

2010（平成22）年度「大学評価」申請用

専任教員の教育・研究業績

大東文化大学

目 次

文学部	P. 1
日本文学科	
中国学科	
英米文学科	
教育学科	
書道学科	
経済学部	P. 269
社会経済学科	
現代経済学科	
外国語学部	P. 371
中国語学科	
英語学科	
日本語学科	
法学部	P. 521
法律学科	
政治学科	
国際関係学部	P. 623
国際関係学科	
国際文化学科	
経営学部	P. 715
経営学科	
企業システム学科	
環境創造学部	P. 821
環境創造学科	
スポーツ・健康科学部	P. 885
スポーツ科学科	
健康科学科	
法務研究科	P. 1029
法務専攻	
東洋研究所	P. 1075
書道研究所	P. 1093
国際交流センター	P. 1097

文学部

日本文学科

池山 晃	3
太田 雅孝	5
小野 民樹	8
工藤 隆	10
栗林 秀雄	14
小林 敏男	17
小谷野 純一	20
下山 嬢子	22
Janine Beichman	25
中村 邦生	27
播本 眞一	30
檜垣 孝	33
日吉 盛幸	35
藤尾 健剛	38
北村 章	40
浜口 俊裕	41
美留町 義雄	44
山口 敦史	46
富樫 純一	48

中国学科

池田 知久	50
門脇 廣文	55
中川 諭	59
中林 史朗	64
林 克	67
三浦 國雄	69
渡邊 義浩	71
大橋 由治	75
武藤 慎一	78
村井 信幸	82
山口 謠司	84
吉田 篤志	94

英米文学科

網代 敦	97
------	----

猪股 謙二	100
岡倉 登志	102
河野 芳英	104
栗栖 美知子	110
里見 繁美	112
高杉 玲子	114
田仲 勉	117
中澤 紀子	118
Barbara Yates	121
三上 紀史	123
George Neil Wallace	125
宮瀧 交二	127
小池 剛史	131
照沼 阿貴子	134

教育学科

荒井 明夫	136
磯貝 富士男	138
太田 政男	140
大山 俊男	142
尾花 清	144
加藤 憲一	147
川床 靖子	151
宍倉 洋	154
須藤 敏昭	156
滝澤 達子	158
橘 与志美	160
沼口 博	161
松村 健吾	165
村山 士郎	166
和田 章	169
金澤 妙子	171
小室 俊明	178
齋藤 友介	180
田尻 敦子	183
中井 睦美	186
藤本 卓	191

船木 正文	193
武者小路 信和	195
吉永 良正	197
石渕 聡	199
上野 正道	204
呉 栽喜	209
杉田 明宏	211
三島 一郎	215

書道学科

安達 直哉	217
河内 利治	219
河野 隆	230
齊藤 公男	238
澤田 雅弘	244
高木 厚人	247
田中 裕昭	251
古谷 稔	256
高木 茂行	259
高城 弘一	262
日賀野 琢	265

経済学部

社会経済学科

石垣 信浩	271
加藤 瑛子	273
加藤 正昭	274
近藤 正臣	275
篠永 宣孝	278
竹永 進	281
中島 正人	284
永野 慎一郎	285
中村 年春	288
花輪 宗命	296
馬場 靖雄	298
本間 修	300
松村 文武	301

渡部 茂	302
大野 秀樹	305
川野 幸男	309
田中 達也	311
内藤 二郎	313
濱本 知寿香	317
田中 深雪	319
中垣 恒太郎	322
中野 耕市	329

現代経済学科

岩澤 勝彦	331
上野 健一	333
浦田 健二	335
岡村 與子	336
岡村 宗二	337
上遠野 武司	340
斉藤 眞事	343
佐藤 順一	345
竹内 亨夫	346
中村 宗悦	347
藤原 碩宣	353
古屋 核	355
吉田 憲夫	357
角田 保	358
村 俊範	360
横溝 えりか	362
神谷 諭一	364
郡司 大志	366
佐藤 方宣	368

外国語学部

中国語学科

大島 吉郎	373
岡部 謙治	375
瀬戸口 律子	376
高橋 弥守彦	379

鄭 新培	388
丁 鋒	390
中嶋 幹起	393
中村 浩一	395
山口 直人	397
肖 賢彬	399
喜多山 幸子	401
竹島 毅	404
原瀬 隆司	406
安藤 好恵	408
李 新	410

英語学科

阿出川 祐子	411
出水 慈子	413
大月 実	416
奥田 祥子	420
北林 光	422
熊澤 佐夫	424
鈴木 敬了	425
高尾 謙史	429
竹田 宏	431
中込 啓子	432
西川 栄紀	435
平林 幹郎	439
望月 昭彦	441
山崎 俊次	449
渡辺 良彦	451
白井 春人	455
姫田 麻利子	457
米山 聖子	461
Robert J. Sigley	464
荒又 雄介	465
岡本 和子	467
Gabriel A. Lee	469
佐藤 千津	471
須寄 文明	476

藤井 康成	477
松本 明子	481
Maria Valentina Oliphant	483

日本語学科

柏木 成章	484
藏中 しのぶ	486
田口 悦男	492
田中 寛	494
寺村 政男	502
長谷川 恒雄	504
関口 伊都子	507
中道 知子	509
福盛 貴弘	512
前田 理佳子	516

法学部

法律学科

浅野 美代子	523
菟原 明	528
加瀬 幸喜	530
貴田 晃	532
木原 正雄	533
柴田 敏夫	535
白石 裕子	536
苑原 俊明	538
多田 辰也	540
Noel Williams	542
野口 昌宏	543
古川 陽二	545
森 稔樹	548
山口 志保	554
山本 裕子	556
葛西 まゆこ	558
河野 良継	563
松原 孝明	565
山口 みどり	567

穴沢 大輔	570
金 春	572
堀川 信一	574
山本 紘之	576

政治学科

穴見 明	578
岩橋 俊哉	580
内田 健二	582
瓜生 洋一	584
小倉 いずみ	586
加藤 普章	589
黒柳 米司	591
五味 俊樹	593
齊藤 哲郎	595
土岐 寛	597
永井 健晴	600
中村 昭雄	602
東田 親司	604
平尾 淳一	606
山根 雄一郎	608
和田 守	611
武田 知己	614
坂部 真理	620

国際関係学部

国際関係学科

井上 恭子	625
白杵 英一	627
内田 知行	629
Edward Mergel Jr.	631
篠田 隆	633
柴田 善雅	635
新納 豊	638
松井 弘明	639
遠藤 元	641
岡本 信広	644

Garren Mulloy	649
小林 啓志	654
須田 敏彦	656
瀧口 明子	658
新里 孝一	662
福家 洋介	664
松本 弘	665

国際文化学科

石田 英明	668
井上 貴子	670
岡田 宏二	675
押川 典昭	677
片岡 弘次	679
小泉 康一	681
高桑 守	683
田辺 清	684
原 隆一	688
樋口 桂子	690
本田 孝一	692
鹿 錫俊	695
大石 敏之	701
加藤 栄	702
高野 太輔	704
古川 宣子	706
水野 さや	708
山田 稔	711
廣江 倫子	712

経営学部

経営学科

青木 幹喜	717
井上 照幸	721
岡田 良徳	723
熊沢 孝	725
小松 義明	728
首藤 禎史	731

鈴木 一道	734
谷郷 一夫	736
前川 邦生	737
松尾 敏充	739
水谷 正大	742
山崎 雅教	745
石井 昌宏	747
佐藤 史子	750
中野 紀和	751
成岡 浩一	754
山田 敏之	756
青木 久	765
高沢 修一	771
James McCrostie	777

企業システム学科

天笠 美知夫	779
今城 光英	783
内山 研一	786
梅沢 豊	790
清家 伸彦	791
寺田 浩司	793
永田 清	795
長谷川 礼	798
丸山 啓輔	800
McMahill, Cheiron Sariko	802
劉 甦朝	805
梅澤 正史	806
白坂 亨	809
Darren McDonald	810
高田 茂臣	813
松崎 友世	816
伊澤 啓子	819

環境創造学部

環境創造学科

植野 一芳	823
-------	-----

帰山 俊二	825
川村 千鶴子	827
篠原 章	833
白山 肇	835
高山 洋一	837
土井 幸平	839
富田 祐一	842
永戸 健	850
貫 隆夫	852
平山 義康	855
宮地 秀門	857
山口 由二	859
大杉 由香	861
北澤 恒人	870
島田 恵司	872
福島 斉	876
小湊 浩二	880
塚本 正文	882

スポーツ・健康科学部

スポーツ科学科

秋葉 盛夫	887
新井 義久	889
遠藤 俊郎	891
大橋 二郎	900
馬渡 照代	903
琉子 友男	905
川本 竜史	911
田中 博史	914
中間 和男	920
中村 正雄	922
宮城 修	926
森 浩寿	931
鹿島 丈博	937
佐藤 真太郎	940

健康科学科

伊藤 機一	943
大城 聰	950
太田 眞	957
岡田 淳	966
狩野 元成	968
樺澤 一之	976
近藤 弘	979
杉森 裕樹	990
鈴木 明	997
高橋 進	1000
高山 成伸	1006
早川 欽哉	1009
兵頭 圭介	1011
勝又 宏	1013
只隈 伸也	1018
築瀬 澄乃	1024

法務研究科

浅野 善治	1031
井口 秀作	1034
石川 美明	1037
植村 栄治	1040
片山 克行	1042
河原 格	1044
高 翔龍	1046
齊藤 信宰	1050
鈴木 實	1052
須田 清	1053
早川 勲	1056
平良木 登規男	1058
出井 直樹	1060
麻生 利勝	1064
中込 秀樹	1072
村上 光鷗	1073

東洋研究所

兵頭 徹	1077
福田 俊昭	1079
松本 照敬	1082
山田 準	1084
岡崎 邦彦	1086
小林 春樹	1088

書道研究所

玉村 清司	1095
-------	------

国際交流センター

大河原 尚	1099
清水 厚子	1101
松嶋 緑	1102

文学部

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	池山 晃	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2007.04.01		日本文化史特殊講義において書画カメラを常時使用し、画像資料の提示を行う。また、毎回コメントペーパーを提出させ、次回に受講者へのフィードバックを行う。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
論文							
1 芸能興行地名古屋の特色		単著	2005.01.25	歌舞伎研究と批評 34 (歌舞伎学会)		近世から近代における芸能興行地として、名古屋という土地に注目、その地理的条件や人的条件、各種資料を総括的に検討整理したうえで、あらためてその重要性を問う。	
2 『網模様燈籠菊桐』の性描写 近代における受容より見て		単著	2005.08.01	国文学解釈と鑑賞 70 巻 8 号 (至文堂)		江戸時代末期に書かれた河竹黙阿弥の歌舞伎脚本である本作について、その性描写に注目し、その場面が近代以降どのように演じられ、評されたかを検証する。それによって、本作が近代以降において持つ意義、占める位置について論ずる。	
3 歌舞伎役者と旅『手前味噌』を中心に		単著	2006.01.20	浮世絵芸術 151 号 (国際浮世絵学会)		幕末・明治期の歌舞伎役者三代目中村仲蔵の旅日記を基本資料とし、各種関連資料を援用しつつ、役者たちの旅芝居の実相を明らかにし、その意義を論ずる。	
4 近松門左衛門の世話浄瑠璃にみる「家」		単著	2008.08.00	『第 2 回東アジア三大学国際シンポジウム論文集 東アジアにおける「家」—伝統文化と現代社会—』 pp.198-203		近松の作品を通して、元禄期の家族制度と社会の閉塞状況を探る。	
5 名古屋市史編纂資料本の役割者評判記		単著	2009.01.00	『役者評判記の世界』 園田学園女子大学近松研究所 pp.88-93		江戸時代の役者評判記のなかで当該資料群の占める位置と伝存経緯を検証する。	
6 近世名古屋 劇場・観客年表稿 (享和～天保)		単著	2009.02.00	『日本文学研究』 48 大東文化大学日本文学会 pp.25-33		19 世紀前半期の名古屋における劇場・観客の実態を年表化する。	

その他				
1	「いぬ」等大 14 項目、小 390 項目	単著	2004.10.00	全解古語辞典（文英堂） 項目執筆
2	「高橋則子著『草双紙と演劇—役者似顔絵創始期を中心に—』	単著	2005.07.01	国語と国文学 82 巻 7 号（至文堂） 書評
3	江戸の声—黒木文庫でみる音楽と演劇の世界—	分担執筆	2006.03.27	黒木文庫特別展実行委員会 書誌データ作成
4	校訂 『右大将鎌倉実記』	単著	2007.09.00	『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集』11（玉川大学出版部） pp.13-109
5	「はじめに」および「解説」執筆	単著	2008.07.00	『日本の古典をよむ⑨雨月物語 冥途の飛脚 心中天の網島』小学館 pp.3-5, 309-317
6	近松門左衛門の世話浄瑠璃にみる「家」	単著	2008.09.00	第 2 回東アジア三大学国際シンポジウム「東アジアにおける「家」—伝統文化と現代社会—」於大東文化大学 近松の作品を通して元禄期の家族制度と社会の閉塞状況を探る。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1986.06.00	～	現在	日本近世文学会会員（2008 年 6 月～現在 委員（1 期目）、2009 年 5 月～現在 編集委員（1 期目））
2	1987.12.00	～	現在	歌舞伎学会会員（平成 2 年度～平成 5 年度常任委員（編集）、平成 6 年度～現在常任委員（総務）、平成 14 年度～平成 17 年度 総務委員長、平成 18 年度～現在 歌舞伎学会奨励賞選考委員）

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	教授	氏名	太田 雅孝	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 都立鷺宮高等学校出張授業			2008.12.12	いわゆる出前授業であるが、大学での比較詩学の授業方法を用いて、吉野弘の詩編「I was born」を W.H.Auden などの想像力論を手がかりにして解釈し、国語教育における比較文学・文化の方法論を現代の学生向けに工夫し実践したものの。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 日本文学研究入門「基礎演習」テキスト (大東文化大学文学部日本文学科)			2008.03.31	授業の教材として使用。第四部第二章 (201～209 頁) 担当。B 5 版、総頁 258 頁			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 太田雅孝詩集『あんぶく』	単著	2005.10.09	国文社	創作詩集。総頁数 108 頁。			
論文							
1 オーデンの宗教的歴史観—ローゼンシュトックニフェッシーの影響—	単著	2004.08.30	英米文学研究雑誌「OBERON」第 32 巻 第 1 号 (南雲堂)	これまでの W. H. オーデン研究においてほとんど知られていなかった歴史家オイゲン・ローゼンシュトック＝フェッシーの、オーデンにおける重要な影響を探究した論考。とりわけ、宗教的な探究を深めていたオーデンにとって、ローゼンシュトック＝フェッシーが示唆した万霊節の意義は極めて大きく、オーデンは、これによってアングロ・カトリックの立場に接近することになるのであった。2 段組総頁数 79 頁中 49～62 頁。			
2 コミックな軽みの詩—オーデンとハイク	単著	2005.04.01	「白亜紀」123 号	晩年の W・H・オーデンがハイク形式を採用して多数の詩を書き始めたことに注目し、その頃の英語ハイクの状況を背景にして、オーデンの用いたハイク形式の特徴を指摘した。また、柔軟なウイットと苦いユーモアを湛えながら、自己を笑うカーニヴァル的な自己表白に滑稽なまでの真実を盛り込んだ詩人の軽みのセンスを捉えようとしたもの。2 段組総頁数 64 頁中 60 頁～63 頁。			
3 開かれた形而上詩へ—現代詩文庫『星野徹詩集』	単著	2006.10.01	「白亜紀」126 号	日本の戦後詩における形而上詩の追求をライフワークとしてきた詩人星野徹の詩的経歴を辿る形で、この詩人の激しい意志と詩的屈折を指摘し、世界的な文脈における現代詩の問題と関係させながらこの詩人の意義を、特にそのキリスト教的関心の軌跡を位置づけたもの。2 段組総頁数 64 頁中 60 頁～63 頁。			

4	『英語文学事典』	共著	2007.04.20	ミネルヴァ書房	木下卓／窪田憲子／高田賢一／野田研一／久守和子編著、編集委員を兼務し、26項目の執筆を担当。
5	沈黙と想像力ー吉野弘の「I was born」についてー	単著	2008.03.31	『日本文学研究入門』（大東文化大学文学部日本文学科）	吉野弘の詩「I was born」における沈黙の意味を、W. H. オーデンの想像力論を援用しながら考察したもの。英語の”bear”という語の持つ様々な意味の反映を捉え、そこから作中の母親の死と沈黙の意味、さらには父親の沈黙の意味に至る。作者と重なるような語り手の重層的な表現に着目した。総頁数 259 頁中、201～209 頁。
6	神話と詩と歴史	単著	2008.04.01	「白亜紀」129号	神話原型と歴史の二つの中心点を持つ楕円を一つの詩のモデルとして、その中心間を往還するような形でのダイナミックな想像力の働きの中で、大きな歴史ではなく、絶えず個々の人間に寄り添う歴史の女神のいることが大事なことを、W. H. オーデンの詩篇「クリオ礼讃」を引きながら論じた詩論。2段組総頁数 52 頁中 22 頁～23 頁。
その他					
1	英国パブ巡り（連載エッセイ）	単著	2003.04.07～2007.10.22	「食料醸界新聞」	週一回の割で、イギリスのパブや飲酒に関する様々な文化表象を扱う。途中、休刊などで空きはあるものの、平成 19 年 10 月 22 日付第 200 回にて終了。主として、4面に掲載。
2	月の川を渡る（書評）	単著	2005.03.01	「立教」192号（立教大学）	中村邦生著『月の川を渡る』（作品社）の書評。総頁数 86 頁中、81 頁。
3	ポール・コリンズ著『古書の聖地』（書評）	単著	2005.07.01	「英日文化」81号（英日文化協会）	ポール・コリンズ著『古書の聖地』（晶文社）の書評。総頁数 104 頁中 68 頁～69 頁。
4	C・S・ルイス著『喜びのおとずれ』（書評）	単著	2006.03.01	「英日文化」84号（英日文化協会）	C・S・ルイス著『喜びのおとずれ』（ちくま文庫）の書評。総頁数 128 頁中 114 頁～115 頁。（但し、115 頁は乱丁のため、差し替えの文章となる。）
5	Auden's 'Ars Poetica'（口頭発表）	単著	2006.07.29	オベロン会（国際交流会館にて）	アメリカ移住後のオーデンは、政治と文学の狭間で苦闘を続け、やがて長編詩「海と鏡」に自らの「詩学」と呼べるような認識を刻むまでを、詩人の自己省察の言葉や作品を通して考察したもの。
6	詩2編（「はさみ虫」「虫喰い考」）	単著	2007.02.20	『日本現代詩選 第33集』（日本詩人クラブ）	日本詩人クラブの年間アンソロジーに載せたもの。総頁数 464 頁中 86～87 頁。
7	<発語>の訪れを待つ器＊岡野絵里子詩集『発語』	単著	2007.04.01	「白亜紀」127号	岡野絵里子詩集『発語』の書評。2段組総頁数 58 頁中 26 頁～27 頁。
8	北上花巻雪景色	単著	2007.04.15	「日本現代詩研究者国際ネットワーク 会報 28号」	日本現代詩歌文学館にて行われた研究発表会に参加したときの報告と、翌日の宮澤賢治記念館およびイーハトーブ館への小旅行などの経験をもとに書いたエッセイ。4段組総頁 8 頁中 7 頁～8 頁。
9	文学と歴史の記述ー文化テキストの物語り（口頭発表）	単著	2007.07.28	オベロン会（国際交流会館にて）	Charles Nicholl と Stephen Greenblatt の描く伝記の対照的な記述の方法を検討し、さらに歴史と詩の関係を扱うオーデンの作品から考察したもの。
10	いま翻訳された意義とは（書評）	単著	2008.05.30	「週刊読書人」第 2740 号	I. A. リチャーズ著『実践批判』（みすず書房）の書評。5 面。
11	テキストの内なる他者たちーイエイツ、キーツ、オーデンの場合（口頭発表）	単著	2008.07.26	オベロン会（国際交流会館にて）	イエイツやキーツの詩に間テキスト的な詩的表現を見いだすところから初めて、ソシュールの言語学的転回以降の考え方と通じるような言語認識と従来の言語的反応についてのオーデンの考えを考察したもの。
12	イギリス飲酒文化史を読む（書評）	単著	2008.12.20	「図書新聞」第 2829 号	飯田操著『パブとビールのイギリス』（平凡社）の書評。5 面。
13	修辭的殘像の解釈学（書評）	単著	2009.01.16	「週刊読書人」第 2771 号	阿部公彦著『スローモーション考』（南雲堂）の書評。5 面
14	詩2編（「尾道から広島へ」「北極ぶんどり合戦」）	単著	2009.02.20	『日本現代詩選 第34集』（日本詩人クラブ）	日本詩人クラブの年間アンソロジーに載せたもの。総頁数 604 頁中、98～99 頁。

15	体験と神話の形而上詩*武子和幸詩集『アイソポスの蛙』(書評)	単著	2009.04.01	『白亜紀』131号	武子和幸詩集『アイソポスの蛙』(思潮社)の書評。2段組総頁数52頁中、20～21頁
III 学会等および社会における主な活動					
1	1975.04.00	～	現在	英日文化協会会員。	
2	1982.04.00	～	現在	十七世紀英文学会会員。平成元年～平成5年：東京支部幹事。平成元年～平成3年：本部幹事。平成11年～平成12年：東京支部幹事。平成12年～平成20年：十七世紀英文学会論集編集委員。平成18年～現在：東京支部事務局幹事。平成19年～現在：本部事務局幹事。	
3	1986.04.00	～	現在	日本英文学会会員。	
4	1988.04.00	～	現在	The W.H.Auden Society 英国のW. H. オーデン協会会員。	
5	1994.05.00	～	現在	ASLE・Japan／文学・環境学会会員。平成6年～平成14年：運営委員。平成13年：大会運営委員。平成19年～現在：会誌編集委員。	
6	2001.11.24	～	現在	日本現代詩研究者国際ネットワーク会員。平成19年～現在：会計監査監事。	
7	2006.09.09	～	現在	日本詩人クラブ会員。	

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	小野 民樹	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『60年代が僕たちをつくった』	単著	2004.05.00	洋泉社	東京郊外の高校の同級生7人を中心に、彼らが自己形成した1960年代の精神とその意味を追求したノンフィクション。大島渚、浦山桐郎、山田洋次、鈴木清順、今村昌平らの作品を自分の問題として同時代的に見た経験による、映画と社会の動向が密接な関係をもっていた時代への精神的ルポルタージュ。240p			
2 『撮影監督』	単著	2005.07.00	キネマ旬報社	映画撮影からみただけの日本映画史。これまで映像についての研究、評論において、撮影に言及されることが余りに少なかった。本書は、黒澤明や寅さんなどの撮影所映画から新人監督の作品やテレビ映画、ドキュメンタリーのカメラマンまで、日本の代表的映画カメラマン60人余の仕事と考え方から、日本映画の過去と現在を考察したものである。伝統と革新、技術の伝承、監督とカメラマン……日本特有なシステムが急速なデジタル化のなかでいかに変貌するかをも見据えた映画論でもある。352p			
論文							
1 「韓流映画二本一劇画には革命歌がよく似合う」	単著	2004.09.00	『新日本文学』2004年9月号	168-172pp			
その他							
1 「時代の感覚を描き出す」	単著	2004.05.00	『映画撮影』161号	4-5pp			
2 「宮川一夫と宮島義勇」	単著	2004.11.00	『映画撮影』163号	4-5pp			
3 「時代を越える劇を撮る」	単著	2004.11.00	『別冊映画秘宝』	27-30pp			

4	「枠を超えた作品をつくりたい」	単著	2005.02.00	『映画撮影』164号	4-5pp
5	「埋もれ木の森へ」	単著	2005.08.00	『映画撮影』166号	4-5pp
6	「みんなそれぞれの季節を生きている」	単著	2005.11.00	『映画撮影』167号	4-5pp
7	「人間の貌を撮りたい」	単著	2006.02.00	『映画撮影』168号	4-5pp
8	「切り捨てた二百枚が……」	単著	2006.04.00	『映画芸術』415号	90-91pp
9	「新藤兼人ーそのドラマ創りについて」	単著	2006.04.00	『NFCニューズレター66』	5p
10	「上手派のカメラと下手派のカメラ」	単著	2006.05.00	『映画撮影』169号	4-5pp
11	「ずっと映画遊びをやってきた」	単著	2006.08.00	『映画撮影』170号	4-5pp
12	「日活青春映画のカメラマン」	単著	2006.11.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』171号	
13	「いいカットが時代を象徴する」	単著	2007.02.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』172号	
14	「ロマンポルノを撮らなかつた日活カメラマン」	単著	2007.05.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』173号	
15	「特撮は映像の詩をめざす」	単著	2007.08.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』174号	
16	「やっぱり、ホンが良くないと」	単著	2007.11.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』175号	
17	「小さな自然にも世界がある」	単著	2008.02.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』176号	
18	「ウルトラのカメラマン古巣に帰る」	単著	2008.05.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』177号	
19	「NHK、辞めてからのびのび」	単著	2008.08.00	日本映画撮影監督協会『映画撮影』178号	4-6pp
20	『石内尋常高等小学校 花は散れども』	共著	2008.08.00	岩波書店	インタビュー、構成、編集 1-240pp
21	「カメラマンは最初の観客だ」	単著	2008.11.00	『映画撮影』179号	4-6pp
22	「ほのぼの昭和？」	単著	2008.11.00	『日本の映画』	
23	「とても敵れなかつた健康な精神」	単著	2009.01.00	『高杉一郎・小川五郎追憶』	168-171pp
24	「カメラさえ覗いていれば、幸福だ」	単著	2009.02.00	『映画撮影』180号	4-6pp
25	「3年我慢できれば…」	単著	2009.05.00	『映画撮影』181号	
26	『「断腸亭日乗」を読む』	単著	2009.05.00	岩波書店	解説 257-264pp
III 学会等および社会における主な活動					

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	教授	氏名	工藤 隆	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書								
1 『少数民族とことば表現世界』 (『アジア遊学 63』、単行本扱い)	編著	2004.05.05	勉誠出版		工藤隆論文「大涼山イ (彝) 族の創世神話ネウォテイー古事記以前への視点」を含む 10 編の論文と、4 編の報告文とから成る。アジア全域の 13 余の少数民族の、実際のことば表現資料を集め、日本の〈古代の古代〉のことば表現モデルの基礎を固めた。4 頁+12 頁			
2 『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』	単著	2006.06.20	勉誠出版		第 I 部：「石宝山と歌会の概況」「各歌垣の状況と人物像」「歌垣【A】・歌垣【B】との出会い」「歌垣【C】についての簡略な分析」「少数民族歌垣モデルから見た日本古代文学」。第 II 部では、歌垣【A】(123 首)、歌垣【B】(41 首、依頼して歌ってもらったもの)、歌垣【C】(1996 年取材、848 首)の全句を、アルファベット発音表記によるペー族語、中国語訳、日本語訳をセットで記録した。このうちの、歌垣【A】(123 首)と歌垣【C】(848 首)は、どちらも、若い男女が自然な形で即興の歌を掛け合った貴重な記録である。548 頁			

3 『古事記の起源ー新しい古代像をもとめて』(書き下ろし)	単著	2006.12.20	中央公論新社	<p>“生きている神話”の現場資料(『四川省大涼山イ族創世神話調査記録』)と“生きている歌垣”の現場資料(『雲南省ベ一族歌垣と日本古代文学』)を獲得したことによって、日本古代文学研究に従来とは異なる分析方法を導入できるようになった。「序論ー古事記研究の現在」では、従来の『古事記』研究では“生きている神話”の実態資料無しの研究だったために、『古事記』神話の古層・深層・中間層の弁別ができないでいたことを明らかにした。「第Ⅰ部 古事記をどう読むか」では、原型生存型民族の口誦表現モデルから古事記を読み直す必要があると論じた。「第Ⅱ部 古事記を読み解く」では、第Ⅰ部で提起した新たな研究方法によって、『古事記』をどう読み解くかの実践をした。各章は、「臣安万侶言す(「記序」)ー激変の時代が突出させた復古精神」「天地初めて発けし時ー無文字の古層と文字の新層の交錯」「イザナミの死ー排泄物利用の技術革新」「黄泉の国神話ー死と折り合いをつける」「スサノオ神話ー分析を拒絶する混沌」「ヤマトタケルの死ー古層の死生観で読み直す」「サホヒコ・サホヒメー民族サバイバルから恋愛へ」「志毘臣と袁祁命ー歌垣と政治の交錯」から成る。「結ー古事記と日本」は、「第一節 時代に遅れた書物としての古事記」「第二節 古事記と現代」から成る。293頁</p>
4 『日本・起源の古代からよむ』	単著	2007.12.20	勉誠出版	<p>〔第Ⅰ部〕“負を語る神話、モデルから見た海幸山幸神話／九条と“負を語る神話、／日本古代ー神話・歌と<国家>の共存／歌垣と身体／図像考古学と“ことば表現考古学、を結びつける実態資料が必要／生きている神話や生きている歌垣の第一次資料が必要 〔第Ⅱ部〕『古事記の起源』の執筆意図／古代文学研究の前提が変わりつつある／フィールド調査の威力／古代文学研究に変化の兆し／靖国問題で思いがけない影響を受けた／神話・呪術的情念と裸の資本主義への傾倒ー日本文化の小泉純一郎的二重構造ー読者への手紙ー『日本・神話と歌の国家』をめぐる／“もつたいない、と天皇文化／起源への意志ー白川静の力動 〔第Ⅲ部〕二〇〇六年四月～九月アジア滞在記／アジアから帰国して／近代化で消えゆく<古代の古代>ー日中共同研究が進む歌垣の十一年 〔第Ⅳ部〕浮浪する人々／演劇ー異界と日常界を往還する／人間にとって<演技>とはなにか 起源の古代から現代をよむーおわりに 304頁</p>
論文				
1 「大涼山イ族の創世神話『ネウオテイ』ー古事記以前への視点」	単著	2004.05.05	『アジア遊学』NO.63、勉誠出版	<p>「ネウオテイ」全 5680 句の概略を紹介し、ムラ段階の神話が“乱立する神話”であることを示して、“たった一つの神話”を語る神話の異質性とその本質について示唆した。なお、この『アジア遊学』NO.63は「少数民族とことば表現世界」を特集したが、この特集の全体を編集した。12頁</p>
2 「歌垣と身体」	単著	2005.01.00	『大航海』NO. 53、新書館	<p>日本古代の歌垣についての従来のイメージを、中国少数民族の現存の歌垣を素材にしたモデル理論によって、大幅に修正した。11頁</p>
3 「中国雲南省ワ族文化調査報告」	単著	2005.03.00	『アジア民族文化研究4』アジア民族文化学会	<p>2002年9月6～16日に行なった雲南省南部地域のワ族文化の詳細な報告書を作成した。45頁</p>
4 「日本古代ー神話・歌と〈国家〉の共存」	単著	2005.03.00	『アジア民族文化研究4』アジア民族文化学会	<p>日本古代国家は、神話・恋歌といった、中国少数民族など無文字文化社会に顕著な、ムラ段階の文化を色濃く継承して成立した。したがって、日本古代国家においては、リアリズムの視点が求められる〈国家〉体制と、ムラ段階の反リアリズム的な呪術・神話世界が共存したことになる。この相反する二者が共存するというあり方は、その後の日本の歴史を貫いて継承され、現代日本の社会構造にまで届いている。9頁</p>

5	「負を語る神話モデル」から見た海幸山幸神話」	単著	2005.03.00	『大東文化大学紀要』第43号	中国少数民族の神話のなかには、優勢民族漢族に比べて自分たちの生活の劣悪である現実の原因を、自分たち自身の“知恵の無さ”や“人格的欠陥”などにあるとする“自民族の劣っている点を語る神話”が多く見られる。『古事記』は、少数民族の神話を継承しているにしても、全体としては“自民族の劣っている点を語らない”優勢民族の神話になっている。しかし、天皇氏族と接触したために、相対的に弱小の少数民族の位置に置かれた土蜘蛛・国巢・隼人そのほかの人々もいた。そのうちの隼人族にしぼり、中国少数民族の“負を語る神話モデル”を用いて、海幸山幸神話の読み直しを試みた。26頁
6	「演劇—異界と日常界を往還する」	単著	2005.07.29	『学際』No.15、構造計画研究所	日本における俳優の原点は、アニミズム的・シャーマニズム的な神々との交流する者たちであった。その彼らがのちに芸能者となるが、芸能者もまた、境界を越えてさまざまな異界を往還する者たちであり、異界と日常界の境界を無化する者たちであったと述べた。4頁
7	「講述自己不足的神話与《古事記》」	単著	2007.10.00	『口承文学与民間信仰』（中日民俗文化国際学術研討会論文集）雲南大学出版社（中国）	中国少数民族のイ族、ワ族、ハニ族、ラフ族などの“自民族の劣っている点を語る神話、と、『古事記』神話との関係を論じた。16頁
8	「歌垣と万葉恋歌」	単著	2007.11.10	『國文學』11月号、學燈社	少数民族の歌垣の現場では、見物人や友人などの他者に聞かれることを前提として恋歌が交わされる。そこでは、「人目」「人言」など他者の目や噂を障害とする歌もあるが、それらを、自分たちの恋を実現させるための“承認・支援者”として位置づける歌もある。『万葉集』の歌には、このうちの障害としての他者の姿しかない。これは、万葉集は、歌垣の現場性を失った<古代の近代>の段階の歌であることを示している。7頁
9	「中国湖南省鳳凰県苗族歌垣調査報告」	単著	2008.03.31	『アジア民族文化研究7』アジア民族文化学会	2008年6月26日～7月4日、湖南省の貴州省との省境の鳳凰県苗（ミャオ）族の歌文化の調査をした。この地域では、まだ自然な歌垣が残存しているだけでなく、歌われる創世神話も残存していた。現場での歌垣記録や、女性シャーマンによる冥界訪問などの実際についての報告をまとめた。24頁
10	「島生み神話記述の古層と新層」	単著	2008.12.06	近藤信義編『修辞論』（おうふう）	『古事記』の島生み神話を原型的神話モデルから分析した。島生みの段の島の名には「亦の名」が付加されているが、これは古層の起源神話の痕跡や〈神話の核〉の残存であることを論証した。16頁
11	序	単著	2009.01.00	張正軍『文化尋根—日本学者之雲南少数民族文化研究』（上海交通大学出版社）	日本古代文化と中国文化の比較研究は、『漢書』『後漢書』『魏志』『宋書』その他の記述に依拠した研究が盛んに行なわれてきた。しかし一方で、1900年代に入ると、日本最古の書物『古事記』（712年）における日中文化の比較研究には、文化人類学的な資料も必要だという視点が登場してきた。特に、1900年代も末になると、日本古代の日本列島民族は、中国古代国家との政治的關係においては現代で言う“少数民族”の位置にあったのだし、文化的にも無文字民族であったという意味でまさに“少数民族”であったという私（工藤）の主張が登場した。『古事記』の、成書化される以前の、無文字時代の音声言語表現を、他の未開社会の事例をモデルにして推定しようというのである。したがって、この分野の日中文化の比較研究には、録音機やビデオカメラによって、少数民族の、歌う神話や歌掛けや祭式をそのまま録音・録画し、それらの音声資料から各少数民族語そのものの発音に添って、国際音声記号その他によって文字記録化することが必要である。このような分野が開拓されてきたために、日中文化の比較研究には、中国側に、従来とは異なる人材が必要になってきた。その第一人者が、張正軍氏である。4頁
	その他				

1	「ワ族首狩り文化調査報告ーシステムとしての〈浪費〉」	単著	2004.05.08	アジア民族文化学会	私は、中国雲南省西盟・孟連地区のワ族文化の調査を、1996年1月20～1月27日および2002年9月6日～9月16日の2度行なった。今回の発表では、首狩りの実態と、その首狩り行動がワ族社会全体の安定均衡システムとして機能していることを報告した。また、父系の西盟地区ワ族の家譜は、現在から源に向かって遡って行く独自の形式を持っていること、母系の孟連地区ワ族の場合は、家譜を伝えようとする意識自体が存在していないことを報告した。また、ワ族創世神話「司崗里（シガンリ）」の日本語訳も公開した。
2	「負を語る神話と古事記」	単著	2004.08.18	第三回中日民俗文化シンポジウム：於中国雲南省	中国少数民族のイ族、ワ族、ハニ族、ラフ族などの“自民族の劣っている点を語る神話”の実例を報告し、そういった“負を語る神話”と『古事記』との関係を考察した。
3	「9条と“負を語る神話”」	単著	2005.07.31	毎日新聞	中国少数民族の多くが、自分たちの貧しさや無文字などの原因を優勢民族の漢族との敵対に持っていかに、自らの知恵の無さや人格的弱点に求める“負を語る神話”を持っている。日本文化もまた、少数民族の原型生存型文化を色濃く継承しているため、その感性の中に“負を語る神話”的なものが存在しており、それが、敗戦後の「憲法9条」に対する絶対擁護の姿勢を生み出す一要因となっているのではないかと述べた。
4	「白族歌文化と日本古代文学」	単著	2006.08.22	中日白族歌謡文化学術シンポジウム：於中国雲南省	ペー（白）族など少数民族の現場の歌垣資料によって、日本古代文学研究の側の従来の歌垣像が大きく変わりつつあること、また、従来は、原型的な歌垣と、芸能あるいは文学の領域に進んだものの区別が曖昧だったが、ペー族などの自然な歌垣の実態資料によってそれらの区別がつかようになってきたことを報告した。
5	「近代化で消えゆく〈古代の古代〉」	単著	2006.11.20	毎日新聞	中国少数民族の原型的な文化は、改革開放政策による近代化の波及と、行政主導の観光事業化によって変質・消滅が進んでおり、7年ぶりに訪問した雲南省石宝山のペー族歌垣の場合も同じ状況にあったことを報告した。また、アジア民族文化学会と、現地の大理学院文学院・大理学院民族文化研究所の共催で、8月に雲南省大理でペー族歌文化をめぐる初の日中合同シンポジウムが開催され、日中共同の歌垣研究が軌道に乗ったことを報告した。
6	「湖南省鳳凰県苗族歌垣調査報告」	単著	2007.05.12	アジア民族文化学会	2006年6月26日～7月4日は、湖南省鳳凰県のミャオ族の「六月六」という祭りを中心に、ミャオ族の歌文化について調査した。ミャオ族の歌垣は多くの地域で消滅が進行しているが、鳳凰県を含む湖南省と貴州省の省境地域のミャオ族の集落では、かろうじてまだ自然な歌垣が残存していることがわかった。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
1	1977.04.00	～ 現在	古代文学会
2	1984.04.00	～ 現在	日本文化人類学会
3	1985.04.00	～ 現在	日本民俗芸能学会
4	1988.04.00	～ 現在	古事記学会
5	1988.04.00	～ 現在	上代文学会 1991～94年度 常任理事、1995年度～現在 理事
6	1988.04.00	～ 現在	日本文学協会
7	2001.04.00	～ 現在	アジア民族文化学会 2001～2005年度 代表、2006年度～現在 運営委員

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	栗林 秀雄	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 『社会文学事典』	共著	2007.01.00	冬至書房	事典の大項目「性」の分担執筆		
論文 1 国木田独歩論ーその思想の軌跡ー	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要 46 号	国木田独歩の抱懐した思想の推移の軌跡を追究		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1966.04.00	～	現在	日本近代文学会 1968.4～1970.3 運営委員 1994 年 4 月～1996 年 3 月運営委員		
2	1975.04.00	～	現在	日本文学協会		
3	1979.02.00	～	2008.03.00	港区近代文学研究会講師 (於 港区立青山青年会館 第 2・4 火曜日 午後 2:00～4:00)		
4	1980.10.00	～	現在	NHK 教育テレビ出演 (「日本の作家」ー志賀直哉) 5 6. 1. 5. 7 に再放映		
5	1980.10.00	～	現在	看護学校学園祭講師 (於 国立埼玉看護学校 近代文学に表われたる愛について)		
6	1981.09.00	～	現在	NHK 学校放送出演 (唐木順三「中世の文学」について) 9. 2 2. 2 4 再放送		
7	1981.10.00	～	現在	NHK 教育テレビ出演 (「日本の作家」ー志賀直哉……前回放映のものを大幅改訂) 5 7. 1. 2 2. 3. 5 再放映		

8	1981.10.00	～	現在	東松山市社会教育講座講師（於 東松山市立図書館 近代の文豪）
9	1983.12.00	～	現在	板橋区職員研修講師（「近代文学に表われた人間関係」）
10	1984.01.00	～	現在	看護学校特別講演講師（於 国立埼玉看護学校「近代文学に表われた倫理問題」）
11	1984.11.00	～	現在	大東文化大学日本文学会東松山大会講演（志賀直哉の倫理観について）
12	1985.04.00	～	現在	昭和文学会
13	1985.09.00	～	現在	板橋区職員研修講師（自然主義と耽美派について）
14	1985.10.00	～	現在	千葉市民文化大学講師（志賀直哉の大学）
15	1986.02.00	～	現在	千葉県柏市商工会議所青年部文化講演会講師（近代文学に描かれた倫理問題）
16	1986.11.00	～	現在	千葉市民文化大学講師（郷土と作家、国木田独歩）
17	1986.11.00	～	現在	板橋区職員研修講師（現代文学のテーマ）
18	1987.09.00	～	現在	千葉市民大学講座講師（志賀直哉の文学）
19	1987.11.00	～	現在	板橋区ことぶき大学講師（漱石の作品とその時代…2回）
20	1988.09.00	～	現在	千葉市民文化大学講師（国木田独歩・志賀直哉の文学…2回）
21	1989.09.00	～	現在	大東文化大学文学部公開講座講師（森鷗外「舞姫」論）
22	1989.10.00	～	現在	板橋区立徳丸福祉センターことぶき大学講師（昭和の文学…3回）
23	1990.06.00	～	現在	大東文化大学図書館教養講座講師（私の読書遍歴、体験と作品）
24	1990.09.00	～	現在	千葉市民大学講座講師（独歩、志賀…2回）
25	1990.10.00	～	現在	三越文化センター講師（近代文学…月1回）
26	1991.01.00	～	現在	立教女学院高等部特別講演
27	1992.07.00	～	現在	千葉市民大学講師（白樺派の文学…2回）
28	1993.01.21	～	現在	板橋区立小茂根図書館文化講座講師（近代文学…5回）
29	1993.08.25	～	現在	千葉市文化講演（志賀直哉…3回）
30	1993.09.09	～	現在	大東文化大学文学部公開講座（志賀直哉の〈母〉なるもの…1回）
31	1996.09.09	～	現在	大東文化大学文学部公開講座（宮澤賢治『注文の多い料理店』を中心にー）
32	1997.11.03	～	現在	立教女子学院短期大学図書館特別講演（国木田独歩と福田清人）
33	1999.10.16	～	現在	大東文化大学公開講座講師（谷崎・川端の文学）
34	2000.04.00	～	現在	松本清張研究会
35	2001.07.00	～	現在	千葉市民大学講師（志賀・谷崎…2回）
36	2005.04.00	～	2005.12.00	板橋区グリーンカレッジ大学院講師
37	2005.11.02	～	2005.11.02	香川県立小豆島高校 講演テーマ（近代文学と人権について）

38	2005.11.02	～	2005.11.02	香川県立土庄高校 講演
39	2009.01.31	～	2009.01.31	大東文化大学同窓会群馬県支部総会講演（志賀直哉 人と作品）

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	小林 敏男	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『日本古代国家形成史考』	単著	2006.08.15	校倉書房	I 英雄時代 II 古代国家論と国家形成史段階 III 日本古代国家の形成史を考える IV 日本古代国家論の展望 V 日本の文化論的位置 VI 王朝交替説とその方法をめぐって VII 日本書紀の紀年論 (上) VIII 日本書紀の紀年論 (下) (総頁数 335)		
2 『日本古代国家の形成』	単著	2007.08.10	吉川弘文館	はしがき、第1章邪馬台国と女王国、第2章統・邪馬台国と女王国、第3章古代初期日朝関係史、第4章稲荷山古墳出土鉄剣銘文について、第5章飯豊郎女とヲケ・オケニ王登場の歴史的背景について、第6章祇体王統出現の歴史的背景について、第7章安閑天皇紀のいわゆる「武蔵国造の乱」の記事をめぐって、第8章日本という国号について おわりに (総頁数 288)		
論文						
1 日本の古代国家形成過程――五・六世紀を中心に――	単著	2004.08.30	鈴木靖民編『シンポジウム倭人のクニから日本へ』学生社	邪馬台国、前方後円墳体制、五・六世紀の日朝関係史と日本古代国家形成史の中に位置づける。18頁 (総頁数 266)		
2 古代初期日朝関係史――とくに好太王碑文辛卯年条を中心として―― (下)	単著	2005.03.31	大東文化大学紀要 43号	碑文の辛卯年は西暦 391年より 60年さかのぼった 331年であることを主張したもの		
3 書評 前田晴人著『飛鳥時代の政治と王権』	単著	2006.03.01	日本歴史 694号	書評		
4 「古代における神と仏」	単著	2007.03.31	佐々木宏幹編『民俗学の地平―桜井徳太郎の世界』岩田書店	日本の在来 (固有) 信仰である神祇的世界と普遍宗教である仏教との出会い、関係性について考察		

5	古代における神と仏		2007.03.31	佐々木宏幹編『民俗学の地平－桜井徳太郎の世界－』 岩田書院	本稿では、古代の仏教の初期受容の様子を、道教的な神を媒体として成立していくことを論じた。19頁（総頁数337頁）
6	書評 水林彪著『天皇制史論－本質・起源・展開－』	単著	2007.11.01	『日本歴史』714号	書評4頁
7	科野（信濃）国造に関する考察		2008.07.01	井原今朝男、牛山佳幸編『論集東国信濃の古代中世史』 岩田書院	科野（シナノ）の国造の通説を批判し、国造の成立をミヤケとの関係で、4、5世紀から6世紀半以降に下げて論じたもの。36頁（総頁数416）
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1977.04.00	～	現在	続日本紀研究会会員
2	1978.04.00	～	現在	日本史研究会会員
3	1979.05.00	～	現在	歴史学研究会会員
4	1980.04.00	～	現在	歴史科学協気会会員
5	1987.08.00	～	現在	奄美・沖縄民間文芸研究会会員
6	1989.04.00	～	現在	延喜式研究会会員
7	1991.04.00	～	現在	日本歴史学会会員
8	1993.04.00	～	現在	考古学研究会会員
9	1993.07.00	～	現在	東京都中野区の「古代を学ぶ会」「女帝について」と題して講演
10	1994.04.00	～	現在	よみうり・日本テレビ文化センター浦和「古代史講座」を開講（月、2回）
11	1994.09.00	～	現在	東京都中野区の「あけぼの会」「善光寺の謎」と題して講演
12	1995.01.00	～	現在	朝日カルチャーセンター（横浜）「騎馬民族説と日本古代国家の形成」と題して講演
13	1995.01.00	～	現在	朝日カルチャーセンター（湘南藤沢）「王朝交替説」と題して講演
14	1995.09.00	～	現在	東京都中野区の「あけぼの会」「善光寺の成立」と題して講演
15	1995.11.00	～	現在	東京都府中生涯学習センター「河内王朝論」と題して講演
16	1995.12.00	～	現在	東京都府中生涯学習センター「継体新王朝論」と題して講演
17	1996.03.00	～	現在	東京都中野区の「古代を学ぶ会」「南西諸島の平家伝説」と題して講演
18	1996.04.00	～	現在	信濃史学会会員
19	1996.04.00	～	現在	長野郷土史研究会会員
20	1996.06.00	～	現在	埼玉県の県信連「騎馬民族説と古代の日本」と題して講演
21	1996.10.00	～	現在	東京都中野区の「あけぼの会」「伊勢神宮の謎」と題して講演
22	1997.06.00	～	現在	東京都板橋区文化財保護審議会審議会委員
23	1997.10.00	～	現在	東京都中野区の「あけぼの会」「日本のなりたちと日本文化論」と題して講演

24	1998.04.00	～	現在	正倉院文書研究会会員
25	1998.10.00	～	現在	東京都中野区の「あけぼの会」「継体新王朝説」と題して講演
26	1999.01.00	～	現在	東京都中野区の「古代を学ぶ会」「ヲケ・オケ二王と忍海部女王」と題して講演
27	1999.07.00	～	現在	朝日カルチャーセンター（横浜）「王朝交替はなかった」と題して講演
28	1999.09.00	～	現在	東京都中野区の「古代を学ぶ会」「王朝交替論について」と題して講演
29	2000.06.14			東京都中野区の「あけぼの会」「フダラク渡海海」と題して講演
30	2001.06.21	～	現在	東京都中野区あけぼの会「神武天皇即位年について－辛酉革命説を中心に－」と題して講演
31	2002.06.20	～	現在	東京都中野区あけぼの会「武蔵国造の乱」と題して講演
32	2002.12.14	～	現在	国際シンポジウム「東アジアから見た日本古代国家の起源」（東アジアの古代文化を考える会主催）「日本の古代国家形成過程－五・六世紀を中心に－」と題して基調報告。討議。
33	2003.06.19	～	現在	東京都中野区あけぼの会「邪馬台国と女王国」と題して講演
34	2004.06.08	～	現在	東京都中野区あけぼの会「古代女帝の特質について」と題して講演
35	2005.06.15	～	現在	東京都中野区あけぼの会「飯豊郎女－女帝の起源－」と題して講演
36	2006.06.23	～	現在	東京都中野区あけぼの会「武蔵国造の乱・再論」と題して講演
37	2007.06.22	～	現在	東京都中野区あけぼの会「日本という国号について」と題して講演
38	2008.03.04	～	現在	シンポジウム「水林彪著『天皇制史論』をめぐって」奈良女子大学COE研究会「水林彪著『天皇制史論』の論点と問題点」と題して報告、討論。
39	2008.04.19	～	現在	東アジアの古代文化を考える会「日本という国号について」と題して講演。

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	教授	氏名	小谷野 純一	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 36 巻蓬生・関屋』		2004.10.10	至文堂	『源氏物語』蓬生・関屋の両巻について、総合的に編集と記述に当たったもの。菊判総頁 224 頁			
2 『紫式部日記』(原文 & 現代語訳シリーズ)	単著	2007.04.30	笠間書院	『紫式部日記』の訳注だが、新見を加えた。四六判総頁 233 頁			
3 『紫式部日記の世界へ』(新典社新書)	単著	2009.01.30	新典社	『紫式部日記』の作品世界を論じた。新書判 159 頁			
論文							
1 『和泉式部日記』の表象—五月記事の重層構造をめぐって—	単著	2005.05.31	中古文学第 75 号	『和泉式部日記』の時間性の問題についての論証を試みたもの。菊判総頁 76 頁中 10 頁			
2 平安朝の日記文学	単著	2006.06.30	台湾・淡江大学 2006 年度国際シンポジウム論文集	シンポジウムにおける発表を論文化したもの。A 4 判総頁 380 頁中 13 頁			
3 語ることへの傾き—『紫式部日記』書簡体部分をめぐって—	単著	2007.03.31	日記文学研究誌第 9 号	同日記の書簡体部分の表現の内実を論じたものである。菊判 53 頁中 10 頁			
4 『紫式部日記』の表現—書簡体部分をめぐって—	単著	2007.06.30	台湾・淡江大学 2007 年度国際シンポジウム論文集	シンポジウムにおける発表を論文化したもの。A 4 判総頁 377 頁中 13 頁			
5 切り拓かれるということ—『紫式部日記』の表現をめぐって—	単著	2008.05.31	『紫式部日記の新研究』(新典社)	同日記の表現の論理について論述したもの。菊判総頁 446 頁中 20 頁			

6	萩谷朴「紫式部日記絵巻物の考察より日記本文の残欠非残欠説の批判並に日記歌原体の推測に及ぶ」解説	単著	2008.07.31	『源氏物語と紫式部—研究の軌跡』(角川学芸出版)	当該文献の本質と意義について記述したもの。菊判総頁478頁中8頁
その他					
1	『紫式部日記』書簡体ブロックへの時空へ	単著	2005.12.19	日記文学研究会第49回大会	当該作品の書簡体部分の本質を論述したもの。
2		単著	2006.05.19	台湾・静宜大学2006年度国際シンポジウム	蜻蛉日記から讃岐典侍日記に至るいわゆる日記文学に関して、それぞれの特質を論述したもの。
3	『紫式部日記』の表現—書簡体部分をめぐって—	単著	2007.05.19	台湾・静宜大学2007年度国際シンポジウム	当該作品の書簡体部分に対する統論である。
4	紫式部の存在	単著	2007.05.21	台湾・淡江大学大学院	紫式部の思考構造の内実に関する自説を開陳した。
5	日本文学研究の現在	単著	2007.06.21	大東文化大学・北京外国語大学国際シンポジウム	各領域について概括し、自己の研究の現状について明示した。
6	『讃岐典侍日記』の表現構造—上巻の叙述世界を中心に—	単著	2007.09.22	北京外国語大学国際フォーラム	当該作品の上巻の表現を論述したもの。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1965.00.00	～	現在	中古文学会平成9年度～平成12年度 常任委員・編集委員、平成13年度～平成15年度事務局所在地委員	
2	1985.00.00	～	現在	全国大学国語国文学会会員	
3	2000.04.01	～	2010.03.31	日記文学研究会平成12年度～平成21年度運営委員	
4	2003.04.01	～	2005.03.31	NHKラジオ第2放送「古典講読」の番組、講師	
5	2004.04.01	～	2006.03.31	日記文学研究会平成16年度～平成17年度代表委員、編集委員	

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	下山 嬢子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「文学と音楽」という〔日本文化史特殊講義〕の実践		2006.04.00	講義の内容を、文学テキストの分析をしつつ 1、文学作品内に登場する<音楽>の考察 2、文学作品の内における<音楽性>の考察を、キーボード・CD、楽譜など用いて、実践しつつ行う授業の試み。2009 年度用として資料集 (テキスト) (A 5 版、100 頁、500 部) を作成し、学生に配布。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『日本文化史特殊講義〔文学と音楽〕資料集』(A5 版・102 頁)		2009.04.30					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『評伝島崎藤村』	単著	2004.10.15	勉誠出版 B 6 版 216 頁	〈日本の作家 100 人〉の 1 冊。年譜付。「人と作家」を評伝としてまとめたもの。作家の伝記と、作品解説が相関性をもって語られている。			
2 『近代の作家島崎藤村』	著書	2008.02.00	(明治書院) A 5 版 500 頁	学位 (博士) 論文。明治～大正～昭和と息の長い活動を続けた島崎藤村の総合的研究。藤村文学の表現方法、表現内容・構造に関する研究である。			
論文							
1 「作中作『懺悔』の発表に関する一考察―『新生』再読―」	単著	2005.05.13	『キリスト教文学研究』第 22 号 (日本キリスト教文学会) (9p 分)	藤村の小説『新生』の中で、主人公岸本が執筆する「懺悔」についての考察。			
2 「編年体近代現代女性文学史―昭和 34・35・36・37 年―」	単	2005.12.15	『解釈と鑑賞』	女性文学を中心とする 4 年間の文学史記述。			
3 『新世帯』再読―新吉とお国の〈関係〉について―	単	2006.03.20	『近代文学研究 I』(大東文化大学人文科学研究報告) 1～18 頁 (18p 分)	徳田秋声作『新世帯』の作品論。従来、二説に分かれていた〈読み〉への新たな試論。			
4 解説・鑑賞「安永蔭子」	単著	2007.03.00	『展望 現代の詩歌』第 6 巻・短歌 1 (明治書院) 211～227 頁 (27p 分)	歌人・安永蔭子の生涯を辿り、代表作を選び、解説と鑑賞を行なう。			
5 「藤村における明治二十年代のキリスト教」	単著	2007.05.00	『キリスト教文学』第 24 号 (日本キリスト教文学会) (7P 分)	島崎藤村における、明治二十年代のプロテスタント主義の実質についての考察。			

6	『エトランゼエ (仏蘭西旅行者の群)』の位相	単	2009.03.20	『近代文学研究Ⅱ』(大東文化大学人文科学研究研究所研究報告) 20~37 頁 (18p 分)	島崎藤村が、フランス滞在から帰国し、4~5年たってからの回想と紀行であるが、空想(幻想)領域・カソリズムにも及ぶその特質を論じた。
その他					
1	島崎藤村・真杉静枝・牧野吉晴・水野仙子・帯木蓬生	単著	2004.07.00	『現代小説大事典』(明治書院) (16p 分)	近・現代日本の作家と作品の解説。(5 作家、11 作品 担当)
2	「藤村の〈隣人〉思想—大正期—」	単	2004.09.11	日本キリスト教文学会 第 353 回 月例研究会 (於・筑波大学学校教育部)	大正期の島崎藤村の〈隣人〉思想についての考察。聖書的認識と滞仏、その前後のテキストについて。
3	(ミニシンポジウム) 『『新生』再読』		2004.12.11	日本キリスト教文学会 第 356 回 月例研究会 (於・筑波大学学校教育部)	高橋昌子 (三重大学教授)・剣持武彦 (上智大元教授)・下山、三者による藤村の『『新生』再読』のシンポジウム。
4	紹介ノート『島崎藤村』(評伝・日本の作家 100 人)	単	2005.05.00	『日本近代文学』第 72 集 (1p 分)	自著の研究ノート・紹介。
5	志賀直哉「赤西蠣太」	単	2005.06.05	学会の研究発表の司会 (於・日本女子大学) 全国大学国語国文学会	司会。
6	「小諸なる古城のほとり」	単	2005.08.20	全国文学館協議会編『全国文学館ガイド』(小学館) 115 頁 (1p 分)	小諸市立藤村記念館の紹介・エッセイ。
7	「〈声響〉の魅惑」	単	2005.09.18	東京芸術大学上演オペラ『オルフェウス』パンフレット(東京芸大) 2005.09.18~2005.09.19 34 頁 (1p 分)	森鷗外訳、グルック作曲のオペラ「オルフェウス」に因み、明治期の音楽と文学の関係について述べたエッセイ。
8		単	2006.01.00	『日本女性文学大事典』(大日本図書センター) 57、66~67、124、173、174、270~271、283~284 (10p 分)	大迫倫子・岡田八千代・近藤富枝・相馬黒光・曾野綾子・水野仙子 (以上 7 名の女性作家の解説)
9	「明治期のキリスト教—島崎藤村の場合—」	単	2006.05.12	学会大会シンポジウムパネリスト (日本キリスト教文学会) (於: 二松学舎大学)	学会大会のシンポジウムのパネリスト (藤村・透谷・蘆花の各々の場合について)
10	「大会印象記」		2006.07.00	日本近代文学会会報 105 号	(日本近代文学会 2006 年度春季大会第一日目) 島崎藤村『夜明け前』の研究発表に関する印象。
11	紹介「川端俊英著『島崎藤村の人間観』」	単著	2006.11.00	『日本近代文学』第 75 集 (1p 分)	書評紹介。
12	(講義)「木崎さと子『水面』を読む—80 年代・パリ・カソリズム—」		2007.11.28	(於・パリ第七大学大学院)	2007 年度の海外研究における講義。
13	シンポジウム・パネリスト「『夜明け前』と中山道」		2008.09.27	島崎藤村学会全国大会 (於・中津川市文化会館)	『夜明け前』における〈交通〉の概念、福沢諭吉、〈自然〉の問題についてパネリストとして提言。
14	(研究発表)「藤村と『新撰讃美歌』」		2008.11.08	(日本キリスト教文学会月例会 於・筑波大学学校教育部)	文学作品に現れた讃美歌の考証。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1971.05.00 ~ 現在			日本近代文学会昭 50 年度~51 年度運営委員 平 9 年度~平 10 年度編集委員 平 14 年度~平 15 年度運営委員、平成 14 年度~評議員 (～現在ニ至ル)	
2	1979.10.00 ~ 現在			昭和文学会平成 12 年度~現在幹事 昭 62 年度~平 4 年度編集委員 平 11 年度~13 年度会務委員	
3	1985.04.00 ~ 現在			日本文学協会会員	

4	1987.04.00	～	現在	全国大学国語国文学会会員
5	1993.10.00	～	現在	島崎藤村学会平成 21 年度～理事（現在） 平成 15 年度～20 年度幹事
6	1994.04.00	～	2009.03.31	北村透谷研究会会員
7	1995.06.00	～	現在	一葉研究会会員
8	2003.11.00	～	現在	日本キリスト教文学会会員

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	Janine Beichman	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 “The Writer in Time of War: Yosano Akiko and the Russo-Japanese War,” pp.57-82.		2007.00.00	日本アジア協会紀要 (Transactions of the Asiatic Society of Japan) . Fourth series, Vol. 21.			
その他						
1 「境の津」.から始まる 与謝野晶子の短歌		2004.00.00	The Addison Street Anthology: Berkeley's Poetry Walk. Robert Hass and Jessica Fisher 編. Heyday Books 出版	一首の英訳、p. 170。晶子の生まれ故郷堺市と Berkeley (バークレー市) は姉妹都市である。		

2	Yosano Akiko, "Beloved You Must Not Die," "In the First Person," "A Certain Country," "From Paris on a Postcard", "A Thirtyish Woman," pp. 302-304; tanka, pp. 313-314; "An Open Letter," pp. 333-339. Wakayama Bokusui, p. 311. Ogiwara Seisensui, p. 612. Ozaki Hosai, p. 614	2005.00.00	The Columbia Anthology of Modern Japanese Literature Volume 1. J. Thomas Rimer and Van C. Gessel 編. Columbia University Press 出版。	与謝野晶子の詩の英訳 5 編 (君死にたまふこと勿れ、一人称、ある国、巴里より葉書の上に、三十年の女の心)、短歌 12 首、随筆一編 (ひらきぶみ)。若山牧水の短歌の英訳 2 首。荻原井泉水の俳句の英訳一句。尾崎放哉の俳句の英訳 2 句。与謝野明子の作品のぞいてそれぞれ「Poems for All Seasons/折々のうた」にも掲載。
3	木之下晃. 『木之下晃 武満徹を撮る/Akira Kinoshita Photographs Toru Takemitsu』 by Akira Kinoshita.	2005.00.00	小学館, 118 pp.	日英語版。英訳担当。
4	Women and Poetic Thought by Miwata Masako, pp. 31-33.	2006.00.00	Woman Critiqued: Translated Essays on Japanese Women's Writing. Rebecca Copeland 編. University of Hawai'i Press 出版。	三輪田真佐子 「女子と詩想」と言う論文の英訳。
5	Ishigaki Rin, pp. 415-416. Katsura Nobuko, pp. 444-445. Maekawa Samio, p. 446. Nakajo Fumiko, pp. 448-449.	2007.00.00	The Columbia Anthology of Modern Japanese Literature, Volume 2. J. Thomas Rimer and Van C. Gessel 編. New York: Columbia University Press 出版。	石垣りんの詩 3 編 (屋根、シジミ、くらし)、桂信子の俳句 5 句、前川佐美雄の短歌 1 首、中城ふみ子の短歌 3 首の英訳。石垣りんの詩のぞいて、それぞれ「Poems for All Seasons/折々のうた」にも掲載。
6	In Iris Fields: Remembrances and Poetry by Abbess Kasanojin Jikun. 花山院慈薫尼公「御寺御所大聖寺門跡花山院慈薫尼公——あやめ 艸日記」。バーバラルーシュと桂美千代編。	2009.00.00	淡交舎	花山院慈薫 (1910-2006) の作品集。歌 (著者ご自分の短歌及び随筆中引用される他人の詩歌) の英訳担当。歌謡、近現代短歌、古典和歌、近世俳句、近代詩あわせて 130 編の外に、訳者の前書き。

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.00.00 ~ 現在	Association of Teachers of Japanese 会員
2	1992.00.00 ~ 現在	Association of Asian Studies 会員
3	1996.00.00 ~ 現在	日本近代文学会会員
4	1996.00.00 ~ 現在	日本近代文学館会員
5	1996.00.00 ~ 現在	日本文学協会会員
6	2000.00.00 ~ 現在	しずおか世界翻訳コンクール 審査員 (英語部門) ウェブサイト http://www1.sphere.ne.jp/shizuoka/translate/index.html から「しずおか世界翻訳コンクールとは・・・わが国の優れた文学を世界の人々に紹介し親しんでもらうとともに、国際相互理解を進めるため、世界各国を対象とした日本文学の翻訳コンクール」
7	2002.00.00 ~ 現在	日本比較文学会会員
8	2007.00.00 ~ 現在	日本アジア協会 (Asiantic Society of Japan) 会員

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	中村 邦生	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 日本文学研究入門		2009.03.00	日本文学専攻の学生が研究方法を策定するための具体例を教示。研究の方法の試みとして「書き出しの誘惑—テーマ批評の試み」を執筆。198～205頁。共著者・小谷野純一、下山嬢子ほか18名。総頁224。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 <衣裳>で読むイギリス小説—装いの変容。編者：久守和子、窪田憲子	共	2004.06.05	ミネルヴァ書房	「<不似合い>をめぐるエスキス」(251頁～269頁)を執筆。小説における「ふるまい」のテクスチャーを分析。総頁269		
2 月の川を渡る	単	2004.06.10	作品社	小説集。芥川賞候補作「ドック・ウォーカー」を含む三編を収録。総頁266		
3 <虚言>の領域—反人生処方としての文学	単	2004.07.30	ミネルヴァ書房	ナボコフ、シェイクスピア、日本の現代小説などをおし、文学的フィクションの魅力論を論じた批評書。282頁。		
4 本を愉しむ人々	共	2004.09.01	本の森	『幻の詩集、そして『さかえだ書店』のことなど』(86頁～96頁)を執筆。杉並区荻窪の無店舗書店「さかえだ書店」のユニークな本文化の役割をめぐるエッセイ集。総頁210		
5 メディアとしての身体・文学空間 01	共	2004.11.30	風涛社	日野啓三の「黒い穴」をめぐる意識と身体の危機の表象を論究した「十五秒の失語の身体—日野啓三「黒い穴」から／へ」(32頁～41頁)を執筆。総頁186		
6 記憶のディスク—ル・文学空間 02	共	2005.11.30	風涛社	20世紀政治史に翻弄されたボヘミア生まれの指揮者カレル・アンチェルを中心に音楽体験を書簡形式で書いたエッセイ「響きと怒りと—ある音楽家を憶いだす」(72頁～90頁)を執筆。総頁178		
7 風の消息、それぞれの	単	2006.07.30	作品社	小説集。芥川賞候補作「森への招待」を含む三編を収録。総頁175		
8 現代女性作家読本 ⑨・山田詠美	共	2007.03.10	鼎書房	作品論として『熱帯安楽椅子』—(唾棄)の関係論(44頁～48頁)を執筆。原善編。総頁146。		
9 女性文化 (第25巻)	共	2007.04.02	昭和女子大学	文学の愉快的な受容の方法をめぐる論「どうして富士には月見草が似合うのだろうか」(135頁～154頁)を執筆。昭和女子大学近代文化研究所編。総頁315		

10	現代女性作家読本 ⑩・中沢けい	共	2007.04.10	鼎書房	作品論として『『仮寝』ー一気分の微分法』(68頁～72頁)を執筆。与那覇恵子編。総頁154。
11	いま、きみを励ますこ とばー感情のレッシ ン	単	2007.11.20	岩波書店	古今東西の文学作品を素材に、人生のさまざまな局面で経験する感情の起伏を伝える名言を採求し、相互参照的に考察したものの。総頁196
12	名作はこのように始 まる I	共	2008.03.20	ミネルヴァ書房	古今東西の名作の冒頭の持つ効果と機能を論究した書。ミネルヴァ評論叢書の一冊。編者千葉一幹・芳川泰久。千石英世とともに編集を担当。川端康成『伊豆の踊子』(29頁～39頁)の書き出しの修辞性を考察した論を執筆。総頁206
13	名作はこのように始 まる II	共	2008.03.20	ミネルヴァ書房	一卷に続き、古今東西の名作の冒頭の持つ効果と機能を論究した書。ミネルヴァ評論叢書の一冊。共編著者、千石英世。川上弘美『センセイの鞆』(193頁～208頁)の書き出しの修辞性を考察した論を執筆。総頁208
14	ラヴレターを読むー ー愛の領分	共	2008.12.00	大修館書店	古今東西の文学者・芸術家のラヴレターのレトリックを論ずる。カフカの書簡を論じた「この十字砲火のような手紙のやりとりは止めなければなりません」(176頁・189頁)を執筆。共編者・吉田加南子、共著者・大岡信、佐々木幹郎、沼野充義ほか8名。総頁253頁。
15	名作は隠れている	共	2009.01.00	ミネルヴァ書房	宮沢賢治、カフカ、メルヴィルなど作家たちの隠れた問題作・意外作の意義を論評し分析。日野啓三「七千万年の夜警」を執筆(199頁・209頁)。総頁223。編者・千石英世/千葉一幹。共著者・山城むつみ、室井光広、千葉俊二ほか13名。
論文					
1	罵倒と悪態ーはみ だしの修辞学	単	2005.07.01	『言語』34巻7号(大修館書店)	小説における罵り言葉の役割と機能を場面の持つ意味の偏差と「ずれ」に焦点をあてて論述。査読あり。128頁中、5頁。
2	小島信夫の<小島信 夫的>な愉楽	単	2005.12.01	『水声通信』第1巻2号(水声社)	「小島信夫を再読する」のための論考。小島信夫の虚構のアイロニーを論ずる。査読あり。186頁中、17頁。
3	C. S. ルイスの魅力 のありか	単	2005.12.10	『喜びのおとずれ』筑摩書房・所収	イギリスの英文学者・批評家・小説家のC. S. ルイスの自己像の根拠を対立と矛盾の魅力として追究。11頁
4	なぜかブルース・チャ トウィンを憶い出し て	単	2006.12.10	『國文學』51巻13号(学燈社)	イギリスの作家ブルース・チャトウィンの事実と虚構の重なりあう紀行文学を論究する中からアイロニカルに中上健次を想起する試み。査読あり。180頁中、6頁。
5	忘却と熱の精度ー ー記憶の感触 22	単	2008.04.00	『水声通信』23号	記憶の淵源にある火のイメージを追究。査読有り 182頁中、8頁
6	異物、または調和の幻 想①ー記憶の感触 23	単	2008.06.00	『水声通信』24号	自己史の語りの「連続感覚」の特性を論究。査読有り 142頁中、7頁
7	異物、または調和の幻 想②ー記憶の感触 24	単	2008.08.00	『水声通信』25号	チェーホフ、コルタサルを起点に幻=実の意識を追究。査読有り 190頁中、7頁
8	愛かもしれない①ー ー記憶の感触 25	単	2008.10.00	『水声通信』26号	シュベルヴィエルの小説とアライダ・アスマンの記憶論を基底に記憶の再編について論述。査読有り 177頁中、8頁
9	愛かもしれない②ー ー記憶の感触 26	単	2008.12.00	『水声通信』27号	バタイユの箴言に同調しつつ愛の記憶の呪縛に言及。査読有り 222頁中、7頁
10	終わりの企みに抗っ てー記憶の感触 27	単	2009.03.00	『水声通信』28号	ボルヘスの「フネス」の記憶から擬態批評を試みる。査読有り 214頁中、15頁
その他					
1	デイヴィッド・ガーネ ット『ガーネット傑作 集I』	単	2004.06.25	週刊読書人	書評。
2	書物から発して、書物 に向かう教育を	共	2005.03.01	『立教』191号	文学教育と文芸ジャーナリズムの問題を中心とする千石英世、大川繁樹との鼎談。
3	池澤夏樹『世界文学を 読みほどく』	単	2005.03.18	『週刊読書人』2579号	書評

4	坪内祐三『「別れる理由」が気になって』	単	2005.07.01	『文學界』（文藝春秋）59巻7号	書評
5	記憶の感触	単	2005.11.01	『水声通信』1号（水声社）～24号（継続中）	発想の展開は小説的方法を持続しつつ、古今東西の虚構テキストのディテールに潜むイメージと登場人物の動きを「記憶」をテーマに追究した思考の試み。
6	喜びのおとずれーC.S. ルイス自叙伝	共	2005.12.10	筑摩書房	C.S.Lewis の Surprised by Joy の訳書。共訳者・早乙女忠。
7	ロミ&フェクサス『でぶ大全』	単	2005.12.10	『週刊読書人』2753号	書評
8	小沼丹『黒と白の猫』	単	2006.03.24	『週刊読書人』2630号	書評
9	ドミニク・ノゲーズ『人生を完全にダメにするための11のレッスン』	単	2006.04.01	『ふらんす』81巻4号（白水社）	書評
10	中軽井沢・桔梗が丘別荘地3-B区画をK氏は買わなかった	単	2006.07.01	『水声通信』第2巻7号（水声社）	特集「軽井沢という記号」のためのエッセイ。「軽井沢」の虚実的空間をめぐる考察の試み。
11	小島信夫『残光』を読む	単	2006.08.12	『図書新聞』2786号	混淆と錯綜に満ちた小島信夫の小説『残光』をめぐる書評的エッセイ。
12	都市出版社を追懐するー一九六〇年代のある文芸出版社のこと	単	2006.11.01	『水声通信』第2巻11号（水声社）	2006年2月28日（日本近代文学館）の東京出版理論サークルのために行なった講演記録。
13	文学の困難さを生きる	単	2006.11.11	『図書新聞』2797号	小島信夫への追悼文
14	存在論的幻量のあわい	単	2006.12.11	『図書新聞』2705号	自作『月の川を渡る』『〈虚言〉の領域』をめぐるインタビュー。聞き手、米田綱路
15	辞書的な発想の試みー中村邦生氏に聞く「辞典・事典」	単	2007.04.21	『図書新聞』2818号	小説・評論の書き手として、いかに辞書が発想の起点になっていくか、言葉と言葉をいかに再編成していくか語ったインタビュー。聞き手・米田綱路
16	坂本公延『作家の本音を読む』	単	2007.05.25	『週刊読書人』2689号	書評
17	老いるからこそ、書くー小島信夫“死後の二著”をめぐる	共	2008.03.01	『図書新聞』2860号	小島信夫の『小説の楽しみ』『書簡文学論』を中心に小島文学に関して語った千石英世（文芸評論家）との対談。
18	たとえば標高一万六千六百フィートの蠅ー旅をめぐる断想	単	2008.04.20	『國文學』53巻6号（学燈社）	旅先で遭遇する小動物、天気と交通情報、車窓の風景など旅行のディテールの喚起する感興と考察を記したエッセイ。
19	演題「嘘」を蒔くことー感情のレッスンとしての物語	特別講演	2008.11.08	日本イギリス児童文学会 清泉女子大学	
20	テーマ「ソフィー・バラをめぐる」	シンポジウム	2008.11.15	主催 聖心女子大学キリスト教文化研究所 清泉女子大学	

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.01	～	現在	二十世紀文学会会員（1996.04.01～現在、編集委員）
2	1992.04.01	～	現在	フォリオa 編集委員
3	1994.04.01	～	現在	文学・環境学会（ASLE・Japan）会員（1994.04.01～2007.03.31 運営委員）
4	1997.04.01	～	現在	日本文藝家協会推薦会員
5	1998.04.01	～	現在	文学空間編集委員

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	播本 眞一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書		2009.03.31		日本文学科1年次の必修科目「日本文学基礎演習」のテキストである。日本文学科の専任教員全員が著者となり、改訂を重ねている(2009年現在、改訂第三版)。筆者は、「第四部実践編」の「第二章レポート作成編」(pp.185-192)を担当した。A5版、総頁257頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 馬琴の立場—儒・仏・老・神をめぐって	単著	2004.05.25	「文学」隔月刊第5巻第3号(2004年5・6月号)岩波書店発行	馬琴の思想を、儒教・仏教・老荘思想・神道の側面から分析したもの。馬琴と荻生徂徠・太宰春台・新井白石・本居宣長との関連について考察し、馬琴が朱子学の範疇におさまらず宣長に近い立場にあったことを明らかにした。pp.53-70			
2 早稲田大学所蔵合巻集覧稿(三十二)	共著	2004.06.30	「近世文芸研究と評論」第66号 近世文芸研究と評論の会(早稲田大学谷脇研究室)発行	早稲田大学図書館所蔵の「合巻」を基本対象として、書誌的事項の調査をふまえ、内容紹介を行い、作品の趣向分析等にも言及し、「合巻」の総合的研究を企図する。『伊与簀垂女純友』を担当。pp.141-145 棚橋正博・播本眞一・佐々木亨。			
3 早稲田大学所蔵合巻集覧稿(三十三)	共著	2004.11.30	「近世文芸研究と評論」第67号 近世文芸研究と評論の会(早稲田大学谷脇研究室)発行	早稲田大学図書館所蔵の「合巻」を基本対象として、書誌的事項の調査をふまえ、内容紹介を行い、作品の趣向分析等にも言及し、「合巻」の総合的研究を企図する。『鶴山後日轉』を担当。pp.105-111 棚橋正博・播本眞一・佐々木亨。			
4 翻刻『故事部類抄』(八) —曲亭叢書—	共著	2005.03.15	「早稲田大学図書館紀要」第52号	曲亭叢書研究会の共同研究による馬琴旧蔵書の翻刻である。「穀菜部・材木部・菓実部・花卉部」を担当する。pp.65-83 柴田光彦・谷脇理史・雲英末雄・播本眞一・二又淳・小澤笑理子。			

5	馬琴と異国	単著	2005.06.15	「江戸文学」32号(特集 江戸文学と異国情報) ぺりかん社発行	曲亭馬琴の外国知識・外国観を、資料の備わる寛政期(1789年～)から天保期(～1843年)まで、その全体を見通すもの。寛政期の黄表紙『庭莊子珍物茶話』や馬琴手沢本『魯西亜志』『暹羅記事』『白石叢書』の書込みなどを資料とし、馬琴が正確で豊富な外国知識を持っていたにもかかわらず、青年期に影響を受けた本居宣長特有の皇国史観によって外国を夷狄とみなし続けていたことを論証する。pp.147-164
6	早稲田大学所蔵合巻集覧稿(三十四)	共著	2005.06.30	「近世文芸研究と評論」第68号 近世文芸研究と評論の会(早稲田大学谷脇研究室)発行	早稲田大学図書館所蔵の「合巻」を基本対象として、書誌的事項の調査をふまえ、内容紹介を行い、作品の趣向分析等にも言及し、「合巻」の総合的研究を企図する。『竹春駒心引綱』を担当。pp.144-149 棚橋正博・播本眞一。
7	馬琴と性	単著	2005.08.01	「国文学解釈と鑑賞」平成17年8月号(特集=近世文学に描かれた性) 至文堂発行	曲亭馬琴の、性に関する諸種の問題を論じるもの。馬琴黄表紙や『羈旅漫録』『南総里見八犬伝』にみえる性にかかわる描写と馬琴の体験との関連を述べ、息子の結婚など重要な局面において馬琴が開帝籤によって方針を決定していたのは新井白石の影響によることなどを論証する。pp.126-134
8	早稲田大学所蔵合巻集覧稿(三十五)	共著	2005.11.30	「近世文芸研究と評論」第69号 近世文芸研究と評論の会(早稲田大学谷脇研究室)発行	早稲田大学図書館所蔵の「合巻」を基本対象として、書誌的事項の調査をふまえ、内容紹介を行い、作品の趣向分析等にも言及し、「合巻」の総合的研究を企図する。『同八百屋娘姉妹』を担当。pp.178-182 棚橋正博・播本眞一・佐々木亨・村田裕司。
9	翻刻『故事部類抄』(九) 一曲亭叢書一	共著	2006.03.15	「早稲田大学図書館紀要」第53号	曲亭叢書研究会の共同研究による馬琴旧蔵書の翻刻である。「毛鱗部」を担当する。pp.42-58 柴田光彦・谷脇理史・雲英末雄・播本眞一・二又淳・小澤笑理子・鈴木絵里奈。
10	早稲田大学所蔵合巻集覧稿(三十六)	共著	2006.06.30	「近世文芸研究と評論」第70号 近世文芸研究と評論の会(早稲田大学谷脇研究室)発行	早稲田大学図書館所蔵の「合巻」を基本対象として、書誌的事項の調査をふまえ、内容紹介を行い、作品の趣向分析等にも言及し、「合巻」の総合的研究を企図する。『敵討 十三塚由来』を担当。pp.156-160 棚橋正博・播本眞一・佐々木亨・村田裕司。
11	『椿説弓張月』論	単著	2007.02.15	「日本文学研究」第46号 大東文化大学日文学会発行	馬琴史伝も読本の初作『椿説弓張月』(文化4～8年)のテーマを論じるもの。『弓張月』が書かれた文化年間には日本がロシアなどの外国の侵犯をうけた時代であったが、『弓張月』は、琉球王朝の中興の祖・舜天王が源為朝の子であるという伝説を利用しながら、当時中国と日本に両属する地域であった琉球が日本の領土であることを主張する。新井白石の南倭構想をとりいれつつ、本居宣長に影響を受けた皇国史観に基づく作品であることを議論した。pp.55-66
12	翻刻『故事部類抄』(十) 了 一曲亭叢書一	共著	2007.03.15	「早稲田大学図書館紀要」第54号	曲亭叢書研究会の共同研究による馬琴旧蔵書の翻刻である。「羽虫部」「虫部」を担当する。pp.161-184 柴田光彦・谷脇理史・雲英末雄・播本眞一・二又淳・小澤笑理子・鈴木絵里奈。
13	『南総里見八犬伝』の風景	単著	2007.10.25	「江戸文学」第37号(特集=江戸の文体) ぺりかん社発行	『南総里見八犬伝』の文体について、特に、当時の読者が妙文と賞讃した風景描写について議論したもの。『八犬伝』の風景描写が、中国白話小説の「只見」、浄瑠璃の道行文、『太平記』などの影響を受けながら、独自のスタイルを確立していることを論証した。具体的に述べると、馬琴の風景描写が「只見」と同義の「見渡せば」という惹句によって読者の視点を作中人物の視点と同化させ、そのあとに、語り手のコメントを加えて作中人物を遠景として捉えなおすという形式をとることを論じた。pp.141-148
14	『南総里見八犬伝』を読む(四)	単著	2007.11.30	「近世文芸 研究と評論」第73号 早稲田大学谷脇研究室発行	注釈という方法を用いて『南総里見八犬伝』第七輯巻之一の口絵第一図から第五図、六丁ウラの漢詩を読みとくもの。口絵第一図に描かれ、第七輯本文では名君として表現される武田信昌が馬琴の息子・宗伯の主君であった松前道広をモデルにしていたこと、口絵第三図に記される赤岩一角をめぐる物語と歌舞伎「名歌徳三升玉垣」との関連、口絵第五図・漢詩が馬琴の恩人であった柳川藩士・西原梭江をふまえたものであることなどを明らかにした。pp.58-70

15	『南総里見八犬伝』を 読む (三)	単著	2008.02.01	『復興する八犬伝』 勉誠 出版発行	注釈という方法を用いて『南総里見八犬伝』第二輯口絵、第四輯見返し、第三十一回芳流閣、第七輯表紙・見返し・序文を読みとくもの。第二輯口絵第一図と第二図が歌舞伎「伊勢音頭恋寝刃」と関連すること、第四輯見返しが天明二年刊行『東海藻』の口絵によること、芳流閣の場面が『聊齋志異』巻十六「禽侠」に基づくこと、第二輯口絵や第八輯の表紙などが伊勢を描く意味、第七輯序文と金聖歎評『水滸伝』との関連などを議論した。総頁 428 頁 pp.287-314
16	翻刻『俳諧歳時記』 (一)	単著	2009.02.15	「日本文学研究」第 48 号 大東文化大学日本文学会発行	曲亭馬琴著、享和 3 年 (1803) 刊行『俳諧歳時記』(横本、二巻二冊)の冒頭部を翻刻するものである。馬琴の『俳諧歳時記』を増補したと一般に考えられている藍亭青藍の『俳諧歳時記葉草』(嘉永四年 (1851) 刊)は岩波文庫などに翻刻され著名であるが、『俳諧歳時記』とは全く内容を異にする書物である。文化年間 (1804) 以降に読本作者として活躍する直前の、馬琴の、事物に対する認識や関心がまとまった形であらわれている『俳諧歳時記』は、三十歳代中頃の馬琴を考えるための必読文献といえる。馬琴研究のための重要な書物であるにもかかわらず、活字化されていないため、架蔵の初版本をもとに翻刻した。pp.11-24。
その他					
1	『馬琴中編読本集成』 14	共著	2005.03.30	汲古書院	鈴木重三・徳田武共編『馬琴中編読本集成』の書誌調査、解題執筆に対する協力。奥付に「編修協力 播本眞一・高木元」と記載あり。総頁 491 頁。
2	『新版 近世文学研 究事典』	共著	2006.02.20	おうふう	都賀庭鐘 (pp.117-117)・『西山物語』(pp.100-101)・読本 (pp.98-99)の項を担当。総頁 498 頁。
3	『馬琴中編読本集成』 15	共著	2006.04.28	汲古書院	鈴木重三・徳田武共編『馬琴中編読本集成』の書誌調査、解題執筆に対する協力。奥付に「編修協力 播本眞一・高木元」と記載あり。総頁 544 頁。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1977.04.00	～	現在	早稲田大学国文学会会員 (1981 年度～現在評議員、1999 年度～2002 年度編集委員、2004 年・2005 年度窪田空穂賞選考委員、2007 年度～現在理事)。	
2	1977.04.00	～	現在	日本近世文学会会員 (2008 年度～現在委員)	
3	1997.11.00	～	2006.03.00	読本研究の会会員 (1997 年度～2005 年度運営委員・編集委員)。	

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	檜垣 孝	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 『平家物語』の俊成歌について－古歌の問題と関わって－	単著	2005.02.00	日本文学研究、第 44 号	語り本系『平家物語』にとられた俊成歌は、平宗盛が口ずさんだ古歌として扱われているということに注目し、物語の論理・和歌の論理両面から考えて、俊成歌としないで古歌とすることに意味があったことを論じたもの。		
2 『長秋詠藻』評釈 (2)	単著	2005.03.00	大東文科大学紀要 第 43 号 (人文科学)	藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その 2、367 番から 373 番)		
3 『長秋詠藻』評釈 (3)	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 (人文科学)	藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その 3、374 番から 387 番)		
4 『長秋詠藻』評釈 (4)	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要 45 号 <人文科学>	藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その 4、388 番から 394 番)		
5 『長秋詠藻』評釈 (5)	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要 46 号 <人文科学>	藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その 5、395 番から 402 番)		
6 『長秋詠藻』評釈 (6)	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要 47 号 (人文科学)	藤原俊成の私家集『長秋詠藻』全歌の評釈。(その 6、403 番から 407 番)		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1973.04.00 ～ 現在		日本文芸研究会会員 (昭和 50 年～52 年委員) (平成 7 年～現在委員)				

2	1981.06.00	～	2005.03.00	全国大学国語国文学会会員
3	1983.04.00	～	現在	和歌文学会会員（平成3年～6年例会委員）（平成21年～現在会計監査）
4	1986.10.00	～	現在	中世文学会会員
5	1988.05.00	～	現在	中古文学会会員
6	1988.05.00	～	現在	仏教文学会会員（平成2年～現在委員）
7	1990.06.00	～	現在	解釈学会会員
8	1990.06.00	～	現在	日本文学協会展員（平成7年・8年委員）（平成9年～12年運営委員）

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	教授	氏名	日吉 盛幸	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「日吉ゼミナールのホームページへようこそ。」		1997.04.01	(1997年4月～現在) インターネット上に HP (http://www.daito.ac.jp/~hiyo/siryu.html) を開設し、「講義科目教授資料」「万葉集関係資料」「『万葉集』研究の基礎」「卒業論文書式フォーマット」「演習用レジュメサンプル」などを欠席してもどこからでもダウンロードできるようにしたほか、「履修登録後の課題と演習順」など学生が携帯電話を用いて簡単に確認できるようにし、授業内容などについても「書き込み掲示板」で質問を受け、必ず回答している。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『日本文学研究入門』		2006.03.31	大東文化大学日本文学科 第四部実践編『『万葉集』研究の基礎』執筆。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 『人文科学』第10号～第13号(2005.03～2008.03)		2005.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
2) 『人文科学研究所所報』No.11～No.14(2005.03～2008.03)		2005.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
3) 河内利治他『中国美学範疇辞典』訳注第三冊』		2005.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
4) 小林健二『「馬王堆漢墓帛書」肆、「張家山漢墓竹簡」所収十一経脈釈文総索引』		2005.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
5) 成家徹郎『古代漢字の研究』		2005.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
6) 尾花清『大東文化学院創立過程基本史料』		2005.04.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
7) 下山嬢子編『近代文学研究 I』		2006.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
8) 井上亘著『諧声符引き古音検字表附解説・図表』		2006.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
9) 成家徹郎著『中国古代の天文と暦』		2006.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
10) 中林史朗編『近出殷周秦漢金文集録』		2006.04.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
11) 門脇廣文他『中国美学範疇辞典』訳注第四冊』		2007.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
12) 田尻敦子『バリ島の美術高校をめぐる五世代の学習の連鎖』		2007.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
13) 山口謠司他『大秦景教流行中国碑』		2007.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
14) 田尻敦子『バリ島の美術学校と工房の相互作用』		2008.03.00	大東文化大学人文科学研究所 発行人				
15) 尾花 清『大東文化学院の「創設神話」について』		2008.03.20	大東文化大学人文科学研究所 発行人				

16) 門脇廣文他『中国美学範疇辞典』訳注 第五冊』		2008.03.25	大東文化大学人文科学研究所 発行人	
II 研究活動				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『藝文類聚(巻十五)訓讀付索引』	共著	2005.03.25	大東文化大学東洋研究所	芦川敏彦・福田俊昭・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸
2 『藝文類聚(巻十六)訓讀付索引』	共著	2006.03.25	大東文化大学東洋研究所	芦川敏彦・福田俊昭・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸
3 『藝文類聚(巻八十)訓讀付索引』	共著	2007.03.25	大東文化大学東洋研究所	芦川敏彦・福田俊昭・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸
4 『藝文類聚(巻八十一)訓讀付索引』	共著	2008.03.25	大東文化大学東洋研究所	芦川敏彦・福田俊昭・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸
5 『藝文類聚(巻八十二)訓讀付索引』	共著	2009.03.25	大東文化大学東洋研究所	芦川敏彦・福田俊昭・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸
論文				
その他				
1 『万葉集』と秩父(2)		2004.07.10	秩父市歴史文化伝承館	ちちぶ学セミナー「新編武蔵風土記稿と小歳万葉歌碑」講演。
2 やさしい文学		2004.08.27	埼玉県川島町社会福祉協議会	
3 平成15年度ちちぶ学セミナー講義録	単	2005.02.10	秩父市教育委員会	ちちぶ学セミナー「大伴部小歳歌と伝承」講演録。
4 平成16年度ちちぶ学セミナー講義録	単	2005.03.31	秩父市教育委員会	ちちぶ学セミナー「新編武蔵風土記稿と小歳万葉歌碑」講演録。
5 平成16年度ちちぶ学セミナー講義録(専門)	単	2005.03.31	秩父市教育委員会	ちちぶ学セミナー「秩父の文学碑と万葉歌碑」講演録。
6 やさしい文学		2005.08.26	埼玉県川島町社会福祉協議会	
7 平成18年度板橋グリーンカレッジ大学院「レポート集」	単	2006.03.20	板橋区健康いきがい部	『万葉集』の総合的探求を終えて
8 秩父文学碑マップ	監修・解説	2006.03.31	秩父市歴史文化伝承館	「秩父の文学碑」解説と文学碑204基の中から75基を翻刻し、マップを作成A2四つ折り2面カラー(国会J P : 21068007)。
9 平成17年度ちちぶ学セミナー講義録(専門)	単	2006.03.31	秩父市教育委員会	ちちぶ学セミナー「秩父文学碑探訪」講演録。
10 やさしい文学		2006.08.25	埼玉県川島町社会福祉協議会	
11 秩父の万葉歌碑ー時空を超えた魅力ー		2006.09.09	主催・秩父市 秩父市教育委員会 秩父市歴史文化伝承館	関東の万葉古碑と秩父の万葉歌碑について、ビジュアルライザーを使用した公開講演。
12 平成18年度ちちぶ学セミナー講義録	単	2007.03.31	秩父市教育委員会	ちちぶ学セミナー「秩父の万葉歌碑」公開講演録。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1972.04.00 ~ 現在	上代文学会会員(1991.04.00~1993.03.00 常任理事、1993.04.00~2011.03.00 理事)		

2	1972.04.00	～	現在	萬葉学会會員
3	1975.04.00	～	現在	美夫君志会會員
4	1986.04.00	～	現在	大東文化大学東洋研究所兼担研究員
5	2004.04.00	～	2008.03.00	大東文化大学人文科学研究所所長

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	教授	氏名	藤尾 健剛	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
1) 「日本文学研究入門「基礎演習」テキスト」			2008.04.00		日本文学基礎演習のための教科書で、第1部、第2部、第4部のなかの一篇を執筆した。A5版、計50頁			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
1) 「夏目漱石『門』、『心』を読む」			2008.10.16		2008年10月16日、30日、11月13日大東文化大学地域連携センター主催のオープンカレッジで、一般市民に対して『門』と『心』を講じた。			
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書								
論文								
1 「根本的の手術」は可能かー『明暗』の展開	単著	2005.03.00	「大東文化大学紀要」第43号〈人文科学〉		夏目漱石の『明暗』のプロットを、主人公津田の精神に対してなされる「手術」の過程とする解釈を受け継ぎ、発展させた。B5版16頁			
2 「匂いと記憶ー夏目漱石の場合」	単著	2005.11.30	「文学空間」第5巻第2号・20世紀文学研究会(風濤社)		『それから』などにおいて、匂いの知覚と記憶の連鎖がどのように描かれているかを分析した。A5版5頁			
3 「坊っちゃん」と日露戦争ー武士道、侠客、仇討ち	単著	2006.03.00	「大東文化大学紀要」第44号		「坊っちゃん」に、日露戦争にまつわる言説批判のモチーフを読みとった。B5版23頁			
4 「漱石とナショナリズムー「坊っちゃん」を中心に」	単著	2006.03.10	「國文學」學燈社		漱石が、日露戦時のナショナリズムの高揚に対して、どのように関わったかを論じた。A5版9頁			
5 「夏目漱石「一夜」・「夢十夜」考ー「夢みること」をめぐる二つの省察」	単	2009.03.00	「大東文化大学紀要」第47号〈人文科学〉		夏目漱石の「一夜」と「夢十夜」を分析し、現代人のロマンティックな夢想癖に対する漱石の批判的姿勢を検証した。B5版、計16頁			
その他								
1 山崎甲一著『夏目漱石の言語空間』	単	2004.05.15	日本近代文学		A5版4頁			

2	「綾目広治著『倫理的で政治的な批評へ日本近代文学の批判的研究』」	単著	2004.09.01	「昭和文学研究」第49集・昭和文学会	綾目広治著『倫理的で政治的な批評へ日本近代文学の批判的研究』に対する書評。A5版3頁
3	「佐々木亜希子著『漱石 響き合うことば』」	単著	2007.03.20	「愛知淑徳大学国語国文」第30号	書評 A5版6頁
4	「柴田勝二著『漱石のなかの<帝国>—「国民作家」と近代日本』」	単著	2007.06.00	「日本文学」日本文学協会	書評 A5版2頁
5	「朴裕河著『ナショナル・アイデンティティとジェンダー 漱石・文学・近代』」	単著	2008.02.00	「日本文学」日本文学協会	書評 A5版2頁
6	「内部の〈家〉—夏目漱石『行人』の〈近代〉」A4版、7頁	単	2008.09.00	第2回 東アジア三大学国際シンポジウム・論文集「東アジアにおける「家」—伝統文化と現代社会」	ルトウルノー『結婚と家族の進化』が夏目漱石に与えた影響を検証し、あわせて、前近代的な家父長制の機構が『行人』の主人公たちの精神を束縛していることを指摘した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1988.04.00	～	現在	日本近代文学会会員
2	1992.04.00	～	現在	日本文学協会会員
3	1994.10.00	～	現在	文体学会会員
4	1997.04.00	～	現在	昭和文学会会員
5	1998.09.00	～	現在	日本比較文学会会員

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	准教授	氏名	北村 章	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 道長の宿痾恢復譚に関する覚書	単著	2008.02.15	大東文化大学日本文学会『日本文学研究』第 47 号	『栄花物語』(巻第 7・とりへ野) 長保 3 年夏に罹患したとする藤原道長の病悩が、実はその後の彼の人生に深く関わる一件と位置づけられた、作者による物語上の操作であったことを、その蓋然性において考察した。総頁数 124 頁中 13 頁			
その他							
1 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』	共著	2004.10.10	至文堂	蓬生・関屋の巻を分担執筆			
III 学会等および社会における主な活動							
1	1973.00.00	～	現在	日本文学協会			
2	1974.00.00	～	現在	中古文学会平成 9 年度～平成 10 年度 常任委員			
3	1996.00.00	～	現在	解釈学会			
4	1997.09.00			埼玉県いきがい財団生涯教育の一環として「古典」講義；			
5	1997.12.00	～	現在	日本文学関連学会平成 9 年 12 月の学会設立準備会に中古文学会選出の会議委員となり、平成 12 年学会設立と同時に委員を退く。			
6	2006.07.00	～	現在	日記文学研究会			

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	准教授	氏名	浜口 俊裕	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 浜口俊裕電子ギャラリー (日本文学・文化一所蔵品から)		2004.05.01	授業担当科目「古典文学特殊講義3 (古典文学と図像)」の発展的学習と日本古典文学や文化・歴史などへの関心を育成することを目的に、江戸～大正期頃に制作された架蔵の大和絵・奈良絵・浮世絵・屏風・画譜・絵本・新聞付録などの絵画類 259 件、古筆切・書跡・歌仙色紙・屏風・短冊などの書蹟類 82 件、卷子体・写本・版本・手鑑などの和本文類 36 件に解説文を付して、大学のホームページ上で公開している。その多くが公共機関に所蔵しないものであり、研究者にも有益なもの。(http://www.ic.daito.ac.jp/~hama/index.html)。また母校史教育の参考に、本学創設母体の「大東文化学院」関係者の書画等 14 件も併せて公開し、現在に至っている。(2004年5月1日～現在)				
2) 『大学教育への提言 ファカルティ・デベロップメントと IT 活用 2006 年版』(社団法人・私立大学情報教育協会) 刊		2006.11.00	IT 活用授業モデルの章に、「可視化教材を多用した中古文学特殊講義授業」を執筆。CD-R も添付。A4判、総 349 頁。執筆頁 37-39 頁。※研究業績の再掲。				
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (2008 年 12 月実施) において、「中古文学演習乙 (3 年生用 紫式部日記)」科目で全 13 項目の平均値 1.98 (2 段階評価)、授業への満足度値 4.6 (5 段階評価) の高い評価を得た。				
4) 浜口ゼミ 3 年生の動画 CD-ROM「君に会えた日から」(浜口俊裕著作・制作) を配布		2008.12.24	2008 年度浜口ゼミ 3 年生のゼミでの 1 年間を記録した動画 CD-ROM 版「浜口ゼミ 2008 君に会えた日から」(浜口俊裕著作・制作) をゼミ 3 年生に配布した。内容は「新入ゼミ生歓迎コンパ/京都夏合宿の 3 日間/夏合宿付録第 1 集/夏合宿付録第 2 集/ゼミ担当教員浜口俊裕の『源氏物語』一千年紀講義録/『紫式部日記』ゼミプレゼンテーションの記録」などで成り、写真・肉声・ミュージックによって 1 時間 6 分 29 秒にまとめて収録した。ゼミ生の父兄から CD-ROM を通して子女の 1 年間の快活な姿を知ることができたと好評を博した。				
5) 浜口ゼミ生卒業記念動画 CD-ROM「軌跡」(浜口俊裕著作・制作) を配布		2009.03.11	2008 年度浜口ゼミ卒業生へ卒業記念品として、浜口ゼミで過ごした 3 年・4 年次 2 年間の学生生活を収録した動画 CD-ROM 版「軌跡」(浜口俊裕著作・制作) を配布した。内容は「思い出の道/ゼミ生のプレゼンテーションの様子/京都夏合宿の 3 日間/ゼミ生紹介/ゼミコンパ/卒業論文制作の様相/ゼミ担当教員浜口俊裕から卒業生へのはなむけの詞/思い出のキャンパス」などで成り、写真・肉声・ミュージックによって 28 分 11 秒にまとめて収録した。ゼミ卒業生からは一生の宝ものにしたいと好評を博した。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			

著書				
1 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 蓬生・関屋』	単著	2004.10.00	至文堂刊	「影印本を読むー東久邇宮家旧蔵本「よもきふ」一帖」A 5判、総頁 224 頁。執筆頁 22-23 頁。
2 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 蓬生・関屋』	単著	2004.10.00	至文堂刊	「鑑賞欄」「基本用語」に解説文、各頁の「語句解釈」などを執筆。A 5判、総頁 224 頁。執筆頁 53、57、61、63、71、77 頁。
3 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 蓬生・関屋』	単著	2004.10.00	至文堂刊	「越の白山」「松と藤」の補助論文を執筆。A 5判、総頁 224 頁。執筆頁 72-73 頁、98-99 頁。
4 『芸文類聚（巻十五）訓読 付索引』	共著	2005.02.00	大東文化大学東洋研究所刊	共著者は芦川敏彦、蔵中しのぶ、中林史朗、成田守、浜口俊裕、日吉盛幸、福田俊昭。B 5判、総頁 93 頁。
5 『芸文類聚（巻十六）訓読 付索引』	共著	2006.03.00	大東文化大学東洋研究所刊	共著者は芦川敏彦、蔵中しのぶ、中林史朗、成田守、浜口俊裕、日吉盛幸、福田俊昭。B 5判、総頁 118 頁。
6 『枕草子の新研究 作品の世界を考える』	共編著	2006.05.00	新典社刊	安田女子大学助教授 古瀬雅義氏との共編著。14 名の論文を掲載して、『枕草子』の作品の世界について考究する。A 5判、総頁 412 頁。
7 『枕草子の新研究 作品の世界を考える』	単著	2006.05.00	新典社刊	『枕草子』『中納言まゐりたまひて』章段新考」を執筆する。同章段についての史実年時の新見、天禄四年円融天皇勝ち熊の扇贈呈との構想的重なり、緻密な構成と主題、広報活動担当官としての作者など、当章段についての総合的な研究論文。自分の編著であるが、A 5判、総 412 頁で、拙稿の執筆頁は 369-404 頁。
8 『大学教育への提言 ファカルティ・デベロップメントと I T 活用 2006 年版』	単著	2006.11.00	社団法人・私立大学情報教育協会刊	<第 2 章 ファカルティ・デベロップメントとしての I T 活用授業モデル>章に、「可視化教材を多用した中古文学特殊講義授業」を執筆。A 4判、総 349 頁。執筆頁 37-39 頁。
9 『国文学 解釈と鑑賞』	単著	2007.01.01	至文堂刊	「佐伯梅友と源氏物語論」を執筆。文法学者としての佐伯梅友氏が源氏物語とどのように向き合ったかを論じた。A 5判、総 231 頁。執筆頁 93-98 頁。
10 『芸文類聚（巻八十）訓読 付索引』	共著	2007.03.00	大東文化大学東洋研究所刊	共著者は芦川敏彦、蔵中しのぶ、中林史朗、成田守、浜口俊裕、日吉盛幸、福田俊昭。B 5判、総頁 109 頁。
11 『芸文類聚（巻八十一）訓読付索引』	共著	2008.03.00	大東文化大学東洋研究所刊	共著者は芦川敏彦、蔵中しのぶ、中林史朗、成田守、浜口俊裕、日吉盛幸、福田俊昭。B 5判、総頁 158 頁。
12 『源氏物語の新研究 本文と表現を考える』	単著	2008.11.00	新典社刊	「新出の善本ー東久邇宮家旧蔵本『源氏物語』末摘花の本文についてー」を執筆する。従来、全く存在の知られなかった『源氏物語』の新出写本であり、本文系統としては青表紙本系統であること、今日の同系統の日本大学総合図書館蔵三条西家旧蔵証本よりも内容的に優れた本文を有していること、など書誌的外観も含めて詳細に考察した研究論文。A 5判、総 398 頁中、拙稿の執筆頁は 231-258 頁。
13 『芸文類聚（巻八十二）訓読付索引』	共著	2009.03.00	大東文化大学東洋研究所刊	共著者は芦川敏彦・蔵中しのぶ・中林史朗・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸・福田俊昭。B 5判、総頁 143 頁。
論文				
その他				
1 枕草子研究会	単	2004.11.00	昭和女子大学	「藤原定家の功罪ー枕草子の動物をめぐるー」を口頭発表。
2 日本文学風土学会タイアップ特別講座	単	2005.02.00	新宿産経学園	「山々の物語ー北山などー」の講座講師。
3 日本文学風土学会産経学園提携講座「世界の歴史・風土の中に日本文学を開く」	単	2006.08.00	新宿産経学園	「歴史の編纂・六国史から大鏡・栄華物語へ」の講座講師。

4	『絵師・画家たちと『枕草子』――「香炉峯の雪」章段の図像を中心に――（口頭発表）』	単	2007.05.19	中古文学会春季大会（於、國學院大学）	従来『枕草子』に取材した図像は博物館や美術館に数点しか知られていないが、本発表では50点ほど存在することを指摘し、特に「香炉峯の雪」章段にまつわるものが25点確認されるほど多数を占めている。なぜこの図像が絵師たちに好まれて描かれたのか、最初の図像はどのような図様であったか、江戸・明治・昭和における絵師や画家たちの作品をプロジェクターを使用して見せながら『枕草子』の享受のあり方を新しい視点と文献などによって探究した。
5	日本文学風土学会タイアップ特別講座「東京の文学と風土」	単	2007.09.08	新宿産経学園	「品川の文学と風土」の講座講師。
6	<古典文学講座>『枕草子』の世界	単	2007.10.09	埼玉県新座市立中央公民館	講座講師。全3回。
7	『枕草子と図像の交流――「香炉峯の雪」章段を中心に――』	単	2007.11.10	中京大学国文学会秋季大会講演（於、中京大学）	講演講師。

III 学会等および社会における主な活動

1	1972.04.00	～	現在	中古文学会平成9年度選挙管理委員副委員長、平成9年5月～平成11年5月常任委員・事務局所在地委員、平成11年度選挙管理委員長、平成13年度選挙管理委員長、平成13年5月～15年5月事務局所在地委員、平成15年度選挙管理委員長、平成15年5月～平成17年5月事務局所在地委員、平成17年度選挙管理委員長
2	1972.04.00	～	現在	日本文学協会会員
3	1972.04.00	～	現在	和歌文学会会員
4	1984.04.00	～	現在	全国大学国語国文学会会員
5	1998.04.00	～	現在	日本文学風土学会平成11年6月～14年6月「常任委員」、平成14年6月～現在「常任理事」
6	2003.04.00	～	2008.03.00	社団法人・私立大学情報教育協会「文学教育IT活用研究委員会委員」に委嘱
7	2005.07.00	～	2008.03.00	社団法人・私立大学情報教育協会「日本文学運営委員会委員」に委嘱

(表 24)

所属	文学部日本文学科		職名	准教授	氏名	美留町 義雄	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 森鷗外「有楽門」	共著	2009.01.30	『名作は隠れている』(ミネルヴァ書房)	56-69 頁 編者：千石英世・千葉一幹			
論文							
1 都市・身体・速度－鷗外の足－	単著	2004.11.30	『文学空間』(20世紀文学研究会)	森鷗外のベルリンにおける近代都市体験を考察した論考。			
2 衛生都市ベルリン－鷗外のもう一つの都市体験－	単著	2007.03.31	大東文化大学紀要 人文科学第 45 号	99～119 頁			
3 ベルリンのカフェにて－「パウエル茶店」と鷗外	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要 人文科学 46 号 115～137 頁				
その他							
1 (口頭発表) 市民を覆う近代都市のネットワークと生の変容－ベルリン小説の背景－	単著	2008.06.14	日本独文学会春期研究発表会 於立教大学				
2 (口頭発表) Unter der Erde der Kaiserstadt－Mori Ogai und Berlin－	単著	2008.08.29	第五回アジア・ゲルマニスト会議				
III 学会等および社会における主な活動							
1	1994.05.00	～	現在	十九世紀ドイツ文学研究会会員			

2 1994.05.00 ~ 現在

日本独文学会会員

(表 24)

所属	文学部日本文学科	職名	准教授	氏名	山口 敦史	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 古代前期 (日本) の言語認識と (異言語) - 「梵語」「漢語」「倭語」などの問題 -		2004.07.00	『21世紀言語学研究 - 鈴木康之教授古稀記念論集 -』(04 記念行事委員会編、白帝社)	p397-409		
2 『日本霊異記』の性愛表現		2005.03.00	『ケガレの文化史 - 物語・ジェンダー・儀礼 -』(服藤早苗・小嶋菜温子、増尾伸一郎、戸川点編、森話社)	p63-78		
3 『日本霊異記』における祖霊祭祀 - 枯骨報恩譚を中心に -		2006.02.00	「日本文学研究」第 45 号 (大東文化大学日本文学会)	p1-9		
4 善珠『梵網経略抄』から見る「姪」と「呪術」の認識 - 唐・新羅作製『梵網経』注釈との関連 -		2006.03.00	「古代文学」第 45 号 (古代文学会)	奈良時代の学僧善珠が作製した『梵網経略抄』の「姪」と「呪術」に関する記述から、奈良時代の仏教的知性の知的認識を探る。p2-9		
5 『懐風藻』の自然観と仏教思想 - 麻田陽春の漢詩と藤原氏の系譜 -	単著	2008.05.00	『懐風藻 日本の自然観はどのように成立したか』(辰巳正明編、笠間書院)	p152-168		
6 「蘇民将来」論 - 経典と注釈 -	単著	2009.03.01	「古代文学」第 48 号	p19-24		
その他						

1	奈良時代の仏典注釈と「鄔太」－法進『沙弥十戒并威儀經疏』をめぐって－	2004.05.16	上代文学会大会（奈良女子大学）	
2	文字表記論についての雑感	2004.07.00	「セミナー通信」第9号（古代文学会）	
3	『日本靈異記』における祖霊信仰	2004.10.09	東アジア比較文化国際会議日本大会（九州産業大学）	
4	『日本靈異記』における〈呪殺〉	2004.12.04	仏教文学会支部例会（大東文化大学）	
5	『日本靈異記』における「一闡提」	2006.07.02	古代文学会例会（神楽坂エミール）	
6	セミナー雑感	2006.09.00	「2005年度夏季セミナー発表報告と今後の可能性」（古代文学会）	
7	上代説話文学の諸相－仏典・經疏・説話－	2006.10.25	大東文化大学日本文学会秋季大会（大東文化大学東松山校舎記念講堂）	
8	子午線 「靈性論」の後に	2007.06.00	「日本文学」第56巻第6号（日本文学協会）	
9	「蘇民将来」の〈神話〉と經典	2008.05.03	古代文学会 連続シンポジウム第2回「仏教と神話」（共立女子大学）	
10	牛と疫鬼－『日本靈異記』説話の思想－	2008.06.07	仏教文学会大会（大正大学）	
11	古代・仏教的知性の言語認識	単著 2008.12.10	「武蔵野文学」第56集	p21-26

III 学会等および社会における主な活動

1	古代文学会会員
2	上代文学会会員
3	説話文学会会員
4	東アジア比較文化国際会議会員
5	日本比較文学会会員
6	日本文学協会会員
7	仏教文学会会員
8	和漢比較文学会会員

(表 24)

所属	文学部 日本文学科		職名	講師	氏名	富樫 純一	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 現代日本語終助詞研究文献目録	単著	2004.11.30	『筑波日本語研究』第9号 筑波大学人文社会科学研究所	現代語の終助詞研究の文献を網羅し、索引をもうけて利用者の便を図った目録を作成した。(pp.69-90)			
2 複合動詞「にしろ」「にせよ」「であれ」 —その意味と諸用法をめぐって—	単著	2005.08.31	『筑波日本語研究』第10号 筑波大学人文社会科学研究所	新聞や小説のコーパス調査に基づき、「にしろ」「にせよ」「であれ」の三形式がどのような使用傾向をしめしているのか、どのような要素が前接、あるいは共起するのかを確認した。その上でこれらの共通の意味を要素の例示を表すものと記述した。(pp.1-18)			
3 「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論	単著	2005.10.15	『言語』2005年11月号 大修館書店	「へえ」「ほう」「ふーん」の用いられ方の異なりを観察し、それぞれの意味を心内処理の観点から説明した。また、それほど分析が進んでいない感動詞へのアプローチに関して、現象の観察はもちろん、心内の動きとの関連に重点を置かなければならないことを指摘した。(pp.22-29)			
4 驚きを伝えるということ —感動詞「あつ」と「わっ」の分析を通じて—	共著	2005.10.19	『シリーズ文と発話第一巻 活動としての文と発話』 (串田秀也・定延利之・伝康晴(編)) ひつじ書房	感動詞「あつ」と「わっ」の振る舞いの違いから、これらの意味の異なりが心内での認識の相違によるものと分析した。「あつ」は単純な認識、「わっ」はより複雑な認識が発話の背後に存在する。これをさまざまな現象の観察に基づいて指摘し、感動詞一般における分析の方向性を明らかなものとした。(pp.229-251) (共著者) 林誠、串田秀也、西阪仰、北野浩章、細馬宏通、ポリリー・ザトラウスキー、定延利之、中川明子、林博司、水口志乃扶、小川暁夫			

5	肯定・検索・問い返し ー感動詞「ええ」の統 一的記述を求めてー	単著	2005.10.31	『文藝言語研究言語篇』第 48号 筑波大学大学院人 文社会科学部研究科文芸・言 語専攻	言語形式「ええ」は、音調の違いによって、肯定・問い返し・ 検索標識という異なった三つの機能を示す。ここでは、これ らの機能に共通する心内処理を、現象の観察に基づいて考察 した。一見、全く機能的な共通性がないものでも、心内処理 レベルでは共通の処理操作が根底にあることを指摘し、感動 詞分析の新たなアプローチを提示した。 (pp.77-93)
6	否定応答表現「いえ」 「いいえ」「いや」	共著	2006.03.20	『現代日本語文法 現象と 理論のインタラクション』 (矢澤真人・橋本修(編)) ひつじ書房	心内の情報処理の観点から、これまで注目されてこなかった 否定応答表現「いえ」「いいえ」「いや」の異なりを観察し、 機能的・意味的な位置付けを示した。そこから、否定を「情 報そのものの否定」と「情報の提示行為の否定」とに分ける ことで、それぞれの形式の相違を明確に説明することができる。 (pp.23-46) (共著者)天野みどり、福盛貴弘、石 田尊、福嶋健伸、阿部二郎、橋本修、和氣愛仁、安部朋世、 茂木俊伸、井本亮、川野靖子、北原博雄、矢澤真人
7	実験言語学の展望	共著	2006.03.31	『文法理論の適切な適用範 囲の検証と、体系的な教育 文法理論の構築』(平成 17 ～18 年度科学研究費補助 金基盤研究C 研究成果報 告書(研究代表者:矢澤真 人)) 筑波大学	脳波を検出する実験と言語学とを結びつけた場合、どのよう な現象分析、実験手順、分析手法を取ることができるのか。 そして、脳内処理の分析が言語学、日本語学に寄与するもの はいったい何か。その展望をさまざまな視点からまとめた。 (pp.59-75) (共著者)福盛貴弘、阿部二郎、石田尊、井 本亮、川野靖子、福嶋健伸、茂木俊伸
その他					
1	終助詞・間投助詞の 「さ」に関する覚え書 き	単独 発表	2004.05.08	第 74 回関東日本語談話会 (学習院女子大学)	終助詞・間投助詞の「さ」について、コーパス調査による傾 向を把握した。対話、新聞、小説のそれぞれのコーパスで、 「さ」の用いられ方が異なり、小説や新聞では役割語として の使用が顕著に見られることを指摘した。実際の対話におけ る使用との隔たりが「さ」には認められた。
2	「と」を構成要素に持 つ感動詞	単独 発表	2005.10.08	シンポジウム「現代日本語 文法の現象と理論のインタ ラクション」(筑波大学)	「おっと」「えっと」は感動詞「おっ」「えっ」に助詞「と」 が付加した形式である。「と」が構成要素になる感動詞は唯 一これだけである。これらの意味的相違、「と」の有無によ る差異を観察し、感動詞の語構成における「と」の役割を 考察した。
3	形容詞語幹単独用法 について ーその制 約と心的手続きー	単独 発表	2006.05.14	日本語学会 2006 年度春季 大会 (東京学芸大学)	「からっ」「さむっ」といった、形容詞の語幹のみを発話す る用法を「形容詞語幹単独用法」と呼び、用法の考察を行っ た。形容詞語幹単独用法は、単純な事態認識でもなく事態 の内実の判断でもない、認識と判断の中間的な心的手続きに 対応していると考えた。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1995.05.00	～	現在	関東日本語談話会会員 (1996 年 4 月～2003 年 3 月関東日本語談話会 事務)	
2	1995.05.00	～	現在	日本語学会 (旧称: 国語学会) 会員	
3	2000.12.00	～	現在	日本語文法学会会員	

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	池田 知久	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価講演		2008.12.00	大東文化大学授業評価(2008.12 実施)において一定の評価を得た。平均値 4.6 (5段階評価)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『中国思想史』東大出版会		2007.07.00	大学の教養課程の中国思想史の教科書。B5版 総頁 244 ページ				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 『孔子思想中の「学び」と「教え」』		2005.11.00	足利学校平成 17 年 積尊記念講演				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 集中講義「中国哲学史研究的方法論——当代日本的探求」		2007.08.00	中国山東大学文史哲研究院 2007.08.00～09.00				
2) 山東大学(中国)文史哲研究(大学院)において博士論文審査会の主任を勤めた		2009.05.00	山東大学(中国)の文史哲研究院(二大学院)の博士論文 8 篇を審査、及び面接試験を行い、7 名の審査委員(山東大学 5 名、北京図書館長 1 名、それに池田)の中で主任(審査委員長)を勤めた。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『郭店楚簡の研究』(六)		2005.03.31	(池田知久監修)大東文化大学大学院事務室	223 頁			
2 『馬王堆漢墓帛書五行研究』(中国語)	単著	2005.04.00	中国社会科学出版社	池田知久著・王啓発訳			
3 『老子』	単著	2006.02.00	東方書店	馬王堆出土文献訳注叢書、466 頁			
4 『郭店楚簡の研究』(七)	共著	2006.03.00	大東文化大学大学院事務室	(池田知久監修) 268 頁			
5 『池田知久簡帛論文集』	単著	2006.08.00	中華書局	409 頁、中国語			
6 溝口雄三・丸山松幸・池田知久共編『中国思想文化事典』(韓国文)	共著	2006.09.00	民族文化文庫	金錫根・金容天・朴奎泰共訳、1～1040 頁			
7 『上海博楚簡の研究』(一)		2007.03.00	大東文化大学大学院事務室	(池田知久監修) 266 頁			
8 『中国思想史』	共著	2007.07.00	東京大学出版会	溝口雄三・小島毅と共著、244 頁			
9 『上海博楚簡の研究』(二)		2008.03.01	(池田知久監修)大東文化大学大学院事務室	(池田知久監修) 236 頁			
10 『道家思想の新研究——『莊子』を中心として』	単著	2009.02.00	汲古書院	943 頁			

11	『上海博楚簡の研究』 (三)		2009.03.00	大東文化大学大学院事務室	(池田知久監修) 264 頁
論文					
1	“The evolution of the concept of filial piety (xiao) in the Laozi, the Zhuangzi, and the Guodian bamboo text Yucong”	単著	2004.00.00	Filial Piety in Chinese Thought and History, Foutledge Curzon, London and New York	
2	『奏漢史論叢』第9輯 睡虎地秦簡《語書》与墨家思想	単著	2004.07.01	学会誌	
3	新出土資料研究の今後	単著	2004.12.00	『東方』286	
4	「“自然”的思想」(中国語)	単著	2005.01.00	王中江主編『中国觀念史』(中州古籍出版社)	池田知久著・黄華珍訳、38～78 頁
5	「蘭陵荀子墓探訪記」	単著	2005.03.00	大東文化大学『漢学会誌』第四十四号	291～312 頁
6	「中国哲学における『自然』」	単著	2005.09.00	日本学術会議第19期哲学研究連絡委員会、『人文知の可能性』	33～46 頁
7	Ikeda Tomohisa, “Confucianism and Political Power in the Former and Latter Han”	単著	2005.10.00	TRANSACTINS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES, No.L, 2005 (国際東方学会議紀要第五十冊、THE TOHO GAKKAI (THE INSTITUTE OF EASTERN CULTURE))	pp.190～194.
8	「郭店楚簡〈性自命出〉篇中の「道之四術」」(中国語)	単著	2005.12.00	長沙市文物考古研究所編『長沙三国吳簡・百年来簡帛發現与研究國際學術討論會論文集』(中華書局)	曹峰訳、233～261 頁
9	「孔子思想の中の『学び』と『教え』」	単著	2006.03.00	史跡足利学校研究紀要『学校』第6号(足利市教育委員会)	333～347 頁
10	池田知久・西山尚志「出土資料研究同様需要“古史辨”派的科学精神——池田知久教授訪談録」(中国語)	共著	2006.07.00	『文史哲』2006年第4期(総第295期、文史哲出版社)	曹峰訳、21～30 頁
11	「中国思想史中“自然”的誕生」(中国語)	単著	2006.08.00	鳳凰出版伝媒集団『中国的思維持世界』(江蘇人民出版社)	孫歌等訳、10～45 頁
12	「中国古代的天人相關論——董仲舒的情况」(中国語)	単著	2006.08.00	鳳凰出版伝媒集団『中国的思維持世界』(江蘇人民出版社)	孫歌等訳、46～97 頁
13	「性三品說的形成与發展」(中国語)	単著	2006.08.00	『新哲学』第6輯(大象出版社)	劉岳兵訳、113～124 頁
14	『周易』研究の課題と方法	単著	2006.09.00	渡邊義浩編『兩漢における易と三礼』(汲古書院)	329～366 頁
15	「睡虎地秦簡《語書》与墨家思想」(中国語)	単著	2007.08.00	李学勤・林慶彰等編『新出土文献与先秦思想重講』(出土思想文物与文献研究叢書(二十五)、台湾書店)	267～304 頁

16	「《周易》研究的課題 と方法」(中国語)	単著	2007.08.00	『儒教文化研究』第八輯(韓 国成均館大学校儒教文化研 究所)	35~68 頁
17	「グローバル化とア ジア人間科学」	単著	2007.09.00	『“面向世界的東方思想”中 日韓三国學術研討會論文集』(山東大学)	109~114 頁
18	Ikeda Tomohisa, “Rivalry Surrounding the Three Commentaries on the Chun-chiu during the Former and Latter Han”	単著	2007.10.00	TRANSACTINS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES, No.LII 2007 (国際東方学 者會議紀要第五十二冊、 THE TOHO GAKKAI (THE INSTITUTE OF EASTERN CULTURE))	pp.124~131.
その他					
1	“Introduction Aim of Symposium III”	単著		『国際東方学者會議紀要』 第 48 回	77~78 頁
2	東洋学・アジア研究の 新しい動き	単著	2004.11.00	『学術の動向』	
3	今世紀最初の最大規模 のアジア研究国際 会議	単著	2004.12.00	『学術の動向』	
4	第 3 回中国出土資料 国際會議参加報告	共著	2005.01.00	『東方学』109	
5	「睡虎地秦簡《語書》 和墨家思想」(中国 語)	単著	2005.03.00	『新出簡帛研究国際研討會 論文集』(台湾大学哲学系)	
6	「睡虎地秦簡《語書》 和墨家思想」(中国 語)	単著	2005.03.00	中国社会科学院歴史研究所	
7	「私の中国思想史研 究」	単著	2005.03.00	中国人民大学哲学系	
8	『『黄帝針灸甲乙經』 講義』	単著	2005.04.00	漢方鍼汪会	毎月 1 回、各 5 頁
9	「中国古代思想 老 子・莊子」(連続 8 回)	単著	2005.05.00	渋谷区上原社会教育館主催 講座(東京都渋谷区教育委 員会)	
10	「馬王堆帛書『陰陽十 一脈灸經』の人体観と 先秦諸子の氣論」(中 国語)	単著	2005.11.00	「新出土簡帛医薬文献研究 研討會論文集」(香港中文 大学)	1~5 頁
11	「孔子思想の中の「学 び」と「教え」	単著	2005.11.00	足利学校平成 17 年積奠記 念講演(足利市教育委員会)	
12	「性三品說的形成と 発展」(中国語)	単著	2006.04.00	中国山東大学儒学研究中 心・山東省鄒城市人民政府 主催「儒学全球論壇(2006) 孟子思想的当代價值国際学 術研討會論文集」	36~42 頁
13	「アジアの知恵で現 代グローバル化を越 える」	単著	2006.05.00	春季・沼津市民教養講座	
14	『『周易』研究的課題 と方法』(中国語)	単著	2006.07.00	『儒家經典和 17 世紀東亞 儒学思想国際學術會議論 文集』(韓国成均館大学校東 亞學術院儒教文化研究所)	17~26 頁
15	「出土資料と中国思 想史の研究」(日本語 と中国語)	単著	2006.08.00	台湾中央大学中文系	

16	『周易』研究的課題 与方法」(中国語)	单著	2006.08.00	台湾中央研究院中国文哲研 究所	
17	「上海楚簡『孔子詩 論』中出現的“豊(礼)” の問題—以闕雎篇 中所見節制人欲的“豊 (礼)”為中心—」 (中国語)	单著	2006.08.00	台湾台湾大学哲学系	
18	『周易』研究的課題 与方法」(中国語)	单著	2006.11.00	中国社会科学院國際學術論 壇「簡帛學論壇」(中国社会 科学院歷史研究所)	
19	「“中国式的”人類不 平等起源論—人性 “三品說”的形成和展 開」(中国語)	单著	2006.11.00	中国清華大学哲学系	
20	「人文学と東洋学・A S I A研究の再興の ために」	单著	2007.04.00	「The 1st Yonsei International Conference on Humanities— Humanities in East Asia: Present and Future」 (韩国延世大学校文科大 学)	1～5頁
21	「關於上海博楚簡『周 易』的訟卦」(中国語)	单著	2007.04.00	「第3屆國際易学与現代文 明學術研討會論文集 (2007)」(韩国高麗大学)	1～7頁
22	「老莊思想について 学ぶ」	单著	2008.01.00	朝日カルチャーセンター (横浜)	2008.01.00～03.00、5回
23	インタビュー「出土資 料研究の最前線へ発 信する—東方書店 刊『馬王堆出土文献訳 注叢書』をめぐる」	共著	2008.01.00	『東方』第323号(東方書 店)	12～17頁
24	「老子購読」	单著	2008.04.11	湯島聖堂斯文会文化講座	2008.04.11～現在、毎月1回
25	「莊子購読」	单著	2008.04.16	湯島聖堂斯文会文化講座	2008.04.16～現在、毎月1回

III 学会等および社会における主な活動

1	1981.06.00	～	現在	東大中哲文學會(東大中國學會)1981年6月～1985年5月 評議員、1985年6月～1992年12月 理事
2	1993.01.00	～	現在	中國社會文化學會 1993年1月～2001年9月 理事、1999年9月～2003年9月 理事長、2003年10月～現在 評議員
3	1993.09.00	～	現在	東方學會 1993年9月～1997年9月 評議員、1993年9月～1995年9月、1999年9月～2001年9月、2003年9月～2009年9月 査讀委員、1995年7月～2009年3月 關東地區委員、1997年9月～2003年9月、2005年9月～2009年9月 理事、1997年9月～2001年9月 東方學會賞選考委員、1999年9月～2009年9月 國際東方學者會議運營委員、1995年3月～1999年3月、2001年9月～2003年9月 『東方學』編集委員、2005年9月～2009年9月 常務理事・東京支部長
4	1994.04.00	～	現在	日本中國學會 1992年4月～1994年3月 日本中国学会報編集委員、1994年4月～2002年3月 學術専門委員、1996年4月～2011年3月 評議員、1997年4月～1999年3月 監事、2001年4月～2011年3月 理事、2001年4月～2007年3月 将来計画特別委員会委員長、2007年4月～2011年3月 理事長
5	1995.01.00	～	現在	『國際易学研究』(在中國北京市) 1995年1月～現在 朱伯崑主編『國際易學研究』日本文主編・編集委員
6	1995.01.00	～	現在	『道家文化研究』(在中國北京市) 陳鼓應主編『道家文化研究』編集委員
7	1995.04.00	～	現在	中國出土資料研究會(中國出土資料學會)1995年4月～1998年3月 會長・幹事、1998年4月～2008年3月 理事、2008年4月～現在 名譽會長
8	1995.04.01	～	現在	日本學術審議會 1995年4月～1996年3月、1998年4月～1999年3月、1999年1月～2000年1月 専門委員

9	1996.02.00	～	現在	東方國際易學研究院（於中国北京市）1996年2月～現在 顧問
10	1996.02.00	～	現在	日本道教學會 1996年2月～1998年2月 評議員、1997年10月～2009年12月 理事、2005年2月～2006年1月 日本道教学会賞選考委員
11	1996.05.00	～	現在	『馬王堆出土文獻註叢書』（東方書店）1996年5月～現在 『馬王堆出土文獻註叢書』（全10卷）編集委員代表
12	1998.08.00	～	現在	國際道聯會（在中國北京市）1998年8月～現在 學術委員
13	1999.10.00	～	現在	武漢大學中國文化研究院（在中國武漢市）1999年10月～現在 學術顧問、《人文論叢》顧問
14	1999.10.00	～	現在	國際儒學聯合會（在中國北京市）1999年10月～現在 理事、1999年11月～現在 國際簡帛研究中心副主任、2000年8月～現在 學術委員會通訊委員
15	2000.08.00	～	現在	國際簡帛研究聯絡處（在中國北京市）2000年8月～現在 委員
16	2000.11.00	～	現在	日本學術會議 2000年11月～2003年10月 東洋學研究聯絡委員會委員・幹事 2003年7月～2006年7月 第19期會員（第1部）、東洋學研究連絡委員會委員長、アジア學術會議委員會委員、2005年12月～2006年3月 第20期特任連携會員
17	2001.07.00	～	現在	日本周易學會 2001年7月～現在 會長
18	2002.11.00	～	現在	マレーシア孔学研究会（於マレーシア・クアラルンプール市）2002年11月～現在 顧問
19	2003.01.00	～	現在	郭店楚簡研究中心（於中国湖北省荆門市）2003年1月～現在 顧問
20	2003.06.01	～	2005.06.30	大学評価・学位授与機構 2003年6月～2005年6月 大学評価委員会評価委員
21	2004.04.00	～	現在	國際易學連合会 2004年4月～現在 副会長
22	2004.08.00	～	現在	國際アジア・北アフリカ研究会議（於ハンガリー・ブタペスト）2004年8月～2006年7月 國際諮問委員、2004年12月～2006年6月 ICANAS-39 準備委員会会長
23	2004.12.00	～	現在	東洋学・アジア研究連絡協議会 2004年12月～2011年3月 会長
24	2005.05.00	～	現在	韓国成均館大学（於韓国ソウル市）2005年5月～現在 『儒教文化研究』編集顧問、2006年6月～現在 儒教研究評価委員
25	2007.01.00	～	現在	華東師範大学（於中国上海市）2007年1月～現在 『諸子学刊』學術委員会委員
26	2007.02.00	～	現在	日本學術振興会 2000年8月～2002年7月 特別研究員等審査会専門委員、2001年1月～2002年12月 科研費委員会専門委員、2005年2月～9月 21世紀COE専門委員、2007年2月～9月、2009年2月～9月 グローバルCOEプログラム委員会専門委員

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	門脇 廣文	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 一年間の授業内容の提示と予習・復習の促進		2005.04.01		一年間の授業の内容を、一回ごとにその内容を提示し、欠席した場合でも自習・復習できるようにしている。(1993年04月01日～現在)			
2) 授業運営のHP上の公開と予習・復習の促進		2005.04.01		個人のHP上で授業の内容・日程・教科書・参考文献などを詳細に公開し、欠席した場合でも自習・復習できるようにしている。(1997年04月01日～現在)			
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価(2008年12月実施)において、高い評価を得た。平均値4.8(5段階評価)。大学の授業評価が始まって以来ずっと高い評価を得ている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『中国学研究入門Ⅱ』(共著)		2005.03.31		講義「中国学研究入門Ⅱ」の教科書として使用。筆者は「前期」の第8章(45頁～58頁)を担当。A4版、全162頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『中國人民大學出版社《中國美學範疇辭典》譯注・第三冊』(共訳)	共	2005.03.20	大東文化大学・人文科学研究所刊	全306頁			
2 『中國人民大學出版社《中國美學範疇辭典》譯注・第四冊』(共訳)	共	2007.10.31	大東文化大学・人文科学研究所刊	全410頁			
3 『中國人民大學出版社《中國美學範疇辭典》譯注・第五冊』(共訳)	共	2008.03.20	大東文化大学・人文科学研究所刊	全268頁			
論文							
1 中国古典詩学における二組の対立する考え方の成立について－「縁情説」から「言志説」へ－	単	2007.02.20	『清水凱夫教授退職記念論集』				

2	中国古典詩学における二組の対立する考え方の成立について－「縁情説」から「言志説」へ－	単	2007.02.28	『清水凱夫教授退職記念論集』	pp.00-00
3	中国詩学における対立する二組の主張	単	2007.03.28	『比較日本学研究センター研究年報』第3号	pp.00-00
4	「桃花源記」と「洞窟探訪説話」の登場人物の用きについて－二つの「桃花源記」から読み取れるものの検討の前提として－	単	2009.03.20	『大東文化大学 漢学会誌』第48号	
その他					
1	推薦書『白雲遙遙－回想の志村良治』さとう出版	単	2005.02.08		
2	編集『白雲遙遙－回想の志村良治』さとう出版	単	2005.02.08		
3	中國人民大學出版社『中國美學範疇辭典』譯注(4) (共訳)	共	2005.03.31	『大東文化大学 人文科学』第10号	pp.01-25
4	上海辭書出版社『唐詩鑑賞辭典』訳注稿－李商隱篇(12)－	共	2005.03.31	『大東文化大学紀要』第43号 人文科学	pp.69-87
5	大東文化大學圖書館所藏戸田浩曉博士舊藏書目録 序文	単	2005.03.31	『大東文化大學圖書館所藏戸田浩曉博士舊藏書目録』大東文化大學圖書館	
6	『中国学研究入門Ⅱ』(共著)	単	2005.03.31	大東文化大学文学部中国文学科刊	
7	中国美学の「術語」とその検討方法	単	2005.10.01	『創文』2005-10-480	
8	「型」の探求と確立『松浦友久著作選(4)』の書評	単	2005.10.01	『中唐文学』12 中唐文学会	pp.45-48
9	「日本中国学会2004年学界展望 文学の部」	単	2005.10.10	『日本中国学会報』日本中国学会	
10	三枝秀子著『たのしみを詠う陶淵明』序	単	2005.10.21	『たのしみを詠う陶淵明』汲古書院	
11	中国美学の「術語」とその検討方法	単	2005.11.15	大東文化大学人文科学研究所シンポジウム	
12	学科主任挨拶(はじめに)『三国志シンポジウム』	単	2006.02.10	大東文化大学文学部中国学科	
13	都市の中の桃源郷	単	2006.02.20	『電通報』電通	
14	中国美学とその「術語」の検討方法	単	2006.03.15	『大東文化大学人文科学研究所所報』N0.11 大東文化大学人文科学研究所	
15	上海辭書出版社『唐詩鑑賞辭典』訳注稿－李商隱篇(13)－	共	2006.03.31	『大東文化大学紀要』第44号 人文科学	pp.000-000

16	中国詩学における対立する二組の主張	単	2006.07.08	お茶の水大学国際日本学研究センター第8回 国際日本学シンポジウム「比較日本学研究所の対話と深化」	
17	「研究室便り 64 大東文化大学」	単	2006.08.04	『東方学会報』No90 東方学会	
18	「日本中国学会 2005 年学界展望 文学の部」	単	2006.10.10	『日本中国学会報』日本中国学会	
19	中國人民大學出版社『中國美學範疇辭典』譯注(5) (共訳)	共	2007.03.31	『大東文化大学 人文科学』第 11 号	pp.00-00
20	上海辞書出版社『唐詩鑑賞辞典』訳注稿 一 李商隱篇 (14) 一	共	2007.03.31	『大東文化大学紀要』第 45 号 人文科学	pp.000-000
21	中國人民大學出版社『中國美學範疇辭典』譯注(6) (共訳)	共	2008.03.31	『大東文化大学 人文科学』第 12 号	pp.00-00
22	上海辞書出版社『唐詩鑑賞辞典』訳注稿 一 李商隱篇 (15) 一	共	2008.03.31	『大東文化大学紀要』第 46 号 人文科学	pp.000-000
23	日本における中国の読解・研究方法としての「漢文訓読法」	単	2008.05.06	台湾輔仁大学翻訳研究所国際師生共教共学講座	
24	「中国の文学主張」の構造と日本文学の相違点	単	2008.05.08	台湾輔仁大学翻訳研究所国際師生共教共学講座	
25	「中国古典美学」の「術語」の翻訳の問題点	単	2008.05.09	台湾輔仁大学翻訳研究所国際師生共教共学講座	
26	中国の伝統美学における「術語」の翻訳・検討の方法とその問題点について	単	2008.11.01	大東文化大学・東北師範大学主催シンポジウム「日本と中国の明日への懸け橋—言語・文化・社会、日中比較を基軸として—」中華人民共和国東北師範大学	
27	中国传统美学“术语”的研究方法以及問題点	単	2008.12.26	中国社会科学院歴史研究所	
28	中国の伝統美学における「術語」の検討する前に	単	2009.03.15	『大東文化大学人文科学研究研究所報』NO.14 大東文化大学人文科学研究研究所	
29	李白の漢詩「静夜思」特別授業	単	2009.03.17	東京都江戸川区立葛西中学校	
30	上海辞書出版社『唐詩鑑賞辞典』訳注稿 一 李商隱篇(16) 一	共	2009.03.31	『大東文化大学紀要』第 47 号 人文科学	
31	中國人民大學出版社『中國美學範疇辭典』譯注(7) (共訳)	共	2009.03.31	『大東文化大学 人文科学』第 13 号	

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.04.00	～	現在	慶応義塾大学藝文学会会員
2	1976.04.00	～	現在	早慶中国学会会員
3	1976.04.00	～	現在	日本中国学会会員 (1983.04.00～1985.03.00 幹事、2005.04.00～2007.03.00 出版委員会委員、2007.04.00～2009.03.00 評議員)

4	1978.04.00	～	現在	中国文史哲研究会会員
5	1978.04.00	～	現在	東方学会会員（2006.04.00～9999.99.99 地区委員）
6	1978.04.00	～	現在	東北大学文学会会員
7	1978.04.00	～	現在	東北中国学会会員
8	1981.04.00	～	現在	日本中国語学会会員
9	1983.04.00	～	現在	全国漢文教育学会会員
10	1983.04.00	～	現在	大東文化大学漢学会会員
11	1984.04.00	～	現在	日本道教学会会員
12	1986.04.00	～	現在	中国社会文化学会会員
13	1997.04.00	～	現在	六朝學術学会会員（2001.04.00～2003.03.00 評議員、2003.04.00～2005.03.00 常任理事・評議員、2005.04.00～9999.99.99 理事・評議員）
14	2003.04.01	～	現在	中国文化学会会員

(表 24)

所属	文学部中国学科		職名	教授	氏名	中川 諭	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「中国学特殊講義 9」において、日本語を用いず中国語だけで中級会話の授業を行った。			2008.04.00		1年間の授業を通して、受講生の会話力に大きな進歩が見られた。		
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校国語科指導助言者			2000.04.01		(2000.04.01～2005.03.31) 附属長岡中学校の研究協議会 (中間報告会・事前協議会を含む) に参加し、附属長岡中学校及び中越地区の中学校国語科教員に対して、国語科教育に関する指導・助言を行った。		
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							
1 上海図書館蔵『三国英雄志伝』二種について	単著	2005.03.00	『新大國語』第 30 号 (新潟大学教育人間科学部国語国文学会)		77～92 頁 上海図書館に版式を等しくする二種類の二十巻本『三国英雄志伝』が蔵されている。この二種の版本の挿図・文章について、楊美生本などその他の『三国英雄志伝』と比較し、この両本の成立した過程、そしてこの両本が必ずしも覆刻の関係にあるのではないことを明らかにした。さらに清代康熙年間以降に『三国英雄志伝』が多数出版されていることから、清代中期に最も流行していたのは『三国英雄志伝』であることを述べた。		
2 六巻本『三国英雄志伝』について	単著	2005.03.00	『東アジア出版文化の研究—学問領域として書誌・出版の研究を確立するために—』(東北大学東北アジア研究センター)		293～309 頁 『新刻按鑑演義京本三国英雄志伝』と題する六巻本は、封面に「毛声山先生原本」とあり、毛宗崗本成立以降の刊行である。そして聚賢山房刊本以外にも、尚徳堂刊本・宝華楼刊本が存在する。これら三本を子細に比較検討し、聚賢山房本と尚徳堂本は宝華楼本よりも近い関係にあること、また二十四巻系の文章をしている冒頭五則は周日校本と李卓吾本の中に位置する文章であろうことを明らかにした。そして「偽毛宗崗本」たる六巻本の出版は毛宗崗本の出版と関わっており、道光年間頃に流行し、その後真毛宗崗本が広まるにつれ、六巻本は淘汰されていったであろうことを述べた。		

3	継志堂刊『三国英雄志伝』について	単著	2005.06.00	『中国—社会と文化—』第二十号(中国社会科学学会)	135～148頁 東京大学東洋文化研究所に蔵される『鼎鑄按鑑演義古本全像三国英雄志伝』(以下「継志堂本」と略称する)を取り上げ、この本が二十巻簡本系の英雄志伝グループに属することを示し、その他の英雄志伝グループ諸本と比較することによって、楊美生本・魏某本と比較的近い関係にあるが、いずれも底本としないことを明らかにした。さらに継志堂本が雍正年間の刊行であることから、毛宗崗本が成立しても『三国英雄志伝』は引き続き出版され、読者に受け入れられていたことを述べた。
4	《三国志演義》諸本三系統与黄正甫本の性質	単著	2005.06.00	『中国古代小説研究』第1輯(中国社会科学院文学研究所中国古代小説研究中心編、人民文学出版社)	183～195頁 四十種あまりにのぼる現存する『三国志演義』諸本について、文章の違いを具体的に用例を上げて示し、大きく三系統に分類できることを示した。さらに昨今『三国志演義』の最も古い版本ではないかと言われている黄正甫刊本は、文章が簡略になっていることから、版本の段階としては比較的遅い簡本系に属すること、さらに黄正甫という書肆が万暦の終わりから天啓・崇禎年間にかけて活躍していたことを論じ、黄正甫刊本はやはり刊行のかなり遅れる版本であり、決して『三国志演義』の最も古い版本ではないことを示した。
5	単元「項羽—『史記』から—」学習指導法の仮説検証的研究	共著	2005.06.00	『教育実践総合研究』第4号(新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター)	41～65頁 常木正則・小黒成寛・中川論 共著 平成16年度の新潟大学大学院教育学研究科の講義科目「国語科教育方法演習」において、修士1年の大学院生が附属新潟中学校で行った実践の記録と、それに基づく分析と考察である。その中で、クラス全体で一斉に行う後追い読み・詩の暗唱の有効性と必要性を述べ、『史記』「項羽本紀」の中学校の教材としての長所と短所を指摘した。そして中学校における漢文の授業のあり方として、ストーリー性のある短い文章を教材として選ぶこと、高等学校での漢文の授業への橋渡しの役割を担う必要があることを指摘した。
6	Microsoft Accessを用いた書目データベースの作成	単著	2006.02.00	科学研究費補助金基盤研究(C)報告書「中国古典通俗文芸研究のための書目データベースの構築と公開」	10～20頁 明代になって編纂された『宝文堂書目』・『古今書刻』・『百川書誌』は従来の目録にはない特徴として、通俗文芸作品を著録していることが挙げられる。しかしこれらの目録は必ずしも伝統的な四部分類で分類されているわけではなく、また通俗文芸作品だからこそその分類項目に著録されているのか容易に判断できない。これらの書目を横断的に検索できるデータベースを作成することは、研究を進めていく上できわめて有効である。本論文ではMicrosoft社のAccessを用いて、どのようにして書目のデータベースを作成したのかという具体的な手順、そしてこのデータベースを用いて明代の通俗文芸研究にどのように役立てることができるかについて論じた。
7	酒を煮て英雄を論ず	単著	2006.03.00	『新大國語』第31号(新潟大学教育人間科学部国語国文学会)	37～50頁 『三国志演義』の「酒を煮て英雄を論ず」の場面を取り上げて考察する。この場面において劉備が「天下の英雄」として挙げた数人は、この後の物語展開の中で劉備が頼っていく人物である。また曹操が「英雄ではない」と否定した人物は、曹操によって滅ぼされたり病に倒れたり、志半ばで散っていった人物である。この場面には「伏線」が数多く設けられていることを指摘する。またこの場面では、曹操の言葉に驚いた劉備が箸を落とし、ちょうど雷が鳴ったことにかこつけて、箸を落としたことをごまかすのであるが、『三国志演義』のある版本では、雷が鳴ってから箸を落とすという順序に書き換えられている。このことから、『三国志演義』版本の変遷を再度捉えなおすとともに、文章を自由に書き換えていた明末書肆の姿勢を指摘する。

8	Microsoft Access を用いた明代私家書目データベースの作成	単著	2006.10.00	『漢字文献情報処理研究』第7号(漢字文献情報処理研究会)	4～11頁 明代になって編纂されたいくつかの私家書目は、従来の目録にはない特徴として、通俗文芸作品を多数著録していることが挙げられる。しかしこれらの目録は必ずしも伝統的な四部分類で分類されているわけではなく、また通俗文芸作品だからこそその分類項目に著録されているのが容易に判断できない。これらの書目を横断的に検索できるデータベースを作成することは、研究を進めていく上できわめて有効である。本論文では『宝文堂書目』・『古今書刻』・『百川書誌』・『徐氏家蔵書目』を取り上げ、Microsoft社のAccessを用いて、どのようにして書目のデータベースを作成したのかという具体的な手順、そしてこのデータベースを用いて明代の通俗文芸研究にどのように役立てることができるかについて論じた。
9	關於上海圖書館藏《三國英雄志傳》兩種	単著	2006.10.00	『二〇〇五明代文学国際学術研討会論文集』(左東嶺主編、学苑出版社)	541～548頁 上海図書館に二種類の二十巻本『三国英雄志伝』が蔵されている。いずれも残本であり、一本は「美玉堂」と称する書肆の刊行した本で、巻一から巻十を存する。もう一本は巻五と巻十七から巻十九の一部を存するのみで、書肆名などは分からない。これら二本について、楊美生本の挿図や文章と比較し、その成立した過程・『三国志演義』版本の変遷しの中における位置を明らかにし、さらに清代において流通していた『三国志演義』の版本は、毛宗崗本ではなく、英雄志伝系であることを明らかにした。
10	島和宏教諭の授業(中3)を手がかりに	単著	2007.03.00	科学研究費補助金基盤研究(C)報告書「小・中学校九か年を見通した学び合いにおける話すこと・聞くこととの能力養成」	179～196頁 平成17年11月8日に新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校で行われた公開授業に基づく分析・考察である。この授業の分析を通して、話し合いを潤滑に行うためには、授業者は学習者へ明確な学習課題を与えておかなければならないことが分かった。そうすることで話し合いの前段階の事前学習で明確な解を得られ、充実した話し合いが行われるようになる。しかし一方で、話し合いとは別の学習としては、学習課題をあえて明確にしない学習活動も意味があることであることも間違いない。また話し合いにおいて、生徒はいわゆる若者言葉やくだけた表現を使いがちである。正しいコミュニケーション能力の養成という観点からすれば、教室内の話し合い活動であっても、正しい言葉遣いで話をするよう、指導者も学習者も留意しなければなるまい。
11	上海図書館蔵『三国志演義』残葉について	単著	2007.07.00	『三国志研究』第二号(三国志学会)	110～120頁 上海図書館所蔵の嘉靖刊『陶淵明集』の表紙・裏表紙は裏打ち補修がされており、その裏打ち用紙に『三国志演義』のあるテキストの一葉が用いられている。(以下「残葉」と称する。)この残葉は『三国志演義』の比較的古い版本の一葉である可能性は高い。そして残葉の文章を『三国志演義』諸版本と比較してみると、二十四巻系に属する文章であり、周日校本にきわめて近く、残葉の元の版本が嘉靖本よりも古いという確かな証拠は必ずしも存在しない。よって成化・弘治年間のものだと断定することもできない。嘉靖元年以降、嘉靖年間であるという可能性も十分考えるべきである。
12	《三国演義》“煮酒論英雄”的兩個問題	単著	2007.07.00	『2006 明代文学論集』(廖可斌主編、浙江大学出版社)	456～466頁 『三国志演義』の「酒を煮て英雄を論ず」の場面を取り上げて考察する。この場面において劉備が「天下の英雄」として挙げた数人は、この後の物語展開の中で劉備が頼っていく人物である。また曹操が「英雄ではない」と否定した人物は、曹操によって滅ぼされたり病に倒れたり、志半ばで散っていった人物である。これらは後の物語展開の「伏線」としてこの場面に設定されているのである。またこの場面では、曹操の言葉に驚いた劉備が箸を落とし、ちょうど雷が鳴ったことにかこつけて、箸を落としたことをごまかす。嘉靖本や周日校本など比較的刊行の古い二十四巻系諸本および二十巻繫本系・簡本系ともこの順序で描かれている。しかし李卓吾本においてこの順序が書き換えられ、毛宗崗が李卓吾本を修訂する際に再度元の順序に書き直しているのだから、このことから、『三国志演義』版本の変遷を再度捉えなおすとともに、文章を自由に書き換えていた明末書肆の姿勢を指摘する。

13	清代の三国通俗文芸と『三国志演義』	単著	2008.03.10	『大東文化大学漢学会誌』第四十七号	116～135 頁 清代には「三国志」を題材にした数多くの通俗文芸作品が作られる。その中で、清代中期に成立した『三国志玉璽伝』と清代末期に成立した『三国志鼓詞』を取り上げ、『三国志演義』諸本と比較した。すると、『三国志玉璽伝』は英雄志伝系本と、『三国志鼓詞』は毛宗崗本と影響関係にあることが分かる。このことから、清代中期には以前として英雄志伝系テキストが流通しており、清代末期になってやっと毛宗崗本が広く普及したということが考えられる。
14	清代的三国通俗文芸与《三国演義》	単著	2008.06.00	『中国文学研究』第十一輯（教育部人文社会科学重点研究基地復旦大学中国古代文学研究中心編、中国文联出版社）	36～49 頁 明末時期以降に出現した三国通俗文芸の作品は、いずれも『三国志演義』からの影響を受けている。清代の『三国志玉璽伝』は乾隆年間の初めに成立した作品である。この作品の成立は毛宗崗本『三国志演義』成立後ではあるが、毛宗崗本からの影響は見られず、毛宗崗本以前の版本に基づいたと考えられる。また『三国志鼓詞』も三国志物語を題材にした通俗文芸であるが、その成立は清代後期であり、毛宗崗本からの影響が色濃く見える。このようなことから、『三国志演義』版本の出版状況と三国通俗文芸作品とは大きく関わりがあり、毛宗崗本は清代中期に成立したとはいえ、その流行は清代末期になってからなのである。
15	關於六卷本《三国英雄志伝》	単著	2008.12.00	『中国古代小説研究』第3輯（中国社会科学院文学研究所中国古代小説研究中心編、人民文学出版社）	262～276 頁 上海図書館などに蔵される『新刻按鑑演義京本三国英雄志伝』は六卷本の体裁を取りながら、「英雄志伝」と題するとおり、福建刊行の簡本系テキストである。しかしその刊行は清代になって、それも毛宗崗本が刊行された後である。この本は同版式のテキストが数種類存在し、その流行ぶりがうかがえる。しかしそれは毛宗崗本であることを装った結果であり、真の毛宗崗本が流通するに従って、六卷本は次第に淘汰されていった。
その他					
1	上海図書館蔵『三国英雄志伝』二種について	単著	2005.01.29	中国古典小説研究会例会 早稲田大学	
2	關於上海図書館蔵《三国英雄志伝》兩種	単著	2005.08.21	明代文学与文化国際學術研討会暨中国明代文学学会第三届年会 首都師範大学	(中国語で発表)
3	上海図書館蔵『三国志演義』嘉靖殘葉について	単著	2005.10.21	大東文化大学文学部中国学科漢学会秋季大会	
4	『三国志演義』「酒を煮て英雄を論ず」の場面について	単著	2006.02.04	新潟大学教育人間科学部国語国文学会 新潟大学教育人間科学部	
5	使用微軟 Access 数据库的明代書目研究	単著	2006.07.31	第5届中国古代小説文献与数字化研討会	(中国語で発表)
6	《三国演義》"煮酒論英雄"的兩個問題	単著	2006.08.21	中国明代文学学会（籌）第四届年会暨 2006 年明代文学与文化国際學術研討会	(中国語で発表)
7	明末刊湯賓尹本『三国志伝』の2種類のテキストについて	単著	2006.08.30	中国古典小説研究会 2006 年度大会	
8	清代的三国通俗文芸与《三国演義》	単著	2007.08.17	現代視野下的中国古代文学与文論国際學術研討会	(中国語で発表)
9	關於上海図書館蔵《三国演義》殘葉	単著	2007.08.21	中国明代文学学会（籌）第五届年会暨 2007 年明代文学与文化国際學術研討会	(中国語で発表)
10	楊美生本『三国志伝』のデジタル化にあたって	単著	2007.08.29	中国古典小説研究会 2007 年度大会	
11	『三国志演義』の版本	単著	2007.10.01	『創文』2007 年 10 月 No.502	

12	パネルディスカッション「中国四大奇書の成立と出版—嘉靖・万暦の出版活動」	単著	2008.07.28	第4回東アジア出版文化に関する国際学術会議	パネリスト
13	劉龍田本《三国志伝》和繁本系統繁本	単著	2008.08.27	中国古代小説文献暨デジタル国際学術研討会	(中国語で発表)
14	シリーズ中国の電子出版(3) 中国古代小説デジタルプログラム	単著	2009.03.00	『東方』337号	

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.01	～	現在	中国文史哲研究会会員
2	1987.04.01	～	現在	東北大学文学会会員
3	1987.04.01	～	現在	東北中国学会会員
4	1987.04.01	～	現在	日本中国学会会員(平成十九・二十年度幹事)
5	1988.04.01	～	現在	中国旧小説研究会会員(昭和六十三年度～平成十三年度幹事)
6	1988.04.01	～	現在	中国古典小説研究会会員(平成八年度～現在幹事、平成十八年度～現在事務局長)
7	1989.04.01	～	現在	東方学会会員
8	1990.04.01	～	現在	書学書道史学会会員
9	1995.04.01	～	現在	新潟大学教育学部国語国文学会会員
10	1995.04.01	～	現在	新潟大学東アジア学会会員(平成九年度～十七年度幹事)
11	1996.04.01	～	2005.03.31	新潟大学環日本海研究会幹事

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	中林 史朗	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2007.03.00	担当授業 (中国文化史や日本漢文学史等) の中で登場する文物の实物を学生に見せて触わせ、よりビジュアル的に理解を深めるため、中国古陶器(1370点強)・青銅器(200点強)・玉石村(140点強)・版本(220点弱)・工芸品(20点強)・書画(1820点強)等々3790点強の文物を収集し、授業中に活用。尚、全ての文物及び授業内容の具体的話である『漢文訓読の色葉』『管説日本漢文学史略』等は大学のホームページ上に公開中。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 中国学研究入門Ⅱ		2005.03.00	日本漢文を知ろう(16頁)・類書を知ろう(8頁)の部分を担当				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『藝文類聚卷十五訓注附索引』	共著	2005.02.25	大東文化大学東洋研究所	『藝文類聚』卷第十五に関する訓読、典拠、校異、及び附索引。(訓読及び典拠校異を担当、共同執筆者：芦川敏彦・藏中しのぶ・成田守・福田俊昭・日吉盛幸・浜口俊裕・中村史朗) 93頁			
2 『藝分類聚卷十六訓注附索引』	共著	2006.02.25	大東文化大学東洋研究所	『藝分類聚』卷十六に関する訓読、典拠、校異、及び附索引。(訓読及び典拠校異を担当、共同執筆者：芦川敏彦・藏中しのぶ・成田守・福田俊昭・日吉盛幸・浜口俊裕・中村史朗) 118頁			
3 『近出殷周秦漢金文収録(第一録『大物』1999.6~2004.12)』(共同編著者：萩庭勇・中林史朗・進藤英幸・小林茂・桑瀬明子)	共編著	2006.04.25	大東文化大学人文科学研究所	該当時期の全文資料を整理して、釈文や訓読文を付した 238頁			
4 『藝分類聚卷八十訓注附索引』	共著	2007.03.25	大東文化大学東洋研究所	『藝分類聚』卷第八十に関する訓読、典拠、校異、及び附索引。(訓読及び典拠校異を担当、共同執筆者：芦川敏彦・藏中しのぶ・成田守・福田俊昭・日吉盛幸・浜口俊裕・中村史朗) 108頁			
5 『中国博物館~100館の収蔵物に見る文化とその歴史~(DVD 26枚)』	共監修	2008.02.05	ポニーキャニオン	中国百ヶ所の博物館の文物や歴史に関する説明の中国語・日本語の字幕スーパー及び日本語ナレーションの総監修 DVD26枚、解説書1冊 56頁			

6	『藝分類聚卷八十一 訓注附索引』	共著	2008.03.25	大東文化大学東洋研究所	『藝分類聚』巻八十一に関する訓読、典拠、校異、及び附索引。(訓読及び典拠校異を担当、共同執筆者：芦川敏彦・蔵中しのぶ・成田守・福田俊昭・日吉盛幸・浜口俊裕・中村史朗) 157 頁
7	『藝分類聚巻八十二 訓注附索引』	共著	2009.03.25	大東文化大学東洋研究所	『藝分類聚』巻八十二に関する訓読、典拠、校異、及び附索引。(訓読及び典拠校異を担当、共同執筆者：芦川敏彦・蔵中しのぶ・成田守・福田俊昭・日吉盛幸・浜口俊裕・中村史朗) 143 頁
論文					
1	日本人に於ける三国志とは～見るのか読むのか、江戸から現代まで～	単著	2009.03.00	大東文化大学「漢学会誌」第 48 号	日本人に於ける『三国志』の受け入れ態度や理解のし方を、江戸から現代までの変遷を論ず。
その他					
1	『該餘叢考』訓譯巻六	共著	2005.03.25	大東文化大学『漢学会誌』第 44 号	『該餘叢考』の訓読・語注・現代語訳を行ったもの
2	江戸人の書	単著	2005.06.00	「大東書道」2005 年 7 月号	江戸人の書に関するエッセイ
3	『該餘叢考』訓譯巻七之上	共著	2006.03.25	大東文化大学『漢学会誌』第 45 号	『該餘叢考』の訓読・語注・現代語訳を行ったもの
4	『該餘叢考』訓譯巻七之下	共著	2007.03.25	大東文化大学『漢学会誌』第 46 号	『該餘叢考』の訓読・語注・現代語訳を行ったもの
5	日本人にとって三国志とは何じやいな	単著	2007.07.00	大東文化大学第三回三国志シンポジウム	
6	『該餘叢考』訓譯巻八之上	共著	2008.03.25	大東文化大学『漢学会誌』第 47 号	『該餘叢考』の訓読・語注・現代語訳を行ったもの
7	名と号	単著	2008.10.00	「大東文化大学歴史資料館だより」第 5 号	号の性格と使用方法を論ず。
8	『該餘叢考』訓譯巻八之下	共著	2009.03.25	大東文化大学『漢学会誌』第 48 号	『該餘叢考』の訓読・語注・現代語訳を行ったもの
III 学会等および社会における主な活動					
1	1969.04.00	～	現在	漢学会 2001.04 より評議員担当	
2	1970.04.00	～	現在	無窮会 1992.04 より評議員担当	
3	1972.04.00	～	現在	日本中国学会	
4	1978.04.00	～	現在	東洋史研究会	
5	1981.04.00	～	現在	東方学会	
6	1982.04.00	～	現在	斯文会	
7	1983.04.00	～	現在	道教文化研究会	
8	1983.04.00	～	現在	日本道教学会 2004.04 より評議員担当	
9	1983.04.00	～	現在	和漢比較文学会	
10	1984.04.00	～	現在	全国漢文教育学会 1988.04 より幹事担当。1999.04 より評議員担当。2003.04 より理事担当	
11	1984.06.00	～	現在	江戸後期の漢学者狩谷掖斎著『古京遺文』の訳注及び校定本製作に関する共同研究(昭和学院短大教授鈴木晴彦氏と)を主催(月1回)	
12	1985.04.00	～	現在	中国社会文化学会	

13	1987.04.00	～	現在	大東文化大学東洋研究所「日中比較文学研究『芸文類聚』班」に研究員として参加（月1回）
14	1989.04.00	～	現在	中国文史哲研究会
15	1989.04.00	～	現在	魏晋南北朝史学会
16	1991.04.00	～	現在	国立北海道教育大学専任講師渡辺義浩氏を共同研究者とする大東文化大学人文科学研究共同研究『後漢書』国訳の作業を主催
17	1996.04.00	～	現在	中国出土資料研究会 2003.04 より監事担当。2008.04 より理事担当
18	1996.04.01	～	2008.03.31	日華文化協会会員（理事就任 1996.05 1999.05）
19	1998.04.00	～	現在	板橋区より依頼を受け、「中国中世文学読書会」を毎月一回開催中
20	2002.04.00	～	現在	東洋陶磁学会会員
21	2005.04.01	～	現在	東京安来会理事就任
22	2006.04.01	～	2007.03.31	中華民国台湾の現代社会風俗文化の調査、及び玉文化研究の為に、一年間台北市を中心に調査
23	2007.08.05	～	2007.08.26	中華民国台湾の文物調査（21日間）
24	2008.06.02	～	2008.07.15	大学に於ける地域連体・中高大連体の一環として、板橋区立志村第四中学校に於て一年生の国語授業「故事成語」の単元を、全5クラス共に6回に渉り（50分）担当
25	2008.07.31	～	2008.08.21	台湾に於ける政治変化・社会文化及び文物調査のため、主に台北地区を調査（21日間）
26	2008.10.15	～	2008.10.15	東京新聞主催東京自遊大学中国歴史講座「愛と勇気の伝説『三国志』がもたらしたもの（映画「レッドクリフ」特別試写会）」の出張講演（40分）を、Togen 虎ノ門試写室に於て担当
27	2009.03.28	～	2009.03.28	廣告社主催「進学EXPO2009in 有楽町」の出張講演「『三国志』と『三国志演義』と映画」（45分）を、東京国際フォーラムに於て担当

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	林 克	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 中国学研究入門Ⅱ		2005.03.31		教科書 PP.5～26		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 『脈法』文字攷	単著	2005.03.10	『大東文化大学漢学会誌』第 44 号	pp.81～112		
2 「中国の伝統医学と古典学」	単著	2006.03.31	『斯文』114 号	PP.110～131		
3 『陰陽十一脈灸経』文字攷補	単著	2007.03.10	『大東文化大学漢学会誌』46 号	pp.63～77		
その他						
1 『呂氏春秋』に見える気について	単著	2004.10.10	鍼汪会	10,000 字		
2 「中国の伝統医学と古典学」	単著	2005.05.00	斯文会	11,000 字		
3 『『呂氏春秋』の気について』	単著	2005.05.00	『鍼汪』第 28 号	PP.15～29		
4 易に太極あり	単著	2007.06.00	足利学校アカデミー	18,000 字		
5 明堂新攷——方技的視点から	単著	2007.09.25	中国社会科学院歴史研究所	15,000 字		
6 『中国思想における身体・自然・信仰——坂出祥伸先生退休記念論集』	単著	2007.11.00	『東方宗教』110 号	pp.82～91		

7	「方技思想の特色」	単著	2008.08.00	内経思想研究会	9,000 字
8	「明堂新攷」	単著	2008.10.00	大東文化大学漢学会	10,000 字
9	「易について」	単著	2009.02.00	日本東洋医学会関西支部専門医制度委員会	12,000 字
III 学会等および社会における主な活動					
1	1981.04.00	～	現在	京都大学中国哲学史研究会会員	
2	1981.06.00	～	現在	日本道教学会会員（平成 8 年～11 年度評議員、平成 12～21 年度理事、平成 14～17 年度『東方宗教』編集委員）	
3	1981.10.00	～	現在	日本中国学会会員（平成 19 年～20 年度評議員）	
4	1982.04.00	～	現在	東方学会会員	
5	1992.04.00	～	現在	日本医史学会会員	
6	1993.04.00	～	現在	生存科学研究所東西の健康観研究会会員	
7	1993.04.00	～	現在	大阪中国学会会員	
8	1997.05.00	～	現在	東北中国学会会員	
9	1998.04.00	～	現在	中国出土資料学会会員（平成 10 年～11 年度理事、平成 12～13 年度監事、平成 14～21 年度理事）	
10	1999.04.00	～	現在	中国社会文化学会会員	
11	2002.01.00	～	2004.12.00	日本学術振興会科学研究費委員会専門委員	
12	2008.04.00	～	現在	日本印度学仏教学会会員（平成 20 年～21 年度理事）	

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	三浦 國雄	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)			2003.04.00	(2003年4月～現在) <中国哲学概説>の授業において、毎回最後の20分間にレポート (講義内容感想) を書かせ、次の時間に添削して学生に返している。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 風水・暦・陰陽師――中国文化的の縁としての沖縄――	単著	2005.03.10	榕樹書林	全 250 頁			
2 風水講義	単著	2006.01.20	文藝春秋社	全 253 頁			
3 術数書の基礎的文獻学的研究――主要術数文献解題――	共著	2007.03.31	科研研究成果報告書	研究代表者 分担執筆 pp.1-5, pp.27-42, pp.123-158			
4 増訂 易経	単著	2008.06.29	東洋書院	全 445 頁			
5 「朱子語類」抄	単著	2008.10.10	講談社学術文庫	全 580 頁			
論文							
1 アジアの自然観と風水地理説 pp.12-26	単著	2005.03.23	『アジア地域文化エンハンシング研究センター報告集 III』	早稲田大学 21 世紀 COE プログラム、アジア地域文化エンハンシング研究センター			
2 祀られる族譜 pp.95-99	単著	2007.03.00	『文化資源としての宗族』	大阪市立大学院文学研究科 COE / 重点研究 / 科研費共催シンポジウム報告書			
3 朝鮮・李徳懋『蜻蛉国志』の日本観 pp.85-122	単著	2007.11.15	『泊園』第 46 号	泊園記念会			
4 安堅「夢遊桃源図」と「桃花源記」 pp.17-34	単著	2007.12.25	『国学院中国学会報』第 53 輯	国学院大学中国学会			

5	「自然葬」の源流－中国の場合－	単著	2008.04.15	凱風社『自然葬と世界の宗教』	pp.78～111
6	『酬世錦囊』の中の『朱子家礼』	単著	2008.08.20	雄松堂出版『東アジアの儀礼と宗教』	pp.205～230
7	道教の天－「初期天師道」における「天帝」を中心に－	単著	2008.12.25	汲古書院『両漢儒教の新研究』	pp.167～196
その他					
1	アジアの自然観と風水地理説		2004.10.30	国際シンポジウム「アジア地域文化の構築Ⅱ」、早稲田大学 21 世紀 COE、アジア地域文化エンハンシング研究センター	
2	隠・詩・楽－邵康節という「生」－		2005.10.22	韓国の隠士文化第二回国際学術大会、於韓国江原道華川	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1966.04.00	～	現在	阪神中国哲学談話会会員	
2	1972.04.00	～	現在	朝鮮学会会員	
3	1972.04.00	～	現在	東方学会会員	
4	1977.04.00	～	現在	東北中国学会会員	
5	1992.04.00	～	現在	日本中国学会専門委員（2006年3月31日まで）	
6	1993.04.00	～	現在	日本道教学会理事（2000年1月～2001年12月 会長）	
7	1995.04.00	～	現在	日本中国学会評議員	
8	1997.10.00			第 49 回日本中国学会準備委員長	
9	1999.09.00	～	現在	東方学会評議員	
10	2007.03.28	～	現在	東洋大学共生思想研究センター評価委員会委員	

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	教授	氏名	渡邊 義浩	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・(無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 漢文講読テキスト 三国志		2008.03.03		白帝社 講義の教材として使用。石井仁・津田資久・伊藤晋太郎・田中靖彦との共著で、全体を全員で担当。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 1) 茨城県弘道館アカデミー県民大学講座		2006.10.00		茨城県 (2006年10月～2008年6月) 茨城県の県民大学のための講座講師。茨城県県西生涯学習センター。年十回。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『エピソードで楽しくわかる故事成語』	単著 (監修)	2004.05.00	PHP研究所 (316頁)	故事成語の成立過程をおいながら、中国の歴史を宋まで概観した。		
2 『世界歴史の旅 三国志の舞台』	共著	2004.08.00	山川出版社 (130頁)	三国志の舞台となった地域の現在をたどりながら、中国の人々への三国志への思いを探る。田中靖彦との共著。		
3 『全譯後漢書 列傳 (一)』	共著 (主編)	2004.11.00	汲古書院 (657頁)	范曄の『後漢書』のうち列傳一から列傳十にまとめられる光武帝劉秀の功臣の伝記を訳出した。堀内淳一との共著。		
4 『図解中国史がすぐわかる! 故事成語 春秋戦国編』	単著 (監修)	2004.11.00	学習研究社 (95頁)	春秋戦国時代の故事成語を中心に、当該時代の歴史を概観した。		
5 『図解雑学 中国』	共著	2004.11.00	ナツメ社 (330頁)	中国の小百科事典。歴史・文化・政治・経済・外交など中国に関わるさまざまな分野を分かりやすく解説した。松金公正との共著。		
6 『両漢の儒教と政治権力』	共著	2005.09.00	汲古書院 (320頁)	第五十回国際東方学会議でのシンポジウム「両漢の儒教と政治権力」を中心に、漢代における国家権力と儒教との関係を儒教の国教化の問題に焦点をあてて論ずる論考を編集した。		
7 『全譯後漢書 列傳 (四)』	共著	2005.11.00	汲古書院 (691頁)	范曄の『後漢書』のうち列傳三十一から列傳四十にまとめられる後漢中期を中心とする臣下の伝記を訳出した。高山大毅との共著。		
8 『全譯後漢書 志 (六) 郡國』	共著	2006.02.00	汲古書院 (388頁)	范曄の『後漢書』と合刻される司馬彪の「八志」のうち、郡國志を現代日本語に翻訳した。水野厚志との共著。		
9 『全譯後漢書 列傳 (六)』	共著	2006.03.00	汲古書院 (738頁)	范曄の『後漢書』のうち列傳五十一から列傳六十にまとめられる後漢末期を中心とする臣下の伝記を訳出した。田中靖彦との共著。		

10	『両漢における易と三礼』	編	2006.09.00	(汲古書院 487 頁)	東京大学で行った国際シンポジウム「易と術数研究の現段階」および第五十一回国際東方学者会議でのシンポジウム「両漢における三礼の展開」を中心に、漢代における易と三礼の諸論考を編集した。
11	『三国志演義』	単著	2007.01.00	(ナツメ社 247 頁)	元末明初の羅貫中により編集された歴史小説『三国志演義』の内容・戦いなどをまとめ、『三国志演義』の文学としての特徴を論ずる。
12	『「三国志」名将完璧ファイル』	監修	2007.05.00	広済堂出版 (254 頁)	「三国志」の武将の列伝。
13	『三国志研究入門』	単著	2007.07.00	日外アソシエーツ (263 頁)	三国志に関する研究動向を整理すると共に、論文の書き方を指し示し、三国志に止まらず、中国学研究の方法を明らかにした。
14	『全譯後漢書 列傳(二)』	共著	2007.10.00	汲古書院 (795 頁)	范曄の『後漢書』のうち列傳十一から列傳二十にまとめられた後漢初期の臣下の伝記を訳出した。堀内淳一・島田悠との共著。
15	『宗教より見た中国 古代史』	単著	2007.11.00	ナツメ社 (239 頁)	宗教を視座に、中国 古代史を概観。
16	『両漢における詩と三伝』	編	2007.12.00	汲古書院 (463 頁)	第五十二回国際東方学者会議でのシンポジウム「両漢における『春秋』三伝の相剋」、および東京大学で開催した国際シンポジウム「詩経研究の現段階」を中心に、漢代における『春秋』三伝と詩経の研究をまとめあげた。
17	『三国志武将大百科』一～三	監修	2008.03.00	ポプラ社 (175・175・175 頁)	「三国志」の武将の列伝。中学校の図書館用図書。
18	『「三国志」軍師 34 選』	単著	2008.04.00	P H P 研究所 (338 頁)	「三国志」の軍師の列伝。
論文					
1	「杜預の春秋長暦について」	単著	2005.01.00	東洋研究 第 155 号 (99～121 頁) 大東文化大学東洋研究所	杜預は『春秋長暦』において、暦法を無視した置閏や連大をあえて拙傳解経法に基づいて行い、公羊傳よりも左氏傳こそが春秋の正しい傳であることを証明しようとした。また、春秋時代の日食を正しく配置する長暦を作り上げることにより、劉歆・賈逵を超える左傳の暦学の頂点を目指したのである。
2	「「封建」の復権－西晋における 諸王の封建に向けて」	単著	2005.02.00	早稲田大学大学院文学研究科紀要 第 50 輯 第 4 分冊 (51～65 頁) 早稲田大学大学院 文学研究科	後漢「儒教国家」の崩壊、それに伴う社会の分権化傾向の中で、儒教は「封建」の解釈を展開した。同姓諸侯に軍事力と地方行政の裁量権を大幅に認め、皇帝権力を分権化することにより、国家権力の集権化に努めようとしたのである。それは、異姓の州牧が国家権力を分権化していくことへの対抗策であった。
3	「杜預の左傳癖と西晋の正統性」	単著	2005.03.00	六朝学会報 第 6 集 (1～13 頁) 六朝学会	杜預の『春秋左氏經傳集解』は、杜預の生きた西晋の正統化を強く意識して書かれた注釈書であった。周公が残したとする左傳の義例をつくりあげ、無道な君主は弑殺してもよいとして西晋の正統性を明らかにしたのである。
4	「杜預の諒闇制と皇位継承問題」	単著	2005.03.00	大東文化大学漢学会誌 第 44 号 (63～80 頁) 大東文化大学漢学会	杜預の諒闇心喪説は、西晋武帝の実質的な心喪三年を経學により正統化したものである。また杜預は、諒闇心喪の適用により司馬攸の政治的発言力を守りその討呉の機会を失わせないように尽力した。
5	「井田の系譜－占田・課田制の思想的背景について」	単著	2005.06.00	中国研究集刊 第 37 号 (1～19 頁) 大阪大学中国学会	西晋の占田・課田制は、周の井田を伝える文献の中で『禮記』の影響を強く受け成立した制度であった。それは、『禮記』にのみ井田と五等爵との一体性が表現されており、貴族制の進展に合わせ身分による土地所有の階層化を国家主導で行わんとした西晋の政策に最も適した解釈が可能な經典であったためである。
6	「後漢儒教の固有性」	単著	2005.09.00	渡邊義浩(編)『両漢の儒教と政治権力』(汲古書院) (125～147 頁)	『白虎通』に描かれた祭祀体制を根幹とする宗教国家の理念型は、「元始の故事」から始まった「中国における古典的国制」を儒教の經義により正統化する必要から形成されたものである。したがって、章帝期の白虎觀會議に儒教の国教化の完成を措定し得る。

7	「ヨーロッパの哲学者から見た儒教－ヘーゲル・ウェーバーを中心に」	単著	2005.09.00	渡邊義浩（編）『兩漢の儒教と政治権力』（汲古書院）（303～321頁）	ヨーロッパの儒教認識の特徴は、自己の尺度に中国を一方向的に当てはめる方法論にある。日本や韓国のような儒教を身体化している民族ではないためである。有神論・合理性・近代といった明確な基準を設けて分析するヨーロッパの儒教認識に、儒教の多様性を照射し得る。
8	「西晋における國子學の設立」	単著	2006.01.00	東洋研究 第159号（1～24頁）大東文化大学東洋研究所	西晋で設立された國子學は、貴族の子弟のみを教育対象とし、祭酒・博士に代表的な学者を揃え、貴族の基盤である文化を習得させることにより、貴族の再生産を守る教育機関であった。西晋における國子學の制度は、貴族制が続く唐の六學に継承されていく。
9	「西晋墓誌二題」	共著	2006.03.00	駒沢史学 第66号（80～100頁）駒沢史学会	洛陽の近郊から出土した「楊駿殘誌」は、編纂史料には記載されない系図を復元し得る。西晋の外戚である楊駿は、後漢の「四世三公」の名門「弘農の楊氏」の嫡流であり、楊震の五世孫なのである。石井仁との共著。
10	「司馬彪の修史」	単著	2006.03.00	大東文化大学漢学会誌 第45号（23～41頁）大東文化大学漢学会	司馬彪の『統漢書』就中その八志は、西晋「儒教国家」再編の鑑とすべき後漢「儒教国家」の諸制度をまとめあげたものであった。中国の史書の編纂目的が、勸善懲惡という孟子の『春秋』解釈から『資治通鑑』にも繋がる鑑としての杜預の『春秋』解釈へと展開するものであれば、漢を鑑とする司馬彪の『統漢書』は後者の嚆矢に位置づけられるのである。
11	「海外ドキュメンタリー番組制作における産学連携の研究－「三国志」の子孫をさがせ」の制作を中心に」	共著	2006.03.00	人文科学 第11号（37～49頁）大東文化大学人文科学研究所	NHKの番組の制作協力を通じた産学連携の方法について論じた。蔣楽群との共著。
12	「“所有”与“文化”－对于中国貴族制度研究的一个观点」	単著	2006.08.00	『新哲学』6（北京）125-139頁	中国社会科学院での講演をまとめたもの。日本における中国の貴族制研究の回顧と展望を行ったのちに、貴族の存立基盤を文化に求めることを提唱している。
13	「後漢における礼と故事」	単著	2006.09.00	『兩漢における易と三礼』（汲古書院、175－193頁）	後漢「儒教国家」の国政の運用が、礼に代表される儒教經典だけではなく、漢家の先例である故事に基づいていたこと、故事を利用することにより、儒教教義と現実社会との狭間を埋めていたことを論じた。
14	「西晋司馬氏婚姻考」	単著	2006.11.00	『東洋研究』161、1－26頁	西晋の建国者である司馬炎は、婚姻政策を通じて、貴族の家にヒエラルキーを形成し、それを実際の官職にも反映させて、士庶区別へと連なるような国家的身分制としての貴族制の構築を試みていたことを論じている。
15	「九品中正制度と性三品説」	単著	2006.12.00	『三国志研究』1、61－74頁	中国の貴族制を保証する制度である九品中正制度は、性三品説を思想的な背景としており、それは生まれながらにして人間の資質が異なるとする貴族制の特質を思想面から支えていたことを論じている。
16	「西晋における五等爵制と貴族制の成立」	単著	2007.03.00	『史学雑誌』106－3、1～31頁	中国の貴族制は従来の定説のように、九品中正制度が社会の貴族的風潮に流されて成立したものではなく、西晋で施行された五等爵制とあいまつことにより成立した。文化を基盤とする社会的存在としての貴族と、国家的身分制としての貴族制とを区別して論じなければならないことを提唱している。
17	「司馬氏の台頭と西晋の建国」	単著	2007.03.00	『漢学会誌』46、79－108頁	司馬氏が曹魏の「名士」から抜きこんで皇帝となっていく過程で行った州大中正・五等爵の設置という二政策の中で、司馬氏の地位を唯一無二の皇帝権力に引き上げるものは、後者の五等爵であったことを論じた。
18	「中国における儒教の復権」	共著	2007.03.00	人文科学第12号（213～227頁）大東文化大学人文科学研究所	2000年に作成に協力したNHKのTV番組「よみがえる孔子」を現時点でふりかえり、そこで扱った中国における儒教の復権の重要性を論じた。蔣楽群との共著。
19	「孫呉の正統性と國山碑」	単著	2007.07.00	三国志研究第2号（40～55頁）三国志学会	孫呉政権は、当初「漢室匡輔」にその存立理念を置き、政権を樹立する際には、後漢の赤徳を継承する黄徳を唱えた。しかし、それは曹魏と重複するため、曹魏の滅亡後は、曹魏の黄徳を継承する白徳を主張したことを國山碑という石刻史料より明らかにした。
20	「曹魏政権対“文学”的宣揚」	単著	2007.09.00	原野 2007-2・3（17～24頁）中国許昌三国文化學術研討会	第二回中国許昌三国文化學術研究討論会での学会報告。曹魏における文学の宣揚の政治的背景について論じた。

21	「漢魏における皇帝即位と天子即位」	単著	2007.11.00	東洋研究第 165 号（1～27 頁）大東文化大学東洋研究所	漢魏における君主は、皇帝即位から天子即位という二段階の即位を行っており、それは伝位の場合でも、禪譲の場合でも同様であることを論証した。
22	「両漢における春秋三伝の相剋と国政」	単著	2007.12.00	渡邊義浩（編）『両漢における詩と三伝』（汲古書院）（127～168 頁）	春秋三伝のうち、公羊伝は武帝期までの国政を正当化し、後漢においてもその学説を展開して、両漢を通じて中心的な経典となった。これに対して、穀梁伝は宣帝期の特化しすぎ、左氏伝は王莽に利用されたことが地位を不利にしたのである。
23	「鄭箋の感生帝説と六天説」	単著	2007.12.00	渡邊義浩（編）『両漢における詩と三伝』（汲古書院）（415～432 頁）	鄭玄は、『史記』の劉邦に対する記述と武帝の甘泉泰時の祭祀の現実を背景として、六天説を構築し、漢堯後説・漢火徳説を正統化するとともに、前漢の祭天の現実をも経学体系の中に取り込んだのである。
24	「三国志の世界」	単著	2008.03.00	二松学舎大学人文論叢第 80 号（1～14 頁）二松学舎大学人文学会	二松学舎大学人文学会での学術講演をもとにした論文。歴史としての三国志への分析方法、ならびに『三国志演義』への道教の影響を論じた。
25	「西晋における「儒教国家」の形成」	単著	2008.03.00	大東文化大学漢学会誌第 47 号（77～96 頁）大東文化大学漢学会	西晋は、史上最初の「儒教国家」である後漢「儒教国家」の諸要素に加えて、第一に経の「理」を尊重すること、第二に国政の根底に経義を置くことに特徴を持つ。その根底には、鄭玄を批判した王肅の経学があった。
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1984.04.00	～	現在	史学会会員
2	1984.04.00	～	現在	東洋史研究会会員
3	1984.09.00	～	現在	歴史学研究会会員
4	1987.04.00	～	現在	東方学会会員
5	1991.04.00	～	現在	日本中国学会会員（2005.04.00～現在 幹事、2007.04.00～現在 理事）
6	1992.04.00	～	現在	日本道教学会会員
7	1997.04.00	～	現在	中国出土資料学会会員（2006.04.00～現在、理事）
8	1999.04.00	～	現在	六朝学術学会会員（2007.04.00～現在、常任理事）
9	2006.07.31	～	現在	三国志学会会員（2006.07.31～現在、事務局長）

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	大橋 由治	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 干寶の天観と『搜神記』の編纂	単著	2005.11.00	『東方宗教』第 106 号 日本道教学会	『搜神記』の政治的意図は、この説話集が政治色の強い歴史書『晋紀』と同一の著者により編纂されたものであるにもかかわらず、今まで殆ど注目されてこなかった。本論考は『搜神記』編纂の意図について再考し、東晋初期におけるその重要性を明らかにすることを目的としている。『晋紀』は編年体史書であり、この種の史書の特徴は記述の中心となる王朝のみを正統の王朝と主張することである。よってこの『晋紀』は東晋が正統の王朝であることを国内はおろか北方の異民族に知らしめることを目的に著されたものである。序文に明らかのように、その正当化のために人格神としての天帝の存在が前提となっている。『搜神記』の説話からその天観を探ってみると、そこには人格神としての天と原理としての天が存在する。しかし、原理は人格神がいかに変化を降すかという機能を説くものであるため、実質的にはこの二種はともに人格神としての天を語るものである。よって『搜神記』の天観は『晋紀』の天観と共通のものであると判断される。こうしたことから中興に努める東晋初期に『搜神記』を編纂するにあたり干寶は天帝の存在を再び想起させることを企図したと結論づけている。これはこれまでにない『搜神記』像を提起した。 p17～34		

2	『新説新語』と魏晉文化－説話に見る人物評価の実相－	単著	2006.03.00	『大東文化大学漢学会誌』第45号	『世説新語』は南朝宋の劉義慶が監修した志人小説集である。書中では主に後漢から東晋にいたる間の士族であり文人でもある人々の言行に関わる軼事を記している。内容は概ね漢魏以後の筆記小説と諸子、史伝中の物語的要素のあるものから採集しており、各方面にわたって当時の気風や習俗を反映している。よって多分野の参考に値する内容を有している。本論考では『世説新語』を資料として漢から魏晋にかけて人物評価がどのように行われていたのか、内容がどのように変化していったのかについて確認することを目的としている。その結果以下のことが確認できた。もと人材登用制度のために始められた人物評価であったが、評価の主体を有力者に壟断されてからはその社会的意義は薄れていった。この変化は、人々に人物評価の見方を実用的、功利的なものから、人物の個性、知恵、才能に対する批評へと転じさせたのである。これによって魏晋時代の人物品藻は功利を超えた審美的色彩を帯びようになるのである。これにともなって評価の基準も道徳的なものから審美的なものへと移り変わっていった。このように『世説新語』には思想書や歴史書からだけではうかがい知ることの出来ない魏晋文化の実相が描かれていることを示した。 p1～20
3	『世説新語』と魏晉文化：文人と個性	単著	2007.03.00	大東文化大学漢学会誌第46号	魏晋の文人に共通して見られる個性的言行への志向が閉塞した時代における才能の発露であり、無道な統治権力に対する抵抗の姿勢であることを論じた。 p131～144
4	文言小説研究序説：『太平廣記』	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要・人文科学45号	文言小説は時代毎に範疇が異なることや内容が雑多であることから範囲や内容について一つの視点から定義することは不可能とされている。よってこのジャンルにおいて先ず必要となるのは範疇に含まれると判断される書物や説話についてその特徴を把握することである。本論考は文言小説の最も重要な資料である宋の『太平廣記』について整理を試みたものである。 p53～63
5	『世説新語』と魏晉文化－文人の人生観－	単著	2008.03.00	大東文化大学漢学会誌第47号	統治者の横暴がまかり通る魏晋の世相に生きた文人に特徴的な二種の人生観について論じた。その人生観とは審美的人生観と道徳的人生観である。審美的人生観は閉塞した社会のなかで人生を遊戯化しかつそれを芸術品として鑑賞することであった。道徳的人生観とは混乱する社会の中で人間性を回復する手立てとして伝統的道徳を実践したものである。これらはいずれも社会が変動し価値観が転換することで形成されたものである。 p97～p115
6	文言小説研究序説：『夷堅志』	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要・人文科学46号	文言小説は時代ごとに範疇が異なることや内容が雑多であることから範囲や内容について一つの視点から定義することは不可能とされている。よってこのジャンルにおいて先ず必要となるのは範疇に含まれると判断される書物や説話についてその特徴を把握することである。本論考は宋代の史家洪邁がおよそ五十年の歳月をかけて記録した『夷堅志』について著述の経緯を明らかにした。 p223～p243
7	『世説新語』と魏晉文化－言語表現－	単著	2009.03.00	大東文化大学漢学会誌第48号	『世説新語』は人物の言行を記述した志人小説であるが、その記述の文章は多くの人々から称賛されている。そうした『世説新語』の言語表現に関して特に特徴的と思われる行動描写と人物の発話の部分に焦点をあててその特徴を考察した。発話の部分に関しては事象を抽象化して自然物等になぞらえる事で迫真の表現になっており、行動描写では比較を巧みに使って特徴を精細に描くものであった。これらから『世説新語』の言語表現は人物の外的要因から人物像を描く事に長けたものであることを明らかにした。
8	文言小説研究序説：『夷堅志』②	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要・人文科学47号	『夷堅志』に関して序文が散佚した各編の成立年代、難解な書名の意味、説話の来源、版本種類について論述した。
その他					
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1988.05.00	～	現在	日本中国学会会員	

2	1988.05.00	～	現在	六朝學術学会會員
3	1997.00.00	～	現在	日本道教學會會員
4	2005.01.00	～	現在	東方學會會員

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	武藤 慎一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 多方向発信型授業の実施		2007.04.01		学生個人の全体に対する発言に不慣れな現状を克服し、学生が自ら思考して表現することができるように、小グループやグループ紙の活用、書くことによる発言等によって、教員と学生の双方向、及び学生相互の発信型授業を行っている。(2007年4月1日～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) Ariadne—特別研究の手引き		2006.04.07		担当する科目「特別研究」前期の教科書として、小川清次と共同で作成したもの。学生が研究を行う際に指針となるように、題目、研究計画、資料収集と整理、考察とまとめ、プレゼンテーション等の項目について解説した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 The Peshitta:Its Use in Literature and Liturgy. Papers Read at the Third Peshitta Symposium(Monographs of the Peshitta Institute Leiden,15). Interpretation in the Greek Antiochenes and the Syriac Fathers	共著	2006.12.00	Brill(Leiden) (分担) pp.207～222	編集者：B.ter Haar Romeny 共著者：Shinichi Muto 他多数 本研究では、ヨアンネス・クリュストモスらアンティオキア積義学派とその同時代のニシピスのエフライムらシリア教父における「解釈」が扱われる。前者が聞き手に聖書箇所「唯一の、真の」解釈を教えようとする傾向があるのに対して、後者は他の多くの解釈可能性により開かれている。両者の間には本質的な相違があるので、従来の説のようにシリア的解釈学をアンティオキア型と見なすべきではない。			
2 多元的世界における宗教的寛容と公共性—東アジアの視点から。『大秦景教流行中国碑』における宗教的寛容	共著	2007.03.20	晃洋書房(京都) (分担) pp.122～133	編集者：芦名定道 共著者：武藤慎一他9名 大秦景教流行中国碑は、中国におけるキリスト教の現存する最古の史料である。しかし、今日ではその内容が在来諸宗教に妥協的だとして、とかく過小評価されるきらいがある。景教の他宗教に対する寛容の姿勢は、唐の皇帝から景教に対して示された姿勢に対応したものと取れば、極めて自然なものである。現在の多元的な宗教状況における寛容の重要性の観点から見れば、むしろそれを千二百年先駆けたものと肯定的に評価できる。			
3 エチオピアを知るための50章	共著	2007.12.25	明石書店 (分担) エチオピア正教会 (pp.50～55)、ゲエズ語 (pp.87～90)	歴史から見たエチオピア正教の最大の特徴は、ユダヤ・セム性と古代キリスト教との併存にある。外来のものを早期に取り入れながら自らの言語文化に合わせて大胆に改変し、現存する伝統的教会の中で最も独自の教会となることができた。ゲエズ語とは古典エチオピア語のことで、主にキリスト教文書を記すための書記言語として使用された。編著者：岡倉登志 共著者：多数			

4	ハラホト出土モンゴル文書の研究	共著	2008.03.20	雄山閣 全 410 頁 (分担) 第六部 シリア文字文書 (pp.233~253)	破損が激しく、判読不能部分が多いハラホト出土シリア語文書H彩 101 を世界で初めて研究した。その結果、キリスト教の三一神、束縛と解放が主題で、宇宙論的な構造を持っていることが分かった。他に、同じくシリア文字で書かれたF 文書群の 10 点がシリア語まじりテュルク語の文書で、キリスト教関連の内容であることが判明した。編集者：吉田順一／チメドドルジ 共著者：多数
論文					
1	四世紀イラクにおける地域文化としてのキリスト教 —そのマイノリティとしての自己意識	単著	2004.12.30	『基督教学研究』第 24 号 pp.49~64	従来の研究ではペルシア地域の特殊性と教義の普遍性との関係を十分に明らかにし得なかった。本研究は主に、ペルシアの賢者アフラハトによる人称代名詞の使用と土地に対する言及に注目するという方法で、この関係を考察した。その結果、彼らは理念においては普遍性を標榜しているが、現実においては特殊性が目立つことが判明した。四世紀イラクのキリスト教の特徴は、この二つの面が共存している点にある。
2	The Hermeneutics of Eusebius of Emesa in Comparison with That of Ephrem of Nisibis	単著	2005.00.00	The Harp 18 pp.203~215	ラテン語訳で著書が現存する、アンティオキア釈義学派の創始者エメサのエウセビオスとその同時代のシリア教父を代表するニシビスのエフライムを比較した。前者が聞き手に聖書箇所「唯一の、真の」解釈を教えようとする傾向があるのに対して、後者は他の多くの解釈可能性により開かれている。両者の間には本質的な相違があるので、従来の説のようにシリア的解釈学をアンティオキア型と見なすべきではない。
3	クリュソストモスのエウドキア (神の喜び) 理解 —影響作用史的聖書解釈の試み	単著	2005.12.30	『基督教学研究』第 25 号 pp.129~152	聖書解釈上の成果としては、「エウドキア」の二つの語義「切望」と「満悦」は相互に密接に関連している点である。次に、アンティオキア学派のキリスト論との接点としては、原因としてのエウドキアという点では、モブスエスティアのテオドロスと軌を一にしている。最後に、神の感情の問題としては、クリュソストモスにおいては御子の受肉の原因と結果という重要な点で、神の喜びという感情が考えられていることが明らかになった。
4	The Syrian Origin of the Divine Condescension as the Key to Biblical Interpretation	単著	2006.00.00	The Harp 20 pp.249~261	ギリシア語資料の中では、クリュソストモスの適応論が傑出しているが、シリア語資料によるとエフライムが彼以前に、豊かな適応論を展開していた。このギリシア語圏とシリア語圏とを媒介したのは、エメサのエウセビオスが代表する二重言語話者である。従って、従来の諸研究とは異なり、クリュソストモスの解釈学にとって最重要の考えにおいて、シリア語圏の影響が認められることが初めて明らかになった。
5	ハラホト出土文書 (モンゴル文) の研究 —平成 14~17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書。シリア文字文書	共著	2006.03.31	早稲田大学文学学術院 (東京) (分担) pp.139~146	編集者：吉田順一 共著者：梅村担、宇野伸浩、石濱裕美子、井上治、船田善之、武藤慎一 破損が激しく、判読不能部分が多いハラホト出土文書H彩 101 を世界で初めて研究した。その結果、標準的なシリア文字、シリア語であることを確認した。キリスト教の三一神、束縛と解放が主題で、宇宙論的な構造を持っている。文体は、詩的で修辭的な表現が多い。他にも、一まとまりの文書群である F で始まる篇号の 10 点が、全体として少なくともシリア語を含み、キリスト教関連の内容の文書であることが判明した。
6	人文知の新たな総合に向けて —21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」第四回報告書上巻。四世紀イラクにおける地域文化としてのキリスト教 —そのマイノリティとしての自己意識	共著	2006.03.31	京都大学大学院文学研究科 (京都) (分担) pp.234~237	編集者：21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」代表者 紀平英作 共著者：武藤慎一他多数 従来の研究ではペルシア地域の特殊性と教義の普遍性との関係を十分に明らかにし得なかった。本研究は主に、ペルシアの賢者アフラハトによる人称代名詞の使用と土地に対する言及に注目するという方法で、この関係を考察した。その結果、彼らは理念においては普遍性を標榜しているが、現実においては特殊性が目立つことが判明した。四世紀イラクのキリスト教の特徴は、この二つの面が共存している点にある。

7	ニシビスのエフライムの発見論	単著	2007.03.30	『西南アジア研究』第66号 pp.17～30	本研究が初めて明らかにしたエフライムの発見論は、能力の向上や不断の努力といった発見者の側の発見要件を含みつつも、それだけに留まらない。発見者に対する発見対象の動的な関与という点を含む発見の全体像としては、西洋の伝統的な論証的・科学的モデルとは異なる、ヘブライ・セム的な発見法的思考モデルを提供している。
8	アンティオキア学派における「エウドキア」の意味	共著	2008.03.00	京都大学大学院文学研究科(京都)(分担) pp.75～94	古代地中海世界の多面的状況とキリスト教の形成(平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書。共著者:◎片柳榮一、他4名。聖書解釈上の成果としては、「エウドキア」の二つの語義「切望」と「満悦」は相互に密接に関連している点である。次に、アンティオキア学派のキリスト論との接点としては、原因としてのエウドキアという点では、モプスエスティアのテオドロスと軌を一にしている。最後に、神の感情の問題としては、クリュソストモスにおいては御子の受肉の原因と結果という重要な点で、神の喜びという感情が考えられていることが明らかになった。
9	アンティオキア積義学派におけるエウドキア	単著	2008.12.31	『パトリスティカ』第12号 pp.55～74	聖書で神の感情を表す重要な一面であるエウドキアは、アンティオキア学派のキリスト論の最大の問題の一つにも関わっている。本研究は、この聖書の「エウドキア」の語義理解と思想としてのエウドキアとの接点を明らかにするために、ディオドロスとクリュソストモス、テオドロスの関連テキストを考察した。その結果、アンティオキア積義学派のエウドキア思想では、キリストの受肉に関して、その原因としての神の強い意志だけではなく、神の喜びという感情も考えられていたことが明らかになった。
その他					
1	A Quest for the Origin of the Divine Condescension as the Key to Biblical Interpretation	単著	2004.09.25	第1回環太平洋西岸教父学会	ギリシア語資料の中では、クリュソストモスの適応論が傑出しているが、シリア語資料によるエフライムが彼以前に、豊かな適応論を展開していた。このギリシア語圏とシリア語圏とを媒介したのは、エメサのエウセビオスが代表する二重言語話者である。従って、従来の諸研究とは異なり、クリュソストモスの解釈学にとって最重要の考えにおいて、シリア語圏の影響が認められることが初めて明らかになった。
2	Christianity as a Local Culture in Fourth-Century Iraq:Its Self-Identity as a Minority	単著	2005.03.29	第19回世界宗教学宗教学史学会	従来の研究ではペルシア地域の特殊性と教義の普遍性との関係を十分に明らかにし得なかった。本研究は主に、ペルシアの賢者アフラハトによる人称代名詞の使用と土地に対する言及に注目するという方法で、この関係を考察した。その結果、彼らは理念においては普遍性を標榜しているが、現実においては特殊性が目立つことが判明した。四世紀イラクのキリスト教の特徴は、この二つの面が共存している点にある。
3	The Universality and the Locality in Early Persian Christianity as Reflected in Aphrahat's Demonstrations	単著	2006.09.13	第6回世界シリア学会	従来の研究では、ペルシア地域の特殊性と教義の普遍性との関係を十分に明らかにし得なかった。本研究は主に、ペルシアの賢者アフラハトによる人称代名詞の使用と土地に対する言及に注目するという方法で、この関係を考察した。その結果、彼らは理念においては普遍性を標榜しているが、現実においては特殊性が目立つことが判明した。初期ペルシアのキリスト教の特徴は、この二つの面が共存している点にある。
4	柴田有著『教父ユスティノスーキリスト教哲学の源流』	単著	2007.09.20	『日本の神学』第46号 pp.151～156	本稿は、ユスティノスの学術研究として本邦初のモノグラフで主として「哲学者ユスティノス」として描いた著作の書評である。
5	旧約注解者ヨアンネス・クリュソストモス	単	2007.12.31	『パトリスティカ』第11号 pp.106～124	本稿は、2006年6月24日に第116回教父研究会で英語にて行われた教父研究会設立30周年記念特別講義の全訳である。あまり評価されることがなかったアンティオキア学派の旧約聖書注解の意義をクリュソストモスを中心に論じたものである。著者:ロバート・C・ヒル
III 学会等および社会における主な活動					
1	1993.03.00	～	現在	京都大学基督教会会員(1999年度～現在 編集委員)	
2	1993.03.00	～	現在	日本基督教会会員(2006年度 幹事)	

3	1996.07.00	～	現在	日本宗教学会会員
4	1998.06.00	～	現在	西南アジア研究会会員
5	2008.06.00	～	現在	京都ユダヤ思想学会会員

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	村井 信幸	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業運営の中で「ビデオ鑑賞」を行い、客観テストを行った。(「中国地域文化論」)			2008.07.15	「シンデレラ」(ウォルト・ディズニー、1949年)のビデオ鑑賞を行い、映画と昔話の相違を明らかにする工夫をした。		
2) 2009年1月13日、1月20日 この2回の授業で受講者全員(約40名)で討論を行った。(「教科教育法地歴」(歴史))			2009.01.13	1月13日は「いじめと体罰」1月20日は「世界平和」をテーマとして、司会者はあらかじめ指定して、この二つのテーマが現代において重要なテーマであることを出席者全員に理解してもらうよう徹底的に討論を行った。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 清代改土帰流時の納西族の社会変化	単著	2007.12.25	東洋研究第166号大東文化大学東洋研究所発行	113~138頁、数多くの西南中国少数民族は、清代の改土帰流によって大きな社会変化を遂げた。本稿では、納西族に問題点をしぼり、その土司木氏が雍正元年(1723)の改土帰流によって権力を失い、その支配地に流官楊氏が派遣された状況を紹介した。そして納西族の主要居住地である麗江において漢化が徹底的に行われ、葬儀が火葬から土葬に移行したこと、若い男女の情死の増加した等の彼らの社会変化について考察した。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1975.04.01	～	現在	上智史学会会員		
2	1975.04.01	～	現在	東京都立大学社会人類学会会員		
3	1978.04.01	～	現在	紀尾井史学会会員		

4	1978.04.01	～	現在	中国大陸古文化研究会会員
5	1978.04.01	～	現在	東南アジア史学会会員
6	1985.04.01	～	現在	日本民族学会会員
7	1995.04.01	～	現在	史学会会員
8	1995.04.01	～	現在	東洋史研究会会員
9	1996.04.01	～	現在	大東文化大学漢学会会員
10	2007.07.27	～	現在	日本チベット学会会員

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	山口 諤司	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『中国学入門 II テキスト』		2005.03.00	「漢籍目録の読み方」(分担執筆) 大東文化大学中国文学科編纂				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 日本文化と漢字の世界 (全5回)		2004.10.00	明治大学リバティーアカデミー2004年度教養文化講座				
2) 漢語と日本語 (全5回)		2005.10.00	明治大学リバティーアカデミー2005年度教養文化講座				
3) 「日本語の奇跡ー アイウエオといろはの誕生」(全3回)		2008.06.19	朝日カルチャーセンター				
4) 「日本語と漢語ー 論語と漢詩から見えることば」(全3回)		2009.02.05	朝日カルチャーセンター				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『漢字ル世界ー食飲見聞録』	単	2005.01.13	不空社	中国に行つて、街中にあふれる漢字に目を通し、身体で言葉を感じてみよう。食べて飲んで見て聞いて、身近なところから漢字を理解する本。不空社 菊判変形総頁 253 ページ。			
2 『大東文化大学図書館所蔵 戸田浩暁博士旧蔵書目録』	共／監修	2005.03.00	大東文化大学図書館	劉協『文心雕龍』の研究者として国内外に知られる戸田浩暁博士が大東文化大学に寄贈された書籍の目録。特に『文心雕龍』の明、清、江戸時代に印刷されたものについては詳細な書誌データを加えて解説した。A5版、総頁 168 ページ。			
3 『妻はパリジェンヌ』	単	2005.06.00	文藝春秋	パリの画廊での運命的な出会い。弁護士を退職し、日本での生活を望む妻。日仏の文化ギャップもスパイスにする家族3人の愉快的な日常。文藝春秋 菊判 総頁 248 ページ。			
4 『感じて! 漢詩』	単	2005.11.00	不空社	漢詩が漢詩人たちだけの楽しみなんて、もったいない。サザンオールスターズ、長淵剛、中島みゆきなどのフォークソングや歌謡曲を引用しながら、漢詩に解説を加える。また、漢詩のコミュニケーション的側面なども詳説する。不空社 菊判変形総頁 191 ページ。			
5 『書いて楽しむ小倉百人一首ーえんぴつで味わう和歌の心』	単著	2006.10.27	小学館	一首につき1ページの解説と、1ページの練習帳。えんぴつでなぞり書きをするうちに、ゆったりと和歌の心を味わえる。小学館A5判 総頁 224 ページ			

6	『大秦景教流行之碑 翻訳資料』（貴田晃氏 と共著）	共著	2007.03.31	大東文化大学人文科学研究 所	1625年、イエズス会士ニコラストリゴールによって最初に 中国語からラテン語に翻訳された『大秦景教流行中国碑』を 日本語訳し、これまで行われていなかった碑文の漢文訓読と それによる日本語訳を施した。共著者の貴田晃氏はラテン語 部分を担当。筆者は漢文訓読及び日本語訳を担当した。A5 版総頁99ページ。
7	『書いて楽しむ論語 —えんびつで味わう 漢字の世界』	単	2007.04.19	小学館	論語の中から日本人になじみ深い100の言葉を選び、書き下 し文、レ点・返り点をつけた訓読文付き。楽しくためになる 「話のタネ」、論語と孔子についての詳しい解説等も掲載。 小学館A5判 224ページ。
8	『日本語の奇跡 〈ア イウエオ〉と〈いろは〉 の発明』	単	2007.12.17	新潮新書 新潮社	日本人が創り上げたたぐい稀な言葉の世界。「五十音図」に 代表される論理的な〈カタカナ〉、いろは歌に代表される情 緒的な〈ひらがな〉、そして中国から渡来した漢字。これら を巧みに組み合わせることで、日本人は素晴らしい言葉の世 界を創り上げてきた。これまでにない視野から、日本語誕生 の物語をダイナミックに描く。新書判総頁186ページ
9	静嘉堂文庫所蔵北宋 版『白氏六帖事類集 1』解題（神鷹徳治と 共著）	共著	2008.03.06	古典研究会叢書 漢籍之部 40 汲古書院	世界に唯一、一本しか伝来のない静嘉堂文庫所蔵の北宋版 『白氏六帖事類集』の影印。
10	静嘉堂文庫所蔵北宋 版『白氏六帖事類集 2』解題（神鷹徳治と 共著）	共著	2008.05.06	古典研究会叢書 漢籍之部 41 汲古書院	世界に唯一、一本しか伝来のない静嘉堂文庫所蔵の北宋版 『白氏六帖事類集』の影印。
論文					
1	本邦漢籍目録書目	単	2005.03.31	中国文学報第68冊 京都 大学文学部中国語学中国文 学研究室内中国文学会 PP.134-146	これまでに刊行ないし発表された国内に漢籍を所蔵する機 関の目録を網羅的に収集し、その書誌データを公開した。こ れは1970年代に財団法人東洋文庫で行われた『日本に於け る漢籍の収集』の補遺し、かつ以後約40年行われなかった 漢籍収集機関に対する研究である。
2	大東文化大学図書館 所蔵「漢籍分類目録 （易部）附国書易類分 類目録」	単	2005.03.31	大東文化大学漢学会誌 44 号 PP.267-290	大東文化大学図書館に所蔵される漢籍のうち、「易」に関す る明清、江戸時代の版本の書誌データを発表したもの。
3	「本邦漢籍目録書目 及び解題編書目一附 本邦漢籍目録書目補 遺並びに追加」	単	2005.10.31	中国文学報第70冊 京都 大学文学部中国語学中国文 学研究室内中国文学会 PP.126-133	これまでに刊行ないし発表された国内に漢籍を所蔵する機 関の目録を網羅的に収集し、その書誌データを公開したもの のうち、なかでも目録に貴重書に解題を施したもの、あるいは 図版などを提示しているものを紹介した。また前回の調査 に遺漏のあったものもここに掲示する。
4	『秘府略』の紙背の 『尚書』について	単	2005.11.31	「東洋文化」復刊 95号 財 団法人無窮会 PP.172-184	前田育徳会尊経閣文庫に所蔵される平安後期書写『秘府略』 の紙背に記される『尚書』の本文の系統を調査した。その結 果、これが玄宗による勅令『隷古定尚書』の廃止以前に写さ れた写本の系統であることが判明した。
5	大秦景教流行之碑の 1625年ラテン語訳に ついて	共	2006.03.31	大東文化大学文学部人文科 学研究所書報 2005年度号	イエズス会士ニコラストリゴールによって、「大秦景教流行 中国之碑」がラテン語訳されていたことはこれまでほとんど 知られなかった。この碑文の発見を記したトリゴールの報告 書とラテン語訳の問題点についての報告。
6	大東文化大学図書館 所蔵「漢籍分類目録 （書部）附国書易類分 類目録」	単	2006.03.31	大東文化大学漢学会誌 45 号 PP.289-309	大東文化大学図書館に所蔵される漢籍のうち、「書」に関す る明清、江戸時代の版本の書誌データを発表したもの。
7	木の魂と「小国寡民」 —製紙王高島菊次郎 と中国古典		2006.11.00	『アジア遊学—漢籍と日本 人— 勉誠出版	王子製紙社長であった高島菊次郎の蔵書は、現在大東文化大 学図書館に所蔵されている。高島氏は生前『老子』の版本や 写本を多く収集しておられた。氏と『老子』の関わり、そし て王子製紙の創業以来の歴史を記した。
8	『茶譜』の諸本につい て（『茶の湯と座の文 芸の本質の研究—『茶 譜』を軸とする知的体 系の継承と人的ネッ トワーク』）	共著	2007.02.25	大東文化大学語学教育研究 所（2004—2006年度日本 学術振興会科学研究費補助 金・基盤研究（C）（2）[課 題番号16520114]研究成果 報告書 221pp、pp26-28	現在国内に所蔵が知られる四本の『茶譜』についてそれぞれ 書誌を詳しく記し、どの本がもっともオリジナルに近いか、 そして巻数が記されない『茶譜』の巻次がどのようであった かの推定を行った。

9	「大東文化大学図書館所蔵漢籍分類目録（詩部）附国書詩類分類目録」		2007.03.31	『大東文化大学漢学会誌』第46号 pp.217-246	大東文化大学図書館に所蔵される漢籍のうち、「詩」に関する明清、江戸時代の版本の書誌データを発表したもの。
10	連載 経籍訪古誌（1）『『経籍訪古誌』という奇跡』		2007.07.20	『アジア遊学（No.99）』勉誠出版 pp187-pp189	幕末、渋江抽斎・森立之を中心に行われた我が国に伝来した中国の古籍の調査の後、多くの書籍が国外に持ち出され、あるいは所蔵を移管された。幕末から明治という動乱への時代の直前に『経籍訪古誌』が編纂されたことの奇跡的意味について記した。
11	大秦景教流行中国之碑 1625年ラテン語訳と典札問題について	単	2007.09.10	『面向世界的東方思想 中日韓三国学術研討会』山東大学 pp.141-pp154	儒教に基づく各種儀礼がキリスト教徒にとって異端になるか否かという問題が17世紀後半以来中国でのキリスト教布教に関して持ち上がる。そのひとつの契機としてヨーロッパではイエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会、ミッションエトランジェールなどのキリスト教内部での派閥争いがあったこと、またその一因にトリゴールによる大秦景教流行中国之碑のラテン語訳がされた時の誤訳が大きく作用していることを明らかにした。
12	連載 経籍訪古誌（2）「老子道德経二巻」		2007.09.20	『アジア遊学（No.102）』勉誠出版 pp192-pp194	経籍訪古誌に著録された足利学校旧蔵『老子道德経』は、戦前王子製紙社長の高島菊次郎の所蔵を経て現在大東文化大学図書館に所蔵される。この『老子道德経』の書き入れから、足利学校の創立が従来言われていたように北条氏金沢文庫との深い関係があることを明らかにした。
13	連載 経籍訪古誌（3）「論語註疏解経二十巻 北宋槧本 楓山文庫蔵」		2007.12.20	『アジア遊学（No.105）』勉誠出版 pp212-pp214	現在宮内庁書陵部に所蔵される論語注疏は、渋澤栄一によって影印され、世界の主要な図書館に配られた。現在国宝に指定される本書の来歴と渋澤が影印をした理由、そしてその経緯を明らかにした。
14	連載 経籍訪古誌（5）「字書の王様——『玉篇』」		2008.06.20	『アジア遊学（No.105）』勉誠出版 PP199-PP201	奈良時代から平安初期に書写された原本系『玉篇』のうち、東大寺に所蔵されたものは現在行方不明になっている。筆者はこの書が江戸時代に写されたものを所蔵する。これについての報告を行った。
15	富山房の『漢文大系』		2008.11.00	『アジア遊学—漢籍と日本人II—』勉誠出版 PP.	江戸漢学の大成とも言われる『漢文大系』を出版した富山房書店の創立とこの書店に脈々と流れた創始者の思い、『漢文大系』の出版の意義を明らかにした。
その他					
1	「資料紹介：[江戸後期]刊[伝]小野道風墨跡本」解題・影印	共	2004.08.00	『白居易研究年報』第5号 PP.227-242	
2	コトバでアヤトリ（1）「でくわした！」	単	2005.03.00	『大東書道（4月号）』大東文化大学書道研究所 PP.10	
3	（編訳）『中国歴史文献学史述要—『永楽大典』について（洲脇武志・石川薫と共訳）』	共	2005.03.10	大東文化大学漢学会誌 44号 PP.249-266	曾貽芬・崔文印著による『中国歴史文献学史述要』のうち、『永楽大典』に関わる部分を日本語訳しながら、原著の誤りを訂正しかつ遺漏を補った。共訳の作業に当たっては、筆者が粗訳を行ったところを、中国に堪能な石川薫がチェックし、内容のチェックを洲脇が担当し、最終的に筆者が文章を整えた。
4	密かなブーム、楽しい「漢詩」入門	単	2005.04.00	『新潮45』5月号 新潮社 PP.128-PP.135	
5	コトバでアヤトリ（2）「でかした！」	単	2005.04.00	『大東書道（5月号）』大東文化大学書道研究所 PP.10	
6	コトバでアヤトリ（3）「タンポポ」	単	2005.05.00	『大東書道（6月号）』大東文化大学書道研究所 PP.10	
7	なんて素晴らしいニッポン語！	単	2005.06.00	『新潮45』7月号 新潮社 PP.148-PP.156	
8	コトバでアヤトリ（4）「ピーチクパーチク」	単	2005.06.00	『大東書道（7月号）』大東文化大学書道研究所 PP.10	

9	コトバでアヤトリ (5)「頭を掻く」	単	2005.07.00	『大東書道(8月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
10	コトバでアヤトリ (6)「ボクも子子子子」	単	2005.08.00	『大東書道(9月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
11	和歌はこんなに面白い	単	2005.09.00	『新潮45』十月号 新潮社 PP156-164	
12	コトバでアヤトリ (7)「演歌は壮士節と呼ばれていた」	単	2005.09.00	『大東書道(10月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
13	トポスとしての物狂い(英語)	単	2005.09.02	第11回ヨーロッパ日本学国際会議 オーストリア、ウイーン大学	
14	コトバでアヤトリ (8)「鴨南蛮」	単	2005.10.00	『大東書道(11月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
15	コトバでアヤトリ (9)「鴨南蛮は高かった」	単	2005.11.00	『大東書道(12月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
16	大秦景教流行碑のラテン語訳について	単	2005.11.19	大東文化大学人文科学研究会報告会	
17	能はなぜ「物狂う」のか	単	2005.12.00	『新潮45』一月号 新潮社 PP152-159	
18	コトバでアヤトリ (10)「左右手」	単	2005.12.00	『大東書道(1月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
19	コトバでアヤトリ (11)「源氏物語を読みたいなあ」	単	2006.01.00	『大東書道(2月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
20	コトバでアヤトリ (12)「三木のウマヘタ」	単	2006.02.00	『大東書道(3月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
21	コトバでアヤトリ (13)「ホルンー新しか音ば薩摩から」	単	2006.03.00	『大東書道(4月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
22	(編訳)『中国歴史文献学史述要』—宋代の類書と「資料集成」	共	2006.03.10	大東文化大学漢学会誌 45号 PP.113-138	曾貽芬・崔文印著による『中国歴史文献学史述要』のうち、宋代の類書に関わる部分を日本語訳しながら、原著の誤りを訂正しかつ遺漏を補った。共訳の作業に当たっては、筆者が粗訳を行ったところを、中国に堪能な石川薫がチェックし、内容のチェックを洲脇が担当し、最終的に筆者が文章を整えた。
23	コトバでアヤトリ (14)「ソロバンとカルシウム」		2006.04.00	『大東書道(5月号)』大東文化大学書道研究所 PP10	
24	学芸欄イラスト		2006.04.10	大東文化 第562号	
25	コトバでアヤトリ (15)「洋行ということば」		2006.05.00	『大東書道(6月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
26	福島敦子「食生活を積極的にクリエートしよう」イラスト		2006.05.18	『SALUT』No.32 オハヨー乳業株式会社広報誌 PP4	
27	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載		2006.05.20	アスキー・ドットPC 6月号 P60	
28	林望著『リンボウ先生の文章教室』装画及びイラスト		2006.05.21	小学館文庫	

29	「思いは厲し！李白のごとく」原采蘋漢詩訳	2006.05.24	『温故』第43号 福岡県立甘木歴史資料館	
30	コトバでアヤトリ (16) 「蝸牛考」考	2006.06.00	『大東書道(7月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
31	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	2006.06.00	アスキー・ドットPC 7月号 P60	
32	橋本仁子著『大学公開講座の効果的運営方法』装画	2006.06.00		
33	『2006 大東文化大学起業アイデアコンテスト』ポスター並びにチラシデザイン	2006.06.00		
34	学芸欄イラスト	2006.06.00	大東文化 第563号	
35	チェコ音楽コンクールのためのポスター制作	2006.06.10		チェコ音楽コンクールのためのホーム・ページ制作 スロヴァキア音楽コンクールのためのポスター制作 スロヴァキア音楽コンクールのためのホーム・ページ制作
36	コトバでアヤトリ (17) 「オイさ！」	2006.07.00	『大東書道(8月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
37	コトバでアヤトリ (18) 「トントロ雨」	2006.08.00	『大東書道(9月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
38	「校訂」という教養	2006.09.00	『新潮45』10月号 新潮社 P128-P140	
39	コトバでアヤトリ (19) 「心太」	2006.09.00	『大東書道(10月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
40	コトバでアヤトリ (20) 「イレズミとお祭り」	2006.10.00	『大東書道(11月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
41	大東文化大学ウォーキング2006 Tシャツ・バッグデザイン	2006.10.00		
42	学芸欄イラスト	2006.10.00	大東文化 第564号	
43	林望「食べたいな」イラスト	2006.10.20	光文社「小説宝石」11月号	
44	コトバでアヤトリ (21) 「消えたおしん」	2006.11.00	『大東書道(12月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
45	コトバでアヤトリ (22) 「五十年」	2006.12.00	『大東書道(1月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
46	コトバでアヤトリ (23) 「卒業論文」	2007.01.00	『大東書道(2月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
47	学芸欄イラスト	2007.01.00	大東文化 第565号	
48	コトバでアヤトリ (24) 「芥川龍之介とプラセンタ」	2007.02.00	『大東書道(3月号)』大東文化大学書道研究所 P10	
49	図書館の本来	2007.03.00	『新潮45』3月号 新潮社 P128-135	

50	コトバでアヤトリ (25) 「月枝で玉を 追う日々」 PP.10	2007.03.00	『大東書道(4月号)』 大 東文化大学書道研究所	
51	「板橋区協働データ ベースとインターネ ットラジオ」	2007.03.00	大東文化大学・板橋区地域 デザインフォーラム 『元 気な学生まちづくり』(地 域デザインフォーラム・ブ ックレット) pp59-66	
52	林望「同窓会ワープ」 イラスト	2007.03.00	光文社「小説宝石」4月号 P85-P90	
53	大東文化大学企業ア イデアコンテスト参 加賞トートバックデ ザイン	2007.03.00		
54	(編訳)『中国歴史文 献学史述要』—魏晋南 北朝隋唐時代の類書	2007.03.10		曾貽芬・崔文印著による『中国歴史文献学史述要』のうち、 魏晋南北朝隋唐時代の類書に関わる部分を日本語訳しなが ら、原著の誤りを訂正しかつ遺漏を補った。共訳の作業に当 たっては、筆者が粗訳を行ったところを、中国に堪能な石川 薫がチェックし、内容のチェックを洲脇が担当し、最終的に 筆者が文章を整えた。
55	コトバでアヤトリ (26) 「朝に歌わん」 PP.28	2007.04.00	『大東書道(5月号)』 大 東文化大学書道研究所	
56	コトバでアヤトリ (27) 「あこぎ」 PP.28	2007.05.00	『大東書道(6月号)』 大 東文化大学書道研究所	
57	コトバでアヤトリ (28) 「白玉」	2007.06.00	『大東書道(7月号)』 大 東文化大学書道研究所 P.P28	
58	書評 谷崎光著『北京 大学てなもんや留学 記』(文藝春秋刊) 「混沌とした中国で 自分を磨く」(文藝春 秋『本の話』7月号) PP20	2007.06.00	文藝春秋	
59	コトバでアヤトリ (29) 「ノ・ボール とマリリン」	2007.07.00	『大東書道(8月号)』 大 東文化大学書道研究所 PP28	
60	『2007 大東文化大 学起業アイデアコン テスト』ポスター並び にチラシデザイン	2007.07.00	大東文化大学	
61	『2007 学生のいる まちコンテスト』ポ スター並びにチラシデ ザイン	2007.07.00	大東文化大学	
62	山元大輔著『浮気をし たい脳』イラスト及び カバー	2007.07.20	小学館	
63	コトバでアヤトリ (30) 「今夜の一品、 イモダコ」	2007.08.00	『大東書道(9月号)』 大 東文化大学書道研究所 PP28	
64	お金ことはじめ 室 町から江戸の豪商・角 倉家の秘密	2007.09.00	『新潮 45』10月号 新潮 社 P148-P160	
65	コトバでアヤトリ (31) 「検乳器があ った時代」	2007.09.00	『大東書道(10月号)』 大 東文化大学書道研究所 P.28	

66	大秦景教流行中国之碑 1625 年ラテン語訳と典札問題について (英語による口頭発表)	2007.09.15	面向世界的東方思想 中日韓三国学術研究会	儒教に基づく各種儀礼がキリスト教徒にとって異端になるか否かという問題が 17 世紀後半以来中国でのキリスト教布教に関して持ち上がる。そのひとつの契機としてヨーロッパではイエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会、ミッションエトランジェールなどのキリスト教内部での派閥争いがあったこと、またその一因にトリゴールによる大秦景教流行中国之碑のラテン語訳がされた時の誤訳が大きく作用していることを明らかにした。
67	コトバでアヤトリ (32) 「金玉的力」	2007.10.00	『大東書道 (11 月号)』 大東文化大学書道研究所 P28	
68	コトバでアヤトリ (33) 「五味康助の音」	2007.11.00	『大東書道 (12 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP.28	
69	「不動通り新聞」の発行	2007.12.00	『学生まちづくりの研究』 (大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム) 地域デザインフォーラム・ブックレット No.20 大東文化大学地域連携センター	
70	コトバでアヤトリ (34) 音のする「母」	2007.12.00	『大東書道 (1 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP28	
71	コトバでアヤトリ (35) 「東髪 of 時代だ!」と叫んだ人	2008.01.00	『大東書道 (2 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP28	
72	学芸欄イラスト	2008.01.00	大東文化 第 567 号	
73	〈アイウエオ〉と〈いろは〉 PP36	2008.01.15	『波』 新潮社	
74	コトバでアヤトリ (36) 『七年史』という本	2008.02.00	『大東書道 (3 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP28	
75	かず・かたちの図鑑イラスト	2008.02.00	小学館	
76	書「風」	2008.02.25	コダックフォトクラブ「風」写真展 2008 年 2 月 25 日～28 日	
77	(編訳)『中国文献学史述要』—宋代の歴史文献の校勘について (洲脇武志・石川薫と共訳)	2008.03.00	『大東文化大学漢学会誌』 第 47 号 PP.136-168	
78	コトバでアヤトリ (37) 正金銀行はないけれど	2008.03.00	『大東書道 (4 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP.28	
79	(編訳)『中国歴史文献学史述要』—宋代の歴史文献の校勘について (洲脇武志・石川薫と共訳)	2008.03.10	『大東文化大学漢学会誌』 第 47 号 PP.136-168	曾貽芬・崔文印著による『中国歴史文献学史述要』のうち、「宋代の歴史文献の校勘について」に関わる部分を日本語訳しながら、原著の誤りを訂正しかつ遺漏を補った。共訳の作業に当たっては、筆者が粗訳を行ったところを、中国に堪能な石川薫がチェックし、内容のチェックを洲脇が担当し、最終的に筆者が文章を整えた。
80	林望「猫眼の男」イラスト	2008.03.20	光文社「小説宝石」4 月号 PP61-PP68	
81	コトバでアヤトリ (38) 日吉屋講談本製造工場の娘	2008.04.00	『大東書道 (5 月号)』 大東文化大学書道研究所 PP.28	

82	(編訳)『中国歴史文献学史述要』—魏晋南北朝時代の総集について(洲脇武志・石川薫と共訳)	共	2009.03.10	『大東文化大学漢学会誌』第48号 PP.177-193	曾貽芬・崔文印著による『中国歴史文献学史述要』のうち、「魏晋南北朝時代の総集について」に関わる部分を日本語訳しながら、原著の誤りを訂正しかつ遺漏を補った。共訳の作業に当たっては、筆者が粗訳を行ったところを、中国に堪能な石川薫がチェックし、内容のチェックを洲脇が担当し、最終的に筆者が文章を整えた。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1987.04.01	～	現在	財団法人無窮会会員／評議員	
2	1987.04.01	～	現在	東方学会会員	
3	1992.04.01	～	現在	SOCIETE ASIATIQUE 会員	
4	1997.04.01	～	現在	京都大学文学部中国文学会会員	
5	2004.04.01	～	現在	日本スロバキア文化交流会実行委員	
6	2004.04.01	～	現在	日本チェコ音楽コンクール実行委員	
7	2004.04.01	～	現在	日本チェコ文化交流会実行委員	

(表 25)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	山口 諡司	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所			開催日時	発表・展示等の内容等				
1 チェコ音楽コンクールのためのポスター制作				2004.06.00					
2 チェコ音楽コンクールのためのホーム・ページ制作				2004.06.00					
3 スロヴァキア音楽コンクールのためのポスター制作				2004.06.00					
4 スロヴァキア音楽コンクールのためのホーム・ページ制作				2004.06.00					
5 大東文化大学展示ギャラリーにて絵画及び彫刻個展				2004.07.00					
6 出品『雑草アンテナ』（鉄の彫刻に彩色）	International Open Air Expressions 2004 Hiki (国際野外の表現展)			2004.09.00					
7 大東文化大学生協 やまぐちヨウジイラスト絵葉書発売				2004.09.00					
8 『ヤナチェック声楽集』匂坂恭子編レイアウト	全音楽譜出版社			2004.10.00					
9 フランソワ・ルーセル著『TOME 1』装幀及びイラスト	第三書房出版			2004.11.00					
10 林望著『東京坊ちゃん』装画、及びイラスト	小学館			2004.11.00					
11 林望著『リンボウ先生からおんなたちへ』装画及びイラスト	小学館文庫			2005.02.00					
12 「写友風」グループ展に絵画作品出品				2005.02.00					
13 「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドット P C			5 月号 P60	2005.04.00				
14 「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドット P C			6 月号 P60	2005.05.00				
15 『2005 大東文化大学企業アイデアコンテスト』ポスター並びにチラシデザイン				2005.06.00					
16 「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドット P C			7 月号 P60	2005.06.00				
17 チェコ音楽コンクールのためのポスター制作				2005.06.00					
18 チェコ音楽コンクールのためのホーム・ページ制作				2005.06.00					
19 スロヴァキア音楽コンクールのためのポスター制作				2005.06.00					
20 スロヴァキア音楽コンクールのためのホーム・ページ制作				2005.06.00					
21 「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドット P C			8 月号 P60	2005.07.00				
22 「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドット P C			9 月号 P60	2005.08.00				
23 林望著『リンボウ先生新味珍菜帖』装画及びイラスト	小学館文庫			2005.09.00					

24	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 10月号 P60	2005.09.00
25	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 11月号 P60	2005.10.00
26	『2005 大東文化大学企業アイデアコンテスト』参加賞手ぬぐいデザイン		2005.10.00
27	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 12月号 P60	2005.11.00
28	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 2月号 P60	2005.12.00
29	福島敦子「世界に誇るべき日本人の感性」イラスト	『SALUT』オハヨー乳業株式会社 社広報誌	2006.01.00
30	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 3月号 P60	2006.02.00
31	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 4月号 P60	2006.03.00
32	「リンボウ先生のデジタル黄金律」イラスト連載	アスキー・ドットP C 5月号 P60	2006.03.00
33	「一文字の世界」企画及び書作品展示	コダックフォトクラブ「風」写真展 2006年4月25日～28日	2006.04.25

(表 24)

所属	文学部中国学科	職名	准教授	氏名	吉田 篤志	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2006.11.00		学生による授業評価において、授業への満足度 4.2 (5段階評価、2科目の平均値) の評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 中国学読解基礎演習Ⅱ		2005.03.31		中国学科 2年生用の漢文演習テキスト。A5版、約 300頁を 3名で分担執筆。			
2) 漢文入門		2009.03.31		中国学科 1・2年生用の漢文演習テキスト。A5版、約 300頁を 3名で分担執筆。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大学アーカイブ講義「現代の大学」		2006.05.19		1,2年生を対象に自校史教育を担当			
2) 大学アーカイブ講義「現代の大学」		2007.05.19		1,2年生を対象に自校史教育を担当			
3) 大学アーカイブ講義「現代の大学」		2008.06.07		1,2年生を対象に自校史教育を担当			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 試論郭店楚簡の形成年代—通過“親親”与“尊尊”来考察—	単著	2006.03.00	中国社会科学院歴史研究所簡帛研究 二〇〇六	(1~9頁) 「郭店楚簡の親親主義と尊尊主義をめぐって」(大東文化大学郭店楚簡研究班『郭店楚簡の研究(三)』[2001.03.20発行] 収載)の中国語訳。戦国晩期から秦漢期にわたって形成された既存文献、特に春秋伝と比較しながら郭店楚墓竹簡の形成年代を考察した。			
2 五帝時代は史実か—神話の歴史化に対する疑問—	単著	2007.03.10	大東文化大学漢学会誌第 46号	(35~61頁) 近年来、中国の考古学界や古代史学界では文明起源の問題について頻りに検討会を開催し、また報告書を刊行している。2000年に夏王朝を実在の王朝と確定してからは、更に遡って『史記』五帝本紀記載の五帝(黄帝・堯・舜など)を実在の人物と認定し、これを歴史化しようとしている。そこで黄帝と同時期とされる炎帝を例として文献学の立場から考察し、これが戦国時代に形成されたものと結論づけ、五帝時代を史実と見なす意見に疑問を呈した。			

3	禹の九州伝説の成立過程	単著	2008.03.10	大東文化大学漢学会誌第47号	(16～47頁) 禹は夏王朝の始祖で、黄河の治水を成し遂げ、中国を九州に分けて治めたとされる伝説上の人物である。この治水九州説は古文獻に多く記録されており、特に『尚書』禹貢篇には詳しい。『尚書』『詩経』や戦国・秦・漢期の諸子・出土資料等の禹貢篇を前後する文献を精査し、九州説がどのように成立したのかその過程を考察した。
4	先秦時代の家族観—“滅私奉公”をめぐる—	単著	2008.08.29	発行：第2回東アジア三大学国際シンポジウム論文集 東アジアにおける「家」— 伝統文化と現代社会—	(19～24頁, 175～180頁) 2008年9月に大東文化大学で開催された第2回東アジア三大学国際シンポジウムに参加し、中国の先秦時代において、家族間の私的紐帯を重んじる儒家思想に対して、“私”よりも“公”を優先する考え方(思想)を“滅私奉公”という言葉を用いて説明した。
その他					
1	西周時代の王墓・王城の発見	単著	2005.03.00	大東文化大学人文科学研究 所所報 No.11	(18頁) 2004年5月に報道された周公廟遺跡(王墓群)発見の記事と2005年2月に報道された鳳翔水溝遺跡(大古城壁)発見の記事とを紹介し、未発見だった西周王墓や王城の発見に伴う今後の発掘研究の可能性について述べた。
2	五帝時代は史実か	単著	2006.03.00	大東文化大学人文科学研究 所所報 No.12	(2～7頁) 中国は2000年に夏商周断代工程(夏商周年代確定プロジェクト)による夏王朝の年代を確定した。これを受けて2002年から中華文明探源工程(中華文明起源探索[探究]プロジェクト)が開始され、更に1000年遡って伝説の五帝時代を歴史化しようとしている。筆者は2005年に文明起源の問題を討論する数次の学術会議に参加し、その参加報告を紹介し、五帝時代の歴史化に対する疑問を論じた。
3	青銅器の郷を尋ねて—陝西宝鶏調査報告—	単著	2006.03.10	大東文化大学漢学会誌第45号	(311～325頁) 2005年8月から9月にかけて、中国陝西省宝鶏市の宝鶏青銅器博物館、鳳翔県の秦公一号大墓遺址博物館・鳳翔県博物館、岐山県の周公廟遺跡・宗廟遺跡(鳳雛村)・周原博物館(元工作站)、扶風県の宮殿遺跡(召陳村)・周原博物館・周原博物館文物複製廠等を訪問調査し、主に西周時代の遺跡や出土青銅器についての見聞を記録し、写真を掲載した。
4	郭沫若『两周金文辞大系』研究班報告(在北京博物館蔵青銅器の調査報告)	単著	2007.03.00	大東文化大学人文科学研究 所所報 No.13	(24～32頁) 2006年3月に北京の西周燕都遺址博物館・中国国家博物館・北京大学サックラー考古芸術博物館・新首都博物館・保利芸術博物館等に所蔵する西周時代の青銅器の調査を行い、博物館や青銅器についての見聞を記録し、写真を掲載した。また北京市房山区琉璃河の西周燕国都邑遺跡と山西省曲沃県曲村の西周晋国都邑遺跡とから出土した青銅器(新首都博物館蔵・北京大学サックラー考古芸術博物館蔵)に対する若干の考察を施した。
5	「郭沫若『两周金文辞大系』研究」班報告(附：嚏・苾(薏)文字考)	単著	2008.03.00	大東文化大学人文科学研究 所所報 No.14	(2～7頁) 2007年度の研究班報告。付録として青銅器銘文にも記録される「苾(薏)」について、『詩経』終風の「願言則嚏」をめぐる、その字の本来の意味と詩篇の解釈の相違を検討し、どのように邦訳すべきか、いくつかの例を検討しながら考察した。
6	「西周青銅器銘文研究」班報告(附：孫臏兵法管見)	単著	2008.03.12	大東文化大学人文科学研究 所所報 No.15	(26～29頁) 2008年度の研究班報告。付録として山東省臨沂県の銀雀山漢墓から出土した孫臏兵法について、『史記』孫子列伝との相違を明らかにするために、「擒龐涓」篇の記録を考察し、『史記』が「擒龐涓」篇の記録をアレンジした可能性が高いことを推測した。
7	研究報告「先秦時代の家族観—“滅私奉公”をめぐる—」		2008.09.16	「第2回東アジア三大学国際シンポジウム」於大東文化大学 2008.09.16～09.17	「第2回東アジア三大学国際シンポジウム」に参加し、「先秦時代の家族観—“滅私奉公”をめぐる—」と題して、中国の先秦時代において、家族間の私的紐帯を重んじる儒家思想に対して、“私”よりも“公”を優先する考え方(思想)を“滅私奉公”という言葉を用いて報告した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1979.04.00	～	現在	財) 無窮会会員 (2005.04.01～現在 評議員)	
2	1979.04.01	～	現在	日本中国学会会員	

3	1981.04.01	～	現在	東方学会会員
4	1987.09.00	～	現在	中国殷商文化学会（中国）会員
5	1995.04.01	～	現在	中国出土資料学会会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	網代 敦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 1年生の共通ゼミナールに関し、各担当教員から授業運営の実践報告会を実施		2008.03.00		1年生の基礎導入科目であるフレッシュマン・セミナー担当教員に呼びかけ、各自の授業実践における方法、問題点、改善点などを検討する会を開いた。随時、情報交換をすることによって、自己の授業運営を振り返る機会を設けていくことを確認し合った。その際、各学科教員の教授方法を紹介する「かわら版」を作成し、教員間に配布することを決めた。			
2) 講義科目の授業において、学生が受け身的にならないような参加型授業の工夫		2008.04.00		(2008年4月～2009年5月) 学生の批評的意見を出させるように、毎時間、講義内容について一つの問いかけを行い、それに対する短い意見を書かせ提出させた。それをパソコンに打ち出し、プリントアウトし、次週の授業で配布し、コメントを与えたのち相互の意見の確認をさせた。			
3) 教育上の能力に関する大学等の評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成19年12月実施) 講義授業で、平均4.2 (5段階評価) の評価。必ずしも高い評価とは言えないが、大人数の概論の授業としては、資料作りの工夫もあって、それなりの反応があったと思う。大東文化大学授業評価 (平成20年12月実施) 演習授業で、平均値4.2 (5段階評価) の評価。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「古英語の本文批評と Beowulf (1)」	単著	2005.03.15	大東文化大学英米文学論叢第36号 (27・47)	従来の古英語のテキスト編纂 (本文校訂) において、理論的・体系的な方法が十分に提示されてこなかった指摘が Michael Lapidge や R. D. Fulk によってなされている。本稿では、(1) 古英語作品の編集・校訂の歴史、(2) 従来指摘されてきた本文批評の問題点を年代順に採り上げること、(3) 多種類の Beowulf テキストの校訂法の再考を通し、今後の古英語の本文批評のあり方を考察する。今回は (1) を中心に、Matthew Parker (1566) から Edward Thwaites (1698) までの校訂法を歴史的に追った。			

2	「古英語の本文批評と Beowulf (2)」	単著	2006.03.15	大東文化大学英米文学論叢 No.37 (43-59 頁)	前号 (No.36) からの継続。今号では古英語作品の編集・校訂の歴史的概観として、18 世紀の George Hickes, Humfrey Wanley, Elizabeth Elstob, David Wilkins, John Smith, Thomas Hearne, Daines Barrington を採り上げた。18 世紀は写本との校合がなされた厳密な意味での critical edition の登場にはまだまだ遠く、本格的な古英語テキストの編集は 19 世紀に入ってからの古英詩の段階を待たなくてはならないことを述べた。
3	「古英語の本文批評と Beowulf (3)」	単著	2007.03.15	大東文化大学英米文学論叢 No.39(33-57 頁)	前号 (No.37) からの継続。本格的な古英語のテキスト編集の開始とされる 19 世紀に入ってからの編集・校訂の歴史的発達を追った。Conybeare 兄弟、Benjamin Thorpe, Jacob Grimm, John Mitchell Kemble, Henry Sweet を採り上げた。Thorpe によってイングランドに比較言語学に裏打ちされた 'The New Philology' が導入されて以来、音韻・形態的に正確なテキストが写本から編集されるようになった。さらにドイツの Grimm によりさらに精確な近代的な校訂法が確立され、Kemble にそれが受け継がれ、Sweet に至って写本本位の「保守的校訂法」の方向性が認知されたことを指摘した。
4	「古英語の本文批評と Beowulf (4)」	単著	2008.03.15	大東文化大学英米文学論叢 No.39 (23-46)	前号 (No.38) からの継続。19 世紀末から 20 世紀にかけての重要な古英語の散文テキストの編集・校訂の歴史的発達を追った。Bede の作品を校訂した J.R.Lumby と Thomas Miller, Grein-W ü lker による古英語の詩華集の校訂法、Earl and Plummer の『アングロサクソン年代記』、Gollancz-Mackie の The Exeter Book、F.Liebermann のアングロサクソンの法律文書のそれぞれの校訂方針を明らかにした。
5	シンポジウム第十部門：文学テキストの言語と読みを問う 「Beowulf のテキストの言語と読み：写本と諸校訂本をめぐって」	単	2008.09.20	The 80th General Meeting of the English Literary Society of Japan (日本英文学会第 80 回大会 Proceedings) 182-183	Katherine O'Brien O'Keefe 編の Reading Old English Texts (Cambridge,1997) で提示されたように、古英語のテキストは読みの上で様々な新しい要素が求められている。例えば、テキストの伝達に関してや、orality (声の文化) と literacy (文字の文化) に関する問題などである。これらの客観的言語事実以外の要素を考慮しつつ、Beowulf の写本に見られるいろいろな問題点や不規則な特徴を、editing において "clear reading" に修正することが正当なことかどうかを考えながら、Beowulf の写本テキストと諸校訂本の読みをめぐると問題点の一端に触れてみた。骨子は次の 4 点である。(1)Beowulf の諸校訂本 (転写本・diplomatic edition を含む) を年代順 (1705~2008) に提示し、校訂方針を簡単に示す、(2)従来、標準版として一番よく用いられてきた Klaeber 第 3 版 (Boston, 1950) の校訂本を中心に、いくつかの校訂本間における読みの相違を示し、校訂者が、写本本文にどのような本文上の介入をしているかを提示する、(3)Klaeber 版 (1950) を主に取り上げながら、本文への介入に関する問題点を取り上げる、(4)JohnD.Niles の論文、'Editing Beowulf: What Can Study of the Ballads Tell Us?' Oral Tradition 9, (1994, 440-467)を引用しながら、orality という観点から写本本文に関しどのような読みができるか触れてみる、ということである。
その他					
1	(書評)	単著	2005.03.15	大東文化大学英米文学論叢 第 36 号	田中實著『逆立ち男』詩画集
2	「The Fitzwilliam Museum の The Macclefield Psalter」	単著	2006.03.01	ASTERISK: A Quarterly Journal of Historical English Studies, vol.XIV, No.2(イギリス国学協会編) (27-36)	中世イングランドで製作された礼拝用の詩篇集である彩飾写本が、新発見という形で 2004 年に世に現れた。The Macclefield Psalter と命名されたこの写本について、発見の経緯などに触れたあと、写本の特徴をケムブリッジ大学の The Fitzwilliam Museum の公開展示を実際に目にした立場から述べ、その独自性の一端に触れた。

3	シンポジウム第十部門:文学テキストの言語と読みを問う 「Beowulf のテキストの言語と読み:写本と諸校訂本をめぐって」	単	2008.03.10	The 80th General Meeting of the English Literary Society of Japan (日本英文学会第 80 回大会資料) p.51	2008年5月25日に行われるシンポジウムの講師としての発表要旨。
4	「文学テキストの言語と読みを問う」ー Beowulf の場合	単著	2008.04.19	広島英語研究会 4 月月例会 (於広島大学)	「文学テキストの言語と読みを問う」というテーマのシンポジウムで、歴史的にテキストの問題を扱った 4 人の発表者の一人として、古英語部門を担当した。Beowulf の校訂本と原写本の比較を通し、刊本テキストの校訂者が、どのように本文介入をしているのかを考察した。
5	シンポジウム第十部門:文学テキストの言語と読みを問う 「Beowulf のテキストの言語と読み:写本と諸校訂本をめぐって」	単	2008.05.25	日本英文学会第 80 回大会 (於広島大学)	「文学テキストの言語と読みを問う」と題し、Beowulf, Chaucer, Shakespeare, Dickens を通した歴史的文学テキストの流れの中で、そこに見られる言語的諸問題をフィロロジカルに浮き上がらせるということが本シンポジウムの共通テーマである。本発表者は古英語で書かれた Beowulf のテキストを扱った。Beowulf の校訂本は 1815 年の Thorkelin 版に始まり、現在まで数々のものが刊行されてきた。従来、Klaeber 版 (1950; 3rd ed./2008改訂第 4 版) による読みが主流となってきたが、その読みにもいろいろな問題点が指摘されている。校訂者の本文介入の是非を巡り、conservative 派と liberal 派の間の論争の中にその問題点の理由が見出される。また、O'Keefe (1990) や Niles (1994) による、写本本文には 'orality' から 'literacy' への移行の視覚的痕跡が見られるという指摘から、従来の校訂本における読みの方に疑義が投げかけられている。本発表では、Beowulf 本文の数箇所について、いくつかの研究例を採り上げながら、諸校訂本間の読みの相違を検討し、改めて写本本文に立ち戻ってこれら刊本テキストの読みの問題を再検討した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1978.04.00	～	現在	日本英文学会会員
2	1980.03.00	～	現在	上智大学英文学会会員 (平成 11 年度～平成 20 年度 評議員)
3	1981.04.00	～	現在	サウンディングズ英語英米文学会会員 (昭和 60 年度～昭和 62 年度会報編集委員; 平成 5 年度～平成 8 年度会誌編集委員; 平成 14 年度～平成 15 年度会誌編集委員長; 平成 17 年度～評議員; 平成 18 年度～19 年度会誌編集委員・論文査読委員)
4	1984.12.00	～	現在	日本中世英語英文学会会員 (平成 21 年 1 月 1 日～平成 23 年 12 月 31 日大会準備委員)
5	1984.12.00	～	現在	日本中世英語英文学会東支部会員
6	1997.04.00	～	現在	イギリス国学協会会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	猪股 謙二	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 高大連携による導入教育の実践 (学科全教員参加)		2006.00.00	2006 年一以降継続 推せん入学者 50%の中の指定校推せん制度による入学者に対して、合格が決定し入学に至る 5ヶ月間に課題図書を供与しその内容についてのレポートを課し添削返却している。入学予定者は返却されたレポートを通じてフィードバックされて各自の問題を解決できつつある。			
2) 単位修得が困難な学生との面談と個別指導等。		2008.00.00	大学への入学が様々な形で行われている為に学生の学力は通常の授業で指導しきれないレベル差がある。特に英語の学力差がある為に学生間での信頼、友人関係に亀裂が生じている場合がある。このひとつの解決法として課外授業・面談を行い、問題のある学生に個別にアドバイスをしている。			
3) 学部学生の為の外国語学習		2008.04.00	2008 年 4 月 - 2009 年 4 月 - 卒業論文、大学院進学、海外留学等の為に英語以外の外国語を学ぶ学生の為に「読書会」を設けている。対象となる言語は、ギリシア語、ラテン語、フランス語、オランダ語、ドイツ語等である。使用するテキストは英語で書かれたものである為に対照言語学に拠る学習効果がある。			
4) 「卒業論文」履修者間でのインターネット上での討論		2009.04.00	卒業論文履修者 6 名は、各自のテーマの基本となる共通の図書を決めて、その内容についてネット上で議論しその結果を卒論の中に盛り込む。教室での学習とは異なり、時間的空間的な制限がない為に有効な議論がなされている。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1979.00.00	～	現在	日本言語学会会員
2	1983.00.00	～	現在	日本英語学会会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	岡倉 登志	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『世界史の中の日本』			2006.11.20	明石書店			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
1 世界史の中の日本・岡倉天心とその時代		単著	2006.11.20	明石書店		幕末より大正初期までの日本の歴史を世界史の中に位置づけるとともに岡倉天心の活動とも関連づけた。その一例は消費文化と万博である。275 頁	
2 エチオピアを知るための 50 章		単著 (編著)	2007.12.10	明石書店		420 頁のうち 180 頁以上執筆。	
論文							
1 岡倉天心とボストン・ブラーミンズ (2) - ラングドン・ウォーナー		単著	2004.09.00	『東洋研究』152 号		典型的ボストン・ブラーミンズであるラングドン・ウォーナーと岡倉天心との師弟関係を中心にアメリカのジャポニズムをも扱った論稿。18 頁	
2 岡倉覚三 (天心) と英文学		単著	2005.03.00	『大東文化大学英米文学論叢』		天心のヨーロッパ文化受容の一部として文学を取りあげた。あまり知られていないバイロンやワーズワースへの関心にも言及。16 頁	
3 ジブチにおける民族紛争 - 歴史と現在 (1)		単著	2005.03.00	『大東文化大学紀要 (人文科学)』43 号		「アフリカの角」における民族紛争の一貫としてジブチのケース・スタディーの試みだが、1977 年の独立時点までを扱っている。16 頁	
4 岡倉天心 (覚三) とインド (1)		単著	2005.11.00	『東洋研究』157 号		ニウモディータとの交流に焦点をあて、『東洋の目覚め』『東洋の理想』の執筆背景にも言及している。16 頁	
5 日露戦争前後の岡倉天心		単著	2005.12.20	『五浦論叢』12 号		『日本の目覚め』執筆、ボストン美術館就職、ガードナー夫人との交友スタートなど天心研究の重要時期を扱い、アメリカの対日文化政策にも迫る。15 頁	
その他							

1	「ロンドンの天心、およびレガメ『東京の学校の図画と図画教育』についてなど	共著	2004.09.02	『鵬』創刊号	2002年4月に発足した天心研究会の紀要の創刊号。 4頁
2	『国際政治事典』	共著	2005.09.00	弘文堂	アドワの戦い、「アフリカの角」など約20項目執筆。
3	「日露戦争期のアメリカにおける岡倉天心」岡倉天心と3人のオペラ歌手	共著	2006.02.00	『鵬』2号	天心研究会での発表要旨と新資料を用いたエッセー。 6頁
4	国際シンポ「東アジア共同体と岡倉天心」		2008.02.18		青木保文化庁長官、中島岳志氏らとパネラー 基調報告は松本健一氏（2008年秋に藤原書店より報告書刊行予定）
5	「東と西への融合の思い」	単著	2008.04.10	『ウエシッジ』2008年5月号	「新・地球学の世紀」フォーラムでの講演の一部を活字化。 2頁

III 学会等および社会における主な活動

1	2003.04.00	日本黒人研究会会員
2	2006.10.00	日本フェノロサ学会副会長

(表 24)

所属	文学部英米文学科		職名	教授	氏名	河野 芳英	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							
1 On Short Stories of Katherine Mansfield's Early Period (1)	単著	2005.03.00	『英米文学論叢』No.33 (大東文化大学英文学会)		そのニュージーランドを代表する短編小説家であるキャサリン・マンスフィールドの初期の作品を取り上げ、それがどのような萌芽を見せ、文学作法として、どのようにに技量を開花していったかを論考した。15 ページ。		
2 The Tale of Peter Rabbit の海賊版についての書誌的考察 - 主として 1904 年から 1916 年について	単著	2005.03.00	『藤本昌司教授退官記念論文集』(鳳書房)		英国を代表する児童文学作家ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』は、米国での著作権を申請・取得しなかったため、おびただしい数の海賊版が出版された。本学の「ビアトリクス・ポター資料館」に所蔵されている書籍を中心に、書誌学的にその調査を行い、論述。16 ページ。		
3 Beatrix Potter の The Tale of Peter Rabbit の日本への受容について (その1)	共著	2009.03.00	『英米文学論叢』No.40 (大東文化大学英文学会)		今までは、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』の最初の翻訳は、1912 年のオランダ語訳とされていたが、1906 年に日本語訳で紹介されていたことを、河野、小林、利部が発見した。それらについて、第一回目の論文を発表。共著者、河野芳英、小林和子、利部由理子。		
その他							
1 「Beatrix Potter の魅力」(研究口頭発表)		2004.06.00	第 47 回 英米文学語学研究会 (飯田橋レインボービル)				

2	「2005年度：大東文化大学図書館・文学部英米文学科所蔵 Beatrix Potter 文献目録」(大東文化大学文学部英米文学科発行)	2005.03.00	書誌目録(大東文化大学英米文学科)
3	「言の葉メモ」「『ピーターラビットのおはなし』の作者・ビアトリクス・ポターについて」(計5回)	2006.03.00	茨城ラジオ放送局
4	「2006年度：大東文化大学図書館・文学部英米文学科所蔵 Beatrix Potter 文献目録」(大東文化大学文学部英米文学科発行)	2006.03.00	書誌目録(大東文化大学英米文学科)
5	小学図書館ニュース 「いたずら好きなお話：美しい自然が育んだピーターラビットの世界：第745号」	2006.03.00	少年写真新聞社
6	SALA : No.14:「大東文化大学ビアトリクス・ポター資料館：ピーターラビットの絵本の世界」について	2006.03.00	埼玉県大学・短期大学図書館協議会
7	The Story of a Fierce Bad Rabbit, The Story of Miss Moppet, The Tale of Tom Kitten について	2006.07.00	ビアトリクス・ポター生誕140周年記念イベント(埼玉県こども動物自然公園：森の教室)(主催：埼玉県)
8	ビアトリクス・ポターの絵本とナーサリーライムについて	2006.07.00	ビアトリクス・ポター生誕141周年記念イベント(埼玉県こども動物自然公園：森の教室)(主催：埼玉県)
9	「日曜訪問」「大東文化大学ビアトリクス・ポター資料館について」	2006.07.00	NHKラジオ第一放送局
10	ピーターラビットとビアトリクス・ポターのおはなし：100年つづくナチュラルライフのすすめ	2006.08.00	特別講演(ダヴィンチ神谷町：ストップおんだん館) (主催：全国地球温暖化防止活動推進センター：協力：環境省：チーム・マイナス6パーセント)
11	「朝日小学生新聞」 「ピーターラビットとビアトリクス・ポターのおはなし：8月30日号」	2006.08.00	朝日新聞社
12	News from Japan (The Beatrix Potter Society Newsletter No.102)	2006.09.00	Beatrix Potter Society
13	ピーターラビットの生みの親 - ビアトリクス・ポターを学ぶ	2006.09.00	特別講演(埼玉県こども動物自然公園：森の教室)(主催：埼玉県日高市図書館)

14	いたばし文化芸術講座：おっとりピーターラビットの世界へ	2006.10.00	特別講演（大東文化大学） （主催：板橋区）
15	ビアトリクス・ポター資料館について	2006.10.00	特別講演（埼玉県こども動物自然公園：森の教室）（主催：ピーターラビット・友の会）
16	「子供の科学」「地球の未来を考えよう：エコロジー・ジャパン：大東文化大学資料館：10月号」	2006.10.00	誠文堂新光社
17	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙1：10月15日号」	2006.10.00	毎日新聞社
18	ピーターラビットとビアトリクス・ポターのおはなし：100年つづくナチュラルライフのすすめ	2006.11.00	特別講演（福井県教育センター）（主催：全国地球温暖化防止活動推進センター：協力：環境省：チーム・マイナス6パーセント）
19	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙2：11月19日号」	2006.11.00	毎日新聞社
20	ピーターラビットを追いかけて－英国・湖水地方の旅	2006.12.00	特別講演（埼玉県蓮田市図書館）（主催：埼玉県蓮田市図書館）
21	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙3：12月17日号」	2006.12.00	毎日新聞社
22	News from Japan (The Beatrix Potter Society Newsletter No.103)	2007.01.00	Beatrix Potter Society
23	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙4：1月21日号」	2007.01.00	毎日新聞社
24	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙5：2月18日号」	2007.02.00	毎日新聞社
25	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙6：3月25日号」	2007.03.00	毎日新聞社

26	「2007年度：大東文化大学図書館・文学部英米文学科所蔵 Beatrix Potter 文献目録」(大東文化大学文学部英米文学科発行)	2007.03.00	書誌目録(大東文化大学英米文学科)
27	ピーターラビットの仲間たちを追いかけて	2007.04.00	ピアトリクス・ポター資料館：オープン一周年記念イベント(埼玉県こども動物自然公園：森の教室)(主催：大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館)
28	「毎日小学生新聞」 「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙7：4月14日号」	2007.04.00	毎日新聞社
29	「毎日小学生新聞」 「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙8：5月12日号」	2007.05.00	毎日新聞社
30	「毎日小学生新聞」 「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙9：6月9日号」	2007.06.00	毎日新聞社
31	News from Japan (The Beatrix Potter Society Newsletter No.105)	2007.07.00	Beatrix Potter Society
32	「毎日小学生新聞」 「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙10：7月14日号」	2007.07.00	毎日新聞社
33	「毎日小学生新聞」 「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙11：8月11日号」	2007.08.00	毎日新聞社
34	ピアトリクス・ポター作品の日本語訳について	2007.09.00	特別講演(ドーミ倶楽部：軽井沢)(主催：ピーターラビット・友の会)
35	ピーターラビットの世界とハーブ	2007.09.00	特別講演(埼玉県こども動物自然公園)(主催：特定非営利活動法人：Japan Herb Society)
36	大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館について	2007.09.00	特別講演(埼玉県こども動物自然公園)(主催：絵本の家・友の会)
37	The Magical Years of Beatrix Potter — おっとりとしたピーターラビットの世界へ	2007.09.00	大学院特別講演(日本大学文理学部英米文学科・大学院特別講義)

38	ピアトリクス・ポターとナショナル・トラスト	2007.09.00	特別講演（埼玉県こども動物自然公園）（主催：NPO・NGO：日本ナショナル・トラスト協会）
39	「ふくろう通信：No.6」「ファンタジー列伝3：ピアトリクス・ポター」	2007.09.00	株式会社スピカ
40	「毎日小学生新聞」「ようこそピーターラビットのふるさとへ：作者・ポターからの手紙12：9月15日号」	2007.09.00	毎日新聞社
41	Early Japanese Translation (The Beatrix Potter Society News Letter No.106)	2007.10.00	Beatrix Potter Society
42	「Parks：27号」：ピアトリクス・ポターと動物園	2007.10.00	埼玉県公園緑地協会
43	ピーターラビットの世界－ピアトリクス・ポターとその作品について	2008.02.00	特別講演（埼玉県鶴ヶ島市中央図書館）（主催：埼玉県鶴ヶ島市中央図書館）
44	「J-WAVE」「TEPCO: EARTH HUMMING」	2008.03.00	F M放送局
45	「2008年度：大東文化大学図書館・文学部英米文学科所蔵 Beatrix Potter 文献目録」（大東文化大学文学部英米文学科発行）	2008.03.00	書誌目録（大東文化大学英米文学科）
46	Peter Rabbit in Japanese Kamishibai (The Beatrix Potter Society News Letter No.108)	2008.04.00	Beatrix Potter Society
47	News from Japan (The Beatrix Potter Society News Letter No.108)	2008.07.00	Beatrix Potter Society
48	石井桃子とピーターラビット	2008.07.00	特別講演（さいたま文学館）（主催：さいたま文学館）
49	おっとりとピーターラビットの世界へ	2008.09.00	特別講演（中央大学駿河台記念館）（主催：イギリスを知る会）
50	ピーターラビットとイギリスと自然環境保護について	2008.11.00	特別講演（埼玉県こども動物自然公園）（主催：埼玉県）
51	The Tale of Peter Rabbit と『ピーターうさぎの冒険』について	2008.11.00	特別講演（上野：東京文化会館）（主催：ピーターラビット・友の会）

52 「ことばと出会って、 ところを見つけてー 文学作品と子どもたち」	2008.12.00	英米文学語学研究会 シン ポジウム (飯田橋レインボ ービル)	コーディネーター：清水雅夫 (杏林大学) パネラー：河野芳 英 (大東文化大学) 大急ぎでピーターラビットの世界へ：米 川聖美 (明星大学) ロマン派詩人と児童文学：鷺谷里美 (女 子美術大学) 子どもに心の栄養をー母子が選ぶ絵本と児童文 学：加藤千晶 (聖心女子大学) オスカー・ワイルド『幸福の 王子』における幸福感ー無償の愛と唯美主義の接点
53 A Campaign and Three Exhibitions in Japan (The Beatrix Potter Society News Letter No.111)	2009.01.00	Beatrix Potter Society	
54 「2009 年度：大東文 化大学図書館・文学部 英米文学科所蔵 Beatrix Potter 文献 目録」 (大東文化大学 文学部英米文学科発 行)	2009.03.00	書誌目録 (大東文化大学英 米文学科)	
III 学会等および社会における主な活動			
1 2002.04.00 ～ 現在		日本キャサリン・マンスフィールド協会理事	

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	栗栖 美知子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 3年次の自主ゼミ設定		2004.05.00	(2004年5月～現在) 毎週1回のゼミをより効果的に行うため、学生主導の自主ゼミを週2回程度導入。ゼミ長、副ゼミ長が中心となり、お昼休み、その他の空き時間を利用して、自主的なディスカッション、問題点の相互理解をはかり、メインのゼミナールが活発かつ効率的になっている。				
2) 4年次卒業論文指導のゼミ化		2004.05.00	(2004年5月～現在) 4年次卒業論文指導を毎週ゼミ形式でおこなうと共に、3年ゼミナール同様、4年次間で週2回の自主ゼミをおこない、それぞれの取り扱う作家や作品の合評・ディスカッションを通じ、卒業論文の作成が連帯感に満ち、それぞれの研究と論文作成がスムーズになった。				
3) 3年、4年、大学院1, 2年合同夏期合宿		2004.05.00	(2004年5月～現在) 毎年、学年を越えて、2泊3日の集中合宿をおこない、共通の作品分析・ディスカッションを1日10時間にも及ぶ時間をかけて行っている。これによって学年を越えた信頼と敬意、友情が深まり、学問への関心は驚く程高まる。これによって、大学院進学への意欲も湧いている現状がある。相互に学問的刺激を受ける格好の場となっている。				
4) 大学院生の海外奨学金留学制度の改革		2005.04.00	(2005年4月～現在) 大学院英文学専攻主任として、大学院(修士課程)2年次における英語圏大学院への1年間の留学制度を整え(対象大学との個別交渉を現地に赴き行う。)2年次における単位交換留学を実現させた。これにより、英語圏大学院への更なる進学が活性化した。(以前は3年かかっていた修士取得を2年でできるよう内規を改訂。)				
5) 英語圏大学・大学院への奨学金留学生の派遣とサポート		2005.07.00	(2005年7月～現在) 学部・大学院の英語圏大学・大学院への1年間の留学を可能にするため、英国・米国の大学に個別交渉に赴き、学期の異なる System の中での奨学金留学を可能にした。また、毎年3月7、8、9月とイギリスに行き、相手校との情報交換(指導教員との面談など)また、留学生の精神的・学問的サポートにあたっている。				
6) 大学院英文学専攻学会「英文学シンポジウム」の創設		2005.11.00	(2005年11月～現在) 大学院1、2年次全員がその研究成果を発表するための学会を立ち上げ、現在では他大学院生の招待発表を含め、すべての運営を大学院生がとりおこない、組織運営・研究発表・リーダーシップの育成に役立っている。				
7) 大学院学術雑誌『ポローニア・レビュー』(Paulounia Review)の再刊		2006.03.00	(2006年3月～現在) 英文学専攻主任として、長らく休刊していたポローニア・レビューを再刊。丹念な指導を通じた大学院在学学生全員が英語論文を寄稿する。(査読あり)				
8) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価(平成20年12月実施)において、高い評価を得た。平均値4.8以上(5段階評価)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							

II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 「ドイツヘッド邸の遺産—ジェイン・エアと父権」	単著	2006.03.31	彩流社 出渕敬子編『読書する女性たち』167-180	ジェインがアウトサイダーであったことの理由のひとつに彼女のもつ中流意識があり、この当時の父権の脅威が、いわず語らずのうちに作用していることを分析したもの。
2 「‘Monster’それとも‘Wise Matriarch’？—ウルフのレイ・ストレイチー」	単	2008.10.00	『ヴァージニア・ウルフ研究』第25号 91-109 日本ヴァージニア・ウルフ協会	『イギリス女性運動史』の著者レイ・ストレイチーは女性参政権運動に深く関わったアクティビストであったが彼女とヴァージニア・ウルフの関係ははまだ論じられたことがない。実は、ウルフのフェミニズムにストレイチーが与えた影響が多かったことを証明したもの。
その他				
1 学会司会		2007.11.24	日本ジョージ・エリオット協会大会	午前の部 研究発表の司会。2つの研究論文のまとめと質疑応答。
2 レイ・ストレイチー著『イギリス女性運動史 1792-1928』	共監訳	2008.01.15	みすず書房	みすずからイギリスの女性普通選挙権獲得運動にたずさわったレイ・ストレイチーによる80年にわたる19世紀の女性史を訳したもの。女性史を学ぶ者たちにとって必読書とされている本の本邦初書。原書にはない、多くの写真・イラスト・訳注・地図・年表など付加価値の高いものになっている。
3 レイ・ストレイチー著『イギリス女性運動史 1792-1928』みすず書房		2008.05.00	日本女子大学図書館だより	上記の翻訳書の内容を詳細に述べたもの。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1977.00.00	～	現在	日本英文学会会員
2	1981.00.00	～	現在	日本ヴァージニア・ウルフ協会会員
3	1988.00.00	～	現在	日本ブロンテ協会会員
4	1998.00.00	～	現在	日本ジョージ・エリオット協会会員
5	1998.00.00	～	現在	日本ハーディ協会会員
6	2004.00.00	～	現在	日本ヴィクトリア朝文化研究学会会員
7	2006.00.00	～	現在	Dorothy Richardson Society 会員
8	2009.04.00	～	2009.11.00	日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2009年度定期全国大会開催校委員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	里見 繁美	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 別府恵子・里見繁美編『ヘンリー・ジェイムズの華麗な仲間たちージェイムズの創作世界』	共著	2004.10.00	英宝社	「ラフカディオ・ハーンの捉えたジェイムズ像」77-101 総頁 263 頁			
2 西川盛雄編『ラフカディオ・ハーンー近代化と異文化理解の諸相ー』	共著	2005.07.00	九州大学出版会	「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ・ニューオーリンズ時代ー才筆開花の軌跡とその検証」117-147 総頁 255 頁			
3 里見繁美・池田志郎編『アメリカ作家の理想と現実』	共著	2006.10.20	開文社出版	「人生の構築ーラフカディオ・ハーンとイラスト」43-60 総頁 310 頁			
4 『ハーン曼荼羅』	共著	2008.11.00	北星堂	「ラフカディオ・ハーンのピエール・ロチ論」119-137 総頁 197 頁			
論文							
その他							
1 「ハーンと Ye Giglampz 出版体験」		2004.10.23	日本英文学会第 57 回九州支部大会 特別企画「ハーン没後 100 年記念フォーラム」(福岡大学)				
2 「ハーンと Ye Giglampz 出版体験」	単著	2005.06.00	『へるん』第 42 号 八雲会	30-32 総頁 182 頁			

3	「新たなパースペクティヴから見たラフカディオ・ハーン」		2005.07.25	平成 17 年度日本比較文学会春季九州大会「ハーン・フォーラム」(熊本大学)	
4	「熊本大学教養英語教育における学習到達度に関する基礎的研究」	共著	2006.03.31	『熊本大学平成 17 年度重点配分経費による実施事業研究成果報告書』	
5	R. L.ゲイル『ヘンリー・ジェイムズ事典』	共著	2007.10.00	雄松堂	379-980 総頁 1014 頁
III 学会等および社会における主な活動					
1	1985.04.00	～	現在	日本アメリカ文学会会員	
2	1985.04.00	～	現在	日本英文学会会員	
3	1996.04.00	～	現在	日本比較文学会会員	
4	2004.09.00	～	2006.03.00	熊本八雲会副会長	
5	2007.10.06			歴史講演会①「上州里見氏のルーツとその周辺」担当	
6	2008.07.13			歴史講演会②「里見氏と山名氏と大井田氏を語る」担当	

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	高杉 玲子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) ゼミ生引率 観劇		2004.06.25	シェイクスピア『ヴェローナの二紳士』(俳優座)を観劇した。				
2) イギリス・キール大学夏季語学研修引率		2004.08.09	2004年8月9日～8月31日 授業のみならず生活全般にかかわって指導した。参加学生は22名。				
3) ゼミ生引率 観劇		2005.05.23	シェイクスピア『冬物語』(俳優座)を観劇した。				
4) 夏のゼミ合宿		2005.09.05	2005年9月5日～9月7日 小諸 2泊3日のゼミ合宿実施。1年の最後には文集を発行している。				
5) ゼミ生引率 観劇		2006.06.09	シェイクスピア『マクベス』(俳優座)を観劇した。				
6) 夏のゼミ合宿		2006.08.01	2006年8月1日～8月3日 千曲川 2泊3日のゼミ合宿実施。1年の最後には文集を発行している。				
7) ゼミ生引率 観劇		2007.06.17	シェイクスピア『夏の夜の夢』(新国立劇場)を観劇した。				
8) 夏のゼミ合宿		2007.09.17	2007年9月17日～9月19日 箱根 2泊3日のゼミ合宿実施。1年の最後には文集を発行している。				
9) ゼミ生引率 観劇		2008.05.02	シェイクスピア『夏の夜の夢』(俳優座)を観劇した。				
10) シェイクスピアシアター主宰の出口典雄氏出講		2008.06.09	シェイクスピアの言葉を声に出して読み、発声方法など指導してもらった。				
11) 夏のゼミ合宿		2008.09.09	2008年9月9日～9月11日 河口湖 2泊3日のゼミ合宿実施。1年の最後には文集を発行している。				
12) ペンブルック・プレイヤーズのワークショップ参加		2008.09.24	ゼミ生が参加し、そのなかで『夏の夜の夢』の5幕劇中劇を演じた。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) キール大学の英語研修を引率して		2005.03.00	大東文化大学国際交流センター発行『夏季語学研修報告書』キール大学の夏季語学研修を引率したときの報告書。(72-77頁) A5版、総頁124頁。				
2) キール大学の英語研修を引率して		2005.03.15	大東文化大学『英米文学論叢』No.36 キール大学の夏季語学研修を引率したときの報告書(107-115頁)前著を転載したもの A5版、総頁181頁。				
3) ケンブリッジ大学ペンブルック・プレイヤーズ来たる		2009.03.15	大東文化大学『英米文学論叢』No.40 英米文学科では、ケンブリッジ大学の学生劇団ペンブルック・プレイヤーズを招聘して2008年10月1、2日の両日、ワークショップ、一般公開公演、文学部特別講義を企画したが、その責任者としてそれら一連の行事の概容をまとめたもの。演目はシェイクスピアの『夏の夜の夢』でした。(103-106頁) A5版、総頁128頁。				
II 研究活動							

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 『ブラウダ』	単著	2005.10.31	英潮社『現代演劇』No.15	現代演劇研究会が、ディヴィッド・ヘア特集号として企画編集したもので、私の執筆担当は『ブラウダ』の作品論である。（75-78頁）A5版、総頁248頁。
2 「オセローのハンカチ：『オセロー』における文化交換の倫理」	単著	2006.03.15	『英米文学論叢』No.37	『オセロー』には、ヴェネツィア、フィレンツェ、スペイン、アフリカ、トルコなどさまざまな文化が交差し、交換されて、それが登場人物のなかに内面化されている。そしてそれらの文化交換の倫理的結節点をなすのが、オセローのハンカチとなっていることを分析している。（11-25頁）A5版、総頁131頁。
3 西欧の愛—『ロミオとジュリエット』における愛と死のレトリック	単著	2006.03.20	『文学研究』第33号	北イタリアのヴェローナの町で、バルコニーを背景にひとり立つジュリエットの銅像に端を発して、(1)ソネット形式(2)七月の太陽(3)バラの名前(4)星によって阻まれた恋人たち(5)ジュリエットとロミオの物語という五章の組み立てで西欧の愛の「愛と死」という観念的レトリックを分析する。（2-15頁）A5版、総頁58頁。
4 『屋根裏部屋のおもちゃ』	単著	2007.05.20	英潮社『現代演劇』No.17	現代演劇研究会編リリアン・ヘルマン／メガンテリー特集号筆者は『屋根裏部屋のおもちゃ』作品解説を（62-66頁）担当。A5版、総頁287頁。
5 『夏の夜の夢』における月	単著	2008.03.15	『英米文学論叢』No.39	シェイクスピアの『夏の夜の夢』において前面に押し出されている月が、どのような様々なイメージで表象され、どのような意味を付与されているのか考察した。（1-12頁）A5版、総頁74頁。
6 『アマデウス』再考	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要』〈人文科学〉第46号	ピーター・シェファアの『アマデウス』は、大幅な改訂を三回おこなっている。ここでは、最終稿をテキストに、著者が何を伝えたかったのか、天才と凡庸の対峙に何を込めようとしたのか再考した。（255-262頁）B5版、総頁横組317頁、縦組259頁。
7 『マクベス』と「武勇」	単著	2008.03.31	『文学研究』第35号	シェイクスピアの『マクベス』における「武勇」の意味を考察した。（44-54頁）A5版 総頁58頁。
8 『幸福なる種族』	単著	2008.11.17	英潮社フェニックス『現代演劇』No.18	現代演劇研究会がノエル・カワード特集号として企画編集したもので、私の執筆担当は『幸福なる種族』の作品論である。（91-95頁）A5版、総頁252頁。
その他				
1 「ビアトリクス・ポターはシェイクスピアの戯曲を読み、そらんじていた！」という題で執筆。	単著	2005.03.31	大東文化大学英米文学科『Beatrice Potter Collection 文献目録』	P12。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1975.04.00	～	現在	「文学研究」同人会会員 昭和53年度、平成8年度、平成15～17年度編集幹事 昭和62年度文化局幹事
2	1975.04.00	～	現在	日本シェイクスピア協会会員
3	1975.04.00	～	現在	日本英文学会会員
4	1991.04.00	～	現在	The International Shakespeare Association 会員
5	1991.04.00	～	現在	現代演劇研究会会員

6	1998.12.00	～	2006.03.31	国際シェイクスピア・グローブセンター日本支部会員
7	2005.06.18	～	現在	エリザベス朝演劇読書会会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	田仲 勉	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 Lyca の行方	単著	2007.03.15	英米文学論叢 38 号	William Blake の Lyca にまつわる 3 つの詩 'Night', 'The Little Girl Lost', 'The Little Girl Found' を中心に vision と Symbolism を考察した。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1972.05.00	～	現在	日本英文学会会員		
2	1988.00.00	～	現在	日本 T.S エリオット協会会員		
3	2004.00.00	～	現在	The Wordsworth Trust (英国) 会員		
4	2009.04.00	～	現在	The Blake Society (英国) 会員		

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	中澤 紀子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 総合教育科目におけるディスカッションの指導と実践およびレポートの書き方の指導と講評	2007.04.01	総合教育科目において、言語学（ことばと人間AB）と題して、複数の教員によるオムニバス形式で、ことばと人間の関係をいろいろな角度から探っていく授業を展開した。その中で、特に、テーマを設定してディスカッションを組み立て、受講生全員による実践を前期と後期に2回ずつ行なった。また、前期後期に課題として出すレポートの書き方の詳しい指導を行ない、提出されたレポートには、内容だけでなく、書き方に関するコメントもつけて返却し、授業時に講評を行なった。（2007年4月1日～2009年3月31日）					
2) フレッシュマン・セミナーの授業におけるNHKラジオ講座の利用	2007.04.01	英米文学科1年生を対象にしたフレッシュマン・セミナーの授業においてNHKラジオ英会話入門を聴いて、トピックセンテンスを覚えることを年間の課題とし、毎授業時にトピックセンテンスの書き取りテストを実施した。（2007年4月1日～2008年3月31日）					
3) 指定校推薦による入学予定者に対する入学前指導	2008.02.01	指定校推薦による入学予定者に対し、英語の読み物2冊と日本語で書かれた英国の文化、米国の文化に関する新書各1冊を課題として読んでもらい、英語の理解度チェックのための問題（簡単な英作文を含む）と日本語での要約・感想を含むレポートを提出させ、3回にわたって添削指導を行なった。（2008年2月1日～3月31日、2009年2月1日～3月31日）					
4) 全学共通科目（テーマ科目）におけるプレゼンテーションの指導と実践およびレポートの書き方の指導	2009.04.01	全学共通科目（テーマ科目）として、自己・人間を見つける（ことばと人間AB）と題した、複数の教員によるオムニバス形式の授業を行なっている。ことばと人間の関係をいろいろな角度から扱った講義を行なった後、受講生に、ことばと人間に関する具体的なテーマを設定してもらい、プレゼンテーションを前期1回、後期2回行なう予定。また、課題として出すレポートの書き方の詳しい指導を行ない、提出されたレポートには、コメントをつけて返却し、授業時に講評と指導を行なう予定。（2009年4月1日～現在）					
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大東生論文コンテストの審査および論文指導	2007.04.01	大東生論文コンテストの副委員長として、論文テーマの設定、テーマの解説文の作成、論文審査、論文指導を行なった。（2007年4月1日～2008年3月31日）					
2) 高等学校において、大学の英文法の授業を体験してもらうための模擬授業を実施	2007.07.10	東京都立大山高校にて、大学の英米文学科における語学の授業はどういうものであるかを体験してもらうための模擬授業を実施した。大学の英米文学科で学ぶ内容を紹介したあと、英文法の体験授業として、英語の時制を扱った授業を、高校生も授業に参加し、発言する形で行なった。					
3) 指定校訪問	2007.09.06	推薦入試の指定校である茨城県立下館第二高等学校および下妻第二高等学校を訪問し、進路指導部の先生方と、高等学校と大学の教育の連携および接続教育について意見を交換した。					
4) 指定校訪問	2007.09.07	推薦入試の指定校である茨城県立守谷高等学校を訪問し、進路指導主事の先生と、高校生が大学に求めるもの、高等学校と大学の教育の連携について意見交換を行なった。					

5) 高等学校において、大学の文学・文化系の授業を体験してもらうための模擬授業を実施	2008.11.20	埼玉県越谷西高等学校において、大学の文学・文化系の分野では、何を目標にして何を学ぶのかを説明したあと、その一例として、英文学・英国文化に関する授業はどういうものであるかを体験してもらうために、「ピアトリクス・ポターとナーサリー・ライム」と題した模擬授業を実施した。また、授業の前後に、大学の文学系の授業に対するイメージと実際に授業を受けてみた感想を聞き、文学系の学問に関する意識調査を行なった。
--	------------	---

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 「V-ing：動名詞と現在分詞の分類をめぐって」	単著	2005.03.15	『英米文学論叢』 第 36 号 (pp.49-75)	現代英語における文法形式の1つである動詞のing形(V-ing)は、派生名詞、動名詞、現在分詞という3つの異なる文法機能を持つが、その三者の分類は一筋縄では行かず、特に動名詞と現在分詞の分類については永く議論的になってきた。本稿では、三者の特徴を詳細に分析し、それぞれの典型例は基本的にどんな特徴を有しているかを探り、三者のプロトタイプを提示した。さらに、動名詞と現在分詞は、どんな特徴を共有することによってそれぞれの構造が拡張したり、二者が融合するののかについて、動的文法理論の立場から説明を与えた。総頁数 181 頁中 27 頁。
2 「Mother Goose's Melody(1791)における動名詞と現在分詞」	単著	2006.03.15	『英米文学論叢』 第 37 号 (pp.27-41)	この研究に先立つ中澤(2005)「V-ing：動名詞と現在分詞の分類をめぐって」において、動名詞と現在分詞の考察を行ない、特に、動詞的動名詞と現在分詞の構造がどんな特徴を共有して「拡張」したり「融合」したりするのかを現代英語を対象とした共時的観点から考察した。その研究に基づいて、本研究では、Mother Goose's Melody(1791)に収録されたナーサリー・ライムを言語資料として用いることによって、近代英語期の主に口承の英語を対象にして動名詞と現在分詞の考察を行なった。そして、動名詞と現在分詞それぞれの「拡張」と両者の「融合」のメカニズムがいつ頃からどのようにして働き始めるのかという問題の手がかりを探った。
3 「There 接触節と関係代名詞の顕在化—ナーサリー・ライムの場合」	単著	2006.05.01	『近代英語研究』 第 22 号 (pp.71-91)近代英語協会	17 世紀前半から 19 世紀にかけて出版されたナーサリー・ライム集の原典（復刻版）に当たって調べた 200 篇余りのナーサリー・ライムを主な言語資料として、近代英語期における「there 接触節」を含む種々の「there 構文と後続節」の派生過程について考察した。まず、Nakazawa(2003)“There Contact Clauses in English Nursery Rhymes”で提案した‘parataxis’から関係節構文に至る「派生の2経路説(Two-Way Derivation Hypothesis)」によって、近代英語期の事実が過不足なく説明できることを見た。次に、「there 接触節」において関係代名詞が顕在化する動機付けについて、動的文法理論の観点から、次のような説明を与えた。すなわち、上記の2経路のうち一方で‘共有構文’の原則によって派生した「there 接触節」は、その文法形式と意味の対応関係におけるパラダイム上のギャップ(paradigmatic gap)を内包しているが故に、そのギャップを埋めようとする力が働く。その結果、もう一方の経路で[接続詞+代名詞]を置き換える形ですでに出現していた wh 関係代名詞に倣って、もともと存在していなかった関係代名詞が顕在化した。レフェリー制あり。

4	「英語学研究と伝承文化研究の接点—ひとつのパースペクティブ」	単著	2007.03.31	大東文化大学紀要第 45 号 (pp.301-308)	純理論的な英語学的構文研究と文化・文学的な伝承文化研究は、ともすれば全く別の研究分野と見なされ、両者を有機的に結びつけるようなパースペクティブを持った研究は余り行なわれてこなかった。そこで、本稿では、両者を結びつける試みのひとつとして、筆者自身の理論的・実証的研究を「英語学研究と伝承文化研究の双方向性」としてこのパースペクティブの中で位置づけ、その意義と展望について論じた。その中で特に、従来、文法研究の資料としてはほとんど利用されて来なかったナーサリー・ライムを文法研究の資料として用いることの妥当性について具体的根拠を挙げて論じた。
5	“Where Gerunds and Participles Meet: A Note on the Syntactic Environment of V-ing”	単著	2008.03.15	An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu pp.101-113 Hituzi Syobo	現代英語を対象とした共時的立場から、動名詞 (gerunds) と現在分詞 (present participles) がどのような統語的環境で融合するかを探った。英語という個別文法の中で複数の異なる文法機能を持つ、動詞の-ing 形 (V-ing) のうち、特に、動詞的動名詞、分詞形容詞、知覚動詞の補語の位置に生じる現在分詞の三者が、それぞれの基本的特徴を持った「基本形」から他方の特徴を取り込んで「拡張」して行く際の重要な接点になったと思われる3つの統語的環境を特定した。そして、それらの環境でどのように三者が融合するかを統語論的・意味論的観点から論じた。査読あり。
6	「英語圏の遊び歌に見られる融合と拡張—On a cold and frosty morning を手がかりにして」	単著	2009.03.15	『英米文学論叢』第 40 号 (pp.9-27)	英語圏の遊び歌の中で、「オールド・バラッド」の形式をもつ代表的な歌、Here we go round the mulberry bush で始まる輪遊び歌と Here we go gathering nuts in May で始まる‘はないちもんめ’型の間答歌を取りあげ、両者を中心として、遊び歌の詩句の融合と拡張について考察した。その結果、さまざまな融合や拡張の重要な鍵となっているのが、「オールド・バラッド」に特有のリフレインの部分の詩句、On a cold and frosty morning とその交替形の So early in the morning であることを論じた。
その他					
1	(学会発表)「there 接触節 と 関係代名詞の顕在化」	単	2005.05.20	近代英語協会 第 22 回大会 (於 千葉大学)	17 世紀前半から 19 世紀にかけての nursery rhymes を資料として、「there 接触節」を含む「there 構文と 後続節」の派生過程について、歴史的な見地から ‘Two-Way Derivation Hypothesis’ を提案した。そして、there 接触節において関係代名詞が顕在化する動機づけについて、動的な文法理論の観点から説明を与えると共に、「可能な文法の拡張」について論じた。(発表時間 30 分質疑応答 10 分) レフェリー制あり。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1979.04.00	～	現在	東京英語学談話会会員	
2	1981.05.00	～	現在	日本英文学会会員	
3	1983.11.00	～	現在	日本英語学会会員	
4	1989.05.00	～	現在	近代英語協会会員	
5	1998.03.00	～	現在	英語語法文法学会会員	

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	Barbara Yates	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) “All in the Family of Free Flight”		2006.11.00		USHP6A magazine, November 2006.		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 Standing Tall: A Note on the Iowa Caucuses Role in the 2004 Nominating Process	単著	2005.03.00	Daito Bunka Literary Review, No.36	The Iowa Caucuses are the first in America to put forth a presidential candidate, so their importance is understood by savvy politicians of both parties.		
2 “Moving in from the Margins: Towards a More Multicultural Education.”	単	2006.03.00	Daito Bunka Literary Review, No.37			
3 “Engaging our Research”		2007.03.00	関係性教育学会 Journal Vol.6, No.1, March, 2007. pp44-63	Links process, product and pedagogy concerning our research.		
4 “Landscape as Classroom.- Experiencing the Border”		2008.03.00	関係性の教育学ジャーナル, No. 7 pp.3~20	Mexican immigrant issues and the concept of citizenship with some pedagogical Suggestions		
5 『“Sparkling Rain” and other stories of women who love women from Japan』	共著	2008.04.00	NEW VICTORIA PUBLISHERS, USA. 206pp.	Lesbian fiction of Japan collection		
6 “The Post Colonial Professor.”		2009.03.00	Daito Bunka Literary Review, No.40			
その他						

1	日本憲法—このままいいのではないのでしょうか？	単著	2005.05.05	西東京市特別講演	
2	Gender Matters	共	2005.11.00	Peace as a Global Language V	Panel on teaching gender issues related to Japan.
3	Peace as a Global Language 学会		2006.00.00		会長
4	関係性教育学会		2006.00.00		会長, Journal EDITOR
5	Aikido, My Way	単	2006.03.00	小林道場 WEBSITE	「合気道 わが道」という本の翻訳 206pp.
6	“Lesbian Fiction from Japan”		2007.02.14	女性言語教育学会	

III 学会等および社会における主な活動

1	1996.01.00	～	現在	女性言語教育学会 (WELL) 会員 (1996年1月～1997年1月 Chair、2003年～2004年 会長)
2	1998.10.00	～	現在	Gender Awareness in Language Education (GALE)-Special Interest Group, JALT-Programs Chair 会長
3	2003.00.00	～	現在	PEACE AS A GLOBAL LANGUAGE 学会会長
4	2004.00.00	～	現在	関係性教育学会会員 (2002年～現在 会長、紀要 Editor)

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	教授	氏名	三上 紀史	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 講義ものの授業の方法改善		1997.05.06		(1997年5月6日～2009年5月1日) 講義ものの授業(「アメリカ文学史」「英米文学と精神分析」等)においては、授業の内容をレポートとして毎回授業の終わりに提出させている。その方法の改善に努めている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『清経の修羅道』(一)	単著	2004.12.19	『橘香』2004年12月号	能「清経」の主人公平清経が入水自殺にいたるまでの心の葛藤について論じた。B5版、2段組、総頁数21頁中2頁。			
2 『清経の修羅道』(二)	単著	2005.01.12	『橘香』2005年1月号	『橘香』前号の続きで、清経の自殺時の意識の流れを内容とするクセの部分と、キリの修羅の段の分析。B5版、2段組、総頁数21頁中2頁。			
3 『謡曲「天鼓」を読む(一)―父と子のきずなが意味するもの』	単著	2005.02.11	『橘香』2005年2月号	能「天鼓」の父と息子のきずなが才能の伝承を暗示していることと、母親がツレとして登場しない理由を論じた。B5版、2段組、総頁数21頁中2頁。			
4 『謡曲「天鼓」を読む(二)―埋もれた芸術家の復活』	単著	2005.03.17	『橘香』2005年3月号	『橘香』前号の続きで、親子関係をあつかった能の多くが、片方の親と子の関係をあつまっている理由と、権力者によって殺された天鼓少年が亡霊となって出現する意味について論じた。B5版、2段組、総頁数21頁中2頁。			
5 『外国で能を教える』	単著	2006.01.15	大東文化大学外国語学部日本語学科誌『GAYA』第5号	1986年にアメリカのコーカー・カレッジで能を教えた体験、および1991年に英国ジャパン・フェスティバルに参加したときの体験などをもとに、外国人の目を通すことによって新たに発見した能の特質について述べた。B5版、総ページ数154頁中11頁。			
その他							
1 『「天鼓」「望月」「樋の酒』』	単著	2004.05.29	第23回増上寺薪能パンフレット	第23回増上寺薪能で上演された能「天鼓」と「望月」および狂言「樋の酒」の解説。			

2	『やさしい能楽入門』	共	2004.10.12	中央区文化・国際交流振興協会文化講座（2004.10.12, 2004.10.19）	2回にわたる能の入門講座のレクチャーとデモンストレーション。三上紀史がレクチャーを担当し、デモンストレーションを梅若研能会の古室知也氏と中村政裕氏が担当した。
3	シェークスピア『ハムレット』について	単	2005.09.13	ふじみ野市立上福岡図書館	ふじみ野市「ふみの会」主催による特別講演。
4	サン・テグジュペリ『星の王子さま』について	単	2006.09.12	ふじみ野市立上福岡図書館	ふじみ野市「ふみの会」主催による特別講演。
5	『文学としての謡曲』	単著	2006.12.01	『観世』（12月号）（檜書店）	タイ、チュラロンコーン大学で「日本演劇文学」という演習科目を担当したときの体験をもとに、能の台本（謡曲）を文学として読むときに、能という形式に総合された次元での言葉の意味を読みとることが大切であることを述べた。巻頭随筆として掲載された。
6	『グリム童話集』の四つのお話	単	2007.09.11	ふじみ野市立上福岡図書館	ふじみ野市「ふみの会」主催による特別講演。
7	「英米文学科創設 40周年記念祝賀会（報告）」	単	2008.03.15	『大東文化大学英米文学論叢』（第 39 号）	2007 年 11 月 3 日に開催された「英米文学科創設 40 周年記念祝賀会」の様子を報告した。
8	「別科運営上の問題点」	単	2008.03.21	『別科日本語研修課程のあゆみ』（大東文化大学学務部学務課パンフレット）	別科が閉科されるにあたり、これまで別科がかかえてきた問題点を論じた。
9	シェークスピア『ジュリアス・シーザー』について	単	2008.09.09	ふじみ野市立上福岡図書館	ふじみ野市「ふみの会」主催による特別講演。
10	書評『イギリス女性運動史』	単	2009.03.15	みすず書房 『大東文化大学英米文学論叢』（第 40 号）	レイ・ストレイチー著・栗栖美和子他監訳の『イギリス女性運動史』（みすず書房）についての書評。

III 学会等および社会における主な活動

1	1971.04.00	～	現在	日本アメリカ文学会会員
2	1971.04.00	～	現在	日本英文学会会員
3	1996.05.00	～	現在	アメリカ サウス・カロライナ州コーカ・カレッジより名誉博士号 (Doctor of Letters) を授与される。
4	2004.04.00	～	2005.03.00	大学基準協会相互評価委員会・文学系第 2 専門委員会主査
5	2005.03.00	～	現在	能楽学会会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	准教授	氏名	George Neil Wallace	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 A Translation of and Reflections on Kenji Miyazawa's short story 『鳥の北斗星』	単	2005.03.00	大東文化大学英米文学論叢第 36 号 pp85-96			
2 The Frog's Rubber Boots : A Translation of and Reflections on Kenji Miyazawa's 『蛙のゴム靴』	単	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 pp55-68			
3 Gadolf's Lily : A Translation of and Reflections on Kenji Miyazawa's 『ガドルフの百合』	単	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 pp1-10			
4 Looking at The Tale of Mr.Tod	単	2007.03.00	大東文化大学英米文学論叢第 38 号 pp1-10			
5 A Night in the Oak Grove : A Translation of and Reflections on Kenji Miyazawa's 『かしわばやしの夜』	単	2007.03.00	大東文化大学紀要第 45 号 pp287-300			
6 A Reading of Beatrix Potter's The Tale of Jeremy Fisher	単	2008.03.00	大東文化大学英米文学論叢第 39 号 pp13-21			

7	Pollanno Square: A Translation of and Reflections on the First Three chapters of Kenji Myazawa's 『ポラーノの広場』	単	2008.03.00	大東文化大学紀要第 46 号 pp263-288
8	Looking at The Tale of Jemima Puddle - Duck	単	2009.03.00	大東文化大学紀要第 47 号 pp181-189
9	Looking at The Hound of the Baskervilles	単	2009.03.00	大東文化大学英米文学論叢第 40 号 pp51-64
その他				
1	ピーターラビットとイギリス最新事情 (講演)		2008.04.00	埼玉県こども動物自然公園 レクチャールーム
2	Beatrix Potter and Japan (講演)		2008.08.00	The Beatrix Potter Society : International Conference (England)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1991.04.01	～	現在	宮沢賢治学会会員
2	1998.04.01	～	現在	The Lewis Carroll Society 会員
3	2001.04.01	～	現在	日本ルイス・キャロル協会会員
4	2008.04.01	～	現在	The Beatrix Potter Society 会員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	准教授	氏名	宮瀧 交二	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 早稲田大学教員免許更新講習オンデマンド講座 教材「史料保存と歴史学」作成		2009.03.00	映像収録講義①「身近な歴史資料を活用した授業」(60分) ②「博物館を利用しよう」(60分)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2005／古代・中世の東国史を学ぶ／源義経と武蔵武士		2005.10.19	於：大東文化大学東松山校舎 60周年記念図書館AV教室 講義「鎌倉街道」と武蔵武士				
2) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2005／古代・中世の東国史を学ぶ／源義経と武蔵武士		2005.11.16	於：大東文化大学東松山校舎 60周年記念図書館AV教室 講義「フィールドスタディー事前講義／源氏の足跡を埼玉を訪ねて」				
3) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2005／古代・中世の東国史を学ぶ／源義経と武蔵武士		2005.11.26	フィールドスタディー「源氏の足跡を埼玉を訪ねて」				
4) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ②／よみがえる古代武蔵国の国府と郡家		2006.05.18	於：大東文化大学東松山校舎 7319 教室 講義「総論／古代武蔵の国府と郡家」				
5) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ②／よみがえる古代武蔵国の国府と郡家		2006.06.15	於：大東文化大学東松山校舎 7319 教室 講義「フィールドスタディー事前講義／古代武蔵の国府と郡家を訪ねて」				
6) 大東文化大学エクステンションセンター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ②／よみがえる古代武蔵国の国府と郡家		2006.06.17	フィールドスタディー「古代武蔵の国府と郡家を訪ねて」				
7) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ③／「やきもの」からみた古代・中世の社会		2006.10.31	於：大東文化大学東松山校舎 1号館 314 教室 講義「総論／古代・中世の「やきもの」				
8) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ③／「やきもの」からみた古代・中世の社会		2006.11.28	於：大東文化大学東松山校舎 1号館 314 教室 講義「フィールドスタディー事前講義／刻画文陶器の世界」				
9) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2006／古代・中世の東国史を学ぶ③／「やきもの」からみた古代・中世の社会		2006.12.05	フィールドスタディー「古代・中世の「やきもの」を鑑賞する」				
10) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2007／古代・中世の東国史を学ぶ④／北武蔵の中世城郭を学ぶ		2007.05.22	於：大東文化大学 7号館 223 教室 講義「総論／中世城郭研究入門」				
11) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2007／古代・中世の東国史を学ぶ④／北武蔵の中世城郭を学ぶ		2007.06.12	於：大東文化大学 7号館 223 教室 講義「フィールドスタディー②事前講義／騎西城・忍城・鉢形城」				
12) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ 2007／古代・中世の東国史を学ぶ④／北武蔵の中世城郭を学ぶ		2007.06.16	講義「フィールドスタディー②／戦国期の城跡を訪ねて」				

13) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2007／古代・中世の東国史を学ぶ⑤／体験！ 埼玉の考古学・最前線－(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共同企画－	2007.10.02	於：大東文化大学7号館223教室 講義「根岸武香の考古学研究」
14) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2007／古代・中世の東国史を学ぶ⑤／体験！ 埼玉の考古学・最前線－(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共同企画－	2007.11.13	フィールドスタディー「発掘調査体験と資料館見学」
15) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2008／古代・中世の東国史を学ぶ⑥／平将門と東国の古代史	2008.05.13	於：大東文化大学8号館044教室 講義「『将門記』を読む」
16) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2008／古代・中世の東国史を学ぶ⑥／平将門と東国の古代史	2008.06.03	於：大東文化大学9号館402教室 講義「検証！『将門記』の世界－文献史学・考古学の成果から－」
17) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2008／古代・中世の東国史を学ぶ⑥／平将門と東国の古代史	2008.06.17	フィールドスタディー「将門の足跡を訪ねて」
18) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2008／古代・中世の東国史を学ぶ⑦／体験／埼玉の考古学・最前線 part.2－(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共同企画－	2008.10.07	於：大東文化大学9号館402教室 講義「文献史料からみた古代の食生活」
19) 大東文化大学地域連携センター／オープンカレッジ2008／古代・中世の東国史を学ぶ⑦／体験／埼玉の考古学・最前線 part.2－(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共同企画－	2008.11.18	フィールドスタディー「(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団とさいたま市立博物館見学」

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『綾瀬市史10／別編／ダイジェスト』	共著	2004.00.00		
2 鶴飼政志・蔵持重裕・杉本史子・宮瀧交二・若尾政希編『歴史を読む』	共著	2004.11.00	東京大学出版会	
3 『岡部町史／原始・古代資料編』	共著	2006.03.00	埼玉県岡部町	
4 『ビジュアル版／伊奈の歴史』	共著	2006.06.00	埼玉県伊奈町	
5 『名栗の歴史／上』	共著	2008.03.31	埼玉県飯能市	
論文				
1 「古代東国の平安期集落遺跡研究と落川・一の宮遺跡」	共著	2004.00.00	『古代文化』56-7	共同執筆
2 「大里郡冨山・根岸家の「菟古舎」について－埼玉県博物館発達史の研究・1－」	単著	2004.00.00	『(埼玉県立博物館)紀要』29	
3 「古代東国集落遺跡研究の新展開」	単著	2004.00.00	山岸良二編『原始・古代日本の集落』同成社	
4 「越谷吾山『諸国方言物類称呼』の考古学的検討	単著	2004.00.00	『幸魂－増田逸朗氏追悼論文集－』	

5	「行基（他3項目）」	単著	2004.00.00	『人物伝承事典』東京堂出版
6	『日本書紀』の「村」と「邑」に関する一試論	単著	2005.05.00	吉村武彦編『律令制国家と古代社会の研究』塙書房
7	「今なぜ環境史・災害史の視点かー日本古代史の立場からー」	単著	2005.09.00	『新しい歴史学のために』259
8	「村落と民衆」	単著	2005.11.00	上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦編『列島の古代史／第3巻／社会集団と政治組織』岩波書店
9	「堂山下遺跡ー「鎌倉街道」・「苦林宿」の発掘調査ー」	単著	2006.05.00	小野正敏・萩原三雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院
10	「武蔵国大里郡大字青山小字雷発見の「田村」と記した祝部土器ー明治十一年発見の墨書土器についてー」	単著	2006.05.00	埼玉考古学会編『埼玉の考古学 II』六一書房
11	「刻書紡錘車からみた日本古代の民衆意識」	単著	2006.09.00	国士舘大学考古学会編『古代の信仰と社会』六一書房
12	「日本古代民衆史研究と菅原道真「寒早十首」」	単著	2006.12.00	『史苑』67-1
13	「稻荷山古墳出土鉄剣」（他14項目）」	単著	2007.00.00	『歴史考古学事典』吉川弘文館
14	「[印刷文化史探訪・1] アントワープのプランタン・モレトゥス博物館（The Plantin-Moretus Museum）を訪ねて」	単著	2007.01.00	『大東文化大学英米文学論叢 DAITO BUNKA REVIEW』37
15	「韓国・大邱近郊の公立博物館と大学博物館」	単著	2007.03.00	『MOUSEION／立教大学博物館研究』52
16	「資料（文化財）保存機関としての博物館」	単著	2007.03.00	『歴史評論』683
17	「現代と向きあう博物館」	単著	2007.12.00	『歴史評論』692
18	「養蚕（他5項目）」	単著	2008.01.00	『日本女性史辞典』吉川弘文館
19	「環境史・災害史研究と歴史学」	単著	2008.03.00	『（財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター）研究紀要』16
20	「学芸員養成現場の現状と課題」	単著	2008.04.00	『地方史研究』332
21	「古代武蔵国高麗郡をめぐる研究の現状について」	単著	2008.06.00	野田嶺志編『地域の中の古代史』岩田書院
その他				
1	報告「環境史・災害史からみた古代東国の村落と民衆」		2004.06.00	学習院大学史学会創立40周年記念シンポジウム「歴史と環境ー人と自然の関係史ー」於：学習院大学創立百周年記念会館

2	報告「刻書紡錘車からみた日本古代の民衆意識」		2005.05.22	日本考古学協会 2005 年度第 71 回総会研究発表会 於：国士館大学 6 号館 401 教室
3	「服藤早苗『平安王朝の子どもたち－王権と家・童－』」	単著	2005.12.00	『人民の歴史学』166
4	「金関恕・春成秀爾編『佐原真の仕事』全六巻」	単著	2007.01.00	『日本歴史』704
5	報告「現代と向きあう博物館」		2007.06.30	歴史科学協議会創立 40 周年記念講演会 於：立教大学 8 号館 201 教室
6	報告「学芸員養成現場の現状と課題」		2007.10.07	地方史研究協議会／シンポジウム「博物館法改正と学芸員制度」於：青山学院大学総研ビル 11 階第 19 会議室

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1983.05.00	～	現在	歴史学研究会会員（1987.05～1989.05 運営委員）
2	1986.02.00	～	現在	神奈川地域史研究会常任委員
3	1987.04.00	～	現在	日本考古学協会会員（1995.05～1996.05 選挙管理委員）（2007.04～埋蔵文化財保護対策特別委員）
4	1990.12.00	～	現在	木簡学会会員
5	1994.11.00	～	現在	歴史科学協議会会員（1994.11～『歴史評論』編集委員）
6	1999.04.01	～	現在	古代交通研究会会員（2000.06～2003.03 運営委員）
7	2005.03.00	～	現在	川越市立博物館常設展示検討委員
8	2006.04.01	～	現在	埼玉県東松山市文化財専門調査委員
9	2006.04.01	～	現在	埼玉県平和資料館資料評価委員
10	2007.04.01	～	現在	埼玉県狭山市文化財保護審議会委員
11	2007.08.01	～	現在	埼玉県熊谷市熊谷市史編さん委員
12	2008.03.01	～	現在	埼玉県熊谷市熊谷市史編集専門委員

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	講師	氏名	小池 剛史	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 英語学演習 2 課題レポート書き直しの実践		2009.04.14		60名前後の授業。前期で扱った内容に関するレポートであるが、必ず2度提出することを条件とする(一回目に提出した後、私の添削コメントを見て、再度提出する)。レポートの「出しっ放し」を防ぎ、自分の書いたものを何度か推敲してから提出する習慣を付けさせるのが主なねらい。(2009年4月14～31日)		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「ウェールズ語における属格構造に見られる変化(試論)」	単著	2004.00.00	『ケルティック・フォーラム』4/5(合併号)	:42-52 査読あり		
2 “The history of the genitive case in English as a grammaticalisation of the determinative function”	単著	2004.00.00		Proceedings of the Annual Linguistic Meeting 2004 of the Postgraduate Conference (学会責任者及び編集者は Efrosyni Argyri, Phaisit Boriboon, Susie Flett, Time Mills, Hannele Nicholson) 掲載予定 査読あり 校正終了 第13回国際英語史学会ウィーン大会(Thirteenth International Conference on English Historical Linguistics: Vienna, 2004)にて口頭発表した内容の論文		
3 The analysis of the genitive case in Old English within a Cognitive Grammar framework, based on the data from AElfric's Catholic Homilies First Series	単著	2004.00.00		(博士論文) エデインバラ大学哲学・心理学・言語科学学部		
4 「カムライグ語の属格構造」	単著	2005.05.00	Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1/1:3-8. 日本カムライグ学会	査読あり。		

5	“The history of the genitive case from the old English period onwards”	単著	2006.05.00	English Language and Linguistics 10.1:49-75. Cambridge University Press	査読あり。
6	「カムライグ語の属格：構造・機能・関係」	単著	2007.05.00	Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 3/1:14-34. 日本カムライグ学会	査読あり。
7	「カムライグ語の母音の記述」	単著	2008.11.01	日本カムライグ学会 機関紙 Bwletin 4/2:9-13	(2008年5月17日の日本カムライグ学会第7回例会での発表要旨)
その他					
1	“The history of the genitive case in English as a grammaticalisation of the determinative function”		2004.00.00	エディンバラ大学哲学・心理学・言語科学部言語学科の学会 (Postgraduate Conference 2004)	口頭発表。
2	“The grammaticalisation of the determinative function of a genitive nominal after the end of the OE period”		2004.00.00	第13回国際英語史学会:ウィーン大会 (Thirteenth International Conference on English Historical Linguistics: Vienna)	口頭発表。
3	「古英語から中英語にかけての属格用法の変化□古英語では“Who touched my?”と言えたのに、なぜ現代英語では言えないのか。決定詞としての属格機能の文法化」		2004.00.00	日本ケルト学会会議東京研究会 (國學院大學)	口頭発表。
4	「古英語以降の属格機能の変化」		2005.06.25	第21回研究発表会(信州大学)	口頭発表
5	「カムライグ語の属格：構造・機能・関係」	単	2007.03.26	大阪言語研究会、於 大阪アウイーナ	口頭発表
6	研究紹介(4) Henry Lewis(1942) “The Sentence in Welsh.” The Proceedings of the British Academy 28:3-24	単著	2007.03.30	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 9:14-16	研究の紹介
7	合宿勉強会	企画	2007.08.15	日本カムライグ学会 カムライグ語学研究部会	主催・企画を担当。名古屋大学において。(2007.08.15~17)
8	研究紹介(8) Bob Morris Jones (1993) “The definite article and specific reference.” Studia Celtica 26/27:175-201	単著	2007.09.30	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 11:8-10 (学会ニューズレター)	研究の紹介
9	研究紹介(11) G.M.Awbery(1984) ‘Phonotactic constraints in Welsh’. Welsh Phonology(M.Ball & G.E.Jones (eds). 65-104).	単著	2008.01.30	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 12:5-8	研究の紹介
10	合宿勉強会	企画	2008.03.13	日本カムライグ学会 カムライグ語学研究部会	主催・企画を担当。名古屋大学において。(2008.03.13~15)

11	発表題目「カムライグ語の母音の記述」		2008.05.17	日本カムライグ学会 第7回例会 (大東文化大学)	口頭発表
12	研究紹介 (12) M. Ball & B. Williams (2001) 'word-level stress' in Welsh Phonetics 165-185	単著	2008.09.30	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 15:2-6	研究の紹介
13	「寄稿・紀行・聴こう」	単著	2008.09.30	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 15:18-20	2008年夏のウェールズ語方言調査の報告
14	「現代カムライグ語の「文章語」発音と「会話」発音」		2008.10.12	日本ケルト学会 第27回大会 (北海学園大会)	口頭発表
15	発表題目「カムライグ語実地調査報告:カムライグ語の様々な言語使用域」		2008.11.29	日本カムライグ学会 第8回例会 (愛知工業大学 本山キャンパス)	口頭発表
16	研究紹介 (13) Glyn E. Jones(1984) 'The distinctive vowels and consonants of welsh' (M. Ball G.E. Jones) Welsh Phonology 40-64.	単著	2008.12.31	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 16:2-4	研究の紹介
17	「寄稿・紀行・聴こう」	単著	2008.12.31	日本カムライグ学会 Cylchlythyr 16:4-5	2008年夏のウェールズ語方言調査の報告
18	合宿勉強会	企画	2009.03.19	日本カムライグ学会 カムライグ語学研究会	ウェールズ語文献の講読会。主催・企画を担当。金城学院大学において。(2009.03.19~21)
III 学会等および社会における主な活動					
1	1994.00.00	～	現在	日本ケルト学会 (旧日本ケルト学者会議) 会員、庶務係 (2004年10月～)	
2	1996.00.00	～	現在	中世英語英文学会会員	
3	2005.01.29	～	現在	日本カムライグ学会関東幹事・会計庶務担当	

(表 24)

所属	文学部英米文学科	職名	講師	氏名	照沼 阿貴子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 入学前指導		2006.12.00	(2006年12月～2007年3月)指定校推薦で入学予定の高校3年生に対して課題を与え、期間中4～5回郵送による添削指導を行った。(この指導は、学科の方針として、学科の全教員が行っているものである。)			
2) 入学前指導		2007.12.00	(2007年12月～2008年3月)指定校推薦で入学予定の高校3年生に対して課題を与え、期間中4～5回郵送による添削指導を行った。(この指導は、学科の方針として、学科の全教員が行っているものである。)			
3) 「生成文法と言語獲得」		2008.03.03	大東文化大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程の学生に対する特別講義			
4) 学生への課外指導		2008.10.00	学業上の問題を抱えている学生に対して、月に2回程度の割合で授業とは別に特別な課題を課し、授業時間外に指導を行っている(2008年10月～2009年6月)			
5) 入学前指導		2008.12.00	(2008年12月～2009年3月)指定校推薦で入学予定の高校3年生に対して課題を与え、期間中4～5回郵送による添削指導を行った。(この指導は、学科の方針として、学科の全教員が行っているものである。)			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「全称数量詞を含む否定文で生じる含意の獲得について(1)」	単	2005.01.01	「英語青年」150-10	本稿では、対照の「は」を伴う全称数量詞を含む日本語否定文に対する大人と子供の解釈の違いを説明し得る3つの仮説を検討した。執筆頁数6頁。		
2 「全称数量詞を含む否定文で生じる含意の獲得について(2)」	単	2005.02.01	「英語青年」150-11			

3	“The Acquisition of the Negative Sentence Containing Zenbu-wa‘All-Ctop’ in Japanese”	単	2005.09.00	開拓社「言語研究の宇宙－長谷川欣佑先生古稀記念論文集：The World of Linguistic Research: A Festschrift for Kinsuke Hasegawa on the Occasion of His Seventieth Birthday」	本稿では、対照の「は」を伴う全称数量詞を含む日本語否定文の解釈に関して、大人と子供がどのように異なるのかを明らかにした。執筆頁数 22 頁。
4	“Children's Scope Construal in Negative Sentences Containing a Quantifier”	単	2008.00.00	POETICA 70	本稿では、数量詞を含む否定文の解釈に関する子供と大人の違いに対して、言語処理の観点からの説明を試みた。執筆頁数 36 頁。
その他					
1	「対照の『は』が誘発する含意の習得について」	単	2004.06.20	第 128 回日本言語学会	本発表では、日本語の対照の「は」が誘発する含意の獲得を自然発話分析によって調査し、「語用論的知識の獲得は遅い」とする従来の見方に対する反証を挙げた。
2	「数量詞を含む否定文の解釈の習得について」	単	2004.07.30	第 21 回日本認知科学学会	本発表では、数詞と否定辞の相対的作用域の獲得について考察した。
3	「対照の『は』を伴う全称数量詞を含む否定文の解釈の習得について」	単	2004.11.21	第 129 回日本言語学会	本発表では、「太郎は本を全部は読まなかった」のような文が大人の文法ではどのように解釈されるかを明らかにし、当該文の解釈に関する子供と大人の違いについて考察した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1999.11.00	～	現在	日本英語学会会員	
2	2001.08.00	～	現在	日本言語学会会員	
3	2004.05.00	～	現在	日本認知科学学会会員	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	荒井 明夫	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学 学生による授業評価		2004.00.00	"2004 年度～2006 年度の学生による授業評価において、『日本教育史』に関しては、各評価項目において参加学生から平均 4.5 以上 (5 段階) の高い評価を得ている。			
2) 学生の主体形成を目的としたゼミと講義		2004.06.00	" 日本教育史研究会『日本教育史往来』第 150 号 学生の歴史離れ・歴史嫌いがすすんでいる中、日本教育史の講義の工夫により、学生が興味関心を強くもつようになった経験を報告した。			
3) 『『きけわだつみのこえ』を現代学生はいかに聴いたか』		2006.08.27	旧制高等学校研究会 「第 11 回夏期教育セミナー」で指導した荒井ゼミナール学生が口頭発表 指導しているゼミナールの学生がゼミの成果である『きけわだつみのこえ』の分析を通じた近代日本における教養の問題を発表し、高い評価を得た。			
4) 大東文化大学 学生による授業評価		2007.00.00	2007～2008 年度の学生による授業評価において、『日本教育史』その他に関して、各評価項目において参加学生から平均 4.5 以上 (5 段階) の高い評価を得ている。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『近現代日本人物史料情報辞典』		2004.07.20	吉川弘文館 日本近現代史研究上欠くことのできない重要人物について、史料所蔵機関、史料保存状況をまとめた辞典である。初代帝大総長 渡辺洪基と明治期文部官僚 辻新次を担当執筆した。(268 頁～269 頁、446 頁～447 頁) 120 人で執筆。			
2) 『教育史研究の最前線』		2007.03.25	日本図書センター 1990 年代以降の日本近代史中等教育史に関する研究動向を整理し、その特徴をまとめ、今後の課題を提示した。(63 頁～66 頁) 49 人執筆。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						

1	近代日本黎明期における「就学告論」の研究	編著			幕末維新期において府・藩・県の地域指導者たちが新しい時代の新しい人間の育成の必要を感じ、学問奨励・学校設立奨励のために発した言説が就学告論である。全国調査を実施し、可能な限り収集し、そこで用いられた論理を様々な角度から分析した。筆者は、編著者として「はしがき」(i-ii)「序章」(P6-P18)「終章」(P436-P444)を執筆した。共著者大矢一人・藤女子大学教授。小熊伸一芦屋大学教授。柏木敦兵庫県立大学准教授。軽部勝一郎熊本学園大学講師。河田敦子お茶の水女子大学大学院。川村肇独協大学教授。神辺靖光国士館大学名誉教授。熊澤恵里子東京農業大学准教授。小林啓子お茶の水女子大学大学院。坂本紀子北海道教育大学准教授。杉村美佳上智短期大学講師。大間敏行筑波大学大学院。高瀬幸恵鶴川女子短期大学講師。寺崎昌男東京大学名誉教授。谷雅泰福島大学准教授。野坂尊子桜美林大学講師。三木一司近畿大学九州短期大学准教授。
2	『近現代日本人物史料情報辞典』	共	2004.07.20	吉川弘文館	日本近現代史研究上欠くことのできない重要人物について、史料所蔵機関、史料保存状況をまとめた辞典である。初代帝大総長 渡辺洪基と明治期文部官僚 辻新次を担当執筆した。(268頁-269頁、446頁-447頁) 120人で執筆。
3	第3章中等教育史 第2節日本中等教育史 1 維新変革期～1910年代	共	2007.03.00	『教育史研究の最前線』(教育史学会編、日本図書センター、平成19年) 63頁-66頁	1990年代以降の日本近代中等教育史に関する研究動向を整理し、その特徴をまとめ今後の課題を提示した。49人で執筆。
論文					
1	学校の主体形成を目的としたゼミと講義	単	2004.06.00	往来150号(日本教育史研究会発行)	学生の歴史離れ、歴史嫌いがすすんでいる中、現実的課題を集めた歴史の中に位置付ける講義の展開により学生が興味関心を強くもつようになった経験を報告した。
2	「近代日本公教育成立過程における国家と地域の公共性に関する一考察」	単	2005.12.00	『教育学研究』第72巻第4号(日本教育学会)	1870年代から90年代の近代公教育制度の成立過程における地域的公共性と国家的公共性の関係を学校設立に即して検討した。学制以降の「地域における学校共同所有観念」や学校の「地域の共有財産化」等の地域的共同性が国家的公共性に吸収馴化するプロセスを描いた。
3	神辺靖光『明治前期中学校形成史 府県別編I』を読んで	単	2007.04.00	中等教育史研究第14号(中等教育史研究会)	
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1987.06.00	～	現在	教育史学会会員(2004年～現在 理事)	
2	1987.10.00	～	現在	日本教育史学会会員	
3	1987.10.00	～	現在	日本教育史研究会会員	
4	1990.10.00	～	現在	全国地方教育史学会会員(1990年～現在 幹事、1999年～2004年 事務局長)	
5	1990.10.00	～	現在	日本教育学会会員	
6	1991.04.00	～	現在	歴史学研究会会員	
7	1994.04.00	～	現在	民主教育研究所研究委員	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	磯貝 富士男	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 日本中世奴隷制論	単著	2007.01.30	校倉書房	本書は、1970 年代初頭以来続けてきた、日本における奴隷制の展開についての研究を集大成したものである。日本中世社会においては、律令体制下では抑制されていた自由民の奴隷への転落が増大し、社会のあり方が奴隷制によって秩序付けられていったこと、これは気候の冷涼化が 13 世紀以来進行したこと (15 世紀半ばに底) を背景にしたものであること、などを中心論点として、奴隷制に関する諸側面を明らかにした。			
論文							
1 円覚寺所蔵尾張国富田荘絵図の成立事情	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 42 号	中世荘園絵図の代表的存在である本図の成立事情について、対立する諸説を検討し、新説を提示した。この原図は 1334 年、後醍醐政権に地頭請権復活申請を行った時、作成されたものだが、その後 1336 年、足利政権成立直後に提起した隣域との境相論のために修正されたものが、これであることを明らかにした。			
2 円覚寺領尾張国富田荘絵図に見る海水面変動	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 42 号	富田荘絵図から知られる地形や界線・地名等々を手がかりとして、1100 年頃には、周囲から海が大きく入りこんで、孤立した島となっていた姿を明らかにした。それとともに、7 世紀から 14 世紀にかけての海退・海進にともなう島の姿・土地利用についての見通しを示した。			
3 長承・保延の飢饉と藤原敦光勘申について	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要第 46 号	12 世紀後半の武家政権成立という現象を 12 世紀前半以来の社会的矛盾の展開の中で理解するための基礎的作業の一つとして、保延元年 (1135) 7 月 27 日「藤原敦光勘申」を分析したもので、長承・保延の飢饉で生じていた社会的実状を明らかにした。			

4	気候変動論から考える武家政権成立過程	単著	2008.05.00	年報 中世史研究 第33号	12世紀後半日本と朝鮮の歴史が、1170年代に武人政権が登場し1190年代に確立をみたという点で、酷似しているのは、1100年頃の温暖化頂点を過ぎて以後冷涼化が進行しているという気候変動による社会矛盾の激化を背景にしているからであって、中国北方でチンギスカンを生み出す闘争社会が生じた理由もそこにあるとして、12世紀武人政権成立史についての仮説を提起した。
5	武蔵園比企岩殿山縁起の基礎的考察－龍蛇退治伝説と東松山市岩殿山地域史－	単著	2009.03.00	人文科学第14号 1～34頁	東松山市岩殿観音に伝えられてきた「坂上田村麿利仁將軍」による龍蛇退治伝説の成り立ちを考察し、この伝説が形成された背景として、1230年に始まる寛喜の飢饉と1363年に岩殿山を舞台として行われた岩殿合戦の経験が不可欠であったこと等を明らかにした。
その他					
1	気候変動論から考える武家政権成立時代		2007.09.15	中世史研究会講演	
2	「新田義貞の鎌倉攻めと気候変動」		2007.11.18	横浜市歴史博物館 講演会 南北朝内乱期を探る	
3	伝承などによる地域史の構築－「鳴かずの池」伝説から東松山市岩殿山地域史を考える－		2007.11.24	大東文化大学人文科学研究所／研究班報告会での報告	
4	「伝承・絵画・古図などによる地域史の構築」研究班報告	単著	2008.03.00	大東文化大学人文科学研究所所報 14号	
III 学会等および社会における主な活動					
1	1972.00.00	～	現在	歴史学研究会会員(1980～1981年中世史担当委員、1986～1988年総合部会担当委員)	
2	1975.00.00	～	現在	日本史研究会会員	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	太田 政男	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)				大学が実施している学生による授業評価では、これまで高い評価を得ている。現在学部長職にあるため、担当科目数を減じており、「教育文化演習1, 2」と「基礎演習2」のみを担当しているが、昨年の評価は5段階評価でそれぞれ4.5と3.9であった。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『現代教育のキーワード』	共著	2006.05.00	大月書店	全体の共同編集。戦後教育学の批判的検討とカテゴリーの吟味について討論をし編集した。執筆は「地域づくり・仕事おこしと教育」。(pp.74-75)		
2 「思春期・青年期サポートガイド」	共著	2007.12.00		教育学、心理学、司法などの分野の多数の専門家の協力を得て、現代社会における思春期・青年期の特徴と課題について総合的・体系的に明らかにした。実践的な資料も付した。		
3 「学ぶ はたらく つながる」	共著	2008.02.00		若者の就職難、不安的雇用がひろがっている状況を実態に即して明らかにし、高校職業教育の新しいありかた、若者の社会的自立を励ます地域社会の課題と実践について叙述している。		
論文						
1 学校論の再構築	単	2004.00.00	『現代社会教育の理論』第1巻 東洋館出版	日本社会教育学会の事業として戦後社会教育理論を総括する目的でつくられた。「開かれた学校」「学社融合」など社会教育と学校教育の理論と実践の現時点での総括を試みた。		
2 もう一つの学校 (オルタナティブ・スクール)	単	2005.05.00	『社会教育・生涯学習ハンドブック』第7版 エイデル研究所	正規の学校以外に生起しているフリースペース、フリースクール、居場所などを調査して事例を紹介し、その意義について論じた。		
3 地域高校・新設高校の「困難校」化と基礎自治体のとりくみ	単	2005.08.00	『民主教育研究所年報2005』	埼玉県T市(都市部)、長野県M町(中山間地)というの2つ対称的な地域とそこの学校について「地域と高校」という視点から3年間共同で実証的な調査をした報告。学校の存立には地域の自立(自律)が不可欠であること、基礎自治体が重要な役割を果たしていること、学校が「地域創造」の視点を持つこと、などが明らかになった。		
その他						

1	転換期の教育行政	共	2006.10.00	日本教育行政学会	シンポジウム。埼玉県鶴ヶ島市の事例を発表した。教育審議会をよって教育行政への住民代表性を高め活性化したこと、学校協議会によつて父母住民の参加と共同を実現したことなどを報告した。
2	グローバルな時代における<ローカルな知>の可能性	単	2008.06.00		プロジェクト研究。「地域づくりと生涯学習」のタイトルで、地域学の歴史的位相、地域学における知と認識について報告した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1988.00.00	～	現在	日本社会教育学会会員（昭和 63 年度、平成 1 年、6 年度、13 年度、16 年度紀要編集委員）	
2	2000.00.00	～	現在	埼玉県鶴ヶ島市教育審議会委員	
3	2001.00.00	～	現在	日本教育学会会員（平成 13 年度～平成 15 年度 8 月常任理事）	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	大山 俊男	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学 授業評価		2009.04.01	平成 12 年～現在 学生による授業評価(平成 20 年 12 月実施)「教育心理学概論」は必須科目で習熟すべき内容も多いが、教育現場での対応をふまえた講義は具体的でわかりやすい講義として、また採用試験を視野に入れた講義として常に 4 点以上の評価を得ている。「心理学」「こころの健康」は全学共通科目として平成 20 年度 500 名に近い履修者があつたが、大教室での資料提示には板書、AV 機器共に工夫を行なった。かつ自己採点方式による諸検査を実施して、受講生の自己理解のためのフィードバックに努めており、静かに集中して聴ける講義として、4.3 点の高い評価を得ている。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『教育心理学入門』(再掲)		1987.04.00	八千代出版 (昭和 62 年 4 月～現在) 教育心理学の基本事項を簡潔にまとめ、教員としての基礎学力の充実を目指している。講義では現実の教育場面との関連について触れながら使用しており、採用試験の学習用としても好評で 5 版の増刷を行っている。				
2) 『青年期までの生活指導』(再掲)		1995.11.00	ブレーン出版 (平成 7 年 11 月～現在) 生涯発達の立場から各段階の発達特徴を提示すると共に教育現場における指導のあり方を不登校、いじめ等具体例と関わらせて詳細に説明している。中高教職を目指す学生にも多く利用されている。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 自我境界と対人行動(2)	単	2005.03.31	大東文化大学紀要 第 43 号(社会科学)	「協調性」得点の経年推移に認められる変化と、対人スキルが外的自我境界の性質に与える影響との関連を検討した。P.15-20			
2 現代における自我境界の特徴	単	2008.04.01	平成 19 年度大東文化大学特別研究期間報告書	中世から現代に至る生活様式の、変遷に伴い、対人関係のとり方と、自我境界の様相が推移し、至適点をより近くに設定しながら、境界面を堅牢化する傾向にあることを、絵図、浮世絵などの分析を通して考察した。(概略) P2。			
3 現代における自我境界の特徴	単	2009.03.31	大東文化大学紀要第 47 号(社会科学)	自他の境界を設定するための情報は、次第に自己身体依存性が低減し、その結果現代は自己定位が難しくなりつつあることを、中・近世の資料を援用比較することで論じた。p277-283.			

その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1974.04.00	～	現在	日本応用心理学会会員
2	1974.10.00	～	現在	日本心理学会会員
3	1987.04.00	～	現在	日本応用心理学会運営委員
4	1996.04.00	～	現在	人間一環境学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	尾花 清	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)		現在		1) グループ別の集团的討議にもとづく授業をすすめ、教材としてはビデオ、歴史的な史料を実際に学生に提供し、学生たちが自分で考える授業を進めている。			
2 作成した教科書、教材、参考書		2005.00.00		1) 大東文化学院創立過程基本史料 「教育史概説」の講義に使用。(再掲)			
1) 韓国における地域づくりと連携したカリキュラム改革の試み		2006.03.00		教育思想の授業に使用。			
3) これ以上学院創設史の偽造を許してはならない		2008.03.30		「教育史概説」の講義に使用(再掲)。			
4) 大東文化学院の「創設神話」について		2008.03.30		「教育史概説」の講義に使用(再掲)。			
5) 韓国ブルム学校関連文献の翻訳		現在		教育思想の授業において、本邦未刊行の同校および地域の関連文献『学校と地域』(季刊)、『明るい洪東』(月刊行)、などを適時翻訳して学生に配布し、教材として使用している。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 日韓の農民・行政職員交流の現場に立ち合っ	単著	2004.12.00	日本生活教育連盟『生活教育』673号	有機農業による村づくりをすすめる大分県下郷農協と韓国ブルム学校を中心とした地域の農民たちの交流を通して、地域共同体づくりの到達点と今後の課題について論じた。(P.58-P.61)			
2 漢学はどこへ行ったか	単著	2005.03.00	大東文化大学人文科学研究所『所報』11号	44、45帝国議会の議論の分析を通して、大東文化学院の創設目的が「漢学」の振興から「国体に醇化した儒教」の振興へと転換したことを明らかにし、それらがどのように創設時のカリキュラム、教授陣の構成となって現われているのかを、発掘した第一次史料にもとづいて解明した。(P.5-P.6)			

3	韓国における地域づくりと連携したカリキュラム改革の試み	単著	2005.03.00	『2003-2005年度科学研究費補助金・基盤研究(A)(1)成果報告書 教育改革時代における教師の位置と文化—その再編の社会的・歴史的・比較論的研究(課題番号:15203032)』	共同研究の課題であった世界の教育改革の今日的動向の一例として、今日の韓国における下からの教育改革の可能性を、忠清南道洪東郡洪東邑地域の教職員・地域住民による、個別の学校の教育課程にとどまらず、幼・小・中・高・大学に一貫した環境教育についての協同のカリキュラムづくり、教育課程づくりの実践事例の分析をとおして明らかにした。(P.33-P.53)
4	大東文化学院創立過程基本史料	単編	2005.04.00	大東文化大学人文科学研究所研究報告	1923年に創設された大東文化学院の設立過程に関する百点以上の第一次史料を発掘し、校訂して収録した。史料部分の構成は以下のとおり(P1~P432)。一中学校漢文科廃止反対と漢學振興への模索、二漢學振興から漢学者養成機関の具体化、三東洋文化学会と大東文化協会の確執への胎動、四大東文化協会の創設と第四十六帝國議會、五財団法人大東文化協会の成立、六大東文化学院の設立、七大東文化学院創立後の諸条件整備、八草創期の大東文化学院、解説論文「大東文化学院創立過程の真実の解明のために」(P433~P519)では、それらの史料にもとづいて大東文化学院創設過程研究の課題と方法について論じた。その構成は以下のとおり。はじめに、一創立過程研究の基本的課題、二『大東文化大学五十年史』の問題点再論、三創設の過程から目をそむけた「建学の理念」論、四本「基本史料」の内容と構成、おわりに。
5	語られなかった「大東」の由来	単著	2006.03.30	大東文化大学人文科学研究所『所報』12号	大東文化大学の前身である大東文化学院がその創立に際して何ゆえ「大東」という名称をつけたのかは未だに明らかにされていない。なぜそれが公に語られることがなかったのかを創立の過程における大東文化協会と東洋文化学会の確執の過程から明らかにし、あわせて「大東」の意味についても示唆した。(P.16-P.18)
6	大東文化学院の「創設神話」について	単著	2008.03.30	大東文化大学人文科学研究所研究報告	『大東文化大学五十年史』に記述されている大東文化学院創設前史における「大正七年木下成太郎烽火点火説」と「六年制専門学校説」がまったく成り立たないことを新たに発掘した史料に基づき明かにし、その虚妄性を論じた。(B5版、p.1-p.23)
7	これ以上学院創設史の偽造を許してはならない	単著	2008.03.30	大東文化大学人文科学研究所『所報』14号	「大東創立の第一人者で発展史上忘れることの出来ない大功労者」とされる木下成太郎の問題性はたんなる自らの出自と生い立ちに関わる「経歴詐称の常習者」であったことにとどまらず、自らが関わってきた歴史を偽造することにおいても常習者であった。『木下成太郎伝』に対する厳密な史料批判の必要性を提起した。(B5版、p18-p21)
8	歴史家八木三男は「安田校長の大礼服」で何を言わんとしたのか	単著	2009.01.20	『榊(tabunoki) —八木三男とともに生きる』(私家版)	故八木三男遺稿集『「閑適」のあとで』収録の「村上中学校教育小史(大正編)」についての解題的論文。八木三男の史料分析の方法、歴史叙述の特質を抽出し、「村上中学校教育小史(大正編)」が新潟県の中学校史のみならず、日本の大正期の中学校史において傑出した学校史であることを論じた。(A5版、p.62-p.79)
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1977.04.00	～	現在	日本教育学会会員	
2	1980.04.00	～	現在	地域民主教育交流全国研究会(1990～全国常任世話人、現在)(1992～1995 機関誌編集長)	
3	1995.04.00	～	現在	日本教育政策学会会員	
4	1996.08.00	～	現在	日韓歴史教育交流大会(東京)実行委員長	
5	1997.10.00	～	現在	大韓民国誠信女子大学教育問題研究所主催国際シンポジウム「ポストモダン社会における教育の方向」で「未来社会の青少年のための社会教育の方向」を論文発表	
6	1998.04.00	～	現在	日韓平和教育研究会(事務局長 1998～現在)(編集長 1999～現在)	

7	1999.02.00	～	現在	韓神大学民衆教育研究所
8	1999.02.00	～	現在	日韓平和教育研究会韓国平和教育研究会共催国際シンポジウム第2回日韓平和教育シンポジウム（東京）で「韓国教育における『朝鮮戦争』」を論文発表
9	2003.02.00	～	現在	日韓平和教育研究会第4回日韓平和教育シンポジウム(東京)実行委員長

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	加藤 憲一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 公立小学校研究会講師	2004.05.28	鎌ヶ谷市立中部小学校校内研究会 (講演会) 講師 「よりよく生きるための自分づくり・友達作りー国語科を通しての『自己表現力』」のテーマで 90 分講演、30 分質疑を行なう。					
2) 公立小学校研究会講師	2004.06.21	松戸市立常盤第三小学校校内研究会講師 4年「作文『一輪車』を読んで友達のよいところを見つけよう」の授業参観と指導講話					
3) 公立小学校研究会講師	2004.11.11	市川市立大和田小学校研究会講師 2年「作文 (詩)『見つけたことを』」の授業参観と授業研究会における指導講話					
4) 公立小学校研究会講師	2004.12.02	松戸市立常盤第三小学校校内研究会講師 1年読書指導の授業「おはなしたまてばこをあけてみよう」の授業参観と指導講話					
5) 基礎講座二日目問題別講座講師	2005.06.05	第二回教育基礎講座 (広島県民間教育サークル会議主催) 17分科会 (文芸教育): 日記の作文指導のあり方					
6) 公立小学校研究会講師	2005.06.23	松戸市立常盤第三小学校研究会 国語科授業研究 (二年の作文の授業) 授業指導を行った。					
7) 公立小学校研究会講師	2005.06.30	市川市立大和田小学校研究会 国語科授業研究 (3年「音読・詩を楽しもう」) 授業指導を行った。					
8) 公立小学校研究会講師	2005.10.20	松戸市立常盤第三小学校研究会 国語科授業研究 (五年「大造じいさんとがん」) 授業指導を行った。					
9) 公立小学校研究会講師	2005.11.08	松戸市立栗ヶ沢小学校研究会 国語科授業研究 (四年「詩・かぼちゃのつるが」) 授業指導を行った。					
10) 公立小学校研究会講師	2005.11.17	松戸市立常盤第三小学校研究会 国語科授業研究 (四年「詩・村の人口」) 授業指導を行った。					
11) 公立小学校研究会講師	2006.01.17	市川市立大和田小学校研究会 国語科授業研究 (1年「お手紙」/2年「きつつき」/4年「ごんきつね」) において授業指導を行った。					
12) 大東文化大学授業評価	2006.12.00	平成 12 年度～現在 5 段階評価でどの科目でも 4 を超える。平成 18 年度は受講数の少ない科目と多い科目の二科目の評価が実施されたが、それぞれ総合点はそれぞれ、4.9、4.8 と高い評価であった。					
13) 千葉県松戸市立常盤平第三小学校国語授業研究会	2007.05.25	4年詩教材「ぼったのうた」(おうちやすゆき) の授業研究会における指導助言講師 研究テーマ「ものの見方、考え方、表し方の言葉の力を育てる国語の授業のあり方」					
14) 千葉県松戸市立栗ヶ沢小学校国語授業研究会	2007.06.28	読解リテラシー育成に関わる文学教材 (詩・4年) の授業公開を参観し、その授業研究における講師を務め、指導評価を行ったもの。					
15) 千葉県松戸市立常盤平第三小学校国語授業研究会	2007.10.04	2年における詩「かいだん」(関根純一) の授業研究における指導助言講師 研究テーマ「ものの見方、考え方、表し方の言葉の力を育てる国語の授業のあり方」					
16) 第 18 次全教千葉教職員組合・同教育研究会	2007.11.10	低学年部会講師 研究テーマ「みんなで学ぶと楽しいよ」のもと、生活科の実践報、船橋氏教員組合 告及び文学の授業「大きなかぶ」「きつねのおきゃくさま」の実践報告を受けての研究討議における指導助言					
17) 千葉県松戸市立常盤平第三小学校国語授業研究会	2007.11.15	5年物語「雪わたり」(宮澤賢治) の授業研究における指導助言 研究テーマ「ものの見方、考え方、表し方の言葉の力を育てる国語の授業のあり方」					
18) 松戸市教育研究集会講師	2008.10.18	分科会テーマ「見たがりや聞きたがりや話したがりや」。1年「大きなかぶ」の実践 (今井まき子)、福祉教育の実践 (「言葉と心が通じ合う交わりをつくろう」井上佳子) 提案を受け、討論を行い、その指導助言を行う。会場 松戸市立牧ノ原小学校					

19) 埼玉県鳩ヶ谷市立中居小学校研究会 (国語) 講師	2008.10.23	『一人一人の子どもの力を伸ばす学校をめざしてーその効果的な指導方法の工夫・改善』がテーマ。6年「平和のとりでを築く」(田村健一教諭)の授業公開を資料に、研究討論を行いその指導助言を行う。		
20) 埼玉県鳩ヶ谷市立中居小学校研究会 (国語) 講師	2008.11.06	『一人一人の子どもの力を伸ばす学校をめざしてーその効果的な指導方法の工夫・改善』テーマに5年「わらぐつの中の神様」(小林真次教諭)の授業をもとに、研究討論を行いその指導助言を行う。		
21) 千葉県・市川市合同研究会講師	2008.11.08	分科会テーマ「学校大好き～子どもが育つとき」。低学年の国語と音楽の実践報告を受けて、参加者者による討論が行われ、討論及び事後の指導助言を行う。提案者平野容子・今井まき子氏。市川市立宮田小学校		
22) 埼玉県鳩ヶ谷市立中居小学校研究会 (国語) 講師	2008.11.20	『一人一人の子どもの力を伸ばす学校をめざしてーその効果的な指導方法の工夫・改善』がテーマ。3年「すがたをかえる大豆」(浅賀友文教諭)の授業をもとに、研究討論を行いその指導助言を行う。		
23) 埼玉県鳩ヶ谷市立中居小学校研究会 (国語) 講師	2009.01.05	『一人一人の子どもの力を伸ばす学校をめざしてーその効果的な指導方法の工夫・改善』がテーマ。1年「たぬきの糸車」(太田圭典教諭)の授業公開を資料に、研究討論を行いその指導助言を行う。		
2 作成した教科書、教材、参考書				
1) 『作文教育入門』[拙著 明治図書]	2004.08.00	子どもの発達にとってことば表現とは何か、また、その現実と課題は何かをふまえ、表現の本質を幼児の言葉から小学校高学年まで様々な表現をとりあげ、子ども個々の人格や認識の発達を促す作文教育の理論的・実践的な在り方を具体的に書いている。教師や教師をめざす学生が、表現の中に子どもをどう読むのか、どう意味の世界へ引きあげていくのか、子どもの生き方の変革にいかに向けるのか、発達段階に即して具体的に活用できるテキストとしての価値がある。177p		
2) 『新国語教育事典』[文芸研 明治図書 編集責任]	2005.08.00	文芸教育研究協議会が、長年の研究の中で生み出した国語教育理論と実践やその基礎としての教育的認識論を具体的に解説している。加藤はその編集責任の任にあたった。責任執筆としては①「類比」(1「比較」の1項(p29～33) ②「独創的、主体的、典型的」の項(p111～18) ③「文芸研の目指す授業」(p127～32)等を執筆している。国語科教育の理論を教材を使いながら実践化を視座して書いているので、国語科教育の学習に活用出来る。		
3) 『大学生の児童文学 一民話・童話・漫才・詩一』	2007.03.20	『児童文学教育論』(18年度)『国語教育論』(19年度)の授業において課した学生の創作集をB5班(1p:19×24×3段)93pに表したものを。未来の小学校教師として、小学生の子どもを読み手として創作したもの。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
1) 神奈川県私立小学校協会半日研修会講師	2007.04.20	演題「読み」の指導、今何がどう問題かー真の言葉の力を育てるために」とい演題で2003年PISAの結果を受けての、リテラシーの言葉の力を育成するための現状と具体について講演。		
2) 千葉県松戸市立常盤第一小学校国語科教育研究会講師	2007.06.07	講演「説明的文章における教材研究と授業ー「読み」の行為とは何かー」伝統的読解力とPISA型読解リテラシーを比較しながら、求められる論理的思考力・表現力とは何かについて、説明文教材の分析と授業の具体についての講演		
4 その他教育活動上特記すべき事項				
1) 学生の創作活動と作品発行支援	2008.01.11	特異な創作意欲と方法術をもった演習生(神山智史)の創作支援を行い、研究室にて発行させる。詩集『Mande in Black』(2006・3・10 48p) 詩集『HEAVY and WILL』2006・10・22 33P) 詩集『キッドの園/Artistic Poems』(同 39p) 詩集『水のゆくえ』(2007・1・29 35p) 小説『Eternnal Moment~Another version』(同 103P)、詩集『告白』(2007・6・6・6 43P)『玄武という喜劇』(2007・8・24 59p) 小説『Silent Blue~潮風に抱かれて~』(2008・1・11 201p)。いずれも作者は神山智史 発行人 加藤憲一 発行所 研究室)		
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)

著書				
1 『あすに光さして』 (人間・篠宮善一校長の仕事)	編著	2004.07.00	窓映社「あすに光さして出版委員会」編集代表 定価12000円	同書は出版委員会によって、教育者篠宮善一(1917～1987)の校長(18年)としての仕事・業績を著した。具体的な記録、資料をもとに氏の校長としての5校18年間を、学校順に整理し、その仕事の解説と意味を明らかにされている。(398p) 主たる編集委員は、若王子淑子、安藤弘、上西信夫、加藤憲一(編集代表者)。加藤は、氏の資料・記録の全編に目を通し、主に3校分の資料選択と解説・意味づけ(各p191～193、p247～251、p287～289)、年譜作成(p389～394)などを担当した。さらに、氏の文学教育者としての軌跡と、生き方の軌跡をそれぞれ「篠宮善一と文学教育」(p346～351)、「風雪に抗い真実に生きて」(p381～386)として書いている。
2 『作文教育入門』	単著	2004.08.00	明治図書 監修西郷竹彦 定価2260円	同書は、文芸研の授業シリーズの第8巻で、〈作文指導編(理論編、実践編)〉のうちの理論編として書かれたもの。子どもの人間的な発達に密接不可分な作文教育を、幼児の言葉から小学校高学年まで様々な作文・表現をとりあげ、認識論的に表現を掘り下げ、実践的方向を視座している。177p
3 『新国語教育事典』	共著	2005.08.00	明治図書 文芸教育研究協議会著	編集代表として、編む。責任執筆として、教育的認識論と国語科授業に関わる項目の執筆をした。次の項目を執筆する。編集委員は西郷竹彦・足立悦夫・上西信夫・藤井和寿・加藤憲一 加藤は教育的認識論の項目のうち①「類比」(1「比較」の1項)4p(p29～33)②「独創的、主体的、典型的」9p(p111～118)と、③「文芸研のめざす授業」6p(p127～132)についてその基本的考えと在り方を解説している。
4 「認識の枠組み」としての ことばの力を」 (提言・国語科教育の改革)	単著	2005.09.00	『国語授業の改革5』(科学的『読み』の授業研究会編 学文社)	ことばによって人間や人間をとりまくものごとについて思考し、理解・認識できることばの力を育てる国語科教育への転換を主張。特に、世界「認識の枠組み」としての「ことばの力」と何かを論じ、戦後の民間教育研究運動の中で、国語においてことばによる認識の方法が、どう論じられ内化してきたかをふまえ、西郷竹彦の提唱する「教育的認識論」の意義を位置づける。(p168～173)
論文				
1 『豊かな言語活動が 関係を作る』	単著	2007.03.00	松戸市立六実第三小学校発行・研究紀要『平成18年度研究の歩み』(「言葉と心が通じ合う授業を作ろう——伝え合う力を伸ばす指導を通じて」)	同校の研究は「言葉と心が通じ合う授業を作ろう——伝え合う力を伸ばす指導を通じて」というもので、伝え合う力を育てる主として「話すこと・聞くこと」を中心とする学年1学級ずつの授業研究をおこなった。本記録は、通年講師として、一年間同校の研究実践に立ち会い指導してきた立場からの総括として、研究実践の経過を整理しそのねらいに基づきそれぞれの実践研究の意味を探り、次年度の課題を指し示したものである。講1～講8(75p～82p)
2 「付け合い・不易流行の 俳諧の精神を」		2009.03.18	大東文化大学教育学会誌第32号	教育学会長として、平成20年度の教育学会の活動に対するふりかえり行い、総括的に意味づけを行ったもの。学会誌32号の序文(4p～8p)である。
その他				
1 「教育の道しるべとして」 (文献紹介)	単著	2006.05.00	雑誌『文芸教育』82号2006春新読書社	『新国語教育事典』(文芸教育研究協議会著 明治図書)H17の文献紹介である。これは、国語科において認識と表現の力となる言葉の力を育てるという理論と実践を系統的に分かりやすく解説した事典であり、教育的認識論を軸にすることの教育的意味を、国語科教育にとどまらず、教育全体に関わるものとして編集代表者の立場から解説紹介している。(114p～117p)
2 第42回文芸教育全国 研究会シンポジウム 司会		2007.08.05	第42回文芸教育全国研究会シンポジウム	研究会三日目の全大会。まど・みちおの詩教材「よかったなあ」(授業者/山中吾郎)の授業記録(ビデオ)の見ながら、大会テーマの「意味と価値」観点からシンポジウム。その司会者をつとめる。(司会:加藤、シンポジスト:西郷竹彦、前田康子・村尾聡、上西信夫・山中吾郎)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1975.08.00	～	現在	文芸教育研究協議会会員(1976.7～1981.8事務局、1981.8～1987.8副会長)

2	1996.00.00	～	2007.00.00	松戸市立常盤平第三小学校国語科教育授業研究会通年講師
3	1996.08.00	～	現在	日本作文の会会員
4	1997.05.00	～	現在	全国大学国語教育学会会員
5	1998.08.00	～	現在	日本学校図書館学会会員
6	2002.09.00	～	2006.04.00	総合人間学研究会会員
7	2004.05.28	～	2004.05.28	千葉県鎌ヶ谷市立中部小学校研究会（講演）「よりよく生きるための自分づくり・友達づくりー国語科を通しての『自己表現力』」講師（講演）
8	2004.06.21	～	2004.06.21	千葉県松戸市立常盤第三小学校研究会講師 国語科授業 四年「作文の授業」講師
9	2004.11.11	～	2004.11.11	市川市立大和田小学校研究会講師
10	2004.12.02	～	2004.12.02	千葉県松戸市立常盤第三小学校研究会講師
11	2005.06.05	～	2005.06.05	第28回教育基礎講座（広島民間教育サークル会議）講師（講演）
12	2005.06.23	～	2005.06.23	松戸市立常盤平第三小学校国語科授業研究会講師
13	2005.06.30	～	2005.06.30	市川市立大和田小学校国語科授業研究会講師
14	2005.10.30	～	2005.10.30	松戸市立常盤平第三小学校国語科授業研究会講師
15	2005.11.08	～	2005.11.08	松戸市立栗ヶ沢小学校国語授業研究会講師
16	2005.11.17	～	2005.11.17	松戸市立常盤平第三小学校国語科授業研究会講師
17	2006.01.17	～	2006.01.17	市川市立大和田小学校国語科授業研究会講師
18	2006.05.00	～	現在	総合人間学学会会員
19	2008.08.00	～	現在	日本国語教育学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	川床 靖子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) マルチメディア機器を活用した授業方法		2005.04.00	2005.04.00～現在 すべての授業科目において、適宜、学校や仕事場における人々の実際の学習場を VTR で紹介し、分析を進めながら話を進める。また、講義内容をパワーポイントで作成し、視覚的にも豊かな情報を発信するよう工夫している。			
2) 学生の授業外における学習促進のための取り組み		2005.04.00	2005.04.00～現在 全ての授業科目において、学生によるフィールドワークとその結果のクラスでの発表を課している。たとえば、教室場面における教師と生徒のディスコース (談話)、或いは日常場面での人々のやり取りを収録し、それらの分析を通して当事者たちの言語ゲーム (ものの見方、考え方、とらえ方、感じ方 etc) を探るというテーマで調査し、発表させ、自らの活動による視野の拡張が実感できるような学習体験をさせている。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 学習のエスノグラフィー：タンザニア、ネパール、日本の学校と仕事場をエスノグラフィーする (春風社)		2007.05.00	本書は教科書として執筆されたものではないが、担当する全ての授業科目における授業内容のベースになる考え方や事例が網羅されている。授業では毎回この著書の中の事例、および、データをプリントして教材として配布、使用している。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) アレックスはいかにして「落ちこぼれの子」に見えるのか 一場面の組織化と学習の相互的構成		2008.06.21	日本教授学習心理学会第4回年会において講演。日々、教授・学習活動をしている現場の教師、研究者を対象に、教室場面やテスト場面で子どもが“できる”“できない”“正答する”“誤答する”ということ、従来の教授法の考え方とは異なるパラダイムによって再考することを提案した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 科学技術実践のフィールドワーク：ハイブリッドのデザイン	共著	2006.12.00	せりか書房	8章「技術の位置決め」を執筆 上野直樹・土橋臣吾編 川床靖子、大塚善樹、中村雅子、岡部大介、吉岡有文、入江信一郎、松嶋登。新しい技術の導入に伴い技術者コミュニティの社会・技術的関係がいかにして再編され、危険にさらされたのかを技術者自身の語りによって描き出すことを試みた。電子機器産業における技術革新の嵐のなかで、現場の技術者が新しい技術を自分との関係でどのように定式化し学習してきたのかということ、彼らもその一部であるコミュニティの社会技術的配置や編成のあり方との相互構成という視点から探った。(pp.154-176)		

2	科学技術実践のワールドワーク：ハイブリッドのデザイン	共著	2006.12.00	せりか書房	2章「参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会的技術的アレンジメントの役割」P.38-54 Callon, M. (2004) The role of hybrid communities and socio-technical arrangements in the participatory design. Journal of the center for information studies. 5 (武蔵工業大学環境情報学部メディアセンタージャーナル第5号) 3-10 を翻訳した。(pp.38-54)
3	学習のエスノグラフィー：タンザニア、ネパール、日本の学校と仕事をフィードバックする	単著	2007.05.00	春風社	本書は、筆者自身によって日本、タンザニア、ネパールの学校と仕事場において行なわれた学習のエスノグラフィー（文化人類学的調査）を集大成したものである。教室の活動と日常の仕事場の活動を区別することなく統合的に見ることを通して、学習とは‘個人’による達成と見るより、むしろ、道具と行為とコンテクストの相互的な構成、言い換えれば、学習とは様々なリソースの布置、社会的なネットワークのあり方に依存して変化するものであることを具体的に明らかにし、議論した。また、本書では学習環境をデザインする上での具体的な方向性を提案している。(全 342 ページ)
論文					
1	Machines as a social system.	単著	2004.05.00	情報メディアセンタージャーナル武蔵工業大学環境情報学部第5号	コピー機の修理技術者の活動をエスノグラフィーすることによって、モバイルテクノロジーがどのように彼らのサービスエリアの状況を可視的にするのか、また、社会システムとしてのコピー機を維持・管理するためにどのような規範やコントロールがテクノロジーに埋め込まれているのかを記述した。
2	“自立の生活へと駆り立てられる高齢者：情報・コミュニケーション技術と高齢者ケアとの同盟の行方	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 <社会科学・自然科学>	近年高齢者福祉の世界であたかも実体があるかのごとくに物象化され、喧伝されている高齢者の“自立”ということを社会-技術的 (socio-technological) 観点から問い直した。その上で、高齢者自らが選択できるような“自立”の生活はどのようにしたら実現可能なのかを検討した。
3	社会システムのデザインとしての技術開発および技術教育に関する研究	単著	2005.06.00	平成 15～平成 16 年度科学研究費補助金基盤 (C) (2) 研究成果報告書(pp.1～89)	実際の技術開発の現場において様々な技術が社会的なシステムとしてどのように構築されているのか、それらの技術がコミュニティの社会的技術的関係をどのように再編させるのかということフィールド調査によって具体的に見た。そして、技術を社会的なシステムのデザインとして見るという観点から技術教育をとらえ直す、つまり、技術を専門家だけのものにするのではなく、生徒や学生が社会人、市民として現代技術を用い、評価し、提案していくことを可能にするような技術教育構築への提言を試みた。
4	老いのデザイン：高齢者をめぐる社会・技術ネットワークの構築、離散、成長	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 <社会科学>	日本におけるケア・デザインのあり方を社会・技術的な観点から問い直した上で、鳥取県の中山間地、智頭町で生まれた「ひまわりシステム」の構築と再編のプロセスを、社会・技術的ネットワークの構築・離散・成長という視点で分析し、「ひまわりシステム」の高齢者福祉に投じた意義を再考した。(pp.1-14)
5	個人とコミュニティの社会・技術的編成：バイテクラボにおける科学的ディスコースの分析	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要第 45 号 <社会科学>pp.147-164	大学のバイテク・ラボにおける科学者の実践を彼らのセミナーにおけるディスコースの分析を通して明らかにした。彼らは DNA 対象の特定に際して、常に、実験自身のスキルやテクニックを話題にする。実験者のスキル、職人的知識、テクニックを語ることは彼らの科学実践とコミュニティを組織し、維持するための一つの方法なのである。また、‘腕のいい人対悪い人’、‘初心者対熟練者’のように「個人」を構成する仕方は、実践のコミュニティにおける社会的エージェント、対象、そして技術の配置のあり方、及び、メンバーの組織され方と不可分であることを明らかにした。
6	「精密部品の加工実践における多層的ヴァイジョンの状況的構成」	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要第 46 号 <社会科学>pp.217-235	金属加工の実践における切削過程と品質管理のための多層的で観察可能なネットワークは、作業標準書のようなアーティファクトと共に組織されることをエスノグラフィーした。この実践においては分業間の境界、或いは、現在と過去の実践の境界が常に交差し変動する。その中で、個々の作業者と可視化のネットワークは相互にそしてリフレクシヴに個々の学習の事実を作り合っている。学習は個人の内部に居座っているのではなく、人間アクターと人工物を共に含む作業グループのなかに構築されることを明らかにした。

7	「地域再生」を問い直す	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要 第47号<社会科学>pp.265-276	近年、居住者の高齢化、建物や施設設備の老朽化、空き室、空き店舗の増加など地域としての減衰傾向を顕在化させていると言われる1970年代に建設された団地をめぐる“再生”プロジェクトをとりあげ、地域活動におけるパラダイムのシフト、つまり、地域「再生」から「空間のヒストリー」の掘り起こしへ、そして、「そこに暮らす人々の豊かなヒストリーを形成する空間の構築へ」という考え方の転換、および、地域を可視化するための具体的な方策を提案した。
その他					
1	老いのデザイン：“自立”の社会・技術的コンフィギュレーション	単著	2005.11.12	科学技術社会学会第4回研究大会ワークショップ：科学技術における「社会的なもの」の再建を巡って	近年、高齢者福祉の世界であたかも実体があるかのごとくに物象化され、喧伝されている高齢者の“自立の生活”を社会・技術的コンフィギュレーションの視点から問い直し、その上で、高齢者自らが選択できるような自立の生活はどのようにしたら実現可能なのかを検討した。
2	The design of old age: socio-technical configuration of “independent” life	単著	2006.08.24	paper presented at the symposium entitled “Exploring the materiality of solutions and problems in health care” EASST 2006 at Univ. of Lausanne, Switzerland	鳥取県智頭町で行われている独居老人への「ひまわりサービス」と参加高齢者の暮らしと意識の推移を分析し、“自立性”、“依存性”といったヒューマンエンジェンシーは人々をとりまく社会技術的アレンジメントのあり方によって変化することを論じた。
3	高齢者の「自立の生活」：その社会・技術的 configuration のデザイン	単著	2007.09.07	ISCAR-Japan/Asia (国際文化活動研究学会 (International Society for Cultural and Activity Research) 第1回国際アジア大会「活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン」の第7セッション「社会的実践としての看護、介護、医療領域への状況論的アプローチの実践」にて発表	約10年前に鳥取県の中山間地でスタートした高齢者の生活を支援するプロジェクトをとりあげ、高齢者をめぐる社会・技術的ネットワークがどのように構築、離散、成長のプロセスを経ているのかを具体的に分析した。その分析を通して、ネットワークにおける人、もの、装置の社会・技術的配置と編成のあり方の再編（リコンフィギュレーション）は、そのネットワーク上の人々のエンジェンシー（存在のあり方）の変化を含意するものであることを議論した。
4	Acting with Democratization of Technology: Taking part in a regional regeneration project.	単著	2008.08.23	paper presented at the symposium entitled “Public Involvement in Urban Affairs”. 4S & EASST 2008 at Rotterdam, The Netherlands.	少子高齢化の進むマンモス団地の住民とその近くに所在する大学が共同で地域の活性化に取り組むプロジェクトを取り上げ、地域住民、研究者、学生、さまざまな社会的グループによるプロジェクトへの参加のあり方を描出した。人々による革新的対話を通してプロジェクトがどのように変化し発展するのか、また、人々の幅広い関心と民主的見解がテクノロジーを巡ってどのように収斂されるのかを探った。そして、普通の人々によるこのような新しいタイプの対話への参加にこそ技術の民主化の可能性が存在することを議論した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1974.04.00	～	現在	日本教育心理学会会員	
2	1992.07.00	～	現在	日本アフリカ学会会員	
3	1995.06.00	～	現在	日本認知科学会 教育環境のデザイン分科会会員	
4	1997.10.00	～	現在	Society for Social Studies of Science (4S) 会員	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	宍倉 洋	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学生による授業評価アンケート			2000.04.01	平成 12 年度から開始された授業評価アンケートでは高い評価を得ている。総合点で平均 4 点台 (5 段階評価) を保持している。(2000.04.01～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「音楽専任教師のための児童発声法講座」			2005.08.17	千葉市教育研究会音楽教育部会講師。千葉大学教育学部附属中学校。			
2) 「音楽専任教師のための合唱指導法講座」			2007.08.20	千葉市教育研究会音楽教育部会講師。千葉大学教育学部附属中学校。			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1975.04.00	～	現在	日本音楽教育学会会員			
2	1976.04.00	～	現在	全日本教育音楽研究会会員			
3	1994.04.00	～	2007.04.01	千葉県少年少女合唱連盟理事長			
4	1995.04.00	～	2007.04.01	千葉県文化祭実行委員会委員			
5	1998.04.00	～	2007.04.01	J j C S - 日本少年少女合唱連盟副理事長			

(表 25)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	宍倉 洋	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時		発表・展示等の内容等			
1	第 22 回ヴォーカルリサイタル 日伊歌曲・研究発表	東京・王子ホール		2004.07.19		ソロ宍倉洋 ピアノ ヤン・ホラーク イタリア古典歌曲から「かなわぬ恋」「ラールゴ」「恋しき君」「麗しの恋人よ」「もし幸せの中に」日本歌曲から「鐘が鳴ります」(山田耕筰)「平城山」(平井康三郎)「鴉」(信時潔)「夏の日のレクイエム」(小林秀雄) オペラから“愛の妙薬”より「人知れぬ涙」「アルルの女」より「フェデリーコの嘆き」イタリアカンツォーネから「君が好き」「無言の歌い手」「アヴェマリア」「愛のカンツォーネ」「太陽の国」			
2	第 23 回ヴォーカルリサイタル	東京・王子ホール		2005.07.18		ソロ宍倉洋 ピアノ ヤン・ホラーク イタリア古典アリアから「お休み、お眠り」「ニーナ」「愛の喜びは」「懐かしき面影」日本歌曲から「待ちぼうけ」(山田耕筰)「日記帳」(小林秀雄)「落葉松」(小林秀雄) イタリアカンツォーネから「光さす窓辺」「雨」「歌っておくれ」「ナポリのカンツォーネ」「マリア・マリ」「ドリゴのセレナーデ」「禁じられた音楽」オペラアリア“ウェルテル”より「春風、何故吾を目覚ますのか」			
3	第 24 回ヴォーカルリサイタル	東京・王子ホール		2006.07.17		ソロ宍倉洋 ピアノ ヤン・ホラーク イタリア古典アリアから「私の偶像である人を巡りて」「私の称える美しい神よ」「教会のアリア」日本歌曲から「白月」(本居長世)「波浮の港」(中山晋平)「空」(小林秀雄) オペラから“トゥーランドット”より「誰も寝てはならぬ」イタリアカンツォーネから「帰れ」「魅惑の瞳」「遙かなるサンタ・ルチア」「さようなら栄光の夢よ」「ロリータ」ほか			
4	第 25 回ヴォーカルリサイタル	東京・王子ホール		2007.07.16		ソロ宍倉洋 ピアノ ヤン・ホラーク イタリア古典アリアから「愛の神よ」「愛は遙か遠く」「遙かなるいとしい君よ」「陽はすでにガンジス川から昇り」日本歌曲から「赤とんぼ」(山本大道)「少年」(諸井三郎)「母」(小松耕輔)「紫陽花」(團伊玖磨) イタリアカンツォーネから「舟人の歌」「愛のマリンコニーア」「ナポリのマンドリン弾き」「朝の歌」「夢みるフィレンツェ」「海に来たれ」「夜明けは光から」「五月の一夜」			
5	第 26 回ヴォーカルリサイタル 日本・イタリア歌曲・カンツォーネ・スペイン曲の研究発表	東京・王子ホール		2008.07.20		ソロ宍倉洋 ピアノ ミハル・ホラーク イタリア古典アリアから「親愛なる森よ」「愛に満ちた乙女よ」「羊飼いの娘よ希望をお持ちなさい」「君を称える光栄のために」日本歌曲から「わすれなぐさ」(飯沼信義)「春の誘い」(高原宏文)「野のわる狐」(小山清茂)「おやすみ」(中田喜直) イタリアカンツォーネから「祈り」「夜の声」「羊飼いの恋」「セレナータ」「愛するままに」「彼の人に伝えて」「スペインの娘」スペイン歌曲から「グラナダ」			

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	須藤 敏昭	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) サマースクール (小学生対象) の実施		1979.08.00	(1979年8月～2009年8月) (毎年実施) 教育学科3、4年生のゼミの一環として、小学生(約50名)を対象に2泊3日のサマースクールを実施している。ゼミの学生が教師役をつとめ、実践的に教育方法・授業方法を研究する。ゼミでの机上の学習と合わせることで大きな教育効果を発揮している。2009年は、学生22人、小学生47人、栃木県鹿沼市「自然体験交流センター」で実施。				
2) 学生による授業評価アンケートの実施		2000.12.00	(2000年12月～2008年12月) 2000年度より全学部の特設科目を対象に「学生による授業評価アンケート」を実施しているが、この制度の導入を学長として実施委員長としてリードした。毎年学生による授業評価アンケートを受けているが、評価は高い。2008年度の結果は、「教育方法論B」(135人受講)が5段階評価で4.1、「演習2」(12人)が同4.8であった。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『学びと遊びの楽しさを求めて』(大東文化大学須藤ゼミナール刊)		1979.12.00	(1979年12月～2008年12月) (毎年1冊刊行) 上記サマースクールの授業や指導の過程を詳しく記録した報告集(A4版焼く120頁の本格印刷)。執筆は全学生と須藤。すでに第1集から第29集まで刊行されている。先輩学生が書いた実践記録がそのまま学生たちの「授業研究」の貴重なテキストになっている。また、現職教員にも読まれている。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) (財) 大学基準協会「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP) 審査委員		2005.00.00	平成17年度及び18年度、19年度。委嘱を受けて、「特色GP」のうち、学士課程の「教育方法の工夫改善を主とする取り組み」の審査にあたった。				
2) (財) 日本高等教育評価機構評価委員		2007.00.00	平成19年度～平成21年度。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 子どもの「手」を育てる一手ごたえのある遊び・学び・生活を(A5版188頁)	共著	2007.08.00	ミネルヴァ書房	第一編者・著者として総論・理論のパートを執筆。近年の高度情報化社会に生活する子どもたちにとって、自分の手や体をつかってリアルに学び、遊ぶことがいかに重要かを論じた。あわせて、その観点から学力論、学習指導論にも論及。共著者は、◎須藤敏昭、森下一期、松本達郎、名和秀幸ほか。(PP.1-5, 21-37)			
論文							

1	子どもにとってあそびとは	単	2007.05.00	日本の学童保育（6月号）	編集部求めにより、同名の特集の巻頭論文として書いたもの。近世以来の遊び文化史のなかで、現代の子どもの遊びの様相や問題点を分析し、大人のかかわり方について論じた。とくに、遊びのもつ癒し効果に注目すること、遊びの本質や分類・構造について指導者が深い理解をもつことを説いている。(PP.7-12)
	その他				
III 学会等および社会における主な活動					
1	1970.04.01	～	現在	日本教育学会会員	1986.9.1～1987.8.31 編集委員
2	1973.04.01	～	現在	日本教育方法学会会員	
3	1999.04.01	～	2005.03.31	日本私立大学協会理事	
4	2000.04.25	～	2005.03.31	板橋区教科用図書審議会委員（会長）	
5	2003.04.00	～	2005.03.31	日本私立大学協会常任理事	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	滝澤 達子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		1979.00.00	昭和 54 年～平成 21 年 毎年教育実習(3 年次 1 0 月 4 週間、4 年次 6 月 2 週間)の研究授業に赴いて指導案の書き方、授業での発問の仕方、授業展開の方法等について指導助言を行ってきた。				
2) 学生による授業評価アンケート (愛知教育大学)		2004.12.08	平成 2 年～現在 愛知教育大学法人化により平成 2 年から始まった学生による評価アンケートは、担当の音楽人類学入門、音楽科教育法に対してなされ、前者の入門授業は西洋音楽のみでなく、日本を含めた民族音楽の概説で、学生には新しい知識として理解され評価はその内容及び教授姿勢(資料の準備、映像機器、講義)を評価された(数値の評価はなされていない)。音楽科教育法は授業現場に、即活かせる内容として評価された。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 高校音楽教科書 1 年～3 年編集 (教育出版社)		1995.00.00	平成 7 年～平成 16 年 指導要領の改訂のポイントである日本の音楽、世界の諸民族の音楽の教材の開発が緊急に必要とされ教科書出版社の高校の音楽教科書編集に参画。同時に、中学校、小学校にも同様の新教材導入のため、アドバイザーとして参画した。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 講演 3 回		2004.00.00	2004.03.20～22 タイ王国マヒドン大学新設の音楽学部からの招聘により、集中講義「音楽教育の哲学」 「日本の音楽教育、世界の音楽教育」など講義をした。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 生涯学習音楽指導員養成講座講師		2003.00.00	平成 15 年～平成 17 年 財団法人音楽文化創造 講座講師				
2)		2003.00.00	平成 15 年～平成 17 年 財団法人音楽文化創造が毎年行っている「生涯学習音楽指導員養成講習会」において、既に音楽大学を卒業した者、邦楽を専門に教えている者など音楽経験を有する有資格者が新たに生涯音楽学習指導員としての資格を取る為の講習会の講師をした。				
3) 全日本音楽教育研究会講師		2005.05.26	全日本音楽教育研究会高等学校部会山形支部大会において、山形県の高校の音楽教師 50 人を対象とした「新しい音楽教材の扱い方—ワールド・ミュージックについて」の講演をした。				
4) 愛知教育大学教育研究評議委員、愛知教育大学学部代議委員 (音楽教育講座代表)		2005.04.01	平成 17 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日				
5) タイ王国音楽教育者協会 (学会) 外国」アドバイザー		2006.04.01	平成 18 年～現在				
6) 現職職員指導		2007.04.00	愛知教育大学大学院で現職教員(小学校教師)の指導(音楽学特講—民族音楽教材の扱い方)を指導した。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							

論文				
1 Facets of Community Musical activity in Japan—The Motivation behind a Music Copmany's Outreach Project.	単著	2007.03.00	ISME（国際音楽教育協議会）コミュニティ音楽活動コミッション発行雑誌。	
その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1973.04.01	～	現在	東洋音楽学会会員
2	1973.04.01	～	2004.03.31	日本音楽学学会会員
3	1975.04.01	～	現在	日本音楽教育学会会員
4	1982.06.01	～	現在	国際音楽教育協議会（International Society for Music Education—ISME UNESCO）会員
5	2000.06.01	～	2006.06.01	国際音楽教育協議会 ISME-Community Musical Activity(CMA—コミュニティ音楽活動研究部会)コミッショナー
6	2004.06.01	～	2007.06.01	国際音楽教育協議会 ISME 国際大会企画支援委員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	橘 与志美	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 第2次世界大戦下における小学校教育に関する研究	単著	2007.03.31	「大東文化大学紀要」第45号<社会科学>・大東文化大学	昭和16年～20年までの「第五期・国定教科書」や「国体の本義」「国体明徴」「臣民の道」「天皇発言」などを資料としつつ、5・15事件、2・26事件、支那事変、日中戦争を経ながら世界大戦へと発展していく流れを踏まえ、決戦体制下での国内情勢や学校教育状況・学童疎開・学徒動員・皇国民の錬成などについて広く追究している。結果として、国家情勢がいかに学校教育や国民生活に大きな影響を及ぼしてくるかを究明した。P.109～P.129。21ページ執筆。レフェリー無し。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1972.04.00	～	現在	大東文化大学教育学会会員		
2	1974.04.00	～	現在	全国大学国語教育学会会員		
3	1976.04.00	～	現在	日本国語教育学会会員		

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	沼口 博	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 板橋区立北野小学校の「総合的な学習の時間」支援活動 (試行期間以来)		2000.04.00	板橋区立北野小学校の「総合的な学習の時間」支援活動 (試行期間以来) 平成 12 年 4 月～平成 19 年 3 月			
2) 中野区立中野本郷小学校生活科の支援活動および理科フェスティバルの支援		2003.09.00	中野区立中野本郷小学校生活科の支援活動および理科フェスティバルの支援 平成 15 年 9 月～平成 19 年 3 月			
3) 学生による授業評価と大学教育 (大東文化大学授業評価報告書Ⅱ) 2006 年度		2006.00.00				
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 中野区教育委員会特色ある学校づくり重点校でのシンポジウムのパネラー: 理数大好きモデル地域事業推進校		2007.10.17	中野区立中野本郷小学校での理科教育推進のためのシンポジウムで、教員養成の立場から、何が必要でどのような対応が可能なのか、また今後の理科教育のあり方とかかわった教育養成制度について、いくつかの具体例を指示し、問題提起をおこなった。			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 青島・北京職業教育研修旅行		2004.11.03	2004.11.03～11.09 青島烹飪学校で開催中の山東省職業教育研修会で、日本の職業教育制度について講演。(山東省の教育委員会からの招待) また北京では中国の教科書を出版している人民教育出版社を訪問し、中国の教科書出版事情とわが国の事情について意見交流した。			
2) 荒川区教育研究部技術・家庭部での講演 (区教委と区教組の協催)		2007.07.11	科学・技術が 20 世紀に果たして来た役割、成果をふり振り返りながら、問題点や課題を浮きぼりにし、今後、科学・技術に求められるであろう方向性について検討を加えた。			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 教育学用語事典	共著	2006.05.00	学文社	工業化と教育、社会変動と教育、職業教育・産業訓練、ダブルスクール、発展途上国の教育、立身出世主義と教育、リベラル・アーツの項目を担当		
論文						
1 教育史学会シンポジウムの感想	単著	2004.11.00	会報 教育史学会 No.96	人間形成をめぐる普通教育と職業教育の展開—二つの国民の創出・再生産から—というシンポジウムのパネラーの一人として、シンポジウムで深め切れなかった学校教育と職業教育の根本的な違いと、その教育を誰がどこでどのように保障するのかという課題を提起したもの。		

2	シンポジウム 高等職業教育はコミュニティ・カレッジになるか？(司会進行役として)	単著	2005.01.00	産業教育研究 第35巻第1号 日本産業教育学会	高等職業教育機関としての専門学校や能力開発大学校、そして短期大学など、職業教育機関としての機能を備える教育機関がコミュニティ・カレッジ、つまり国民的教養を養成する高等教育機関の一環として存在しうるか否かについての議論の場であったが、議論の土台である国民的教養(コミュニティ・カレッジ)についての共通概念の一致が難しく、議論はまとめられなかった。
3	図書紹介 「働くということ」ロナルド・ドーア著	単著	2005.07.00	産業教育学研究 第35巻第2号 日本産業教育学会	労働が効率化されたにも関わらず、労働時間が減らないのはなぜか？労働時間の短縮よりも人間のモノに対する欲望が強いために、余剰を食いつくしていること。しかしこうした状況は異常であり、労働者連帯と良識ある経営者達、そして何より社会的な安定を望む人たちの力で社会が変わらなければならないという著者の強い意志を紹介した。
4	普通教育と職業教育の統合に向けて	単著	2005.10.01	「日本の教育史学」教育史学会 第48集	学校教育における普通教育と基本的には学校外でおこなわれる職業教育を、どのようにつなぎ、統一していくのか、その教育を誰がどこでどのように保障するのかという課題解決に向けての提言。人間形成のためには普通教育と職業教育の統合が必要であるという見解を整理した。
5	シンポジウム 産業教育は2007年問題にどう立ち向かうかー教員・指導員の現状と要請問題ー司会として	単著	2006.01.00	産業教育学研究 第36巻第1号 日本産業教育学会	団塊の世代が大量退職する2007年問題を職業訓練・教育に携わる教員・指導員の立場から議論したが、明らかになったのはいわゆるグローバリゼーションの進行の下で80年代から進められてきたリストラによる影響が深刻なことが浮き彫りにされた。また95年以降、多くの企業が取り組んできた諸改革が、実は職業訓練・教育に対して深刻な問題を引き起こしていることが明らかになったシンポジウムであった。
6	図書紹介 「働くことを学ぶ」全国進路指導研究会編	単著	2007.01.00	産業教育学研究 第37巻第1号 日本産業教育学会	学校教育で体験学習、職場体験などが盛んに導入されるようになってきた。しかし、わが国の学校教育は職業について教えることに関して、一貫して中立的な立場を維持してきた。そのことがわが国の教育と訓練にかかわる重要な問題でもあり、また企業内教育や社畜と呼ばれる雇用者が輩出する背景でもある。働くことを学ぶにはどんなことが必要とされているのかについて、教育現場の様々な取り組みを紹介し、整理した一冊である。
その他					
1	図書紹介 「家庭科が狙われている検定不合格の裏に」鶴田敦子著	単著	2004.05.00	技術教室 No.622号	新家庭科教科書の検定の裏側に新規参入者に対する厳しい検定と、基準もなく責任もない検定意見のつけ方、そして組織的な秘密主義の全体像を著者の経験をもとに紹介している。検定の理不尽さを追及した。
2	図書紹介 「13歳のハローワーク」村上龍著	単著	2004.06.00	技術教室 No.623号	思春期に子ども達が思い、迷う進路の問題に感性豊かな資料を提案した、この本の優れた点を紹介。いろいろな仕事に触れる一歩としてこの本の持つ意味を紹介した。
3	図書紹介 「就職に気が重たいあなたへ」坂井希・伊藤彰男著	単著	2004.07.00	技術教室 No.624号	若者の就職が氷河期とも言われ、また若者に働く意欲がないとも言われる時代に、その社会的な背景と抜本的な対策の提言を支持、紹介した。
4	一人ひとりの子どもによりそった教育の実践を	単著	2004.11.00	技術教室 No.628号	今日子ども達がおかれた状況の中で、豊かな技術教育を実践するための諸条件と可能性を追究した。
5	総合的な学習の時間における環境学習	単著	2004.11.00	技術教室 No.628号	小学校の総合的な学習の時間におけるファーストフード店やコンビニの環境対策への取り組みを比較し、各グループによる処理法、対策、そして戦略の違いを浮き彫りにし、問題点を明らかにした。
6	月報「技術と教育」	単著	2005.01.00	技術教室 No.639～641号	毎月の新技術と教育に関する情報の紹介。
7	海外の職業教育ー中国の職業教育事情視察	単著	2005.03.00	技術教室 No.332	中国、山東省青海での省教育委員会主催の職業教育研修会に出席、参加し、当地の職業教育の現状を国際的に比較し、中国の職業教育制度がヨーロッパ型、特に北欧式スタイルで再編成されていることを紹介。
8	図書紹介「働くということ」日本経済新聞社編	単著	2005.03.00	技術教室 No.632号	フリーターやニートが若者の間に増加しているが、働くことに意味をさまざまな職業について紹介し、働くことの意味を問い直したものの。

9	図書紹介「学校のない社会への招待」マドゥ・スリ・プラカシュ & グスタボ・エステバ著	単著	2005.04.00	技術教室 No.633 号	学校という社会制度、国家制度がどのように人間の形成をゆがめているのか、学校の無い社会から、学校の持つ意味、役割を問い直したもの。
10	図書紹介「隠された風景死の現場を歩く」福岡賢正著	単著	2005.07.00	技術教室 No.636 号	屠畜をする人や野良犬や野良猫を捕獲し、安楽死させる保検所職員など、社会的に必要とされる仕事に対する社会の偏見や蔑視を鋭くえぐりだし、人間のエゴイズムを痛烈に批判したドキュメンタリーなルポルタージュとして紹介。
11	図書紹介「働くということ」ロナルド・ドーア著石塚雅彦訳	単著	2005.08.00	技術教室 No.637 号	労働の意味が消費欲と新しい経済体制、生産体制により大きく変化し、人間の生活スタイルを大きく変化させていることに改めて警鐘を鳴らし、労働のあり方を考え直す契機を与えた書物として紹介した。
12	イラスト版子どもの技術 子どもとマスターするものづくり 25 のわざとこつ	共著	2005.08.15	合同出版	産業教育研究連盟 [編] 金子政彦、沼口修 [監修] 全体の監修と p82～85 「一枚の原板から携帯用木枕をつくる」を担当執筆。中学校技術科の木材加工で用いる技術、知識を土台にして、発展的にものづくりを進める場合の題材 25 例をとりあげ、材料、道具、加工法などを丁寧に解説した本。技術的には初歩的な段階から発展的な段階までを見通した配列となる様に工夫した。また道具や材料もなるべく身近な所で手に入れやすいものを中心に構成をした。
13	月報「技術と教育」	単著	2006.01.00	技術教室 No.642～653 号	毎月の新技術と教育に関する情報の紹介。
14	図書紹介「新卒ゼロ社会—増殖する「擬態社員」」岩間夏樹著	単著	2006.04.00	技術教室 No.645 号	若者の労働に対する意識が急速に変化してきている今日、意識調査データをもとに、新卒社員がゼロになる社会が到来することを予測。今日の若者は自分らしさを求めて労働、仕事を探そうになっており、会社員としての帰属意識が急速に薄れていると警鐘をならす。
15	図書紹介「工業高校の挑戦」斉藤武雄・田中喜美・依田有弘編著	単著	2006.05.00	技術教室 No.646 号	専門高校、とりわけ工業高校における授業改革の取り組みの紹介。現実の職業教育と専門高校における教育とのギャップや社会的なニーズ、生徒達の現状などさまざまな課題に挑戦している姿が描かれている。
16	図書紹介「働きすぎの時代」森岡孝二著	単著	2006.10.00	技術教室 No.651	グローバル資本主義、IT化の進行、そして消費資本主義が人間の労働を際限なく拡大させる三大要因だとして、死に至らしめる労働に対し強い規制を訴えている。
17	特別支援教育と技術・家庭科「授業を変えよう！」	単著	2006.12.00	技術教室 No.653	特殊教育から特別支援教育へと社会的教育の概念が変化してきている今日、その技術・家庭科への対応はどのようにあるべきかについて、特別支援教育の本質から捉えなおそうとした。従来型の教育ではなく、生活機能に応じて教育のあり方を工夫し、授業を仕組みなおす必要があることを指摘した。
18	図書紹介「日本の農業」原剛著	単著	2006.12.00	技術教室 No.653	わが国農業の変遷をまとめたもの。特に農業政策と現実の農家の関係について取材に基づいた状況を指摘。農業政策が欧米流の農業技術や経営法を導入することに熱心で、現実の農家の状況を把握していないことを厳しく指摘している。
19	図書紹介「働くことを学ぶ」全国進路指導研究会編	単著	2007.01.00	技術教室 No.654	職場体験、キャリア教育などを通して働くことの意味や役割を経験する機会が増えてきているが、このような経験を蓄積しつつ、働くことの喜びや喜びを分かち合える人間関係の形成などについて豊富な事例を紹介。
20	月報「技術と教育」	単著	2007.01.00	技術教室 No.654～659 号	毎月の新技術と教育に関する情報の紹介。
21	図書紹介「労働ダンピング」中野麻美著	単著	2007.02.00	技術教室 No.655	次第に下がってくる派遣労働者の時間給。こうした実態を弁護士の立場から、労働力を商品として扱う社会的な危険性を鋭く指摘。労働市場を持続可能なものにするための転換を訴えている。
22	図書紹介「人生の教科書『家づくり』」藤原和博著	単著	2007.04.00	技術教室 No.657	東京の公立中学校に民間人として登用された民間出身の校長として名前が知れた筆者が、それまでの海外経験や日本での転居を通して積み重ねてきた経験を家作りに生かそうというもの。豊かな海外経験を生かした家づくりのコンセプトが提起してある。

23	生態学からみた技術・家庭科の構築を	単著	2007.12.00	技術教室 No.665	経済学ではなく、生態学を中心とした技術の再編成、再構築についてレスター・ブラウンなどが主張する生態学を中心に技術・家庭科を捉え直したらどの様な技術・家庭科になるかを概観した。
24	新しい技術・家庭科の構想	単著	2008.01.00	技術教室 No.666	従来の産業技術を中心とする技術・家庭科ではなく、生態学や環境を保全し、自然エネルギーを活用した新しい技術・家庭科の構想について展望したもの。
25	図書紹介「親子で学ぼう 電気の自由研究」	単著	2008.03.00	技術教室 No.668	家庭で、しかも親子のできる電気実験を集めたもの。実験を通して電気のことが色々分かるように工夫されている
26	図書紹介「粗食で生き返る」	単著	2008.04.00	技術教室 No.669	粗食というより生きるために必要最小限のモノ（栄養を含んだ）を食べることで、成人病などの病気から解放され、心身共に健康に生活できるようになるという体験を基にした健康本の1つ。
27	図書紹介「史的システムとしての資本主義」	単著	2008.07.00	技術教室 No.672	約 500 年の歴史を持つ資本主義というシステムが制度崩壊の危機にあることを、具体的な社会、行政、商業等の事実を踏まえて解明したもの。崩壊しつつあるか、その後は全く見当もつかないという、歴史家が史実等に基づいて書いた一冊。
28	月報「技術と教育」	単著	2008.12.00	技術教室 No.677	毎月の新技術と教育に関する情報の紹介。
29	図書紹介「木育のすすめ」	単著	2009.01.00	技術教室 No.678	木材加工に慣れ親しむために木材加工を広めようと、木育という言葉を通じて木工を普及させるための知恵と工夫が説かれている。
30	図書紹介「ものづくり 木のおもしろ実験」	単著	2009.04.00	技術教室 No.681	木の持つ様々な性質を実験を通して理解させようという本である。それぞれ工夫に富んだ実験や簡単に単純な実験などものづくりに役立つ実験がとり入れられている。
31	研究ノート「高度成長期における北部九州の産業と労働力構成の変化に関して一職業能力の開発と職業的な自立にかかわって」	単著	2009.03.01	九州大学教育社会学研究集録 第 10 号	九州の高度成長期における、中卒および高卒労働力者（新規学卒者）の就職状況と就業先での職業能力の開発状況について、実態調査と統計資料から中小零細企業における独立自営者の割合が高いこと、そのための条件として、仲間や支援者、そして経営的な見通しに明るいことなどが必要とされていること等を明らかにした。37-46 頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1973.08.00	～	現在	産業教育研究連盟会員（昭和 49 年度～昭和 60 年度 常任委員、昭和 61 年度～平成 2 年度 事務局長、平成 3 年度～現在 常任委員、平成 12 年度～現在 委員長）
2	1974.07.00	～	現在	子どもの遊びと手の労働研究会会員
3	1974.09.00	～	現在	日本教育学会会員
4	1976.07.00	～	現在	日本産業教育学会会員（昭和 52 年度～61 年度 事務局員、昭和 61 年度～平成 16 年 10 月 理事、平成 13 年 12 月～現在 学会誌編集委員、平成 19 年 11 月～現在 理事）
5	1978.07.00	～	現在	日本教育社会学会会員
6	1990.02.00	～	現在	日本カリキュラム学会会員
7	2004.11.00	～	現在	日本キャリアデザイン学会会員
8	2006.04.01	～	2008.03.31	東京都板橋区教育委員会東京都板橋区学校運営連絡協議会委員
9	2006.04.01	～	現在	(財) 能力開発工学センター評議員
10	2008.12.01	～	2009.11.30	日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	松村 健吾	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 倫理学『倫理のディアレクティーク第三版』(再掲)		2006.04.10				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『倫理のディアレクティーク改訂第三版』	単著	2006.04.10	文化書房博文社	倫理学をディアレクティーク(弁証法)の視点から捉えようとしてものである。第一章では古代ギリシアの倫理観を文学作品などを交えながら考察し、更にはソクラテスおよびアリスとテレスの倫理観を考察した。第二章は近代のヨーロッパの倫理観を取り上げ、それが自己保存の概念を中心に構成されていることを明らかにした。		
2 『革命と宗教—初期ヘーゲル論考』		2007.05.30	近代文芸社	これは下記の学位論文「初期ヘーゲル論考」に手を加えた著作である。新全集版の第一巻に依拠した初の本格的な初期ヘーゲル研究書であり、若いヘーゲルの思想の形成をドイツの民衆・民族意識の形成とフランス革命の影響の中で描いたものである。		
論文						
1 ベルンのヘーゲル	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要 43 号	ヘーゲルのベルン時代の草稿を研究したもので下記の「初期ヘーゲル論考」の土台のひとつとなったものである。		
2 初期ヘーゲル論考		2005.11.09	博士学位論文 (提出先一橋大学大学院社会学研究科)	若いヘーゲルの思想形成を少年時代・チュービンゲン大学時代・ベルン時代と精密に考察した研究である。内容的には上記の著書『革命と宗教』と重なるので省略する。		
3 啓蒙の夕暮れ	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要 47 号	レッシングの晩年の作『人類の教育』(1780 年)を読み解いたもの。「魂の再生」の思想を現代に純化することによって、レッシングは民衆の啓蒙の時代の終りを告知した。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	村山 士郎	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 『児童詩でつづる戦後子ども生活誌』(ノエル) 1巻1945年～59年、2巻1960年～74年、3巻1975年～89年		2005.00.00	平成17年～平成19年 セミナールでの学習研究のまとめ。戦後の子どもの書いた児童詩を資料に、戦後の子どもの生活誌を組み立てた。				
2) 2006年大東文化大学「学生による授業評価」		2006.00.00	平成18年度は右記の2科目について実施 現代子ども論…4.3 基礎演習…4.8 授業への満足度(5点満点)の項目のみ記載				
3) 聞いてよ! 私たちのつづやきと叫び		2008.03.00	ノエル 子どもの詩を学生のゼミであつめて編集し、それにコメントを加えたもの。(166頁)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『失敗だらけの新人教師』		2005.00.00	新人教師たちの喜びと困難の手記をもとに、新人教師が何を求めているのかにわかりやすく解説。				
2) 失敗だらけの新人教師(大月書店)		2005.05.00	教職必修科目「教師論」の参考教材。A5版、142頁				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 埼玉県和光市立白子小学校校内研修講師(3年間)		2005.04.00	(2005年4月～2008年3月)研究テーマ「豊かな学びをつくる ―豊かな言葉と表現を育てる―」の指導と講義。				
2) 埼玉県和光市立新倉小学校校内研修講師		2009.04.00	(2009年4月～現在)研究テーマ「子どもが生き生きと輝く国語の研究」の指導と講義。				
3) 東京都八王子市立長池小学校校内研修講師		2009.04.00	(2009年4月～現在)研究テーマ「豊かな人間関係を築ける子どもの育成 ―国語『読解力』を高める学習を通して―」の指導と講義。				
4) 教育講演会(多数)			その他、各地での教育講演会で講演活動を行っている。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 村山俊太郎 生活綴方と教師の仕事	編著	2004.08.00	桐書房	戦前の北方性生活綴方の実践家である村山俊太郎の仕事を今日に継承すべき実践論の視点で再構成している。p.398			
2 事件に走った少女たち	単	2005.01.00	新日本出版	大阪・家族全員殺害計画、長崎佐世保の小六児童殺傷事件、などを分析し、今日の子どもの「心の闇」を分析。子どもの生活の組み替えみよる人間的自然の復権を提起。p.190			
3 子どもの野性と生活実感―児童詩で綴る戦後子ども生活誌1945～59年	編著	2005.03.00	ノエル	現代の子どもを歴史的に捉えようとする際、子どもを取り巻く歴史ではなく、子ども自身の生活史をどのようにしてとらえることができるのか。この仕事では、戦後子どもたちの書いたたくさんの日記・詩・作文を集めて、子どもの生の声で生活誌(史)をつづる試み。大学のゼミ活動として学生と一緒につくったところがユニーク。p.222			

4	失敗だらけの新人教師	編著	2005.05.00	大月書店	新人教師は、最初の職場で何にとまどい、どんな援助を求めているのか。新人教師たちの手記をもとにして、失敗するのがあたりまえと呼びかけている。大学の教師論のテキストとして使用。 p.142
5	子どもの生活世界と高度成長期 - 児童詩でつづる戦後子ども生活誌 1960～74年	編著	2006.03.00	ノエル	同上の問題意識で1960年～74年 p.193
6	現代の子どもと生活綴方実践	単	2007.01.00	新読書社	日本の生活綴方実践の現状や論争を分析しながら、伝統的な生活綴方を「ことば・表現・コミュニケーション」の視点から再構成し、その臨床教育学的可能性を探っている。1章子どもの心の闇を解き放ち、安心と信頼を育てる。2章ことばと表現を耕し、生活に向き合う子どもを育てる。3章日本作文の会の指導論をめぐっての論争的諸課題。4章生活綴方の教育学をめざして p.411
7	子どもの楽しさの変貌と消費社会 - 児童詩でつづる戦後子ども生活誌 1975～89年	編著	2007.02.00	ノエル	同上の問題意識で75年～89年 p.206
8	小学校国語（書くこと）全3巻	共	2007.02.00	大月書店	日本の子どもたちの文章表現能力は著しく低下しているといわれている。とりわけ小学校時代に「書く力」をどう高めるかが課題となっている。小学校1年から6年生までの「書くこと」の指導体系を試みている。1巻p.126、2巻p.126、3巻p.126
9	いじめ 子どもたちの叫び	共	2007.04.00	大月書店	2006年、いじめ自殺事件が連続した。福岡県筑前町の森啓祐君の自殺を対象にしなが、今日のいじめの特徴であるからかいや冷やかしを分析し、今日の子どもたちの人間関係にいじめいじめられ関係の常態化が進行していることを指摘している。 p.166
論文					
1	現代の子どもとことば	単	2004.00.00	『国語の授業』No.185、186号	現代の子どものことばを事件の主人公になってしまった少女のブログ日記を分析し、ことばの抽象化、商品化、記号化が進行していることを解明。
2	少年事件と書きことば・表現をめぐる研究課題	単	2005.00.00	『作文と教育』平成17年1月号	書きことばの発達した子どもは、学力や人間性が豊かであるといわれてきた。ところが、事件の中の子どもたちは文章表現能力が優れており、そのすぐれている表現能力で自己の病理を深めてしまう現代性を指摘。
3	「ことば・表現・コミュニケーション」リテラシーとその実践的アプローチ	単	2006.03.00	2003年～05年度科研費・基盤研究(B)成果報告書(課題番号15330168)	従来、生活綴方として行われてきた実践をリテラシー概念から整理。「ことば・表現・コミュニケーション」リテラシーが、リテラシーの土台をなすだけでなく、人間的諸力の基礎をなしていることを現場の実践者たちとの実践分析から探求している。
4	ことばの表現・コミュニケーションの実践的課題	単	2008.00.00	旬報社 雑誌『人間と教育』	フィンランドの国語読本(教科書)の書き方指導の形式性を批判。(7ページ)
5	学童ほいくの子ども観と生活づくり	単	2008.04.00	学童保育連絡協が会編『日本の学童ほいく』	現代の子どもの生活の現実を明らかにしながら、その発達の方向性を解明しようとしたもの。
その他					
1	村山俊太郎におけるリアリズム論の今日的意味—北方性教育運動における村山俊太郎と佐々木昂研究ノート	単	2004.00.00	日本作文の会第53回大会・生活綴方の理論分科会での報告	戦前の北方性生活綴方の理論的指導者であった佐々木昂、村山俊太郎の生活綴方実践論を分析し、その到達していた理論は、ヴィゴツキーの意味論を含んだ表現論に到達していたことを仮説的に提起した。そして、戦後生活綴方実践論がこの到達点を学ぶことなしに、または、無理解的にすすめてきたことが、大きな誤りを生んだ。

2	それでも子どもは未来志向	単	2005.00.00	新日本婦人の会ブックレット	日本の2000年以降の子どもの実態や事件を分析して、子育ての方向性をわかりやすく解説したもの。そこでは、様々な否定的な事態が進行しているが、子どもはそういう時代でも自分の生き方を探求しており、その意味で「未来志向」とあると訴えた。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1972.00.00	～	現在	日本教育学会会員	
2	1997.00.00	～	現在	日本作文の会委員（1997年～2007年 委員長、2007年～現在 副委員長）	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	和田 章	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.8 (5 段階評価)。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 2003.04.01 ~ 2007.03.31		国際野外の表現展実行委員会 (委員)				

(表 25)

所属	文学部教育学科	職名	教授	氏名	和田 章		
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等		
1	第 51 回陶彫展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2004.06.07			
2	国際野外の表現展 2004	埼玉県東松山市		2004.10.01			
3	第 19 回土反展	三番町ギャラリー (川越市)		2004.11.07			
4	第 52 回陶彫展	ギャラリーくぼた (東京、京橋)		2005.06.06			
5	第 20 回土反展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2005.11.00			
6	第 53 回陶彫展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2006.06.00			
7	第 21 回土反展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2006.10.00			
8	第 54 回陶彫展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2007.06.00			
9	第 22 回土反展	ギャラリー藤屋 (埼玉坂戸)		2007.11.00			
10	第 54 回陶彫展	ギャラリーくぼた (東京京橋)		2008.06.00			
11	第 23 回土反展	ギャラリー藤屋 (埼玉坂戸)		2008.11.00			

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	金澤 妙子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『幼児教育課程・保育計画総論 [第3版]』(再掲)		2005.10.20	建帛社 第5章「保育所2歳児の計画と実践」(単独執筆) 保育所2歳児の指導計画として、週日案の作成について具体的な子どもの姿・保育を例にその思考と手順を示した。用紙の形式も含めて、書くことが自分の保育にとって有意義になるよう考え修正していくところに保育者の主体性がある。保育者養成系短大・大学の「幼児教育課程論」「保育計画総論」の教科書として使用。 子どもと育総合研究所森上史朗/東京家政大学名誉教授阿部明子編著 筆者は第5章 (p.53~85) 担当。戸田雅美、北村都美子、金澤妙子、河邊貴子、佐伯一弥、徳安敦 B5版、総頁149頁。			
2) 『教育課程・保育課程論』(再掲)		2008.12.04	東京書籍 第四章「保育所における保育課程」(単独執筆) 保育所の全体計画としての保育課程について、保育所保育指針に基づいて説明し、保育課程の必要性について述べた。また、保育課程の作成に際して、保育所保育指針を押さえた上で、保育所の事例を紹介しながら、①発達過程、②子どもの実態と家庭の状況、③地域の実態、④保護者の意向を考慮すること、さらに、保育課程の実際の使われ方と課題について言及した。 聖心女子大学准教授河邊貴子編著、永田陽子(日本女子大学附属豊明幼稚園園長)、金澤妙子他、A4版、総頁127 中9頁(p.29~37)			
3) 『幼児教育課程・保育計画総論』補遺(再掲)		2009.03.01	建帛社 「保育所における保育課程：保育所保育指針の改定を踏まえて」 全体計画としての保育所のカリキュラムは、「保育計画」と呼ばれていたが、平成20年、保育所保育指針が改定され、「保育課程」となった。そこで、保育所における「保育の計画」について整理し、全体計画としての保育課程とその必要性、保育課程の作成に際して考慮すること、保育課程の使われ方と課題について述べた。(p.1~4)			
4) 『演習 保育内容総論』(再掲)		2009.03.05	建帛社 演習2「子ども理解と保育内容」(p.3~12 共同執筆)では、子ども理解から保育内容が作られること、一人一人の体験の質に着目して保育内容を考えることについて述べた。演習4『「生活」から捉えられる保育内容』(p.21~30 単独執筆)では、食事、排泄、休息や睡眠、清潔、片付けといった様々な生活場面に見る保育内容を具体的に考えた。演習5『「環境」から捉えられる保育内容』(p.31~40 単独執筆)では、人的、物的、室内、戸外、家庭、地域や社会といった環境から見た保育内容を具体的に考えた。演習13「幼稚園・保育所と小学校との連携と保育内容」(p.104~115 共同執筆)では、保育内容と小学校の教育内容の異同、連携の現状と問題点・課題について述べた。演習14「保育内容と保育者の専門性」(p.116~127 単独執筆)では、保育所保育指針をもとに、保育者の専門性を具体的な事例の中に見た。演習15「保育内容の今日的課題と保育者の専門性：まとめ」(p.128~132 単独執筆)では、保育という仕事、チームを組むことと保育者の専門性について言及した。 金澤妙子/東京家政大学短期大学部専任講師佐伯一弥編著、阿部和子、岡田たつみ、金英珠、佐藤暁子、竹林美紀子、戸田雅美、久富陽子、古橋さつ子 A5版、総頁143頁。			

5) 『演習 保育内容 言葉』(再掲)	2009.03.05	建帛社 演習5「一つの言葉で」(11頁)、演習6「人とつながる言葉1」(11頁) 演習5(p.30~40)では、一語で様々なことを伝える乳児期の言葉の発達の特長を保育事例で紹介し、保育者に必要なかかわりについて考えた。演習6(p.10~51)では、主に2~3歳児が言葉を通して他者とのかかわり、言葉や人とのかかわりを広げていく様子との時期に大切にしたいことについて言及した。 東京家政大学教授戸田雅美編著、金澤妙子、永倉みゆき、内藤知美、和田美沙子、徳安敦 A5版、総頁136頁。
6) 『保育原理—新しい保育の基礎—』(再掲)	2009.04.15	同文書院 第4章「乳幼児の遊びと総合的な指導」1.幼児の遊びと発達の多様性(1)保育における遊びの重要性(2)遊びを通して乳幼児期に何が育つのか①心情的なもの②身体的な育ち③知的な育ち④技術・技能的な育ち⑤社会性の育ち⑥感性の育ちに焦点をあてて考えた。2.遊びの充実と保育士の援助では、具体的な事例をもとに、遊びが充実する援助とはどういうことかを考えた。 岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行監修 大妻女子大学教授 柴崎正行編著 筆者は第4章(p.43~64)担当。B5版、総頁210頁。
7) 『演習 保育内容 表現』(再掲)	2009.04.20	建帛社 演習4「乳幼児の発達と表現」(11頁)子どもが発達すること、「表現」が子どもが育つとともに変っていくこととはどのように関係しているのかについて論じた。演習7「受け止めること・表すこと」(12頁)乳児における「表現」をどう考えるか。子どもの「あrawし」を保育者がとらえ、受けとめ、反応し、呼应・共鳴しながら、日々の生活を作り出していることを論じた。演習8「コミュニケーションとしての表現」(12頁)、見ること、まねること、見せること、一緒に動くこと・歌うこと、きくこと、やりとりすること、かけあうこと、うかがうこと、話し合うこと、おしはかることなど、関係性の中で育まれる「表現」に目を向け論じた。 大妻大妻女子大学准教授 岡健、児嶋輝美、岩田遵子、今川恭子、牧野由里、田代幸代、岡田たつみ、金澤妙子 A5版、総頁144頁。
8) 『演習 保育内容 人間関係』(再掲)	2009.04.30	建帛社 演習14『育ちにかかわる「私たち」の人間関係』(13頁)子どもの育ちにかかわる「私たち」を園で働く人たち、保護者、地域住民、関連分野の専門家と捉え、それらの人達と保育者・園との人間関係が子どもの育ちにどのように関わっているのかを保育事例を通して考えた。 大妻女子大学准教授田代和美/駒沢女子短期大学講師松村正幸編 梅田優子、片川智子、金澤妙子、柁島香代、金瑛珠、小林研介、濱名浩、西原彰宏、松田清美 筆者担当分はp.101~113 A5版、総頁127頁。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 新潟県十日町市	1990.04.00	<保育実践検討会等>妻有保育会(平成2年4月~現在)
2) 静岡県榛原郡本川根町立三ツ星保育園	2004.00.00	中川根町保育園連絡会保育士研修会 あらかじめ提出された週日案にチェックを入れ、それをもとにして保育の検討を行う。(平成16年)
3) 「実践に生きる研修のあり方」	2005.01.15	静岡県榛原郡三根会保育研究会 保育の当事者である保育士の研修のあり方として、この町では週日案を持ち寄って保育を検討しあってきた。その過程に立ち会った者として、日頃の自分たちの実践を記録すること、その記録を読み合いながら見直していくことの重要性について述べた。
4) 静岡県榛原郡本川根町徳山聖母保育園	2005.10.08	中川根町保育園連絡会保育士研修会 あらかじめ提出された週日案にチェックを入れ、それをもとにして保育の検討を行う。(平成17年10月8日)
5) 静岡県榛原郡本川根町立三ツ星保育園	2006.07.01	川根本町保育園連絡会保育士研修会 あらかじめ提出された週日案にチェックを入れ、それをもとにして保育の検討を行う。(平成18年7月1日、10月14日、平成19年2月17日)
6) 「新十日町市公立保育園の保育目標作成のための基礎資料への提言」	2007.02.23	十日町市保育研究会/於情報館「新十日町市公立保育園の保育目標作成のための基礎資料への提言」各園から提出された保育目標作成のための基礎資料を読み、保育指針の前提となる子ども観・保育観、体験の質を問う保育内容の考え方にふれ、新しい保育目標を考えていくために押さえておきたいことについて述べた。

7) 静岡県榛原郡川根本町町立桜保育園	2007.06.30	川根本町保育園連絡会 行事を見直すということで、子どもの日のこいのぼり集会の週の週日案が提出された。あらかじめ提出されたこれらの2週間分の週日案を選び、見直してみても本人のコメントに、チェックを入れ、当日は、各年齢別のグループ討議に参加し、総括を行なった。
8) 保育と実践の研究・安城の会（愛知県三河安城市）	2007.07.18	「4歳児T男の保育について」（園長提供）「5歳児A子とのかかわりから」（主任提供）の2事例についてあらかじめ記録を読んだ感想も提出し、検討を行なった。
9) 和歌山県新宮市たづはら保育園	2007.07.20	あらかじめ提出された1、2歳児クラスのレポート「保育園での生活を見直す」について、コメントを入れ返却し、それを読んだレポートを提出してもらっていた。2日間の保育参観後、実践とこれら2つのレポートのすり合わせを行なった。
10) 社会福祉法人虎岳会 虎岳保育園（香川県丸亀市）	2007.08.28	隣接幼稚園との連携をはかって運営されている0、1、2歳児のみの保育園である。保育参観、指導案、気になる子どものレポートをつき合わせて、園内研修を行なった。
11) 学校法人虎岳幼稚園（香川県丸亀市）	2007.08.29	提出された指導計画・保育の課題を前もって読み、保育参観後、検討を行なった。
12) 和歌山県新宮市たづはら保育園	2007.09.01	前回（7.20）の園内研修「保育園での生活を見直す、とくに園生活における生活感」を受けて、前もって園長から「2007.9.1 園内研に向けて」が提出された。また各クラスの「遊びマップ」も提出され、保育参観後の感想をあわせて検討した。「子どもが安心して生活できる場、空間」「あそびが楽しめる空間」（園長）をキーワードに、あそびマップ（特に室内遊びを中心に）を参考にしながら考えた。
13) 保育と実践の研究・安城の会（愛知県三河安城市）	2007.09.04	「2歳児のごっこあそびを考える 新任保育士の観察記録より」という、主任サイドからの事例の検討を行った。
14) 保育と実践の研究・安城の会（愛知県三河安城市）	2007.11.16	「0歳児T児の母親対応から親の思いに添う親支援について考えるー延長保育の受け入れ事例を通してー」の事例検討を行った。
15) 静岡県榛原郡川根本町町立桜保育園	2007.11.17	あらかじめ提出された週日案をもとにグループ討議を行ない、これまでの川根本町の保育についての総括を行なった。
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 「幼児教育課程・保育計画総論〔第3版〕」	共著	2005.10.20	建帛社 森上史朗・阿部明子編著	第5章「保育所2歳児の計画と実践」（単独執筆）保育所2歳児の指導計画として、週日案の作成について具体的な子どもの姿・保育を例にその思考と手順を示した。用紙の形式も含めて、書くことが自分の保育にとって有意義になるよう考え修正していくところに保育者の主体性がある。総頁149頁。pp.53～85。森上史朗、阿部明子、戸田雅美、北村都美子、金澤妙子、河邊貴子、佐伯一弥、徳安敦
2 第四章「保育所における保育課程」（単独執筆）	共著	2008.12.04	東京書籍 編著『教育課程・保育課程論』	保育所の全体計画としての保育課程について、保育所保育指針に基づいて説明し、保育課程の必要性について述べた。また、保育課程の作成に際して、保育所保育指針を押しえた上で、保育所の事例を紹介しながら、①発達過程、②子どもの実態と家庭の状況、③地域の実態、④保護者の意向を考慮すること、さらに、保育課程の実際の使われ方と課題について言及した。聖心女子大学准教授河邊貴子編著、永田陽子（日本女子大学附属豊明幼稚園園長）、田代幸代（立教女学院短期大学講師）、金澤妙子、他総頁127頁中9頁（pp.29～37）

3	「保育所における保育課程：保育所保育指針の改定を踏まえて」	単著	2009.03.01	建帛社『幼児教育課程・保育計画総論』補遺	全体計画としての保育所のカリキュラムは、「保育計画」と呼ばれていたが、平成20年、保育所保育指針が改定され、「保育課程」となった。そこで、保育所における「保育の計画」について整理し、全体計画としての保育課程とその必要性、保育課程の作成に際して考慮すること、保育課程の使い方と課題について述べた。(p.1～4)
4	演習2「子ども理解と保育内容」(10頁 共同執筆) 演習4『「生活」から捉えられる保育内容』(10頁 単独執筆) 演習5『「環境」から捉えられる保育内容』(10頁 単独執筆) 演習13「幼稚園・保育所と小学校との連携と保育内容」(12頁 共同執筆) 演習14「保育内容と保育者の専門性」(12頁 単独執筆) 演習15「保育内容の今日的課題と保育者の専門性：まとめ」(5頁 単独執筆)	共編著	2009.03.05	建帛社『演習 保育内容総論』	演習2「子ども理解と保育内容」(p.3～12)では、子ども理解から保育内容が作られること、一人一人の体験の質に着目して保育内容を考えることについて述べた。演習4(p.21～30)では、食事、排泄、休息や睡眠、清潔、片付けといった様々な生活場面に見る保育内容を具体的に考えた。演習5(p.31～40)では、人的、物的、室内、戸外、家庭、地域や社会といった環境から見た保育内容を具体的に考えた。演習13(p.104～115)では、保育内容と小学校の教育内容の異同、連携の現状と問題点・課題について述べた。演習14(p.116～127)では、保育所保育指針をもとに、保育者の専門性を具体的な事例の中に見た。演習15(p.128～132)では、保育という仕事、チームを組むことと保育者の専門性について言及した。金澤妙子/東京家政大学短期大学部専任講師佐伯一弥編著、阿部和子、岡田たつみ、金英珠、佐藤暁子、竹林美紀子、戸田雅美、久富陽子、古橋さつ子 A5版、総頁143頁。
5	演習5「一つの言葉で」(11頁) 演習6「人とつながる言葉1」(11頁)	単著	2009.03.05	建帛社『演習 保育内容言葉』	演習5(p.30～40)では、一語で様々なことを伝える乳児期の言葉の発達の特長を保育事例で紹介し、保育者に必要なかわりについて考えた。演習6(p.10～51)では、主に2～3歳児が言葉を通して他者とかわり、言葉や人とのかわりを広げていく様子とこの時期に大切にしたいことについて言及した。東京家政大学教授戸田雅美編著、金澤妙子、永倉みゆき、内藤知美、和田美沙子、徳安敦、A5版、総頁136頁。
6	第4章「乳幼児の遊びと総合的な指導」	単著	2009.04.15	同文書院『保育原理－新しい保育の基礎－』	1.幼児の遊びと発達の多様性(1)保育における遊びの重要性(2)遊びを通して乳幼児期に何が育つのか①心情的なもの②身体的な育ち③知的な育ち④技術・技能的な育ち⑤社会性の育ち⑥感性の育ちに焦点をあてて考えた。2.遊びの充実と保育士の援助では、具体的な事例をもとに、遊びが充実する援助とはどういうことかを考えた。岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行監修 大妻女子大学教授 柴崎正行編著 筆者は第4章(p.43～64)担当。B5版、総頁210頁。
7	演習4「乳幼児の発達と表現」(11頁) 演習7「受け止めること・表すこと」(12頁) 演習8「コミュニケーションとしての表現」(12頁)	単著	2009.04.20	建帛社『演習 育内容 表現』	演習4では、子どもが発達すること、「表現」が子どもが育つとともに変っていくこととはどのように関係しているのかについて論じた。演習7では、乳児における「表現」をどう考えるか。子どもの「あらわし」を保育者がとらえ、受け止め、反応し、呼応・共鳴しながら、日々の生活を作り出していることを論じた。演習8では、見ること、まねること、見せること、一緒に動くこと・歌うこと、きくこと、やりとりすること、かけあうこと、うかがうこと、話し合うこと、おしはかることなど、関係性の中で育まれる「表現」に目を向け論じた。大妻女子大学准教授 岡健、児嶋輝美、岩田遵子、今川恭子、牧野由里、田代幸代、岡田たつみ、金澤妙子 A5版、総頁144頁。
8	演習14『育ちにかかわる「私たち」の人間関係』(13頁)	単著	2009.04.30	建帛社『演習 保育内容 人間関係』	子どもの育ちにかかわる「私たち」を園で働く人たち、保護者、地域住民、関連分野の専門家と捉え、それらの人達と保育者・園との人間関係が子どもの育ちにどのように関わっているのかを保育事例を通して考えた。大妻女子大学准教授田代和美/駒沢女子短期大学講師松村正幸編 梅田優子、片川智子、金澤妙子、椛島香代、金英珠 小林研介、濱名浩、西原彰宏、松田清美 筆者担当分はp.101～113 A5版、総頁127頁。
	論文				

1	「子どもが口にするものをめぐる保育実践の検討」	単著	2006.03.10	スペース新社保育研究室「保育の実践と研究」第10巻第4号 pp.46～79	学術雑誌 ある保育現場では、平成8年7月の大阪府堺市を中心に発生したO157による食中毒事件をきっかけに、子どもが保育の中で口にするものについてルールが発生し、保育のあり方が変わったように思える。そこで、O157発生前の保育にあった意味、O157発生後のルールが保育に及ぼす影響について考えた上で、特に後者のような保育になってしまうのはなぜか、その根拠を行政が出す文書や関連他分野の知見を探り検討した。A4版、総頁数79頁中34頁。
2	「コラボトローレと共に紡ぐ保育ーボローニャ市にみる保育の場における支え合いー」	単著	2008.12.25	保育学研究 第46巻 第2号 P.22～32	学会誌/レフェリーあり ボローニャ市の保育園二箇所(9回と7回)、幼稚園一箇所(14回)での保育観察を通して、コラボトローレという協力者の保育へのかかわりを描き出し、その働きが支えるものについて考えた。また、その働きに支えあいを感じるのはなぜかを考えてみると、保育者とコラボトローレの間にある、ある種のリスペクトと対等感を感じる人間関係、認め合い方によるのではないかと述べた。A4版、総頁240頁中11頁。
その他					
1	「病原性大腸菌O-157がある保育現場にもたらしたもの」	単著	2004.08.26	日本教育学会第63回大会、北海学園大学、p.168～169	身の回りの自然とのかかわりは保育の中でずっと目指され、庭や畑、散歩の途中で口にできるものに出会うことを通してその味を知り、好き嫌いを克服するきっかけになったり、外で食べた時の美味しさやそこでの風景や開放的な雰囲気子ども時代の体験として残ることもある。だが、H8年O-157の発生をきっかけに、それらの多くを禁止した保育所がある。O-157の発生が、保育の中で子どもが口にするものへの保育者のかかわりにどのように影響を及ぼしているのかを以下の点から考えた。①保育所で育てる作物の共有 ②保育の流れとしての不自然さ ③地域の中の保育所 ④食の安全
2	『「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～について考える II、食育に関する指針について考える』	共著	2005.03.10	スペース新社 保育研究室「保育の実践と研究」第9巻第4号 pp.46～56/学術雑誌	平成16年3月に厚生労働省から出されたいわゆる「食育指針」をめぐる座談会の採録である。この指針の作成にかかわった人の話(成り立ちと作成過程)をめぐって、保育研究者、栄養士、栄養士養成にかかわる者、保育ジャーナリストの立場から、保育の実際をすり合わせて検討した。A4版、総頁数79頁中11頁。
3	「妻有保育会のこれまでとこれから～私に見えたもの～」	単著	2005.09.10	スペース新社保育研究室「保育の実践と研究」第10巻第2号 p.9～23	よりよい保育を求めて自分達の実践事例を持ち寄り、疑問なこと、悩んでいることを出し合い、考え合ってきたある地域の勉強会の15年間の歩みを、来市した人、事例、話し合いという三つの切り口でその成果と課題について振り返り、保育の歩みにおけるこうした検討の位置と意味、事例のもつ意味について考えた。A4版、総頁数79頁中15頁。
4	「コラボトローレ collaboratore(-trice)と共に紡ぐ保育-Italia Bologna」		2006.09.01	日本保育学会会報第136号	イタリアボローニャ市での幼稚園と保育園の5か月間の保育観察から、コラボトローレ(協力者)の存在とその働き、保育者とのチームの作り方について紹介し、両園での保育・子どもとの直接的なかわり方の違いを言及した。
5	横浜例会に三回参加して～子どもが表したものを通しての保育実践の自覚化と検討ー	単著	2007.01.09	保育と表現研究会「保育と表現」No.87p.10	子どもは保育の中で様々な表しをする。その形に残ったものを持ち寄って、日頃の保育やその表しが生まれる背景を検討する大切さと「保育と表現研究会」の活動について述べた。A4版、総頁数16頁中1頁。
6	「遊び～古くて日々新しい、永遠の課題～」	単著	2007.06.10	スペース新社保育研究室「保育の実践と研究」第12巻第1号 pp.55～60/学術雑誌	第8回保育の実践と研究シンポジウム『いま、改めて「遊び」を考える』に見る遊びの援助への保育者の悩み、及びそのものとなった『保育の実践と研究』誌「共に考えよう～私たちの誌上実践研究会～」で提案された遊びのマナーとその援助を総括した。保育行政改革が一体化へ向けて進む中、幼稚園と保育園では遊びの援助の志向性に違いがあるのかないのかなどの問題を提起した。A4版、総頁数79頁中5頁。
7	特集 「第8回保育の実践と研究シンポジウム 採録 いま、改めて「遊び」を考える [4]討論:「遊び」を考える」	共著	2007.06.10	スペース新社 保育研究室「保育の実践と研究」第12巻第1号 p.33～49	学術雑誌 シンポジウム採録 保育をめぐる様々な制度改革の中、保育の根幹である「遊び」について見直すべく議論した。幼稚園と保育園の子どもの遊びの捉え方、援助に対する考え方のそこはかとない違いに言及した。A4版、総頁数79頁中17頁。

8	「never give up, never ending 保育の見直し」 pp.1～4	単著	2007.09.10	スペース新社保育研究室 「保育の実践と研究」第12巻第2号	和歌山県新宮市のたづはら保育園の1、2歳児クラスの「生活の見直し」をテーマにした国内研修に参加した。テーマを受けて目にとまった子どもの生活と遊びを描きながら、乳児の生活について考えた。また、この園のこうした保育の見直しの大切さにも言及した。A4版 総頁数79頁中4頁。
9	「6人の地域の宝が集う場所」	単著	2008.02.01	「幼児の教育」第107巻第2号日本幼稚園協会（フレール館） pp.28～35	和歌山県古座川町に全園児6人の保育所がある。運営費用は行政が出しているが、保育者の手配、給与計算はじめ、諸費用の収支など、実質的なことはすべて子どもの保護者がボランティアで分担している。この園の“保育所ごっこ”のような保育の様子、地域とのかかわりを描きながら、こうした園生活の経験が、子どもにもたらす誇りや一日の中でのめりはりの意義について述べた。B5版 総頁数63頁中8頁。
10	「5歳児の遊びと生活」	単著	2008.02.24	第9回保育の実践と研究シンポジウム 5歳児の遊びと生活／於 東京家政大学／学術雑誌	「5歳児の遊びと生活」というテーマのシンポジウム。保育を研究する者として、よく保育園に行き、子どもと保育者のかかわりをちょっと外から見ている立場から、自分が5歳児をどんなふうに見ていたのかを、自覚的に考えてみた。給食の場面と人とのかかわりの保育実践の中から、5歳児はどんな年齢なのかに言及している。
11	「子どもが口にするものをめぐる保育実践の検討2」	単著	2008.05.18	日本保育学会第61回大会名古屋市公会堂・名古屋市立大学山の畑キャンパス p.433	平成8年7月、堺市の腸管出血性大腸菌O157発生をきっかけに、それ以降、園内で栽培した作物や近隣の方から頂いたものを、(場合によっては保育の中で子どもと調理して)食べることに様々なルールを課している園がある。平成8年の腸管出血性大腸菌O157発生～平成17年9月までの保育の経過を、それ以前の保育とすり合わせ検討した。「新市の課題として検討することになっている」という市役所の回答から、本稿では保育の中でみられる対応や、合併後、新市としてこのルールを検討したかを折に触れて保育者に尋ねた際の反応から、保育者の姿勢に見えるものを探った。A4版 総頁数837頁中1頁
12	「給食のおかずの皿に見る5歳児の姿」 pp.49-65	単著	2008.06.10	スペース新社保育研究室 「保育の実践と研究」第13巻第1号	保育所の昼食時、嫌いなもの、苦手なものに向き合う4人の子どもの姿をその他の場面の姿とすりあわせながら、5歳児としての育ちとは何かを考えた。それぞれに乗り越えようとするハードルも乗り越え方も違うが、自分でプレーキをかける、自分の中に規範をもつことのできる年齢であると結論した。A4版、総頁数79頁中17頁。
13	第9回保育の実践と研究シンポジウム コメント「3. 様々な5歳児の姿」	共著	2008.06.10	スペース新社保育研究室 『保育の実践と研究』第13巻第1号、p.12～15	保育実践の中から、給食場面と人とのかかわりの場面で、5歳児の姿を自覚してみたシンポジウムでの発言の採録である。A4版総頁数79頁中4頁
14	特集 第9回保育の実践と研究シンポジウム I. 採録「7. 討議」	共著	2008.06.10	スペース新社保育研究室 『保育の実践と研究』第13巻第1号、p.26～37	子どもたちの遊びと生活の結実として、5歳児の保育に焦点を当てた話題提供：柴崎正行、コメント：金澤妙子（大東文化大学）、古橋さつ子（安城市立小川保育園）、佐藤暁子（新宿区立愛日幼稚園）石渡登志江（同）、提案：河邊貴子（聖心女子大学）の発言を受けての、参加者全員での討議の採録である。A4版総頁数79頁中12頁
15	「それぞれのインタビューのまとめ10 新潟県私立保育所 K先生 11 新潟県公立保育所 L先生 12 新潟県公立保育所 M先生」	単著	2009.01.30	日本保育学会編『日本保育学会60周年記念出版 戦後の子どもの生活と保育』相川書房	学会誌／日本保育学会60周年記念事業企画のインタビュー協力者として、3名の保育者に子どもの食事と睡眠の変遷についてインタビューを実施、担当者としてまとめを行った。筆者担当分は、第1部第2章II.p.105～118
16	「忌憚のない意見の交流で自覚したもの：保育実践への私のかかわりとまなざし」	単著	2009.05.01	スペース新社保育研究室 「保育の実践と研究」第14巻第1号	保育の実践と研究第10回シンポジウムでの「無自覚にやる中で、子どもは育つかも知れないが保育者は育たない」という河辺貴子の発言への私の反論を以下の点で振り返った。 （1）歩みの違いと保育者に求めるものの違い（2）育つことを志向してなお・・・（3）相当に緩やかな振り返りと検討ゆえに許されている私の保育実践へのかかわり（4）どの時点のどういう姿、そこに至るどういう過程をもって「育った」というのかの言及がなかったこと：私が見続けていることから（5）違った作法で：見極めたいもの A4版総頁79頁中7頁（pp.57～63）

17	「高津事例から保育所における親支援を考える」	単著	2009.05.01	スペース新社保育研究室 『保育の実践と研究』第14巻第1号	私が参加している愛知県安城市の保育実践を持ち寄って検討する会上がった、0歳児の延長保育をめぐる父母とのやりとり事例とそれをめぐる話し合いを深めたものである。この事例を通して、親支援が保育士の重要な役割であることはよく分かるが、親を支援することとはどういうことか、子どもにとって最善の親支援とはどういうことかという事例提供者の問いを多角的に考え、課題を考えた。子育てには大変さもあるが楽しさもあること、また大変だが楽しいと感じてもらうために保育者に必要なことを論じた。A4版総頁79頁中9頁 (pp.70～78)
18	特集 第10回保育の実践と研究シンポジウム I. 採録「7. 討論」	共著	2009.05.01	スペース新社保育研究室 『保育の実践と研究』第14巻第1号, p.5～33	学術雑誌／平成20年の幼稚園教育要領の改訂において、体験の多様性と関連性に関する記述が加わった。保育を取り巻く環境が変化している今、幼稚園・保育所を問わず、保育の実践において、子どもの体験の内容を理解し、その意味を考えることの重要性について、榎沢良彦（淑徳大学）と河邊貴子（聖心女子大学）の対談を受けて議論している。戸田正美（東京家政大学）、河邊貴子（聖心女子大学）金澤妙子（大東文化大学）、佐藤暁子（新宿区立愛日幼稚園）、塚本美起子（文京区立千駄木幼稚園）、北村都美子（明德土気保育園）栗原ひとみ（二葉幼稚園）他。A4版総頁数79頁中29頁
19	「地域の宝みんなで四人になっても」	単著	2009.05.20	「幼児の教育」第107巻第2号,日本幼稚園協会（フレール）, p28～35	第107巻第2号で紹介した和歌山県古座川町の保育所は、平成20年度も全園児4人で存続している。そこに若者を伴って訪問した際の、子どもと若者のふれあい、村人と若者のふれあい、室内環境を描きながら、新しい所長さんの心意気と戸惑い、極少数園の保育の課題（大人のまなざしからの逃げ場の必要性）について述べた。前号の続編である。B5版、総頁数63頁中8頁

III 学会等および社会における主な活動

1	1984.02.00	～	現在	日本保育学会会員
2	1990.01.00	～	現在	日本教育学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	小室 俊明	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 スピーキング系英語授業 3ヶ月間の教育的効果の検証	単著	2005.03.07	大東文化大学語学教育研究所論叢第 22 号	25 人の文学部 (非英語専攻) の学生に 4 月と 7 月に英語能力診断テストを受験させ、3 月間の教育効果を分析したものの。学生が受けた授業は会話の基礎力を養成しながら英語に対する苦手意識を払拭することを目標とする授業であり、週間英文日記、shadowing と物語リスニング、週刊誌を用いた語彙テスト、意見の発表などの活動を毎週課したものである。様々な角度で分析した結果、このテストが achievement test ではなく、proficiency test であったこともあり、3 ヶ月間では全体に差がでることはなかった。ただし上位、中位、下位に分けた分析では下位グループに有意の向上が見られた。(pp.199-213)		
2 低学力時代の大学生の英語の誤り	単著	2008.01.31	大東文化大学語学教育論叢 25 号	英語力が低下し続けている状況下で先行研究からエラーについて得られる情報を多角的に分析してその性質を明らかにし、また授業で収集した実際のエラーを整理してそのパターンを探り考察した。(pp.113-131)		
3 大学の英語教育 1 年間の教育的効果の検証	単著	2008.07.26	「英語教育・英語学習研究 現場型リサーチと実践へのアプローチ」桐原書店	大学の 1 年間の英語の授業でどう英語力が変化するかを 3 回の英語力診断テストを行い調査したもの。会話系の授業と多読系のリーディングの授業という違った種類の授業を 2 つ選んでその結果を比較した。全体では英語力は逆に低下したという結果が出た。習熟度別の傾向では、習熟度の低い学生が大きく伸び、高い学生が低下した。その原因を詳しく分析し、いくつかの仮説を検証した。(pp. 304-313)		

4	教員が英語学習者の動機づけに与える影響	単著	2009.01.31	大東文化大学語学教育論叢 26号	英語の学力低下を防ぐ要因として、動機づけに影響が強いとされる「教員」を取り上げ、国内外の動機づけの先行研究と7年間教科教育法(英語)の授業での学生の議論の中から教員の動機づけに影響を与える要因として「英語力」「授業」「生徒との人間関係」「性格・特徴・一般的な資質」「その他」に分類して調査した結果をまとめた。(pp.155-175)
その他					
1	実践報告 会話の基礎力を養成する授業		2004.09.03	第43回JACET全国大会 中京大学名古屋キャンパス	英語専攻でない学生に会話の基礎力を養成しながら英語に対する苦手意識を払拭することを目標とする授業をどのように行っているかを報告したもの。実施の原則としては1. 継続的な学習システム、2. メリハリのある流れ作業、3. 活動の狙いを認識させ、大学生としてのプライドを持たせる、の3つをあげ、具体的な活動(週間英文日記、shadowingと物語リスニング、週刊誌を用いた語彙テスト、意見の発表)の実施手順と注意点を論じた。
2	事典現代のアメリカ 74 アメリカ英語		2004.10.01	大修館書店	アメリカ英語の特徴を多角的分析したもの。最初に英語の成立過程及びそれが移民によってアメリカに導入されたときにどのような要因で変容して独特のアメリカ英語につながったかを論じ、次にイギリス英語との違いを音声、語彙、文法に分けて比較して、さらにアメリカ内の方言の種類や特徴に言及し、最後に世界の中のアメリカ英語の地位とこれからの展望に触れて結びとした。編集者 松尾弑之 他 pp.821-834
3	コラム 「方言区分研究の進展」		2004.10.01	大修館書店	代表的な方言区分がどのように分けられているかを分析して、またそれがどのような歴史的な変遷を辿ったかを論じた。 p.830
4	コラム「黒人英語と英語公用化問題」		2004.10.01	大修館書店	アメリカ英語の中で特異な立場にある黒人英語の特徴やその社会的な意味を分析したものと、アメリカで起こっている英語公用化問題の背景とその意味を論じたもの。 p.835

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.00	～	現在	大学英語教育学会会員
2	1988.06.00	～	現在	「英会話発信ボキャブラリー500」発刊記念ボキャビルセミナー講師
3	1988.07.00	～	現在	NHKラジオ第二放送高校実力養成講座「英文を読む」講師
4	1989.07.00	～	現在	NHKラジオ第二放送高校実力養成講座「英文を読む」講師
5	1990.02.00	～	現在	全国語学教育学会会員
6	1990.03.00	～	現在	第1回産能短大日本語教育セミナー「(英語の)言語習得研究紹介I・II」講師
7	1990.03.00	～	現在	第3回横浜日本語教育フォーラム「コミュニケーション能力とその測定法」パネリスト
8	1990.07.00	～	現在	NHKラジオ第二放送高校実力アップコース「英文を読む」講師
9	1990.09.00	～	現在	第2回産能短大日本語教育セミナー「第二言語教育の歴史的展望1・2」講師
10	1991.07.00	～	現在	NHKラジオ第二放送高校実力アップコース「英文を読む」講師
11	1991.12.00	～	現在	日本語教育学会日本語教育研修会理論課程特別講師「英語教育が日本語教育に示唆するもの」
12	1992.07.00	～	現在	日本語教育学会日本語教育集中研修会「第二言語習得理論と教育への応用①・②」講師
13	1993.09.00	～	現在	国際教育振興会日本語教師養成講座「第2言語習得研究」講師
14	1994.04.00	～	現在	国際教育振興会日本語教師養成講座「第2言語習得研究」講師

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	齋藤 友介	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 大学生のための福祉教育入門			2009.03.30	ナカニシヤ出版 筆頭編者 (他の編者: 坂野純子、矢嶋裕樹) 教職課程で学ぶ大学生のための社会福祉の教科書であり、我が国内外の社会福祉の動向、障害児者ならびに社会福祉サービス利用者の現況と、サービスの実際、特別支援教育の目的と内容について平易に概説した。本書作成にあたっては、企画から分担執筆者の選定、原稿の全体調整など、筆頭編者として携わった。1・105p		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項 1) 埼玉県越生町教育委員会就学指導委員 (再掲) 2) 埼玉県立坂戸ろう学校特別非常勤講師 (再掲) 3) 埼玉県立坂戸ろう学校特別非常勤講師			2004.04.00 2008.04.01 2008.04.01	(平成 16 年度~20 年度) 1) 就学指導委員会会議への参加 2) 町内の小中学校教諭を対象とした、軽度発達障害児に対する特別支援教育に関する講演会の講師 平成 20 年度特別非常勤講師として小学部高学年及び小学部重複障害学級の教育指導に対するスーパーヴィジョンならびに、小学部研究会における講師 平成 20 年度特別非常勤講師として小学部高学年及び重複障害学級の教育指導に対するスーパーヴィジョンならびに、小学部研究会における講師		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 新訂図書館概論	共著	2005.01.00	東京書籍	北嶋武彦編著 第 8 章 6 節「2.聴覚障害者情報提供施設」を分担執筆 本書は図書館司書の養成課程において使用される教科書である。広義の図書館に含まれる、聴覚障害者情報提供施設の目的、歴史、機能、サービスについて、聴覚障害についての初学者を念頭に平易に分担執筆した。177-188p		
2 特別支援教育概説	共著	2007.05.00	学芸図書出版	佐藤泰正編著 第三章第 2 節「聴覚障害児の特性」(77p-98p) を分担執筆した。本書は筑波大学心身障害学系の現・前教官が中心執筆メンバーとなり、我が国の新しい特別支援教育に関して、平易に論じられた概説書である。		
3 大学生のための福祉教育入門	共著	2009.03.30	ナカニシヤ出版	筆頭編者 (他の編者: 坂野純子、矢嶋裕樹) 教職課程で学ぶ大学生のための社会福祉の教科書であり、我が国内外の社会福祉の動向、障害児者ならびに社会福祉サービス利用者の現況と、サービスの実際、特別支援教育の目的と内容について平易に概説した。本書作成にあたっては、企画から分担執筆者の選定、原稿の全体調整など、筆頭編者として携わった。1-105p		

論文				
1 難聴高齢者における聴力低下に対する対処方略が精神的健康におよぼす影響	共著	2005.09.00	日本保健科学学会誌第8巻2号、89p-97 (レフェリー誌)	筆頭著者(矢嶋裕樹と共著)*共同研究につき本人担当部分抽出不可能 難聴高齢者においては、聴力の程度よりもむしろ、聴覚障害に起因する音声コミュニケーション場面における、諸種の困難への対処方略(ストラテジー)そのものが、彼らの精神的健康の状態に影響を及ぼすことを、共分散構造分析(パス解析)により検証した。
2 大東文化大学における介護体験に関わる事前指導の在り方に関する検討一盲・聾・養護学校を対象とした調査結果から一	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要(社会科学)第44号、23p-34	東京都及び埼玉県内の特殊教育諸学校を調査対象に質問紙調査を実施のうえ、データ解析を加えた結果、四年制大学における介護等体験に関する事前指導の改善に寄与する基礎知見を得た。
3 大東文化大学における介護体験に関わる事前指導の在り方に関する検討(その2)一社会福祉施設を対象とした調査結果から一	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要(社会科学)第45号、165p-176	東京都及び埼玉県内の社会福祉施設を調査対象に質問紙調査を実施のうえ、データ解析を加えた結果、四年制大学における介護等体験に関する事前指導の改善に寄与する基礎知見を得た。
その他				
1 介護等体験における事前指導の授業化の試み	単	2004.09.00	日本特殊教育学会第42回大会発表論文集	ポスター発表 介護等体験に参加する学生を対象とした、事前指導を目的とする授業モデルをデザインし、大学関係者ならびに、社会福祉施設、特別支援学校関係者に提示した。
2 社会福祉施設からみた介護等体験生に対する評価	単	2006.09.00	日本特殊教育学会第44回大会発表論文集、583p	ポスター発表 介護等体験の実施に際し、独自の事前指導を実施する、大東文化大学の体験生ならびに事前指導の教育的効果について、社会福祉施設の職員により評価を受け、その結果を報告した。
3 (翻訳)ダグラス・C・ペイントン『『野蠻』と『聾啞』一19世紀における進化論と手話使用を禁圧する運動一』	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要第46号(社会科学) p249-269	本論文において、ペイントンは19世紀後半の米国において台頭した後に、20世紀初頭まで通底した、ダーウィンの進化論に起因する社会思潮が、聾教育における手話法の衰退を促し、口話法台頭の遠因となったことを、初めて実証している。
4 スーザン・バーチ「手話の『狭間』をよむ一20世紀初頭における(ろう)文化の攻防」	単著	2009.03.30	大東文化大学紀要第47号(社会科学)	本論文においてスーザン女史は、口話法全盛期にあった20世紀初頭の米国聾学校における、手話の堅持を企図した(ろう)文化と口話法との攻防について、歴史的データに基づき詳細な歴史的検討をおこなっている。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1988.04.20	～	現在	ろう教育科学会正会員
2	1988.09.15	～	現在	日本特殊教育学会正会員
3	1998.07.20	～	現在	日本保育学会正会員
4	1999.06.10	～	現在	日本保健科学学会正会員
5	1999.09.10	～	現在	日本言語聴覚士協会正会員
6	2004.04.00	～	現在	埼玉県越生町教育委員会就学指導委員
7	2007.03.01	～	現在	障害科学学会正会員
8	2007.10.21	～	現在	ろう・難聴教育研究会正会員
9	2008.04.01	～	現在	埼玉県立坂戸ろう学校特別非常勤講師

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	田尻 敦子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『体罰・虐待・戦争等の暴力の循環からどう抜け出るか?—自らの内なる力と外なる力のエンパワーメント—』 2009.3 大東 Books 第8号		2009.03.31	暴力の循環から抜け出る方法を示唆する本 10 点挙げて、考察を行った。大学生に勧める本として、読みやすく、実践的で、かつ理論的な背景のある本を選定した。体罰や虐待などの内なる暴力と、戦争などの外なる暴力の連鎖から抜け出る方法を模索する問題意識を喚起することがねらいである。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 中高教職課程で新設された「総合演習」15 コマ分の立ち上げ・運営		2002.00.00	中高教職課程で新設された「総合演習」15 コマ分を立ち上げ、運営している。人権教育、街づくり、地域づくり、環境教育、国際理解教育、情報教育、比較文化教育など多様な観点から複数の授業を構築した。(2002年～)			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『バリ島の美術高校をめぐる五世代の学習の連鎖～芸術家イ・クトゥット・ブディアナ氏の複数の共同体へ参加する文化的実践』	単著	2007.03.00	大東文化大学人文科学研究 所 pp1-182	第一に、バリ島の芸術文化創造をめぐる語りの課題を探った。第二に、文化創造の原点を学びの場に探ることを行った。今ここで文化の創造の実践を行っている人々に聞き取り調査を行い、五世代にわたる文化の学習と創造の過程を探求した。第三に、現在における文化創造の事例として、美術高校の誕生・隆盛・衰退の過程に参加し、芸術家協会の創設・運営に携わり、祝祭の装飾を行うサンギンであるブディアナ氏の実践に焦点を当てて論じた。		
2 『バリ島の美術高校と工房の相互作用～学校と縁側の学習の場を紡ぐ二重システムのカリキュラム実践～』	単著	2008.03.00	大東文化大学人文科学研究 所 pp1-292	学校と地域の相互作用を活性化するシステム・ガンダ (二重システム) と呼ばれるカリキュラム実践をしている美術高校に焦点を当てて論じた。学校と地域の工房、美術館、ギャラリー、市場、外国人などとの相互作用のもとで、生徒達がどのように学んでいるか? という問いを具体的な事例をもとに明らかにした。		
論文						
1 殺し殺される関係から対話へ—暴力の連鎖を植民地教育論から問い直す—		2004.09.00	『教育』第54号第9号 No.704号教育科学研究会 国土社 pp113-118	暴力ではなく、対話により、問題を解決する教育方法を探究する試みを行った。インドネシアにおける植民地教育をめぐる言説をもとに、対等な関係性にもとづく対話のあり方を論じた。		

2	教師の学校と地域と家庭における学習過程ーバリ島の美術高校の元校長ワヤン・シカ氏の語る自らと学校の歴史ー	単著	2005.03.00	『大東文化大学紀要 社会科学』第 43 号 p21-pp57	教師の実践には、教師自身の学習の履歴が反映されていると考えられる。教師は、学校で学ぶだけでなく、地域や家庭において学習を行っている。そこで、教師が学校、地域、家庭でどのように学んできたのか？という問いを美術高校ウブドゥ校元校長のワヤン・シカ氏のライフヒストリーを考察することで探求した。その過程で、研究者と教師が共に問い、研究をすることの意味を探った。
3	種としてのエスノグラフィーバリ島の美術学校で学んだ個人のライフヒストリーと学校誌～	単著	2006.03.00	『関係性の教育学』関係性の教育学会 第5巻1号 同一論文の英文 pp71-79、日本語文 pp150-158	なぜ異文化の地で、フィールドワークを行い、エスノグラフィを書くのか？という文化人類学における問いを探求した。調査者と被調査者、研究者と実践家という権力関係を自覚しつつ、共に問いを探求する実践共同体に参加する過程として、フィールドワークを行い、エスノグラフィを書くという手法を提言した。
4	11章 誰が何のために学校を作るのか？～フォーマル/ノンフォーマル教育『エチオピアを知るための50章』	単著	2007.12.00	明石書房 pp86-91	エチオピアのノンフォーマル学校を事例として、学校の設立と運営の責任は、誰が果たすべきなのか？という問いを探求した。エチオピアのノンフォーマル学校は、政府が政策として増設し、日本の国際協力事業団や、国際的NGOの補助を受け、地方行政官の指導のもとで地域の人々が運営を行うとされている。政府、地方自治体、国際的NGOやNPO、ユニセフ、国際協力事業団、民族集団、村落共同体などのどこが設立と運営を行うのか？という問いを探求した。
5	12章 複数の共同体で学ぶ葛藤～多文化社会のなかで～『エチオピアを知るための50章』	単著	2007.12.00	明石書房 pp92-97	エチオピアでバンナ民族の農村から都市の学校に通う生徒は、国家と民族、農村と都市、アムハラ民族バンナ民族、キリスト教と民族的規範などの葛藤を経験する。複数の共同体に参加する矛盾と葛藤の狭間でどのような学びの可能性があるかを考察した。
6	共に学び実践する人々の共同体～権力の網の目に埋め込まれた個人がいかにして学ぶのか？	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p31-39	複数の実践共同体に参加する人々が、権力の網の目の中で、いかにして実践を行うのかという問いについて探求した。文化人類学と認知心理学の接する領域で生まれた正統的周辺参加論においては、権力関係があまり描かれてこなかった。しかし、その概念を拡張することで、権力に埋め込まれた個人の実践を描くことの可能性を模索した。
7	インドネシアにおける職業高校のカリキュラム改変と統合～職業高校の急激な増加の問題点～	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p40-64	インドネシアにおいては、職業高校を普通高校に対し、7割まで増設する計画が立てられている。その急激な増加が生み出す問題点をフィールドワークで得られた資料をもとに考察した。
8	バリ島の絵画作品を通して自らをみつめる	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p116-122	芸術作品を通して自らをみつめるということとはどのような実践なのかを考察した。芸術作品には、描いた作者の自画像、それを見る者の姿、そして、その時代の社会、周囲の自然環境などが写し出されている。自らというのは、作者、鑑賞者、社会、自然などが重層的に反映しあい見えてきた姿でもあることを論じた。
9	共に学び実践する人々の共同体～権力の網の目に埋め込まれた個人がいかにして学ぶのか？	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p31-39	
10	「インドネシアにおける職業高校のカリキュラム改変と統合～職業高校の急激な増加の問題点～」	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p40-64	
11	「バリ島の絵画作品を通して自らをみつめる」	単	2009.03.00	大東文化大学 人文科学研究 所 コミュニティにおける学習 p116-122	
その他					
1	サナア旧市街の女性を守る四枚の皮膚：ベール・摩天楼・街区	単著	2005.01.00	『季刊旅行人冬号イェメン』 pp18-19	サナア旧市街において、女性がどのような暮らしをしているのかについて、ベールや摩天楼、街区などの観点から論じた。

2	サナア旧市街における新しいものと古いもの：世界遺産の窓に這う電線	単著	2005.01.00	『季刊旅行人冬号イエメン』 pp20-21、p41	イエメンのサナア旧市街において、住民達自身が、電線や水道などの新しいものと、木製の扉や窓などの古いものの関係をどのように捉えているのかをインタビューをもとに考察した。
3	自らを律する力 サナア・アデン・マールブの服装	単著	2005.01.00	『季刊旅行人冬号イエメン』 pp72-73	イエメンにおける服装とアイデンティティの関係性について論じた。
4	学習する身体～葛藤の埋め込まれた女性の身体～	単著	2007.06.03	関係性の教育学会 第五回 年次大会	状況的学習論においては、学習とは共同体に参加の度合いを深める過程だとされている。では、複数の矛盾し合う共同体に参加する過程で、葛藤が生じた場合、どのような学習が生じるのだろうか？女性の身体に埋め込まれた歴史性が、共同体への参加の過程でどのような葛藤を引き起こすのか？という問いを探究した。
5	日本とバリ島の出会いから生まれる新たな創造『バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ』	単著	2008.04.01	世田谷美術館 p3	バリ島展覧会実行委員会の代表として、世田谷美術館における「バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ展」を主催した。編著者として、約80頁の『バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ』を制作した。作品解説、作品リスト、年賦などの作成し、翻訳も行った。日本とバリ島の人・自然・素材の出会いからいかにして新たな作品が生まれるかを考察した。
6	現代世界を共に生きる妖怪・人・神々『バリ島絵画の巨匠イ・クトゥット・ブディアナ』	単著	2008.04.01	世田谷美術館 p4	バリ島で、ブタカラというのは、盲目の力狭間の時、妖怪などを意味する。荒々しいコントロールされない力(ブタカラ)を人が祀ることで、生命を育む神々(デワ・デウィ)となる過程を描いた絵画について論じた。
7	自らをみつめる～鏡としての芸術『自らをみつめる～鏡としての芸術』	単著	2008.04.01	世田谷美術館 p3-p5	編著者として、『自らをみつめる～鏡としての芸術』を制作した(約18頁)。フランスの美術評論家ジャン・クトー氏や、九州大学の教授で元アジア美術館学芸員の後小路氏らと共に、バリ島絵画について多様な角度から論じた。筆者の執筆した「自らをみつめる～鏡としての芸術」においては、絵画が、作者の内と外の力を写す鏡であり、それを見る者をも写しだすというコンセプトについて考察を行った。
8	自らをみつめる Melihat Diri ～作品を通じたコンセプトの理解～	単	2009.03.00	大東文化大学人文科学研究 所 コミュニティにおける 学習 p125-131	インドネシアの芸術大学 ISI デンパサール校の客員講師で、人文科学研究所兼任研究員のイ・クトゥット・ブディアナ氏の論考の翻訳を行った。作品というメディアを通して、自らをみつめるとはどのような実践なのかについて考察を行った論考である。

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.00.00	～	現在	アフリカ学会会員
2	2000.00.00	～	現在	認知心理学会会員
3	2005.00.00	～	現在	関係性の教育学会会員
4	2005.04.00	～	現在	バリ島展覧会実行委員会代表

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	中井 睦美	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 中高校生南極北極オープンフォーラム		2004.00.00	平成 16 年以降 国立極地研究所主催の南極北極研究のアウトリーチ活動の一つで、中高生から広く研究計画を募集し、その内容を両極で実施しようというプログラム。この企画には、企画作成段階からかかわり、審査委員も務めている。このほかにも地質学会の『小さなアースサイエンティスト』企画や地球惑星連合の研究発表の企画など、小中高生向けの地球科学自然科学アウトリーチ活動に広くかかわっている。(2004.00.00~2008.00.00)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「高校地学」の再編成と、他の理科学科では得られない独自性について		2004.05.09	地球惑星科学連合同学会 (幕張メッセ国際会議場) 講演要旨 (CD-ROM) 共著 著者: ◎中井睦美・久津間文隆。理科の中でなぜ高校で地学を教えることが必要なかのべ、地球に根ざした自然科学の特色を生かした授業例を紹介した。				
2) 「高校地学」の再編成と、他の理科学科では得られない独自性について		2004.05.09	地球惑星科学連合同学会地学教育委員会 新しい地学教育の試み, p.53-60. 共著 著者: ◎中井睦美・久津間文隆。理科の中でなぜ高校で地学を教えることが必要なかのべ、従来の分野別の地学教育ではなく、分野の壁をとりはらった地学教育を提唱した。				
3) 地球深部探査船「ちきゅう」と連携した「砂プロジェクト」		2006.05.00	地球惑星科学連合同学会合同大会 (幕張メッセ) 講演要旨 共著 著者: ◎宮下敦、横山一巳、平朝彦、斎藤靖二、伊藤久男、真砂英樹、青池寛、中井睦美、雁沢夏子、金川和人、小田桐茂良、田中克人。『ちきゅう』の研究航海に対応したアウトリーチ活動の一つとして、小～高校生を対象とした陸の岩石と海洋の砂とを結ぶ「砂プロジェクト」をたちあげた活動内容の報告。発表者: 宮下。				
4) 夢のあるフィールドと子どもたちの学び心		2006.06.00	文部科学時報, No.1564, p.40-41 単著 国立極地研究所主催の中高校生向け南極北極研究募集授業に3年間取り組んできた内容について紹介し、さらにどのような教育上の効果がありまた今後の課題があるかについて述べたエッセイ。				
5) 地学教育についての日本地球惑星科学連合の取り組みと地質学会地学教育委員会の活動		2006.09.00	日本地質学会第113年学術大会 シンポジウム 転換期の地学教育 (高知大学) 講演要旨 共著 著者: ◎浅野敏夫、安部国広、中井睦美。地質学会の地学教育委員会として今までおこなってきたアウトリーチ活動と地球惑星連合と対応した活動についてまとめた総論。				
6) 現在の教育を巡る諸問題		2007.08.00	地学団体研究会第61回大阪大会、講演要旨。単著 著者: 中井睦美。学習指導要領が改訂される年で、地学教育のありかたについて、問われている。現在の学校教育における地学教育の現状と、制度の変化、教員構成の変化、若い教員の意識の変化などについて、まとめて発表した。				
7) これからの小中学校教員へのどのような地学教科の支援が必要か—大学生対象のアンケート結果から—		2007.09.00	日本地質学会第114年学術大会、講演要旨 共著 筆頭著者。発表者: ◎中井睦美 栗原麻美 中井均。2006年2007年に行ったアンケート結果から、教科・科目に関する得意不得意意識についてだけを中心に解析した内容について、まとめた内容で、世代交代する現場の教員に、専門家からどのような支援が必要かに就いて考察した。				

8) 初等教育系学生が子どもたちと自然体験をおこなう教育学的効果—下仁田自然学校行事の例。	2007.11.00	子どもと自然学会、於東京学芸大学、講演要旨 共著 筆頭著者。著者：◎中井睦美 保科 裕 川での自然観察を主とした自然体験を、初等教育系学生が、現場の理科教員や自然観察団体（下仁田自然学校）の指導者とともに、実際に子どもたちと経験することにより、自然の学び方や、安全な対応について具体的に学ぶことができる事例報告。
4 その他教育活動上特記すべき事項		

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 「南極地域石油天然ガス基礎地質調査」(FY1980-1999)によって得られた海底堆積物コアの古地磁気・岩石磁気測定	共著	2005.09.00	地質調査研究報告第56巻、341-373	著者：◎森尻理恵、中井睦美、上野直子、荻島智子 レフェリーあり。南極周辺海域の堆積物コアの古地磁気測定と岩石磁気測定結果に着いてまとめ、約20年前のデータと基本的には変動無く、今後の環境解析の結果として重要であることに着いて報告した。
2 春を見つけようという課題に短歌で表現させる試み	共著	2006.02.00	地質ニュース、618号、61-64	著者：◎森尻理恵・中井睦美 レフェリー有り 初等教育の大学生対象に、春の自然観察を行い、短歌に表現することによって、観察力表現力を養う試み。同様に小学生の短歌作品にも触れる。
3 南極ウイルクスランド沖とデュモンデュールビルの海底堆積物コア試料中の磁性鉱物について。	共著	2006.03.31	大東文化大学紀要自然科学、44、1-16	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、荻島智子 南極のウイルクスランド沖とデュモンデュール海の堆積物の磁性鉱物に着いて、3種類の実験から検討し、海域の酸化還元環境について検討した。
4 南極周辺海域における磁気特性を用いた第四紀気候変動の解明	共著	2006.06.00	平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(C)研究成果報告書146p.	科学研究費報告書。著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子。中井は研究代表者。石油公団が採取した南極をほぼとりまく周辺の海洋コアの岩石物性から、氷河の消長について推論した研究報告。
5 帯磁率をもちいたディーゼルエンジンバス排気汚染調査	共著	2006.12.00	第16回環境地質シンポジウム論文集、21-24	著者：◎中井睦美、田崎和枝、渡辺弘明、朝日隆二、島崎晴美。ディーゼル車の排気ガスによる路面汚染状態を帯磁率を用いて調査する方法と、その高帯磁率の要因になっている物質が、数ミクロン以下の鉄の硫化物であることを分析した研究論文である。従来、酸化物と推定されていた高帯磁率物質を硫化物と断定できたのが成果である。
6 いわゆる物見山層の礫組成と現河床礫との比較研究—物見山層の起源について	共著	2007.03.00	大東文化大学紀要No.45<自然科学>17-27	著者：◎中井睦美、森岡俊郎、上野直樹、佐藤瞳。大東文化大学教育学科の卒業論文として共同研究してきた内容をもとに、岩石磁気物性のデータを加味して、関東平野西縁部の地盤の隆起にもなって堆積した飯能礫層の1種類としての物見山礫層の起源について明らかにした。
7 現代の教育を巡る諸問題。	単著	2008.03.00	地学教育と科学運動、No.57、9-15	著者：◎中井睦美。査読付き雑誌。2007年8月に学会発表した内容に加えて、2007年末に発表されたPISAのデータを加え、21世紀になってから毎年めまぐるしく変化する教育制度と、それに関わる問題点、および、教員の年齢構成のデータと教員養成、子どもたちや、学生の変化についてまとめた。さらに地学教育に関する問題点について、明らかにした。

8	せんだん帯にとまなう古地磁気方位および岩石磁気異方性の変化。	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要、No.46、自然科学、1-8	著者：中井睦美。南極昭和基地南方のルンドボークスヘッタから採取されたせんだん帯をとまなう片麻岩の試料から1 cm 径のコアをせんだん帯の両側、およびせんだん帯にそって抜き、振動型磁力計を用いて、帯磁率、残留磁化、帯磁率異方性、保磁力異方性などについて調査をおこなった。その結果、せんだん帯の中では、構造運動時に古地磁気は再磁化されたことが予想され、その際、粒子の細粒化などにより、保磁力が上昇するが、現岩より異方性の大きさが低下することがわかった。
9	生命の進化から子どもの教育を考えるーいのちの来た道をたどる子育て。	単著	2008.03.00	大東文化大学教育学会誌、No.31、8-14	著者：中井睦美。ヒトは他のほ乳類からみても、極めて未熟児の状態子どもを出産すると言われ、子育てにかかる時間が長い生物であると言われている。また個体発生は系統発生を繰り返すという傾向は、子どもが幼児へと成長する過程にも一部見られるとも言われている。著者は、子どもの教育に就いて、生命は遺伝子の伝達と環境の影響と双方の影響で進化してきたわけで、個体の成長（子どもの成長）にも遺伝子と環境の双方の影響があるわけで、それを考える際、ヒトの進化を無視した無理な環境設定は正常な個体発生を導かないと考えている。その内容に就いて、大東文化大の教育学科の学生を対象に、まとめた文章である。
10	現在の理科教育と教員養成の問題ー主に初等教育についてー。	共著	2008.04.00	地質学雑誌、Vol.114、No.4、170-179	筆頭著者。著者：◎中井睦美、中井均。査読付き雑誌。2006、2007年に6大学で調査したアンケートを解析し、特に初等教育の教員養成の現在の問題点と、今後予想される理科教育の問題点について明らかにした。
その他					
1	帯磁率を用いた物見山礫層の起源の推定について	共著	2004.05.12	地球惑星科学関連合同学会（幕張メッセ国際会議場）講演要旨（CD-ROM）	著者：◎中井睦美、佐藤 瞳。粒度別帯磁率を用いて、礫種組成の不明な礫層の起源の推定をおこなった例である。河川堆積物の解析は近年注目されている研究課題であるが、粒度別に帯磁率をもとめた研究例はまだなく、今回、チャートが混在する礫層の解析には、この方法が有効であることを明らかにした。
2	礫組成および砂の帯磁率を用いた荒川水系の現河床堆積物と物見山礫層・飯能礫層の比較	共著	2004.08.00	地学団体研究会 第58回川越総会 講演要旨 p.113.	著者：◎佐藤瞳、上野直樹、森岡俊郎、中井睦美。関東平野西縁に分布する第三紀-第四紀の礫岩は、関東平野の生成期に堆積した河川性の堆積物で、飯能礫層と総称されている。この礫層について、現河床堆積物と比較した結果。佐藤、森岡、上野の卒業論文を中井がまとめたもの。学会での講演要旨、図表。文は代表して中井が作成。発表者：中井。
3	利根川本流から採取した砂の帯磁率変化ー帯磁率は礫と同様に流域の地質を反映するー	共著	2004.08.00	地学団体研究会 川越総会 講演要旨 p.112.	著者：◎内田一哉、中井睦美。利根川本流の現河床堆積物の砂粒以下の粒子について、粒度、帯磁率などについて調査した結果。内田の卒業論文に、中井のデータを加え、中井がまとめたもの。発表者：中井
4	Study on correlation and origin of fluvial gravels using magnetic susceptibility	共著	2004.08.00	International Geological Congress. Abstracts. (フィレンツェ)	◎NAKAI, M., and SATOH, H. 関東平野西縁に分布する第三紀-第四紀の飯能礫層について、礫構成、磁気特性などからその起源について述べたもの。佐藤の卒業論文を一部使用し、中井のデータを加えて、中井がまとめたもの。発表者：中井。発表場所：フィレンツェ。
5	南極ロス海からウィルクスランド沖にかけての海底堆積物コアの地球磁場強度変化を用いた対比の試み	共著	2004.09.00	日本地質学会第111年学術大会 千葉大学 講演要旨 P-72(p.195)	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、石川尚人、林田明、小玉一人。石油公団が採取した南極周辺の海洋コアの年代学的対比を、古地磁気学的手法で検討した結果。
6	ロス海からウィルクスランド沖の南極海域海底堆積物コアの地球磁場強度	共著	2004.09.00	地球電磁気・惑星圏学会 講演要旨 D31-P034	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、石川尚人、林田明、小玉一人。石油公団が採取した南極周辺の海洋コアの古地球磁場強度変化について検討した結果。発表者：中井
7	南極ウィルクスランド沖の堆積物のB-M境界以降の岩石磁気と氷床の消長	共著	2005.05.00	地球惑星科学関連合同学会	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、萩島智子 石油公団が採取した南極周辺の海洋コアの岩石物性から、氷河の消長について推論した結果。発表者：中井

8	Origin of the pollution characterized by high susceptibility--Magnetic character of the exhaust dust from the vent of bus--	共著	2005.07.00	International Association of Geomagnetism and Aeronomy (ツールーズ) GAI.02/01P/D-001	◎M. Nakai (1), N. Ueno (2), K. Tazaki (3), H. Watanabe (3), R. Asada (3) and H. Shimazaki (1)ディーゼルバスの排気孔から採取したチリに含まれる物質の科学組成分析と、高帯磁率汚染の原因となる鉄のチリについての分析結果と電子顕微鏡写真でその起源について明らかにした。
9	ウイルクスランド沖の海洋堆積物コアにみられる岩石磁気特性の変動について	共著	2005.10.00	国立極地研究所南極地学シンポジウム 講演要旨	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、石川尚人、荻島智子 石油公団が採取した南極周辺の海洋コアのうちウイルクスランド沖の堆積物について、岩石物性から、氷河の消長について推論した結果。発表者：中井
10	南極ウイルクスランド沖の堆積物の粒度分析結果と岩石磁気特性粒度パラメーターとの関連	共著	2006.05.00	地球惑星科学関連学会合同大会 (幕張メッセ) 講演要旨	著者：◎中井睦美、森尻理恵、上野直子、荻島智子、家内慧。石油公団が採取した南極周辺の海洋コアの岩石物性から、氷河の消長について推論した結果に、堆積物の粒度分析結果のデータを加え、岩石磁気パラメーターが堆積物のどのサイズの粒度変動と対応するかについて明らかにした。
11	教員養成問題および小学校教育の現状	共著	2006.09.00	日本地質学会第113年学術大会 シンポジウム 転換期の地学教育 (高知大学) 講演要旨	著者：◎中井睦美・阿部国広。小学校教員の理科教科指導の現状と、教員養成における理科教科の問題点について整理し、今後の課題について明らかにした。発表者：中井。
12	Correlation between particle size distribution and rock-magnetic parameters of the marine sediments from off Wilkesland, East Antarctica.	共著	2007.07.00	International Union of Geodesy and Geophysics, Perugia, Italy. Abstracts.	筆頭著者。著者：◎Mutsumi Nakai, Rie Morijiri, Naoko Ueno, Tomoko Ogishima, Kei Kanai. 南極ウイルクスランド沖のコアの岩石磁気学的な対比と気候変動との関連、堆積物の粒度分析の結果に就いてまとめている一連の研究内容を、はじめて国際学会に発表した。
13	南極ウイルクスランド沖の堆積物の粒度分析結果と岩石磁気特性粒度パラメーターが示す変動と粒度分析結果について。	共著	2007.12.00	高知大学海洋コア総合研究センター 共同研究合同発表会、講演要旨	筆頭著者。著者：◎中井睦美・森尻理恵・上野直子・荻島智子・家内 慧。2007年度の高知大学海洋コア総合研究センターでおこなった研究内容の報告。
14	東南極ウイルクスランド沖の堆積物の珪藻化石と磁気特性について		2008.00.00		共著、◎菊池奈緒美・中井睦美。施国立極地研究所。南極ウイルクスランド沖の海洋底コアの珪藻化石の定量分析結果と磁気特性の関連。
15	南極クィーンモードランド沖コア (石油公団「南極地域石油天然ガス基礎地質調査」) PC602、PC603の岩石磁気が意味すること	単著	2008.01.00	南極・南大洋における第四紀の古気候・古海洋変動ワークショップ 於高知大学コアセンター 講演要旨	発表者：◎中井睦美。昭和基地沖のPC602とPC603の岩石磁気、古地磁気について報告し、年代決定に重要なエクスカッションの存在を指摘した。
16	南極ウイルクスランド沖コアに見られる岩石磁気特性変化と珪藻化石変化の関連		2009.01.00		共著◎中井睦美・上野直子・森尻理恵・荻島智子。施東京大学小柴ホール。高知大学海洋コア総合研究センター共同研究合同発表会

III 学会等および社会における主な活動

1	1973.04.00	～	現在	地学団体研究会会員 (昭和56年～62年 全国運営委員、平成11年～現在 月刊ニュース (そくほう) 編集委員)
2	1973.04.00	～	現在	日本地質学会会員 (平成15年4月～平成17年8月 理事、平成14年度～平成17年8月 女性地球科学者委員会委員、平成16年9月～平成19年3月 地学教育委員会委員)
3	1980.04.00	～	現在	American Geophysical Union 会員
4	1980.04.00	～	現在	地球電磁気惑星圏学会会員
5	1980.04.00	～	現在	日本第四紀学会会員
6	1999.09.00	～	現在	日本地学教育学会会員

7	1999.12.00	～	現在	日本地球惑星科学連合（旧地球惑星科学関連学会）会員（平成15年度～平成17年度 地学教育委員会委員、平成17年度～ 教育問題検討委員会監事、平成18年5月～ 教員養成問題検討小委員会世話人代表）
8	2000.04.00	～	現在	下仁田町立自然学校
9	2000.04.00	～	現在	国立極地研究所共同研究員、中高校生南極北極オープンフォーラム審査委員
10	2000.04.00	～	現在	嵐山町教育委員会嵐山町史編纂委員
11	2005.00.00	～	2006.03.31	産業技術総合研究所共同研究員
12	2005.04.01	～	現在	高知大学海洋コア総合研究所共同研究員
13	2008.04.01	～	現在	板橋区立高島第六小学校学校運営委員

(表 24)

所属	文学部教育学科		職名	准教授	氏名	藤本 卓	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 教授要項 (シラバス) の様式改変～ピヴォット・クエスチョン方式			2004.00.00	従来から教授要項の記述には意を用いて来ていたが、この年度より担当科目のうち特に講義中心の課目 (教育学概論・特別活動の研究・生活指導論) において記載様式を改め、自ら考案したピヴォット・クエスチョン方式を用いることにした。その要点は、半年の講義につき6つ～7つの軸となる「両義的疑問」をたて、そのそれぞれに教授内容のキイとなるテクニカル・タームを4つ～5つ配する、という形式である。これらのピヴォット・クエスチョンの一覧が、同時に講義内容の節立てともなる (学生はノートの第1ページに貼り、「目次」とする) のだが、授業開始時にその時点での各自の「仮の答」を記させ、授業終了時にそれらを再び見直させる、といった使い方をする。この方式によって、受講者の集中は目立って良くなったと感じている。			
2) 平成16年度大東文化大学 学生による授業評価			2004.00.00	基礎演習 (熱意 4.7、満足度 4.4)、教育学概論 (熱意 4.2、満足度 3.3)、生活指導論 (熱意 4.5、満足度 4.1)、全体を通じて、板書についての評価は 3.5 平均で、ワーク・シートとの関係づけを含めて、今後の課題である。			
3) 平成19年度 大東文化大学 学生による授業評価			2007.00.00	特別活動の研究 (満足度 4.2、熱意 2.0 [満点]、シラバスの反映度 1.9、聞き取りやすさ 1.9、理解度 1.6)			
4) 平成20年度 大東文化大学 学生による授業評価			2008.00.00	基礎演習2 (満足度 3.4、熱意 2.0、シラバスの反映度 1.9)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「悦ばしき“学び”、か？－柳田國男による「マナブ」と「オボエル」の対照のトポスについて」	単	2008.03.00	大東文化大学紀要 第46号 (人文科学)	わが国の民俗学の創始者・柳田國男には、教育論にかかわって、これまでほとんど回避されてきた議論が存在する。通有の「マナブ」と「オボエル」の価値づけを逆転させ、近代教育/学校における「マナビ」の瀰漫を批判した議論である。本論文は、この柳田の議論を正面から検討し直し、その核心的論点を救済して教育課程の全体構造論に取り入れることを企図している。			

2	“パストラル・ケア” その叢生と褪色— 英国公教育に“生活指 導”の似姿を垣間見る —	単	2009.03.00	大東文化大学紀要 第47 号〈社会科学〉	教育認識の概念としての「生活指導」は、移植概念ではなく、日本の教育界に根生いの概念であるが、英国には類似のものとして“Pastoral care”という概念が存在する。“生活指導”概念と同様に、学校現場での実践的必要から生まれ、一時期は広範な使用が見られるとともに、それを名に冠した学会も誕生したが、概念としての安定を得られぬまま近年ではその使用も下火となっている。本論文は、この“パストラル・ケア”概念の英国公教育界での叢生と褪色のプロセスを検討しており、後に企図する「生活指導」概念との比較に備えている。
その他					
1	<畑>は<森>にどうつ ながるか	単	2006.05.00	『國學院雑誌』No.1189	里見実著『学校でこそできることとはなんだろうか』（太郎次郎社）への書評
2	（英語翻訳）『あき らめない教師たちの リアル—ロンドン 都心裏、公立小学校の 日々—』	単	2009.02.00	太郎次郎社エディタス	ウェンディ・ウォラス著（原題 Oranges & Lemons）ロンドンに実在する公立小学校（イーディス・ネヴィル校）の日常について一年余にわたって詳細に記録したルポルタージュ。原著者へのアップデート・インタビューの他、小論「〈学校〉というマイクロコスモス」を訳者後記として収録している。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1984.04.00	～	現在	日本教育学会会員	
2	1984.04.00	～	現在	日本生活指導学会会員	
3	1985.04.00	～	現在	全国高校生活指導研究協議会常任委員	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	船木 正文	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)				担当講義及び演習では、教育改革あるいは学校制度をめぐって議論されている今日的な問題について、受講生に相異なる多様な視点や見解を提供し自らの考えを形成することを目的に、NIE_(Newspaper in Education、教育に新聞を)の方法 (例・主要各紙の社説や記事の比較検討) を取り入れる実践を行っている。また、講義内容やテーマに関するレビュー・シート (感想・質問) を次回の講義で紹介し、双方向型・参加型の講義に努めている。講義内容及び計画はweb上で公開している。			
2)				本学が実施している学生による授業評価では、とりわけ上記のNIEを活用した講義に関しては、今日的な教育問題を様々な視点から関心を持って学習できるという理由等からおおむね肯定的な評価を得ていると思われる。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1)				NIEの方法を取り入れていることから、主要各紙の社説や記事を中心に資料を教材として作成し配布している。指定教科書は使用しないが、「解説教育六法」(三省堂)を参考書として推薦している。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)				FD委員会委員			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「学校安全基本条例要綱案」	単著	2005.09.00	「季刊教育法」146号、エイデル研究所 16頁-18頁	今日発生している子どもの事故・事件の状況に鑑み、日本教育学会学校事故問題研究特別委員会が提案した学校安全基本条例の趣旨とその意義について解説している。			
2 「アメリカにおける学校の警察化と法執行としての教育」	単著	2005.11.00	愛敬浩二他編『浦田賢治先生古稀記念論文集 現代立憲主義の認識と実践』、日本評論社 173頁-191頁	今日のアメリカの学校で強化されている生徒に対する厳罰主義であるゼロ・トレランスの運用状況と警察官の学校配置の問題を批判的に考察している。			
3 「アメリカの学校暴力と安全対策—警察官配置をめぐる問題」	単著	2006.03.00	「季刊教育法」148号、エイデル研究所 52頁-56頁	アメリカで頻発する学校暴力と犯罪に対処するため、学校に警察官配置や金属探知機等の設置の施策が進められているが、それが生徒や学校教育に及ぼす影響と問題点を考察している。			
4 「教育目的と教育内容」	単著	2006.03.00	永井憲一編『憲法と教育人権』、日本評論社 63頁-79頁	永井憲一教授の主権者教育権説と教育内容要求権説をめぐる近年の学説における再評価を踏まえ、憲法価値と憲法教育のありようについて考察している。			

5	船木正文他『学校の安全を見る目に確かさを』	共著	2006.03.00	日本評論社 75頁-93頁	1990年代以降「地域に開かれ学校づくり」が展開しているが、その一方で不審者の学校侵入と登下校中の子どもに対する犯罪事件が発生し、学校が閉じられようとしている今日の問題を、学校が安全に安心して子どもの教育を受ける権利を保障するために、いかなる施策が望ましいかを検討している。喜多明人、永井憲一、橋本恭宏、村元宏行、高野敏春と共著。(PP.76-93)
6	解説 学校安全基準	共編著	2008.05.30	不摩書房	子どもの安全と安心の確保のために、国、自治体、学校は何をすべきか。学校安全に関する法・条例・指針・判例について提言・解説などを総合的に行っている。
論文					
1	「人権としての子どもの安全とその能力形成—安全学習指針から—」	単著	2006.06.00	エイデル研究所「季刊教育法」151号 26頁-29頁	学校で発生する事故や登下校中に遭遇する事件に鑑み、学校は子どもの安全に安心して教育を受ける権利を保障するために、子どもに対し安全を守る学習を人権学習として行うことの重要性を指摘している。
2	「アメリカの能力別編成と構造的暴力論—日本の習熟度別指導への一つの示唆—」	単著	2007.03.00	「大東文化大学紀要〈社会科学〉」45号 177頁-188頁	アメリカで行われている能力別編成が、下位のコース・グループに多数入るマイノリティの生徒に否定的ラベルを貼り、それによって暴力や非行を誘発する一因になっているとする研究を紹介しつつ、日本における習熟度別指導の問題を考察する一つの示唆を提供している。
3	「ゼロトレランス批判と代替施策の模索—学校における修復的司法—」		2007.06.00	エイデル研究所「季刊教育法」第153号 28頁-33頁	アメリカにおける生徒の学校暴力や犯罪に対処する厳罰主義としてのゼロ・トレランスを批判的に考察し、ゼロ・トレランスに代えて暴力、犯罪の予防と解決を探る修復的司法の模索について検討している。
4	「〈訳載〉教室の刑罰化—ニューヨーク市学校の過剰警察化」	単著	2008.03.00	「大東文化大学紀要〈社会科学〉」46号 187頁-215頁	ニューヨーク市民的自由連合と全米市民的自由連合が本レポートにおいて市公立学校における警察活動の強化の背景と経緯、学校に配置される警察官の威圧的で暴力的な活動による生徒の逮捕、学校の教育環境に及ぼす否定的な影響等について指摘している。
その他					
1	ゼロ・トレランス政策の動向と学校教育の役割—アメリカの問題状況を教訓に—	学会発表	2008.08.28	日本教育学会第67回大会	日本における近年の毅然たる指導のあり方(=日本型ゼロ・トレランス)について、1990年代以降徹底されているアメリカ合衆国のゼロ・トレランスをめぐる問題状況とその代替策を追求する議論を教訓にしつつ考察する。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1973.03.28	～	現在	日本教育法学会会員(現在)、理事(1993.05.00～現在)	
2	1982.05.10	～	現在	全国憲法研究会会員(現在)	
3	1986.08.20	～	現在	日本教育学会会員(現在)	
4	2007.05.28	～	現在	学校安全と子どもの人権に関する研究特別委員会事務局長	

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	武者小路 信和	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 書誌学教育のためのアニメーション教材の作成		2006.00.00	平成 18 年度～現在 西洋書誌学を理解するうえで活版印刷に関する基礎的な知識が必要となる。活版印刷のように現在では廃れてしまった技術を言葉だけで説明しても、学生や講習会受講生にとってそれを正確に理解することは難しい。そこで、Flash というアニメーション作成ソフトを利用して、「植字作業中の行末調整」や「印刷作業を止めて行う組版の修正」のアニメーションを作成し、植字・印刷作業を目で見て具体的に理解できるように工夫した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 西洋古版本印刷地の見分け方ガイド (2)	単	2005.03.00	経済資料研究 35 号	書誌学に関する専門的な知識を持たない人でも、西洋古版本の印刷地を推定することが可能な方法、つまり国・地域により異なる植字・組版上の慣業に注目した諸方法を解説した。		
2 印刷史	単	2005.10.00	図書館・情報学研究入門 (勁草書房)	近代日本における活字・活版印刷に関する主要な研究を展望したレビュー論文。		
3 西洋古版本印刷地の見分け方ガイド (3)	単	2006.03.00	経済資料研究 36 号	書誌学に関する専門的な知識を持たない人でも、西洋古版本の印刷地を推定することが可能な方法、つまり国・地域により異なる植字・組版上の慣業に注目した諸方法を解説した。		
その他						
1 西洋古版本・印刷地の見分け方	単	2004.06.00	経済資料協議会総会・研究会	国・地域により異なる植字・組版上の慣業に注目した西洋古版本の印刷地の見分け方について発表した。		
2 図書館で働く一進路を考える際の選択肢の一つとして	単	2008.03.00	教育学会誌 (大東文化大学教育学会) 31 号	司書になりたい学生のために、採用状況、情報源、注意事項を解説		
III 学会等および社会における主な活動						

1	1985.04.00	～	現在	三田図書館・情報学会会員（昭和 60 年 4 月～平成 20 年 5 月 機関誌『Library and Information Science』編集委員、平成 18 年 6 月～現在 運営委員）
2	2002.04.00	～	2005.03.00	日本図書館情報学会会員（平成 14 年 4 月～平成 17 年 3 月 選挙管理委員長）
3	2002.06.00	～	現在	経済資料協議会会員（平成 14 年 6 月～現在 理事）
4	現在	～	現在	経済学史学会会員
5	現在	～	現在	日本 18 世紀学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	准教授	氏名	吉永 良正	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) バスカルと数学		2006.01.07		数学教育の会、2006年冬の集会での講演 (学習院大学) *研究業績の再掲。		
2) 情報飽食の時代と脳の健康		2006.08.28		日本民間放送連盟、「テレビCMの日」シンポジウムの基調講演 (電通本社)。*研究業績の再掲。		
3) もっとおもしろくても数学史—数学と哲学—		2008.05.16		大阪私学数学教育研究会、平成20年度春季講演会での講演。*研究業績の再掲。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 ひらめきはどこから来るのか	単著	2004.05.00	草思社	脳科学、情報科学等についての哲学的エッセイ。四六判 230 頁		
2 新装版 数学・まだこんなことがわからない	単著	2004.09.20	講談社	1990 年刊行本の改訂版。		
3 『バンセ』数学的思考	単著	2005.06.10	みすず書房	バスカル『バンセ』の断章 (B72 他) を読解し、現代数学と現代宇宙論の知見から新解釈を提示。四六判 146 頁		
4 この数学書がおもしろい	共著	2006.04.01	数学書房	数学書房編集部編。A5判 176 頁 「リベラル・アーツとしての数学書」を執筆 p.170-p.173		
5 アキレスとカメーパラドックスの考察—	単著	2008.07.01	講談社	アリストテレスの『自然学』にあるゼノンの4つのパラドックスについて数学史及び哲学史から究明。新解釈も盛り込み、無限と連続の本質を考える。四六判 127 頁		
論文						
1 幾何学はどこから来たのか	単著	2006.07.01	「現代思想」Vol.34 No.8 (青土社)	幾何学の起源とその影響を考察。p.199-p.203		
2 パスカル、一生に一度の賭け	単著	2006.10.20	「別冊国文学」No.61 (学燈社)	確率論の成立と「火の夜」の回心との関係を考察。p.166-p.171		
その他						

1	統合学の概念規定のためのいくつかの論点	単独	2005.08.09	統合学術国際研究所	「複雑系と有機体思考プロジェクト」研究会での発表。
2	統合学の原理と論理	単独	2005.12.29	統合学術国際研究所	第3回合同研究会パネルディスカッションのパネラー
3	バスカルと数学	単独	2006.01.07	数学教育の会(学習院大学)	「2006年冬の集会」での講演
4	ブックガイド〈数学〉を読む	単著	2006.06.05	「学鏡」Vol.103 No.2(丸善)	書評。p.44-p.47
5	情報飽食の時代と脳の健康	単独	2006.08.28	「テレビCMの日」シンポジウム基調講演(日本民間放送連盟)	「情報糖尿病」の考え方を紹介し、テレビCMの役割を考察。
6	数学と統合学への夢	単著	2007.02.25	「大学への数学」2007年3月号(東京出版)	数学を単なるテクネーでなくエピステーメーとして考察。p.64-p.67
7	哲学にとって“複雑系”とは何か	単独	2007.07.01	京都ヘーゲル読書会 平成19年度夏期研究会	哲学の課題としての“複雑系”を紹介し、問題群を提示。
8	哲学を愛した人たち	単著	2008.02.25	「大学への数学」2008年3月号(東京出版)	数学者であった哲学者たちを紹介。p.74-p.76
9	一病息災	単著	2008.03.01	「大法輪」平成20年3月号(大法輪閣)	エッセイ。p.46-p.47
10	もっとおもしろくても数学史ー数学と哲学ー	単独	2008.05.16	大阪私学数学教育研究会 平成20年度春季講演会	ゼノンのパラドックスの一つ、「アキレスと亀」の数学的新解釈を紹介し、数学と哲学の深い関係を考察。
11	数学的無限の概念規定ー1830年前後の数学と『大論理学』ー	単独	2009.01.11	京都ヘーゲル読書会 平成20年度冬期研究会	ヘーゲルの『大論理学』の中にある微積分学についての話を、当時の数学的状況を考慮しながら読み直す研究の第1回目。数学についての考察がヘーゲル哲学の再解釈への道を拓く。
12	無限と連続	単著	2009.02.25	「大学への数学」2009年3月号(東京出版)	ゼノン、バスカル、ヘーゲルの無限概念を紹介。p.64-p.67

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1983.10.00	～	現在	京都哲学会会員
2	1990.07.00	～	現在	京都ヘーゲル読書会会員
3	1992.11.00			第一回科学ジャーナリスト世界会議日本組織委員会組織委員
4	1997.11.00			花博記念協会「コスモス国際賞シンポジウム」コーディネイター
5	1998.11.00			自動車工業振興会「トークイン'98」コメンテーター
6	2005.04.00	～	2009.03.00	信濃毎日新聞書評委員
7	2006.01.00			講談社科学出版賞選考委員
8	2006.06.00			日本文芸家協会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	石渕 聡	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 冒険する身体	単著	2006.07.00	春風社、248 ページ	観客による舞踊の享受の仕方を考察し、舞踊における身体の認知および舞踊の意味生成のあり方を構造化する。現象学的見地から「踊ること」を読み解き、「ダンサーの道具としての身体」を解放する。舞踊の意味と身体の問題を考察し、観客が舞踊を受容するあり方、また舞踊の意味が生成する様相を構造化する。		
論文						
1 映像における身体表象の認知の問題	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 pp.19-30	身体パフォーマンスの芸術における身体表象と映像芸術におけるそれとを構造的につきあわせることによって、身体を考えていく新たな視点を見出す。映像の身体認知の問題を、「第三の現実」という映像内現実に対する了解システム、自己認知のシステムの稼働 (及び、他者認知の視線の問題)、舞踊作品を、映像における身体表象が虚性における特質を示す場として、つまり、映像が「映像であること」を主張してくるものとして捉え、映像の身体表象の機能を考察する。		
2 舞踊作品におけるシーン (Scene) という単位について	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 p.47-p.60	「シーン scene」という用語を「あるまとまりをもって空間一時間的に作品を構成している要素」として規定し、どのような方法で観客は舞踊作品にシーンを見出すかということを考える。分析はまず、シーンが作品の中でどのような性質をもった単位であるかを検討する。そして、シーンを区切る一つの要因として、振付と他のメディア (ここでは特に音楽を取り上げる) との内容的連関を検討する。最終的には、観客が舞踊作品にシーンを見出す認知のモデルを構築する。		
その他						
1 舞踊作品における映像の機能とは何か		2008.12.06	第 60 回舞踊学会大会 2008 年 12 月 6 日 (土)・7 日 (日)	口頭発表		

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1989.04.00	～	現在	早稲田大学演劇・映像学会 Society of Theatre Studies, Waseda University 会員
2	1989.10.00	～	現在	民俗芸能学会 The Society of Folkloric Performing Arts 会員
3	1991.10.00	～	現在	舞踊学会 Japanese Society For Dance Research 会員(平成 10 年度～平成 11 年度事務局事務担当)

(表 25)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	石渕 聡	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	第一章 009 は二度死ぬ	天王洲・スフィアメックス		2004.05.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
2	Big Wednesday	福岡・イムズホール		2004.08.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
3	Big Wednesday	広島・広島市東区民センター		2004.08.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
4	Big Wednesday	大阪・MIDシアター		2004.09.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
5	Big Wednesday	東京・シアターアプル		2004.09.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
6	愛知万博プレイベント「森の中のパレード～音楽が踊る・ダンスが聴こえる～」	よみうりランド オープンシアター E A S T		2004.10.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
7	愛知万博プレイベント「森の中のパレード～音楽が踊る・ダンスが聴こえる～」	愛知県芸術劇場大ホール		2004.11.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
8	2005年アーメン	京都三条アートコンプレックス 1928		2004.12.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
9	『大狂騒時代』～浜通り(サンダーロード) 激情大暴走!!	いわき市文化センター大ホール		2005.01.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
10	『大狂宴時代』～学園都市(パラダイスシティ) 青春大爆裂!!	つくばカピオホール		2005.01.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
11	『大狂楽時代』～コンドルズ、仙台に新規参入決定!!	仙台市青年文化センター シアターホール		2005.02.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
12	JUPITER	東京・渋谷公会堂		2005.03.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
13	JUPITER ENCORE	東京・東京グローブ座		2005.03.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
14	TOP OF THE WORLD	福岡・イムズホール		2005.08.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
15	TOP OF THE WORLD	広島・NTTクレドホール		2005.09.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
16	TOP OF THE WORLD	大阪・OBP円形ホール		2005.09.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
17	TOP OF THE WORLD	東京・シアターアプル		2005.09.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
18	「剛速球時代」	宮崎県立芸術劇場		2005.11.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
19	2006年ベルリン	京都三条アートコンプレックス 1928		2005.12.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
20	「TOP OF THE WORLD 独眼竜スペシャル」	仙台市青年文化センター シアターホール		2006.02.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
21	勝利への脱出	東京グローブ座		2006.04.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
22	勝利への脱出_SHUFFLE	彩の国さいたま芸術劇場		2006.05.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	
23	GALA Obirin 2006 特別公演 『桜開花時代』	桜美林大学 PRUNUS HALL		2006.05.00	コンドルズ ダンサー、振付・演出補佐として参加	

24	国際交流基金主催・日比友好 50 周年記念イベント マニラ公演	マニラ・フィリピン文化センター	2006.06.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
25	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	福岡・イムズホール	2006.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
26	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	広島・アステールプラザ	2006.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
27	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	仙台・電力ホール	2006.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
28	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	大阪・松下 I MP ホール	2006.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
29	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	東京・シアターアプル	2006.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
30	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	札幌・札幌芸術の森屋外ステージ ART BOX	2006.09.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
31	ダンストリエンナーレ TOKYO 2006	青山芸術劇場	2006.11.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
32	ELDORADO ～ New Best of CONDORS～	りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館	2006.12.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
33	2007 年メルヘン	京都三条アートコンプレックス 1928	2006.12.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
34	ヨーロッパツアー2007 ロンドン公演	Lilian Baylis (Sadler's Wells)	2007.01.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
35	ヨーロッパツアー2007 パリ公演	The Japan Cultural Institute in Paris (The Japan Foundation)	2007.01.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
36	ヨーロッパツアー2007 ローマ公演	AUDITORIUM PARCO DELLA MUSICA Sala Teatro Studio	2007.01.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
37	ヨーロッパツアー2007 東京凱旋公演「太陽にくちづけ7 バック・トゥ・ザ・フューチャー」	東京グローブ座	2007.03.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
38	埼玉スペシャル公演 2007「太陽にくちづけ 007 トゥモロー・ネバー・ダイ」	彩の国さいたま芸術劇場	2007.05.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
39	SUMMER TIME BLUES～沈黙の夏～	福岡・イムズホール	2007.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
40	SUMMER TIME BLUES～沈黙の夏～	広島・アステールプラザ	2007.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
41	SUMMER TIME BLUES～沈黙の夏～	大阪・松下 I MP ホール	2007.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
42	SUMMER TIME BLUES～沈黙の夏～	仙台・電力ホール	2007.08.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
43	SUMMER TIME BLUES～沈黙の夏～	東京・シアターアプル	2007.09.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
44	愛知と青春の旅立ち～コンドルズと祝おう 愛知芸術文化センター15周年イベント	愛知県芸術劇場大ホール	2007.11.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
45	学習院女子大超特別公演「聖コンドル女学園～あなたにあえてよかった～」	学習院女子大学 やわらぎホール	2007.11.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
46	SKY HIGH	春日井市民会館	2007.11.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
47	HIGH VOLTAGE	福井市文化会館	2007.11.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加
48	2008 年ツタンカーメン	京都三条アートコンプレックス 1928	2007.12.00	コンドルズ	ダンサー、振付・演出補佐として参加

49	HIGH KICKS	焼津市文化センター (静岡)	2008.01.12	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
50	NATURAL HIGH	さくらホール (岩手)	2008.01.19	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
51	Let's Go Crazy tour2008 HIGH AVERAGE	所沢市民文化センター (さいたま)	2008.01.26	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
52	NHK シアターコレクション'08 ELDORADO	NHK ふれあいホール (渋谷) 2008年2月16-17日	2008.02.16	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
53	UFO	青山円形劇場 (青山) 2008年2月20-23日	2008.02.20	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
54	ブラジル公演	Teatro Sala Sergio Cardoso (Curitiba, Brazil) 2008年3月2-23日	2008.03.02	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
55	ブラジル公演	Teatro Sala Sergio Cardoso (Sao Paulo, Brazil) 2008年3月14-16日	2008.03.14	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
56	大いなる幻影	彩の国さいたま芸術劇場 (さいたま) 2008年5月17-18日	2008.05.17	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
57	UNTOUCHABLES-アンタッ チャブルー	OBP 円形ホール (大阪) 2008年11月1-2日	2008.11.01	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
58	UNTOUCHABLES-アンタッ チャブルー	シアターアプル (新宿) 2008年11月7-9日	2008.11.07	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
59	UNTOUCHABLES-アンタッ チャブルー	アステールプラザ (広島)	2008.11.21	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
60	UNTOUCHABLES-アンタッ チャブルー	イムズホール (福岡) 2008年11月23-24日	2008.11.23	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
61	2009年アインシュタイン	アートコンプレックス 1928 (京都) 2008年12月21-23日	2008.12.21	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加
62	ラストワルツ	シアターアプル (新宿)	2008.12.31	コンドルズにダンサー、振付・演出補佐として参加

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	上野 正道	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 茅ヶ崎市立浜之郷小学校研究授業参加		2008.06.13	教育学科の3、4年生の学生(小学校教員志望の学生)を対象に、浜之郷小学校の研究授業に参加し、教育学の学習を深める契機とした。				
2) 北区立赤羽台西小学校研究授業参加		2008.07.09	教育学科のゼミ生を中心に、赤羽台西小学校の研究授業に参加。その後、同小学校の教員と学生を交えて、「デュイと学校改革」について講義を行った。				
3) 板橋区立三園小学校への授業アシスタントのボランティア学生を派遣		2008.09.00	2008年9月～2009年3月 上野ゼミナール3年生2名を三園小学校に授業アシスタントのボランティアとして派遣し、随時、支援内容についての報告と相談を実施した。				
4) 夏季ゼミ合宿の実施		2008.09.13	2008年9月13日～15日 教育学科の3、4年生のゼミ生を対象に、戸狩温泉で夏季ゼミ合宿を実施し、集中的な学習会を行った。				
5) 台東区立千束小学校研究授業参加		2008.09.16	教育学科の3、4年生とともに、千束小学校の研究授業に出席し、授業についての協議に加わった。				
6) 北区立赤羽台西小学校研究授業参加		2008.10.07	教育学科のゼミ生を中心に、赤羽台西小学校の研究授業に参加。				
7) 台東区立千束小学校研究授業参加		2008.11.25	教育学科の3、4年生とともに、千束小学校の研究授業に出席し、授業についての協議に加わった。				
8) 板橋区立三園小学校への学力調査派遣		2008.12.00	教育学科の2年生の(次年度上野ゼミの学生)に、三園小学校で学力インタビュー実施の支援を行い報告を求めた。				
9) 大東文化大学授業評価(学生による授業評価アンケート)		2008.12.00	大東文化大学の授業評価アンケートで高い評価を得た。基礎演習1の授業では、「説明の理解度」「聞き取りやすさ」「教材の適切性」「情報提示の工夫」「学習内容の量」「シラバスの反映度」「質問する機会」「関連分野への関心」「授業目的の明確性」「教員の熱意」の項目において、アンケート回答者の全員が「2. はい」と回答。				
10) 北区立八幡小学校研究授業参加		2008.12.09	教育学科の2年生の学生2名とともに、八幡小学校のワークショップに出席し、協議会に加わった。				
11) 上野ゼミナール卒業論文集を作成		2009.01.00	上野ゼミナール4年生7名の卒業論文を収録した卒業論文集を作成した。				
12) 練馬区立豊玉南小学校研究発表会参加		2009.01.23	教育学科の4年生のゼミ生とともに、豊玉南小学校の研究発表会に参加した。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			

著書				
論文				
1 デューイの教育理論における総合学習の構想ー民主的なカリキュラムの創造ー	単著	2005.04.00	『幼児教育学研究』第12号、9～17頁	2002年より小学校、中学校、高等学校で導入されている「総合的な学習の時間」とそれが示す学校改革の方向性を、デューイのカリキュラム論に基づいて解明した。デューイの言うカリキュラムが、教科の領域概念としてよりも、「相関」と「統合」の関係概念で捉えられていたこと、「活動」と「経験」を軸にして、子どもたちの学習経験において位置づけられていたこと、「民主的なコミュニティ」の実現を意図していたことを解明した。その上で、彼が1896年から1903年までの間、シカゴ大学の付属として自ら開設し実践した実験学校のカリキュラムを分析した。科学や歴史、大工、料理などの単元が「仕事（オキュペーション）」と呼ばれる作業をもとにして、カリキュラムを創造し構成していったことを明らかにした。
2 進歩主義期の学校改革における市民教育の展開ーT. J. ジョーンズのカリキュラム政策に着目してー	単著	2006.02.00	『國學院大學紀要』第44巻、49～64頁	1900年代から1910年代にかけて、社会科のカリキュラムの創設に尽力したジョーンズのカリキュラム改革に着目して、進歩主義期の学校改革における市民教育の展開を明らかにした。
3 進歩主義期のカリキュラム改革における市民性教育の構想ー『アメリカ民主主義の問題』を中心にしてー	単著	2006.03.00	『教育学科学セミナー』第37号、61～68頁	1916年の中等教育改革審議会の社会科委員会が構想し発表した『アメリカ民主主義の問題』のカリキュラムから市民性教育の展開を解明した。
4 小学校低学年用 Thinking Together Programme の開発と実践	共著	2006.03.00	『協働思考を通じた学習 CHAT Technical Reports』No.3、1～39頁	大阪府のF小学校で実施した Thinking Together Programme の実践を分析した。協働学習の理論と実践の解明を行った。
5 環境学習における協同的探究と経験の再構成ーデューイのカリキュラム論とその実践的展開ー	単著	2006.04.00	『幼児教育学研究』第13号、1～10頁	デューイのカリキュラム論が現代の環境学習の実践に示唆する事柄について、彼の探究と経験に基づく学習論をもとに明らかにした。デューイは、探究概念を、個人的に遂行されるものではなく、協同的な形で展開されるものと認識し提示したことを考察した。その上で、富士市の広見小学校の環境学習の実践の分析を、デューイの理論をもとに行なった。
6 デューイの学習理論における生活経験とカリキュラムー自然科と社会科の統合ー	単著	2006.05.00	『経済文化研究所紀要』第11号、249～262頁	デューイが、カリキュラムの成立基盤を子どもたちの生活経験に置き、カリキュラムを領域概念としてよりも、関係概念の中で捉えたことを解明した。特に、彼が自然科と社会科の統合をデザインしたことを考察した。
7 協同的な学習活動におけるコミュニケーションと道具ー活動理論とデューイー	単著	2007.03.00	『語学教育研究論叢』第24号、191～212頁	授業実践において協同的な学習活動を構想する際の中核に位置する道具としてのコミュニケーションの考え方を、活動理論とデューイの学習論を比較し考察した。ヴィゴツキーに端を発し、現代ではエンゲストロームらによって展開されている活動理論におけるコミュニケーション的な活動の概念が、デューイの学習理論にも共通して底流にあったことを明らかにした。
8 デューイにおける学校改革と公共性の再構成ー1930年代の民主主義の教育を中心にしてー	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要 社会科学』第45号、127～145頁	1930年代のデューイの学校改革と公共性の構想を、リベラリズム批判の角度から解明し、民主主義を基調とする彼の学校教育の構想を明らかにした。デューイは、市場や国家が主導する伝統的な公共性の概念を退け、学校を社会形成と文化創造のエージェンシーとして位置付け、民主主義的なコミュニティとしての革新的な学校のヴィジョンを提示したことを解明した。
9 デューイの学習構想と文化歴史的活動理論の展開ー活動と経験に基づく教育システムのデザインー	単著	2007.04.00	『幼児教育学研究』第14号、30～48頁	ジョン・デューイの学習理論と、ヴィゴツキー学派で展開されているエンゲストロームの理論を比較しながら、活動と経験を基礎にした学校システムについて考察した。

10	School reform and democracy in the public theory of John Dewey: The transformation of liberalism and its ethics	単著	2007.05.00	『経済文化研究所紀要』第12号、167～194頁	1920年代から30年代のデューイのリベラリズムと公共性の思想から、彼の学校改革の構想の展開過程を解明した。
11	1910年代のアメリカの中等教育改革における市民性教育の構想と展開ー『中等教育基本原理』を中心にー	単著	2007.10.00	『日本デューイ学会紀要』第48号、191～200頁	1918年に中等教育改革審議会から出された「中等教育基本原理」をもとに、1910年代のアメリカの市民性教育の展開を明らかにした。
12	対話的・協同的実践としての学習活動の創造ーデューイと進歩主義教育ー	単著	2008.03.00	『語学教育研究論叢』第25号、261～281頁	デューイと進歩主義学校とのかかわりから、対話的で協同的な学習構想の実態について検討を行った。
13	デューイにおけるリベラリズム批判と公共性の再構成ー教育改革の成立基盤としての公共性概念の検討ー	単著	2008.03.00	『大東文化大学紀要 社会科学』第46号、271～283頁	デューイの『リベラリズムと社会的行為』（1935年）を中心に、彼の公共性概念について考察し、教育改革の成立基盤となる公共性の新しい定義づけを試みた。
14	1930年代のデューイにおけるコミュニティ・スクールの構想ー活動的な学習実践の創造ー	単著	2008.03.00	『人文科学』第14号、121～140頁	1930年代のデューイのコミュニティ・スクールの構想を、「進歩主義学校をなぜ主張するのか」（1933年）、「学校の『飾り』を廃止すべきか、否」（1933年）、「活動の動向」（1934年）などの彼の小論と講演から分析し、その上で、コミュニティ・スクールの実践的展開を彼の教え子のエルシー・クラップの実践から明らかにした。ケンタッキー州ジェファーソン・カウンティのロジャー・クラーク・バラード・メモリアル・スクールや、ウエスト・ヴァージニア州リーブヴィルのアーサー・デール・コミュニティ・スクールなど、クラブが改革に従事した学校を取り上げ、彼女の試みを活動的なコミュニティの学習の観点から考察した。
15	デューイにおける学校の公共性の再構成ー1920年代から30年代のリベラリズムの変容を中心にー	単著	2008.10.00	東京大学大学院教育学研究科博士学位論文	2008年3月に東京大学に提出され、10月に受理された博士学位論文。博士（教育学）を取得。
16	協同学習に基づく学校システムの形成ージョン・デューイの「教育の自由」構想を中心にー	単著	2009.03.00	『語学教育研究論叢』第26号、349～362頁	1930年代のデューイが協同的な学習活動と教育の自由を基盤にした学校システムの構築を探索したことを明らかにした。なかでも、彼が「勉強」と「学習」を区別して論じ、「勉強」とは異なる「学習」を、協同性と自由の観念において捉えていたことを考察した。そして、そうした協同的な学習を基盤にした「教育の自律性」と「権威」を確立する観点から対立したシカゴ大学総長のハッチンスとの論争を検討し、デューイがコミュニケーションの対話関係を基礎とする「国家的システム」としての学校を構築しようとしたことを明らかにした。
17	公共性の概念系譜とコミュニティーハーバーマス、アレント、デューイー	単著	2009.03.00	上野正道、田尻敦子編『コミュニティにおける学習』大東文化大学人文科学研究所、1～13頁	公共性の概念とコミュニティの関係を、ハーバーマス、アレント、デューイの比較から検討した。
18	芸術教育とコミュニティーデューイとバーンズの挑戦ー	単著	2009.03.00	上野正道、田尻敦子編『コミュニティにおける学習』大東文化大学人文科学研究所、14～30頁	1930年代のデューイとバーンズの芸術教育の試みをフィラデルフィア美術館やフィラデルフィア市との論争に焦点を当てて考察した。
19	教職の専門性とコミュニティー教師教育における省察とメンタリングー	単著	2009.03.00	上野正道、田尻敦子編『コミュニティにおける学習』大東文化大学人文科学研究所、101～115頁	近年、アメリカで議論が活発化されている、コミュニティの中での教職の専門性の育成について、教師教育の省察とメンタリングの観点から考察した。
その他					

1	教育改革における市民性の位相―1980年代以降の思想変容をもとに―	単著	2004.06.00	『児童研究』第50巻、第3号、4～5頁	イギリスやアメリカで進行している教育改革の中で市民性形成の重要性が強調されている。この論稿では、80年代以降の動向の中での市民性教育の展開過程を追及し明らかにした。
2	進歩主義期の学校改革における市民教育の展開―T. J. ジョーンズのカリキュラム政策に着目して―	単	2004.07.03	日本カリキュラム学会第15回大会	1910年代から20年代の中等教育改革審議会(NEA)の「市民教育」を、ジョーンズの学校構想に着目して考察した。彼は、ヴァージニア州のハンプトン・インスティテュートで、教科として最初の「社会科」の実践を行った。黒人と移民たちを対象にして実践された「社会科」のカリキュラムは、彼らの子どもを新たに「市民」の当事者に加えようとした点で、革新的な学校構想の意味を持っていた。しかし、20年代にジョーンズが指導的役割を果たしたNEAは、複線型による教育機会の分断を推進し、白人中産階級を主体とする「市民教育」を展開した。ジョーンズは、政治的権利や平等の確立を意図してきた19世紀リベラリズムの伝統とは異なり、黒人や移民の子どもたちを白人に同化させるコンフォーミティ優先の政策を実現させた。ジョーンズとNEAが、デューイとは対立する方向でリベラル改革を率い、学校の公共性を準備したことを明らかにした。
3	デューイの教育理論における総合学習の構想―民主的なカリキュラムの創造―	単	2004.08.28	日本幼児教育学会第12回大会	2002年より小学校、中学校、高等学校で導入されている「総合的な学習の時間」とそれが示す学校改革の方向性を、デューイのカリキュラム論に基づいて解明した。デューイの言うカリキュラムが、教科の領域概念としてよりも、「相関」と「統合」の関係概念で捉えられていたこと、「活動」と「経験」を軸にして、子どもたちの学習経験において位置づけられていたこと、「民主的なコミュニティ」の実現を意図していたことを解明した。その上で、彼が1896年から1903年までの間、シカゴ大学の付属として自ら開設し実践した実験学校のカリキュラムを分析した。科学や歴史、大工、料理などの単元が「仕事(オキュペーション)」と呼ばれる作業をもとにして、カリキュラムを創造し構成していったことを明らかにした。
4	教職専門職大学院のカリキュラムを構想する	共	2005.08.05	関西大学大学院人間活動理論研究センター、第1回公開フォーラム、共同発表者、山住勝広、比留間太白、鍋島弘治朗、若槻健、上野正道	関西大学人間活動理論研究センターで開催された第1回公開フォーラムである。教職専門職大学院の設置を展望したカリキュラム研究の最前線について発表し議論した。
5	デューイの学習理論における生活経験とカリキュラム―自然科と社会科の統合―	単	2005.08.27	日本幼児教育学会第13回大会	デューイが、カリキュラムの成立基盤を子どもたちの生活経験に置き、カリキュラムを領域概念としてよりも、関係概念の中で捉えたことを解明した。特に、彼が自然科と社会科の統合をデザインしたことを考察した。
6	今日の日本の教育における教師の位相と課題	共著	2006.09.00	『公共的良識人』第178号、1～8頁	ネル・ノディングス、佐藤学、石井順治、草川剛人、上野正道、飯塚立人、金泰昌、矢崎勝彦との座談会の内容である。これからの教師の位置と課題について、議論を行った。
7	1910年代の中等教育改革における市民性教育の構想と展開―「中等教育基本原理」を中心として―	単著	2006.10.00	日本デューイ学会第50回研究大会	1918年に、中等教育改造審議会が提案した『中等教育基本原理』を取り上げて、1910年代の進歩主義期の学校改革における市民性教育の構想と展開を明らかにした。1910年代において、子どもが市民性の担い手として登場する一方で、19世紀の市民性概念を特徴付けてきた政治概念としての市民性概念が捨象され、市民性は生活概念を主体とするものへと変貌したことを指摘した。
8	デューイにおける協同学習とカリキュラム―経験の意味と関係の再構築―	単著	2007.03.00	『大東文化大学教育学会誌』第30号、13～22頁	デューイの学習論が、経験の意味と関係の再構築を基盤にすることを考察した。特に、彼が1896年に開設したシカゴ大学附属小学校の実践を検討した。シカゴ実験学校における「仕事」のカリキュラムの分析を行い、協同学習とカリキュラムの連関を明らかにした。
9	学びの意味とその再定義―発展的な学力の形成に向けて―	単著	2007.03.00	『敬愛大学教職課程研究室年報』第11号、78～79頁	OECDとIEAの学力の国際比較調査から見える近年の学力の問題を指摘し、それをもとに、近未来の学びのあり方について、創造的で発展的で社会実践的な観点からデザインした。

10	音楽の学びをひらく	単著	2007.05.00	『音楽教育 ヴァン』 Vol.10、教育芸術社、12～ 15 頁	今日の音楽教育のあり方とこれからについて、提言を行った。
11	技術教育と学びの公共空間ーシカゴ実験学校の実践からー	単著	2008.01.00	『技術教室』No.666、10～ 15 頁	デューイのシカゴ実験学校の「仕事」の実践から、技術教育の学びについて提言した。
12	『人文科学研究所所報』第14号、21～22頁	単著	2008.03.00	多様なコミュニティにおける学習活動の形成	
13	学習コミュニティに基づく教師教育の創造ー教師の専門性の議論を手がかりにしてー	単著	2008.10.12	日本デューイ学会第52回 研究大会、筑波大学	「学習コミュニティ」の観点から教師教育の再生に着手する全米教育アカデミーの教師教育委員会の議論に焦点を当てて、「専門的実践のヴィジョン」の樹立をめぐる展開されている教師教育の先端的な研究と実践を明らかにした。教師教育委員会の展望を考察した上で、具体的なプログラムとして、ウィスコンシン州のアルバーノ・カレッジの試みを検討した。

III 学会等および社会における主な活動

1	2000.04.00	～	現在	教育思想史学会会員
2	2000.04.00	～	現在	教育哲学会会員
3	2000.04.00	～	現在	日本デューイ学会会員
4	2000.04.00	～	現在	日本教育方法学会会員
5	2001.04.00	～	現在	日本カリキュラム学会会員
6	2001.04.00	～	現在	日本幼児教育学会会員
7	2008.08.01	～	現在	日本教育学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	呉 裁喜	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 地域との連携及びサポート (児童館、公民館、保育園におけるボランティア活動)		2005.00.00		(平成 17 年～現在) ゼミ活動の一つとして地域のニーズ把握、サポート、連携といった地域とのかかわりを児童館や公民館、保育園におけるボランティア活動を通じて体験できるよう指導を行っている。今年度からは高島平地域活性化プロジェクトの一環として幅広く地域住民のニーズ調査に取り組む予定である。		
2) 当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価		現在		毎年行われている学生による授業評価アンケートの結果では授業に対する学生の満足度はかなり高いものとなっている。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 大学生のための福祉教育 (ナカシニシヤ)		2009.03.00		虐待やネグレクトなどにより保護を必要とする児童を取り巻く現状及び必要保護児童を対象にサービスを行う児童養護施設について紹介した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) (科学研究基盤研究 A 課題) 21 世紀の超少子高齢・人口減少社会における家族福祉モデル開発に関する研究		2007.04.00		文部科学省 (基盤研究) (平成 19 年度～平成 21 年度) 本研究は、平成 19 年度から 3 年間を予定とし日本、ヨーロッパ、北米、アジアの家族のあり方を模索しながら 21 世紀日本の超少子高齢・人口減少社会に貢献する、個々人のライフコースを尊重した QOL (生活の質) の維持・向上に資するための家族福祉モデルを提案することを目的とする。		
2) 平成 19 年度科学研究基盤研究 A (分担研究者) 課題: 21 世紀の超少子高齢・人口減少社会における家族福祉モデル開発に関する研究		2007.04.00		本研究は、平成 19 年度から 3 年間を予定とし日本、ヨーロッパ、北米、アジアの家族のあり方を模索しながら 21 世紀日本の超少子高齢・人口減少社会に貢献する、個々人のライフコースを尊重した QOL (生活の質) の維持・向上に資するための家族福祉モデルを提案することを目的とする。		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 老人保健施設入所者と介護者の施設や支援相談員への期待に関する質的調査—フォーカスグループインタビューの結果を中心に—	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要 社会科学 第 43 号 p.1-13	老健施設における家庭復帰に向けた「介入モデル」開発の一環として、入所者や入所者家族を対象に家庭復帰にかかわる支援相談員の役割 (退院援助業務) に焦点を当てたニーズについてフォーカスグループインタビュー法を用いて質的調査を行った。		

2	障害幼児の発達特性と母親のニーズの関係	共著	2006.03.00	大東文化大学紀要 社会科学 第44号 p.15-22	障害幼児の母親の福祉関連ニーズの対する介入指針を得ることをねらいとし、障害児通園施設（17か所）から300人の親子を対象に調査を行い、児の発達特性と母親のニーズとの関係について明らかにした。
3	日本及び欧州諸国における育児支援策に関する研究(1)―出産・育児休業及び経済的支援を中心に―		2008.03.00	大東文化大学紀要 社会科学 第46号 p.237-248	スウェーデン、フィンランド、オランダ、ベルギーにおける家族政策のうち出産・育児休業及び経済的支援の制度及び現状について検討し、今後日本における育児支援策充実のための方向性を提示した。
4	フィンランドの家族政策	単著	2008.07.00	社会環境フォーラム 21 第2号 p.99-107	福祉国家であるフィンランドの社会福祉政策のうち重要な位置を占めている家族政策について検討し、国民の多様なライフスタイルに応じた支援が行われている現状について明らかにした。
5	フィンランドにおける高齢者雇用支援	単著	2009.01.00	社会環境論究 創刊号 p.99-107	高齢化が進むフィンランドの高齢者就業支援策について検討し、日本に示唆する点を考察することを目的とした。研究方法はインタビュー法を用いた。
6	障害児の特性と母親の育児負担感の関係	共著	2009.03.00	大東文化大学紀要 第47号 p.285-294	障害幼児の母親に対する介入指針を得ることをねらいとし、障害児通園施設を利用する母親515人を対象に質問紙調査を行い、障害児の特性と母親の育児負担感の関係について検討を行った。共著者：岡田節子、中嶋和夫
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	1993.06.00	～	現在	日本社会福祉学会会員
2	1995.04.00	～	現在	日本保健福祉学会会員
3	1996.04.00	～	現在	日本小児保健協会会員
4	1999.06.00	～	現在	日本国際福祉学会会員
5	2000.04.00	～	現在	日本公衆衛生学会会員
6	2001.04.00	～	現在	日本子ども家庭福祉学会会員
7	2002.09.00	～	現在	韓国老人福祉学会会員
8	2002.09.00	～	現在	日本特殊教育学会会員
9	2007.04.00	～	現在	社会環境フォーラム 21 会員
10	2007.04.00	～	現在	日本保健科学学会会員
11	2008.10.00	～	現在	地域の子育て支援～親子コミュニティ大東文化大学現代 GP プロジェクトの一環として運営されている「カフェサンク」において毎月第3月曜日、乳幼児やその保護者、小学生を対象にゼミ生との交流を行っている。昨年、地域の保護者を対象とした育児支援ニーズ調査の結果、多くの保護者「育児に関する相談相手がいない」、「母子共に近くに友達がいない」、「子どもと一緒に遊べる場がほしい」等のニーズが明らかになった。そこで、呉ゼミでは少子化が進む高島平地域の親子を対象とし、子ども達の発達を促す様々なプログラムを用意し参加してもらおうと同時に母親達が気軽に地域の育児コミュニティ活動への参加を促すことをねらいとし活動を展開している。

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	杉田 明宏	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 「児童の権利に関する条約 (子どもの権利条約) を生かす人権教育」		2004.06.16		三芳町教育研究会講演			
2) 「地域から非核と平和文化づくりを」～富士見市非核平和都市宣言 20 年を迎えて～ コーディネーター		2004.07.15		富士見市ピース・フェスティバル 記念フォーラム			
3) 「世界に広がる平和のうねり」		2005.01.00		04 ピースカレッジ埼玉 A コース後期 講師			
4) 最新沖縄事情レポート		2005.07.31		平和のための埼玉の戦争展 イベントルーム企画講演			
5) 「国際貢献のあり方を考えようーアフガンを題材に」		2005.11.26		05 ピース・カレッジ埼玉 講師			
6) 「憲法 9 条と平和の力」		2006.06.10		平和のための埼玉の戦争展実行委員会 結成総会基調講演			
7) テーマ「平和とは何か」		2006.10.06		さいたま市立大宮西高等学校 生徒対象平和学習講師			
8) 第 1 回 教育問題を平和学するー暴力論		2006.10.27		06 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
9) 第 2 回 沖縄問題を平和学するーコンフリクト論		2006.11.17		06 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
10) 第 6 回「平頂山事件から考える中・日の和解」		2006.11.25		06 ピース・カレッジ埼玉 A コース後期 講師			
11) 第 3 回 核問題を平和学するーアクター論		2006.12.01		06 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
12) 「平和にむけた取り組み」助言者		2007.03.02		第 52 回全国青年問題研究集会 第 4 部門第 1 分科会			
13) 第 1 回コンフリクトとしての「沖縄問題」		2007.05.18		07 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
14) 第 2 回沖縄戦問題のコンフリクト構造とその転換		2007.06.08		07 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
15) 第 3 回沖縄戦問題のコンフリクト構造とその転換		2007.07.06		07 ピース・カレッジ埼玉「平和学を学ぶ」金曜ゼミナール 講師			
16) 「平和ガイドと私と平和心理学」		2007.09.16		沖縄平和ネットワーク 学習会講師			
17) 戦争と人権侵害ー沖縄戦から考える戦争と平和		2007.10.18		埼玉県立坂戸西高等学校 修学旅行事前学習会講師			

18) コーディネーター	2008.05.05	9条世界会議自主企画「外国ジャーナリストが語る 海外から見た憲法9条」
19) 「戦争も核兵器もない平和で持続可能な世界をつくろう」	2008.06.14	平和のための埼玉の戦争展実行委員会 結成総会 記念対談 (立教大学 阿部治教授と)
20) 「「沖縄」と「私たち」、そして私」	2008.11.07	埼玉県立上尾高等学校修学旅行事前学習講演 沖縄への修学旅行生を対象に、沖縄戦・米軍基地問題と高校生がいかに向き合うべきか、という視点から講演を行った。
21) 「高校生として、オキナワをどう学ぶか？」	2008.11.18	埼玉県立飯能高等学校修学旅行事前学習講演 沖縄への修学旅行生を対象に、沖縄の諸問題に対し、高校生としてどのような視点から向き合い考えるべきか、について講演を行った。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『「心のノートの方へは行かない」平和心理学から見た「心のノート」問題』	共著	2004.00.00	子どもの未来社	岩川直樹・船橋一男(編著)筆者は第5章(185~209頁)担当
2 『平和の文化8つのキーワード』において「非暴力」・「民主主義」担当	共著	2006.11.15	図書出版・平和文化	平和の文化をきずく会(編)筆者は(15~19頁)担当
論文				
1 愛国心克服のための平和教育の視点—若者の「誇り」の分析から—	単著	2004.00.00	『平和教育』No.67 日本平和教育研究会	(12~17頁)
2 戦後60年 次世代に何をどう伝えるのか	単著	2005.07.09	『新英語教育』8月号 新英語研究会	
3 「ピース・カレッジ」(埼玉)のチャレンジ	単著	2006.04.15	『社会教育』5月号 国土社	(19~28頁)
4 沖縄・平和ガイドの平和心理学的考察	単著	2006.11.00	『心理科学』第26巻2号	(30~47頁)
5 沖縄戦学習の平和心理学的課題—沖縄における戦争体験継承を通じて—	単著	2006.12.10	『人間と教育』52号	(32~39頁)
6 日本における平和心理学の発展	共著	2008.05.00	『心理科学』第28巻第2号	日本における平和心理学の発展を戦後から現在(2007)までを5期に区分し、心理科学研究会平和心理学部会の20年の活動を柱にして、跡づけ、この分野の方向性を考察した。◎杉田明宏、伊藤武彦 42-55頁
その他				
1 武力によらない平和を	共著	2004.07.00	2004 平和のための埼玉の戦争展パンフレット	26-27頁を担当
2 『子どもと偏見』	共訳	2005.00.00	ハーベスト社	フランシス・アブード著(栗原孝、杉田明宏、小峰直史訳)(総頁数215頁)
3 書評:井上孝代編著『コンフリクト転換のカウンセリング』	単著	2005.05.00	『トランセンド研究』3巻1号トランセンド研究会	(42-43頁)
4 沖縄平和短信1「4月1日」	単著	2005.05.30	『SAITAMA ねっとわーく』6月号 日本機関紙協会埼玉県本部	(21頁)

5	沖縄平和短信 2「静かな闘い」	単著	2005.06.30	『SAITAMA ネットワーク』7月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(21 頁)
6	沖縄から平和を考える	共著	2005.07.00	2005 平和のための埼玉の戦争展パンフレット	24-25 頁を担当
7	「沖縄から平和を考える」	単著	2005.07.14	『2005 年平和のための埼玉の戦争展 パンフレット』	(24-25 頁)
8	「平和と心理学 (1) 平和のロールモデル」	単著	2005.07.15	『根と柁』50 号沖縄平和ネットワーク	(24 頁)
9	沖縄平和短信 3「忘却と歪曲」	単著	2005.07.30	『SAITAMA ネットワーク』8月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(21 頁)
10	沖縄平和短信 4「墜落 1 年」	単著	2005.08.30	『SAITAMA ネットワーク』9月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(9 頁)
11	沖縄平和短信 5「図書館と大砲」	単著	2005.09.30	『SAITAMA ネットワーク』10月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(9 頁)
12	「平和と心理学 (2) 戦争被害者への援助」	単著	2005.09.30	『根と柁』51 号沖縄平和ネットワーク	(20 頁)
13	沖縄平和短信 6「沖縄と平和ガイド」	単著	2005.10.30	『SAITAMA ネットワーク』11月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(9 頁)
14	「沖縄・平和ガイドの平和学的・平和心理学的意義」	単	2005.11.12	日本平和学会・平和教育分科会 発表	
15	沖縄平和短信 7「世代の思いをつなぐ沖縄」	単著	2005.11.30	『SAITAMA ネットワーク』12月号 日本機関紙協会 埼玉県本部	(9 頁)
16	「平和と心理学 (3) 平和ガイドのアイデンティティー」	単著	2005.12.20	『根と柁』53 号沖縄平和ネットワーク	(20 頁)
17	「平和への心理学的アプローチ」	単	2006.02.25	平和教育学研究会第 7 回例会報告	
18	「心科研・平和心理学部会 20 年史の検討」	単	2006.04.21	心理科学研究会 歴史研究部会・平和心理学部会合同分科会	
19	「21 世紀を平和の時代に」	共著	2006.07.14	『2006 年平和のための埼玉の戦争展 パンフレット』	(26-27 頁)
20	愛国心：学生調査－私の視点 8	単著	2006.09.15	『毎日新聞』9月 15 日付	
21	「沖縄社会の平和へのチャレンジから考える平和心理学の方法論」	単	2006.10.20	心理科学研究会 2006 秋期研究集会 平和心理学分科会発表	
22	「平和教育の平和学的位置づけ」	単	2006.11.11	日本平和学会 2006 秋期研究大会 平和教育分科会・指定討論	
23	21 世紀を平和の時代に	共著	2007.07.14	『2007 年平和のための埼玉の戦争展 パンフレット』	(23-24 頁)
24	コラム 5 沖縄戦被害者とエンパワーメント	単著	2007.12.20	『エンパワーメントのカウンセリング』川島書店	井上孝代編著 (182 頁)

25	「学校」「地域」における暴力との闘いの平和学的意義	単	2008.06.15	日本平和学会 2006 秋期研究大会 平和教育分科会・指定討論	
26	非暴力・平和への道	共著	2008.07.00	2008 平和のための埼玉の戦争展パンフレット	26・27 頁を担当

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1988.04.00	～	現在	心理科学研究会会員・全国運営委員
2	1998.00.00	～	現在	日本平和学会会員
3	2000.03.20	～	現在	平和の文化をきずく会会員・幹事
4	2000.11.26	～	現在	トランセンド研究会会員・理事
5	2004.05.01	～	現在	平和の学び場コラボ 21 常任理事
6	2005.04.01	～	現在	日本応用心理学会会員
7	2006.11.01	～	現在	日本機関紙協会埼玉県本部会員・理事
8	2007.04.01	～	現在	日本コミュニティー心理学会会員

(表 24)

所属	文学部教育学科	職名	講師	氏名	三島 一郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『心のケアのためのカウンセリング大事典』松原達哉、楡木満生、澤田富雄、宮城まり子共編全 839 頁 7-6。「コミュニティにおけるセルフ・ヘルプ」(p548-560)	分担執筆	2005.09.07	培風館	セルフ・ヘルプグループの思想的背景とその成立の社会・歴史・文化的条件について述べた後に、セルフ・ヘルプグループの援助の特性を述べ、6つにまとめている。更に主なセルフ・ヘルプグループの活動の実際を述べ、セルフ・ヘルプグループの運動の社会的役割を考察している。それらは3つの側面で現われ、①サービスがもつ社会統制的機能を根本的に変えたり、破壊する可能性を持つ ②サービスが持つ段階的で官僚的な様式を弱める可能性を持つ ③サービス資源を拡張する可能性を持つの3側面である。		
2 『コミュニティ心理学ハンドブック』	分担執筆	2007.06.27	東京大学出版会	日本コミュニティ心理会編 (全 811 頁) II 章 3、エンパワメント (70-84) II 章 5、セルフ・ヘルプ・グループ (218-235)		
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1993.04.00	～	現在	日本心理臨床学会会員		
2	1994.04.00	～	現在	日本家族心理学会会員		
3	1994.04.00	～	現在	日本社会精神医学会会員		

4	1994.04.00	～	現在	日本人間性心理学会会員
5	1994.07.00	～	現在	ワークインたまがわ（精神障害者共同作業所）グループワーカー、スーパーヴァイザー、コンサルタント
6	1995.04.00	～	現在	日本集団精神療法学会会員
7	1995.04.00	～	現在	日本精神衛生学会会員
8	1997.06.00	～	現在	日本家族研究・家族療法学会会員
9	1997.06.00	～	現在	日本精神障害者リハビリテーション学会会員
10	1997.06.00	～	現在	文京区地域精神保健福祉連絡協議会「生活部会」委員
11	1998.03.00	～	現在	日本コミュニティ心理学会会員、理事（2002.04～）
12	2000.07.00	～	現在	日本社会福祉学会会員

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	安達 直哉	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		平均値 4.5 (5段階評価)。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 古文書を見る (1)		2006.09.30		大東文化大学オープンカレッジ		
2) 古文書を見る (2)		2006.10.07		大東文化大学オープンカレッジ		
3) 書跡の見方・考え方		2007.09.08		大東文化大学オープンキャンパス		
4) 書跡の見方・考え方		2008.08.07		大東文化大学オープンキャンパス		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 阿弥陀経梵本等	共著	2004.11.00	『高貴寺所蔵慈雲の書』東京国立博物館			
2 勅額	共著	2005.01.00	『唐招提寺展国宝鑑真和上像と盧舎那仏』TBS			
3 『法隆寺献納宝物特別調査報告書 聖徳太子絵伝下貼文書』	共著	2007.03.31	東京国立博物館			
論文						
1 高濱御方御入峯一件記 7	単著	2005.06.00	『醍醐寺研究紀要』20号			
2 大東文化大学所蔵貴重書跡調査報告 1	単著	2006.03.00	『大東書道研究』13号			
3 『歴史考古学大辞典』	共著	2007.02.00	吉川弘文館	「古文書」等 20項目執筆		
4 古文書の修復	単著	2008.03.00	『歴史と地理』612号	42~51頁		
5 平成 20 年度科学研究費補助金「基盤研究 B (海外学術調査)」による研究報告	共著	2009.03.00	『大東書道研究』16号			

その他				
1 紙背文書の世界	単	2005.03.00	東京国立博物館	
2 大倉集古館寄託品調査		2005.09.00	東京・大倉集古館	
3 小野道風筆『智証大師 謚号勅書』について	単	2006.11.00	書学書道史学会大会	
4 キュレイターズ・アイ 1	単	2007.03.01	『大東文化大学博物館学講 座だより』第1号	
5 古文書調査		2008.08.00	京都・醍醐寺	
6 日本書跡調査		2008.08.00	アメリカ・ボストン美術 館・フリーアギャラリー	
7 キュレイターズ・アイ 2	単	2008.11.01	『大東文化大学博物館学講 座だより』第2号	
8 書道学の文化財保存 への対応に関する諸 問題	単	2008.11.30	書学書道史学会大会	
9 日本書跡調査		2009.03.00	アメリカ・フリーアギャラ リー	

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1974.04.01	～	現在	民衆史研究会会員
2	1977.04.00	～	現在	日本史研究会会員
3	1991.08.00	～	現在	醍醐寺文化財研究所研究員
4	1995.04.00	～	現在	鎌倉遺文研究会会員
5	2005.04.01	～	現在	大東書道学会会員
6	2006.02.01	～	現在	鎌倉市教育委員会美術工芸作品収集選定委員会委員
7	2006.04.01	～	現在	財団法人氏家浮世絵コレクション評議員
8	2006.06.00	～	現在	書学書道史学会会員
9	2009.01.28	～	2009.01.28	九州国立博物館文化財買取委員

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	河内 利治	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業運営の中でディスカッションならびに質疑応答を取り入れている。		2004.10.01	書道学科1年生必修科目「書道学概論」は、受講生全員が毎回6名ずつ各自の研究テーマを発表し、質疑応答が積極的に活発に行われるよう、ディスカッションを展開している。また全員がメモを取り、毎回の感想や質問を提出する形態を取っている。(2004年10月～現在)			
2) 授業運営の中でディスカッションならびに質疑応答を取り入れている。		2004.10.01	書道学科3年生選択必修科目「美学・芸術学演習1」は、受講生全員が毎回2名ずつ各自の卒業論文の研究テーマを発表し、質疑応答が積極的に活発に行われるよう、ディスカッションを展開している。また全員がメモをコンピューター上で作成し、毎回の感想や質問を提出する形態を取っている。(2004年10月～現在)			
3) 授業運営の中でディスカッションならびに質疑応答を取り入れている。		2004.10.01	書道学科4年生選択必修科目「美学・芸術学演習2」は、受講生全員が毎回2名ずつ各自の卒業論文の研究テーマを発表し、質疑応答が積極的に活発に行われるよう、ディスカッションを展開している。また全員がメモをコンピューター上で作成し、毎回の感想や質問を提出する形態を取っている。(2004年10月～現在)			
4) 授業運営の中で中国語のネイティブスピーカによる読解を取り入れている。		2005.04.01	書道学科3・4年生選択科目「書道美学論」は、日本人学生の中国語発音による原書講読の手助けとなるよう、中国天津美術学院と国立台湾美術学院との交換留学生に授業に参画してもらい、中国語の音読を展開している。学生間の相互学習の向上のみならず、語学体験および生活体験にも良い刺激を与えている。(2005年4月～現在)			
5) 授業運営の中で専門画家との共同指導を展開している。		2007.10.01	書道学科4年生選択科目「作品制作特別演習」は、書作、詩作、画作を行う内容であるが、画作については、国立台湾美術大学専任講師林錦濤(大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻博士後期課程3年在籍)の協力を得て、共同指導を行っている。(2007年10月～現在)			
6) 授業評価		2008.03.00	大東文化大学4年生「作品制作特別演習」と1年生「書道学概論」に対する「授業評価アンケート」の結果、いずれも好評であった。毎年度、書道学科4年生諸君が「詩・書・画が三位一体化」し、生き生きとした作品を制作できるように指導している。本年度は文学研究科書道学専攻博士後期課程に留学中の、黄華源(D3)と林錦濤(D1)両氏の画作の指導協力(Teaching Corporation)を得ることができたので、特に画作(水墨画)の面において表現題材を拡充でき、例年以上に充実した授業展開ができた。彼らの作品は、2008年2月、台湾国父記念堂における国立台湾芸術大学主催「書画創意大観国際聯展」において展示されることになっており、作品成果を国際舞台で発表できることも、学生諸君からの高評価に繋がったと思われる。TCや国際展は新しい試みであるが、次年度以降も可能な限り継続していきたいと考えている。			
7) 授業評価		2009.03.00	大東文化大学3年生「書道美学論」と1年生「書道学概論」に対する「授業評価アンケート」の結果、いずれも好評であった。「授業への満足度」の平均が、3年生「書道美学論」は4.5、1年生「書道学概論」は4.3である。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) インターネット上での論文指導		2006.08.11	大東文化大学 河内利治個人 HP (http://done-labo.com)上において、卒論・修論の集中指導会を実施。(～現在)			
2) ゼミ合宿		2008.03.05	大東文化大学 3月5日から6日まで国立女性教育会館(NWEC)で「河内ゼミ」春合宿を実施。文学部書道学科3年生7名、4年生1名、大学院文学研究科書道学専攻MC1年3名、MC2年5名、DC1年2名、DC2年2名、DC3年1名の計22名の論文研究発表の指導を行う。			

3) ゼミ合宿	2008.09.03	大東文化大学 9月3日から5日まで栃木県かご岩温泉で「河内ゼミ」合宿を実施。文学部書道学科3年生、4年生、大学院文学研究科書道学専攻MC1年、MC2、DC1年、DC2年2名、DC3年の計30名の論文研究発表および実技指導を行う。
4) ゼミ合宿	2009.03.09	大東文化大学 3月9日から10日まで国立女性教育会館(NWEC)で「河内ゼミ」春合宿を実施。文学部書道学科3年生、大学院文学研究科書道学専攻MC1年、DC2年の計18名の実技指導を行う。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 書道質疑応答	2006.04.01	河内利治ホームページ 河内個人のHP「志書」(http://done-labo.com)は、2006年4月1日開設以来、一貫してネット上での書法の啓蒙活動を行っており、学生との書道関係の質疑応答を行っている。(～現在)
2) 書道質疑応答	2006.06.19	中国書法江湖工作室 中国の書法江湖は、ネット上で書法の啓蒙活動を行っており、「工作室」に河内利治専用コーナー(http://www.sf108.com/bbs/forumdisplay.php?fid=86)が2006年6月に設置され、随時書道の質疑応答を行っている。(～現在)
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 日本書道史	2007.01.23	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 2007年1月21日(日)～2月10日(土)全て英語で書道の授業を実施。各160分実技授業。その1回目。「日本書道史」の講演。
2) ひらがな	2007.01.25	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 英語で書道の授業を実施。その2回目。「ひらがな」の実技授業。
3) カタカナ	2007.01.30	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 英語で書道の授業を実施。その3回目。「カタカナ」の実技授業。
4) 漢字(楷書)	2007.02.01	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 英語で書道の授業を実施。その4回目。「漢字(楷書)」の実技授業。
5) 日本書道史と実技授業	2007.02.03	フロリダ州立西フロリダ大学 日本センター 3時～5時。英語で書道の講演と実技指導。
6) 漢字(行書)	2007.02.06	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 英語で書道の授業を実施。その5回目。「漢字(行書)」の実技授業。
7) 作品制作	2007.02.08	フロリダ州立西フロリダ大学 芸術学科 英語で書道の授業を実施。その6回目。「作品制作」の実技授業。
8) オープンカレッジ講師 書道(隸書)「隸書に親しむ」	2007.10.05	大東文化大学 中国後漢の「曹全碑」「鮮于璘碑」「西峡頌」などを中心に実技指導。10月5日、12日、19日、11月9日、30日、12月7日の全6回講座。
9) 書道実技授業	2008.03.25	天津美術学院 天津美術学院中国画系書法専攻4年生「卒業制作」指導(中国語)。
10) 書道実技授業	2008.03.26	天津美術学院 天津美術学院中国画系書法専攻2年生「魏碑臨書」指導(中国語)。
11) 書道実技授業	2008.03.27	天津美術学院 天津美術学院中国画系書法専攻1年生「隸書臨書」指導(中国語)。
12) 書道実技授業	2008.03.28	天津美術学院 天津美術学院中国画系書法専攻4年生「卒業制作」指導(中国語)。
13) オープンカレッジ講師 書道(楷書)「楷書に親しむ」	2008.05.16	大東文化大学 中国唐代の欧陽詢、虞世南、褚遂良、顔真卿などを中心に実技指導。5月16日、23日、30日、6月6日、13日、20日、27日の全7回講座。
14) レッスン篆書「散氏盤」講師	2008.08.01	芸術新聞社刊「墨」193号 2008年7・8月号「墨」は、「碑法帖名品選」特集号であるが、その篆書の講師として、金文の「散氏盤」を指導する。
15) オープンカレッジ講師 書道(篆書)「古代文字を書く」	2008.10.02	大東文化大学 中国西周時代古代文字(金文)「散氏盤」「大盂鼎」などを中心に実技指導。10月2日、9日、23日、11月13日、20日、27日、12月4日の全7回講座。
16) 書道実技授業講師	2008.10.15	University of Puget Sound アメリカ、ピュージェット・サウンド大学のアート・クラスで「篆書・篆刻」の実技指導を行った。(英語)

17) 書道実技授業講師		2008.11.03	東北師範大学 中国、東北師範大学外国語学院日語系で「ひらがな」の実技指導を行った。(日本語)	
II 研究活動				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『書法美学の研究』	単著	2004.06.18	汲古書院	全 320 頁 書法美学という研究分野は、日本では新しい学術領域であるが、全くの未開拓の領域ではなく、井島勉氏が『書の美学と書教育』(1956 年)において論及された、「美の類型」や「美の範疇」といった美の性格と構造を精密に分析する美学上の概念があり、また中田勇次郎氏が『中国書論集』(1970 年)において手がけられた、品等法・比況法・品性法の三つの方法による「書品論」と呼ばれる書論研究の一分野がある。本書に収めた五篇の論考は、この両氏の「美の範疇」と「書品論」研究を基盤に考察を進めたものである。第一章「書法審美範疇語〈骨〉義考」、第二章「書法審美範疇語〈遒媚〉考」、第三章『『広芸舟双楫』〈骨〉字術語考」、第四章「劉熙載の書品論(上) - 〈骨〉〈筋〉字術語考」、第五章「劉熙載の書品論(下) - 〈力〉〈気〉字術語考」および付章「現代中国の書法美学研究」からなる。
2 『成復旺主編・中国人民大学出版社《中国美学範疇辞典》訳注』第三冊	共著	2005.03.20	大東文化大学人文科学研究 所発行 全 305 頁	2004 年度大東文化大学人文科学研究所中国美学研究班研究報告書
3 『中国書画の鑑定をめぐる研究』	単著	2005.03.20	大東文化大学書道学科河内 利治研究室発行	全 70 頁 文部科学省特定領域研究(A)「東アジア出版文化の研究」(課題番号 15021222) - 中国書画の印刷出版環境をめぐる諸問題の文化史的研究 - 平成 15・16 年度研究成果報告書。内容は「中国書画伝来の一側面～真跡から印刷へ～」、訳註「中国の古代書画の鑑定」、「中国古代書画図目備注一覧表」からなる。
4 『Calligraphie Kunpei KAWACHI』	単著	2005.09.01	白帝社	詩・書・画・印・その他の河内利治(君平)の初の作品集。フランスでの個展にあわせて出版。全 36 頁。
5 『日本・中国・朝鮮／書道史年表事典』	共著 (分担執筆)	2005.09.10	書学書道史学会編	P.153-P169 他執筆、萱原書房。
6 『中国書論の体系』	単著 (単訳)	2006.04.01	白帝社	熊秉明著『中国書法理論体系』天津教育出版社 2002 年 6 月の全訳。全 324 頁。
7 『漢字書法審美範疇考釈』	単著	2006.05.00	上海社会科学院出版社	全 195 頁。河内利治著／承春先訳。汲古書院刊『書法美学の研究』の全訳。自序・後記を付加する。あわせて図版を多く挿入した。
8 成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』訳注第四冊	共著 (共訳)	2007.03.20	大東文化大学人文科学研究 所	大東文化大学人文科学研究所中国美学研究班の研究報告書。全 420 頁。河内利治・門脇廣文ほか 16 名の協力を得て翻訳した。
9 成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美学範疇辞典』訳注第五冊 全 268 頁	共著 (共訳)	2008.03.20	大東文化大学人文科学研究 所	大東文化大学人文科学研究所中国美学研究班の研究報告書。河内利治・門脇廣文ほか 18 名の協力を得て翻訳した。
10 『Calligraphie Kunpei KAWACHI avec ses élèves』	単著	2008.09.01	白帝社	2008 年 9 月フランス・パリでの「河内君平とその生徒展」開催に合わせて作成した作品集。河内 4 点(書 3+画 1)と生徒 28 点の書作品を収録。全 32 ページ。
11 『Brush and Ink Kunpei KAWACHI』	単著	2008.10.01	白帝社	アメリカ・ワシントン州タコマのピューージェット・サウンド大学チズム基金客員芸術家として招聘され、2008 年 10 月キトリッジ・ギャラリーでの個展開催に合わせて作成した第 2 作品集。全 54 ページ。
論文				

1	中国美学史の著作概況 (1950-2003)	单著	2005.03.00	「大東文化大学人文科学研究会所報 No.11」P.1 - P.6	黄柏青 (中国人民大学哲学系宗教学系) の「著作春秋——中国美学史著作概況研究」(中国人民大学書報資料中心、2004年第8期『美学』p. 50~p.55) によれば、「20世紀80年代以降、中国美学史の研究は、美学界の学者からますます多くの注目を浴びてきた。人々は異なる角度から、さまざまな方法を用いて、中国美学史に対する個人研究を進め、中国美学史を構築してその発展規律を提示し、中国美学独特の歴史を描写してきた」という。
2	緬懷熊秉明先生	单著	2005.03.00	文匯出版社	陸丙安編《対人性与智慧的懷念》P.185-P.189。原文中国語。
3	中国における詩書画三位一体の文人書法の研究	单著	2005.03.20	大東文化大学書道研究所「大東書道研究 12」P.7-P.11	書道研究所の研究紀要『大東書道研究』が審査制度を導入して、各研究員が自分の研究作品を発表し、併せて「制作論」を述べる場を設けることになった。このことは、研究所にとっては画期的な方策であり、また筆者にとっては一つの時宜を得た契機であり、新たな展開を模索する場であると判断する。よって、研究作品「相見歎」を発表するとともに、制作論試案とその試案による平成16年度研究報告を提示した。
4	福州後學陳壽祺編『明漳浦黄忠端公全集』目次(前)	单著	2005.03.20	国士舘大学「漢学紀要7」P.129-P.162	黄道周の著書目録の前編。
5	『黄石齋手書逸詩』考	单著	2005.03.31	「大東文化大学紀要〔人文科学〕43」P.55-P.70	黄道周の詩を、正面から論じた研究書は殆ど無い。その要因は、数量の厩大さと詩意の難解さに拠るであろうが、その中でこの『逸詩』は、わずかに二首を注解しただけだが) 詩意が明解で、正しく「悲壯な挽歌」と言っていよい。黄道周自身が「遺らなくてもよいが、それでもなお遺った詩」を「逸詩」と呼んだ理由がここにある。明朝への挽歌であるからには、清潮には遺らない、遺るはずがないと黄道周が考えながらも今日まで遺ってきた、それが『逸詩』である。書作として、詩作として、この『逸詩』は黄道周の人生の終焉とも言うべき傑作に他ならない。
6	黄倪合璧冊解題	单著	2005.04.01	書論編集室編「書論 34」P.107-P.118	黄道周と倪元璐の書法作品の解題。
7	日本「書道」の原義	单著	2005.10.04	韓国世界書芸学会	『2005年度韓国世界書芸学会秋季学術発表会』P.25-P.53。(韓国語)
8	日本「書道」の原義	单著	2006.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究 13」P.32-P.41	『2005年度韓国世界書芸学会秋季学術発表会』に収録される「日本「書道」の原義」を加筆訂正したもの。(日本語)
9	福州後學陳壽祺編『明漳浦黄忠端公全集』目次(後)	单著	2006.03.20	国士舘大学「漢学紀要8」P.71-P.114	黄道周の著書目録の後編。
10	何紹基書《泰興縣襟江書院記》解題	单著	2006.03.20	「大東文化大学紀要〈人文科学〉44」P.83-P.103	何紹基の楷書作品の拓本の解題。
11	日本的「書道」之原義	单著	2006.05.12	當代書畫藝術發展回顧與展望	「大東書道研究 13」に収録する「日本の「書道」の原義」の中国語訳。『2006 国際学術研討会論文集』P.251-P.261。
12	〔書評〕浦野俊則退職記念論文集刊行会編『望岳室古文書法論集』	单著	2006.09.30	書学書道史学会編「書学書道史研究 16」P.120-P.121	2006年2月に萱原書房から刊行された同書の書評。
13	現代日本における〈水墨画〉の語義をめぐって	单著	2006.10.20	水墨藝術研究編集委員会編「水墨藝術研究 1」P.24-P.28	水墨画を研究する以前に、現代日本における通念を理解し、その存在及び扱われ方がどのようであるかの実情を理解するために執筆。
14	アメリカの四美術館の書跡調査	单著	2007.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究 14」P.188-P.212	大東文化大学平成18年度長期海外研究員として、アメリカ合衆国ボストン大学人文学部美術史学科客員研究員の身分でアメリカ国内を中心に行った研究成果の一部である。ワシントンDC・フリーアギャラリー&アーサーMサックラーギャラリー、プリンストン大学美術館、ニューヨーク・メトロポリタン美術館、ボストン美術館の四美術館についての書跡調査の報告書である。
15	何紹基書《泰興縣襟江書院記》解題	单著	2007.06.00	国立台湾芸術大学「書画学術学刊 2」P.19-P.36	何紹基の楷書作品の拓本の解題(中文)

16	関于日本研究傅山情 況的簡介(1997-2004)	単著	2007.07.00	山西人民出版社『傅山紀念 文集』p.624-p.628	1997年から2004年までの日本における傅山の研究状況を 簡単に紹介(中文)。ISBN7203058603
17	関于日本研究傅山情 況的簡介(1997-2004)	単著	2007.11.00	山西文物局『文物世界』 2007年06期	1997年から2004年までの日本における傅山の研究状況を 簡単に紹介(中文)。ISSN1009-1092
18	「明治時代の書論」か らの考察	単著	2008.03.20	大東文化大学書道研究所編 「大東書道研究15」 P.32-P.44	明治時代を真に再考すること、または新たに認識することによ つてのみ、現代を把握できると考えるからであり、言いか えれば、近代を再構築しなければ、書道の未来への発展性や 方向性を考えることができない。この考え方は、書道のみな らず、日本のあらゆる文化、文学、美術、芸術に共通するも のであるが、殊に書道の領域においては、等閑視されてきた と言わねばならないだけに、重要なテーマであると考え
19	日本傅山研究状況略 論 1994-2007	単著	2008.03.31	大東文化大学書道学会編 「大東書学8」P.102- P.109	2007年7月の《紀念傅山誕辰400周年學術研討会》に際し、 日本における傅山の研究状況を簡単に紹介したもの。
20	平成20年度科学研究 費補助金「基盤研究B 〈海外學術調査〉」に よる研究報告—研究 課題：アメリカ収蔵 「書跡」の基礎データ 収集と整理のための 調査研究	共著	2009.03.20	大東文化大学書道研究所編 「大東書道研究16」 P.200-P.214	独立行政法人日本學術振興会より交付された平成20年度科 学研究費補助金「基盤研究B〈海外學術調査〉」により、「研 究課題：アメリカ収蔵「書跡」の基礎データ収集と整理のた めの調査研究(課題番号20401014、以下〈アメリカ収蔵書 跡〉と略す)」の研究を開始した。研究代表者は河内利治、 研究分担者は安達直哉、研究期間は平成20年度から平成24 年度まで5年間の予定である。本稿はその平成20年度分の 報告の一部である。
21	西嶽華山廟碑〔雙鈞 本〕	単著	2009.03.20	大東文化大学人文科学研究 所「2008年度研究報告書」	後漢時代(165年)に建てられた「西嶽華山廟碑」は原碑が 失われ拓本だけが伝来する。その中で文字数が一番多く残 っている「長垣本」(台東区立書道博物館蔵)に基づくと 思われる〔雙鈞本〕を原寸大、オールカラーで復刻した。 【解題】を執筆。全32ページ。
22	LECTURE: "THE INFLUENCE OF CHINESE CALLIGRAPHY TECHNIQUE ON JAPANESE CALLIGRAPHIC SAINT KUKAI (774-835)"	単著	2009.03.31	大東文化大学書道学会編 「大東書学9」P.92-P.98	2008年10月15日、アメリカのピューージェット・サウンド 大学における招聘講演「書聖・空海に与えた中国書法の影響」 の講演録。パワーポイントで作成した英文と図版を掲載す る。
その他					
1	中国書画の印刷出版 環境をめぐる諸問題 の文化史的研究	単著	2004.06.26	平成16年度(2004)第6 回研究集会 沖縄県那覇市 共済会館八汐荘	文部科学省特定領域研究「東アジア出版文化の研究」にお ける口頭発表。
2	中国書法学和日本書 道学	単著	2004.09.23	首都師範大学中国書法文化 研究所	首都師範大学中国書法文化研究所主催講演、聴講者40名。
3	中国書法—従伝統到 現代	単著	2004.09.24	中央美術学院中国画系	中央美術学院中国画系〈書法与絵画研究中心〉主催講演、聴 講者300名。
4	書道与漢字	単著	2004.09.25	中国書法文化国際論壇 首 都師範大学国際文化大廈	首都師範大学中国書法文化研究所主催「中国書法文化国際論 壇・高等書法教育学科建設与発展国際研討会」における口頭 発表。研究成果は、首都師範大学中国書法文化研究所編『中 国書法文化国際論壇・高等書法教育学科建設与発展国際研討 会論文集』P.67-P.86に収録。
5	石川忠久著『NHK漢 詩への誘い〜歴史と 風土(杭州の巻)』	共著	2004.10.01	日本放送出版協会	宇野直人・佐藤正光・直井文子・棟方徳・鷺野正明と編集協 力。P.65-P.96担当。
6	「書学と書作」パネリ スト	共著	2004.11.07	第15回書学書道史学会記 念シンポジウム 大東文化 大学多目的ホール	「書跡」は書を愛し、楽しみ、究めるための paradigm (模 範・範例)であり、「書学と書作」は知性と感性の co-ordination (同格・等位関係/統一・共同作業)であり、 「審美観照・「書跡」・形態論 ↔ 審美範疇・「書学」・美 論 ↔ 審美表現・「書作」・創作論」であることを提示し た。司会—中村伸夫(筑波大学)、パネリスト—萱のり子(大 阪教育大学)・河内利治・野中浩俊(新潟大学)・横山弘平(京 都橘大学)。

7	書跡から見る中国の形と心	単著	2005.02.20	第39回(平成16年度)国士館大学漢学会大会	書道は、「中国文化の精華である」と中国人は考えている。書道が会得できれば、中国文化に精通できるという考えである。なぜ中国人はそのように考えるのか。中国文化の理解を深めるために、その理由を探った。方法論として、名筆とされる「書跡」を取り上げ、造形上の比較検討と、「書論」と呼ばれる中国人の書道に対する理論上の考察を通じて、「形」と「心」の両面から追いかけた。
8	「特別鑑賞セミナー：宇野雪村コレクションと日本の名品」解説	共著	2005.02.27	書学書道史学会普及委員会主催 五島美術館	《黄庭経(宋拓心太平本)》、《宋拓群玉堂残帖》、《餘清齋帖(楊守敬題簽)》の解説を担当。
9	熊秉明著『中国書法理論体系』5	単著	2005.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究12」P.24-P.54	「第五章 天然派の書法理論」の訳注である。「一、道家精神」、「二、人品—「放逸」」、「三、無為の創作」、「四、自然に同じ」、「五、逸品(神品を兼ね論ず)」、「六、道家傾向の書法」、「七、道教と書法」からなる。
10	日本現代書法芸術	単著	2005.03.24	天津美術学院中国画系	天津美術学院中国画系主任講演、聴講者30名。
11	成復旺主編・中国人民大学出版社『中国美術範疇辞典』訳注稿(四)	共著	2005.03.31	大東文化大学人文科学研究「人文科学10」P.(45)-P.(81)	審美範疇語〈風骨〉の共訳。
12	辛亥以後の書法思想について	共著	2005.03.31	大東文化大学大学院書道学専攻院生会「書道学論集2」P.(1)-P.(9)	姜澄清著『中国書法思想史』河南美術出版社1994年3月発行所収「附：辛亥後書法思想的簡介」(同書208頁～218頁)の訳注。大東文化大学大学院書道学専攻修士課程の開講科目「書法文化特殊研究」において講読した同題の文章を訳者が分担して発表し、監訳者河内利治がその訳注原稿の記載の統一を図ったものである。訳者は、鎌田里美(修士二年)、宮木蘭子(同)、幸喜洋人(修士一年)、西原大輔(同)、高橋由利子(同)、藤田尚美(同)、藤森大雅(同)からなる。
13	日本現代書法芸術	単著	2005.03.31	南開大学文学院中文東方芸術系	南開大学文学院中文系・東方芸術系主任講演、聴講者30名。
14	国立台湾芸術大学との交流	単著	2005.03.31	大東文化大学書道学会「大東書学5」P.65-P.92	「一、はじめに」、「二、国立台湾芸術大学(National Taiwan University of Arts)」、「三、学術交流協定書」、「四、二〇〇三(平成十五)年度「書道文化演習2」台湾研修」、「五、二〇〇四(平成十六)年度「書道文化演習2」台湾研修」、「六、個展「斎藤蒼青の書」開催」、「七、おわりに」からなる。
15	「NHK漢詩への誘い～季節を詠う(清明の巻)」	共著(分担)	2005.04.01	日本放送出版協会	宇野直人・佐藤正光・直井文子・棟方徳・鷺野正明と編集協力。P.53-P.84担当。
16	第十五回書学書道史学会大会報告	単著	2005.09.30	書学書道史学会編「書学書道史研究15」P.112-P.114	大東文化大学で開催された大会報告文。シンポジウムを含む。
17	「NHK漢詩への誘い～季節を詠う(寒露の巻)」	共著(分担)	2005.10.01	日本放送出版協会	宇野直人・佐藤正光・直井文子・棟方徳・鷺野正明と編集協力。P.69-P.102担当。
18	『中村璋八先生傘寿記念文集』	単著	2006.01.07	汲古書院	「編集長の神技」を執筆。
19	韓国全州秋興八首其一	単著	2006.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究13」P.14-P.17	韓国で作った短歌八首其一を朱竹画の画賛として書す。
20	中国の三大学との「学術交流協定書」	単著	2006.03.20	大東文化大学書道学会編「大東書学6」P.50.-P.59	中国首都師範大学、天津美術学院、中国美術学院との学術交流協定について。
21	A translation of "CHINESE CALLIGRAPHY" wrote by LIN YUTANG.	共著(共訳)	2006.03.31	大東文化大学大学院書道学専攻院生会「書道学論叢3」P.(1)-P.(5)	林語堂著『My Country and my people』の「Chinese Calligraphy」の翻訳。
22	「NHK漢詩への誘い～人生を詠う(行遊の巻)」	共著(分担)	2006.04.01	日本放送出版協会	宇野直人・佐藤正光・直井文子・棟方徳・鷺野正明と編集協力。P.175-P.200担当。
23	書道教育につくされた二教授の定年退職に思う	単著	2006.10.00	東方書店「東方308」P.11-P.15	千葉大学浦野俊則教授と奈良教育大学松本宏揮教授の定年退職にあたり今後の書道教育の継承を期す。

24	「NHK漢詩への誘い〜人生を詠う（閑吟の巻）」	共著 (分担)	2006.10.01	日本放送出版協会	宇野直人・佐藤正光・直井文子・棟方徳・鷺野正明と編集協力。P.56-P.98 担当。
25	徐渭的書法審美	単著	2006.11.12	マカオ芸術博物館	『乾坤清氣——故宮上博珍藏青藤白陽書画學術研討会』にて中国語で発表。
26	Kunpei Artworks	単著	2006.12.14	シカゴ大学 コ克蘭・ウッズ芸術センター	1:30~2:30。日本語で講演と書道実技のデモンストレーション。
27	Kunpei Artworks	単著	2007.02.15	マサチューセッツ芸術大学	4時~5時。英語・中国語で講演と書道実技のデモンストレーション。
28	Kunpei Artworks	単著	2007.03.04	コーネル大学 ジョンソン美術館	1時~3時。英語・中国語で講演と書道実技のデモンストレーション。
29	Kunpei Artworks	単著	2007.03.05	ボストン大学 東アジア考古学・文化史国際研究センター	1時~3時。英語で講演と書道実技のデモンストレーション。
30	Kunpei Artworks	単著	2007.03.06	ブランディーズ大学	9:10~10:30。英語で講演と書道実技のデモンストレーション。
31	空海の書跡に見る中国書法の影	単著	2007.03.08	ハーバード大学 ライシャワー日本研究所	3時~5時。日本語で講演。
32	形”與“心”——以王獻之書《鴨頭丸帖》來論書跡的變容	単著	2007.03.17	香港中文大學藝術系・文物館	『書海觀瀾II——帖学与对聯書法研討会』にて中国語で発表。
33	Kunpei Artworks	単著	2007.03.28	セーラム ビーボディーエセックス博物館	12時~1時。英語で講演と書道実技のデモンストレーション。
34	Kunpei Artworks	単著	2007.03.29	ケンブリッジ社会人教育センター	1時~3時。英語で講演。
35	海外における中国書法研究の簡単な紹介	単著 (単訳)	2007.03.31	大東文化大学書道学会編 「大東書学7」P.85-P.100	白謙慎講演「海外中国書法研究簡介」の全訳。
36	アメリカンドリーム的一年	単著	2007.04.15	大東文化大学新聞「大東文化」566 P.5	平成18年度大東文化大学海外研究員、ボストン大学客員研究員としてのアメリカでの見聞談。
37	在外研究を終えて① ボストンでの一年	単著	2007.04.15	大東文化大学新聞「大東文化」567 P.7	平成18年度大東文化大学海外研究員、ボストン大学客員研究員としてのアメリカでの見聞談。
38	世変 形象 流風：中国近代絵画 1796-1949 學術研討会	単著	2007.05.25	台湾 高雄市立美術館・鴻禧美術館主催	『《雪橋詩話》研究：從《雪橋詩話》來看黃道周像』(中文) 口頭発表と司会
39	紀念傅山誕辰 400 周年學術研討会	単著	2007.07.30	中国 山西省太原市政府主催	「關於日本研究傅山的簡介 1994-2007」(中文) 口頭発表
40	明清書法史國際學術研討会	単著	2007.08.18	中国 江蘇省張家港市政府蘇州書法家協會主催	『《人帖》中黃道周的詩和書』(中文) 口頭発表
41	When Art Met History: A Symposium on the Richard Fabian Collection	単著	2007.09.14	Honolulu Academy of Arts	「He Shaoji's Calligraphy: Inspirations and Implications」(英文)口頭発表
42	在外研究を終えて② ウエストフロリダ大で授業	単著	2007.10.15	大東文化大学新聞「大東文化」568 P.7	平成18年度大東文化大学海外研究員、ボストン大学客員研究員としてのアメリカでの見聞談。
43	紀念傅狷夫—現代書画藝術學術研討会	単著	2007.10.26	国立台湾芸術大学・国立歴史博物館主催	「從《明治時代的書論》來考察」(中文) 口頭発表と総括
44	第十八回書学書道史学会大会記念シンポジウム	単著	2007.11.17	書学書道史学主催	「書学書道史の教育の現状と将来」コーディネーター。筑波大学研究棟D
45	ボストンから見た日本	単著	2007.11.24	大東文化大学人文科学研究所主催	「人文科学研究所報告会 2007」において口頭発表。

46	第18回大会記念シンポジウム報告	単著	2007.12.15	書学書道史学会「書学書道史学会会報14」P.7	開催「主旨」説明、鶴田一雄（新潟大学）、下野健児（花園大学）、森岡隆（筑波大学）、長野秀章（東京学芸大学）から各大学における現状報告と将来に向けての提言をして頂いた。
47	国際会議の現状と将来	単著	2007.12.15	書学書道史学会「書学書道史学会会報14」P.11	日本で書道の国際会議を行うのであれば、日本独自の展覧会とタイアップするとか、特定の時代またはタイムリーなテーマ設定を行うのも一案であること、そして総花的な研究発表ではなく、深く高い水準のグローバルな学術会議にしたいことを提起した。
48	在外研究を終えて③ハーバード大でのワークショップ	単著	2008.01.15	大東文化大学新聞「大東文化」569 P.7	平成18年度大東文化大学海外研究員、ボストン大学客員研究員としてのアメリカでの見聞談。
49	アジア美術共生シンポジウム	単著	2008.01.27	亜細亜太平洋水墨画会主催	「アジア創造美術展2008」特別企画、パネリスト。国立新美術館
50	黄道周の臨書	単著	2008.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究15」P.14・P.16	《黄石齋先生榕壇問業真跡》中華民国六十三年七月をもとに、かつて何度か臨書したが、カラー版が中国和平出版社から《黄道周榕壇問業上下冊》（二〇〇五年五月）発行されたので再度臨書した。
51	天津美術学院学術報告廳	単著	2008.03.25	天津美術学院・科研處主催「天美講壇」	特別講演「芸術文化のグローバルイゼーション」。聴衆400名。
52	天津美術学院演講廳	単著	2008.03.27	天津市書法家協会主催	特別講演「現代日本書道簡介2008」。聴衆200名。
53	Guest Lecture	単著	2008.10.15	University of Puget Sound	Chism Fund Visiting Artist として「THE INFLUENCE OF CHINESE CALLIGRAPHY TECHNIQUE ON JAPANESE CALLIGRAPHIC SAINT KUKAI(774-835)」を講演（英語）
54	シンポジウム「日本と中国の明日への架け橋—言語・文化・社会、日中比較を機軸として—」	単著	2008.10.31	東北師範大学外国語学院（中国長春）	（主催）大東文化大学・東北師範大学（共催）日本学術振興会北京事務所 演題「日中書法伝授の一形態—空海と韓方明の筆法をめぐる言説について」（日本語）
55	米国で個展 筆と墨	単著	2009.01.24	大東文化大学新聞「大東文化」573 P.6	アメリカ・ワシントン州タコマのピュージェット・サウンド大学キトリッジ・ギャラリーでの個展開催の報告文。
56	高峰頭日「遊高雄山詩」	単著	2009.03.20	大東文化大学書道研究所編「大東書道研究16」P.14・P.16	王羲之や空海を習ったと思われる、正統的、伝統的な書きぶりに魅せられ幾度も臨書した。作品サイズは三一・一×六一・一と、高峰頭日の墨蹟よりも一回り大きくなった。行間を空けた為である。奇を衒わず、できる限りオーソドックスに仕上げた作品である。
57	葉朗著『中国美学史大綱』序論訳注	共著（共訳）	2009.03.20	大東文化大学大学院書道学専攻院生会「書道学論集6」P.(1)～P.(14)	平成20年度書道学専攻博士後期課程開設科目「中国書学演習（三）」における受講者8名の演習発表の成果を監訳したものである。テキストは底本として葉朗著『中国美学史大綱』上海人民出版社1985年11月第1版、2002年9月第6次印刷本を使用した。原文は同書巻頭に「緒論」として1頁から16頁に収められる。また葉朗著『中国美學的開展（上／下）』台湾金楓出版有限公司（出版年不明）を参照した。中国美学に関する多くの示唆に富む提言が含まれており、中国美学史の研究者には言うまでもなく、書道学専攻者にとっても重要な一文である。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1981.04.00	～	現在	書法研究雪心会会員（幹事：1991年4月～現在、会長：今井凌雪）
2	1983.08.00	～	現在	読売書法会会員（評議員；1995年2月～2000年4月 幹事；2000年5月～現在）
3	1984.02.00	～	現在	社団法人日本書芸院会員（二科審査会員；1992年5月～2000年4月 一科審査会員；2000年5月～現在）
4	1984.04.00	～	現在	中国文化学会会員（理事・編集委員；1997年10月～2006年3月、2007年10月～現在）
5	1984.04.00	～	現在	日本中国学会会員（選挙管理委員；1996年4月～1998年3月 幹事；2000年4月～2005年3月）

6	1986.04.00	～	現在	全国漢文教育学会会員（幹事・編集委員：1986年4月～1997年3月）
7	1988.04.00	～	現在	明清文人研究会会員（事務局：1989年4月～現在、代表者：内山知也）
8	1988.10.00	～	現在	日本中国語学会会員
9	1988.12.00	～	現在	中国社会文化学会会員
10	1990.11.00	～	現在	書学書道史学会会員（幹事：1998年4月～2000年10月、理事；2000年11月～2006年3月、常任理事；2006年4月～現在、国際局長；2008年4月～現在）
11	1991.04.00	～	現在	全国大学書写書道教育学会会員
12	1992.11.00	～	現在	日本道教学会会員
13	1995.04.00	～	現在	東京都板橋区教育委員会派遣外国語（中国語）人材ボランティア
14	1996.04.00	～	現在	中国出土資料学会会員
15	1997.04.00	～	現在	六朝学術学会会員
16	1997.10.00	～	現在	中国語教育学会会員
17	1998.06.00	～	現在	ハプスブルグ芸術友好協会会員（宮廷芸術会員；2001年5月～現在）
18	2008.04.01	～	現在	千葉県漢詩連盟顧問

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	河内 利治
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等
1	第 36 回日展入選	東京都美術館		2004.11.00	篆書「自詠読荷花詩」縦 78 cm×横 180 cm
2	第 4 回参和展	有楽町交通会館 B 1 エメラルドギャラリー		2004.12.00	三戌会主催、代表出品、自詠詩句篆書「明月清風奇」半切。
3	第 3 回肆心展	東京鳩居堂画廊 4 F		2005.03.01	①七言対聯、②自詠癸未中秋詩、③醸酒、④墨竹図(自詠題画詩)、⑤さかさまに、⑥孤独及詩、⑦鬱勃縦横、⑧按図策驥、⑨金石同寿の 9 点出品。中村伸夫・河内君平・吉村英僊・池田毓仁の四人の合同展。～2005.03.06
4	日本詠帰会書画展	徐州書法家協会主催		2005.04.06	王学仲芸術展覧館、賛助出品。
5	Calligraphie KAWACHI Kunpei	フランス パリ Galerie Satellite		2005.09.00	個展。9 月 17 日～24 日。
6	西泠印社 2005 年社員作品観摩 及学術交流成果作品展	西泠印社		2005.10.00	篆書と漢詩出品。
7	第 5 回参和展	有楽町交通会館 B 1 エメラルドギャラリー		2005.12.11	三戌会主催。代表として半切「温良恭儉讓」を出品。
8	第 5 回亜細亜太平洋水墨画展	千葉県立美術館		2005.12.13	朱竹画「韓国全州秋興歌行八首其二」を賛助出品。
9	第 6 回参和展	有楽町交通会館 B 1 エメラルドギャラリー		2006.12.11	三戌会主催。代表として半切「受余康號」を出品。
10	Young Calligraphers 展 Japanese	ニューヨーク 大西ギャラリー		2007.01.12	本学書道学科卒業生のグループ展「Young Japanese Calligraphers 展」が 1 月 12 日(金)～1 月 31 日(水)までアメリカ・ニューヨークの大西ギャラリーで開催され、篆刻作品「長樂」を賛助出品した。
11	第 34 回雪心会選抜書作展	雪心会主催		2007.07.24	自詠詩「丙戌初冬其一」 3×10 尺 上野の森美術館
12	第 24 回読売書法展	読売新聞社・読売書法会		2007.08.24	自詠詩「丙戌初冬其一」 6×2.6 尺 国立新美術館
13	創立二十周年記念文字文化作品展	文字文化研究所主催		2007.09.14	半切「温良恭儉讓」 京都文字文化研究所
14	第 7 回参和展	三戌会主催		2007.12.09	半切「山齋畜韻對澄江」 有楽町交通会館 B1 エメラルドギャラリー
15	『韓国篆刻学会三十周年記念 印品菁華』197 頁	韓国篆刻学会		2007.12.19	「長樂」白文印
16	アジア創造美術展 2008	亜細亜太平洋水墨画会主催		2008.01.23	審査員。富岡鉄斎詩「題自画山水図」(篆書)招待出品 国立新美術館
17	書画創意大観国際聯展	国立台湾芸術大学主催		2008.02.00	墨竹画 台湾国父(孫文)記念堂
18	題字揮毫	『大観書画』2008 第 9 輯		2008.03.00	国立台湾芸術大学書画芸術学系発行機関誌「大観書画」の題字を揮毫。
19	板橋の作家'05-'07 展	板橋区立美術館主催		2008.03.08	半切「温良恭儉讓」 板橋区立成増アートギャラリー
20	第 43 回雪心会書作展	雪心会主催		2008.03.19	半切「山齋畜韻對澄江」 奈良県立文化会館
21	第 62 回日本書芸院四月展	社団法人日本書芸院主催		2008.04.15	富岡鉄斎詩「題自画山水図」 6×2.6 尺 大阪市立美術館
22	第 4 回肆心展	肆心展主催		2008.05.06	書画 5 点出品 東京鳩居堂画廊 4F

23	「書畫藝術創意大觀國際聯展」 大東文化大学出品作品帰朝展	「書畫藝術創意大觀國際聯展実行委員会	2008.05.13	「竹林図」半切横 大東文化大学板橋校舎ギャラリー
24	第36回日本の書展	財団法人全国書美術振興会・共同通信社主催 文化庁後援	2008.06.12	半切「優孟忌所」 国立新美術館
25	第35回雪心会選抜書作展	雪心会主催	2008.07.24	自詠詩「戊子夏五端居」 10×3尺 上野の森美術館
26	第25回読売書法展	読売新聞社・読売書法会	2008.08.22	自詠詩「戊子夏五端居」 6×2.6尺 国立新美術館
27	Calligraphie Kunpei KAWACHI avec ses élèves	河内君平パリ展実行委員会主催	2008.09.10	2008.09.10～09.17 の一週間、フランス・パリ GALERIE SATELLITE で「河内君平とその生徒展」を開催した。
28	書画結縁一大東台芸四人展	書画結縁展実行委員会	2008.10.01	「君子愛人以禮」半紙 大東文化大学板橋校舎ギャラリー
29	The Art of Brush and Ink Kunpei KAWACHI	ピューージェット・サウンド大学主催	2008.10.12	アメリカ・ワシントン州タコマのピューージェット・サウンド大学チズム基金客員芸術家として招聘され、キトリッジ・ギャラリーで個展を開催した。全26点展示。
30	第40回日展	日展主催	2008.11.03	自詠詩「戊子夏五端居」 2.6×6尺 国立新美術館
31	2008 書法篆刻観摩展	国立台湾芸術大学主催	2008.12.00	「君子愛人以禮」半紙 国立台湾芸術大学内ギャラリー
32	大東文化大学・国立台湾芸術大学 教学交流五周年記念展	大東文化大学・国立台湾芸術大学主催	2008.12.00	「君子愛人以禮」41.6×51.0 国立台湾芸術大学内ギャラリー
33	第8回参和展	三戌会主催	2008.12.14	「積學樂志」半切 有楽町交通会館 B!1 エメラルドギャラリー
34	書道学科6期生卒業制作展・書道 学専攻4期生修了制作展	大東文化大学主催	2009.02.17	苦鉄道人詩 円形 東京銀座画廊 ※なお本作品は「大東文化大学カレンダー2009」に掲載されるものである。
35	第44回雪心会書作展	雪心会主催	2009.03.18	高峰顕日詩「遊高雄山」半切 奈良県立文化会館
36	第63回日本書芸院四月展	社団法人日本書芸院主催	2009.04.15	自詠詩「戊子赴長春」 6×2.6尺 大阪市立美術館

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	河野 隆	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 篆刻実技講習会 於：高知新聞会館文化ホール		2004.08.00	高知県高等学校文連・高知県教育委員会 高校生アーティスト育成事業の一環として、石印材による自用印の制作指導及び印の役割について解説した。				
2) 篆刻実技講習会 於：高知新聞会館文化ホール		2005.08.00	高知県高等学校文連・高知県教育委員会 前年度に続き高校生アーティスト育成事業の一環として篆刻の実技指導に当り、新しい素材(発泡スチロール)による取り組みの具体的な方法を示した。				
3) 篆刻実技講習会 於：高知県立高知南高等学校		2006.09.00	高知県高等学校文連・高知県教育委員会 3年目に当る篆刻の実技指導で、地域性を生かした創作活動として“龍”“馬”の題材により制作した。理想的な押印の方法を解説し、実践した。				
4) 篆刻実技講習会 於：神奈川県立平沼高等学校		2007.07.00	神奈川県教育委員会主催 研修講座 篆刻の実習を主とし、石印材を用いた自用印の制作の方法を解説し実践させた。				
5) 篆刻実技講習会 於：横浜市立港総合高等学校		2007.08.00	横浜市教育委員会主催 研修講座 小・中・高の現場教員を対象にして、篆刻の方法を解説し、2日間に亘って実習させた。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「篆刻ハンドブック」	単	2005.01.00	可成屋	篆刻の技法・歴史・鑑賞をビジュアルな図版を用いて解説した。篆刻周辺のことすらも配慮し、生活の色々な場面で生かす印の用法を紹介した。総頁数 160 頁			
2 「書道テキスト」第 10 巻篆刻	単	2008.03.00	大東文化大学書道研究所編 二玄社刊	璽印・篆刻の歴史に沿って、日中の名品を列挙し解説を加えた。篆刻三法の字法・章法・刀法の中でも、章法は字数別及び種別に、新しい視点から豊富な作例を紹介して、解析を試みた。章法を理解し、実践で応用する際の的確な資料を提供した。総頁数 64 頁。			
3 『平々凡々印譜』	単	2009.04.00	晨風会出版局	明治・大正期の三村竹清及び昭和 40 年代の藤山鳴堂両氏が企画し蒐集した「平々凡々」の同文印 46 種を新たに鈐拓し、『平々凡々印譜』に成譜した。総頁数 68 頁。			
論文							
1 『杭州九日記』(書道文化演習 2、書画短期研修報告)	単	2006.03.00	『大東書学』第 6 号	2005 年 8 月 29 日から 9 月 6 日までの 9 日間実施された中国美術学院での海外研修の内容をエッセーにまとめたもの。総頁数 21 頁			

2	『台芸夏天』（書道文化演習2、書画短期研修報告）	単	2007.03.00	『大東書学』第7号	2006年8月30日から9月7日までの9日間実施された国立台湾芸術大学での海外研修の内容をエッセーにまとめたもの。総頁数16頁。
3	『美院旬日記』（書道文化演習2、書画短期研修報告）	単	2008.03.00	大東書道学会・学会誌『大東書学』第8号	2007年8月29日から9月7日までの10日間実施した杭州の中国美術学院での海外研修の内容をエッセーにまとめたもの。総頁数21頁。
4	『台湾書画短期研修報告』（書道文化演習2）	単	2009.03.00	『大東書学』第9号	2008年12月21日から27日までの7日間実施された国立台湾芸術大学での海外研修の内容をエッセーにまとめたもの。総頁数22頁。
その他					
1	“篆刻の楽しみ”	単	2004.05.00	『大東書道』第412号	連載コラム No21
2	基本部首解説	単	2004.06.00	『楽篆』第18号	総評等を担当
3	“篆刻の楽しみ”	単	2004.06.00	『大東書道』第413号	連載コラム No22
4	学芸欄カット	単	2004.06.00	『大東文化』新聞第552号	水墨画連載の1
5	“篆刻の楽しみ”	単	2004.07.00	『大東書道』第414号	連載コラム No23
6	“篆刻の楽しみ”	単	2004.08.00	『大東書道』第415号	連載コラム No24
7	基本部首解説	単	2004.08.00	『楽篆』第19号	総評等を担当
8	“篆刻の楽しみ”	単	2004.09.00	『大東書道』第416号	連載コラム No25
9	“篆刻の楽しみ”	単	2004.10.00	『大東書道』第417号	連載コラム No26
10	基本部首解説	単	2004.10.00	『楽篆』第20号	総評等を担当
11	“篆刻の楽しみ”	単	2004.11.00	『大東書道』第419号	連載コラム No27
12	“篆刻の楽しみ”	単	2004.12.00	『大東書道』第420号	連載コラム No28
13	基本部首解説	単	2004.12.00	『楽篆』第21号	総評等を担当
14	“篆刻の楽しみ”	単	2005.01.00	『大東書道』第421号	連載コラム No29
15	“篆刻の楽しみ”	単	2005.02.00	『大東書道』第422号	連載コラム No30
16	“篆刻の楽しみ”	単	2005.03.00	『大東書道』第423号	連載コラム No31
17	“篆刻の楽しみ”	単	2005.04.00	『大東書道』第424号	連載コラム No32
18	基本部首解説	単	2005.04.00	『楽篆』第22号	総評等を担当
19	“篆刻の楽しみ”	単	2005.05.00	『大東書道』第425号	連載コラム No32
20	“篆刻の楽しみ”	単	2005.06.00	『大東書道』第426号	連載コラム No33
21	基本部首解説	単	2005.06.00	『楽篆』第23号	総評等を担当
22	“篆刻の楽しみ”	単	2005.07.00	『大東書道』第427号	連載コラム No34
23	「篆刻作品のスライド解説」於：東京都美術館講堂	単	2005.08.00	読売書法会	第22回読売書法展の幹部作品30余点の鑑賞ポイントを解説した
24	“篆刻の楽しみ”	単	2005.08.00	『大東書道』第428号	連載コラム No35

25	基本部首解説	単	2005.08.00	『楽篆』第24号	総評等を担当
26	「二世中村蘭台の書画篆刻」－ひとつの文人像－ 於：大東文化大学	単	2005.09.00	書学書道史学会	多方面に表現活動をした二世蘭台の実作をもとにその特質を解説した。
27	“篆刻の楽しみ”	単	2005.09.00	『大東書道』第429号	連載コラム No36
28	“篆刻の楽しみ”	単	2005.10.00	『大東書道』第430号	連載コラム No37
29	基本部首解説	単	2005.10.00	『楽篆』第25号	総評等を担当
30	“篆刻の楽しみ”	単	2005.11.00	『大東書道』第431号	連載コラム No38
31	“篆刻の楽しみ”	単	2005.12.00	『大東書道』第432号	連載コラム No39
32	基本部首解説	単	2005.12.00	『楽篆』第26号	総評等を担当
33	“篆刻の楽しみ”	単	2006.01.00	『大東書道』第433号	連載コラム No40
34	“篆刻の楽しみ”	単	2006.02.00	『大東書道』第434号	連載コラム No40
35	基本部首解説	単	2006.02.00	『楽篆』第27号	総評等を担当
36	「側款の採拓」於：横浜桜木町びおシテイ研修室	単	2006.03.00	晨風会	篆刻作品の重要な組成部分をなす側款の技法と歴史を解説した。
37	“篆刻の楽しみ”	単	2006.03.00	『大東書道』第435号	連載コラム No41
38	「人体に関する文字」於：日本教育会館	単	2006.04.00	全日本篆刻連盟	甲骨文・金文の字形をもとに“人”“手”“足”などから派生する漢字100字の成り立ちを解説した。
39	“篆刻の楽しみ”	単	2006.04.00	『大東書道』第436号	連載コラム No42
40	基本部首解説	単	2006.04.00	『楽篆』第28号	総評等を担当
41	「河井荃廬の篆刻」	単	2006.05.00	国立台湾芸術大学	国立台湾芸術大学の特別講座として、書画系の教員及び学生・院生40余名を対象に、日本近代を代表する巨匠の作品を解説した。
42	“篆刻の楽しみ”	単	2006.05.00	『大東書道』第437号	連載コラム No43
43	“篆刻の楽しみ”	単	2006.06.00	『大東書道』第438号	連載コラム No44
44	基本部首解説	単	2006.06.00	『楽篆』第29号	総評等を担当
45	“篆刻の楽しみ”	単	2006.07.00	『大東書道』第439号	連載コラム No45
46	「篆刻作品のスライド解説」 於：東京都美術館講堂	単	2006.08.00	読売書法会	第23回読売書法展の幹部作品30余点の鑑賞ポイントを解説した。
47	“篆刻の楽しみ”	単	2006.08.00	『大東書道』第440号	連載コラム No46
48	基本部首解説	単	2006.08.00	『楽篆』第30号	総評等を担当
49	“篆刻の楽しみ”	単	2006.09.00	『大東書道』第441号	連載コラム No47
50	“篆刻の楽しみ”	単	2006.10.00	『大東書道』第442号	連載コラム No48
51	基本部首解説	単	2006.10.00	『楽篆』第31号	総評等を担当
52	“篆刻の楽しみ”	単	2006.11.00	『大東書道』第443号	連載コラム No49

53	「漢字の成り立ち」 於 大東文化会館	単	2006.12.00	板橋文化芸術カレッジ「文 化芸術の東と西」全8回 のうち1	人体に関わる漢字を殷・周の古い字形をもとに解説した。
54	“篆刻の楽しみ”	単	2006.12.00	『大東書道』第444号	連載コラム No50
55	基本部首解説	単	2006.12.00	『楽篆』第32号	総評等を担当
56	“篆刻の楽しみ”	単	2007.01.00	『大東書道』第445号	連載コラム No51
57	“篆刻の楽しみ”	単	2007.02.00	『大東書道』第446号	連載コラム No52
58	基本部首解説	単	2007.02.00	『楽篆』第33号	総評等を担当
59	“篆刻の楽しみ”	単	2007.03.00	『大東書道』第447号	連載コラム No53
60	基本部首解説	単	2007.04.00	『楽篆』第35号	総評等を担当
61	“篆刻の楽しみ”	単	2007.04.00	『大東書道』第448号	連載コラム No57
62	「西川寧・生井子華両 先生のやりとり」於： 阿倍野市民学習セン ター	単	2007.05.00	斉平印会	昭和10年代に両者の間で取り交わされた篆刻指導資料を解説した。
63	「二世中村蘭台の 書・画・篆刻」於：盛 岡市ホテル・ルイズ	単	2007.05.00	岩手県篆刻連盟	二世蘭台の篆刻を中心に幅広い表現活動を実作をもとに解説した。
64	“篆刻の楽しみ”	単	2007.05.00	『大東書道』第449号	連載コラム No58
65	“篆刻の楽しみ”	単	2007.06.00	『大東書道』第450号	連載コラム No59
66	基本部首解説	単	2007.06.00	『楽篆』第36号	総評等を担当
67	“篆刻の楽しみ”	単	2007.07.00	『大東書道』第451号	連載コラム No60
68	基本部首解説	単	2007.08.00	『楽篆』第37号	総評等を担当
69	“篆刻の楽しみ”	単	2007.08.00	『大東書道』第452号	連載コラム No61
70	“篆刻の楽しみ”	単	2007.09.00	『大東書道』第453号	連載コラム No62
71	“篆刻の楽しみ”	単	2007.10.00	『大東書道』第454号	連載コラム No63
72	基本部首解説	単	2007.10.00	『楽篆』第38号	総評等を担当
73	“篆刻の楽しみ”	単	2007.11.00	『大東書道』第455号	連載コラム No64
74	“篆刻の楽しみ”	単	2007.12.00	『大東書道』第456号	連載コラム No65
75	総評等を担当	単	2007.12.00	『楽篆』第39号	
76	“篆刻の楽しみ”	単	2008.01.00	『大東書道』第457号	連載コラム No66
77	「璽印篆刻の歴史と 鑑賞」於：熊谷女子高 等学校	単	2008.02.00	埼玉県書道部会主催 研修 講座	日中の印の歴史を映像と実物の印章によって解説した。
78	“篆刻の楽しみ”	単	2008.02.00	『大東書道』第458号	連載コラム No67
79	総評等を担当	単	2008.02.00	『楽篆』第40号	
80	“篆刻の楽しみ”	単	2008.03.00	『大東書道』第459号	連載コラム No68

81	単	2008.03.00	『日中書法の伝承』展 ンフレット逸品紹介	バ 謙慎書道会 70 周年記念特別展の出陳作品中、篆刻の名品について解説を担当した。総頁数 2 頁。	
82	“篆刻の楽しみ”	単	2008.04.00	『大東書道』第 460 号	連載コラム No69
83	総評等を担当	単	2008.04.00	『楽篆』第 41 号	
84	「鈴印法」於：浦添市 てだこホール	単	2008.05.00	大東文化大学書道研究所主催	雅印を鮮やかに押す為の基礎知識と技法を実演を交えて解説した。
85	“篆刻の楽しみ”	単	2008.05.00	『大東書道』第 461 号	連載コラム No70
86	“篆刻の楽しみ”	単	2008.06.00	『大東書道』第 461 号	連載コラム No71
87	総評等を担当	単	2008.06.00	『楽篆』第 42 号	
88	“篆刻の楽しみ”	単	2008.07.00	『大東書道』第 462 号	連載コラム No72
89	“篆刻の楽しみ”	単	2008.08.00	『大東書道』第 463 号	連載コラム No73
90	総評等を担当	単	2008.08.00	『楽篆』第 43 号	
91	“篆刻の楽しみ”	単	2008.09.00	『大東書道』第 464 号	連載コラム No74
92	“篆刻の楽しみ”	単	2008.10.00	『大東書道』第 465 号	連載コラム No75
93	総評等を担当	単	2008.10.00	『楽篆』第 44 号	
94	“篆刻の楽しみ”	単	2008.11.00	『大東書道』第 466 号	連載コラム No76
95	“篆刻の楽しみ”	単	2008.12.00	『大東書道』第 467 号	連載コラム No77
96	総評等を担当	単	2008.12.00	『楽篆』第 45 号	
97	“篆刻の楽しみ”	単	2009.01.00	『大東書道』第 468 号	連載コラム No78
98	“篆刻の楽しみ”	単	2009.02.00	『大東書道』第 469 号	連載コラム No79
99	総評等を担当	単	2009.02.00	『楽篆』第 46 号	
100	“篆刻の楽しみ”	単	2009.03.00	『大東書道』第 470 号	連載コラム No80
101	“篆刻の楽しみ”	単	2009.04.00	『大東書道』第 471 号	連載コラム No81
102	総評等を担当	単	2009.04.00	『楽篆』第 47 号	
103	巻頭言「用と美」－篆刻の授業に寄せて－	単	2009.04.00	『ニューサポート』vol.6 東京書籍 高等学校書道教育情報誌	

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1984.10.00	～	現在	東京書籍高等学校書道教科書編集委員
2	1987.02.00	～	現在	読売書法会理事 第 5 回展（1989）以降 審査員通算 6 回、企画委員 4 回
3	1987.05.00	～	現在	謙慎書道会常任理事 第 44 回展（1982）以降 審査員通算 11 回
4	1989.05.31	～	現在	神奈川県教育委員会「中学校国語科書写の指導法について」第 1 回中学校国語科教育研修講座の 1 として 実技講習
5	1991.04.00	～	2006.03.31	古河市立篆刻美術館運営協議会委員

6	1991.06.00	～	現在	全日本篆刻連盟理事
7	1991.11.00	～	現在	社団法人 日展会友
8	2001.07.26	～	現在	横浜市教育委員会「篆刻」小・中学校国語科書写実技講習の1として
9	2001.08.05	～	現在	和洋女子大学夏期書道講習会の1として「篆刻実技」
10	2001.11.00	～	2006.03.00	書学書道史学会会員
11	2003.03.06	～	現在	厚生年金会館新宿大学の1として「印の役割」
12	2003.04.06	～	現在	全日本篆刻連盟常任理事
13	2003.08.06	～	現在	和洋女子大学夏季書道講習会の1として「篆刻実技」
14	2003.09.21	～	現在	西泠印社名誉社員
15	2004.06.22			東京私立中学高等学校協会芸術体育系教科研究会（書道）講演会「鈴印法」
16	2005.05.00			社団法人 日展出品依頼
17	2006.02.00	～	現在	読売書法会常任理事 第23回展以降審査員通算1回、企画委員2回
18	2006.04.00	～	現在	書学書道史学会理事
19	2007.04.01			全日本篆刻連盟副会長
20	2008.10.00			社団法人日展第40会日展新審査員
21	2009.03.00	～	現在	社団法人日展会員

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	河野 隆	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所			開催日時	発表・展示等の内容等				
1 「得時者昌」他1点	第17回全日本篆刻連盟展			2004.06.00	常任理事として出品 於 銀座鳩居堂				
2 「印外求印」	第21回読売書法展			2004.08.00	理事として出品				
3 「戲海遊天」	第36回日展			2004.11.00	無鑑査として出品				
4 「無為」	第66回謙慎書道展			2005.03.00					
5 「篆書五言聯」	第4回河野隆近作展			2005.03.00	他近作の書画・篆刻・工芸等 42点を出品 於：横浜桜木町ギャラリー守玄齋				
6 「如是」	第17回全日本篆刻連盟展			2005.06.00	常任理事として出品 於 銀座鳩居堂				
7 「得魚忘筌」	第22回読売書法展			2005.08.00	理事として出品				
8 「不如学」	第37回日展			2005.11.00	委嘱として出品				
9 「出入平安」	第50回現代書道20人展			2006.01.00	他近作の篆刻作品を7点を印材とともに出品 於：上野松坂屋他				
10	日本書壇の歩み展－昭和から平成へ－			2006.01.00	「仁者寿」を印材とともに出品。於東京国立博物館平成館				
11 「愚公移山」	第67回謙慎書道展			2006.03.00	常任理事として出品				
12 「臨趙之謙説文解字叙」	第5回河野隆近作展			2006.03.00	他近作の書・画・篆刻工芸等 40点を出品。 於：横浜桜木町ギャラリー守玄齋				
13 「十駕」	第18回全日本篆刻連盟展			2006.06.00	常任理事として出品				
14 「道無雙」	第23回読売書法展			2006.08.00	常任理事として出品				
15 「抱甕」	第38回日展			2006.11.00	委嘱として出品				
16 「千秋萬歳」	第51回現代書道20人展			2007.01.00	他近作の篆刻作品7点を印材とともに出品。 於：上野松坂屋他				
17 「仁者寿」	第68回謙慎書道展			2007.03.00	常任理事として出品				
18 「蘇東坡賞心十六事」	第6回河野隆近作展			2007.03.00	他近作の書・画・篆刻・工芸等 45点を出品 於：横浜桜木町ギャラリー守玄齋				
19 「吳下阿蒙」「文字歛」	第20回全日本篆刻連盟展			2007.05.00	副会長として出品 於銀座セントラル美術館				
20 「主于一」	第24回読売書法展			2007.08.00	常任理事として出品 於国立新美術館				
21 「吟風弄月」	第39回日展			2007.11.00	委嘱として出品 於国立新美術館 巡回展にも選抜される				
22 「小神僊」	第52回現代書道20人展			2008.01.00	他近作の篆刻作品を7点を印材とともに出品 於：上野松坂屋他				
23 「道法自然」	第7回河野隆近作展			2008.03.00	他近作の書・画・篆刻工芸等 48点を出品。 於：横浜桜木町ギャラリー守玄齋				
24 「人中龍」	第70回謙慎書道展			2008.03.00	常任理事として出品 於 上野都美術館				
25 「延益寿」「平々凡々」	第21回全日本篆刻連盟展			2008.05.00	副会長として出品 於 銀座セントラル美術館				

26	「不倒翁」	第 25 回読書法展	2008.08.00	常任理事として出品
27	「人長寿」	第 40 回日展	2008.10.00	新審査員として出品
28	「金石寿」	第 53 回現代書道 20 人展	2009.01.00	他近作の篆刻 9 点を印材とともに出品 於： 上野松坂屋 他
29		第 13 回晨風会展	2009.03.00	他近作の書・画・篆刻 30 点を出品 於・横 浜桜木町ゴールデンギャラリー
30	「還嬰」	第 71 回謙慎書道展	2009.03.00	常任理事として出品
31	「羊質虎皮」「偏印楼主」	第 22 回全日本篆刻連盟展	2009.05.00	副理事長として出品 於 銀座セントラル美 術館

(表 24)

所 属	文学部書道学科	職 名	教授	氏 名	齊藤 公男	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 新代の刻石 葉子侯刻石 (2頁)			2004.05.00	書道研究誌「書窓」			
2) 新代の肉筆 急就章 (2頁)			2004.06.00	書道研究誌「書窓」			
3) 後漢の刻石三種 (5頁)			2004.07.00	書道研究誌「書窓」			
4) 祀三公山碑 (2頁)			2004.10.00	書道研究誌「書窓」			
5) 嵩山少室石闕銘 (2頁)			2004.11.00	書道研究誌「書窓」			
6) 裴岑紀功碑 (2頁)			2005.02.00	書道研究誌「書窓」			
7) 北海相景君碑 (2頁)			2005.03.00	書道研究誌「書窓」			
8) 漢代の隸書・石門頌 (2頁)			2005.04.00	書道研究誌「書窓」			
9) 漢代の隸書・乙瑛碑 (2頁)			2005.05.00	書道研究誌「書窓」			
10) 漢代の隸書・禮器碑① (2頁)			2005.06.00	書道研究誌「書窓」			
11) 漢代の隸書・禮器碑② (2頁)			2005.07.00	書道研究誌「書窓」			
12) 漢代の隸書・禮器碑③ (2頁)			2005.08.00	書道研究誌「書窓」			
13) 漢代の隸書・禮器碑④碑陰の書 (2頁)			2005.09.00	書道研究誌「書窓」			
14) 漢代の隸書・楊峴の臨禮器碑 (2頁)			2005.10.00	書道研究誌「書窓」			
15) 漢代の隸書・張景造土牛碑 (2頁)			2005.11.00	書道研究誌「書窓」			
16) 漢代の隸書・張寿残碑 (1頁)			2005.12.00	書道研究誌「書窓」			
17) 漢代の隸書・劉平国摩崖 (1頁)			2006.01.00	書道研究誌「書窓」			
18) 漢代の隸書・封龍山頌 (2頁)			2006.02.00	書道研究誌「書窓」			
19) 漢代の隸書・西嶽華山廟碑 (3頁)			2006.03.00	書道研究誌「書窓」			
20) 西嶽華山廟碑と何紹基の臨書 (2頁)			2006.04.00	書道研究誌「書窓」			
21) 漢代の隸書・孔宙碑 (2頁)			2006.05.00	書道研究誌「書窓」			
22) 漢代の隸書・史晨前碑 (2頁)			2006.06.00	書道研究誌「書窓」			

23) 漢代の隸書・韓仁銘（2頁）	2006.07.00	書道研究誌「書窓」
24) 漢代の隸書・尹宙碑（2頁）	2006.08.00	書道研究誌「書窓」
25) 漢代の隸書・白石神君碑（2頁）	2006.09.00	書道研究誌「書窓」
26) 漢代の隸書・曹全碑①（4頁）	2006.10.00	書道研究誌「書窓」
27) 漢代の隸書・曹全碑②③④（3頁）	2006.11.00	書道研究誌「書窓」
28) 漢代の隸書・曹全碑⑤（2頁）	2007.02.00	書道研究誌「書窓」
29) 漢代の隸書・曹全碑⑥（3頁）	2007.03.00	書道研究誌「書窓」
30) 漢代の隸書 張遷碑 王舍人碑（3頁）	2007.04.00	書道研究誌「書窓」
31) 漢代の隸書 西狭頌（2頁）	2007.06.00	書道研究誌「書窓」
32) 漢代の隸書 郃閼頌（2頁）	2007.07.00	書道研究誌「書窓」
33) 漢代の隸書 楊淮表記（2頁）	2007.08.00	書道研究誌「書窓」
34) 漢代の隸書 熹平石經（2頁）	2007.09.00	書道研究誌「書窓」
35) 漢代の隸書 漆盤銘と博女（4頁）	2007.10.00	書道研究誌「書窓」
36) 漢代の隸書 陶瓶漆書と石闕題字（6頁）	2008.02.00	書道研究誌「書窓」
37) 漢代の草隸 「急就章博」と「木簡」（4頁）	2008.04.00	書道研究誌「書窓」
38) 漢代画像石題記と銅鏡の銘文（8頁）	2008.06.00	書道研究誌「書窓」
39) 漢碑の篆額と隸書（2頁）	2008.09.00	書道研究誌「書窓」
40) 漢代木簡に見る草隸と草書化の姿（12頁）	2008.10.00	書道研究誌「書窓」
41) 漢代武威簡に見る行書化の姿（2頁）	2009.04.00	書道研究誌「書窓」
42) 三国時代の書「上尊号奏」（魏隸）（2頁）	2009.05.00	書道研究誌「書窓」
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 漢字仮名交じりの書を楽しむ（於・東松山校舎）	2004.05.13	大東文化大学エクステンションセンター・オープンカレッジ（2004.07.15まで）
2) 高校生のための書道講座	2005.07.28	大東文化大学書道研究所書道講座
3) 宮崎県高等学校書道実技向上講座	2006.10.19	（於・宮崎県青島サンクマールホテル）
4) 第34回栃木県高等学校書道教員展批評会講師	2007.02.17	栃木県高等学校教育研究会書道部会主催（於・県総合文化センター）
5) 高校生のための書道講座	2007.06.24	大東文化大学書道研究所書道講座（於・福岡国際会議場）
6) 高校生のための書道講座	2007.07.27	大東文化大学書道研究所書道講座（於・本学板橋校）
7) 社会人書道講座	2007.08.04	大東文化大学書道研究所書道講座（於・本学板橋校）

8) 書道実技向上講習会	2007.08.07	宮崎県高等学校文化連盟書道専門部主催 (於・宮崎県青島サンク マールホテル)
9) 高校生のための書道講座	2008.05.16	(於・沖縄県浦添市でだこホール)
10) 高校生のための書道講座	2008.06.22	(於・熊本市)
11) 高校生のための書道講座	2008.07.00	(於・板橋キャンパス)
12) 第50回記念大東文化大学全国書道展	2008.10.00	審査(特別賞選考)
13) 「絵と書のコラボレーション」	2008.10.07	大東文化大学国際交流センター オープンカレッジ (於・板橋校)

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 「斎藤蒼青の書」(36頁)		2004.08.00	個展作品集 国立台湾芸術大学編印	国立台湾芸術大学の招請により開催した個展作品を収録。
2 「斎藤蒼青の書」(36頁)		2007.03.00	個展作品集	山梨県立美術館で開催した第3回個展作品(新作27点)ならびに制作論を収録。
3 「不二山」		2007.08.00	テレビCM出演(株)エノモト	7×4m大の用紙に大字書「不二山」を揮毫、揮毫風景の映像化した。(現在放映中)
論文				
1 陳猷章をイメージした創作と“読める書”への提言(5頁)		2005.03.20	大東文化大学紀要「大東書道研究」第12号	
2 雑考「美しい書の要件」(13頁)		2005.03.31	大東文化大学書道学会紀要「大東書学」第5号	
3 「故郷忘じがたし」		2006.03.20	大東文化大学紀要「大東書道研究」第13号	漢字仮名交じり書による信玄の詩と制作ノート(2頁)
4 新資料「中村不折の臨万歳通天進帖」と美意識(18頁)		2006.03.20	大東文化大学紀要「大東書道研究」第13号	(山梨県立文学館収蔵)
5 「偶然書せんと欲す」(3頁)		2007.03.20	大東文化大学紀要「大東書道研究」第14号	
6 「余白の美」芭蕉の句(2頁)		2008.03.22	大東文化大学紀要「大東書道研究」第15号	
7 「自称琳派風の試み」		2009.03.20	大東文化大学紀要「大東書道研究」第16号	(3頁)琳派絵画への想いを胸に、漢字仮名交じり書と絵画とのコラボレーション作品を制作し、制作論を述べた。
その他				
1 「書の実しさ」とは		2005.03.12	第33回埼玉県立大宮光陵高校書道科特別講演	(於・さいたま市民会館うらわホール)
2 漢字仮名交じり作品制作と問題点		2005.10.11	大東文化大学書道部講演	
3 2008年度埼玉県立大宮光陵高校特別講演「漢字仮名交じり書について」		2008.12.13	(大宮光陵高校習成館)	

III 学会等および社会における主な活動

1 1972.00.00 ~ 現在	謹慎書道会理事。
-------------------	----------

2	1977.00.00	～	現在	社団法人日展会友。
3	1981.00.00	～	現在	蒼の会主宰。例年、研修会を開催。また山梨県立美術館において展覧会を開催。平成 21 年 3 月に第 27 回展を開催した。
4	1991.00.00	～	現在	書芸院会長。例年教育書道展（後援・山梨県、県教育委員会、山梨日日新聞社、山梨放送）を開催。書道教育の振興に努める。27 年の歴史がある。また、書芸院発行の書道研究誌「書窓」（通巻 645 号）の主幹を務める。
5	1992.00.00	～	現在	山梨日日新聞社・山梨放送主催「席書き大会」審査員。山梨県下 51 箇所の小学校を会場にして一斉に行われる席書き大会。幼児から一般まで参加する（参加者数約 1,5000 人）大イベントで 60 年の歴史がある。この大会を通して多くの書人が誕生してもおり、書道教育の発展に寄与するところが大きい。
6	1994.00.00	～	現在	楨社文会会員
7	1996.00.00	～	現在	山梨県書道会常任理事・審査員。例年一回公募展、教育書道展、研修会を開催、県下書道文化の向上に寄与
8	1997.00.00	～	現在	山梨芸術家協会理事。絵画、書道、演劇、音楽、日舞など、ジャンルを超えた文化活動の集団
9	1999.00.00	～	現在	山梨書作家連盟常任理事。会員展、日中友好展（四川省）、チャリティー展を開催。
10	2001.00.00			山梨県けんみん文化祭（主催・山梨県）書道部門委嘱。
11	2002.08.00	～	現在	大東文化大学山人会代表幹事。大東文化大学OB、OG、在学生による書道研究会。大東の書を広くアピールするとともに地域の活性化に努める。3年に1度、展覧会を開催。2008年4月に第3回展を催した（於・山交百貨店）
12	2007.04.00	～	現在	読売書法会理事、審査員。

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	齊藤 公男	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	与謝野晶子のうた（昭和8年、昇仙峡に遊びし折によめるうた）	現代書壇を代表する「日本の書展」		2004.07.23	（於・なかとみ現代工芸美術館）委嘱出品	
2	「乗燭遊」第27点	国立台湾芸術大学招請「斎藤蒼青の書」展		2004.08.30	新作による海外での初個展。（於・国立台湾芸術大学書画美術芸廊）	
3	半田良平のうた「裾野の風景」より	第4回山梨けんみん文化祭		2004.10.10	（於・山梨県立美術館）委嘱出品	
4	「斎藤蒼青の書」展	（於・板橋校ギャラリー）		2004.11.20	国立台湾芸術大学での個展作品抜粋を展示。	
5	大伴家持のうた	第32回山梨県書道会展		2004.11.30	（於・山梨県立美術館）審査員出品	
6	殷墟文字六言対句	第23回蒼の会展		2005.03.08	〈於・山梨県立美術館〉	
7	信玄詩「寄濃州僧」	第2回大東文化大学山人会展		2005.04.06	（於・山交百貨店）	
8	井伏鱒二訳による孟浩然詩「春暁」	第12回楨社文会展・青山杉雨先生13回忌記念展		2005.05.22	（於・サンシャインシティ文化会館）	
9	楊佩夫詩句摘録「隸書七言聯」	第4回山梨書作家展		2005.06.14	（於・山梨県立美術館）	
10	巖谷一六詩「夢登富嶽」	現代書壇を代表する「日本の書展」		2005.07.22	（於・なかとみ現代工芸美術館）委嘱出品	
11	武田信玄詩「梅花」	第5回けんみん文化祭		2005.11.05	（於・山梨県立美術館）委嘱出品	
12	頼山陽詩「題富嶽図」	第33回山梨書道会展		2005.12.03	（於・山梨県立美術館）	
13	「壺中天」	第12回新春チャリティー書展		2006.01.07	（於・山交百貨店）	
14	伊東春畝（博文）詩「寒梅」、「不動妙山」	第24回蒼の会書展		2006.03.08	（於・山梨県立美術館）	
15	「伊達政宗詩」馬上少年過ぐ	當代書画芸術創新展		2006.04.10	国立台湾芸術大学主催（於・台北县政府展覽室）	
16	「武田勝頼夫人辞世のうた」	現代書壇を代表する「日本の書展」		2006.07.00	（於・なかとみ現代工芸美術館）	
17	「中里介山 大菩薩峠 冒頭の一節」 読売新聞社賞	第23回読売書法展		2006.08.13	（於・東京都美術館）	
18	石川大山詩「富士山」	第6回やまなし県文化祭		2006.10.29	（於・山梨県立美術館）	
19	「昭和二十年七月六日夜」等27点（新作）	「斎藤蒼青の書」展		2007.03.24	（於・山梨県立美術館）	
20	「龍の鬚の青い実に寄せて」	第5回山梨県作家展		2007.05.20	自詠（於・山梨県立美術館）	
21	「伊達政宗涛」	韓国慶尚南道書芸大展		2007.06.05	招待出品（於・韓国昌原聖山会館ギャラリー）	
22	「万葉集山上憶良のうた」	第24回読売書法展		2007.08.24	理事出品（於・国立新美術館）	
23	「不二山」揮毫	（株）エノモトCM出演		2007.08.29	7×4mの大字書 UTY放映中	
24	「山上憶良のうた」	日中韓三国四校国際交流展		2007.09.03	教員出品（於・無錫美術館）併催・論談会（無錫花園酒店）	
25	「萬歳不敗」仿漢代磚銘	第34回山梨県書道会展		2007.10.18	審査員出品（於・山梨県立美術館）	

26	「笑うが如し」	第7回やまなし県民文化祭	2007.12.15	依頼出品（於・山梨県立美術館）
27	「野田笛浦詩」	書画芸術創意大観国際聯展	2008.02.19	（於・台湾国立国父記念館）
28	「万葉歌二首対聯」	第26回蒼の会書展	2008.03.22	主宰（於・山梨県立美術館）
29	「雷神」「行書五言句対聯」	第3回大東文化大学山人会展	2008.04.16	（於・山交百貨店）
30	「野葡萄図」他2点	国際水墨画展	2008.06.30	（於・板橋キャンパス・ギャラリー）
31	「種田山頭火の随筆より」	第25回 読売書法展	2008.08.00	（於・国立新美術館）
32	「秋萩図下絵万葉歌」	台湾芸大書法観摩展	2008.11.00	（於・国立台湾芸術大学）
33	「万葉集・露に寄せるうた」	大東文化大学・国立台湾芸術大学教 学交流五周年記念書画展	2008.12.00	（於・国立台湾芸大、大東文化大学）大東文 化大学書道学科と国立台湾芸大との交流5周 年を記念した両校教員同志の書画展
34	「葛下絵芭蕉句二句」	第27回蒼の会書展	2009.03.01	（於・山梨県立美術館）

(表 24)

所属	文学部 書道学科	職名	教授	氏名	澤田 雅弘	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『書Ⅰ』(高等学校芸術科教科書)		2006.02.28	教育図書 文部科学省検定済、全 97 頁				
2) 『書Ⅱ』(高等学校芸術科教科書)		2007.02.28	教育図書 文部科学省検定済、全 73 頁				
3) 『書Ⅲ』(高等学校芸術科教科書)		2008.02.28	教育図書 文部科学省検定済、全 65 頁				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 書学書道史学会編『日本・中国・朝鮮書道史年表事典』	共著	2005.09.00	萱原書店	全 505 頁、澤田雅弘(212~215、217~227 頁)分担執筆			
2 [決定版]中国書道史	共著	2009.01.30	芸術新聞社	全 190 頁、澤田雅弘(129~145 頁 第7章 明)			
論文							
1 「偽刻家Xの形影—同手の偽刻北魏洛陽墓誌群—」	単著	2005.09.00	書学書道史研究(書学書道史学会)第15号	酷似する字蹟が頻出すること、後世の俗字を共用するなど使用字体に共通性があること、特徴的な筆癖が認めれること等の観察結果にもとづいて、洛陽出土とされる北魏墓誌中の(偽刻説のある11件を含む)15件が、同一人の手になる偽刻であることを指摘し、いまなお不明な偽刻者の実態を解明するうえで格好のモデルを提供した。 1~21 頁			
2 「偽刻北魏墓誌考—朱奇墓誌・段峻徳墓誌・李頤墓誌・陳廡墓誌・高珪墓誌—」	単著	2006.03.00	大東書道研究(大東文化大学書道研究所)13	朱奇墓誌・段峻徳墓誌では事蹟の比較をもとに、No.27「偽刻家Xの形影—同手の偽刻北魏洛陽墓誌群—」で指摘した偽刻家Xの偽刻であること、李頤墓誌では北魏の別体を誤用や後世の字体を頻繁に使用することを、陳廡墓誌では偽造が蘇慈墓誌からの集字であることを、高珪墓誌では後世の字体を頻繁に使用することを指摘し、5件の墓誌が偽刻であること、ならびにその根拠を明らかにした。 60~74 頁			

3	北朝墓誌の刻について－元毓墓誌と元昉墓誌－	単著	2007.02.14	群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第56巻	北魏の河陰の変において同日に殺害され、同日に同墓葬区に葬られた兄弟元毓・元昉の両誌の字蹟を検討し、①両誌の書者は趙万里の指摘のとおり同手であること。②元毓墓誌の主たる刻法はA・Bの二種、元昉墓誌の主たる刻者の刻法はC・Dの二種であり、AとC、BとDはそれぞれ同一刻保持者の別手であること。③またAのうち一部の刻法bは、Dと同手である可能性があることの結論を得て、鐫刻分担組織上の問題を発掘した。(18年度科研・萌芽研究の成果の一部)
4	北朝墓誌の書者と刻者について－元總墓誌と元詳墓誌－	単著	2007.03.20	大東書道研究(大東文化大学書道研究所)14	同日に同墓葬区に葬られた兄弟元總と元詳の両誌の字蹟を検討し、①両誌の書者は趙万里のいう同手ではなく、書法の来源を一にする別手であること。②元總墓誌の主たる刻法はA・Bの二種、元詳墓誌の主たる刻法はC・Dの二種であり、AとC、BとDとはそれぞれ来源を一にする刻法継承者の別手であることの結論を得て、鐫刻分担組織上の問題を発掘した。(18年度科研・萌芽研究の成果の一部)
5	「飲墨について」	単著	2007.09.00	『“面向世界的東方思想”中日韓三国學術研討會論文集』	おおむね旧稿「飲墨について」中の王勃の故事「腹稿」の解釈にかかわる箇所を割愛し、さらに短縮したものであるが、文人における飲墨の意味の観点から部分的に加筆したところがある。
6	「北朝墓誌の刻について－元顥墓誌と元瑒墓誌－」	単著	2008.03.20	大東書道研究(大東文化大学書道研究所)15	同日に同墓葬区に葬られた兄弟元顥と元瑒の両誌の字蹟を検討し、①両誌の書者は同手もしくは同一書流にあって酷似の書をなすもの同士の手であること。②元顥墓誌の主たる刻法はA・B・C・D・Eの五種、元瑒墓誌の主たる刻法はF・G・Hの三種であり、うちAとF、DとHの各刻者は同手とみられることの結論を得て、鐫刻分担組織上の問題を発掘した。(19年度科研・萌芽研究の成果の一部)
7	隋代墓誌の刻について－張盈墓誌と夫人蕭氏墓誌－	単著	2009.03.20	大東書道研究(大東文化大学書道研究所)16	同日に葬られた夫婦の各墓誌の字蹟を検討し、①両誌の書者は同手であること。②張盈墓誌の刻法はA・Bの二種、夫人蕭氏墓誌の刻法はC・Dの二種であり、AとCは南朝書法に練熟した同一刻法、BとDは北朝的書法に練熟した同一刻法であること、の結論を得て、工房組織上の問題を発掘した。(20年度科研・基盤研究の成果の一部)
8	偽刻墓誌考－(北魏)張君夫人李淑真墓誌・(陳)到仲举墓誌－	単著	2009.03.31	書学文化(淑徳大学書学文化センター)第10号	北魏の張君夫人李淑真墓誌が、澤田が「偽刻家Xの形影」(業績区分21,年書学書道史研究2005)で発見論証した偽刻家Xの手になる偽造の一件で、その偽造方法は清末民国初出土の唐の王昕妻李清禪墓誌の誌銘を下敷きに自運したものであること。偽刻である陳の到仲举墓誌が隋の蘇慈墓誌を下敷きにした集字偽造で、その手法と集字技術上の問題が、澤田が「偽刻北魏墓誌考」(業績区分22,大東書道研究13)で論証した偽刻陳廠墓誌のそれと類似すること。以上の二点を論証した。
その他					
1	「偽刻家Xの形影－同手の偽刻北魏洛陽墓誌群－」	単独 口頭 発表	2004.11.00	書学書道史学会第15回大会(東京大学)	
2	澤田雅弘・富田淳著「小来禽館手札墨宝(前)」	共著	2005.03.00	書学文化(淑徳大学書学文化センター)、第6号	15～26頁
3	明清時代の書－法帖から金石へ－	単独 講演	2005.12.15	東京国立博物館 中国書跡講座第3回	
4	澤田雅弘・富田淳著「小来禽館手札墨宝(後)」	共著	2006.03.00	書学文化(淑徳大学書学文化センター)、第7号	19～36頁
5	関于飲墨	単独 口頭 発表	2007.09.18	『“面向世界的東方思想”中日韓三国學術研討會(山東大学)』	
6	刻法と筆法の怪しい関係	単独 講演	2007.09.24	書学書道史学会第3回研究発表会会員による研究余話(大東文化大学)	

7	「書」の中国思想	単独講演	2008.07.05	町田市・NHK共催 特別展「北京故宮 書の名品展」関連文化講演会(於町田市立中央図書館 6階ホール)	
8	「書」の中国思想	単独講演	2008.07.12	東京都中央区・NHK共催 特別展「北京故宮 書の名品展」関連文化講演会(於築地社会教育会館 4階視聴覚室)	
9	北京故宮 書の名品展	共著	2008.07.15	毎日新聞社・NHK・NHKプロモーション	江戸東京博物館特別展図録 187～191頁 「行書総兵帖」等 14項目の解説
10	「書」の中国思想	単独講演	2008.07.31	立川市・NHK共催 特別展「北京故宮 書の名品展」関連たちかわ生涯学習文化講演会(於女性総合センターホール)	
11	「書」の中国思想	単独講演	2008.08.31	日野市・NHK共催 特別展「北京故宮 書の名品展」関連文化講演会(於日野市市民会館小ホール)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1977.06.00	～	現在	日本中国学会会員	
2	1990.04.00	～	現在	書学書道史学会会員 (1998年4月～2000年11月理事、2000年12月～現在常任理事)	

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	高木 厚人	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 四季の詩歌を書く (かな編)	単	2006.12.00	可成屋	大学かな用の手本集として書き下ろしたもの。春夏秋冬の俳句、和歌をさまざまな大きさの紙を用いて書きそのねらいを示した。		
2 書道テキスト第9巻 かな	単	2007.08.00	二玄社	大東文化大学の書道 (かな) 用テキストとして編集。かなを学ぶための基礎知識および基本的な古典資料を紹介した。		
論文						
1 五鳳の名品「いろは歌」	単	2005.01.00	芸術新聞社『墨』172号 pp. —	日比野五鳳「いろは歌」の技法を探り、その用筆に迫った。そしてその魅力の一端を述べた。		
2 漢字・仮名交じりの書	単	2006.01.00	芸術新聞社『墨』178号 pp. —	漢字・仮名交じりの書としての参考作品を示し、その作品を仕上げるにあたっての考えを付した。		
3 かなをもっと魅力的に	単	2006.08.00	可成屋『書画の楽しみ』41号	伝統書としての「かな」の魅力をどうしたら次世代に伝えることができるかを、具体的な例をあげながら論じた。		
その他						
1 特別講座 関東のかな書一女流の系譜	単	2004.12.00	於：奈良市杉岡華邨書道美術館	関東のかな書は関西のかな書と異なった系譜をもつ。ここでは5人の女流作家をとりあげそれぞれの系譜を通し、関東女流かな書家の生き方を考えた。		
2 特別講義 大字仮名・小字仮名における作品制作	単	2005.08.00	於：栃木県高等学校教育研究会書道部会	かな作品を制作するにあたってのさまざまな方法論を示し実際に書き示すことでその道すじを明らかにした。		
3 特別講義	単	2006.03.00	於：イタリアーナポリ東洋大学	日本語・日本文化を主専攻とする学生を対象に文字のなりたち、特にかな文字の成立についての講義を行った。あわせてかな実技の体験をさせた。		

4	特別講義 かな古典の魅力と現代作品(1)	単	2006.05.00	於：牛久書道協会	平安時代のかな古典をとりあげその魅力について分析し、それを現代の作家はどのように作品にとり入れているかを示した。
5	特別講義 かな古典の魅力と現代作品(2)	単	2006.06.00	於：静岡県高等学校教育研究会書道部会	平安時代のかな古典をとりあげその魅力について分析し、漢字かな交じりとの関連を明らかにした。
6	特別講義 実作における私の古典—私の見方・感じ方—	単	2007.05.00	於：日本書芸院 夏期講座	高野切第三種、中務集、本阿弥切から創作のヒントになる場所をぬき出し、紹介、古典の中にかくれている表現の秘密を明らかにした。
7	特別講義「かな古典の散らし書きについて」	単	2007.09.00	於：三国四大学書道展 中国無錫	
8	特別講演 杉岡華邨の書について	単	2008.06.00	於 成田山書道美術館	杉岡華邨の書の魅力について分析、その書道史上の位置を示した。
9	特別講演 かな古典から学ぶこと	単	2008.07.00	於 東京有楽町朝日ホール 主催 書道団体連合会	かな作品実作者の立場から、かな古典からの学ぶべき点、その可能性を考えてみた。
10	特別講座 一行の散らし	単	2008.08.00	於 奈良市杉岡華邨書道美術館	かな書における一行の散らし（一行の中に表現される動き）について考えた。
11	日本文化専攻学生対象特別講義	単	2008.12.00	於 イタリア・ナポリ東洋大学	日本の伝統文化の一つである書の魅力について語った。
12	連続講座 平安のかな	単	2008.12.00	於 イタリア・ローマ日本文化会館	平安時代に完成したかなの美の紹介とその時代の美意識について語った。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1982.04.00	～	現在	全国大学書道学会会員
2	1986.02.00	～	現在	読売書法会昭和 61 年度評議員、平成 2 年理事、平成 13 年常任理事
3	1993.02.00	～	現在	社団法人日本書芸院平成 5 年監事、平成 7 年理事、平成 9 年常務理事、平成 21 年副理事長
4	1993.03.00	～	現在	社団法人日展平成 5 年会友、平成 10 年委嘱、平成 15 年新審査員、平成 16 年会員
5	1995.04.00	～	現在	書写書道教育学会会員
6	2000.04.00	～	現在	書学書道史学会会員

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	高木 厚人	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所			開催日時	発表・展示等の内容等			
1	第 58 回書芸院役員展	大阪国際会議場			2004.00.00	題名「秋萩」縦への流れと横への拡がりの調和をはかった大字作品、書面の充実感を目ざした。(180cm×360cm)			
2	第 35 回臨地会書展	大阪国際会議場			2004.00.00	題名「花」小大二つの集団に散らしながらも文字群は四つに配し、作品における遠近の演出を試みた。(180cm×360cm)			
3	第 89 回書教展	東京都美術館			2004.07.00	題名「騒人」文字の集合と離散による立体感を演出した。(225cm×53cm)			
4	第 21 回読売書法展	東京都美術館			2004.08.00	題名「心」西行の和歌一首を二行構成でまとめた作品。潤渇二行の調和を試みた。(225cm×53cm)			
5	第 56 回千葉県展	千葉県立美術館			2004.10.00	題名「いろはIV」8 尺×4 尺の書面にいろはを 12 文字ずつ書いた連作の最終回、結びを感じる作をと努めた。			
6	第 36 回日展	東京都美術館			2004.11.00	題名「冬」和歌一首を二集団に散らした作。前半をしぼることで後半が大きく広がりを持つように試みた。(140cm×53cm×2縦)			
7	第 59 回書芸院役員展	大阪国際会議場			2005.00.00	題名「さざなみ」複雑な行と簡素な行とを組み合わせることで明るい空間を表現しようと試みた超大字作品。(180cm×360cm)			
8	第 36 回臨地会書展	大阪国際会議場			2005.00.00	題名「山の端」万葉歌二首を小大2集団に分けて散らした作。淡墨と渴筆を生かすことに心掛けた。(180cm×372cm)			
9	第 90 回書教展	東京都美術館			2005.07.00	題名「朝顔」俳句を素材に右下の主集団と左上の従集団とに散らした作。大小集団の間のとり方に神経を集中した。(225cm×53cm縦)			
10	第 22 回読売書法展	東京都美術館			2005.08.00	題名「風」和歌一首を二行の定型に表現した作。力強さと墨量変化による奥行きを持たせることを目標にした。(225cm×53cm縦)			
11	第 57 回千葉県展	千葉県立美術館			2005.10.00	題名「明石の浦」223cm×106cm の紙面に和歌一首を散らした作品。淡い墨色を生かし広い空間にダイナミックに展開した。			
12	第 37 回日展	東京都美術館			2005.11.00	題名「三吉野」西行の和歌二首を横形式に展開、中央の盛り上がりを演出するため前半は小さめに、結びは散らし統一感を模索した作。(70cm×180cm、横)			
13	第 60 回書芸院役員展	大阪国際会議場			2006.00.00	題名「明石の浦Ⅱ」ダイナミックな動きを表現しようと試みた作。(225cm×106cm縦)			
14	第 37 回臨地会書展	大阪国際会議場			2006.00.00	題名「秋」六曲屏風に和歌一首を展開、力強さを追った。			
15	第 91 回書教展	東京都美術館			2006.07.00	題名「朝顔」線に厚みと強さを込め密度の高い作品を目ざした。(225cm×53cm)			
16	第 23 回読売書法展	東京都美術館			2006.08.00	題名「西行のうた」西行歌二首を横形式に散らした作。			
17	第 58 回千葉県展	千葉県立美術館			2006.10.00	題名「夕月夜」右上(大)と左下(小)との二集団に散らしその調和を試みた。(225cm×106cm)			
18	第 38 回日展	東京都美術館			2006.11.00	題名「梢の花」複雑な行と簡素な行とを織り交ぜながら統一感が出るように演出した作。(70cm×170cm横)			

19	第 61 回書芸院役員展	大阪国際会議場	2007.00.00	題名「芭蕉四句」135cm×35cm の紙に芭蕉の句を一句ずつ4枚書き、それぞれの散らしの変化と統一を模索した。(135cm×35cm×4)
20	第 38 回臨地会書展	大阪国際会議場	2007.00.00	題名「西行六首」西行の和歌六首を一首ずつ散らし構成を変えながら屏風形式に展開、全体の調和を試みた。(50cm×36cm×6 六曲屏風)
21	第 92 回書教展	東京都美術館	2007.07.00	題名「天の河」原石鼎の句を放ち書きと連綿の対比を生かしながらまとめた。(225cm×53cm 縦)
22	第 24 回読売書法展	東京都美術館	2007.08.00	題名「さざ波」線の変化で作品を支えようと試みた作品。(70cm×145cm 横)
23	第 59 回千葉県展	千葉県立美術館	2007.10.00	題名「海」和歌一首を散らした作、墨色の明るさをねらった。
24	第 39 回日展	東京都美術館	2007.11.00	題名「古都情景」多数行の調和を考えて書いた作。(70cm×160cm 横)
25	第 62 回書芸院役員展	大阪国際会議場	2008.00.00	題名「春夏秋冬」俳句4句をそれぞれ半折に散らしながら4枚が全体で調和するように試みた。(135cm×35cm×4)
26	第 39 回臨地会書展	大阪国際会議場	2008.00.00	題名「はる」西行歌を11首横に展開、起承転結を意識して全体をまとめた作。(60cm×360cm)
27	第 93 回書教展	東京都美術館	2008.07.00	題名「西行六首」細字を横形式に展開、ゆったりとした空間をつくった。
28	第 25 回読売書法展	東京都美術館	2008.08.00	題名「万葉のうた」和歌一首を横形式に展開、中央部の広がりを表現した。(70cm×160cm)
29	第 60 回千葉県展	千葉県立美術館	2008.10.00	題名「潮騒」万葉歌一首を小大の二集団に散らし余白の大きさを演出しようと試みた作。(225cm×106cm)
30	第 40 回日展	東京都美術館	2008.11.00	題名「秋萩」90cm×180cm 横形式に和歌二首を展開、隙が出ないように線に厚みを出すことを心掛けた。

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	田中 裕昭	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業評価		2008.11.00		国際基督教大学授業評価 4.9 以上。			
2) 授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価に於いて高い評価を得た。楷書法 I ほか 4.9 以上。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 書道テキスト「楷書編」		2007.11.00		中国新出土の資料を入れ、解説は中国でのガイドを訳して付した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大東文化大学主催 高校生のための書道講座		2008.08.00		(2008 年 8、9 月－2009 年 5 月) 本講座で高校生の興味を高める指導を行ってきた。(熊本県、北海道、石川県など)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 書道テキスト (全 11 巻) 楷書編 大東文化大学書道研究所刊	共著	2007.02.01	二玄社	書道古典中の代表楷書名作についての図版の選定と解説。(全 61 ページ)			
論文							
1 墨躍る「田中節山展」図録	単著	2006.06.07	長野県飯田創造館	代表作品、新作等 64 点掲載 (全 58 ページ)			
その他							
1 講演「楽しく書く」	単	2005.05.16	長野県喬木小学校 5、6 年生に講演と実習				
2 講演「楷書の美」	単	2005.08.14	全日本書道連盟夏期講座				
3 講演とデモンストレーション「書体のうつり」	単	2005.11.25	全米書道展 (ロスアンゼルス日米会館)				
4	単	2006.05.13	長野県飯田創造館	漢字書道講習会講師 (5 月 13～14 日)「隷書の美」			
5 青森県高等学校総合文化学講演と審査	単	2006.10.23		県文化祭書道部門審査と出品者のための講演 (2006.10.23～24)			
6	単	2006.10.27	宮崎県高等学校書道連盟	高校生のための講習会講師 (11 月 27～28 日)「唐代の楷書」			
7 講師	単	2007.06.00	九州地区高等学校書道講習会	九州全県からの高校生に対して実施 (主催大東文化大学)「楷書の美」			

8	単	2007.10.00	秋田県高等学校総会文化祭講演	秋田県の高専から選抜の高専生の文化祭書道部門の展示作品講評講師
9	宮崎県高等学校書道連盟講習会	単	2008.06.17	高校生のための書道講座講師（2008.06.17～18）
10	九州全県高校生のための書道講座	単	2008.06.22	九州全県の高専生のための書道講座講師（主催 大東文化大学）

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1973.02.00	～	現在	謙慎書道会展漢字部門審査員
2	1977.07.00	～	現在	第1回読売書法展漢字部門審査員
3	1977.10.28			第二次日中友好書道訪中団北京…落陽…西安…上海 以後友好訪中、学術訪中合計 37回
4	1980.03.00			ヨーロッパ教育施設訪欧団フランス…イタリア…ギリシャ
5	1984.10.00	～	現在	日展（社団）依嘱（1991.10.00まで） 会員（1992.05.00～） 評議員（2008.04.01～）
6	1985.07.00	～	現在	高校生のための書道講座夏期書道講座（書道研究所主催）講師
7	1986.05.00	～	2008.05.31	飯田創造館漢字書道講習会長野県立飯田創造館講習会講師
8	1987.05.00	～	現在	全国書美術振興会（財団）理事
9	1988.07.00			日本の書展（海外展）デンマーク展出品「抱」デンマーク国立図書館買上げ
10	1991.09.00			静岡県美術祭書部門審査
11	1991.10.16			（社団）日展書部門審査
12	1994.11.00			山梨県芸術祭書部門審査
13	1995.02.06			諏訪大社全国競書大会書部門審査長
14	1995.03.11	～	現在	成田山全国競書大会書部門審査員
15	1996.12.00	～	現在	書象会理事長
16	1997.05.00			大分県美術協会展<5月>書一般公募部門審査、<10月>書役員部門審査
17	1997.09.00	～	現在	全日本書道連盟理事
18	1998.06.00			山形ふれあい県民書展書部門審査員
19	1999.05.01			99'世界書芸ヴェンナーレ展書部門招待出品と招待訪韓
20	1999.10.00			佐賀県美術展書部門審査員
21	2000.04.00			日中書法西安展招待出品
22	2000.10.14			徳島県美術展書部門審査員
23	2001.02.00	～	現在	読売書法会常任理事
24	2001.03.28			張裕釧陵園竣工式日中共同の顕彰活動の完成式に参加
25	2001.07.02			秋田さきがけ美術展書部門審査員
26	2001.10.18			（財団）日展書部門審査員

27	2002.06.04		日本の書展フランスパリ展出品とデモンストレーション（日本の書紹介）
28	2002.10.20		山梨県芸術祭展書部門審査員
29	2002.11.14		武蔵野市芸術祭書部門審査員
30	2003.07.29		富士市民文化祭書部門審査員
31	2004.02.00	～ 現在	読売書法会東京展実行委員
32	2004.02.17		宮崎県芸術祭書部門審査員
33	2004.04.01	～ 現在	謙慎書道会副理事長
34	2005.02.16		宮崎県芸術祭書部門審査員
35	2005.06.12		広島県美術展書部門審査員
36	2005.07.20		第21回読売書法展漢字部門審査員
37	2006.06.13		広島県美術展審査書部門審査員
38	2006.07.15	～ 現在	第24回読売書法展東京展実行委員長
39	2006.08.03		福岡県美術展覧会書部門審査員
40	2007.10.15		第39回日展第5科「書」部門審査員
41	2008.06.24		静岡県富士市展書部門審査員
42	2008.09.27		新潟県上越市展書部門審査員

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	田中 裕昭
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等
1	海外展帰国作品展			2004.05.00	第5回ユーロリション他 2004 年度海外展作品の帰国展を開催「空」他 20 点出品（於時事通信ホール）
2	飯田創造展			2004.05.00	飯田市立美術館主催「雨」（60×45 cm）を出品
3	キューバ美術賞展			2004.06.00	キューバ美術賞展主催世界美術クラブ「抱」（80×60 cm）を出品
4	下伊那の書展			2004.06.00	飯田下伊那書道協議会主催「花」（65×45 cm）を出品
5	第 44 回書象展			2004.07.00	理事長として出品「吾素剛急」（160×23 cm）
6	第 21 回読売書法展			2004.08.00	企画委員審査員として出品「中国遊記」より（70×180 cm）
7	日本の書展ブルガリヤ展 同ローマ展（移動展）			2004.10.00	全国書美術振興会主催ブルガリヤ展「筆翰如流」（136×35 cm）ローマ展「竿頭進歩」（136×35 cm）を出品
8	第 36 回日展			2004.11.00	会員としての出品「壮気毅然」（230×75 cm）
9	日本の書展代表展			2005.02.00	理事として出品「心順」（35×136 cm）
10	第 66 回謙慎書道会展			2005.03.00	副理事長として出品「世遠象聲田」（80×230 cm）
11	スペイン美術賞展			2005.04.00	「風」（68×100）他 1 点を役員出品
12	飯田創造展			2005.05.00	「吾有素心友」（35×138cm）を会員出品
13	下伊那の書展			2005.06.00	「龍」（50×65cm）を会員出品
14	第 44 回書象展			2005.07.00	「千邪不如一直」（23×138cm）を理事長として出品
15	第 22 回読売書法展			2005.08.00	「智深而勇沈」（50×240cm）を審査進行として出品
16	「愛・地球博」			2005.09.00	「花」（166×138cm）日本名家 35 選に依囑出品
17	第 13 回有象展			2005.10.00	「極處」（80×180cm）を主宰として出品
18	田中節山小品展			2005.10.00	「喬木」（52×35cm）他 13 点（於椋鳩十記念館）を出品
19	第 37 回日展			2005.11.00	「鼓腹擊壤」（75×230cm）を会員として出品
20	第 47 回有山社展			2006.01.00	「傍人有眼」（70×70cm）を会員として出品
21	第 34 回日本の書展			2006.02.00	「茶令人爽」（35×138cm）を理事として出品
22	第 68 回謙慎書道会展			2006.03.00	「松風」（78×234cm）を副理事長として出品
23	イタリア美術賞展			2006.04.00	「風」（63×100cm）、「雨」（70×90cm）を役員として出品

24	墨躍る「田中節山展」	2006.06.07	「夕月夜」(242cm×90cm) 「王維詩・新竹」(242×90cm) 「伊那節」(242×181cm) 「優游自適」(242×90cm) 「龍從雲虎從風」(242×181cm) 「花」(125×112.5cm) 「漢簡臨書」(250×85cm) 他54点を出品。長野県の要請によって開催。
25	第45回書象展	2006.07.04	「可楽在人和」(200×40cm)を理事長として出品。
26	第23回読売書法展	2006.08.13	「致中和」(180×78cm)を企画委員として出品。
27	第38回日展	2006.11.02	「直方廉潔」(242×82cm)を会員として出品。
28	フランス美術賞 天津展	2006.11.05	「氣」(220×85cm)を招待出品。
29	第48回 有山社展	2007.01.15	「獲我心」(70×70cm)を会員として出品
30	第68回謙慎書道会展	2007.02.28	「百川衆星」(240×90cm)を副理事長として出品
31	現代の創造展	2007.05.05	「魂」(60×60cm)を会員として出品。
32	第46回 書象展	2007.06.23	「市翼」(163×72cm)を理事長として出品
33	第39回 日本の書展	2007.06.23	「守正不撓」(135×35cm)を現代日本代表選に理事として出品
34	第24回 読売書法展	2007.07.22	「履潔」(163×70cm)を企画委員として出品。
35	下伊那の書展	2007.11.00	「花」(70×40cm)を会員として出品
36	第39回 日展	2007.11.01	「見賢思齊」(230×70cm)を審査員として出品。
37	日中文化人書法展	2007.12.09	中国北京開催「独坐不遷」(40×35cm)を招待出品
38	第49回 有山社展	2008.01.15	「心静興長」(60×60cm)を会員として出品
39	第70回 謙慎書道会展	2008.02.28	「敦厚純朴」(230×80cm)を同会副理事長として出品。
40	第36回 日本の書展	2008.06.11	「留餘慶」(138×35cm)を全国書美術振興会理事として出品。
41	第47回 書象展	2008.06.11	「展驥」(170×70cm)を書象会理事長として出品。
42	第25回 読売書法展	2008.08.20	「覆載」(170×70cm)を読売書法会常任理事として出品。
43	第32回 書象土曜会展	2008.10.01	「和光同塵」(70×23.5cm)を書象会理事長として出品。
44	第40回 日展	2008.10.29	「長慶」(180×93cm)を日展評議員として出品。
45	第32回 書壇巨匠展	2008.11.03	「天行健」(40×35cm)を招待出品。(主催書道新聞社)
46	第50回 有山社書展	2009.01.15	「心無累」(90×90cm)を有山社会員として出品。
47	第71回 謙慎書道会展	2009.02.28	「楽以和神」(230×80cm)を同会副理事長として出品。

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	教授	氏名	古谷 稔	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 「大東文化大学所蔵日本書跡解題」の監修および指導	2006.03.31	『書道学論集』3（大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌）に所収する未発表の本学所蔵品のうち（1）昭和切古今和歌集 藤原俊成筆（石丸真弥）、（2）右衛門切古今和歌集 伝寂連筆（島田昌広）の2件につき研究調査および論文作成の指導を行った。					
2) 「大東文化大学所蔵日本書跡解題」の監修および指導	2007.03.31	『書道学論集』4（大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌）に所収する未発表の本学所蔵品のうち（1）和歌短冊 大口周魚筆（2）和歌短冊 尾上柴舟筆（3）和歌短冊 若山牧水筆（4）和歌短冊 北原白秋筆（以上、高橋利郎）の4件につき研究調査および論文作成の指導を行った。					
3) 日本書道史演習学外見修「禅文化と書」研究	2007.08.01	日本書道史演習（ゼミ）所属学部3年生を対象に学外見修を行った。事前学習の上、第1日目に東京国立博物館で開催の特別展「京都五山禅の文化」展を見学、同日鎌倉の宿泊施設において「禅文化と書」について意見交換を行う。第2日目に鎌倉市内の円覚寺・建長寺などの禅寺および鎌倉国宝館を訪れ、鎌倉時代を中心とする禅文化の息吹きに触れる体験学習をし、各自レポートにまとめさせた。					
4) 「大東文化大学所蔵日本書跡解題」の監修および指導	2008.03.31	『書道学論集』5（大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌）に所収する未発表の本学所蔵品のうち（1）和歌短冊 高崎正風筆（2）和歌短冊 前田夕暮筆（3）和歌短冊 内藤湖南筆（4）和歌短冊 新村重山筆（以上、高橋利郎）の4件につき研究調査および論文作成の指導を行った。					
5) 「大東文化大学所蔵日本書跡解題」の監修および指導	2009.03.31	『書道学論集』6（大東文化大学大学院書道学専攻院生会誌）に所収する未発表の本学所蔵品のうち、本阿弥光悦書状5月27日付（根本知）の1件につき研究調査および論文作成の指導を行った。					
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『書道史年表事典』（書学書道史学会編・萱原書房）	2007.10.01	本書は2005.10.1の改訂版で、日本・中国・朝鮮の書道史が一望できるように各国の書道史年表を基盤に据え、各時代を構成する主要な遺品および用語を平易明解に解説を加えたもの。共著。古谷は、本書において「日本書道史概説」のほか、草仮名・三跡・散らし書き・寄合書などの用語、および「秋萩帖」など9件の作品解説を担当した。豊富な図版を参考に、年表と対比しながらの学習は、書道史を理解する上に不可欠であり、2008年度より「日本書道史」および「日本書道史演習」の授業で教科書として採用することとした。					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) かな古筆の見かた その1ー草がな	2006.06.17	大東文化大学オープンカレッジ春期講座「大東書道学」における講義					
2) かな古筆の見かた その2ー平がな	2006.06.24	大東文化大学オープンカレッジ春期講座「大東書道学」における講義					
3) 書の美とは	2007.07.27	書道研究所主催の「高校生のための書道講座」における講演。					
4) 『修了論文、修了作品 研究集録』の監修	2009.03.31	平成19年度 大東文化大学大学院文学研究科書道専攻博士課程前期課程4期生による修了論文概要および修了作品の成果と研究集録としてまとめ、監修を行った。					

II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 中国書法を基盤とする日本書道史研究	単著	2008.01.10	竹林舎	長年にわたり研究の対象としてきた日本書道史関係の論考を再構築し、古代から近世までの書の流れを概括的に展望できるように構成したもので、日本書道史研究の方法を提起した。大東文化大学特別研究費（研究成果刊行助成金）交付出版。全670頁。
論文				
1 「秋萩帖」に見る和漢の世界	単	2005.03.16	『書道文化』創刊号（四国大学書道文化学会）	2004年11月28日における四国大学書道文化学会大会記念講演の概要に補筆したもの。13～20頁
2 古筆手鑑「披香殿」所収古筆切再考	単	2005.03.31	『川崎市市民ミュージアム紀要』第17集	『古筆手鑑 披香殿』（古谷稔監修・淡交社刊・平成11年3月刊）に所収の伝源俊頼筆「和歌集断簡」の出典について再考し、「近江御息所歌合断簡」と判明、同時に本断簡は『二十卷本類聚歌合』所収の原本そのものを書写した転写本と考察した。さらに本断簡の下絵に注目、それらが本手鑑作成時の補筆であることも推考した。1～14頁
3 男手と女手の競演－『万葉集』の古筆のみかた－	単	2005.03.31	『高岡市万葉歴史館紀要』第15号	平安時代の『万葉集』書写本の特質として、男手（万葉仮名）と女手（平仮名）の対照的な書体が、同一紙面に見事に調和する姿をとらえながら、『万葉集』の古筆の見方を提示したもの。43～55頁。
4 後鳥羽院宮廷書道と「熊野懐紙」	単著	2006.02.20	霞会館・『熊野懐紙』（霞会館編）	現存する鎌倉初期の「熊野懐紙」全35枚を考察の上、集大成し、書道史上に位置付けた。18-36頁、39～79頁（釈文）、80～82頁（伝記）。
5 王羲之書法と小野道風の書	単	2006.09.00	春日井市道風記念館	秋の特別展「王羲之と小野道風」（春日井市道風記念館主催）カタログ概説
6 「和」と「漢」を結ぶもの－「粘葉本和漢朗詠集」の世界－	単著	2008.04.01	成田山新勝寺	平成20年に開山1070年を迎えた成田山新勝寺が刊行した『書と文化』に収録されたもの。完成された和様書道の代表的遺品「粘葉本和漢朗詠集」の中で漢字と仮名が見事に調和した美意識を考察した。191～201頁。
7 「日本の書流と「家」－春日権現験記絵を中心に－	単著	2008.08.29	「東アジア三大学国際シンポジウム論文集」編集委員会	2008年9月に大東文化大学で行われた第二回東アジア三大学（山東大学、成均館大学、大東文化大学）の国際シンポジウム論文集『東アジアにおける「家」－伝統文化と現代社会－』に収録された研究発表の論文である。
8 「日本書道史から見た貫名菘翁の書」	単著	2008.10.11	徳島県立文学書道館	書道特別展『生誕二三〇年記念 貫名菘翁展－阿波に伝わる菘翁の書画－』図録に収録の論文である。
その他				
1 藤原佐理の書	単	2004.05.09	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演。
2 日本の書道文化	単	2004.05.13	東松山きらめき市民大学（東松山市）	東松山きらめき市民大学における講演
3 源兼行の書	単	2004.07.11	野口英世記念会館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
4 本阿弥光悦の書	単	2004.09.05	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
5 和の心－書の文化継承に向けて－	単	2004.11.06	第15回書学書道史学会大会記念シンポジウム基調講演（東京大学）	書の活性化を考えるべき今日において、日本の伝統文化に潜在する「和」の心を基盤に新鮮な美を開発することこそ、世界に発信できる日本の「書」が生まれることを力説したもの。
6 「秋萩帖」に見る和漢の世界	単	2004.11.28	第1回四国大学書道文化学会大会記念講演（四国大学交流プラザ）	現存する「秋萩帖」1巻の表裏に展開する3人の筆者による書風および書体の状況を考察し、そこに和漢の世界が見出せる点を指摘したもの。
7 良寛の書	単	2005.02.20	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演

8	奈良時代の書 一聖武天皇と光明皇后	単	2005.06.19	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
9	平安時代の書（1） 一空海と嵯峨天皇	単	2005.08.14	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
10	平安時代の書（2） 一小野道風と藤原行成	単	2006.01.15	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
11	鎌倉時代の書 一藤原俊成と藤原定家	単	2006.03.12	野口英世記念館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
12	書の文化を楽しむ	単	2006.05.21	東京国立博物館（東方書道院）	東方書道院講演会（第五十回記念）における講演
13	漢字の手紙一空海と最澄	単	2006.06.11	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
14	三跡と『白氏文集』	単	2006.08.13	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
15	王羲之と小野道風の書	単	2006.10.01	春日井市道風記念館（春日井市道風記念館）	特別展「王羲之と小野道風」の講演会における講演
16	装飾経一「平家納経」を中心に	単	2006.10.08	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
17	仮名消息と散らし書き	単	2007.03.11	東京国立博物館（書芸文化院）	平安書道研究会（書芸文化院主催）における講演
18	「日本の書流と「家」 一春日権現験記絵を中心に」	単著	2008.09.17	第二回東アジア三大学国際シンポジウム第二部文学・芸術に現れた「家」一研究発表	9月17日に大東文化大学で研究発表を行った。日本の代表的絵巻である「春日権現験記絵」の詞書が、撰閲家である鷹司家一族親子によって執筆され、それらが日本書道史上の一つの書流としてとらえられる点を指摘した。
19	「貫名菘翁の書」	単著	2008.11.02	徳島県立文学書道館	書道特別展『生誕二三〇年記念 貫名菘翁展一阿波に伝わる菘翁の書画一』記念講演会。
20	近代日本の書を観る眼	単著	2009.03.10	『出版ダイジェスト』2150号	『日本の書〔維新～昭和初期〕』（成田山書道美術館編）の書評。近代日本書道の見方を提示したもの。

III 学会等および社会における主な活動

1	1967.00.00	～	現在	美術史学会会員
2	1988.00.00	～	現在	日本歌謡学会会員（1998.00.00～2006.03.00 評議員）
3	1996.05.00	～	現在	財団法人三井文庫評議員（現在に至る）
4	1999.00.00	～	現在	書学書道史学会会員（2000.11.18～2002.03.31 理事、2002.04.00～ 2006.03.00 常任理事・国内局長、2006.04.00～現在 理事長）
5	2003.02.00	～	現在	徳島県立文学書道館書道資料収集委員会委員（現在に至る）
6	2004.09.01	～	現在	財団法人畠山記念館評議員（現在に至る）
7	2005.04.01	～	現在	春日井市道風記念館顧問（現在に至る）

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	准教授	氏名	高木 茂行	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 古代文字レスンブック		2004.12.10	可成屋	古代文字を芸術表現する為の指導書 総頁数 112 頁		
2 楊峴の書法	単	2006.03.10	二玄社	楊峴の書を余すところなく集録し、清朝の隸書、行草書を解明する重要な手引書。総頁数 270 頁		
3 古典名句を書く「篆書篇」	単	2006.08.10	可成屋	古代文字を使用し古典名句を芸術表現し、古代を現代に蘇生させた指導書。総頁数 80 頁		
4 高校教科書「書 I」	共	2007.02.05	光村図書出版	共著者 井茂圭洞、金子卓義、高木茂行、宮沢正明、斎藤ますみ、横田恭三、漢字部を担当 総頁数 118 頁		
5 書道テキスト、第八巻 行草書	単	2007.04.10	大東文化大学書道研究所編	前漢から清朝までの行草書を完全なまでに掲載し、書作を目標とすべき人の必携書 総頁数 129 頁		
6 楊伯潤の書画	単	2007.12.03	郁文社	中国清朝の代表的作家楊伯潤の書画 50 点を掲載 その変歴を調査したもの 62 頁		
7 漢字書道入門	単	2008.04.30	芸術新聞社	漢字楷書の基本から学ぶレッスン本。初心者に書道に親しんでもらうもの 93 頁		
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1988.07.00	～	現在	読売書法会理事。常任理事 (2001 年 2 月～)。常任理事 事務長 (2004 年 12 月～)。		

2	1989.06.00	～	現在	謙慎書道会常任理事。常任理事 事務局長（2004年5月～2009年12月）。
3	1993.03.00	～	現在	成田山書道美術館企画委員
4	1995.06.00	～	現在	社団法人日展委嘱。審査員（2001年5月）（2006年5月）。会員（2002年3月～）。
5	2001.05.00	～	現在	（財）全国書美術振興会理事
6	2001.05.00	～	現在	（社）全日本書道連盟評議員 2009年5月14日～現在理事
7	2008.01.02	～	現在	朝日新聞社主催 現代書道20人展に出品

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	准教授	氏名	高木 茂行	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	現代書道 20 人展	上野松坂屋、名古屋松坂屋、大阪高島屋		2009.01.02	(2009年1月2日～10日 以下略) 現代作家 20 人で壁面 5m50cm を与えられ 4 点発表する。	
2	第 26 回郁文社展	中国杭州 西湖美術館		2009.03.10	(2009年3月10日～15日) 高木の主宰するグループ展	

(表 24)

所属	文学部書道学科		職名	准教授	氏名	高城 弘一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
1 平安かなの美	単著	2004.10.00	二玄社		A4 版 総 158 頁 [監修] 村上翠亭		
2 『古筆切の基礎的研究』	単著	2008.11.00	こうぼく堂				
論文							
1 古筆・古筆切と国文学	単著	2005.03.00	學燈社『國文學 解釈と教材の研究』4月号第722号		A5 版 7 頁 13~19		
2 伝紀貫之筆「寸松庵色紙」に見る付着鏡文字考	単著	2005.03.00	大東文化大学書道研究所『大東書道研究』第12号		B5 版 21 頁 56~76		
3 古筆と『古今和歌集』	単著	2006.03.00	大東文化大学書道学会『大東書学』第6号		A5 版 17 頁 33~49		
4 かなの空間 (文字と余白)「香紙切」筆跡分類の場合	単著	2007.08.00	學燈社『『國文學 解釈と教材の研究』8月号臨時増刊号 第52巻10号		A5 版 8 頁 40~47		
その他							
1 新出「香紙切」二種二葉考	単	2004.11.00	第15回書学書道史学会東京大会 会場: 東京大学		口頭発表		
2 古筆手鑑『かりがね帖』の構成	単著	2005.03.00	大東文化大学書道学会『大東書学』第5号		A5 版 17 頁 48~64		
3 新出「香紙切」第二種に見る仮名「楚(そ)」	単著	2005.03.00	國學院大學若木書法會『若木書法』第4号		A5 版 2 頁 48~49		

4	「古筆と極め」展 講演：古筆と『古今和歌集』	共単	2005.04.21	会期：平成 17 年 4 月 21 日～7 月 10 日 講演：6 月 4 日 茶道資料館	〔監修〕村上翠亭
5	古筆と『古今和歌集』	単著	2005.07.00	大東文化大学広報部『大東文化』3 月号	B4 変形版 一面部分
6	日本・中国・朝鮮 書道史年表事典	共著	2005.09.00	書学書道史学会 萱原書房	新書版 11 項目 13 頁担当〔共著〕新井儀平他 36 名
7	「古今和歌集切」の写しー「高野切第一種」写し三葉の紹介ー	単著	2005.12.00	岩波書店 浅田徹他編『和歌をひらく』第 2 巻「和歌が書かれるとき」〈コラム 5〉	A5 版 3 頁 243～245
8	古筆と『古今和歌集』（講演会抄録）	単著	2006.03.00	茶道資料館 茶道資料館友の会会報『茶窓』第 3 号	A4 版 3 頁 5～7
9	栗原蘆水氏蔵古筆切調査一覧	共著	2006.03.00	大東文化大学書道研究所『大東書道研究』第 13 号	B5 版 36 頁 134～169〔共著〕村上翠亭他 2 名
10	新出「荒木切」の位置	単著	2006.03.00	國學院大學若木書法會『若木書法』第 5 号	A5 版 2 頁 56～57
11	古筆学から見た手鑑ー手鑑所収「香紙切」の場合ー	単著	2006.04.00	おうふう鶴岡八幡宮悠久事務局『悠久』第 105 号	A5 版 13 頁 53～65
12	「日本の書」展	単	2006.04.08	会期：平成 18 年 4 月 8 日～5 月 21 日 列品解説：会期中 2 回 ふくやま書道美術館	
13	平成 18 年度書壇院文化講演会 手鑑とその周辺	単	2006.06.11	東京都近代美術館講堂 主催：書壇院	
14	「香紙切」の古筆学的研究	単著	2006.09.00	新典社 久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究ー物語絵と古筆切を考える』	A5 版 29 頁 417～445
15	古筆分家とその鑑定	単	2006.11.00	平成 18 年度大東文化大学人文科学研究所研究班報告会 会場：大東文化大学板橋校舎	口頭発表
16	身近なオモシロ仮名	単著	2007.03.00	大東文化大学書道学会『大東書学』第 6 号	A5 版 10 頁 32～41
17	略字「広」の使用	単著	2007.03.00	國學院大學若木書法會『若木書法』第 6 号	A5 版 2 頁 88～89
18	古筆手鑑ー栗原コレクションー 作品解説	単著	2007.03.00	ふくやま書道美術館 ふくやま書道美術館所蔵品図録 VI	A4 版 29 頁 84～112
19	講演：楽しい日本の書のお話	単	2007.07.14	平成 19 年 7 月 14 日～7 月 15 日 徳島県立文学書道館	
20	特別講義：西行の仮名	単	2008.02.25	千葉県立市川南高等学校	対象：1 年生書道選択者一部
21	新出の女子用往来物『女用玉章袋』	単著	2008.03.00	実践女子短期大学『実践女子短期大学紀要』第 29 号	B5 版 11 頁 259～269
22	「手鑑の見方、楽しみ方」		2008.10.20	「サンリツ服部美術館の名筆仮名と墨蹟」展 二〇〇八年度美術史入門連続講座ー書之美を読み解くー第二回講演、同館講堂	講演
23	「明治三十三年「小学校令」以前の仮名統一と諸問題」		2008.11.29	第十九回書学書道史学会大会研究発表、神戸大学国際文化学部 K-202 教室	

24	「仮名の世界 身近な変体仮名」	2009.01.00	第一回～第三回、『月刊書写書道』通巻213～215、財団法人日本武道館、2009年1月～3月	
25	「古筆の散らし書き」	2009.02.00	『墨』新装二号196号、芸術新聞社	
26	『缶詰ラベル博物館』未載の缶詰食材	2009.03.00	『実践女子短期大学紀要』実践女子短期大学	資料紹介
27	「伝称筆者」	2009.03.00	『決定版 日本書道史』所収コラム、芸術新聞社	

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.00	～	現在	東京都北区青少年十条地区委員
2	1990.04.00	～	現在	東京都北区青少年委員
3	1991.04.00	～	現在	かな書道研究菫の会会長
4	1992.04.00	～	現在	書学書道史学会会員
5	1993.04.00	～	現在	全国大学国語国文学会会員
6	1996.04.00	～	現在	書学書道史学会幹事
7	1996.04.00	～	現在	國學院大學國文學会会員、委員（1998.04.00～）、常任委員（1998.04.00～2002.03.00）、会計（2000.04.00～2002.03.00）
8	1997.00.00	～	現在	國學院大學オープンカレッジ講師（対象：一般、かな書道実習）
9	2000.11.00	～	現在	東アジア比較文化国際会議会員
10	2001.04.00	～	現在	読売書法会幹事
11	2001.05.00	～	現在	東京都北区立王子第三小学校評議員

(表 24)

所属	文学部書道学科	職名	講師	氏名	日賀野 琢	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『張猛龍碑について』(張猛龍碑)		2005.01.00		「条幅臨書研究科」(月刊書道研究誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行) 平成 17 年 1 月号 2 頁			
2) 曹全碑 (研究科解説・連載)		2005.07.00		「半紙臨書研究科」(月刊書道研究誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行) 平成 17 年 7 月～18 年 6 月 10 頁			
3) 『王羲之一書の普遍性』(集字聖教序)		2006.04.00		「条幅臨書研究科」(月刊書道研究誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行) 平成 18 年 4 月号 2 頁			
4) 平成 19 年度版高等学校『書 I』指導書 (光村図書出版株式会社)		2006.04.00		楷書半紙臨書揮毫例 8 点掲載			
5) 「条幅臨書研究科」(月刊競書誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行)		2007.01.00		『木簡・竹簡・帛書の臨書学習』平成 19 年 1 月号 2 頁			
6) 「条幅臨書研究科」(月刊書道研究誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行)		2008.01.00		『孟法師碑』平成 20 年 1 月号 2 頁			
7) 『大東書道』平成 20 年 3 月号 (大東文化大学書道研究所発行)		2008.03.00		隷書課題参考手本揮毫			
8) 平成 21 年度版高等学校『書Ⅲ』教科書 (光村図書出版株式会社)		2008.04.00		漢字仮名交じりの書作例 (『楚帛書』を基調とした作例) 1 点掲載			
9) 『大東書道』平成 20 年 6 月号 (大東文化大学書道研究所発行)		2008.06.00		楷書課題参考手本揮毫			
10) 「半紙臨書研究科」(月刊競書誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行)		2008.07.00		『曹全碑』(研究科解説・連載) 10 頁 平成 20 年 7 月～21 年 6 月			
11) 『大東書道』平成 21 年 1 月号 (大東文化大学書道研究所発行)		2009.01.00		隷書課題参考手本揮毫			
12) 「条幅臨書研究科」(月刊競書誌『臥龍』、書道研究臥龍会発行)		2009.01.00		『蘭亭叙を学ぶ』2 頁			
13) 『大東書道』平成 21 年 3 月号 (大東文化大学書道研究所発行)		2009.03.00		楷書課題参考手本揮毫			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 高校生のための書道講座<本校編> (主催/大東文化大学書道研究所)		2007.08.00		楷書担当 2 コマ、隷書担当 2 コマ			
2) 高校生のための書道講座<沖縄編> (主催/大東文化大学書道研究所)		2008.05.19		隷書担当 (沖縄県浦添市てだこホール)			
3) 高校生のための書道講座<本校編> (主催/大東文化大学書道研究所)		2008.07.30		楷書担当 2 コマ、隷書担当 2 コマ (大東文化大学板橋キャンパス)			
4) 大東文化大学オープンキャンパス体験授業 (主催/大東文化大学入試課)		2008.10.18		初歩の隷書学習 1 コマ (大東文化大学東松山キャンパス)			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 『書と文字の文化史』		2005.02.00		放送大学 栃木学習センター面接授業 集中講義			

2) 『篆書・隸書の指導法－現場での実践法』	2006.05.00	栃木県青年書作家協会 講演会
3) 大東書道講座 (主催/大東文化大学書道研究所)	2007.08.00	篆書・隸書担当 2 コマ
4) 「書道 (篆書・隸書)－古代文字に親しむ」	2008.05.00	大東文化大学オープンカレッジ (主催/大東文化大学地域連携センター) 全 7 回
5) 栃木日展作家展アーティストトーク (主催/栃木日展作家の会・さくら市ミュージアム)	2009.01.11	作品解説とミニ講演 (栃木県さくら市ミュージアム)
6) 栃木県高等学校教育研究会書道部会講演会 (主催/栃木県高等学校教育研究会書道部会)	2009.01.22	『宇高卒の奇才－伊藤伸－その人と書』(栃木県立宇都宮高等学校書道室)

II 研究活動

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)
著書 1 『珠玉のミニアチュア－那須国造碑』(特集「日本の金石 [2]」続・古代日本の碑)	単著	2005.01.00	特集記事執筆・揮毫 (季刊書文化情報誌『書・21』、匠出版発行) 平成 17 年 1 月 (19 号)	2 頁
論文 1 「表現としての臨書－権量銘を素材に」	単著	2008.04.00	『大東書道研究』(大東文化大学書道研究所発行)	兼任研究員 3 頁 作品掲載『権量銘』66×96cm
2 「紙面形態と表現効果」	単著	2009.04.00	『大東書道研究』(大東文化大学書道研究所発行)	兼任研究員 4 頁 作品掲載『匡衡詩』80×80cm
その他				

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.00	～	現在	書学書道史学会会員
2	1990.04.00	～	現在	書道研究臥龍会同人理事審査員
3	1994.06.00	～	現在	謙慎書道会会員 (1994 年 6 月～理事、2000 年 6 月～現在常任理事、2002 年 2 月、2005 年 2 月、2008 年 2 月審査員)
4	1996.02.00	～	現在	読売書法会会員 (1996 年 2 月～評議員、2001 年 2 月～幹事 (旧評議員)、2003 年 2 月～理事、2009 年 2 月～現在 常任理事)
5	1997.05.00	～	現在	宇都宮市民芸術祭運営委員・審査員
6	1997.08.00	～	現在	全日本書道連盟正会員
7	1998.05.00	～	現在	栃木県青年書作家協会会員 (1998 年 5 月～副理事長、2003 年 5 月～現在 副会長)
8	1999.10.00	～	現在	栃木県芸術祭実行委員 (2000 年、2003 年、2006 年、2007 年)
9	2000.08.00	～	現在	下野の書展代表作家
10	2001.10.00	～	現在	栃木県芸術祭審査員 (2004 年、2008 年)
11	2002.05.00	～	現在	栃木県書道連盟理事
12	2005.03.00	～	現在	日展会友
13	2009.05.00	～	現在	全日本書道連盟事務局次長

(表 25)

所属	文学部書道学科	職名	講師	氏名	日賀野 琢	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	『蘇東坡詩』	第 25 回宇都宮市民芸術祭美術展書道部門 (主催/宇都宮市・宇都宮市教育委員会 宇都宮市文化会館)		2004.06.00	運営委員 228×77cm	
2	『高橋渡の詩』(調和体)	第 21 回読売書法展 (主催/読売新聞社 東京都美術館)		2004.08.00	理事 69×170cm	
3	『陸游詩』	第 58 回栃木県芸術祭美術展書道部門 (主催/栃木県・栃木県文化協会 栃木県総合文化センター)		2004.10.00	招待 (審査員) 135×35cm	
4	『劉望詩』	第 36 回日展 (主催/社団法人日展 東京都美術館)		2004.11.00	入選 232×53cm	
5	『雞晨』 『萌女・翔瑛・咲花・智菜』	第 10 回栃木の書壇 50 人展 (主催/下野新聞社、県内選抜展 栃木県総合文化センター)		2005.01.00	選抜 90×120cm 25×33×4 cm	
6	『趙甌北詩』	第 33 回日本の書展 (主催/財団法人全国書美術振興会 銀座画廊美術館)		2005.02.00	招待 81×81cm	
7	『王安石詩・題齊安壁』	第 67 回謙慎書道会展 (主催/謙慎書道会 東京都美術館)		2005.02.00	常任理事 (審査員) 228×77cm	
8	『王安石詩・題齊安壁』	第 26 回宇都宮市民芸術祭美術展書道部門 (主催/宇都宮市・宇都宮市教育委員会 宇都宮市文化会館)		2005.06.00	審査員・運営委員 228×77cm	
9	『芥塵』(調和体)	第 22 回読売書法展 (主催/読売新聞社 東京都美術館)		2005.08.00	理事 69×170cm	
10	『劉秉忠詩』	第 37 回日展 (主催/社団法人日展 東京都美術館)		2005.11.00	入選 232×53cm	
11	『不立文字』	TOYOTA自動車 レクサス 公式ホームページ		2005.11.00	文字揮毫	
12	『劉望詩・九嶷山』	洪水書展 (主催/洪水文会、銀座画廊美術館)		2006.01.00	平成 18 年 1 月第 1 回展出品	
13	『勵令猷』 『大地・涼吉・琉作・亮太』	第 11 回栃木の書壇 50 人展 (主催/下野新聞社、県内選抜展 栃木県総合文化センター)		2006.01.00	選抜 75×162cm 25×33×4 cm	
14	『蘇東坡詩』	第 34 回日本の書展 (主催/財団法人全国書美術振興会 銀座画廊美術館)		2006.02.00	招待 81×81cm	
15	『蕭立之詩』	第 68 回謙慎書道会展 (主催/謙慎書道会 東京都美術館)		2006.02.00	常任理事 232×53cm	
16	『蕭立之詩』	第 27 回宇都宮市民芸術祭美術展書道部門 (主催/宇都宮市・宇都宮市教育委員会 宇都宮市文化会館)		2006.06.00	運営委員 232×53cm	
17	『周啓の詩』(調和体)	第 23 回読売書法展 (主催/読売新聞社 東京都美術館)		2006.08.00	理事 69×171cm	
18	『蕭立之詩』	第 60 回栃木芸術祭美術展書道部門 (主催/栃木県・栃木県文化協会 栃木県総合文化センター)		2006.10.00	招待 (実行委員) 232×53cm	
19	『寂蓮詩』	第 38 回日展 (主催/社団法人日展 東京都美術館)		2006.11.00	特選 232×53cm	
20	『丕顯徳』	洪水書展 (主催/洪水文会、銀座画廊美術館)		2007.01.00	平成 19 年 1 月第 2 回展出品	

21	『駭耳』 『華麗・御具四・千年家・柳庵』	第12回栃木の書壇50人展(主催/下野新聞社、県内選抜展 栃木県総合文化センター)	2007.02.00	選抜 90×120cm 25×33×4cm
22	『蔡沈詩』	第69回謙慎書道会展(主催/謙慎書道会 東京都美術館)	2007.02.00	常任理事 75×162cm
23	『張湛詩』	第35回日本の書展(主催/財団法人全国書美術振興会 国立新美術館)	2007.06.00	招待 81×81cm
24	『宝珣の詩』(調和体)	第24回読売書法展(主催/読売新聞社)	2007.08.00	理事 170×69cm
25	『臨濟録・示衆』	第61回栃木芸術祭美術展書道部門(主催/栃木県・栃木県文化協会 栃木県総合文化センター)	2007.10.00	招待(実行委員) 162×39cm
26	『陸士龍詩』	第39回日展(主催/社団法人日展 国立新美術館)	2007.11.00	無鑑査 232×53cm
27	『査慎行詩・自怡園』	洪水書展(主催/洪水文会、銀座画廊美術館)	2008.01.00	平成20年1月第3回展出品
28	『老子一節』 『才人・心響・奏太・夕奈』	第13回栃木の書壇50人展(主催/下野新聞社、県内選抜展 栃木県総合文化センター)	2008.02.00	選抜 228×77cm 25×33×4cm
29	『査慎行詩・自怡園』	第70回謙慎書道会展(主催/謙慎書道会 東京都美術館)	2008.02.00	常任理事(審査員) 228×77cm
30	『齊寵辱』	第32回謙慎書道会東部展(主催/謙慎書道会東部展実行委員会 福島県文化センター)	2008.05.00	常任理事 61×81cm
31	『文同詩・歩月』	第43回猗園書展(主催/猗園文会 銀座画廊美術館)	2008.05.00	準会員 162×40cm
32	『匡衡詩』	第36回日本の書展(主催/財団法人全国書美術振興会 国立新美術館)	2008.06.00	委嘱 81×81cm
33	『薛濤の詩』(調和体)	第25回読売書法展(主催/読売新聞社 国立新美術館)	2008.08.00	理事 170×69cm
34	『文同詩・歩月』	第62回栃木県芸術祭美術展書道部門(主催/栃木県・栃木県文化協会 栃木県総合文化センター)	2008.10.00	審査員招待出品 162×40cm
35	『蘇東坡詩』	第40回日展(主催/社団法人日展 国立新美術館)	2008.11.00	特選 232×53cm
36	『順天』	第1回宇都宮文化協会書道展(主催/宇都宮市文化協会宇都宮文化会館)	2008.12.00	会員出品 70×135cm
37	『千巖春』	第4回洪水書展(主催/洪水文会 銀座画廊美術館)	2009.01.00	会員出品 66×96cm
38	『王安石詩・題齊安壁』	第71回謙慎書道会展(主催/謙慎書道会東京都美術館)	2009.02.00	常任理事 232×53cm
39	『査慎行詩・自怡園』『陸人・奏樂・蒼太・亜穹』	第14回栃木の書壇50人展(主催/下野新聞社、県内選抜展 栃木県総合文化センター)	2009.02.00	選抜 228×77cm 25×33×4cm
40	『天竈墨』	第33回謙慎書道会東部展(主催/謙慎書道会東部展実行委員会 水戸県民文化センター)	2009.05.00	常任理事 61×81cm
41	『陳與義詩・山齋』	第44回猗園書展(主催/猗園文会 銀座画廊美術館)	2009.05.00	準会員 162×40cm

経済学部

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科		職名	教授	氏名	石垣 信浩	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							
1 19世紀ボルジヒ企業における垂直的統合の過程	単著	2005.03.25	大東文化大学経済論集第84号		19世紀の30年代に設立されたアウグスト・ボルジヒの工場は、蒸気機関車製造部門、一般機械製造部門、製鉄・圧延部門、鑄造・鍛造部門等から成り立っていた。本論文では、これらの各部門がアウグスト・ボルジヒのもとで原料、中間材、完成品に至るまで垂直的に統合経営されていた過程を考察した。		
2 アルベルト管理下のボルジヒ企業(1854年7月～1878年4月)	単著	2007.03.25	大東文化大学経済論集第88号		アウグスト・ボルジヒの死後、経営を引き継いだアルベルト・ボルジヒは、父アウグストが未完のままに終わらせた企業の垂直的統合を完成させた。アルベルトは特に蒸気機関車製造工場の生産能力を一気に高め、同工場を世界最大級の工場に育てあげた。		
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1970.04.00	～	2009.03.00	社会経済史学会会員			
2	1973.04.00	～	2009.03.00	経営史学会会員			
3	1973.06.00	～	2009.03.00	ドイツ資本主義研究会会員			

4 1984.10.00 ~ 2009.03.00

政治経済学・経済史学会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	加藤 瑛子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1961.00.00 ~ 現在		土地制度史学会				

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	加藤 正昭	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 「経済学によく出てくる数学」-大東文化大学岡村宗二教授と共同執筆	共	2006.09.25	同文館出版	経済学で用いられる数学の教科書		
論文 1 「公的信用保証の経済学」-大東文化大学岡村宗二教授と共同執筆	共	2007.03.00	経済研究第 20 号 (大東文化大学経済研究所)	公的信用保証に関する学術論文		
その他 1 「中小企業融資に対する公的信用保証の制度的役割と政策提言」	共	2006.05.28	学会記録一般発表	日本経済政策学会 (九州共立大学) における報告論文 (討論者は横浜国立大学教授三井逸友先生) -大東文化大学岡村宗二教授と共同執筆		
III 学会等および社会における主な活動						
1			金融学会会員			
2			日本経済学会会員			
3			日本経済政策学会会員			

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	近藤 正臣	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『通訳の仕事がわかる本』		2005.06.30	法学書院 「Part 2 通訳者に求められるもの」(22～53 ページ)、「Part 5 通訳者になるには」(208～245 ページ) 通訳者になりたいとの抱負をもつ学生に、そのために何が必要とされ、どのように勉強したらいいかを述べる。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) リック・ハーバー教授講演会「アメリカから見た中国経済」		2004.06.00	大東文化大学 テーマは中国研究 逐次通訳				
2) ストコール氏講演会「オーストラリアにおける多文化主義」		2004.06.00	大東文化大学 テーマはオーストラリア研究 逐次通訳				
3) グラフ教授セミナー、シンポジウム「ナチスとキリスト教神学」		2004.11.00	聖学院大学 テーマは神学 逐次通訳				
4) 国際宗教学会東京大会、分科会 O 4A「近代日本の宗教と社会」		2005.03.26	聖学院大学 テーマは宗教学 逐次通訳				
5) リック・ハーバー教授講演会「中国経済の現状」		2005.05.00	大東文化大学 テーマは経済 逐次通訳				
6) ストコール氏講演会「日豪関係の歴史」		2005.05.00	大東文化大学 テーマはオーストラリア研究 逐次通訳				
7) スロバキア大使講演会「スロバキア文化の伝統と音楽」		2005.06.00	大東文化大学 テーマは音楽 逐次通訳				
8) シュベール教授講演会、シンポジウム		2005.10.00	聖学院大学 テーマは神学 逐次通訳				
9) 国際シンポジウム「戦後 60 年——ドイツと日本」(日本におけるドイツ年)		2005.10.29	聖学院大学・FES テーマは政治・宗教学 同時通訳				
10) テクニカル・セミナー IWCC(国際伸銅協議会)2005年11月14-15		2005.11.14	IWCC(国際伸銅協議会) テーマは伸銅 同時通訳				
11) グッドウィン・リュウ教授「アメリカにおける教育法・政策の発展」		2006.03.00	大東文化大学法務大学院 テーマは教育学 逐次通訳				
12) 国際シンポジウム「北欧福祉国家における公共サービス改革」		2006.03.00	北海道大学 テーマは福祉国家論 同時通訳				
13) ストコール氏講演会「構造改革——オーストラリアの場合」		2006.05.00	大東文化大学 テーマはオーストラリア研究 逐次通訳				
14) ウィッテ教授講演会・セミナー「アメリカ建国期の信教の自由、教会と国家の分離について」		2006.06.00	聖学院大学 テーマは神学 逐次通訳				
15) Dell Asia Pacific Kuala Lumpur 2006年7月30日～8月1日		2006.07.30	Dell Asia-Pacific 社 テーマは IT 関連 同時通訳				
16) ストコール氏、「オーストラリアの政治状況」		2007.04.00	大東文化大学 テーマはオーストラリア研究 逐次通訳				

17) レブナー教授「アメリカの大統領選挙」	2007.05.00	大東文化大学 テーマは政治 逐次通訳
18) グラフ教授「ウェーバーのプロ倫の現代的意義」	2007.10.00	聖学院大学 テーマは社会学 逐次通訳
19) アジア・オセアニア会計士会議	2007.11.00	アジア・オセアニア会計士協会 マレーシアにて テーマは会計学 同時通訳
20) 日米防衛会議	2007.11.00	防衛省 テーマは防衛 同時通訳
21) キャロル・ラオグリーン講演会「死別とグリーフに向き合う」	2008.02.22	東京大学 逐次通訳
22) 環境思想国際シンポジウム	2008.06.15	千葉大学 同時通訳
23) ロバート・ニ・マイヤー講演会「死別とグリーフ」	2008.09.02	東京大学 逐次通訳
24) 国際シンポジウム「戦後リベラル・デモクラシー」	2008.10.13	聖学院大学 同時通訳

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
1 「B言語への通訳ー日本の経験:アンケート調査報告	単著	2005.12.00	『通訳研究』第5号(日本通訳学会)、261-283 ページ	日本人会議通訳者を対象として、日本語から英語への通訳についての実情、その諸側面についての自己認識などをアンケート方式で問い、161人中81名より解答を得たものを集計して、コメントを付した。できるだけ解答をそのまま生かしてまとめ、さらに、日英通訳の困難さの原因などについてその解決法にもふれている。
2 'Interpreting into B: Japanese Experience'	単著	2005.12.00	Conference Interpretation and Translation, 2005, Vol.7 (2), Korean Society of Conference Interpretation, pp.3-28.	英文報告。日本人会議通訳者を対象として、日本語から英語への通訳についての実情、その諸側面についての自己認識などをアンケート方式で問い、161人中81名より解答を得たものを集計して、コメントを付した。これを、英文にてまとめ、海外の読者にたいして必要な解説などを加えた。
3 オーストラリアにおける保護主義の起源	単著	2006.07.00	『経済論集』第87号、大東文化大学経済研究所、1-31 ページ	オーストラリア植民地時代から連邦化初期において、保護主義政策がとられた事を述べ、その起源として、サイムとディーキンの2人がいたことを論じる。
4 「オーストラリアにおける保護主義の起源	単著	2006.07.00	『経済論集』87号、大東文化大学経済研究所、1-31 ページ	オーストラリア連邦発足にもなつて採用された経済政策保護主義の起源を、スコットランドからの移民 David Syme と、それを実現した政治家 Alfred Deakin に求め、その思想・政治過程を略述したもの
5 'Multiple Layers of Meaning - Toward a Deepening of the "Sense" Theory of Interpreting - '	単著	2006.12.00	『通訳研究』6号、通訳理論研究会、175-182 ページ	セレスコヴィチの通訳理論「意味の理論」をさらに深化すべく、「意味」には何層もの「意味」がある、それを通訳者は意識すべきではないかと論じたもの
6 「オーストラリア連邦の成立とその意味」	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要<社会科学>』大東文化大学、1-20 ページ	オーストラリアにおける英国6植民地が統一して連邦となるまでの過程を述べたもの。Alfred Deakin が大きな役割を果たしたことを指摘したもの。
7 オーストラリア連邦の成立とその意味	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要』第45号(社会科学)、大東文化大学、1-20 ページ	オーストラリアにおいて、英国の6植民地が統一されて、同連邦となったこと、その過程でアルフレッド・ディーキンという文人政治家が決定的な役割を果たしたことを論じる。

8	「オーストラリアにおける新保護主義」	単著	2007.07.00	『経済論集』89号、大東文化大学経済研究所、55-90ページ	オーストラリアにおいて、「新」保護主義というユニークな政策（産業を保護する代わりに、労働者に fair and reasonable な賃金を保障する）が提唱され実現されていく過程を述べたもの。政治家 Alfred Deakin と連邦調停仲裁判断所判事 Henry Higgins が決定的役割を果たしたことを指摘したもの。
その他					
1	'Interpreting into B: Japanese Experience'	単著	2005.08.04	フィンランド、タンペレ市の第17回国際翻訳家連盟大会において報告	日本人会議通訳者を対象として、日本語から英語への通訳について、実情・その諸側面についての自己認識などをアンケート方式で問い、161人中81人からの回答を集計して、コメント・解説を加えた。
2	'Multiple Layers of Meaning - Toward a Deepening of the "Sense" Theory of Interpreting'	単著	2006.10.20	中国北京市、国際貿易経済大学にて行われた第6回中国国際通訳会議「21世紀の上質な翻訳・通訳を目差して」において報告	通訳作業の過程として「意味」を理解してそれを再表現するとしただけでは十分とは言えず、少なくとも、セレスヴィッチのいう「意味」にいくつかの層があり、そのなかでも話者の「意図」を峻別すべきだと論ずる。
3	Multiple Layers of Meaning		2006.12.00	『通訳研究』第6号、175-182ページ	通訳作業の過程として、「意味」を理解して、それを再表現するとしただけでは充分ではなく、少なくとも、セレスヴィッチのいう「意味」にいくつかの「層」があり、中でも、話者の「意図」を峻別すべきだと論じる。
4	'Interpreting and Interpreting Research Scene in Japan'	単著	2007.11.21	マレーシア、クアラ・ Lumpurにて、マレーシア国立翻訳通訳研究所、第11回翻訳通訳会議「マレー語での知の蓄積を豊かにするために」において、招待講演	日本の通訳状況、通訳研究の状態について、一般的に報告する
5	'Genesis of Japan Association for Interpretation Studies	単著	2008.08.07	中国上海市、上海国際コンベンションセンターで行われた第18回FIT（国際翻訳家連盟）の日本通訳学会理事会パネルでの報告	日本通訳学会の創設会長として、同会の起源を論じる。1990年に通訳理論研究会を立ち上げ、その10年後に日本通訳学会に改組した経過を報告。研究会に先立つ通訳研究が日本ではほとんど行われていなかったかの事情を、通訳作業は「研究に値しない」という社会的評価のあったことから説明している。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1980.04.00	～	現在	国際経済学会会員	
2	1996.04.00	～	現在	国際開発学会会員	
3	1998.04.00	～	現在	時事英語学会会員	
4	2003.04.01	～	2005.03.31	文科省教科書審査委員会臨時委員	
5	2003.07.00	～	現在	日本通訳学会特別顧問	
6	2007.04.01	～	2008.03.31	文科省「特色ある大学教育支援プログラム」委員会ペーパーレフェリー	

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	篠永 宣孝	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「外交官クローデルとフランスの対日政策」		2005.11.26	(2005年11月26～27日)クローデル没後50年国際会議シンポジウムに参加・講演。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『日露戦争(一)－国際的文脈－』	共著	2004.12.01	錦正社	日露戦争100周年を記念して軍事史学会が40年の研究蓄積を投入した日露戦争に関する総合的研究。近代日本の進路と20世紀の潮流を方向付けた世界的事件に政治、外交、軍事、経済、国際法、社会・文化の各方面から多角的且つ複眼的に迫る。「日露戦争とフランスの対ロシア借款」を執筆(228～245頁)。共著者は、高橋久志、戸部良一、飯島康夫、仁井田崇、小野圭司、高橋文雄、川島真、平川幸子、君塚直隆、松村正義、三輪公忠、イアン・ラックストン、中井晶夫、松下佐知子、喜多義人、篠永宣孝、石川亮太、菅野直樹、横手慎二、原剛、大久保政博、等松春夫。			
2 『クローデルと日本』	共著	2006.11.11	七月堂	クローデル没後50周年を記念して日仏会館で開催された国際会議・シンポジウムの論文集である。著名な詩人・劇作家クローデルの駐日大使としての外交活動を分析。1921年に駐日大使として赴任したクローデルは、大戦後の国際社会の中で孤立を深める日仏両国の類似性・補完性を見て取り、日仏接近、日仏関係強化に尽力したが、日仏間の政治的軍事的経済的共通利害の設定や相互依存システムの構築は容易に進展しなかった。クローデル外交の最大の功績は東京・京都日仏会館の建設に見られるごとく、日仏文化芸術交流の発展であったことを分析・紹介した論文。「Claudel diplomate et la diplomatie française envers le Japon」(128～150頁)を執筆。共著者は、中條忍、イヴァン・ダニエル、ビエール・フルニエ、福永知代、芳賀徹、支倉崇晴、小林義彦、フランソワ・ラショウ、クリストフ・マルケ、ドミニック・ミエ＝ジェラルド、ベルナルド・ド・モンフェラン、本野盛幸、ジャン＝ルイ・ムキエリ、内藤高、フランソワーズ・サバン、里美貞代、篠永宣孝、ミシェル・ワッセルマン、渡邊守章、余中先。			

3 『フランス帝国主義と中国』	単著	2008.02.11	春風社	本書は、フランスで取得した博士論文『中国興業銀行の創立とその崩壊－ベルトロ兄弟の挑戦－』（1988年）の前半部をベースに執筆・刊行した論考に、2001年度の長期海外出張時に収集した新史料などを加味して大幅な加筆・修正を施し、新たに執筆した論考も加えて編んだ、第一次大戦前の中国におけるフランス帝国主義に関する研究書である。フランス帝国主義を「高利貸的」帝国主義と規定したレーニンの古典的帝国主義像から脱却し、フランス特有の新しい帝国主義像の構築を目指し、日本はもとよりフランスにおいても、未だ誰も取り扱わなかった中国を舞台としたフランスの帝国主義（1914年前）を、フランスの歴大な第一次史料（外交文書、大蔵省・植民地省・商務省文書、国立公文書館、フランス銀行、etc）を駆使して歴史具体的に究明した研究である。本研究のもう一つの意義は、これまでの中国における帝国主義研究はイギリスの例をもって列強の代表とされてきたが、それとはかなり異なったフランス帝国主義が中国で現象したのが確認されたからである。即ち、1914年前のフランスの豊富な資本（金融力）や銀行を切札とした膨張主義、これを「金融帝国主義」あるいは「銀行帝国主義」と命名することができる。B5版、総頁510頁。
論文				
1 「日露戦争とフランスの対ロシア借款」	単著	2004.12.00	軍事史学 第40巻2・3号 合併号 軍事史学会	日露戦争前のロシアはフランスの対露借款と仏露同盟のお陰で緊密な露仏関係を維持しており、日露戦争に際してもフランスの全面的な支援を当てにできたと考えられてきた。だが現実には、19世紀末にフランスの対露借款政策が大きく転換され、日露戦争に際してロシアが最も期待したフランスの金融的支援は多くを望めない状況にあった。逆にフランスは金融力を武器に露仏関係において外交的主導権を握るようになった。こうしたプロセスを仏外交文書により実証する。（レフリー制有）
2 「京漢鉄道建設とフランスの外交・金融協力（上）」	単著	2005.03.00	経済論集 第84号 大東文化大学経済学会	日清戦争後の中国で、フランスはとりわけ軍事を背景とした「砲艦外交」、仏外務省主導の下に「鉄道外交」を展開した。フランスの主たる目的は、イギリスの支配する中国の中枢部・揚子江流域に侵入・浸透することによって、中国におけるイギリスの商業的経済的優位を打破し、フランスの影響力を扶植することであった。このフランス鉄道帝国主義の最も大規模な事業は、ベルギーとの共同事業という装いで開始した京漢鉄道建設で、北京（盧溝橋）から中国中央部を南北に縦貫して漢口を結ぶ中国初の大幹線鉄道（約1200km）であった。本稿では、この京漢鉄道建設の経緯・実態やフランスの外交・金融協力を、主として仏外務省のアルシーブに基づいて実証的に跡づけたもの。
3 「京漢鉄道建設とフランスの外交・金融協力（下）」	単著	2005.07.00	経済論集 第85号 大東文化大学経済学会	日清戦争後の中国で、フランスはとりわけ軍事を背景とした「砲艦外交」、仏外務省主導の下に「鉄道外交」を展開した。フランスの主たる目的は、鉄道建設を媒介としてイギリスの支配する中国の中枢部・揚子江流域に侵入することによって、中国におけるイギリスの商業的経済的優位を打破し、フランスの影響力を扶植することであった。このフランス鉄道帝国主義の最も大規模な事業は、ベルギーとの共同事業という装いで開始した京漢鉄道建設で、北京（盧溝橋）から中国中央部を南北に縦貫して漢口を結ぶ中国初の大幹線鉄道（1200km）の建設であった。本稿は、この京漢鉄道建設の経緯や実態、フランスの外交・金融協力の実態を、主として仏外務省のアルシーブに基づいて実証的に跡づけたもの。
4 「汴洛（開封－洛陽）鉄道建設とフランスの外交」	単著	2006.03.00	経済論集 第86号 大東文化大学経済学会	中国におけるフランスの鉄道建設の中で、ベルギーとの共同事業として最も大規模であった京漢鉄道建設の他に、この京漢鉄道を東西に横断して開封と河南府（洛陽）を結ぶ汴洛鉄道（186km）があった。この鉄道建設はベルギーの財閥アンパンの事業であったが、フランスは金融力を武器にこの事業に参画した。本稿では、この鉄道建設の経緯や実態、フランスの外交・金融協力とフランス・ベルギー間での鉄道建設資材・レール・機関車等の供給を巡る争い（フランスの輸出競争力）などを、主として仏外務省のアルシーブに基づいて実証的に分析したもの。

5	「駐日大使クロードルとフランスの極東政策」	単著	2007.07.31	『早稲田政治経済学雑誌』 早稲田大学政治経済学会	詩人・劇作家として著名なポール・クロードルは、外交官としても一流で戦間期の日外交の主軸をなすブリアン＝バルトロ路線に列なる重要人物であった。駐日大使として赴任したクロードルは、大戦後の国際社会の中で孤立を深める日仏両国の類似性・補完性を見て取り、日仏接近、日仏関係の強化（政治・軍事・経済・文化関係を絡めた日仏関係の緊密化）に尽力したが、日仏間の共通利害の設定や相互依存システムの構築は容易に進まなかった。クロードルが積極的に日本側は受動的に求めた日仏関係の緊密化は殊のほか困難であった。クロードル外交の最も成功したのは、東京・京都日仏会館の建設など、日仏文化芸術交流の発展（文化外交）であった。（レフリー制あり）
6	「1914年前の対中国国際借款団の成立（上）」	単著	2009.03.00	経済論集 第92号 大東文化大学経済学会	英・仏・独・米・日・露の対中外交政策にかかわるため、これまで本格的に研究されてこなかった中国に対する国際借款団の成立過程を明らかにする。義和団事件後のひっ迫する清朝財政と鉄道建設借款をコントロールするために英仏の協力・協調から始まった借款団は、1910年には英・仏・独・米の四国借款団の結成に結実し、辛亥革命後は日露を加えた六国借款団に発展した。こうした国際借款団の成立過程を主としてフランス外交文書に基づいて実証的に究明したものの。
その他					
1	「外交官クロードルとフランスの対日外交 Claudel diplomate et la diplomatie française envers le Japon」	単著	2005.11.27	国際会議 クロードル没後50年記念企画委員会	クロードル没後50年記念企画委員会・日仏会館主催による「国際会議 クロードルと日本 Colloque International Claudel et le Japon」での報告論文で、劇作家・詩人として著名なポール・クロードルの駐日大使（1921-27年）としての活動とフランスの対日外交政策を日外務省のアルシーブに基づいて分析したもの。大戦後の国際社会の中で孤立化を深める日仏両国の類似性・補完性を見て取ったクロードルは、日仏接近（政治・軍事・経済・文化関係の強化）に尽力するが、日仏間の政治・軍事・経済的協調は想いのほか困難だった。クロードル外交の最も成功したのは、東京・関西日仏会館の建設などによる日仏文化交流の発展（文化外交）であったことを報告した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1989.00.00	～	現在	社会経済史学会会員（2009年～現在 評議員）
2	1990.00.00	～	現在	社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会会員
3	1990.00.00	～	現在	日本国際政治学会会員（1996年～現在 評議員）
4	1991.00.00	～	現在	政治経済学・経済史学会（土地制度史学会）会員
5	1993.00.00	～	現在	日仏政治学会会員
6	1993.00.00	～	現在	日仏歴史学会会員
7	1993.00.00	～	現在	歴史学研究会会員
8	1995.00.00	～	現在	日本西洋史学会会員
9	1995.10.00	～	現在	中国人戦争被害者の要求を支える会会員（呼びかけ人）
10	1998.00.00	～	現在	日本比較政治学会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	竹永 進	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価アンケートの実施		2007.12.00		担当授業 (2 科目) において実施した授業評価アンケートの多くの項目で高い評価を得た。			
2) 大東文化大学授業評価アンケートの実施		2008.12.00		担当授業 (2 科目) において実施した授業評価アンケートの多くの項目で高い評価を得た。			
3) 基礎演習における教材の作成				(過去 5 年間以上～現在) 1 年生を対象とする基礎演習用に毎週新聞記事・読解用の英文・基礎的な数学の問題を教材として作成し、専門教育に備えるための学力の向上に努めている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『貨幣的循環理論の構造と問題 (四)』	単著	2004.07.00	経済論集 (大東大)、第 83 号	上記 (一) (二) (三) の続き。貨幣的循環理論における貨幣と金融の関係と両者の扱いの相違、および、この理論の枠組にはまったく登場していない資本財の位置づけの問題について論じ、この理論的流れの現況について展望する。			
2 国際会議出席報告「第 4 回マルクス国際学会」		2005.00.00	『日本経済学会連合ニュース』No41.2005、日本経済学会連合				
3 大谷禎之介氏の『資本論』第三部第五章 (篇) 草稿の研究について	単著	2005.03.00	経済論集 (大東大)、第 84 号	(研究ノート) マルクスの残した『資本論』第三部の草稿の信用理論の部分 (第五章) について 20 年にわたる研究を縮くられた大谷氏の仕事の意義、および、この仕事によって明らかにされたエンゲルス編集の現行版の問題点について論じる。			
4 「特集にあたって」	単著	2006.01.00	『季刊経済理論』第 42 巻第 2 号、経済理論学会	筆者が編集担当した同誌同号の特集『『資本論』草稿研究の現在—新メガの編集・刊行とその成果』に付した編集者解題。特集の意義と寄稿論文について解説。			
5 「貨幣的循環理論の構造と問題再論 (一)」	単著	2007.07.00	経済論集 (大東大) 第 89 号	A.Graziani の理論モデルの基本的特質を B.Schmitt のそれとの対比において総括的に論じる			

6	「貨幣的循環理論の構造と問題再論(二)」	単著	2008.03.00	経済論集(大東大)第90号	(一)に続いて、A.Grazianiのモデルにおける銀行セクターの内部構造に踏み込んだ分析について、詳細な検討を加える
7	「フランスにおけるリカード経済学研究」	単著	2008.03.00	『経済研究』第21号 大東文化大学経済研究所	科研費プロジェクトの一環として、日本ではあまり知られることのないフランスにおけるリカードの経済学に対する研究を、リカードの同時代より現代に至るまで追跡し、若干の評価を付す。
8	貨幣的循環理論の構造と問題再論(三)	単著	2008.07.00	経済論集(大東大)第91号	通貨を発行し貸付けることを機能とする銀行と、これを取り扱う金融仲介機関とを分析的に区別すべきことを論じる
9	貨幣的循環理論の構造と問題再論(四)	単著	2009.03.00	経済論集(大東大)第92号	貨幣的循環理論における利潤の貨幣的実現と利子の発生・支払いの問題について論じる
その他					
1	Sur les travaux de rédaction de MEGA au Japon	単著	2004.09.29	Congr è s Marx International IV (パリ)	
2	第4回国際マルクス会議に参加して	単著	2005.04.00	経済理論学会編『季刊 経済理論』第42巻第1号	2004年9月末にパリ郊外で開催された国際マルクス会議での報告をもとに、この会議の開催主体や性格、開催の意義について、特に日本における学術国際交流のあり方との対比を行いながら、検討を加える。
3	書評、蛭原良一著 資本蓄積と失業・恐慌 (法政大学出版局、2004年)	単著	2005.06.00	経済学史学会年報第47号	古典派とマルクスの経済学上の諸問題を扱った論文集の書評
4	Fundamental Character of the Theory of Value of D. Ricardo	単著	2005.06.10	European Society of the History of Economic Thought. 第9回、スターリング大学(スコットランド)	
5	『知られざるマルクス』	単著	2006.01.00	経済理論学会編『季刊 経済理論』第42巻 第4号	新メガ第2部の概要とその意義を論じたアムステルダム大学教授ミヒャエル・R・クレトケ氏のオリジナル原稿(英文)の翻訳
6	『特集にあたって』	単著	2006.01.00	経済理論学会編『季刊 経済理論』第42巻第4号	経済理論学会誌の特集『「資本論」草稿研究の現在—新メガの編集・刊行とその成果—への、編集担当者としての趣意説明
7	A phase in the value controversy in the Soviet Union in 1920s	単著	2006.04.00	World Political Economics Society. 第1回大会上海财经大学(中国)	
8	『ジェラルド・デュメニル、ドミニック・レヴィ『マルクス経済学と現代資本主義』』	単著	2006.11.00	こぶし書房	現代フランスの代表的なマルクス経済学研究者に属する2名の著者による、『資本論』の経済分析の原理的研究を現代世界の経済分析にどのように生かすかを簡明に示した入門的著述。
9	貨幣的循環理論の構造と問題	単	2007.05.27	経済学史学会第27回大会、九州産業大学	
10	書評、カワツキー・レンナー・ゲゼル『「資本論」の読み方』(相田慎一訳)、ばる書房、2006	単著	2007.06.00	経済学史研究第49巻第1号	相田氏の独自編集による3人の著者の『資本論』についての特色ある解説書の訳についての書評
11	Structure and problems of the theory of monetary circuit	単	2007.07.07	11th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Université de Strasbourg	

12	Une phase dans la pol é mique de valeur dans l é x-Union sovi é tique durant les derni è res ann é es 20 du si è cle dernier	単	2007.10.04	Congr è s Marx International V, Universit é de Paris X	
13	メガIV・18 巻収録抜粋ノートに含まれるフランス語文献について	単	2008.03.12	MEGA編集東京国際会議、一橋大学佐野書院	
14	Making of Capital by Marx during the period from Feb.1864 to Sep.1868, in relation to the editing work of MEGA IV・18	単	2008.03.12	MEGA編集東京国際会議、一橋大学佐野書院	
15	「シンポジオン」	単	2008.04.00	アソシエ No.20	メガ研究の現段階と日本人研究者の参加
16	Structure et probl é mes de la th é orie de circuit mon é taire	単	2008.05.13	s é minaire ERMES, Paris	
17	Once more structure and problems of the theory of monetary circuit	単	2008.05.16	12th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, University of Praha	
18	Making of Capital by Marx during the period from Feb.1864 to Sep. 1868, in relation to the editing work of MEGA IV.18,		2008.12.05	神奈川大学創立 80 周年記念国際シンポジウム『マルクスの遺産』(2008年12月5日-6日)における報告、神奈川大学、2008年12月5日	
19	Editorial work of MEGA ² in Japan	単	2009.04.25	13th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, University of Macedonia	

III 学会等および社会における主な活動

1	1974.04.00	～	現在	経済学史学会会員、年報編集委員会 (1999.6-2001.5)、経済学史学会研究奨励賞審査委員 (2006.5-2008.4)、学会幹事 (2009.4-2011.3)、企画交流委員会委員 (2009.5-2011.4)
2	1974.04.00	～	現在	経済理論学会会員、『季刊経済理論』編集委員 (2003.6-2005.12)、大会開催準備委員会事務局長 (2005.1-2005.12) 大会開催校幹事 (2004.12-2005.12)
3	1982.04.00	～	現在	社会思想史学会会員
4	2002.01.00	～	現在	European Society for the History of Economic Thought 会員
5	2006.04.00	～	現在	World Political Economics Society 会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科		職名	教授	氏名	中島 正人	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) ゼミにおける Google ドキュメントの利用			2009.04.00	(2009 年度) Google ドキュメントにより、学生間、学生一教員間でファイルを共有し、授業中はもちろんその他の時間も共同論文作成の手段としている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『日本経済の経済学 (第3版)』	共著	2005.04.00	学文社	第2版の改訂版			
論文							
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1985.05.00	～	現在	日本経済政策学会会員			
2	1997.00.00	～	現在	公共選択学会会員			
3	1997.00.00	～	現在	社会経済史学会会員			
4	1997.05.00	～	現在	日本財政学会会員			

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	永野 慎一郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『眠れる美女 日本文化の万華鏡 ～交流史のつづれ織り』	共著	2005.02.09	MOKU出版社	イサベラ・C. L. コヴァーチュ著。英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ハンガリー語、中国語、韓国語、日本語の8ヶ国語同時収録の日本文化交流史。韓国語の翻訳および編集協力者として参加。総頁数 240 頁。			
2 『世界の起業家 50 人』の韓国語版の編集責任者。	共著	2005.03.10	ドナンチュルバン (thenanbiz)	韓国語版書名『セケルル ウムジヌン キオブカエケ キョンヨンウル ベウンダ』(世界を動かしている企業家に経営を学ぶ)。永野慎一郎ほか著、金昌楠訳。まえがき、鄭周永、ルパート・マードック、鳥井信治郎、松下幸之助、孫正義を執筆。A 5 版、総頁数 396 頁。			
3 『相互依存の日韓経済関係』	単著	2008.09.25	勁草書房	1910 年の日韓併合から今日に至るまでの日韓経済関係を多数の未公表資料を中心に考察し、相互依存という観点から分析している。A5 版、総頁数 430 頁。			
論文							
1 『ポスト冷戦時代の日米関係と日本の役割 ～同盟関係の強化と日本の軍事的役割の拡大～』	共著	2005.07.25	大東文化大学経済論集第 27 号	I. 問題提起、II. ポスト冷戦時代の日米同盟の再定義および強化 (1. 日米同盟の再確立および再定義、2. 在日米軍の再編と日米同盟の強化)、III. 日米同盟の戦略的相互依存の強化と日本の軍事的役割の拡大 (1. 日米同盟の戦略的相互依存の強化、2. 国際社会における日本の軍事的役割の拡大)、IV. 結論。永野慎一郎、裴廷鎬 共著。B5 版、総頁数 98 頁中 16 頁。			
2 講演記録『世界を動かしている企業家のリーダーシップ ～イノベーションとチャレンジの一生涯～』		2006.03.31	大東文化大学経済研究所報第 20 号	B5 版、総頁数 39 頁中 9 頁。			

3	「21世紀東北アジア時代の日韓関係」	共著	2006.07.25	大東文化大学経済論集第87号	韓国民民主党代表・韓和甲氏の講演内容。1. 日韓関係について、2. 韓国経済の成長と日本、3. 東北アジア経済の現状と将来の展望、4. 21世紀東北アジア時代のための坂本竜馬と勝海舟、5. われわれ共に東北アジア時代の主役になりましょう！B5版、総64頁中10頁。
4	「在日コリアンの韓国経済発展への寄与に関する一考察」	単著	2008.10.15	『HWAN DONG HAE REVIEW』Vol.4、No.2.	本論文は、在日コリアンが広い意味では祖国、狭い意味では出生した故郷のために多大な物質的、金銭的寄与をしたにもかかわらず、正当な評価がされていないというところに着し、実例を挙げて分析し、再評価すべきであるという問題提起をしている。
5	「在日コリアンの祖国への貢献 ～教育・文化事業の事例研究」	単著	2009.03.31	経済研究（大東文化大学経済研究所）第22号	在日コリアンの祖国への貢献のうち、特に、教育・文化事業に貢献した人を紹介している。
その他					
1	『第13回東アジア地域国際シンポジウム』		2004.10.12	中国西北大学経済管理学院	『東アジア経済協力の新発想と挑戦』という題の国際シンポジウムにおいて討論者および座長として参加。 (2004.10.12-13)
2	『第2回韓・日国際セミナー』		2005.04.01	韓国民民主党国家戦略研究所（ソウル）	韓国民民主党国家戦略研究所主催国際セミナー『CEOのリーダーシップと政治的リーダーシップの実態的照明』という題の国際セミナーにおいて『世界を動かしている企業家のリーダーシップ』について基調報告。
3	多文化関係学会		2005.10.22	多文化関係学会第4回年次大会	オープン・フォーラム「東アジア文化圏の協働課題を探る」のディスカッサントとして参加し、『東アジア経済共同体構想ーその可能性を探るー』というテーマで報告・討論。
4	『第14回東アジア地域国際シンポジウム』		2005.12.08	沖縄経済学会	沖縄経済学会主催、琉球新報社・(財) 南西地域産業活動センター・沖縄観光コンベンションビューロー共催、『第14回東アジア地域国際シンポジウム』共通題目「持続発展可能な東アジアの地域協力・地域統合」において討論者および座長として参加。
5	『第15回東アジア地域国際シンポジウム』		2006.12.01	韓国技術教育大学校	「東アジア地域における地方レベルでの人材育成と雇用創出」と題する国際シンポジウムに討論者及び座長として参加。
6	日韓政策フォーラム		2008.01.22	韓国統一研究院	韓国統一研究院主催・大東文化大学東北アジア平和発展フォーラム主管の日韓政策フォーラム『韓国新政府の北朝鮮政策と日韓協力』が大東文化大学法科大学院会議室で開催され、第2セッションの座長及び総合討論の座長を務める。
7	ドキュメンタリー「蔚山の鄭周永・鄭周永の蔚山」		2008.09.27	UBC放送（韓国蔚山）	ドキュメンタリー「蔚山の鄭周永・鄭周永の蔚山」番組に海外専門家として出演。
8	台湾逢甲大学主催第16回東アジア地域国際シンポジウム『東アジアにおけるイノベーションと経済成長』において座長を務める。		2008.11.14	台湾逢甲大学	
9	国際高麗学会日本支部主催の特別講演会において「相互依存の日韓関係」と題して講演。		2008.12.20	国際高麗学会日本支部	大阪OICセンター。
10	第2回日韓政策フォーラム		2009.04.01	韓国統一研究院	韓国統一研究院主催・大東文化大学東北アジア平和発展フォーラム主管（代表・永野慎一郎）フォーラム『米国オバマ政権の対北朝鮮政策と日韓戦略的提携』において座長を務める。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1972.04.00	～	現在	日本国際政治学会会員（1992年度より2004年度まで評議員）	

2	1994.05.00	～	現在	東アジア経済学会会員
3	1995.09.00	～	現在	環日本海アカデミック・フォーラム会員
4	1996.05.00	～	現在	財団法人日本国際フォーラム正会員
5	1998.02.00	～	現在	財団法人青峰奨学財団監事（設立時より現在に至る）
6	1998.07.00	～	現在	日本比較政治学会会員
7	1998.10.00	～	現在	国際連合学会会員
8	1999.09.00	～	現在	社団法人平和問題研究所（韓国）客員研究委員
9	2000.05.00	～	現在	早稲田政治学会会員
10	2000.11.00	～	現在	現代韓国朝鮮学会会員（2000年度より2004年度まで監事）
11	2008.10.00	～	現在	国際高麗学会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	中村 年春	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2004.04.00	「日本の企業社会 A」「日本の企業社会 B」の科目において、企業・団体等と連携したオムニバス講座を実施している。毎回、現代社会の第一線で活躍している企業人、エコノミスト、ジャーナリストおよび各分野の専門家を特別講師として招き、企業のガバナンスや経営戦略、CSR、消費者対応、環境対応などを中心に講義をしてもらい、現代企業の実体についての理解を促し、学生の進路・職業選択や将来設計の参考となるよう配慮している。(2004年4月～現在)				
2)		2005.11.00	「経済学演習」における学生の学習状況および教育効果を検証するため、毎年、消費者力検定試験(財団法人日本消費者協会主催)を受験し、生活経済、消費者問題、消費者教育などの理解に繋げている。(2005年11月～現在)				
3)		2006.12.00	「経済学演習」での研究成果を検証し、学生のモチベーションを高めるため、経済学部主催の経済学演習成果発表会(プレゼンテーション部門、ポスターセッション部門、ホームページ部門)に参加し、優秀な成績を収めている。(2006年12月～現在)				
4)	大東文化大学授業評価	2008.12.00	大東文化大学授業評価(2008年12月実施)において、高い評価を得た。「日本の企業社会 B」において、「授業への満足度」が4.23(5段階評価)、その他の評価項目の平均が1.97(2段階評価)であった。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)	現代社会と契約－契約について知ろう－<再掲>	2004.06.00	「平成16年度消費生活大学講座」講演(特定非営利活動法人青森県消費者協会)				
2)	市民参加型社会の実現－理想とする市民社会に近づくために－<再掲>	2004.11.00	「2004年度徳島県消費者大学校」講演(特定非営利活動法人徳島県消費者協会)				
3)	個人情報保護法施行に伴う重要事項の説明について<再掲>	2005.02.00	「平成16年度新入会員研修会」講演(社団法人青森県宅地建物取引業協会)				
4)	個人情報の収集・利用・管理－個人情報保護法が全面施行になりました－<再掲>	2005.05.00	「平成17年度消費生活大学講座」講演(特定非営利活動法人青森県消費者協会)				
5)	消費者教育展開の課題－行政における普及啓発を中心に－<再掲>	2005.06.00	「平成17年度消費者行政職員研修・職員講座」講義(独立行政法人国民生活センター)				
6)	個人情報の保護とその取り扱いについて<再掲>	2005.09.00	「子育てサポーター研修会 研修講座」講演(青森市家庭教育支援総合推進事業協議会)				
7)	消費者教育に関する講義の内容と実践－指導、助言および講評－<再掲>	2005.10.00	「平成17年度消費者教育に携わる講師養成講座」(独立行政法人国民生活センター)				
8)	消費者問題の展開と消費者団体の役割－この15年とこれからの展開－<再掲>	2005.11.00	「青森県消費者問題研究会設立15周年記念フォーラム」記念講演(青森県消費者問題研究会)				
9)	個人情報保護法の施行に伴う重要事項の説明について<再掲>	2006.02.00	「平成17年度新入会員研修会」講演(社団法人青森県宅地建物取引業協会)				

10) 消費者団体がNPO法人として活動する意義－消費者NPOの役割－<再掲>	2006.03.00	「支部長研修会」講演（新潟県消費者協会）
11) 法律講座「悪徳商法VS消費者力 消費者・行政・NPOの協働を考える」NPO活動と消費者相談の実践と悩み－【消費者力】これからのNPO活動－<再掲>	2006.07.00	「国士館大学生涯学習センター平成18年度春期公開講座」講演（国士館大学生涯学習センター）
12) 消費者団体訴訟制度の概要<再掲>	2006.08.00	「消費者団体訴訟制度学習会」講演（特定非営利活動法人青森県消費者協会）
13) 契約関連の法律について－契約の基礎知識と事例研究－<再掲>	2006.08.00	「平成18年度悪質商法防止対策指導者研修会」講演（特定非営利活動法人青森県消費者協会）
14) 消費者団体の法人化の現状と展望－消費者NPO、指定管理者制度、公益法人制度改革などを考える－<再掲>	2006.09.00	消費者団体と東京都の協働による学習会「2006年度第2回全国消費者協会連合会研修会」講義（東京都）
15) 消費者契約法と賃貸住宅の現状回復義務との関係－個人保護法の施行に伴う重要事項の説明－<再掲>	2007.02.00	「平成18年度新入会員研修会」講演（社団法人青森県宅地建物取引業協会）
16) NPOと行政との協働－青森県を事例として全国の動向を考える－<再掲>	2007.03.00	消費者相談セミナー「これからの消費者相談を考える－民間と行政との協働－」（特定非営利活動法人NPO消費者相談室）
17) 日本社会における格差問題を考える－その本質は、何が問題か－<再掲>	2007.10.00	「平成19年度大東文化大学公開講座（板橋区共催）」講演（大東文化大学地域連携センター・東京都板橋区教育委員会）
18) 現代社会と消費者問題<再掲>	2008.04.00	「東松山市きらめき市民大学平成20年度第1学期」講義（東松山市きらめき市民大学）

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 地域デザインフォーラム・ブックレット No.10『産業振興ビジョン策定に向けて』	共著	2005.03.00	大東文化大学国際比較政治研究所	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「第3章 都市環境の変化と商店街を取り巻く課題」（30～40頁）担当。共著者：上遠野武司（大東文化大学）、横田昇（板橋区）、相田治昭（板橋区）、小池喜美子（板橋区）、富澤賢一（板橋区）。A5版、総頁110頁。
2 『創立25周年記念消費者教育21』	共著	2005.09.00	日本消費者教育学会	日本消費者教育学会編「消費者団体訴権を活かす消費者教育」（71頁）共著者：小木紀之、西村隆男、白川智洋他。B5版、総頁 頁。
3 地域デザインフォーラム・ブックレット No.14『地域の産業振興－ビジョン策定を受けて－』	共著	2006.03.00	大東文化大学国際比較政治研究所	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「序文」（1～2頁）「第6章 消費者から見た魅力ある商店街」（70～90頁）担当。共著者：横田昇（板橋区）、富澤賢一（板橋区）、土井幸平（大東文化大学）、相田治昭（板橋区）、小池喜美子（板橋区）、上遠野武司（大東文化大学）。A5版、総頁149頁。
4 地域デザインフォーラム・ブックレット No.17『元気な学生まちづくり』	共著	2007.03.00	大東文化大学地域連携センター	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「地域デザインフォーラムブックレットの刊行にあたって：第4期地域デザインフォーラムが始動」（i～iii）、「第2章 市民参加のまちづくりを考える前提」（13～38頁）担当。共著者：上遠野武司（大東文化大学）、川野幸男（大東文化大学）、橋本一裕（板橋区）、岩田雅彦（板橋区）、山口諤司（大東文化大学）、浅野美代子（大東文化大学）、首藤禎史（大東文化大学）、有馬潤（板橋区）、寺西幸雄（板橋区）。A5版、総頁113頁。
5 アカデミア叢書⑦『悪質商法VS消費者力を見る目に確かさを』	共著	2008.03.00	成文堂	「第4章 消費者・行政・NPOの協働を考える」（93～115頁）共著者：山口康夫（国士館大学）、安彦和子（弁護士）、夷石多賀子（消費生活コンサルタント）、山本登江子（世田谷区）。A4版、総頁152頁。

6	『学校教育における保険教育の現状と展望』	共著	2009.03.00	財団法人 生命保険文化センター	学校教育における保険教育の必要性と課題について、多角的視点から考察を行った研究報告である。「はしがき」[IV 消費者と保険教育 第10章 保険消費者に必要な保険法教育] (137～153頁) 担当。執筆者：堀田一吉、天野晴子、近藤恵、尾島恭子、東珠美、柿野成美、阿部信太郎、高橋桂子、小木紀親、中村年春、山口康夫、永井雅章。A4版、総頁193頁。
論文					
1	特集 消費者問題	単著	2005.01.00	季刊 家計経済研究 No.65 (2005. W I N T E R) 財団法人家計経済研究所	特集論文「消費者問題におけるNPOの役割」(42～50頁)
その他					
1	「消費者月間特集」行政とNPOの協働事業を展開	単著	2004.05.01	『ニッポン消費者新聞』第687号25面(日本消費者新聞社)	
2		共	2004.06.00	「公益事業学会第54回大会総合セッション(パネルディスカッション)」パネリスト(公益事業学会)	公益事業のニューステージ：構造改革、地球環境、NPOの階梯
3	現代社会と契約—契約について知ろう—	単	2004.06.00	「平成16年度消費生活大学講座」講演(特定非営利活動法人青森県消費者協会)	
4	月曜インタビュー「時代を読む」	収録	2004.08.23	『デーリー東北』(デーリー東北新聞社)	消費者権利守る新たな形—行政から苦情相談、支援業務受託、休日相談など「民間効果」—(取材記事)
5	特別寄稿	単著	2004.09.00	消費者関連専門家会議(ACAP)機関誌『FORUM』No.173(社団法人消費者関連専門家会議)	「協働事業として消費生活センター業務に取り組むNPO法人—行政とNPOのパートナーシップの先進モデルを实践する試み—」(8～9頁)
6	パネル討論「公益事業のニューステージ：構造改革、地球環境、NPOの階梯」	共著	2004.10.00	公益事業研究第56巻第2号(2004年度No.2)(公益事業学会)	パネリスト報告「市民風力発電が創り出す地域社会の希望」(86～88頁)担当。共著者：[基調講演記録]植田和弘(京都大学)／[パネル討論記録]中条潮(慶應義塾大学)、中村年春(大東文化大学)、西村弘(大阪市立大学)、松行康夫(東洋大学)、安部誠治(関西大学、座長)。B5版、85-96頁。
7	市民参加型社会の実現—理想とする市民社会に近づくために—	単	2004.11.00	「2004年度徳島県消費者大学校」講演(特定非営利活動法人 徳島県消費者協会)	
8	シリーズ「消費者教育21」	単著	2004.11.08	『日本消費経済新聞』第1683号5面(日本消費経済新聞社)	消費者団体訴権を活かす消費者教育
9	行政とNPOの協働事業の先進モデルを实践する試み	単	2004.12.00	「平成16年度全国消費者フォーラム」報告(独立行政法人国民生活センター)	
10	パネルディスカッション「協働の地域づくりを考える」	単	2004.12.00	「NPO推進青森会議設立3周年記念フォーラム」コーディネーター(特定非営利活動法人NPO推進青森会議)	
11	個人情報保護法施行に伴う重要事項の説明について	単	2005.02.00	「平成16年度新入会員研修会」講演(社団法人青森県宅地建物取引業協会)	
12	リレーエッセー「現代消費者考—くらしの視点」第1回	単著	2005.04.05	『東奥日報』10面(東奥日報社)	消費者は裸の王様

13	個人情報の収集・利用・管理－個人情報保護法が全面施行になりました－	単	2005.05.00	平成 17 年度消費生活大学講座」講演（特定非営利活動法人青森県消費者協会）	
14	【第 1 講】個人情報保護の規制強化で何が変わる－個人情報保護法の全面施行を受けて－	単	2005.05.00	「あおり NPO 塾 2005」講義（特定非営利活動法人 NPO 推進青森会議）	
15	「消費者月間総力特集」	単著	2005.05.01	『ニッポン消費者新聞』第 709 号 25 面（日本消費者新聞社）	消費者被害の未然防止活動を推進
16		単	2005.06.00	「2005 年度通常総会記念講演会」講演（特定非営利活動法人とちぎ消費生活サポートネット）	消費者から信頼される NPO とは－行政と NPO との協働と NPO の役割－
17	消費者教育展開の課題－行政における普及啓発を中心に－	単	2005.06.00	「平成 17 年度消費者行政職員研修・職員講座」講義（独立行政法人国民生活センター）	
18	リレーエッセー「現代消費者考 からの視点」第 17 回	単著	2005.07.26	『東奥日報』10 面（東奥日報社）	消費者力のアップを
19		単	2005.08.00	「2005 年度第 4 回 NPO 井戸端会議」講話（特定非営利活動法人 NPO 推進青森会議）	行政と NPO との協働の可能性について－消費者 NPO の場合－
20		単	2005.09.00	「2005 年度夏期合同研修会第 2 分科会」報告（大東文化大学・板橋区地域連携研究（地域デザインフォーラム））	商店街の活性化に向けた振興策を考える－消費者から見た魅力ある商店街とは－
21		単	2005.09.00	「子育てサポーター研修会研修講座」講演（青森市家庭教育支援総合推進事業協議会）	個人情報の保護とその取り扱いについて
22		単	2005.10.00	「平成 17 年度消費者教育に携わる講師養成講座」（独立行政法人国民生活センター）	消費者教育に関する講義の内容と実践－指導、助言および講評－
23	CONSUMER MAIL	単著	2005.10.00	SONPO 第 39 号（社団法人 日本損害保険協会）	消費者 NPO の役割（3 頁）
24		単	2005.11.00	「青森県消費者問題研究会設立 15 周年記念フォーラム」記念講演（青森県消費者問題研究会）	消費者問題の展開と消費者団体の役割－この 15 年とこれからの展開－
25	パネルディスカッション	共	2005.11.00	「青森県消費者問題研究会設立 15 周年記念フォーラム」パネリスト／コメントーター（青森県消費者問題研究会）	個人情報保護法について考える
26	リレーエッセー「現代消費者考 からの視点」第 31 回	単著	2005.11.08	『東奥日報』12 面（東奥日報社）	食と生活を考える
27		単	2005.12.00	「平成 17 年度全国消費者フォーラム」報告（独立行政法人国民生活センター）	行政と消費者 NPO との協働の可能性

28	共通論題報告・討論	共	2005.12.00	「第14回東アジア地域国際シンポジウム」座長(沖縄経済学会東アジア地域国際シンポジウム運営委員会)	第3報告「中台経済交流の緊密化と展望」(興国管理大学 幸美) 第4報告「移民後世代の適応問題－世代間格差の日本比較－」(大東文化大学 川野幸男)
29		単	2006.02.00	「平成17年度新入会員研修会」講演(社団法人青森県宅地建物取引業協会)	個人情報保護法の施行に伴う重要事項の説明について
30		単	2006.03.00	「支部長研修会」講演(新潟県消費者協会)	消費者団体がNPO法人として活動する意義－消費者NPOの役割－
31		単著	2006.03.00	経済研究 第19号(大東文化大学経済研究所)	刊行にあたって: 研究所の将来展望を考える
32		単著	2006.03.00	大東文化大学経済研究所報 第20号(大東文化大学経済研究所)	刊行にあたって: 社会の変化と大学研究機関の改革
33	リレーエッセー「現代消費者考 暮らしの視点」第50回	単著	2006.03.28	『東奥日報』11面(東奥日報社)	消費者NPOの役割
34		単著	2006.04.00	市民と法 No.38(民事法研究会)	【書評】喜成清重著『中・高校生のための法律ガイド[第2版]』民事法研究会(69頁)
35	「現代消費者考 暮らしの視点」第59回	単著	2006.05.00	『東奥日報』11面(東奥日報社)	市場の監視者として
36	法律講座「悪徳商法VS消費者力 消費者・行政・NPOの協働を考える」	単	2006.07.00	「国士館大学生涯学習センター平成18年度春期公開講座」講演(国士館大学生涯学習センター)	NPO活動と消費者相談の実践と悩み－【消費者力】これからのNPO活動－
37	消費者団体訴訟制度の概要	単	2006.08.00	「消費者団体訴訟制度学習会」講演(特定非営利活動法人青森県消費者協会)	
38	契約の基礎知識と事例研究	単	2006.08.00	「平成18年度悪質商法防止対策指導者研修会『契約関連の法律について』」講演(特定非営利活動法人青森県消費者協会)	
39	消費者団体の法人化の現状と展望－消費者NPO、指定管理者制度、公益法人制度改革などを考える－	単	2006.09.00	消費者団体と東京都の協働による学習会「2006年度第2回全国消費者協会連合会研修会」講義(東京都)	
40		単	2006.12.00	「第4期地域デザインフォーラム第3分科会第6回研究会」報告(大東文化大学・板橋区地域連携研究(地域デザインフォーラム))	市民セクターと行政との協働による「地域づくり」－地域資源(廃施設・スペース)の有効活用による賑わいの「場(空間)づくり」を考える－
41	特別寄稿「企業による消費者教育の実践」(14頁)	単著	2007.01.00	消費者関連専門家会議(ACAP)機関誌『FORUM』NO.187(社団法人消費者関連専門家会議)	
42	消費者契約法と賃貸住宅の現状回復義務との関係	単	2007.02.00	「平成18年度新入会員研修会」講演(社団法人青森県宅地建物取引業協会)	個人情報保護法の施行に伴う重要事項の説明
43	NPOと行政との協働－青森県を事例として全国の動向を考える－	単	2007.03.00	消費者相談セミナー「これからの消費者相談を考える－民間と行政との協働－」(特定非営利活動法人NPO消費者相談室)	
44	「現代消費者考 暮らしの視点」第99回	単著	2007.03.00	『東奥日報』8面(東奥日報社)	団体訴訟制度で新展開
45	刊行にあたって	単著	2007.03.00	経済研究第20号(大東文化大学経済研究所)	

46	刊行にあたって	単著	2007.03.00	大東文化大学経済研究所報第21号(大東文化大学経済研究所)	
47	地域デザインフォーラム・ブックレット No.18『シンポジウム まちづくりと危機管理』	共著	2007.04.00	大東文化大学地域連携センター	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「地域デザインフォーラムブックレットの刊行にあたって：第4期地域デザインフォーラムが始動」(3～5頁)担当。共著者：[基調講演記録] 青山侑(明治大学) / [パネル討論記録] 石塚輝雄(板橋区)、鈴木孝雄(板橋区町会連合会)、山口鶴子(板橋区)、土井幸平(大東文化大学)、中村昭雄(大東文化大学、コーディネーター)。A5版、総頁84頁。
48	【新学部長紹介】	単著	2007.06.00	ARCH Vol.72(2007 SUMMER)(大東文化大学青桐会)	新任の学部長からのメッセージ：生きる力の涵養
49	日本社会における格差問題を考えるーその本質は、何が問題かー	単	2007.10.00	「平成19年度大東文化大学公開講座(板橋区共催)」講演(大東文化大学地域連携センター・東京都板橋区教育委員会)	
50	地域デザインフォーラム・ブックレット No.19『少子化対策ー非婚化・晩婚化を視座にしてー』	共著	2007.12.00	大東文化大学地域連携センター	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「地域デザインフォーラムブックレットの刊行にあたって：第4期地域デザインフォーラムの成果公表」(3頁)担当。共著者：東田親司(大東文化大学)、浅島和夫(板橋区)、太田洋子(板橋区)、松田玲子(板橋区)、山口鶴子(板橋区)。A5版、総頁118頁。
51	地域デザインフォーラム・ブックレット No.20『学生まちづくりの研究』	共著	2007.12.00	大東文化大学地域連携センター	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「地域デザインフォーラムブックレットの刊行にあたって：第4期地域デザインフォーラムの成果公表」(3頁)担当。共著者：上遠野武司(大東文化大学)、川野幸男(大東文化大学)、岩田雅彦(板橋区)、橋本一裕(板橋区)、有馬潤(板橋区)、山口諤司(大東文化大学)、浅野美代子(大東文化大学)。A5版、総頁123頁。
52	地域デザインフォーラム・ブックレット No.21『危機管理と自治体』	共著	2007.12.00	大東文化大学地域連携センター	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム編「地域デザインフォーラムブックレットの刊行にあたって：第4期地域デザインフォーラムの成果公表」(3頁)担当。共著者：中村昭雄(大東文化大学)、土井幸平(大東文化大学)、湯本隆(板橋区)、谷津浩史(板橋区)、矢嶋吉雄(板橋区)、森下貴博(板橋区)。A5版、総頁117頁。
53	刊行にあたって：設立20周年を迎えて	単著	2008.03.00	経済研究第21号(大東文化大学経済研究所)	
54	刊行にあたって	単著	2008.03.00	大東文化大学経済研究所報第22号(大東文化大学経済研究所)	
55		単著	2008.03.00	『2007年度大東文化大学経済学会学生懸賞論文集』(大東文化大学経済学会)	大東文化大学経済学会編集委員会編「刊行の辞」(1頁)
56	現代社会と消費者問題	単	2008.04.00	「東松山市きらめき市民大学平成20年度第1学期」講義(東松山市きらめき市民大学)	
57	特集 消費者新時代	共著	2008.05.00	月刊消費者 No.585 (2008.5)(財団法人日本消費者協会)	【対談】これからの消費者と企業(3～10頁)、中村年春／早川克巳。
58	特集 2008年の消費者問題	共著	2009.01.00	月刊消費者 No.593 (2009.1)(財団法人日本消費者協会)	【座談会】2008年の消費者問題にモノ申す(17～23頁)。中村年春(司会)／市川まりこ／卯月洋史／近本聡子／山田英郎。
59	連載 言わせてもらえば(第24回)	単著	2009.03.00	月刊消費者 No.595 (2009.3)(財団法人日本消費者協会)	消費者の権利を実現できるか消費者庁(43頁)

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.10.00	～	現在	日本労働法学会会員
2	1977.10.00	～	現在	日本社会保障法学会会員
3	1978.01.00	～	現在	日本経済法学会会員
4	1979.12.00	～	現在	日本私法学会会員
5	1984.10.00	～	現在	日本消費者教育学会会員(平成2年度～平成5年度評議員、平成6年度～平成10年度理事・東北支部長、平成11年度～平成13年度常任理事・東北支部長、平成14年度～現在学会論文査読委員、平成20年度～現在評議員)
6	1985.10.00	～	2006.03.00	東北法学会会員
7	1990.11.00	～	現在	青森県消費者問題研究会会員(1990.11.00～2002.03.00 会長、2002.04～現在 顧問)
8	1992.09.00	～	現在	東北経済法研究会会員
9	1994.11.00	～	現在	公益事業学会会員(平成18年度～現在評議員)
10	1996.11.00	～	2008.10.00	国際消費者法学会日本フォーラム会員
11	1998.10.00	～	現在	青森県廃棄物処理施設の設置許可に係る生活環境保全等に関する専門家(青森県) 専門委員
12	1999.01.00	～	2005.12.00	青森法学会会員(平成11年度～平成14年度理事)
13	1999.12.00	～	現在	生活経済学会会員
14	2000.05.00	～	現在	日本法政学会会員
15	2000.09.00	～	2007.03.00	青森県環境保全施策推進協議会(青森県) 委員
16	2000.10.00	～	2004.09.00	青森県運営適正化委員会(同委員会) 委員
17	2000.10.00	～	2004.09.00	青森県運営適正化委員会苦情解決部会(同委員会) 委員(2000.10.00～2004.09.00 部会長)
18	2001.01.00	～	現在	特定非営利活動法人NPO推進青森会議会員(2001.01.00～現在 理事長)
19	2001.10.00	～	現在	特定非営利活動法人気候ネットワーク会員
20	2002.01.00	～	現在	特定非営利活動法人青森県消費者協会会員(2002.01.00～2006.05.00 理事・会長、2006.05.00～2008.03.00 特別会員、2008.03.00～現在 会長)
21	2002.09.00	～	現在	特定非営利活動法人グリーンエネルギー青森会員
22	2002.11.00	～	2007.03.00	市民自然エネルギー株式会社監査役
23	2003.04.00	～	2006.03.00	特定非営利活動法人エココミュニティ・ネットワーク会員
24	2003.04.00	～	2007.03.00	全国消費者協会連合会役員(2003.04.00～2005.03.00 理事、2005.04.00～2007.03.00 監事)
25	2003.04.00	～	現在	財団法人日本消費者協会役員(2003.04.00～2009.03.00 理事、2009.04.00～現在 理事・会長)
26	2004.03.00	～	2006.03.00	青森・岩手県境不法投棄事案に係る風評被害認定委員会(青森県) 委員
27	2004.04.00	～	2008.03.00	大東文化大学・板橋区地域連携研究(地域デザインフォーラム) 共同研究員
28	2004.06.00	～	現在	日本消費経済学会会員
29	2005.02.00	～	2007.03.00	青森県消費者トラブル防止ネットワーク会員(2005.02.00～2007.03.00 会長)

30	2005.02.00	～	2007.03.00	青森県生活者ネットワーク協議会委員（2005.02.00～2007.03.00 会長）
31	2005.06.00	～	2005.12.00	板橋区産業振興構想策定検討会（板橋区産業振興構想策定委員会）委員（2005.06.00～2005.12.00 座長）
32	2005.06.00	～	2007.03.00	財団法人 日本消費者協会あり方懇談会委員（2005.06.00～2007.03.00 座長）
33	2005.09.00	～	2005.12.00	板橋区空き店舗活用コンテスト、コミュニティビジネス・コンテスト合同審査会（東京都板橋区）合同審査員（2005.09.00～2005.12.00 会長）
34	2006.01.00	～	2006.03.00	板橋区立企業活性化センター指定管理者選定委員会（東京都板橋区）委員（2006.01.00～2006.03.00 委員長）
35	2006.04.00	～	2008.03.00	大東文化大学・板橋区地域連携研究（デザインフォーラム）運営委員会（大東文化大学・東京都板橋区）委員（2006.04.00～2008.03.00 大学代表運営委員）
36	2006.09.00	～	2007.03.00	板橋区コミュニティビジネス・コンテスト審査会（東京都板橋区）審査員（2006.09.00～2007.03.00 会長）
37	2007.01.00	～	2009.03.00	生活設計と生命保険に関する学校教育研究会（財団法人生命保険文化センター）委員（2007.01.00～2009.03.00 座長）
38	2007.04.00	～	現在	特定非営利活動法人消費者機構日本会員
39	2007.05.00	～	2007.08.00	社団法人全国はちみつ公正取引協議会第三者委員会（同協議会）委員（2007.05.00～2007.08.00 委員長）
40	2007.08.00	～	2008.04.00	東アジア地域国際シンポジウム代表
41	2007.08.00	～	現在	社団法人全国はちみつ公正取引協議会役員（2007.08.00～現在 理事）
42	2007.10.00	～	2007.12.00	板橋区コミュニティビジネス・コンテスト審査会（東京都板橋区）審査員（2007.10.00～2007.12.00 会長）
43	2008.02.00	～	2009.01.00	板橋区「自治力UP」推進協議会専門部会（同協議会）委員（2008.02.00～2009.01.00 部会長）
44	2008.03.00	～	現在	社団法人全国はちみつ公正取引協議会規約委員会（同協議会）委員
45	2008.11.00	～	現在	日本消費者法学会会員
46	2009.04.00	～	現在	全国消費者協会連合会役員（2009.04.00～現在 会長）

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科		職名	教授	氏名	花輪 宗命	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
1) 平成 17 年度板橋グリーンカレッジ大学院「福祉・健康コース」			2005.05.20	2005 年 5 月 20 日～12 月 2 日 グリーンカレッジ修了生 17 名に対し大学院レベルの演習を実施				
2) 平成 19 年度板橋区公開講座			2007.12.01	第 27 回大東文化大学経済研究所シンポジウムと連携して開催された板橋区の公開講座 (区民対象) 講義				
3) 寝屋川市管理職候補者研修			2008.11.15	寝屋川市の係長昇任前の職員に、地方行財政の課題発見と解決策の立案技法を指導				
4 その他教育活動上特記すべき事項								
1) 阪神 9 市 1 町税務専門研修			2007.11.16	阪神 9 市 1 町税務専門職員に対し、近年の税財政制度改革の動向を解説				
2) 寝屋川市管理職候補者研究			2007.11.17	寝屋川市の管理職候補者に対し、近年の地方行財政改革の動向を解説				
3) 石川県地方行財政セミナー「地域間格差の拡大と分権型社会への転換」			2008.08.20	石川県の幹部職員に対し、近年の地方行財政改革の動向を踏えた政策形成能力育成研修 (演習形式)				
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
論文								
1 三位一体改革における税の役割とそのあり方	単	2004.10.00	『税』10月号ぎょうせい	三位一体改革を実現する上で、国から地方への税源移譲をいかに進めるべきかについて論考				
2 普通税と目的税～財政学的視点からの考察～	単	2005.03.00	『税』3月号ぎょうせい	消費税の目的税化が議論されている中で、目的税の意義を財政学的視点から考察				
3 ペイオフの全面解禁と地方自治体の財政運営	単	2005.07.01	『群馬自治』群馬県自治協議会	ペイオフの全面解禁に伴い、地方自治体は、公金管理をどのようにすべきかについて、解説				
4 基礎税率部分を地方、累進税率部分を国の二層制に	単	2005.10.00	『税』10月号ぎょうせい	国から地方への所得税源移譲の進め方についての考察と提案				

5	税財源の地方間格差とその対応～英国の分権改革を参考に今後の課題を考える	単	2007.07.00	『税』7月号	地方分権改革の推進に伴って顕著になってきた税財源の地方間格差を是正する方策に就て、類似の課題に取り組んでいる英国の試みを参考に、今後の改革の方向を探究した。
6	「わが国の地方行政改革とブレア政権の分権改革の教訓」	単	2008.07.25	経済論集第91号	18頁
その他					
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1985.04.00	～	現在	日本財政学会会員（平成18年度～平成19年度理事）	
2	2000.10.00	～	現在	地方財政学会会員	
3	2001.03.00	～	現在	日本不動産学会会員	
4	2004.04.01	～	2004.09.30	板橋区行政評価委員会委員	
5	2004.04.01	～	2004.11.30	独立行政法人国際観光振興連盟通訳案内業国家試験 委員	
6	2008.00.00	～	2010.03.31	戸田市行政評価委員会副委員長	

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	馬場 靖雄	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において高い評価を得た。平均値 3.8 (5 段階評価)。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 社会福祉士養成講座編集委員会編、新・社会福祉士養成講座 3『社会理論と社会システム』(中央法規)		2009.03.00		第 2 章第 2 節「法と社会システム」(56-68 頁)を担当。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『理論社会学の可能性』	共著	2006.02.06	新曜社	第 5 章「機能分化の社会理論」(pp.94-112)を担当。従来の社会学における機能分化論との対比のもとで、ルーマンの「機能分化した社会としての近代社会」という議論の独自性を明らかにする。共著者：富永健一、盛山和夫、徳山彰他			
2 『現代倫理事典』	共著	2006.12.00	弘文堂	共著者：大庭健、井上 達夫、川本隆史 他 「ルーマン、ニクラス」の項 (874-875 頁)を担当。			
3 『社会学のアリーナへ』	共著	2007.11.00	東信堂	共著者：友枝敏雄、厚東洋輔、花野裕康 他 第 1 章「社会学と社会システム論」(35-62 頁)を担当。社会をひとつのまとまり (システム) として捉え、その外側に位置するより複雑で流動的な「環境」と関連づけようとする発想を分析・批判する。			
4 『社会の構造と変動』	共著	2008.07.00	世界思想社	共著者：井上俊、伊藤公雄 他 「自己言及するシステムールーマン『社会システム』」(85-94 頁)を担当。			
論文							
1 「機能分化と『法の支配』」	単著	2005.03.30	東京大学社会科学研究所紀要第 56 巻 (5・6 合併号) pp.27-48	機能分化した近代社会では法の支配は社会の全域に及ぶが、それはあくまで法的コミュニケーションが生じている場合にかぎってのことである。近代社会は中心も頂点もない社会であり、法もまた多くの機能システムのひとつにすぎず、制御中枢ではありえない。			
2 「バウマンとルーマンの『モダニティ』」	単著	2007.06.25	社会学史研究第 29 号 pp.39-55	ジグムント・バウマンとニクラス・ルーマンそれぞれの理論における近代社会の特徴とその変容に関する論点を整理し、前者が近代社会の変容を、後者がその構造的持続性を強調していることを明らかにする。			
その他							

1	ニクラス・ルーマン 『社会の芸術』	単著	2004.10.19	法政大学出版局	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1986.05.00	～	現在	日本社会学会会員（1986.8.10～現在）、 研究活動委員（2008.3.1～2010.2.28）	
2	2005.04.01	～	2007.03.31	人事院国家公務員試験 I 種出題専門委員	

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	本間 修	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 授業の理解度と質問への対応		2004.04.00		(2004年4月～現在) 毎回の授業終了時に、授業の理解度を試す質問と質問をレポート用紙に記入させ、次回の授業時にフィードバックする。			
2) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価結果に対する学生へのフィードバック			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
論文							
1 ワークモチベーションを考える	単著	2006.08.00	特技懇 No.242、特許庁技術懇話会発行	職務上のモチベーションを高めるためには、給与等の外発的動機づけのみでは不十分であり、欲求等の内発的動機づけをいかに強化するかが重要である。本稿ではマズローの欲求階層説を基に、日本の組織内対人関係等を具体的に論じ、ワークモチベーションを高めていく方策を考察した。			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1969.00.00	～	現在	日本心理学会昭和59年度～平成2年度 代議員			
2	1984.00.00	～	現在	日本社会心理学会会員			
3	1991.00.00	～	2005.03.00	日本アルコール精神医学会平成4年度～平成12年度 評議委員			
4	1994.00.00	～	2005.03.00	日本消費経済学会会員			
5	2008.04.00	～	現在	鳩山町地域公共交通協議会委員			

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	松村 文武	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大東・立教・法政 3 大学国際経済ゼミ合同発表会		2004.12.10		(2004 年 12 月以降毎年 1 回)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『国産化の経済分析』 (第 3 版)		2005.09.22	岩波書店				
論文							
1 「ドル危機前後の米 国国際収支統計につ いて」	単著	2004.10.01	『世界経済評論』	前記 2002 年『経済論集』拙著への批判に対する反批判論文			
2 「貿易を通ずる消費 の世界的偏重—世紀 転換期米国の経済ユ ニラテラリズム—」	単著	2004.10.10	『国際経済』(55 号日本 国際経済学会編)	2004 年度日本国際経済学会全国大学共通論題報告の論文化			
3 巻頭言：選暦を迎えた 戦後世界経済	単著	2005.09.00	世界経済評論	第 2 次世界大戦後の世界経済を大局的に回想。			
4 巻頭言：再考 ドルの 持続可能性	単著	2006.08.00	世界経済評論	基軸通貨ドルの可能性と限界を再検討。			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1 1998.10.20 ~ 2008.10.01		国際経済学会常任理事					

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	教授	氏名	渡部 茂	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業内容に関係なく書物を読み、その概要と読後感を報告する		2000.04.01	(2000年4月1日～現在)ゼミの授業の内容に関係なく、毎月、書物を2冊読み、その概要と読後感を報告させ、読解力や文章構成を養成している。				
2) ゼミの授業を含む活動内容をHP上で公開		2003.02.01	(2003年2月1日～現在)HP上でゼミの活動内容を公開して、さまざまな情報を提供すると共に、学生のゼミ選択の一部としている。 (http://www.daito.ac.jp/~swatabe/framepage2.htm)				
3) 大東文化大学授業評価		2004.07.00	大東文化大学授業評価(平成16年6～7月実施)において、大人数授業では中位の評価(5段階評価の3.4)、少人数授業では上位の評価(4.15)を得た。				
4) 大東文化大学授業評価		2006.12.00	大東文化大学授業評価(平成18年12月実施)において、高い評価を得た。平均値4.85(5段階評価)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) トーマスR・マイケル『マクロ経済理論』(翻訳)		2004.09.20	学文社 講義の教材として使用。筆者は序文、第1章、第2章を担当。総頁数275頁中33頁。				
2) 『日本経済の経済学』		2005.04.10	学文社 ゼミ・講義の教材として使用。筆者は第1章、第6章、第11章、第12章を担当。総頁数255頁中82頁。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『第三版 日本経済の経済学』	編著	2005.04.10	学文社	日本経済の現状と課題についての論理的・実証的分析◎渡部茂：第1、6、11、12章 末繁宏造：第2章 中村宗悦：第3章 中島正人：第4、9章 大杉由香：第5章 上遠野武司：第7、8章 斉藤真事：第10章 総頁数255頁中82頁。			
論文							
1 「環境クラスター試論」	単著	2005.03.25	大東文化大学経済論集第84号	エコ・ビジネスを中心としたクラスターについての試論 総頁数293頁中19頁。			
2 「環境問題と消費者の意識変革」	単著	2006.03.00	板橋区環境白書(板橋区)	環境に関する消費者の意識変革の実態分析 総頁数148頁中6頁。			
3 「社会的正義はなぜ正しくないのか」	単著	2008.02.02	F.A.ハイエク『法と立法と自由II』(篠塚慎吾訳)春秋社、2008所収	新版解説であり、「社会的正義」という言葉の虚構性を明らかにした。総頁数279頁中9頁。			

その他					
1	エクステンションセンター講演「楽しい焼酎談義」	単	2004.05.08	大東文化大学オープンカレッジ	
2	アントワヌ・ルベイロ『ワルラスの経済思想』(抄訳)	単著	2004.07.00	大東文化大学経済論集第83号	ワルラス経済学の思想的統一性を詳細な分析によって明らかにした書物の抄訳 総頁数 131 頁中 21 頁。
3	トーマスR. マイケル『マクロ経済理論』	共著	2004.09.20	学文社	マクロ経済理論を単純な数学モデルで解説 総頁数 275 頁中 33 頁。
4	講演「日本経済再生への道」	単著	2005.01.00	グリーンカレッジ(板橋区)	平成不況の真の原因と現代日本経済の課題
5	シンポジウム「地球温暖化これからの取り組み」	単著	2005.02.05	板橋グリーンホール	コーディネーターとしての発言
6	講演「高齢社会における高齢者の実像と新たな役割」	単著	2005.04.11	板橋区グリーンカレッジ入学式	元気な高齢者の実像を明らかにし、「高齢者の明日は日本の明日」であることを主張
7	講演「日本経済再生への道」	単著	2006.01.00	グリーンカレッジ(板橋区)	現代日本経済の課題と将来展望を分析
8	シンポジウム「地球温暖化への地域からの取り組み」	単著	2006.02.04	板橋区立文化会館	シンポジウム「地球温暖化への地域からの取り組みについて」コーディネーターとして発言
9	アントワヌ・ルベイロ『ワルラスの経済思想』	共著	2006.03.30	慶応義塾大学出版会	ワルラス経済学の思想的統一性を明らかにした野心的著作、渡部茂(序論、第1、第2、第3章)、石橋春男(第4、5、6章、結論、略伝) 総頁数 337 頁中 167 頁。
10	講演「日本経済の現状と課題」	単著	2007.01.00	グリーンカレッジ(板橋区)	日本経済の現状と課題について平易に解説
11	シンポジウム「地球温暖化対策への地域からの取り組みについて」	単著	2007.02.17	板橋区立文化会館	コーディネーターとして発言
12	フィリップ・マッカ編著『企業立地行動の経済学』	共著	2007.02.18	学文社	産業立地についてさまざまな角度から分析 総頁数 223 頁中 48 頁。
13	講演「日本人の心と神」	単著	2007.02.21	成増アクトホール	日本人の心にDNAとして受け継がれてきた神について解説
14	講演「日本経済の現状と課題」	単著	2008.01.00	グリーンカレッジ(板橋区)	本格的な成長軌道に乗れない日本の問題点を解説
15	シンポジウム「地球温暖化対策への地域からの取り組みについて」	単著	2008.02.16	板橋区立文化会館	コーディネーターとして発言
16	F.A.ハイエク新版『法と立法と自由』	単著	2008.03.00	春秋社	旧版に修正とともに新たな解説が加わった。「小さな政府論」の古典的名著 総頁数 296 頁。
17	シンポジウム「低炭素社会へ向けた地域からの取り組みについて」	単著	2009.02.14	板橋グリーンホール	コーディネーターとして発言

III 学会等および社会における主な活動

1	1975.00.00	～	現在	日仏経済学会会員
2	1977.00.00	～	現在	金融学会会員
3	1978.00.00	～	現在	日本経済学会会員
4	1983.00.00	～	現在	日本経済政策学会会員
5	1991.00.00	～	現在	経営行動学会会員

6	1992.00.00	～	現在	日欧社会経済学会会員
7	1999.00.00	～	現在	日本消費経済学会会員
8	2000.04.01	～	2006.03.31	地域デザインフォーラム（板橋区と大東文化大学の共同研究）第2、第3分科会研究員
9	2001.04.01	～	現在	板橋区高齢者大学校・板橋グリーンカレッジ運営協議会委員
10	2001.10.01	～	現在	エコポリス板橋環境行動会議委員（座長）
11	2002.04.00	～	現在	板橋区環境保全賞選考審査会審査委員
12	2004.07.28	～	2005.09.09	板橋区長期基本計画審議会委員
13	2005.10.18	～	現在	司法試験委員会考査委員
14	2006.06.01	～	現在	板橋区産業活性化推進会議委員（委員長）
15	2007.11.19	～	2009.01.30	板橋区「自治力UP」推進協議会委員（副委員長）
16	2008.04.01	～	現在	日本私立大学協会理事
17	2008.06.02	～	現在	板橋区文化・国際交流財団理事
18	2008.09.01	～	現在	日本私立学校振興・共済事業団共済審査会委員
19	2008.11.10	～	現在	板橋区「(仮称) シニア活動センター」構想策定協議会委員（委員長）

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	准教授	氏名	大野 秀樹	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 早稲田大学教育学部英語英文学科 非常勤講師		2006.00.00				
2) 早稲田大学教育学部英語英文学科 非常勤講師		2007.00.00				
3) 早稲田大学教育学部英語英文学科 非常勤講師		2008.00.00				
4) 早稲田大学教育学部英語英文学科 非常勤講師		2009.00.00				
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 英語学習と「討論會」単独発表		2005.03.20	日本英学教育史学会			
2) シンポジウム・タイトル『クリティカル・シンキングと言語教育』 単		2005.09.00	第 44 回大学英語教育学会全国大会 (於玉川大学) 議論の前に熟考する: 英語授業とクリティカル・シンキング (シンポジウム・パネリスト全 4 名)			
3) クリティカル・シンキングと EAP 単		2006.04.15	大学英語教育学会月例研究会 (東京・JACET 事務所) 個人学会発表			
4) 学生への調査にみられる大学英語教育の実態と今後		2006.09.01	大学英語教育学会 シンポジウム・パネリスト (全 5 名)			
5) 「クリティカル・シンキングと大学英語教育」		2007.06.23	大学英語教育学会・関東支部大会第二回大会・プレリミナリー・セッション (於立教大学) パネリスト (全 5 名)			
6) The Implementation of TBLT for Critical Thinking: A Debating Class in a EFL Context		2007.09.22	The 2nd International Conference on Task-Based Language Teaching (at University of Hawaii at Manoa) Poster Presentation			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) JACET(大学英語教育学会)Critical Thinking 研究会 メーリングリスト開設		2004.04.00				
2) 大東文化大学経済学部英語教員用メーリングリスト開設		2004.04.00				
3) 大東文化大学英語分科会 (部会) のメーリングリスト開設		2004.04.00				
4) 第 30 回ディベートセミナー企画開催		2004.05.09	日本ディベート協会 全国の社会人対象			
5) 大東文化大学経済学部英語教員用報告書(大東文化大学経済学部における英語教育) 出版企画		2004.07.00				
6) 授業講評・カリキュラム作成指導		2004.10.18	文部科学省 スーパーイングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール 岐阜・高山西高校アドバイザー			
7) 第 31 回ディベートセミナー・インストラクター		2004.10.31	日本ディベート協会			
8) 審査、開会の辞		2004.11.13	第 3 回岐阜県高校生英語ディベート大会審査委員			

9) 授業講評・カリキュラム作成指導	2005.00.00	文部科学省スーパーイングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール岐阜・高山西高校アドバイザー 11月 高校生英語ディベート大会ジャッジ含み、3回
10) ディベートセミナー企画	2005.00.00	日本ディベート協会 2回
11) 第32回ディベートセミナー企画開催	2005.01.30	日本ディベート協会 全国の社会人対象
12) JACET(大学英語教育学会)Critical Thinking 研究会 海外招待講演者開催	2005.02.08	大東文化大学 信濃町校舎
13) 授業講評・カリキュラム作成指導	2005.02.20	文部科学省 スーパーイングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール岐阜・高山西高校アドバイザー
14) 平成17年度初任行政研修Aコース(人事院)「政策ディベート」	2005.05.16	講義(5月16日)、実習(5月19日)
15) 日本教科教育学会	2005.12.00	論文査読(英文)
16) 大学英語教育学会クリティカル・シンキング研究会 研究会開催	2006.05.13	
17) 大学英語教育学会クリティカル・シンキング研究会 研究会開催	2006.06.10	
18) 大学英語教育学会クリティカル・シンキング研究会 研究会開催	2006.09.14	
19) 全国の社会人対象のセミナー企画開催	2006.10.22	日本ディベート協会
20) 運営指導委員会	2006.11.00	文部科学省スーパーイングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール高山西(岐阜)
21) 第一回全国高校生英語ディベート大会	2006.12.17	審判、来賓
22) 全国の社会人対象のセミナー企画開催	2007.02.04	日本ディベート協会
23) 第41回日本ディベート協会ディベートセミナー	2007.05.06	(オリンピックセンター) 主催
24) 第42回日本ディベート協会ディベートセミナー	2007.08.26	(大東文化会館) 主催
25) 第2回 全国高校生英語ディベート大会	2007.12.15	2007年12月15・16日 於名古屋学院大学 来賓・審判
26) 第43回日本ディベート協会ディベートセミナー	2008.01.27	(大東文化会館) 主催・講演・講師
27) JACET(大学英語教育学会)Critical Thinking 研究会 研究会開催	2008.05.24	大東文化大学 板橋キャンパス
28) JACET(大学英語教育学会)Critical Thinking 研究会 研究会開催	2008.06.14	早稲田大学 理工学部
29) 大東文化大学経済学部学生用、TOEICBridge 導入企画	2008.07.00	
30) 大学英語教育学会紀要(JACET Journal)	2008.07.00	論文査読(英文)
31) JACET(大学英語教育学会)第47回全国大会	2008.09.00	2008年9月11~13日 運営委員 早稲田大学
32) 第3回埼玉いなほカップ高校生英語ディベートコンテスト	2008.10.03	県民活動総合センター ジャッジ
33) 第45回JDAディベートセミナー	2008.10.26	大東文化会館 開催、およびインストラクター
34) 大東文化大学第二回FDフォーラム	2008.11.07	大東文化大学板橋キャンパス 開催
35) 第3回全国高校生英語ディベート大会	2008.12.20	岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス、2008年12月20, 21日 ジャッジ

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 英語による教育 ディベートの歴史的考察－日本における展開を中心に－	単著	2004.10.00	広島大学論文博士・博士論文（教育学）	
2 高千穂大学生の English Communication 能力育成のための英語教育システムの構築	共	2005.03.00	高千穂大学総合研究所	経済学部の英語教育－大東文化大学を例として－（pp.60-71）担当箇所
3 ビジネス系大学の英語教育イノベーション：ESPの視点から	共	2005.11.00	白桃書房	経済学部の英語教育－大東文化大学を例として－（pp.60-71）＜担当箇所＞
論文				
1 明治期「討論」関連書籍の分析－『曾議指南』と『西洋討論軌範』－		2007.07.25	経済論集 大東文化大学経済学会	
2 The Ennis-Weir Critical Thinking Essay Test の採点基準に関する考察		2007.08.10	クリティカル・シンキングと大学英語教育第1号（CD-ROM）編集 大学英語教育学会（JACET）Critical Thinking 研究会	大野秀樹 熊本たま 松本佳穂子 pp.36-48 及び同書の編集
その他				
1 英語で発信、授業をデザイン	単著	2004.06.00	英語教育（大修館書店）	pp.22～23 同雑誌6月号のなかからひとつ選ばれて以下の「英語教学ニュース」に掲載されている。 http://www.eigokyoikunews.com/eigokyoiku/essay/200406/index.shtml
2 大東文化大学経済学部における英語教育 I	共編著	2005.03.31	モリモト印刷	
3 大東文化大学経済学部における英語教育 II	共編著	2006.03.00	モリモト印刷	
4 大東文化大学経済学部における英語教育 III	共編著	2007.03.00	モリモト印刷	
5 わが国の外国語・英語教育に関する実態の総合的研究－学生編－		2007.03.00	大学英語教育学会実態調査委員会編	担当箇所 pp.74～85
6 大東文化大学経済学部における英語教育 IV	共編著	2007.03.10	モリモト印刷	
7 「可視化と大学教育－何を評価するのか－」	単著	2008.10.00	FDニュース 第四号、大東文化大学FD委員会編	
8 大東文化大学経済学部における英語教育 V	編著	2009.03.00	モリモト印刷	
III 学会等および社会における主な活動				
1	現在		Tanabe Applied Linguistics Kenkyukai 会員	

2	現在	外国語教育メディア学会会員
3	現在	広島大学英語教育学会会員
4	現在	全国英語教育学会会員
5	現在	大学英語教育学会（JACET）会員、平成14年7月～現在 研究企画委員、平成16年4月～現在 クリティカル・シンキング研究会代表、English for Specific Purposes (ESP) 研究会、月例研究会委員会、実態調査委員会委員
6	現在	日本コミュニケーション学会会員、平成14年7月～平成16年6月運営委員
7	現在	日本シミュレーション&ゲーミング学会（授業と教材研究部会）会員
8	現在	日本ディベート協会理事、平成15年4月～現在、普及活動委員会
9	現在	日本英語コミュニケーション学会会員
10	現在	日本英語教育史学会会員
11	現在	日本教科教育学会会員
12	現在	日本英学史学会会員
13	現在	International Society for the History of Rhetoric 会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	准教授	氏名	川野 幸男	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 “Generational Differences in Mexican-American's Earnings: Comparing the Second and Third Generation”(with Katharine M. Donato and Charles Tolbert).		2005.00.00	Annual Report 2004, CSSI, COE Program, Tohoku University	pp.113-134.		
2 “Trade and Trade Liberalization,”(with Benjamin Brewer)		2005.00.00	Encyclopedia of Economic Sociology. Edited by Jens Beckert and Milan Zafirovski, London: Routledge	pp.672-674.		
3 「移民後世代の適応問題：世代間格差の日米比較」		2005.00.00	『経済研究』第19号 (大東文化大学経済研究所)	川野幸男	pp.35-47.	
4 「メキシコ系アメリカ住民の停滞的適応の分析：2世、2.5世、3世の比較研究」		2005.00.00	『経済論集』第86号 (大東文化大学経済学会)	川野幸男	pp.51-75.	
5 “Trade and Trade Liberalization,”		2005.00.00	in Encyclopedia of Economic Sociology. Edited by Jens Beckert and Milan Zafirovski. London: Routledge	Kawano, Yukio and Benjamin Brewer. pp. 672-674.		

6	“Generational Differences in Mexican-American's Earnings: Comparing the Second and Third Generation”	2005.00.00	Annual Report 2004, Center for the Study of Social Stratification and Inequality (CSSI), The 21st Century Center of Excellence (COE) Program, Tohoku University	Kawano, Yukio, Katharine M. Donato and Charles Tolbert. pp. 113-134.
7	移民後世代の適応問題：世代間較差の日米比較	2005.03.00	大東文化大学経済研究 19号	
8	メキシコ系アメリカ住民の停滞的適応の分析：2世、2.5世、3世の比較研究	2005.03.00	大東文化大学経済論集 86号	
9	Social Determinants of Immigrant Selection: The United States, Canada and Australia	2006.00.00	NY: LFB Scholarly Publishing.	Kawano, Yukio.
10	“Destination and Ethnic-Origin Effects on Immigrants' Earnings: A Multi-level Analysis”	2007.00.00	『経済論集』第88号（大東文化大学経済学会）	Kawano, Yukio. pp.23-42.
11	“Recent Immigrant Settlement in the Nonmetropolitan United States: Evidence from Internal Census Data”	2007.00.00	Rural Sociology (巻号ページ未定)。	Donato, Katharine M., Charles Tolbert, and Yukio Kawano.
12	“Trade Globalization since 1795: Waves of Integration in the World-System,”	2007.00.00	Paul James (ed.), Globalization and Economy vol-1. NY: Sage Publications.	Chase-Dunn, Christopher, Yukio Kawano and Benjamin Brewer.
13	“Generational Differences in Mexican-American's Earnings: Comparing the Second and Third Generation”	2007.00.00	Yoshimichi Sato (ed.), Deciphering Stratification and Inequality: Japan and Beyond, Trans Pacific Press.	Kawano, Yukio, Katharine M. Donato and Charles Tolbert.
14	「在日コリアンの高齢化とエスニシティ」	2007.00.00	川村千鶴子、宣元錫編 『異文化間介護と多文化共生—誰が介護を担うのか』 明石書店。	川野幸男 第3章
15	“Changing Faces, Changing Places: The Emergency of Non-Metropolitan Immigrant Gateways.”	2008.00.00	Ch.3 in D. Massey and C. Hirshmann (ed.), New Faces in New Places: The Changing Geography of American Immigration, NY: Sage Publications.	Donato, Katharine M., Charles Tolbert, Yukio Kawano, and Alfred Nucci.
その他				
III 学会等および社会における主な活動				
1	2003.00.00	～	2005.00.00	American Sociological Association (ASA)アメリカ社会学会
2	2003.00.00	～	現在	Population Association America (PAA)アメリカ人口学会

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	准教授	氏名	田中 達也	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 立正大学地球環境科学部非常勤講師 (日本史概論)		2007.09.21	2007年9月21日～2008年3月31日			
2) 國學院大學文学部非常勤講師 (地誌学 I)		2008.09.22	2008年9月22日～現在に至る			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 景観形成の歴史地理学—関東縁辺の地域特性—		2008.03.31	参考書 二宮書店 共著者 ©石井英也、阿部綾子、新井敦史、岡村治、加藤晴美、川崎俊郎、幸田一男、河野敬一、清水克志、清水ゆかり、住田勝宏、椿真智子、中西僚太郎、中嶋則夫、乃木俊介、原田洋一郎、平野哲也、船杉力修、三木一彦、満田宏子、山澤学、山下須美礼、山下琢巳、湯澤規子、六本木健志、渡辺康代。 A 4版、総頁 271 頁。 本人担当分 103～108 頁			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 鹿沼市史叢書 10 鹿沼の絵図・地図	共著	2005.03.25	鹿沼市	共著者 石井英也、川崎俊郎、河野敬一、島野安雄、関戸明子、中西僚太郎、原田洋一郎、平野哲也、山澤学。 A 4版、総頁 185 頁。本人担当分 75～77 頁、104～106 頁、120 頁。		
2 鹿沼市史 通史編 近世	共著	2006.03.25	鹿沼市	共著者 田中圭一、竹末広美、阿部昭、川田純之、船木明夫、六本木健志、水谷類、平野哲也、久保康顕、渡辺和、佐野かおり、有元修一、田村右品。 A 4版、総頁 514 頁。本人担当分 46～70 頁、173～178 頁、258～262 頁		
3 景観形成の歴史地理学—関東縁辺の地域特性—	共著	2008.03.31	二宮書店	共著者 ©石井英也、阿部綾子、新井淳史、岡村治、加藤晴美、川崎俊郎、幸田一男、河野敬一、清水克志、清水ゆかり、住田勝宏、椿真智子、中西僚太郎、中嶋則夫、乃木俊介、原田洋一郎、平野哲也、船杉力修、三木一彦、満田宏子、山澤学、山下須美礼、山下琢巳、湯澤規子、六本木健志、渡辺康代。 A 4版、総頁 271 頁。本人担当分 103～108 頁		
論文						

1	中世末期の府川郷－ 開発と郷の解体－	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 121～137 頁	本研究では、武蔵国入間郡府川郷を事例に、中世末期における郷村の様相と近世村落への変化について検討した。近世の 8 か村に及ぶ領域をもつ地域単位であった府川郷は、中世末期に石田本郷・谷中・石田・菅間の各村が分離・自立することにより解体した。中世末期における石田本郷や菅間の検地に関与した谷中村の大野縫殿助が、在所の範囲を越えた広域的な開発の推進者であり、開発対象地における協力者との連携によりそれを実現させたことを明らかにするとともに、開発が中世郷の解体・再編をもたらしたと考えた。
2	中近世移行期における 東国村落の開発と 村落社会の変容	単著	2007.11.30	筑波大学博士（文学）学位 請求論文	本研究は、後北条氏領国下の武蔵国における個々の郷村での開発と、越後国岩船郡色部氏領における複数村落に及ぶ広域的な水田地帯を形成する開発を事例に、中近世移行期における東国村落の開発にともなう変容過程とその特質を検討した。当該期における開発は、その対象と形態が前代とは異なる革新性と、一郷村の枠に止まらない開放性をもち、旧来からの村落秩序からみて外在的・外縁的存在であるその推進者が重層的に関与することで実現した。新たな対象に基づく開発は、新たな集落の創出と連動し、旧来とは異なる耕地との結合関係をもつ家を成立させ、これを包摂する新たな村落社会を生み出した。
3	中世末期における湊 町の空間構成と社会 －越後国色部氏領に おける岩船町を事例 として－	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要第 47 号 1～21 頁。	越後国北部の岩船潟口に位置する岩船町は、中世末期には五日市・横浜・さかり口・新屋という来歴の異なる複数集落の集合体としての様相を呈し、これらは近世岩船町を構成する主要な町場の前身となった。また、当該期の岩船町は、農業・漁業や商品流通、各種加工業といった複合的な機能を有していた。当該期の岩船町がもつ空間構成や社会は、岩船潟沿岸の開発とそれにとりまなう集落の再編、周辺に位置する多様な機能をもつ村落の形成、遠隔地交流の活発化といった要因が関連しあうなかで形成されたものであった。
その他					
1	近世村落の形成過程 －鹿沼市域村落を事 例として－	単独	2006.08.26	栃木県歴史文化研究会第 16 回大会（栃木県立博物 館）	
2	学界展望 歴史地理 （中世）	単著	2007.06.28	人文地理第 59 巻第 3 号 53～54 頁	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1992.07.00	～	現在	歴史地理学会会員（2008.04.00～現在 編集委員）	
2	1994.06.00	～	2006.03.00	鹿沼市教育委員会鹿沼市史編さん調査員（近世史部会）	
3	1995.01.00	～	現在	人文地理学会会員	
4	1995.03.00	～	現在	日本地理学会会員	

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	准教授	氏名	内藤 二郎	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 東松山市きらめき市民大学講師		2003.00.00		(2003～2005 年)			
2) 全国市町村国際文化研究所「中国派遣」研修講師		2004.00.00		(2004 年～現在)			
3) 経済学部教務委員		2004.00.00		(2004～2005 年度、2009 年度～)			
4) 学長室員		2005.00.00		(2005～2008 年度)			
5) 大東文化大学経済研究所研究部会長		2006.00.00		(2006～2007 年度)			
6) 大東文化大学北京代表処運営委員		2007.00.00		(2007～2008 年度)			
7) 体連柔道部部长		2007.00.00		(2007 年度～)			
8) 経済学部改革推進委員		2008.00.00		(2008 年度～)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「中国の地方財政の構造的問題－債務問題を中心に－」	単著	2004.07.00	『経済論集』第 83 号 (大東文化大学経済学会)				

2	“Discussion on a New Framework for Regional Economic Cooperation in East Asia”－Mutual Cooperation of Regional Economic Zones in China and Japan－	単著	2004.10.00	Discussion Paper Series Institute of Economic Research Faculty of Economics Daito Bunka University	
3	「政策決定に関わる中央－地方関係－財政と人事面を中心に－」	単著	2005.03.00	『中国の政策決定システムの変化に関する研究会』（財務省委嘱調査）国際金融情報センター	
4	“Problems of the temporary housing as the emergency response for the Great Hanshin-Awaji Earthquake”	共著	2005.10.21	The International Conference on Public Administration October 21-22, 2005, Chengdu, China	(舟場正富氏、田端和彦氏との共著)
5	‘Toward Realizing True “Resident Participation”’	単著	2006.00.00	“Proceeding of 2006 International Conference on Public Administration” University of Electric science and Technology Press	p.905～914
6	「中国における地方行政改革と地方自治について－北京市石景山区魯谷の「大社区」改革を事例に」	共著	2006.00.00	『北東アジア研究』第10号（島根県立大学）	(張忠任氏との共著) *日本学術振興会科学研究費補助対象研究の成果
7	「再集権化を強める中国財政－その制度と実態－」	共著	2007.00.00	『地方財政運営の新機軸』（日本地方財政学会研究叢書）勁草書房	(張忠任氏との共著)
8	「中国のマクロ経済動向の政治経済分析－地方の動向が及ぼす影響－」	単著	2007.02.00	『国際情勢』No.77（社）国際情勢研究会	
9	「財政／中国の経済環境の変容と展望－華南地域を中心に」	単著	2007.03.00	『中国のA S E A N接近と各国の対応』調査 中国の経済・外交戦略の実態と今後の東アジア』日本貿易振興会（ジェトロ）海外調査部	
10	「財政から見た中央－地方関係」	単著	2007.04.00	財務省財務総合政策研究所 中国研究会報告書	
11	“Intergovernmental Relation from the Fiscal Aspect in China-Reform movements and Tasks Compared to Japanese Experience.”	単著	2008.00.00	FRI Research Report Fujitsu Research Institute No.302	
12	'Intergovernmental Fiscal Relation in China-Reform movements and Tasks Compared to Japanese Experience'	単著	2008.00.00	“Economic Review Vol.12 No.2” Fujitsu Research Institute	
13	「中国の経済政策の課題とその背景－高度成長の裏で高まるリスク－」	単著	2008.02.00	『国際情勢』No.78（社）国際情勢研究会	

14	「从財政看中央和地方的關係－日本の改革動向及其对中国的后示」(中国語)	単著	2008.03.00	加藤弘之・丁紅衛著『日本經濟新論』第3章 中国市場出版社	
15	「転機を迎えた中国經濟－構造調整と政策転換の動向分析－」	単著	2009.02.00	『国際情勢』No.79 (社) 国際情勢研究会	
16	「行財政面からみた中央地方關係」	単著	2009.03.00	『中国經濟研究』第5巻 中国經濟学会	
17	「中国經濟を取り巻く内外環境の変化と展望」	単著	2009.03.00	外務省委託調査「中長期的な日米中戰略關係の展望に関する調査」報告書	
その他					
1	『マクロ經濟理論－ショートコース』(トーマス・R・マイクル著)	共訳	2004.09.00	大東文化大学經濟学研究会 訳 学文社	
2	「住民参加のまちづくりにおける大学の役割」		2005.03.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット No.11』 大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	
3	「再集権化を強める中国財政－その制度と実態」		2005.05.27	日本地方財政学会第13回大会(2005年5月27日・28日、大阪經濟大学)において報告	(張忠任氏と共同) *日本學術振興会科学研究費補助対象研究の成果の一部
4	“Problems of the temporary housing as the emergency response for the Great Hanshin-Awaji Earthquake”		2005.10.21	The International Conference on Public Administration October 21-22, 2005, Chengdu, China	
5	(書評)大西靖著『中国財政・税制の現状と展望－「全面的小康社会の実現」に向けた改革』(大藏財務協会)		2006.00.00	アジア研究第52巻1号所収	
6	「真の「住民参加」に向けて」		2006.03.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット No.15』 大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	
7	「中国を取り巻く政治經濟情勢と日本」(オピニオン)		2007.00.00	“Economic Review Vol.11 No.2”Fujitsu Research Institute	
8	『企業立地行動の經濟学』(フィリップ・マッカン編著)	共訳	2007.02.00	上遠野武司編訳 学文社	
9	「政府間財政關係の日中比較」		2007.09.10	国際政治經濟体系与東亜－国際學術研討会系列之八 「近代化過程中東亜三国的相互認識」 中国南開大学 日本研究所シンポジウム 2007年9月10・11日	
10	「中国經濟のゆくえ～二期目の胡錦濤政権の政策を検証する～」		2008.05.19	富士通総研經濟研究所特別企画カンファレンス(2008年5月19日、経団連会館)	
11	「行財政面からみた中央－地方關係」		2008.06.20	中国經濟学会第7回全国大会(2008年6月20日・21日、一橋大学)	

12	「転機を迎えた中国 経済 - 金融危機下の 改革動向」		2009.03.27	2009年日台東アジアフォー ラムー危機か転換か、金 融危機下の東アジア地域安 全保障ー台湾政治大学国 際関係研究センター
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	～	2009.03.00		平和安全保障研究所受託外務省委託調査「中長期的な日米中戦略関係の展望」委員
2	1997.07.00	～	現在	国際財政学会会員
3	1997.10.00	～	現在	日本財政学会会員
4	2000.07.00	～	現在	日本現代中国学会会員
5	2001.04.01	～	現在	アジア政経学会会員
6	2001.04.01	～	現在	国際公共経済学会会員 理事
7	2001.08.00	～	現在	日本中国アジア経済知識アドバイザー協議会アドバイザー
8	2002.04.00	～	現在	中国経済学会会員
9	2002.10.00			(財) 関西空港調査会第 287 回関西空港部会にて講演「中国経済の動向をどう捉えるかー 共存するチャンスとリスク」(新空港レビュー) 第 288 号所収 2002 年 10 月
10	2002.10.00			財務省財務総合政策研究所中国研究会にて講演「中国財政の課題と改革の視点」(財務省財 務総合政策研究所HP上に公開中)
11	2003.09.00			国際協力銀行受託調査「中国の地方財政に関する調査報告書」
12	2003.11.00			全国市町村国際文化研究所「中国派遣」講師(継続中)
13	2004.11.00			(財) 国際金融情報センター「中国研究会(主査: 小島朋之教授)(財務省委嘱)委員(～ 2005 年 3 月)
14	2006.04.00			(社) 国際情勢研究会「中国研究会」委員(継続中)
15	2006.04.00			東京都板橋区「行政評価委員会」委員(継続中)
16	2006.07.00			日本貿易振興機構・ジェトロ研究会委員(～2007 年 3 月)
17	2006.10.00			(株) 富士通総研経済研究所客員研究員(～2008 年 9 月)
18	2007.01.00			財務省財務総合政策研究所中国研究会にて講演「財政から見た中央ー地方関係」(財務省財 務総合政策研究所HP上に公開中)
19	2007.04.00			東京都立板橋有徳高等学校校連絡協議会委員(継続中)
20	2008.12.00	～	現在	財務省財務総合政策研究所「中国研究会」委員
21	2009.04.00	～	現在	21 世紀政策研究所中国研究プログラム委員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科		職名	准教授	氏名	濱本 知寿香	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 家裁調査官補 問題と対策 [改訂第5版]			2005.12.05	法学書院 法学書院編集部 B5版 全文 239 頁中、担当「社会福祉学」38-42 頁			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項 1) 熊谷市 長寿社会を楽しく生きる講座 講師 年金改革の動向について 熊谷中央公民館			2006.11.21				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 貧困と社会的排除－福祉社会を蝕むもの－	共著	2005.02.10	ミネルヴァ書房	岩田正美・西澤晃彦編著 B5版、全文 323 頁中 担当：第3章「収入からみた貧困の分布とダイナミックスーパーパネル調査にみる貧困変動－」(71-93 頁)			
2 Poverty and Social Welfare in Japan		2008.12.30	Trans Pacific Press	Masami Iwata, Akihiko Nishizawa 編著 全文 323 頁中、担当：The distribution and dynamics of poverty looked at according to income (the fluctuations of poverty based on a panel survey) 62-85 頁			
論文							
1 「子育て支援と住民参加」	単著	2005.03.31	『地域デザインフォーラム・ブックレット 住民参加』No.11	全 97 頁中 (69～79 頁)			
2 「保育サービスの多様化と福祉政策」	単著	2005.07.25	大東文化大学経済学会『経済論集』第 85 号				
3 「母子世帯の生活状況とその施策」	単著	2005.09.22	国立社会保障・人口問題研究所『季刊社会保障研究』、第 41 巻第 2 号				
4 『女性の「生活基盤」の形成・変動と福祉課題－「生活基盤不安定層」の類型化を中心に－』	単著	2006.03.00	平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金 (基礎研究 (B)) 研究成果報告書	全 276 頁中「パネル調査からみた離別母子世帯の住宅変動」(89～99 頁)			
5 「保育所保育料の地域格差－保育料の軽減率をもとに－」	単著	2007.07.25	大東文化大学経済学会『経済論集』第 89 号				
その他							

1	女性の貧困ダイナミックス	単	2004.05.22	社会政策学会第108回大会
2	家計研パネル調査からみた貧困の経験(岩田正美氏と共同発表)	共	2007.12.25	第7回パネル調査・カンファレンス(財団法人家計経済研究所主催、慶應義塾大学・大阪大学・お茶の水女子大学・一橋大学各21世紀COEプログラム共催)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1991.04.00	～	現在	日本家政学会会員
2	1996.05.00	～	現在	社会政策学会会員
3	1996.05.00	～	現在	生活経済学会会員
4	1996.10.00	～	現在	経済社会学会会員
5	1996.10.00	～	現在	日本社会福祉学会会員
6	1998.04.01	～	2005.03.31	生活経済政策研究会会員
7	2001.04.00	～	現在	大東文化大学経済学会会員
8	2001.04.01	～	現在	財団法人家計経済研究所委員
9	2004.04.01	～	2006.03.31	大東文化大学国際比較政治研究所兼任研究員
10	2005.04.01	～	2006.03.31	板橋区子育て支援者養成システム検討会委員
11	2007.12.16	～	現在	貧困研究会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	講師	氏名	田中 深雪	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2007.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 19 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.7 (5 段階評価)。			
2) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅳ』		2008.03.00		大東文化大学経済学部語学科目部会 岩澤勝彦、大野秀樹、田中深雪 他			
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.8 (5 段階評価)。			
4) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅴ』		2009.03.00		大東文化大学経済学部語学科目部会 岩澤勝彦、大野秀樹、田中深雪 他			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「CUBIC LISTENING: PUZZLE It Out—Second Edition」		2008.01.01		MacMillan LanguageHouse 社 (執筆協力者) ©Timothy Kiggell 著			
2) 「CUBIC LISTENING: SURPRISE, SURPRISE—Second Edition」		2008.01.01		MacMillan LanguageHouse 社 (執筆協力者) ©Timothy Kiggell 著			
3) 「CUBIC LISTENING: Over to Our Reporter—Second Edition」		2008.01.01		MacMillan LanguageHouse 社 (執筆協力者) ©Timothy Kiggell 著			
4) 『文部科学省検定高校教科書・英語Ⅱ』		2009.03.15		スクリーン・プレイ社 English Course II Screenplay (執筆協力者) ©スクリーンプレイ編集部 A4 版、総頁 172 頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「Tochigi English Teacher's Seminar in 2005」ワークショップ講師		2005.08.01		栃木県教育委員会平成 17 年度英語教員研修会 (中・県立学校教員) (栃木県総合教育センター) 受講者 50 名×2 クラス			
2) 「Tochigi English Teacher's Seminar in 2006」ワークショップ講師		2006.08.01		栃木県教育委員会平成 18 年度英語教員研修会 (中・県立学校教員) (栃木県総合教育センター) 受講者 40 名×2 クラス			
3) 第 3 回外国語授業研究ワークショップ招待講師		2006.09.00		学習院大学外国語教育研究センター講演会			
4) 「Tochigi English Teacher's Seminar in 2007」ワークショップ講師		2007.08.01		栃木県教育委員会平成 18 年度英語教員研修会 (中・県立学校教員) (栃木県総合教育センター) 受講者 40 名×2 クラス			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
1 『英語リスニングの「基礎トレ」』		単著	2004.11.00	講談社インターナショナル			
論文							
1 『通訳訓練法』を利用した大学での英語教育の実際と問題点』		単著	2004.12.00	『通訳研究』第 4 号 日本通訳学会		p.63-82	

2	「CALLシステムを利用したシャドーイング練習の指導方法について」	単著	2005.07.00	『外国語教育メディア学会第45回全国研究大会』外国語教育メディア学会	p.56-57
3	「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」	共著	2005.12.00	『通訳研究』第5号 日本通訳学会	p.285-310 ©染谷泰正、斎藤美和子、鶴田知佳子、田中深雪、稲生衣代
4	「プロ通訳者とコミュニティ通訳者—その折り合いをどうつけるのか、通訳教育とコミュニティ通訳の現場から考える」	単著	2005.12.00	『通訳研究』第5号 日本通訳学会	p.311-325
5	「CALL機材を利用した『英語同時通訳法』クラスの指導例」	単著	2006.03.00	『LET関東支部だより』第37号 外国語教育メディア学会	p.4
6	「マルチメディア時代の通訳訓練—CALLシステムの導入とその有効活用について」	単著	2006.12.00	『通訳研究』第6号 日本通訳学会	p.183-196
7	「映画を活用したシャドーイングとミラーイング」	単著	2007.05.00	『映画英語教育研究』紀要第12号 映画英語教育学会	p.62-63
8	「通訳クラス受講生たちの意識調査～2007年度実施・通訳教育分科会アンケートより」	共著	2007.12.00	『通訳研究』第7号 日本通訳学会	(代表執筆者) p.253-263 ©田中深雪、中村幸子、稲生衣代、新崎隆子、河原清志
9	「A Study of a College Interpreting Class in Japan—The Effect of Basic Interpreting Training Focusing on Listening Comprehension」	単著	2008.03.00	『大東文化大学紀要』第46号大東文化大学	p.301-317
10	「シャドーイングとプロソディ指導の有効性についての考察」	単著	2008.12.00	日本英語コミュニケーション学会紀要 第17巻 第1号: 1-11 日本英語コミュニケーション学会	
11	「基礎的な通訳訓練へのL2リスニング・スキルの導入について—外国語教授法からの知見の応用の可能性—」	単著	2009.01.00	『通訳研究』第8号: 57-72 日本通訳翻訳学会	
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	2001.09.00	～	現在	日本通訳翻訳学会会員(平成13年度 通訳教育分科会担当責任者、平成14年度～現在 理事)
2	2001.09.01	～	2005.08.31	時事英語学会会員(平成13年度～平成17年度 幹事)
3	2002.04.01	～	2008.03.31	外国語教育メディア学会会員(平成14年度～平成19年度 運営委員)
4	2007.04.01	～	現在	CALICO会員

5	2007.04.01	～	現在	IATIS会員
6	2007.04.01	～	現在	TESOL会員
7	2007.04.01	～	現在	全国語学教育学会会員
8	2008.01.01	～	現在	日本リメディアル教育学会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	講師	氏名	中垣 恒太郎	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『映画シナリオーカサブランカ』		2008.04.00		鶴見書店 曾根田憲三、石垣弥麻、長尾主税、三井敏郎編。大学英語教科書の編纂に参加。注釈・練習問題などを作成。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 日本ソロー学会編『新たな夜明けー「ウォールデン」150周年記念論文集』	共著	2004.05.00	金星堂	『コッド岬』の浜辺ーアメリカ旅行文学におけるソロー(176-87頁)。旅行記『コッド岬』を現代の旅行理論の見地から検討し、19世紀半ばのアメリカ旅行記の系譜に位置づけた。			
2 山里勝己、高田賢一、野田研一、高橋勤、Scott Slovic 編『国際シンポジウム2003 沖縄 自然と文学のダイアローグー都市・田園・野生』	共著	2004.09.00	彩流社	「ワイルド・ワイルド・ウェストー西部体験から見るマーク・トウェインの主体形成」(97-110頁)。トウェインが、アメリカ西部の土壌から生まれた背景について、ネイチャー・ライティングの観点から検討した。			
3 “Searching for the Idealized Girl: Mark Twain and the Lost America”	単著	2004.10.00	Journal of Mark Twain Studies (『日本マーク・トウェイン協会英文ジャーナル』第1号)	59-72頁。トウェイン晩年の作品には、少女を描いた作品が散見される。ヴィクトリア朝の女性観を逸脱した奔放な少女像が目立つ。トウェインのジェンダー観について検討した。(査読あり)			
4 「白人男性作家のアジア系表象ーブレット・ハート、マーク・トウェイン『アーシン、異教のシナ人』を中心に」	単著	2004.12.00	『AALA ジャーナル』(アジア系アメリカ文学研究会)第10号	9-16頁。トウェインおよび当時の西部作家を代表するブレット・ハートの共作戯曲を分析することで、19世紀アメリカにとって、中国人とはどのような存在であったのかを分析した。(査読あり)			
5 杉田米行編『アメリカ的価値観の揺らぎー唯一の帝国は9.11のテロ後にどう変容したのか』	共著	2006.07.00	三和書籍	「21世紀の『ボーン・イン・ザ・USA』ーポスト9.11時代のアメリカ大衆文化の想像力」(189-221頁)。「9.11」という事件をアメリカの大衆文化の担い手たちがどのように受けとめ、反応したのか、分析を試みた。			

6	アメリカ文学の古典を読む会編『語り明かすアメリカ古典文学』	共著	2007.03.00	南雲堂	アメリカ文学の古典を読む会による6年間の読書会の成果。
7	Eds. Yoshifumi Kato and Scott Pugh. 『John Steinbeck: Global Frameworks』	共著	2007.03.00	Osaka Kyoiku Tosyo	157-68頁。第6回ジョン・スタインベック国際会議に基づく研究論文集。学会発表原稿を加筆修正し、研究論文として発表した。
8	伊藤詔子、横田由理、吉田美津、スコット・スロヴィック編『エクトピアと環境正義の文学』	共著	2008.01.00	晃洋書房	199-212頁。エコクリティシズム研究会による活動の成果をまとめた論集。19世紀ユートピア小説に見出せる未来像を環境正義の観点から論じた。
9	越智道雄監修、小澤奈美恵・塩谷幸子編『9.11とアメリカ映画にみる現代社会と文化』	共著	2008.09.00	鳳書房	「911」という時代の大きな分岐点以後、アメリカの変遷がどのようにアメリカ映画からうかがえるのかを探究した共著。「海外から見た日本表象の変遷」および「アメリカにおける医療問題」に関する2章分を担当した。
10	那須頼雅、市川博彬、和栗了編『若きマーク・トウェイン「生の声」から再考』	共著	2008.10.00	大阪教育図書	単著論文「『金メッキ時代』に見る近代国家『アメリカ』のアイデオロジー——投機熱・拡張主義・成功神話」を掲載(77-97頁)。
11	亀井俊介編『アメリカ旅の文学』	共著	2009.05.00	昭和堂	アメリカ旅行文学にまつわる共同研究の成果。第8(マーク・トウェイン)・13章(ゾラ・ニール・ハーストン)の章を執筆。
12	杉田米行編『グローバル化とアメリカ・アジア太平洋地域』	共著	2009.05.00	大学教育出版	環太平洋文化研究にまつわる共同研究企画による成果。第4章「グローバル化時代における文化交流の可能性——ポピュラー・カルチャーは国家的／文化的特質を変容させるのか?」を執筆。ポピュラー・カルチャーの見地からグローバル化の問題を検討した。
論文					
1	“A Connecticut Yankee in the Hawaii Kingdom: Mark Twain Encounters with Other Cultures”	単著	2004.06.00	『藝文研究』(慶應義塾大学藝文学会)第86号	356-74頁。トウェイン初期のハワイ、サンドウウィッチ諸島での異文化体験が、後の作品や思想にどのように影響を及ぼしたのかを分析した。(査読なし)
2	「アメリカ叙事詩『コッド岬』の歴史観」	単著	2005.03.00	『ヘンリー・ソロー研究論集』(日本ヘンリー・ソロー学会)第31号	1-11頁。ヘンリー・ソローの旅行記『コッド岬』を、アメリカの叙事詩として捉え、ソローの歴史観、アメリカ観について分析した。(査読あり)
3	「アメリカ文学教育の実践——アメリカ文学講読の授業実践を中心にその可能性を展望する」	単著	2005.03.00	『早稲田教育評論』第19号	63-86頁。アメリカ合衆国の大学における文学教育の制度と方法について検討し、日本の大学において今後どのような外国文学教育が可能であるかを、自身の授業例とともに展望した。(査読あり)
4	『リアリティTV』時代におけるドキュメンタリー文学の可能性」	単著	2005.03.00	『コミュニティ振興研究』(常磐大学コミュニティ振興学部)第5号	5-23頁。「リアリティTV」という新しいドキュメンタリー表現の到来により、「リアル」であることの意味が変容しつつある。虚構およびノンフィクションの境界線が揺らぎつつある現状について分析を行った。(査読なし)
5	「外側から見た日本文化——グローバル化時代における異文化理解の可能性」	単著	2005.03.00	『外国語外国文化研究』(国士舘大学外国語外国文化研究会)第15号	29-49頁。バブル景気以降、海外から見た「日本」イメージが変容しつつある。歴史的考察とともに、日本の内側／外側から、新しい「日本表象」について分析を試みた。(査読なし)
6	「サタンとエンジェルー——『赤道に沿って』から『不思議な少年』へ」	単著	2005.04.00	『マーク・トウェイン——研究と批評』第4号	30-37頁。トウェインの最後の旅行記『赤道に沿って』は、英国植民地を講演旅行をしまわった際の見聞録である。トウェインが帝国主義、植民地主義の実態に触れることで、どのように彼の思想および作品に影響を及ぼしたのか、ポストコロニアリズムの観点から分析した。(査読あり)

7	「マーク・トウェインの コロンブスー起源への探求」	単著	2005.06.00	『アメリカ文学』(日本アメリカ文学会東京支部) 第66号	25-33頁。トウェインはくりかえしクリストファー・コロンブスにまつわるパロディや言及を、初期の頃から一貫して行ってきた。トウェインのコロンブス・モチーフの変遷を探ることで、アメリカ観について検討した。(査読あり)
8	「旅行記というジャンルの生成ー『明白な天命』における自然誌・博物誌」	単著	2006.03.00	『ソロー研究』第32号	82-91頁。19世紀中葉におけるアメリカ旅行記の隆盛について、博物誌や科学にまつわる同時代の関心領域と絡めて分析検討を行った。(査読あり)
9	「コミック・ジャーナリズムと戦争表象ースピーゲルマン以後のアメリカン・コミックス」	単著	2006.03.00	『立教アメリカン・スタディーズ』(立教大学アメリカ研究所) 第28号	83-102頁。グラフィック・ノヴェルという新しいコミック表現が近年、注目されている。中でも戦争ルポルタージュや政治風刺を行う「コミック・ジャーナリズム」の動きについて展望した。(査読あり)
10	“In Search of America: Representations of the Other and Multi-Cultural Future”	単著	2006.05.00	Steinbeck Studies (日本ジョン・スタインベック学会) 第29号	36-44頁。マーク・トウェインおよび20世紀作家のジョン・スタインベックが、どのようにアメリカ西部およびアジア系アメリカ人の姿を描いていたのか。比較検討を行った。(査読あり)
11	「幻想の未来ージュール・ヴェルヌと日米大衆文化における空想科学小説の系譜」	単独	2007.01.00	『Expressionsー国際文化表現研究』(国際文化表現学会) 第3号	369-85頁。ジュール・ヴェルヌの想像力がいかに日米の大衆文化に影響を及ぼしたのかを比較文化的視座において展望した。(査読なし)
12	「The Gilded Age に見る初期マーク・トウェインのアメリカン・アイディオロギー」	単著	2007.01.00	『言語と文化』(法政大学言語・文化センター) 第4号	243-61頁。マーク・トウェインの初期作に見出せるナショナル・アイデンティティの問題、1870年代の時代思潮について考察した。(査読なし)
13	『ノン・フィクション・ノヴェル』再考ー『冷血』と映画『カポータ』に見る視点の問題」	単著	2007.03.00	『英米文化』(英米文化学会) 第37号	115-32頁。「ノン・フィクション・ノヴェル」を提唱し、ニュー・ジャーナリズムの新しい潮流をもたらしたカポータ『冷血』を主に視点の力学の観点から再考した。(査読あり)
14	「TVCMの異文化比較・序説ー外国文化教育の可能性」	単独	2007.03.00	『外国語外国文化研究』(国士舘大学外国語外国文化研究会) 第17号	79-103頁。異文化間の文化コードをTVCMを素材に分析することにより、比較文化論を提示した。(査読なし)
15	「ヘミングウェイのイタリア体験とナショナル・アイデンティティ」	単著	2007.08.00	『ヘミングウェイ研究』(日本ヘミングウェイ協会) 第8号	3-15頁。ヘミングウェイの初期イタリア体験に注目し、イタリアおよび第一次世界大戦を題材にとった、『武器よさらば』を中心に、ヘミングウェイにおけるナショナル・アイデンティティの問題について考察した。(査読あり)
その他					
1	「サタンとエンジェルー『赤道に沿って』から『不思議な少年』へ」	共同	2004.10.15	日本マーク・トウェイン協会第8回全国大会シンポジウム「マーク・トウェインと旅」	(司会・石原剛、講師・八木敏雄、里内克巳、中垣)(於・甲南大学)
2	(評論)「英語教師がインストラクターになる日」	単著	2005.04.00	『八事』(中京大学) 第21号「特集 外国語」	118-22頁。中京大学の文芸誌『八事』での「外国語」を特集した号に、英語教師としての立場から寄稿した。
3	「アメリカ大衆文化についての基礎知識」	共同	2005.06.00	杉田米行編『アメリカ社会への多面的アプローチ』(大学教育出版)	222-38頁。アメリカ文化論講座で用いられる大学用教科書の製作に関与した。「アメリカ大衆文化」にまつわる、外国人研究者による寄稿論文を翻訳した。
4	“In Search of America: Representations of the Other in the Works of John Steinbeck”	単独	2005.06.09	第6回スタインベック国際会議(International Steinbeck Congress)	ジョン・スタインベック学会国際会議での個人研究発表(於・京都)。
5	「アメリカン・コミックにおける戦争表象とグラフィック・ノヴェルの発達」	共同	2005.06.18	第5回日本マンガ学会全国大会<マンガと戦争>部会	(講師・大城房美、小田切博、小野耕世、中垣)(於・京都精華大学)。

6	“Re-Discovering America: Mark Twain's Vienna Experience”	単独	2005.08.04	第5回マーク・トウェイン国際会議 (International Conference on Mark Twain Studies)	マーク・トウェイン国際会議での個人研究発表 (於・米国エルマイラ)。
7	「旅行記というジャンルの生成 < 明白な天命 > 期における自然地誌・博物誌」	共同	2005.10.15	日本ヘンリー・ソロー学会 2005 年大会シンポジウム 「アメリカ・ルネッサンスー科学と文学」	(司会/講師、藤田佳子、講師・松島励也、鶴野ひろ子、中垣) (於・北海学園大学)
8	“Asian Other on the American Frontier in the Works of Mark Twain and John Steinbeck”	単独	2006.03.23	米国ジョン・スタインベック学会国際会議 (Steinbeck and His Contemporaries)	ジョン・スタインベック学会国際会議での個人研究発表 (於・米国サンヴァリー)。
9	“Chaplin's Dual Worlds” 2006 年 3 月 26 日 (於・京都、元・立誠小学校) 国際チャップリンシンポジウム。	単独	2006.03.26	国際チャップリンシンポジウム	国際チャップリンシンポジウムでの個人研究発表 (於・京都)。
10	「幻想の未来ージュール・ヴェルヌと日米大衆文化における『空想科学』小説の系譜」	単独	2006.05.13	国際文化表現学会第 2 回大会	国際文化表現学会での個人研究発表 (於・日本大学工学部)。
11	“Steinbeck's Documentary Styleー The Forgotten Village and Mexico”	単独	2006.05.22	日本ジョン・スタインベック協会第 30 回記念フォーラム Reading Steinbeck: Works I Recommend	ジョン・スタインベック学会記念フォーラムでの個人研究発表 (於・金城学院大学)。
12	"The End of the World" Revisited: Beyond the Nostalgic Apocalypse"	単独	2006.07.02	Cultural Typhoon 2006 in Simokitazawa.	カルチュラル・タイフーンでの研究発表 (於・ウィル愛知)。
13	『『原子科学』時代再考ー『地球 SOS』に見る『空想科学冒険物語』の系譜とアメリカ観』	単独	2006.10.14	日本比較文学会第 44 回東京大会	日本比較文学会東京大会での個人研究発表 (於・東京工業大学)。
14	『『空想科学冒険』物語の英学受容ージャンル小説の黎明期』	単独	2006.10.22	日本英学史学会第 43 回全国大会	日本英学史学会での個人研究発表 (於・台東区民会館)。
15	「ヘミングウェイのイタリア体験」	共同	2006.12.16	日本ヘミングウェイ協会第 17 回全国大会シンポジウム 「ヘミングウェイの政治性と思想」	(司会/講師・村上東、講師・塚田幸光、長谷川裕一、中垣) (於・関東学院大学)。
16	“The possibility of Post Documentary Style: The Meeting of Documentary and Fiction in the Era of Reality TV”	単独	2007.02.15	2007 Annual SW/TX Popular/American Culture Association Meeting.	ポピュラー・カルチャー学会南西部支部での個人研究発表 (於・米国アルバカーキ)。
17	"The End of the World" Revisited: Beyond the Nostalgic Apocalypse. Panel Session: Post-Apocalypse.	共同	2007.04.17	Frankfurt Kinema Club VIII Nippon Connection.	キネマクラブ第 8 回大会でのパネル・セッションに参加 (於・ドイツ、ゲーテ大学)
18	(記事) 「< 海外新潮 > Privacy と 19 世紀アメリカ」	単著	2007.06.00	『英語青年』	年 4 回連載 「海外新潮」 アメリカ文学部門を担当。
19	『リアリティ TV』時代におけるドキュメンタリー表現の変容」	単独	2007.06.03	日本映像学会第 33 回大会。	日本映像学会での個人研究発表 (於・女子美術大学)

20	「公害怪獣とエコクリティシズムーポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力」	単独	2007.08.20	ASLE日韓合同シンポジウム。	ASLE 日韓合同シンポジウムでの個人研究発表（於・金沢文化センター）
21	（記事）「＜海外新潮＞世界の中のアメリカ的アイデンティティ」	単著	2007.09.00	『英語青年』	年4回連載「海外新潮」アメリカ文学部門を担当。
22	「ハリケーン・カトリナと環境正義」	共同	2007.10.14	日本アメリカ文学会第46回全国大会、ワークショップ「ポスト・カーソンと環境正義の文学」	（司会・横田、講師、浅井、松永、中垣）（於・広島修道大学）
23	「21世紀におけるマーク・トウェインの大衆文化研究の可能性」	共同	2007.11.18	第62回東北英文学会シンポジウム「マーク・トウェインと大衆文化」	シンポジウムにて司会・講師を担当。司会・講師・中垣、講師・石原、久保、井川）（於・山形大学）
24	（記事）「＜海外新潮＞アメリカ文学の生成と文化交流」	単著	2007.12.00	『英語青年』	年4回連載「海外新潮」アメリカ文学部門を担当。
25	（記事）「＜海外新潮＞「アメリカ」文学教育の行方」	単著	2008.03.00	『英語青年』	年4回連載「海外新潮」アメリカ文学部門を担当。
26	Imaginary Ideal Girls, Ordinary Girls, or, Odd Girls: Refashioning Shōjo Images in Japanese Films and Visual Culture. Panel Session: Shōjo Genso: An Interdisciplinary Approach to Contemporary Japanese Girl's Culture.	共同	2008.06.21	The Twelfth Asian Studies Conference Japan.	主に米国のアジア研究者による日本支部にてパネル・セッションを企画し、研究発表を行った。（司会・講師：須川亜紀子、講師：山梨牧子、中垣）（於・立教大学）
27	「変容する街の記憶と思索の旅ーツアー・パフォーマンス『サンシャイン62』における『演劇』力」 「Panel Session：旅するパフォーマンス～Port Bの試み」	共同	2008.06.29	Cultural Typhoon 2008 in Sendai: "Inter/Space."	カルチュラル・スタディーズの国際学会にてパネル・セッションを企画し、研究発表を行った。（司会・講師：中垣、講師：荻原健、山梨牧子）（於・仙台）
28	Imaginary Ideal Girls, Ordinary Girls, or, Odd Girls: Refashioning Shōjo Images in Japanese Films and Visual Culture. Panel: Shōjo Genso in Japanese Cultural Heritage: Critical Approach to the Neo-Romantic World of Girls.	共同	2008.09.21	12th International Conference of the European Association for Japanese Studies.	ヨーロッパの日本研究学会にてパネル・セッションを企画し、研究発表を行った。（司会・講師：山梨牧子、講師：須川亜紀子、中垣）（於・イタリア・サイレント大学）
29	『『接続』2007 Vol. 7」	単著	2008.10.00	『文学と環境』第11号	57-59頁。文学・環境学会の学術機関誌『文学と環境』にて、文芸誌『接続』の特集号を書評。
30	「児童文学として読む A Connecticut Yankee in King Arthur's Court」	単独	2008.11.08	第38回日本イギリス児童文学会	英語圏児童文学研究学会における単独の研究発表。（於・清泉女子大学）

31	「アフロ／アジア 研究の潮流ーFred Ho and Bill V.Mullen. Afro Asia: Revolutionary Political and Cultural Connections between African Americans and Asian Americans」	単著	2009.03.00	『AALA ジャーナル』(ア ジア系アメリカ文学研究 会) 第 14 号	アジア系アメリカ文学研究会の学術機関誌『AALA ジャーナ ル』にて、最新のアジア研究の潮流を分析しつつ書評した。
32	「法政大学比較経済 研究所・曾村光利編 『新自由主義は文学 を変えたかーサッ チャー以後のイギリ ス (比較経済研究所研 究シリーズ 23)』(法 政大学出版局、2008 年)」	単著	2009.03.00	『経済研究』(大東文化大 学経済研究所) 第 21 号	学内研究所の機関誌にて、書評を掲載した。
33	「A Comic Warrior under the Great Depression: Chaplin's American Jeremiad in Modern Times as "an American Story"」	単独	2009.03.14	第 3 回チャップリンフェス ティバル 2009	チャップリン研究における国際学会にて研究発表を行った。 (於・京都、元・立誠小学校)

III 学会等および社会における主な活動

1	American Comparative Literature Association 会員
2	American Culture Association 会員
3	American Studies Association 会員
4	International Comparative Literature Association 会員
5	Mark Twain Circle of America 会員
6	MLA (Modern Language Association) 会員
7	Popular Culture Association 会員
8	Society for Cinema and Media Studies 会員
9	映画英語教育学会会員
10	英米文化学会会員
11	外国語教育メディア学会会員
12	多民族研究学会会員(役員、大会準備委員、会計)
13	大学英語教育学会会員
14	日本アメリカ学会会員
15	日本アメリカ文学学会会員
16	日本チャップリン協会会員(事務局幹事)

17	日本マーク・トウェイン協会会員(評議員、事務局幹事)
18	日本映画学会会員
19	日本映像学会会員
20	日本英文学会会員
21	日本演劇学会会員
22	日本比較文学会会員

(表 24)

所属	経済学部社会経済学科	職名	講師	氏名	中野 耕市	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 『中国語ⅠA』科目担当		2001.04.00	初学者 (主に1年次) を対象に、基本的な文法事項を、自分に関する具体的な文に置き換えて覚えさせることにより、より実用的な中国語習得を目指す。(2001.04.00～現在)			
2) 中国語で手紙を書く体験		2001.06.00	主に2年次を対象に、年に一回、海外向けの中国語放送を行っている各国放送局に、中国語で手紙を書く体験を行う。携帯メールにのみ慣れている学生が、中国語で送った手紙に、実際に海外から返信が届くと驚いたり、うれしがったりする光景が見られる。(2001.06.00～現在)			
3) 中国語朗読コンテスト運営		2001.12.00	経済学部所属の学生を対象に、年に一度、中国語の朗読コンテストを行う。朗読にすることにより、気軽に参加しやすくなり、例年、全体で30～40名程度の参加者がある。(2001.12.00～現在)			
4) 中国語自己紹介文集作成		2001.12.00	主に1年次を対象に、年度末に、基本的な文法事項を盛り込んだ自己紹介の文章を書かせ、それをクラス単位で文集としてまとめる。1年間学んだ文法事項を、自ら具体的な文章にすることにより、定着しやすくすると共に、同級生の文章を読むことにより、復習の教材としても使える。(2001.12.00～現在)			
5) 『中国語ⅡA』科目担当		2002.04.00	主に2年次を対象に、初学者向けの文章 (中国語検定協会問題など) を直訳することにより、中国語の文の構造を間接的に把握させる。(2002.04.00～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) ホーム・ページ「BCL短波放送のコーナー」開設		1999.05.01	短波による各国海外向け中国語放送の放送時間と周波数をホームページで提供。つき1000件程度のアクセスがある。 http://www.daito.ac.jp/~zhongye/bcl_main.htm (1999.05.01～現在)			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						

1	『直訳による中国語文法の把握状況の調査』	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要（人文科学）』46 大東文化大学	直訳は外国語の文法構造や表現法を理解する上で、特に学習の初期の段階において、有効な学習方法の一つであるが、学生らの直訳練習の結果をもとに、どのような文法的な機能を表すキーワードや文型が理解しやすく、あるいは理解しにくいかを分析することを試みたもので、特に主述述語文や様態補語を導く“得”などが把握しにくいと分析。総ページ数578頁中（左）289-300頁
	その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1989.04.01	～	現在	日本中国語学会会員	
2	1997.02.01	～	現在	アジア放送研究会会員	
3	1997.02.01	～	現在	日本BCL連盟会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	岩澤 勝彦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅰ』		2005.03.00	大東文化大学経済学部 共編者：大東文化大学経済学部 中川僚子教授、大野秀樹専任講師。経済学部授業報告書として、大東文化大学経済学部の英語担当教員の授業実践報告を編集し、FDの一環として、よりよい授業を展開するための基礎資料として公開したものである。あわせて、編著者自身の2004年度担当授業科目について、内容を詳細に記録している。授業の工夫、学生の反応、今後の取り組みの方針などを記載し、教育能力のさらなる開発を目指したものである。筆者は、1-5頁、15-17頁、34-35頁、70-71頁を執筆。A4版、総頁96頁。				
2) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅱ』		2006.03.00	大東文化大学経済学部 共編者：大東文化大学経済学部 中川僚子教授、大野秀樹専任講師、クリス・シェパード専任講師。経済学部授業報告書として、大東文化大学経済学部の英語担当教員の授業実践報告を編集し、FDの一環として、よりよい授業を展開するための基礎資料として公開したものである。あわせて、編著者自身の2005年度担当授業科目について、内容を詳細に記録している。授業の工夫、学生の反応、今後の取り組みの方針などを記載し、教育能力のさらなる開発を目指したものである。筆者は、1-4頁、6-7頁、16-17頁、32-33頁、46-47頁、73-74頁を執筆。A4版、総頁94頁。				
3) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅲ』		2007.03.00	大東文化大学経済学部 共編者：大東文化大学経済学部 中川僚子教授、大野秀樹専任講師。経済学部授業報告書として、大東文化大学経済学部の英語担当教員の授業実践報告を編集し、FDの一環として、よりよい授業を展開するための基礎資料として公開したものである。あわせて、編著者自身の2006年度担当授業科目について、内容を詳細に記録している。授業の工夫、学生の反応、今後の取り組みの方針などを記載し、教育能力のさらなる開発を目指したものである。筆者は、1-3頁、6-7頁、25頁、63-64頁を執筆。A4版、総頁74頁。				
4) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅳ』		2008.03.00	大東文化大学経済学部 共編者：大東文化大学経済学部 大野秀樹専任講師、田中深雪専任講師。経済学部授業報告書として、大東文化大学経済学部の英語担当教員の授業実践報告を編集し、FDの一環として、よりよい授業を展開するための基礎資料として公開したものである。あわせて、編著者自身の2007年度担当授業科目について、内容を詳細に記録している。授業の工夫、学生の反応、今後の取り組みの方針などを記載し、教育能力のさらなる開発を目指したものである。筆者は、1-5頁、13-17頁、31頁、64-65頁を執筆。A4版、総頁60頁。				
5) 立教大学授業評価アンケート		2008.12.00	非常勤校立教大学授業評価（平成20年12月実施）において、高い評価を得た。平均値4.6（5段階評価）。				
6) 『大東文化大学経済学部における英語教育Ⅴ』		2009.03.00	大東文化大学経済学部 共編者：大東文化大学経済学部 大野秀樹准教授、田中深雪専任講師、中垣恒太郎専任講師。経済学部授業報告書として、大東文化大学経済学部の英語担当教員の授業実践報告を編集し、FDの一環として、よりよい授業を展開するための基礎資料として公開したものである。あわせて、編著者自身の2008年度担当授業科目についての記録である。授業の工夫、学生の反応、今後の取り組みの方針などを記載し、教育能力のさらなる開発を目指したものである。筆者は、1-2頁、5-6頁を執筆。A4版。				
2 作成した教科書、教材、参考書							

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 「感情的ダイクシスについて」	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要<人文科学>第44号、pp.89-102.	直示語 this と that の感情を表す用法（感情的ダイクシス）について分析を行い、それが、外界指示用法と文脈照応用法の中間的なものとして位置づけられること、また、特定の感情的意味合いは、神尾(1990) の<なわ張り>とメイナード(2000)の<付託>の概念を用いることによって説明できることを論じた。
2 「感情的ダイクシスと指示性」	単著	2007.03.18	開拓社、溝越彰也（編）『英語と文法と』所収、pp.51-62.	感情的ダイクシスを指示性の観点から分析した。なわ張りの概念によって説明できない直示語の感情用法は、直示語が話し手の意識空間を指示するという特性をもつという前提のもとで、同じ対象を見つめることによって話し手と聞き手の感情的関係を打ち立てる<付託>の原理を援用することによって捉えられる見込みがあることを論じた。
その他				
1 小学館外国語辞典編集部（編）『英語便利辞典』	共著	2006.02.01	小学館	「第4部 文法事項を整理する」分担執筆。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1982.04.00	～	現在	筑波英語学会会員
2	1984.04.00	～	現在	日本英語学会会員
3	1984.04.00	～	現在	日本英文学会会員
4	2009.04.00	～	現在	英語語法文法学会会員
5	2009.04.00	～	現在	日本認知言語学会会員

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	教授	氏名	上野 健一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 経済学部ゼミ成果発表会 (東松山校舎)			2004.11.00		経済学部ゼミ成果発表会にてゼミが、口頭発表部門にて発表			
2) 大東文化大学授業評価			2005.00.00		大東文化大学授業評価 (平成 17 年実施) において、平均的評価を得た。			
3) 経済学部演習成果発表会			2005.11.06		経済学演習 (ゼミ) のゼミがポスター部門と口頭発表部門にて発表			
4) 経済学部演習成果発表会 (板橋校舎)			2006.12.02		経済学演習 (ゼミ) のゼミがパネル部門と口頭発表部門にて発表			
5) 大東文化大学授業評価			2007.00.00		大東文化大学授業評価 (平成 19 年 10 月実施) において、平均的評価 (3.2 と 3.8) を得た。			
6) 経済学部演習成果発表会 (板橋校舎)			2007.12.08		経済学演習 (ゼミ) のゼミがパネル発表と口頭発表、及び H P 発表 (2008 年 1 月実施) に発表、佳作と H P 発表は最優秀賞 (1 位相当) を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
論文								
1 『エッジ都市についての一考察』		単著	2008.03.31	大東文化大学経済研究第 21 号		エッジ都市とエッジなし都市の議論をたどってみると、両者の主張には一定の展開がみられる。また一方でこの種の議論を都市的スプロールの一部としてとらえる立場もみられる。ギャロウの指摘したエッジ都市の概念は、設定の基準が一面的な側面をもつといえる。昼間人口で示される雇用集中地としてのエッジ都市は、アメリカで広汎に認められるが、その位置づけに関しては、批判意見や反対論もみられるといえる。さらにエッジなし都市の議論については、これからという印象も受ける。アメリカ大都市の郊外発展に関して、従来の研究は明るくユートピア的イメージを含んだ中で、議論の展開がなされてきたとの指摘がある一方で、この種の意見はある種の開発方法にたいする批判的見解を含んでいることを認めることができるであろう。 27～34 頁。		

2	『ハイテク産業の集積と都市に関する一考察』	単著	2008.03.31	大東文化大学経済研究所報第22号	Smith and Waters (2005) を中心として、ハイテク産業の集積と都市の性格を検討した。産業集積は中心都市の性格に影響を受けており、ハイテク産業によってそれらの影響の大きさは異なるといえよう。産業集積のすすむ地域でも、産業部門と中心都市とその居住者の教育水準とはかなり関連があるとみることができる。イギリスのオックスフォードとケンブリッジはこうした点からも、部門構成や雇用者構成にかなり明確な対照的相違が認められ、より多様な側面から究明していく必要がある。 18～23 頁。
その他					
1		単著	2004.00.00	日本地域学会第41回(2004年)年次大会、早稲田大学。	1 件の研究報告、の討論者
2		単著	2006.10.08	日本地域学会第43回(2006年)年次大会、千葉商科大学。	1 件の研究報告、の討論者
3		単著	2007.10.06	日本地域学会第44回(2007年)年次大会、九州大学箱崎キャンパス。	1 件の研究報告、の討論者
III 学会等および社会における主な活動					
1	1973.11.00	～	現在	日本地理学会会員、2002.04～2004.03 編集専門委員会(和文)委員	
2	1976.04.00	～	現在	人文地理学会会員	
3	1980.04.00	～	現在	立正地理学会会員	
4	1984.04.00	～	現在	経済地理学会会員、1989.11～1991.03 機関紙編集委員、1990.05～1991.03 幹事	
5	1986.04.00	～	現在	歴史地理学会会員、1993.04～1995.03 集会委員	
6	1988.06.00	～	現在	日本地域学会会員	
7	1992.01.00	～	現在	英国地理学者協会(I.B.G.)会員、1996年～Royal Geographical Society/I.B.G	
8	1992.07.00	～	現在	地理情報システム学会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	浦田 健二	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 経済学を学ぶための微分法の基礎		2007.08.00		同文館出版 大学で経済学を学ぶために必要な最低限の微分法を懇切丁寧に、経済学部生にもわかりやすいように記述したテキスト。大東文化大学経済学部で開講している選択必修科目「経済数学」の教科書として利用。共著者大東文化大学木村哲三教授および同大学古屋核准教授。(分担部分抽出不可能)		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項 1) エネルギーと環境問題		2009.01.28		東松山市きらめき市民大学 東松山市きらめき市民大学環境学部の講座 (2005年1月22日、2006年1月31日、2007年1月26日、2008年1月31日)		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
1 失業・環境・エネルギーのマルチエージェントシステムによる接近	共著	2008.11.28	大東文化大学 経済研究所 第28回経済シンポジウム	「マルチエージェントシステムは経済学を救うか」 パネルディスカッションの討論者の一人として発表。司会者 (岡村宗示)、討論者 (荒井一博、磐田朋子、松尾誠治、藤井秀昭、浦田健二、古屋核)		
2 人文・社会系学部における物理教育について	単著	2009.03.15	大学の物理教育、VOL.15、No.1 日本物理学会	非理系学部における物理教育 (自然科学教育) の必要性和教育内容、教育方法について問題提起した。		
III 学会等および社会における主な活動						
1 1990.08.00 ~ 現在				日本物理学会会員		
2 1991.09.00 ~ 現在				日本応用数理学会会員		

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	教授	氏名	岡村 與子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 Convergence to State growth: a model for Japan. (1965-1990).			Applied Economics Letters, No. 3	pp.259-265. Co-authored with Prof. Jati Sengupta.			
2 Scenarios and Risks of Micro-data Disclosure; A Critical Review.				In Japanese			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	American Economic Association						
2	Western Economic Association						
3	日本経済学会						
4	日本政策学会						

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	岡村 宗二	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『ファンダメンタル マクロ経済学』		2005.12.00		中央経済社 「再掲」			
2) 『経済学によく出てくる数学』		2006.09.00		同文館 「再掲」			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『ファンダメンタル マクロ経済学』	単著	2005.12.00	中央経済社	現代マクロ経済学の主内容を解説したもので、演習問題・解題を含む。日本のマクロ経済、マクロ経済学の課題、マクロ経済活動水準の決定、賃金・物価・雇用の変動、景気の変動とマクロモデル、経済成長、貿易とマクロ経済、現代マクロ経済学の歴史と課題を扱う。			
2 『経済学によく出てくる数学』	共著	2006.09.00	同文館	標準的なミクロ経済学およびマクロ経済学に類出する数学テクニックを解説する。同時に、関連する経済学の内容を説明する。少なくとも、大学での講義あるいは教科書レベルの数学利用を独学・自習できるように工夫した。序章「経済学でよく用いる関数とグラフ」、第1章「限界効用と限界費用：微分法」、第2章「経済主体の最適化行動：その1」、第3章「編微分と前微分」、第4章「経済主体の最適化行動：その2」、第5章「生産者余剰と積分法」、第6章「経済のいろいろな関係式と線型代数」、第7章「比較静学」。(共著者：岡村宗二・加藤正昭)			
3 『信頼と安心の日本経済』	編著	2008.05.00	勁草書房	「市場主義」を軸に日本経済が直面する諸課題 (市場組織と信頼、規制緩和・民営化、金融市場、農業の激変、雇用流動化、格差、地方財源、エネルギー安全保障、温暖化問題) を検討する。特に、「市場主義評価の狭間で」(導入部) および「信頼と安心から迫る日本経済」(まとめ) を担当執筆。共著者：荒井一博、河村信哉、庭田文近、盛田清秀、石水喜夫、続橋孝行、小林信也、兼子良夫、藤井秀昭、小塚浩志、松尾誠治。			
論文							

1	“Macroeconomics of Hysteresis, Suddenness and Trap”	単著	2005.01.00	『立教経済学研究』(立教大学)、第58巻第3号、1～35頁	本稿は、経済主体に合理的行動や期待形成が限定され、それゆえ、市場が市場価格で必ずしもクリアーされないような状況でのマクロ経済の動学的運行を記述する。このような経済では、ミクロおよびマクロ経済変数の変動にヒステレシスや深い罫が形成される一方、突然の変動に向けての内部エネルギーが蓄積される。日本経済に関連して、負のバブル、回復の遅れ、裁量的政策の効果を議論する。仮設の数値による継起的な動学分析を含む。
2	「公的信用保証の経済学」	共著	2007.03.00	『経済研究』第20号(P.51～89)	中小企業の資金ファイナンスを円滑にする公的信用保証の機能や優位性を理論モデルに示し、同時に日本の信用補完制度の現状と問題点、そしてその改革案を提言する。経済社会および地域経済の発展(雇用拡大・成長)を促す意味での革新的な中小企業の育成と、弱者救済(ローカルな雇用の維持と安定)の両面を兼ね備えた中小企業政策の一環としての信用保証協会の意義を再検討し、今後の展開の在り方を示す。(共著者:岡村宗二・加藤正昭)
3	「自然非自発的失業と貨幣的景気循環:再論」	単著	2007.07.00	『経済論集』No.89(大東文化大学)(PP.29～53)	独占的競争経済のもとで、効率賃金論(Smith)と相対賃金論(Keynes)を補完的に解釈し、自然非自発的失業を伴う長期均衡を示した上で、価格および賃金硬直性による貨幣的景気循環を示す。相対賃金と努力・勤勉性、失業、硬直性、貨幣中立性問題に関する議論の明確化を試みる。また、モデルの含意として、労働価値観の違いや構造的失業の上昇を考察する。
その他					
1	『日本の相続税と賃貸住宅の過剰供給』	単著	2005.07.00	大東文化大学経済研究所	地主家計の相続税節税行動がもたらす賃貸事業の開業と過剰投資を条件付制約モデルで分析する。日本の資産課税のもとでの住宅建設会社、金融機関、地主の連携プレイによって生じる不効率的な資源配分の実態を探る。賃貸住宅サービス市場における高空室率の原因の一部は、相続税制にもとづく供給側要因に求められる。資源配分の効率改善と公正を目指した制度改革を含む総合的な検討が望まれる。
2	R&D in Small-scale Business Firms and Public Credit Guarantee	単著	2008.11.00	Feng Chia University	日本の信用保証(補完)制度に関するアジア各国の関心は高い。技術革新と経済成長に寄与すべき中小企業が一般に直面する投資資金の獲得困難と公的金融制度によるその打開策を論じる。特に日本の公的信用保証制度の現状を説明する。深刻な景気変動に対応する特別保証枠の大幅拡大やその経済的效果を含めて、公的信用保証制度の意義と在り方を議論する。
3	「ミクロ主体期待の相互依存と経済変動」	共著	2009.03.00	『経済研究』(大東文化大学経済研究所)、第22号	近年、コンピューターの高性能化によって、多様な個性を持つ社会主体の行動を容認したマルチエージェントシステム(MAS)の分析が注目を浴びている。本稿はMASにもとづく理論および政策研究の途中経過報告である。特に、主体の期待形成と同調度に着目し、主たる経済変数(産出、賃金、収益、失業率など)の変動をシミュレーションによって観察する。MAS経済分析の前途には多難が予想されるが、問題の根源と広がりをも明確にする有望な接近法と期待する。(共著者:岡村宗二・松尾誠治・荒井一博)
III 学会等および社会における主な活動					
1	1977.02.00	～	現在	American Economic Association	
2	1977.02.00	～	現在	日本経済政策学会	
3	1986.09.00	～	現在	日本経済学会(旧理論・計量経済学会)	
4	1987.04.00	～	現在	経済学史学会	
5	1997.06.00	～	現在	日本消費経済学会	
6	2004.04.00	～	現在	中国経済学会	
7	2005.12.00	～	現在	PEJ 大手町研究会代表	

8 2006.12.00 ~ 現在

埼玉県信用保証協会外部評価委員

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	上遠野 武司	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 産業振興ビジョン策定に向けて	共著	2005.03.31	大東文化大学国際比較政治研究所地域連携研究班	序章、第5章 地方自治体における産業政策を担当。中村年春、上遠野武司、相田治昭、富澤賢一、小池喜美子、横田昇執筆。		
2 第三版 日本経済の経済学	共著	2005.04.10	学文社	第7章 規制緩和と現代経済、第8章 産業構造の転換を担当。第二版の統計資料中の数値の更新と一部加筆。大杉由香、上遠野武司、斎藤真事、末繁宏造、中島正人、中村宗悦、渡部茂執筆。		
3 地域の産業振興ービジョン策定を受けてー	共著	2006.03.31	大東文化大学国際比較政治研究所地域連携研究班	第7章 地域経済の活性化と産業政策、あとがきを担当。中村年春、上遠野武司、土井幸平、相田治昭、富澤賢一、小池喜美子、横田昇執筆。		
4 元気な学生まちづくり	共著	2007.03.31	大東文化大学地域連携センター	序文 第1章 μ プランの基本構想と推進を担当。上遠野武司、中村年春、川野幸男、橋本一裕、岩田雅彦、山口諤司、松尾利充、浅野美代子、首藤禎史、有馬潤、寺西幸男執筆。		
5 ロード・プライシング	共著	2007.04.15	勁草書房	第10章 ロード・プライシング制度の社会的受容性 關哲男、庭田文近、臼井功、三本松憲生、矢澤信雄、朝日ちさと、藤井秀昭、坪井貴彦、樋口清秀、上遠野武司、金兌奎執筆。		
6 学生まちづくりの研究	共著	2007.12.05	大東文化大学地域連携センター	序文、第8章 実行可能なまちづくりを求めて、結びを担当。上遠野武司、川野幸男、岩田雅彦、橋本一裕、寺西幸雄、有馬潤、山口諤司、浅野美代子執筆。		
論文						

1	ロードプライシングの政治経済学	単著	2005.01.28	日本交通政策研究会	K. Small and J. A. Gomez-Ibanez による Road Pricing For Congestion Management : the Transition from Theory to Policy (K. Button and E. T. Verhoef 編集 Road Pricing, Traffic Congestion and the Environment (1998) 所収) をとり上げ、それをひとつの手掛かりにロードプライシングの理論について実行可能性、受容可能性などの諸点を検討した論文。日交研シリーズ A-373『交通経済の理論と政策』に所収。
2	産業集積の変化と企業立地行動	単著	2006.03.25	『経済論集』86号 大東文化大学経済学会	産業集積と企業立地行動の関係について、立地理論にもとづき考察し、変化の可能性を検討した論文。
3	企業立地における集積の意義	単著	2006.03.31	『経済研究』19号 大東文化大学経済研究所	空間の異質性の観点から、産業集積要因とその繁栄の可能性について考察した論文。
その他					
1	現代交通観光辞典	共著	2004.05.20	創成社	1564項目中、一般道路、運賃、価格差別、都市交通、都市鉄道など46項目の執筆を担当。廣岡治哉監修、秋山義継、上遠野武司、小池鉄夫、小池知之、小林信雄、白土健、野尻俊明、堀雅通、山岸寛他40名執筆。
2	料金徴収の課税手段としての非効率性ーガーデンステート・パークウェイからの証拠ー	単著	2004.06.01	『高速道路と自動車』47巻、6号、7号 高速道路調査会	J. R. Peters and J. K. Kramer 著 “The Inefficiency of Toll Collection as a Means of Taxation : Evidence from the Garden State Parkway”, Transportation Quarterly, summer 2003 の翻訳。
3	マクロ経済理論ーショート・コースー	共著	2004.09.20	学文社	Thomas R. Michl 著 Macroeconomic Theory : A Short Course の翻訳。第10章 インフレーションと失業、第11章 積極的金融モデルの邦訳を担当。上遠野武司、河口雄司、蔣安、末繁宏造、内藤二郎、丸山航也、横溝えりか、渡部茂共訳。
4	動体視力を鍛える訓練	単著	2005.01.15	『大東文化』556号 学校法人大東文化学園	第14回大東生論文コンテストの審査委員長としての講評。630字程度。
5	企業の立地行動と産業集積の研究	単著	2005.03.31	『大東文化大学経済研究所報』19号 大東文化大学経済研究所	2004年度経済研究所研究プロジェクトの研究活動内容を報告。3000字程度。
6	危ういネット情報に注意	単著	2006.01.15	『大東文化』561号	第15回大東生論文コンテストの審査委員長としての講評。600字程度
7	道路の製品差別化(上)(下)	単著	2006.02.01	『高速道路と自動車』49巻2号、3号	Erik. T. Verhoef, Kenneth A. Small 著 “Product Differentiation on Road: Constrained Congestion Pricing with Heterogeneous Users”, Journal of Transport Economics and Policy, Vol. 38, January 2004 の翻訳。
8	読み手を意識した文章表現を	単著	2007.01.15	『大東文化』565号	第16回大東生論文コンテストの審査委員長としての講評。600字程度。
9	企業立地行動の経済学	共訳	2007.02.18	学文社	Philip McCann 編著 Industrial Location Economics、2002年の抄訳。序文、第1章 古典派・新古典派の立地ー生産モデルの邦訳を担当。上遠野武司、末繁宏造、内藤二郎、渡部茂、丸山航也共訳。平成18年度大東文化大学研究成果刊行助成。
10	地域経済の研究	単著	2007.03.31	『大東文化大学経済研究所報』21号 大東文化大学経済研究所	2006年度経済研究所研究プロジェクトの研究活動内容を報告。3000字程度。
11	地域づくりの手法と地域社会	単著	2009.03.31	『大東文化大学経済研究所報』23号 大東文化大学経済研究所	2008年度経済研究所研究プロジェクトの研究活動内容を報告。4500字程度。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1984.06.00	～	現在	日本交通学会会員	
2	1987.06.00	～	現在	公益事業学会会員(平成12年～平成15年関東部会企画幹事、平成15年～現在評議員、平成16年～平成20年編集委員会委員、平成15年～平成16年関東部会事務局長、平成16年～現在関東部会会計監事)	

3	1994.12.00	～	現在	(財) 高速道路調査会平成6年～平成19年経済関係編集委員会委員、平成19年～現在海外論文研究会委員
4	1995.03.00	～	現在	日本交通政策研究会基礎理論プロジェクト・メンバー
5	1998.06.00	～	現在	日本海運経済学会会員
6	1998.06.00	～	現在	日本環境共生学会会員
7	1999.06.00	～	現在	日本地域学会会員
8	2008.04.01	～	2009.03.31	東京都板橋区高齢者大学校板橋グリーンカレッジ講師
9	2008.07.09	～	現在	ときがわ町ときがわ町地域公共交通懇談会会長

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	斉藤 眞事	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 「貨幣経済学入門」		2005.10.20		貨幣経済学の研究方法と研究対象として理論経済学と応用経済学の区別を明らかにし、研究対象の貨幣の流通現象を J. M. ケインズに求め、産業的資金循環と金融的資金循環を捉える。家計の貨幣所得は消費と貯蓄に分割され、産業的資金循環と金融的資金循環が始まる。家計の貯蓄資金は銀行、金融機関を通して企業への貸付資本となり、企業の投資活動が促され、所得フローと資本ストックを増やし資金循環の規模は拡大され、経済の福利厚生を潤沢にする貨幣経済学の課題を学ぶ。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 「貨幣経済学入門」	単著	2005.10.20	税務経理協会	貨幣経済学の研究方法と研究対象として理論経済学と応用経済学の区別を明らかにし、研究対象の貨幣の流通現象を J. M. ケインズに求め、産業的資金循環と金融的資金循環を捉える。家計の貨幣所得は消費と貯蓄に分割され、産業的資金循環と金融的資金循環が始まる。家計の貯蓄資金は銀行、金融機関を通して企業への貸付資本となり、企業の投資活動が促され、所得フローと資本ストックを増やし資金循環の規模は拡大され、経済の福利厚生を潤沢にする貨幣経済学の課題を学ぶ。		
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1977.04.01	～	現在	日本金融学会会員		
2	1985.04.01	～	現在	統計研究会会員		

3	2007.10.01	～	現在	International Biographic Centre (Cambridge, England) Financial adviser to the Director General
4	現在	～	現在	日本 EU 学会会員
5	現在	～	現在	日本ファイナンス学会会員
6	現在	～	現在	日本消費経済学会会員
7	現在	～	現在	米国経済学会 (American Economic Association) 会員

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	教授	氏名	佐藤 順一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
論文								
1 当事者と分析者			2005.03.00	大東文化大学『経済論集』第 84 号		大衆化された大学における経済学教育を念頭におき、当事者と分析者という図式に基づいて教育の構造を分析し、教員が置かれている困難を検討した。		
その他								
III 学会等および社会における主な活動								
1 1970.00.00 ～ 現在			日本経済学会会員					

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	竹内 亨夫	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価を実施した。 (2008年12月)		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著 の別	発行または発 表の年月 (西 暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・ 号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1972.10.21	～	現在	政治経済学・経済史学会会員		
2	1978.05.13	～	現在	比較経済体制学会会員		
3	1987.10.25	～	現在	比較文明学会会員		
4	1987.11.22	～	現在	経済学教育学会会員		
5	1990.10.13	～	現在	経済理論学会会員		
6	2000.04.29	～	現在	社会主義理論学会会員		
7	2008.04.25	～	現在	PEJ 大手町研究会会員		

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	中村 宗悦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・(無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 経済学演習（ゼミ）の中で他大学ゼミとのディベートを運営、実施している。		2000.04.01	2000年度から現在まで経済演習（ゼミ）の受講生（3年生）に対し、他大学（現在、9大学参加）とのディベートに参加させ、学生の問題発見能力、コミュニケーション力、課題解決能力の総合的開発を実践している。（2000年4月1日～現在）				
2) 文京学院大学授業評価		2007.07.00	文京学院大学授業評価（2008年7月実施）において、評価対象科目「経済学Ⅰ」の講義が高い評価を得た。				
3) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価（2007年12月実施）において、評価対象科目「日本経済史Ⅱ」の講義が高い評価を得た。				
4) 文京学院大学授業評価		2007.12.00	文京学院大学授業評価（2008年12月実施）において、評価対象科目「経済学Ⅱ」の講義が高い評価を得た。				
5) 文京学院大学授業評価		2008.07.00	文京学院大学授業評価（2008年7月実施）において、評価対象科目「経済学Ⅰ」の講義が高い評価を得た。				
6) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価（2008年12月実施）において、評価対象科目「日本経済史Ⅱ」の講義が高い評価を得た。				
7) 文京学院大学授業評価		2008.12.00	文京学院大学授業評価（2008年12月実施）において、評価対象科目「経済学Ⅱ」の講義が高い評価を得た。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 浜野潔・井奥成彦・中村宗悦ほか『日本経済史 1600-2000 歴史から読む現代』慶應義塾出版会		2009.03.31	講義の教材として使用。筆者は、第3章（95-149ページ）、および年表（323-333ページ）を担当。総ページ数353ページ。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
1 「水産品の生産と流通」	共著	2004.07.20	日本評論社	松本貴典編著『生産と流通の近代像－100年前の日本』の第4章、pp.173-213を執筆。			
2 『経済失政はなぜ繰り返すのか－メディアが伝えた昭和恐慌』	単著	2005.01.27	東洋経済新報社	218ページ。昭和恐慌前夜、メディアに誘導された世論は、浜口雄幸・井上準之助の清算主義的政策を熱狂的に支持した。未曾有の経済危機を招いた大新聞の「偏向報道」を明らかにする。			
3 「日本の大衆消費社会－その誕生から現代まで－」	共著	2005.04.10	学文社	渡部茂編著『第三版 日本経済の経済学』の第3章、pp.44-60を執筆。第二版の改訂版。			

4	「松方財政期における幣制改革論－金本位制と清算主義的政策思想－」（野口旭編『経済政策形成の研究－既得観念と経済学の相克－』所収、pp.95-133）	共著	2007.09.20	ナカニシヤ出版	貨幣法制定過程における経済政策思想の特徴の一つを「清算主義」として捉えられることを、政策担当者の言説分析などを通じて明らかにした。
5	『評伝日本の経済思想 後藤文夫－人格の統制から国家社会の統制へ－』xii+pp.250	単著	2008.03.05	日本経済評論社	戦前期、既存の政党政治批判を軸に新日本同盟などを通じて新たな体制の構築を模索した内務官僚・後藤文夫。「新官僚」のリーダーが抱いた統制の思想と行動を分析した。
論文					
1	「領事報告－近代日本の通商情報戦略」	単著	2004.11.26	東京大学出版会	鶴飼政志・蔵持重裕・杉本史子・宮瀧交二・若尾政希編著『歴史をよむ』の pp.204・207、を執筆。
2	「サラリーマンと年金」	単著	2004.12.30	『別冊環脱＝「年金依存」社会』第9号、藤原書店	pp.143-150。サラリーマン型人生航路に基づく年金制度が限界に達しつつあることを歴史的視点から検証した。
3	「高橋是清のリフレーション政策に関する英国の認識と評価」	単著	2005.03.25	大東文化大学経済学会『経済論集』第84号	pp.191-208。英国国立文書館（Public Record Office）所蔵の日英外交関係文書を中心に、高橋是清のリフレーション政策に関する英国の認識と評価の一端を明らかにした。
4	「「サラリーマン税制」を超えて」 pp.17-22。	単著	2006.12.05	『生活協同組合研究』No.371	サラリーマン税制の問題点を歴史的視点から解説。現状批判をおこなった。
5	「「昭和恐慌」と後藤文夫－危機への対応としての「国家社会の純化」」 pp.1-12	単著	2007.03.31	『経済研究 研究報告第20号』大東文化大学経済研究所	「新官僚」後藤文夫の昭和恐慌期における思想と行動を「国家社会の純化」という観点から分析した。
その他					
1	書評「マーク・ラビナ著／浜野潔訳『「名君」の蹉跌』NTT出版、2004年」	単著	2004.05.15	『週刊東洋経済』2004年5月15日号	書評、p.118。
2	書評「橋爪紳也『飛行機と想像力－翼へのパッション』青土社、2004年」	単著	2004.06.12	『週刊 東洋経済』2004年6月12日号	書評、p120.
3	パネルディスカッション「昭和恐慌期のメディアとジャーナリズム」で「問題提起」と「新聞メディアの経済論説－金解禁と清算主義－」を報告	単独	2004.06.20	第15回日本経済思想史研究会全国大会 於：広島修道大学	
4	「大恐慌期英国の対日経済観－英国公文書館（PRO）所蔵資料を中心に」	単独	2004.07.27	日本経済思想史研究会定例会 於：慶応義塾大学	
5	書評「佐伯真一『戦場の精神史－武士道という幻影』NHK出版、2004年」	単著	2004.08.28	『週刊 東洋経済』2004年8月28日号	書評、p104.
6	書評「帝国書院編『地図で見る昭和の動き』帝国書院、2004年」	単著	2004.09.11	『週刊 東洋経済』2004年9月11日号	書評、p106.
7	書評「水谷三公『丸山真男－ある時代の肖像』ちくま新書、2004年」	単著	2004.09.25	『週刊 東洋経済』2004年9月25日号	書評、p122.

8	書評「法政大学大原社会問題研究所編／梅田俊英・高橋彦博・横関至著『協調会の研究』柏書房、2004年」	単著	2004.10.00	渋沢研究会編『渋沢研究』第17号	書評、p81-87。
9	書評「塚瀬進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004年」	単著	2004.11.13	『週刊 東洋経済』2004年11月13日号	書評、p137.
10	書評「猪木武徳『文芸にあらわれた日本の近代』有斐閣、2004年」	単著	2005.01.08	『週刊 東洋経済』2005年1月8日号	書評、126p.
11	書評「永原慶二『苧麻・絹・木綿の社会史』吉川弘文館、2004年」	単著	2005.02.05	『週刊 東洋経済』2005年2月5日号	書評、p99.
12	書評「富永茂樹『理性の使用』みすず書房、2005年」	単著	2005.03.19	『週刊 東洋経済』2005年3月19日号	書評、p148.
13	書評「藤井信幸『地域開発の来歴－太平洋岸ベルト地帯構想の成立－』日本経済評論社、2004年」	単著	2005.03.31	『日本経済思想史研究』第5号	
14	書評「陳天璽『無国籍』新潮社、2004年」	単著	2005.04.16	『週刊 東洋経済』2005年4月16日号	書評、p118.
15	「学者が斬る No.211: 問い直される経済メディアの役割」	単著	2005.04.26	毎日新聞社	『エコノミスト』2005年4月26日号の pp.46-49.
16	書評「柳沢遊・木村健二編著『戦時下アジアの日本経済団体』日本経済評論社、2004年」	単著	2005.05.01	『歴史評論』611号	書評、pp89-93
17	書評「山口輝臣『明治神宮の出現』吉川弘文館、2005年」	単著	2005.05.14	『週刊 東洋経済』2005年5月14日号	
18	「19世紀末停滞の経済学－日本のエコノミストの立場－」	単独	2005.05.29	経済学史学会第59回全国大会於：大阪産業大学	フォーラム「経済学史は経済政策研究の役に立つのか」の一つとして報告をおこなった。
19	書評「中村隆英・御厨貴編『聞き書 宮澤喜一回顧録』岩波書店、2005年」	単著	2005.06.04	『週刊 東洋経済』2005年6月4日号	
20	「福澤の経済政策思想－田口卯吉との比較を通じて－」	単独	2005.07.16	福澤研究センター2005年春学期セミナー於：慶応義塾大学	
21	書評「室山義正『松方正義－我に奇策あるに非ず、唯正直あるのみ』ミネルヴァ書房、2005年」	単著	2005.07.30	『週刊 東洋経済』2005年7月30日号	
22	書評「山室信一『日露戦争の世紀－連鎖視点から見る日本と世界』岩波新書、2005年」	単著	2005.09.24	『週刊 東洋経済』2005年9月24日号	
23	「歴史からみた構造改革論」(2005年10月期「日本経済最新レポート」の第3回目)	単独	2005.11.02	朝日カルチャーセンター於：新宿住友ビル	

24	書評「田中秀臣『最後の『冬ソナ』論』太田出版、2005年」	単著	2005.11.26	『週刊 東洋経済』2005年11月26日号	
25	書評「若田部昌澄『改革の経済学—回復をもたらす経済政策の条件』ダイヤモンド社、2005年」	単著	2005.12.09	『BREATHING』vol.9N T Tコミュニケーションズ	
26	書評「ジェフリー・S・ヤング、ウィリアム・L・サイモン[著]、井口耕二[訳]『ステイプ・ジョブズ—偶像復活』東洋経済新報社、2005年」	単著	2006.01.21	『週刊 東洋経済』2006年1月21日号	
27	書評「タイモン・スクリーチ[著]、村山和裕[訳]『江戸の英吉利熱—ロンドン橋とロンドン時計』講談社選書メチエ、2006年」	単著	2006.03.20	『BREATHING』vol.10N T Tコミュニケーションズ	
28	書評「関川夏央『おじさんはなぜ時代小説が好きか』岩波書店、2006年」	単著	2006.05.31	『BREATHING』vol.11N T Tコミュニケーションズ	
29	書評「安達誠司『脱デフレの歴史分析—「政策レジーム」転換でたどる近代日本』藤原書店、2006年」	単著	2006.07.09	『東京新聞』2006年7月9日号	
30	書評「ゲーリー・S・ベッカー、リチャード・A.ポズナー[著]鞍谷雅敏、遠藤幸彦[訳]『ベッカー教授、ポズナー判事のブログで学ぶ経済学』東洋経済新報社、2006年」	単著	2006.08.31	『BREATHING』vol.12N T Tコミュニケーションズ	
31	「『昭和恐慌』と後藤文夫—危機への対応としての「国家社会の純化」—」	単独	2006.11.17	第26回大東文化大学経済研究所シンポジウム 於：大東文化大学	「新官僚」後藤文夫の昭和恐慌期における思想と行動を「国家社会の純化」という観点から分析した。
32	書評「内藤陽介著『満洲切手』角川学芸出版、2006年」	単著	2006.12.02	『週刊 東洋経済』2006年12月2日号	
33	「後藤文夫論—「新官僚」の危機認識とその革新思想—」	単独	2007.03.10	東京外国語大学地域文化研究科「グローバル資本主義研究会」於：東京外国語大学本郷サテライト	後藤文夫の第一次世界大戦期から昭和恐慌期に至る政策思想と行動について、その危機認識に焦点を当てて報告をおこなった。
34	「後藤文夫の経済構想—「新日本同盟」結成から経済更生運動までを中心に—」	単独	2007.03.24	日本経済思想史研究会 於：慶応義塾大学	後藤文夫の経済構想に関して、「新日本同盟」結成時から昭和恐慌期の経済更生運動期までを中心に分析し、報告をおこなった。
35	「坂の上の雲は続く—近代120年の歩みから今を読み解く」第1回	単独	2008.01.10	『経』（ダイヤモンド社、2008年1月号）	近代経済成長過程120年の歩みから現代の問題を読み解く連載。
36	書評「島田昌和著『渋沢栄一の企業者活動の研究』日本経済評論社、2007年」	単著	2008.02.01	『歴史評論』694号	

37	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 2 回	単独	2008.02.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 2 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
38	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 3 回	単独	2008.03.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 3 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
39	「特集：経済学ガイ ダンス 経済史—史料 を検証することでみ えてくる経済社会」 pp.40-43	単独	2008.03.27	『経済セミナー』（日本評 論社、2008 年 4 月号）	
40	書評「大森郁夫編『経 済思想 9 日本の経 済思想 1』日本経済評 論社、2006 年」	単著	2008.03.31	『日本経済思想史研究』第 8 号	
41	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 4 回	単独	2008.04.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 4 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
42	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 5 回	単独	2008.05.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 5 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
43	忘れられた「新官僚」 後藤文夫	単独	2008.06.01	『評論』（日本経済評論社、 2008 年 6 月号、No.167）	自著の紹介。6-7 ページ。
44	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 6 回	単独	2008.06.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 6 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
45	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 7 回	単独	2008.07.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 7 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
46	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 8 回	単独	2008.08.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 8 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
47	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 9 回	単独	2008.09.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 9 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
48	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 10 回	単独	2008.10.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 10 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
49	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 11 回	単独	2008.11.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 11 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
50	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 12 回	単独	2008.12.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 12 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
51	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 13 回	単独	2009.01.10	『経』（ダイヤモンド社、 2008 年 1 月号）	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。

52	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 14 回	単独	2009.02.10	『経』(ダイヤモンド社、 2008 年 2 月号)	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
53	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 15 回	単独	2009.03.10	『経』(ダイヤモンド社、 2008 年 3 月号)	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。
54	「坂の上の雲は続く —近代 120 年の歩み から今を読み解く」第 16 回	単独	2009.04.10	『経』(ダイヤモンド社、 2008 年 4 月号)	近代経済成長過程 120 年の歩みから現代の問題を読み解 く連載。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.00	～	現在	社会経済史学会会員
2	1987.04.00	～	現在	日本経済思想史研究会会員 (平成 16 年度～平成 19 年度: 編集委員, 20 年度～現在: 幹事)
3	1994.01.00	～	現在	経営史学会会員 (平成 10 年度～13 年度幹事, 17 年度～現在: 広報委員会委員長)
4	1995.04.00	～	現在	経済学史学会会員 (平成 17 年度～18 年度: 編集委員)
5	1998.04.00	～	現在	メディア史研究会会員
6	1998.06.00	～	現在	コンピュータ利用教育協議会会員 (平成 10 年度～現在: 編集委員, 16 年度～現在: 監事)
7	1999.07.00	～	現在	メディアと経済思想史研究会会員 (平成 11 年度～現在: 事務局) 事務局
8	2000.07.00	～	現在	日本植民地研究会会員
9	2005.04.01	～	2007.03.31	独立行政法人国際観光振興機構通訳案内業 (ガイド) 試験 試験委員
10	2005.04.01	～	2008.03.31	国際日本文化研究センター共同研究員 (「文明交流圏としての海洋アジア」に参加)
11	2007.04.01	～	現在	早稲田大学現代政治経済研究所特別研究員
12	2007.07.01	～	現在	内閣府経済社会総合研究所特別プロジェクト「バブルの発生・崩壊からデフレ克服までの 日本経済とマクロ経済政策に関する研究」歴史編のワーキング・グループ委員 (2009 年 5 月 1 日現在継続中)

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	藤原 碩宣	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項		2005.04.01				
1) 千葉県自治専門校				日本経済論、財政、経済の仕組み、商工行政等の研修講師		
2) 千葉市役所職員研修所				日本経済論、財政、経済の仕組み、商工行政等の研修講師		
3) 茨城県自治研修所				日本経済論、財政、経済の仕組み、商工行政等の研修講師		
4) 群馬県地方自治研修所				日本経済論、財政、経済の仕組み、商工行政等の研修講師		
5) 山形県自治研修協議会				日本経済論、財政、経済の仕組み、商工行政等の研修講師		
6) 大東文化大学FDプロジェクト				大東文化大学全学FD委員会設立への委員会委員長		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『経済と経済学』改訂版	共著	2007.03.15	実教出版			
論文						
1 『日本の財政改革の動向』	共著	2006.09.15	韓国地方財政学会年報			
その他						
1 『地方財政再建の方向性』1	単著	2006.09.01	「クリエイティブ房総」千葉県自治センター			
2 『日本の財政改革の動向』	共同発表	2006.09.15	韓国全州市 全北大学校における韓国地方財政学会2006年大会			
3 報告者に対する討論		2007.05.00	日本地方財政学会第15回大会			
4 報告者に対する討論		2007.10.00	日本財政学会第63回大会			

Ⅲ 学会等および社会における主な活動	
1	学術審議会専門委員
2	経済企画庁（現内閣府）専門調査員（総合計画局）
3	公益事業学会会員
4	公共選択学会会員
5	国際財政学会（I I P F）会員
6	国際租税学会（I F A）会員
7	大蔵省（現財務省）専門調査員（主税局）
8	日本金融学会会員
9	日本計画行政学会会員
10	日本財政学会理事、常任理事、監査
11	日本地方財政学会理事、監査
12	最高裁判所職員採用試験委員会 臨時委員
13	最高裁判所家庭裁判所調査官試験委員会 臨時委員

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	古屋 核	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業用 HP の運営		2005.04.00		(2005年4月～現在) 宿題、宿題解答、復習問題などを HP 上で掲示。(http://www.t.daito.ac.jp/~t037785)。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『経済学を学ぶための微分法の基礎』		2007.08.09		同文館 共著者 大東文化大学 木村哲三、浦田健二教授。筆者はコラム、第4章、章末問題、解答の一部を担当。B5版、総頁310頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者。著者名(共著の場合のみ記入)	
著書							
1 “Effects of Exchange Rate Revaluation under Price Controls and Endogenous Quality Adjustment.”		共	2007.02.00	Hisayuki Mitsuo, ed. New Developments of the Exchange Rate Regimes in Developing Countries. Palgrave Macmillan.		左掲書の第7章(pp.231-248)を担当。査読有。	
2 “Foreign Currency Debt as a Barrier to Price Adjustment in a Financially Constrained Economy.”		共	2007.06.00	Hisayuki Mitsuo, ed. Financial Fragilities in Developing Countries. IDE-JETRO.		左記調査報告書の第3章(pp.39-54)を担当。査読無。	
論文							
1 “Regulation, Quality Adjustment, and Relative Price Changes: The Case of yen Appreciation Shock of 1985”		単	2006.03.00	大東文化大学経済学会『経済論集』第86号		pp.147-161。査読無。	
2 「市場の失敗と雇用格差—“既卒”差別と若年労働問題—」		単	2008.03.00	大東文化大学経済研究所『経済研究』第21号 pp.17-26		査読無。	
その他							
1 「外貨建て債務と企業行動」		単	2007.11.00	『アジア研ワールド・トレンド』No.146、pp.10-13		左誌146号特集「開発途上国における金融的脆弱性」における解説。査読無。	

2	第28回経済シンポジウム「マルチエージェントシステムは経済学を救うか」	共	2009.03.00	大東文化大学経済研究所『経済研究』22号	パネルディスカッション。pp.63-78。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1995.10.00	～	現在	American Economic Association 会員	
2	1996.09.00	～	現在	日本経済学会会員	
3	2001.05.00	～	現在	大東文化大学経済学会会員	
4	2004.05.00	～	2005.03.00	日本貿易振興会アジア経済研究所「国際通貨体制の新展開と開発途上国」研究会委員	
5	2005.05.00	～	2006.10.00	日本貿易振興会アジア経済研究所「開発途上国における金融市場と貨幣」研究会委員	
6	2005.05.00	～	現在	日本金融学会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	教授	氏名	吉田 憲夫	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価において高い評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『ドイツ・イデオロギー』における疎外論の止揚と物象化論の定礎	単著	2005.08.01	『情況』2005年8・9月号 (情況出版)				
2 「今村仁司さんを悼むー『第三項排除』論と価値形態論をめぐって」	単著	2007.07.01	『情況』2007年7・8月号 (情況出版)				
その他							
1 書評「日山紀彦著『抽象的人間労働論』の哲学」	単著	2007.03.09	『週間読書人』				
2 「編者序文」	単著	2007.05.01	『情況』2007年5月号別冊「日中合同マルクス主義哲学研究」				
III 学会等および社会における主な活動							
1	1977.04.00	～	現在	経済学史学会			
2	1978.04.00	～	現在	社会思想史学会			

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	准教授	氏名	角田 保	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「いかに学生に自習させるか：方法と教材」		2006.12.15		大東文化大学経済学部FD講演会 発表			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
論文							
1 主な喫煙関連疾病の死亡率とその異時点的な影響		単著	2005.07.00	『経済論集』85号 大東文化大学経済学会			
2 喫煙習慣に関する経済学分析・合理的依存症モデル神話とその再検討		共著	2005.09.00	東洋経済新報社		小椋正立・鈴木亘と共著『医療と介護の世代間格差』第9章、東洋経済新報社	
3 喫煙習慣の世代間連鎖に関する計量経済学分析		共著	2005.09.00	東洋経済新報社		小椋正立・鈴木亘と共著『医療と介護の世代間格差』第10章、東洋経済新報社	
4 産婦人科医師数の動向とその分析		単著	2006.03.00	『経済論集』86号 大東文化大学経済学会			
5 出生行動における若年者労働市場と公共政策の役割		共著	2008.10.00	経済研究第59巻第4号		小椋正立との共著	
その他							
1 喫煙・非喫煙選択と外来医療費への効果		共著	2004.06.12	日本経済学会		小椋正立・泉田信行と共著	
2 “Public Policies and the Fertility of Japanese Women”		共著	2008.02.01	出生率と公共政策コンファレンス (Fertility and Public Policy)		小椋正立と共著	

3	“Analysis of Long-Term and Health Care Costs Across Municipalities in Japan”		2009.01.14	「高齢者の医療費と介護費に関する主要国の政策と規政」国際会議	小椋正立との共著
III 学会等および社会における主な活動					
1	1997.09.00	～	現在	日本経済学会会員	
2	2005.01.00	～	現在	International Health Economic Association 会員	
3	2006.06.00	～	現在	医療経済学会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	准教授	氏名	村 俊範	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業評価アンケートの実施			2007.12.00	大学で実施した授業評価アンケートを担当授業で行った。			
2) 授業評価アンケートの実施			2008.12.00	大学で実施した授業評価アンケートを担当授業で行った。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 交通需要予測における交通機関の決定要因としての時間費用の考え方	単著	2007.03.00	大東文化大学経済学会経済論集 88 号	交通需要予測における各種マイナスの効用についての研究・評価を行なった論文である。総頁数：10 頁			
2 台湾高速鉄道 (台湾新幹線) の需要予測	単著	2008.03.00	大東文化大学経済学会経済論集 90 号	2007 年 3 月に全線が開業した台湾高速鉄道について、輸送人員の需要予測における研究・評価を行なった論文である。総頁数：20 頁			
3 「九州新幹線 (博多-新八代) の需要予測」	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要 47 号 <社会科学>	2010 年度末に開業する予定の九州新幹線 (博多-新八代間) の需要予測についての評価・研究を行なった論文である。総頁数 26 頁			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1996.10.00	～	現在	日本交通学会一般会員			
2	1997.10.00	～	現在	情報処理学会一般会員			
3	1997.10.00	～	現在	日本ソフトウェア科学会一般会員			

4 1999.10.00 ~ 現在

日本消費経済学会一般会員

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	准教授	氏名	横溝 えりか	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 国際協力銀行において、対外債務持続可能性の検証方法を説明			2006.10.00				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 文部科学省において、2006 年ノーベル経済学賞プレス発表用資料作成			2006.10.00				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「通貨切下げによる貿易収支の改善」	単著		『産業経営』第 34 号	レフェリー有			
2 Capital Flow to Asian Developing Countries and Sustainability of External Debt		2007.07.00	『経済論集』第 89 号				
3 「HS コード分類に基づく輸出入弾力性の推計」	単著	2008.11.00	『産業経営』第 43 号				
その他							
1 「エマージングマーケット経済からの資本流出」		2004.07.00	早稲田大学産業経営研究所	研究報告			
2 「開放経済の基本」、「固定相場」、「変動相場」、T. マイクル著『マクロ経済学』第 12~14 章	翻訳	2004.09.00	学文社				

3	「エマージング・マーケット経済からの外国資本流出-対外債務持続可能性の視点から-」		2004.09.00	日本金融学会 2004 年度 秋季大会 (愛知大学)	
4	「これまでの研究を振り返って」		2005.02.00	大東文化大学経済研究所	研究報告
5	The Domestic and Global Impact of Japan's Policies for Growth, by N.Batini, P.N'Diaye and A.Rebucci(IMF)		2005.11.00	Southern Economic Association Annual Meeting (アメリカ、ワシントン D.C)	学会報告での討論者
6	Making Hay while the Sun Shines-Looking at the Sustainability of U.S. Debt from Japan-	単著	2006.01.00	早稲田大学産業経営研究所 ワーキングペーパー	
7	Making Hay while the Sun Shines-Looking at the Sustainability of U.S. Debt from Japan-		2006.02.00	ジョージワシントン大学 経済学研究科	研究報告
III 学会等および社会における主な活動					
1	1996.10.00	～	現在	国際経済学会会員	
2	1997.10.00	～	現在	日本金融学会会員	
3	1999.10.00	～	現在	日本経済学会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	講師	氏名	神谷 諭一	大学院における研究指導当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 講義プリントの作成		2008.04.00		明治学院大学 2008 年度担当科目「基礎数学」において、毎回、講義プリントを作成し配布した。			
2) 講義プリントの作成		2008.04.00		明治学院大学 2008 年度担当科目「入門経済数学」において、毎回、講義プリントを作成し配布した。			
3) 演習プリントの作成		2008.04.00		日本大学工学部 2008 年度担当科目「微分 I, II」において、毎回、演習プリントを作成し配布した。			
4) 演習プリントの作成		2008.04.00		日本大学工学部 2008 年度担当科目「行列・行列式」において、毎回、演習プリントを作成し配布した。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 A note on the spectrum of the Riemann zeta-function.	単著	2004.09.00	Commentarii, Mathematici Universitatis Sancti Pauli 53, 立教大学 数学教室	139-144			
2 On spectrums of certain harmonic functions attached to the Riemann zeta-function.	単著	2004.10.00	Acta Mathematica Hungarica 105, Springer	103-114			
3 An asymptotic formula for a sum involving zeros of the Riemann zeta-function.	共著	2004.12.00	Publications de l' Institut Mathématique 76 (90), Matemati č ki Institut SANU	Y. Kamiya and M. Suzuki. 81-88			
4 Remarks on the Lindel ö f hypothesis.	単著	2004.12.00	Publications de l' Institut Mathématique 76 (90), Matemati č ki Institut SANU	73-79			

5	Spectral sets of certain unbounded functions.	単著	2006.01.00	Acta Mathematica Hungarica 110, Springer	51-65
6	An approach to spectral sets of certain zeta-functions.	単著	2007.05.00	Journal of Mathematical Analysis and Applications 329, Elsevier	1303-1315
7	On the average of some q -additive functions.	共著	2008.07.00	Annales Universitatis Scientiarum Budapestinensis de Rolando E ö tv ö s nominatae, sectio computatorica, 29, Department of Computer Algebra E ö tv ö s Lor á nd University	Y.Kamiya and L.Murata,39-63
8	Spectral sets of certain functions associated with Dirichlet series.	共著	2008.11.00	Journal of Mathematical Analysis and Applications 347, Elsevier	H. Ishikawa and Y. Kamiya. 204-223
その他					
1	あるクラスに属するゼータ関数の Beurling スペクトル		2004.10.00	研究集会：解析的整数論とその周辺、京都大学数理解析研究所	
2	関数解析的な立場からのリーマンゼータ関数の研究		2005.03.00	日本数学会関数解析分科会	
3	Beurling のスペクトル理論の観点からの Weil の明示公式の解釈、試み		2005.10.00	研究集会：解析的整数論、京都大学数理解析研究所	
4	ディリクレ級数に付随する関数のスペクトル集合について		2007.10.00	研究集会：解析的整数論とその周辺、京都大学数理解析研究所	
5	On the average of some q -additive functions.		2008.01.00	研究集会：ゼータ関数、 L 関数、日仏冬の学校 ホテルマホロバマインズ	
6	グレイ符号と sum of digits について		2008.07.00	共同研究集会： L 関数の値分布と関係する数論的な諸関数の研究、京都大学数理解析研究所	
III 学会等および社会における主な活動					
1	1997.10.01 ~ 現在			日本数学会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科		職名	講師	氏名	郡司 大志	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1	教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)			2009.04.00	(2009年4月～現在) 演習で読書を行い、毎回感想文を書かせている。			
2	作成した教科書、教材、参考書						
1)			2007.04.00	(2007年4月～現在) 新入生のための教育を行うために、大学生活で必要とされるスキルについての資料を作成した。			
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4	その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1	“Convergence across Indian States: A Re-evaluation”	共著	2005.02.07	ICES Working Paper, No. 121, The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University	With Yuko Nikaido.		
2	“A Cointegration Approach to Estimating Contagion: An Application to the Russian Financial Crisis”	単著	2006.09.00	東京国際大学『東京国際大学論叢—経済学部編』第35号	17-28 頁		
3	“Essays on Currency Crises”	単著	2007.03.00	法政大学大学院課程博士学位論文			
4	“Common Fundamentals in Currency Crises and the Channels of Contagion Effects”	単著	2007.09.00	東京国際大学『東京国際大学論叢—経済学部編』第37号	63-77 頁		
5	“Bank Profitability and Bank Lending Channel: Evidence from China” With Yuan Yuan.	共著	2007.11.00	ICES Working Paper, No.134. The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University.			

6	“Bank Competition and Monetary Policy”	共著	2009.01.00	Japan and the World Economy, Vol.21, No.1, Elsevier	With Kazuki Miura and Yuan Yuan.
その他					
1	“Convergence across Indian States: A Re-evaluation”	共著	2004.06.12	日本経済学会 2004 年度春季大会 (明治学院大学)	二階堂有子氏との共著
2	「形成期の証券市場と企業の市場参加—金融危機前後のタイ証券市場の評価—」	共著	2004.06.12	日本経済学会 2004 年度春季大会 (明治学院大学)	三重野文晴氏との共著
3	“Firm’s IPO Behavior and its Financial Impacts in Developing Financial Market: A Case of Thai Securities Markets in the Early 1990s”	共著	2004.11.13	The Ninth International Convention of the East Asian Economic Association, the Chinese University of Hong Kong	With Fumiharu Mieno.
4	「銀行の競争度と金融政策の効果」	共著	2005.10.08	日本金融学会 2005 年度秋季大会 (大阪大学)	三浦一輝氏・袁媛氏との共著
5	“The Bank Lending Channel in China”	共著	2006.09.09	日本金融学会 2006 年度秋季大会 (小樽商科大学)	袁媛氏との共著
6	“The Bank Lending Channel in China”	共著	2006.11.18	The Tenth International Convention of the East Asian Economic Association, Beijing	With Yuan Yuan.
7	Comments on “Productivity and Efficiency of Banks in South East Asia,” by Ergun Dogan and Dietrich K. Fausten		2006.11.18	The Tenth International Convention of the East Asian Economic Association, Beijing	
8	「アナザー・ライブドア・ショック？」	共著	2007.05.12	日本金融学会 2007 年度春季大会 (麗澤大学)	三浦一輝氏との共著
9	“The Impact of Foreign Capital on the Chinese Banking Market” With Yuan Yuan.	共著	2008.11.15	The Eleventh International Convention of the East Asian Economic Association, Manila	
10	Comments on "Bank Loan and Real Estate Prices in Asia" by Masahiro Inoguchi		2008.11.16	The Eleventh International Convention of the East Asian Economic Association, Manila	
11	Comments on "Structural and Cyclical Movements of the Current Account in the U.S.: 1976-2007" by Yoichi Matsubayashi		2008.12.07	The 10th Macroeconomics Conference, Hitotsubashi University	
III 学会等および社会における主な活動					
1	2000.05.00	～	現在	日本金融学会会員	
2	2002.05.00	～	現在	日本経済学会会員	
3	2004.11.00	～	現在	American Economic Association 会員	
4	2008.12.26	～	現在	社団法人全国地方銀行協会金融構造研究会会員	

(表 24)

所属	経済学部現代経済学科	職名	特任講師	氏名	佐藤 方宣	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業運営の中でメーリングリストをディスカッションに活用。		2009.04.00		2009 年度担当科目「卒業演習」について、メーリングリストによって事前の情報提供や事後の議論を行っている。(2009 年 4 月 1 日～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『福祉の経済思想家たち』		2007.04.00		ナカニシヤ出版 講義の教科書として使用。筆者は第 23 章「ミルトン・フリードマン：“福祉国家アメリカ”の批判者」(254-264 頁)を担当。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『福祉国家の経済思想』小峯敦編	共著	2006.10.00	ナカニシヤ出版	第 4 章「戦間期アメリカの『計画化』: J.M.クラークを中心に」 107-133 頁			
2 『福祉の経済思想家たち』小峯敦編	共著	2007.04.00	ナカニシヤ出版	第 23 章「ミルトン・フリードマン：“福祉国家アメリカ”の批判者」 254-264 頁			
3 『市場社会とは何かーヴィジョンとデザイン』平井俊顕編	共著	2007.05.00	Sophia University Press 上智大学出版	第 12 章『『自由主義』の変容ークラークとナイト』 256-279 頁			
4 『ビジネス倫理の論じ方』	編著	2009.04.00	ナカニシヤ出版	序章「倫理はなぜ／いかにビジネスの問題になるのか」3-19 頁 第 1 章「企業とビジネス: 社会的責任はどう問われたか」21-49 頁			
論文							
1 「J.M.クラークの社会経済学のヴィジョン」	単著	2004.06.00	『経済学史学会年報』第 45 号	40-54 頁 (査読あり)			
2 「1920 年代アメリカのビジネス・エッセイ『倫理コード』をめぐる動向とその同時代評価」	単著	2005.12.00	『経済学史研究』(旧『経済学史学会年報』) 第 46 巻 2 号	92-107 頁 (査読あり)			
その他							
1 「J.M.クラークとニューディール」		2004.05.29	経済学史学会、第 68 回全国大会 (北星学園大学)				

2	[セミナー報告]「近年における大戦間期の制度主義再考について: Malcolm Rutherford “Walton H. Hamilton and the Public Control of Business” を中心に」	2005.01.22	科学研究費基盤研究 B (1) 『19 世紀末～戦間期における経済思想の国際比較—経済社会の構想と経済政策のデザイン—』第 2 回研究会 (東京都立大学国際交流会館)	
3	[セミナー報告]「J.M. クラークにおける『コントロール』と『計画化』」	2005.02.19	『総合セミナー: 福祉国家の経済思想 ~自由と統制の混合~』(中央大学駿河台記念館)	
4	[コメンテーター] (Summary in Japanese and Comment in English)	2005.05.15	科学研究費基盤研究 B (1) 『19 世紀末～戦間期における経済思想の国際比較—経済社会の構想と経済政策のデザイン—』第 3 回研究会 (東京都立大学国際交流会館)	第 4 セッション “Discussion on Prof. Rutherford's Walton Hamilton and the Public Control of Business” におけるコメンテーター
5	[コメンテーター (学会・指定討論者)]	2005.05.28	経済学史学会第 69 回全国大会 (大阪産業大学)	高橋慎吾氏 (京都大学大学院) の報告「J.R. コモンズの『取引』経済学」の指定討論者
6	[セミナー報告] “John Maurice Clark on Control and Planning”	2005.06.13	Sophia University Seminar: “Economic Theory and Economic Policy in the Inter-war Period: Comparative Studies of UK, USA, and Japan”	
7	[コメンテーター]	2006.06.18	龍谷大学社会科学研究所、2006 年度個人研究「ベヴァリッジの経済思想: デジタルアーカイブの手法から」(個人研究: 小峰敦) の資金援助による招聘 (龍谷大学)	京阪経済研究会「(特集) ベヴァリッジの『失業』(1909)」、小峰敦氏 (龍谷大学) の報告「ベヴァリッジの『失業』(1909): 独自性と限界」の招聘討論者
8	「自由主義の変容とクラーク, ナイト」	2006.10.22	社会思想史学会、第 31 回全国大会 (法政大学)	
9	「フランク・ナイトと自由主義の変容」	2006.11.25	経済学史学会、関東部会 (東洋大学)	
10	[セミナー報告]「アメリカにおけるビジネス・エシックス論の興隆: 20 世紀初頭に問われたもの」	2007.01.29	関西大学経済・政治研究所、ビジネス・エシックス研究班、公開セミナー	
11	「クラークとナイト: 『自由主義』の変容をめぐる」	2007.05.27	経済学史学会、第 71 回全国大会 (九州産業大学)	
12	[書評]「Guglielmo Forges Davanzati: Ethical Codes and Income Distribution: A Study of John Bates Clark and Thorstein Veblen, London: Routledge, 2006」	2007.06.00	『経済学史研究』 第 49 巻 1 号	178-179 頁
13	[コメンテーター]	2007.07.14	経済理論史研究会 (早稲田大学)	伊藤秀史氏 (一橋大学) 報告「情報の非対称性とインセンティブに関する研究が新古典派経済学にもたらした変容」のコメンテーター
14	「危険, 不確実性, そして自由: ナイトの自由論」	2007.10.13	社会思想史学会、第 32 回全国大会 (立命館大学)	

15	『自由主義』の変容	2007.12.01	経済学史学会、関東部会(上智大学)	ミニ・シンポ『市場社会論と経済理論の関係』のパネリストの一人として報告 司会者：千賀重義(横浜市大)、八幡清文(フェリス女学院) パネリスト：高橋聡(中央大学)、尾近裕幸(國學院大學)、中山智香子(東京外国語大学)、藤田菜々子(名古屋市立大学)、平井俊顕(上智大学) コメントーター：山田鋭夫(九州産業大学)、野口旭(専修大学)
16	“Clark and Knight on the Conditions of Liberal Society: After the Transformation of “Liberalism””	2008.03.17	経済学史学会第1回 Young Scholar's Seminar (一橋大学)	
17	「法人企業の社会的責任論の系譜へ」	2008.05.24	経済学史学会、第72回全国大会(愛媛大学)	セッション「経済思想とビジネス・エシックス」の組織者として趣旨説明と個人報告。 報告者：中山智香子(東京外国語大学)、討論者：若田部昌澄(早稲田大学)、司会：小峰敦(龍谷大学)

III 学会等および社会における主な活動

1	1998.05.00	～	現在	経済学史学会会員
2	2005.05.00	～	現在	社会思想史学会会員
3	2006.11.00	～	現在	経済理論史研究会事務局

外国語学部

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	大島 吉郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 「中検一日講座 4 級」日本中国検定協会主催		2009.01.31		中国語検定試験第 66 回試験の 4 級出題問題の解説を行う講座であり、講義内容を録画し、協会の HP で配信を行うもの。		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「“V上”の意味解釈 — 心理的側面を中心に」	単著	2005.03.07	大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第 22 号	方向動詞“上”が方向補語として用いられ、抽象的方向を示す場合の用例を中心に、意味分析を行うもの。従来解釈に話者の心理的側面からの視点を導入し、より具体的かつ詳細な意味記述を提示し、辞書における説明の矛盾点についても指摘を行った。A 5 版、全 21 頁。		
2 「動詞重畳型に関する通時的研究 (七) — 《脂硯齋重評石頭記》庚辰本を中心に」	単著	2005.03.31	大東文化大学『大東文化大学紀要』(人文科学) 第 43 号	清代乾隆庚辰年の過録本とされる《石頭記》唐辰本を対象に、動詞重畳型の用例を分類し、通時的観点から問題点の指摘を行うもの。(後四十回)に比し類型が豊富に見られ、曹雪芹の言語を採る上で重要な手掛かりを明らかにし得たものと考え。同時期の他の資料とは顕著な差異を示す結果が得られた。B 5 版、全 21 頁。		
3 「二音節動詞重畳型の通時変化について」	単著	2005.07.22	光生館『香坂順一先生追悼記念論文集』	《清平山堂話本》から《児女英雄伝》まで 13 種の言語資料から、二音節動詞の重畳型について類型上の変化を通時的に記述したもの。A 5 版、全 12 頁。		
4 「香坂順一先生主要著作目録」	単著	2005.07.22	光生館『香坂順一先生追悼記念論文集』	研究・教育分野を中心に 1937 年から 1999 年までの約 60 年間に及ぶ研究業績をリストアップしたもの。A 5 版、全 27 頁。		
5 「構造助詞“地”の解釈をめぐって — 「様態化接辞」説」	単著	2006.02.03	大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第 23 号	従来状況語マーカである助詞“地”の意味解釈は成されておらず、もっぱら構造上の説明に終始していたが、本論文では“得”、“的”との共通性「様態化」に着目し、連用修飾語を構成する際の“地”の機能を「様態化接辞」という面からの説明を試み、新たな仮説の提示を行った。A 5 版、全 15 頁。		

6	「動詞重畳型に関する通時的研究(八) — 「三言」を中心に	単著	2006.03.31	大東文化大学『大東文化大学紀要』(人文科学)第44号	明末天啓年間に刊行された「三言」(馮夢龍撰)全120編の作品について動詞重畳型に関する調査の概要を示したものの。各作品の成立時期を明らかにするような特徴的な型式は見られず、作品成立当時の資料性を、動詞重畳型からは見出し得ないという結論である。B5版、全23頁。
7	「《元刊〈老乞大〉》における常用漢字について」	単著	2007.02.01	大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第24号	現存する《老乞大》諸テキストのうち、元代に刊行されたと推定される《元刊〈老乞大〉》は朝鮮半島高麗朝当時の中国語会話テキストとして極めて高い資料的価値を有する。このテキストに用いられた一万六千字余りの使用漢字を使用頻度の高い順から整理し1393の字種に特定し、字体と用字法の特徴及び傾向について述べたものである。A5版、全20頁。
8	「動詞重畳型に関する通時的研究(九) — 《兒女英雄傳》を中心に」	単著	2007.03.31	大東文化大学『大東文化大学紀要』(人文科学)第45号	1868年清朝光緒4年初版になる《兒女英雄傳》は清代北京語を中心に、中国北方方言の言語状況を知る上で重要な資料である。中国語の歴史的变化を位置付けるためには、このテキストのデータは必須であり、大きな意味を有する。全985例を分類し、その特徴を明らかにし、現代語との共通的と差異を述べたもの。B5版、全29頁。
9	“黒”の読音をめぐって	単著	2008.03.31	大東文化大学『大東文化大学紀要<人文科学>』第46号	現代中国語(普通話)で/hei/と発音される“黒”はかつて入声音であった。入声韻尾が消失し/he/となり/hei/に変化したものと考えられる。同じ舌根音のグループに属する/gei/も入声韻尾を失い/ge/から/gei/へと変化を遂げたのではないかという仮説を提示し、音韻変化の過程が文字表記として“和”、“合”、“己”、“給”などのように現れたものであるとの説を述べたもの。B5版、全13頁。
その他					
1	「『会話テキスト』として見た『元刊老乞大』 — 基礎調査報告」	単著	2004.12.12	中国近世語学会秋期研究集会	『老乞大』原刊本に近いとされる元刊本の「会話テキスト」としての条件について行っている調査内容を中心に行った報告。識字教育、発音教育の面を中心に基礎データを提示し、上級会話テキストに盛り込まれた情報の分析を行ったもの。
2	「私の中国語学習法(8) — 「中国語脳」を作る	単著	2005.08.01	日本中国語検定協会『中国語の環』第70号	中国語検定試験の受験者向けに作成されたパンフレットに掲載されたエッセイ。
3	「《元刊〈老乞大〉》における常用漢字について」	単著	2006.12.17	中国近世語学会秋期研究集会	《元刊〈老乞大〉》の常用漢字に関する先行研究は中国深圳大学張林濤(2004)が有るが、データが不正確であり、信頼性が極めて低いことを指摘し、独自の調査に基づく新たなデータを提示し、その特徴について報告を行ったもの。
4	「中国語が「分かる」ためには」	単著	2009.01.00	日本中国語検定協会『中国語の環』第80号	巻頭エッセイ。中国語学習者、中国語検定試験受験者を対象に日本中国語検定協会が年3回発行する定期刊行物に掲載されたもの。中国語学習の中級段階への移行をスムーズに実現するためには複文パターンをきちんと身につけ、副詞“就”及び“也”の習得が可かせない事を述べる。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1980.10.00	～	現在	日本中国語学会会員	
2	1985.05.00	～	現在	日本中国語学会会員	
3	1985.10.00	～	現在	中国近世語学会会員(2002年5月～現在理事)	
4	1989.06.00	～	現在	大阪市立大学中国語学会会員	
5	2004.12.00	～	現在	日本中国語検定協会評議員	
6	2006.02.00	～	現在	日本中国語検定協会理事(関連事業担当)	
7	2009.02.00	～	現在	中国語教育学会会員	

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	岡部 謙治	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業評価		2000.00.00		(2000 年度～現在) 毎年行われる授業評価で高い評価を得ている。わかりやすい授業をと心がけてきた成果と考えている。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1)		2008.00.00		(2008 年度～現在) 学生自治組織「中国語研究部」の放課後指導、春季合宿、夏季強化練習、春季合宿への語学指導参加、暗誦弁論大会、中国語劇上演への語学指導を通じ、学生の語学力向上を援助している。		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1977.11.00	～	現在	日本中国語学会会員		
2	1984.03.00	～	現在	老舎研究会会員		
3	1990.09.00	～	現在	世界漢語教学学会会員		
4	1997.10.00	～	現在	中国語教育学会会員		
5	2003.06.00	～	現在	日中対照言語学会会員		

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	瀬戸口 律子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 中国語ははじめました	単著	2005.04.01	駿河台出版社	発音を重視しながら、「読む」「書く」「話す」「聞く」の基礎を習得するための中国語初級テキスト。全 111 頁。			
2 中国文化を歩こう	共著	2005.04.01	駿河台出版社	中国語の基礎を学び、更に中国語コミュニケーションのレベルアップと中国文化に関する知識を学ぶための中国語中級テキスト。共著者 (盧燕麗) 全 70 頁。			
3 官話問答便語全訳ー琉球官話課本研究	単著	2005.09.30	榕樹書林	琉球官話課本の一種「官話問答便語」の全訳本 (注釈付) 全 296 頁 (193~296 頁は天理大学附属天理図書館本複製)			
4 新・中国語ははじめました	単著	2008.04.01	駿河台出版社	中国語の初級テキスト「中国語ははじめました」の新訂版。全 111 頁。			
論文							
1 談《唐話 長短拾話》	単著	2004.07.00	国立中山大学清代学術研究中心編印	第三屆國際暨第八屆清代学術研討會 (台湾高雄中山大学にて開催) で口頭発表した“《唐話・長短拾話》的語言特点”に補充を加えまとめたもの。(中国文) (307~316 頁)			
2 两部唐話課本的語言比較	単著	2006.01.00	康樂集 (曾憲通教授七十寿慶論文集)	唐話のテキスト二種《唐話》と《唐話・長短拾話》について、課本の内容と言語を比較し、それぞれの特徴を指摘。(中国文) (267~273 頁)			
3 琉球官話課本《学官話》兩種抄本的比較	単著	2006.03.31	外国語学研究第 7 号 大東文化大学大学院外国語研究科	《中国語文》創刊 50 周年国際学術検討会 (中国南昌大学にて開催) で口頭発表した内容をベースとして補充しまとめたもの。二種類の写本 (天理本と長沢本) について比較分析し、それぞれの課本の言語的特色を指摘。(中国文) (15~21 頁)			
4 琉球官話課本与唐話課本之比較	単著	2006.04.00	国立台湾師範大学国文学系	国立台湾師範大学国文学系が主催した創立 60 周年記念シンポジウムで開催した学術研討会で口頭発表した論文。(中国文) (127~136 頁)			
5 「琉球官話課本中表使役、被動句的“給”」	共著	2007.03.10	中国語文第 2 期 中国語文雜誌社	琉球官話課本の中に現われた使役・受身の「給」の用法について整理分析 (144-148 頁) (中国文) (李煒共著)			

6	従《百姓官話》看琉・中交流	単著	2007.09.17	中日韓三国学術研討会論文集 山東大学	琉球官話課本の一つ《百姓官話》の内容を通して琉球と中国の交流史について紹介。(中国文)(134-140頁)
7	琉球二字官話集と琉球官話	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集	琉球二字官話集の言語と内容を分析し、他の琉球官話課本との比較を中心にまとめたもの。(95-111頁)
8	琉球《官話問答便語》及其語言的考察	単著	2008.06.00	中国語言学報 第13期 高務印書館	2006年8月 中国北戴河で開催された「中国言語学会第13回大会」で口答発表したものを補充修正し、まとめたもの。(中国文)(241-247頁)
9	18世紀琉球的漢語教学一以“琉球官話課本”為中心	単著	2008.08.00	琉球中国關係国際学術會議	琉球大学で開催された第11回琉中歴史関係国際シンポジウムで口答発表した内容をまとめたもの。
10	琉球官話課本の研究	単著	2009.03.00	琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻博士(学術)論文	琉球官話課本の六種を研究材料として課本の中国語史上の位置付けと言語の特色について分析・考究した。
その他					
1	両部《唐話》課本的比較		2004.06.27	中国言語学会於中国銀川	《唐話》と《唐話長短拾話》の内容及び語彙、語法を比較し、それぞれの言語的特徴について紹介。使用言語：中国語
2	師恩難忘	単著	2005.03.15	外国語学会誌 No34	金丸邦三教授御定年退職記念号にて金丸教授との交流をまとめたもの。(7~10頁)
3	何容氏中国語文法散論	単著	2005.03.30	外国語学研究 第6号	《中国語文法散論-4》の続編。(86~99頁)
4	「琉球官話課本と唐話課本之比較」		2006.04.08	国立台湾師範大学暨国文学系創立60周年記念国際学術研究会	琉球官話課本と唐話課本の中で、比較的編纂時期が接近している課本を一種ずつ選び、その言語的特質と琉球と中国、日本と中国のかかわりについて説明。使用言語：中国語
5	《官話問答便語》及其語言的考察		2006.08.17	第13回中国言語学会 於中国北戴河	琉球官話課本の一つ《官話問答便語》の語彙・語法を通して課本の中で何故閩語の影響を最も強く受けたかを指摘。使用言語・中国語
6	『方言と中国文化』(周振鶴・游汝傑著)	単著	2007.03.30	外国語学研究第8号	〈方言と民俗〉の翻訳担当(155~168頁)
7	書評『斉鯤・費錫章統琉球国志略』	単著	2007.04.22	琉球新報	(原田禹雄訳注 榕樹書林)
8	校歌		2007.09.00	TONGXUE 第28号	琉球大学で開催された日本中国語学会全国大会記念号。小学校校歌の歌詞に記された中・琉交流についてまとめたもの。
9	「従《百姓官話》看琉・中交流」について	単著	2007.09.18	山東大学	琉球官話課本《百姓官話》に描かれた琉球と中国の民間交流について紹介。使用言語：中国語
10	「18世紀琉球的漢語教学一以琉球官話課本為中心一」	単著	2007.11.23	第11回琉球中国關係国際学術會議 於琉球大学	琉球官話課本の内容を通して当時の琉球における中国語教育の状況を指摘。使用言語：中国語
11	書評『明代冊封体制と朝貢貿易の研究』	単著	2008.03.14	沖繩タイムス	(辺土名朝有著 新星出版)
12	書評『封舟往還』	単著	2008.03.30	琉球新報	(原田禹雄訳注 榕樹書林)
13	琉球官話課本のことば		2008.06.28		琉球大学で開催された公開研究発表会(「琉球官話と中国のことば」)にて発表。
14	《官話問答便語》和《学官話》的語言異同		2008.08.00	中国・温州大学	第14回中国言語学会全国大会(温州大学)にて発表。琉球官話課本の『官話問答便語』と『学官話』の言語の異同について、主として二書の言語比較について発表。使用言語・中国語
III 学会等および社会における主な活動					
1	1972.10.00 ~ 現在			日本中国語学会会員(1996年~現在 評議員)	
2	1980.10.00 ~ 現在			日本中国学会会員	
3	1985.05.00 ~ 現在			近世語学会会員	
4	1985.10.00 ~ 現在			中国社会文化学会会員	

5	1992.05.00	～	現在	中華民国聲韻学学会会員
6	1993.09.00	～	現在	南島史学会会員
7	1994.04.00	～	2006.03.00	大東文化大学エクステンションセンターオープンカレッジ 中国語講座担当
8	2001.09.10			広州中山大学中文系研究所（大学院）にて講演「琉球官話課本から見た琉球と中国の交流について」（於中山大学中文系研究所会議室）使用言語：中国語
9	2004.12.08			台湾高雄文藻外語学院において2回講演実施 使用言語：中国語①応用華語文学科の学生を対象に講演「言語から見た文化のちがい」②華語教学センターの教師及び同センターに在籍している日本人留学生を対象に講演「私の中国語学習について」
10	2005.04.00	～	現在	東方学会会員
11	2005.10.01	～	2005.10.01	琉球新報社新社屋落成記念講演会にて講演「清代・琉球官話集の中の留学生たち」（於琉球新報社2階ホール）
12	2006.04.00	～	現在	大東文化大学地域連携センターオープンカレッジ 中国語講座担当
13	2006.11.16	～	2007.11.16	東京成徳大学深谷高校にて、模擬授業実施「中国の言語について」

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	高橋 弥守彦	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『実用詳解中国語文法』	単著	2006.04.01	郁文堂	本書は言語3部門 (語音、語彙、文法) と标点符号、および文法単位 (1.語素 2.単語 3.連語 4.文 5.談話) について、例文と解説とにより中国語を体系的に述べたものである。408 頁		
2 『格つき空間名詞と〈ひと〉の動作を表す動詞との関係—日中対照研究を視野に入れて—』	単著	2009.01.13	大東文化大学語学教育研究所	本書は序章と本文3章と終章からできている。序章は本書執筆の目的、第1章は『日本語文法・連語論 (資料編)』再考、第2章は格つき空間名詞と〈ひと〉の動作を表す動詞との関係、第3章は位置移動の動詞“過”と空間詞との関係、終章は連語論の観点から執筆した本書の意義について書いている。498 頁		
論文						
1 『“向/朝”の用法について』	単	2004.00.00	語学教育研究論叢第21号 (大東文化大学語学教育研究所)	“向/朝”の用法はよく似ているが、違う面もある。“向”は動詞・介詞・副詞に分かれ、動詞はさらに述語動詞 (対面義・照準義・移動義) と補語動詞 (到達義・照準義・移動義) に分かれ、介詞は対照の標識と出所の標識に分かれることを明らかにした。“朝”は述語動詞 (対面義・照準義・移動義) だけの用法であり、両者は述語動詞として使われるときだけ、同じように使われることを明らかにした。両者が同じように使われる場合も移動義を表す場合は“向”がよく使われ、対面義を表す場合は“朝”が多く使われ、照準義はどちらも使われるが、どちらかというとなら“向”の方が多く使われることを明らかにし、その理由が“向”「むかう」と“朝”「向いている」の基本義にあることを明らかにした。17 頁		

2	『論動補短語“走進來”』(レフェリーあり)	単	2004.06.00	第七屆國際漢語教學討論會論文選(北京大學出版社・《第七屆國際漢語教學討論會論文選》編輯委員會)	動補連語“走進來”をありさま移動の動詞“走”、位置移動の動詞“進”、趨向移動の動詞“來”の三類に分類し、これらがどのような空間名詞や空間名詞連語とむすびつのかを明らかにした。また、移動動詞がどのような形状の空間語とむすびつのかによって、異なるむすびつきを作り、移動動詞が基本義と派生義に分かれることも明らかにした。755頁中8頁
3	『位置移動の動詞“過”について』	単	2005.02.28	大東文化大學語學教育研究所創立20周年記念現代中國語文法研究論集	位置移動の動詞“過”が名詞とくみ合わさる場合の構造を4類に分け、“過”と空間名詞との関係を分析した。いずれの構造であっても“過”は通過するところの違いにより6類に分かれ、空間名詞は線条性的名詞“河、長安街”・範囲性的名詞“湖、草地”・角度性的名詞“山、坡”の3類に分かれ、「過」+空間名詞」は連語論の立場からみる「通過のむすびつき」を作る。4類の構造の中ではどの構造であっても同一の結果が得られ、この3類以外の空間名詞との組み合わせでは介詞“從”を用いなければならないことが明らかになった。ここには介詞の必要性の一つが証明されることとなった。146頁中42頁
4	『位置移動の動詞“過”における基本義と派生義とについて』	単	2005.03.00	大東文化大學紀要第43号	“過”が名詞と共に用いられると、領域別の名詞と領域内部の名詞の違いにより、基本義と派生義とに分かれる。“過”は空間名詞と共に用いられると、述語動詞と補語動詞の位置に用いられるが、基本的な機能は同じなので、“過”の有する意味から趨向動詞ではなく、位置移動の動詞の一つとみなせる。“過”とむすびつく空間名詞は線条性的名詞“馬路、天橋”・範囲性的名詞“太湖、公園”・角度性的名詞“山、坡”であり、「通過のむすびつき」を作る。“過”が三類の空間名詞をどのように「過ぎる」かによって、“過”の基本義「過ぎる」から派生義が生まれることを明らかにした。486頁中27頁
5	『“走過來”“走過去”の“過”について』	単	2005.03.07	語學教育研究論叢第22号 語學教育研究所創立20周年記念号(大東文化大學語學教育研究所)	一般に“過來”“過去”は動詞と趨向動詞とに分れているが、本稿では“過來、過去”の“過”が位置移動の動詞であり、“來、去”が趨向移動の動詞であることを明らかにした。また、“走過來”“走過去”に空間名詞が用いられる場合は一般文型ではなく特殊文型であることも例文によって明らかにしている。「動詞+“過”+空間名詞」構造中の空間名詞は“過”の移動の仕方によって6類の通過するところに分かれるが、趨向移動の動詞“來、去”の影響により、“過”は5類の通過の意味を有する日本語の動詞とむすびつくことが明らかになった。310頁中31頁
6	『“過來”“過去”の“過”について』	単	2005.03.15	『外国語学会誌』No. 34	一般に“過來”“過去”は動詞と趨向動詞とに分けている、本稿では先行研究と例文を分析することにより、“過”が位置移動の動詞、“來、去”を趨向移動の動詞とし、“過來、過去”を分析した。“過來、過去”と空間名詞を組み合わせた“主体”の移動により、6類の通過のむすびつきが作れることが明らかになった。空間名詞は線条性的名詞“馬路、大橋”・範囲性的名詞“公園、銀行”・角度性的名詞“山、山岡”の3類である。6類の構造に用いられる“過”は5類の訳出法があることも明らかになった。“過”の基本義は「過ぎる」であるが、同じ「通過のむすびつき」でも客体の違いにより派生義が生じることを明らかにした。
7	『“過來/過去”と「動詞+“過來/過去”」の“過”と空間名詞との関係について』(レフェリーあり)	単著	2005.05.30	日中対照言語学会第7号 (白帝社・日中対照言語学会)	“過來/過去”が空間名詞とくみあわせると、“過+空間名詞+來/去”の構造を作る。「動詞+“過來/過去”が空間名詞とくみあわせると“動詞+過+空間名詞+來/去”の構造を作る。この2構造では“過+空間名詞”が「通過のむすびつき」を作り、いずれも主体がどのように客体を通過するかにより、日本語訳は5類に分かれることを明らかにした。動詞は通過するありさまを表し、“來/去”は趨向義を表すことを明らかにした。179頁中26頁。
8	『中國語學から見た連語論』	単著	2005.07.01	國文學『解釈と鑑賞』890 (至文堂)	連語論の観点から、「過」+空間名詞」で作る「通過のむすびつき」の各関係と介詞が必要な場合を明らかにしている。250頁中14頁。

9	『時間副詞について』 (レフェリーあり)	単著	2006.02.03	語学教育研究論叢第 23 号 (大東文化大学語学教育研 究所)	筆者は本稿で時間副詞を時点性の時間副詞と時段性の時間副詞の 2 類に分けている。本稿はこのうち時点性の時間副詞を過去“曾經、已經”・現在“正在、正、在”・未来“將、就”に分けて論じたものである。また、“快／要／快要／就要…了”の“快／要”は前者が形容詞、後者が能願動詞だが、この構造に用いられると、その表す意味は未来時間副詞“將／就”と同様の働きをすることを明らかにしている。また、“快要”は「形容詞＋能願動詞」、「就要」は「副詞＋能願動詞」だが、その用いられる文中の位置により、その表す意味は未来時間副詞“將／就”と同様の働きをすることを明らかにしている。この働きは品詞の兼類ではなく位置優先説であることも明らかにしている。281 頁中 20 頁。
10	『連語内部における 単語の基本義と派生 義とについて』	単著	2006.03.31	大東文化大学紀要第 44 号 (人文科学)	本稿は「歩く」「出る」「行く」によって、単語が基本義と派生義に分かれ、多義語になることを「むすびつき」の違いによる例によって証明している。たとえば、「山を歩く」(移動のむすびつき)、家からバス停まで歩く(空間的な移りのむすびつき)、「家を出る」(離れのむすびつき)、「川のほとりに出る」(到着のむすびつき)、「ベッドへ行く」(空間的な移りのむすびつき)、「甲州街道に行く」(移動のむすびつき)のようである。518 頁中 19 頁
11	『時間副詞とその日 本語訳について』(レ フェリーあり)	単著	2006.05.26	日中対照言語学会第 8 号 (白帝社・日中対照言語学 会)	時点性の時間副詞を出来事との関係から過去“曾經、已經”・現在“正在、正、在”・未来“將、就”に 3 分類し、それぞれの日本語訳について検討した論文である。たとえば“曾經”は「かつて、昔」、「正」は「ちょうど、今」、「將」は「もうすぐ、ほどなく」と対応する。しかし、文中に時間名詞があると、影響力前置説の影響により、日本語では時間名詞が優先され、時点性の時間副詞は不訳にされるのが一般的である。一方、中国語では、時間名詞と時間副詞とは機能が違うため同一文中に現れる。両言語のこの違いを明らかにしている。196 頁中 18 頁。
12	『連語論から見る “過”＋空間名詞 の“過”について』(レ フェリーあり)	単著	2006.07.00	漢日語言対比研究第 7 集 (北京外国語大学・国際交 流学院編)	中国語の“過”＋空間名詞の“過”は形状別から見る線条性の空間名詞“馬路、河、長安街”、範囲性名詞“海、草原、銀行”、角度性名詞“坂、山、山岡”およびこれらの連語とくみあわさる。連語の表す意味から「通過のむすびつき」という。これら以外のくみあわせであれば、客体を前置させる介詞を用いることにより、通過を表すある現実を表現する。日本語では主体が通過する場所をどのように通過するかによって、6 類の表現方法と対応することを明らかにしている。274 頁中 12 頁。
13	『連語論から見る “上”＋空間名詞 について』(レフェリ ーあり)	単著	2007.02.01	語学教育研究論叢第 24 号 (大東文化大学語学教育研 究所)	“上”＋空間名詞の“上”と空間名詞との関係について論じたものである。位置移動の動詞“上”と空間名詞とで作る「むすぶつき」の違いにより、動詞“上”と名詞に意味変化が生じることを明らかにしている。なお、本稿では“上”＋空間名詞で作るむすびつきを「移動のむすびつき」「到着のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」の 3 類に分けている。271 頁中 25 頁。
14	『“爸爸買回来一些苹 果。”について』	単著	2007.03.15	外国語学会誌 36 号(大東文 化大学外国語学会)	「動詞＋“回来”」を用いて文を作ると、主体が動くのか客体が動くのかで見解が分かれていた。本稿は連語論の観点からどちらが動くかを分析したものである。その結果、客体が「もの」か「場所」かにより 2 類に大別される。前者であれば、4 通りのパターン(1.主体の移動、客体の付随移動 2.主体の後行移動、主体の先行移動 3.主体の先行移動、客体の後行移動 4.客体のみの移動)があり、後者であれば 2 通りのパターン(1.主体のみの移動 2.主体と客体の同時移動)しかないことを例文と筆者の分析とにより明らかにしている。256 頁中 30 頁。
15	『動態助詞“～着”の 用法について』	単著	2007.03.31	大東文化大学紀要第 45 号 (人文科学)	動態助詞“～着”は一般に進行と持続を表すと言われている(呂叔湘主編《現代漢語八百詞》)が、本稿では先行研究と言語事実により、文を一般文型と特殊文型とに分け、動態助詞“～着”の使用状況を調査し分析している。その結果、動態助詞“～着”の機能は継続を表すという見解に賛成し、出来事との関係により、進行・持続・関係を表すことを明らかにしている。442 頁中 22 頁。

16	『中国語教育の一方 法』	単著	2007.03.31	中国語教育第5号(中国語 教育学会)	中国語教育に携わって30年余りになる。この間、一貫して「基本+5段階学習法」と「基本から基本」という教育方針によって中国語教育を行ってきた。この方法でやれば、かなりの教育効果をあげることができるので、具体的な方法と学生たちの点数などを取り上げて、中国語教育の一方法論として紹介した。193頁中5頁。
17	『關於“過”和空間詞 的關係』(レフェリー あり)	単著	2007.04.00	第八屆國際漢語教學討論會 論文選(高等教育出版社)	「“過”+空間名詞」と「動詞+“過”+空間詞」を連語論の観点から分析し、「通過のむすびつき」を6類に分け、両構造の関係を明らかにしている。また、通過のむすびつきの中になぜ介詞“從”が使われるのかも論証している。837頁中7頁。
18	『連語論から見る日 中対照研究』(レフェ リーあり)	単著	2007.05.00	日中対照言語学会第9号 (白帝社・日中対照言語学 会)	連語論は個別言語研究にも対照言語研究にも適用できる。本稿は連語論の観点から見る日中対照研究である。中国語の「“過”+空間名詞」「“上”+空間名詞」「天回来」と日本語とを対照研究することにより、両言語の特徴を明らかにしている。190頁中15頁。
19	『位置移動の動詞 “過”とその連語とに ついて』(レフェリー あり)	単著	2007.10.10	中国の補語(白帝社・日中 対照言語学会)	位置移動の動詞“過”と空間詞を用いる4つの構造を分析し、連語論の立場から「“過”+空間詞」「“過”+空間詞+来」構造に用いる“過”は述語動詞であり、「動詞+“過”+空間詞」「動詞+“過”+空間詞+来」構造に用いる“過”は補語動詞であることを明らかにしている。また、4つの構造中の「“過”+空間詞」構造はいずれも「通過のむすびつき」を作るので、“過”のあとに必ず空間詞を用い、“過”の前の動詞はありさまを表し、“来”は趨向義を表していることを明らかにしている。251頁中57頁。
20	『中国語研究者の見た 日本語文法』	単著	2008.01.01	国文学『解釈と鑑賞』890 (至文堂)	連語論の観点から、動詞と名詞の多義性と動詞から介詞への品詞転換(転成)を「“上”+空間名詞」で作る連語論的な意味と構造的なタイプとによって各むすびつきと日中両言語の特徴を明らかにしている。238頁中7頁。
21	『“動詞+上来/去” と空間詞の関係につ いて』(レフェリーあ り)	単著	2008.02.01	語学教育研究叢第25号 (大東文化大学語学教育研 究所)	“動詞+上来/去”と空間詞との関係について論じたものである。動詞は出来事的方式を表し、位置移動の動詞“上”と空間詞とで作る「むすびつき」の違いにより、動詞“上”と名詞に意味変化が生じることを明らかにしている。“来/去”は転移義と趨向義とを表す。なお、本稿では「“上”+空間詞」で作るむすびつきを「移動のむすびつき」「着点のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」「態度的な移りのむすびつき」「うつしかえのむすびつき」「空間的な〈ひと〉の位置変化のむすびつき」の6類に分けている。271頁中25頁。
22	『連語論から見る“上 来/上去”と空間詞と の関係について』	単著	2008.03.15	外国語学会誌37号(大東文 化大学外国語学会)	連語論的な意味と構造的なタイプとにより「“上”+空間詞+来」と「“上”+“去”」とを「空間的な移動のむすびつき」「空間的な移動のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」の3類に分け、“上”と客体の意味変化についての理論的な根拠を明らかにしている。428頁中18頁。
23	『“過”と客体との関 係について』	単著	2008.03.25	大東文化大学外国語学部創 設三十五周年記念論集	“過”と客体との関係について分析した。連語論的な意味と構造的なタイプとにより、空間的なくみあわせを「空間的な通過のむすびつき」と「方向的な移りのむすびつき」の2類に分け、“過”と空間詞との関係を領域転換のベースとして、なぜ“過”が時間領域・もの領域・ひと領域・からだ領域・こと領域へも用いられ、これらへの領域転換が可能かについて、連語論の観点から述べたものである。382頁中22頁。
24	『“上”と客体との関 係について』	単著	2008.03.30	大東文化大学外国語学研 究第9号	“上”と客体との関係について分析した。連語論の観点から、“上”と空間詞のむすびつきを6類に分け、両者の関係を領域転換のベースとして、なぜ“上”が時間領域・もの領域・ひと領域・こと領域へも用いられ、これらへの領域転換が可能かについて述べたものである。442頁中22頁。
25	『動詞+“上”と空間 詞との関係について』	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要第46号 (人文科学)	「動詞+“上”+空間詞」は連語論的な意味と構造的なタイプとにより「空間的な移動のむすびつき」「空間的な着点のむすびつき」「空間的な進入のむすびつき」「社会的な移りのむすびつき」「立ち居のむすびつき」「付着のむすびつき」「出現のむすびつき」「とりつけのむすびつき」「(もの)のうつしかえのむすびつき」「(ひと)のうつしかえのむすびつき」の10類に分類できる。むすびつきの違いによって、“上”と客体に意味変化がおきることを明らかにしている。442頁中18頁。

26	『介詞“在”とそれに対応する空間名詞の格について』(レフェリーあり)	単著	2008.05.00	『日本語文化研究』第八輯北京大学日本語文化系・北京大学日本文化研究所編(学苑出版社)	介詞“在”は空間名詞の前に用いて、出来事が行われる空間を表すが、空間名詞の格「デ、ニ、ヘ、ヲ、カラ」は、連語論的な意味を表す各むすびつきの違いを明らかにする標識である。本稿では連語論の観点から、中国語の介詞と日本語の空間名詞の格の違いを明らかにしている。550頁中8頁
27	『日中両言語の語順について』(レフェリーあり)	単著	2008.05.07	日中対照言語学会第10号(白帝社・日中対照言語学会)	連語論の観点から、中日両言語の語順の違いを検討し、その違いを明らかにしている。本稿では中国語の二重客語文、移動表現、多項性限定語を取り上げている。これら中国語の語順は連語論的な意味を表す各むすびつきにより、語順が決定し、自由にくみあわせることができないことを指摘している。これらに対応する日本語は文末の動詞や中心語となる名詞以外のくみあわせは自由であるが、自由なくみあわせの中にも何を強調したいかによって、語順が異なってくることを明らかにしている。185頁中16頁。
28	『連語論から見る“上”+空間詞について』(レフェリーあり)	単著	2008.09.00	『日本語文化研究 日本学框架與国際化視覚』張威主編(清華大学出版社)	中国語の「上」+空間詞構造は連語論的な意味と構造的なタイプとにより、5つのむすびつきを作る。「上」が「下から上に移動する」角度性の移動を表す基本義として使われるのは「空間的な移動のむすびつき」を作る場合だけである。この場合、「上」の日本語訳がヲ格の空間詞とくみあわさるが、他の4つのむすびつきはすべてニ/ヘ格の空間詞とくみあわさる。本稿では日本語の連語論を中日両言語の対照研究の分野に応用し、中国語の動詞と名詞にも意味変化がおきることを明らかにしている。なお、本稿は語学教育研究論叢第24号の『連語論から見る“上”+空間名詞について』を再検討したものである。611頁中11頁
29	『可能表現に用いる能願動詞“能”』(レフェリーあり)	単著	2008.10.22	『日本語と中国語の可能表現』(白帝社・日中対照言語学会)	中国語の可能表現は6類に分けられる。このうち能願動詞“能”を用いるのは、筆者の分類による能動型(“能”+動詞)、併用型A(“能”+動詞+“得”+結果/趨向性動詞)、併用型B(“能”+動詞+“得”)の3類である。本稿では主体の能力を表す“能”をプロトタイプ意味とし、出来事との関係で“能”の現在能力を表す用法をプロトタイプ用法とし、能力の顕在化(評価能力、回復後能力、分量能力、到達能力、用途能力)と能力の潜在化(可能性、環境、情理)をバリエーション用法とする。“能”を用いる否定形“不能”は条件と言語環境とにより、「不可能」と「禁止」とを表す。動結・動趨型(動詞+“得/不”+結果/趨向性動詞)は可能と不可能を表す。動詞・形容詞型(動詞+“得/不得”、形容詞+“不得”)は前者が可能・不可能・禁止を表し、後者は禁止を表すことを明らかにしている。251頁中39頁
30	『“下”+空間詞について』(レフェリーあり)	単著	2009.01.31	語学教育研究論叢第26号(大東文化大学語学教育研究所)	「下」+空間詞「動詞“下”+空間詞」の“下”と空間詞との関係について論じたものである。位置移動の動詞“下”と空間詞とで作る「むすびつき」の違いにより、動詞“下”と名詞に意味変化が生じることを明らかにしている。なお、本稿では「下」+空間詞で作るむすびつきを「空間的な移動のむすびつき」「空間的な退出のむすびつき」「空間的な離点のむすびつき」「空間的な着点のむすびつき」「空間的な進入のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」「社会的な離点のむすびつき」「とりつけのむすびつき」の8類に分け、「動詞“下”+空間詞」で作るむすびつきを「空間的な移動のむすびつき」「空間的な退出のむすびつき」「空間的な離点のむすびつき」「空間的な進入のむすびつき」の4類に分け、各むすびつきに用いられる“下”の意味変化の過程を図表化している。455頁中30頁。
31	『“下来、下去”と空間詞との関係について』	単著	2009.03.30	大東文化大学外国語学研究所第10号	“下来、下去”と空間詞との関係および“来、去”の表す意味について連語論の観点から分析した。「下」+空間詞+“来、去”の「下」+空間詞は「空間的な移動のむすびつき」「空間的な着点のむすびつき」「空間的な進入のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」の4類に分けられる。「動詞+“下”+空間詞+“来、去”」の「下」+空間詞は「空間的な移動のむすびつき」「空間的な退出のむすびつき」「空間的な離点のむすびつき」「空間的な着点のむすびつき」の4類に分けられる。両構造とも“下”の意味変化を図表化している。なお、“来、去”は2つの構造とも移動義と趨向義とを表す。210頁中15頁

32	『「過」+客体で作る異領域のくみあわせ』	単著	2009.03.31	大東文化大学紀要第 47 号 (人文科学)	「過」+客体は客体の種類により 6 領域のくみあわせ(空間、時間、もの、ひと、からだ、こと)を作る。このうち、「過」+空間詞(空間領域のくみあわせ)を連語論的な意味と構造的なタイプとにより分類すると、6 類のむすびつきを作る。この 6 類のむすびつきをベースにして、各領域への転換が行われる。品詞分類の角度から見れば、「過」は意味と機能と文法的なふるまいから、位置移動を表す「過」は動詞で、過去の経験を表す「過」は助詞である。462 頁中 23 頁
その他					
1	『「通過のむすびつき」-日中対照研究を通じて-』		2004.05.09	その他/学会記録/一般発表 日中対照言語学会第 11 回大会(東洋大学)	連語論から見る「通過のむすびつき」について「過」と空間名詞との関係を日中対照研究の立場から論じた研究発表である。
2	『「過+空間名詞」里的「過」和空間名詞的關係』		2004.08.22	その他/学会記録/一般発表 第六屆國際漢日對比語言學研討會(北京外國語大學)	連語論の立場から、位置移動動詞「過」と空間名詞との関係「通過のむすびつき」を論じたものである。位置移動動詞「過」は移動、空間名詞は場所を表し、連語論から見るむすびつきの違いにより「過」に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の中にも名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。
3	『動態助詞「～着」の用法について』		2004.12.23	その他/学会記録/一般発表 日中対照言語学会第 12 回大会(東洋大学)	動態助詞「～着」の用いられている文型を一般文型と特殊文型に分け、その用法を明らかにしている。
4	『時間副詞とその日本語訳について』		2005.06.05	その他/学会記録/一般発表 日中対照言語学会第 13 回大会(東洋大学)	時間副詞のうちの時点時間副詞を過去、現在、未来に分け、それらの訳について論じたものである。
5	『時間副詞及其翻訳』		2005.08.21	その他/学会記録/一般発表 第八屆國際漢日對比語言學研討會(北京外國語大學)	時間副詞を時点時間副詞と時段時間副詞とに分類し、そのうちの時点時間副詞の日本語訳について論じたものである。
6	『連語論から見る「過」と「空間名詞」との関係について』		2005.10.23	その他/学会記録/一般発表 北京大学 2005 年國際シンポジウム(北京大学)	連語論から見るむすびつきの違いにより位置移動動詞「過」に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の位置に用いられるもの名詞も場所を表すことを明らかにしている。
7	『連語論から見る位置移動動詞「上」について』		2005.12.23	日中対照言語学会第 14 回大会(東洋大学)	位置移動動詞「上」と空間名詞との関係について論じたものである。連語論から見るむすびつきの違いにより「上」に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の中にも名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。
8	『連語論から見る位置移動動詞「上」+空間名詞について』		2006.05.27	清華大學日本語文化國際フォーラム(清華大學)	日中対照研究の立場から連語論により、位置移動動詞「上」と空間名詞との関係について論じたものである。連語論から見るむすびつきの違いにより「上」に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の中にも名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。
9	『連語論から見る日中対照研究の方法について』		2006.06.04	日中対照言語学会第 15 回大会(東洋大学)	連語論による対照研究は、連語論的な意味により、対象とする言語に共通の基盤を設けて研究する方法である。例として「上」+空間名詞」「過」+空間名詞」「動詞+回来+空間名詞」を取り上げて論じた研究発表である。
10	『「動詞+上+空間名詞」里的「上」和空間名詞的關係』		2006.08.20	第八屆國際漢日對比語言學研討會(北京外國語大學)	連語論の立場から、ありさま動詞と位置移動動詞「上」と空間名詞との関係について論じたものである。ありさま動詞はありさま、位置移動動詞は移動、空間名詞は場所を表すことを明らかにし、連語論から見るむすびつきの違いにより「上」に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の中にも名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。
11	『連語論から見る「在+空間名詞」の「在」の日本語訳について』		2006.10.21	北京大学日本語学部創設 60 周年記念大会(北京大学)	連語論から見るむすびつきの違いにより介詞「在」に意味変化の起きることを明らかにしている。

12	『「動詞+“回来”」について』	2006.12.09	中国語教育学会 12 月例会 (大東文化大学)	本発表は連語論の観点から主体と客体のうち、どちらが動くかを分析したものである。その結果、客体が「もの」か「場所」かにより 2 類に大別される。前者であれば、4 通りのパターン (1.主体の移動、客体の付随移動 2.主体の後行移動、主体の先行移動、3.主体の先行移動、客体の後行移動 4.客体のみ移動) があり、後者であれば 2 通りのパターン (1.主体のみ移動 2.主体と客体の同時移動) しかないことを例文と筆者の分析とにより明らかにしている。
13	『能願動詞“能”について』	2006.12.17	日中対照言語学会第 16 回大会 (東洋大学)	能願動詞“能”の機能について論じたものである。“能”の基本義は「能力」であるとし、“能”の機能である能力と可能の関係について論じたものである。
14	『位置移動動詞“上”と空間名詞との関係について』	2007.03.17	第 1 回中国語学会関東支部大会 (明治大学駿河台校舎)	位置移動の動詞“上”と空間名詞との関係について論じたものである。連語論から見るむすびつきの違いにより“上”に意味変化の起きることを明らかにし、空間名詞の中にももの名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。同時に“上”が動詞と介詞として機能することにも言及した。
15	『日中対照研究から見る連語論について』	2007.04.19	青島大学 (中国)	対照研究では共通の基盤を対象とする連語論により、日本語の「移り動きのむすびつき」「存在のむすびつき」を紹介し、次に中国語の場所を表す標識“在”がなぜ日本語の名詞の格「デ、ニ、ヘ、ヲ、カラ」に対応するのかについて連語論の立場から分析したものである。本講演では「連語論的な意味によるむすびつき」(移り動きのむすびつき、存在のむすびつき)とそれを作る「構造的なタイプ」とによって連語を分類し、以下の点を明らかにしている。(1)「異領域のくみあわせ」「同領域のくみあわせ」「一領域内部の一むすびつき」の関係 (2)連語を作る名詞や動詞の意味変化のメカニズム(日本語、中国語) (3)介詞の誕生と介詞を必然的に使う根拠(中国語)
16	『従日中対比研究的角度分析“上+空間詞”』	2007.04.20	青島大学 (中国)	本講演では日中対照研究の立場から“上+空間詞”について分析し、連語論から見るむすびつきの違いによって“上”に意味変化の起きることと、空間詞に場所名詞以外の名詞が空間詞として使われることを明らかにしている。
17	『連語論から見る“上来, 上去”と空間詞との関係について』	2007.04.21	青島大学 (中国)	本講演では日中対照研究の立場から“上+空間詞+来/去”について分析し、連語論から見るむすびつきの違いによって“上”に意味変化の起きることと、空間詞に場所名詞以外の名詞が空間詞として使われること、および“来/去”に移動義と趨向義のあることを明らかにしている。
18	『日中対照研究から見る“過+空間詞”』	2007.04.22	青島大学 (中国)	本講演では日中対照研究の立場から“過+空間詞”「通過のむすびつき」について分析し、連語論から見るむすびつき内部の空間詞の形状の違いと、主体がある空間をどのように通過するかによって、“過”に意味変化の起きることと、空間詞に場所名詞以外の名詞が空間詞として使われることのあることを明らかにしている。また、「通過のむすびつき」には、ある場所とその前後左右上下を通過する 2 類のあることも言語事実から明らかにしている。
19	『従日中対比研究的角度分析“過+空間詞+来/去”』	2007.04.23	青島大学 (中国)	本講演では日中対照研究の立場から“過+空間詞+来/去”について分析し、連語論から見るむすびつきの違いによって“過”に意味変化の起きることと、空間詞に場所名詞以外の名詞が空間詞として使われること、および“来/去”に移動義と趨向義のあることを明らかにしている。
20	『従短語論的角度縦観日漢対比研究之全貌』	2007.08.20	第二届漢韓語言対比国際研討会 (北京語言大学)	連語「“上”+空間詞」を連語論の立場から、中国語と日本語との対照研究をし、ありさま動詞と位置移動の動詞“上”と空間詞との関係について論じたものである。ありさま動詞はありさま、位置移動の動詞は移動、空間詞は場所を表すことを明らかにし、連語論から見るむすびつきの違いにより“上”に意味変化の起きることを明らかにし、空間詞の中にももの名詞が用いられても場所を表すことを明らかにしている。
21	『“上”+空間詞で作る 4 構造について』	2007.08.27	日中言語理論フォーラム研討会 (北京大学)	連語「“上”+空間詞」で作る 4 構造を分析したものである。従来言われている動補連語に空間詞がくみあわさったものではなく、「“上”+空間詞」を基礎にして 4 構造が作られたことを明らかにしている。

22	『“上” + 空間詞で作る4構造について』		2007.12.21	試論“趨向補語”和空間詞的關係 (中山大学)	連語「“過” + 空間詞」で作る4構造を分析したものである。従来言われている動補連語に空間詞がくみあわさったものではなく、「“過” + 空間詞」を基礎にして4構造が作られることを明らかにしている。
23	『中国語談話言語学概論』	共訳著	2008.02.27	白帝社	本翻訳書は王福祥氏の《話語言語学概論》を続三義氏とともに日本語に訳したものである。王福祥氏はロシア言語学、特に談話言語学の専門家として著名である。中国語の談話言語学に関する論文や著作も多数あり、本書はその大成といえるであろう。620頁
24	『日本人中国語学習者の中国語について』		2008.04.08	北京外国語大学中文学院	日本人中国語学習者の中国語学習を過去・現在から分析し、いかにして中国語を学び中国語ができるようになるとうとしているのかを明らかにしている。
25	『日中対照研究から見るひとの動きについて』		2008.04.09	日本学センター	日本語のひとの動きを「移り動き」と「ありか」に分類し、日本語の「行く」と中国語の連語「上” + 空間詞」を分析したものである。
26	『連語論から見るひとの動きについて』		2008.04.10	首都師範大学	日本語のひとの動きを「移り動き」と「ありか」に分類し、日本語の「行く」を連語論の観点から分析したものである。
27	『“下” + 空間詞”の“下”について』		2008.05.11	日中対照言語学会春季大会 (大阪産業大学梅田サテライト)	文法における連語論の位置を論述し、連語「“下” + 空間詞」で作る構造を連語論的な意味と構造的なタイプとにより連語論の観点から分析したものである。“下” + 空間詞”を「空間的な移動のむすびつき」「空間的な退出のむすびつき」「空間的な離点のむすびつき」「空間的な着点のむすびつき」「空間的な進入のむすびつき」「空間的な移りのむすびつき」「社会的な離点のむすびつき」「とりつけのむすびつき」の8類に分け、“下”と客体が各むすびつきの中で意味変化がおきることを明らかにしている。
28	『“上” + 客体で作る構造について』		2008.05.17	日中対照言語学会5月例会 (北京外国語大学日本事務所)	異領域のくみあわせを作る8構造を分析したものである。従来言われている動補連語に客体がくみあわさったものではなく、「“上” + 客体」を基礎にして8構造が作られることを明らかにしている。
29	『位置移動の動詞“過” + 空間詞再考』		2008.06.21	日中対照言語学会6月例会 (北京外国語大学日本事務所)	連語論の観点から“過” + 空間詞”を再考した発表である。拙論「動詞 + “過” + 空間名詞の中の“過”について」(『日中言語対照研究論集』第6号)に対する王志英の批判に答えたものである。王志英は筆者の言う「通過のむすびつき」は、その場所を通過する場合とその前後左右を通過する場合があるとしている。この点はすでに筆者が数年前に述べていることであり、筆者は王志英よりも詳細である。また、王志英はその分析や引用にも問題がある。
30	『論“下来、下去”與空間詞之關係』		2008.07.17	語言的描写與解釈国際学術討論会－記念胡裕樹先生誕辰90周年會議(復旦大学中文系)	“下”と空間詞のむすびつきについて連語の観点から分析したものである。「“下” + 空間詞」「動詞 + “下” + 空間詞」はそれぞれ4類のむすびつきを作り、“来/去”は転移義と趨向義に分かれることを明らかにしている。
31	『論“下”和空間詞的關係』		2008.12.16	第9回世界漢語教育学会大会(北京国際会議中心)	“下”と空間詞の語順について連語の観点から分析したものである。文構造を4類に分類し6類の文により、なぜ“下”の後に空間詞が来るのかを明らかにしている。
32	『連語論から見る“过” + 空間詞”について』		2008.12.23	日中対照言語学会第20回大会(大東文化会館)	本発表では王志英「認知的な観点による“過”と“…過”についての再分析」と丸尾誠「“過”の表す移動義について」の論文を参考にして、連語論の観点から“过” + 空間詞”を再検討し、王志英の認知文法から分析する「点」と「線」の理論を否定し、丸尾誠の説を補充している。
33	『構文論から見る位置優先のルールについて』		2009.03.14	中国語教育学会3月例会 (大東文化会館)	中国語の文は主体と出来事からなっている。一般には名詞や代詞からなる主体が主語となり、名詞の特性である動詞や形容詞などからなる出来事が述語または「述語 + 客語」となる。これとは別に、中国語では動詞や形容詞も主語になり、名詞も述語になるが、なぜそうなるのかを構文論的なタイプを構築し、文型の力により、それが可能であることを明らかにしている。

34 『連語論から見る時間詞の語順について』	2009.03.28	第3回中国語学会関東支部大会(明治大学駿河台校舎)	中国語の文は主体と出来事からなっている。一般には名詞や代詞からなる旧情報の主体が主語となり、名詞の特性である新情報の動詞や形容詞などからなる出来事が述語または「述語+客語」となる。旧情報と新情報は説明関係であり、新情報は旧情報の出来事である。しかし、状況語となる時間名詞は主体が作れるものではなく、名づけることができるだけである。主体に関係なく時間名詞は存在する。そのため、出来事の前に来ることも主体の前に用いることもできるのである。
------------------------	------------	---------------------------	---

III 学会等および社会における主な活動

1	1971.04.00	～	現在	日本中国学会会員
2	1974.10.00	～	現在	日本中国語学会会員（平成10年～平成16年理事）
3	1985.06.00	～	現在	老舎研究会会員
4	1986.04.00	～	現在	中国近世語研究会会員
5	1987.08.00	～	現在	世界漢語教学学会会員（平成14年～平成20年理事）
6	1989.02.00	～	現在	東松山市中国語学習連合会顧問
7	1989.06.00	～	現在	上海現代語言学研究会会員
8	2002.03.27	～	現在	中国語教育学会会員（平成14年～現在理事）
9	2002.06.02	～	現在	日中対照言語学会会員（平成14年理事長、平成15年～現在副理事長）
10	2006.04.00	～	現在	実用中国語検定協会会員（平成17年4月～現在常任理事）

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	鄭 新培	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)				(毎年) 担当した科目「作文」、「翻訳」などが教学法を研究して、学生参加の形で授業を行う。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 大東文化大学・板橋区公開講座		2008.10.25		講演：「東南アジアの華人と中国」			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)				(毎年) 3泊4日ゼミ合宿、教室外の実践活動と学生個別指導、また、ゼミ研究内容に合わせ、中国へ実地調査と見学も実施。			
2)				(現在) 中国における日本人留学生現状及び中国私立大学の現状を調査研究。			
3) 「日本全国日本人中国語作文コンクール」				(毎年) 10数名以上の学生を中国語作文を指導して全国コンクールに参加させた。2005年度最優秀賞(1位)2等、3等賞とも獲得した。2006年～2008年も2等から3等賞10数名が獲得した。			
4) 学内中国語弁論大会				(毎年) 学生を指導して、弁論大会を参加させ、1位から3位までいずれか入賞した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 日本語言語的対比及其文化的差異(日中語言の比較及びその文化の相違)	単	2007.03.00	『大東文化大学紀要』第45号<人文科学>	日本語の語彙・表現しかたと中国語の相違について研究分析している。両国語言文化の特徴、背景の差異・微妙な表現方式などを論じる。			
2 日本漢語教育的現状及其問題(日本中国語教育の現状及びその問題)	単	2007.03.00	『語学教育研究論叢』第24号 大東文化大学語学教育研究所	歴史的な視点から戦後日本における中国語教育の発展歴史及び発展各段階の特色と現状について分析して、これから中国語教育の展望について論じている。			
その他							
1 中国の教育改革と私立大学		2004.05.31	大東文化大学語学教育研究所	改革開放以後、中国の高等教育改革の歴史及び私立大学発展現状について研究発表。			
2 日中語言の比較とその文化の相違		2004.12.03	中日比較研究国際学術大会(中国厦門)	厦門大学主催の国際会議で日中語言の対比研究、及び両国語言の相違点を分析し、それぞれの表現しかたの異同について論じる。			

3	日本中国語教育の現状及び問題	2005.07.25	第8回世界漢語教学学会大会(北京)	戦後日本の中国語教育の歴史とその発展状況について研究発表。
4		2005.10.22	日本現代中国学会第55回大会	「福祉・教育パネル・ディスカッション」座長をつとめる。
5	「中国教育の改革と現状」	2007.06.01	大東外国語学部大会	講演：「中国教育の改革と現状」という題で中国改革開放以後教育改革の状況と問題点を発表
6	大東外国語学部創設35周年記念講演会・シンポジウム	2007.12.15		シンポジウム ゲストメンバー

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.04.00	～	現在	日本中国語学会会員
2	1991.06.00	～	現在	世界漢語教学学会（中国）会員
3	1994.08.00	～	現在	華社研究中心（マレーシア）会員
4	1996.04.00	～	現在	日本現代中国学会会員
5	2002.08.00	～	現在	東南亜華文資料中心（マレーシア）会員
6	2003.09.00	～	現在	日本華僑・華人学会会員
7	2004.04.00	～	現在	日中対照言語学会会員
8	2006.04.00	～	現在	高等学校中国語教育研究会会員

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	丁 鋒	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 「中国語作文Ⅱ」の授業で、中国語作文力を高めるため、教材使用、宿題内容、試験方式などが特性を持たせ、学生から高い評価をえた。大東文化大学授業評価（平成 20 年 12 月実施）において、平均値 4.6（5 段階評価）。		2007.04.00	2007 年 4 月～現在				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「近世白話文講読」の授業で、逐年学生と一緒に作成した白話文日訳データを次年度に用い、教育の効果は良い。		2006.04.00	2006 年 4 月～現在				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 埼玉県の鷲宮高校で中国語教育について講師として授業を行った。		2007.10.00					
2) 大学の公開講座の講師として『中国人による歴代日本語と琉球語の記録』と題する講演を行った。		2008.11.29					
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
1 『日漢琉漢対音與明清官話音研究』	単	2008.08.00	中華書局				
論文							
1 『「The Ningpo Syllabary」所附百年前吳語紹興方言羅馬字音』	単著	2004.07.00	『文学・言語学論集』（熊本学園大学）第 20 21 合併号				
2 『「日本考略・寄語略」反映的十六世紀吳語音韻』	単著	2004.09.00	『海外事情研究』（熊本学園大学）第 32 卷第 1 卷				
3 『日本常用漢字特殊字形来源小考』	単著	2004.10.00	『現代中国語研究』（『現代中国語』編輯委員会編集 朋友書店出版）第 6 期				
4 『「大廣益會玉篇」刪改「玉篇」増補内容考—兼談各国所藏「玉篇」殘卷的版本問題—』	単著	2005.02.00	『海外事情研究』（熊本学園大学）第 32 卷第 2 号				

5	『宋本玉篇』による「原本玉篇」の義解の減増、継承と改変について』	単著	2005.03.00	『日本語辞書研究 第3輯 上 木村晟博士古稀記念』(港の人出版) 所収
6	『一百年來紹興方言的語音演變』	單著	2005.04.00	『吳語研究 一 第三屆國際吳方言學術研討會論文集』(上海世紀出版集團 上海教育出版社出版) 所収
7	『日漢對音漢語音韻研究的理論和方法』	單著	2005.05.00	『漢語史學報』(浙江大學漢語史研究中心編) 第5輯
8	『慧琳改訂玄應反切声類考 一兼論唐代長安声母演變過程』	單著	2005.05.00	『音史新論: 慶祝邵榮芬先生八十壽辰學術論文集』(學苑出版社) 所収
9	『琉球語研究の新資料 一故宮博物院圖書館所藏「琉球土語」の解讀試案』	單著	2005.08.00	『近思學報・史料と研究 第2輯 片山晴賢教授學術獎勵記念』(港の人出版) 所収
10	『「遊歴日本図経・方言」日漢對音所見吳川京三個語音層次』	單著	2005.12.00	『文學・言語學論集』(熊本學園大學) 第12卷第2号
11	『慧琳音義轉錄改訂玄應音義考』	單著	2006.02.00	『海外事情研究』(熊本學園大學) 第33卷第2号
12	『陳侃「使琉球録・夷字」所記琉球假名對音反映的明代吳語寧波音』	單著	2006.06.00	『語言學探索——竺家寧先生六秩壽慶論文集』(竺家寧先生六秩壽慶籌備會編 國家圖書館出版品預行編目資料) 所収
13	『殘存早期佛經音義考——隋釋曇捷及其所著「法華經字釋」』	單著	2006.07.00	『佛經音義研究——首屆佛經音義研究國際學術研討會論文集』(上海古籍出版社) 所収
14	『日中・琉中對音資料による中国音韻史の総合的研究』第一分冊(上卷・著述篇); 第二分冊(下卷: 資料篇) 2002年度~2005年度 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号: 14510499) 研究成果報告書	單	2006.07.00	
15	『「新彫入篆說文正字」に見る宋代大徐本「說文解字」の一端』	單著	2006.10.30	『日本語辞書研究 第4輯 大友信一博士喜寿記念』(港の人) 所収
16	『慧琳改訂玄應反切反映的唐代長安聲調狀況』	單著	2006.12.00	『漢語史學報』第六輯(上海教育出版社) 所収
17	『原本「玉篇」殘卷・空海「篆隸萬象名義」・宋修「玉篇」・「広韻」同字音切合輯(続)』	單著	2007.01.30	『近思學報・史料と研究 第4輯 一近藤良一先生古稀記念』(港の人) 所収
18	『歴代玉篇音註叢考』	單著	2007.02.28	『海外事情研究』(熊本學園大學) 第34卷第2號
19	『「日本風土記」所記日語對音反映的十六世紀吳語語音』	單著	2007.04.12	『佐藤進教授還曆記念中國語學論集』(好文出版) 所収

20	『從宋修「玉篇」與殘卷「玉篇」的異切看中古音韻的演變過程』	単	2007.12.00	『語苑擷英（二）—慶祝唐作藩教授八十華誕學術論文集』（中国大百科全書出版社）所収
21	『「吾妻鏡補・國語解」對音漢字所反映的清代吳語語音』	単	2008.03.00	『中国音韻学—中国音韻学研究会南京研討會論文集・2006』（南京大学出版社）
22	『馬若瑟「漢語札記」的羅馬字記音及其与「諧声品字箋」音系的關係』	単著	2008.12.00	『民俗典籍文字研究』第五輯
その他				
1	『近二十年来音韻学海外研究動向』（日本語原文作者：古屋昭弘）	共著	2005.05.00	『音史新論：慶祝邵榮芬先生八十壽辰學術論文集』（学苑出版社）所収
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1985.09.00	～	現在	中国音韻学会會員
2	1993.10.00	～	現在	日本中国語学会會員
3	1996.09.00	～	現在	日本中国近世語学会會員
4	1999.03.00	～	現在	日本中国学会會員
5	1999.05.00	～	現在	国際漢語教学学会會員
6	1999.11.00	～	現在	九州中国学会會員
7	2001.08.00	～	現在	中国方言学会會員

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	中嶋 幹起	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業の中で、大学院留学生の協力により外国語 (朝鮮語) 教育を活性化した。		2007.04.01	(2007年4月1日～2008年3月31日)大学院に在籍する朝鮮人留学生を起用して、日本人学生の朝鮮語会話能力を高めるのに、授業の中で協力してもらった。				
2) 授業の中で、大学院留学生の協力により外国語 (朝鮮語) 教育を活性化した。		2008.04.01	(2008年4月1日～2009年3月31日)大学院に在籍する朝鮮人留学生を起用して、日本人学生の朝鮮語会話能力を高めるのに、授業の中で協力してもらった。				
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.0 (5段階評価)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 授業の進行の中でモンゴル人研究者の協力により、外国語 (モンゴル語) の会話練習テキストを作製		2006.04.01	(2006年4月1日～2007年3月31日)モンゴル語の中でも、ナイン方言のテキストは、日本には皆無であるので、本テキストは、学生たちにも、学習の上で、大変に刺激になった。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「授業評価実施委員会」の副委員長として、報告書 (全学データ) を作製。		2005.03.31	委員長 (学長) を頭に、副委員長として、授業評価報告書 (全学データ) を作製 (第 1、2、4 章、第 3 章第 1 節を執筆した)				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『エウエンキ語への招待』 (A5 版。200 頁)	共著	2005.06.10	大学書林	エウエンキ語はアルタイ諸語のツングース語族に属する。その分布範囲は、西はシベリアのエニセイ河左岸から東はオホーツク海沿岸、北は北極圏から南はアムール川流域である。本書は共著者の 1 人、ハイラル出身のエウエンキ人言語者と共に言語データを整理して、詳細な解説を加えたもの。我が国で最初の分野での研究書である。(D.O.チョクと共著)			
2 古賀十二郎ー長崎学の確立にささげた生涯 (総頁 363 頁)	単著	2007.10.07	長崎文献社	長崎学の確立に貢献した古賀十二郎の評伝			
論文							
1 満洲語の実詞化 (61～68 頁)	単著	2006.03.30	Altaistic Studies Vol.1	満洲文語の・ngge の実詞化作用について、その機能を分類しつつ、解き明したもの。			
2 「中国語」	単著	2007.01.15	明治書院『日本語学研究事典』	古代から現代までの中国語の歴史的、言語学的総説			
3 シルク・ロードの言語と民族ー河西回廊の言語調査 (165-176 頁)	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集刊行委員会	中国甘肅省でのチベット族の話す漢語方言についての調査報告である。			

4	Characteristics of the Gansu Chinese Dialect (pp.31~43)	単著	2008.03.25	『アルタイ語研究』Ⅱ／日本アルタイ語会議編／大東文化大学語学教育研究所	中国甘肅省でのチベット族の話す漢語方言についての研究報告 (英文)
その他					
1	「満文的命」	単著	2004.09.09	Proceedings of the 6th Seoul International Altaic Conference	漢語の「命」を満州語でどのように翻訳しているかを考察したもの。
2	「第一回国際ツングース言語文化学会議及び第二回国際ツングース言語文化学会議」(内外東方学会消息)	単著	2005.01.15	『東方学』(第109輯)(東方学会)	2つの国際学会に出席し、学会の内容を紹介したもの。
3	「長崎と福建との歴史的文化的関係について」	単著	2008.05.21	日中平和条約締結30周年記念厦門大学学術講座(2008.05.21~22)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1970.05.01	～	現在	日本言語学会会員	
2	1970.05.01	～	現在	日本中国学会会員	
3	1970.05.01	～	現在	日本中国語学会会員	
4	1972.05.01	～	現在	東方学会会員(昭和52年度～平成9年度 目録編纂委員、平成元年度～平成13年度 地区委員、平成2年度～平成16年度評議員)	
5	1997.05.01	～	現在	中国語学会会員	
6	2000.05.01	～	現在	国語学会会員	
7	2002.08.02	～	現在	財団法人大学セミナーハウス大学セミナーハウス大学共同セミナー企画委員	
8	2006.03.25	～	現在	日本アルタイ語会議代表	

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	中村 浩一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価(平成 20 年 12 月実施)において平均値 3.25 (5 段階評価) を得る。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 “方便” について	単著	2006.03.31	大東文化大学紀要 (人文科学) 第 44 号	『水滸』から現代中国語までの“方便”の意味の変遷を明らかにしたものである。総頁 518 頁中 139-147 頁		
2 『普通話三千常用詞表』と『水滸』多音節形容詞 1	単著	2007.03.31	大東文化大学紀要 (人文科学) 第 45 号	『普通話三千常用詞表』にあげる、「人や事物の形や性質、状況を形容するもの」、「事物の見えない性質を形容するもの」等の常用形容詞の『水滸』における意味、用法を探究し、『水滸』に占める位置を明らかにしたものである。総頁 442 頁中 123-142 頁。		
3 『普通話三千常用詞表』と『水滸』多音節形容詞 2	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要 (人文科学) 第 46 号	『普通話三千常用詞表』にあげる温度、香り、味、人の容貌、品位、感情、思想、等を形容する常用形容詞の『水滸』における意味、用法を探究し、『水滸』に占める位置を明らかにしたものである。総頁数 576 頁中 43-62 頁		
4 『普通話三千常用詞表』と『水滸』多音節動詞 1	単著	2009.03.31	大東文化大学紀要 (人文科学) 第 47 号	『普通話三千常用詞表』にあげる五官と頭部の動作、腕・手の動作、足の動作、全身の動作、生理衛生に関する動作・行為、日常生活に伴う動作の『水滸』における意味、用法を探究し、『水滸』に占める位置を明らかにしたものである。総頁数 462 頁中 45-59 頁		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1975.10.00 ~ 現在		日本中国語学会会員				

2	1979.10.00	～	現在	日本中国学会会員
3	1985.10.00	～	現在	中国近世語学会会員
4	2002.04.00	～	現在	中国語教育学会会員
5	2002.10.00	～	現在	大阪市大中国学会会員
6	2008.04.00	～	現在	日中対照言語学会会員

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	教授	氏名	山口 直人	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 発音特訓		2006.07.00		1年生全員参加の形で、夏休み直前の土曜日に半日を使って行っている。レベル別の発音のクラスを11クラス作り、専任教員が担当する。発音テストやアンケートを行い、それを集約・分析することによって、学生の発音習得を目指している。(2006～2009年7月最終土曜日)		
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 神速大師系統ビジネス中国語講座		2005.00.00		東進Dスクール 中国語による会話や商談の仕方を効率よくマスターするためのDVD教材。山口はテキスト全3冊のうち、練習問題部分を担当。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 中国語の遊離数量詞	単著	2005.05.30	日中対照言語学会学会誌『日中言語対照論集』第7号 日中対照言語学会	中国語の遊離数量詞について、相互C統御と非対格性の仮説をキーワードに、日中対照分析の観点から論じた。P.114-131 レフェリー有		
2 非対格化と中国語の4つの言語現象—遊離数量詞、受身、結果複合動詞、“V着”存在文—	単著	2006.02.03	『語学教育研究論叢』第23号 大東文化大学語学教育研究所	中国語においては、遊離数量詞、結果複合動詞、“V着”存在文、受動文といった、一見それぞれ無関係に思える言語現象が、すべて「非対格化」という共通性を持つことを主張した。P.37-48		
3 “有界”“無界”と非対格性の仮説 —2つの異なる“V着”存在文をめぐって—	単著	2006.05.26	『日中言語対照研究論集』第8号 日中対照言語学会	沈家煊 2004 の“有界”“無界”にもとづく分析と、Miyagawa 1989 の生成文法にもとづく分析が、一部の“V着”存在文における数量詞の遊離現象について同じ結果を導くことに注目し、その理由が共に「主語と目的語の非対称性」に立脚しているからであることを主張した。P.77-89 レフェリー有		
4 中国語の反復疑問文と“也”の共起に関する新考察	単著	2008.01.31	『語学教育研究論叢』第25号 大東文化大学語学教育研究所	山口 1996 で主張した反復疑問文と“也”の共起に関する仮説の不備を修正し、一般性を高めた。P.27-42		
5 “王冕死了父親”の生成について	単著	2008.05.00	『九州中国学会報』第46号 九州中国学会	“王冕死了父親”という文がいかんして生成されるのかという問題に対して、認知言語学のアプローチを批判し、生成文法による分析の優越性を主張した。P.106-120 レフェリー有		

その他				
1 “有界”“無界”と非対格仮説――2つの異なる“V着”存在文をめぐって――	単	2005.06.04	日中対照言語学会第13回大会	ある“V着”存在文について、“有界”“無界”の考え方と非対格仮説とが同じ結論を導き出す理由について論じた。
2 “王冕死了父親”の生成について――認知言語学的なみかたと生成文法的なみかた――	単	2007.05.13	九州中国学会 第55回大会	本発表は『九州中国学会報』第46号 2008年にて活字化された。
3 とりたて詞と否定の作用域に関する日中対照分析	単	2007.10.28	日本中国語学会 第57回全国大会	日中両語のとりたて詞である「も」「也」の否定のスコープの違いについて、中国語では表層のスコープ関係がLFにおける意味解釈でも保たれるという仮説を立てることによって、一般性の高い方法で説明を行なった。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1983.11.00	～	現在	日本中国語学会会員
2	1991.05.00	～	現在	日本言語学会会員
3	2004.04.00	～	現在	日中対照言語学会理事
4	2004.10.00	～	現在	日本語文法学会会員
5	2006.05.00	～	現在	九州中国学会会員

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	客員教授	氏名	肖 賢彬	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1)		2007.00.00		「中国全国留学生作文コンクール」に参加した留学生が最優秀賞を獲得した。(指導した学生)		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 《語言文字是一種生活方式》		2004.00.00	《粵海風》3期			
2 《關於“新發于刑”的討論》		2004.00.00	《學術研究》12期			
3 《<馬王堆漢墓帛書>所反映的上古動補式》		2005.00.00	《遼寧大學學報》4期			
4 《幾個來自上古情態象聲詞的動詞》		2005.00.00	《漢語史研究集刊》8輯			
5 《四字格“××AA”的歷時演變》		2005.00.00	《語言教學與研究》3期			
6 《据居延漢簡討論漢代動補式問題》		2006.00.00	《內蒙古大學學報》2期			
7 《<詩經>中若干帶“有”“其”字疑難句子的積義》		2006.00.00	《廣東社會科學》4期			
8 《漢語的“專化現象”与對外漢語教學初探》(第一作者)		2007.00.00	《暨南大學・華文學院學報》3期			
9 《古漢語動補結構起源“兼語說”之再研究》		2007.00.00	《海南大學學報》6期			
10 《從文化角度看一條語料的積讀》		2007.00.00	《漢字文化》5期			

11	《“專化意義”与幾個 相關概念的辨析》	2007.00.00	《華南師範大學學報》6期
12	《“使動”之為積義方 法說》	2007.00.00	《語言研究》2期
13	《漢語的“專化意義” 与文化誤讀》	2008.00.00	《粵海風》1期
14	《跨文化交際中漢語 的“專化現象”——從 一個對外漢語教學的 例子說起》	2008.00.00	《語文學刊（高教版）》1期
15	《上古漢語動補結構 判別標準的討論》	2008.00.00	《浙江大學學報》5期
16	《從留學生漢語習得 偏誤看辭書對“專化意 義”的積義》	2008.00.00	《辭書研究》1期
17	《判別古漢語動補結 構“語義差”標準例說》	2008.00.00	《中山大學學報》1期
18	《使動用法中“使動 詞”的性質問題》	2008.00.00	《北京師範大學學報》1期
19	《留學生漢語動賓搭 配能力的習得》（第一 作者）	2008.00.00	《漢語學報》1期
その他			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	准教授	氏名	喜多山 幸子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) NHKラジオ中国語講座入門編講師		2005.04.00	NHKラジオ第2放送 2005年4月～2005年9月 NHKラジオ第2放送 毎週月曜日～木曜日 午前8:20～8:40 (同日午後11:35～11:55再放送) はじめて中国語を学ぶ聴取者を対象に、テキストに沿って発音、文法を解説し、練習問題をおこなう。6カ月で104回。収録では2名の中国人ネイティブが模範発音を担当する。				
2) NHKラジオ中国語講座入門編講師		2006.10.00	NHKラジオ第2放送 2006年10月～2007年3月 NHKラジオ第2放送 毎週月曜日～木曜日 午前8:20～8:40 (同日午後10:40～11:00再放送) 2005年4月～9月の再放送。				
3) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	2007年12月実施 「中国社会文化演習」において、平均値4.4 (5段階評価) の評価を得た。「総合中国語2 (語彙)」において、平均値4.4 (5段階評価) の評価を得た。				
4) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	2008年12月実施 「中国社会文化演習」において、平均値4.5 (5段階評価) の評価を得た。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『ニューエクスプレス中国語』喜多山幸子著		2007.06.05	白水社 学習参考書。2007年から、白水社の外国語入門書であるエクスプレスシリーズが新シリーズに変わりつつある。中国語は前シリーズよりやさしく学べるものという要請で作られた。全143ページ、20課。CD付。1課は「本文」「語句」「慣用表現」「文法」「練習問題」で構成され、独習者がわかりやすく学べるよう工夫した。A5判、総ページ数143ページ。				
2) 『1冊めの中国語・会話クラス』劉穎 喜多山幸子 松田かの子著		2008.03.10	白水社 初級教科書。発音篇プラス15課。1課は「本文」「単語」「ポイント」「トレーニング」「リスニング」で構成されている。「トレーニング」「リスニング」でたくさんの練習問題を行い、話す・聞く力がつくように作られた。この教科書は、1クラスが週2回の授業を2人の教師で担当する際、1人が『会話クラス』を、もう1人が『講読クラス』を使うことで、話す・聞く・読む・書く力を均等に付けられるようにとの意図で作ったが、会話の教科書として単独で使うこともできる。全編のチェック、修改、教授用資料を担当。B5判、総ページ数78ページ。				
3) 『1冊めの中国語・講読クラス』劉穎 喜多山幸子 松田かの子著		2008.03.10	白水社 初級教科書。発音篇プラス15課。1課は「本文」「単語」「ポイント」「チャレンジ」で構成されている。「チャレンジ」で読む・書く力をつける。各課の内容は、『会話クラス』と連動しており、『会話クラス』の本文が対話形式なのに対し、文章形式となっている。「単語」「ポイント」を学ぶ順序はほぼ『会話クラス』と同じで、『会話クラス』と併用すれば、同じ内容を異なる形式で2度学ぶことになり、学生の理解度も深まることが期待される。講読の教科書として単独で使うこともできる。全編のチェック、修改、教授用資料を担当。B5判、総ページ数79ページ。				
4) 『はじめまして!中国語』喜多山幸子 鄭幸枝著		2009.03.10	白水社 初級教科書。発音編プラス会話による本文の12課のほか、4課ごとに文章体の復習の課を設けている。この復習の3課は進度によって省いても後の学習に影響しない。1課は本文・ポイント・トレーニングで構成される。中国語専攻でない学生が使用対象。本文の場面は日本で、日本人大学生と中国人留学生による6～8行の簡単な会話から成る。ポイントを40にしぼり、週1回1コマ1年間で学び終わられるようにした。鄭幸枝氏には主にインフォーマントチェックをお願いした。B5判、総ページ75ページ。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							

4 その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
その他				
1 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 4月号 (p.8~p.43)	単著	2005.04.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
2 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 5月号 (p.6~p.50)	単著	2005.05.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
3 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 6月号 (p.6~p.44)	単著	2005.06.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
4 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 7月号 (p.6~p.52)	単著	2005.07.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
5 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 8月号 (p.6~p.59)	単著	2005.08.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
6 NHKラジオ中国語講座テキスト入門編 9月号 (p.6~p.70)	単著	2005.09.01	日本放送出版協会	6カ月でステップ1~ステップ100プラス復習4課を学ぶ。各号16課~20課を掲載。1課は「今日のひとこと」「語句」「今日のポイント」「ポイント練習」「今日の会話」で構成される。「今日のひとこと」には単純で典型的な文型をあげて説明し、その文がどのような場面で使われるかを「今日の会話」で示す。
7 講談社日中辞典	共著	2006.03.16	講談社	執筆(飯田敦子、梅沢和幸、戸沼市子他)
8 NHKラジオ中国語講座テキスト・入門編	単著	2006.10.00	日本放送出版協会	(2006年10月1日~2007年3月1日発行) 「入門編へようこそ」(新規執筆)10月号(p.6) 11月号(p.6) 12月号(p.6) 1月号(p.6) 2月号(p.6) 3月号(p.6) 2005年の再放送用。テキストは2005年と同じ内容となる。ただし毎月号のまえがき「入門編へようこそ」は新しく書きなおし、学習方法についてのアドバイスなどをする。

9	講談社ボックス 中 日・日中辞典	共著	2008.04.17	講談社	執筆（飯田敦子、石田知子、保坂律子他）
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1976.04.00	～	現在	日本中国語学会会員	

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	准教授	氏名	竹島 毅	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 予習・復習の促進		2004.04.00		(2004年度～) 毎回授業の始めに、小テストを実施し、予習及び復習を欠かさずに行なうように指導している。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者、著者名(共著の場合のみ記入)	
著書							
1 『中国語リスニングチェック』		共著	2005.09.15	駿河台出版社		中国語の基礎学習を終え、リスニングの力をさらに高めたい人のために編まれた。実用的な表現を盛り込み、豊富な単語と様々な文型、文法が学べるように構成されている。各課のポイントを用いた作文練習なども附し、中国語の資格試験に対応できるように配慮してある。	
2 『中国語リスニングマスター』		共著	2007.01.30	駿河台出版社		中国語の基礎学習を終え、リスニングの力をさらに高めたい人のために編まれた。リスニング問題を豊富に設けることで、耳の訓練だけでなく、語彙・文法などの面も強化できるように構成されている。	
3 『中国語リスニングステージ』		共著	2008.04.01	駿河台出版社		中国語の基礎学習を終え、リスニングの力をさらに高めたい人のために編まれた。「日本と中国」をテーマにして、耳の訓練を強化しながら、成語、ことわざ等の語彙も増やせるように工夫してある。	
論文							
1 「中国語検定試験3級・4級合格のために」		単著	2008.03.15	大東文化大学外国語学会 外国語学会誌 第37号		「中国語検定試験」の3級と4級に関して、過去に出題された問題を調査分析することによって、どのような事前準備が必要であるかについての考察を試みた。	
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1 1985.07.00 ～ 現在				日本中国語学会会員			
2 1991.07.00 ～ 現在				世界漢語学会会員			

3	1996.02.00	～	現在	日中言語対照学会会員（現在理事）
4	1996.04.00	～	現在	全国中国語教育協議会会員

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科	職名	准教授	氏名	原瀬 隆司	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『漢語レッスン』		2006.04.00		光生館 共著 中国語を初めて学ぶ者のために編んだ教科書で、1997年に刊行した『初学漢語』の改訂版である。担当部分：全般			
2) 『ポイント&ドリル中国語』		2007.10.00		光生館 共著 中国語の初級段階を終えた学習者を対象とした、練習問題を通じて、更に一步深く学べるよう編集したテキストである。担当部分：「ポイント」(文法事項の整理箇所)全般と「練習」(ドリル部分)の全体的編集。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『趙州禪師語録』にみられる「動詞+箇+名詞」の“箇”について	単著	2005.05.00	九州中国学会報第 43 巻	禪の語録『趙州禪師語録』をテキストにして、「動詞+箇+名詞」構造における“箇の文法機能を考察したもの。その“箇”には「文脈指示」機能を主とした機能があることを明らかにした。そして、それが現代中国語にも継承されていることを明らかにした。			
2 〈蘇州語の音調〉	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 巻	現代蘇州語の音調について記述したもの。単語・連語及び単文中の音調を決定する文字間の連続変調を記述し、その類型を検討した。			
3 蘇州語の連続変調	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要第 45 号	蘇州語の連続変調を実験音声学の立場から分析して記述したもの。音声分析ソフトを使用して、単語・連語(動詞+賓語)・文の中にみられる連続変調のパターンを分析した。			
4 「蘇州語における動賓構造の連続変調」	単著	2008.03.00	大東文化大学紀要第 46 号	蘇州語では、「動詞+賓語(目的語)」の構造には一般的に連続変調(Tone Sandhi)は生じない。本稿では、そうした一般的規則に合わず、構造全体にトーンパターンが及ぶ用例を掲げて蘇州語の連続変調を考察した。			
5 「蘇州語の文音調について」	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集	蘇州語の文を音声分析機器を用いて分析し、文における音調曲線を考察したもの。文の統語構造をつくるいくつかのキーワードを用いて、蘇州語の文音調の特徴を検討した。			

6	蘇州方言語彙（1）	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要第 47 号	中国語方言の一つである呉語の基礎資料として作成したものである。呉語の代表的方言である蘇州方言の単語及び連語の一部について、その音声（声調を含む）、漢字表記、標準語訳を付した。又、一部分は連続変調を記載している。
その他					
1	蘇州語の音調	単著	2006.07.00	日本中国語学会関東支部例会 2006 年度第 3 回 大東文化大学	蘇州語の連続変調を実験音声学の立場から分析し、「パワーポイント」を用いて実際の音調と音声分析機器で得られた画像を紹介したもの。変調パターンの中で反転がみられるフレーズパタンの実例を示した。
2	蘇州語における動賓構造の連続変調	単著	2007.03.00	日本中国語学会第 1 回関東支部拡大例会 明治大学	「動詞＋賓語」の構造における連続変調をとりあげ、その変調パターンとそのパターンが及ぶ範囲について分析したもの。発表に際してはパワーポイントを使用し、実際の音調と分析画像を示した。
3	「蘇州語の文音調について」	単著	2008.03.00	日本中国語学会第 2 回関東支部拡大例会 中央大学	音声分析機器を利用して得られたデータを用いて、実際の音声と映像を示して発表を行なった。文の音調が統語構造をつくるいくつかのキーワードを核アクセントとして働き、全体の音調曲線を形成することを示した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1986.10.00	～	現在	日本中国語学会会員	
2	1988.04.00	～	現在	九州中国学会会員	
3	2004.05.00	～	現在	東北中国学会会員	

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科		職名	講師	氏名	安藤 好恵	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.8 (5 段階評価)。				
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
論文								
1 「語気助詞“啊”の意味機能について」	単著	2004.12.00	『奥羽大学文学部紀要』第 16 号 奥羽大学文学部	p.106-116 感嘆文、平叙文、疑問文、命令文の文末に現れる語気助詞“啊”について、日本語の終助詞「ね」「よ」と比較し、“啊”が驚きや賞賛などの感銘、旧情報との相違など「新しい情報の発見」と深く関わっていることを明らかにした。				
2 「文末助詞の“啊”と“吧”」	単著	2005.06.00	『中国文化』第 63 号 中国文化学会	p.49-58 文末助詞の“啊”と“吧”の談話の場における両者の意味機能の違いを認知言語学的視点から考察した。				
3 『一声嘆息』の女たち—婚姻法改正前夜の男女関係— p.38-45		2005.12.00	奥羽大学文学部紀要第 17 号 奥羽大学文学部	映画『一声嘆息』で描かれた不倫問題を通して、現代中国社会において法律、道徳が婚姻、不倫などの問題にどう対処しているか考察した。				
4 “即使”構文の使用について	単著	2009.03.00	『語学教育研究論叢』第 26 号 大東文化大学語学教育研究所	“即使”構文が使用される語用論的背景について、“如果”構文と比較し考察した。				
その他								
1 公開講座「説漢語—中国語を話してみませんか」		2004.09.00	於奥羽大学	郡山市民を対象に奥羽大学で開かれた公開講座。中国語入門をテーマとした。				
2 「語気助詞の“啊”と“吧”」		2004.12.00	中国文化学会例会	語気助詞“啊”と“吧”の談話の場における両者の意味機能の違いを認知言語学的視点から考察した。				
3 「文末助詞の使用について」		2006.09.02	お茶の水女子大学中国文学部例会	日本語と中国語の文末助詞の使用について、共同注意 (ジョイント・アテンション) という視点から考察した。				

4	「主従複文中の仮定について」		2007.06.00	中国語学会大会	主従複文の従属節に現れる“如果”と“即使”について、互換可能な例を取り上げその使用条件について考察した。
5	曖昧な文と発話解釈	単	2008.12.06	お茶の水女子大学中国語学会例会	中国語の曖昧な名詞句や文解釈は関連性理論によって説明できることを試み、先行研究で同一グループとされてきた名詞句とコピュラ文が更に下位分類可能であることを指摘した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1992.00.00	～	現在	お茶の水女子大学中国語学会会員	
2	1992.00.00	～	現在	日本中国語学会会員	
3	1995.00.00	～	現在	中国語学会会員	
4	2006.00.00	～	現在	日中対照言語学会会員	
5	2008.04.00	～	現在	中国語教育学会会員	

(表 24)

所属	外国語学部中国語学科		職名	客員講師	氏名	李 新	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 2007-2008 年度北京外国語大学中文学院優秀教師二等賞			2008.07.00				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 《漢語視聴説課教材》				北京外国語大学中文学院			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)			2005.00.00	(2005 年～2008 年) 授業の内容に合わせ、学生を組織して実地調査と実践活動を行っていた。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 《対外漢聴力教学三階段》	単	2005.00.00	《漢日語言教学文集》北京出版社				
その他							
III 学会等および社会における主な活動							

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	阿出川 祐子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)		2008.12.19		2008 年度担当科目 (ポキャブラリービルディング) に関して、2008 年 4 月にクラス全体の到達目標とは別に、各学生個人の到達目標を設定させ、2008 年 12 月 19 日に各学生にその分析に関するプレゼンテーションを課し、さらにクラス全体でディスカッションをした。これは、これまでの、単なる教授形式から 一歩進んだ新しい試みである。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 H. ジェイムズ文学における道徳とプラグマティズム的要素 (1)	単著	2005.03.31	大東文化大学紀要第 43 号、大東文化大学	ジェイムズの文学に見られるウィリアム・ジェイムズの哲学の影響を論じたもの。			
2 「運命に立ち向かうイザベル」	単著	2007.08.30	湘南英文学会湘南英文学第二号、湘南英文学会	ヘンリー・ジェイムズの『ある婦人の肖像』について、圧倒的多数の研究者の結論である主人公の最終行動の解釈を再検証し、全く別の解釈を試みたもの。(レフェリー制有)			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1966.04.00	～	現在	横浜国立大学英語英文学会会員			
2	1970.04.00	～	現在	奈良女子大学英語英文学会会員			
3	1975.04.00	～	現在	湘南英語英文学会会員			

4	1977.04.00	～	現在	日本アメリカ文学会会員
5	1982.04.00	～	現在	日本比較生活学会会員
6	1991.04.00	～	現在	日本比較文学会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	出水 慈子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 基礎ゼミと課外ゼミナールを連動した学習促進のための取り組み。	2006.00.00	教育内容:基礎ゼミナール 課外ゼミナール を通じて実践した。方法の工夫:学習意欲、動機付け不足、学習環境に恵まれない等々が原因で、大学カリキュラムの埒外に置かれやすい学生を十二分に視野に入れ、1:積極的コミュニケーション方法、人間関係づくり支援、個別コンサルティング(自己分析、日常自己管理方法、悩み解決方法 等々)を積極的に取り入れた。2:重要科目の補修、個性に合わせた学習方法、効果的共通の学習法などを基底にすえて指導した。					
2) 学生による授業評価	2006.00.00	①地域研究(アフリカ・中近東)評価平均値 1.92/2点満点 ②フランス語特別講座B 評価平均値 1.82/2点満点					
3) 学生による授業評価	2007.00.00	①フランス語2A 評価平均値 1.92/2点満点 ②基礎ゼミナール 評価平均値 1.94/2点満点					
4) 基礎ゼミと課外ゼミナールを連動した学習促進のための取組み(Ⅱ)(2007年4月1日~2008年3月31日)	2007.04.01	教育内容:2006年度に引き続き「ヨーロッパ2言語コース(英仏系)」の第2期生を対象にした。方法の工夫:様々な原因でカリキュラムの埒外にいる学生に加え、今年度はくふきこぼれ>学生を対象としたため、自己申告による習熟度別対応、人間関係構築支援、個別対応のテーマ別コンサルティングによる学習意欲増進などを積極的に取り入れた。成果として基礎ゼミの基本的方法の実践例を示すことができた。また課外ゼミ出席者はTOIEC、TOFFLEや仏語検定試験等で好成績を出した。					
5) 「仏語3」(第2外国語2年生)における仏語検定4級取得の効果的方法実践(2007年4月1日~2008年3月31日)	2007.04.01	教育内容:当該科目は週1回、1年時の全面的復習が必要な学生と2年時に4級取得を希望する学生が混在する。通例としては3名程度が取得できれば上出来とされているが、今年度は学級を2分することなく、秋季に希望者が受験できるように、教科書とプリント、過去問題の効果的な実施、課題などをフルに活用した。この工夫により、受験者9名(30%)のうち8名の合格者という好成績を出した。					
6) 日本と米国の教科書併用、学生自身による理解(プレゼン)及びタスク導入に基づく、自律的学習とディスカッション	2008.04.01	2008年担当科目「仏語圏の文化と社会」日本と米国の大学で使用されている「仏語圏の文化と社会」の教科書を併用、さらに学生自身によるフランス語圏理解のプレゼン、仏語圏の文化と社会に関するタスク学習導入により、学習者の自立的な学習と活発なディスカッションを促した。[海外研修のため、前期のみの実施]					
7) 講義科目(中規模人数対象)における学習者中心の学習導入による多様な学習能力養成	2008.04.01	2008年担当科目「アフリカ研究」受講生にとって遠いアフリカのコンテキストを講義することに加え、多様な教材の使用により、その要約、和訳、同時通訳、テキスト説明、異文化理解、質疑応答、ディスカッション等、アフリカを媒体にして様々な能力養成を試みた。[海外研修のため、前期のみの実施]					
8) コンピューター使用とメールによる論文作成少人数クラス[基礎科目・少人数クラス]	2008.04.01	2008年担当科目「(小)論文」論文作成に慣れない1~2年の学生たちに、アウトラインから始まる全プロセスでコンピューターを上手に利用する方法指導と、論文作成者が主題を絞り込む困難を支援するためにメールを含むきめ細かな指導で論文を完成させた。[海外研修のため、前期のみの実施]					
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							

4 その他教育活動上特記すべき事項				
1) 外国語学部英語学科に『ヨーロッパ2言語コース』を設置		2006.00.00	2006 年以前より文学部の独任担当教員が設立準備にあたってきた「ヨーロッパ2言語コース」が第1期生を迎えた。	
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書 1 「グリオの変貌・・・ 生きた記憶媒体の残存は可能か」	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部創設35周年記念論文集 大東文化大学外国語学部	現代グリオの主は、数世紀に誉め歌を捧げた封建的支配層から、民主主義或いは軍事独裁政権の権力者や新興資産家になった。さらに文字と学校制度の浸透、新興権力者や資産家の台頭、グローバリゼーション等に多大な影響を受け、グリオは変貌を遂げている。その現状は? 「生きた記憶媒体」として残存できるのか? ほとんど知られていないニジェール共和国のグリオ事情を垣間見つつ、マリ共和国を中心に文献による考察を試みた。
論文 1 グリオと西欧 (1) ディアスポラ	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要第43号 <人文科学>	グリオに見る<グローバリゼーション>は西欧およびアメリカ大陸への移民潮流と密接に関係している。当初、経済移民として社会の枠外に存在していた非西欧人は次第に西欧社会と文化的に遭遇、対立しつつも居住先社会で顕在化し、構成員に組み入れられていったが、その過程において、アイデンティティという課題が深刻に問われ、出自文化の特質、とりわけ口頭文化のそれを強く見出していった。現代グリオの西欧進出や移住による活躍の経過と原因を分析し、さらにグリオが西欧在住の同胞の内的要求と西欧の異文化受容にどのように答え、領域開拓を行うかについて考察。
2 グリオと西欧 (2) ニューヨークの西アフリカ系移民	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第42号 <人文科学>	ヨーロッパにおける移民規制と密入国取締り強化と共に、アメリカやカナダにおいて西アフリカ系移民が目立つようになり、現在彼らは主に大都会に居住し、独自のコミュニティを形成するまでに至っている。移民の増殖といえるニューヨークもその例外ではないが、ニューヨークの移住先地域ではアフリカ系アメリカ人が抱える貧困、暴力、犯罪等の諸問題が、アフリカからの新参入者を待ち受けていた。問題の根源に横たわるアフリカ系アメリカ人の過酷な歴史といまだ端緒でしかない西アフリカ系移民小史を概観し、大都会の一隅に定住するそれぞれの過程とコミュニティ形成のありようの諸相を検証した。同時に西アフリカ系移民のコミュニティにおける出自文化継承の努力とアメリカ文化とのハイブリッドな文化形成の萌芽にグリオが関わる可能性について考察した。
3 国際文化交流 (その1) 日米文化交流ー ジャパン・ソサイエティ	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要第45号 <人文科学>	戦後60年、日米関係は政治経済、安全保障というに及ばず、文化全般、国民生活のすみずみまで深く影響している。しかし近年、国際関係の構図は大きく変貌し、日本と東アジアとの関係も含め、日米関係もまた例外ではない。曲がり角にあるこの時期に、日米文化交流活動の事例として、ジャパン・ソサイエティを取り上げて検証し、近未来の日米の文化交流や目指すべき交流のありかたなど、国際文化交流考察の端緒とした。(pp. 1-17)
その他 1 アメリカ通信: ニュー ヨークに生きるア フリカ文化	単	2009.01.00	大東文化大学新聞 (大東文化大学)	アメリカ合衆国へのアフリカ移民が一時期増えたことと、アフリカ文化認識が高まってきたことなどにより、グリオもアメリカで活躍の場をより多く得るようになった。ツアースタイルや定住型がそのほとんどだが、彼らはどのような活動を展開しているのか? 2008年度、ニューヨーク短期海外研修期間中に調査した際に出会ったグリオインタビューの報告である。
III 学会等および社会における主な活動				

1	1973.04.00	～	現在	日本フランス語フランス文学会会員、1998年4月～2000年3月 幹事
2	1980.09.00	～	現在	日本民族学会会員
3	1992.01.00	～	現在	日本アフリカ学会会員
4	1992.12.00	～	現在	サルトル研究会会員
5	1994.04.00	～	現在	日本口承文芸学会会員
6	1995.00.00	～	現在	国際マンデ研究会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	大月 実	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 特別セミナーで学生の研究指導、毎年その成果をゼミ論集として纏めている		2004.04.01	2004年4月1日～2008年3月31日 それぞれの学生と相談の上、言語文化関連のテーマを選定して調査探究。学生の希望を尊重してアドバイスの上、ゼミでの発表と論評を通して年度末にゼミ論集を出している。年度により大きなテーマを設けており、04-05年度は「言語文化に現れた色彩」、06年度は「北欧の言語文化」、07-08年度は「南欧の言語文化」であった。06-07年度は、参加学生からの好意的な評価・感想が大学の「ゼミなび」に掲載され、08年度には大学の広報誌『Crossing』でゼミの内容がとり上げられ紹介された。				
2) 大学院での高度先端研究指導とその結実としての院生論文の学術誌掲載		2005.12.00	2005年12月 大学院博士前期・後期過程では院生に集中的訓練を実施し成果を上げてきた。今までも少なからぬ指導学生がレフェリー制のある学会誌への論文掲載を果たしている。(この時期に担当した院生は一名。)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) CBS News Watching (1) (ビデオ・CD有)		2005.01.10	成美堂 CBS Evening News から題材を採り作成した、中・上級者向けの英語総合教材。特に、従来のテキストに殆ど見られなかった新機軸として、文脈・状況から内容を予想する能力の養成を図る訓練に重点を置いた。				
2) 『News for You 2006/2007』(CD有)		2006.01.10	成美堂 新機軸のメディア英語テキスト。隔年刊行の時事英語テキストを形式内容ともに刷新。大学生の英語力向上のための多様な演習を提供しつつ、現代世界を理解する上で要となる背景知識(特に日本人学生に馴染みの薄い法律・宗教・民族・歴史・社会等に関する情報)を学生が興味を持てるような形で組み込み、英語と英米の言語文化・社会を立体的に把握できるよう工夫を凝らした。p.86				
3) 『News for You 2008/2009』(CD有)		2008.01.10	成美堂 隔年刊行のメディア英語テキスト。国や時代を超えた普遍的な問題につながる内容のものを意識的に取り上げた。読者を勇気付ける、人間の生きる姿勢に関する強いメッセージの込められている稀有な教科書として、大学・高等学校等で採択されている。p.82				
4) 『CROWN総合英語』(CD有) [共著]		2008.03.20	三省堂 採択 No.1 教科書『CROWN』の代表著者の編集による総合英語参考書(編者を含めて5名の執筆者+ネイティブスピーカーの校閲)。基礎から発展まで重要事項を網羅し、英語学・英語教育学の成果も盛り込む。「日英比較」などをコラムを充実させ、各種写真により実際の使用例も示した。(この他に準教科書・ワークブックをレベル別に用意。) p.616				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							

1	『言語表現と創造』 (内「日本語色彩表現の史的意味変遷について」を執筆)	共著	2005.11.23	鳳書房	日本語の比喩的・象徴的色彩表現の史的変遷の分析により、日本語の基本的色彩語間の関係性に関して幾つかの重要な事実の発見を行なった。また、英語との対比により日本語の色彩語の特質の解明の方向性を示唆した。(P354 中 19-31) 編者：藤本昌司
論文					
1		単著	2004.12.01	学術論文『言語の世界』 Vol.22,No.1/2 (2004)	命名論序説 言語の実態とその概念的考究を踏まえた新たな命名論を提案した。命名の本質に関わる根本問題を扱い、命名論の理論的基礎付けを施した。命名の本質を解明するために、まず命名を定義及び表現との比較・対照において、その特質を記号論的に位置づけ、次に既存の記号との関係から命名法を4種に下位区分。更に、命名の機能を伝達・通信の6つの構成要因に関して検討し、命名に関する幾つかの重要な事実の指摘を行なった。最後に、命名行為を文法概念で規定し、構成項目間の関係性を示した。(pp.53-69.) (レフェリー制有)
2	二次的名称に現れる認知と命名の対応性	単著	2005.09.10	『日本認知言語学会第五回記念大会 Conference Handbook 2004』 (pp.17-20)	二次的名称の分析により、認知に関わる、従来指摘されなかった複数の規則性の存在を明らかにした。典型例を挙げながら、その理論的意義と帰結を考究した。
3	名前の本性は何か? :『クラテュロス』の新たな解釈を踏まえて	単著	2006.12.01	『言語の世界』 Vol.24、 No.1/2	プラトンの対話編『クラテュロス』に関して、ヘルモゲネスの規約説とソクラテスの本性説は、そもそもお互いに二律背反ではなく見ている側面が違うことを指摘した。そこにおいて展開されている議論の論理的・概念的分析を通して、前提とされている音声象徴理論内での決定不能問題としてこの対話編を位置づけ、新たな発展性のある解釈を提示、その解釈を踏まえて名前の本性に関して検討した。名前が基本的には<本質存在>ではなく<事実存在>を表わしていることを明らかにするとともに、命名の二重性に関して指摘した。(レフェリー制有) (P122 中 pp.35-46)
4	「命名と名前：命名論の新たな地平」	単著	2008.09.09	『認知言語学論考 No.7』ひつじ書房 (pp.117-167)	従来の諸研究を踏まえながら、命名と名前につき総体的に捉えると同時に、いくつかの重要問題に関してそれらを特に掘り下げて考究した。命名・名前の諸機能につき、ヤコブソンの挙げる6つの構成要因・機能と関連させて検討したうえで、そこに関与者という構成要因とその機能(「注意惹起的機能」)の欠落していることを指摘し、また新たに「実体化機能」と「社会的機能」を命名・名前に関わる特徴的な機能として提案。命名の本質に関わる根本問題に関して言語の実態を踏まえて概念的に考察した。
5	指示・記述・命名・表現—表現論への展望—	単著	2008.12.01	『言語の世界』 Vol. 26、 No.1/2 (pp.67-76)	指示が事実として限定された存在者たる事実存在に関わるのに対して、命名は普遍的で可能的な存在たる本質存在に関わる。一方、記述が普遍妥当性があるのに対して、表現は特殊多様性がある。指示・記述がどういうモノを指すかを問題とするのに対して、命名・表現の方はどういう言い方をするかが問題となる。本稿は、今まで言語学的には厳密な議論ができなかった表現というものについてその理論的な基礎固めを行なった。従来の指示中心の哲学・言語学ではなく文学や日常言語の表現研究にも道を開くものである。
その他					
1	二次的名称に現れる認知と命名の対応性	単著	2004.09.00	『日本認知言語学会 第5回記念大会 Conference Handbook 2004』 (pp.17-20.)	二次的名称に現れる認知と命名の対応性 一般に、認知的階層上、上位に立つ要素は、下位に立つ要素よりも先に命名されるとする「認知と命名の対応性仮説」を提案。仮説を確証する日本語及び英語の事例を示しながら、二次的名称の各下位類に関して一般的な指摘を行なった。認知に関わる、従来指摘されなかった複数の規則性の存在を明らかにした。(レフェリー制有)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1981.06.00	～	現在	日本地震予知クラブ会員	
2	1984.04.00	～	現在	言語研究学会常任理事 (1996.09.00～現在会長)	

3	1986.06.00	～	現在	上智言語学会会員
4	1987.04.00	～	現在	日本語学会会員
5	1991.04.00	～	現在	無門館道場顧問
6	2004.04.00	～	現在	日本認知言語学会会員 (2005.09.00～現在理事)

(表 25)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	大月 実	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	井原高等学校の校歌作詞	岡山県立井原高等学校		2006.04.10	岡山県立井原高等学校と岡山県立精研高等学校の統合による新・井原高等学校開設に伴い、依頼により新校歌を作詞、入学式・開設記念式にて披露した。	

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	奥田 祥子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 文献からみる第二言語習得研究	共著	2005.07.01	開拓社	インプット、インタラクションとアウトプットの章を担当。三者の関係及びこれからの研究の方向を文献を通して探った。代表者：佐野富士子 執筆者 23 名 奥田祥子担当章：2 章 p.17-26		
論文						
1 Japanese University Students' Receptive Pragmatic Competence	共著	2005.03.00	JACET BULLETIN NO.40 (J A C E T 学会誌)	2792 名の日本人大学生に不満、訂正、拒否、要請を表わす英文を読ませ、それらが正確にどのように理解されるか語用論能力を論じたものである。その結局理解力は学生の英語力に比例すること、4 つの意味範囲で理解度の高いものと低いものがあることが判明した。(レフリー制) 代表者：佐野富士子 執筆者 23 名 p.117-133		
2 第 2 言語における語彙習得について	単	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号	本論文は既に発表された奥田 (1986) を上台にその後の研究を含めて考察したものである、新しい発見として母語が異なっても、同じ方略を用いること、また Ellis (1994) で述べられているように語彙習得パターンがあることがわかった。p.217-225		
3 第二言語習得における母語の影響	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号	英語を第二言語として習得する日本語を母語とする幼児を数名取り上げ個人差や普遍性をみた。データは山本 (2005) の対象児 4 名を奥田の対象児 1 名に基づいている。習得の類似性はかなりの程度みられる。p.149-157		
4 幼児の英語語彙の習得・忘却・再習得の関係	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集	第 2 言語における語彙の習得・忘却 (保有)・再習得をみると初期に習得された語彙ほど長期記憶に保存され、忘れることも少なく、再習得もされやすいことがわかった。しかし習得と忘却語彙には同じ認知型が使用されたが、再習得の場合は二者とは異なる型が使用されたという結果が出た。これは子供の年齢・自意識の強さ・環境の違い等により習得と再習得の型が異なったのではないかと考えられる。p.43-57		

その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1983.04.00	～	現在	大学英語教育学会（JACET）会員
2	1996.04.00	～	現在	SLA 研究会（大学英語教育学会内の研究会）会員（事務局（会計他） 2004年3月まで）
3	2000.04.00	～	現在	日本児童英語教育学会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	教授	氏名	北林 光	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 Naming as a Source of Identity in Japanese Language	単著	2004.00.00	Cumming & Hathaway, New York	2002年の10月2日から5日にかけて、アメリカ地理言語文化学会とニューヨーク市立大学ブルック校の共同主催で行われたアメリカ地理言語文化学会国際年次総会から選ばれた発表の一つとして出版されました。内容は日本語における名前の使い方とアイデンティティの関係です。			
2 An Overview of Esperanto in Japan	単著	2005.00.00	Cumming & Hathaway, New York	2003年10月2日から4日にかけて、アメリカ地理言語文化学会とニューヨーク市立大学ブルック校の共同主催で行われたアメリカ地理言語文化学会国際年次総会から選ばれた発表の一つとして出版されました。内容は日本におけるエスペラント活動の歴史についての概要です。			
その他							
1 The Underlying Rhythmic Structure of Desmond Egan's Poetry Compared with That of Hopkins	単著	2005.07.23	Gerard Manley Hopkins Society, Ireland	現代のアイルランドの詩人 Desmond Egan の詩と19世紀の英国の詩人 Gerard Manley Hopkins の詩のストレスとリズムとの相似点における重要性の研究。さらに両者の詩に使われている詩的なストレスとリズムは言語本来の意味以上のものをもたらしている。			
2 On A Piece of Music's Music	単著	2006.03.23	Regis University's Hopkins Denver Conference	以前の未編集の詩や他の文学作品の草稿はどのような原則に基づいて編集されるかに関する研究。特に、詩を編集する場合、編集者の音韻的な観点によって編集した結果が変わる可能性もあり、そのことを A Piece of Music において例証した。			

3 「日本の高等教育機関におけるネイティブスピーカー教員の処遇の変化」		2008.09.27	アメリカ地理言語文化学会国際会議、於ニューヨーク市立大学バルック校	2008年9月26日と27日にニューヨークのニューヨーク市立大学バルック校にて行われたアメリカ地理言語文化学会の国際会議において基調演説を務めた。演説の内容は、1970年代から21世紀最初の年にかけて、ネイティブスピーカー教員が日本の大学で受けて来た処遇の変化である。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1986.04.00	～	現在	日本文体論学会会員
2	1987.06.00	～	現在	日本中世英語英文学会会員
3	1996.05.00	～	現在	17世紀英文学会員
4	1998.01.00	～	現在	日本ホプキンズ協会会員
5	2002.10.02	～	現在	American Society of Geolinguistics 会員
6	2003.08.00	～	2007.04.00	T I L C (東京インターナショナルラーニングコミュニティ) 会員 (2003.08.00～2007.04.00 理事)
7	2005.10.00	～	現在	The Gerard Manley Hopkins Society, Ireland 顧問

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	熊澤 佐夫	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	鈴木 敬了	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「福島高専コミュニケーション情報学科における英語教育」		2005.08.04		平成 17 年度高専一長岡技科大(機械系)教育交流研究集会 5 学年生の平均点が 480 点台である要因をカリキュラム及び英語教授法の見地から論じ、効果的な英語教育のあり方を提案した。			
2) 「大学で英語を学ぶ」		2007.06.12		長野県立松本深志高等学校での大学進学希望者対象に大学の英語学科カリキュラムの概要と英語学とはどのような研究分野かを紹介し、また、英語教育の観点からどのような貢献ができるかを実例を交えて講演した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 “On MV/VM Order in Beowulf” New Perspectives on English Historical Linguistics: Selected Papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21-26 August 2002 所収	共	2004.08.00	Christian Kay, Simon Horobin, Jeremy Smith 編 John Benjamins 出版社 (アムステルダム、フィラデルフィア)	全体の概要：この研究書は「英語歴史言語学の新たな展望」と題されており、副題にあるとおり、2002 年 8 月にグラスゴー大学において 1 週間にわたり開催された第 12 回英語歴史言語学会国際会議で読まれた 100 を超える論文のなかから特に選考を経た論文を収めたものである。全部で 2 巻あり、第 1 巻は 13 篇の統語論、形態論からなる。この国際学会においてはイギリス以外のヨーロッパの国々およびアジア (特に日本) からの発表が数多くあり、英語歴史言語学研究の裾野の広さを物語っている。担当部分概要：古英語の統語論に関しては散文と韻文の研究に大別されるが、散文の研究成果に比べて韻文の研究に関しては学者間で意見の一致はまれである。例えば散文の法助動詞 (M) と不定詞補語 (V) の語順の決定要因に関して extra element (主語、M、V、以外の要素) の存在の有無が決定要因であるとの主張がある。この説は古英語散文には有効である。しかしながら extra element の影響は古英語頭韻詩 Beowulf では働かず、代わって頭韻の分布が MV/VM 語順の重要な決定要因であることを主張した。また主節においては第 1 半行が第 2 半行とは異なる分布を示すことからその区別は古英語詩の語順研究にとって重要であると主張した。(全 264 ページ) pp.195-213 Sandra Charke, David Denison, Olga Fisher, Mikko Laitinen, Bettelou Los, April McMahon and Robert McMahon, Anneli Meurman-Solin, Carol Percy, Jennifer Smith, Hironori Suzuki, Martine Taeymans, Anthony Warner, Ilse Wischer 以上 14 名、全 13 篇			

<p>2 “Effect of Alliteration on Construction with Complex Predicates in Old English Poetry” Textual and Contextual Studies in Medieval English 所収 平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 7520339</p>	共	2006.03.00	Michiko Ogura 編 Peter Lang 社、(フランクフルト)	<p>全体の概要：S H E L L (英語史研究会) の国際学会で発表された論文を中心に編まれたものである。英語史上のさまざまなテーマ、アプローチによる研究論文からなり統語、音韻、形態、文体、韻律等多岐にわたり英語の変遷をとらえようとする試みである。 担当部分概要：古英語の従属節における法助動詞 (M) と不定詞補語 (V) に関して extra element (主語、M、V、以外の要素) の存在の有無が語順の決定要因であるとの主張がある。この説は古英語散文には有効である。しかしながら extra element の影響は古英語頭韻詩 Beowulf では働かず、代わって頭韻の分布がMV/VM語順の重要な決定要因であることを主張した。この現象が法助動詞以外の他の助動詞にも見られるかどうかを検証した。その結果、他の助動詞に関しても同様の現象がみられ助動詞全体の語順決定要因となっていることが明らかとなった。(全 220 ページ) pp.179-92 Michio Hosaka, Yoko Iyeiri, Tadashi Kotake, Yoshiyuki Nakau, Yuji Nakao, Hiroyuki Nawata, Michiko Ogura, Masayuki Ohkado, Young-Bae Park, John Scahill, Hironori Suzuki, Hideki Watanabe, Fumiko Yoshikawa 以上 13 名、全 13 編</p>
<p>3 Word Order Variation and Determinants in Old English</p>	単著	2006.09.01	マナハウス (出版社)	<p>東北大学に提出した博士論文を公刊したもの。古英語には現代英語と異なり語順の多様性が見られるが、それらを生み出す要因は何かを考察したもの。先行研究と分析方法論について触れた後に (1 章)、英語史の定説、格組織の消失と語順の固定化の因果関係の検証 (2 章)、それに代わる要因として散文では目的語の語順に対する「要素の重さ」の作用を説明し (3 章)、韻文においては助動詞の語順を分析対象とし、散文で見られた要因および韻律の影響など、さまざまな要因の検証を行った。結論として散文の要因は働かず、古英語詩の特徴である頭韻の分布が語順の決定要因となっていることを説明し (4 章)、韻文統語研究のさらなる可能性を示唆 (5 章) している。(全 164 ページ)</p>
<p>4 「古英語頭韻詩の語順に関する実証的研究および電子コーパスの構築」</p>	単	2008.03.00	文部科学省、国立国会図書館所蔵全 160 ページ	<p>本報告書は「古英語頭韻詩の語順に関する実証的研究および電子コーパスの構築」(課題番号 17520339) をテーマとし平成 17 年度～平成 19 年度までの科学研究費補助金基盤研究 (C) による研究成果報告書である。古英語の散文の語順決定要因が頭韻詩では働かず韻律、特に頭韻のパターンが重要な要素となっていることを明らかにし電子コーパスの必要性と実際のコーパスの構築を行った。</p>
<p>論文</p>				
<p>1 “Word Order Variation and Determinants in Old English” (博士論文) 平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 7520339</p>	単	2006.03.00	東北大学大学院情報科学研究科	<p>英語史の定説では古英語から現代英語にかけて語順の変化 (SOV から SVO) の要因は格語尾の消失であるとされている。本研究では定説の検証を行い、格の水平化の状況は古英語初期から見られること、主格、目的格の区別がない節においても語順の多様性が見られ、その現象は中英語期まで続いたことを明らかにした。古英語における語順の多様性を生み出す要因説明に関して散文を対象に目的語の情報構造、要素の長さ等が要因であるかどうかの可能性を探った。その結果要素の長さが要因の一つであることが判明した。さらにジャンルの異なる韻文における語順決定要因に関しても調査した。韻文においては語順の決定が容易な助動詞の語順に注目し、「散文における語順決定要因が働くのか、働かないとすればどのような要因があるのか」について調査した。その結果、散文で見られる要因は働かず、詩の特徴である頭韻の型が要因となっていることが判明した。本研究の意義は、特に詩に関する語順決定要因の解明であり、今後さらにジャンルの違いと基底語順の関係の解明につながるものと思われる。</p>
<p>2 “On MV/VM Order in the Meters of Boethius”</p>	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部 35 周年記念論文集	<p>古英語詩 Meters of Boethius は古英語散文から作詩されたとされているが、法助動詞構文の語順が他の古英語詩と同様の傾向が見られるかを調査した。その結果、頭韻の影響が強く作用しており、他の古英語詩と同様、頭韻のパターン分布とその語順には密接な関係があることが実証された。 pp.79-94</p>

3	“Correspondence between Old English Prose and Verse Versions of Boethius's De Consolatione Philosophae”	単著	2008.06.00	日本英語表現学会編「英語表現研究」第25号	古英語の韻文版と散文版の比較により以下の点が明らかとなった。(1) 散文版では subjunctive が使われる箇所、詩では複数行にまたがり助動詞と不定詞補語の組み合わせで表現され、MV 語順となっており作詩において助動詞構文が重要な役割をしていること。(2) 散文の語順が詩でも保持される場合、頭韻の分布により詩の文法にそっていること。(3) 散文の語順が詩で変更されている場合、頭韻パターンにより詩の文法にしたがっており、詩の文法の独自性を示していること。PP.41-51
4	“On AV/VA Order in the Meters of Boethius”	単	2009.03.00	大東文化大学語学研究所編「語学教育研究論叢」第26号 pp.133-154	10世紀後半の頭韻詩 Meters of Boethius をデータベースにした本研究は古英語詩の語順研究の一環であり、法助動詞構文における語順決定要因が他のタイプの助動詞構文全体にみられるかを調査したものである。分析の結果、頭韻の影響が他のタイプの助動詞構文でも見られた。したがって Meters of Boethius において助動詞構文全体にわたり、語順と頭韻の密接な関係が実証されたとと言える。
その他					
1	“Word order in Old English poetry: alliteration as the key factor”	単	2004.08.00	The Thirteenth International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL 13), University of Vienna, Austria (第13回英語歴史言語学会国際会議、ウィーン大学、オーストリア)	古英語の従属節における法助動詞 (M) と不定詞補語 (V) に関して extra element (主語、M、V、以外の要素) の存在の有無が語順決定要因であるとの主張がある。この説は古英語散文には有効である。しかしながら extra element の影響は古英語頭韻詩 Beowulf では働かず頭韻の分布がMV/VM語順の重要な決定要因であることを主張した。本論ではこれが他の助動詞構文でも有効であるか否かを Beowulf 以外の古英語頭韻詩を含めて調査した。その結果、法助動詞以外の他の助動詞構文でも同様の傾向が見られ、古英語詩全体の傾向であることが判明した。
2	“Word order determinants in Old English poetry: The case for alliteration”	単	2004.09.00	The Fourth International Forum on Language, Brain, and Cognition: Cognition, Brain, and Typology: Toward a Synthesis (The Tohoku University 21st Century COE Program in Humanities) Forum Handbook (第4回国際フォーラム脳、言語、認知: 東北大学 21世紀COEプログラム)	古英語の統語論に関しては散文と韻文の研究に大別されるが、散文の研究結果にくらべ、韻文の研究に関しては学者間で一致することがまれである。例えば散文の法助動詞 (M) と不定詞補語 (V) の語順の決定要因に関して extra element (主語、M、V、以外の要素) の存在の有無が語順の決定要因であるとの主張がある。この説は古英語散文には有効である。しかしながら extra element の影響は古英語頭韻詩では働かず、代わって頭韻の分布がMV/VM語順の重要な決定要因であることを主張した。また主節においては第1半行が第2半行とは異なる分布を示すことからその区別は古英語詩の語順研究にとって重要であることを主張した。pp.90-91
3	“Effect of Alliteration on Constructions with Complex Predicates in Anglo-Saxon Poetry”	単	2005.09.00	SHELL 2005 International Conference (第1回英語史研究会国際会議、千葉大学)	古英語頭韻詩の助動詞構文における語順の要因をさまざまな観点から調査し、頭韻の分布がもっとも重要な要因であることを示してきた従来の研究に、さらに資料を加え、より広い範囲においてもこれまでの主張が有効であることを主張した。
4	「古英語詩における語順決定要因の解明とデータベースの構築」	単	2007.10.00	日本英語コーパス学会 第30回記念大会 (JAECS 30)、立教大学	現在の古英語詩のコーパスは詩形の情報、特に頭韻パターンの情報を含まないため、その語順研究には独自のデータベース構築が必要であることを示している。そこで本研究では詩の語順研究のためのデータベースを提案する。データベースのソフトは Windows 版 FileMaker Pro 8.5 を使用した。フィールドは a.Chapter b.Page c.Line d.Clause Type e.Subordinator f.Example g.Type h.Order i.Alliteration j.Scope を設定している。これにより、詩の語順決定要因の更なる解明が可能となると思われる。

5	“The Production of an Old English poem”	単	2008.08.00	The Fifteenth International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL 15) ミュンヘン大学、ドイツ	10世紀後半の Boethius の De Consolatione Philosophiae (‘Consolation of Philosophy’) はもとのラテン語の作品からではなく直接、古英語散文から作詩されたとされる特徴をもっている。散文版との対応関係を調査し、詩の文法の独自性をより明確にした。結論(1) 散文版では subjunctive が使われる箇所で、詩では複数行にまたがり助動詞と不定詞補語の組み合わせで表現され、MV 語順となっており作詩において助動詞構文が重要な役目をしていること。(2) 散文の語順が詩でも保持される場合、頭韻の分布により詩の文法にそっていること。(3) 散文の語順が詩で変更されている場合、頭韻パターンにより詩の文法にしたがっており、詩の文法の独自性を示していること。
---	---	---	------------	---	--

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1982.04.00	～	現在	早稲田大学英語英文学会会員
2	1990.04.00	～	現在	I C U 英語研究会会員
3	1990.04.00	～	現在	英語史研究会 (S H E L L) 会員
4	1990.04.00	～	現在	近代英語協会会員 (2006年5月～2010年4月編集委員会委員、2009年5月～2010年4月編集委員長)
5	1990.04.00	～	現在	東京都立大学中世英語英文学研究会会員
6	1990.04.00	～	現在	日本英語学会会員
7	1990.04.00	～	現在	日本英語表現学会会員
8	1990.04.00	～	現在	日本英文学会会員
9	1990.04.00	～	現在	日本中世英語英文学会会員 (2004年1月～2004年12月全国大会準備委員会委員、2005年1月～2005年12月全国大会準備委員会副委員長、2006年1月～2006年12月全国大会準備委員会委員長・評議委員、2008年4月～2012年3月東文部幹事)
10	2000.08.00	～	現在	I C E H L (英語歴史言語学会国際会議) 会員
11	2003.04.00	～	現在	大学英語教育学会 (J A C E T) 会員
12	2007.04.00	～	現在	英語ユーパス学会 (J A E C S) 会員、学会賞審査委員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	高尾 謙史	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 『驚異の装置』	単著	2006.08.30	木下卓・清水明編著『ガリヴァー旅行記』(ミネルヴァ書房)	ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に登場する奇妙な機械装置「知識製造機」を、当時の普遍記号法運動や神秘学的な伝統の中で捉えなおし、スウィフトが何をどのように風刺しているのかを析出した論考。		
2 『「神の石」のトポグラフィ―モーリス・ルブラン『三十棺桶島』をめぐって』	単著	2006.12.25	『文学空間』(20世紀文学研究会・風濤社)第5巻第3号	モーリス・ルブランの小説『三十棺桶島』を、西のトポス、檜の木、花崗岩、地下世界といったトポグラフィックな観点から分析した論考。		
3 『ヨーロッパの霊狐』	単著	2007.02.17	『朱』(伏見稲荷大社)第50号	ヨーロッパにおける狐のイメージ、とくに「霊狐」と呼べるようなイメージを、(1)中世の秘密結社およびフランソワ・ラブレーの作品に見られるシンボリズム、(2)錬金術の象徴、(3)サン=テグジュベリの『星の王子さま』の中に探った論考。		
4 『サルヴェルトの『オカルト科学について』』	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要第46号	エジテリスムという語がつくられた1830年頃の思潮状況を解明するためのひとつの入口として、1829年に出版されたサルヴェルト『オカルト科学について』を分析し、さらにこの書物をどのような歴史的な文脈に入れて考えることができるかについて展望を示した論考。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

1	1983.05.00	～	現在	日本フランス語フランス文学会会員
2	2001.05.00	～	2005.05.00	日本フランス語フランス文学会資料調査委員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	教授	氏名	竹田 宏	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							
その他							
1 『カトリック教会の伝統に基づく演劇および芸能論』	単著	2008.09.30	大東文化大学図書館 大東 BOOKS 第6号		『TRAIT É DE LA COMEDIE ET DES SPECTACLES, SELON LA TRADITION DE L'EGLISE』(1669年刊)の紹介。フランス17世紀における演劇界とカトリック教会との軋轢についての概説 (p.13~p.16)		
III 学会等および社会における主な活動							
1	1967.05.00 ~ 現在		日本フランス語フランス文学会会員				

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	中込 啓子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 Elfriede Jelineks Literarische Methode Und Missverst ä ndnisse bei der Rezeption	単著	2005.10.01	In: Elfriede Jelinek-"Poetik und Rezeption" Hsg. von Walter Rupprechter Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 034 JGG Tokyo (日本独文学会発行)	2004年10月にノーベル文学賞を受賞したオーストリアの作家エルフリーデ・イエリネクが受容に際し数々の誤解を受けてきた原因を探った。若きイエリネクはロラン・バルトの影響を受けて、脱神話化の作用を及ぼす新しい文体を確立したがこれは読者に抵抗感をもたらし、すぐには感情移入して読むことが難しい文体である。またイエリネクは自国の右翼的傾向に対して、新聞・雑誌に評論を書き続けて反政治的活動を行ってきた。この2つが主に誤解を受ける原因であるが、まさにこの2つがノーベル賞を受賞する最大の理由であることを明らかにした。			
2 論文名 : "Die Interkulturelle Problematik: Die Darstellbarkeit von Elfriede Jelineks Theatertexten"	単著	2006.12.00	In: Elfriede Jelinek: 'Ich will kein Theater' Mediale Über-schreitungen Hrsg. von Pia Janke Praesens Verlag, Wien (出版名)	エルフリーデ・イエリネクの演劇テキスト"Was geschah, nachdem Nora ihren Mann verlassen" hatte oder st ü tzen der Gesellschaften が1998年3月に日本で初演 (「東京演劇アンサンブル」)されたが、ドイツ人 Thirza Bruncken 女史の演出により、観客には理解し難い芝居上演に終わった。日本語を理解しない演出者の異文化理解に問題があり、また原作者イエリネクのテキストへの尊敬を欠いた演出に問題があったことを理解すると同時に、翻訳の難しさをも探求した。			
3 エルフリーデ・イエリネク 私なりの抵抗の仕方—政治活動と創作演劇テキスト『別れの言葉 (レ・ザデュエー)』をめぐって (p.124-136)		2008.10.05	『ドイツ文化を担った女性たち—その活躍の軌跡』ゲルマニス ティンネンの会編 (鳥影社)	1999~2000年はじめにオーストリアの内閣には極右政治家ヨルク・ハイダゲンが入閣していたが、エルフリーデ・イエリネクが、ハイダゲンの辞任の際の手記と、アイスキュロス (古代ギリシャ) のドラマ『オレスティア』を使用して、文学作品としてのドラマ『別れの言葉』を書いて、抵抗した経緯と作品の意義を論じた。			

その他					
1	書評『古い庭園』マリー・ルイーゼ・カシュニッツ書、田尻三千夫訳（同学者）	単著	2004.06.00	図書新聞	書評
2	ヴァルター・ラーテナウの項目翻訳	共訳	2004.09.00	ハンス・ユルゲン・シュルツ編『彼ら抜きでいられるか』新曜社	
3	イエリネクのノーベル文学賞によせて	単著	2004.10.14	東京新聞（夕刊）	新聞社の希望により、2000年9月、IVG国際学会が開催されたウィーンで、エルフリーデ・イエリネクに会見したときのことを中心に書いた作家紹介の記事である。
4	エルフリーデ・イエリネクのノーベル文学賞受賞		2005.01.00	同学社「ラテルネ」	イエリネクの近況をドイツ語教員向け雑誌に紹介した。
5	ノーベル賞で解放感作家イエリネク氏からのメール	単著	2005.02.07	朝日新聞（夕刊）	オーストリアの文学エルフリーデ・イエリネクの「人とその文学性」について、とくにノーベル賞受賞後の近況と反響について、作家本人とのメール通信に基づいて報じた記事である。
6	文学にみる非婚パートナーシップ 恐ろしい愛の深淵	単著	2005.03.04	東京新聞（夕刊）	「世界の文学」シリーズのドイツ篇に書いた記事、ドイツで1968年以降に増加した非婚パートナーシップを扱ったドイツ語圏文学の未邦訳の作品『フランツァの書』（I. バッハマン）、『わが名はガンテンバイン』（M. フリッシュ）、『出会ってカップルに』（P. シュナイダー）、『後世』（M. シュトレールヴィツ）を紹介した。
7	Reiko Tanabe : Schoene Koerper.Zur Erotik des Blicksin der deutschen Literatur mitte des 18.Jahr-hundert.	単著	2005.03.10	日本独文学会誌「ドイツ文学」第117号書評	田辺玲子氏の左記タイトルのドイツ語の著書（約170頁）において、18世紀ドイツ文学の作品に見られた、まなざしの客体としての「美しい男性身体」が、どのように消滅していったのかを追い、論評した。
8		単	2005.05.00	日本独文学会春季大会（早稲田大学）シンポジウム「エルフリーデ・イエリネクー Poetik und Rezeption "Elfriede Jelineks literarische methode und missverst ä ndnisse bei der Rezeption"	発表・質疑応答すべてドイツ語。内外の5人のパネリストの一人として口頭発表。
9	Zn Jelineks literarischer methode and missversta ndnissen	単著	2005.05.03	日本独文学会第59回春季研究発表会 ドイツ語シンポジウム「エルフリーデ・イエリネクー詩学と受容」 Elfriede Jelinek-Poetik and Rezeption	日本、オーストリア、ドイツから参加した5人のパネリストの1人として発表し討議を行った。2004年にノーベル文学賞を受けたオーストリアの文学者エルフリーデ・イエリネクは、フランスの構造主義哲学者・批評家ロラン・バルトの「日常神話の解体」理論の影響をうけて、新しい文体を編み出して長編小説を書いている。しかしこれを理解できない批評家たちが、誤解に基づき、論拠のない批評を書き、この作家本来の質を貶めていることを考察した。
10	「エルフリーデ・イエリネクと一人芝居ー極右政治家とファースト・レディのオーラを剥ぐ脱神秘化作用」	単	2006.10.14	東京新聞／中日新聞（夕刊） 「世界の文学オーストリア」	
11	Die interkulturelle Problematik: Die Darstellbarkeit von Elfriede Jelineks Theater texten	単	2006.10.21	エルフリーデ・イエリネク演劇テキスト・シンポジウム（Wien）"Mediale Ü berschreitungen"	ドイツ語による口頭発表と質疑応答
12	『カッサンドラ』クリスタ・ヴォルフ作、改訳	単著	2009.02.28	世界文学全集Ⅱー2（河出書房新社）『失踪者・カッサンドラ』	ドイツの作家クリスタ・ヴォルフの物語作品『カッサンドラ』（初訳中込啓子、恒文社、クリスタ・ヴォルフ選集第3巻、1997）が河出書房新社発行、池澤夏樹単独編集の世界文学全集所収となったのを機会に全面改訳をし、詳しい解説、年譜を付した。

13	『死と乙女 プリンセスたちのドラマ』エルフリーデ・イエリネク作	単著	2009.05.15	鳥影社	2004年にノーベル文学賞を受賞したオーストリアの作家エルフリーデ・イエリネクが受賞直前の1998年～2002年までに発表した演劇テキスト5編と新聞評論を翻訳した。5編ともインターテクスチュアリティと脱神秘化の手法で創作されている。
----	---------------------------------	----	------------	-----	--

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1971.04.00	～	現在	日本独文学会会員（平成11年度～平成14年度 学会誌編集委員）
2	1981.10.00	～	現在	オーストリア文学研究会会員
3	1983.05.00	～	現在	ドイツ文法理論研究会会員
4	1984.05.00	～	現在	日本独文学会ドイツ語教育部会会員（昭和60年度～昭和63年度 会報編集委員）
5	1989.05.00	～	現在	世界文学会会員
6	1990.04.00	～	現在	I V G（国際ドイツ語ドイツ文学学会）会員（1990年度大会 セクション司会者）
7	2004.07.00	～	2006.02.00	ドイツ大使館／ゲーテ・インスティトゥートドイツ連邦共和国レッシング翻訳賞およびゲーテ・インスティトゥート・マックス・ダウテンダイ・フェーダー賞審査員
8	2005.08.05	～	現在	日本文芸家協会会員
9	2005.11.05	～	現在	エルフリーデ・イエリネク研究センター研究委員会（本拠地ウィーン大学）海外委員
10	2006.04.00	～	2007.03.00	大学基準協会評価委員
11	2007.04.00	～	現在	財団法人ドイツ語学文学振興会ドイツ語学文学振興会発行『ひろの』編集長

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	西川 栄紀	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 Familiar Things－Japanese Culture in English－	共著	2008.02.14	南雲堂	頁数 78. コミュニケーション・スキルを効果的効率的にアップする双方向音声認識ソフト搭載の次世代教科書教材を開発した。英語力養成に不可欠の3学習方略要素である「英語が楽しい (意欲)」、「わかる (納得)」、「できた (達成感)」を満たせるよう、音声発信型ゲーム、ロールプレイ型ゲーム、シャドウイング型ゲーム、リピーティング型ゲームなどを網羅し、かつ学習スタイルや習熟度に合わせて易から難へ一貫性のあるタスクが選択できるよう工夫を施した。(共編著者 岸上英幹)		
論文						
その他						
1 新しいコミュニケーション文法		2005.06.00	講話 埼玉県立川口北高等学校	ネイティブスピーカーの言語感覚を醸成した英文法とはどのようなものかについて、従来の伝統文法 (学校文法) と比較し、単純で解りやすく、しかも実践的であることを説く。		
2 音声認識ソフト搭載のインタラクティブ演習教科書教材の開発		2007.11.02	発表 大東文化大学英語ワークショップ	従来のマルチメディア利用教材は一方向的言語活動が主であるが、双方向的音声認識エンジンの登場によって、コミュニケーション能力養成の教授・学習が可能となった。本格的な発見学習、問題解決学習などが効果的効率的に行えるのである。		

3	音声認識ソフト搭載の双方向的演習教科書教材の開発	2007.11.10	発表 映像メディア外国語教育学会	音声認識ソフトを搭載して、本格的な双方向的言語活動、効率的なリメディアル、定着強化を可能にする次世代教科書教材の開発を試みた。開発の視点・課題点・作成の方法、教材コンテンツなどについて説明し、作成した教科書の使用実演を行った。双方向音声認識ソフトは大小クラスサイズ、小学校英語、使える英語資格、個別指導などに汎用的かつ有用なソフトである。
4	中学英語学力向上の方策	2007.12.27	講演 七尾市教育委員会	地域の中学生の英語学力向上の鍵は、リメディアルとリエンフォースのための英語のコンタクト量である。このためには、教室の内外において生徒がその熟達度に応じながら、ふんだんに自ら学べる教材が求められる。とりわけ、スピーキング、ライティング、発音、文法をも自主的に学べる教材は強力である。このような教材は双方向音声認識ソフトを搭載することで作成可能であり、それは動機や意欲を高め、理解や納得の誘導に優れ、目標達成感を味あわせる工夫が凝らされているものである。地域の教員の手によってそのような教材を開発する手立てを説く。
5	高等学校英語一文法指導の革新(小中高大対応型)	2008.10.18	日本先端メディア外国語教育学会	言語感覚養成型教育文法を提唱する。理論的には言語習得における「気付き」の重要性に基づいて、脳内における言語使用ルールに対する認知判断を容易にするコミュニカティブなコンテキストの提示法を披露する。例えば、 I climb Mt Fuji. は頂上まで登ったことを伝えるのに対し、 I climbed on Mt. Fuji. は途中までしか登らなかったことを伝える。これは前者では、動詞脳電流が前置詞抵抗器がないので完全実現の意味が生起するのに対し、後者では前置詞抵抗器によって動詞脳電流が弱められ不完全実現の意味を招来することによる。従って、コミュニケーションの場では、前者に対する相手の反応としては god しか予測されないが、後者では
6	脳科学のコミュニケーション文法	2008.10.25	浦和学院高等学校	例えば、次のようなタスクを提示して、意味と形式の相関に気付かせたり、意識させることで言語ルール習得の効果効率をアップさせることができる。 shoot N/ shoot at N A: He shot the bear. / He shot at the bear B: Congratulations! / Umm. It escaped. Q1: 熊を(撃ち殺した/撃ち損じた)のはどっちかな。 Q2: どうして意味が違ってくるのかな。

III 学会等および社会における主な活動

1	1962.04.00	～	現在	金沢大学英文学会会員
2	1971.04.00	～	現在	石川県高等学校国際教育研究協議会事務局長・副会長を経て1987年より相談役
3	1974.08.00			鳥屋町教育委員会「鳥屋町放送利用学級」講演講師
4	1975.10.20			石川県教職員組合第一回地区合同教育研究会実行委員。発表者
5	1977.09.19			石川県教育センター「研修講座」発表者(英語使用)
6	1978.05.20			文部省「海外派遣通訳研修講座」発表者
7	1978.11.17			石川県教育センター「研修講座」発表者
8	1979.11.13			石川県立社会教育センター「国際交歓会」通訳者
9	1979.11.28			石川県高等学校教育研究会英語部会「総会」発表者
10	1980.02.10			金沢大学英文学会「総会」講演講師
11	1980.06.06			オーストラリア・キャンベラ大学「バイリンガル・セミナー」発表者
12	1981.01.18			石川県教育センター「長期継続研修講座」講師
13	1981.02.06			石川県教育センター「研修講座」講師

14	1981.05.16		石川県高等学校国際教育研究協議会「総会」講演講師
15	1981.06.25		石川県高等学校教育研究会英語部会「総会」講演講師
16	1981.08.00		石川県高等学校教育研究会英語部会「サマー・セミナー」指導講師
17	1982.10.00		鳥屋町教育委員会「文化教室」講演講師
18	1983.06.16		石川県教育センター「研修講座」発表者
19	1983.11.00		外務省・石川県「東南アジアの青年の船」会議通訳者
20	1983.11.20	～ 現在	七尾を世界に開く市民の会（代表：小田禎彦）実行委員・通訳者
21	1984.04.00	～ 現在	兵庫教育大学言語表現学会会員
22	1984.06.00		七尾市教育委員会「英国BBCテレビ放送取材番組ー日本の城下町七尾」翻訳者
23	1987.06.27		国際交流基金・石川県「フィリピン教育視察団」会議通訳者
24	1987.09.00		石川県高等学校海外教育研究協議会「総会」講演講師
25	1987.10.04		読売新聞社「高松宮杯第39回全日本中学校弁論大会石川県大会」審査委員長
26	1988.06.00		金沢大学教育学部附属中学校教育研究協議会指導講師
27	1988.06.00		国際交流基金・石川県「シンガポール教育視察団」会議通訳者
28	1988.08.00		石川県立金沢辰巳丘高等学校「一日英語セミナー」講師
29	1988.08.22		石川県高等学校教育研究会英語部会「英語サマーキャンプ」アドバイザー、パネリスト
30	1988.09.15		石川県・交際理解を深める婦人の会「地域婦人国際交流のつどい」講演講師
31	1989.10.20		石川県中学校英語教育研究会「総会」講演講師
32	1990.04.00	～ 現在	石川県国際交流クラブ参与
33	1991.01.27		北陸日米文化協会・石川県立社会教育センター「第29回石川県学生英語スピーチコンテスト」審査員
34	1992.02.00		文部省・福井県教育委員会「東海・北陸・甲信越静地区英語指導助手中間研修会」指導助言者
35	1992.04.00	～ 現在	石川県立社会教育センター「石川県生涯学習情報提供システム」講師
36	1992.04.00	～ 現在	大東文化大学外国語学会会員
37	1992.06.00	～ 現在	日本通信教育学会会員
38	1992.07.00	～ 現在	日本英語検定協会「実用英語技能検定準一級試験」面接試験委員
39	1993.04.00	～ 現在	埼玉県「埼玉県彩の国頭脳バンク」講師
40	1993.04.00	～ 現在	大学英語教育学会会員
41	1993.05.00		石川県国際交流協会・ユニーロセンター金沢「日本の教育制度」講演講師
42	1995.00.00		文部省「文部省社会通信教育教材審査会」審査員
43	1995.04.00	～ 現在	日本教科教育学会会員

44	1995.09.00		東松山市教育委員会「公開講座」講演講師
45	1997.11.20		石川県高等学校教育研究会英語部会「記念大会」講演講師
46	2000.05.00		東京都立隅田川高等学校「出張講義」指導講師
47	2003.02.28		石川県立羽咋高等学校「いしかわスーパーハイスクール英語科研修会」講演講師
48	2004.06.00		埼玉県立進修館高等学校「出張講義」指導講師
49	2004.10.16		大東文化大学語学研究所研「創立20周年記念公開講座」講演講師
50	2005.06.00		埼玉県立川口北高等学校「出張講義」指導講師
51	2005.06.00	～ 2007.03.00	映像メディア外国語教育学会会員（平成17年度副会長、平成18年度会長）
52	2006.06.00	～ 2008.03.31	石川県教育委員会「県立学校活性化特別委員会」副委員長
53	2006.06.00	～ 現在	石川県教育委員会「学力向上教育改革推進会議」委員
54	2007.04.00	～ 現在	日本先端メディア外国語教育学会会員（平成19年度～現在会長）
55	2007.10.06		読売新聞社・JNSA基金「高松宮杯第59回全日本中学校弁論大会東京都大会」審査委員
56	2008.04.00	～ 現在	石川県教育委員会「学力向上教育改革推進会議」委員
57	2008.04.00	～ 現在	石川県教育委員会「県立学校活性化特別委員会」副委員長
58	2008.06.23		石川県高校教育研究会英語部会総会「記念講演」講演講師
59	2008.10.20		読売新聞社・JNSA基金「高円宮杯第60回全日本中学校弁論大会中央大会」指導講師
60	2008.10.20		読売新聞社・日本学生協会基金「第58回全日本英語教育者会議」講演講師
61	2008.10.25		浦和学院高等学校「出張講義」審査委員
62	2008.12.13		読売新聞社・JNSA基金「皇太子殿下、高円宮妃殿下、典子女王殿下御臨席・高円宮杯全日本中学校弁論大会記念パーティ」陪席員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	教授	氏名	平林 幹郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)			2007.07.01		2007年7月1日～現在 外国語学部学生支援委員会委員長として退学の防止と授業改善に努める。		
			2008.03.31		授業評価実施委員会副委員長として適切な評価のあり方を検討。		
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
1 『英語の起源と古低地ドイツ語』	単著	2009.04.16	(株)現代図書発行 A5判、並製、全220頁。ISBN978-4-434-12213-2		2世紀に北ドイツおよびデンマークのユトランド (ユラン、キンパー) 半島に居住していたサクソン人、フリジア人、アングル人およびジュート人は、相互に礼拝・交際共同社会を形成し、そのためイングヴェオーネン特性と称される共通の言語的特徴を持っていた。既に「彼は」は he に、「我々に、を」は ū s と低地ドイツ語化していた。やがて3～6世紀になるとブリテン島へ移住して、これら4民族の言語が基盤となって古英語が形成された。その中心となる言語は古サクソン語である。言語史では古英語、古サクソン語、古フリジア語、古オランダ語をまとめて古低地ドイツ語と言う。write (書く) は古サクソン語および古フリジア語である。Middle Low German で書かれた北ドイツ、デンマークの写本の言語は、驚くほど英語に似ている。hadde (= had)、datt (= that)、komen (= come)、Wente it was ~ (というのは～だったから)、ik (私は、Chaucer が2回用いた)、de zecken (= the sick)、watt (= what)、moriigen (= morning)、sagen (話) help (助ける) 等がある。本書はドイツの大学への留学をも含めて、約10年に亘る著者の先駆的研究の成果です。		
論文							
1 古期ザクセン語、中期低地ドイツ語と英語との類似性について Zur Verwandtschaft des Altsächsisch, Mittelniederdeutsch mit dem Englisch	単著	2007.03.31	『外国語学会誌』第36号 (大東文化大学外国語学部発行)		ドイツ連邦共和国での研究成果の一部報告。古期ザクセン語は「大陸のサクソン語」と「イギリスのサクソン語」に分けられ、例えば Heliand の写本はミュンヘンとロンドンにある。この言語は古フリジア語等も含めて成長して後の英語となった。今日の英語の語彙、音韻を考える上で最も大切な言語である。中期低地ドイツ語にも英語との多くの類似性が見られる。		

2	On the Rhetorical Expressions of G. Chaucer—European Poems and Aesthetics—	単著	2007.03.31	『大東文化大学紀要』（人文科学）第45号（英文）（大東文化大学発行）	14世紀のイギリスの詩人チョーサーの文章を文体論、美学から検討した論文。英文論文。また中期低地ドイツ語と類似した語彙にも言及した。内容的には2003年6月に日本中世英語英文学会東支部で口頭発表したものに基づく。
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1985.04.00	～	現在	日本言語学会会員	
2	1986.04.01	～	現在	日本英語学会会員	
3	1986.04.01	～	現在	日本中世英語英文学会および東支部会員	
4	2006.04.01	～	2008.03.31	大東文化大学「学生による授業評価」委員会副委員長	
5	2006.04.01	～	現在	日本英語音声学会会員	
6	2007.04.01	～	現在	日本音声学会会員	
7	2007.07.01	～	現在	大東文化大学外国語学部外国語学部学生支援委員会委員長（外国語学部長の依頼による）	

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	教授	氏名	望月 昭彦	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・(無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)			2001年3月から2007年3月まで。平成13年3月から毎月末の土曜日に筑波英語評価研究会を開催し、学部生、院生、現職の中学校、高校の英語科教師、本学及び他大学の教師にテスト論の理論の紹介、テストの作成方法の実践、中学・高校で行われた実際のテスト、TOEFLなどのテスト問題の検討など研究支援を行った。 (http://www16.plala.or.jp/modem_assessing/)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 中学校英語教科書、New Horizon English Course 1、同2、同3			東京書籍 笹島準一、望月昭彦 ほか多数。3冊の著作関係者の一員。2001～2006。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 中学校・高校への助言講師		2001.00.00	2001年から2006年まで毎年、11月最後の金曜日に開催される筑波大学附属駒場中・高等学校の教育研究会において中学校及び高校の英語科教師の公開授業及び、研究協議会のために助言講師を務めた。			
2) 「クローズテストと英語教育」		2005.00.00	筑波大学附属学校教育局の大塚英語教育研究会 11月例会 望月昭彦 2時間半の講演。(1)言語テストの流れー1910年代から現在までー、(2)言語能力に対する Bachman and Palmer (1996)の枠組み、(3)クローズテストの種類と特徴、(4)クローズテストの問題点、(5)クローズテストの利用法について実際のテストを聴講者に示しながら話した。			
3) 「英語コミュニケーション能力を測るテスト(コミュニケーション・テスト)はどのように作ったらよいか、又、どのように評価したらよいかーライティング能力とスピーキング能力についてー」		2006.00.00	平成18年度つくば市教育研究会英語教育研究部夏季研修会つくば市豊里庁舎2F 研修室 望月昭彦 2時間 現職の中学校の英語科教師を対象に学力の測定法、ライティングテスト及び、スピーキングテストの作成法を紹介し、評価をどのようにすべきかを話した。			
4) 「コミュニケーション・テスト」		2006.00.00	平成18年度プレ・カレッジ講座。県立土浦第二高等学校 望月昭彦 2時間。高校生を対象に、英語学力とは何か、どのように測定したらよいかを話した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 文部科学省の科学研究費補助金採択状況		2003.00.00	平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書『小・中・高一貫性にもとづく教科・教科外のカリキュラム開発研究』、課題研究番号 15330184、1480万円。(研究代表者 人間総合科学研究科教授・桑原 隆)に途中から研究分担者として参加した。平成15-16年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))『中学校と高校における意味中心のライティング指導が英作文の質及び量に及ぼす影響』課題番号 15520348、研究代表者として研究をまとめた。270万円。2003-2004。			
2) 日英・英語教育学会(JABAET)の紀要査読委員		2003.10.00	全国規模の学会誌の査読委員を務めている。(2003年10月～現在)			
3) 現職の中学校・高校の県教育委員会派遣の内地留学の現職教諭の指導		2004.10.00	2004年10月から2005年3月末まで半年間、県教育委員会から内地留学で派遣されたつくば市立竹園東中学校の英語教諭茂在哲司氏の研究指導にあたり、研修報告書『平成16年度後期内地留学研修ー実践的コミュニケーション能力の育成を図るライティング指導ー内容の一貫性を重視した指導を通してー』(1-127頁)を完成に導いた。			

4) 外国人研修生の指導	2004.10.00	2004年10月から1年間、韓国国費留学生イ・ウン・ギョン氏の研究指導にあたり、第25期外国人教員研修プログラム Final Report 25th In-Service Training Program for Overseas Teachers のための報告書「Learning English through Cooperation」(1-33頁)を完成に導いた。
5) 文部科学省の科学研究費補助金採択状況	2005.00.00	平成17～19年度科学研究費補助金基盤研究(C)『中・高・大の連携を考慮したデータ援助型英語学習と教材開発の研究』、課題研究番号17520367、280万円。(研究代表者 人間総合科学研究科助教授・久保田章)に研究分担者として参加した。
6) 英語教育学会の活動	2005.00.00	平成17年10月～19年9月。日英・英語教育学会(JABAET)の会長に選ばれ、同学会のために貢献した。
7) 文部科学省の科学研究費補助金採択状況	2006.00.00	平成18～20年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(一般)『中学・高校の日本人教師のための信頼性・妥当性の高いライティングの評価規準作成』課題番号18520423、研究代表者として研究を実施。平成18年度140万円、19年度130万円、20年度70万円 3カ年で総額340万円。
8) 博士課程の博士論文指導	2006.03.00	現代文化・公共政策専攻博士課程の学生のために研究指導教員として授業の他に、毎週、長時間にわたり、ゼミを実施し、指導生2人の指導を担当し、5年間指導を継続し、2006年3月にそれぞれ、無事に課程博士号を初めて同専攻から取得させることができた。 情報伝達・メディア論分野・小泉 利恵: Relationships Between Productive Vocabulary Knowledge and Speaking Performance of Japanese Learners of English at the Novice Level. (『日本人英語初級者における発表語彙知識とスピーキング・パフォーマンスの関係』) 情報伝達メディア論分野・清水真紀: Inference Generation Processes of Japanese EFL Learners: Effects of Questioning on Their Reading Comprehension.
9) 博士課程の博士論文指導	2006.04.00	現代文化・公共政策専攻博士課程5年生の指導生・印南洋氏が4年次に学術振興会・特別研究員の資格を取得することが可能になるように指導し、平成18年4月から2カ年、特別研究員の資格を得た。毎週、長時間にわたり、ゼミを実施し、同氏の指導を担当し、5年間指導を継続し2007年3月に The Effects of Task Types on Listening Test Performance: A Quantitative and Qualitative Study (タスク形式がリスニングテストパフォーマンスに及ぼす影響: 量的および質的分析を通じて) というテーマで課程博士号を取得させることができた。
10) 日本英語検定実用英語技能検定試験面接委員	2008.06.00	英検の第2次試験の面接委員を勤めた。(1967年～2008年6月定年まで)

II 研究活動

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書 1 『中学校と高校における意味中心のライティング指導が英作文の質及び量に及ぼす影響』	共著	2005.00.00	平成15-16年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)研究成果報告書 課題番号15520348、筑波大学	平成15-16年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号15520348、代表者筑波大学・人文社会科学部教授・◎望月昭彦、4～5頁、6～22頁、23頁、23～25頁、28～31頁、31～39頁、69～72頁、73頁、73～77、77～84頁、118～119頁、120～121頁、125～127頁、計68頁、(久保田章、磐崎弘貞、望月昭彦の3人で131～160頁)、研究代表者として平成15～16年度の2カ年にわたりライティングの指導法について、意味中心-パラグラフ・ライティングの指導法、「ただひたすら多く書かせる」指導法、「読み話し書く」総合的指導法の3指導法を中学校、高校それぞれ11週間にわたり実施し、その結果をまとめた。「1章はじめに」4～5頁、「2章先行研究」6～22頁、「3章、中学校の場合」の「3.1 仮説と研究質問」23頁、「3.2 実験方法」23～25頁、28～31頁、「3.3 結果」31～39頁、「3.4 考察」69～72頁、「4章高校の場合」の「4.1 仮説と研究質問」73頁、「4.2 実験方法」73～77、「4.3 結果」77～84頁、118～119頁、「4.4 考察」120～121頁、「5章結論」125～127頁、「付録」(131～160頁の3分の一)を執筆。(共著者:久保田章、磐崎弘貞) A4判、総頁160頁

2	〔理論編〕第3章「書くこと」の指導の評価	分担執筆	2005.00.00	中学校英語科教育実践講座、ニチブン	1「書くこと」の評価項目と評価方法、2「書くこと」の評価規準・基準の設定、3「書くこと」の評価結果のフィードバックの3項目からなる全1章を執筆。1では、「書くこと」の理論研究の成果を解説し、中学の教科書を例に観点別評価の例を挙げている。2では、総合評価と分析的評価の2つの方法を説明し、平成8～10年度の科研による成果報告書からWeirに基づく「3部構成枠組」の作文テストを例に挙げて説明している。最後にフィードバックの効果、方法、正確さと流暢さについて述べている。160-177頁。総頁数238頁の中の18頁を執筆。(共著者：根岸雅史、平田和人、小串雅則、望月昭彦他)
3	発表能力の発達と中学・高校における連携指導ーライティングの意味の一貫性についてー	単著	2006.00.00	平成15～17年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書『小・中・高一貫性にもとづく教科・教科外のカリキュラム開発研究』、課題研究番号15330184、研究代表者 筑波大学・人間総合科学研究科教授・桑原 隆	附属中学校、附属高校は、共通して、発表能力を伸ばすことに力を入れている。まとまりのある英語の文章を書く活動を年1～2回と3回以上を合計すると、中学校、高校共に6割、8割それぞれ行われており、富田(2002)の調査結果より、かなり高いことがわかる。英語の自己表現をしたいという願望は中学校、高校共に約9割もおり、動機が高く、高校では専門的な仕事に間に合う程度まで自己表現の力を付けたいと思っている。ライティングの要素について、中学・高校共に、語順、文法的正確さ、綴り・句読点、単語の選択の文レベルの関連事項に約7割の生徒が注意しているのに対し、内容の適切さ、目的、段落構成、意味の一貫性の談話レベルの関連事項は、文レベルの関連事項ほど高くなく、中学・高校共に殆ど同じ傾向であるが、「目的」についてだけ、高校の方が減ってきている。段落の構成について、注意をしていない生徒が中学・高校ともに約3割もいるので、指導が必要と思われる。130～159頁を執筆。(共著者：桑原 隆、高橋健夫、田中統治、望月昭彦ほか) A4判、総頁246頁
4	『新しい英語教育のためにー理論と実践の接点を求めて』	共編著	2007.00.00	成美堂	「大学におけるプロセス・ライティング」215～228頁。本論文では、筑波大学人文学類の英語専攻の学生対象の科目でのプロセス・ライティングの指導を(1)プロセス・ライティングの理論と歴史、(2)筆者の大学におけるプロセス・ライティングを使った授業の紹介、(3)2002年度の1年間のプロセス・ライティングの指導の結果をプレ作文、ポスト作文の内容の一貫性について総合的評価及び文法的正確さ、流暢さについて分析的評価を行い、ノンパラメトリック検定及び、効果量 Hedge's g による分析を行った結果、(1)内容の一貫性が向上したこと、(2)文法的正確さの4指標の全てで向上が認められたこと、(3)流暢さの5指標全てで向上が認められたことが分かった。「クローズテストと英語教育」256-269頁。本論文では、(1)言語テストの流れー1910年代から現在まで、(2)言語能力に対するBachman and Palmer (1996)の枠組み、(3)クローズテストの種類と特徴、(4)クローズテストの問題点、(5)クローズテストの利用法を述べている。「英語教師としての歩み」329～333頁、筆者が定年で退職するにあたり、筆者の英語教師としての歩みを高校教師時代、留学と最初の単著執筆の時代、大学教師の時代の3つに分けて振り返って見たものである。◎望月昭彦・久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司(共編著)。筆者は33頁担当した。B5判、総頁335頁
5	中学・高校・大学における連携ーライティング指導ー	単著	2008.03.19	平成17年度～19年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書『中・高・大の連携を考慮したデータ援助型英語学習と教材開発の研究』課題番号：17520367	ライティングについての先行研究の検討を挙げ、次に、中学校、高校の生徒がライティングについてどのような意識を持っているかを調べるために、平成15年度～17年度、文部科学省の科学研究費補助金・基盤研究(B)(研究代表者 筑波大学人間総合科学研究科教授 桑原隆)『小・中・高一貫性にもとづく教科・教科外のカリキュラム開発研究』課題研究番号15330184で筑波大学附属中学校2年生を対象に実施したライティングについてのアンケート調査、及び、同大学附属高等学校2年生を対象に実施したライティングについてのアンケート調査、更に、大学生のライティングについての意識を調べるために筑波大学人文学類で実施した授業「対照言語学演習」でのアンケート調査で目立った点を述べた。最後に、それらのアンケート調査に基づいて中・高・大の連携の点から中学・高校・大学における今後のライティング指導に必要とされる事柄を提案している。研究代表者 筑波大学・人文社会科学研究科・准教授・久保田章。PP.70-97頁を執筆。A4判

6 『新しい英語教育のために—理論と実践の接点を求めて—』再版	共編著	2008.10.20	成美堂	<p>1. 「大学におけるプロセス・ライティング」 215～228 頁 2. 「クローズテストと英語教育」 256～269 頁 3. 「英語教師としての歩み」 323～328 頁 合計 34 頁を執筆。 ◎望月昭彦・久保田章・磐崎弘貞・卯城祐司（共編著）、B5判、総頁 335 頁。 2007 年に刊行したものの配列を変えて再版したものである。</p>
7 『中学・高校の日本人教師のための信頼性・妥当性の高いライティングの評価規準作成』	共著	2009.03.30	平成 18 年度～20 年度文部科学省 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 課題番号 18520423	<p>「Interview Validation of writing tests and problems of CEFR: An interview with Dr. Cyril J. Weir and Dr. Anthony Green」 15 頁（20～34 頁）。筆者が 2007 年 9 月中旬、科学研究費による海外出張で連合王国を 10 日間、Bedfordshire 大学及び Oxford 大学を訪問したが、本論文では筆者と Bedfordshire 大学の Weir, C. 教授、Green, A. 准教授との会談で扱われた妥当性検証、欧州共通枠組の問題などを録音したものを書き起こしたものである。「妥当性概念の変遷」 15 頁（4～19 頁）。本論文では、最初に、日本の中学・高校で英語教育を担う英語教師及び、教師志望の学生を対象とする英語科教育法テキストの評価論中の妥当性がどのように扱われているかを見、次に、妥当性についての概念の変遷を 1990 年代から 2008 年までで代表的な論を取り上げて述べている。最後に、結論として、実証主義的（心理測定的）研究が LTRC の 16 年間の歴史を振り返り 66% も占めているが、この立場と反対の解釈主義的研究が勃興し始めていることに注目したいこと、英語教育学を専門とする者は、実証主義的な研究方法をある程度身につけることが求められるが、更に本論文で紹介した解釈主義的研究方法も知っておきたいと結んでいる。「理論編 Shaw & Weir (2007) の英語ライティングテストの妥当性検証枠組」 28 頁（65～92 頁）。本論文では Shaw & Weir (2007) にしたがって、2. 妥当性検証枠組を示し、3. テスト受験者の特徴、4. 認知的妥当性(Cognitive validity)、5. 文脈妥当性(Context validity)、6. 採点妥当性(Scoring validity)、7. 結果妥当性、8. 基準関連妥当性を順に紹介し、最後に 9. 結びで Shaw and Weir (2007) の枠組について、3 つのことを述べている。第 1 に、従来の妥当性の用語と今回の用語とは若干異なる。文脈妥当性、採点妥当性は従来の用語を使えば、内容妥当性、信頼性であるが、Shaw and Weir はそれらの上に概念をそれぞれ拡大させている。第 2 に、Messick (1989,1994,1996) の妥当性検証枠組を 6 つの面に分けて検討して証拠を集める方法と Shaw and Weir の妥当性検証枠組で証拠を集める方法が大分異なるようだ。Messick の版では、MTMM、因子分析、構造方程式モデリング（SEM）など、高度の統計処理方法が多く使われるのを目にしてきたが、Shaw and Weir (2007) は必ずしもそのようなことは必要としないようだ。第 3 に、Shaw and Weir は、妥当性検証について認知的な過程を特に大事しており、彼等の妥当性検証枠組で綿密に受験者の特徴、タスクの内容と受験者の応答、タスクと受験者の相互交渉を細かに記述すること、換言すれば質的分析を大事にしている感じである。分析の部。27 頁。筆者は、タスク実現度 I,II を多数の研究者の先行研究を研究した結果、提案した評価尺度で評定者間信頼性が 0.9 を超える高いものになった。他の分担研究者、研究協力者で指標を使い、7 つの高校の約 650 名の分析の部、3 つの中学の約 450 名の分析を行った。筆者は、タスク実現度 I,II と熟達度テストの相関を扱った（1～3 頁、93～107 頁、144～145 頁、146～158 頁、199～207 頁）共著者◎望月昭彦、久保田章、鈴木基伸。筆者の執筆の合計頁数は、100 頁。A4 判、総頁 266 頁。</p>
論文				

1	Effectiveness of the Cloze Test for Beginning Japanese EFL Learners in Comparison with the Discrete-point Test and 4 Communicative Tests.	単著	2004.00.00	『言語文化論集』65号、筑波大学・現代語・現代文化学系	望月昭彦 A5判1~31頁 平成8~10年度科研による研究(課題番号08680285、研究代表者望月昭彦)の一部として、中学3年生460名を対象として標準型クローズテスト(C L)の有効性を熟達度テスト、4つの(L、R、S、W)コミュニケーション・テスト、アンケートとの比較で分析したものである。分析の結果、(1)CLは、困難度、弁別度、信頼性、妥当性、作成の容易さ、採点の容易さ、解釈の容易さの点で優れていること、(2)CLは、熟達度テスト、及び、W、R、L、特にRテストとの相関が高いこと、(3)CLは、上位群、下位群をよく弁別していること、(4)CLは、表面妥当性が高いことがわかった。
2	「さあ、テストを作ろう!第1回熟達度テストを作る」	単著	2004.05.00	『STEP 英語情報』7巻5号、日本英語検定協会	望月昭彦 50-53頁、計4頁(2段組) 中学校、高校の英語教師、教師を目指す大学生を対象として理論だけでなく実例を挙げながらテスト作成で留意すべき事柄を取り上げ、明日の学校のテスト作成に役立つものを念頭に置き、6回の連載記事の1回目として英語の熟達度テストを取り上げた。信頼性、妥当性、実用性というテスト作成の3要件を述べ、Weir(1993)の「3部構成枠組」を基にした「英語基礎学力テスト」と「英語学力構成要素表」の実例を挙げ解説している。A4判4頁(2段組)
3	「さあ、テストを作ろう!第2回コミュニケーション・テストを作る」	単著	2004.07.00	『STEP 英語情報』7巻6号、日本英語検定協会	望月昭彦 50-53頁、計4頁(2段組) 連載第2回目の論文で、コミュニケーション・テスト(CT)とは何か、またどんなテストがCTと言えるのかについて、過去の研究から共通の特徴を5つにまとめた。次に4つの技能のうち、発表能力の中のライティングの知識・技能を測るCTをWeir(1993)の「3部構成枠組」に基づいて作成する方法を述べ、中学校3年生のライティング・テストの実例を挙げた。次に、テストの解答をどのように評価したらよいかを述べ、実際の評価例を挙げた。A4判4頁(2段組)
4	「さあ、テストを作ろう!第3回スピーキング・テストを作る」	単著	2004.09.00	『STEP 英語情報』7巻7号、日本英語検定協会	望月昭彦 50-53頁、計4頁(2段組) 連載第3回目の論文で、スピーキング能力を測るテスト、即ちスピーキング・テスト(Speaking Test、STと略)の歴史的概観、問題点、②そのSTをどのように作成したらよいか、③テストを実施後どのように評価したらよいか、④実際の評価例、⑤研究用に分析する際の分析単位について述べている。A4判4頁(2段組)
5	「さあ、テストを作ろう!第4回リスニング・テストを作る」	単著	2004.11.00	『STEP 英語情報』7巻8号、日本英語検定協会	望月昭彦 48-51頁、計4頁(2段組) 連載第4回目の論文で、①リスニング能力を測るテスト、即ちリスニング・テスト(Listening Test、LTと略)の歴史的概観、問題点、②そのLTをどのように作成したらよいか、③テストを実施後どのように評価したらよいか、④実際の評価例について述べている。A4判4頁(2段組)
6	Deletion of the Smaller Half in the C-Test - Does it Work?	単著	2005.00.00	『外国語教育論集』第27号、筑波大学外国語センター	Akihiko Mochizuki B5判49-63頁 修正型クローズテストの中のCテスト(CT)は、Raatz & Klein-Braley(1981)が考案し、2語目の後半の大きめの部分(1字多く)を抜いて作成するが、認知的に負荷を平等にするためにこの後半部分を1字多く又は少なくを交互にして100項目のCテスト(短縮版Cテスト)を物語文を使って作成した。熟達度テスト及び、CTと短縮版CTの3種類を私立理系の大学と国立大学の1年生計136名に実施し、信頼性、困難度、弁別度、内容語・機能語の割合、熟達度テストとの相関の点から比較した。その結果、CTの方が短縮版Cテストより弁別度が高く参加者の熟達度よりよく反映していることがわかった。今回の実験では、CT、短縮版Cテストは、物語文を使用したのが今後は解説文を使った追試験の必要がある。
7	「さあ、テストを作ろう!第5回リーディング・テストを作る」	単著	2005.01.00	『STEP 英語情報』8巻1号、日本英語検定協会	望月昭彦 50-53頁、計4頁(2段組) 連載第5回目の論文で、受容能力であるリーディングについて、次の4項目、①リーディング能力を測るテスト、即ちリーディング・テスト(Reading Test、RTと略)の歴史的概観、問題点、②そのRTをどのように作成したらよいか、③テストを実施後どのように評価したらよいか、④実際の評価例について述べている。A4判4頁(2段組)

8	「さあ、テストを作ろう！第6回中学校・高校の実際のテストを検討する」	単著	2005.03.00	『STEP 英語情報』8巻2号、日本英語検定協会	望月昭彦 46-49頁、計4頁(2段組) 連載第6回目の論文で、連載の最後の記事であるので、まとめとして、①テスト作成の手順、②作成されたテストの妥当性は高いか、③コミュニケーションな活動を反映したテストであるかについて中学校・高校の実際のテスト例をあげて上記の事柄を検討している。A4判4頁(2段組)
9	The Effectiveness of Three Kinds of Cloze tests-MC, CT and CL-in Terms of Eight Perspectives.	単著	2006.00.00	『外国語教育論集』第28号、筑波大学外国語センター	Akihiko Mochizuki B5判121-138頁 100項目の標準型クローズテスト(C L)、100項目の選択式クローズテスト(MC)、100項目のCテスト(C T)の3種類クローズテストを1つの同一のテキスト内に組み込んだ300項目のテストを作成し、3種類のクローズテストの内、どれが8つの視点-困難度、弁別度、信頼性、妥当性、作成の容易さ、採点の容易さ、解釈の容易さ、参加者の印象-から熟達度テストとして有効かを調査した研究である。熟達度テスト、及び、これらのクローズテストを3つのパターン(MC-C T-C Lなど)で順序を変えて大学3年生、2年生の計80名に実施した。使用したデータは72名。その結果、MCとC Tが同列で第1位、C Lが3位となった。MCは、熟達度を測るテストとして有望だと思われる。
10	Which is the most effective of three kinds of cloze tests -MC, CT and CL-in Terms of Eight Perspectives?	単著	2007.00.00	『外国語教育論集』第29号、筑波大学外国語センター	Akihiko Mochizuki B5判1-16頁 8つの視点-困難度、弁別度、信頼性、妥当性、作成の容易さ、採点の容易さ、解釈の容易さ、参加者の印象-から、標準型クローズテスト(C L)、選択式クローズテスト(MC)、Cテスト(C T)の3種類クローズテストのうちどれが最も有効かを調べることを目的として、100項目の標準型クローズテスト(C L)、100項目の選択式クローズテスト(MC)、100項目のCテスト(C T)の3種類クローズテストを1つの同一のテキスト(物語文)内に組み込んだ300項目のテストを作成し、2003年1月に関東地方の国立大学と私立理系の大学の学生計145名を対象として、これらのクローズテストと英検の問題を使った熟達度テストを実施した。上述の8つの視点からの分析の結果、熟達度を測るには、Cテストが最も適切で、次に、選択式クローズテスト、標準型クローズテストが同列の状態が続くことが分かった。
11	プロセスライティングの有効性-大学生の場合-	単著	2008.03.10	『帝京大学文学部教育学科紀要』第33号	2002年度の授業で取り入れたプロセス・ライティングの指導によって内容の一貫性において向上が見られ、又、正確さ及び流暢さの点で概ね向上したと言える(望月他、2007 pp.215-228参照)。2006年度のプロセス・ライティングの指導では、熟達度テストも実施し、2002年度の分析項目より増やして、分析した。その結果、2006年度も内容の一貫性で向上したこと、又、正確さ及び流暢さの点でも向上したことが確認された。熟達度と流暢さ、正確さ、一貫性との相関は、中程度あること、熟達度が上昇すると一貫性も中程度、上昇することが示された。また、アンケート調査により、談話レベルの作文を書く際に必要な要素、即ち、構成、一貫性、目的、内容の適切さ、語彙の選択など、に注意を払うようになったことがわかった。A4版、2段組、37~47頁。
12	高校における英語ライティング・テストの妥当性検証-Shaw and Weir (2007)の枠組を基にして抽出100名のデータ	単著	2009.01.31	『語学教育研究論叢』第26号	本研究は、平成18~20年度科学研究費補助金(C)(一般)課題番号18520423研究代表者望月昭彦「中学・高校の日本人教師のための信頼性・妥当性の高いライティングの評価規準作成」の3年目の研究の中の高校生抽出100名分の分析結果をShaw and Weir (2007)の妥当性検証枠組を使って述べている。関東地方の国立高校2校、県立高校2校、東北地方の県立高校1校、北海道の道立高校1校、中部地方の国立高校1校の計7校、650名を対象に2007年6月から7月までの期間に英語熟達度テスト(文法、語彙、作文整序問題、読解、計52問、マーク式解答45分)、ライティング・テスト(文レベルの問題3問(Q1.1,Q1.2,Q1.3)を10分間、談話レベルの問題2問を15分ずつ、30分、記述式、合計40分)(WTと略)を実施した。研究代表者が評価基準、記述子、模範例を作成した後、研究会で議論しまとめ、2007年10月から2008年2月まで研究会で評価者訓練を行った。熟達度テスト、WTの両方のテストを受験した517名のデータを使い、SPSS12.0Eにより分析を行った。本研究では、この中から100名のデータを無作為抽出し、妥当性検証の結果を述べたものである。総計29頁のうち、筆者が22頁を執筆した。©望月昭彦、長橋雅俊、A5判総頁455頁

その他					
1	「意味の一貫性を重視したライティング指導－中学生の場合」	単著	2004.00.00	第12回筑波英語評価研究会	望月昭彦
2	「英語力を問い直す－筑波大学の英語検定試験－」	単著	2004.00.00	第10回日英・英語教育学会(JABAE T)研究大会(会場:工学院大学新宿校)のシンポジウム「英語力を問い直す－中・高・大のケース－」	望月昭彦 大学側の提案者として口頭発表又、司会者も務めた。
3	編集後記	単著	2004.00.00	『言語文化論集』第63号、第64号、第65号、筑波現代語・現代文化学系紀要	望月昭彦 各々、最後の頁。
4	学会発表予稿集、「意味中心のライティング指導が英作文の質及び量に及ぼす影響－中学生の場合－」	共著	2004.08.00	『第30回全国英語教育学会長野研究大会発表要綱』全国英語教育学会事務局	◎望月昭彦・久保田章 B5判 pp.60-63 平成15-16年度文部省科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)課題番号15520348の研究の中の中学生のデータを分析した結果が学会の予定稿に掲載された。
5	学会発表予稿集、「ライティングにおける意味重視の指導、量重視の指導、「読む・話す・書く」を総合する指導の3指導法の比較－中学生の場合－」	共著	2005.00.00	『第31回全国英語教育学会札幌研究大会予稿集』全国英語教育学会事務局	望月昭彦・久保田章 B5判 pp.162-165
6	「教育改善事業実施概要」	共著	2005.00.00	『「TOEFL-ITPの試験的实施データによる学内英語検定試験の改善」報告書』、筑波大学外国語センター	◎望月昭彦、平井明代、久保田章、磐崎弘貞 4-6頁
7	「筑波大学の英語検定試験とTOEFL」	共著	2005.00.00	『「TOEFL-ITPの試験的实施データによる学内英語検定試験の改善」報告書』、筑波大学外国語センター	◎平井明代、望月昭彦、久保田章、磐崎弘貞 7-19頁
8	「学内検定試験の課題と展望」	共著	2005.00.00	『「TOEFL-ITPの試験的实施データによる学内英語検定試験の改善」報告書』、筑波大学外国語センター	◎望月昭彦、平井明代、久保田章、磐崎弘貞 20-22頁
9	学会発表予稿集、「3種類のクローズテスト(Cloze、MC、C-Test)の中で熟達度テストとしてどれが最も効果的か?－困難度、弁別度、信頼性など8つの観点から－」	単著	2006.00.00	『第32回全国英語教育学会高知研究大会発表予稿集』全国英語教育学会事務局	望月昭彦 B5判 pp.523-526
10	「3種類の選択式クローズテストにおける選択肢の有効性」	単独	2006.00.00	日英・英語教育学会第2回地方研究会関西地方研究会。同志社女子大学ジェームズ館	望月昭彦 口頭発表

11	「3種類のクローズテスト (Cloze、MC、C-Test) の中で熟達度テストとしてどれが最も効果的か?—困難度、弁別度、信頼性など8つの視点から—」	単独	2006.00.00	第32回全国英語教育学会高知研究大会 (会場 高知大学)	望月昭彦 口頭発表
12	「選択式クローズテストの選択肢と熟達度の関係」	単独	2006.00.00	第34回筑波英語評価研究会	望月昭彦 口頭発表
13	「英語能力・資格試験の特徴をめぐって—試験の理念・内容・利用法を考える CEFの立場から—」	単独	2007.00.00	第13回日英・英語教育学会研究大会 (会場 成蹊大学)	望月昭彦 提案者として発表、又、司会も務めた。
14	FDT報告 「選択必修2単位「教育英語演習I」」	単独	2007.10.29	帝京大学FDT委員会	帝京大学教育学科で2007年の前期に担当した2年生対象の英語の専門科目「教育英語演習I」を、FD活動の一環として実施した学生からの授業評価の結果を使って、Plan-Do-Check-Actのサイクルの点から授業を分析して口頭発表した。
15	平成19年度教育学科「学科別 Sub-T」活動報告	単独	2008.03.17	帝京大学FDT委員会	帝京大学の全学FDT活動として、教育学科長から依頼を受けて、1年間の教育学科の活動のまとめを口頭発表した。教育学科の活動として、授業の実践の積み上げを勉強会の形で教師同士で発表しあうことを教育学科教員会議で決定したので、教育学科では2007年度は授業「総合演習」を扱うこととして、2007年9月初旬と2008年1月中旬の2回、それぞれ、約2時間程度、授業研究発表会を開催したこと、同発表会で、それぞれ、4名の教員が担当する授業について、Plan-Do-Check-Actのサイクルの点から授業内容を発表して、その後、活発な質疑応答がなされたこと、また、教育学科が学生に求める最低限の基準であるMR (Minimum Requirements) の原案が教務係から提案されたので、作成に向けて、教育学科教員会議で審議を開始したことを口頭発表した。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1977.08.00	～	2008.03.00	中部地区英語教育学会会員 (平成4年—9年運営委員)
2	1989.04.00	～	2007.08.00	鳴門教育大学英語教育学会会員
3	1990.10.00	～	現在	大学英語教育学会 (JACET) 会員
4	1992.08.00	～	2007.03.31	全国語学教育学会 (JALT) 会員
5	1993.10.00	～	現在	日英・英語教育学会 (JBAET) 会員 (平成15年10月から運営副委員長、平成17年10月から19年9月会長、平成19年10月から現在、顧問。)
6	1998.07.00	～	現在	日本言語テスト学会会員 (平成12年—13年度 研究助成委員会委員長)
7	2001.09.01	～	2007.03.31	IRT (項目応答理論) 研究会会長
8	2003.03.29	～	2007.03.31	筑波英語評価研究会会長
9	2008.02.21	～	現在	望友会会長
10		～	現在	関東甲信越英語教育学会会員
11		～	現在	全国英語教育学会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	教授	氏名	山崎 俊次	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 『Studies in English Corpus Linguistics』 vols. IX			2008.03.31	大東文化大学 大学院生の修士論文と学部生のゼミ論文を編集して毎年発刊し、コーパス言語学の発展に寄与している。現在 vol.IXまで発刊している。			
2) 「英語コーパス研究」			2008.03.31	大東文化大学 毎年山崎特別ゼミの学生に「英語コーパス研究」に関して、コンピュータ利用を促進し、さらにコーパス言語学を進める目的で独自HP作成をさせてインターネット上に公開している。1999年以來毎年継続して学生のHPを公開中。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「外国語学部の取り組み」			2007.10.17	北海道文教大学 外国語学部、特に英語学科での入試対策、カリキュラム改革、留学、さらに新しいヨーロッパ二言語コースについて講演。北海道の大学との地域差はあるが参考になる示唆をもらったと評価される。			
2) 「多言語教育と自律学習」			2008.01.26	京都大学 英語学科で実施している英語コースに加えて、新しく独仏が同時に学べる英独・英仏コースのあるヨーロッパ二言語コースについて講演して多くの質問を受け、その後問い合わせが英語学科に多く来る。			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 The Use of Adjectives in Modern Written English: A Study of their Distribution in Fire Corpora.	単著	2004.12.08	ヴィクトリア大学 (ニュージーランド)	未刊行博士論文。イギリス、アメリカ、ニュージーランド英語における書きことばコーパスを利用して形容詞の分布を言語解析した論文。			
その他							
1	単著	2007.04.00	ICAME Journal NO.31 ベルゲン大学 (ノルウェー)	英語コーパス学会 10周年記念論文集である Junsaku Nakamura, Nagayuki Inoue and Tomoji Tabata(eds.) English corpora under Japanese eyes, Amsterdam and New York; Rodopi, 2004について ICAME Journal 編集部から書評を依頼されて書いたもの。			

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1988.11.01	～	現在	日本英語学会会員（2003年4月～現在 評議員）
2	1993.05.01	～	現在	オーストラリア学会会員
3	1993.05.01	～	現在	日本音韻論学会会員
4	1995.04.01	～	現在	英語コーパス学会運営委員（1997.4～現在）、東支部長（2000.4～2004.3）、学会誌論文審査員・編集委員（2002.4～2007.3）、事務局長（2007.4～2009.3）、副会長（2009.4～現在）
5	1996.05.01	～	現在	日本ニュージーランド学会会員（2006.6～現在 理事）
6	1996.05.15	～	現在	ICAME (International Computer Archive of Modern and Medieval English)年次大会に概ね毎年参加
7	2003.03.28			Corpus Linguistics 2003 General Committee（国際運営委員）として参加（ランカスター大学、英国）
8	2009.04.01	～	現在	きらめき市民大学副学長（東松山市役所地域生活部文化まなび課）

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	教授	氏名	渡辺 良彦	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							

<p>1 On the Relation between the choice of That or Which and the Articles The and A in 'Complement' Relative clauses.</p>	<p>単著</p>	<p>2004.12.00</p>	<p>日本英語学会 English Linguistics 21 : 2, pp.454-466.</p>	<p>本稿では、これまであまり取り上げられることのなかった問題として、(1) (2)にあるような関係節構文において、関係詞 that (および ϕ) と which の選択が、先行詞名詞の冠詞 the/a の選択とどのような関係にあるかを扱う。(1) <i>She is not the cheerful woman { (that) /* who } she was before she married.</i> (2) <i>His letter (December 5) implied the Soviet Union is a "fascist state" which, of course, it is not.</i></p> <p>(1) (2) の関係節構文では、いずれも関係節内の空所 (gap) (それぞれ、<i>she was, it is not</i> の後ろの位置のこと) が be の補語であり、かつ、先行詞+関係節から成る名詞句全体も be の補語となっているという特徴がある。本稿ではこれらを「補部関係節 (complement relative)」と呼ぶ。(1) の解釈は、「彼女は結婚前には <i>x kind of cheerful woman</i> であったが、現在はそれと比べて <i>the same kind of cheerful woman</i> ではない」という読みである。<i>x kind of woman</i> は空所の部分の意味である。<i>x</i> (変項) の値は与えられておらず、何でもよい。(2) は、「(手紙によれば) ソビエトは総称概念または種類としての「ファシズム国家」のひとつの具体例 (an instance) であるとされるが、実際にはソビエトはそのような総称概念 (種類) のいかなる具体例でもない」という読みである。この場合は、空所は「(ファシズム国家という総称概念の) いくつかの具体例 (some instances) のような意味を表すと考えられる。説明が求められるのは、(1) のような解釈では、関係詞は that または ϕ であって which は許されず、また、先行詞名詞の冠詞はは定性的 (definite) な the でなければならないが、一方の (2) では、冠詞は不定 (indefinite) の a であり、that の代わりに which が用いられて ϕ 関係詞は容認不可であるということである。関係詞 that (ϕ) /which の選択と冠詞の定・不定の選択との間になぜこのような関係があるのか。本稿での結論は以下になる。(1) の定性的なタイプの補部関係節では、that/ϕ の先行詞は総称概念 (種類) としての <i>cheerful woman</i> (範疇は <i>N'</i>) の部分であり、定冠詞の the が空所の <i>x</i> を束縛することによって「どんな種類の <i>cheerful woman</i>」かが具体的に定まる仕組みとなっている。つまり、<i>x</i> の値が決まれば <i>the cheerful woman</i> の解釈も決まるわけである。That は、先行詞と空所の <i>kind of cheerful woman</i> の部分が共に総称概念 (種類) であることを表す働きをしている。一方、(2) の不定的タイプでは、which は「分類」(classifying) 機能を果たすと考える。この点が that/ϕ との相違である。Which の先行詞は同じく総称概念 (種類) の部分ではあるが、関係節内の空所にはその総称概念を分類した結果の「具体例」(some instances of 'fascist state') が存在する。Which が持つとされる分類機能は、単純な叙述文にも見られる。たとえば、<i>Soviet Union is a fascist state.</i> では、補語は (単数では) 必ず不定の a を伴うが、これは総称概念 (種類) としての「ファシズム国家」が分類されてその具体例 (メンバーの一つ) となったからと考えられる。Which にこのような分類機能を認めると、なぜ、先行詞名詞が (2) のように必ず不定冠詞でなければならないかが説明される。このように、関係詞の that/ϕ と which の機能の違いと空所の要素の違いとから、(1) のタイプと (2) のタイプの補部関係節の解釈の相違が説明される。[レフェリー有]</p>
---	-----------	-------------------	---	---

2	時と場所の関係節における wh 関係詞 when/where と前置詞 +which の選択について	単著	2004.12.25	日本語学会『言語研究』第 126 号、pp.93-112	<p>本稿の目的は、多くの実例（以下では省略）に基づいて、時と場所の関係節における wh 関係詞 ((1a) (2a)) と前置詞 + which ((1b) (2b)) の使い分けについての原理を明らかにすることである (e は関係節内の空所 (gap) を表す)。(1) a.the day [when...e...] b.the day [on which...e...] (2) a.the street [where...e...] b.the street [on which...e...]</p> <p>結論的に言うと、wh 関係詞の場合は、関係節が先行詞の「属性」を定義する、つまり、関係節の内容は先行詞名詞の一般的特徴を描写し、同時にその名詞によって表される概念の適用範囲を限定する読みの場合には wh 関係詞が選択され、一方、先行詞名詞が既に定義されて (以下、「既定的」と呼ぶ)、関係節は偶発的付随的事柄を述べるだけの場合には前置詞 + which が用いられる。前者の「属性の定義と概念の適用範囲の限定」という点については、(3) A baker is a [person who bakes bread] .のような定義文に見られる関係節の働きと同様と考える。(3) の関係節は通常の制限関係節と異なり、先行詞の person を定義づけて、person によって表される概念の適用範囲を (全体で総称概念としての “baker” の意味になるように) 限定しているので、関係節による定義がないと person だけではその指示対象が定まらないという特徴がある。したがって、(3) の関係節の空所は、制限関係節の場合のような個体を変域とする変項 x とは解釈されない。なぜならば、person who bakes bread 全体は baker のことを指すからである。一方、前置詞 + which の場合の ((1b) (2b)) では、先行名詞は「既定的」であるので関係節がなくともそれ自体で指示物が定まっている。本稿では、(1a) (2a) の (限定詞を除いた) day when...や street where...全体も (3) 同様にある纏まった一つの総称概念に対応することがデータから実証される。さらに、本稿では、「原理とパラメータのアプローチ」に基づいて、空所の性質の違いから、関係詞の選択を説明しようとしている。すなわち、空所に総称概念を表す要素 (N') が存在する場合は wh 句関係詞が選択され、空所が個体 (NP) を変域とする変項 x と解釈される場合には前置詞 + which が選択されると主張した。〔レフェリー有〕</p>
3	Complement Relatives, Restrictive Relatives, and “Putative” Restrictive Relatives.	単著	2008.03.15	An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu. (ひつじ書房)	<p>長原 (1990) の研究では、従来の制限、非制限関係節という 2 分法に対して、補部の関係節と呼ばれる別のタイプを制限関係節から独立させ、3 分類を試みた。本稿では、新しく「はみ出し関係節」と言われるものがあって、これも制限節とは異なるものであることを主張している。この「はみ出し関係節」が長原の補部関係節とも類似しているが、両者が全く同じものか、または異なるタイプであるかについては今後の研究の課題となっている。総頁数 628 頁中 179-190 頁。(レフェリー有)</p>
4	関係節の補部分析とその帰結 — that/ゼロ関係詞に導かれる時の関係節の場合 —	単著	2008.03.25	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集刊行委員会。『大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集』	<p>本稿は、that/ゼロの時の関係節を取り上げ、関係節を含む名詞句が副詞的付加詞として生じた場合の時制の副詞類としての機能について、関係節の補部分析に基づいてその説明を試みた研究である。総頁数 382 頁中 211-230 頁。</p>
その他					
1	That/φ 関係詞に導かれる時の関係節の意味と構造 — 特に先行詞の性質について —	単	2004.11.20	日本語学会第 129 回大会予稿集 (2004 年 11 月 20 日～21 日 会場：富山大学)	<p>本発表では、関係節内の空所 (gap) の性質によって先行詞の統語範ちゅうが決まるとする考え方に立脚し、that/φ 関係詞に導かれる時の関係節の先行詞は「副詞的」範ちゅうとしての Tense-Adverbial であることを主張した。関係節は限定詞の補部であるとする分析にもとづき、that/φ の関係節の先行詞名詞句はある時点を基準点として「特定の時」を指す Tense-Adverbial と考えて他の単純な Tense-Adverbial と同様 [Tns] をもつと分析し、いくつかの帰結が派生することを論じた。総頁数 356 頁中、295-300 頁。(日本語学会第 129 回大会発表 (富山大学))</p>
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1983.11.00	～	現在	日本英語学会会員	

2	2001.06.00	～	現在	日本語学会会員
3	2002.07.00	～	現在	英語語法文法学会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	准教授	氏名	白井 春人	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) フランス語が大学教育の中で生き残るにはー英語学科ヨーロッパ2言語コースとカリキュラム			2007.02.17		第 102 回 P E K A (於・ピアソン・エデュケーション) 2006 年度から導入された大東文化大学外国語学部英語学科のヨーロッパ2言語コース・英仏クラスについて、カリキュラム・導入経過・教育目標・実践状況などを説明。英語+フランス語 併習の意義について考察した。		
2) コミュニケーション能力と「身体の技法」			2007.04.21		第 103 回 P E K A (於・大東文化会館) 大東文化大学外国語学部英語学科の新カリキュラムに導入された新科目「身体の技法」についての説明。言葉を伝えることの意味を、体を動かしながら、考えることの重要性を考察。		
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
論文							
1 マゾヴォー劇における「沈黙の共演者」	単著	2008.03.01	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集 P.59～76 (大東文化大学外国語学部)		マゾヴォーの演劇作品は、いずれも観客を「沈黙の共演者」とすることにより、複雑な主人公たちの心理のゆらぎを、明瞭に舞台上に現出することに成功している。		
その他							
1 「パリの舞台よりー2004/05 の記憶」	単著	2005.05.20	日仏演劇協会講演会(於、学習院大学)		パリを中心とした今日のフランスの演劇状況をセノグラフの観点からその多義性について講演を行なった。		
III 学会等および社会における主な活動							
1 1984.04.00 ～ 現在			日本フランス語フランス文学会会員 (平成 10 年 6 月～現在語学教育委員会委員)				
2 1984.10.00 ～ 現在			日本フランス語教育学会会員 (平成 6 年 10 月～8 年 5 月組織運営検討委員会委員・平成 9 年 6 月～平成 13 年 5 月理事、平成 13 年 6 月～平成 14 年 5 月幹事長)				
3 1985.10.00 ～ 現在			日仏演劇協会会員 (平成元年 10 月～現在会報編集委員・平成 17 年 4 月～現在運営委員)				

4	1986.10.00	～	現在	日本 18 世紀学会会員
5	1998.07.00	～	2006.06.30	(財)日本スケート連盟フィギュア部委員総務部長・強化スタッフ (強化コーチ)
6	2005.04.00	～	2006.03.00	(財)日本オリンピック委員会強化スタッフ(戦略分析委員会委員)
7	2008.07.00	～	現在	(財) 日本スケート連盟評議員・フィギュア部委員事業副部長・強化スタッフ (強化コーチ)

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	准教授	氏名	姫田 麻利子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) Taxi ! Dossier 0		2005.03.00		Hachette Japon フランス語教科書 Taxi ! (Hachette)の日本人学習者用補助教材。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 1) Pour un festival du court m é trage en fran ç ais des é tudiants 2) 映画の活用について		2007.03.31 2008.06.21		Rencontres P é dagogiques du Kansai (於：大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズ) フランス語を学ぶ大学生のためのフランス語短編映画祭の提案。 P é ka, Association des didacticiens japonais 例会 (於：ピアソンエデュケーション) フランス語の授業へのフランス映画の活用について実践教案を示すと共に、映画の活用に関して参加者同士のディスカッションを提案した。(共同発表者：土屋良二、田中幸子)		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 Repr é sentations de l'anglais et d'autres langues é trang è res chez les é tudiants japonais 2 Entre distance et proximit é : l'é volution de la relation st é r é otyp é e des apprenants avec la culture é trang è re	共 共	2008.01.00 2008.03.00	Alao, G. et al. (é ds), Grandes et petites langues, Pour unedidactique du plurilinguisme et du pluriculturalisme, (Transversales 24) Berne : Peter Lang Zarate, G., L é vy, D., Kramsch, C. (dir.), Pr é cis du plurilinguisme et du pluriculturalisme, Paris : Editions des archives contemporaines	日本の外国語教育政策と日本人大学生の持つ外国語イメージの関連について述べたもの。(Alao, G. et al. 編著;担当執筆 pp.137-148) フランス語を学ぶ大学生のフランスイメージの変化について、授業中の教員による目標文化提示の方法の影響関係から述べたもの。(Zarate, G., et al. 編著担当執筆 pp.233-237)		
論文 1 「文化」それぞれのイメージ	単	2004.05.00	Etudes didactiques du FLE au Japon 13 ; (P é ka, Association des didacticiens japonais)	フランス語の授業で扱われる「文化」について、教員間の多様性を考察したもの。FLEの歴史を振り返れば、各 m é thodologie は「文化的側面」に関しても固有の視点があったわけだが、各文脈ごとに各教員が折衷的な教授法を選択する今日において、「文化的側面」に触れる際に教員が考慮すべきことは何か、教員はその主観的な視点を十分に意識しているか。(pp.5-17 ; 査読論文)		

2	Analyse qualitative des strat é gies d'apprentissage dans le cadre d'un stage linguistique	共	2004.07.00	フランス語教育 Enseignement du fran çais au Japon 32 : (日本フランス語教育学会)	フランス語を学ぶ日本人大学生が、フランスで語学研究を受ける際、その学習ストラテジーにはどんな変化があるか、学習日記とインタビューから考察した。調査対象学生全員について、認知ストラテジーは向上したが、メタ認知的、また社会文化的ストラテジーでは学生間に差が見られた。共著者：常盤僚子・茂木良二・田中幸子・原田早苗・室井幾世子(担当：6. 2) (pp.67-83)
3	外国の文化を教えるということ	単	2005.03.00	『人文科学』第10号(大東文化大学人文科学研究所)	外国語の教員が、文化的側面の教育についてどのように考えているか、その意識の多様性を探りながら、教室で「文化」を提示する際に教員が担うべき役割について考察する。(pp.37-44)
4	La notion de repr é sentation en didactique des langues	単	2005.07.00	フランス語教育 Enseignement du fran çais au Japon 33; (日本フランス語教育学会)	外国語教育研究における repr é sentation の概念について考察した。特に社会学から借りたこの概念が、複言語主義を目指す文脈に登場する場合と複文化主義を目指す文脈に登場する場合では定義に差異のあることに注目している。(pp.69-86 ; 国際レフェリー制)
5	教科書を選ぶ・使う	単	2006.05.00	Etudes didactiques du FLE au Japon 15: P é ka, Association des didacticiens japonais	フランス語の教科書について選択する時の評価基準と実際の使用時の評価基準の差異について述べると同時に。「使いにくさ」を克服する技術を構成する要素を考察した。(pp.14-24)
6	『欧州共通参照枠』における agent/acteur の概念について	単	2006.07.00	『リテラシーズ2』(リテラシーズ編集委員会編；くろしお出版)	外国語学習者に対する新しい定義として『欧州共通参照枠』英語版には social agent、仏語版に acteur social がそれぞれ導入された。本稿では仏語において現在流通する agent と acteur の差異に注目しながら、言語教育が責任を負う「文化」リテラシーについて考える。(pp.99-111)
7	異文化間能力と「言語バイオグラフィ」	単	2007.03.00	『人文科学』(大東文化大学人文科学研究所) 第	『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』における異文化間能力の定義をめぐる議論を整理するとともに、そこで未認知の内的気づきとしての能力を育成、証明するしくみの構築に「言語バイオグラフィ」を取り入れた場合の留意点を考察した。(pp.1-20)
8	フランス語教育における<文化>の転回、停滞、課題	単	2008.03.00	『語学教育研究論叢』(大東文化大学語学教育研究所), 第25号	外国語教育における文化接近法について、理論的多様性と現場の停滞、今後の方向性を検討した。(pp.193-218)
9	Elaboration d'un outil menant à la prise de conscience interculturelle	単	2008.05.00	Etudes didactiques du FLE au Japon 17: P é ka, Association des didacticiens japonais	日本人大学生によるフランス現地研修中の目標文化への気づきとその言語表現化を促す教材の工夫について述べたもの。(pp.44-63)
10	映画の活用について	共	2009.05.00	Etudes didactiques du FLE au Japon 18: P é ka, Association des didacticiens japonais	フランス語の授業へのフランス映画の活用について実践教案を示すと共に、フランス語教師たちの映画活用法の傾向、類型、彼らの感じる困難の類型、今後議論すべき課題について論じた。(共著者：土屋良二、田中幸子；担当執筆：教案例を除く全ての考察) pp.1-11.
その他					
1	彼らは「代表者」ではない	単	2004.06.00	ふらんす 2004年6月号(白水社)	マルク・クレボン著、白石嘉治訳『文明の衝突という欺瞞』(新評論)の書評。(p.69)
2	書評・Michael Byram and Karen Risager, Language Teachers, Politics and Cultures	単	2004.07.00	フランス語教育 Enseignement du fran çais au Japon 32 (日本フランス語教育学会)	マーストリヒト条約以降、ヨーロッパの外国語教育がどのように変わっていくか、義務教育の外国語教員に対して行なった調査の結果を紹介するとともに展望を述べる Michael Byram and Karen Risager, Language Teachers, Politics and Cultures についての書評。(PP.167-8)
3	「文化リテラシー」とは何かー異文化能力の評価をめぐるヨーロッパの議論から	単	2005.09.00	国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」プロシーディング	Genevi è ve Zarate による La place de la «cultural literacy» dans le d é bat europ é en sur l' é valuation des comp é tences culturelles 論文の翻訳
4	『欧州共通参照枠』における agent/acteur の概念について	単	2005.09.00	国際研究集会「ことば・文化・社会の言語教育」プロシーディング	外国語学習者に対する新しい定義として『欧州共通参照枠』英語版には social agent、仏語版に acteur social がそれぞれ導入された。本稿では仏語において現在流通する agent と acteur の差異を整理しながら、言語教育が責任を負う「文化」リテラシーとは何か考える。(pp.196-202)

5	私たちのフランスイメージと授業で扱う「文化」について	単	2006.03.00	第19回獨協大学フランス語教授法研究会報告	文化的側面の教育に関する意識の多様性を、初級フランス語を担当する日本人教員の9名のインタビュー結果から考察。(pp.10-12)
6	Cadre européen en commun de référenceにおけるacteur socialの概念について	単	2006.03.00	Rencontres Pédagogique du Kansai	agentとacteurの概念を整理しながら、「文化間仲介者」としての言語学習者の能力について述べた。agentとacteurを、学びの各段階と捉え直す提案をした。
7	Pour un festival du court métrage en français des étudiants	単	2006.03.31	Rencontres Pédagogique du Kansai (於：大阪日仏アリアンスフランセーズ)	フランス語の授業で学生と共に作成した短編映画を紹介。撮影に至るまでのシラバス、教材の紹介と上映。将来「学生フランス語映画祭」を開催する可能性について協議。
8	Représentations de la France chez les étudiants taiwanais et japonais	共	2006.04.29	1er Congrès régional Asie-Pacifique C.A.P.-F.I.P.F. (於：台北国家図書館)	世界フランス語教員連盟アジア太平洋地域大会における研究発表。台湾と日本でフランス語を学ぶ大学生がフランスおよびフランス人に抱くイメージについて、共通点と相違点を考察した。共同発表者：CHI, Hsin-ping
9	シンポジウム報告：Évolution de l'image de "la culture française" au Japon : ce que nous pouvons faire, ce qui nous est impossible	単	2006.07.00	Revue japonaise de didactique du français Vol. 1, no. 1 (日本フランス語教育学会)	2005年5月に行なわれたフランス語教育学会におけるシンポジウム「フランス文化のプロモーション/私たちにできること、できないこと」に関する報告。(pp.149-152)
10	書評：Peter Radai (ed.), Le statut des enseignants en langues	単	2006.07.00	Revue japonaise de didactique du français Vol. 1, no. 1 (日本フランス語教育学会)	欧州評議会による複言語・複文化主義提案以降の外国語教員の意識、とくに社会的立場の意識について考察した Peter Radai (ed.), Le statut des enseignants en langues についての書評。(pp.189-191)
11	L'utilité imaginaire de la grande langue. Représentation de l'anglais chez les étudiants japonais	単	2006.07.03	国際研究集会 Grandes et petites langues et didactique du plurilinguisme et du pluriculturalisme. Modèles et expériences (於：パリ第3大学)	「大」言語「小」言語と複言語・複文化主義にもとづく言語教育研究と題する国際研究集会での研究発表。日本の言語教育政策と日本人大学生の英語および他の外国語に関するイメージとの関連について論じた。
12	ザラト、ジュヌヴィエーヴ<文化リテラシー>とは何か	共	2007.10.19	佐々木倫子他『変貌する言語教育』くろしお出版	本書第7章ジュヌヴィエーヴ・ザラト「<文化リテラシー>とは何か」の翻訳。(pp.116-140)
13	書評：Zarate, G. & Gohard-Radenkovic, A. Larecognition des compétences interculturelles	単	2007.10.27	Revue japonaise de didactique du français Vol.2, no.1 (日本フランス語教育学会)	『共通参照枠』以降の欧州における異文化間能力に関する論考の書評。(pp.304-307)
14	海外学会報告：Colloque international：《Grandes》et《petites》langues et didactique du plurilinguisme et du pluriculturalisme. Modèles et expériences	単	2007.10.27	Revue japonaise de didactique du français Vol.2, no.1 (日本フランス語教育学会)	表題の学会に参加した報告。(pp.350-352)
15	<異文化間の気づき>はひとりでは得られるか：言語バイオフィの工夫	共	2007.12.16	国際シンポジウム「ICTによる外国語教育と自律学習」(北海道大学情報基盤センター)	日本人大学生によるフランス現地研修中の目標文化への気づきとその言語表現化を促す教材の工夫について述べた。
16	<異文化間能力>の教育の挑戦	共	2008.01.27	国際シンポジウム「大学における外国語教育の二つの挑戦：多言語教育と自律学習」(京都大学芝蘭会館稲盛ホール)	ドゥニーズ・リュシエ氏への指定討論者としての参加。
17	ポートフォリオの理論と実践—日本の場合	共	2008.05.23	日本フランス語教育学会春季大会(於：青山学院大学)	表題のシンポジウムについて、話題提供、司会を担当した。(パネリスト:加藤幸次、M.=F.Pungier、福島祥行)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
1	1990.04.00	～ 現在	P é ka (P é dagogie を考える会) 会員
2	1991.04.00	～ 現在	日本フランス語フランス文学会会員(2000年度～2002年度語学教育委員;2004年度～2006年度資料調査委員)
3	1992.10.00	～ 現在	日本クローデル研究会会員
4	1995.10.00	～ 現在	日本フランス語教育学会会員(2003年度～2008年度理事;2005年度幹事長)
5	2001.10.00	～ 現在	日本教育工学会会員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	准教授	氏名	米山 聖子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 Phonological neighborhoods and phonetic similarity in Japanese word recognition (Contributions Towards Research and Education of Language, Vol. 14)	単著	2007.12.00	Institute for the Research and Education of Language, Daito Bunka University (大東文化大学語学教育研究所)	本研究は、2002年に Ohio State University より Ph.D.を取得した際に提出された博士論文に加筆・修正を加えて出版されたものである。本研究では日本語母国語話者の音声語彙認識における心内辞書に蓄積される語彙表示の可能性について、実験結果をもとに検討を行ったものである。音声語彙認識過程における語彙アクセスに用いられている語彙表示に関する問題は、語彙の隣接効果を測定する3つの定義を検証することにより検討された。まず、日本語においても語彙の隣接効果が一部の実験方法で確認された。これにより、語彙の隣接効果は言語普遍的な影響である可能性が高いことが明らかになった。また、実験結果から、異なる心内辞書の語彙表示を使って心内辞書にアクセスした可能性が高いことが明らかになった。これにより、成人の音声語彙認識モデルに2つの語彙表記を仮定する必要があることを主張した。総頁数 212。		
論文						
1 A cross-linguistic study of diphthongs in spoken language processing in Japanese and English	単著	2004.10.00	CD-ROM Proceedings of the 8th International Conference on Spoken Language Processing	本研究は日本語母国語話者と英語母国語話者がどのように二重母音を音声理解するのかということ、日本語と英語の刺激語を用いて実験を行った。その結果、日本人は二重母音を2つの母音の間に分節を行うのに対し、英語母国語話者は2つの母音をひとつの単位として処理している可能性が高いことが明らかになった。レフリー有。		
2 The recognition of Japanese-accented and unaccented English words by Japanese listeners	単著	2006.05.00	CD-ROM Proceedings of SPEECH PROSODY 2006, TUDpress	日本語母国語話者の第二言語 (ここでは英語) を理解する際に、語彙隣接効果や語彙頻度といった心内辞書の単語に関連する影響が音声語彙認識にどのように係っているかを実験によって検証を行った。今回の実験結果は、先行研究で報告されている現象とは異なるものであった。その理由についていくつかの検討を行った。レフリー有。		

3	Probabilistic phonotactics and neighborhood density in Japanese: Evidence from non-word experiments	単著 2006.06.00	CD-ROM Proceedings of the 9th Western Pacific Acoustics Conference (WESPAC IX 2006), The Acoustic Society of Korea'	日本語母国語話者が日本語において、語彙の隣接効果があることが報告されてきた。しかしながら、今までにその効果が見られた実験方法は Semantic Categorization Task を用いたものであり、必ず心内辞書にアクセスしていることが必要になるものであった。今回は、先行研究によってその影響が見られている無意味語を刺激語を使うことにより、同様の効果が見られるかどうかを検証した。レフリー有。
4	Effects of probabilistic phonotactics, neighborhood density and word frequency in English by Japanese listeners	単著 2006.06.00	Proceedings of the 2006 KAKS-KASELL International Conference on English and Linguistics, The Korean Association of Language Sciences and The Korean Association	日本人英語学習者が英語の語彙を理解する際に心内辞書に蓄積されている語彙頻度と隣接語彙数が影響を及ぼしているかどうかを実験によって検証した。実験結果は、英語語彙頻度の影響は受けませんが、語彙連続効果の影響は認められなかったことが明らかになった。この結果は先行研究とは異なり、日本人英語学習者は英語を理解する際にはボトムアップから推測される音響的な情報の影響を受けている可能性があることが示唆された (281-292 頁)。
5	CASECスコアとVOA Special English newsのdictation正答率との相関関係について	単著 2007.02.00	映像メディア外国語教育学会誌、創刊号、映像メディア外国語教育学会	本研究では VOA Special English news (以後VOA) の dictation の正答率とCASECの総合点との相関をとり、CASECが proficiency test がTOEICと同様に VOA dictation と相関関係があるかどうかを総合的に検証するために3つの分析を行った。分析1ではVOAの dictation の正答率とCASECの総合点について回帰分析を行った。相関関係は0.734 とかなり高い相関であった。分析2ではCASECのスコアから予想されるTOEICのスコアと VOA dictation についてかなり高い相関を示した。分析1と分析2の結果から、CASECはTOEICと同様に英語の proficiency test である可能性が高いことが確認された。CASECがTOEIC同様に英語の proficiency test として認められるためには、今回の研究参加者が三枝 (1998) の研究参加者と同様の VOA dictation の正答率とTOEICスコアの関係性を保持している必要がある。従って、分析3では三枝 (1998) の研究参加者のうち、本研究の件有産かさの VOA dictation 正答率の範囲にある学生に限定して分析を行い、本研究参加者のデータと同じ傾向を持つことを確認した。今回の分析結果から、CASECが英語の proficiency test であると同時に VOA Special English news の dictation の正答率とかなり高い相関があることが明らかになった (1-12 頁)。レフリー有。
6	Neighborhood density and lexical competition in Japanese: An experimental approach	単著 2007.07.00	レキシコンフォーラム、3、ひつじ書房	本研究は日本語音声語彙認識において、どのような語彙表示が語彙接近に用いられているかを語彙隣接効果に関する実験によって明らかにすることを目的とする。語彙隣接効果はターゲットとなる語彙の周辺にある音的に類似している語の数 (隣接語) によって計算されるが、隣接語の定義に関しては類似性をどのような定義するかによって違いが生じる。本研究では日本語に適用できる3種類の定義を想定した。1つ目はアブストラクトな音素列を想定した語彙表示、2つ目は1つ目の語彙表示にピッチアクセント情報を付与したもの、そして3つ目は聴覚的類似性に基づいた語彙表示である。これら3つの定義と語彙表示を中心に語彙隣接効果に関する実験を行い妥当な語彙表示を検討し、アブストラクトな語彙表示とより詳細な音声情報を含んだ語彙表示の両方が必要であることが明らかになった。また、成人の語彙認識においては複数の語彙表示を想定しているモデルはないので、実験結果を反映した音声語彙認識モデルを提案した (67-93 頁)。レフリー有。

7	How we hear what is hardly there: Mechanisms underlying compensation for /t/-reduction in speech comprehension	単著	2008.05.00	Journal of Memory and Language, 59(1), Elsevier	本研究では、どのようにオランダ語の reduced /t/をどのように聞くのかを明らかにするために4つの実験を行った。先行研究から、オランダ語では、/s/や/n/の後では/t/はよりたやすく認識される傾向にあります。それは、/s/の後での弱化された語末の/t/を発話するのが日常会話では普通です。その音韻的コンテキストの robustness についてさまざまな方法で、オランダ語話者と/t/の弱화가日常的におこらない日本語話者との比較対象実験によって明らかにします。実験結果は一般的に見られることが確認できたが、実験方法によって多少差があることもわかった。総合的に今回の実験結果から、弱化した/t/の埋め合わせにおけるコンテキストの影響は聴覚的制約、音韻的な学習そして心内辞書からの制約などが係る複雑なプロセスであることを主張した (133-152 頁)。共著者 Holger Mitterer (Researcher, Max-Planck-Institut für Psycholinguistik), Mirjam Ernestus (Researcher, Radboud Universiteit and Max-Planck-Institut für Psycholinguistik)。レフリー有。
その他					
1	A cross-linguistic study of diphthongs in spoken language processing in Japanese and English	単	2004.10.00	The 8th International Conference on Spoken Language Processing, Jeju, Korea	本研究は日本語母国語話者と英語母国語話者がどのように二重母音を音声理解するのかということ、日本語と英語の刺激語を用いて実験を行った。その結果、日本人は二重母音を2つの母音の間に分節を行うのに対し、英語母国語話者は2つの母音をひとつの単位として処理している可能性が高いことが明らかになった。レフリー有。
2	The recognition of Japanese-accented and unaccented English words by Japanese listeners	単	2006.05.00	SPEECH PROSODY 2006, Dresden, Germany	日本語母国語話者の第二言語（ここでは英語）を理解する際に、語彙隣接効果や語彙頻度といった心内辞書の単語に関連する影響が音声語彙認識にどのように係っているかを実験によって検証を行った。今回の実験結果は、先行研究で報告されている現象とは異なるものであった。その理由についていくつかの検討を行った。
3	Probabilistic phonotactics and neighborhood density in Japanese: Evidence from non-word experiments	単	2006.06.00	The 9th Western Pacific Acoustics Conference (WESPAC IX 2006), Seoul, Korea	日本語母国語話者が日本語において、語彙の隣接効果があることが報告されてきた。しかしながら、今までにその効果が見られた実験方法は Semantic Categorization Task を用いたものであり、必ず心内辞書にアクセスしていることが必要になるものであった。今回は、先行研究によってその影響が見られている無意味語を刺激語を使うことにより、同様の効果が見られるかどうかを検証した。
4	Effects of probabilistic phonotactics, neighborhood density and word frequency in English by Japanese listeners	単	2006.06.00	The 2006 KAKS-KASELL International Conference on English and Linguistics, Pusan, Korea	日本人英語学習者が英語の語彙を理解する際に心内辞書に蓄積されている語彙頻度と隣接語彙数が影響を及ぼしているかどうかを実験によって検証した。実験結果は、英語語彙頻度の影響は受けませんが、語彙接続効果の影響は認められなかったことが明らかになった。この結果は先行研究とは異なり、日本人英語学習者は英語を理解する際にはボトムアップから推測される音響的な情報の影響を受けている可能性があることが示唆された。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1994.08.01	～	現在	日本音韻論学会会員（平成19年4月より理事）	
2	1996.09.01	～	現在	アメリカ音響学会会員	
3	1996.09.01	～	現在	アメリカ言語学会会員	
4	1997.04.01	～	現在	日本言語学会会員	
5	2002.04.01	～	現在	日本音声学会会員（平成16年4月より庶務委員）	
6	2003.06.00	～	現在	日本英語学会会員	
7	2006.11.00	～	現在	映像メディア外国語教育学会会員（平成19年11月より事務局長）	

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	准教授	氏名	Robert J. Sigley	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 'Corpus studies of variation'	単	2005.00.00	in Brown, K(ed) Encyclopedia of Language and Linguistics (2ed), Oxford: Elsevier.	Vol 3, p.220-p.226.		
その他						
1 Comparing corpus data from different social groups	単	2004.05.19	ICAME 25 (19-23 May 2004), University of Verona, Verona, Italy.	Conference Presentation.		
III 学会等および社会における主な活動						

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	講師	氏名	荒又 雄介	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学の授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4,5 (ドイツ語)、4,8 (講義課目 ドイツ語圏の文化と社会) (5 段階評価)		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 刹那主義の行方 — ホーフマンスタールとシュニツラーのカサノヴァ劇 —	単著	2007.03.00	早稲田大学ドイツ語学・文学会発行『ワセダブレター』第 14 号	58-77 頁		
2 二つのカサノヴァ像	単著	2009.03.31	大東文化大学 大東文化大学紀要 第 47 号 <人文科学>	フランツ・プライとエルンスト・リサウアーの作品に現れる山師 1-12 頁		
その他						
1 鈴木隆雄 (編集主幹) 『オーストリア文学小百科』水声社 (2004) 紹介	単著	2005.03.00	早稲田大学ドイツ語学・文学会発行『ワセダブレター』第 12 号	149-152 頁		
2 山師あるいは冒険者 — ドイツ語圏の文学に現れるカサノヴァ像 —	単独	2005.10.00	於 早稲田大学ドイツ語学・文学会 第 13 回研究発表会			
3 市民社会のカサノヴァ	単独	2006.06.00	於 日本独文学会 2006 年春季研究発表会			

4	Hans Esselborn (著) Goethes "Braut von Corinth" als Vampirballade. ハ ンス・エッセルボルン (著) 吸血鬼バラード としての《コリントの 花嫁》	単独 で翻 訳	2006.10.00	ゲーテ自然科学の集い発行 『モルフォロギア ゲーテ と自然科学』第28号	91-99 頁
5	Michael Wetzel (著) Blinde Sehen - Zum Begriff des Plastischen bei Goethe	単独 で翻 訳	2008.10.31	ゲーテ自然科学の集い発行 『モルフォロギア ゲーテ と自然科学』第30号	ミヒャエル・ヴェッツェル (著) 盲目の視覚 — ゲーテの 概念「彫塑的なもの」について 20-35 頁

III 学会等および社会における主な活動

1	2001.04.00	～	2005.03.00	日本独文学会ドイツ文化ゼミナール運営委員
2	2002.04.00	～	2005.03.00	オーストリア文学研究会機関紙『オーストリア文学』編集委員
3	2002.04.00	～	現在	ゲーテ自然科学の集い機関紙『モルフォロギア ゲーテと自然科学』編集委員 (隔年担当 2002年、2004年、2006年、2008年)
4	2003.04.00	～	2006.07.00	日本独文学会機関紙『NEUE BEITRAGE ZUR GERMANISTIK』文化ゼミナール担当編 集委員
5	2004.10.00	～	現在	早稲田大学ドイツ語学・文学会機関紙『ワセダブレッター』編集委員
6	2006.10.00	～	現在	早稲田大学ドイツ語学・文学会運営委員
7	2007.04.00	～	現在	ドイツ語学文学振興会機関紙『ひろの』編集委員
8	2008.04.00	～	現在	オーストリア文学研究会 幹事 (庶務)
9	2008.10.00	～	現在	早稲田大学ドイツ語学・文学研究会機関紙『早稲田ブレッター』副編集委員長
10	2008.11.00	～	現在	ゲーテ自然科学の集い幹事 (庶務)

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	講師	氏名	岡本 和子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 「脳ミソに汗」		2009.03.31		2009年3月31日 「大東文化大学で外国語を学ぶ」(大東文化大学東松山外国語分科会発行) という、新入生向けの外国語学習の手引きとなる冊子に、ドイツ語学習のすすめ、および心構えを執筆した。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 韻と名ーヴァルター・ベンヤミンにおける抒情詩という形式について	単著	2004.09.30	『文芸研究』第94号(明治大学文学部文芸研究会) 41-67ページ			
2 ベンヤミンにおける子どもー言語と物	単著	2007.03.31	『大東文化大学紀要 人文科学』第45号	本論文は、ベンヤミンにおける「子ども」という形象が、彼の芸術理論の核心にある「言語」との関係において特殊な位置を占めていることを明らかにした。(pp.49-65.)		
3 Dask Kunstwerk und der Begriff des Lebens bei Walter Benjamin	単著	2008.00.00	Leben und Geschichte. Atudien zur detuschen Geistesgeschichte des 19. und 20. Jahrhunderts, K ö nigshausen&Neumann	(119-130頁) 23cm、総頁200頁。ベンヤミンにおける「芸術作品」の概念を、生および死という観点から明らかにした。		
4 Schwellenerfahrung. Die Darstellung des Schmerzes bei Walter Benjamin	単著	2008.00.00	Kulturfaktor Schmerz, K ö nigshausen&Neumann	(218-232頁) 23cm、総頁257頁。ベンヤミンにおける「苦痛・痛み」は、二つの世界のあいだの敷居をまたぐ際の経験として叙述されていることを明らかにした。		
5 芸術的変換装置としての物語ーC. プレンターノの『平和人形の入った箱』	単著	2009.03.25	『ドイツ文学』(日本独文学会)第138号 (Band7/Heft2) 204-217ページ	C・プレントナーの詩論を表題にある作品を手がかりとして、死という側面から明らかにした。		
その他						

1	Schwellenerfahrung – Darstellung des Schmerzes bei Walter Benjamin	単独発表	2004.09.11	東京大学人文社会系研究科 科研研究会「文学表現と記憶ードイツ文学の場合」 (基盤研究 A1) 研究発表会	
2	ベンヤミンにおける子ども一言語と物	単独発表	2005.12.18	東京大学人文社会系研究科 科研研究会「文学表現と記憶ードイツ文学の場合」 (基盤研究 A1) 研究発表会	
3	『ベンヤミン 救済とアクチュアリティ』	分担執筆	2006.06.30	河出書房新社	担当部分 著作解題:『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(pp.8-11) 著作解題:『ゲーテの「親和力」』(pp.16-19) 論考:「ベンヤミンの星」(pp.162-167)
4	Der Begriff des Kunstwerks bei Walter Benjamin - im Hinsicht auf den Begriff des Lebens.	単独発表	2006.11.19	Internationales Forschungsprojekt an der Meiji Universität: Leben und Geschichtlichkeit in der deutschen Geistesgeschichte (明治大学国際シンポジウム「ドイツ思想史における『生』と『歴史性』概念について」)	本発表は、ベンヤミンにおける「芸術作品」の概念を、生と死という観点から明らかにしたものである。
5	人形という死体ーW.ベンヤミンにおける芸術作品の概念とC.ブレンターノ『平和人形の入った箱』	単独発表	2007.02.11	九州大学人文社会系研究科 科研研究会「ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き」(基盤 B一般) 研究発表会	本発表は、ベンヤミンにおける芸術作品の概念を踏まえ、ブレンターノの作品に現われている芸術作品観を死という側面から明らかにした。
6	浅井健二郎 編訳『ベンヤミン・コレクション4』(ちくま学芸文庫)	分担訳	2007.03.10	筑摩書房	担当作品「[フォンターネの『マルク・ブランデンブルク紀行』]」、「E・T・A・ホフマンとオスカル・パニッツァ」、「クリストフ・マルティン・ヴィーラント」、「『初期ロマン派の危機の時代ーシュレーゲル・サークルの人びとの手紙』」、「カール・ヴォルフスケールの六十歳の誕生日に因んで」、「〈实用抒情詩〉だって? しかしこんな風にはなく!」、「ドイツ・ファシズムの理論」、「左翼メランコリー」、「物語作者としてのオスカル・マリーア・グラーフ」、「行動主義の誤謬」、「ドイツの失業者たちの年代記」(pp.99-168, pp.378-383, pp.601-639.)
7	批評の誕生ーベンヤミンのロマン主義論	単独発表	2007.09.10	18世紀ドイツ文学研究会 第61回研究会	ベンヤミンが18世紀の精神世界をどのように評価していたか、また、それに続くロマン主義をどのように捉えていたかを明らかにした。
8	クレメンス・ブレンターノ『ゴッケル、ヒンケル、ガッケライア』における子どもの言語	単独発表	2007.09.15	九州大学人文科学研究科・ 科研研究発表会「ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き」 (基盤研究 B)	ブレンターノの上記の作品に表われた、子どもと言語の関係を明らかにした。
9	ヴァルター・ベンヤミンにおける小さいものの理論	単独発表	2008.09.14	九州大学人文科学研究科・ 科研研究発表会「ドイツ近・現代文学における〈否定性〉の契機とその働き」 (基盤研究 B)	ベンヤミンにおける「小さいもの」は「ゆがみ」の概念と関連しており、彼の言語論・芸術論を構成する重要な要素であることを明らかにした。
III 学会等および社会における主な活動					
1	2000.02.01 ~ 現在			日本独文学会会員	
2	2004.01.01 ~ 2005.03.31			日本独文学会和文誌編集委員	
3	2005.04.01 ~ 2007.03.31			日本独文学会文学・文化部門編集委員	

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	講師	氏名	Gabriel A. Lee	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) Focus on Form or Meaning : a Cultural question		2004.07.22	全国私立中学高等学校 外国語 (英語科) 研修会 Workshop の指導講師			
2) I Can Read but I Can't Speak		2005.07.25	全国私立中学高等学校 外国語 (英語科) 研修会 Workshop の指導講師			
3) Vocabulary and Fluency in Jr and Sr High School Classrooms		2006.06.26	全国私立中学高等学校 外国語 (英語科) 研修会 Workshop の指導講師			
4) Developing Fluency in Jr. & Sr. High School Classrooms		2007.07.26	全国私立中学高等学校 外国語 (英語科) 研修会 Workshop の指導講師			
5) Second Language Acquisition in Japan		2008.06.29	全国私立中学高等学校 外国語 (英語科) 研修会 Workshop の指導講師			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						

1	Three Factors in L2 Reading Ability: Using Rauding Theory to Reanalyze a Study by Nassaji and Geva	単著	2006.12.00	Reading Psychology, Volume27, Issue 5 Routledge (Taylor & Francis Ltd., Philadelphia, PA)	pages 405-433 Nassaji and Geva(1999)concluded that lower level processes, particularly efficiency in phonological and orthographic processing contributed significantly to individual differences in adult ESL reading. Moreover, they reported that speed of letter naming, while not directly associated with reading comprehension, was related to linguistic subcomponents of L2 reading, including lexical and syntactic knowledge. Efficiency (a measure of rate and accuracy) is at the core of Rauding theory (Carver, 1977, 1982, 1983, 1984, 1985a, 1985b, 1987a, 1987b, 1987c, 1990a, 1990b, 1992a, 1992b, 1992c, 1992d, 1993, 1997, 2000), which argues reading achievement can be accurately predicted using precise mathematical equations. Using the exact same statistical analysis procedure as Carver (1992d), Nassaji and Geva's (1999) correlation matrix was reanalyzed with factor analysis. The same patterns found by Carver (1992d) were strongly evident in Nassaji and Geva's data, lending support for rauding theory's model of reading achievement with advanced ESL learners.
2	第二言語習得の単純論	単著	2008.01.31	大東文化大学語学教育研究論叢、第25号	第二言語（L2）熟達度の正確な予測モデルの作成
その他					
1	Rauding in a second language		2004.00.00	16年度 Society for the Scienific Study of Reading 研修会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	2004.06.01	～	現在	Society for the Scientific Study of Reading regular member	

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	講師	氏名	佐藤 千津	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 教育方法の工夫と学生の共感的理解の促進		2004.09.01	<p>共立女子大で担当した「教育方法研究」および「教育制度研究」では、教育方法あるいは教育制度の理論と実践に関して考えながら、マルチメディア機器を用いて国内外の様々な教育方法あるいは教育制度について教授するとともに、教育実践の一部をアクティビティとして学生に直接的に体験させることで学生の理解を深めた。(2004年9月1日～2006年3月31日)</p>				
2) オンデマンド・サイトの利用と授業時間外の個別応答の工夫		2004.09.01	<p>共立女子大学学芸学部・家政学部で担当した「教育方法研究」および「教育制度研究」の授業外における指導上の工夫として、各学生の個別の学術的関心を重視し、学内のオンデマンド・サイトを利用した授業時間外の個別応答を適宜実施した。(2004年9月1日～2006年3月31日)</p>				
3) 授業内容の工夫と学生の共感的理解の促進		2006.04.01	<p>大東文化大学で担当している「特別セミナー」ではイギリス文化研究をメイン・テーマにしている。また、同大学で担当している「異文化理解」でも諸外国の文化や社会制度を紹介し、日本のそれとの比較において捉え学生の理解を深めている。諸外国の事情に関してはマルチメディア機器や各種アクティビティを積極的に活用したり、外部講師を招くなどして、学生の共感的・体感的理解を促している。(2006年4月1日～現在)</p>				
4) 大東文化大学授業評価		2008.02.05	<p>大東文化大学外国語学部で2007年度に担当した「異文化理解」に対する学生の授業評価の結果、「授業への満足度」は5段階評価の4.2ポイントであった。なかでも「聞き取りやすさ」「学習内容の量」「授業態度の指摘」「教員の休講・遅刻」の各項目は58名の回答者全員が満足と回答した。</p>				
5) 日本女子大学学生授業評価		2008.03.00	<p>日本女子大学文学部で2007年度に担当した「英語論文作成法Ⅱ」に対する学生の授業評価の結果、総合評価(満足度)は5段階評価の4.27ポイント(キャンパス平均4.01)であった。</p>				
6) 早稲田大学授業評価		2008.08.08	<p>早稲田大学教育学部で2008年度に担当した「教職原論」に対する学生の授業評価の結果、総合評価(授業の満足度)は5段階評価の4.2ポイント(学部平均3.6)であった。特に「板書と提示資料、配布資料、テキスト・参考図書が理解に役立つものであった」の項目は4.7(平均3.6)、「教員が熱心であった」の項目は4.4(平均3.9)、「この分野への学習意欲がわいた」の項目は4.3(平均3.5)と特に評価が高かった。</p>				
7) 大東文化大学授業評価		2009.02.05	<p>大東文化大学外国語学部で2008年度に担当した「異文化理解」に対する学生の授業評価の結果、「授業への満足度」は5段階評価の4.0ポイントで、「聞き取りやすさ」は2段階評価の2.0、「授業目的の明確性」「説明の理解度」「板書の読みやすさ」「教材の適切性」「情報提示の工夫」「学習内容の量」「シラバスの反映度」「教員の熱意」の各項目はすべて1.9と、特に評価が高かった。</p>				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 教材の作成および教育方法の工夫		2005.04.01	<p>(1)担当授業では、次の自著論文を用いることがある。①佐藤千津「イギリスの教師養成と採用」日本教師教育学会編『講座教師教育学・教師をめざす』第2巻、2002年、学文社、190～191頁。②佐藤千津「イギリスの外国人と国際学校—イスラム系公営学校の設立をめぐる」末藤美津子・福田誠治編著『世界の外国人学校』(第3章)、2005年、東信堂、101～123頁。(2)また、国内外の学校で実際に用いられている教科書や補助教材などを教材として使用することで学生の関心を高め、理解を深めている。(3)各科目について、その授業の概要と授業中に適宜使用する資料、図・表をまとめた冊子を作成して各回の授業で配付している。</p>				

2) 『おさえておきたい教育法規』、酒井書店。	2009.04.24	本書は、教師および社会教育専門職員等を目指す者のために関係法規の要点を解説したもので、早稲田大学で担当している「教職概論」および「教職原論」の教科書として使用している。編者は朝倉征夫。他の執筆者は、金塚基、蘇佩怡、若園雄志郎、裘曉蘭、前田崇、帆足哲哉、福井庸子、前田耕司、鄭任智、佐藤隆之である。筆者は第7章「教育職員に関する規定」(93～125頁)担当。A5版、総頁数174頁中33頁。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 海外の教員養成の動向からみた教員養成の課題—イギリスの教員養成改革動向について	2006.05.20	全国私立大学教職課程研究連絡協議会第26回大学シンポジウム、亜細亜大学。(研究業績の再掲)
2) 国立教育系大学・学部における教員養成制度を考える—イギリスの教員養成制度とプログラムが提起すること	2008.02.20	東京学芸大学新教育養成システム推進第6回連続講演会、東京学芸大学。(研究業績の再掲)
3) イギリスにおける学力政策と教員制度改革—教師の専門性規定要因としての学力モデル	2008.09.07	日本学習社会学会第5回研究大会(課題研究1「世界の地域・民族と教育・学習」)、お茶の水女子大学。(研究業績の再掲)
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 「特別セミナー」の運営における創意工夫(他のゼミとの交流活動の実施)	2006.04.01	2006年度より担当している英語学科の専門教育科目の「特別セミナー」(3年次配当)は自由選択科目であるが、毎年、20名近い履修希望者があり、そのほとんどを受け入れている。特別セミナーでは、イギリス文化研究に関し、学生各自に個別に研究テーマを設定させ、年度末にまとめる論文の執筆に向けて指導をしているが、専門分野に関する学生の専門性を高めるとともに、幅広い教養を身につけることを目標にして、ゼミ合宿を実施したり、同じ英語学科の他のセミナーや他学部他学科のゼミとの合同授業などを積極的に実施したりすることで、学問分野の枠を超えた普遍的で社会的な能力を育成することにも力をいれている。またその実施にあたっては学生の自主性や計画性を重視している。(2006年4月1日～現在)

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 世界の外国人学校	共著	2005.05.31	東信堂発行。	本書は、イギリスにおける外国人・国際学校政策で注目された宗教系私立学校の公営学校化について、イスラム系公営学校の事例分析から宗教系私立学校の制度化とその運営に関する問題点と課題を考察した。編者は福田誠治・末藤美津子。本書の他の執筆者は、古沢常雄、田中圭治郎、北村三子、児玉奈々、大和洋子、汪輝、山崎直也、シーナ・チョイ、鳥井康熙、中山あおい、中村則子である。筆者は第3章「イギリスの外国人と国際学校—イスラム系公営学校の設立をめぐる」(101～123頁)担当。B5版、総頁数409頁中24頁。
2 Changing Education System for Cultural Awareness: School Management and Curriculum Planning	単著	2009.02.00	『語学教育フォーラム第18号』大東文化大学語学教育研究所発行。	本書は、在外日本人学校における現地理解教育の問題を教育課程経営の観点から考察しており、筆者の博士論文を公刊するものである。カリキュラム編成上の問題を教師の文化概念形成メカニズムとの関連から解明することで異文化理解教育の今日的課題・課題を提示した。さらに近代的国民教育制度における異文化理解教育に内在する近代性と、学校教育制度の現代的意義について分析した。A5版、総頁数255頁。
論文				

1	Education for International Understanding in Japan: Japanese self-identification and the discourse of internationalization after the Second World War		2004.06.00	Intercultural Education, 15(2), International Association for Intercultural Education, Routledge.	本稿では、国際理解教育政策における1980年代以降の日本の「国際化」言説と日本人の自己アイデンティティ形成過程について、日本人論等の再検討を含めて考察した。また、近年の国際理解教育改革動向についても検討した。まず、日本における国際理解教育の発展過程について、国際化言説の形成との関連から、第二次世界大戦以降の歴史を概観した。特に、1980年代以降の日本の教育政策に反映される「国際化と文化ナショナリズム」のスタンスと国際理解教育の展開について、その政治性を分析した。また、それを戦後の日本人論の変遷との関連から考察した。pp.209～219。査読付
2	イギリスにおける教師教育改革の動向（課題研究Ⅰ）	単著	2005.09.24	『日本教師教育学会年報』第14号、日本教師教育学会発行。	本論文は、イギリス(主にイングランドを対象とする)における教師教育改革動向について、教師教育における大学の役割、国家による規制と教師の自律的組織、教師の専門性・専門職性の質的变化などの観点から検討した。179～182頁。査読付。
3	イギリス—解題	共著	2006.03.30	『教師の質的向上策に関する資料集(2)外国編』(科学研究費補助金・基盤研究成果報告書)。	本稿は、イギリスの「学校における教員養成課程」の実態調査から得られた分析結果をもとに1980年代以降のイギリスの教員養成改革について考察した。ベッドフォード市の「ピルグリム・パートナーシップ(Pilgrim Partnership)」教員養成プログラムに関する資料を紹介しながら改革動向を概観した。さらに『教員養成課程査察の枠組み2005-2011年』の全訳を掲載した。共著者は明治大学高野和子教授。107～168頁。
4	大学改革と教育専門職の養成（課題研究Ⅰ）	単著	2006.09.22	『日本教師教育学会年報』第15号、日本教師教育学会発行。	本論文は、日本では国公立大学の統合および法人化、専門職大学院の創設や認証評価制度の導入など高等教育全体の再編が進められ、教職課程は様々な影響を受けつつある現状を踏まえ、諸外国の高等教育制度改革の動向とそのなかでの教師・教育専門職の養成課程の変容を検討する目的で諸外国の動向に焦点化して検討した。142～144頁。査読付。
5	イギリスにおけるイスラーム文化と宗教系学校（課題研究Ⅰ）	単著	2006.09.23	『日本学習社会学会年報』第2号、日本学習社会学会発行。	本論文は、労働党政権による公教育システム多様化政策について検討し、マイノリティの教育要求をめぐる動きとして、イギリスで最初のイスラーム系公営学校となったイスラミア初等学校 (Islamia Primary School) のケースを取り上げて分析した。12～13頁。査読付。
6	各国における教師の資質向上策—イギリス	共著	2007.05.20	『教師教育の質的向上策とその評価に関する国際比較研究』(科学研究費補助金・基盤研究B研究成果報告書)。	本稿は、イギリスの高等教育制度改革と教員養成制度の変遷、教員資格および採用方法に関する制度と実態などの問題について総合的に考察した。共著者は明治大学高野和子教授。65～93頁。
7	Learning from weaknesses in teaching about culture: the case of Japanese school abroad	単著	2007.12.00	Intercultural Education (Journal of International Association for Intercultural Education), 18(5), International Association for Intercultural Education, Routledge.	本論文は、異文化理解教育の阻害要因を教師の文化概念の側面から考察し、これまで教育の場面で実体視されてきた文化のナラティブとその表象のポリティクスを解明し、その問題構造を明らかにすると同時に今後の課題を提示した。pp.445-453。査読付。
8	国立教育系大学・学部の教員養成制度を考える—イギリスの教員養成制度改革が提起すること	単著	2008.05.15	『知識基盤社会を創る高度実践型教員養成を考える全国フォーラム in 東京』東京学芸大学新教員養成システム推進連続講演会報告集、東京学芸大学・新教員養成システム推進部発行。	本稿は、イギリスの教員養成制度とプログラムの現状からイギリスの教員養成の特質を捉え、日本の教員養成制度と比較検討した。さらに日本の国立教育系大学・学部の教員養成制度への示唆や、その課題について検討した。181～188頁。
9	イギリスの教師教育政策と教師の資質管理	単著	2008.06.30	『日本教育政策学会年報』第15号、日本教育政策学会発行。	本論文は、1997年から約10年間のイギリスの教員養成政策について養成教育の内容規制と教師の資質管理という観点から検討した。この改革の対象は教師教育の領域だけではなく、学校の教職員集団全体を視野に入れた制度改革として展開されてきたため、関連領域の政策動向についても必要な範囲で触れた。195～202頁。査読付。
10	教師教育の多様化政策とその展開—イギリスの「学校における教員養成」の場合	単著	2008.09.13	『日本教師教育学会年報』第17号、日本教師教育学会発行。	本論文は、イギリスにおいて進行している学校の教職員集団全体を視野に入れた制度改革が教師の専門性や専門職性に与えるインパクトについて教育経営学的に検討した。さらにそのことが教師教育に与える長期的影響について分析した。42～50頁。査読付。

11	平成20年度「開発的学力向上プロジェクト」まとめ	単著	2009.03.27	『平成20年度墨田区「開発的学力向上プロジェクト」実施報告書』、墨田区教育委員会発行。	本報告書は、筆者がアドバイザーとして参画した墨田区教育委員会の「開発的学力向上プロジェクト」の平成20年度研究成果報告書でプロジェクトの推進事業により墨田区内児童生徒の学力向上に一定の成果が見られた点について分析した。43～45頁。総頁数216頁。
その他					
1	イギリスにおける教師教育改革の動向	単著	2004.09.19	日本教師教育学会第14回研究大会（課題研究「大学改革と教育専門職の養成」）、立教大学。	日本教師教育学会課題研究発表。
2	イギリスの「学校における教員養成制度（School-Centred Initial Teacher Training Scheme）」の概要と現状について	単著	2005.02.19	平成16年度科学研究費補助基盤研究「教師教育の質的向上策とその評価に関する国際比較研究」（代表：吉岡真佐樹京都府立大学教授）第3回研究会議、京都私学会館。	科学研究費研究会議発表。
3	イギリスにおけるイスラーム文化と宗教系学校	単著	2005.09.10	日本学習社会学会第2回研究大会（課題研究「世界の地域問題と教育・文化・学習」）、宇都宮大学。	日本学習社会学会課題研究発表。
4	海外の教員養成の動向から見た教員養成の課題－イギリスの教員養成改革動向について	単著	2006.05.20	全国私立大学教職課程研究連絡協議会第26回大会シンポジウム、亜細亜大学。	シンポジウム（提案者）。
5	文献紹介「アイヴァー・グッドソン／パット・サイクス著、高井良健一他訳『ライフヒストリーの教育学－実践から方法論まで』」	単著	2007.09.28	『日本教師教育学会年報』第16号、日本教師教育学会発行。	本稿は、教師のナラティブをもとに教育の「真実」を追究しようとするライフヒストリー研究の専門書である同書を紹介した。165頁。
6	国立教育系大学・学部における教員養成制度を考える－イギリスの教員養成制度とプログラムが提起すること	単著	2008.02.20	東京学芸大学新教員養成システム推進第六回連続講演会、東京学芸大学。	講演。
7	イギリスにおける学力政策と教員制度改革－教師の専門性規定要因としての学力モデル	単著	2008.09.07	日本学習社会学会第5回研究大会（課題研究「世界の地域・民族と教育・学習」）、お茶の水女子大学。	日本学習社会学会発表。
8	イギリスの教員養成の認証機構・方法の現状と課題	単著	2008.11.30	東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター／教育目標・評価学会共催シンポジウム「高等教育機関としての教師教育の質保証を考える」、東京学芸大学。	シンポジウム（提案者）。
9	図書紹介「久富善之編著『教師の専門性とアイデンティティ－教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから』」	単著	2009.03.31	『教育学研究』第76巻1号、日本教育学会発行。	本稿は、「教職アイデンティティ」に注目しながら、教育改革や教師の専門性・専門職性のあり方とそれとの関係を分析した同書を紹介した。138～139頁。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1992.09.00 ～ 現在	日本教師教育学会会員（1993年9月～1996年8月国際部幹事、2003年2月～2005年9月年報編集委員会幹事、2003年2月～現在英文校閲、2006年4月～現在年報常任編集委員、2008年9月～現在年報編集委員会副委員長、2008年9月～現在常任理事）			

2	1992.10.00	～	現在	国際ロータリー財団学友（現在に至る）
3	1993.04.00	～	現在	日本教育政策学会会員（2007年7月～現在年報常任編集委員）
4	1994.09.00	～	現在	日英教育学会会員（1994年9月～1996年8月事務局幹事、2006年8月～2008年7月現在監査）
5	1995.04.00	～	現在	日本教育学会会員
6	1996.10.00	～	現在	英国教育史学会（History of Education Society）会員
7	1997.04.00	～	現在	英国国際・比較教育学会（British Association of International Comparative Education）会員
8	2000.11.00	～	現在	日本国際教育学会会員（2003～2004年度選挙管理委員、2008年8月～現在理事、2008年8月～現在年報編集委員）
9	2001.04.00	～	現在	国際異文化間教育学会（International Association for Intercultural Education）会員
10	2003.09.00	～	現在	日本学習社会学会会員（2005年9月～2007年9月年報常任編集委員）
11	2007.11.00	～	現在	大学英語教育学会会員（2008年4月～現在関東支部研究企画委員）
12	2008.04.01	～	2009.03.31	東京都墨田区教育委員会開発の学力向上プロジェクト推進会議アドバイザー

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	講師	氏名	須崎 文明	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 外国語にチャレンジ! (改訂版)		2006.11.30		CD作製 大東文化大学外国語分科会 未習者に対する外国語 (15ヶ国語) の案内用CDの改訂版の責任編集		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 1) 「世界文学の魅力」の5年間を振り返って		2009.01.19		語学教育研究論叢 第26号 443-444頁掲載 2009.1.31発行 大東文化大学語学教育研究所 2003年から2007年の5年間に渡って、前期11名後期11名の計22名の教員によるオムニバス形式で行った講義の成果と今後の課題に付いて研究発表会 (大東文化大学語学教育研究所) で口頭発表を行った記録。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文 1 ドイツ語の正書法—その歴史的展望と現状	単	2007.03.31	大東文化大学紀要第45号 (人文科学) 大東文化大学	1994年11月にドイツ正書法の改定が行なわれた。その後十数年たった現在、その成立過程・成果・現状・今後の課題等を検証した。(67-78頁)		
その他 1 丑田弘忍: ドイツ語語彙の史的的研究	単著	2007.10.15	ドイツ文学 第133号 日本独文学会	同学社より2005年に発行された丑田弘忍氏の著書「ドイツ語語彙の史的的研究」を紹介したものである。(査読付き)(257頁)		
III 学会等および社会における主な活動						
1	1974.04.00	～	現在	日本ゲーテ協会会員		
2	1974.04.00	～	現在	日本独文学会会員		
3	2005.04.00	～	現在	大東文化大学外国語学会会員 (平成19年度 学会誌編集委員長)		

(表 24)

所属	外国語学部英語学科		職名	講師	氏名	藤井 康成	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 検索エンジンを使った英作文の主体的練習の促進			2006.09.00		(2006年9月～12月) 自らの力でネイティブらしい英語を書けるように、検索エンジンの使い方を受講者に伝授する。その教育上の成果は、学術雑誌に発表。		
2) 言語学 (会話分析) の知見に基づく英会話の練習の促進			2008.09.00		(2008年9月～12月) 従来の会話教材や映画、ドラマでは学習し得ない英語話者のコミュニケーションの仕方を、会話分析の概念をもとに講義で解説。受講者に自然なコミュニケーションの感覚に慣れてもらうよう工夫する。会話テストを数回行い、その結果を慎重に分析し全ての受講者に詳細なフィードバックを提供する。		
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
1 英語イディオムと口語表現 1700 完全詳解—TOEIC テスト・TOEFL テスト・英検に役立つ	共著	2007.09.00	三修社		全体の 15% に相当するイディオムを執筆。		
論文							

1 Tell me about when you were hitchhiking: The organization of story initiation by Australian and Japanese speakers	単著	2007.04.00	Language in Society 36 (2), Cambridge University Press (国際学術雑誌)	<p>日常会話におけるオーストラリア人と日本人のストーリー（説話）の導入の仕方について、会話分析の手法を使って比較対照分析を行う。被験者はそれぞれオーストラリア英語と日本語の母語話者であり、25 ペアの英語データおよび 20 ペアの日本語データを取得した。本稿では各言語からそれぞれ 4 ペアを選択し、詳細な分析を行った。会話分析では、ストーリーは語り手の前置き (story preface) によって始まるとされている。このような前置きに関する聞き手に協力の仕方において、二言語間に大きな違いが見られた。英語のデータでは、ストーリーの前置きがはっきりしているのに対し、日本人の語り手はそれとなくストーリーを始めるという傾向が見られる。例えば、あいまいにストーリーの始まりを合図するのが一つのパターンである。つまり、語り手がそれとなく話を導入するため、会話相手が単純に「うん」と答えるだけでは話が進まない可能性があるということである。そのため、ストーリーを始める際に、聞き手の協力が必要な場合が発生する。会話分析研究における声調の重要性の自覚、研究の精密化が進むとともに、英語を中心とする欧米言語で発達してきた会話分析の理論と技法が、文法や社会の構造が異なる日本やその他の非欧米言語文化ではどのように妥当性を持つのか、といった問題が指摘されてきた。一方で、これまでの会話分析の理論では、有意義な会話を維持するためにはどのような言語的手段が必要または選択可能なのかを示すことができなかった。これらの問題点を意識しながら、本稿では、英語および日本語に存在している普遍的・個別的な会話規則、会話の局部構造、そして日本語会話の特徴の問題を考察し、その上で、これまでの会話分析理論の欠陥を指摘し、改正を試みた。英語では、ある発話に対する応答は短く単刀直入なものが望ましく、長く複雑なものは好ましくないとされているが、本研究では、日本語話者のストーリー開始前の儀式を英語と比較しながら解明し、さらに、異文化コミュニケーションとの関連性についても検討を行った。</p> <p>pp.183-211.</p>
2 Making the most of search engines for Japanese to English translation: Benefits and challenges	単著	2007.10.00	The Asian EFL Journal Professional Teaching Articles Vol.3, 2007, Asian EFL Journal Press (国際学術雑誌)	<p>本稿では、自然科学分野のアブストラクト日英翻訳における検索エンジン適用の利点および課題について論じる。インターネットは、オーセンティックな英文の宝庫であるが、検索エンジンに必要な英文を探し出せば、それらを借用することによって、自然な英文を作成し、辞書の制約を補うことが可能となる。これは、プロ翻訳者が日常的に使用している方法である。本研究の参加者は、理系の大学の学部生約 200 名。第一ステップとして、科学論文のアブストラクトの一部を、一般の電子辞書または紙面辞書のみを用いて、教室内で翻訳させた。第二ステップでは、検索エンジンを活用し、オーセンティックな英文を効率よく検索するために必要な基礎テクニックを紹介したハンドアウトを配布。約 1 ヶ月の期間を学生に与え、第一ステップで仕上げた訳文を課外で修正させた。結果、多くの学生が完成度の高い英文に修正することに成功した。著しく改善が見られた項目は、次の通りである。名詞の単複と冠詞、時制、品詞の変換、前置詞、文の流れ、関係代名詞、文脈に適した語彙および表現、受動態から能動態への変換等。特に名詞の単複と冠詞に関するテーマは非常に難解かつ複雑であり、日本人学生にとっての急所であるのは言うまでもないが、インターネット上の英文を参考にするにより、いくらかでも正確な用法を身に付けることができたのは、大変有意義である。</p> <p>pp.41-77.</p>

3	The asymmetrical relationship between the active and passive voice: Implications for teaching Japanese-to-English translation of specialized scientific texts	単著	2008.04.00	The Linguistics Journal 3 (1) , Linguistics Journal Press (国際学術雑誌)	<p>自然科学文書の日英翻訳における態 (voice) の非対称性について論じる。客観性を重視する科学論文では、受動態の文章が頻繁に使用されるが、実際の翻訳では、原文の態と訳文の態が一致しない場合が多い。例えば、受動態の日本語の文章を訳文では能動態で表現したほうが自然な場合があり、その逆の場合もある。問題は、英語として自然かどうかということで、状況に応じて判断する必要がある。英語で受動態を使う理由は主に三つある。第一に、主語に重点を置く必要がない場合。例えば、実験や操作手順の説明等があげられる。これは、実験を行ったのは「私 (達)」であることが自明であるためである。第二に、前文とのつながりの関係で受動態の方がスムーズに流れる場合。つまり、既知の用語を冒頭に置くのである。第三に、能動態では複雑な部分が前に出てしまう場合、読みにくくなるため複雑な部分を後ろに配置する。本稿では、日本人大学生の日英翻訳原稿を分析し科学文書の日英翻訳プロセスにおける適切な能動態・受動態の用法とは何かについて考察した。被験者は理系の大学に在籍する日本人学部生約 230 人。使用したテキストは、翻訳技能認定試験 (日本翻訳協会) の部門別技能試験問題から、自然科学分野 4 級の日英翻訳問題 (計 13 問)。被験者に共通する問題として、文意をよく考えず機械的に日本語を英語に置き換える、難しく考えすぎてやさしい英語が書けない、日英両言語の発想の違いを理解していない等があげられるが、態の変換を考えていないため、英語らしい表現を作成することができない。訳文をより詳細に分析した結果、教育現場における受動態の指導として、以下の点に留意することを提案する。(1) 情報原理に基づき、旧情報と新情報の流れを考える。(2) 「影響」や「局面」といった広範で抽象的な日本語を訳す際には、論理的な英文になるように工夫する。(3) 位置関係や動きの方向を表す英語の前置詞の重要性を十分に理解する。(4) 前置修飾および後置修飾の仕組みを把握する。(5) “we” を使用できない場合があることを確認する。(6) 日本語と英語の主題関係の相違について復習する。(7) It を用いた形式主語の用法をマスターし、形容詞と動詞の過去分詞に関する理解を深める。 pp.40-74.</p>
4	'You must have a wealth of stories': A cross-linguistic comparison of addressee support behaviour of Australians and Japanese	単著	2008.12.00	Multilingua 27 (4) , Walter de Gruyter (国際学術雑誌)	<p>ストーリー中における聞き手の言語行動について、オーストラリア人と日本人の相違を、相槌、評価、質問の三つの観点から考察。最新の会話分析の考え方を参考にし、オーストラリアおよび日本で被験者を集め会話を録音し、25 ペアの英語データおよび 20 ペアの日本語データを取得した。データ分析の結果、以下の特徴が見出された。まず、相槌であるが、英語では相槌がなくても長い時間話し続けることができるが、相槌を打つ場合、異なる相槌表現を巧みに変化させていくことを発見した。一方、日本語では、同種の相槌表現を連続させることは特異な言語行動ではない。また、日本語の相槌は豊富な意味性を持っていることも分かった。次に評価であるが、英語では、会話相手の視点から発話理解を示すとともに、自分の意見や印象を自由に述べ、ユーモアのセンスを交えることも多く見られる。日本語では共感的理解を基礎に評価を述べる傾向が見られるが、このような言語行動はいわゆる会話のオフリングであるとも解釈できる。最後に質問であるが、英語のデータにおいては、聞き手が頻繁に質問をする傾向が見られ、これは語り手の話に、聞き手が誠意を持って参加しているというデモンストレーションであると解釈することができる。英語のデータに比べて、日本語では、聞き手からの質問は少なく、まず語り手の観点を支持することが大切であるとされる。これは、後に自分の意見を言うことがあっても、礼儀正しくフレンドリーな会話を維持するために必要な戦略であると思われる。聞き手はむしろ、語り手との交流を築き維持する働きをする「相槌」等の同意表現を使うことが多い。データ分析、特に日本語データの分析・解釈においては、「以心伝心」「甘え」「思いやり」といったステレオタイプな日本人論から離れ、「礼儀正しくフレンドリーな会話」を維持するために必要な言語表現とはどのようなものか、それぞれの言語について検証を試みた。また、会話分析の観点から人間の文化とは何かという問題を考察し、異文化の相違とはいかなることかを検討した。 pp.325-370.</p>

その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	2005.00.00	～	現在	社会言語科学会会員
2	2005.00.00	～	現在	大学英語教育学会会員
3	2008.00.00	～	現在	国際学術雑誌 The Linguistics Journal 投稿論文査読委員

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	特任講師	氏名	松本 明子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 工業英検のすすめ		2006.07.00	工業英語ジャーナル vol.26 (通巻 104 号)			
2 アジア系アメリカ人女性のメディアにおける表象の批判的考察: 女優ノブ・マッカーシーの視点		2006.12.00	東京電機大学総合文化研究第 4 号			
3 日本の企業語学研修の現状と言語監査		2007.12.00	日本「アジア英語学会」第 22 回全国大会予稿集			
4 航空業界における企業英語研修: ESP 教育のケーススタディーとして		2007.12.00	東京電機大学総合文化研究第 5 号			
5 工業英検: 理工系大学生の英語教育への活用		2008.12.00	東京電機大学総合文化研究第 6 号			
その他						
1 Motivating Science and Technology Major Students (Poster Presentation)		2006.11.00	全国語学教育学会 (第 27 回)			

2	日本における言語監査の現状：日本の企業語学研修の現状と言語監査	2007.12.00	アジア英語学会（第22回）
3	Responses to Linguistic Environment: Visions of Linguistic Auditing	2008.10.00	第12回 OECD/Japan セミナー
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
1	青山学院大学総合研究所国際協働コミュニケーション部会会員		
2	全国語学教育学会（JALT）会員		
3	大学英語教育学会（JACET）会員		
4	同学会 English for Specific Purposes（ESP）研究会会員		
5	日本「アジア英語」学会（JAFAE）会員		

(表 24)

所属	外国語学部英語学科	職名	外国人特任講師	氏名	Maria Valentina Oliphant	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)				AIM: Developing communicative competence through cross-cultural learning strategies.		
2)				EVALUATION: Commitment to improvement is assessed. Pre- and Post- course testing is employed.		
2 作成した教科書、教材、参考書						
1)				In my more advanced classes I use original material: authentic reading texts and listening extracts. I am currently working on an intermediate level textbook for Japanese students of Law. A pilot course to test contents is under way at Waseda University.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1)				I am constantly researching new teaching strategies and every summer I attend the Siena University seminars of practical linguistic workshops under Prof. A. Duguid.		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1)				I am currently a member of the Daito Bunka Entrance Examination Committee (2008-09 and 2009-10). I am also currently a member of the Shang Shung Institute Interntional Research Committee on the teaching of endangeredlanguages.		
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 “Under the Sway of the Demon. China, Tibet and the Dalai Lama”		2008.00.00	Shang Shung Editions, Arcidosso, Italy	Translation from Italian into English. Italian title: “Il Demone eil Dalai Lama” Rome, Italy: Baldini Castadi 2008 (400pages) Forthcoming 2010. First published in 2008.		
論文						
1 ‘Recent interpretations of gnas and gnas skor in Tibetan Historiography’		2006.09.00	Management Journal Daito Bunka University vol.1,no.12	p.103-118		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1		イタリア図書館学会 (Italian Society of Librarians) 会員				
2		Association for Research on Tibetan Culture. Shang-Shung Institute, Arcidosso, Italy 会員				

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	教授	氏名	柏木 成章	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 辞の諸相―「取り立て」と「文末表現」をめぐって―	単著	2004.05.00	大東文化大学別科論集別科日本語教育第6号 大東文化大学別科日本語研修課程	いわゆる「取り立て」の助詞を「も」以下「こそ」に至るまではほぼ全体的に検討し、その各々の本質について検討した。また特に「～と思う」を中心として各種文末表現について検討し、それらの体系的把握のための出発点としての手がかりを得ようとした。			
2 「まだ」と「もう」	単著	2005.03.31	大東文化大学紀要第43号 (人文科学)	一見裏表のような「まだ」と「もう」が根本的にその性質を異にし、一方が「まだだ」と言えて一方が「もうだ」と言えない理由を「運動」の概念を中心的に用いて解明した。			
3 文章における指示詞	単著	2006.03.15	外国語学会誌 No.35 大東文化大学外国語学会	文章におけるいわゆる指示詞「こ」「そ」「あ」の実際の用法を、堀内和吉の説に基づき検証し、一般的な文章においては基本的に該説の首肯されるべきことを明らかにした。ここでは堀内の説を「こ・あ」=「自己」、「そ」=「非自己」との解釈の下に整理して用いている。			
4 文章における接続詞	単著	2006.03.31	大東文化大学紀要第44号 (人文科学)	接続詞総体における問題に理論的にせまる足がかりを得るため、その「省略」・「接続助詞」との相違等を問題としつつ現実のテキストにおけるその用いられ方の調査に基づき、その本質が基本的に「同化」と「異化」の使い分けに存することを示唆し、今後の精緻なその分類への第一歩を形成しようとした。			
5 「全体化」と「類化」―並立助詞、特に「と」「や」を中心として―	単著	2006.12.00	大東文化大学別科論集 別科日本語教育第8号 大東文化大学別科日本語研修課程	「と」は「全体化」、「や」は「類化」の機能を有するものとして、従来の「全部列挙」・「一部例示」等の解釈の現象性を指摘し、並立助詞の理論的研究の中心的論点を形成してさらに「とか」・「やら」・「だの」等の口頭語的それをも包括し得る視点を得ようとした。現実のテキストにおける使用実態に基づいて立論している。			

6	終助詞論（続）	単著	2007.03.15	外国語学会誌 No.36 大東文化大学外国語学会	先行拙稿に基づき、終助詞の四段階説の上に立って、ここではいわゆる男性語－女性語の観点からその全体的把握を試みた。
7	「の」の一研究	単著	2008.03.00	大東文化大学別科論集 別科日本語教育第9号	名詞と名詞をつなぐ助詞「の」につき、その本質を「中心化」とし、従来挙げられてきたその多様な用法を統一的に把握しようとした。拙説によれば従来解釈困難とされた「自由の女神」の「の」のような用法が適切に解釈される他、「スピードの日本」という「の」の用法（ある意味で「創造」的な）の解釈も容易になされるであろう。
8	紀行文の「る」と「た」	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要第46号 <人文科学>	紀行文としての特定の資料をとりあげ、そこにおける「る」と「た」の用法を種々の側面から検討し、紀行文の特性及び「る」・「た」の特性について実証的に確かめようとした。
9	受身論－特に、「迷惑の受身」の観点から－	単著	2009.01.31	言語教育研究論叢第26号	日本語の「受身」は根本的に「迷惑」の受身であるとの観点に立ち、ある「特殊」な場合にそう（「迷惑」に）ならなくなることを指摘しその理由を考えた。日本語の文法現象を直截・適切に把握することを目的とする研究である。
10	「てしまう」論	単著	2009.03.15	外国語学会誌 No.38 大東文化大学外国語学会	補助動詞としての「(て) しまう」につき、その本質を従来の研究史をふまえつつ、「話し手（＝自己）と関係づけられた非－通常の出来事の実現」ととらえる見地からその種々の用法を統一的に理解・把握しようとした。
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1981.01.00	～	現在	日本語教育学会会員	
2	1987.05.00	～	現在	国語学会会員	

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	教授	氏名	蔵中 しのぶ	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業運営の中で、ディスカッションをメーリングリストにより実施。		2004.04.01	2004年度担当科目「専門演習5」について、メーリングリストによって受講者間でのディスカッションを展開している。 2004年4月～現在			
2) 外国語学会日本語部会教職プロジェクトの活動指導		2004.04.01	本学着任時1999年より教職課程委員会委員をつとめ、また、1999年より外国語学会日本語部会委員として、日本語部会の学生の活動組織として、教職・日本語教師・就職・日本文化の4つのプロジェクトをたちあげ、4月新入生オリエンテーションに日本語部会学生役員の参加を実現し、現在まで教職プロジェクトの指導を継続している。5月「教育実習直前講座」、7月「教育実習直後講座」、10月「高校授業見学」、11月「日本語学科卒業生の現職教員による教職講演会」を毎年、教員志望の学生が主体的に開催している。 2004.4.1～現在			
3) 日本学術振興会科学研究費補助金「茶の湯と座の文芸－『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の研究協議に、ゼミ学生が参加。		2004.04.25	日本学術振興会科学研究費補助金「茶の湯と座の文芸－『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」研究期間2004年4月～2007年3月。「語研フォーラム」(大東文化大学語学教育研究所)として、研究報告書を刊行。 ゼミ学生が参加して、『茶譜』全十八巻の諸本の本文の校勘をおこなう研究会を開催、現在も継続中。			
4) 上記科研費による研究会を自主的に継続し、ゼミ学生が参加。		2007.04.20	ゼミ学生が参加して、『茶譜』全十八巻の諸本の本文の校勘をおこなう研究会を開催、現在も継続中。2007.4.20～2008.3.31			
5) 上記科研費による研究会を、大東文化大学東洋研究所「茶の湯と座の文芸」研究班として新たに発足。『茶譜巻一注釈』刊行を目的とする研究会に、ゼミ学生が参加。		2008.04.01	ゼミ学生が参加して、『茶譜』全十八巻の諸本の本文の校勘をおこなう研究会を開催、現在も継続中。2008.4.1～現在			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『蔵中しのぶゼミ卒業論文集』第1号～第3号		2004.03.25	ゼミ学生全員の卒業論文を掲載した論文集第1～3号を刊行。 ゼミ学生が主体的に卒業論文集を作成、製本して、大学院博士課程後期課程の発足まで、3年間発行。			
2) 『蔵中しのぶゼミ合宿のしおり』		2004.07.25	二泊三日でおこなうゼミ合宿の見学地について、学生が分担して調べて作成する合宿のしおりを作成。 ゼミ学生が主体的にゼミ合宿の計画を練り上げるとともに、「ゼミ合宿のしおり」を作成、製本して現地に持参し、現地で発表する。 現在も継続中。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)		

著書				
1 藝文類聚(巻第十五) 訓読付索引	共著	2005.02.25	大東文化大学東洋研究所	紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校訂の『藝文類聚』(上海古籍出版社)をテキストとし、各項目ごとに原文・校異・訓読文・現行本の所在を示す《注》を置き、巻末に索引を付す。文部省認定学術図書。共著者 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班。代表 遠藤光正・藏中しのぶ・中林史郎・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸。本文 pp.1-93、索引
2 藝文類聚(巻第十六) 訓読付索引	共著	2006.03.25	大東文化大学東洋研究所	紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校訂の『藝文類聚』(上海古籍出版社)をテキストとし、各項目ごとに原文・校異・訓読文・現行本の所在を示す《注》を置き、巻末に索引を付す。文部省認定学術図書。共著者 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班。代表 遠藤光正・藏中しのぶ・中林史郎・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸。本文 pp.1-75、索引 pp.1-43。
3 翰林学士集注釈	共著	2006.03.25	大東文化大学東洋研究所	初唐太宗周辺の君臣唱和詩を収録し、本朝にのみ伝存する『翰林学士集』は、他書に見えない詩篇を多く収載し、奈良平安朝の漢詩文に多大な影響を与えた。真福寺本を底本とし、陳矩書写本との校訂をおこなった校訂本文・校勘・訓読文・語釈・現代語訳・考察を付した注釈である。共著者：福田俊昭・藏中しのぶ・藏中進。本文 pp.1-540。
4 「茶の湯と座の文芸 - 『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」研究成果報告書	編著	2007.02.15	大東文化大学語学教育研究所	本文 pp 1-215。
5 藝文類聚(巻八十) 訓読付索引	共著	2007.03.25	大東文化大学東洋研究所	紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校訂の『藝文類聚』(上海古籍出版社)をテキストとし、各項目ごとに原文・校異・訓読文・現行本の所在を示す《注》を置き、巻末に索引を付す。文部省認定学術図書。共著者 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班。代表 遠藤光正・藏中しのぶ・中林史郎・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸。本文 pp.1-93。
6 『東アジア比較文化研究』6・特集世界の中の日本学		2007.06.01	東アジア比較文化国際会議 日本支部	編著・責任編集
7 『藝文類聚(巻八十一) 訓読付索引』	共著	2008.02.25	大東文化大学東洋研究所	紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校訂の『藝文類聚』(上海古籍出版社)をテキストとし、各項目ごとに原文・校異・訓読文・現行本の所在を示す《注》を置き、巻末に索引を付す。文部省認定学術図書。共著者 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班。代表 遠藤光正・藏中しのぶ・中林史郎・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸。
8 『延暦僧録』注釈	単著	2008.03.25	大東文化大学東洋研究所	本文 pp.1-378。
9 『茶譜 巻一 注釈』		2009.03.25	大東文化大学東洋研究所	本文 pp.1-230 『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661~1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚 編纂した茶道百科事典ともいうべき性格を備えている。本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本(国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本)すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。藏中しのぶ・福田 俊昭・相田 満・安保 博史・矢ヶ崎 善太郎・渡辺 信和共著
10 『藝文類聚(巻八十二) 訓読付索引』	共著	2009.03.25	大東文化大学東洋研究所	紹興年間宋刻本を底本とする汪紹楹校訂の『藝文類聚』(上海古籍出版社)をテキストとし、各項目ごとに原文・校異・訓読文・現行本の所在を示す《注》を置き、巻末に索引を付す。文部省認定学術図書。共著者 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班。代表 遠藤光正・藏中しのぶ・中林史郎・成田守・浜口俊裕・日吉盛幸。
論文				

1	『和漢朗詠集』絵入り 版本の版種－貞享元 年刊「絵入」と貞享三 年刊「絵入頭書」－	単	2004.08.15	『ナオ・デ・ラ・チーナ 複合研究域としての出版文 化文化論』第6号(文部 科学省科学研究費特定領域 研究「東アジア出版文化の 研究」事務局)	pp21-24.『和漢朗詠集』絵入り版本のうち、最初の絵入り版 本貞享元年刊「絵入」と同じ挿絵をもちながらも、頭書が付 された貞享三年刊「絵入頭書」について、両者の先後関係を 論じ、「絵入頭書」が遅れて成立したことをあきらかにした。
2	『唐大和上東征伝』に おける「大和上之影」 と「禪師影像」		2004.10.15	『説話論集 第十四集 中 国と日本の説話II』(清文 堂)	pp191-210
3	塔のオントロジー『長 谷寺銅版法華説相図 銘』と長安西明寺の類 聚編纂書群－	単	2005.03.31	『和漢古典学のオントロ ジ』2(国文学研究資料館)	pp47-64.平成15年度科学研究費助成金(基盤研究(B))和 漢古典学のオントロジモデルの構築・第2年度(平成16年 度)調査報告。『長谷寺銅版法華説相図銘』の出典群が、長 安西明寺の道世の著『諸経要集』敬塔部・『法苑珠林』敬塔 篇に一致すること、道宣撰『広弘明集』に出典をもつことを 考証し、その影響関係に奈良末の大安寺文化圏の揺曳を指摘 した。さらに、玄奘訳『甚希有経』の引用は、『諸経要集』『法 苑珠林』に掲出する異訳『未曾有経』『無上依経』ではなく、 玄奘訳出経典という選択がはたらいたことを論じた。
4	巻六・一〇一八 巻十六・三八五三	単	2005.11.15	『セミナー 万葉の歌人と 作品 万葉秀歌抄』第十二 巻(和泉書院)	pp.172 pp.324
5	長安西明寺類聚編纂 書のオントロジとそ の受容－『諸経要集』 述意録・『法苑珠林』 述意部と『三宝絵』上 巻の構成		2006.00.00	『和漢古典学のオントロジ モデルの構築 研究成果報 告書』再録	pp.164-186
6	皇子文化圏と仏教の 交流－初唐文化と道 昭－		2006.08.00	『東アジア比較文化研究』 5 東アジア比較文化国際 学術会議日本支部	「論集・日本漢文学の今」、pp.2-14
7	兼将画五頂像一鋪－ 『唐大和上東征伝』 (宝暦十二年版本四 ウ)－		2006.10.00	『日本文学』第五五巻十号 日本文学協会	pp.44-49
8	薬師寺「仏足石記」所 引「西域伝」攷		2006.11.00	『東洋研究』161 大東文化 大学東洋研究所	pp.27-51
9	平城京の仏教－唐か らもたらされた文学 の場と体系 The Buddhism in Heijou-kyou－From China in the eighth century, the place of brought literature and system－		2007.03.00	『万葉古代学研究所研究年 報』5 万葉古代学研究所	
10	茶の湯と座の文芸		2007.03.00	大東文化大学東洋研究所報 大東文化大学東洋研究所	
11	光源氏と仏教に縁な き衆生・末摘花－仏像 によそえられる人物		2008.03.21	『アジア遊学』108号	pp.70-71
12	『茶譜』における茶室 寸法の原拠 －「寸法ノ書付」と「大 工ノ言葉」－		2008.03.31	『kabnnken News Letter』第2・3合併号池 坊短期大学華道文化研究所	
13	鑑真和上の肖像 －キャラクター形成 と伝記叙述－		2009.01.21	『アジア遊学・古典キャラ クターの展開』第11号 勉 誠出版	
14	三つの鑑真伝－玄奘 伝から鑑真伝へ－		2009.03.25	『東洋研究』第171号 大 東文化大学東洋研究所	

15	『茶譜』の出典体系 —千利休流・小堀遠州 流・古田織部流・金森 宗和流—		2009.03.25	『茶譜巻一注釈』 大東文 化大学東洋研究所	
16	『南天竺婆羅門僧正 碑并序』注釈	編著	2009.04.19	『水門一言葉と歴史—』第 21号 水門の会	
その他					
1	日本文学における 「座」の意味	単	2004.07.19	平成 16 年度科学研究費プ ロジェクト：基盤研究 (C) 「茶の湯と座の文芸の本質 の研究—『茶譜』を軸とす る知的体系の継承と人的ネ ットワーク—」第 2 回研究 協議・研究発表	於 日本大学。
2	『茶譜』「紹陽までの 茶湯座敷」	単	2004.09.09	平成 16 年度科学研究費プ ロジェクト：基盤研究 (C) 「茶の湯と座の文芸の本質 の研究—『茶譜』を軸とす る知的体系の継承と人的ネ ットワーク—」第 5 回研究 協議・研究発表	於 日本大学。
3	万葉集と藤原京	単	2004.10.09	ムーンライト IN 藤原京 2004 第一部歴史シンポ ジウム Vol. 1 『藤原京と 人・歌・ロマン』講演 (ム ーンライト I N 藤原京実行 委員会)	於 奈良県社会福祉総合センター・大ホール。
4	源氏物語の鑑賞と基 礎知識 No.36 蓬 生・関屋		2004.10.10	至文堂	補助論文：「栄華、その後—夕顔・末摘花と『白氏文集』「凶 宅」(pp.30-31)、「『萌え出づる春』の享受と流伝 (pp.46-47)、「仏教に縁なき末摘花—末摘花は周利槃特か —」(pp.54-55)、「三径における「荒」と「貧」—蔣詒・陶 淵明・白居易」(pp.58-59)、「雨そそぎ—催馬楽・東屋— (pp.90-91)、「漢訳仏典と『塔こぼちたる人』」 (pp.102-103)、「石山寺と王朝文学—『石山寺縁起絵巻』か ら—」(pp.126-129)、「石山寺の本尊—如意輪観音半跏像 —」(pp.132-133)
5	長安西明寺の類聚編 纂書のオントロジー 『集神州三宝感通録』 から『法苑珠林』へ—	単	2004.10.28	平成 16 年度科学研究費プ ロジェクト：基盤研究 (B) 「和漢古典学のオントロ ジ・モデルの構築」共同研 究会・研究発表	於 国文学研究資料館。
6	藤原京の寺院ネット ワーク		2004.10.30	日本文学研究会・研究発表	於 大東文化大学板橋校舎。
7	塔のオントロジー—長 安西明寺の類聚編纂 書をめぐって—	単	2005.01.21	平成 16 年度科学研究費プ ロジェクト：基盤研究 (B) 「和漢古典学のオントロ ジ・モデルの構築」共同研 究会・研究発表	於 国文学研究資料館。
8	万葉集と藤原京		2005.02.01	歴史シンポジウム Vol. 1 『藤原京と人・歌・ロマン』 (ムーンライト I N 藤原京 実行委員会)	pp24-32
9	類聚編纂書と出典論		2005.03.31	『文学語学』第 181 号 (特 集) 平成十五年(自 1 月～至 12 月)国語国文学界の動向 (全国大学国語国文学会)	pp53-55
10	入唐留学生井真成と 日本文学		2005.04.01	『あざみ』第 18 号、(薊の 会)	pp16-18

11	長安西明寺の類聚編纂書と藤原京一平城京・大安寺文化圏をさかのぼる一	単著	2005.04.23	仏教文学会本部四月例会・上代小特集	於 京都女子大学。
12	奈良朝の仏教と文学	単著	2005.09.05	インターナショナル・ワークショップ「日本文学と漢文学古語の諸問題」	チェコ・カレル大学
13	茶の湯と座の文芸	単著	2005.09.05	インターナショナル・ワークショップ「茶の湯と座の文芸」	チェコ・カレル大学
14	上代漢文研究の広がり		2006.06.00	『日本語日本文学研究の新たな視座』 全国大学国語国文学会	pp.73-81
15	平城京の仏教一唐からもたらされた文学の場と体系 The Buddhism in Heijou-kyou-From China in the eighth century, the place of brought literature and system一	単著	2006.10.08	第8回万葉古代学研究所公開シンポジウム「万葉集と平城京一万葉集を成り立たせたものを探る一」基調報告・パネルディスカッション	奈良県立万葉文化館
16	道慈とその時代		2006.11.02	大安寺道慈忌講演 奈良・大安寺	
17	茶の湯と座の文芸		2006.11.30	大東文化大学東洋研究所公開講座 大東文化会館	
18	辺境のジャータカ一『延暦僧録』天皇菩薩伝・皇后菩薩伝一		2007.06.29	「人物キャラクターの視点による前近代文学史構築の研究」研究協議	同朋大学
19	唐僧思託による類聚編纂書としての『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』一凝然撰『律宗祖師伝』佚文から一	単著	2007.10.28	説話研究会	筑波大学
20	三つの鑑真伝一『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』『唐大和上東征伝』『延暦僧録』をめぐる一	単著	2007.11.10	仏教文学会東部11月例会《小特集・祖師高僧伝》	芝・増上寺
21	光源氏と仏教に縁なき衆生・未摘花一仏像によそえられる人物一	単著	2007.12.07	「人物キャラクターの視点による前近代文学史構築の研究」研究協議	国立台湾大学
22	上代における初唐文化の受容一「新羅学生審祥経典目録」と大安寺文化圏一	単著	2008.09.10	水門の会9月例会	ユニバープラザ UNITY
23	イメージで見る上代・中古の文学	単著	2008.09.24	サレント大学・大東文化大学共催インターナショナル・ワークショップ「イメージで見る日本の文化」講演	イタリア・国立サレント大学
24	鑑真をめぐる奈良時代の伝記文学	単著	2008.09.28	国際講演会「上代における日中比較研究」	イタリア・国立サレント大学
25	大安寺文化圏と鑑真伝		2009.02.25	入唐求法巡礼記研究会	國學院大學

26	Ninsho's Toseiden'e and Jianzhen's Legacy in Medieval Ritsu(Vinaya) Communitis 中世律宗における忍性の『東征伝絵』と鑑真の伝記	単著	2009.03.29	Association for Asian Studies 2009 Annnal Meeting	Sheraton Chicago SESSON 226. Communicating Religious Legitimacy and Authenticity in the Medieval Saidaiji Order
----	---	----	------------	--	--

III 学会等および社会における主な活動					
1	1985.00.00	～	現在	中古文学会会員	
2	1986.00.00	～	現在	仏教文学会会員（平成6年度～9年度 役員、平成10年度～現在 委員、平成18年度～現在 編集委員）	
3	1986.00.00	～	現在	和漢比較文学会会員（平成7年度～現在 常任理事、平成13年度 日中比較文学国際学術検討会実行委員、同論集編集委員）	
4	1986.00.00	～	現在	萬葉学会会員	
5	1986.11.01	～	現在	水門の会会員	
6	1988.00.00	～	現在	古代文学会会員（平成12年度～現在 維持会員、平成12年度～13年度 例会委員、平成13年度例会500回記念シンポジウム「古代文学研究の新世紀へ」実行委員）	
7	1988.00.00	～	現在	上代文学会会員（平成13年度～現在 理事、平成15年度～現在 常任理事（編集））	
8	1988.00.00	～	現在	日本文学協会会員（平成9年度～平成13年度 委員）	
9	1988.00.00	～	現在	美夫君志会会員	
10	2000.06.12	～	現在	古事記学会会員	
11	2001.04.01	～	現在	茶の湯文化学会会員	
12	2002.02.01	～	現在	財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所客員研究員	
13	2002.11.01	～	現在	仏教史学会会員	
14	2004.01.01	～	現在	全国大学国語国文学会会員（平成19年7月1日～現在 委員）	
15	2004.01.01	～	現在	東アジア比較文化国際学術会議日本支部編集委員（平成19年度～現在）	
16	2006.04.01	～	現在	中国・東北師範大学客座教授	

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	教授	氏名	田口 悦男	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 日本語学科学生の留学支援				(現在まで) 学科創設当初より、英語圏の大学、語学学校に留学を希望する学生に、個別面談や学習相談などを通して留学の開始から終了までを支援し、多くの学生を派遣した。また、留学中も、異文化に順応し、授業に参加できるように電子メールを通じて支援をした。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) Essential Practice in TOEIC TEST: Vocabulary and Grammar		2006.04.01		開文社出版 英語語彙・文法学習のための大学用テキスト。B5版、総頁数 100 ページ。			
2) 新TOEIC TEST 600 点英文法スピード攻略		2007.05.00		こう書房 TOEIC 検定問題集。B5版、総頁数 215 ページ。			
3) 新TOEIC TEST これ1冊で 600 点突破リーディング問題集		2008.03.00		TOEIC リーディングセクション対策問題集。B5版、総頁数 223 ページ。			
4) Power Steps to TOEIC TEST Success: Vocabulary and Grammar		2009.02.01		開文社出版 英語語彙・文法学習のための大学用テキスト。B5版、総頁数 119 ページ。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 Developing Reading Fluency in EFL: How Assisted Repeated Reading and Extensive Reading Affect Fluency Development.	共著	2004.00.00	Reading in a Foreign Language, Vol.16, No.2 Available [online]: http://www.nflrc.hawaii.edu/rfl/October2004/taguchi/taguchi.html [平成13年度大東文化大学特別研究費助成]	Taguchi, E., Takayasu-Maass, M., & Gorsuch, G.J. (2004). 70-96. 多読と反復読みが第二言語の読みの流暢さに与える影響の検証。レフェリー制の国際学術誌。			
2 A Comparative Study of Two Methods on Building Reading Fluency in EFL: Repeated Reading vs Extensive Reading.	共著	2004.00.00	Language, Education, & Technology, Vol.41, [平成13年度大東文化大学特別研究費助成]	Taguchi, E., Takayasu-Maass, M., & O'Neill, T. (2004). 179-198. 第2言語の読みの流暢さの発達が理解度と与える影響の検証。レフェリー制の国内学術誌。			

3	Repeated readings : A simple yet powerful method to improve reading fluency in English as a foreign language.	単著	2004.00.00	『語学教育の方法論構築に向けて』(大東文化大学語学教育研究所)	Taguchi, E.(2004). PP.3-18.
4	A Study of two methods for developing lower identification skills of EFL readers : Quantitative and qualitative analyses.	共著	2004.09.25	Proceedings of the First International Online Conference on Second and Foreign Language Teaching and Research.	Taguchi, E., Takayasu-Maass, M.,& Gorsuch, G.J. (2004). 25-26.多読と反復読みが第二言語の読みの流暢さの発達に与える影響の質的・量的検証。
5	Developing second and foreign language reading fluency and its effect on comprehension: A missing link.	共著	2006.09.00	The Reading Matrix 6(2) (平成 16 年度大東文化大学特別研究費助成)	Taguchi, E., Gorsuch, G.J., & Sasamoto, E. 第二言語の読みにおける下位スキルと上位スキルとの相互作用を、読みの流暢さと理解度との関係から批判的に考察。自動化理論、および verbal efficiency 理論を対比させて先行研究の知見を論じ、今後の研究の方向性を示唆した。(18 ページ)。
6	Repeated reading for developing reading fluency. The case of EFL learners in Vietnam.	共著	2008.00.00	System, Vol.36, No.2	Gorsuch, G.J., & Taguchi, E.
その他					
1	How repeated reading affects advanced-level proficiency Japanese readers of EFL: A diary study.	単著	2008.00.00	AILA2008 (World Congress of Applied Linguistics)	
III 学会等および社会における主な活動					
1	1992.04.01	～	現在	International Reading Association 会員	
2	1993.04.01	～	現在	大学英語教育学会会員 (平成 20 年度～現在広報・通信委員会副委員長)	
3	1995.04.01	～	現在	外国語メディア学会会員	
4	2005.04.01	～	現在	日本先端メディア外国語教育学会会員 (平成 20 年度～現在評議員)	
5	2006.04.01	～	現在	日本 e-Learning 学会会員 (平成 20 年度～現在理事)	
6	2007.05.23	～	現在	“Reading in a Foreign Language” external reviewer (平成 19 年～現在)	
7	2008.05.00	～	現在	“The Modern Language Journal” external reviewer (平成 20 年～現在)	

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	教授	氏名	田中 寛	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 集中講義 中国・南京の東南大学 2006.9.4-9.9		2006.09.04	東南大学の外国語学部日本語学科の学生、院生、教員を対象に日本語文法の諸問題、および上級学習者のための小説読解(吉村昭、倉橋由美子などの作品)の授業を担当。				
2) 集中講義 中国・長沙の湖南大学 2006.9.10-15		2006.09.10	湖南大学外国語学院日本語学科の学生、院生、教員を対象に、日本語文法の諸問題および上級学習者のための小説読解(三島由紀夫、村上春樹などの作品)の授業を担当。				
3) NPO法人埼玉県日本中国友好協会会長に就任(2007.7.1付)。		2007.07.01	『日本と中国』第567号にインタビュー記事の紹介。				
4) 【インタビュー記事】週刊タイ経済 N0568 週刊タイ経済印刷		現在	シリーズ「タイ交差点」の402回に人物紹介として掲載。1970年代のタイにおける日本語教育、および当時の日タイ関係についての貴重な紹介記事となっている。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『まずはこれだけ中国語』	共著	2004.05.00	国際語学社	白愛仙氏との共著。はじめて中国語を学ぶ人のために発音、基本語彙、基本文型をやさしく解説した入門書。文字も見やすく、最重要点が効率よく学べるよう配慮した。A5版 132p			
2 『日本語学・日本語教育学のために』	単著	2006.02.00	私家版	これまでに方々で発表された日本語論、日本語教育に関する論考のほかに新たに数編を加えて多言語・多文化共生社会に生きるために日本語研究、日本語教育が何をなすべきかを解説した。日本語教育と外国語教育、文学教育、異文化理解教育など多角的な論考を収録。英国ロンドン大学 SOAS 所蔵の漱石文献目録なども紹介した。A5版 364p			
3 『はじめての人のための日本語の教え方ハンドブック』	単著	2006.03.00	国際語学社	これまでの日本語教育、日本語学研究成果を生かして、「文の仕組みが分かる、文の仕組みを教える」を基本に、文法面から解説した初級日本語教本。入門期の指導から始まり、全50課にわたる実践的な内容は豊富な例文、分かりやすい説明で初心者にもすぐ始められる教授法を展開。著者の経験にもとづいた授業に役立つコラム記事を多数掲載した。A5版 456p			

4	「タイ語の条件表現をめぐって——日本語とタイ語の対照研究」	単著	2006.10.00	益岡隆志編『条件表現の対照』くろしお出版	p.126-153 言語対照シリーズの一冊として、中国語、韓国語、スペイン語、英語などとともにタイ語の条件表現を担当。時間節との交渉、および明確な関連語などのマーカーをもたない意味的な連結法（意合法）についても日本語との対照比較の視点から考察を行った。2005年7月に神戸で行われた「条件表現の対照シンポジウム」で発表した内容を修正、加筆した。P99～125
5	『パーフェクトフレーズ 日常会話タイ語』	監修	2007.10.00	アサダーユット・チュウシー著、田中寛監修 国際語学社	場面ごとに約2000の会話例を収録、日常生活で使用頻度の高い文例を自然なスピードで習得できるように録音にも工夫を凝らした。また単元ごとに日本とタイの言語文化にもふれて、現地での生活案内書的な役割を担っている。会話を習得しながら、日タイ語の言語表現の比較対照にも関心が向けられるように構成にも配慮されている。B6版 271P
6	『恥と隠蔽の言語学「表徴」する日本語の発想と心理』（私家版）	単著	2008.03.00	私家版	p542 日常身の言い回しや慣用的な表現を例に日本語の発想と心理を明らかにする。第一部は日本語のナショナリズム論、敬語論、第二部と第三部は日本語の特徴的な表現をとりあげ、伝達する表現、伝達しない表現の構造を比較言語文化論の視点から詳しく記述した。第四部は日本的なるものの記述をキー概念として受身、形式名詞などをとりあげ、文化論的に記述した。第五部は最近の日本語論、文体論、文学と言語の関係などを取り上げた。A5版 554P
7	田中寛・関口伊都子監修、応用日本語学研究会編集『外国人学習者のための上級日本語教科書 読解の森』p198	共著・監修	2009.03.00	私家版（大東文化大学留学生日本語用）	本学留学生日本語教育に使用される上級日本語学習者の読解教科書として、試用版を作成した。全16課より構成され、本文には小説、評論、エッセイ、新聞、シナリオなどさまざまなジャンルを収録、多様な文体に習熟することにより、日本語表現の豊かさが身につくよう配慮した。各課には言語事項と文型表現と例文を付した。B5版 195P
論文					
1	「戦後世代の八月—欧州からの断想—」	単著	2004.00.00	『文芸秩父』第128号 秩父文化の会	戦後世代の「戦争体験」を基軸に、今日の平和教育、反戦教育がどのような局面にさしかかっているかを、最近の日中、日韓関係を視野に入れながら検証した。後半では松本清張『北の詩人』をとりあげ、日本帝国主義と戦後の朝鮮半島の分断、混迷を議論した。P.55-61
2	書評「森田良行著『日本語文法の発想』」	単著	2004.10.00	『国語学』第54号 武蔵野書院	長年、日本語文法研究に従事してきた森田良行氏の文法論を『日本語文法の発想』を通して紹介した書評。本書の全体的な構成、各章の紹介をおこなった。合わせて「私」「己」をあらわす日本語の主体が文法研究のなかでどのような実効性をもたらしたかを議論した。日本語学会からの依頼論文であり、ロンドンで執筆された。P.167-175
3	「漱石のロンドン」（上）	単著	2004.10.00	『大東文化新聞』第292号 大東文化学園	英国滞在中に訪れたロンドンの漱石記念館。漱石の留学中に考えた近代日本と日本人の自我、異文化観が今日の日本に及ぼした影響について所感を述べた。また、最近の漱石をめぐる研究、関心の動向についても記述した。
4	「否定文末形式の意味と機能」	単著	2004.11.00	『講座日本語教育』第40分冊 早稲田大学日本語研究教育センター	「ないものでもない」「ないこともない」「ないはずがない」など、否定文末形式の意味と機能を豊富な用例を用いて記述検討した。また、これらの述語表現が複文のなかでどのように現れるか、さらに語用論的な用法についてもいくつかの特徴を指摘した。P.59-92
5	「漱石のロンドン」（下）	単著	2004.11.00	『大東文化新聞』第293号 大東文化学園	英国滞在中に訪れたロンドンの漱石記念館。漱石の留学中に考えた近代日本と日本人の自我、異文化観が今日の日本に及ぼした影響について所感を述べた。また、最近の漱石をめぐる研究、関心の動向についても記述した。
6	「文法的思考について」	単著	2005.03.00	『外国語学会誌』大東文化大学外国語学会 第29号	文法研究の意図するもの、その方法論を主として日本語複文の研究、対照研究を材料として多角的に議論したエッセイ。一部に、比較言語論、日英言語文化比較論を含む。P.56-76
7	「条件文と条件表現の体系的研究：序説」	単著	2005.03.00	『大東文化大学紀要』（人文科学）第43号	日本語の条件表現の体系的な研究の序章として、条件表現と言語生活、各種形式の遺棄と機能などのおおまかな輪郭、射程を述べた。主要形式のほか、個別的な形式「ないことには」「ない限り」「た日には」なども合わせて考察した。P.277-304

8	「日本語教育と日本語研究の国際化について—欧州の日本語教育を見聞して—」	単著	2005.11.00	『講座日本語教育』第41分冊 早稲田大学日本語研究教育センター	2004年度の長期海外研究として英国ロンドン大学に滞在した際に見聞した欧州における日本語教育、日本語研究の現況についての紹介。リヨンで行なわれた国際会議、オックスフォードで行なわれた日本語教育学会の参加を通して、内包する日本語教育の諸問題を多角的に検討、議論した。アジアにおける日本語教育と比較しながら、日本語教育の抱える国際性について日本人教師、現地人日本語教師のあり方を再考した。P.144-164
9	「タイ語条件表現の研究—条件節と時間節における文の叙述—」	単著	2006.03.00	『大東文化大学紀要』第44号	タイ語の条件表現の概要について時間節、条件節、名詞節、目的節などとの交渉において記述したもの。一方、接続標識を用いない条件形式については口語的な成立要件を〈談話の情報共有〉に重点を置くことによって検証、伝達性における簡潔さを指摘した。P.203-247
10	「“きっかけ”をあらわす構文の機能」	単著	2006.03.00	『指向』第3号 大東文化大学大学院外国語学研究所 日本語学専攻研究誌	「を機に」「を契機に」「をきっかけに」などの構文を原因理由をあらわす複文の一類型として記述し、それぞれの意味用法の違いを検討した。あわせて「をピークに」「を最後に」といった契機をあらわす後置詞、複合辞についても用法を解説した。P.3-15
11	「資料：英国ロンドン大学 SOAS 図書館所蔵 戦前・戦中に刊行された国語学・日本語学関係文献目録」	単著	2006.03.00	『外国語学研究』第7号 大東文化大学大学院外国語学研究所	ロンドン大学東洋アフリカ学院の図書館にはアジア学関係の資料が多く所蔵されているが、本稿では戦前・戦中期における国語学、日本語学関係の文献を、文字学、文法学、方言学、辞書学、音声学などのジャンルに分類し、これを年代順に配列した。これにより、欧州における日本語学研究の関心の一端をうかがう資料とした。P.79-92
12	書評：志々田文明著「武道の教育力——満洲国・建国大学における武道教育」	単著	2006.04.00	『植民地教育史研究年報』第8号 皓星社	満洲国の最高学府であった建国大学における武道教育について書かれた著作の書評。武道教育の本質を見据え、かつ異文化理解、民族教育との意識的な交差によって生じる諸問題を指摘し、本書に示された積極的評価に関して批判的な論評を展開した。148-155
13	「漱石の書窓（一）」	単著	2006.10.00	『倫敦木曜会』第2号 英国・ロンドン、倫敦木曜会	英国・ロンドンに本部を置く倫敦木曜会の機関誌に寄稿したエッセイ。漱石にちなんだ書籍、随筆などを近年に刊行されたものを中心に十数点を紹介した。
14	「川の記憶（二）」	単著	2006.10.00	『倫敦木曜会』第2号 英国・ロンドン、倫敦木曜会	英国・ロンドンに本部を置く倫敦木曜会の機関誌に寄稿したエッセイ。「川」にまつわる少年時代の記憶をオムニバス風に描いた。連作の第二編。
15	『記憶』（私家版）創作集	単著	2006.10.00		「八月のハルビン—731部隊遺跡に立ちて」、「記憶」、「恩讐の谷」などの中編、短編および評論「戦後世代の八月に」を収めた創作集。
16	「中国南京・湖南における日本語教育事情」	単著	2007.03.00	『語学教育研究論叢』24号 大東文化大学語学教育研究所	2006年9月に中国の南京にある東南大学、また湖南省の長沙にある湖南大学でそれぞれ集中講義を行ったときの記録、および当地の日本語教育の概況を紹介した。
17	「否定文末表現の意味と機能——否定の論理と倫理的な意味」	単著	2007.03.00	『外国語学研究』第8号 大東文化大学大学院外国語学研究所	「ためしがない」「わけがない」などの否定文末表現の形式を複文構造における出現という視点から考察した。また、「言いたくも言えない」「言うに言えない」などの運動表現の形式についても考察を加えた。
18	「江南・華中遊記——南京、湖南再訪の旅から」	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要』（人文科学）45号 大東文化大学	2006年9月に訪れた南京、および湖南省の長沙を舞台に、かつて当地を訪れた芥川龍之介の紀行文を再読、またその足跡をたどった。南京では南京大虐殺記念館を再訪、長沙では湖南第一師範の展示について紹介した。
19	「村上春樹文学の内包する多元言語文化」	単著	2007.03.00	『指向』第4号 大東文化大学大学院日本語学専攻誌	世界文学として各国語に翻訳されている村上春樹の文学作品を解析、日本語の文体および素材、モチーフについて若干の考察を行った。
20	「日本語論のなかの敬語論」	単著	2007.03.00	『指向』第4号 大東文化大学大学院日本語学専攻誌	昨今の文科省、文化庁の国語政策に見られる敬語論について、新聞の論評などを検討した。また、最近の日本人の敬語意識、待遇表現の関心などについても言及した。
21	「<しかたがない><やむをえない>考——“表出”をめぐる考察」	単著	2008.03.00	『外国語学会誌』37号 大東文化大学外国語学会	「しかたがない」「やむをえない」という語彙を文脈的にとらえ、どのような場面的なプロセスで現れるかを“表出”という新しいモダリティを想定しながら検討した。言語データとしては社説をとりあげ、不特定多数の読者、聞き手を意識した主張、伝達の指向性について議論した。なお、関連的な文末表現として「てならない」「てしかたがない」などとの関連性についても触れている。

22	「確信と判断の交渉—<にちがいない>と<のはまちがいない>」	単著	2008.03.00	『外国語学研究』第9号 大東文化大学大学院外国語学研究所	認識のモダリティのなかで「はずだ」と比較対照されることの多い「にちがいない」文を“表出”の一過程としてとらえ、未決の判断との交渉を観察、議論した。その結果、「のはまちがいない」との比較でその伝達の特徴を明らかにした。「に決まっている」「のはかたい」などの表現にも言及、判断への傾斜の要件を中国語訳などを精査しながら検証した。
23	「条件と可能性・蓋然性のモダリティー—<かもしれない><かねない>とその周辺」	単著	2008.03.00	『大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集』	これまで静的な説明として「かもしれない」を推量を表す形式として扱われてきたのを、当該の条件のもとで可能性、蓋然性をあらわす形式として捉え、さらに「かねない」「可能性がある」「恐れがある」「ところだった」などとの形式を取り上げ、比較考察した。言語データとして新聞社説を取り上げ、発話意図、文脈性などを明らかにした。また、確信をあらわすモダリティーとの対照性についても議論を加えた。
24	「高橋和巳『墮落』にみる〈理想〉の悲劇性—文学における戦争責任と戦後認識」	単著	2008.03.00	『大東文化大学紀要』(人文科学) 第46号	p.51-84 一九六〇年代の文学状況において三島由紀夫とやらんで時代の寵児とされた高橋和巳の文学的条理を戦後責任という角度から再検証した。作品『墮落』の構成を検証するとともに、その閉ざされた心理空間を登場人物の心理面から議論した。とくに知識人の抱く「理想」の悲劇性という現実との相克に焦点を当てて考察した。同時に作品の生まれる時代背景の混沌を、作者の生きた時代認識と合わせて検証する必要性を強調した。また、戦後文学の継承的意味についても再検討した。論文末尾に高橋和巳研究文献目録を収録。
25	「誤用例からみた否定文末形式の使用状況」	単著	2008.03.00	『指向』第5号 大東文化大学大学院外国語学研究所 日本語文化学専攻	上級日本語学習者の作文例を対象に、否定表現がどのような文脈で現れるのかを考察した。また、そこで表現の適格性を検討し、文の自然さ、不自然さの生まれる背景、誤用の発想的相違点を明らかにしようと努めた。文を環境のなかで機能的にとらえ、発信するためには当該文型の習熟だけでは不十分である。場面のなかで主体が情報をどのように発信し、伝達するかという意識が重要である。この点を論文では論証した。
26	「英国ロンドン大学SOASに所蔵されたる稀少文献」	単著	2008.03.00	『植民地教育史研究年報』第10号 皓星社	p.83-92 …英国ロンドン大学SOAS図書館に所蔵されている稀少文献についての紹介。主として戦前、戦中の文学書、言語研究、教科書類を取り上げ、その傾向、文献学的特徴を述べた。とくに海外における日本語教育の普及の実態に焦点を当てて解説した。
27	「シンポジウムを振り返って」	単著	2008.03.00	『植民地教育史研究年報』第10号 皓星社	p.13-18 第10回目を迎えた日本植民地教育史研究会大会を司会者の立場から総括した。2007年の3月に仙台の宮城女学院大学で開催された教科書比較研究では音楽、物理などの教科書を植民地、国内の教科書と比較検討することにより、教えたかったこと教えられなかったことの倫理的問題を明らかにしようとした。この視点は現在なお、海外で教科書を開発する立場においてもなお示唆的であるように思われる。
28	「みだりに車外に出ると危険です—「ト」の事象性にみる結果指向と公共意識」	単著	2008.10.00	『言語』2008.10月号 p62-69 大修館書店	特集記事「例解日本語の条件表現」の1編として掲載(依頼原稿)。「ト」条件文には当該現象の提示とともに、ある種の社会的集団の営みを構成・維持する際のアイテムを再認識させる特徴がある。「ト」に内在する機能性を観察することで、事象と認識を接続させ、日本語特有の事象・出来事の「所与」・「所属」の関係性が見えてくる。
29	「夏目漱石「満韓ところどころ」の憂鬱—言語表現にみる中国・朝鮮観を中心に—」	単著	2009.03.00	『大東文化大学紀要』第47号 p23-44 大東文化大学	漱石の海外体験の一つである一九〇九年の満洲・朝鮮への旅を検分し、そこに見られる観察の文体、語法と語彙の特徴を観察しながら、あわせて中国、朝鮮に対する日本の知識人の見方、差別意識などを分析した。「余」という人称代名詞の語りの用法に注目し、判断留保的な叙述の構造を各表現に沿いながら、解説を試みた。
30	「言語行動からみた発話行為と文法—<禁止>の構文をめぐって」	単著	2009.03.00	『語学教育研究論叢』第26号 p.237-260 大東文化大学語学教育研究所	「てはいけない」をはじめとする日本語の禁止表現の特徴を意味と機能の面から考察した。とくに言語行動という面から直接行為、間接行為に分類し、日本語独自の禁止構文の婉曲性について議論した。また、「ことはない」「どこではない」などの周辺的な用法についても具体例をあげながら考察した。

31	「第四回中国日本語研究教育国際シンポジウムの開催」	単著	2009.03.00	『日本語学』vol.28-3 p.50-59 明治書院	2008年9月に中国・湖南大学で開催された日本語研究教育国際シンポジウムの概要をプログラムに沿って報告すると同時に、ここ数年における中国の日本語研究、日本語教育の動向を観察しながら、将来の展望を論じた(寄稿原稿)。その結果、経済交流、人的交流を背景によりグローバルな角度から日本に関心が寄せられていることが分かった。
32	“説明”のモダリティ表現をめぐってー「ことだ」「ものだ」とその周辺ー	単著	現在	『外国語学会誌』第38号 p.99-124 大東文化大学外国語学会	多義的とも言われる名詞述語文のうち、形式名詞を核とする文末述語文について基本的意味、派生的意味を検討し、さらに「次第だ」「所存だ」「見通しだ」などの擬似的なモダリティを有する文末形式を分析した。また、「この頃だ」「私だ」などの連体修飾構造を受ける名詞文の「語り」の構造についても検証した。
33	上級日本語教科書『読解の森』について	単著	現在	『指向』第6号 p.103-108 大東文化大学大学院外国語学専攻	上級日本語学習者のための読解教材として開発した『読解の森』の制作過程、語彙記述の問題、例文の吟味など、さらに本書の使用法について解説した。アカデミックな読解テキストの制作に関して、今後の指針となる種々の提案を行った。
34	“応用日本語学”とは何かー日本語学と日本語教育学の統合をめざして	単著	現在	『外国語学研究』第10号 大東文化大学大学院外国語学専攻 p.187-194	2008.1.25に行われた本学日本語学専攻博士課程設置記念国際シンポジウムにおいて発表された草稿をもとにしたもの。従来の日本語学が日本語教育学との実践的整合性を備え、かつた認知言語学、対照言語学の成果を盛り込んだ応用日本語学を提唱した。
35	「レバ条件文における文脈的機能ー論理関係と節末・文末表現に注目してー」	単著	現在	『語学教育研究論叢』第23号 大東文化大学語学教育研究所	日本語の主要な条件形式のうち、論理性的なレバ形式について、従属節、主節に見られる判断的要素、モダリティ成分など文脈に関わる観点から考察した。従来、主観性といわれる特徴がタラ形式に集約されていた議論を修正し、レバにも道徳的主観性が強く作用している特徴を解説した。 P.167-190
その他					
1	「私の日本研究、日本語研究」		2004.09.22	英国国際教育研究所主催講演	日本人学生を対象に日本研究(日本文化事情研究、歴史研究)と日本語教育のあるべき姿について、実際の経験にもとづいて講義を行った。さらにアジア学の経験を生かしながら、日英文化交流のいくつかの視点についても語った。
2	「複文研究と日本語教育」		2004.10.24	ロンドン日本語センター学術講演	国際交流基金ロンドン日本語センターでの講演。在英日本語教師六〇名が参加した。これまでの日本語における複文研究の動向と、初級から中級にかけての実際の日本語教育の指導に関して講義した。
3	「存在表現とその導入について」		2005.01.17	ロンドン大学SOAS日本語学専攻授業担当	「XにYがいます・あります」「YはXにいます・あります」の二つの存在・位置表現の導入を主として初心者を対象にして、その相違点、注意点について講義を行った。さらに助数詞、位置詞の導入、展開についても解説を行った。対象は同大学日本語学科大学院生。
4	「中上級における日本語読解教育」		2005.02.09	ダーラム大学東アジア学部講演	自作の読解教材を用いながら新聞を用いた読解教育(本文、語彙、文型の導入)と文型教育、作文教育について講義した。対象は中上級日本語学習者、および日本語教師。
5	「新聞に見られる複合動詞について」		2005.03.12	シェフィールド大学東アジア学部講演	日本語を学ぶ学生を対象に、主として新聞紙上に頻出する補助動詞、複合動詞について解説した。なかでも「こむ」「かける」「ぬく」「だす」といった多義的な語彙構造について実際の用例を示しながら説明した。
6	「タイ語と日本語の条件表現の対照」		2005.07.00	対照研究フォーラム(神戸)	本フォーラムは複数言語による条件表現の考察を通して、条件表現の意味機能を多角的に議論するセミナー。タイ語の条件表現の基本構造をいくつかの明示的な標識タイプにもとづいて分類し、thaa, mua, phooなどの個別的な特徴を列記した。また、明示的な標識を用いない意合法の成立についても言及した。
7	「日本語教育と日中友好」		2005.09.00	中国南京・東南大学外国語学部記念講演	東南大学に学ぶ日本語学科の学生を対象に、日本語学の研究、日本語教育と日中友好の展望について講演を行い、また専門とする文法研究の方法論について紹介を行った。
8	「タイ語の条件表現」		2006.02.00	タイ国カセサート大学人文学部記念講義	タイ語の条件表現の概要を述べたのち、日本語と対照させながら、タイ人が誤用しやすい日本語の条件表現の諸問題について検討した。合わせて中級以降の文法の諸問題についても質疑応答を行った。

9	「湖南における戦争の記憶」	2006.10.14	A B C企画委員会主催、「敬蘭之さんをしのぶ会」。	湖南の長沙、常德における日中戦争時期の被害状況を新しい資料などを駆使し、紹介した。また2006年9月に訪問した南京および湖南省の印象などを講演した。
10	「戦争と感情の記憶」	2007.02.24	A B C企画委員会総会講演会。	日中戦争における日本の戦争責任と歴史感情について、中国との歴史認識との相違点をふまえながら講演した。
11	『母といた夏』（私家版）	2007.04.00		「父の言葉」、「母といた夏」、「春のあとさき」など計12編の短編小説を収録。少年時代の自伝的作品を中心に、故郷、家族などをオムニバス風に描く。350頁
12	「副詞、副詞相当成分に「つく」「は」の諸相」	2007.06.16	応用日本語学研究会（大東文化会館）	単純命題成分の提題化として、副詞「要は」「つまりは」など、また副詞節として「ためには」「ときには」などを取り上げ、伝達的な意図、表現効果を議論した。
13	「歴史和解とナショナリズム——日中韓の対話の視座をもとめて」	2007.09.09	中国天津・南開大学日本研究院、大東文化大学共催、日中韓三か国国際シンポジウム「近代化過程における東アジア三国の相互認識」中国・天津 2007/9/9-11	日本・大東文化大学と中国・南開大学日本研究院の共同開催による国際シンポジウムで、近年、論議の対象となっているナショナリズムと歴史認識問題、歴史和解の経緯、展望を述べ、将来の東アジアにおける知の共同体形成に必要とされる要件をいくつか述べた。
14	「誤用例からみる否定文末形式の使用状況」	2007.09.22	応用日本語学研究会（大東文化会館）	上級日本語学習者の作文から「無いわけではない」「なおモノではない」などの誤用例のいくつかをとりあげ、文脈に依存する文末否定表現の特徴を説明した。
15	「社会人のための日本語教授法講座」全12回	2007.10.07	地域連携センター主催、2007/10/7-2008/1/12 大東文化会館	はじめて外国人に日本語を教える人を対象に、初級教科書の構成、教授法を紹介するとともに、日本語の基本的な構造、文型、語彙表現の指導について講義した。また、日本語教育にまつわる異文化理解、教材開発、教案作成のノウハウについても指導した。
16	「日中戦争期における日本語教育の一端」	2007.10.17	植民地教育史研究会研究例会 大東文化会館	日中戦争期における宣撫班の日本語教育をはじめ、華北における初等教育のなかに置かれた日本語教育の実態を当時の報告書、記録をもとにその特徴を検証した。
17	「川の記憶（その三）」	2007.11.00	『倫敦木曜会』3号 英国 倫敦木曜会発行	英国・ロンドンに本部を置く「倫敦木曜会」の機関誌に連載しているエッセイ。2004年に滞在したロンドンの四季に輝くテムズの流れを過去の幾多の記憶と重ねながら描く。
18	「漱石の書窓」	2007.11.00	『倫敦木曜会』3号 英国 倫敦木曜会発行	この一年に刊行された漱石関係の研究書、一般教養書を紹介するコーナー。本編では計12点をとりあげ、概要を記した。
19	「<かもしれない><かねない>とその周辺」	2007.12.22	応用日本語学研究会（大東文化会館）	一定の条件のもとで表出される「かもしれない」のモダリティの特徴を再検討し、同時に「けなない」などの周縁的な表現との比較検討を行った。
20	「応用日本語学とは何か——日本語学からの問題提起」	2008.01.25	日本語文化学専攻開設記念国際シンポジウム・パネルディスカッション	シンポジウムの司会者として標題について総括発表。日本語学と日本語教育学を連携する可能性としての学問領域「応用日本語学」を提唱。対照研究の現況、言語行動論からみた文法研究の展望についても報告した。
21	「中国における日本語教育——過去と現在」	2008.01.25	ふじみ市市民大学講座「中国を知る」シリーズ講演 富士見市公民館	清朝末期からはじまる中国からの日本留学、およびそこで指標とされた日本語の習得と近代文明の摂取から「五四運動」を経て、親日から反日に転化していく過程を追いながら昨今の日本に留学する中国人の現在にスポットをあて、同時に過去（戦中および80年代）の日本語教育と現在の日本語教育の質的な変遷、学習者の意識構造について講演した。
22	「中国における731部隊研究の動向について」	2008.02.24	A B C企画委員会総会講演会 中野ゼロ	日本社会にはびこる食品偽装、隠ぺいといった現象からときおこし、昨今の中国冷凍食品の与えた毒性混入問題を提起、その背景にまだ清算されない旧日本軍「731部隊」および細菌戦の戦争責任をとりあげ、とくに中国においてこの10年に見られる研究の動向について文献紹介と今後の展望について述べた。
23	「私のなかのアジア、中国体験——青年期に何を体験したか」	2008.03.01	埼玉県青年活動委員会主催講演会（埼玉文化会館）	大学時代に中国と遭遇して以来、中国、東アジア、東南アジアにどう向かい合ってきたかを主として青年期に読んだ書物を紹介しながら、自己成長の過程をたどりながら、アジアとの相互理解の大切さを実体験から講演した。
24	「私が中国から学んだもの——自分史からの出発」	2008.03.15	N P O法人埼玉県日本中国友好協会女性委員会主催講演会（浦和市民会館）	大学時代に学んだ中国の近代思想とそこから生まれた中国への洞察の形成を自分史という視点から六つの時期（幼少年時代、大学時代、海外技術者研修協会、バンコク出向、湖南大学時代、大学教員時代および現在）に分けて講演した。

25	「現代中国を見る」	2008.06.12	於埼玉県行田市日中友好協会	一般社会人を対象に、現代中国を見る視角を具体的な事例にそって紹介した。昨今の日中によこたわる誤解、種々の問題意識をどう解決するか、東アジアの共生をふまえた対処法を提起した。NPO法人埼玉県日中友好協会の活動として行った。
26	「日本語の禁止表現をめぐって」	2008.09.20	於中国・湖南大学外国語学院、第四回日本語教育研究国際シンポジウム	「するな」「してはいけない」「しないこと」など、日本語の禁止表現に見られる位相を検証した。とくに社説にあらわれる「てはならない」の用法について詳しい報告を行った。
27	「夏目漱石「満韓ところどころ」の憂鬱」	2008.09.21	於中国・湖南大学外国語学院、第四回日本語教育研究国際シンポジウム	漱石の紀行文「満韓ところどころ」を材料に、そこにあらわれた語法、表現的特徴とともに、中国・朝鮮観、差別認識、ジェンダー意識などを再検証した。
28	「タイ語学習の方法」	2008.11.09	於タイ国・バンコク、泰日経済技術振興協会附属語学学校	在タイ邦人に対するタイ語教育の実践を念頭に、学習方法を言語文化、異文化理解の角度から実例を用意して講演した。参加者はタイ語学習者。
29	「タイにおける日本語教育—実践と回顧」	2008.11.10	於タイ国・バンコク、泰日経済技術振興協会附属語学学校	1970年代のタイにおける日本語教育の状況を教材開発、カリキュラムの策定などから回顧し、現在の日本語教育のあるべき姿を検証した。
30	「日本語の条件表現」	2008.11.11	タイ・バンコク、チュラロンコーン大学東洋言語学部日本語講座	日本語学研究における条件表現研究の現在を検証し、談話行為、発話行為の面からみた機能的用法について、教員、学習者を対象に解説を行った。また、日タイ、タイ・日の翻訳技法についても聴衆者と質疑応答形式で行った。
31	「満洲国とは何であったか」	2008.11.23	NPO法人埼玉県日中友好協会市民講座 於埼玉会館(浦和)	一般社会人を対象に、昨今のブームとされる「満洲国」についての著作、研究のありかたを分析。日中間によこたわる歴史認識問題の事例として、とくに満蒙開拓団の実態、731部隊の記憶について検証した。
32	「現代中国文学から中国を見る」	2008.12.07	NPO法人埼玉県日中友好協会市民講座 於埼玉会館(浦和)	一般社会人を対象に、中国の五四新文化運動から三〇年代文学、新中国後の文学、文革時期、以後の文学、80年代からの開放改革路線、さらに六四民主運動以後現在の文学状況について紹介した。
33	中国山西省呂梁県方山村にて植林活動	2009.4.26	埼玉県日中友好協会	埼玉県日中友好協会会長として、山西省の緑化運動に参加。地元の林野庁の方々・住民とともに植樹活動を行い、友好交流を深めた。
34	中国山西省大原市、山西大学にて学術講演会(日本における日本語学研究の現状)	2009.4.28	山西大学国際交流センター招聘	山西大学国際交流センター外国語学院より招聘を受け、教員、学生を対象に日本における日本語学研究の現状について講義し、交流を深めた。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1981.06.00	～	現在	社団法人日本語教育学会会員
2	1987.07.00	～	現在	日本中国語学会会員
3	1991.10.00	～	現在	国語学会会員
4	1992.04.00	～	現在	日本言語学会会員
5	2000.04.00	～	現在	日本語文法学会会員
6	2000.04.00	～	現在	日本植民地研究会会員
7	2001.04.00	～	現在	社団法人日本語教育学会学会誌査読協力員
8	2001.04.00	～	現在	日本植民地教育史研究会会員
9	2001.10.25			大東文化大学エクステンションセンター(板橋区教育委員会共催)日本語を学ぶ、日本語の文法担当講師
10	2001.11.10			大東文化大学エクステンションセンター公開講座講演(日タイ交流のあけぼの—(アジアへの夢)から(南進論)へ—)担当講師
11	2002.03.11			北部タイ日本語教師の会(タイ・チェンマイ)講演(対照研究からみた日本語教育)

12	2002.03.14		泰日経済技術振興協会（タイ・バンコク）講演（日タイ交流の過去・現在・未来）
13	2002.03.15		チェラローンコーン大学文学部特別講演（戦時期日本におけるタイ語研究）
14	2002.04.00	～ 現在	日本植民地教育史研究会年報編集委員、運営委員
15	2002.12.02		アルク主催日本語教育能力検定試験対策講座講師試験問題の解説と受験対策について
16	2003.05.11		アルク主催日本語教育能力検定試験対策講座講師「対照研究と日本語教育」
17	2004.02.15		東久留米市市民自主企画事業（東久留米市公民館）市民教養講座講師「近代中国東北史の日本」
18	2004.04.00	～ 現在	日本語文法学会編集委員、査読委員
19	2007.07.01	～ 現在	NPO法人埼玉県日本中国友好協会会長、及び同協会理事

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	教授	氏名	寺村 政男	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 中国東北師範大学集中講義		2004.09.00		講義内容 日中対照言語学 (2週間)			
2) 中国東北師範大学集中講義		2005.09.00		講義内容 アルタイ語と日本語 (2週間)			
3) 中国東北師範大学集中講義		2006.09.00		講義内容 日本漢字音と漢語 (中国語) (2週間)			
4) 中国東北師範大学集中講義		2007.09.00		講義内容 日本語の中の近世漢語 (2週間)			
5) 中国東北師範大学集中講義		2008.09.00		講義内容 東アジアの言語接触 (2週間)			
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 東アジア各民族間の言語接触と理解—漢語。モンゴル語・満洲語を中心に—	単	2006.03.00	「アルタイ語研究 I」語学教育研究所	東アジアの各民族は、その興亡の歴史から考えて、各民族の言語間には影響関係が見られる。Turk 語、Mongol 語、女真—満洲語、そしてこれらの民族が中国を制圧し執権民族となると、アルタイ諸語は漢語へ影響を及ぼした。これを以下の章立てで論じた。第一章、漢人のモンゴル語理解。第2章、アルタイ諸語の漢語への影響。第3章、満洲人はどの程度漢文献を理解できたか。第4章、満洲旗人の読めなかった漢字。			
2 東アジアにおける言語接触の研究。PP1～PP554。	単著	2007.01.00	早稲大学博士論文				
3 東アジアにおける言語接触の研究	単	2008.11.25	竹林舎				
論文				本書は早稲田大学に提出した博士学位請求論文に大幅な手を加えて刊行されたものであり、2008年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) の交付を受け刊行されたものである。604頁、11世紀から19世紀にかけての東アジアにおける、漢語、蒙古語、女真—満洲語、韓国語、ウイグル語間の複雑な言語接触の実体を精緻な手法で明かにしたものである。			

1	満族と『尼山シャーマンの物語』		2004.05.31	「アジア遊学」63、特集・少数民族と言葉表現世界	尼山シャーマンの物語は、広くツングース族に伝わる口承文芸であるが、満洲族を除くと、他の民族は表記手段をもっていなかった。その為に満洲語の文献として有名である。しかし、漢族がフィールドワークにより採集し、口承を漢訳した他のツングース族の文献と付き合わせてみると、満洲語文献に残る尼山シャーマンの物語は、大幅に漢民族かされている事が解った。さらには漢民族の仏教唱道文学である宝巻の影響も認められる。また日本の説話の桃太郎等とも類似性をもつ。これらのことを、総合的に解明したもの。
2	東アジアの民族と言語と説話—満洲族と『尼山のシャーマン物語』を中心に—	単	2006.03.00	「アジア民族文化研究」4号	ツングース民族を代表する満洲族は、その先祖肅慎は古代日本とも深い繋がりを持つ。古代からの満洲族の足跡を以下の順に論述し、彼等が残した尼山シャーマンの物語を翻訳論考したものである。序・満洲族をめぐる近況。第一章・満洲族、一・満洲族の紹介、二・清代までの各時代の満洲族。第二章・満洲語、一・満洲語と満洲文字の解説、二・清朝の繙訳システム、三・Turk語・モンゴル語・女真—満洲語・韓国語・日本語の関係。第三章・尼山シャーマンの物語、一・尼山シャーマンの版本、二・話の梗概と類似物語との比較、三・東北三省（満洲）におけるシャーマンとその現状及び語源、四・異本『尼山シャーマン』の全訳
3	「東アジアの言語接触」—日本古典語と中世アルタイ諸語	単	2006.08.00	『中国日本語教育と実践研究』吉林人民出版社	本論考は中国魯東大学における国際シンポジウムにおいて主題発表を纏めたものである。古代日本語（主として万葉集、記紀）より幾つかの語彙を取り出し、女真・満洲語、及び中世モンゴル語と言語学的に比較対照をしたものである。前提としてモンゴル語のCV・CVC、CVC・CV、CV C・CVC、CVCは日本語にあってはCV・CVの形で現れるとして対照比較をなすと、相当の類似性を持つことを実証した。pp8-pp14
4	満漢話條、翻刻、ローマ字転写を翻訳	単著	2008.10.00	語学教育研究所	清代中期に刊行されたと考えられる孤本（東京大学図書館蔵）の満漢話條の満文をローマ字化し、日本語の訳を付け、漢文本文を添えたものである。清代北京語研究の研究資料として提供し、基礎的な分析を加えたものである。
その他					
1	満洲族と尼山シャーマンの物語		2005.11.05	アジア民族文化学会（第9回大会）於 共立女子大	満洲族は漢語文献を大量に満洲語に翻訳して、それらは今に伝わっている。しかし満洲旗人が彼等固有言語である満洲語を使って書いた、満洲族固有の文芸作品は誠に少ない。尼山シャーマンの物語は数少ない満洲族が自己の文芸を満洲語で書き伝わっている文献の一つである。この物語を、版本、異本、日本の説話との共通点などの分けて、発表した。
2	題目・音注成語対待について		2006.05.27	満族史研究会第21回大会 2006年5月27日(土) 於 首都大学東京	
3	中国における日本語教育の理論と実践教育		2006.06.24	国際シンポジウム 2006年6月24,25日 於中国魯東大学 主題講演 東アジアの言語接触について	
4	日本語「味噌」の語源について。		2006.09.26	日本文化国際シンポジウム、北京外国語大学	日本語
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1975.04.00	～	現在	日本中国学会会員	
2	1976.04.00	～	現在	日本中国語学会会員	
3	1985.04.00	～	現在	東大中国学会会員	
4	1987.04.00	～	現在	中国近世語学会会員	
5	2007.04.00	～	現在	水門（みなと）の会編集委員	

(表 24)

所属	外国語学部 日本語学科	職名	教授	氏名	長谷川 恒雄	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 『第2次大戦期 興亜院の日本語教育に関する調査研究』		2002.00.00	平成14年～16年 科学研究代表者				
2) 『第二次大戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究』		2006.00.00	平成18年～20年 科学研究代表者				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『第2次大戦期 興亜院の日本語教育に関する調査研究』	共	2005.00.00	科研報告書 pp1-195<長谷川担当: pp1-110>	本稿は、平成14年度～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「第2次大戦期 興亜院の日本語教育に関する調査研究」(研究代表者:長谷川恒雄、課題番号:4380120)の研究成果報告書である。興亜院は、支那事変処理のために設置された「対支中央機関」であり、1942年に大東亜省に発展する組織であるが、対中国文化工作の一環として中国諸地域における日本語教育を管轄した。担当者の故大志万準治氏は興亜院の原資料を個人的に保管しておられ、本研究は大志万資料を整理し、興亜院の日本語教育を調査研究した。中国における日本語教育は、①日本語教育の制度化 ②日本人日本語教師養成・派遣 ③中国人日本語教師養成 ④日本語教科書の編纂 ⑤日本語教育研究会開催(対日本語教師) ⑥日本語能力検定試験(対中国人) ⑦日本留学制度の整備等を有機的に関連させたネットワークとなっており、興亜院と中国現地政府の連携により成り立っていた。			
論文							
1 興亜院の日本語教育－「錬成」思想と「日本語普及要領(1939)」－	単	2004.00.00	『日本語と日本語教育』33,pp1-16、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター	昭和10年代前半・国内諸所で錬成運動が盛んになる。錬成は「忠孝仁愛等…の根本に立ち…国家のために働き、大君の為に奉仕」できる人材を育成するための訓練であり、日本語教員養成も影響を受け、さらには学習者にも「日本語の普及は、言葉を通じて…日本精神及び日本国情を中華民国人が理解し、もって東亜新秩序建設に協力するの精神を培うため」と強要していく。興亜院は同思想を強調しながら「日本語普及要領(1939)」を作成し、「日本語教員養成・派遣、教科書作成」といった直接教育現場に関わる問題、「教授法研究、日本語研究」といった基礎研究、「興亜院、国内諸団体、中国間」のネットワークづくりを施策課題とした。			

2	留学生の受入れ政策	単	2005.00.00	『新版日本語教育辞典』 (日本語教育学会編)	
3	文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「第二次大戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究」中間報告1	共	2008.03.31	科研中間報告1	科研中間報告1を特に日本語教育史に関する論文目録を中心に作成。
4	文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「第二次大戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究」中間報告2	共	2008.03.31	科研中間報告2	科研中間報告2を特に日本語教育振興会の活動および機関誌『日本語』掲載の論文についてのデータベースを中心に作成。

その他					
1	第2次大戦期 興亜院の対中国日本語教育施設	単	2004.00.00	日本語教育学会 平成16年度春季大会	
2	興亜院の『日本語普及要項(1939)』	単	2004.00.00	日本言語政策学会 第4回大会	
3	「授業における映像メディア(ドラマ・アニメ)の活用」	共	2007.05.27	日本語教育学会 2007 春大会	日本語教育学会 2007 春季大会においてパネルセッションを主催した。
4	「日本語教育の今日的課題・パラダイムの変換の認知」	共	2008.01.25	大東文化大学「日本文化言語学専攻開設記念国際シンポジウム」	国際シンポジウム中の「応用日本語学系パネルディスカッションにおける口頭発表
5	教育実践報告 中級教材における主題の展開とそれに伴う補足語の削除ー東京外国語大学中級第1課の場合ー	単	2008.06.06	(財)言語文化研究所 第21回発表会	
6	研究発表 1930～1940年代の日本語教育施策ー『対外文化事業政策について』(1931、外務省)から、「日本語教育要綱」(1939、興亜院)、「日本語教育振興に関する研究要綱(案)」(1941、編者未詳)にかけての理解ー	単	2008.06.28	日本植民地教育史研究会 第20回研究会	
7	研究報告 日本語教育史の中の財団法人言語文化研究所・長沼直兄と日本語教師連盟	単	2008.07.12	日本語教師連盟 2008年度研究会	

III 学会等および社会における主な活動

1	1970.00.00	～	現在	日本語教育学会会員(1985年常任理事、1986年調査研究委員会委員、1989年教授活動研究委員会委員、1990年研究委員会委員長、1992年実習教育研究委員会委員長、1994年国内の日本語教育のネットワーク作りに関する調査研究委員会委員長、1997年日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究委員)
2	1984.00.00	～	現在	日本国際教育協会委員(1984年「外国人日本語能力試験」試験小委員会委員、1984年「日本語教育能力検定試験」試験小委員会委員(H3日本事情班班長)、1999年「日本語教育能力検定試験」実施委員会委員)
3	1994.00.00	～	現在	日本語教育史研究会会長

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	准教授	氏名	関口 伊都子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 茶の湯のあらまし (続改訂版)	編著	2005.03.00	コロニー印刷	前回改訂版として執筆したものの内容を更に充実させたものである。(全 42 頁)		
2 日本の伝統文化と生活	共著	2006.04.30	外文出版社	日本に古くから伝えられてきた民間信仰や芸能及び精神文化の代表ともいえる茶の湯、更に日常生活における生活習慣等を多岐に渡って取り上げ、外国人にも理解しやすいように解説したものである。(全 109 頁)		
3 Japanese Traditional Culture and Life	共著	2007.02.00	大東文化大学	2006 年に出版した、「日本の伝統文化と生活」を英訳したものである。(全 60 頁)		
論文						
1 掛け物について	研究ノート	2005.03.00	大東文化大学外国語学会 (外国語学会誌 No.34)	茶席で最も重要な役割を果たす掛け物について、いくつか例を挙げ、その出典や意味内容について考察した。(全 139～150 頁)		
2 茶の湯に関して	研究ノート	2006.03.00	外国語学会誌 No.35	茶の湯を行う際に最も基本的なものである炭について分析し、その扱い方、及び効用について考察した。(全 225～235 頁)		
3 茶の湯に関して	研究ノート	2007.03.00	外国語学会誌 No.36	茶の湯の道具類の中でも、重要な要素であるやきもの (陶器) について各地の窯の歴史的な変遷を見ながら、茶の湯に用いられる国焼との関係について言及した。(全 115～123 頁)		
4 茶の湯に関して	研究ノート	2008.03.00	外国語学会誌 No.37	日常生活において、最も身近かな存在とも言える竹について注目し、茶の湯の必需品である茶杓、茶釜を中心に言及した。(全 297～306 頁)		
5 茶の湯に関して	研究ノート	2009.03.00	外国語学会誌 No.38	近年来、茶の湯の道具類について調査研究しているが、今回は筆者にとって最も難解なものの一つである。茶湯釜について、その種類や特徴について言及した。(全 125～134 頁)		
その他						

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1971.09.00	～	現在	外国人のための日本語教育学会
2	1976.09.00	～	現在	日本アメリカ文学会
3	1978.03.00	～	現在	汎太平洋東南アジア婦人協会
4	2001.04.00	～	現在	茶の湯文化学会

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	准教授	氏名	中道 知子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 日本語教育実習指導		2005.04.01	フジ国際語学院における日本語教育実習のために、同校訪問、校長と面談。後日、実習希望学生2名を連れて、同校訪問、具体的な実習スケジュールの相談。実習の事前指導・事後指導。(2005.04.01～2006.03.31)			
2) 日本語教育実習指導		2005.04.01	K C P地球市民学校における日本語教育実習のために、同校訪問、校長ならびに教務主任と面談。後日、実習希望学生2名を連れて、同校訪問、具体的な実習スケジュールの相談。実習の事前指導・事後指導。(2005.04.01～2007.03.31)			
3) 日本語教育実習指導		2006.04.01	フジ国際語学院における日本語教育実習のために、同校訪問、校長と面談。後日、実習希望学生2名を連れて、同校訪問、具体的な実習スケジュールの相談。実習の事前指導・事後指導。(2006.04.01～2007.03.31)			
4) 日本語教育実習指導		2007.04.01	カイ日本語スクールにおける日本語教育実習のために、同校日本語養成講座担当者ならびに日本語教務主任と面談、具体的な実習スケジュールの相談。実習の事前指導・事後指導。(2007.04.01～2008.03.31)			
5) 海外日本語教育実習校の開拓		2008.02.28	三江学院 (学術交流協定校 中国・南京市所在) を訪問し、三江学院学長、外事所長、日本語学部長、日本語教育担当教員との会談を通じて、日本語教育実習に関する総括的・実務的な打ち合わせを行った。この訪問は、三江学院からの招聘による訪問で、訪問団は、本学学長・国際交流センター所長・中道知子・白井国際交流センター職員であった。(2008.02.28～03.01)			
6) 日本語教育実習指導		2008.04.01	カイ日本語スクールにおける日本語教育実習のために、同校日本語養成講座担当者ならびに日本語教務主任と面談、具体的な実習スケジュールの相談。(2008.04.01～)			
7) 日本語教育実習校開拓		2008.11.19	文化外国語専門学校において日本語教育実習を実現するために同校を訪問し、実習担当の吉本恵子氏と面談打ち合わせをした。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						

論文				
1 外来語「スマート」の語義について	単	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 <人文科学>大東文化大学	外来語「スマート」は、その使用例や類義語から見ると、<形が細くて美しい>という意味要素を持っていると考えられる。この意味は、「スマート」の原語と考えられる英語“smart”にはない語義である。本稿では、現代日本語における「スマート」について、原語とのずれに意を用いつつ、語義分析を施した。9 頁
2 「語義の分析」「語彙指導」の項執筆（署名原稿）	分担執筆	2005.09.00	新版日本語教育事典・日本語教育学会編大修館書店発行	2 頁、1 頁
3 語を分割する単位について—語構成論入門書が引き起こす誤解—	単	2006.03.00	大東文化大学紀要第 45 号 <人文科学>大東文化大学	語構成論においては、語の構成要素をどのような単位として分割し認定するかが基本的な重要事項である。この単位認定において、初学者を対象とする入門書では、形態論や統語論分野における単位の扱いとの関係において、誤解を与えがちな記述が見られる。本稿では、専門用語辞典と入門書の記述を検討して、上述のような混乱が、「形態素」の概念と「意味を担う」という概念のあいまいな扱い方と統語論的ないしは形態論的な単位と語彙論的な単位との区別が不十分なことに起因すると判断した。9 頁
4 「熱がある」「パフォーマンス」「ムーディー」	単	2007.11.00	『國學院雑誌』平成 19 年 11 月特集号・國學院大學	単語の意味が多義的に分岐するひとつの型として、「プラス値派生」と名づけられたタイプ(国広哲弥 1997)について、シネクドキーによる意味転用ではないという見解を論ずる。また、「パフォーマンス」という語には「マイナス値派生」といえる意味が派生していることを指摘する。さらに、「ムーディー(一)」という語が、外来語としての独自の語義解釈を生じている理由は、形態論的な類推に基づくものであると結論する。13 頁
5 「パフォーマンス」のマイナス値派生義について	単	2008.03.00	大東文化大学紀要第 46 号 <人文科学>大東文化大学	国広哲弥(1997)によって提起された「プラス値派生・マイナス値派生」の概念に基づき、外来語「パフォーマンス」にはマイナス値とういべき語義が派生していることを論じた。7 頁
6 時間義「マエに」の反義表現：「アトで」、「アトに」	単	2009.03.31	大東文化大学紀要第 47 号 <人文科学>	「マエに」の反義は、順序義と時点義で異なる。「マエに」は時点義として理解され、その反義としてことばそのものから予想されるのは「アトに」である。しかし、現実の言語使用では、「AのマエにB」という文型においては、コトガラAを参照点として、コトガラBを位置づけるという<順序>の読みがなされるために、一般的には、「アトで」が「マエに」の反義語として用いられることが多くなる。5 頁
その他				
1 連用形転成名詞の新用法について—現在の姿—	共	2004.06.26	語彙・辞書研究会第 25 回発表会予稿集・語彙・辞書研究会	本論考で、連用形転成名詞の新用法として扱うものには次の二つの種類がある。① 従来から名詞として存在しているが、意味の面で新しい用法であるもの② 従来は名詞化していなかった動詞が名詞化したもの。これらについて、ゼミにおける共同研究として、実態調査を行った。5 頁 共著者：◎中道知子、安藤光展、小針寛子、高塚里美、遠峰多慧子、永井信、山口真太郎、渡辺絵美
2 連用形転成名詞の現在の姿について	単	2004.07.05	大東文化大学語学教育研究所研究発表会	連用形転成名詞について、語彙・辞書研究会第 25 回発表会(2004.6.26)における発表をふまえて、発表した。7 頁
3 「にやける」の語義について	共同発表	2008.06.14	語彙・辞書研究会第 33 会研究発表会	日本語動詞「にやける」は、国語辞典に記述されている意味と現実に使われている意味が乖離していることを、若い世代(15 歳～26 歳)100 人にアンケート調査した結果により論じた。論点は、(1)「にやける」の主語の制限、(2)語義、(3)語源である。さらに、web 上の使用例 100 例調査では、国語辞典の説明に類する用法は 7 例であることがわかった。8 頁 共同発表者：オトゴン、今野沙紀、根津誠、羽田帆奈美、松井晴道
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1977.04.01	～	現在	日本語教育学会会員

2	1980.04.01	～	現在	国語学会会員
3	1994.04.01	～	現在	日本言語学会会員
4	1999.04.01	～	現在	言語処理学会会員
5	2008.04.01	～	現在	財団法人ハーモニイセンター評議員

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	講師	氏名	福盛 貴弘	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『旅のお供に 今すぐ使えるトルコ語入門』		2006.04.00		勉誠出版 総頁 215 頁			
2) 『日本語－トルコ語 トルコ語－日本語単語集』		2007.01.00		国際語学社 総頁 403 頁			
3) 『トルコ語@DVD音声学』		2007.02.00		大東文化大学語学教育研究所			
4) 「T U F S 言語モジュール トルコ語発音モジュール理論編」		2007.02.00		東京外国語大学			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「音声学」	分担執筆		中島平三監修『シリーズ朝倉〈言語の可能性〉言語学の領域(Ⅰ)』朝倉書店	12-45. 共著者: 中島平三、窪園晴夫、影山太郎、総頁 280 頁			
2 「「ガ格」「ヲ格」における統語および意味的逸脱に対する実験言語学研究－ERPにおけるN400・P600を指標として」	分担執筆	2006.03.00	矢澤真人・橋本修編『現代日本語文法 理論と現象のインタラクション』ひつじ書房	47-67. 共著者: 矢澤真人、橋本修、石田尊他 総頁 349 頁			
3 「母音調和の音響音声学的類型」	共編 共著	2006.07.00	城生侑太郎博士還暦記念論集委員会編『実験音声学と一般言語学』東京堂出版	99-106. 共著者: 城生侑太郎、橋本邦彦、池田潤他 総頁 605 頁			
4 『華夷訳語論文集』	共編	2007.10.00	大東文化大学語学教育研究所、語学教育フォーラム 13 (東ユーラシア言語研究 2)	福盛貴弘・遠藤光暁編 総頁 230 頁			
5 『清文集書－翻字再配列版－』	共編	2008.03.00	東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所、ツングース言語文化論集 39	風間伸次郎・幡早夏・福盛貴弘編 総頁 300 頁			

6	『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座』	共編	2008.10.00	語学教育フォーラム 16 大東文化大学語学教育研究所	寺村政男・久保智之・福盛貴弘編 総頁 434 頁
論文					
1	「現代ヘブライ語のシュワーに対する音響音声学的記述」	共著	2004.12.00	『一般言語学論叢』7 筑波一般言語学研究会	福盛（筆頭）と池田潤氏との共同執筆 29-52.
2	「青年層における東海地方方言話者の母音の無声化」	共著	2004.12.00	『言語学論叢』23 筑波大学一般・応用言語学研究室	福盛（筆頭）と池田明大氏との共同執筆 41-61.
3	「事象関連電位を用いた「目で見える音声」—日本語単音節におけるパイロットスタディー—」	単著	2005.02.00	『茨城大学留学生センター紀要』3 茨城大学留学生センター	65-77.
4	「サウンドスペクトログラム分析からみた現代ヘブライ語の歴史的シュワー」	単著	2005.12.00	『一般言語学論叢』8 筑波一般言語学研究会	75-96.
5	『音の百科辞典』	分担執筆	2006.01.00	丸善	※執筆項目：「IPA」「音声言語と文字言語」「外国語の音声：トルコ語」「記述音韻論」「発話速度」「母語と非母語」「モーラ」「文字・表記：外国語はカナで読めるか？」「調音音声学」「聴覚音声学」「方言」計 12 項目執筆 ※構成項目：「アナウンス」（鈴木史朗氏）「歌番組」「ドラマ」「バラエティ」（伊藤誠氏）計 4 項目構成 総頁 1023 頁
6	「トルコ語における母音調和とアクセントの相関性に対する音響音声学的考察」	単著	2006.03.00	日本アルタイ語会議・大東文化大学語学教育研究所 『アルタイ語研究 I』語学教育フォーラム 9	231-249.
7	「現代ヘブライ語の歴史的シュワーのゆれ」	単著	2006.03.00	『語学教育研究論叢』23 大東文化大学語学教育研究所	215-233.
8	「トルコ語における母音調和とアクセントの相関性に対する音響音声学的考察」	単著	2006.03.00	『アルタイ語研究 I』語学教育フォーラム 9 大東文化大学語学教育研究所	
9	「意味範疇 [±人間] の実在性について」	単著	2006.12.00	『一般言語学論叢』9 筑波一般言語学研究会	97-111.
10	「「関東」・「関西」という区分に関する文化地理学的考察」	単著	2007.03.00	『外国語学会誌』36 大東文化大学外国語学会	125-152.
11	『モンゴル民俗言語地図』における母音の音声表記」	単著	2007.10.00	大東文化大学語学教育研究所 福盛貴弘・遠藤光暁編 『華夷訳語論文集』語学教育フォーラム 13 (東ユーラシア言語研究 2)	185-195.
12	「芝居のセリフにおけるプロソディー研究」	共著	2008.03.00	大東文化大学外国語学会 『外国語学会誌』37	小島麻美氏（筆頭）との共同執筆、259-280.
13	「トルコ語の映像音声資料：音声学的DVDデータベース制作の経緯をふまえて」	単著	2008.03.00	大東文化大学語学教育研究所 日本アルタイ語会議編 『アルタイ語研究 II』語学教育フォーラム 15	105-118.
14	「ニュース番組におけるアナウンサー・キャスターの発話速度—2006年5月3日のニュース番組を資料として—」	単著	2008.03.00	大東文化大学外国語学部 『大東文化大学外国語学部創設 35 周年記念論文集』	191-209.

15	「実験音声学小史ー ルスロ以来の伝統を ふまえてー」	単著	2008.03.00	大東文化大学『大東文化大 学紀要（人文科学）』46	1-9.
16	「トルコ語における 小辞 de ² のアクセシ ン	単著	2008.10.00	『言語の研究ーユーラシア 諸言語からの視座』語学教 育フォーラム 16:193-208。 大東文化大学語学教育研究 所	寺村政男・久保智之・福盛貴弘編
17	「事象関連電位（ER P）を用いた音節、モ ーラの認知に関する 考察」	共著	2008.12.00	『一般言語学論叢』 11:31-51。筑波一般言語学 研究会	（桐越舞氏（筆頭）との共同執筆）
18	「山梨方言青年層話 者におけるバスケッ トボール用語のアク セント調査：専門家ア クセントはどの程度 起こりうるものなの か」	共著	2008.12.00	『言語学論叢 オンライン 版』1:6-24。筑波大学一般・ 応用言語学研究室	（福盛（筆頭）と宮下美穂氏との共同執筆）
19	「トルコ語の後置詞 アクセント小考ー後 置詞 gibi における音 響音声学的パイロッ トスタディー」	単著	2009.02.00	『言語学論叢：城生佰太郎 教授退職記念論文集』特別 号：61-74。筑波大学一般・ 応用言語学研究室	
20	「実験言語学の方向 性」	単著	2009.03.00	『実験音声学・言語学研究』 1:19-24。日本実験言語学会	
21	「意味範疇の文法判 断への関与について ー事象関連電位を用 いた実験言語学研究 ー」	共著	2009.03.00	『実験音声学・言語学研究』 1:39-52。日本実験言語学会	（井本亮氏（筆頭）との共同執筆）
22	「実験音声学再考」	単著	2009.03.00	『北海道言語文化研究』 7:1-10。北海道言語研究会	
その他					
1	「トルコ語の母音調 和」	単独 報告	2004.11.00	日本アルタイ会議、大東文 化大学	
2	「脳波を用いた実験 言語学の方法を探る」	単独 報告	2004.12.00	現代日本語文法研究会、筑 波大学	
3	「実験音声学の諸相」		2005.02.00	於 筑波大学	講演会
4	「現代ヘブライ語に おけるシュワーの音 響解析」	共同 報告	2005.09.00	日本音声学会、県立広島大 学	（池田潤氏との共同報告）
5	「事象関連電位を用 いた実験言語学の方 法」		2005.10.00	於 筑波大学	講演会
6	「事象関連電位を用 いた実験言語学の方 法」	単独 報告	2005.10.09	第3回現代日本語文法研究 会、筑波大学	
7	「有生性の実在性を めぐって：事象関連電 位を用いた意味的逸 脱の検証」	単独 報告	2006.10.22	第4回現代日本語文法研究 会 日本語文法脳機能研究 部会、筑波大学	
8	「トルコ語の映像資 料から見た音声学的 アクセント」	単独 報告	2007.05.19	第3回日本アルタイ語会 議、大東文化大学	

9	「誘発脳波EPRによる意味範疇[±Human]の实在性の検証」	単独報告	2007.10.15	語学教育研究所 2007年度第2回研究発表会、大東文化大学
10	「「はい」「いいえ」に関するERP基礎実験」	単独報告	2007.10.20	第5回現代日本語文法研究会、八洲学園大学
11	「実験音声学と音声科学」	単独報告	2008.01.25	大東文化大学外国語学研究科日本語文化学専攻開設記念国際シンポジウム、大東文化大学
12	「実験音声学と音声科学」	単独報告	2008.01.25	大東文化大学外国語学研究科日本語文化学専攻開設記念国際シンポジウム、大東文化大学
13	(パネリスト)「実験言語学の方向性」	単独報告	2008.08.29	日本実験言語学会設立記念大会パネルディスカッション「記述と実験の架け橋」、筑波大学
14	「トルコ語のアクセントについて」	単独報告	2009.01.31	東ユーラシア語研究会第15回例会、青山学院大学

III 学会等および社会における主な活動

1	1997.00.00	～	現在	日本語学会会員
2	1998.00.00	～	現在	筑波一般言語学研究会会員 (2007年度～現在編集委員)
3	1999.00.00	～	現在	日本音声学会会員
4	1999.00.00	～	現在	日本感性工学会会員
5	1999.00.00	～	現在	日本語教育学会会員
6	1999.00.00	～	現在	日本中東学会会員
7	1999.00.00	～	現在	認知神経学会会員
8	2000.00.00	～	現在	日本オリエント学会会員
9	2003.00.00	～	現在	現代日本語文法研究会会員 (2006年度～現在研究部会長)
10	2004.00.00	～	現在	西南アジア研究会会員
11	2008.00.00	～	現在	日本実験言語学会会員 (2008年度～現在理事)

(表 24)

所属	外国語学部日本語学科	職名	講師	氏名	前田 理佳子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 日本語教育研修報告書 2004 年度～2006 年度		2008.03.31	大東文化大学外国語学部日本語学科 キーンズランド大学 (オーストラリア)、東北師範大学 (中国) の協力を得て実施している課外特別プログラム (日本語教育研修) のコーディネート及び国内研修の分も含めた派遣研修生の事前事後指導を行なった。事後研修の一環として研修報告書の制作を指導した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) ウェストフロリダ大学夏期ビジネス研修日本語交流セッションコーディネート及びチームティーチングアシスト		2004.05.10	交流協定校ウェストフロリダ大学の学生・教員の 6 週間の短期受け入れプログラム (国際交流センター主催) の一部として、学科卒業生 2 名とともに、日本語交流セッションを 90 分計 8 回行なった。ビジターセッションでは他学科生を含む学生 8 名の協力を得た。コーディネートは大河原尚別科嘱託講師のサポートを得、全体のスーパーバイズ及び現場アシストは前田が行なった。(2004 年 5 月 10 日～2004 年 6 月 30 日)			
2) 交換留学生日本語特別プログラム春休み日本語セッションコーディネート及びスーパーバイズ、チームティーチングアシスト		2005.01.15	2003 年 5 月から交換留学生日本語特別プログラムコーディネーター (大河原尚別科嘱託講師) と協議を重ね、日本語学科生による日本語教育実習として交換留学生対象の日本語セッションを計画・実施した。実習授業実施期間は 2 月 28 日～3 月 23 日。課外の自由参加のセッションとして実施したものであるが、日本語学科からは 2 年生 5 名、3 年生 1 名計 6 名が参加して事前準備・実習期間中のリフレクションセッション・事後リフレクションを積極的に行なった。ビジターセッションでは多数の学科外の学生の協力が得られた。多文化共生社会の構築と維持に資する人材を育成する日本語教育実習の試みであり、日本語学科のカリキュラムに日本語教育実習を組み込むためのパイロットケースとなった。(2005 年 1 月 15 日～2005 年 3 月 23 日)			
3) 別科科目担当		2005.04.01	日本語学科が完成年度を迎えて後初めて日本語学科専任教員として別科科目を担当し、別科教員会議のメンバーとして別科の運営全体を視野に入れた上でカリキュラムの質の向上に貢献した。(2005 年 4 月 1 日～2008 年 3 月 31 日)			
4) 「交換留学生との交流の集い」コーディネート		2006.03.01	2003 年 9 月に開始された「交換留学生との交流の集い」コーディネートを前コーディネーター大河原尚別科嘱託講師から引き継ぎ、コーディネートアシスタントからメインコーディネーターとなった。学内での定例の集いを 22 回開催し、延べ 289 名の参加者を得たほか、学外の集いは計 5 回行ない、延べ 53 名の参加を得た。12 月末には群馬県で 2 泊 3 日の合宿を行なった。交換留学生と一般学生の相互の交流を促進するのみならず、外国籍の一般学生、一般留学生のネットワーク構築と維持においてハブの役割を果たすことができた。(2006 年 3 月 1 日～2006 年 12 月 31 日)			

5) 交流学生履修状況調査ワーキンググループ活動	2006.04.00	国際交流センターの委嘱を受けて、短期交換留学生の履修状況を調査するワーキンググループメンバーとして、交換留学生の履修上の問題点を洗い出し、改善策の提言をするのと同時に、パイロットケースとして交換留学生に対する履修指導を実施した。履修上の問題点の洗い出しにあたっては、在籍する短期交換留学生全員にアンケート調査を行なったが、調査票の設計・作成・調査実施・結果分析を担当し、結果を「2006年度前期交流学生履修状況調査結果概要」(2006年10月14日)としてまとめた。調査の設計は主として大河原尚別科嘱託講師と共同で行ない、分析・結果のまとめは主として前田が行なった。ワーキンググループの提言を総括しとりまとめを行なったのは、中道知子助教授。(2006年4月～2006年11月)
--------------------------	------------	--

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
1 在日外国人の言語生活	単	2005.10.01	日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店	pp.487-488
2 非常時対策と日本語教育	共	2005.10.01	日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店	共同執筆者は神戸商科大学松田陽子教授。pp.980-981 筆頭執筆者：前田理佳子
3 やさしい日本語の仕組み	共	2007.06.30	『やさしい日本語』が外国人の命を救う—情報弱者への情報提供の在り方を考える—(平成18年度～平成20年度・科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書「災害時の外国人のための「やさしい日本語」と社会的ニーズへの言語学的手法の適用」研究代表者：佐藤和之、研究課題番号15320061/平成18年度～平成19年度・弘前大学人文学部長裁量経費「民学官協働による弘前市をモデルにした災害時の情報伝達の研究」研究代表者：佐藤和之)	「やさしい日本語」の構造の特質及び「やさしい日本語」による文(章)作成の留意点を整理・紹介した。編者は『やさしい日本語』研究会。共同執筆者は東京農工大学御園生保子教授。pp.31-38 筆頭執筆者：御園生保子
4 「簡易日本語能力テスト」について	共	2007.06.30	『やさしい日本語』が外国人の命を救う—情報弱者への情報提供の在り方を考える—(平成18年度～平成20年度・科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書「災害時の外国人のための「やさしい日本語」と社会的ニーズへの言語学的手法の適用」研究代表者：佐藤和之、研究課題番号15320061/平成18年度～平成19年度・弘前大学人文学部長裁量経費「民学官協働による弘前市をモデルにした災害時の情報伝達の研究」研究代表者：佐藤和之)	「やさしい日本語」の有効性を検証する実験の一環として被験者に対して行なった日本語テストの概要を紹介した。編者は『やさしい日本語』研究会。共同執筆者は東京農工大学御園生保子教授。pp.65-68 筆頭執筆者：前田理佳子

5	留学交流による大学国際化のあり方について	共	2008.03.00	『別科日本語教育』9、大東文化大学別科日本語研修課程	理念不在・受入れ体制未整備のまま留学生受入数の拡大が行なわれることの問題点を明らかにし、確立すべき理念の方向性と具体的な受け入れ業務の内容決定のあり方について提言を行なった。理念の方向性については、「留学生の日本語教育検討委員会」による『留学生の日本語教育』に関する答申「国際教育・研究センター設置について」(2004年8月)の内容を確認した。理念と直結する具体的な受け入れ業務内容の決定の方向性については、「留学生の日本語教育改革委員会」に提出された「国際教育・研究センター(仮称)における調査項目案」並びにこれに基づいて行なわれた教職員対象アンケート及び留学生対象アンケートの調査票を紹介することを通して述べた。編者は『別科日本語教育』編集委員会。共同執筆者は大東文化大学別科大河原尚嘱託講師。pp.100-141 筆頭執筆者：大河原尚
6	『やさしい日本語』広報文の語彙	共	2009.03.31	『やさしい日本語』の構造——社会的ニーズへの適用に向けて——』平成18・20年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書「災害時の外国人のための『やさしい日本語』と社会的ニーズへの言語学的手法の適用」研究課題番号15320061報告書) 弘前大学人文学部社会言語学研究室	「やさしい日本語」による広報文の語彙を、「やさしい日本語」を構成する上でどのような機能をもつかという観点から分類して、「やさしい日本語」の特徴を語彙の面から明らかにし、「やさしい日本語」広報文作成の際の一助となるよう提示した。執筆者：◎前田理佳子・鹿嶋彰。pp.41-52 筆頭執筆者：前田理佳子
7	『やんしす』作成の経緯と『地震時の緊急コメント』	共	2009.03.31		執筆者：水野義道・御園生保子・前田理佳子・鹿嶋彰・伊藤彰則。pp.3-16、筆頭執筆者：水野義道
8	『やさしい日本語』の特徴——N JをE Jに変えることを通して	共	2009.03.31		執筆者：水野義道・御園生保子・前田理佳子・鹿嶋彰・伊藤彰則。pp.65-72、筆頭執筆者：水野義道
その他					
1	やさしい日本語ワークショップ	単	2005.01.22	仙台国際交流協会公開研修会：防災の視点からみた多文化共生のまちづくり	
2	災害時の情報提供：「やさしい日本語」ワークショップ	単	2006.11.28	愛知県国際交流協会平成18年度国際交流講座	
3	やさしい日本語でボランティア：災害情報をどう伝えるか	単	2007.02.24	愛知県国際交流協会平成18年度ボランティア研修会	
4	減災のための「やさしい日本語」	単	2007.03.18	(財)名古屋国際センター「災害時外国人支援」ボランティア研修会：ワークショップ1	
5	外国語学部創設35周年記念シンポジウム「語学と異文化コミュニケーション」パネリスト	共	2007.12.15	大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集刊行委員会編『大東文化大学外国語学部創設三十五周年記念論文集』大東文化大学外国語学部	pp.255-310
6	「やさしい日本語」でボランティア：災害情報をどう伝えるか	単	2008.01.20	徳島県南海地震対策課防災センター災害ボランティア講座(第2回)	
7	やさしい日本語による情報伝達	単	2008.01.30	神奈川県民部国際課「災害時の外国人支援講座」	
8	やさしい日本語による情報伝達	単	2008.02.06	財団法人川崎市国際交流協会『やさしい日本語』による情報提供研究会・第1回	

9	やさしい日本語による情報伝達	単	2008.02.27	財団法人川崎市国際交流協会『やさしい日本語』による情報提供研究会・第2回	
10	災害時の情報伝達に役立つ「やさしい日本語」	単	2008.03.09	長野県国際交流推進協会（ANPIE）（文化庁委嘱事業）日本語指導者養成講座	
11	減災のための「やさしい日本語」日本語に不慣れた人々を災害弱者にしないために	単	2008.07.25	横浜日本語教育フォーラム 2008 年度研究会 主催：アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、横浜市・横浜市教育委員会、横浜市国際交流協会（YOKE） 場所：アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター	講演者・ワークショップファシリテーター
12	指定コメンテーター	単	2008.07.27	『「移民国家日本」と多文化共生論——多文化都市・新宿の深層』（明石書店 2008 年 5 月）出版記念研究会 主催：多文化社会研究会 場所：大東文化大学信濃町校舎	
13	分科会 2 「災害時のやさしい日本語：ミニワークショップ形式」	単	2008.12.07	日本語フォーラム 2008 in 長岡「災害と情報弱者の支援」 主催：新潟大学国際センター（下越地区共生会議事務局）日本語フォーラム全国ネット 場所：長岡市立劇場	講演者・ワークショップファシリテーター
14	減災のための「やさしい日本語」～日本語に不慣れた人々を情報弱者にしないために	単	2009.01.31	平成 20 年度 中部地区合同（中原・高津・宮前）識字ボランティア研修 主催：川崎市教育委員会 場所：高津市民館大会議室	講演者・ワークショップファシリテーター
15	災害時の情報伝達に役立つ「やさしい日本語」	単	2009.02.21	2008 年度文化庁委嘱事業・中信地域外国籍市民日本語支援者養成講座 主催：（財）長野県国際交流推進協会（ANPIE） 場所：松本市中央公民館 4・4 会議室	講演者・ワークショップファシリテーター

III 学会等および社会における主な活動

1	1983.04.00	～	現在	弘前大学国語国文学会会員
2	1992.04.00	～	現在	国語学会会員
3	1993.04.00	～	現在	日本語教育学会会員
4	1997.04.00	～	2008.03.00	（財）とよなか国際交流協会会員
5	1999.09.00	～	現在	特定非営利活動法人神戸定住外国人支援センター会員
6	2001.09.00	～	現在	社会言語科学会会員
7	2003.04.00	～	2006.03.00	「外国人被災者のための『やさしい日本語』を用いた災害時の情報伝達についての研究」（科学研究費補助金・基盤研究 B）研究分担者
8	2003.05.00	～	現在	移住労働者と連帯する全国ネットワーク会員
9	2006.04.00	～	2009.03.00	研究課題：「災害時の外国人のための『やさしい日本語』と社会的ニーズへの言語学的手法の適用」（科学研究費補助金・基盤研究 B）研究分担者

10	2007.02.00	～	現在	日本質的心理学会会員
11	2007.08.00	～	現在	異文化コミュニケーション学会会員
12	2007.08.00	～	現在	多文化関係学会会員
13	2007.08.00	～	現在	特定非営利活動法人JAFSA(国際教育交流協議会) 会員
14	2007.08.00	～	現在	日本言語政策学会会員 (2008年度～現在運営委員)
15	2007.10.00	～	現在	日本教育社会学会会員
16	2008.02.00	～	現在	異文化間教育学会会員
17	2008.10.09	～	現在	日本災害情報学会会員

法学部

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	浅野 美代子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業運営の中でディスカッションをメーリングリストにより実施		2006.04.01		2006年度担当科目「専門演習」について、メーリングリストによって受講者間のディスカッションを展開している。(2006年4月1日より現在)		
2) 大東文化大学授業評価		2009.03.10		大東文化大学授業評価(平成20年12月実施)において、担当講義「専門演習」が高い評価を得た。授業への満足度は平均4.3(5段階評価)。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 「IT社会とコミュニケーション」		2005.02.10		東松山市きらめき市民大学講義。東松山市高齢者大学校「きらめき市民大学」		
2) 「IT社会とコミュニケーション」		2005.02.24		東松山市きらめき市民大学講義。東松山市高齢者大学校「きらめき市民大学」		
3) 「IT社会とICT活用の可能性ー統計学によるデータの常識を身に着けよう！」		2007.06.08		(2007年6月8日～7月5日)連続5回板橋区高齢者大学校「板橋グリーンカレッジ」専門課程(社会生活課程)講義		
4) 「統計の実践的利用」		2008.08.08		神奈川県町村統計事務研究会「統計セミナー」講義		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 [補論] イギリスのコミュニティ・カレッジ	共著	2006.03.31	大東文化大学 国際比較政治研究所 地域研究班	地域デザインフォーラム・ブックレット No.16『板橋コミュニティ・カレッジ構想』[補論]イギリスのコミュニティ・カレッジ、英国における生涯教育の概要紹介と分析 共著者大東文化大学教授 土岐寛、首藤禎史、板橋区役所 松田玲子、杉山光治、真崎祐子共著、筆者は(87-96頁)担当、A5版、総頁159頁。		

2	An Introduction to the Hybrid Approach of Neural Networks and the Linear Regreression Model:An Illustration in the Hedonic Pricing Model of Building	共著	2007.03.31	大東文化大学紀要第四十五号<社会科学>	建設コストモデルへニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法の適用を行った。香港におけるビルの建設費に関連するコストクロスセクションデータについて解析を行った。Cheung and Skitmore(2006)Model 解析の検討を行った結果、説明変数と目的変数は線形関係ではないことがわかった。Asano-Bhattacharyya グラフ (2006) による検討が効果的であることがわかった。共著者：◎浅野美代子、School of Graduate Studies,University College London, Marco K.W.Yu. 筆者は (1-13 頁) 担当、B 5 版、総頁 317 頁
3	第 8 章 地域学習センター創設の可能性	単著	2007.03.31	地域デザインフォーラム・ブックレット No.17 元気な学生まちづくり 大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム第 3 分化会の研究で「地域学習センター創設の可能性」についての研究をおこなった。生涯学習は近年さらに重要になった。文部科学省の施策においても今後の重要課題とされている。本学においても、施策に対応することが大事であり検討を行った。地域に学習センターをつくって住民の希望する豊富なコースの生涯学習をおこなうことは、地域を元気にする最善の方法である。筆者は英国で住民が活発に実際に参加している様子を見て、日本でも行えることを確信した。地域学習センターの実現は、様々の問題を解決することにより、「不動どうり地域学習センター」創設可能である。共著者：大東文化大学教授、浅野美代子、上遠野武志、中村年春、松尾敏充、首藤禎史、助教授、山口諤司、講師、川野幸男、板橋区役所、地域振興課長、橋本一裕、文化部住宅課長、岩田雅彦、産業経済部くらしと観光課長、寺西幸雄、産業活性化推進担当係長、有馬潤 (79-85 頁) 担当、A 5 版、総頁 112 頁。
4	第 7 章 不動どうり地域学習センター創設	単著	2007.12.05	地域デザインフォーラム・ブックレット No.20 学生まちづくり研究 大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム第 3 分科会の研究で「元気な学生まちづくり」についての研究をおこなった。生涯学習は近年さらに重要になっている。文部科学省の施策においても今後の重要課題とされている。本学においても、施策に対処することが大事であり検討を行った。地域に学習センターをつくって住民の希望する豊富なコースの生涯学習をおこなうことは、地域を元気にする最善の方法である。筆者は、英国で住民が活発に実際に参加している様子を見て、日本でも行えることを確信した。地域学習センターの実現は様々の問題を解決することにより、「不動どうり地域学習センター」として創設可能である。共著者：大東文化大学教授、浅野美代子、上遠野武志、松尾敏充、準教授、山口諤司、川野幸男、板橋区役所、地域振興課長、橋本一裕、文化部住宅課長、岩田雅彦、産業経済部くらしと観光課長、寺西幸雄、有馬潤 筆者は (95-102 頁) 担当、A 5 版、総頁 123.
5	Web-based Data Analysis: Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression -A British Tender Price Index Modeling- (日本語題名: Web 版ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法-英国におけるビル価格指数決定モデル)	共著	2008.03.31	大東文化大学紀要第四十六号<社会科学>	英国のビル価格指数決定モデルの分析を Web 版ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法を用いて解析を行った。建設コストモデルは英国政府の施策決定、価格予測などの検討において重要である。Web 版ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法、は 2007 年 7 月に科研費補助金によって開発された。これによって時系列にたいする建設コストの変化などを解析した。共著者：◎浅野美代子、University College London, Marco K.W.Yu, School of Informatics, University of Westminster, Senior Academic & Director of International Operations Dr.Pijush Bhattacharyya、筑波大学教授、椿広計 筆者は (1-11 頁) 担当、B 5 版、総頁 322 頁
6	A Hedonic Pricing Model of Building Costs: an Application of the Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression	共著	2008.09.01	ISBIS-2008:International Symposium on Business and Industrial Statistics, Prague, Czech Republic 1-4 July 2008,	◎Miyoko Asano (Daito Bunka University), Hiroe Tsubaki (Institute of Statistical Mathematics & University of Tsukuba), Pijush K Bhattacharyya (University of Westminster) and Marco K. W. Yu (University College London) 、タイトル” A Hedonic Pricing Model of Building Costs: an Application of the Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression” 予稿集、(70-71 頁) ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法を用いて、英国におけるビル建築モデルに適用し分析結果を示した。

<p>7 Web版ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法</p>	<p>共著</p>	<p>2008.10.25</p>	<p>平成19年度～平成20年度科学研究費報告書(基盤研究(C)) 課題番号 19500241 研究代表者 浅野美代子、共同研究者 椿広計</p>	<p>英国より、Pijush K Bhattacharyya (University of Westminster)、京都大学、西澤慶彦教授、田澤司氏(株式会社 数理システム) 竹澤邦夫氏(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター)を招けて研究集会を行った。プログラムは以下の内容。 ◎Miyoko Asano (Daito Bunka University), Hiroe Tsubaki (Institute of Statistical Mathematics & University of Tsukuba), Pijush K Bhattacharyya (University of Westminster) and Marco K. W. Yu (University College London) ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web システム: Web-based Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression Analysis and its applications. 田澤司(株式会社 数理システム) データ解析システムをWEB上に実装する: How to implement web-based data analysis and visualization system. 竹澤邦夫(独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構中央農業総合研究センター) Estimation of rice yield using remote sensing data. Pijush K Bhattacharyya(University of Westminster) Black-Schole Analysis of Option Pricing. Kohtaro Hitomi(Kyoto Institute of Technology), *Yoshihiko Nishiyama(Kyoto University) and Ryo Okui(Hong Kong University of Science and Technology) A Puzzling Phenomenon in Semiparametric Estimation Problems With Infinite-Dimensional Nuisance Parameters. 椿広計(統計数理研究所・筑波大学)・大野忠士(筑波大学) 定量的モデルと定性的モデルとの架橋: Bridging Quantitative and Qualitative modeling. 筆者は(1-12頁)担当、A4版、総頁94頁</p>
<p>その他</p>				
<p>1 企業財務データを用いたニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法と射影追跡回帰分析結果の比較</p>	<p>単著</p>	<p>2004.05.20</p>	<p>日本計算機統計学会第18回大会論文集</p>	<p>企業財務データを用いて、ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法と射影追跡回帰分析結果の比較を行った。決算期変更会社の売上高を目的変数とした実例解析の結果、構造変化や決算期変更情報が事前にわからない場合でも、ハイブリッド解析法では解析可能であることを示した。また、射影追跡回帰分析よりもハイブリッド解析法が良い結果となる場合がある事を示した。筆者は93～94頁。A4版、総頁110頁</p>
<p>2 A Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression Analysis and its Application to Data Editing</p>	<p>共著</p>	<p>2006.01.11</p>	<p>International Statistical Institute On Business and Industrial Statistics 第5回国際シンポジウム</p>	<p>The 5th International Symposium on Business and Industrial Statistics Lima, Peru で開催された。◎Miyoko Asano, Pijush Bhattacharyya, 椿広計、八重倉孝共著。International Statistical Institute の部会が2005年4月に発足して、発足後最初の国際シンポジウムにおいて、ニューラルネットと線形回帰分析のハイブリッド解析法をデータ・エデッティングを用いて解析することを示した論文。筆者は(30頁)、A4版、総頁105頁</p>
<p>3 Importance of "Mathematics and Statistics" in the Lifelong Learning in the UK.</p>	<p>共著</p>	<p>2006.05.20</p>	<p>日本計算機統計学会第20回記念大会論文集</p>	<p>英国の生涯学習における「数学と統計」で開講されているコースについてまとめて発表を行った。統計のコースは非常にたくさんある、例えば経営と統計など、統計単独ばかりでなく、様々のコースで取り上げられていた。日本計算機統計学会第20回記念大会発表(同志社大学) 共著者: ◎浅野美代子、School of Informatics, University of Westminster, Senior Academic & Director of International Operations Dr.Pijush Bhattacharyya. 日本計算機統計学会第20回記念大会論文集(219頁)担当、A4版、総頁224頁。</p>
<p>4 A Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression: A British Building Tender Price Index Modelling</p>	<p>共著</p>	<p>2006.09.05</p>	<p>2006年度統計関連連合大会講演報告集</p>	<p>英国の建設コストモデルへニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法の適用を行った。建設コストモデルは英国政府の施策決定、価格予測などの検討において重要である。本解析法によって時系列にたいする建設コストの変化などを解析した。データエデッティングの必要性を見出した。共著者: ◎浅野美代子、School of Informatics, University of Westminster, Senior Academic & Director of International Operations Dr.Pijush Bhattacharyya、筑波大学教授、椿広計、School of Graduate Studies, University College London, Marco K.W.Yu. 筆者は(154頁)担当、B5版、総頁301頁。</p>

5	Web-based Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression Analysis and its Applications	共著	2007.08.18	The International Society for Business and Industrial Statistics (ISBIS2007) 2007.08.18-20	ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web 版システムが 2007 年 7 月に完成した。このシステムを用いた事例を示した。ISBIS2007 は、ポストガリアソレス諸島で開催された。当システムは以下の科研費の助成を受けたものです。平成 19 年度科学研究費（基盤研究（C））課題番号 19500241 研究代表者 浅野美代子、共同研究者 椿 広計 研究課題「ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web システム」 共著者：◎浅野美代子、University of Westminster、Dr.Pijush Bhattacharyya、筑波大学教授、椿広計、University College London、Marco K.W.Yu. 筆者は（150 頁）担当、A 4 版、総頁 210。
6	Data Analysis by the Hybrid Approach to Neural Networks and Linear Regression	共著	2007.08.22	56th Session of the ISI INTERNATIONAL STATISTICAL INSTITUTE (ISI2007) 2007.08.22-29	ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法によるデータ解析法を解説して実データによる解析結果を示して有効性を示した。データエディティングの必要性を見出した事例として、東京 23 区の給水量予測、決算期変更のあった財務データで売上高の分析事例を示した。建設コストモデルは英国政府の施策決定、価格予測などの検討によって時系列にたいする建設コストの変化を示した。ISI2007 はリスボンで開催された。共著者：◎浅野美代子、University of Westminster、Dr.Pijush Bhattacharyya、筑波大学教授、椿広計、University College London、Marco K.W.Yu. 筆者は（270-271 頁）担当、A 4 版、総頁 689 頁
7	何故ニューラルネットワークの予測能力は射影追跡回帰を上回るのかーニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法によるデータ解析の特徴ー	共著	2007.11.29	第 2 回横幹連合コンファレンス	共著者：浅野美代子、筑波大学教授 椿広計、京都大学で開催された。多くの学会と実務者が一同に会合し、故ニューラルネットワークの予測能力は射影追跡回帰を上回るのかを説明した。第 2 回横幹連合コンファレンス集：30D09
8	An Application of Web-based Hybrid Approach of Neural Networks and the Linear Regression Model to the Water Supply forecast in Tokyo District 23	共著	2008.05.22	日本計算機統計学会第 22 回大会	ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法を用いて、東京都 23 区の給水量の解析を行った事例を発表した。ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web 版システムが、2007 年 7 月に完成したために、このシステム利用法と解析事例を示した。当システムは以下の科研費の助成を受けたものです。平成 19 年度～平成 20 年度科学研究費（基盤研究（C））課題番号 19500241 研究代表者 浅野美代子、共同研究者 椿広計、研究課題「ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web システム」 共著者：◎Miyoko Asano (Daito Bunka University), Hiroe Tsubaki (University of Tsukuba), Pijush Bhattacharyya (Univ. of Westminster), Marco K. W. Yu (University College, London) 筆者(27-30 頁)担当、A 4 版、総頁 180。
9	Web-based Hybrid Approach to Neural Networks And Linear Regression Analysis	共著	2008.12.05	Joint Meeting of 4th World Conference of the International Association for Statistical Computing (IASC) and 6th Conference of the Asian Regional of the IASC on Computational Statistics & Data Analysis	ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法についての内容を解説し、ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web 版システムが、2007 年 7 月に完成したために、このシステム利用法と解析事例を示した。当システムは以下の科研費の助成を受けたものです。平成 19 年度～平成 20 年度科学研究費（基盤研究（C））課題番号 19500241 研究代表者 浅野美代子、共同研究者 椿広計、研究課題「ニューラルネットワークと線形回帰分析のハイブリッド解析法 Web システム」 共著者：◎浅野美代子、University of Westminster、Dr.Pijush Bhattacharyya、筑波大学教授、椿広計、University College London、Marco K. W. Yu. 筆者は（219 頁）担当、A 4 版、総頁 334 頁
III 学会等および社会における主な活動					
1	1978.04.01	～	現在	応用統計学会会員	
2	1978.04.19	～	現在	日本オペレーションズ・リサーチ学会会員	
3	1992.06.25	～	現在	日本女性技術者フォーラム会員（2002.04.01～2004.03.31）運営委員	

4	1996.09.01	～	現在	日本計算機統計学会会員
5	1996.09.01	～	現在	日本行動計量学会会員
6	1997.04.01	～	現在	日本品質管理学会会員
7	1998.04.01	～	2008.03.31	板橋区役所・大東文化大学共同研究研究員（地域デザインフォーラム）
8	1998.04.01	～	現在	大東文化大学・国際比較政治研究所研究員（Media Studies Working Group）
9	1998.04.01	～	現在	大東文化大学体育センター体育会弓道部部长
10	2001.04.01	～	現在	日本統計学会会員
11	2005.02.10	～	2005.02.24	東松山市役所東松山市きらめき市民大学「IT社会とコミュニケーション」講義
12	2005.03.01	～	現在	The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc. (IEEE)会員
13	2005.05.01	～	現在	International Statistical Institute (ISI)会員
14	2006.09.01	～	現在	板橋区役所板橋区入札監視委員会（2006.09.01～現在、副委員長）
15	2007.06.08	～	2007.07.05	板橋区役所板橋区高齢者大学校「板橋グリーンカレッジ」専門課程（社会生活科）「IT社会とICT活用の可能性ー統計学によるデータの常識を身につけよう！ー」講義
16	2008.08.08	～	2008.08.08	神奈川県町村統計事務研究会、松田町役場神奈川県町村統計事務研究会平成20年度「統計セミナー」講義
17	2009.03.02	～	現在	エネルギー・資源学会会員
18	2009.04.01	～	現在	板橋区役所・大東文化大学共同研究研究員（地域デザインフォーラム）

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	菟原 明	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「憲法の優位」論	単著	2004.10.30	大東法学第 14 巻第 1 号	Ch. Starck の「憲法の優位」をめぐる構想を分析したもの。			
2 「憲法解釈」論 (1)	単著	2005.10.00	大東法学第 15 巻第 1 号	Ch. Starck の「憲法解釈」論を軸に、彼の憲法構想を分析するとともに、あわせてドイツ憲法学を考察する。			
3 「一般国家学」の存在理由?	単著	2006.03.31	大東文化大学法学研究所報	Ch. Starck のゲティンゲン大学退職講義を紹介しつつ、一般国家学の現在のドイツにおける問題状況にふれる。			
4 基本法コンメンタール憲法 [第 5 版]	共著	2006.04.00	日本評論社 小林孝輔・芹沢斉編	憲法第 17、18、31 条の項を担当。			
5 「憲法解釈論 (2)」	単著	2006.10.30	大東法学第 16 巻第 1 号	「憲法解釈論 (1)」に引き続き Ch.Starck の憲法解釈論を軸に、彼の憲法構想を分析するとともに、あわせて現時のドイツ憲法学を考察する。			
6 「憲法解釈論 (3)」	単著	2007.10.30	大東法学第 17 巻第 1 号	「憲法解釈論 (1) (2)」に引き続き、Ch.starck の憲法解釈論を軸に、彼の憲法構想を分析するとともに、あわせて現時のドイツ憲法学を考察する。			
7 「憲法解釈論 (4・完)」	単著	2008.10.30	大東法学第 18 巻第 1 号	「憲法解釈論 (1)、(2)、(3)」に引き続き、Ch. Starck の憲法構想を追究するとともに、あわせて現時のドイツ憲法学を考察する。1～52 頁			
8 ニーダーザクセン州の「公の安全と秩序に関する法」の法改正について	単著	2009.03.31	大東文化大学法学研究所報	ドイツ・ニーダーザクセン州の「公の安全と秩序に関する法」の法改正について、論じたもの。1～10 頁。			
その他							

1	高橋和之・長谷部恭男・石川健治編 別冊 ジュリスト憲法判例 百選 I (第5版)	共著	2007.02.28	有斐閣	法人の人権享有主体性の項担当
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1976.04.01	～	現在	日本公法学会会員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	加瀬 幸喜	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 現代社会と法の講義				現代社会と法の講義では、毎回、法学を学ぶ上で前提となる知識および法学の基礎知識に関する小テスト (40 問程度) を実施している。小テストは、採点后学生に返却し、誤答の箇所が正解に達するまで、答案が教員と学生間を往復し、基礎知識が確実に身に付くようにしている。		
2) 基本法学概論の講義				基本法学概論の講義では、毎回、小テスト (60 問程度) を実施している。テストの内容は、契約法の基礎知識、地理の基本知識、現代史の基本知識、基本的な欧文略語の知識および漢字の書き取りを問うものである。これは、昨今の大学生の学力低下に対応したものである。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 現代社会と法の小テスト問題および解説プリント				毎回の授業で使用する小テスト問題および解説プリントは、すべて担当教員が共同で開発した教材である。		
2) 基本法学概論の小テスト問題				毎回の授業で使用する小テスト問題は、私が高校の教科書などを参考にして開発したオリジナルな教材である。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 2 年生少人数教育の現状と課題			2008.12.03	本学法学研究所の研究会で、基本法学概論の授業方法および課題について、発表した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「破産会社の取締役による自己招致」	単	2006.03.01	法律のひろば 2006 年 3 月号	本論文では、破産した会社の取締役は、業務を執行していないのであるから、保険事故を招致した場合であっても、保険金支払免責条項に該当しないと論証する。65 頁-71 頁		
2 「無保険車傷害保険における胎児の被保険者該当性」	単	2007.01.01	法律のひろば 2007 年 1 月号	本論文では、無保険車傷害保険は傷害保険であるから、保険事故発生時に胎児であった者には、同保険は適用されない旨を論証する。63 頁-70 頁		
3 「自賠法および対人賠償保険における消滅時効」	単	2007.09.13	交通賠償の新次元 (判例タイムズ社発行)	自賠法および対人賠償保険に定める各種の請求権について、その消滅時効を論じた。248 頁-262 頁		
4 「自動車賠償保険と遅延損害金の担保」	単	2008.04.01	法律のひろば 2008 年 4 月号	自賠責保険および任意対人賠償保険に定める保険金請求権および被害者直接請求権が損害賠償債務の遅延損害金を担保する場合およびその範囲を論証した。49 頁-60 頁		

5	人身傷害補償保険と 事故の外来性	単	2009.01.01	法律のひろば 2009年1 月号 57頁-65頁	人身傷害補償保険の保険事故の要件と免責条項との関係を 検討した。
	その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1981.04.00	～	現在	日仏法学会会員	
2	1981.04.00	～	現在	日本私法学会会員	
3	1981.04.00	～	現在	日本保険学会会員	
4	2005.05.00	～	現在	日本交通法学会会員	
5	2005.12.00	～	現在	日本賠償科学会会員	
6	2006.04.01	～	現在	(財) 自賠責保険・共済紛争処理機構紛争処理委員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	貴田 晃	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 「事前学習課題」			2008.12.01	2009 年度法律学科推薦入試合格者を対象とした自宅学習用課題。A 4 版 8 頁。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文 1 「オフィシュとガー ジュ」(2)	単著	2005.03.30	大東文化大学法学研究所 「所報」第 25 号	前版の論考に引きつづき、オフィシュの中でも最も古い官職のいくつかを、中世において考察したもの、フランソワ・ヴィヨンの詩集に登場する人物たちを例として挙げた。B 5 判 28 頁中 4 頁。		
その他 1 「フォシオン対談」	共著	2008.12.10	財団法人法政大学出版局	フランス 18 世紀の思想家マブリの代表作の翻訳。共訳者◎野沢協。「啓蒙のユートピア」第 2 巻所収。総頁 828 頁。512 頁～635 頁。		
III 学会等および社会における主な活動						
1	1975.04.00	～	現在	日本フランス語フランス文学会会員 (1994 年～1996 年 幹事、1994 年～1998 年 語学教育委員会 委員)		
2	2008.04.01	～	現在	フランス近代法研究会会員 (大東文化大学法学研究所)		

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	木原 正雄	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 少人数クラスにおける小テストの添削指導		2004.04.00		2004・2005 年度担当科目「現代社会と法 (演習)」、2008 年度担当科目「基本法学概論」において、毎回小テストを実施。次回添削の上で返却し、全問正解に至るまで受講生に再提出を義務づけた。(2004 年 4 月～2008 年 1 月)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 少人数クラスにおける解説プリント、小テストの作成		2004.04.00		2004・2005 年度担当科目「現代社会と法 (演習)」、2008 年度担当科目「基本法学概論」において、毎回解説プリントを作成、配布し、小テストを作成、実施した。(2004 年 4 月～2008 年 1 月)			
2) オムニバス授業における小テストの作成		2004.04.00		2004 年度～2009 年度担当科目「法学特殊講義 1 A・1 B (問題演習・公務員型 A・B)」において、毎回公務員試験の過去問などから精選した問題を作成し、小テストを実施した。(2004 年 4 月～現在)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 大東文化大学法学研究所第 33 回(2008 年度第 4 回)研究会「二年生少人数教育の現状と課題」		2008.12.03		同研究会で加瀬幸喜教授、白石裕子教授、森稔樹教授、山口志保教授とともにテーマについて報告し、討論を行った。(2008 年 12 月 3 日)			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 公園都市計画事業認可処分的前提となる都市計画決定における裁量権	単著	2004.07.01	法学セミナー2004 年 7 月号 (No.595)	東京高判 2003・9・11 判時 1845 号 54 頁について、都市計画決定を行う際の考慮要素と公用負担法の基本理念という観点から評釈、解説した。(119 頁)			
2 川辺川利水訴訟控訴審判決	単著	2004.12.01	法学セミナー2004 年 12 月号 (No.600)	福岡高判 2003・5・16 判時 1839 号 23 頁について、土地改良法 3 条に基づく資格者の同意率に関する立証責任の分配と事実認定という観点から評釈、解説した。(115 頁)			
3 難民不認定処分国家賠償請求事件控訴審判決	単著	2005.05.01	法学セミナー2005 年 5 月号 (No.605)	東京高判 2004・1・14 判時 1863 号 34 頁について、国家賠償法における違法性と難民認定処分における法務大臣の調査義務という観点から評釈、解説した。(123 頁)			

4	公道の不法占拠者に対する占用料相当額の債権取得とその不行使—東京都はみ出し自販機住民訴訟	単著	2005.06.10	ジュリスト臨時増刊 2005・6・10 (No.1291)	最判平成 16・4・23 民集 58・4・892 について、東京都が損害賠償請求権等を取得するか及びその不行使が適法かという観点から評釈、解説した。(42～43 頁)
5	郵便区分機類に係る不当な取引制限事件	単著	2005.10.01	法学セミナー2005 年 10 月号 (No.610)	東京高判 2004・4・23 判時 1879 号 50 頁について、行政審判における理由付記の程度及び独占禁止法 54 条 2 項の要件の認定と裁量という観点から評釈、解説した。(124 頁)
6	行政指導による産業廃棄物処分業の許可の留保と損害賠償	単著	2006.03.01	法学セミナー2006 年 3 月号 (No.615)	大阪高判 2004・5・28 判時 1901 号 28 頁について、行政指導を理由とした許可の留保の適法性という観点から評釈、解説した。(122 頁)
7	選挙法上の期間	単著	2006.05.20	別冊ジュリスト No.181	村長選挙無効請求事件(最判昭和 34・6・26 民集 13・6・862) について、行政法関係における期間の計算という観点から評釈、解説した。(68～69 頁)
8	障害年金支給裁定の職権取消しと過払年金の返還	単著	2006.08.01	法学セミナー2006 年 8 月号 (No.620)	東京高判 2004・9・7 判時 1905 号 68 頁について、授益的処分に対する職権取消しの可否とその効果という観点から評釈、解説した。(111 頁)
9	裁判官の訴訟手続上の措置と国家賠償責任	単著	2007.01.01	法学セミナー2007 年 1 月号 (No.625)	名古屋高判 2004・11・26 判タ 1205 号 179 頁について、裁判官の訴訟手続上の措置についての国家賠償法上の違法性判断の基準という観点から評釈、解説した。(108 頁)
10	公益上の理由による情報の開示	単著	2007.11.01	法学セミナー2007 年 11 月号 (No.635)	高松高判 2006.9.29 判タ 1237 号 211 頁について、高知県情報公開条例 6 条 2 項の公益上の理由による情報の開示にかかる裁量と立証責任という論点に関して、評釈、解説した。
その他					
1	情報公開における最近の諸問題	単	2006.11.10	埼玉県内市町村情報公開研究会議	2004～2006 年度における情報公開に関する判例・裁判例にあらわれた重要論点の解説及びそれらが示唆するものと、いわゆる「大量請求」に対する地方公共団体のあるべき対応について講演した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1988.07.00	～	現在	日本公法学会会員
2	1990.04.00	～	現在	フランス行政法研究会会員
3	1990.04.00	～	現在	日本法社会学会会員
4	1990.04.00	～	現在	民主主義科学者協会・法律部会会員
5	1991.04.00	～	現在	行政判例研究会会員
6	1991.04.00	～	現在	日米法学会会員
7	1999.04.00	～	現在	春日部市情報公開審査会委員
8	1999.06.00	～	現在	戸田市個人情報保護審査会委員
9	1999.06.00	～	現在	戸田市情報公開審査会委員
10	2000.10.00	～	現在	鳩山町情報公開及び個人情報保護審査会委員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	柴田 敏夫	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1971.05.00	～	現在	日本私法学会会員		
2	1971.05.00	～	現在	比較法学会会員		
3	1983.10.00	～	現在	日本家族 (社会と法) 学会会員		
4	1984.06.00	～	現在	比較家族史学会会員		
5	1993.04.00	～	現在	比較法史学会会員		

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	白石 裕子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 「基本法学概論」教材		2008.04.01	2008年4月1日～2009年3月31日 2008年4月から2年次生の必修科目として「基本法学概論」が置かれたが、この科目の担当者としてオリジナル教材を作成した。内容としては、「現代社会と法」で使用した法学の内容を発展させたものに加えて、公務員試験対策やSPI対策として、世界・日本各地の白地図、明治以降の現代史、さらに一般常識としての欧文略号 (IMF、GATT、ODAなど) や常用漢字を取り入れた。毎回、前週に解説したことを試験し、その要点をもう一度解説しながら理解させ、知識の定着に務めた。			
2) 「現代社会と法」教材		2004.04.01	2004年4月1日～2010年3月31日 「現代社会と法」という科目は、少人数クラス授業において毎回小テストを行って、法学、憲法、民法、刑法の基礎知識を習得させるというものである。そのため、この科目を担当する教員を中心に関係科目担当者が共同して小テストや解説プリントという教材の開発を行い、実際に授業を行いながら、年に数回の会議を行って、これらの教材の改善を重ねている。この教材に加筆して1冊の本とし、今年度中に出版の予定である。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 会社法重要判例解説 [新版]	共	2004.09.01	成文堂	本書は、会社法の分野における最新の重要判例の解説双書である。会社法を学ぶ者が、一般概説書との併用により、会社法全体を理解することができるよう執筆されたものである。「株主名簿閉鎖中の名義書換」、「名義書換未了と株式譲受人の地位」、「会社の過失による名義書換の未了と株式譲受人の地位」、「失念株」を担当 (酒巻俊雄、尾崎安央他 30人) 総頁数 373 頁中 8 頁。		
2 新版基本問題セミナー 1 会社法	共	2005.04.20	成文堂	本書は、会社法の重要な論点について詳細な解説を行うとともに、派生問題および関連問題を掲げて解説することにより、法学部で法律を学ぶ学生から法科大学院の学生までを視野に入れ、会社法の基礎から発展的課題まで理解できるよう執筆されたものである。「株式交換・株式移転による完全親子会社関係の形成」を担当 (酒巻俊雄、尾崎安央他 36人) A5版、総頁数 502 頁中 13 頁。		

3	新版基本問題セミナー2 商法総則・商行為法	共	2005.04.20	成文堂	本書は、商法総則・商行為法の重要な論点について詳細な解説を行うとともに、派生問題および関連問題を掲げて解説することにより、法学部で法律を学ぶ学生から法科大学院の学生までを視野に入れ、会社法の基礎から発展的課題まで理解できるよう執筆されたものである。「営業所の区別とその効果」を担当（酒巻俊雄、栗山徳子他 28 人）A 5 版、総頁数 358 頁中 9 頁。
4	会社法重要判例解説〔第 3 版〕	共	2006.09.30	成分堂	本書は、会社法の分野における最新の重要判例の解説書である。会社法を学ぶ者が、一般概説書との併用により、会社法全体を理解することができるよう執筆されたものである。平成 17 年の会社法全面改正に伴い、旧版を改定した。「名義書換未了と株式譲受人の地位」、「会社の過失による名義書換の未了と株式譲受人の地位」、「失念株」を担当。（酒巻俊雄、尾崎安央他 42 人）総頁数 375 頁中 6 頁。
5	内部統制の理論と実践	共	2007.02.19	財経詳報社	平成 17 年に会社法が制定され、内部統制システムの構築が取締役会の責務となった。しかし、この制度の意味、理論的な問題点、実践上の課題などにつき詳細かつ網羅的な解説を行うものである。「フランスにおける内部統制」および「改正前商法における議論」を担当。（根田正樹、菅原貴与志他 17 人）総頁数 361 頁中 9 頁。
論文					
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1987.05.01	～	現在	日仏法学会	
2	1987.05.01	～	現在	日米法学会	
3	1987.05.01	～	現在	日本私法学会	
4	1987.05.01	～	現在	日本比較法学会	
5	1994.11.01	～	現在	経済法学会	
6	2003.10.01	～	2005.09.30	関東信越国税局関東信越国税局土地評価審議会	委員
7	2004.04.01	～	現在	日本公証法学会	
8	2005.10.01	～	2007.09.30	関東信越国税局関東信越国税局土地評価審議会	委員
9	2007.10.01	～	2009.09.30	関東信越国税局関東信越国税局土地評価審議会	委員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	苑原 俊明	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価 (2008 年 12 月実施) において、平均値 3.2 (5 段階評価) を得た。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 苑原俊明「先住民族の文化遺産の国際的保護―国連の動向とアイヌ民族」	単	2006.10.30	大東文化大学法政学会紀要『大東法学』16 巻 1 号 37-60 頁	国連における先住民族の文化遺産の法的保護に関する動向を分析し、日本のアイヌ民族への適用を論じた。		
2 先住民族の権利と環境	分担執筆	2006.11.25	国際人権法学会編『講座国際人権法』第 2 巻「国際人権規範の形成と展開」のうち、第 13 章「先住民族の権利と環境」を分担執筆、信山社 344-361 頁	学会設立 15 周年を記念した学会編集の論文集の一つ。国際人権法と環境保護との関係を論じ、特に先住民族の土地・資源への権利保全との関連について分析したもの。		
3 先住民族の権利―事前の自由なインフォームド・コンセント原則との関連で―	単著	2007.07.00	国立民族学博物館研究報告 32 巻 1 号 63-85 頁	先住民族が伝統的に所有、占有または使用してきた土地ないし領域における、大規模な開発行為に対して、関係民族の権利として認められてきた、事前の自由なインフォームド・コンセント (F P I C) 原則について分析したもの。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1977.04.00	～	現在	アメリカ国際法学会会員		
2	1977.04.00	～	現在	東京大学国際法研究会会員		

3	1977.04.00	～	現在	日本国際法学会会員
4	1984.04.00	～	現在	日本国際政治学会会員
5	1988.04.00	～	現在	国際人権法学会会員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	多田 辰也	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 後藤昭=白取祐司編 インターネットコンメンタル刑事訴訟法 (http://www.lawlibrary.jp/db.html)	共著	2009.04.00	日本評論社・株式会社TKC提供	刑事訴訟法第2編第一審前注、第2編第1章捜査前注、刑法189条~196条及び刑法198条~246条の解説を担当。		
論文						
1 黙秘権行使と不利益推認	単著	2004.10.24	勁草書房	現代社会型犯罪の諸問題 (板倉宏博士古稀祝賀論文集) 収録 A5判、総頁数 587 頁中 22 頁。		
2 準現行犯逮捕—和光大事件	単著	2005.03.18	刑事訴訟法判例百選 (第8版)	井上正仁編 最決平成8年1月29日刑集50巻1号1頁に対する判例解説 B5判、総頁数 250 頁中 2 頁。		
3 公訴棄却判決への関与と除斥事由 (判例解説)	単著	2006.06.00	ジュリスト 1313 号	平成17年度重要判例解説 最判平成17年8月30日刑集59巻6号726頁に対する判例解説 B5判、総頁数 320 頁中 2 頁。		
4 排除法則の再構築	単著	2007.05.25	日本評論社	村井敏邦ほか編・刑事司法改革と刑事訴訟法下巻収録 A5判、総頁数 550 頁中 33 頁。		
5 法律学小辞典 [第4版補訂版] 金子宏ほか編	単著	2008.10.20	有斐閣	疑わしきは被告人の利益に、科学捜査、科学的証拠、逆送、刑事確定訴訟記録法、検察審査会、合理的疑いを超える証明、実質証拠、司法取引、縮小認定、犯罪被害者等の権利利益の保護を図るための刑事手続に付随する措置に関する法律、被害者の意見陳述、被疑者の取調べ、補助証拠、無罪の推定、和解の解説を執筆。		
6 無罪判決後の勾留	単著	2009.04.10	ジュリスト 1376 号 (平成20年度重要判例解説)	最決平成19年12月13日刑集61巻9号843頁に対する判例解説。B5版、総頁数 335 頁中 2 頁。		
その他						

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1979.10.00	～	現在	日本刑法学会会員
2	1981.05.00	～	現在	刑事判例研究会会員
3	1983.07.00	～	2006.06.00	日本犯罪社会学会会員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	Noel Williams	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 'Happy Family? In Pursuit of Happiness in Japan'		2006.00.00	Daito Law Review vol.2/vol.3 2006/2007	vol.2 pp.54-82		
その他						
1 'Lineal Ascendent-Descendent Relationship and the Right to Life in Postwar Japan'		2004.07.02		オーストラリアの University of West Australia で開かれた Australia and New Zealand Law' 学会で「戦後日本の法」について発表。		
2 'Brain Death in Japanese Law'		2006.09.22		イギリス オックスフォード大学で開かれた日本学 25 周年記念で特別講演		
III 学会等および社会における主な活動						

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	野口 昌宏	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) HP上で授業の教材等の掲載による事前学習の促進		2003.04.01	個人のHP上に、専門科目の担当授業の毎週のレジュメ配布、授業で取上げる判例(事実と判旨)および判例に関連する資料(事件現場の写真、事件に関連した資料)等ビジュアルな資料を事前に掲載し、受講生はこれらのHP上の資料を事前に学習することによって、自学自習および授業をより深く理解できるよう運営している。 (http://www.daito.ac.jp/~mnoguchi/)。 (2003年4月1日～現在)。			
2) 授業運営の中でメーリングリストを利用したレポートとレジュメの配布およびディスカッションの実施		2007.05.01	2007年度担当科目「専門演習」について、メーリングリストを利用して、レポート提出、毎週のゼミ生の研究報告レジュメの事前配布およびディスカッションを実施した(大東大情報センターのYドライブ edu¥002542)。(2007年5月1日から2008年度1月31日)。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『民法入門』(発行:現代民事法研究会)		2006.04.20	担当科目「民法入門」の教科書を補完する教材として3名で共同執筆、自主出版して使用。筆者は、第1節～第3節を担当。(2006年4月1日～2009年1月31日)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『民法入門』	共著	2006.03.25	現代民事法研究会	本書は、法学部に入学した学生が必ず学ばなければならない民法について、民法総則以下の科目を学習するに当たって、その学習をスムーズにするために民法の全体像を把握させるために、民法は何を規定しているか、民法という法律のシステム、裁判基準、法律関係と権利義務などについて、民法の全体を把握させる目的で構成されたものである。分担部分第1節、第2節、第3節41頁(全体で75頁)。著作者 野口昌宏、山口康夫、江口幸治。		
2 『わかりやすい建設業法の手引き』	共著	2009.03.11	新日本法規出版(株)	建設業法は、建設業を営むための許可申請や請負契約に関する事項等を定めており、建設業者はこの法律に則って業務を行う必要がある。しかし建設業法は160条を超える条文からなるうえに、政省令への委任規定も多数あり、関係者はその内容を理解するのに困難を来している。そこで本書は、建設業法や関連法規・通達、判例の最新内容について、条文を分かりやすく解説した。分担部分:第2章(第3条～第17条)で270頁(全体で1374頁)。著作者:山口康夫、野口昌宏、有泉勲、岡垣豊、笠井修、執行秀行、古川健太郎、宮武洋吉、村田光男		

論文				
1 「一 建築士が建築士法三条から三条の三まで及び建築基準法(平一〇法一〇〇号改正前)五条の二の各規定等による規制の実効性を失わせる行為をした場合における建築物の購入者に対する不法行為の正否。二 建築確認申請書に自己が工事監理を行う旨の実体に沿わない記載をした一級建築士が建築主に工事監理者の変更の届出をさせる等の適切な措置を執らずに放置した行為が当該建築主から瑕疵のある建物を購入した者に対して不法行為となるとされた事例(最二判平成15年11月14日)」	単	2005.01.01	判例評論 551号(判例時報1873号)	建売住宅の売主であり建築主が、建築士によって建築確認を得た設計図書と異なる建築基準法に適合しない欠陥住宅を建築した場合に、売主は建売住宅の買主に対して瑕疵担保責任を負うが、同時に建築主を代理して建築確認申請した建築士は、契約関係にない買主に対して不法行為責任を負うとした初めての最高裁判決を、不動産法の立場からアプローチして評論した。9頁。
2 「欠陥住宅と建築士の不法行為責任」	単	2005.03.31	大東文化大学法学研究所報第25号	建売住宅の建築主が瑕疵のある欠陥住宅を建設し販売して、一般消費者である買主に損害を与えた場合に、建築確認申請の際に名義を貸した一級建築士は、当該欠陥住宅を購入した買主に対して不法行為責任を負うかについて、消費者保護の立場から建築士の不法行為責任を検討してものである。5頁。
3 「動画を利用した『民法基礎演習』」	単著	2007.03.31	大東文化大学法学研究所報第27号	本論文は、法学研究所のe-learning教材開発研究班の報告「法学部におけるマルチメディア教材利用の意義と効果」の1として掲載されたものである。大学の大学院化を受けた大学におけるファカルティ・デベロップメント(FD)に関連して、マルチメディアや情報処理技術を活用した民法の授業展開を報告したものである。9頁。
4 「動機付けと学習意欲の向上」	単著	2008.03.31	大東文化大学法学研究所報第28号	本稿は、法学研究所のe-learning教材開発研究班の報告「授業における携帯電話の利用と動機付けの向上」の1として掲載されたものである。大学全入学時代を迎えて、低学力や低意欲学生が増加しつつある現状で、高校時代に学んだ経験のない法学系の専門科目の教育に、e-learning教材の1つである携帯電話を利用して授業の理解度の確認、出席確認、レポートの確認と返却など、携帯電話を利用して「教える授業」から「学ぶ授業」への模索を報告したものである。3頁。
その他				

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1970.10.00	～	現在	日本私法学会会員
2	1985.05.00	～	現在	日米法学会会員
3	1985.06.00	～	現在	日本不動産学会会員
4	1994.04.01	～	現在	(社)私立大学情報教育協会法律学教育IT活用研究委員
5	2007.05.01	～	現在	特定非営利活動法人・雪氷環境プロジェクト理事および技術部研究者(e-Radによる研究者番号申請中)

(表 24)

所属	法学部法律学科		職名	教授	氏名	古川 陽二	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 法律学科生として必須の知識習得の促進			2007.04.01		(2004.04.01 および 2007.04.01 以降) 2004 年度および 2007 年度以降の担当科目「現代社会と法 (演習)」について、担当教員全員が共同で開発した「小テスト」問題および「解説プリント」を用いて毎回の授業を実施している。			
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
1) 「労働契約・就業規則」、「賃金」、「労働時間」、「休日・休暇」、「退職・解雇」			2004.09.28		埼玉県西部労働商工センター主催 所沢地区労働学院労働法講座①ー⑤ 2004.9.28～2004.10.12			
2) 「成果主義賃金とは? - 制度導入に際してのポイント - 評価する人・される人 - 制度運用に際してのポイント -」			2005.02.02		東京都労働相談情報センター 王子事務所主催労働セミナー①ー② 2005.2.2～2005.2.9			
3) 労働契約・就業規則、賃金・労働時間、退職・解雇、パートタイム労働者と法、派遣労働者と法			2005.06.07		埼玉県北部労働商工センター主催熊谷地区労働学院労働法講座①ー⑤ 2005.6.7～6.21			
4) 労働契約の基礎、労働契約の開始と展開			2005.07.12		J I R R A (日本労使関係研究協会) 主催個別労働紛争解決のための労使研修コース①ー②			
5) 労働契約の基礎、労働契約の開始と展開			2006.07.18		J I R R A (日本労使関係研究協会) 主催 個別労働紛争解決のための労使研修コース①ー②			
6) 労働契約の基礎、労働契約の開始と展開			2007.10.30		J I R R A (日本労使関係研究協会) 主催 個別労働紛争解決のための労使研修コース①ー②			
7) 労働契約の基礎、労働契約の開始と展開			2008.05.20		J I R R A (日本労使関係研究協会) 主催 個別労働紛争解決のための労使研修コース①ー②			
8) レベルアップ労働組合! ~ 基礎から最近の法改正まで ~ (①労働組合活性化、②組合視点の法改正・法制定)			2008.07.07		東京都労働相談情報センター 亀戸事務所主催セミナー 2008.07.07～.07.10			
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
1 「組合活動」、「団体交渉」、「争議行為」および「労働協約」担当		共著	2004.09.00	日本乗員組合連絡会議・航空労働研究会編『航空再編と労働組合』		33 頁 - 103 頁		

2	イギリス編のうち、社会保障事情を除く部分を担当	共著	2005.01.25	島田陽一・小嶋典明・古川陽二・野川忍ほか著『欧米の社会労働事情：イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・EU・アメリカー欧米人の仕事と暮らし』所収、ILO協会	3頁－41頁
3	「解雇と退職の法律問題」、「組合活動」、「団体交渉」、「争議行為」、「労働協約」および「労働条件の不利変更」担当	共著	2009.03.02	航空労働研究会編『航空リストラと労働者の権利』旬報社	航空産業に働く労働者の特殊性に配慮しながらそれぞれの項目についての法律問題を論じたもの。66頁－111頁、139－216頁、282頁－297頁
論文					
1	イギリスにおける労働関係の変容と労働立法政策	単著	2005.11.15	日本労働法学会誌 106号 法律文化社	日本労働法学会第109回大会ミニシンポジウム・労働関係の変容と「雇用契約」において、イギリス・ブレア労働党政権の労働立法による雇用関係に対する規制の論理と手法について報告した内容をまとめたもの。38頁－49頁
2	ニュー・レイバーの労働立法政策とその特質	単著	2005.12.15	季刊労働法 211号 労働開発研究会	イギリス・ブレア労働党政権の労働立法による雇用関係に対する規制の論理と手法について論じた日本労働法学会誌106号掲載論文をさらに詳細に論じたもの。157頁－174頁
3	イギリスの最賃制度の現状と課題	単著	2007.11.20	世界の労働 57巻 11号	イギリスの最低賃金制度の現状と問題点について論じたもの。16頁－25頁
その他					
1	海外判例レポート（イギリス）極右政党の組合活動家に対する除名処分	単著	2004.07.00	労働判例 870号 産労総合研究所	96頁－97頁
2	海外労働事情 37 イギリス／情報・協議：新しい職場の権利（翻訳）	単著	2005.03.25	労働法律旬報 1596号 旬報社	15頁－19頁
3	「管理監督者」とは何か	単著	2006.08.15	人事実務 997号 産労総合研究所	労基法上の管理監督者の範囲について、実務上の取扱いについて論じたもの 19頁－21頁
4	（巻頭言）労働と法／私の論点－改正労組法の2年半：不当労働行為審査の的確化とは－	単著	2007.08.10	労働法律旬報 1653号 旬報社	4頁－5頁
5	（翻訳）S. ディーキン・F. ウィルキンソン著「労働法、競争力そして社会権－労働法学における最近の理論上の貢献について」	共著	2007.09.25	労働法律旬報 1656号 旬報社	ケンブリッジ大学S. ディーキン教授が日本の読者のために書き下ろした新しい労働法のパラダイム論に関する論文を翻訳したもの（共訳者：有田謙司専修大学教授）6頁－29頁
6	イギリス労働法研究会訳 H. コリンズ『イギリス雇用法』	共著	2008.02.29	成文堂	ロンドン大学LSE教授H. コリンズ教授の著書を翻訳したもの。第11章社会権の翻訳、「あとがき」の執筆および著書全体の監修を担当。268頁－290頁、301頁－302頁
7	解雇権濫用法理	共著	2008.05.25	唐津博・和田肇編『労働法重要判例を読む』日本評論社	解雇権濫用法理に関する判例法理の分析と今後のあるべき法理について論じたもの。170頁－180頁
8	イギリス労働法の一断面－コリンズ『雇用法』の内容と特徴「特集論文の掲載にあたって」	単著	2008.05.25	労働法律旬報 1672号 旬報社	イギリス労働法研究会から出版されたH. コリンズ『イギリス雇用法』（成文堂、2008年）の理論的特徴について論ずる特集の巻頭言。6頁－7頁

9	「新春鼎談 集团的労働関係における新しい課題」(宮里邦雄弁護士、八代徹也弁護士との座談会)	共著	2009.01.15	労働法令 968号 産業労働調査所	「非組合員の労働条件と義務的団交事項」および「労働組合法上の『労働者』性」に関する判例・労働委員会命令の意義と課題について、2名の弁護士との座談会の内容を記録したもの。6頁-28頁
10	「非組合員の労働条件と義務的団交事項」(国・中労委(根岸病院・初任給引下げ団交拒否)事件)	単著	2009.04.10	ジュリスト臨時増刊 1376号『平成20年度重要判例解説』有斐閣	241-243頁

III 学会等および社会における主な活動

1	1979.05.00	～	現在	日本労働法学会編集委員 (2008.5.18～現在)
2	1982.05.00	～	現在	日本社会保障法学会会員
3	1996.12.10	～	現在	日本乗員組合主催「航空労働研究会」研究メンバー
4	2000.08.00	～	現在	Industrial Law Society (イギリス) 会員
5	2001.06.00	～	現在	International Network on Transformative Employment and Labour Law (INTELL) 会員
6	2001.10.01	～	2009.3.31	埼玉労働局労働関係紛争担当参与会参与委員
7	2005.04.14	～	現在	埼玉県労働委員会公益委員
8	2005.04.14	～	現在	埼玉県労働委員会個別的労使紛争あっせん員候補者
9	2005.04.14	～	現在	埼玉県労働委員会(労働関係調整法に基づく)あっせん員候補者

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	森 稔樹	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 地方分権・自治			2006.06.07	東松山市きらめき市民大学		
2) 地方分権・自治			2007.06.07	東松山市きらめき市民大学		
3) 地方分権・自治			2008.06.11	東松山市きらめき市民大学		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 公共の福祉と私権の制限			2004.10.12	国土交通省国土交通大学校平成 16 年度専門課程用地 (Ⅱ期) 研修		
2) 公共の福祉と私権の制限			2005.06.21	国土交通省国土交通大学校平成 17 年度専門課程用地 (Ⅰ期) 研修		
3) 公共の福祉と私権の制限			2005.10.18	国土交通省国土交通大学校平成 17 年度専門課程用地 (Ⅱ期) 研修		
4) 公共の福祉と私権の制限			2006.06.21	国土交通省国土交通大学校平成 18 年度専門課程用地 (Ⅰ期) 研修		
5) 公共の福祉と私権の制限			2006.10.18	国土交通省国土交通大学校平成 18 年度専門課程用地 (Ⅱ期) 研修		
6) 特別講義 (憲法)			2007.06.15	国土交通省国土交通大学校平成 19 年度専門課程用地 (Ⅰ期) 研修		
7) 特別講義 (憲法)			2007.10.26	国土交通省国土交通大学校平成 19 年度専門課程用地 (Ⅱ期) 研修		
8) 特別講義 (憲法)			2008.06.13	国土交通省国土交通大学校平成 20 年度専門課程用地 (Ⅰ期) 研修		
9) 特別講義 (憲法)			2008.10.17	国土交通省国土交通大学校平成 20 年度専門課程用地 (Ⅱ期) 研修		
10) 特別講義 (憲法)			2008.12.05	国土交通省国土交通大学校平成 20 年度専門課程用地指導研修		
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						

1	第2章「地方税立法権」(29～56頁)を担当。	共著	2005.05.10	日本財政法学会編『財政法講座3 地方財政の変貌と法』(勁草書房)所収	日本財政法学会創立20周年記念の論文集という性格を有する同書の第2章は、地方分権の理念とその実現という観点から、日本国憲法に照らし、地方自治体の課税権、とくに地方税立法権の根拠と構造を分析するものである。地方税立法権は抽象的的地方税立法権と具体的地方税立法権からなり、いずれも日本国憲法第92条および第94条に根拠を求めるべきものである。このことを、従来の憲法学、租税法および財政法学において議論された地方税法律主義と地方税条例主義との対立に照らし、財政調整という概念を参考にして新たに議論を組み立てたものである。また、第一次地方分権改革の結果として法定外普通税・目的税に関する地方税立法権の拡充が実現したが、現実には総務大臣の同意を要する事前協議の制度が一定の制約をかけている。第2章では、この点について地方自治法および地方税法に規定される総務大臣の同意の法的性質および問題点を検討する。共著者名：第1章福家俊朗、第2章森 稔樹、第3章西野徹雄、第4章青山浩之、第5章斎藤忠雄、第6章三輪定宣、第7章碓井光明、第8章金子昇平、第9章廣田達人、第10章碓井光明、第11章碓井光明
2	31 利子所得(62～63頁)、32 配当所得(64～65頁)、33 不動産所得(66～67頁)、85 質問検査の方法(170～171頁)、86 違法な調査(172～173頁)	共著	2007.04.15	中村芳昭＝三木義一編『演習ノート租税法』(法学書院)所収	同書は法学部の学生向けの演習用教材であり、新司法試験の出題範囲を中心に100項目から構成されるものである。執筆者(五十音順)：伊川正樹、伊藤悟、井上康一、内田久美子、大淵博義、大森健、小川正雄、奥谷健、川村栄一、小池幸造、佐々木潤子、末崎衛、首藤重幸、高野幸大、中村芳昭、浪花健三、三木義一、望月爾、森稔樹、森山文昭、安井栄二
3	30 利子所得(60～61頁)、31 配当所得(62～63頁)、32 不動産所得(64～65頁)、85 質問検査の方法(170～171頁)、86 違法な調査(172～173頁)	共著	2008.10.10	中村芳昭＝三木義一編『演習ノート租税法』(法学書院)所収	同書は法学部の学生向けの演習用教材であり、新司法試験の出題範囲を中心に100項目から構成されるものである。執筆者(五十音順)：伊川正樹、伊藤悟、井上康一、内田久美子、大淵博義、大森健、小川正雄、奥谷健、川村栄一、小池幸造、佐々木潤子、末崎衛、首藤重幸、高野幸大、中村芳昭、浪花健三、三木義一、望月爾、森稔樹、森山文昭、安井栄二
論文					
1	筑豊じん肺訴訟最高裁判所判決(149～151頁)	単著	2004.09.27	法令解説資料総覧第272号	最高裁判所第三小法廷平成16年4月27日判決の評釈を中心的内容とするものである。同判決が裁量権消極的濫用論を援用する点については疑問も残るが、結論を支持する旨を述べる。
2	大分県職員野球観戦等旅費返還請求事件最高裁判所判決(111～113頁)	単著	2005.08.25	法令解説資料総覧第283号	最高裁判所第一小法廷平成17年3月10日判決の評釈を中心的内容とするものである。全国各地で同種の事件が争われたが、同判決は最高裁判所第二小法廷平成15年1月17日判決に続くものであり、損害賠償責任、不当利得返還義務のいずれも認められなかったものの、職務命令を違法と判断している。後者については妥当であるが、前者については他の同種または類似の事案に関する判決などを参照し、疑問を述べる。
3	下関市日韓高速船補助金支出住民訴訟最高裁判決(97～99頁)	単著	2006.03.25	法令解説資料総覧第290号	最高裁判所第一小法廷平成17年11月10日判決の評釈を中心的内容とするものである。同判決は、地方公共団体が第三セクターに補助金を支出することの是非に関する基準を示したとも言えるのであるが、裁量権の逸脱・濫用という側面における判断について疑問が残るものである、本論文でもその点を指摘し、分析している。
4	〔行政行為(4)行政行為における裁量〕78 公務員懲戒処分と裁量審査(158～159頁)	単著	2006.05.20	小早川光郎・宇賀克也・交告尚史編「行政判例百選I」〔第5版〕(有斐閣)	最高裁判所第三小法廷昭和52年12月20日判決の解説を中心的内容とするものである。ここでは、裁量統制の方法のうち、実体法的審査について述べる。学説において踰越濫用型審査と判断代替型審査との区別が論じられており、判例も基本的には踰越濫用型審査の採用を明言するのであるが、この審査方法には裁量への許容を極大化し、司法審査の範囲を極小化しやすいという難点があることに注意を促す。また、上記判決においては、踰越濫用型審査と判断代替型審査とが併用されていると考えることも指摘している。

5	地方公共団体の名誉権享有主体性についての試論 (305～333頁)	単著	2006.06.01	早稲田法学第 81 巻 3 号	本論文は、大分大学大学院福祉社会科学研究紀要 1 号 (2004 年 3 月発行) に掲載された「地方公共団体の名誉権と市報掲載記事」の続編的なものである。地方公共団体に名誉権があるのか、名誉毀損などが成立しうるのかという問題は、これまでほとんど論じられたことがなく、判決も少ない。本論文では、論者がかつてサテライト日田問題に取り組んでいたことを踏まえ、事例を地方公共団体対私人、地方公共団体対地方公共団体とに分け、数少ない判決を検討する。その結果、地方公共団体についても名誉権享有主体性が認められるが、私人と異なり、認められる範囲は限定されるべきであること、などを述べる。
6	租税法律主義・地方税条例主義の射程距離 (上) -旭川市国民健康保険条例訴訟最高裁大法廷判決の検討を中心に- (129～138頁)	単著	2006.10.01	税務弘報第 54 巻第 12 号 (2006 年 10 月号)	概要については、次の項目を参照。
7	租税法律主義・地方税条例主義の射程距離 (下) -旭川市国民健康保険条例訴訟最高裁大法廷判決の検討を中心に- (135～144頁)	単著	2006.11.01	税務弘報第 54 巻第 14 号 (2006 年 11 月号)	(上) とともに最高裁判所大法廷平成 18 年 3 月 1 日判決の検討を中心として、憲法第 84 条にいう「租税」の意義、国民健康保険料と国民健康保険税との異同、地方税条例主義の意義、そして課税要件明確主義の意義と国民健康保険料への適用の有無について検討をなす。上記判決については、国民健康保険料についても租税法律主義・地方税条例主義の趣旨が妥当するという趣旨が述べられていることもあり、評価する見解もある。しかし、租税法においては批判的な見解も少なくない。本論文は、国民健康保険料と国民健康保険税との異同を検討した上で、保険料であっても実質的には租税そのもの、あるいはそれに近いものであり、租税法律主義・地方税条例主義が直接的に適用されるべきであることを主旨とするものである。そして、租税法律主義の内容である課税要件明確主義の趣旨が国民健康保険料の賦課要件についても妥当すべきであり、条例の規定には課税要件明確主義の観点から問題があると考え。そして、上記判決は、一応は国民健康保険料についても租税法律主義・地方税条例主義の趣旨が妥当するという趣旨を述べるものの、実質的にはこれを否定するものであって妥当性を欠くと評価する。
8	旭川市介護保険条例 (第二次) 訴訟最高裁判決 (30～37頁)	単著	2008.02.15	会計と監査第 59 巻第 2 号 (2008 年 2 月号)	最高裁判所第三小法廷平成 18 年 3 月 28 日判決の評釈を中心的な内容とするものであり、同判決の判旨は勿論、同判決および最高裁判所大法廷平成 18 年 3 月 1 日判決を支持する見解を分析し、憲法第 25 条および第 14 条の解釈、および立法裁量の統制の観点から大きな問題を残すことなどを指摘し、批判する。また、介護保険条例についても賦課要件法定主義 (課税要件法定主義の趣旨) が妥当すべきであり、検証を経てその点を看過した判決を批判する。旭川市介護保険条例 (第二次) 訴訟最高裁判決に関する評釈は他にもいくつか存在するが、憲法第 84 条との関連を詳細に検討し、論ずるものは、(管見の限りではあるが) 本論文以外には存在しない。
9	個人住民税の寄附金控除制度 - 「ふるさと寄附金控除」制度および「ふるさと納税」制度についての若干の検討 - (105～111頁)	単著	2008.03.01	税務弘報第 56 巻第 3 号 (2008 年 3 月号)	2007 年 5 月より検討がなされ、同年末には自由民主党の税制改正大綱において導入が提唱された「ふるさと納税」制度は、その名称にもかかわらず、単なる寄附金控除制度の拡充であるが、それで片付けられない側面を有する。地方税法第 34 条第 1 項第 5 の 4 号イおよび第 314 条の 2 第 1 項第 5 の 4 号イに規定される個人住民税の寄附金控除制度を検討するのが本論文の目的である。「ふるさと寄附金控除」制度は所得控除としての寄附金控除制度であるが、地方税において主張される応益原則からの逸脱であり、適用下限額に関しても応益負担原則に照らして疑問が残る。「ふるさと納税」制度は、地方公共団体への寄付金について税額控除制度とするものであるが、応益原則や負担分任原則から逸脱するのみならず、憲法第 92 条にいう「地方自治の本旨」の一つである住民自治の原則に反する。以上の問題点を中心に検討を試みたものである。

10	憲法と地方自治—地方税立法権を中心に— (8~12頁)	単著	2008.05.01	住民と自治第 541 号 (2008 年 5 月号)	本論文は、日本財政法学会編『財政法講座 3 地方財政の変貌と法』(2005 年、勁草書房) の第 2 章「地方税立法権」の趣旨を受けて、抽象的の地方税立法権および具体的の地方税立法権の構造を述べる。但し、これらから具体的な地方税財政制度が一義的に導かれる訳ではなく、地方公共団体の役割の明確化、配分されるべき事務の明確化が先決であることを述べている。
11	租税特別措置法附則 27 条による同法 31 条の遡及適用が違憲無効と判断された事例	単著	2008.10.25	法学セミナー増刊・速報判例解説 Vo.1. 3 (速報判例解説編集委員会編、日本評論社) 287~290 頁	租税特別措置法平成 16 年附則第 27 条は平成 16 年 4 月 1 日に施行されたが、損益通算に関する原則を規定する所得税法第 69 条に対する特例を定める租税特別措置法第 31 条を平成 16 年 1 月 1 日に遡及して適用する旨を定めるため、資産の譲渡に関して損益通算ができなくなったとして何件かの訴訟が争われた事例が存在する。本論文は、上記の遡及適用が違憲であると判示した福岡地方裁判所平成 20 年 1 月 29 日判決を中心とし、東京地方裁判所平成 20 年 2 月 14 日判決と比較をしたうえで、租税法規不遡及の原則について解説ないし検討を行ったものである。
12	租税特別措置法 66 条の 6 の適用の有無等が争われた事例 (グラクソ事件控訴審判決)	単著	2008.10.25	法学セミナー増刊・速報判例解説 Vo.1. 3 (速報判例解説編集委員会編、日本評論社) 303~306 頁	タックス・ヘイブン税制の一部をなす租税特別措置法第 66 条の 6 については、その適用要件などをめぐって少なからぬ訴訟が提起されている。本論文は、東京高等裁判所平成 19 年 11 月 1 日判決の評釈を中心とするが、同判決における複数の争点のうち、租税特別措置法第 66 条の 6 第 1 項の解釈を中心に検討するものである (入手した判決に伏字が多かったためでもある)。同項については実質的帰属説と犠牲所得加算説との対立があるが、実質的帰属説を採用することの困難性を示し、犠牲所得加算説が妥当であることを述べる。
13	地方消費税再考—地方税財政権の観点から—	単著	2009.02.18	税制研究 55 号(再刊 15 号。消費税 20 年特集号) 91~97 頁	地方税法第 72 条の 78 以下に定められ、1997 年 4 月 1 日より施行されている地方消費税は都道府県税であるが、譲渡割の納税申告・確定・徴収に関する事務については、附則第 9 条の 4 によって「当分の間」は国に委託する形がとられており、貨物割に至っては本則によって国が賦課徴収の事務を行うこととなっている。この点については施行以来批判があるが、論文はそれほど多くない。本論文は、地方税財政権の観点から地方消費税を検討し、地方消費税が地方税収入権、都道府県間の税収偏在性の是正に貢献してはいるものの、それに留まることを明らかにする。また、1990 年代以来、地方消費税を含めて日本の税制論議における主流として「応益原則」の強調があげられているが、この原則の意味するところは不明確であり、本来は区別すべき課税の根拠論と負担の根拠論を混同しているところに問題がある。本論文は、この点を批判した上で、応能負担原則と応益負担原則の両者について、課税の根拠論との結びつきを改めて検討し、安易な「応益原則」の強調による地方消費税の税率引き上げ論が税の逆進的構造を強めるのみならず、民主主義の原則にも抵触することを論証する。
その他					
1	租税法学会 (第 34 回総会)	単著	2005.12.01	税務弘報第 53 巻第 14 号 (2005 年 12 月号) 146~147 頁	
2	租税法学会 (第 35 回総会)	単著	2006.12.01	税務弘報第 54 巻第 15 号 (2005 年 12 月号) 146~147 頁	
3	技術的困難性が露呈した「ふるさと納税」	単著	2007.10.22	納税通信 2995 号 (2007 年 10 月 22 日号) 4 頁	
4	Is the principle of taxation applicable to the National Health Insurance in accordance with statutes (Der Grundsatz der Gesetzmaessigkeit der Besteuerung)? (pp.1-15)	単著	2008.03.00	Daito Bunka Comparative Law and Political Science Review, Vol. 7, March 2008, Graduate School of Law, Daito Bunka University	本稿は、税務弘報第 54 巻第 12 号に掲載された「租税法律主義・地方税条例主義の射程距離 (上) —旭川市国民健康保険条例訴訟最高裁大法廷判決の検討を中心に—」および同第 14 号に掲載された「租税法律主義・地方税条例主義の射程距離 (下) —旭川市国民健康保険条例訴訟最高裁大法廷判決の検討を中心に—」の趣旨を英文にしたものである。

5	行政裁量論再考、および行政手続法の一部改正に関する考察	単著	2008.10.04	第311回日本税法学会九州地区研究会、2008年10月4日、九州北部税理士会館2階会議室	平成20年、行政不服審査法改正法案および行政手続法一部改正法案が提出された。行政手続法には第36条の3が追加されることとなっているが、この規定が租税の更正・決定手続に適用されるか、これまで実務で行われてきた減額更正の嘆願に及ぼす影響を与えるかが、税理士業界における重大な関心事である。本報告は、日本税法学会九州地区研究会の依頼により、以上の点を検討し、行政手続法第36条の3が更正・決定手続に適用されても、減額更正の嘆願に大きな影響を与えることはない旨を述べたものである。
6	日本における環境紛争処理法制度（中国語の題名は「日本処理環境紛争的法律制度」）	単著	2008.12.13	中国社会科学研究院法学研究所・大東文化大学『『アジアにおける法律変革及び国際協力』シンポジウム論文集（亜州法律変革及其国際合作国際検討会会議論文集）』（2008年12月13日、中国社会科学研究院法学研究所、大東文化大学）79～86頁（中国語）、87～94頁（日本語）	本論文は、2008年12月13日に中国社会科学研究院法学研究所において行われたシンポジウム「アジアにおける法律変革及び国際協力」の第2分科会「環境紛争解決法制」における報告のために作成したものであり、膨大な環境法体系のうち、環境争訟法の分野を取り上げ、日本における制度の概要と問題点を述べ、検討を行うものである。具体的には、民法・民事訴訟法、国家賠償法第1条、国家賠償法第2条、行政事件訴訟法を取り上げ、これまで日本において蓄積されている判例や学説の状況を概観し、私法上の差止訴訟の可能性、裁量権消極的濫用論および反射的利益論の問題点（国家賠償法第1条）などを検討する。また、行政事件訴訟法については、平成16年改正を考慮し、環境事件についても用いられる抗告訴訟を中心とし、対象、原告適格、本案審理における裁量権の審査に関する問題点を概説する。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1995.10.08	～	現在	租税法学会会員
2	1995.12.14	～	現在	日本公法学会会員
3	2000.11.11	～	現在	日本自治学会会員
4	2001.03.17	～	現在	日本財政法学会会員（2006年9月より、事務局員会計担当、2007年度および2008年度、企画委員会委員）
5	2001.04.01	～	2007.03.31	財団法人ハイパーネットワーク社会研究所共同研究員
6	2001.06.10	～	現在	日本税法学会会員
7	2002.11.16	～	現在	日本租税理論学会会員
8	2004.10.12	～	2004.10.12	国土交通省国土交通大学校平成16年度専門課程用地(Ⅱ期)研修「公共の福祉と私権の制限」担当。
9	2005.06.21	～	2005.06.21	国土交通省国土交通大学校平成17年度専門課程用地(Ⅰ期)研修「公共の福祉と私権の制限」担当。
10	2005.10.18	～	2005.10.18	国土交通省国土交通大学校平成17年度専門課程用地(Ⅱ期)研修「公共の福祉と私権の制限」担当。
11	2006.06.07	～	2006.06.07	東松山市きらめき市民大学講義「地方分権・自治」を担当。
12	2006.06.21	～	2006.06.21	国土交通省国土交通大学校平成18年度専門課程用地(Ⅰ期)研修「公共の福祉と私権の制限」担当。
13	2006.10.18	～	2006.10.18	国土交通省国土交通大学校平成18年度専門課程用地(Ⅱ期)研修「公共の福祉と私権の制限」担当。
14	2007.06.07	～	2007.06.07	東松山市きらめき市民大学講義「地方分権・自治」を担当。
15	2007.06.15	～	2007.06.15	国土交通省国土交通大学校平成19年度専門課程用地(Ⅰ期)研修「特別講義（憲法）」を担当。
16	2007.10.26	～	2007.10.26	国土交通省国土交通大学校平成19年度専門課程用地(Ⅱ期)研修「特別講義（憲法）」を担当。
17	2008.06.11	～	2008.06.11	東松山市きらめき市民大学講義「地方分権・自治」を担当。
18	2008.06.13	～	2008.06.13	国土交通省国土交通大学校平成20年度専門課程用地(Ⅰ期)研修「特別講義（憲法）」を担当。

19	2008.10.17	～	2008.10.17	国土交通省国土交通大学校平成 20 年度専門課程用地（Ⅱ期）研修「特別講義（憲法）」を担当。
20	2008.12.05	～	2008.12.05	国土交通省国土交通大学校平成 20 年度専門課程用地指導研修「特別講義（憲法）」を担当。

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	山口 志保	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 教育内容・方法の工夫		2008.04.01	(2008年4月～現在) 基本法学概論の講義では、毎回、教材と小テストを作成し、1年生で習得した勉学の意欲をさらに向上させるべく、法律学科生としての知識と学力の向上に努めている。法律を単なる暗記科目ではなく、知識の立体化を目的とした教材作成に腐心している。また、法律の勉学意欲が他の分野にも関心を抱き、社会全体に対しての考え方を習得させるべく、この教材には法律系の問題だけでなく、その基礎知識・前提知識に関する教材としての意義ももたせるようにしている。毎回の小テスト反復により、自らの理解度を認識させ、知識の定着を図り、自主的な学習姿勢を固定させることに有用と考えている。				
2) 基本法学概論における少人数教育への取り組み		2008.04.01	(2008年4月～現在)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「消費者法 これだけは」 法律文化社 杉浦一郎 編		2007.04.01	法律文化社 第2章 消費者契約法、第4章第4節 貸金業に対する規制法、第5節 みなし弁済、第6節 多重債務の解決方法、第8章第4節 製造物責任法。多発している消費者トラブルに鑑て、賢い消費者になるために最低限身につけておきたい基本事項を、事例から学ぶことを目的としたのが本著です。中でも、民法と密接な関連箇所についてが、執筆部分となります。				
2) 作成した教科書・教材・参考書		2008.04.01	(2008年4月～現在) 毎回の教材と小テストは、すべてオリジナル教材であり、作成に際しては、数冊の教科書を参照し、3、4時間がかかるのが常である。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 教育方法・教育実践に関する発表・講演など		2008.12.00	2008年12月には法学研究所の研究会にて、2008年度の授業進捗と教育効果について、小テスト・期末試験の結果と、各授業での印象を含めて、詳細な報告をした。これは小クラス授業を担当している全教員だけでなく、教育方法を常に更新したいと考えている教員にとって、刺激を与えられたものと考えられる。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							

1	フランチャイズ契約の一考察(1)－契約告知とフランチャイザーの情報提供義務－	共	2007.03.30	成蹊法学 65 号 75 頁～108 頁	フランチャイズ契約訴訟でもっとも問題となるのは、解約せざるを得なくなったフランチャイジー側の事情、その事情を招いたフランチャイザー側の契約前の説明義務、及び解約金の額の総合関係といえる。両者ともに事業を目的として契約を締結することから、両者を事業者と措定すると、両当事者には等しく契約内容に熟知する必要がある。しかし、実際にはフランチャイジーとなろうとしている者の事業経験は圧倒的に乏しく、むしろ事業者の説明を一方向的に信用している状況の方が通常といえよう。このような状況で契約を途中で解約するに際し、多額の解約金を請求されるフランチャイジーが、契約内容の不当性を訴えている事例の集積に着目し、契約締結前の説明義務あるいは情報提供義務のありかたを考察するのが本稿である。本稿は二部完結の予定で、第1部では不当性全般を扱う事例の分析をしている。(第2部では情報提供義務違反を明示している事例を扱う予定である)。 共著者：飯島紀昭
2	「アメリカ契約法における約束的禁反言の位置づけ－最近 10 年間の論争について－」	単著	2008.10.00	大東法学 52 号 (2008 年 10 月号)	契約交渉破棄事例で、破棄した側に損害賠償責任を課す根拠として適用されてきた約束的禁反言に関する、近年までの諸学説を整理したものが、本著となる。これまで契約上の債務を認められないため、例外的に正義の観点から約束的禁反言は適用されるべきであり、それが契約社会に資するものとされてきた。従来の学説では、「信頼」と「約束的禁反言」との捉え方を、同一次元とするか異次元とするかとの点で議論が分かれていた。前者は主として法と経済学派により、後者は新古典主義学派や批判法学派によってとられていた。しかしいずれも、契約交渉の進展の仕方への着目はされていなかった。2003 年以降、ようやく契約交渉の進展度合いに着目されるようになり、学派の対立を超えて、保護されるべき信頼が築かれた当事者間だからこそ、損害賠償が認められるのであり、このような信頼なくして約束的禁反言適用が適用されるのは例外的だとの認識が得られるようになった。
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1990.00.00	～	現在	日本法社会学会会員	
2	1992.00.00	～	現在	日本私法学会会員	
3	2008.10.00	～	現在	日本消費者法学会会員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	教授	氏名	山本 裕子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 現代社会と法の講義		2002.04.00	(2002 年 4 月～現在) 現代社会と法の講義では、毎回、法学を学ぶ上で前提となる知識および法学の基礎知識に関する小テスト(40 問程度)を実施している。小テストは、採点后学生に返却し、誤答の箇所が正確に達するまで、答案が教員と学生間と往復し、基礎知識が確実に身に付くようにしている。これは、昨今の大学生の学力低下に対応したものである。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 現代社会と法の小テスト問題および解説プリント		2002.04.00	(2002 年 4 月～現在) 毎回の授業で使用する小テスト問題および解説プリントは、すべて担当教員が共同で開発したオリジナルの教材である。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「事業者団体への加入要件たる推薦制が独禁法違反とされた事例」	単著	2004.08.00	『ジュリスト』1273 号 190～193 頁			
2 「性能・効果に関する不当表示－空気清浄機事件」	単著	2004.12.00	『ジュリスト』1281 号 156～159 頁			
3 「保険販売における公正な取引ルール－保障性商品に対する広告規制を中心に」	単著	2005.03.00	厚谷先生古稀記念論集『競争法の現代的諸相(下)』信山社所収 765～784 頁			
4 「相手方による差別対価－LPG 販売差別対価差止請求訴訟」	単著	2005.06.00	『ジュリスト』1291 号(平成 16 年度重要判例解説) 256・257 頁			

5	販売業務委託契約の解除が不当な取引拒絶にあたるかーノーエビア化粧品事件	単著	2005.10.00	ジュリスト 1298 号 173-176 頁	
6	「犯則調査制度の独占禁止法への導入にあたっての課題等」	共著	2006.04.00	『法と実務』Vol.5 (日弁連法務研究財団編) 3-51 頁 (執筆担当部分:14-38 頁)	共著者:御器谷修、鈴木恭蔵、梅津有紀
7	「独禁法 24 条に基づく出荷停止の差止請求ー三光丸事件」	単著	2006.09.00	『ジュリスト』1319 号 167-170 頁	
8	「アンブル生地管の輸入妨害が私的独占にあたりとされた事例ーニプロ事件」	単著	2006.12.00	『ジュリスト』1325 号 231-234 頁	
9	「モニター商法の被害者による信販会社への抗弁の主張」	単著	2008.07.00	『ジュリスト』1359 号 168-171 頁	
10	「複数の発注者による石油備蓄基地施設の保全等工事に係る談合事例」	単著	2008.08.00	『公正取引』694 号 58-62 頁	
11	「原産国表示の主体が問題となった事例 (ビームス事件)」	単著	2008.10.00	『速報判例解説 (法学セミナー増刊)』vol.3 261-264 頁 LEXIDB 文献番号 28140014 (オンラインでも提供)	
その他					
1	「郵便保険会社の経営危機対応制度について」	単著	2007.02.00	『簡易保険文化財団年報資料編』No.17 9-14 頁 (要旨のみ)	要旨のみ
2	『アメリカ国際商取引法・金融取引法』	共訳	2007.06.00	レクシスネクシス・ジャパン	担当部分 § 5.04 国際的な競争法制度 (371-402 頁)
3	「EU 保険事業者再建清算指令について」	単著	2007.10.00	大東法学 17 巻 1 号 309-329 頁	
III 学会等および社会における主な活動					
1	1995.07.00	～	現在	経済法学会 (平成 8 年 11 月 日本経済法学会と名称を変更) 会員	
2	1997.09.00	～	現在	日本保険学会会員	
3	2002.04.00	～	現在	日本私法学会会員	
4	2008.11.00	～	現在	財団法人日本鯨類研究所評議員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	准教授	氏名	葛西 まゆこ	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「現代社会と法」の授業における、毎回の小テストの実施・添削・返却		2008.04.00	(2008年4月～2009年1月) 08年度の担当科目「現代社会と法」において、例年通り、毎回、教材と小テストを作成し、それによって授業を行った。小テストは、実施の翌週には返却し、さらに間違ったところは各自で直させて再提出、再添削をおこない、基礎知識の定着を図った。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「生存権の性格－朝日訴訟」		2007.03.23	憲法判例百選Ⅱ (第5版) 有斐閣 最大判昭和 42.5.24 民集 21 卷 5 号 1043 頁を解説したもの。298-299 頁。				
2) 『判例ライン憲法』		2007.10.01	成文堂 社会権の部分の判例を解説したもの。57-60 頁。				
3) 『確認憲法用語 300』		2008.01.25	成文堂 社会権の部分の用語を解説したもの。148-167 頁。				
4) 「現代社会と法」の授業における教材 (解説プリントと小テスト)		2008.04.00	(2008年4月～2009年1月) 毎回の授業で使用する教材は、担当教員が共同で開発したオリジナルの教材であり、定期的に会議を開いて、改良に改良を重ねている。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『現代法学の課題』に所収されている「『日本型福祉社会』と個人の自律」		2006.03.00	成文堂 119～133 頁。	市民社会への過度の期待をよせているようにも思われる現状に対し、あえて「日本型福祉社会」という時代錯誤的なキーワードを用いて生存権の基礎づけを統治分野から検討したもの。			
2 『東アジアにおけるアメリカ憲法』に所収されている「生存権の財産権的アプローチ」		2006.07.00	慶應義塾大学出版会 335～374 頁。	生存権の財産権的アプローチを判例・学説を通じて検討したもの			
3 「アメリカ憲法学における第二の権利章典 (The Second Bill of Rights) の位置づけ－憲法上の権利としての生存権の意義についての予備的考察－」		2008.12.27	『慶應の法律学 公法 I』 233-258 頁に所収。	ルーズベルト大統領によって提示されていた「第二の権利章典」をめぐるアメリカ憲法学の議論を参考にすることによって、日本国憲法 25 条の主観的権利としての意義について検討したもの。			
論文							

1 「エンタイトルメントとしての福祉—アメリカ連邦最高裁判所における社会福祉を受ける地位—」	単著	2004.00.00	法学政治学論究第六一号 (二〇〇四年夏季号) 363 ～392頁。	本稿は、アメリカの福祉改革について述べた後に、社会福祉（特に公的扶助）を受ける地位は、アメリカの連邦最高裁判所によってどのように憲法上位置づけられてきたのかということを、判例をなるべく時系列に沿いながら、かつ、特権論、手続的保護、基本的権利との関係、九六年法以後の判例状況といった視点から考察することにより明らかにしたものである。アメリカにおいて、判例は立法裁量を大幅に認める立場から、特権論を否定する立場に転じた後、社会福祉を受ける地位の手続的側面に対してはデュー・プロセス条項による手続的保護を行ってきた。その手続的保護は、裁判所が社会福祉を受ける地位を、Goldberg 判決以来、「制定法上の資格」として、「財産に類似したもの」として捉えていることによるものであった。また居住要件の問題については、平等保護又は特権・免除条項や市民権条項の問題として保護されてきた。九六年法によれば「エンタイトルメントとしての福祉」は終焉したとされるが、そのことによる直接的な影響は判例の流れからは見て取れず、裁判所は、社会福祉を受ける地位を「エンタイトルメント」として保護する姿勢を崩していない。しかし、社会福祉を受ける地位の具体的内容については、その保護は十分には図られてこなかった。財産権的な「エンタイトルメントとしての福祉」として社会福祉を受ける地位を保護することは、福祉の具体的な内容に対する消極的な審査を導くことにもなる。以上の考察を踏まえれば、アメリカの裁判所によって、財産権的な「エンタイトルメントとしての福祉」として捉えられてきた社会福祉を受ける地位というものは、日本における 25 条の生存権の抽象的権利説にも似た捉えられ方をしてきたと考えられる。
2 「年金改革関連法と憲法」	共著	2004.10.00	法学セミナー第五九八号 (二〇〇四年十月号) 68 ～71頁。	慶應義塾大学小山剛教授との共著。本稿は、2004年6月5日に成立した、保険料増・給付減を内容とするいわゆる年金改革関連法（以下、《改正法》とする）について、憲法の生存権規定、財産権規定、信頼保護原則に即して検討し考察したものである。《改正法》は、生存権規定に関しては、25条1項との関連では年金制度だけで最低生活が保障されなくても生活保護がそれを保障していれば 25条1項に基づく国の責任は果たされていることになるため違憲とは断定できない。また、25条2項との関連でも《改正法》が目的において著しく不合理とは言えず、国庫負担の引き上げによる国の責務の履行も予定されていることから、本法律を違憲とまでは断定できない。財産権規定については、ドイツ連邦憲法裁判所の判例によれば、年金請求権は、請求権に対応する保険料とその支払期間が足りている場合には特に、基本法14条1項によって私有財産と同様に保護される。しかし、年金請求権が財産権として保護されるとしても、引き下げによる財産権の制約が直ちに憲法違反になるわけではなく、年金請求権は立法者の社会政策的裁量に服する。したがって、《改正法》は財産権規定に照らしても、立法裁量の範囲内であり違憲とはいえない。また、信頼保護原則についても、絶対的な保護を与えるものではなく、憲法判断をする際には個人が信頼を損なう程度と公共の福祉のために法律が有する利益の重要性との衡量が必要である。《改正法》について衡量した場合、信頼保護原則の面からしても本法律を違憲とまでは断定できない。しかし、内容面において違憲と断定できないということが、《改正法》がよく出来た法律であるということの意味するわけではない。《改正法》の制定過程は、出生率の取り扱いなどにおいて杜撰な立法過程を経ており、ドイツにおける「立法者の改善義務」という法理に照らせば、立法府は《改正法》の是正義務を現時点で既に有していると考えられる。
3 「アメリカにおける福祉改革—日本における生存権保障への示唆—」	単著	2004.11.00	法政論叢 第四一卷第一号 (二〇〇四年十一月) 255 ～269頁。	

4 「生存権の規範的意義－憲法二五条の裁判規範性をめぐる予備的考察－」	単著	2005.00.00	法学政治学論究第六四号（二〇〇五年夏季号） 241～269 頁。	本稿は、その弱い裁判規範性を踏まえたとき「憲法 25 条に書かれている生存権は、どのような規範的意義を有するのか」という疑問から、生存権の基礎付けについての再考察をもとに、可能な限りにおいて生存権の裁判規範性の問題への示唆を導き出そうとしたものである。本稿は、生存権の基礎付けを考えるにあたって、憲法上いわゆる生存権規定が存在しないアメリカにおける諸学説を参照している。その主たる理由は、リベラリズムを思想的基盤とし個人に着目するアメリカにおける議論は、人権論の立場から日本における生存権論を考察するに当たって、参照に値すると思われるためである。本稿では、アメリカ連邦最高裁における社会福祉を受ける地位に対する財産権的アプローチとその限界を述べた後、生存権において「財産」のみならず「ニーズ」や「社会的シティズンシップ」といった視点を付与することの重要性を指摘する。財産権的アプローチは、弱い裁判規範性のもととなるだけではなく、福祉問題を単なる事後的な物質的利益の再配分の問題にしてしまうという点で限界がある。「ニーズ」や「社会的シティズンシップ」という視点を付与することは、いわゆる貧困者が社会に主体的にかかわる前提としての権利として、生存権をより人権論の立場から基礎付けることができる。このように憲法学が生存権の内容を規範的に具体化していくことは、立法府に対する「立法ないし政策策定指針」として意味をもつ。裁判規範性の問題については、「ニーズ」や「社会的シティズンシップ」といった視点を生存権に盛り込んだからといって、生存権の裁判規範性が、その権利内容の充実化と比例して直接高まるわけではない。しかし、少なくとも制度後退時においては「ニーズ」や「社会的シティズンシップ」を不当に侵害するような制度改革は違憲の疑いが強まることとなり、その限りでは裁判規範性を強化しようと考えられる。
5 「生存権と立法裁量－アメリカ州憲法における判例展開を手がかりに－」	単著	2005.12.15	慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会編『法学政治学論究』第六十七号（二〇〇五年冬季号） 199～229 頁。	立法府の福祉義務規定を有するアメリカの州憲法とその判例を手がかりに生存権に関する立法裁量を検討し、日本においても可能な限り裁判所において精緻に審査されることが求められることを述べた論考である。
6 「社会保障・社会福祉判例研究 介護保険料賦課処分と憲法 14 条・25 条」		2006.11.00	賃金と社会保障 1430 号 58～66 頁	最判平成 18・3・28 判時 1930 号 80 頁を検討した判例評釈
7 「社会保障判例－国民年金法が学生を強制適用の対象から除外したこと及び若年障害者規定（無拋出制）の対象者を 20 歳前の傷病による障害者に限定したことが立法裁量の範囲内であるとされた事例－」		2007.03.00	季刊社会保障研究 42 巻 4 号 420～429 頁	広島高判平成 18・2・22 判タ 1208 号 104 頁を検討した判例評釈
8 「福祉に関するエンタイトルメント概念の一考察」	単著	2007.10.30	大東法学 17 巻 1 号（通巻 50 号） 79～122 頁。	アメリカにおける福祉に関するエンタイトルメント概念を考察することによって、法律による具体化が必要な憲法上の生存権の「権利」性を考察したもの。

9	「福祉給付を受ける地位と平等－Family Cap, Child Exclusion をめぐる判例法理を手がかりに－」	単著	2008.03.30	大東法学 51 号 (2008 年) 37-67 頁。	本稿は、アメリカにおける Family Cap, Child Exclusion をめぐる判例法理を考察することにより、福祉給付を受ける地位と平等の問題を考察したものである。アメリカにおいては、Family Cap が課されている場合には家族の人数に関係なく福祉受給額に上限が設けられ、Child Exclusion が課されている場合には、その受給後に新たな子どもを出産してもその分の福祉給付が増えないことにより、合衆国憲法第一四修正の平等保護違反ではないか、子どもを産む権利を不当に侵害しないか、という点が、判例上も、学説上も争われてきた。本稿は、福祉給付を受ける地位に関連する諸条件は平等保護との関係でどのように捉えられるべきかという点に焦点をあて、Family Cap, Child Exclusion をめぐる諸判決を検討・考察したものである。本稿は、アメリカにおける福祉給付を受ける地位に関連する諸条件は、原則として Dandridge 判決 (Dandridge v. Williams, 397 U.S. 471 (1970)) が示した合理性の基準によって審査されるのみで平等保護についての緻密な検討が加えられることはなく、この点、わが国が堀木訴訟判決 (最大判昭和五七・七・七民集三六卷七号一二三五頁) 以来、近年のいわゆる学生無年金障害者に関する最高裁判決 (最二小判平成一九・九・二八民集六一卷六号二三四五頁、最三小判平成一九・一〇・九裁時一四四五号四頁) でも示されたように、25 条に付随する広範な立法裁量に平等違反の議論が吸引される状況にあることとアメリカも同じであると指摘している。
10	『判例回顧と展望 2007』	分担執筆	2008.06.10		3-21 頁 (憲法部分)。〔小山剛、小谷順子、新井誠、山本龍彦、葛西まゆこの共著〕本稿は、原則として 2007 年 2 月から 2008 年 1 月までに公刊された、最高裁判所判例集 (民集・刑集)、判例時報、判例タイムズ、賃金と社会保障、最高裁判所 HP 等に掲載された裁判例について、紹介・解説したものである。共著であるが、主として、環境権、学問の自由、教育の自由、教育を受ける権利、社会権、C 型肝炎訴訟を執筆した。
11	「判例研究 国民年金法 (平成元年改正前) が、所定の学生等につき国民年金に強制加入させなかった措置等、及び、初診日に所定の学生等であり国民年金に任意加入していなかった障害者に対し無拠出制の年金を支給する旨の規定を設けるなどの立法措置を講じなかったことは、憲法二五条、一四条一項に違反しないとされた事案」	単著	2008.10.30	大東法学 52 号 213-233 頁。	最三小判平成 19 年 10 月 9 日裁時 1445 号 4 頁を検討した判例評釈
12	「労働者保護と憲法二七条」	単著	2008.11.01	法律時報 80 卷 12 号 23-28 頁。	現代的な諸問題に対応する新たな労働者保護のかたちを考える際の憲法的な視点からの手がかりを得ることを目的とし、近年検討されてこなかった憲法二七条の規範構造を検討し、具体的な指針を示しえずとも憲法二七条は労働者保護に資する理念的基礎になりうると結論付けたもの。
13	「高齢加算の廃止を内容とする保護変更決定処分は、憲法 25 条、生活保護法 56 条、3 条等に反しないとされた事案－東京地裁平成 20 年 6 月 26 日判決の検討」	単著	2008.12.10	賃金と社会保障 1479 号 40-53 頁	東京地判平成 20 年 6 月 26 日判時 2014 号 48 頁を検討した判例評釈
14	「高齢加算の廃止と憲法 25 条」	分担執筆	2009.03.01	判例セレクト 2008 (法学教室 342 号) 9 頁	東京地判平成 20 年 6 月 26 日判時 2014 号 48 頁について、解説したものを。
その他					

1	「アメリカにおける福祉改革－日本における生存権保障への示唆－」	単	2004.06.20	日本法政学会第一〇〇回大会研究会報告（於：関西外国語大学。二〇〇四年六月二〇日）	
2	「州憲法の解釈」	分担執筆	2007.12.31	アメリカ法 2007-1 110～115 頁	James,A.Gardner, Interpreting State Constitutions を翻訳・紹介したもの。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	2007.00.00	～	現在	戸田市個人情報保護運営審議会委員	
2	2007.00.00	～	現在	戸田市情報公開運営審議会委員	
3			現在	憲法理論研究会会員	
4			現在	全国憲法研究会会員	
5			現在	日米法学会会員	
6			現在	日本公法学会会員	
7			現在	日本社会保障法学会会員	
8			現在	日本法政学会会員	
9			現在	比較憲法学会会員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	准教授	氏名	河野 良継	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 総合教育科目「現代社会と法」		2005.04.01		<p>法律学科の1年生対象の必修科目である「現代社会と法」のクラス担当として、2005年より参加している。本科目では、毎授業時ごとに教員が工夫を凝らした教材と小テストを作成して、法律学科生として必要な知識を習得するための補助となしている。これらは、従来の法律学学習では疎かにされていた基礎知識や前提知識に関するものであると同時に、近年問題となっている大学生の学力低下に対応した、非常にわかりやすく丁寧な教材となっている。また、本科目では、テストの反復練習とテスト結果に対する復習を義務づけることで、学生自身が法律学に対する理解度を認識するとともに、自主的に学習する姿勢を身につけることにもつながっている。 (2005年4月1日～現在)</p>		
2) 学生による授業評価アンケート		2006.12.00				
3) 学生による授業評価アンケート		2007.12.00				
4) 学生による授業評価アンケート		2008.12.00				
5) 税務大学校関東信越研修所「法学入門」講義		2009.04.00				
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) ベーシックテキスト憲法		2007.03.00		<p>法律文化社 共著者 君塚正臣 横浜国立大学国際社会科学部教授 他。筆者は第1部第2章(17-22頁)担当。B5版、総頁328頁。</p>		
2) 第3版 入門法学 ―現代社会に生きる法・活かす人権―		2009.04.00		<p>晃洋書房 共著者 竹下 賢 関西大学法科大学院教授、沼口 智則 同志社大学法学部嘱託講師、竹村 和也 同志社大学法学部嘱託講師、角田 猛之 関西大学法学部教授、他。筆者は第6章3「裁判における新たな動向」(169-179頁)と第8章1「犯罪被害者と法」(198-207頁)を担当。B5版、総頁259頁。</p>		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						

論文				
1 「コンシューマリズムの倫理と消費社会の精神？」	単著	2004.05.00	『阪大法学』第五四巻第一号 119～163 頁	本論文は、消費する個人の主体性が困難であると法的議論において認識されているにもかかわらず、何故前提とされ続けているのかという問題を、消費社会論の文脈で再定位することによって、解明することを目的としている。まず、消費者法学や消費者政策は、市民間に「本来は」格差がない状態というものを議論の出発点とする市民法／市民社会論を前提としている。そして、本来は格差はないのだが、現実には格差が生じているので法的に介入する、という基本構造がある。この議論の前提となっている市民社会は、個人主義を倫理的基盤としている。一方で、今日の消費社会は、消費者を眩惑することで欲望を喚起していると考えられている。そして、消費は、人間個人の唯一性を追求するために記号の差異を欲求し続けなければならないという「呪われた」自由の行使となってしまっている。したがって、法的には自由な自己決定の主体であるが、社会的には、個人の自由意思を行使しなければならないことが前提とされていることになる。よって、自由意思の主体という表徴の下に、全く懸け離れている二つのイメージが潜在しており、法的議論はこの二重性に暗黙のうちに依拠しているのである、ということ进行らかにしました。
2 「平均的消費者とは何者か (average consumer) ? — 英国における EU 不正取引手段指令国内法化をめぐる議論を参考に —」	単著	2007.03.00	『大東法学』第一六巻第二号 33～67 頁	本論文は、平均的な消費者の観点から市場における不公正さを排除することを目的とした EU 不正取引手段指令の「平均的消費者」概念を、欧州司法裁判所の判例と英国判例法・消費者制定法の分析に基づいて検討するものである。加えて、当概念の法社会学的な含意も併せて考察した。論文では、当概念が、特に英国では合理的な消費者の予測可能な水準として解釈される可能性があることを明らかにするとともに、当概念自体は解釈に開かれている以上、現実の消費者を考慮した上で解釈される必要があることを指摘している。
3 「消費者法制度の行方 — 英国における消費者法制度改革を参考に —」	単著	2007.03.00	『大東文化大学法学研究所報』第二七号 1～8 頁	本論文は、EU の二一世紀型消費者法政策の下に消費者法制度改革を進めている英国の議論状況を考察したものである。論文では、自立した消費者が市場取引の公正性強化という観点から整備された消費者法制度の下で消費活動を行うという EU の消費者法政策モデルと、このモデルの要として制定された EU 不正取引手段指令を、英国がどのように受容しようとしているのかを検討している。
その他				
1 「自由の制御／自由の不平等／自由の強制」	単	2005.05.14	日本法社会学会二〇〇五年度学術大会個別報告 於専修大学	
2 「現代消費社会における自由の意味」	単	2005.11.05	日本法社会学会関東研究支部第二八回 於東京大学	
3 「図書あれこれ (法社会学者による私法の図書紹介)」	単著	2008.03.31	『大東 BOOKS』第四号	大東文化大学図書館に所蔵されている私法の専門図書を中心に、私法について学ぶ上で有益であると思われる図書について 10 冊程度紹介したもの。
4 「英国私法における reasonableness の思考 — 英国・『合理人』 (the reasonable person) の法文化・試論」	単	2008.05.10	日本法社会学会二〇〇八年度学術大会個別報告 於神戸大学 ミニシンポジウム「法文化への学際的アプローチ — 比較法文化の構築に向けて」	
III 学会等および社会における主な活動				
1	1993.05.00	～	現在	日本法社会学会会員
2	2002.10.00	～	現在	日本法哲学会会員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	准教授	氏名	松原 孝明	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 大東文化大学法学研究所 e ラーニング研究班「講義における携帯電話利用の可能性」		2007.03.00		大東文化大学法学研究所 e ラーニング研究班研究員として、携帯電話を講義において活用する方法を検討し、大東文化大学法学研究所報 27 号に内容を発表した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「共同不法行為における関連共同性要件の再検討―日独における通説の形成過程から得られた現在の解釈論に対する示唆 (一)～(二・完)」	単著	2004.08.00	上智法学論集第 48 巻 1 号 57～100 頁・2 号 43～90 頁 平成 16 年 8 月・10 月	民法 719 条 1 項前段の成立要件たる関連共同性の意味・機能を探るために日本とドイツにおける通説の形成過程を歴史的に概観し、現在のわが国における客観的共同説と主観的共同説の二者択一的な対立状況に批判を加えるとともに、新たな枠組みを創出することを提唱した。		
2 複数加害者関与事例における過失相殺の方法についての一考察	単著	2004.12.00	尚美学園大学総合政策論集創刊号 173～185 頁			
3 「開業医に患者を高度な医療を施すことができる適切な医療機関に転送すべき義務があるとされた事例」	単著	2005.10.00	大東法学 15 巻 1 号 189～213 頁			
4 「競合不法行為および共同不法行為と過失相殺の方法について」	単著	2006.10.00	大東法学 16 巻 1 号 61～97 頁			

5	「複数加害者関与事例における過失相殺の方法について」	単著	2006.12.00	賠償科学 34 号 79～89 頁
6	「財産的利益に関する自己決定侵害と慰謝料請求の可否について」	単著	2007.03.00	大東法学 16 卷 2 号 121～157 頁
7	「医師の説明義務違反事例における因果関係と賠償範囲」	単著	2007.10.00	大東法学（大東文化大学法政学会）243～281 頁
その他				

III 学会等および社会における主な活動

1	2004.10.00	～	現在	環境法政策学会会員
2	2005.04.00	～	現在	埼玉大学経済学部講師
3	2005.04.00	～	現在	日本医事法学会会員
4	2005.04.00	～	現在	日本交通法学会会員
5	2005.10.00	～	現在	東京都行政書士会講師
6	2006.04.00	～	現在	日本私法学会会員
7	2007.04.00	～	現在	新潟大学法学部講師
8	2007.04.00	～	現在	日本賠償科学学会会員
9	2007.10.01	～	現在	上智大学経済学部講師

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	准教授	氏名	山口 みどり	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 「キール大学英語研修を引率して」		2007.03.31		『語学研修報告書 2006』 学生 16 名を引率しての 23 日間にわたるキール大学英語研修の報告記 (117～120 頁)		
2) 「ある学生の『卒業』」		2008.09.30		『学生相談室報告書 2007 年度』第 11 号 学生相談室兼担相談員としての報告		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『イギリス近現代女性史研究入門』	共著	2006.05.10	青木書店	京都府立大学河村貞枝教授、大東文化大学今井けい名誉教授編。筆者は第 2 章「家族と教育」序文担当。ヴィクトリア期の「家族像」と女性の位置づけについて。(34-35 頁)担当。B 5 判、総頁 362 頁。		
2 『イギリス近現代女性史研究入門』	共著	2006.05.10	青木書店	京都府立大学河村貞枝教授、大東文化大学今井けい名誉教授編。筆者は第 2 章 第 1 節「ヴィクトリア期の家族観と女性――男女の領域分離論 (セパレート・スフィアズ) をめぐって」担当。ヴィクトリア期の、男女の領域分理論、とくに当時優勢であった、差異を強調することによる女性の領域拡張の可能性と限界について論じた。(36-50 頁)担当。B 5 判、総頁 362 頁。		
3 『女性と高等教育――機会拡張と社会的相克』	共著	2008.07.10	昭和堂	香川せつ子、河村貞枝編。筆者は第 8 章「英国国教会とその娘たちのために――レディ・マーガレット・ホールという試み」担当。B 5 判、総頁 339 頁。ISBN978-4-8122-0835-9		
論文						
1 「牧師館の変容――九世紀英国国教会の改革・建物・「家族企業」――」	単著	2006.09.30	『史観』第 155 冊	本稿は、19 世紀の牧師館をめぐる改革、特に 1830 年代の兼領禁止をはさんでの牧師館の変化に焦点をあて、支配的な価値観の媒介としての牧師館の役割やその影響を論じた。76-91 頁。(無査読)		
2 'The Religious Rebellion of a Clergyman's Daughter', 641-660.	単著	2007.11.30	Women's History Review, 15.5	(有査読)		

3	「ヴィクトリア朝の リテラシー—国教 会と女性」	単著	2008.04.01	歴史評論 696	41-49 頁。有査読。
その他					
1	‘Gender and Personal Narrative’	単著	2004.05.22	GENDER HISTORY, WOMEN'S HISTORY AND FAMILY HISTORY, Symposium Sponsored by the Journal, Gender and History (London)	口頭発表
2	『一牧師の娘、記す』 —パーソナル・ナラ ティヴに見られるヴ ィクトリア女性のアイ デンティティと『父 親の職』	単著	2004.11.20	日本ヴィクトリア朝文化研 究学会 第4回全国大会 (於 甲南大学)	口頭発表
3	「コメント—19世紀 後半イギリスにおけ る思春期女性の身体 教育—学校・家庭での 取り組み—」	単著	2005.05.14	第6回イギリス女性史研究 会 (於甲南大学)	コメンテーター
4	「レオノア・ダヴィド フ教授引退記念国際 シンポジウム『ジェン ダー史、女性史および 家族史シンポジウム』 に参加して」	単著	2005.07.16	『女性史学』第15号	79-86 頁。(有査読)
5	‘Father's Teaching, God's Calling: A Conflict in a Victorian Parsonage’	単著	2006.09.08	British Association for Victorian Studies, Annual Conference 2006, 'Victorian Cultures in Conflict' (The University of Liverpool)	口頭発表
6	「By a Clergyman's Daughter」 — パー ソナル・ナラティヴに みられるヴィクトリ ア女性のアイデンテ ィティと「父親の職」	単著	2007.06.09	イギリス史研究会 (於 明 治大学)	口頭発表
7	書評 川本静子・松村 昌家編『ヴィクトリア 女王 ジェンダー・王 権・表象』(京都:ミ ネルヴァ書房, 2006)	単著	2007.10.20	『ジェンダー史学』第3号	99-102 頁。
8	「Women's History Review への投稿を終 えて」	単著	2008.05.10	イギリス女性史研究会 Newsletter 『女性・ジェ ンダー・歴史』第一号	13 頁。
9	シンポジウム「転換期 を生きた女性たち— 公共圏の内と外— 牧師館の女性たち」	単著	2009.01.10	日本英文学会関東支部 平 成21年1月例会 シンポ ジウム (於 青山学院大学)	シンポジウム (発表)

III 学会等および社会における主な活動

1	1993.00.00 ~ 現在	早稲田大学西洋史研究会会員
2	1994.00.00 ~ 現在	日本西洋史学会会員
3	1996.00.00 ~ 2007.03.31	イギリス都市・生活史研究会
4	1997.00.00 ~ 現在	日本歴史学協会会員

5	2000.00.00	～	現在	The British Association for Victorian Studies 会員
6	2002.00.00	～	現在	イギリス女性史研究会会員 (2007 年度～現在 事務局員)

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	講師	氏名	穴沢 大輔	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 いわゆる「誤振込・誤記帳」事案における財産犯の成否 (1)	単著	2005.01.31	上智法学論集第 48 巻 2 号 上智大学法学会			
2 いわゆる「誤振込・誤記帳」事案における財産犯の正否 (2・完)	単著	2005.03.31	上智法学論集第 48 巻 3・4 号合併号 上智大学法学会			
3 いわゆる第三者領得について ～ドイツにおける刑法改正を手がかりとして～	単著	2006.11.30	上智法学論集第 50 巻 2 号 上智大学法学会			
4 刑事判例研究「旧児童ポルノ等処罰法 7 条 2 項の児童ポルノを販売する目的及び刑法 175 条後段の販売目的が肯定された事例	単著	2008.10.15	Jurist No.1365 有斐閣			

5	判例研究「ガソリンを 詐取した後、その代金 の支払を免れるため、 店員に暴行を加えて 傷害を負わせた場合 について、詐欺罪と強 盗致傷罪が成立し、包 括一罪になるとされ た事例」	単著	2008.10.30	大東法学第 18 卷 1 号 大 東文化大学法政学会	
その他					
1	町野朔編『環境刑法の 総合的研究』	単著	2005.03.01	産業と環境 2005 年 3 月号 388 号 株式会社リック	書評
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	2003.05.25	～	現在	日本刑法学会会員	
2	2007.04.01	～	2010.03.31	日本学術振興会児童虐待の予防と対応（代表者・町野朔）研究協力者	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	講師	氏名	金 春	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 2007年4月1日～2008.3.31 奈良産業大学法学部 非常勤講師 (民事訴訟法)			2007.04.01				
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『中国の倒産制度における労働者の地位・処遇』		2007.12.00	商事法務 2007年12月号出版				
論文							
1 中国 2006年新企業倒産法立法について—主な内容の紹介と条文の解釈	単	2007.01.00	民商法雑誌 135巻4号・5号 227頁				
2 「中国重整型企業破産制度的研究—《企業破産法》(2006) 中の重整程度与和解程度的功能及構造之考察」	単	2008.01.00	政法論壇				
3 「重要判例に学ぶ中国ビジネス最前線—倒産をめぐる裁判例」	単	2008.05.00	N B L 880				
その他							
1 韓国の消費者倒産について		2006.09.00	ジュリスト 1319号 131頁 (2006年9月) 有斐閣				
2 韓国における民事訴訟法の継受と発展		2007.00.00	信山社				
3 中国における新企業倒産制度の考察	単	2007.08.00	メルボルン大学ロースクール・アジアローセンタ (オーストラリア)				

4	「管財人制度に関する日、才、中倒産制度の考察」	単	2008.03.00		
III 学会等および社会における主な活動					
1	2004.04.01	～	現在	現代中国法研究会会員	
2	2004.04.01	～	現在	日本民事訴訟法学会会員	
3	2008.05.00	～	2008.09.00	経済産業省中小企業倒産防止共済法改正プロジェクト委員	
4	2008.11.00	～	現在	JICA国際協力機構国際民事商事法センター中国民事訴訟法改善プロジェクト委員	

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	講師	氏名	堀川 信一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 講義の双方向性の確保		2007.04.01		大講義では、教育の一方向的な情報伝達が主となるが、自発的に挙手をした者に平常点を加算し、また特定の者だけが挙手し続けることを回避する等の努力により、一方向的な情報伝達と、双方向的なやりとりを実現した。授業評価アンケートでも、自由記述式欄に、「学生参加型の講義で理解が深まる」との評価を得た。 (2007年4月1日～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 法学特殊講義 1A.1B		2007.04.00		各種資格対策 (公務員試験、行政書士試験、法学検定等) を意識し、教材を作成した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 携帯電話を活用した講義支援システムとweb上での学習記録の管理		2008.03.00		出席管理や小テストの管理に有用である可能性があるが、不正を防止するための、さまざまな技術上の工夫が必要であることを検討した。大東文化大学法学研究所報 28号 31～34頁			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 大東文化大学法政学会懸賞論文		2008.03.30 2009.03.30		ゼミ指導の一環として、学生に本学法政学会の主催する懸賞論文への応募を呼びかけ、2007年度、2008年度共に、優秀賞受賞者を出した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 近世・近代ヨーロッパの法学者たち	共著	2008.02.00	ミネルヴァ書房	勝田有恒・小山進編著 近世から近代にかけてのヨーロッパの法学者たちについて、その生涯・業種、思想等を紹介した評伝集。A5判、総434頁(268～281頁)			
論文							
1 莫大損害 (laesio enormis) の史的展開 (1)		2004.06.00	『一橋法学』第3巻2号、一橋大学大学院法学研究科	査読つき 「莫大損害」という法理に関して、①この法理が錯誤の推定、弱者保護、等価性原理の三要素から成り立つこと、②従来、等価性原理の現れという側面のみが強調されてきたが、ドイツ圏の実際の立法例においては前二者の性格が強いことを確認した。 387頁～422頁			
2 莫大損害 (laesio enormis) の史的展開 (2)		2004.09.00	『一橋法学』第3巻3、一橋大学大学院法学研究科	査読つき 「莫大損害」という法理に関して、①この法理が錯誤の推定、弱者保護、等価性原理の三要素から成り立つこと、②従来、等価性原理の現れという側面のみが強調されてきたが、ドイツ圏の実際の立法例においては前二者の性格が強いことを確認した。 349頁～379頁			
3 莫大損害 (laesio enormis) の史的展開 (3完)		2005.03.00	『一橋法学』第4巻1号、一橋大学大学院法学研究科	査読つき 「莫大損害」という法理に関して、①この法理が錯誤の推定、弱者保護、等価性原理の三要素から成り立つこと、②従来、等価性原理の現れという側面のみが強調されてきたが、ドイツ圏の実際の立法例においては前二者の性格が強いことを確認した。 189頁～229頁			

4	フランツ・フォン・ツァイラーの「自然私法」論	単著	2005.10.00	一橋大学 21 世紀 COE プログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」公式ホームページ (http://cner.law.hit-u.ac.jp/) 内に掲載	COE ディスカッションペーパー ツァイラーの著書『自然私法』の骨格部分とカント哲学の対応関係を明らかにしたうえで、ツァイラーの私法理論とそれに基づく ABGB が大きく修正された提要体系であることを示した。
5	契約類型と動機錯誤—オーストリア一般民法典九〇一条を参考に—	単著	2006.01.00	『一橋論叢』第 135 巻第 1 号、一橋大学	査読つき 動機錯誤が無顧慮とされる根拠を契約の有償性と無償性の観点から説明したツァイラーの見解を紹介したもの。77～96 頁
6	契約の拘束力と給付の等価性—有償契約における動機錯誤と「価値は性質にあらず」テーゼの再検討—	単著	2006.03.00	未刊行	学位(博士)論文 錯誤対象確定と要素性の判断基準を有償契約と無償契約(及び単独行為)の性質の違いに着目しつつ検討するもの。その際問題となる給付の等価性の理解について、主観的理由の錯誤と性質錯誤等を含む拡大された内容錯誤との限界事例である価値錯誤とその顧慮を否定する「価値は性質にあらず」テーゼを素材とした。
7	19 世紀ハンガリー私法における固有法・普通法・自然法	単著	2006.05.00	一橋大学 21 世紀 COE プログラム「ヨーロッパの革新的研究拠点」公式ホームページ (http://cner.law.hit-u.ac.jp/) 内に掲載	COE ディスカッションペーパー 19 世紀初頭のハンガリー私法の状況といくつかの制度を概観し、当時のオーストリアやドイツ私法学の影響の有無を確認した。
8	判例評釈 フランチャイズ契約における対価の算定方法に関する各項について原判決の解釈が違法であるとされた事例	単著	2008.03.00	大東法学第 17 巻第 2 号 117～132 頁	最高裁平成 19 年 6 月 11 日判決の評釈。
9	契約解釈と対価関係—オーストリア一般民法典第 915 条の成立過程の検討を通じて—	単著	2008.03.00	大東文化大学法学研究所報第 28 号	いわゆる「不明確条項解釈準則」について、有償契約と無償契約では、その適用に差が生じることを論じた。1～11 頁
10	遺言の解明的解釈の方法と限界について—ドイツ法における示唆理論を参考に—	単著	2009.03.30	大東法学第 18 巻第 2 号 81～140 頁	遺言の解釈の限界につき、ドイツの理論を参考としながら、解釈結果と遺言の文言との内容的関連性を重視すべきと主張した。
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	2005.10.00	～	現在	ボワソナード研究会 (於: 一橋大学) 会員
2	2006.04.00	～	現在	法文化学会会員
3	2006.05.00	～	現在	日本私法学会会員
4	2006.06.00	～	現在	国際取引法研究会 (於: 早稲田大学) 会員

(表 24)

所属	法学部法律学科	職名	講師	氏名	山本 紘之	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 法律学における文章表現		2007.04.00		2007年4月～2008年3月「演習ノート 刑法総論」を用い、「刑法総論」の内容のアウトプット方法を実践的に教授した。			
2) 少人数初年度教育の実施		2008.04.01		少人数クラスで、高校の授業と類似の形で導入教育を行った。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 Rechtsangleichung: Grundlagen, Methoden und Inhalte	共著	2006.12.00	De Gruyter Recht	法の共通化についての論稿を収めた論文集。刑法分野からの提言をまとめた論説を寄稿した。			
論文							
1 振替用紙の提出による詐欺	単著	2004.12.30	比較法雑誌 38 巻 3 号 日本比較法研究所	275～287 頁 外国判例研究			
2 過失犯における主観的正当化要素—特に防衛の意思について—	単著	2005.02.20	大学院研究年報 (中央大学) 法学研究科篇 34 号 中央大学大学院	211～228 頁			
3 正当防衛と過剰防衛の限界	単著	2005.03.30	比較法雑誌 38 巻 4 号 日本比較法研究所	333～346 頁 外国判例研究			
4 過失犯における結果の捉え方—不法要素か処罰条件か—	単著	2005.07.30	法学新報 112 巻 3 = 4 号 中央大学法学会	199～233 頁			
5 予見可能性の「契機」について	単著	2005.10.30	法学新報 112 巻 5 = 6 号 中央大学法学会	221～246 頁			
6 過失犯における情報収集義務について—危惧感説との関連を中心に—	単著	2006.03.30	法学新報 112 巻 9 = 10 号 中央大学法学会	397～421 頁			
7 過失犯における予見可能性の意義	単著	2007.10.00	大東法学 17 巻 1 号	予見可能性という要件が、過失犯体系において果たすべき役割についての検討。			

8	意図・目的概念についての一考察 —ジェノサイドにおける解釈を契機として—	単著	2008.10.30	大東法学 18 卷 1 号	ジェノサイド罪の「意図」の解釈について検討した上で、わが国への応用可能性を探った。
その他					
1	刑法における法の同化の必要性と限界	単著	2005.10.01	「日本におけるドイツ年」法律シンポジウム若手研究者フォーラム	研究報告
2	行会い船を認めて針路を右に転じたが、その後、上記行会い船の動向を確認しなかったことにつき過失が認められた事例	単著	2006.10.21	中央大学刑事判例研究会	研究報告
III 学会等および社会における主な活動					
1	2003.05.00	～	現在	日本刑法学会会員	

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	穴見 明	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『ヨーロッパ分権改革の新潮流』	共著	2008.07.25	中央大学出版部	若松隆・山田徹編。グローバリゼーションに伴う国民国家の枠組みの揺らぎ、ポスト福祉国家時代の先進諸国における新たな政策パラダイムの模索などを背景として進行している、現代のヨーロッパにおけるサブナショナル・レベルの「地域」を中心とした分権改革の現状の解明に取り組んだ。担当：「第6章 スウェーデンにおける地域レベルの統治組織の改革」141～166頁 (25頁)。若松隆、山田徹、高橋利安、津田由美子、田口晃、穴見明、山崎幹根、西村茂 共著。211頁			
論文							
1 スウェーデンにおけるリージョナリズムの展開	単著	2005.03.25	季刊行政管理研究 109号	スウェーデンのリージョン・レベルの統治組織に関して1990年代に開始された実験事業を中心として、スウェーデンにおけるリージョンの統治組織の改革の歴史的展開をあとづけた。4～16頁 (13頁)			
2 「スウェーデンの基礎的自治体におけるNPMの導入」	単著	2005.08.05	『地域と自治体・第30集・NPMの検証—日本とヨーロッパ』(自治体問題研究社刊)	スウェーデンの基礎的自治体であるコミューンの行政において、おおよそ1980年代の半ば以降に進んできた、ニュー・パブリック・マネージメント (NPM) の導入について検討を行った。その検討にあたっては、NPMの導入をめぐる、どのような立場の人々からどのような懸念が表明されてきたか、そして、それらの懸念に対してどのような対応がなされてきたかを明らかにすることを中心においた。(165-196頁) 32頁。			

3	「スウェーデンにおける地域政策の変容(1)」	単著	2005.10.30	大東法学・第15巻第1号	スウェーデンでは1998年に「地域成長契約」と呼ばれる地域政策スキームが導入された。これは、国と基礎的自治体との中間に位置する地域レベルにおいて、国の行政機関、地方自治体の機関、企業、経営者団体、労働組合、その他の諸団体などのあいだで作成される協定で、それらのアクター間のパートナーシップを通じて、地域の諸資源をその地域の経済成長と雇用の確保に向けて効果的に動員することをめざすものである。この論文では、この地域成長契約の導入に至る、スウェーデンにおける地域政策の変化を歴史的に跡づけることによって、どのような意味でそれが地域政策における新たな質をもつと言えるのかを明らかにしようとした。(1-35頁) 35頁。
4	「スウェーデンにおける地域政策の変容(2・完)」	単著	2006.03.30	大東法学・第15巻第2号	前期論文の後半部分。(1-40頁) 40頁。
5	「一九九八年のスウェーデンにおける地域政策をめぐる政治論議」	単著	2006.10.30	大東法学・第16巻第1号	「地域成長契約」制度の導入をめぐる、スウェーデンの主要政党間でどのような論争が展開されたかを、主として国会の審議資料と議事録を資料として検討した。(99-148頁) 50頁。
6	「「地域政策」から「地域発展政策」へ—スウェーデンにおける地域政策と産業政策の変容の一局面—(1)」	単著	2007.03.30	大東法学・第16巻第2号	2001年12月にスウェーデンの国会は「全国における成長と活力のための政策」と題する内閣の提案を承認した。この提案は、それまでの「地域政策」と「産業政策」分野の一部として位置づけられてきた「地域産業政策」とを、新たな「地域発展政策」に統合することを軸とするものであった。この論文では、この内閣の政策提案とその国会による承認のもつ意味を、1980年代以降のスウェーデンにおける地域政策の変化との関連において探ることを課題とし、そのために、審議会答申、提案書、委員会報告、国会本会議議事録などを利用して、審議会への諮問から内閣の提案を経て国会の本会議に至る、各段階における政策論議の内容の検討を行った。(1-32頁) 32頁。
7	「スウェーデンの“準自治体”」	単著	2007.08.05	『月刊自治研』Vol.49 no.575 (2007年8月号)	スウェーデンの基礎的自治体であるコミューン内における分権を意味する、「区域委員会」制度の概要について解説し、そのうえで、区域委員会が制度導入のさいに掲げられた目的に照らしてどのように評価されているかを整理した。(59-67頁) 9頁。
8	「「地域政策」から「地域発展政策」へ—スウェーデンにおける地域政策と産業政策の変容の一局面—(2)」	単著	2007.10.30	大東法学・第17巻第1号	前期論文の続き。(1-41頁) 41頁。
9	「「地域政策」から「地域発展政策」へ—スウェーデンにおける地域政策と産業政策の変容の一局面—(3・完)」	単著	2008.03.30	大東法学・第17巻第2号	前期論文の続き(完結)。(1-36頁) 36頁。
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	1981.05.00	～	現在	日本行政学会会員(平成8年度～11年度、企画委員会委員)(2006年5月～2008年5月、理事、組織財政委員長)
2	1983.10.00	～	現在	日本政治学会会員
3	2002.11.00	～	現在	北ヨーロッパ学会会員(2002.11～現在、理事)(2007年度、企画委員長)

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	岩橋 俊哉	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 「情報化社会」			2006.02.00	2006年2月～2008年2月東松山市きらめき市民大学講師 (2006年2月、2007年2月、2008年2月 3回実施 各1回90分)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 心理学関係資料のデジタル化の方法について -学会の発表予稿集のデジタル化を例とした一考察-	単	2004.12.00	心理学史・心理学論 vol.6	日本心理学会大会の学会発表の抄録集をデジタル化することによってその全文がコンピュータで検索可能になる。しかし全文のデジタル化は著作権を侵害する可能性がある。そこで抄録集の本文についてデジタル化した索引を作成することによって資料の検索性を高めることができると考えた。			
2 心理学の文献を Web サイトで公開するための方法について -日本心理学会大会の抄録集のデジタル化索引を例とした一考察-	単	2005.03.00	大東文化大学紀要 (人文科学) 第 43 号	日本心理学会大会の学会発表の抄録集をデジタル化するための具体的な方法論を考察した。人名や固有名詞のみのデジタル化した索引を作成し、これを検索すると抄録集の中でそのキーワードが含まれるのは何年の発表の何ページかということがわかるというようにする。この索引は本文の複製ではないので、この索引を Web サイトで公開することが可能である。			
3 統計言語 R の心理統計での利用について	単	2007.03.00	大東文化大学紀要 <社会科学> 第 45 号	統計言語 R は近年多くの分野で利用されるようになってきたオープンソースの言語である。この R を心理学研究において、どのように使うことができるかを考察した。			
4 R のプログラミング言語としての側面について	単	2008.03.00	大東文化大学紀要 (社会科学) 第 46 号	統計用言語のひとつである R のプログラミング言語としての側面に焦点をあて、記述の際の注意事項と書式の特徴を整理し、使用方法やその有用性を示すと共に、その内容が R のリファレンスとなるよう記述した。			
その他							

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1984.04.00	～	現在	日本心理学会会員
2	1986.04.00	～	現在	日本生理心理学会会員
3	1987.04.00	～	現在	日本基礎心理学会会員
4	1989.04.00	～	現在	日本発達心理学会会員
5	1997.04.00	～	2006.03.31	日本健康心理学会会員
6	1997.04.00	～	現在	情報文化学会会員
7	1998.04.00	～	現在	日本教育工学会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	内田 健二	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 ロシアがわかる 12 章 [改訂版]	共著	2005.09.20	東洋書店	前掲書『ロシアがわかる 12 章』の全面的な改訂版。構成は前掲書と同じだが、内容は最新の情報を取り入れて一新。◎内田健二、井桁貞義、小森田秋男、阿曾正浩。			
論文							
1 スターリン時代のナショナリズム	単著	2004.05.25	『ロシア史研究』(ロシア史研究会) 74 号, (41 頁～49 頁)	ロシア史研究会 2003 年度大会における報告 (後掲) を要約した論文。1930 年代後半に提起された「ソヴィエト愛国主義」シンボルの意味とそれが抱えたディレンマの検討を通じて、多民族国家ソ連における諸民族統合の論理を考察した。			
2 スターリン批判の予行演習	単著	2006.11.25	『ユーラシア研究』(東洋書店) 35 号 (37～41 頁)	スターリン死後最初の共産党中央委員会総会 (1953 年 7 月) で試みられたスターリン批判の論点および論理を検討し、そこでの批判が、後のフルシチョフ秘密報告 (1956 年) の原型となったことを明らかにした。			
3 ロシア新政権の国家像	単著	2008.05.25	『ユーラシア研究』(東洋書店) 38 号 (74～76 頁)	2008 年ロシア大統領選挙を経て成立したメドヴェージェフ・プーチンのタンデム政権が、いかなるロシア国家像を国民に提示しているかについて、「主権民主主義論」を手がかりに考察した。			
その他							
1 翻訳 G・ギル著『スターリニズム』	単著	2004.11.19	岩波書店	G.Gill, Stalinism (Macmillan, 1998) の翻訳。			
2 書評 浜内謙『上からの革命—スターリン主義の源流—』(岩波書店、2004 年)	単著	2005.05.25	『ユーラシア研究』(東洋書店) 第 32 号	浜内謙著『上からの革命—スターリン主義の源流—』(岩波書店、2004 年) の書評。			
III 学会等および社会における主な活動							

1	1978.12.00	～	現在	ソビエト史研究会会員
2	1983.04.00	～	現在	日本政治学会会員
3	1994.10.00	～	現在	ロシア史研究会会員（平成 19 年 10 月～現在運営委員）
4	1998.06.00	～	現在	比較政治学会会員
5	1999.10.00	～	現在	ユーラシア研究所ユーラシア研究所『ユーラシア研究』編集委員（平成 11 年 10 月～現在）
6	2005.01.00	～	現在	ロシア・東欧学会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	瓜生 洋一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2009.04.01		(2009年4月～) 「基礎演習」において、グループ各員に共通で読む本の要約、論点を準備させ、各グループ毎に論点を討論させ、最終的に全体検討をおこなう。論点の抽出と討論能力を伸ばすことを目標としている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 国民国家と帝国：ヨーロッパ諸国民の創造(松本彰、立石博高編)	共	2005.05.00	山川出版社	松本彰、立石博高(編)本書は、国民国家と帝国との関係をヨーロッパ諸国の近代史に則して解明したものである。「フランス革命と戦争」の部分を担当した。			
論文							
その他							
1 フランス革命期における民事立法(23)	共	2004.10.30	「大東法学」第14巻1号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 208 頁中 10 頁。「所有(4)」			
2 フランス革命期における民事立法(24)	共	2005.03.30	「大東法学」第14巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 149 頁中 11 頁。「所有(5)」			
3 フランス革命期における民事立法(25)	共	2005.10.30	「大東法学」第15巻1号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 246 頁中 9 頁。「所有(6)」			
4 フランス革命期における民事立法(26)	共	2006.03.30	「大東法学」第15巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 199 頁中 9 頁。「所有(7)」			
5 フランス革命期における民事立法(27)	共	2006.10.30	「大東法学」第16巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 426 頁中 12 頁。「所有(8)」			
6 フランス革命期における民事立法(28)	共	2007.03.30	「大東法学」第16巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 245 頁中 8 頁。「所有(9)」			
7 フランス革命期における民事立法(29)	共	2007.10.30	「大東法学」第17巻1号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 391 頁中 10 頁。「所有(10)」			

8	フランス革命期における民事立法(30)	共	2008.03.30	「大東法学」第17巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 177 頁中 10 頁。「所有(11)」
9	フランス革命期における民事立法(31)	共	2008.10.30	「大東法学」第18巻1号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 285 頁中 9 頁。「所有(12)」
10	パリ第1大学、政治学研究所共催の国際学会における報告 “Appropriation Révolutionnaire de la t é l é graphie a é rienne en 1795”	単	2009.03.12	Colloque: Usages militants de la technique	本学会は、技術、特にコミュニケーション技術がいかにかに政治との関り合いで使用されたか、というテーマで開かれ、本報告は、1795年における一事件を手がかりにパリールール間で利用された腕木信号機の交信記録を分析したものである。2009年度中に報告集が出版される予定である。
11	フランス革命期における民事立法(32)	共	2009.03.30	「大東法学」第18巻2号	共訳者：江藤价泰、荻原貞正、白石裕子、貴田 晃 総ページ数 215 頁中 9 頁。「所有(13)」

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.01	～	現在	日本西洋史学会会員
2	1990.04.01	～	現在	フランス革命史研究会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	小倉 いずみ	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) イーラーニングの実践		2007.04.01	CALL 教室を使用して、従来の LL 演習にかえてインターネット上の学習を導入した。学生の自習状況をインターネット上でチェックしている。				
2) 大東文化大学事業評価		2008.12.10	大東文化大学授業評価で平均値 4.0(5 段階評価)を得た。過去の授業評価も 4.0 以上である。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『歴史のなかの政教分離ー英米におけるその起源と展開』	共著	2006.03.31	彩流社	「オランダのトマス・フッカーと政教分離の生成過程」を執筆。会衆主義の起源をオランダに亡命したフッカーの思想に探る。アムステルダム英国改革教会においてジョン・ペイジエットとの論争を詳細に解説した。本論文は平成 17 年度科学研究費基盤研究(B)(1)(研究課題:ピューリタニズムの生成と継承に関する研究)(課題番号 15320039)の研究成果の一部である。総頁数 326 頁中、73-101 頁。共著者名:◎大西直樹・国際基督教大学教養学部教授、千葉眞・国際基督教大学教授、ほか 8 名。			
論文							
1 『ジョン・コットンとピューリタニズム』(彩流社)	単著	2004.05.15	『初期アメリカ学会ニューズレター』第 42 号	新著の内容を検討した。特に先住民とのピーコット戦争に関する文献や、クロムウェルとコットンが交わした書簡の原本、英文原文の著書における扱いなどの問題点を指摘し、これに続く研究の方向を探った。本論文は平成 16 年度科学研究費基盤研究(B)(1)の研究成果の一部である。総頁数 4 頁中、1-3 頁。			
2 「英国領北アメリカ植民地の創設と勅許状」	単著	2007.03.31	『大東文化大学紀要』第 45 号	マサチューセッツ湾植民地が創設された時に英国にあった法人所在地をいかに新大陸に移動したかを当時の文献を使用して例証する。総頁 500 頁中、175-192 頁。本論文は平成 18 年度科学研究費基盤研究(B)の研究成果の一部である			

3	◎小倉いずみ・大東文化大学法学部教授『ピューリタニズムの生成と継承に関する研究』	共著	2007.03.31	日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)(課題番号15320039)による研究成果報告書	アメリカ植民地時代の思想をその起源から研究する。論文はトマス・フッカーを中心に、マサチューセッツ湾植民地や建国期文学までを扱い、政教分離の翻訳も含む。ハーバード大学デヴィッド・ホール教授とジョンズ・ホプキンス大学ラーザー・ジフ教授の講演原稿を収録する。総頁数1-191.i-xi頁中、小倉の担当部分は全章の編集と103-191頁。共著者名：大西直樹・国際基督教大学教授、林以知郎・同志社大学文学部教授、増井志津代・上智大学文学部教授、白川恵子・同志社大学文学部専任講師。
4	『メルヴィルの小説にみる先住民表象の虚構と事実』	共著	2007.03.31	日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号1520209、研究代表者大島由起子)による研究成果報告書	「アメリカ先住民とピーコット戦争」を執筆。植民地時代最初のインディアンとの戦争をコネチカット植民地からの視点を中心に、従来のマサチューセッツからの視点を修正する。総頁数122頁中、81-120頁。共著者名：◎大島由起子・福岡大学人文学部教授。
5	『英語文学事典』	共著	2007.04.20	ミネルヴァ書房	ピューリタニズムやベンジャミン・フランクリンなどの13項目を担当。総頁数829頁中、13項目で約8ページ。共著者名：◎木下卓・愛媛大学文学部教授、窪田憲子・都留文科大学教授、高田賢一・青山学院大学文学部教授、ほか17名
6	『ジョン・ブラウンの屍を越えてー南北戦争とその時代』	共著	2008.03.31	日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(課題番号16520171、研究代表者松本昇)による研究成果報告書	「ラルフ・ワルド・エマソンと奴隷解放運動」および「エマソンと黒人奴隷制に関する年表」を執筆。南北戦争にいたるまでのエマソンの思想の変遷を、政治と宗教、思想の観点から探る。総頁数100頁中、論文1-23頁、年表1-6頁。共著者名：◎松本昇・国士館大学政経学部教授、高橋勤・九州大学言語文化研究院教授、君塚淳一・茨城大学教育学部教授
7	アメリカ植民地時代の文献について	単著	2009.01.31	『詩と散文』第83号(永田書房)	植民地時代の歴史資料についての概説であり、New England Historical and Genealogical Registerの設立の目的やその資料としての重要性を論じると同時に、19世紀初頭に設立されたボストンの歴史協会について説明する。総頁数86中、44-47頁。本論文は平成20年度科学研究費基盤研究(B)(研究課題：アメリカ合衆国憲法と政教分離に関する研究)の研究成果の一部である。
8	トマス・フッカーとコネチカット植民地の創設	単著	2009.01.31	『詩と散文』第83号(永田書房)	1636年5月にトマス・フッカーはハートフォードに移住したが、前年はマサチューセッツ湾植民地総会議において政治的・社会的・宗教的な面からこの移住に関して反対があった。フッカーは民主主義を実現するため、新天地を求めたため、1639年のコネチカット基本法にはその精神が実現される。これらの背景を、歴史資料を駆使して分析する。総頁数86中、48-62頁。本論文は平成20年度科学研究費基盤研究(C)(研究課題：トマス・フッカーとコネチカット植民地に対する研究)の研究成果の一部である。
その他					
1	「ピルグリムとピューリタンのオランダ体験」国際基督教大学21世紀COEプログラム	単著	2005.02.28	「『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」の研究の一部としての発表。箱根スコール・プラザホテル。	アメリカに移住する前のピューリタンたちがオランダのライデンでどのような体験をしたかを、トマス・フッカーを中心として探求した。また彼らはアメリカに移住した後に土地を得たが、その獲得が彼らの宗教心にどのような影響を与えたかを分析した。
2	英文紹介 Izumi Ogura, John Cotton and Puritanism, New Arrivals,	単著	2006.02.25	The Journal of the American Literature Society of Japan, No.4	アメリカ文学会の学術刊行物『アメリカ文学研究』の英語版。日本語で書評された新刊書を英語で解説した。日本語版書評と異なり、英語版は著者自身が自著を要約する。総頁数155頁中、92-93。
3	書評 Andrew McMurry, Environmental Renaissance: Emerson, Thoreau, and the Systems of Nature	単著	2006.03.31	『ヘンリー・ソロー研究論集』第32号	システム論の中でソローの作品を分析する先端的な研究を書評した。エマソンとソローを文学からだけでなく哲学からも分析した。総頁数156頁中、121-122頁。
4	シンポジウム講師「エマソンと黒人奴隷制」	単著	2007.05.12	第53回九州アメリカ文学会大会シンポジウム「ジョン・ブラウンの屍を越えてー南北戦争とその時代」(九州大学)	南北戦争にいたるまでのエマソンの思想の変遷を、政治と宗教、思想の観点から探る。司会・講師松本昇・国士館大学政経学部教授、講師・高橋勤・九州大学言語文化研究院教授、講師・君塚淳一・茨城大学教育学部教授。本発表は平成19年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号16520171)の研究成果の一部である。

5	「奴隷解放運動における思想家 Emerson の立場」	単著	2007.10.13	日本アメリカ文学会第 46 回全国大会 (広島経済大学)	エマソンの奴隷制に関する思想がどのように変化したかを 1820 年代から 1882 年の死去まで分析する。本発表は平成 19 年度科学研究費基盤研究 (C) (課題番号 16520171) の研究成果の一部である。
6	アメリカ植民地時代の文献について	単著	2008.06.27	大東文化大学図書館『大東 BOOKS』第 5 号	大東文化大学東松山キャンパス図書館に収蔵された New England Historical and Genealogical Register について解説する。ボストンにおける家系図や歴史資料の重要性を論じると同時に、アメリカ革命の前後の混乱期に歴史文献がどのように管理されていたかとその収集状況について説明する。総頁 9 頁中、7-9 頁。
7	講演「ラルフ・エマソンとアメリカの理念——国家の使命と自己信頼」	単著	2009.01.23	明治学院大学文学部英文学科・アメリカ文学コース主催	エマソンはアメリカ全土で行った講演によって知識人に大きな影響を与えたが、特に黒人奴隷制度に関しては、1840 年代から活発に反対意見を述べている。奴隷解放についての講演や、リンカーン大統領との面会など、原典を使用しながらエマソンの思想を探る。

III 学会等および社会における主な活動

1	1980.05.01	～	現在	アメリカ学会
2	1980.05.01	～	現在	日本アメリカ文学会 (九州支部幹事 1993-1996)
3	1980.05.01	～	現在	日本ソロー学会 (理事,1998 年から現在に至る)
4	1980.05.01	～	現在	日本英文学会
5	1994.05.01	～	現在	Institute of Early American History and Culture
6	1999.04.01	～	2005.03.31	神奈川県藤沢市行財政改革協議会委員
7	1999.05.01	～	現在	Modern Language Association
8	2008.12.01	～	2009.11.30	日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	加藤 普章	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学年別に見た政治学の理解と政治学教育－大東文化大学の事例から		2008.10.12		日本政治学会・分科会 E 7 (政治学教育)、関西学院大学法学部。政治学科の学生よりアンケートを取り、政治学についての期待、希望、そして学生の取り組みについて実証的に分析した。分析は武田知己氏 (准教授) との共同。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「イミダス 2007」(集英社)		2007.01.01		各国情勢の項目のうちカナダ(323-324 頁)を担当。小項目として「カナダ連邦」「ハーバー政権」「カナダ外交」「多文化主義政策」「フランス系カナダ人」「カナダ文化」の 6 つをまとめた。			
2) 「はじめて出会うカナダ」(有斐閣)		2009.04.25		日本カナダ学会編集による入門レベルのテストを作成し、執筆した。6 名からなる編集委員の一人として全体のプランを立て、また「政治」(7 章)と「西部カナダ」(24 章)の章も担当した。全体で 296 頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
1 「ミドルパワーは可能か」、吉川元/加藤普章編		単	2004.05.10	ナカニシヤ出版		『国際政治の行方』。カナダを取り上げ外交行動と国家のサイズについて分析した。担当は 247-267 頁。総頁数は 318 頁。	
2 「多文化主義政策の現在」、梶田孝道編、『新・国際社会学』		単	2005.09.11	名古屋大学出版会		カナダの多文化主義の理論と政策について分析。担当は 238-256 頁。総頁数は 337 頁。	
3 「北米における妊娠中絶手術に関する政治学的考察」		単	2007.03.31			市川太一、他編、『現場としての政治学』、日本経済評論社、アメリカとカナダにおける中絶手術をめぐる考え方と政策を分析。担当は 113-134 頁。総頁数は 337 頁。	
4 「多面的なカナダの政治－地域とエスニシティの独自性」		単	2008.01.30	ミネルヴァ書房		畠山圭一・加藤普章編『アメリカ・カナダ』(世界政治叢書 1) カナダ政治の独自性を 2 つの点に絞って分析した。担当は 171-190 ページ。総頁数は 300 ページ。	
論文							
1 「規制と反規制の政治学－アメリカにおける中絶手術・銃・たばこ問題について」		単	2004.10.30	『大東法学』第 14 巻第 1 号		規制と反規制の政治学という視点からアメリカ政治を大きく左右する 3 つの争点を取り上げ、その特質を分析した。(65-100 ページ)。	
2 「日本におけるカナダ研究の現状と課題」			2005.09.30	『カナダ研究年報』第 25 号		日本における 25 年間のカナダ研究の流れを批判的に分析した。17～31 頁。	

その他				
1	単	2004.09.19	学会報告・日本カナダ学会 葉山町・湘南国際村センター	シンポジウム（カナダ研究の現状）において、日本のカナダ研究の特質について報告した。
2	単	2004.10.16	学会報告・Japan Studies Association of Canada (JSAC)、ビクトリア大学、 カナダ	地域研究の分科会において、日本におけるカナダ研究の特質について報告した。
3 「座談会 パスポートをめぐる力学」	単	2004.11.30	『地域研究』vol 6.No.2、 2004	国立民族学博物館地域研究企画センター主催。9-47頁。
4	単	2005.05.28	／開催は5月27日と28日 ／会場はカナダ大使館ホール	日本カナダ学会とカナダ大使館の共催による国際シンポジウム、「日本とカナダにおける多様性と社会変動」パネル2、「多文化主義と移民」において、「カナダ多文化主義の政策的側面ー日本への教訓」を報告した。
5	単	2005.11.18	札幌コンベンションホール	部会1「テロ後の世界とジェンダー」において、「中絶問題ー北米社会における規制と反規制の政治学」を報告した。
6 国際会議・報告	単	2006.04.12	ニュージーランド・オタゴ 大学	日本におけるカナダ研究の特質について報告した。
7	単	2006.09.10	日本カナダ学会・早稲田大 学	シンポジウム（カナダにおけるポストモダン論）において、討論者として3つの報告について批判的にコメントした。
8 日本学会（JSAC）	単	2006.10.12	カナダ日本学会・トンプソ ン・リバー大学	“New Trends in Japanese Society”というテーマで報告した。
9 書評『日加関係史 1929-1941：戦争に向 かう日本ーカナダ の視座から』	単	2007.01.00	『渋沢研究』第19号	日本とカナダの関係史をまとめた本を紹介した（31-36ページ）。
10 日本国際政治学会・報 告（分科会アメリカ政 治外交）	単	2007.10.28	九州国際会議場	J. ミーハンの著作『日加関係史 1929-1941』の紹介と批判を行った。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1986.10.00	～	現在	日本カナダ学会会員
2	1986.10.00	～	現在	日本国際政治学会会員
3	1987.04.00	～	現在	日本政治学会会員
4	1987.07.00	～	現在	慶応法学会会員
5	1987.10.00	～	現在	日本平和学会会員
6	1992.04.00	～	現在	日本カナダ学会理事
7	1992.07.00	～	現在	日本国際政治学会評議員
8	1998.06.00	～	現在	日本比較政治学会会員
9	2000.10.01	～	2005.03.31	法務省司法試験（第一次試験）審査委員
10	2002.04.00	～	2006.03.00	日本カナダ学会会長
11	2003.07.07	～	2005.11.23	地域研究学会連絡協議会地域研究学会連絡協議会・幹事学会・事務担当
12	2005.11.24	～	2007.11.24	地域研究学会連絡協議会地域研究学会連絡協議会・幹事学会・事務局長
13	2006.08.20	～	2008.08.30	日本学術会議連携会員に任命される（地域研究・基盤整備分科会に所属）
14	2008.12.25	～	2011.03.31	文化庁海外の宗教事情に関する調査協力者として

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	黒柳 米司	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.04		専門科目「国際関係論」に関する学生による授業評価において、「板書の読みやすさ」「聞き取りやすさ」を除くすべての項目(11項目)につき高い満足度が得られた。			
2) 異分野専門演習担当教員との合同オリエンテーション合宿の実施。		2009.02.25		(2009年2月25日～27日) 異分野を担当する政治学科同僚教員2名と協力して、それぞれのゼミの新3・4年生を引率して合同オリエンテーション合宿を実施し、異分野の争点への理解を深めるとともに、専門演習のあり方につき実践的な導入教育に勤めた。(十年以上継続)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 ASEAN安全保障共同体論議の経緯	編	2005.07.29	山本武彦編『地域主義の国際比較—アジア太平洋・ヨーロッパ・西半球を中心にして』早稲田大学出版会	2003年の「第2のバリ宣言」で2020年までに構築されるとされた「ASEAN共同体」のうち、安全保障共同体に注目し、その前提・意義および実現可能性を考察したもの。筆者は他に山本武彦ら。102-125頁			
2 アジア地域秩序とASEANの挑戦—「東アジア共同体」を求めて	編	2005.08.15	黒柳米司編『アジア地域秩序とASEANの挑戦』(【科研費基盤研究B】成果の一部) 明石書店	1967年の結成いらいASEANが達成した成果とその限界を総括し、21世紀の課題として注目されつつある「東アジア共同体」への展望を多様な角度から検討したもの。黒柳は編者として第1章「ASEAN Way」再考(15-37頁)、終章「ASEAN共同体へ」(261-287)を執筆。			
3 「ASEAN体験と東アジア」	共著	2007.06.28	山本武彦・天児慧編『新たな地域形成』(岩波書店)	本論文は、早稲田大学COEプロジェクトの成果物として刊行されたシリーズの第1巻に所収されたもの。「東アジア共同体」を模索する北東アジア・東南アジア諸国の多面的な地域協力においてASEAN諸国が果たしうる役割を、国内レベルにおける政治改革、地域レベルにおける地域アイデンティティの模索、および国際レベルにおける規範の提示という三つに注目しながら検討したもの。他の執筆者は、毛里和子・山本武彦、天児慧ら。第1章。37-66ページ。			
論文							

1	アジア冷戦とASEAN-ZOPFANを手がかりに	単著	2006.05.00	『アジア研究』第52巻第2号 アジア政経学会	ASEAN諸国は、1971年、「東南アジア平和自由中立地帯」(ZOPFAN)宣言を採択し、いわば「ASEAN型非同盟路線」に着手した。本論では、同構想の背景と展開過程を概観し、アジアの冷戦にとってASEAN諸国がいかなる位置を占めたのかを明らかにする。26-35頁。
2	東アジア共同体とASEAN	単著	2006.05.00	『国際問題』2006年5月号 日本国際問題研究所	2005年12月、クアラルンプルで「ASEAN+3(日・中・韓)」に豪・NZ・印の3国を加えた初の「東アジア首脳会議」が開催された。本論では、同会議をめぐる日中両国の角逐、これに対するASEANの働きかけを分析することで、「東アジア共同体」構想にとってASEANの果たす役割を明らかにする。15-25頁。
3	「ASEAN40年目の総括」	単著	2007.10.00	『海外事情』2007年10月号、第55巻10号	本論文は、結成間もない70年代までのASEAN(「初期ASEAN」と、1997年のアジア危機を経て再活性化しつつあるASEAN(「再生ASEAN」とを比較することによって、ASEANが何を達成し、何が課題として残されたかについて検討したもの。その基本構想は、別掲の「アジア政経学会」分科会における報告である。24-40ページ。
その他					
1	「ASEAN結成40年の総括—対話のフォーラムから共同体へ」	単	2007.10.14	アジア政経学会2007年度全国大会、<分科会1>『ASEAN結成40周年—共同体へのトリロジー』(2007年10月14日、東京女子大学)	学会報告
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1976.05.00	～	現在	日本国際政治学会評議員	
2	1991.05.00	～	現在	アジア政経学会評議員	

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	五味 俊樹	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 『9.11 以後のアメリカと世界』		2004.07.15		南窓社 講義の教材として使用。筆者は第 1 章 (12-27 頁) 担当。 A5 版総頁 271 頁。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『9・11 以後のアメリカと世界』 (五味俊樹・滝田賢治編)	編著	2004.07.15	南窓社	「アメリカ一極支配体制の世界政治的意味合い」の部分を執筆。12～27 頁。2001 年 9 月 11 日のいわゆる「同時多発テロ」以後におけるアメリカがおこなったテロとの戦い方について、それが世界政治にどのような意味を与えているかを考察したもの。(五味俊樹、村井友秀、宮坂直史、納家政嗣、岡垣知子、古城佳子、土屋大洋、滝田賢治、乗浩子、坪内淳、松井弘明、三船恵美、阪田恭代、高杉忠明、金子芳樹、坂口智、立山良司、青木一能) 全 271 頁。		
2 『法の理論』 25 (ホセ・ヨンバルト、三島淑臣、竹下賢、長谷川晃、編)	共著	2006.09.15	成文堂	「特集：戦争・テロと平和・正義」において「現代の国際政治における原理的課題」の部分を執筆。45～67 頁。現代の国際政治における主要な課題である、人道的介入、テロリズム、イラク戦争、大量破壊兵器について論じたもの。(森末伸行、長谷部恭男、五味俊樹、嶋本隆光、今井弘道、高橋洋城、上田竹志、藤井樹也、酒匂一郎) 全 214 頁。		
論文						
1 ‘Implications of U. S. Dominance in Global Politics’	単著	2005.03.00	Graduate School of Law, Daito Bunka University (ed.) “Comparative Law and Political Science Review ” Vol.4	いわゆる「9・11」事件以後におけるアメリカの単独行動主義的アプローチが世界の政治に与える影響について論じたもの。16～25 頁。		
2 ‘Fundamental Issues in Contemporary International Politics’	単著	2007.03.00	Graduate School of Law, Daito Bunka University(ed.) “Comparative Law and Political Science Review” Vol. 6	現代の国際政治における主要課題の問題点を論じたもの。1～15 頁。		

3	「アフガニスタン戦争とイラク戦争」	単著	2008.11.30	上智大学・ソフィア編集委員会『ソフィア』第57巻第2号(226号)	2001年のアフガニスタン戦争と2003年のイラク戦争について戦争に至る経緯と戦争形態の比較分析を通して両戦争の問題点と課題を指摘したもの。180～197頁。
その他					
1	小林啓治著『国際秩序の形成と近代日本』の書評	単著	2004.05.01	『日本歴史』第672号、平成16年5月号(日本歴史学会編)	近代日本の軌跡を分析する場合、戦後日本の歴史学では「帝国主義史観」が主流をなしていたが、著者はそれを乗り越えようとして「国際社会」という新しい視点を提示して、近代日本を再考したもの。書評では、その分析方法が新鮮であることを評価しつつも、同時代史的視点が欠落していることを批判したもの。122-124頁。
2	「アメリカの政治と社会」	単	2004.11.28	横須賀市	
3	ジョン・ルイス・ギャディス著『歴史としての冷戦』の書評	単著	2005.03.19	『国際政治』第140号	1940年代から1960年代における冷戦の特徴を先行研究と新史料に基づいて、再評価したもの。157～161頁。
4	『現実を見据えた「アート」(術)としての党外交50年』	単	2005.05.15	『月刊・自由民主』2005年6月号	評論的論文。自由民主党の50年の歩みについて、特に外交・防衛政策について論じたもの。52-63頁
5	グローバリゼーションに伴う移民問題－S.ハンティントン博士の憂慮を手がかりにして－	単	2006.03.00	『I I C P S ニュース・レター』No.15、2006年3月、大東文化大学・国際比較政治研究所	研究ノート。世界各国で起こるテロや暴動にはグローバリゼーションに伴う移民が発生要因になっているものがある。移民がテロや暴動にどのように結びつくかをアメリカを事例に考察したもの。14-16頁。
6	第33回国際学生セミナー「東アジアの将来秩序」	単	2006.09.30	八王子大学セミナー・ハウス	大学セミナー・ハウス主催の「国際学生セミナー」で講師を務める。2006年9月30日、10月1日。
7	『グローバル化に伴う「東アジア共同体構想」の“光”と“影”』	単	2006.12.09	早稲田大学	第6回日本公益学会国際公益研究部会での発表

III 学会等および社会における主な活動

1	1978.04.00	～	現在	日本国際政治学会評議委員 書評委員
2	1980.04.00	～	現在	日本政治学会
3	1987.10.00	～	現在	外交時報社雑誌『外交時報』編集長<現在、休刊中>
4	2006.04.00	～	2008.03.00	大学セミナーハウス国際学生セミナー企画委員
5	2007.08.00	～	2009.07.00	日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金選考委員会委員

(表 24)

所属	法学部政治学科		職名	教授	氏名	齊藤 哲郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)					担当授業(政治学A B、東洋政治思想史、海外地域政治研究等)で、毎回、小レポートを実施。演習では図書館実習で資料収集の訓練。ゼミ論文集の発行。			
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
1 現代アジアの変化と連続性		共著	2008.05.00	彩流社 1 2 P 3 2 P		冷戦後の東アジアにおけるパワーポリティクスと地域統合のベクトルの交錯、グローバリゼーションにともなうトランスナショナルな要素が地域統合に対して作用するベクトル、およびローカリズムの動きを分析した。[担当部分]「序章」および「第9章、マカオ政治における変化と連続性」、[共著者] 鈴木健人、大東和武司、金榮鎬、宇野昌樹、オマール・ファルーク、池田慎太郎、吉田晴彦、板谷大世		
論文								
1 現代中国市民社会論についての省察		単著	2004.11.00	広島国際研究 10 号(レフェリー論文) 1 4 P		ポスト冷戦期の世界的な市民社会論ルネサンスに伴って中国研究に応用された市民社会論の有効性と思想史的意味を検討。中国市民社会論争の特質、市民社会論応用の中国研究の意味と分析モデルの分類、市民社会論史の中での中国市民社会論の位置づけを行い、市民社会の規範と中国との共通性とずれを浮き彫りにし、中国では相互補完モデルが定着したことを確認。		
2 「一国二制度」の地域的機能と市民社会の可能性—返還後の香港・マカオの理論的位相—		単著	2005.10.00	広島国際研究 11 号(レフェリー論文) 1 5 P		香港・マカオで実施中の「一国二制度」を中国の版図拡大としての横軸と、国家と市民社会の関係としての縦軸とから分析		
3 Dialectic of the political reality and the political Science Concerning China		単著	2008.03.00	Daito Bunka Comparative Law and Political Science Review Vol. 7 1 0 P		政治学の後進国であった中国が、外国の政治学理論を輸入している状況を観察し、それが実用目的で、中国政治の経験は中国的特色とされるだけで理論化されていないことを指摘した。		

4	グローバル化とアジア：中国をめぐる国際関係における自由主義的契機（プロジェクト研究班報告1）	単著	2008.03.00	I I C P S ニューズ・レターNo.17 3 P	プロジェクト研究の中間報告として、中国の政治と外交における自由主義の作用を考察した。自由主義派と新左派の論争や、国際政治学者や経済学者の論争における新自由主義的要素が、改革・開放期の中国では大きな比重をもって政策に影響を与えていると論じた。
5	現代中国と新自由主義イデオロギー	単著	2009.03.00	大東法学 53号 24 P	現代中国と新自由主義の関係を、世界的な新自由主義の波と、中国の改革開放政策への影響、および概念の受容の特色から分析した。
6	「非承認国家」のソフトパワー：馬英九政権下の台湾「活路外交」の事例から	単著	2009.03.00	ユーラシア 40号 6 P	台湾が中国との「外交戦」に敗れ、「非承認国家」状態におちいり、馬英九政権が現状打開のためのソフトパワー（非軍事・経済力）を駆使した「活路外交」を展開する過程を分析した。
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1986.04.00	～	現在	比較文明学会会員
2	1991.04.00	～	現在	東大中国学会（現、中国社会文化学会）会員
3	1992.04.00	～	現在	現代中国学会会員
4	1993.01.00	～	現在	比較思想学会会員
5	1993.03.00	～	現在	社会思想史学会会員
6	2002.00.00	～	現在	日本国際政治学会会員
7	2006.07.00	～	現在	政治思想学会会員
8	2006.07.00	～	現在	日本政治学会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	土岐 寛	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『スローな都市の散歩道』	単著	2004.06.20	北樹出版	コラムの形で都市問題、都市政策を平易に論じた著作 (238 頁)。専門家、行政マン、学生だけでなく、一般の読者も想定したソフトな都市論。内外諸都市の都市政策、まちづくりのほか、音楽、映像、絵画、文学、スポーツなど文化面からの考察も含んでいる。			
2 『景観行政とまちづくり』	単著	2005.03.31	時事通信出版局	2004 年の景観法制定・施行を踏まえ、景観問題と景観行政を考察した (212 頁)。景観認識から海外都市の景観行政、日本の景観行政の歴史と現状、景観条例・景観法の分析、事例として長崎市、栃木市、海野宿 (長野県東御市) を取り上げた。			
3 『比較行政制度論』第 2 版、土岐寛・加藤普章編	共著編	2006.05.30	法律文化社	2000 年初版刊行を改訂増補した第 2 版。序章「比較行政制度論の課題と展望」(1~25 頁)に加え、新たに 10 章「日本の行政制度」(259~284 頁)を執筆。他に追加した章は、9 章「ロシアの行政制度」(竹森正孝執筆)。ほかは初版と同構成、内容はアップトゥデートに改めている。共著者は、馬場健、牧田義輝、西村茂、廣田全男、岡本三彦、穴見明、加藤普章、橋本卓、竹森正孝。総頁数 289 頁。			
4 『現代行政のフロンティア』	共著	2007.02.25	北樹出版	グローバル化や情報化、公共性概念の再検討、電子政府、行政評価、危機管理、景観行政など行政を包む今日の環境変化をカバーしたテキスト。「行政学の窓を開く」「日本と諸外国の行政の理解」「現代行政を考える」の 3 部構成、24 章。1 章「行政学の背景と対象」(12~21 頁) 2 章「行政学の歴史 (1)」(22~29 頁) 13 章「ヨーロッパの行政」(154~166 頁) 24 章「景観行政の新展開」(280~289 頁)を担当。共著者は平石正美・外山公美・石見豊。全 293 頁。			

5	科研報告書 『分権型社会構築のための基礎研究：米加両国の州政府を中心とした地域社会の形成』科学研究費補助金：基盤研究（B） 研究代表者 加藤普章	共著	2007.12.00		アメリカ、カナダの地域社会を構築する基礎的な単位としての州政府に着目した比較共同研究（全162頁）。第2章「アメリカとカナダにおける州・地方関係」を執筆（35～68頁）。アメリカとカナダにおける州と自治体の関係を一般的な原則、成長管理政策、各州の改革の実態などから分析、考察した。共著者は、加藤普章、藤田直晴、溝上智恵子、相良亜紀。
6	『シティマネージャー制度論』穂坂邦夫監修	共著	2008.12.04	埼玉新聞社	「日本型シティマネージャーを導入する研究会」の研究成果。地方制度の国際比較研究からわが国の自治制度を検証し、多様な地方制度のあり方、日本型シティマネージャー制度導入について研究、提言した。第1章第1節「わが国と主要国における中央と地方の関係及び制度」（8～10頁）。同第2節「わが国と主要国の地方制度における制度比較（その1）」（10～14頁）、第5章第1節「地方制度多様化の可能性」（152～156頁）を執筆した。他の執筆者は、穂坂邦夫・佐々木信夫・牛山久仁彦・金井利之・工藤裕子（全178頁）。
論文					
1	On Governor of the Tokyo Metropolitan Government	単著	2005.03.00	Daito Comparative Law and Political Science Review, Vol. 4 Graduate School of Law, Daito Bunka University	首相に次ぐ日本の顔といわれる東京都知事について多面的に分析。戦後都知事の変遷と都知事像の検証、とくに職員から見た都知事像と一般市民からみた都知事像のギャップ、都知事ポストの重要性とその現実をアメリカなどとの比較的观点から考察した。総頁数 39 頁中 26～32 頁。
2	Urban Regeneration and Super High-rise Buildings in Tokyo	単著	2006.03.00	Daito Comparative Law and Political Science Review, Vol.5 Graduate School of Law, Daito Bunka University	都市再生の名の下で進められている東京都心の再開発、超高層ビル建設ラッシュがもたらす都市問題を多面的に考察した。とくに都市景観、スカイラインを印象づける超高層ビルのデザインなどに着目し、あるべき都市再生を論じた。総頁数 32 頁中 15～24 頁。
3	「都市景観と広告のあり方」	単著	2006.03.00	財団法人日本都市センター『美しい都市づくりのすすめ』	都市景観に大きな影響を及ぼしている広告のあり方を論じた。日本と欧米都市の比較から、横浜市広告付きバス停留所上屋整備事業など、公的セクターが関わる広告景観形成の可能性に言及した。総頁数 115 頁中 102～108 頁。
4	「東京における都市再生と超高層ビル」	単著	2006.03.20	『経済と貿易』189号	東京都心における再開発、超高層ビル建設ラッシュの背景と問題を考察した。超高層ビル建設の経済的要因と都市環境に及ぼす諸問題、とりわけ都市景観への影響を論じた。総頁数 222 頁中 29～35 頁。
5	「ポートランドのオンブズマン事情」	単著	2006.04.23	日本オンブズマン学会『行政苦情救済&オンブズマン』Vol.17（日本オンブズマン学会誌創刊号）	2003 OMBUDSMAN REPORT, AUDITOR'S OFFICE, CITY OF PORTLAND, OREGON, AUGUST 2004 を中心に、アメリカ、オレゴン州ポートランド市におけるオンブズマン事情の一端を紹介した。総頁数 93 頁中 65～67 頁。
6	「内子町の歴史的町並みの形成と保全」	単著	2006.11.30	『追手門経済論集』41 巻 1 号	かつて和紙と木蠟で栄えた愛媛県内子町の町並み保存意識の形成と保存運動について概観し、保存と景観行政の課題と展望を試みた。総頁数 717 頁中 423～434 頁。
7	Formation and Conservation of Historic Townscape in Uchiko Town, Ehime Prefecture	単著	2007.03.00	Daito Comparative Law and Political Science Review, Vol. 6 Graduate School of Law, Daito Bunka University	和紙と木蠟で栄えた愛媛県内子町の町並み保存意識の形成と保存運動について概観し、保存と景観行政の課題と展望を試みた。総頁数 66 頁中 57～66 頁。
8	「行政制度・運営の国際比較データベース構築を一情報の共有化、公開が喫緊の課題一」	単著	2008.11.10	『地方行政』時事通信社 10019 号	日本政治学会の報告から各省庁・機関・大学バラバラの政策情報データの一元化、共同利用の必要性和検討課題について提言した報告を要約、紹介。総頁数 20 頁中 10～11 頁。
9	「道州制移行後の大都市制度：横浜、大阪、名古屋3市が『都市州』を提言一重複行政全廃し、地域経済力を向上一」	単著	2009.03.12	『地方行政』時事通信社 10047 号	道州制導入が検討されている現在、政令指定都市でも規模・中枢機能において傑出している横浜、大阪、名古屋3市で研究会を組織し、まとめた研究成果・提言を要約、紹介。総頁数 20 頁中 2～4 頁。
その他					

1	「スポーツと地域振興－長野・冬季オリンピックの場合－」	単著	2004.08.27	第13回日韓地方自治国際セミナー（韓国・江陵市で開催）	テーマは「スポーツと地域振興」で、長野・冬季オリンピックを事例に、その経済波及効果を多面的に考察、さらにボランティア活動や高齢者の参加による地域活性化、残された財政問題、オリンピック施設の有効活用などについて論じた。
2	「都市東京事務所の新たな役割」	単著	2005.01.31		平成16年度都市東京事務所長会第4回例会にて講演、約100名（全国都市会館3階第1会議室）。バブル崩壊後の東京と地方、地方分権改革後の東京と地方、都市再生と東京局地パブルの諸相、市町村合併、三位一体改革と地方の再編成などを分析しつつ、都市東京事務所の今後の役割とあり方を論じた。
3	「景観行政とまちづくり」		2006.07.26	福島県都市計画協会主催「まちづくり講習会」で講演（いわきワシントンホテル椿山荘）。	福島県下市町村の都市計画行政関係者に対して、景観行政一般について内外都市のスライドを交えて説明、さらに都市景観の捉え方、景観権、景観行政団体の動向などに言及し、質疑応答を行った。講演は「平成18年度まちづくり講習会－講演録－景観行政とまちづくり」と題して印刷配布された。
4	「港湾景観とまちづくり」		2008.10.06	名古屋市港友会主催（名古屋港福利厚生会館）	港湾景観がなぜ重要かということ、景観の一般論と港湾が持つ社会的、対外的ポジションから論じ、世界各地の写真を織り込みながら、これからの港湾・産業景観のあり方、景観を生かしたまちづくりについて提言した。
5	『新しいリベラリズム』ジェフリー・M・ベリー著、松野弘監訳	共著	2009.02.25	ミネルヴァ書房	アメリカにおける市民パワー台頭の実証的研究書の翻訳。原著 THE NEW LIBERALISM: The Rising Power of Citizen Groups 1999 第1章「リベラリズムは生きている」を訳(1～26頁)。他の訳者は、門口充徳、江藤俊昭、嶋田暁文(全334頁)。

III 学会等および社会における主な活動

1	1975.10.00	～	現在	日本政治学会会員
2	1985.05.00	～	現在	日本行政学会会員
3	1988.11.00	～	現在	日本地方自治学会会員（1994年度～現在理事）
4	1993.11.00	～	現在	鶴岡総合研究所顧問
5	1997.04.00	～	現在	松戸市個人情報保護審議会委員長
6	1998.06.00	～	現在	松戸市水道運営審議会委員長
7	2002.07.17	～	2005.03.31	墨田区行財政改革推進委員会副委員長
8	2003.01.27	～	2005.01.26	板橋区住宅対策審議会委員
9	2005.04.24	～	現在	日本オンブズマン学会会員（2005～2006年度監事、2007年度～現在理事）
10	2005.05.00	～	2006.03.00	日本都市センター「屋外広告物の規制・活用と都市景観に関する調査研究」研究アドバイザー
11	2006.06.00	～	2007.02.00	2006年度東京財団委託研究事業「日本型シティマネージャーを導入する研究」研究会委員
12	2008.09.24	～	2009.03.31	横浜・大阪・名古屋3市による大都市制度構想研究会委員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	永井 健晴	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1)		2009.04.00		政治学専攻の一年生のクラスにおいて、高校の「政治・経済」のテキストを用いて基礎知識の復習を行う。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)		2007.04.00		(2007年4月～) キャリアデザイン委員会委員 キャリアデザイン講演会開催			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
1 『プラトン政治哲学批判序説』	単著	2008.03.25	風行社（全 363 頁）	プラトンの政治哲学研究			
論文							
その他							
1 クリス・ソーンヒル『現代ドイツの政治思想家』	共著	2004.10.00	岩波書店（全 410 頁）	Chris Thornhill, POLITICAL THEORY IN MODERN GERMANY の全訳			
2 プラトンの政治哲学	単	2005.03.00	国際比較政治研究所	R・マオラー著『プラトンの政治哲学』の翻訳に関する報告			
3 ラインハルト・マオラー『プラトンの政治哲学』	単著	2005.08.20	風行社（全 513 頁）	Reinhart Maurer, Platons, Staat ' und die Demokratie の全訳と解説（485-513 頁）			
4 M・B・フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』（1）	単著	2006.10.00	大東法学第 16 巻第 1 号（341-381 頁）	序文、第 1 章政治哲学の対象としてのポリスとステイトの翻訳			
5 アメリカ型新自由主義とヨーロッパ型社会民主主義	共	2006.10.31	国際比較政治研究所国際シンポジウム、『国際比較政治研究』（2006 年）				
6 M. B. フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』（2）	単著	2007.03.30	大東法学第 16 巻第 2 号（167-201 頁）	第二章プラトンにおけるディカイオシュネー（正義）と自由			

7	M. B. フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(3)	単著	2007.10.30	大東法学第 17 卷第 1 号 (341-380 頁)	第三章ヘーゲルのプラトン批判、主体的エレメント
8	M. B. フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(4)	単著	2008.03.30	大東法学第 17 卷第 2 号 (113-177 頁)	第四章「国家」における自由の条件としての法
9	著書『プラトン政治哲学批判序説』に関する報告	単	2008.07.19	現代政治研究会 (於慶應義塾大学三田校舎)	
10	M. B. フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(5)	単著	2008.10.30	大東法学第 18 卷第 1 号 (245-285 頁)	第五章 ヘーゲルにおける「市民社会」と「国家」
11	日英独における立憲主義の形成に関する比較研究	単	2009.02.19	国際比較政治研究所研究会	クリス・ソーンヒル『ドイツ政治哲学』に関する報告
12	M. B. フォスター『プラトンとヘーゲルの政治哲学』(6)	単著	2009.03.00	大東法学第 18 卷第 2 号 (189-217 頁)	第六章 統治者と主権者

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1983.00.00	～	現在	慶應法学会会員
2	1985.00.00	～	現在	日本哲学会会員
3	1989.00.00	～	現在	日本政治学会会員
4	2003.04.01	～	2005.03.31	大東文化大学法学部政治学科学科主任
5	2005.04.01	～	2007.03.31	国際比較政治研究所所長
6	2007.04.01	～	2009.03.31	大東文化大学大学院法学研究科政治学専攻主任

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	中村 昭雄	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 町工場は生き残った!	監修	2004.10.30	アップル・プレス	本書は、「絶対負けない!」の続編で、大東文化大学法学部中村ゼミナールの学生が、東京・板橋の町工場 46 社取材してまとめた研究成果。町工場の赤裸々な実態を紹介している。中村は全編を監修。		
2 危機管理と行政	共著	2005.03.30	ぎょうせい	本書は、危機管理を行政や政治、ビジネスなどさまざまな視点から検討したもの。明治大学社会科学研究所の共同研究「不測事態に対応する行政管理システム確立に関する研究」の成果。共著者は中邨章、下川環、中村昭雄、市川宏雄の 4 人。中村は第 3 章 (55-72 頁) を担当。		
3 「現代日本の行政と地方自治」	共著	2006.04.30	法律文化社	シリーズ「日本の政治」の第 3 巻。国と地方自治体の行政の動向、特に改革に焦点をあて、解明した。共著者名:本田弘、石見豊、中村昭雄、大塚祚保、照屋寛之、李憲模、賀来健輔。中村は第 2 章「政策評価とアカウンタビリティ」(57~79 頁)、第 8 章「政策形成とパートナーシップ」(215~238 頁) を執筆した。総頁数 287 頁。		
4 政治学・行政学の基礎知識 (第 2 版)	共著	2007.08.10	一藝社	本書は、政治学と行政学について、基本的な事項をわかりやすく解説したテキスト。39 人による共著。中村は第 12 章の 3 項目を担当。		
5 基礎からわかる政治学	単著	2008.10.30	芦書房	政治学の思想・理論、制度、政等など政治学の全般にわたってわかりやすく解説した入門書。コラム、図書、資料、文献案内、原典紹介などを含む。総頁数 400 頁。		
論文						

1	再編期福祉国家の政策過程の枠組みに関する調査研究	共著	2005.06.00	平成12年度～平成14年度科学研究費補助金基盤整備(B)(2)研究成果報告書	本報告書は、3年間にわたる「再編期福祉国家の政策過程の枠組みに関する調査研究—北欧の事例」研究をまとめたもの。土岐寛、穴見明、加藤普章、安世舟、中村昭雄、和田守6人の共同研究による共著。中村は、「ノルウェーにおける政策過程の制度的変化—コーポラティズムの視点から」を担当。総頁数129頁中、12頁。
2	「アメリカの環境政策とアクター(1)」	単著	2006.10.30	「大東法学第16巻第1号」大東文化大学法政学会	アメリカの環境政策の形成過程を大統領と議会のアクターに注目し、アメリカの環境政治の政治過程を考察した。
3	「産・学・公・民連携による地域経済の活性化」	単著	2007.03.30	「大東法学第16巻2号」大東文化大学法政学会	2006年11月に、韓国技術教育大学で開催された第15回アジア地域国際シンポジウムで発表した内容をまとめた。
その他					
1	板橋の町工場を通して「モノづくり」の問題を提起	単	2005.03.01	プレス成形加工 第4巻第3号 プレスフォーミングジャーナル社	ゼミで研究発表した「絶対負けない!」と「町工場は生き残った!」について、板橋のモノづくりを中心にインタビューを受ける。総頁数70頁中、5頁。
2	新しいものづくりと受注システムを創り出そう	単	2006.02.01	プレス成形加工第5巻第2号 プレスフォーミングジャーナル社	東京・板橋区の人的・技術的財産としての企業・住民・大学・金融機関、行政などが新しい連携「21世紀ものづくりフォーラム」を結成。このフォーラム設立の経緯や背景、意義などについてインタビューを受ける。総頁数54頁中、4頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1977.04.01	～	現在	日本政治学会会員
2	1980.04.01	～	現在	慶応法学会会員
3	1985.04.01	～	現在	日本選挙学会会員
4	1990.04.01	～	現在	日本法政学会会員
5	1997.04.01	～	現在	日本地方自治学会会員
6	1999.04.01	～	現在	日本公共政策学会会員
7	1999.04.01	～	現在	日本行政学会会員
8	2001.11.07	～	現在	社会福祉法人相思会(2001.11.7～現在評議員)
9	2002.07.09	～	2004.05.20	板橋区ボランティア活動推進協議会会長
10	2004.06.01	～	2006.03.31	東松山市きらめき市民大学大学院講師
11	2006.04.01	～	現在	いたばし総合ボランティアセンター(2006.4.1～現在役員)
12	2006.09.19	～	現在	日本自治体危機管理学会会員(2006年度～現在理事)
13	2007.10.22	～	2008.03.31	文京区総合体育館建て替え他検討協議会副会長
14	2007.11.19	～	2009.01.30	板橋区「自治力UP」推進協議会委員
15	2008.08.26	～	2009.03.31	東松山市入札・契約制度改善委員会委員
16	2008.11.04	～	2008.12.02	リーマン社債調査委員会委員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	東田 親司	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「新版現代行政と行政改革」(芦書房、単著)		2004.05.00	「現代行政と行政改革」(2002年12月 芦書房、単著、1968～2000年までの国家公務員の経験をまとめ、講義の教材として使用。A5版260ページ。)に、その後の行政改革等の動きを追加し、講義の教材として使用。A5版 295ページ。				
2) 「改革の論点」(芦書房、単著)		2006.09.00	行政改革の中から、8つの論点を選び、大学院、ゼミ等の教材として使用。A5版 204ページ。				
3) 「私たちのための行政」(芦書房、単著)		2008.06.00	行政組織ごとに、所管業務と論点を20章に分けて詳述したもので、講義の教材として使用。A5版 302ページ。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 新版 現代行政と行政改革	単著	2004.05.01	芦書房	2002年発行の同名の著書内容を、新規数値に更新するとともに各種行政改革のその後の進展を追記。295ページ。			
2 改革の論点—実践的行政改革論—	単著	2006.09.15	芦書房	政治主要の行政運営、公務員制度改革、国家戦略スタッフ制度、地方分権改革、政策評価制度などの近年の行政改革の諸課題を説明し、問題点等を指摘している。204ページ。			
3 私たちのための行政	単著	2008.06.10	芦書房	実務経験に基づき、行政の制度運用の実際、行政上の課題と動向を20章にわたって平易に説明。各章を「基礎知識」と「論点」に分けて記述。302ページ。			
論文							
1 政治任用の公務員制度に関する一考察	単著	2004.10.30	大東法学第14巻第1号	欧米における政治任用の公務員制度を説明した上で日本への導入には無理があることを論じ、むしろ内閣官房の職員の寄合所帯の解消を提起。21ページ。			
2 東田親司オーラル・ヒストリー	単著	2005.03.31		主に、32年間の公部員生活の中から、行政改革に関する具体的な体験とそれに基づく教訓や課題をまとめたもの。政策研究大学院大学のC. O. E. オーラル・政策研究プロジェクトの一環。173ページ。			
3 統計行政の「司令塔」機能の在り方について	単著	2006.12.25	季刊 行政管理研究 No.116	内閣府におかれた「統計制度改革検討委員会」の報告(2006.6)のポイントと、その後の政府の対応の問題点等を説明。9ページ。			

4	政策評価制度について－効果の把握、評価指標、外部評価など－	単著	2007.04.25	評価クォーターNo.1 ((財)行政管理研究センター)	政策評価を実施する上で、効果の把握の困難性や成果指標導入の困難性の発生理由を分析し、対応策を提起している。8ページ。
5	中央省庁等改革及びその後の行政改革の成果と課題	単著	2008.10.30	大東法学第18巻第1号	中央省庁等改革以降の行政改革について、政治主導の行政運営を目指した改革、縦割り行政の弊害是正のための公務員制度改革、簡素化の視点からの改革、国民本位の行政の視点からの改革に分けて問題点や課題を論述。35ページ。
6	地方公共団体における外部評価結果の実際	単著	2009.01.25	評価クォーターNo.8	板橋区と東松山市の外部評価結果の指摘(183件)について、目的遂行型評価視点、国民受益型評価視点、納税者型評価視点等に分類し、その特徴を論述。6ページ。
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	2000.04.00	～	現在	公共政策学会会員
2	2000.04.00	～	現在	日本行政学会会員
3	2001.11.29	～	2009.03.31	板橋区行政評価委員会委員長
4	2002.04.01	～	現在	環境省入札監視委員会委員
5	2003.09.01	～	2007.08.31	外務省独立行政法人評価委員会分科会長
6	2003.10.29	～	2008.03.31	独立行政法人 農畜産業振興機構評価委員会委員
7	2005.01.01	～	現在	東松山市公共事業再評価監視委員会会長
8	2005.10.01	～	2006.06.05	内閣府統計制度改革委員会委員
9	2006.07.01	～	現在	財団法人日本文化用品安全試験所理事(非常勤)
10	2007.06.14	～	2007.10.31	総務省年金記録問題検証委員会委員
11	2007.09.05	～	2009.03.31	東松山市外部評価委員会会長
12	2008.11.13	～	2009.03.31	戸田市外部評価委員会委員長

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	平尾 淳一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 講義 URL「コンピュータサイエンス」 http://www.daito.ac.jp/~jun/computer/index.html		2009.00.00	授業運営の hp 公開と予習・復習の促進。○個人の hp 上で授業内容を詳細に公開している。○課題・参考文献などを提示して、欠席した場合でも自習および復習できるようにしている。○毎日 e-mail によって学習結果をチェックするとともに常に質問をうけつけ、教室外においても指導をおこなう体制を整えている。				
2) 講義 URL「数学とコンピュータ」 http://members2.tvnet.ne.jp/chris/mc/		2009.00.00	授業運営の hp 公開と予習・復習の促進。○個人の hp 上で授業内容を詳細に公開している。○課題・参考文献などを提示して、欠席した場合でも自習および復習できるようにしている。○毎日 e-mail によって学習結果をチェックするとともに常に質問をうけつけ、教室外においても指導をおこなう体制を整えている。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 特集:「0の発見」「相対論における0」		2005.11.00	数理科学 2005年11月号 No.509 サイエンス社 pp.54-58				
2) 情報システム科学		2006.03.20	放送大学教育振興会 共著:長岡 亮介、平尾 淳一 41-74、131-173/222				
3) 数学とコンピュータ		2006.03.20	放送大学教育振興会 共著:長岡 亮介、岡本 久、平尾 淳一、奥村 晴彦 13-75/253				
4) 数学とコンピュータ		2006.05.00	放送大学 教育振興会 第1~4, 15章担当				
5) 情報システム科学		2006.05.00	放送大学 教育振興会 第3~5, 10~12, 15章担当				
6) 現象と数学的体系から見える物理学1力学I		2008.01.15	森北出版 共著:平尾 淳一、岸根 順一郎、牧野 哲、師 啓二、徳永 旻 共編:平尾 淳一、師 啓二、野村 正雄、徳永 旻 312ページ				
7) 現象と数学的体系から見える物理学9量子力学I		2008.01.15	森北出版 共著:平尾 淳一、牧野 哲、師 啓二、徳永 旻、山本 正樹 共編:平尾 淳一、師 啓二、野村 正雄、徳永 旻 272ページ				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) サイエンス・パートナーシップ・プログラム「研究者招へい講座」講師		2009.06.00	千葉県立千葉東高等学校				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 現象と数学的体系から見える物理学1力学I	共編	2008.01.15	森北出版				

2	現象と数学的体系から見る物理学9 量子力学I	共編	2008.01.15	森北出版	全 272 ページ
	論文				
	その他				

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.04.00	～	現在	日本学術会議標準研究連絡委員会時小委員会委員 (第 15 期) (第 16 期) (第 17 期) (第 18 期)
2			現在	科学基礎論学会会員
3			現在	日本天文学会会員
4			現在	日本物理学会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	教授	氏名	山根 雄一郎	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 教育上の能力に関する大学等の評価		2004.10.01	千葉大学文学部非常勤講師。専門科目「西洋近世近代哲学」担当。2005年3月まで。				
2) 教育上の能力に関する大学等の評価		2007.08.01	放送大学教養学部非常勤講師。専門科目「カント哲学入門」担当。2007年9月まで。				
3) 教育上の能力に関する大学等の評価		2008.08.01	放送大学教養学部非常勤講師。専門科目「カント哲学入門」担当。2008年9月まで。				
4) 教育上の能力に関する大学等の評価		2008.10.01	跡見学園女子大学兼任講師。専門科目「人文学特殊講義（カント哲学の諸問題）」担当。2009年3月まで。				
5) 教育上の能力に関する大学等の評価		2009.04.01	慶応義塾大学文学部・大学院文学研究科修士課程非常勤講師。専門科目「哲学倫理学特殊」担当				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
1 〈根源的獲得〉の哲学——カント批判哲学への新視角	単著	2005.02.21	東京大学出版会	同題の博士学位論文（東大博人社 389 号）を増補したもの。A5判、総 304 頁。第 46 回財団法人東京大学出版会刊行助成図書。なお学位論文要旨と審査要旨は東京大学総合図書館のホームページ上で公開されている。			
2 坂部恵・佐藤康邦編『カント哲学のアクチュアリティ——哲学の原点を求めて——』	共	2008.02.21	ナカニシヤ出版	前世紀末以来、新たな時代の光の下で蘇生した感のあるカントの思考をめぐる学術論集。論文 8 本と序文と座談会からなる（共著者は、両編者と筆者以外に、黒崎政男、松山寿一、渋谷治美、小田部胤久、滝沢正之の 5 氏）。筆者は論文「平和の形而上学——『永遠平和のために』の批判哲学的基底」を寄稿し（179-212 頁）、座談会に参加した。論文では、カントの『平和論』とバーゼル和約との関わりを再考することで、①通説的に語られてきた後者の「秘密条項」の影響はさほど決定的とは考え難いこと、②同著作の主張には、（フランス革命よりもむしろ）ポーランド解体という同時代の事件との深い関連を見出し得ること、③『平和論』の論理構成には、権利問題への関心という『純粹理性批判』このかた批判的思考を導いてきた主動機が一貫していること、を論じた。（A5判、294+xiv 頁のうち論文 34 頁、座談会 44 頁）			

3	寺田俊郎・舟場保之編『グローバル・エシックスを考えるー「九・一一」後の世界と倫理』	共	2008.10.20	梓出版社	とりわけ2001年9月の「同時多発テロ」事件以来あらわになった現代世界の諸問題に、哲学・倫理学の伝統の豊かな資源を参照しつつ15名の研究者が応答を試みた論集。共著者は両編者と筆者以外に、井桁碧、青山治城、ギブソン松井佳子、大橋容一郎、福田俊章、石川伊織、小野原雅夫、石川求、大越愛子、伊藤博美、御子柴善之、牧野英二。筆者は第二部第六章(108-126頁)担当。A5判、総x+330+(8)頁
論文					
1	埋もれたア・プリオリ	単著	2004.12.30	情況出版刊・月刊『情況』第3期第5巻第12号(特集カント没後200年)	著書『〈根源的獲得〉の哲学ーカント批判哲学への新視角』で扱った論点の幾つかを極度に凝縮し再考察した論文である。66-77頁所収。
2	『ロールズ哲学史講義』を読むためにー「訳者解説」に代えて	単著	2005.03.25	バーバラ・ハーマン編『ロールズ哲学史講義』みすず書房	ロールズによる道徳哲学史講義の哲学史的な位置づけならびに訳語に関する総論的論文である。(541-549頁)
3	多民族社会のなかの「学者共和国」ーオーストリア・チェルノヴィツ大学の場合	単著	2006.03.00	『I I C P S ニュース・レター』No.15 大東文化大学国際比較政治研究所刊	旧オーストリア=ハンガリー帝国に存在したチェルノヴィツ大学の創設・展開・消滅の考察を通じて、現代のEUに現出しつつある多民族社会のあり得べき方向性について示唆を得ようとした論文である。(6-10頁)
4	<共生>の「可能性の条件」をめぐるーチェルノヴィツを鏡としてカントを読む	単著	2007.03.19	2003-2006年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書「現代におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究」	旧オーストリアの辺境都市チェルノヴィツに展開した多文化共存状況を参照しつつ、カントの政治哲学における「Volk(フォルク)」概念の奥行きと現代的な可能性を測定することを試みた論文である。(154-162頁)
5	カントと「ミスティシズム」	単著	2007.03.31	大東文化大学紀要第45号<人文科学>	「ミスティシズム」という語彙の成立が18世紀のカントにまで確かに遡り得ること、さらに、カントにおいてこの術語が、『歴史的哲学事典』が事実報告の水準で述べるように古来の「神秘説」と等価的に言い換えられる単なる同義語であるにとどまらず、むしろカント固有の理性批判の根本意図と密接する意義をもち得るものであることを、17・18世紀ヨーロッパにおけるミスティシズムとしてのキエティスムやピエティスムの、神学者モスハイムの著作をあり得べき接点とする影響作用をも視野に収めながら明らかにした論文である。(193-209頁)
6	Zur "kritischen Verwandlung" des Begriffs "angeboren" bei Kant. (Bd.2, S.831-843)	単著	2008.11.00	Recht und Frieden in der Philosophie Kants. Akten des X. Internationalen Kant-Kongresses, hrsg.v. V. Rohden et al., 5 Bde., Berlin/New York	大東文化大学紀要第42号<人文科学>に掲載された論文に、在外研究(2005年度、マールブルク)にて得られた知見を反映させ、ヴェルナー・シュタルク(Werner Stark)教授の助言を得て内容的・言語表現的に改善を加えたものである。
その他					
1	バーバラ・ハーマン編『ロールズ哲学史講義』	共訳	2005.03.25	みすず書房	Barbara Herman ed., John Rawls: Lectures on the History of Moral Philosophy (Harvard University Press, 2000)の翻訳。「カントVII」から末尾まで(全539頁のうち368-539頁)を担当。
2	Eine andere kopernikanische Wende. Die >kritische Verwandlung< des Begriffs "angeboren".	単	2005.09.08	第10回国際カント学会。於ブラジル・サンパウロ大学。	本学紀要第42号(人文科学)に発表したほぼ同題の論文をさらに増補修正したものの口頭発表。大会会場にて配布された冊子体とCD-ROMによる学会要旨集に独文発表要旨が掲載された。
3	「道徳的動機付けーカント倫理学討議」マールブルク学会参加報告	単	2005.09.10	日本カント協会編・理想社刊『日本カント研究』第6号	学会参加報告(189頁)
4	哲学史のなかのロールズ	単	2005.12.01	月刊『みすず』No.534 みすず書房刊	『哲学研究雑誌(Zeitschrift fuer philosophische Forschung)』2003年号第1分冊に掲載されたオトフリート・ヘッフェ著「ジョン・ロールズの逝去に寄せて」(独文)の翻訳である。(24-29頁)

5	多民族社会のなかの「学者共和国」－オーストリア、チェルノヴィツ大学の場合（当日資料配布）	単	2006.06.04	グローバル・エシックス研究会。於明治学院大学白金校舎。	研究発表
6	カント平和論の現在（当日資料配布）	単	2006.07.28	グローバル・エシックス研究会（永遠平和論研究部会）。於明治学院大学白金校舎。	第10回国際カント学会参加報告
7	カントと「ミスティシズム」の問題	単	2006.09.23	カント研究会第205回例会。於早稲田大学戸山キャンパス。	研究発表
8	<共生>の「可能性の条件」をめぐって（ワークショップ「グローバル・エシックスとは何か？」における提題）	単	2006.10.13	日本倫理学会第57回大会。於東京大学本郷キャンパス。	学会ワークショップ提題。
9	第十回国際カント学会参加報告	共	2007.01.30	カント研究会編・晃洋書房刊『現代カント研究 第10巻 理性への問い』	菅沢龍文氏、河村克俊氏と共著。山根の執筆部分は「三」のNegt, Foerster, Hoeffe 3氏の梗概と「四」全部で、記事全体の約56%に相当。（197-204頁）。
10	平和の形而上学－『永遠平和のために』の批判哲学的基底	単	2007.02.18	カント研究会第209回例会。於埼玉大学東京ステーションカレッジ。	
11	自著『<根源的獲得>の哲学－カント批判哲学への新視角』（東京大学出版会）合評会。	共	2007.04.22	カント研究会第211回例会。於埼玉大学東京ステーションカレッジ。	特定質問者、高橋克也氏（埼玉大）、鈴木亮太氏（東洋大）。司会、木阪貴行氏（国士館大）
12	レトリックと判断力	単	2008.01.27	カント研究会第218回例会。於法政大学大学院棟。	研究発表
13	レトリックと判断力（改）	単	2008.07.27	カント研究会第223回例会。於法政大学大学院棟。	研究発表
14	『美と崇高』のカント小屋の運命	単	2008.11.01	月刊『みすず』No.566 みすず書房刊	『文化の風景 東西プロイセン(Kulturlandschaft. Ost-und Westpreussen)』（ドイツ東欧文化フォーラム、2005年）に収録されたハインリヒ・ラング著「ケーニヒスベルク近郊モディッテンのカント小屋」（独文）の翻訳である。（38～43頁）
15	「神秘主義 Mysticismus」拾遺	単	2008.11.15	日本カント協会第33回学会 一般研究発表。於九州大学箱崎キャンパス。	発表要旨が、会員に配布された発表要旨集に掲載された。（頁付なし）。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1994.04.00	～	現在	哲学会（東京大学）会員
2	1996.10.00	～	現在	カント研究会会員（1998年度会計担当、2008年－2010年世話人）
3	1997.05.00	～	現在	日本哲学会会員
4	1997.06.00	～	現在	日本カント協会会員（2007年－2010年会計監査）
5	1998.09.00	～	現在	日本倫理学会会員
6	2009.04.00	～	現在	日本ライブニッツ協会会員

(表 24)

所属	法学部政治学科		職名	教授	氏名	和田 守	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) を受けた。平均値は政治学 3.9、日本政治思想史 3.6 であったが、板書、情報提供において低く、授業内容などは高かった。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 第 7 回全国公開講座シンポジウム (於 亜細亜大学) において「大東文化大学のエクステンションの状況と板橋区との連携」と題し、大学教育の地域開放について講演した。			2005.11.25				
2) 中国研究者の指導と学術書推奨			2007.07.01	中国洛陽大学肖伝国教授の博士論文執筆を指導した (日本国際交流基金より依頼) 成果として刊行された『近代西方文化与日本明治憲法』 (中国社会科学文献出版社) の巻頭に、「序」を執筆し、その概要と学問的意義について略述した。			
3) 中国研究者の指導と学術書推奨			2007.09.29	中国社会科学院日本研究所呉懐中研究員の学術指導にあたり、博士論文審査 (名古屋大学) の副査をつとめた。研究成果として刊行された『大川周明と近代中国—日中関係をめぐる認識と行動—』 (日本僑報社) の学問的意義について「大川周明における近代中国とのかかわりの全容を解明した優れた業績」と題する一文を巻頭に寄せ推奨した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 概説日本政治思想史	共著	2009.01.20	ミネルヴァ書房	近現代日本政治思想の通史として刊行されたもので、共著者は西田毅、森藤一史、出原政雄、山口二郎ら 13 名。筆者は第 2 部第 6 章「憲政擁護運動と政党内閣の成立」 (145~165 頁) 担当。A 5 版、総頁 392 頁。			
論文							

1	近代日本のアジア認識—連帯論と盟主論について—	単著	2004.05.10	『政治思想研究』第4号	アジア諸民族との連帯論とそのなかにおける日本盟主論の交錯という観点から近代日本のアジア認識の特色を通説した論文。先ず連帯論に対して盟主論が優位となる日清戦後の思想状況を考察したのち、明治初年にさかのぼって福澤諭吉を中心に小野梓、興亜会、樽井藤吉らのアジア観に触れ、日清戦後の田岡嶺雲、近衛篤麿、岡倉天心ら民間ベースのアジア連帯論の特徴、日露戦後における大隈重信や徳富蘇峰の東西文化調和論とアジア・モンロー主義、永井柳太郎の日支提携論、浮田和民の「新亜細亜主義」、宮崎滔天の連帯的不干渉論などを跡づけながら、連帯論の虚偽イデオロギー化へと突き進む「大東亜宣言」の悲喜劇を分析した。B5版、総頁数235頁中16頁。
2	知的ネットワーク形成と「社会的」民主主義の探求	単著	2007.01.01	『未来』第484号	田中浩『思想学事始め』の書評として執筆。戦後日本の思想史研究の問題関心をたどりつつ現代的課題について論及した。A5版、総頁数48頁中2頁。
3	新自由主義と新保守主義をめぐる諸問題	単著	2007.09.08	『戦略互恵 穩定発展』(中国社会科学院日本研究所編)	紀念中日邦交正常化35周年国際學術討論会の第1セッションで報告した論稿で、国際的な新自由主義=市場原理主義の展開のなかでの日本の対応と中国との関係、および新保守主義に附随する偏狭なナショナリズムの危険性を歴史的に総括し、開かれた共存型ナショナリズムへの転換を提言した。B5版、総頁数350頁中7頁。
4	日本近代化と中国	単著	2007.09.09	『近代化過程の中東亜三国的相互認識』(南開大学日本研究院・世界近現代史研究中心編)	中国の南開大学と大東文化大学共催(日本国際交流基金協賛)の国際シンポジウム・近代化過程における東アジア三ヶ国間の相互認識における大会報告の論稿で、富国強兵・殖産興業を国是として中央政府の強力な指導のもとで推進された日本近代化の帝国主義的コースとこれを批判した自由主義的民主主義的コースとの対抗関係を基軸にしながら、アジア観とくに中国観の構造的的特色について、内村鑑三や永井柳太郎・石橋湛山・吉野作造らを取りあげて論及した。B5版400頁中7頁。
5	東西文明調和論と東西文化融合論	単著	2007.09.16	『面向世界的東方思想・中日韓三国學術研究会論文集』(山東大学編)	大東文化大学・山東大学・成均館大学国際シンポジウムにおける大会報告の論稿で、日露戦争後に流行した東西文明調和論と第1次大戦後に漢学振興を提起して登場した東西文化調和論を比較しながら、アジア観を中心とした異同を分析しながら開かれた相互理解への展望を提示した。A4版、総頁数514頁4頁。
6	近代日本的亜州認識—連帯論と盟主論	単著	2007.10.00	『日本研究論集』第12集(中国南開大学日本研究院編)	『政治思想研究』第4号(2004年5月10日)に発表した「近代日本のアジア認識—連帯論と盟主論について—」が王美平氏の中国語訳により巻頭論文として掲載されたもの。A5版、総頁数394頁中30頁。
7	日中學術交流の新紀元	単著	2008.03.31	『大東文化大学北京事務所開設記念誌』	大東文化大学・北京外国語大学共同シンポジウムの基調講演の論稿で、日中関係の「新たな歴史段階」において重要なことはリベラル・デモクラシーとナショナリズムの調和の問題であるとの観点から、日中関係の歴史的経緯を概観し、學術文化交流進展の意義について論及した。A4版、全90頁中5頁。
8	グローバルな視点からの思想史研究	単著	2008.08.01	『未来』503号	日本政治思想史研究の立場から社会的民主主義、地域史研究、近代日本の自己省察などに言及し、地域的立脚点と国際的視野の重要性について論述した。A5版、総頁数48頁中9頁。なお、本論文は一部補訂のうえ、田中浩編『思想学の現在と未来』(未来社、2009年1月30日)に収録された。A5版、総頁数252頁中18頁。
9	東アジアにおける公と私—「家」の位置づけと役割をめぐる		2008.09.16	『東アジアにおける「家」—伝統文化と現代社会—』(大東文化大学編)	大東文化大学・山東大学・成均館大学国際シンポジウムにおける基調報告の論稿で、近代日本における国家主義と家族制度、中国ナショナリズムにおける国族主義と宗族制度の関連について論及し、公私の結節点として現代家族がかかえる問題状況にふれ、市民的公共性の再成に向けての展望を提示した。A4版、総頁数431頁中9頁。
その他					
1	(書評) 広瀬玲子『国粹主義者の国際認識と国家構想』	単著	2005.10.15	『歴史学研究』第806号	福本日南を中心に政教社グループの興亜思想の歴史的展開を構造分析した意義を評価したうえで、アジア(とくに中国)ナショナリズムとの関連および台湾植民地政策について分析が不十分な点を指摘した。B5版、総頁数64頁中4頁

2	(書評) 本井康博『新島襄と徳富蘇峰』	単著	2008.04.01	『日本歴史』第 719 号	新島襄と徳富蘇峰の師弟・同志関係を基軸に据えて熊本バンドの非主流派的立場からという新しい視点をもとに、日本近代化揺籃期における市民的自立性と倫理性の問題を実証的に検討した意義を評価しつつ、福沢諭吉との関係についての問題点を指摘した。A 5 版、総頁数 144 頁中 3 頁。
3	日本ピューリタニズム学会 (於聖学院大学) におけるシンポジウム「戦後日本思想へのピューリタニズムの影響」でコメンテーターをつとめた。		2008.06.27		
4	「大正期国民新聞の普選論－徳富蘇峰と馬場恒吾を中心に－」		2009.02.28		同志社大学人文科学研究所第 64 回公開講演会において「大正期国民新聞の普選論－徳富蘇峰と馬場恒吾を中心に－」の学術講演を行った。

III 学会等および社会における主な活動

1	1974.04.01	～	現在	日本政治学会会員 (昭和 55 年度文献委員 56・57 年度年報委員 60 年度企画委員 64・平成 2 年度理事)
2	1976.11.01	～	2008.03.31	日本社会思想学会会員
3	1982.06.01	～	現在	静岡県近代史研究会会員 (昭和 58 年度～平成元年度事務局長、平成 2 年度～4 年度副会長、平成 5・6 年度会長)
4	1992.02.01	～	現在	メディア史研究会会員
5	1992.08.01	～	2008.03.10	日本社会文学学会会員
6	1994.05.01	～	現在	政治思想学会会員 (平成 7 年～平成 15 年 理事)
7	2002.10.01	～	現在	日本思想史学会会員
8	2003.07.00	～	2004.09.00	板橋区長基本計画審議会委員 (会長)
9	2004.04.00	～	2008.03.00	私立大学協会会員 (理事)
10	2004.05.00	～	2004.12.00	板橋区産業振興構想策定会委員 (副会長)
11	2004.05.00	～	2008.03.00	板橋区文化・国際交流財団会員 (理事)
12	2005.04.00	～	2008.03.00	私立大学退職金財団会員 (評議員)
13	2006.04.01	～	現在	日本ピューリタニズム学会会員 (平成 20 年度～現在常任理事)

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	准教授	氏名	武田 知己	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業運営のHP上での公開と予習・復習の促進		2008.04.00	学年暦の始まりに際し、個人のHP上での授業のノートを公開し、ダウンロード可能にする試みを 2004 年度から続けているが、2008 年度はそれを大幅に改訂し、更に学生各自がダウンロードする方針をとった。学生の進捗や能力にあわせて様々な指導を行うのに大いに役立っている (http://www.daito.ac.jp/~ttakeda/lectures/lecturestop.html)。			
2) 試験範囲等のHP上での公開と試験準備の促進		2008.12.00	学年末にあたり、個人のHP上で試験範囲などをあらかじめ公開し、学生個人の試験準備の便宜を図る試みを 2004 年度から行っているが、今年もそれを行った (http://www.daito.ac.jp/~ttakeda/lectures/lecturestop.html)。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 「学年別に見た政治学の理解と政治学教育－大東文化大学の事例から」		2008.10.12	日本政治学会分科会「E7.政治学教育－何をどのように教えるのか」関西大学 加藤普章 (大東文化大学) 氏と共同において、筆者の講義上の工夫に加え、政治学科全体の講義に関するアンケートを駆使して、学年別の理解度に関する調査を行った。			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 伊藤隆・武田知己編『重光葵 最高戦争指導会議記録・手記』	共編	2004.00.00	中央公論新社	総頁数 399		
2 「重光葵とその時代 (解説)」	単著	2007.11.08	『重光葵とその時代－昭和の動乱から国連加盟へ』－特別展 (憲政記念館、2007 年 11 月 8 日～30 日)	総頁数 71		
3 「重光葵外交意見書集 駐華大使・外務大臣時代 (上)」第二巻	監修・解説	2007.12.00	現代史料出版	総頁数 392		
4 『重光葵外交意見書集 外務大臣時代 (下)・その他』第三巻	監修・解説	2008.12.00	現代史料出版	総頁数 462		
5 『重光葵外交意見書集 駐ソ大使・駐英大使時代』第一巻	監修・解説	2009.07.00	現代史料出版、2009 年 7 月刊行予定	総頁数 323		

論文					
1	「芦田均」「重光葵」「松本忠雄」「東郷茂徳」「松野鶴平」「高橋是清」「加藤宗平」「村川一郎」	単	2004.00.00	伊藤隆・季武嘉也編『近現代人物史料情報事典』吉川弘文館	総頁数 455
2	伊藤隆、佐道明広、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 小田村四郎オーラルヒストリー』	共著	2004.00.00	(科研費成果報告書)	総頁数 367
3	「第5章 板橋区の行政評価の実施状況と課題 第2節板橋区へのヒアリング結果」	単著	2005.00.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット no.9 政策評価制度』(大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、2005年)	70-79 頁
4	「第5章 板橋区の行政評価の実施状況と課題 第3節板橋区の二段階評価」	単著	2005.00.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット no.9 政策評価制度』(大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、2005年)	79-93 頁
5	「重光葵 1887-1957」	単著	2005.00.00	『環』「小特集 敗戦と占領はどう受け止められたか」vol.22、2005年夏号、藤原書店	304-309 頁
6	武田知己、黒澤良『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 東田親司オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 173
7	武田知己、中村尚史、森直子『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 菅原操オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 329
8	御厨貴、佐道明広、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 股野景親オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 452
9	越沢明、御厨貴、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト まちづくり行政オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 277
10	伊藤隆、森直子、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 山下英明オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 362
11	伊藤隆、有馬学、小池聖一、佐道明広、武田知己、平松大輔、川越美穂『C.O.E.オーラル政策研究プロジェクト 藤波孝生オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 376

12	伊藤隆、御厨貴、佐道明広、股野景親、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 本野盛幸オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 403
13	伊藤隆、井上寿一、佐道明広、股野景親、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 八木正男オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 308
14	北岡伸一、井上寿一、佐道明広、武田知己『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト 宮崎弘道オーラルヒストリー』	共著	2005.00.00	(COE 科研費成果報告書)	総頁数 294
15	藤井三樹夫、氏家清彦、武田知己『河川オーラルヒストリー 小坂忠 戦後の治水事業と私がめぐり会った人々』	共著	2005.00.00	(日本河川協会)	総頁数 129
16	御厨貴、羽貝正美、野中尚人、佐道明広、武田知己『高速道路事業及び有料道路制度に係る JH オーラルヒストリー (その2) - 有料道路制度草創期からプール制導入までの証言を中心に』	共著	2005.06.00	(日本道路公団総合研修所 経営研修調査室)	総頁数 289
17	「綾部健太郎」「大室政右」「重光葵」「東郷茂徳」「苦米地義三」「花房義質」「松村謙三 (追加情報)」	単著	2005.12.00	伊藤隆・季武嘉也編『近現代人物史料情報事典 2』、吉川弘文館	総頁数 308
18	「北海道白老町の評価制度について」、pp115-138	単著	2006.00.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット no.13 政策評価制度 (総集編)』 (大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、2006 年)	
19	「横須賀市・練馬区の評価制度 (二〇〇五年公開講座報告)」	単著	2006.00.00	『地域デザインフォーラム・ブックレット no.13 政策評価制度 (総集編)』 (大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、2006 年)	
20	『過去のオーラルヒストリー目録シリーズ 1 読売新聞社「昭和史の天皇」取材資料目録』	編集・解説	2006.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 133
21	『過去のオーラルヒストリー目録シリーズ 2 通商産業調査会編「産業政策史回顧録」全 43 巻』	編集	2006.00.00	発表・発行：(近代日本史料研究会)	総頁数 54

22	『過去のオーラルヒストリー目録シリーズ3 大蔵省官房調査部・金融財政事情研究会編「戦後財政史口述史料」全8冊』	編集	2006.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 49
23	御厨貴、内山融、武田知己『東京大学先端研究オーラルヒストリーシリーズ Vol.2 塩飽二郎オーラルヒストリー』	共著	2006.00.00	(東京大学先端科学技術研究所御厨研究室)	総頁数 287
24	『松村謙三関係史料目録』	編集・解説	2007.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 109
25	『松本〔忠雄〕文庫目録一文書の部』	編集・解説	2007.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 115
26	伊藤隆・武田知己・森直子『続山下英明オーラルヒストリー』	共著	2007.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 73
27	「政治史研究からみたオーラルヒストリー(一)～「記憶」から「史料」を作るということ」	単著	2007.01.00	『大東法学』第16巻1号(通巻第48号)	295-322頁
28	「上塚司」「大島健一」「大島浩」「大中睦夫」「小楠正雄」「小柳牧衛」「宮澤喜一」「松村謙三(追加情報)」	単著	2007.12.00	伊藤隆・季武嘉也編『近現代人物史料情報事典3』、吉川弘文館	総頁数 375
29	伊藤隆、佐道明広、武田知己『松野頼三(元自民党衆議院議員)オーラルヒストリー(追加補)』	共著	2008.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 106
30	伊藤隆、武田知己『大塚惟謙(元東北管区警察局長)オーラルヒストリー』	共著	2008.00.00	(近代日本史料研究会)	総頁数 154
31	「オーラルヒストリーの可能性と歴史研究」(特集2008年歴史学の焦点)	単著	2008.11.00	校倉書房『歴史評論』703号	50-62頁
32	人物で読む現代日本外交史	単著	2008.11.00	服部龍二他編『人物日本外交史』吉川弘文館	総頁数 340
その他					
1	「重光葵と日本外交1933-1946」	単	2004.06.30	(大東文化大学国際比較政治研究所)	
2	「史料研究：重光葵関係文書と松村謙三文書を中心に」(『近現代日本の政策資料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築』)	単著	2005.00.00	(代表伊藤隆 課題番号15330024 平成15年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)、COE科研費成果報告書)	

3	「オーラルヒストリー体験と日本政治研究」	単著	2005.00.00	『C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト オーラル・ヒストリー・プロジェクト研究成果報告会』COE 科研費成果報告書)	
4	「九 戦後」	書評	2005.00.00	『史学雑誌 回顧と展望～2004年の歴史学界～』(史学会)	
5	「歴史研究のあり方について：一年の活動を振り返って」	単	2005.00.00	大東文化大学国際比較政治研究所発行『I I C P S ニューズレター』vol.14	12-14 頁
6	『松村謙三関係資料 1、2』	編集	2005.00.00	(CD-ROM。財団法人桜田会)	
7	「昭和戦前・戦時期の外務省における「アジア主義」構想－重光葵を視点に－」	単	2005.11.18	(国際政治学会第七部会、札幌国際コンベンションセンター)	
8	「地域デザインフォーラム第三期 第一分科会「政策評価制度」の活動報告－政策評価制度の諸問題－」	単	2005.12.16	(地域デザインフォーラム、大東文化大学)	
9	「戦後史研究の視点について－北岡伸一『自民党』と石川真澄『新版 戦後政治史』を素材として－」	単著	2006.00.00	(『戦後日本研究会報告集 1』、近代日本史料研究会)	
10	「書評：湘南のイメージ－加藤厚子『銀幕の中の茅ヶ崎』－」	書評	2006.00.00	『茅ヶ崎市史研究』第30号、茅ヶ崎市	
11	「歴史の役割割り：2005年度の活動を振り返って」	単	2006.00.00	大東文化大学国際比較政治研究所発行『I I C P S ニューズレター』vol.15、pp11-13	11-13 頁
12	「昭和史の天皇の取材史料について～史料と性格～」	単	2006.09.24	(日本オーラルヒストリー学会第二分科会「植民地支配と史料論」、東京外国語大学)	
13	「日ソ共同宣言再考－両国における決定の要因と過程」	討論者	2006.10.29	(ロシア史研究会 2006年度大会、明治大学)	
14	「戦前戦後の松村謙三の中国訪問とその周辺」	単	2007.09.10	(2007年9月10日から11日、「南開大学・大東文化大学共催国際シンポジウム 近代化過程における東アジア三カ国間の相互認識」、中国天津市・南開大学)	
15	名称：「2007年11月14日(水)放送 NHKその時歴史が動いた 第305回 国際連合加盟 ～重光葵 日本から世界へのメッセージ～」	製作協力	2007.11.14		
16	総合司会 「<戦後>は終わったか」	総合司会	2007.12.03	(科研費「口述記録と文書記録を基礎とした現代日本の政策過程と政策史研究の再構築」最終報告研究書、政策研究大学院大学)	

17	「松村謙三文書の発掘と『近代化過程における東アジア三カ国間の相互認識』での報告」	単	2008.00.00	大東文化大学国際比較政治研究所発行『IICPSニューズレター』vol.16	
18	一、「オーラルヒストリーの課題について」	単	2008.03.05	(国立国会図書館政治史料連絡協議会、国立国会図書館)	
19	「学年別に見た政治学への理解と政治学教育―大東文化大学の事例から」	共	2008.10.12	日本政治学会分科会「E7. 政治学教育―何をどのように教えるのか」於関西大学	加藤普章（大東文化大学）氏と共同において、筆者の講義上の工夫に加え、政治学科全体の講義に関するアンケートを駆使して、学年別の理解度に関する調査を行った。
20	「外交官・国際人としての重光葵」		2008.11.01	大分・杵築市きつき城下町資料館	
21	「重光葵の遺品発見」に対するコメント		2009.02.07	東京新聞取材	
22	「重光葵の遺品 生家で発見」に対するコメント		2009.03.08	共同通信社取材	
23	「All eyes on Okubo as DPJ treads water Ozawa may resign if prosecutors indict aide over shady donations」に対するコメント		2009.03.21	The Japan Times 取材	

III 学会等および社会における主な活動

1	1999.00.00	～	現在	日本政治学会会員
2	2001.04.01	～	2006.03.31	日本河川協会河川行政に関するオーラルヒストリー実行委員
3	2002.00.00	～	現在	世界オーラルヒストリー学会（IOHA）会員
4	2002.00.00	～	現在	日本国際政治学会会員
5	2002.04.01	～	現在	近代日本史料研究会運営委員（2005.04.01～代表幹事）
6	2004.04.01	～	現在	日本オーラルヒストリー学会会員
7	2005.04.01	～	2007.03.31	社団法人国際情勢研究会（経済史研究会）委員
8	2007.04.01	～	現在	東京財団「政治外交検証プロジェクト」メンバー

(表 24)

所属	法学部政治学科	職名	講師	氏名	坂部 真理	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 2007年4月～2008年3月 金城学院大学 非常勤講師 (2年生対象科目「国際リーディングス」)		2007.04.00		2年生を対象に英語文献の講読をし、現代アメリカ政治の理解と語学力の向上に努めた。			
2) 2008年4月～現在 大東文化大学 法学部 政治学科		2008.04.00		1年生対象科目「現代社会と政治(A)(B)」 1年生を対象に主に日本を例として政治学の基礎的概念を概説した。2年生対象科目「現代政治理論」 2年生を対象に主に20世紀以降の実証理論に関わる諸概念を解説した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 アメリカにおける「政党システム」の再編 (二)	単著	2005.06.00	名古屋大学法政論集、208号 145-180頁	1990年代のアメリカ政治においては、12年続いた共和党政権の後、民主党クリントン政権が誕生した。本稿は、このクリントン政権が新保守主義の継承に還元されるものか、それとも異なる政策潮流を作り出すものであったのかを検討することを課題とした (七回連載)。まず (一) (二) では、1990年代のアメリカ政党制に関する先行業績を「再編成の終焉論」と「共和党優位の再編成論」に整理し、それぞれの問題点を検討した。その上で本稿はフレーミング論の視点を導入し、政党による有権者の選好構築に注目して政党制の再編過程を分析する枠組みを設定した。			
2 アメリカにおける「政党システム」の再編 (三)	単著	2005.09.00	名古屋大学法政論集、209号 173-212頁	(三) では、クリントン政権期の分析の前提作業として、それに先立つ「第5政党システム」が内包した諸問題を整理し、クリントンが民主党の支持基盤を再編する上で克服を志向した諸課題を明らかにした。			
3 アメリカにおける「政党システム」の再編 (四)	単著	2005.12.00	名古屋大学法政論集、210号 137-181頁	(四) では、(二) で設定した分析枠組みに基づき、1992年大統領選挙においてクリントンがどのようなフレーミング戦略を用いて有権者の支持調達を追求したのかを分析した。			

4	アメリカにおける「政党システム」の再編(五)	単著	2006.03.00	名古屋大学法政論集、211号 237-280 頁	(五)では、クリントン政権による医療保険改革を例に、共和党側の対抗的なフレーミング戦略と民主党の分裂により有権者の選好が再度変化し、政権の支持基盤が短期間での不安定化していく過程を分析した。
5	アメリカにおける「政党システム」の再編(六)	単著	2006.06.00	名古屋大学法政論集、212号 427-464 頁	(六)では、1994年中間選挙での民主党の大敗後のクリントン政権の政策・選挙戦略の転換を検討し、1994年以降、政権が新保守主義の方向に接近したことを明らかにした。
6	アメリカにおける「政党システム」の再編(七・完)	単著	2006.09.00	名古屋大学法政論集、214号 365-381 頁	(七)は、全体の結論部である。本稿は、クリントン政権によるフレーミング戦略に注目し、1990年代初頭、政権が新保守主義との対立軸設定によって、新たな政党システムの可能性を模索したものの、党内分裂と財政的制約によって96年まで同原理を貫徹しえなかったと主張した。さらに、90年代後半は、政権の右傾化によって新保守主義側への政策経路の狭隘化が生じ、共和党優位の紛争構造が残存したと結論付けた。
7	2004年アメリカ大統領選挙の位相—アメリカの選挙政治における遠心力—	単著	2006.12.00	名古屋大学法政論集、215号 87-119 頁	ミシガン学派・修正主義間の論争を基に、アメリカの選挙を分析する上での2つのモデルを構築し、2004年大統領選挙における有権者の業績評価・投票行動が既存の党派心に規定されたものである。(内生的である)ことを示した。
8	アメリカ福祉国家の再編(一)—リスクの「私化」と1990年代の分岐点—	単著	2007.12.00	名古屋大学法政論集、220号 1-39 頁	2000年代初頭のアメリカ福祉国家の再編の方向性を「リスクの私化」と捉え、それを加速させた動態を、議会と有権者の二つのレベルで展開される「二段階ゲーム」という視点から説明する(三回連載)。
9	アメリカ福祉国家の再編(二)—リスクの「私化」と1990年代の分岐点—	単著	2008.03.00	名古屋大学法政論集、221号 231-266 頁	1993-94年のクリントン政権による医療保険改革の過程を、(一)で設定した政党による「二段階ゲーム」という視点から分析し、アメリカにおいて「リスクの社会化」という政策経路が定着に失敗した背景を分析した。
その他					
1	2000年代におけるアメリカ政党制の構造と変容	単著	2006.06.00	中部政治学会(於名古屋大学)	ANESのパネルデータに基づき、2000年代初頭のアメリカ有権者の党派的分極化とその安定化、および有権者がもつ既存の党派心が、彼らによる状況認識を規定し、彼らの党派心を再生産する傾向があることを示した。
2	現代アメリカにおける政党制再編の方向—ブッシュの「所有者の社会」構想—	単著	2007.10.00	日本政治学会(於明治学院大学)	2000年代初頭、ブッシュ政権が推進してきた「所有者の社会」構想を共和党側による政党制再編戦略として解釈し、その内容と選挙における支持調達上の効果を分析した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	2005.04.01	～	現在	名古屋アメリカ学会会員	
2	2006.10.01	～	現在	日本選挙学会会員	
3	2007.04.01	～	現在	日本政治学会会員	

国際関係学部

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	井上 恭子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業の中で、理解を深めるための双方向性導入		2006.04.00		2006 年度以降、アジア史 B で講義の理解度を高めるため、小質問を出し、解答を見ながら必要な追加説明を行っている。(2006 年 4 月～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 現地研修のための教科書作成に参加		2009.00.00		インドの項を分担。インドへの研修生の現地理解を深めるための教材 (学部で作成) 作成に参加			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
1 『Sub-regional Relation in the Eastern South Asia: with Special Focus on India's North Easter Region』		共	2005.03.00	Institute of Developing Economies		JRP. Series 133. 上記書の続編として位置づけられる。インド北東地方をとりあげ、地政学上の位置、政治、経済、社会を検討。全 320 ページ。井上は Chapter 1 "Integration of the North East" pp.17～31 を担当。	
2 『Elusive Borders: changing Sub-Reginal Relations in Eastern South Asia』		共	2005.03.00	Institute of Developing Economies		上記 2 書の続編にあたる。東部南アジアの地域関係・諸問題、人種、紛争などをとりあげて検討。全 217 ページ。井上は、Introduction と、Capter5 "Nepalisin Northeast India: In Search for identity" 111～135 を担当。	
3 『インド民主主義の変容』		共	2006.04.00	明石書店		インドの第 14 次連邦下院選挙の分析。全 372 ページ。広瀬崇子、南埜猛、井上恭子の共著編。	
4 『現代インドを知るための 60 章』		共	2007.10.00	明石書店		広瀬崇子・近藤正規・井上恭子・南埜猛の共編著。全 336 ページ。井上は第 3、12、15、38、58 章を担当。	
論文							
1 『インド民主主義体制のゆくえ: 多党化と経済成長の時代における安定性と限界』		共	2008.03.00	アジア経済研究所		近藤則夫編、インドの民主主義についての論文集。井上は第 8 章「インド北東地方の民族運動: ナガ民族について」pp277-309 を担当。	
2 『講座 世界の先住民族: ファースト・ピープルズの現在 03 南アジア』綾部恒雄監修・金基淑編		共	2008.03.00	明石書店		南アジアの先住民族の分析。井上は、第 2 章「ナガ: 辺境における民族アイデンティティの模索と闘争」を担当。pp.53～72。	

その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1991.03.00	～	現在	日本南アジア学会会員
2	2001.03.00	～	現在	日本国際政治学会会員
3	2001.03.00	～	現在	日本比較政治学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	白杵 英一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)		2007.12.00		(大東文化大学図書館報『大東BOOKS』第三号) 大学院生、および若手研究者による一次史料を利用した研究を促進する取り組み。ロンドンにある同公文書館を初めて訪問して、目指す史料を見つけ出すための具体的方法・手続きを具体例に沿って詳細に説明し、助言を与えている。大東文化大学図書館の webpage 上で一般に広く公開中。 (http://www2.daito.ac.jp/jp/modules/library/index.php/J10-00-00-01) 5-11 頁、所収。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「PKO の起源：国際連盟レティシア委員会 (一九三三～三四年)」	単著	2007.03.31	『軍事史学』第 42 巻第 3・4 合併号 (『PKO の史的検証』軍事史学会編、錦正社)	60 年以上の歴史を有する国連平和維持活動 (PKO) の歴史的に検討した論文集に、筆者は第一篇第一章、「PKO の起源：国際連盟レティシア委員会 (一九三三～三四年)」を執筆した。同委員会がすでに戦後の PKO の存在形式における起源であったことを、英国外務省文書及び連盟記録を通して検証する。編者：軍事史学会 総頁数 363 頁中 27～56 頁。			
2 「英国国立公文書館・英国外務省文書 (1938 年～45 年)。目次及び要約」(英国による不承認と国際法：汪兆銘「南京国民政府」(1940 年～45 年) の法的地位)	単著	2008.03.00	(平成 19 年度大東文化大学特別研究費成果報告・附録)	汪政権の法的地位・不承認に関する英国外務省文書の一覧表とその要旨を年月順に整理したファイル。総頁数 94 頁。			

3	「汪兆銘『南京国民政府』の法的地位と日中戦争—英国による不承認と国際法—英国外務省文書の検討」	単著	2008.03.31	『軍事史学』第43巻第3・4合併号（『日中戦争再論』軍事史学会編、錦正社）	日中戦争を多様な視点から検討した総合的研究書に、筆者は第二篇「汪兆銘「南京国民政府」の法的地位と日中戦争—英国による不承認と国際法—英国外務省文書の検討」を執筆した。主に英国の外務省文書及び日中の一次史料を用いて、汪政権に対する不承認の法的根拠；不承認の外交実務における取扱い；チェンバレン内閣による日中戦争の周旋の試み；日中戦争の法的性格の変遷について明らかにする。編者：軍事史学会 総頁数 521 頁中 197～222 頁。
その他					
1	「H. プル『国際社会論』における戦争概念」(研究会発表レジュメ)	単著	2006.12.08	イギリス学派研究会(立命館大学国際関係学部)	国際関係論のイギリス学派の中心的な研究者ヘドリー・プルによる多角的な戦争の考え方についての批評(3頁)。
2	B. マリノフスキー「戦争の人類学的分析」(1941年)	単著	2007.03.31	『大東文化大学紀要』(社会科学)第45号	文化人類学の視点から戦争を議論したB.Malinowskiの古典的論文‘An Anthropological Analysis of War’(American Journal of Sociology, vol. XLVI, no.4, 1941)の翻訳、及び解説。総頁数 317 頁中、21～50 頁。
3	R. L. スティーヴンソン「エディンバラ～絵画的な手記～」(1878年)	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要』(人文科学)第46号	R.L.Stevensonのエッセイの本邦初訳、註、及び解説。総頁数 576 頁中、85～113 頁。
4	R. L. スティーヴンソン「エディンバラ～絵画的な手記～」(1878年)(承前・完)	単著	2009.03.31	『大東文化大学紀要』(人文科学)第47号	R. L. Stevensonのエッセイの本邦初訳、註、及び解説。総頁数 462 頁中、69-96 頁。(前号からの継続・完結)
5	「国際法2・多国間条約と未承認国—ベルヌ条約と北朝鮮」	単著	2009.04.10	『平成20年度・重要判例解説』(ジュリスト臨時増刊4月10日号No.1376)	日本の民放テレビ局2社が無断放映した北朝鮮映画の使用料不払いをめぐる著作権法、及びベルヌ条約(著作物保護条約)の解釈事件(知財高裁平成20年12月24日第4部判決)の紹介と解説(判例評釈)。総頁数 356 頁中 321～323 頁。
6	「R. L. Stevenson によるエディンバラ都市伝説」	単著	2009.04.30	『広島日英協会会報』第82号(広島日英協会)	R. L. スティーヴンソンの伝える故郷エディンバラの多くの都市伝説の背後に秘む社会心理的要因の分析を試みたエッセイ。総頁数 20 頁中、2-7 頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1978.05.00	～	現在	American Society of International Law 会員
2	1978.05.00	～	現在	国際法学会会員
3	1978.05.00	～	現在	日本国際政治学会会員。評議員(2000～2002年度)
4	1989.01.00	～	2004.12.00	British International Studies Association 会員
5	1990.05.00	～	現在	オーストラリア学会会員
6	1996.03.00	～	現在	東京大学国際法研究会会員
7	1997.05.00	～	現在	国際人権法学会会員
8	1998.01.00	～	現在	International Law Association (British Branch)会員
9	1999.05.00	～	現在	International Law Association (Japanese Branch)会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	内田 知行	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『黄土の大地 1937～1945 山西省占領地の社会経済史』	単著	2005.02.00	創土社	日中戦争時代の山西省日本占領地域の問題を傀儡政権の財政、アヘン問題、重工業、交通という角度から分析した。総頁数 310 頁		
2 『日本の蒙疆占領 1937～1945』	共著	2007.02.00	研文出版	内田知行・柴田善雅編。共著者は、柴田善雅・広川佐保・小林元裕・祁建民の 4 人。内田は、蒙疆政権下のアヘン政策、交通建設などについて分析した。総頁数 412 頁		
3 平野健一郎編『日中戦争期の中国における社会・文化変容』	共著	2007.03.00	財団法人・東洋文庫	内田は「内モンゴルの抗日政権とアヘン政策」を執筆した。総頁数 285 頁中 171～205 頁。		
4 三谷孝編『戦争と民衆：戦争体験を問い直す』	共著	2008.03.00	旬報社	内田は「中国における戦時性暴力をめぐる記憶と記録」を執筆した。		
論文						
1 「抗日中国における中仏文化交流」	単著	2005.04.00	『ユニテ』第 32 号、財団法人ロマン・ロラン研究所	日中戦争時代の中国の知識人がフランスの文豪ロマン・ロランをどのように評価したか、を分析した。総頁数 96 頁中 44～81 頁。		
2 「重慶国民政府与日本人士的反戦運動」 (中国語)	単著	2008.08.00	重慶師範大学編『重慶師範大学学報(哲学社会科学版)』2008 年第 4 期	重慶国民政府統治地域における日本人反戦運動の展開について分析した。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

1	1976.10.31	～	現在	日本現代中国学会会員
2	1977.10.31	～	現在	アジア政経学会会員
3	1988.04.01	～	現在	社団法人中国研究所所員
4	1989.03.01	～	現在	鉄道史学会会員
5	1998.06.30	～	現在	日本植民地研究会会員
6	1999.10.01	～	現在	交通史研究会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	Edward Mergel Jr.	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) In Communication English (コミュニケーション英語) class, the students produced and performed a drama in English, making their own original script.			
2)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) In Communication English (コミュニケーション英語) class, the students made an original magazine or newspaper in English.			
3)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) In English for International Issues semester class, the students made an original magazine or newspaper on an international issue or issues in English.			
4)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) In Reading and Discussion: Asian Issues (英語で読むアジア) semester class, the students made an original magazine or newspaper on an Asian issue or issues in English.			
5)		2004.04.01	(2004.04.01~2008.03.31) In 演習 II (Third-Year Seminar) class, an 8-page packet of English classroom materials Job Search Skills: Long-Term Planning, Self-Evaluation, Self-Expression was developed for and incorporated into an intensive 7-8 week Job Search study program.			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1)	Introduction to Asia in English, 英語で学ぶアジア入門	2008.03.31	Introduction to Asia in English, 英語で学ぶアジア入門, 大東文化大学国際関係学部発行, textbook for classroom use, written and edited by Garren Mulloy, Edward Mergel, Jr., 小林啓志, 瀧口明子, authored Chapter 2 (p. 32-57), A4 size, 110 pages total.			
2)	Introduction to Asia in English, 2nd Edition, 英語で学ぶアジア入門 (第2版)	2009.03.31	Introduction to Asia in English, 2nd Edition, 英語で学ぶアジア入門 (第2版), 大東文化大学国際関係学部発行, textbook for classroom use, written and edited by Garren Mulloy, Edward Mergel, Jr., 小林啓志, 瀧口明子, expanded and revised Chapter 2 (p. 44-80), A4 size, 144 pages total.			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) Advisor to International Center and Student Operating Committee on Daito Bunka University English Speech Contest, writing and editing speech contest materials, etc.			
2)		2003.04.01	(2003.04.01~2008.03.31) Acted as head judge and/or judge for preliminary and/or final Daito Bunka University English Speech Contest(s), helped to create speech evaluation criteria for judges.			
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						

論文				
その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1986.04.00	～	現在	日本大学英語教師協会会員
2	2008.10.01	～	現在	全国語学教育学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	篠田 隆	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 学生による授業評価、教員同士の相互評価の結果				国際関係学部で独自に実施している「学生による授業評価」や大学の実施する「学生による授業評価」を毎年受け、授業改善のための資料として活用するとともに、授業評価結果についてのコメントを公開している。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 「インド社会とカースト制」		2009.01.00		富士見市民大学での講演 (鶴瀬公民館)		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 巨大市場インドのすべて	共著	2005.07.28	ダイヤモンド社	「州をゆく：理想主義と実利主義の微妙なバランス グジャラート州」(286 ページ中 206～211 ページ) 近年におけるグジャラート州の発展の光と影の部分論じた。(島田卓編)		
2 Marginalization in the Midst of Modernization: A Study of Sweepers in Western India	単著	2005.08.00	Manohar	インド社会の最底辺に位置づけられてきた清掃人カーストの事例研究をとおしてカースト体制の動向把握を試みた研究成果。拙著『インドの清掃人カースト研究』の英訳改訂版。B5 版。280 ページ。		
3 世界の SSD100：都市持続再生のツボ	共著	2008.01.10	彰国社	「スラム改善は都市全体を活性化する：スラム・ネットワーク計画、アムダーヴァード、インド」(504 ページ中 288～291 ページ) インド、アムダーヴァード市のユニークなスラムネットワーク計画の概要と展望を示した。(東京大学 cSUR-SSD 研究会編)		
4 講座 世界の先住民 族—ファースト・ピーブルズの現在—03 南アジア	共著	2008.03.30	明石書店	「ドゥーブラー：開発に取り残される平原部の部族民」(345 ページ中 126～142 ページ) 農場付労働者として南グジャラートの農業発展に貢献したドゥーブラーが開発に取り残される有様を分析した。(金基淑編) 金基淑、井上恭子、三尾稔、岡橋秀典、篠田隆、杉本良男、高田峰夫、鈴木正崇、村山和之、子島進、丸山純、南真木人、橋健一、和智綏子の 14 名が執筆。		
論文						

1	Livestock Ownership Patterns among the Scheduled Tribes in Rural India: A Study based on National Sample Survey Data	単著	2004.10.00	日本南アジア学会『南アジア研究』第16号	インドの部族民集住地域における家畜所有の動向を地域間および部族民と非部族民間の格差に注目して分析した。(111~143 ページ) (レフェリー制有)
2	「インド農村部における指定部族の家畜所有動向：全国標本調査の分析」	単著	2005.03.00	『大東文化大学紀要(社会科学)』第43号	インド農村部における指定部族の家畜所有に機械化やミルク化がどの程度の影響を与えているのかを検討した。(201~221 ページ)
3	「インド・グジャラート農村の農業経営と労働組織：年雇の形態変化を中心として」	単著	2006.03.00	『大東文化大学紀要(社会科学)』第44号	グジャラートの調査村を事例として、機械化が労働組織に与えた影響を分析した。(171~186 ページ)
4	「インド・グジャラート農村における雄牛の所有と流通：調査村の事例を中心として」	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要(社会科学)』第45号	グジャラートの調査村を事例として、雄牛の所有と流通が過去20年間にどのように変容したのかを分析した。(47~73 ページ)
5	「インド・グジャラート農村におけるトラクターの普及と人畜労働の再編：調査村の事例を中心として」	単著	2008.03.00	『大東文化大学紀要(社会科学)』第46号	グジャラートの調査村を事例として、トラクターの普及が人間と家畜の労働をどのように再編したのかを分析した。(143~168 ページ)
6	「インド・グジャラート農村におけるトラクターの所有と経営：2002年トラクター調査結果の分析」	単著	2009.03.00	「大東文化大学紀要(社会科学)」第47号	グジャラートの調査村で2002年に実施したトラクター調査結果に基づき、トラクター所有農家の農業所得が、土地所有や土地経営の規模や作物構成、および農業収入・支出とどのように関連しているのかを分析した。(149~176 ページ)
7	「インドにおける畜産の展開と飼料基盤」	単著	2009.03.00	飼料輸出入協議会「Feed Trade」Vol.45, No.2	インドの独立後における畜産が、政府の畜産政策や「緑の革命」「白い革命」「農業機械化」とどのように関わり展開してきたのか、またこの過程で飼料基盤はどのように変動したのかを分析し、今後の畜産と飼料基盤に関わる展望も示した。(39~58 ページ)
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.00	～	現在	日本南アジア学会会員
2	2003.02.00	～	2005.03.00	国際協力機構「インド国ガンジス河汚染対策流域管理計画調査」国内支援委員長
3	2007.04.00	～	現在	人文地理学会会員
4	2007.04.00	～	現在	日本農業史学会会員
5	2007.04.00	～	現在	歴史地理学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	柴田 善雅	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 南洋日系栽培会社の時代	単著	2005.02.23	日本経済評論社	日露戦前から日本敗戦までの東南アジアにおける日系ゴム・マニラ麻栽培の通史を描いた。総頁数 615 頁。研究には平成 14 年度大東文化大学特別研究費の交付を受けた。また刊行に平成 17 年度日本学術振興科学研究費 (研究成果公開促進費の交付を受けた。		
2 日本の蒙疆占領 1937-1945	編著	2007.02.15	研文出版	内田知行・柴田善雅編。共著者：広川佐保、小林元裕、祁建民。柴田は序章「蒙疆占領地研究の課題」(内田と共同執筆)、第 1 章「民国国内モンゴル占領前史」(内田と分担執筆)、第 2 章「日本の蒙疆政治支配体制」、第 4 章「蒙疆の財政と域際収支」、第 8 章「蒙疆に置ける企業活動」、終章「蒙疆支配の解体以降と本書の結語」(内田と共同執筆)を執筆した。総頁 377 頁中、3-68 頁、102-132 頁、235-274 頁、345-360 頁。本書の研究には財団法人日中友好開館日中平和友好交流計画歴史研究支援事業より 2002・2003 年度の研究助成を、2004 年度の出版助成を受けた。		
3 満州企業史研究	共著	2007.02.28	日本経済評論社	鈴木邦夫編。共著者：小林英夫、疋田康行、花井俊介、須永徳武、吉川容、老川慶喜。柴田は第 1 部第 1 章「経済政策と会社法制」(小林英夫と分担執筆)、第 4 章「東洋拓殖系企業」、第 5 章「満州国政府系企業」、第 6 章「満州重工業開発系企業」、第 2 部第 1 章「交通」(鈴木・吉川と分担執筆)、第 3 章「金融」、第 4 章「取引所と関連業種」、第 7 章「食料品工業」、第 8 章「鉱業」、第 14 章「農業・林業」、終章「戦後処理と結語」(鈴木と分担執筆)を執筆した。総頁 1112 頁中、13-61 頁、107-183 頁、305-376 頁、437-508 頁、583-674 頁、895-942 頁、1037-1074 頁を執筆。本書の研究には 1997~99 年度文部省科学研究費を交付を、また本書の刊行には 2006 年度日本学術振興会科学研究費の交付を受けた。		

4	中国占領地日系企業の活動	単著	2008.02.29	日本経済評論社	総頁 613 頁。本書の研究には平成 17 年度大東文化大学特別研究費の交付を受け、出版には平成 19 年度大東文化大学特別研究費の交付を受けた。
5	戦後アジアにおける日本人団体一引揚げから企業進出まで	編著	2008.03.31	ゆまに書房	小林英夫・柴田善雅ほか編。共著者：小林英夫、マーク・カプリオ、木村健二ほか。柴田は第 3 章「東南アジア・オセアニアの引揚げ」と第 4 章「引揚者経済団体の活動と在外財産補償要求」を執筆した。総頁 486 頁中、101-129、130-172 頁。
論文					
1	陸軍軍命商社の活動－昭通商株式会社覚書	単著	2004.05.25	『中国研究月報』第 675 号	総頁数中 1-19 頁を執筆。(レフリー制あり)
2	南方開発金庫の晩期事業と敗戦後処理	単著	2004.12.25	『東洋研究』第 154 号	総頁数中 59-89 頁を執筆
3	華中占領地日系企業の活動	単著	2005.03.31	『大東文化大学紀要』(社会科学・自然科学) 第 43 号	総頁数中 223-250 頁を執筆
4	中国関内占領地日系企業の敗戦後処理	単著	2005.12.25	『東洋研究』第 158 号	総頁中 127-154 頁を執筆
5	海南島占領地における日系企業の活動	単著	2006.03.31	『大東文化大学紀要』第 44 号(社会科学)	総頁中 133-170 頁を執筆
6	アジア太平洋戦争期四聯総処の融資割当	単著	2006.09.30	『現代中国』第 80 号	総頁 247 頁中、147-157 頁。(レフリー制あり)
7	アジア太平洋戦争期中国関内占領地における敵産管理処分	単著	2006.12.25	『東洋研究』第 162 号	総頁 125 頁中、83-109 頁。
8	晩期戦時日本帝国の対日決済	単著	2007.03.31	『大東文化大学紀要』第 45 号(社会科学)	総頁 317 頁中、75-91 頁。
9	戦時日本の株式市場統制	単著	2007.12.25	『東洋研究』第 166 号	総頁 155 頁中、27-59 頁。
10	日中戦争期日本の資金割当－「臨時資金調整法」と「銀行等資金運用令」の施行	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要』第 46 号(社会科学)	総頁 320 頁中、123-141 頁。
その他					
1	満州における会社法制	単著	2005.07.03	日本植民地研究会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1976.04.00	～	現在	社会経済史学会会員	
2	1977.04.00	～	現在	政治経済学・経済史学会会員	
3	1977.04.00	～	現在	歴史学研究会会員	
4	1979.04.00	～	現在	日本経営史学会会員	
5	1985.04.00	～	現在	日本財政学会会員	
6	1994.06.05	～	現在	日本植民地研究会会員	
7	1999.12.00	～	現在	近現代東北アジア地域史研究会会員	
8	2002.05.00	～	現在	東南アジア学会会員	
9	2002.11.00	～	現在	同時代史学会会員	

10	2003.01.00	～	現在	日本現代中国学会会員
11	2006.09.00	～	現在	史学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	教授	氏名	新納 豊	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1978.04.00	～	現在	朝鮮史研究会会員		
2	1992.11.00	～	2007.03.31	特定非営利活動法人文化センター・アリラン副館長		
3	2000.03.00	～	2007.03.31	特定非営利活動法人文化センター・アリラン理事・副館長		
4	2007.07.00	～	現在	歴史地理学会会員		

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科		職名	教授	氏名	松井 弘明	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 「国際関係論 AB」電子シラバスの活用と質疑応答の工夫			1994.04.01	1994.4.1～現在 本学就任以来担当している一年次必修の基幹科目である。授業一回毎のテキストを電子シラバスにアップロードし、学生はそれを予めダウンロードして予習し、授業に臨むように指導している。同時に電子メールを利用して質問等も受けつける態勢をとっている。また大教室での授業であるがあるべく一方通行の講義で終わらないよう、毎回授業の最後に質問用紙を配布し、質問又は意見を書いて提出させている。回答が必要な質問等に対しては翌週の授業時に回答している。				
2) 国際関係論 AB			2007.12.00	授業への満足度平均は 3.3 であった。				
3) チュートリアル			2007.12.00	授業への満足度平均は 4.4 であった。				
4) 国際関係論 AB			2008.03.31	本学就任以来担当している一年次必修の基幹科目である。大教室での授業であるがあるべく一方通行にならないよう、質疑応答にも一定の時間を割くよう努めている。具体的には質問用紙に意見・質問等を書いて提出してもらい、翌週の授業時間に回答している。				
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
1 東アジアのロシア	共著	2004.05.10	慶應義塾大学出版会	ロシアと東アジアとの関係という視点から、歴史的な特徴及び冷戦後のロシアと各国との関係、さらに対外政策を規定し、対外政策から影響を受ける内政について分析。共同執筆者：横手慎二、松井弘明、岩下明裕、中野潤三、角田安正、小澤治子、下斗米伸夫、ドミトリー・V・ストレリツォフ、ワレリー・O・キスタノフ、杉本侃、井出康仁、セルゲイ・E・タルノフスキー。総頁数 283 頁中 35-66 頁「ロシアの対米・対NATO関係」担当。				
2 9.11 以後のアメリカと世界	共著	2004.07.15	南窓社	2001年9月11日のアメリカにおける同時多発テロ以後国際関係において生じた変化を争点領域と地域の特徴に分けて考察。共同執筆者：五味俊樹、村井友秀、宮坂直史、納家政嗣、岡垣知子、古城佳子、土屋大洋、滝田賢治、乗浩子、坪内淳、松井弘明、三船恵美、阪田恭代、高杉忠明、金子芳樹、坂口智、立山良司、青木一能。総頁数 271 頁中 146-156 頁、第4章「9.11 以後のアメリカとロシア」担当。				

論文				
その他				
1 中央アジアの政治力学	単著	2005.02.10	公明党機関紙委員会『公明新聞』	ソ連が崩壊した後独立した中央アジア諸国をめぐるロシア・アメリカの最近の動向とそれに対する中央ア諸国の対応を分析。総頁8頁中4頁。
III 学会等および社会における主な活動				
1 1968.04.00	～	現在	日本国際政治学会会員（1995.04～1998.03「ロシア・東欧分科会」責任者）	
2 1972.09.00	～	現在	ロシア・東欧学会会員（1989.04～1995.03 幹事、1995.04～現在 理事）	

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	遠藤 元	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) チュートリアル		2008.03.31	大東文化大学国際関係学部・1年生向け少人数授業「チュートリアル」の教科書。大学での勉強の方法をワークブック形式で解説したもの。共著者名：岡本信広、高野太輔、須田敏彦、廣江倫子。総頁数 72 頁。			
2) チュートリアル (改定版)		2009.03.31	大東文化大学国際関係学部・1年生向け少人数授業「チュートリアル」の教科書。2008年3月31日に発行したものに加筆修正をほどこした改訂版。共著者名：岡本信広、高野太輔、須田敏彦、廣江倫子。総頁数 89 頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 中国・ASEAN経済関係の新展開－相互投資とFTAの時代へ	共	2006.01.13	アジア経済研究所	近年急速に深化しつつある中国・ASEAN間経済関係をおもに直接投資と貿易の観点から分析した。執筆者は中国か東南アジア諸国を調査対象とする地域研究者である。共著者名：大西康雄、石田正美、奥田聡、東茂樹、黄磷、松井和久、丸川知雄、福島光丘。総頁数 361 頁。遠藤は第7章「タイの家電市場と中国製品流入の影響」(215～252 頁)を執筆した。		
2 アジア環境白書 2006 /07	共	2006.10.01	東洋経済新報社	アジア全体および各国の環境問題について、詳細なデータに基づき解説・分析。共著者名：小島道一、井上真、大島堅一、除本理史、山下英俊、他。遠藤は第5章「タイー遺伝子組み換え作物をめぐる政治」を執筆。		
論文						
1 外国経営史の基礎知識	単	2005.02.28	有斐閣	欧米からアジアまでの経営史を対象に、160 超の基本的テーマに分けて見開き 1 頁で解説したもの。経営史学会編。遠藤は第6部8「タイの地方財閥－タントラーパン・グループ」(352～353 頁)を執筆。		
2 AFTA後のタイ家電産業	単	2005.03.01	地理 (古今書院) 第 595 号	東南アジアで自由貿易協定が進展するのにもない、タイの家電産業がどのように変容しつつあるかを、日系家電メーカーの立地再編と中国メーカーの台頭に注目しながら分析した。32～38 頁。		

3	経済危機後のタイにおける流通政策	単	2005.03.31	大東文化大学紀要第 43 号 (レフェリー制なし)	タクシン政権を中心に、タイ政府の国内流通政策とその背景・展開について、流通外資進出に伴うタイ流通業の構造変化という文脈のなかに位置づけながら、整理・分析した。151～175 頁。
4	流通外資の進出とタイ流通業の構造変化—比較研究に向けての展望	単	2005.08.30	中央大学企業研究所企業研究第 7 号 (レフェリー制なし)	「小売国際化論」によるアジア流通研究を批判的に検討し、製造業・卸売業・小売業の取引関係に注目した、地域研究に基づく流通研究の必要性を主張した。そのうえで、国ごとに異なる流通機構を比較研究するための枠組みを、タイの事例に即しながら提示した。総頁数 259 頁中 49～73 頁。
5	タイ政府の大規模小売業規制とその背景	単	2006.11.15	バンコク日本人商工会議所所報 第 535 号 (レフェリー制なし)	2006 年半ばに再燃した、地場の小規模小売業者による外資系大規模小売業出店反対運動と、それに呼応したタイ政府の規制政策の内容と背景を整理・分析した。その結果、問題は地場系小規模店と外資系大規模店の「水平的」対立に止まらず、急速に交渉力を高めた外資系大規模店に対する地場系消費財納入業者 (メーカーと卸売業者) からの牽制という「垂直的」対立にも起因することが明らかになった。25～35 頁。
6	タイにおける日用品・加工食品販売チャネルの再編	単	2008.03.31	大東文化大学紀要第 46 号 (レフェリー制なし)	流通新業態の台頭にともない、タイの日用品・加工食品チャネルがどのように変化しつつあるかを、タイ国内消費市場の構造的特徴に留意しながら、消費財メーカーのチャネル戦略を中心に分析した。45～68 頁。
7	東南アジアを知る事典 (新訂増補版)	単	2008.06.01		東南アジアの政治・経済・社会・文化・芸術・歴史に関して各分野の専門家が当該分野の項目を執筆。遠藤は「商業」の項目を執筆した。
その他					
1	JSPS-NRCT Core University Program Workshop 2005 on 'Toward a New Model of East Asia Society: Entrepreneurship and the Family,' 14-15 October, 2005, Kyoto University, Kyoto.	単	2005.10.14		京都大学東南アジア研究所を拠点とする 4 年研究プロジェクトの初年度のワークショップ。主な報告書: Gary Hamilton, Pasuk Pongpaichit, Shiraiishi Takashi, 他。遠藤は次の報告を行った。"The Entrepreneurship of Provincial Business in Thailand."
2	書評「小池和男・洞口治夫編『経営学のフィールド・リサーチ—「現場の達人」の実践的調査手法』日本経済新聞社」	単	2006.10.31	『アジア研究』第 52 巻第 4 号	
3	Final Symposium of the JSPS-NRCT Core University Program on "The Making of East Asia: from both macro and micro perspectives," 23-24 February, 2009, Kyoto University, Kyoto.	単	2009.02.24		京都大学東南アジア研究所を拠点とする 4 年研究プロジェクトの最終年度のワークショップ。主な報告者: Chris Baker, Pasuk Pongpaichit, Takeshi Hamashita, 他。遠藤は次の報告を行った。"Provincial Wholesalers as Nodes of Distribution Networks in Thailand."
4	書評「Pasuk Phongpaichit and Chris Baker eds. Thai Capital after the 1997 Crisis, Silkworm Books, Chiangmai」	単	2009.04.30	『アジア研究』第 55 巻第 2 号	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1990.04.00 ~ 現在			経済地理学会会員 (2002～2003 年度 幹事)	

2	1991.01.00	～	現在	日本地理学会会員（2000～2003年度 集会委員）
3	1995.04.00	～	現在	人文地理学会会員
4	1996.05.00	～	現在	アジア政経学会会員（2005～2010年度 編集委員）
5	1996.05.00	～	現在	経営史学会会員（2001～2004年度 幹事）（2005～2008年度 編集委員）（2007～2010年度 国際交流委員）
6	1998.12.00	～	現在	日本タイ学会会員（2008～2009年度 事務局）
7	2003.05.00	～	2005.03.00	日本貿易振興会アジア経済研究所研究会委員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	岡本 信広	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 授業運営のHP上の公開と予習・復習の促進		2006.10.00	個人のブログで授業内容を公開、使用教材も提示して、欠席した場合でも自習および復習できるようにしている。 (http://okmtnbhr.seesaa.net/) (2006年10月～現在)				
2) 大東文化大学授業評価		2006.12.00	大東文化大学授業評価 (平成18年12月実施) において、高い評価を得た。全体の満足度 4.4(5段階評価)				
3) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価 (平成19年12月実施) において、高い評価を得た。全体の満足度 4.7(5段階評価)				
4) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成20年12月実施) において、高い評価を得た。全体の満足度 4.5(5段階評価)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 遠藤元・岡本信広・高野太輔・須田敏彦・廣江倫子 (2008) 『チュートリアル』「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ No.6 (ISBN978-4-9903587-5-4 C3000) 導入教育用教材。		2008.03.00	導入教育用教材。岡本は、第3、4、13、14章を担当。作文やレポートなど書き方について解説した。*研究業績の再掲				
2) 『チュートリアル(改訂版)』「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ No.6-1		2009.03.00	導入教育用教材。岡本は、第3、4、13、14章を担当。作文やレポートなど書き方について解説した。なお、2008年に発行した教科書の改訂版である。(研究業績の再掲)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「教員と学生が双方向に刺激する授業のスタイルとは？」『大東文化大学紀要<社会科学>』第47号、大東文化大学 pp.107-120		2009.03.00	教育実践の報告として、授業で行っている小レポート方式と小テスト方式の双方向授業スタイルの効果をまとめた。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 岡本信広・猪俣哲史編 『国際産業連関—アジア諸国の産業連関構造—(IV)』アジア国際産業連関シリーズ No.65	共編著	2005.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	岡本は第一章「Estimation Technique of International Input-Output Model by Non-survey Method」(佐野敬夫と共著:計算以外岡本が担当した)を執筆し、非調査法による国際産業連関モデルの構築を行い、精度を検証した。(pp.1-19所収)			
2 Nobuhiro Okamoto and Takeo Ihara, eds, 'Spatial Structure and Regional Development in China'	共編著	2005.11.00	Palgrave Macmillan	中国の地域格差問題を、空間的な側面(地域間の相互依存、中心地から周辺地への発展の波及など)を中心に地域間産業連関表を用いて分析する。全248ページ。2004年にアジア研より出版した同名書籍の改訂版。(ISBN1-4039-4348-6)			

3	Institute of Developing Economies, "Asian International Input-Output Table 2000, Volume 1, Explanatory Notes"	共著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	Preliminary Notes (猪俣と共著：下書き担当)にて、産業連関表の利用の高まりは空間経済学の発展によるものと指摘し、アジア国際産業連関表の歴史をあきらかにした。(pp.9-12) 全 292 頁 (統計資料シリーズ No.89) (ISBN4-258-12089-8 C3033)
4	Institute of Developing Economies, "Asian International Input-Output Table 2000, Volume 2. Data"	共著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	1975、1985、1990、1995 年に続く、アジア 8 地域と日米を含んだ国際産業連関表。全 344 頁。岡本は中国、フィリピン、マレーシア部分のデータ推計を行った。(統計資料シリーズ No.90) (ISBN4-258-12090-1 C3033)
5	張亜雄・趙坤『区域間投入産出分析』	共著	2006.03.00	社会科学文献出版社(中国)	第四章「区域和区域間投入産出乗数的非調査研制方法」(張亜雄・趙坤と共著：計算以外を担当)を執筆し、Non-survey 法によって省レベル及び地域間の産業連関モデルがどの程度の精度を持つか検証した。(pp.119-141) (ISBN7-80230-024-X/F.352)
6	岡本信広・猪俣哲史編『国際産業連関—アジア諸国の産業連関構造—(V)』アジア国際産業連関シリーズ No.66	共編著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	第一章「アジア諸国の産業連関構造：成長と融合—2000 年アジア国際産業連関表を利用して—」(岡本信広・猪俣哲史・桑森啓・佐藤創・孟渤・中村純と共著：全体のとりまとめを担当)にて 2000 年アジア国際産業連関表を用いて、構造分析を行った。結果アジアにおける中国経済のプレゼンスの高まりが指摘された。(pp.1-38)
7	日中経済・ビジネス連携研究タスクフォース編『日中間の経済・ビジネス連携の在り方』	共著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	第 2 章「東アジアにおける日中 E P A のマクロ経済結果分析」(梅崎、小池、川本、玉村と共著：岡本は全体の書き下ろしとモデル設計を担当)を執筆し、空間 C G E モデルにて日中間で F T A が締結された場合の効果を測定した。モデルには非関税障壁を取り込む工夫がなされた。(P27~54)
8	『中国西南地域の開発戦略』アジア研選書 No.10 (ISBN978-4-258-29010-9)	編著	2007.02.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	第 1 章「内陸開発と西南地域」(pp.3-22)にて、内陸開発の課題と西南地域の特徴を明らかにする。終章「西南地域の発展可能性」(pp.209-224)にて、新古典派の成長モデルを利用しながら今後西南地域はキャッチアップできるかどうかを検討した。
9	東アジアにおける日中 F T A のマクロ経済効果分析	共著	2007.02.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	玉村千治編『東アジア F T A と日中貿易』アジア研選書 4 (梅崎創・小池淳司・川本信秀・玉村千治と共著) pp.213-256 (ISBN978-4-258-29004-8) 東アジアの F T A が進むことによって日中経済はどうなるか、C G E モデルにて分析。どちらも中国の利点が多いことが明かされた。
10	Transnational Interregional Input-Output Table between China and Japan 2000, AIO Series No. 68	共著	2007.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	中国と日本を地域に分割した国際産業連関表。岡本は全体の推計方法を提出。
11	『中国経済の勃興とアジアの産業再編』研究双書 No.563 (ISBN978-4-258-04563-1) 桑森啓・猪俣哲史との共編著。	共編著	2007.11.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	総論「中国の経済発展とアジア経済」(猪俣・桑森と共著)にて、中国経済の急成長の背景と想像されるアジアの産業再編を展望する。(pp.3-21) 最終章「中国とアジア諸国の産業ネットワーク」にて、中国産業が確実にアジアに組み込まれる様子をあきらかにした。(pp.227-273)

12	Nobuhiro Okamoto et.al.(2008) 'Compilation of transnational interregional Input-Output Table between China and Japan 2000', as Chapter 1 in 家田仁編『アジア経済統合化時代における貿易・交通総合予測システム構築と国際交通基盤政策評価』課題番号17310092、平成17～19年度 科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書 平成20年3月	共著	2008.03.00	科学研究費補助金研究成果	日中における国家と地域をリンクした産業連関モデルの推計手法を公開した。
13	Hioki, Shiro and Nobuhiro Okamoto (2009) 'How Have China's Intra- and Inter-regional Input-Output Linkages Changed during Reform?', Resurgent China: Issues for the Future, edited by Nazrul Islam, Hampshire: Palgrave Macmillan	共著	2009.01.00	Palgrave Macmillan	中国の地域内・地域間のリンケージを計測。結果、中国での市場統合は必ずしも進んでいるとはいえないことが示唆される。
論文					
1	中国の地域間産業連関表の推計とその応用—市村真一・王慧炯『中国経済の地域間産業連関分析』によせて—	単著	2005.01.00	『アジア経済』第46巻、第1号	2003年に発行された市村・王の著書に対する書評論文。地域間産業連関分析を行った経験から、データの作成及びその分析について市村・王との立場の違いを明らかにするとともに、最終的に1987年と2000年の時系列分析を付け加える。(pp.72-87) (ISSN0002-2942)
2	Shiro Hioki, G.J.D.Hewings and Nobuhiro Okamoto, 'Identifying the Structural Changes of China's Spatial Production Linkages Using a Qualitative Input-Output Analysis'	共著	2005.04.00	Regional Economics Applications Laboratory, University of Illinois at Urbana Champaign	質的産業連関の手法を用いて、1987年から1997年の空間的生産ネットワークを解明する。地域間のネットワークがやや減少したことが示される。(岡本はデータの解説を担当) Discussion Paper REAL 05-T-5
3	Nobuhiro Okamoto, Takao Sano and Satoshi Inomata, 'Estimation Technique of International Input-Output Model by Non-survey Method'	共著	2005.05.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	非調査法による国際産業連関モデルの構築を行い、精度を検証した。(佐野敬夫、猪俣哲史と共著: 計算以外岡本が担当した) IDE Discussion Paper Series No.28
4	Nobuhiro Okamoto, Yaxiong Zhang, Shiro Hioki, Takaaki Knazawa and Kun Zhao, 'A Method for Constructing an Interregional Input-Output Model of China for 2000.'	共著	2005.10.00	The Journal of Econometric Study of Northeast Asia, Vol.5, No.2,	2000年中国地域間産業連関表の作成の手法を詳細に論じるとともに問題点も将来的な課題として指摘した。(共著で、岡本は全体の下書きを担当) (pp.23-36) (ISSN1880-6988)

5	Bo Meng, Hajime Sato, Jun Nakamura, Nobuhiro Okamoto, Hiroshi Kuwamori and Satoshi Inomata, 'Interindustrial Structure in the Asia-Pacific Region: Growth and Integration, by Using 2000 AIO Table'	共著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	岡本信広・猪俣哲史編『国際産業連関—アジア諸国の産業連関構造—(V)』アジア国際産業連関シリーズ No.66 所収の第一章『アジア諸国の産業連関構造：成長と融合—2000年アジア国際産業連関表を利用して—』の英語版。IDE Discussion Paper Series No.50
6	Qualitative Input-Output Analysis between China and Asian countries', in Satoshi Inomata and Hiroshi Kuwamori eds, Emergence of Chinese Economy and Re-organization of Asian Industrial Structure, AIO Series No.69, (pp.309-328)	単著	2007.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	中国とアジアの産業リンケージを質的産業連関で分析し、中国がアジアの産業ネットワークに入ったことを示した。
7	Industrial Networks between China and the Countries of the Asia-Pacific Region', IDE Discussion Paper Series No.110, (桑森啓との共著)	共著	2007.06.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	中国とアジアの産業リンケージを仮説的抽出法、レオンチェフ逆行列、質的産業連関で明らかにする。
8	「中国の産業連関分析」Inomata, Satoshi and Hiroshi Kuwamori eds. Compilation of the International Input-Output Table for the BRICs-A Feasibility Study-, AIO Series No.71	単著	2008.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	中国の産業連関表の特徴を、歴史、表形式から明らかにし、市場経済化と絡めて論評する。
9	MENG, Bo, Nobuhiro OKAMOTO, Yoshiharu TSUKAMOTO and Chao QU (2009) Input-Output Based Economic Impact Evaluation System for Small City Development: A Case Study on Saemangeum's Flux City Design, IDE Discussion Paper Series No.184, February, 2009	共著	2009.02.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	韓国のセマングム地域の開発において、労働移動による地域間産業連関モデルの準動学化を行った。
その他					
1	玉村千治編『東アジア FTA 構想と日中間貿易投資』調査研究報告書	共著	2005.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	岡本は第五章「東アジアにおける産業集積と中間財の調達・販売ネットワーク」(玉村と共著：アイデア以外岡本が書き下ろし)を執筆し、中国と日本を中心にアジアでどのような産業間ネットワークができてきているか、国際産業連関表を用いてあきらかにした。(pp.95-116 所収)

2	Nobuhiro Okamoto and Takeo Ihara, 'Spatial Structure and Regional Development in China' Nobuhiro Okamoto, Takao Sano and Satoshi Inomata, 'Estimation Technique of International Input-Output Model by Non-survey Method'	共著	2005.07.27	The 15th International Input-Output Conference, Beijing, China, China P.R., June 27-July 1, 2005	同名タイトルの Palgrave Macmillan からの出版物及び上記 Discussion Paper の国際産業連関分析学会での発表。Session I.1.11
3	岡本信広編『中国内陸部の地域開発戦略－西南地域の事例』調査研究報告書	編著	2006.03.00	日本貿易振興機構アジア経済研究所	第一章「中国内陸地域の現状と課題－西南地域を事例に」で記述統計より、西南地域の現状と課題を明らかにし、(pp.1-12)、第十章「中国西南地域の開発戦略」にて西部大開発戦略及び東北振興政策を比較して西部大開発の定式化を試みる。(pp.221-231) 調査研究報告書(中間報告)
4	書評：巖善平著『中国の人口移動と民工－マクロ・マイクロデータに基づく計量分析－』	単著	2006.10.00	『アジア経済』第47巻第10号	書名に係わる書評。大量のデータによる中国の労働移動分析は、これにより成熟してきたことを指摘。
5	日中FTAの効果分析 (pp.18-21)	単著	2007.06.00	『アジア研ワールドトレンド』第141号 2007年6月号	玉村編での分析結果をわかりやすく解説。
6	岡本信広(2009)「書評：金湛著『中国の経済発展と格差－産業構造および地域特性に基づく研究－』」書名に関わる書評。	共著	2009.02.00	『アジア経済』第50巻第2号	産業構造から地域格差にアプローチしているが、結局格差の要因は常識的なものになることを指摘した。

III 学会等および社会における主な活動

1	2001.00.00	～	現在	International Input-Output Association 会員
2	2001.00.00	～	現在	応用地域学会会員
3	2002.00.00	～	現在	中国経済学会会員
4	2004.12.00	～	2004.12.00	国連アジア太平洋統計研究所講師
5	2005.05.00	～	2008.03.31	土木学会土木学会国際交通ネットワーク戦略研究小委員会 Working Group4 研究メンバー
6	2006.05.00	～	2007.03.31	日本貿易振興機構アジア経済研究所「中国経済の勃興とアジアの産業再編」研究会主査
7	2006.05.00	～	2007.03.31	日本貿易振興機構アジア経済研究所「中国内陸部の地域開発戦略－西南地域の事例」研究会主査
8	2007.05.00	～	2009.03.31	日本貿易振興機構アジア経済研究所「BRICs 国際産業連関表の可能性」研究会委員
9	2007.12.00	～	2008.03.31	国交省国土交通政策研究所「環日本海経済圏の発展可能性を考慮した港湾物流のあり方に係るグランドデザインに関する調査」アドバイザー
10	2008.05.01	～	2008.08.31	東京工業大学建築学科韓国セマングム開発設計における国際コンペに参加。
11	2008.05.26	～	2008.06.07	中国オーストラリア政府プロジェクト国際アドバイザー Project Output 1.11 Collection and Revision/Estimation of Raw Origin-Destination Tables and Transport Data 2000-2006 Component 2 Theme 2 Strengthening Policy Processes to Reduce Institutional Barriers to the Integration of Domestic Factor Markets

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科		職名	准教授	氏名	Garren Mulloy	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 'Introduction to Asia in English' Editor, Author of Chapter 1, Daito Bunka University			2009.03.31				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文 1 「ロイヤル・ネイヴィーとパックス・ブリタニカ」田所昌幸 (編集)		2006.04.10	有斐閣・東京	第3章「19世紀のRMA」pp.83～114。19世紀のロイヤル・ネイヴィーは、技術面では極度に保守的で、ヴィクトリア朝に特有の伝統墨守主義に囚われていたとする見方が有力である。ロイヤル・ネイヴィーは発明を軽蔑し革新に対して猜疑心を持ち続けた反動的な組織であり、新たな技術に投資した時も、それは外国からの挑戦に受動的に反応したにすぎなかったというのである。このような見方はおおむね正確だが、ロイヤル・ネイヴィーを制約していた厳しい財政的および作戦上の条件を無視しているし、ロイヤル・ネイヴィーが多くの賢明な投資をしたことも見逃している。海軍省はたしかに反動的だったが、この途方もない技術革新の時代を、限られた資源でかつてないほどの世界的な規模の海軍力の優越を維持したのも事実なのである。パックス・ブリタニカの黄昏は近づいていたが、19世紀のロイヤル・ネイヴィーは比較的安上がりにユニークでグローバルな兵力へと発展したのである。			

2	“25th Anniversary of the Falkland Islands Conflict: Imperial Legacy or Peacekeeping Prophecy?”	2007.00.00	『大東文化大学紀要<社会科学>』第 46 号 (平成 19 年度)	There have been a variety of opinions regarding the significance of the 1982 Falklands Conflict. These range from the effect of wars upon domestic politics, through to the reinforcement of international law. It has been used as an example of the ineffectiveness of the United Nations, how nations could and should act unilaterally for liberal goals, and how military capabilities require nurturing. Dismissed by some as a legacy of empire, the British military victory overshadowed deep deficiencies in British policymaking and administration that have not been effectively resolved 25 years later, and the failure to learn many of the lessons of the conflict has encouraged national leaders to overly rely upon military solutions to complex international problems. The Falklands Conflict, does, however, contain many lessons for the conduct of both diplomacy and military operations in the 21st century. It demonstrated the need for seamless coordination of political, diplomatic, and military doctrines and planning, the value of formal and informal alliances and relationships, and how extended expeditionary operations are difficult to extemporize and stretch military capabilities to breaking point. While the British were slow to learn the lessons of their own experience, it was the Falklands Conflict that encouraged many nations to think beyond the single scenario 'Cold War defence plan and establish expeditionary capabilities that would be most fully utilized not in conflict but in peace, as the core of full spectrum peacekeeping.'
3	“Japan's Defense Diplomacy and “Cold Peace” in Asia”	2007.11.00	Asia Journal of Global Studies, Vol.1, No.1, Asian Association for Global Studies(AAGS)	Despite the end of the Cold War, a “Cold Peace” seems to prevail in East Asia. Political divisions have been reinforced by China's increasing wealth and power, instability on the Korean peninsula, and disputes related to Japan's imperial legacy. Elsewhere, the end of the Cold War witnessed increased exchanges, as trade, communications, and diplomacy flourished. Defense diplomacy was one of the least expected, but most successful, means of cementing new relationships among former antagonists. This article examines aspects of defense diplomacy, highlighting potential avenues for development, primarily for Japan. These include exchanges, defense training, and a range of operational cooperation initiatives, particularly in peacekeeping, that have been largely avoided for fear of worsening already troubled relations. The Japan Self Defense Forces (JSDF) are examined as defense diplomacy actors in the light of potential changes to their status, and how they may contribute to resolving seemingly intractable disputes.
4	Adapting Militaries to Peacekeeping and Policing Roles: Effects of Peacekeeping on Militaries and the Stresses and Strains of Operations	2007.12.01	HUMSEC 2007 Working Paper Series, HUMSEC Project 2007	While peacekeeping is a familiar concept, with attendant problems of rules of engagement, civil cooperation, and political interface, there is less clear understanding of the problems faced by militaries in adapting themselves to peacekeeping and policing roles. Most studies of the military and peacekeeping have focused upon how effective is a PKO, or the institution conducting it: vital concerns but not taking into account the difficulties faced by militaries in adapting to the extraordinary stresses of peacekeeping and policing roles, while maintaining forces at peak war-fighting standards. Examples from Northern Ireland, the Balkans, South East Asia, the Middle East, and Africa are used. No single national or institutional model is proposed, rather the cream of global peacekeeping 'best practice' in operations, and in police and civil administration interface are examined, to ensure the most effective peacekeeping effort possible is achieved.

5	“New Assertions in East Asia: The Changing Face of Japanese Nationalism”	2007.12.00	International Conference Journal(CASA: Canadian Asian Studies Association)	The 1990s, largely viewed in Japan as the ‘lost decade’, witnessed a political and social transformation every bit as significant as the ‘drive for growth’ in the 1960s. Not keenly observed beyond East Asia, Japan gradually stepped out of its shell and began to act increasingly as many in the west would refer to as ‘a normal power’, but which chilled relations with China and Korea to frigid levels. Increasingly assertive bilaterally and through international institutions, this new Japanese nationalism extends much broader and deeper than the premiership of Koizumi or the Tokyo governorship of Ishihara. It represents a significant change in Japanese perceptions of identity and place within the communities of nations. Beyond the traditional war apologists, militarists, and right-wing sound-truck fanatics, the new nationalism is far more nuanced and encompasses a broad spectrum of opinions, political affiliations and social movements. It is both traditional nationalism, in asserting Japan’s rights to possess a military, engage in collective security, and promote symbols of patriotism, yet is softened by human rights concerns (of North Korean abductees), fears of globalization, and concerns that an undemocratic China is rapidly gaining strategic power. It does not indicate a return to the 1930s, yet that fear, as much as Japanese policy changes, has driven relations in East Asia to their lowest ebb in decades. Without an understanding of the political and social reasons for the emergence of Japan’s new nationalism there can be no great improvement in East Asian relations.
6	「ヨーロッパ型防衛改革」	現在	『国際安全保障』（日本国際安全保障学会）（JAIS）	
7	「人道主義と平和維持活動における Civil-Military Affairs」	現在	『国際安全保障』（日本国際安全保障学会）（JAIS）	
その他				
1	「International Sport-science and Engineering in Education Project: ISEEP」			2001年～2003年 日本の学校や大学生による使用を目的とする、スポーツ科学の分野における bilingual digital 学習手段製作のために、Cambridge, UKのNPOと協力。
2	19世紀 Royal Navy Project: 「技術革新と英海軍の適応」	2004.08.04	キロロ、ホテルピアノリゾート、北海道。 America-Britain-Japan(ABJ)Project: The Two Special Relationships in World Affairs(International Conference)	
3	“Ways of Winning Peace: Diverse Models of Peacekeeping for the 21st Century”	2004.12.20	International Conference: “Security Dimensions in Europe Today”, Global Security Research Center (G-Sec), Keio University, Mita, Tokyo	
4	“European Models of Peacekeeping: Lessons for Japan”	2005.07.30	7th Congress of the International Congress for Central and East European Studies (ICCEES), Humboldt University, Berlin, Germany	

5	19世紀 Royal Navy Project: 「Royal Navyと19世紀のRMA」	2005.08.03	キロロ、ホテルピアノリゾート、北海道。 America-Britain-Japan(ABJ)Project: The Two Special Relationships in World Affairs(International Conference)	
6	“Eastern European Military Reform and the Demands of Security”	2005.09.17	Research Forum on Eastern Europe, Global Security Research Center(G-Sec), Keio University, Mita, Tokyo	
7	「日英交流のいま」 (インタビュー: マーティン・ハワード, 聞き手: ギャレン・ムロイ)	2006.02.01	『外交フォーラム』(都市出版)2006年2月号No.211	pp.76~81
8	“Japan's Perspective on Asian Security: Japan a Chronic Underachiever?”	2006.02.10	South Asia Studies Centre, University of Rajasthan, Jaipur, India	
9	“Defense Diplomacy and“Cold Peace”in Asia”	2006.06.24	Asian Association for Global Studies (AAGS) Annual International Conference, Kwansei Gakuin University, Nishinomiya	
10	“New Assertions in East Asia: The Changing Face of Japanese Nationalism”	2006.11.11	CASA 2006 International Conference, Canadian Association of Asian Studies, Marriot Hotel/Concordia University, Montreal, Canada	
11	“Peacekeeping: the layers and the spectrum”	2007.05.10	Research Forum (Professor Jimbo ken), Keio University, Shonan Fujisawa Campus	
12	“The Utility of Peacekeeping Operations: The Case of Japan and the Japan Self-Defense Forces(JSDF).”	2007.09.22	Asian Association for Global Studies (AAGS) Annual Research Forum, Kwansei Gakuin University, Nishinomiya	
13	“Adapting Militaries to Peacekeeping and Policing Roles: Effects of Peacekeeping on Militaries and Stresses and Strains of Operations.”	2007.10.06	EU HUMSEC Human Security Conference, 2007, Bosniak Institute, Sarajevo, Bosnia Herzegovina.	
14	“Effective for Peace?: JSDF peacekeeping operations since 1992.”	2007.11.23	VSFJ(German Association for Social Science Research on Japan) Conference, Security and Insecurity: New Challenges for Japan in the Beginning of the 21st Century, Free University, Berlin, Germany.	

15	“New Assertions in East Asia: The Changing Face of Japanese Nationalism.”	2008.06.22	Asian Studies Conference, Japan, Rikkyo University, Ikebukuro, Tokyo.
16	“Memories of War: Monuments, Media, and History.”	2009.02.21	British Association of Japanese Studies(BAJS), Inaugural Japan Research Conference, Waseda University, Takadanobaba, Tokyo.

III 学会等および社会における主な活動

1	2001.00.00	～	現在	British Association for Japanese Studies (BAJS) 会員
2	2002.00.00	～	現在	日本国際安全保障学会 (Japan Association for International Security) 会員
3	2002.00.00	～	現在	平和安全保障研究所 (Research Institute for Peace and Security : RIPS) 会員
4	2006.00.00	～	現在	Canadian Asian Studies Association (CASA) 会員
5	2007.00.00	～	現在	German Association for Social Science Research on Japan (VSFJ) 会員
6	2008.00.00	～	現在	国際問題研究所 (Japan Institute for International Affairs : JIIA) 会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	小林 啓志	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) South-East Asia		2008.03.31	『Introduction to Asia in English』大東文化大学国際関係学部 エドワード・マーゲル Jr.、ギャレン・ムロイ、小林啓志、瀧口明子編、第3章			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 『流通システムの国際比較史』	共著	2004.10.10	文真堂	小沢勝之編、第2章 アメリカと日本におけるコカ・コーラボトリング会社成立の比較経営史		
論文 1 有機合成化学品製造業者協会の成立(1)ーアメリカ化学産業における業界団体活動ー	単著	2004.06.30	『産業と経済』奈良産業大学第19巻第2号			
その他 1 ハワード・コックス 著、山崎廣明・鈴木俊夫監修、たばこ総合研究センター訳『グローバル・シガレットー多国籍企業BATの経営史 1880～1945』	単著	2004.12.24	『経営史学』第39巻第3号 経営史学会			
2 経営史学会編、湯沢威編集代表『外国経営史の基礎知識』	共著	2005.02.28	有斐閣	「中小企業と業界団体」、「消費者運動と環境問題」担当。(ジェフリー・ジョーンズ他 130名)		
III 学会等および社会における主な活動						
1	1976.11.00	～	現在	経営史学会平成7年1月～平成10年12月幹事、平成11年1月～平成14年12月評議員、編集委員		

2	1988.08.00	～	現在	日本経営学会
3	1997.12.00	～	現在	日本ベンチャー学会
4	2001.00.00	～	現在	日本商業学会

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	須田 敏彦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 演習における野菜作りの実習		2009.04.00	演習 (経済発展、環境問題、貧困問題を主なテーマとしている) において、環境問題を学ぶための実習として、無農薬・無化学肥料による野菜作りを大学構内の空き地で行った。(2009年4月～7月)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 新入生の導入教育用テキスト。		2008.03.31	『チュートリアル』大東文化大学国際関係学部、遠藤元、岡本信広、高野太輔、須田敏彦、廣江倫子著				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「食料需給の構造と課題」	共著	2006.03.17	内川秀二編『躍動するインド経済—光と陰—』アジア経済研究所	経済発展著しいインドの食料需給構造の現状と将来展望を論じ、今後の課題を指摘した。31-76頁。			
2 『日本農業の基本理論』	単著	2006.07.15	農村統計協会	本書は、これまで主に『農林金融』誌に発表してきた日本農業に関する論文をまとめたものである。A5版、総頁208頁。			
3 『インド農村金融論』	単著	2006.08.10	日本評論社	本書は、博士論文をもとに、インドの農村金融の現状と課題を明らかにしたものである。A5版、総頁237頁。			
4 「依然として深刻な貧困問題」168-173頁。「本腰を入れた取り組みが期待される農業・農村開発」174-178頁。	共著	2007.10.10	広瀬崇子、近藤正規、井上恭子、南埜猛編著『現代インドを知るための60章』明石書店	インドの貧困の実態と課題、また農業・農村開発の必要性和課題について解説している。			
5 「民間金融機関による農業融資の可能性とその課題」	共著	2008.03.28	泉田洋一編著『農業・農村金融の新潮流』農林統計協会	103-124頁。途上国におけるマイクロファイナンスの成功とその理論的分析枠組みを活用しながら、現在日本の金融機関が農業融資に取り組み始めている実態を分析する。いかなる要因によって金融機関の農業融資への取り組みが可能になったのか、また、その取り組みを更に活発にするために必要な条件は何かを探る。			
6 「インド農業の構造と世界穀物市場への影響」	共著	2009.01.00	梶井功編集代表、後藤光蔵編集担当『日本農業年報55』農林統計協会	インド農業の生産と消費の構造について簡単に説明し、近年の食料需給構造の変化について、また穀物輸入増大の背景について説明。将来インドが世界の穀物市場に与える影響についても展望する。			
論文							

1	「途上国における信用農協の発展条件－インド・ケーララ州の教訓－」		2004.05.00	『農林金融』45(5)	16-37. ケーララ州で信用農協が発展した理由を主に現地調査から明らかにし、農村金融機関が発展する条件と、信用農協の発展が農村発展・貧困緩和にどのような効果を持つかを検討した。
その他					
1	「インドにおける穀物需給の展望と国際市場への影響」	単著	2008.05.00	『農業と経済』2008.5 臨時増刊号	103-108 頁。インドの穀物需給構造の概要と今後の展望を解説。また、将来インドが国際的な穀物市場に与える可能性がある影響について考察する。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	瀧口 明子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書		2009.04.00		項目 「紅茶／コーヒー」を担当。小項目の事典・エッセイ形式の本。独習もできるが、大学の「イギリス文化論／文化史演習」などといった授業用の教科書としても使えるように企画されている。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項		2007.12.00		既述の業績からこれに相当するものを再録。該当すると考えられるものは以下のとおり。静岡お茶講座 (複数回)、朝日カルチャーセンター講座 (複数回)、大東文化会館でのアジア理解講座 (2008 年秋)、和洋女子大学英文学会講演会、大東文化大学ポスター資料館と動物園での講演会 (2007 年 12 月および 2009 年 5 月など)			
1) 大学の公開講座や社会教育講座における講師		2008.10.25		コーディネーター、各回の司会・進行係 および 第 1 回 10 月 25 日 (土)「ヨーロッパの茶文化」の講師、を担当。 文部科学省の特色 GP に選ばれた国際関係学部「アジア理解教育」関連企画。各回の講師とタイトルは以下の通り。 10 月 25 日 (土)「ヨーロッパの茶文化」瀧口明子 (大東文化大学准教授) 11 月 1 日 (土)「中国の茶文化」高橋忠彦 (東京学芸大学教授) 11 月 8 日 (土)「日本の茶文化」田中仙堂 (大日本茶道学会副会長) 11 月 15 日 (土)「紅茶と砂糖の出会い」生田 滋 (大東文化大学名誉教授) 11 月 22 日 (土)「スリランカ紅茶の楽しみ方」磯淵 猛 (紅茶研究家・エッセイスト) 11 月 29 日 (土)「西アジアの茶文化」鈴木 均 (アジア経済研究所・副主任研究員) 現在の日本における代表的研究者による各地域の茶史、茶文化講座で、講義だけでなく実際に茶を味わってもらった時間も設けた。受講された社会人の皆さんは、年齢層、職業なども幅広く、大変好評で、大学の社会貢献として大きな意義のある連続講座だった。			
2) 社会人のためのアジア理解講座 「お茶を愉しむ～日本、アジア、そしてヨーロッパ」(連続全 6 回 10 月 25 日から 11 月 29 日 毎週土曜)							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『〈食〉で読むイギリス小説』	共	2004.05.00	ミネルヴァ書房	安達まみ、中川僚子編 [担当章「ティー・テーブルの快樂ー茶の英文学史事始」] 衣食住を鍵としてイギリス小説を読み直す 3 部作の 1 冊で 2004 年 5 月刊行予定。内容は専門的だが、大学の教科書としても、研究者および一般向けの読み物としても読めるように構成されている。担当章では、まずイギリスの食生活史と文学における茶の歴史を概観したあと、一例としてギヤスケル夫人の小説『克蘭フォード』(1853)の茶について論じ、最後に「お茶の時間」のとらえ方についていくつかの小説を比較しながら考察した。分担執筆 2・26 頁。			

2	『茶の文化史:英国初期文献集成』全5巻(復刻版)+別冊解説	共	2004.12.00	日本シノブス ISBN4-902454-03-3	17, 18世紀に英語で書かれた茶書を集成し復刻したもの。編集および解説を担当。茶の文化史の根本史料集として、今後の研究に道を開くものと期待される。イギリス研究だけでなく東西文化交流史や比較文化研究の資料としても貴重な文献集。全5巻約2030頁。別冊解説約50頁。
3	項目「紅茶／コーヒー」(約3000字)	共著	2009.04.00	木下卓・窪田憲子・久守和子編著『イギリス文化55のキーワード』(ミネルヴァ書房)2009年4月刊行	イギリス文化を学ぶ学生や一般読者のために、その諸側面を代表するテーマを約60項目取り上げ、それぞれのテーマに詳しい執筆者が寄稿するという企画。1項目見開き4頁。事典的な体裁を取りつつ、各項目はエッセイ風の味わいのあるものを目指した。イギリスにおける紅茶とコーヒーの文化史的意義について、文学作品などの実例をあげつつ、わかりやすく述べた。
論文					
1	「ヨーロッパの茶文化」		2007.03.00	世界緑茶協会機関誌『緑茶通信』20号、2007年3月末日発行 37-40頁	ヨーロッパの茶文化の歴史とその特質について、これまでの研究をふまえて、文献資料、絵画資料などを紹介しながらまとめた小論。依頼原稿。静岡県が中心になって設立された財団法人世界緑茶協会の機関誌で、茶業関係者や茶の研究者および一般読者を対象としている。毎号、歴史学者や農学、生化学、医学など茶に関する幅広い分野の研究者が寄稿している。
その他					
1	「喫茶学の未来 多様性と対話の時代」		2006.07.01	NPO 現代喫茶人の会 季刊誌『喫茶人』25号、2006年7月1日発行 2-4頁	茶の研究の過去、現在、未来について、自由に所感を綴ったエッセイ。依頼原稿。小項目：茶の季節／昭和の茶人たち／アフガニスタンの茶／色・味・香ー美味しい言葉(約3500字)
2	シンポジウム テーマ「茶の香り」		2007.05.19	茶の湯文化学会平成19年度大会(京都・池坊短期大学)	パネリストとして発表 滝口明子 「近世英国資料に見る茶の香り」 その他の発表者 司会 小泊重洋(元静岡県茶業試験場場長)「茶の香りとは」 高橋忠彦(東京学芸大学教授)「中国茶文化における茶の香り」 宮崎良文(千葉大学教授)「香りが人へ及ぼす影響」 茶の香りに関して4名のパネリストがそれぞれ発表し、その後パネリスト全員とフロアの間でディスカッションが行われた。西洋へ伝わった初期の茶は、おもに中国と日本の緑茶や福建省付近産の醃酵茶であった。近世英国の文献の記述をとおして、当時の茶の香りについてどのようなことがわかるかをまとめ、西洋人にとっての茶の香りの意味について考察した。
3	「ピーターラビットとお茶～英国紅茶論争からビアトリクス・ポター時代まで～」		2007.12.01	日本紅茶協会研究会 講演(参加者 約70名)(埼玉、埼玉県こども動物自然公園内 大東文化大学 ビアトリクス・ポター資料館見学、森の教室にて講演)	もともとアジアの飲み物であったお茶は、17世紀にイギリスに伝わった。イギリスにおける茶の歴史の大きな流れを解説し、次に、ビアトリクス・ポターの生涯、およびその作品中に描かれた茶について講義した。ポターおよびそれ以前のヨーロッパのお茶の絵もプロジェクターで紹介した。
4	「紅茶の旅～受皿と秋の吟遊詩人～」		2008.10.00	広島日英協会会報(80号)	イギリスと紅茶に関するエッセイ(依頼原稿)。これまで続けて来た紅茶研究の中で気づいたことをまとめた。(約3500字)。主な話題として取り上げたのは、「紅茶を受皿で」再考、英文学史の授業について、湖水地方の詩人の日常生活とお茶など。
5	「お茶知識人養成講座」講師 「茶と文化II:ヨーロッパの茶文化」		2008.10.30	主催 財団法人世界緑茶協会/静岡産業大学 会場 静岡産業大学(静岡県藤枝市)	対象 静岡産業大学の学生およびお茶の専門的知識の習得を希望する方 毎回木曜日4時限目(14:40～16:10)全12回の連続講座。静岡産業大学学生と社会人の混合クラス(約100名)。茶に関する総合的な知識の習得をめざす学生および社会人のための連続講座で、毎回、茶の起源、茶の文化(中国茶、日本茶)、茶の生産と科学、現代の茶市場など幅広いテーマがとりあげられた。瀧口は第5回「茶と文化II:ヨーロッパの茶文化」を担当。意欲的な受講者が多く、熱心に聴講され、講義後も多くの質問を受けた。ヨーロッパの茶文化に関わる基礎的な事項を、絵画なども見ていただきながらわかりやすく解説した。このテーマへの理解と関心を深めていただけたと考えている。

6 シンポジウム 「お茶と翻訳」 パネリスト『茶の博物誌』翻訳について（発表）および他のパネリストとの（討論）	2008.11.16	静岡県掛川市 市立図書館ホール	司会は小泊重洋（茶学の会会長）、吉野亜湖（日本茶道塾）。3人のパネリストがそれぞれの翻訳書の内容を紹介し、翻訳の苦労や面白さ、お茶の研究の現状と今後などについて話した。その後、3人のパネリストが壇上でフロアからの質問にも答えつつ、ディスカッションした。瀧口はジョン・コークレイ・レットサム著 滝口明子訳『茶の博物誌』（講談社学術文庫）について話した。茶に関心を持つ社会の方が多数参加され、熱心に聴講されていた。名古屋など遠方からの参加者もあり、質問も多く寄せられ、充実したシンポジウムとなった。他のパネリストは以下の通り。鈴木実佳（静岡大学教授：アラン・マクファーレン『茶の帝国』について）、杉本 卓（千葉工業大学準教授：W. H. ユーカース『茶のロマンス』について）。
7 和洋女子大学英文学会講演会 講師（招待講演）「お茶と英文学～オースティン、ブロンテ姉妹からアリスたちへ～」	2009.01.27		19世紀の小説を中心に、英文学とお茶の関わりについて話した。まず17世紀から現代までのイギリスおよびヨーロッパの茶史を概観し、次にオースティン、ブロンテ姉妹の小説、および『不思議の国のアリス』に出てくるお茶の場面を取り上げながら、イギリスにおいて茶がどのように飲まれて来たか、また小説の中でどのように描かれているかを詳細に論じた。最後に『アリス』にも登場する伝承童謡マザーグースの唄の絵本の絵をみていただきながら、ひとつの唄を参加者と一緒にご歌って講演を終わった。お茶をとおして英文学を読み直す、という視点に興味を持っていただくことができた点で、大変意義ある講演会だったと考えている。学生、教職員だけでなく地元の社会人の方も多数参加されていた。大ホールでの講演後、茶話会で少人数の教職員ならびに社会人の方と直接お話しし、ご質問に応じることができた。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1 1985.00.00 ～ 現在	熊本大学英文学会会員
2 1986.00.00 ～ 現在	日本比較文学会会員
3 1993.00.00 ～ 2008.03.00	日本英文学会会員
4 1996.00.00 ～ 現在	茶の湯文化学会会員
5 1997.01.00	放送大学講師（熊本、集中授業「食文化研究入門」）
6 1997.03.00	日本紅茶協会研究会講演（東京）
7 1997.10.00	日本紅茶協会研究会講演（東京）
8 1998.06.00	九州国際大学都市研究会講演（九州、「都市と紅茶とコミュニケーション」）
9 1999.00.00 ～ 現在	日蘭学会会員
10 1999.12.00	日本紅茶協会研究会講演（東京）
11 2000.10.00	上智大学公開講座講師（東京）
12 2001.00.00 ～ 現在	日本ジョンソン協会会員
13 2002.11.00	O-CHA 未来大学講演（静岡）
14 2003.06.00	日本紅茶協会研究会講演（大阪、東京）
15 2003.08.00	茶学の会講演（静岡・お茶の郷博物館）
16 2003.11.00	国際交流基金アジア理解講座 2003年度第2期「アジアの茶文化をさぐる」講師（東京、「紅茶によるアジアとヨーロッパの交流」）
17 2004.02.00	O-CHA 未来大学講演（静岡）

18	2005.00.00	～	現在	メディア史研究会会員
19	2005.06.00			朝日カルチャーセンター講師（東京、「茶の思想と美」）
20	2005.10.00			財団法人世界緑茶協会静岡県お茶知識人養成講座講師（静岡・静岡産業大学、「ヨーロッパの茶文化」）
21	2005.10.00	～	2008.03.00	朝日カルチャーセンター講師（東京、「紅茶でたどる英文学史」ほか）
22	2006.00.00	～	2007.10.00	第3回国際O-CHA学術会議（ICOS 2007）歴史文化部会委員
23	2006.11.00			財団法人世界緑茶協会静岡県お茶知識人養成講座講師（静岡・静岡産業大学、「ヨーロッパの茶文化」）

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	新里 孝一	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) BRDの実践		2007.04.00	(2007年4月～2008年1月)「政治原論」「日本史概論」といった講義課目にBRD=Brief Report of the Day (宇田光が開発した教育メソッド=『大学講義の改革』2005年、北王路書房)を授業に導入し、授業内容の焦点化をはかった。授業評価などにおける学生の評価はおおむね好評であった。			
2) 授業内容の公開と予習・復習の促進		2008.04.00	(2008年4月～2009年1月)「日本史概論」で、授業前に、授業で使用するパワーポイント用スライドを大学の電子シラバス上の掲示板に公開し、さらに、授業後には、授業の終わりに実施する小テストの解答と解説を公開した。受講者からの質問が増加、授業への意欲的な取り組みがみられるようになった。授業評価などでも好評であった。			
3) 教育内容・方法の工夫		2009.04.00	(2009年4月～2009年7月)「社会科学入門(政治)」(1年次選択必修科目)において、毎時間、前時の内容を確認するための「小テスト」(10点満点)を実施し、10回分の合計により成績評価を行うことにした。その結果、7月に実施された国際関係学部の「授業改善アンケート」には次のような顕著な成果がみられた。すなわち、「あなたは授業一回につき、平均して、予習や演習など授業時間外の学習をどれくらい行いましたか」という設問に対し「ほとんどしなかった」という回答が「32.2%」、つまり7割弱の受講生が、程度に差こそあれ、なんらかのかたちで予習・復習をしているということになる。「ほとんどしなかった」学生の数をいかに減らしていくかが、今後の課題である。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「アジアの中の日本」への外交戦略		2008.03.00	『大東文化大学紀要』第46号(社会科学)	(107-122頁)		

2	大東文化大学、成均館大学、山東大学編『東アジアにおける「家」－伝統文化と現代社会－』（第2回東アジア三大学国際シンポジウム論文集）	単著	2008.08.29		根圏のメタファーによる家族機能の再考－ケアの観点から－（218～230頁）
3	ケアにおける「動機」の問題	単著	2008.12.00	大東文化大学東洋研究所編『東洋研究』第170号	（87～111頁）
4	他者の苦難と向き合うことについて－ケアの観点から－	単著	2009.03.00	『大東文化大学紀要』第47号（社会科学）	（157～176頁）
その他					
1	ケアの論理学のための覚書		2008.03.00	大東文化大学大学院 アジア地域研究科『大東アジア学論集』第8号	（27-54頁）
2	第2回東アジア三大学国際シンポジウム（東アジアにおける「家」－伝統文化と現代社会－）		2008.09.17		第5部「現代社会の中の『家』をめぐる諸問題（総論）」で報告。
3	<関心>と<注意力>－ケアの観点から－	単著	2009.03.00	大東文化大学大学院アジア地域研究科編『大東アジア学論集』第9号	（25～37頁）
III 学会等および社会における主な活動					
1	1995.04.00	～	2007.03.00	日本政治学会会員	
2	2002.05.00	～	現在	日本唯物論研究協会会員	
3	2003.04.00	～	2007.03.00	日本公民教育学会会員	
4	2003.04.00	～	2007.03.00	日本道徳教育学会会員	
5	2003.12.00	～	2004.11.00	東松山市東松山市・吉見町法定合併協議会委員、新市建設計画策定小委員会委員	
6	2004.07.00	～	2006.06.00	鳩山町鳩山町行政改革推進委員会委員	
7	2005.06.00	～	2009.03.00	鳩山町鳩山町「環のまち『元気づくり』プロジェクト実行委員会」アドバイザー	
8	2005.06.00	～	2005.06.00	東松山市東松山市総合振興計画審議会委員	
9	2005.07.00	～	2007.06.00	東松山市東松山市総合振興計画審議会委員	
10	2006.05.10	～	2006.05.30	東松山市東松山駅東口周辺開発における開発予定業者の選定委員会委員	
11	2007.07.00	～	現在	東松山市東松山市総合振興計画審議会委員	
12	2008.04.00	～	現在	日本社会臨床学会会員	

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	福家 洋介	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 連続公開講座 アジアの「食」を歩く (第1回)		2008.10.29	学部学生・院生・教員より構成される地域研究会主催の連続公開講座を企画し、アジアの地域言語によって区分された狭いアジア理解ではなく、「食」を切り口にしたより広いアジア理解を試みる。第1回 エビを歩く。『エビと日本人』(岩波新書、1988)の著者、村井吉敬さん(早稲田大学アジア研究機構)による、その後のエビと日本人について(10月29日)。第2回 ヒツジと歩く。赤堀雅幸さん(上智大学アジア文化研究所)による砂漠の民、ペドウィンの食と暮らし(11月3日)。第3回 海を食べ歩く。門田修さん(海工房)によるアジアの海に生きる船乗り、漂海民などの食と暮らし(11月4日)。2009年度も継続する。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
1	東南アジア学会関東部会11月例会(於上智大学)	2008.11.15		間瀬朋子さん(ガジヤマダ大学客員研究員)の研究報告「出かせぎモノ売りにたいする地縁・血縁の役割:中ジャワ州ソロ地方からの出かせぎを事例に」に関するコメンテーター。		
III 学会等および社会における主な活動						
1	1984.11.00 ~ 現在	アジア政経学会会員				
2	1986.11.00 ~ 現在	日本平和学会会員				
3.	2009.04.00 ~ 現在	東南アジア学会会員				

(表 24)

所属	国際関係学部国際関係学科	職名	准教授	氏名	松本 弘	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『湾岸アラブと民主主義—イラク戦争後の眺望—』	共著	2005.11.15	日本評論社	日本国際問題研究所の研究プロジェクト「GCC諸国と民主主義」の成果を発展させ、小杉泰と筆者による共編で出版したもの (出版上の編集は同研究所となっている)。第5章「バハレーンの民主化—史的展開と比較考察—」 (pp.115-137)、第11章「まとめと提言」 (pp.253-265)、「あとがき」 (pp.267-268) を執筆。ISBN 4-535-55438-2 共著者◎小杉泰、福田安志、保坂修司、大川真由子		
2 『西・中央アジア諸国における亀裂構造と政治体制』	共著	2006.10.31	アジア経済研究所	平成16年度および17年度のアジア経済研究所研究プロジェクトの成果を、間寧を編者として出版したもの。第3章「イエメン：政党政治の成立と亀裂」 (pp.95-158) を執筆。全253頁。ISBN4-258-04555-1。共著者◎間寧、青山弘之、岡奈津子		
3 『中東民主化ハンドブック 2007』	編著	2008.01.00	イスラーム地域研究東京大学拠点	人間文化研究機構の地域研究推進事業「イスラーム地域研究」による東京大学拠点出版物のひとつ (TIAS Middle East Research Series No.1) であり、東京大学拠点グループ2「中東政治の構造変容」に所属する「中東の民主化と政治改革の展望 (略称：中東民主化研究班)」の活動内容を筆者が編集したもの。「イエメン」 (pp.96-111) および「バハレーン」 (pp.123-136) を執筆。全177頁。ISBN978-4-904039-03-8。共著者◎松本弘、横田貴之、辻上奈美江、福富満久、吉岡久子		
4 『イスラーム世界研究マニュアル』	共著	2008.07.00	名古屋大学出版会	小杉泰・林佳世子・東長靖の編集による研究案内書。「研究案内 中東の民主化」、「海外文献調査ガイド イエメン」、「海外文献調査ガイド アラブ首長国連邦」 (pp.367-370、542-543、544) を執筆。		

5	<i>Development of Parliamentarism in the Modern Islamic World</i>	共著	2009.03.00	東洋文庫	東洋文庫の研究プロジェクトによる出版物（佐藤次高編集）。”The Introduction of Democracy and Conflicts in Modern Egypt: The Constitution of 1923” (pp.1-24) を執筆。
論文					
1	『アラブ世界におけるイスラーム過激派の変質とイラク戦争後の新たな状況』	単著	2005.03.00	Sophia AGLOS Working Papers Series No.7 上智大学	私市正年編『現代イスラームをめぐるテロリズムの背景と現状』(Sophia AGLOS Working Papers Series No.7)、上智大学 21 世紀 COE プログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」報告書のひとつに、イスラーム過激派の史的变化につき評価したもの (pp.79-88)。
2	「アラブ諸国の政党制—民主化の現状と課題—」	単著	2005.05.00	『国際政治』第 141 号	アラブ各国の議会・選挙・政党制度およびその民主化への評価を比較分析し、サルトーリの政党制の議論を援用して分類したもの (pp.56-71)。ISSN 0454-2215
3	「イエメン民主化の 10 年」	単著	2005.07.00	『現代の中東』第 39 号	1990 年南北イエメン統一以降の民主化を、特に 1993 年、1997 年、2003 年の 3 回の総選挙結果から分析し、サルトーリの政党制の議論を援用して評価したもの (pp.24-39)。ISSN 0912-8107
4	「民主化と構造調整—イエメンの事例から—」	単著	2008.06.00	『中東研究』第 500 号	民主化と構造調整受け入れとの政治的・経済的関係を、イエメンの事例から考察したもの (pp.17-28)。
その他					
1	現代中東政治		2004.10.19	明治大学・公開講座講師 (平成 16 年 10 月 19、26 日、11 月 2、9 日)	
2	GCC 諸国		2004.11.16	国際交流基金・中東理解講座講師	
3	現代中東政治		2004.11.20	駒沢大学・公開講座講師 (11 月 20、27 日、12 月 4 日)	
4	『中東諸国の制度的民主化』	単著	2005.03.00	日本国際問題研究所平成 17 年度自主研究報告 日本国際問題研究所	中東諸国に関わる民主化の経緯、法的制度的変化、政党制などを、制度的アプローチから分析、考察した報告書。
5	「見市健『インドネシア—イスラーム主義のゆくえ—』」	単著	2005.11.00	『国際政治』第 143 号	名称にある学術書を、特にイスラーム主義の視点から論評した書評 (pp.168-171)。ISSN 0454-2215
6	『国際政治辞典』	共著	2005.12.15	弘文堂	辞典項目「イエメン」(pp.70-71) を執筆 (猪口孝・田中明彦・他編)。ISBN 4-335-46023-6
7	GCC 諸国の民主化		2007.01.24	国際交流基金・中東理解講座講師	
8	GCC 諸国の民主化		2007.02.17	The Seminar in the Bahrain Center of Study and Research	バハレーンの研究所のセミナーにおいて、“A Japanese Perception on Resent Development of the GCC Countries” というタイトルで講演。
9	『湾岸、アラビア諸国における社会変容と国家・政治』	共著	2007.03.16	アジア経済研究所	平成 18 年度のアジア経済研究所研究プロジェクトの調査報告書 (編者は福田安志)。第 6 章「イエメンの政治変化と経済変化」(pp.173-201) を執筆。全 201 頁。
10	中東諸国の政治体制		2007.03.23	防衛省防衛研究所・一般講義講師	
11	「読書案内 アラビア半島の近現代史」	単著	2007.08.20	『歴史と地理 世界史の研究』第 606 号、山川出版社	主として高校教師を対象とした山川出版社の雑誌に、アラビア半島の近現代史研究につき解説したもの (pp.38-41)。ISSN1343-5957
12	「イスラームと政治の関係」		2007.11.24	大東文化大学国際関係学部「高校生のためのアジア理解講座」(「特色ある大学教育支援プログラム」関連事業)	
13	「中東の政治社会」		2008.03.25	防衛省防衛研究所・一般講義講師	

14	「アラビア半島:GCC 諸国の国家と『近代』」		2005.06.04	朝日カルチャーセンター横 浜「中東近代の光と影ー伝 統と近代の相克ー」講師。	
15	「小杉泰『現代イスラ ーム世界論』」	単著	2006.06.00	国際問題』第 552 号	名称にある学術書にかかわる書評 (pp.68~70)。
16	「GCC (湾岸協力会 議) 諸国の建国課程」		2007.01.13	朝日カルチャーセンター横 浜「現代中東が作られた時 代ー大戦間期中の中東ー」講 師。	
17	「アラビア半島の 90 年代ーサウジアラビ アとイエメンー」		2007.12.22	朝日カルチャーセンター横 浜「激動の中東(1990 年代) ー湾岸戦争から 9. 11 へ ー」講師。	
18	『シーア派諸社会の 特質とネットワーク を考察するための総 合研究』	共著	2008.08.00		文部科学省科学研究費研究成果報告書(山岸智子編集)。「イ エメン・サイド派の政治的展開」(pp.194-199)を執筆。
19	『湾岸、アラビア諸国 における社会変容と 政治システムーGCC 諸国、イラン、イエメ ンー』	共著	2008.10.00	平成 19 年度日本貿易振興 機構アジア経済研究所調査 研究報告書(福田安志編集)	「イエメンの政治と社会変容:自由化の意味」(pp.193-228) を執筆。
20	「GCC 諸国の政治制 度と民主化」		2008.10.17	国際交流基金・異文化理解 講座講師	
21	「中東の政治社会」		2009.03.17	防衛省防衛研究所・一般講 義講師	

III 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.00	～	現在	日本オリエント学会会員
2	1986.04.00	～	現在	日本中東学会会員(平成 14 年度選挙管理委員、平成 15 年 4 月～現在 評議員、平成 16 年 4 月～現在 編集委員、平成 16 年度大会 実行委員)
3	1993.07.00	～	現在	Seminar for Arabian Studies (UK)会員
4	2000.04.00	～	現在	日本比較政治学会会員
5	2005.04.00	～	現在	日本国際政治学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	石田 英明	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) ヒンディー語基礎 500 語用例集		2005.12.11		大東文化大学国際関係学部 ヒンディー語の基礎的な語彙 500 語とそれを用いた例文を集めたもの。(77 頁)			
2) ヒンディー語 I、II		2009.03.00		大東文化大学国際関係学部 ヒンディー語教科書。I は文法を中心とした入門書。II は語彙集と問題集。(I -10+154 頁 II -145 頁)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) Daito Bunka Vishvavidyala aur Hindi (大東文化大学とヒンディー)		2006.12.13		東京外国語大学ヒンディー・ウルドゥー教育 100 周年記念国際会議。大東文化大学におけるヒンディー語教育の歴史と内容について講演。(ヒンディー語)			
2) Japan men Hindi Shikshan ka Ek Udaharan (日本におけるヒンディー語教育の一例)		2007.11.10		韓国外国語大学 (ソウル)。アジアにおけるヒンディー語教育国際会議。大東文化大学 (国際関係学部) におけるアジア言語スピーチコンテストが学生の教育に果たしている役割をヒンディー語を例として講演。(ヒンディー語)			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 カースト・ダリト問題の作品と雑誌 'Hans' (94, 95)	単	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 PP.311-328	ヒンディー語文芸雑誌 'Hans' (94, 95) に掲載された作品のうちカースト・ダリト問題を扱った作品についてまとめたもの			
2 カースト・ダリト問題の作品と雑誌 'Hans' (86-88)	単	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 PP.263-273	ヒンディー語文芸雑誌 'Hans' (86-88) に掲載された作品のうちカースト・ダリト問題を扱った作品についてまとめたもの。			
3 カースト・ダリト問題の作品と雑誌 'Hans' (1989)	単	2006.05.20	ヒンディー文学創刊号 PP.107-114	ヒンディー語文芸雑誌 'Hans' (1989) に掲載された作品のうちカースト・ダリト問題を扱った作品についてまとめたもの。			
4 カースト・ダリト問題の作品と雑誌 'Hans' (1990, 91)	単	2007.05.20	ヒンディー文学第 2 号 PP.157-188	ヒンディー語文芸雑誌 'Hans' (1990, 91) に掲載された作品のうちカースト・ダリト問題を扱った作品についてまとめたもの。			
5 Way of Making Writer's Own Literary World	単	2008.01.00	Marga, Manohar Prakashan, New Delhi PP.217-235	マラーティー語作家 Keshav Meshram の主に短編小説に基づき、作家としての変化の過程を考察したもの。			

6	近代マラーティー文学とケーシャヴスト Keshavst (1866-1905)	単	2008.03.31	多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として PP.81-89	19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍し、近代マラーティー語詩の誕生に大きな足跡を残したケーシャヴストの人と作品について考察したもの。
7	カースト・ダリト問題の作品と雑誌‘Hans’ (1992, 93)	単	2008.05.20	ヒンディー文学 第3号 PP.129-163	ヒンディー語芸雑誌‘Hans’ (1992, 93)に掲載された作品のうちカースト・ダリト問題を扱った作品についてまとめたもの。
その他					
1	粉々のシャーリグラーム	単	2006.05.20	ヒンディー文学創刊号 PP.28-46	ヒンディー語作家 Devendra の短編小説の翻訳。
2	生贄	単	2007.05.20	ヒンディー文学第2号 PP.35-60	ヒンディー語作家 Ajay Navariya の短編小説の翻訳。
3	亜大陸	単	2008.05.20	ヒンディー文学第3号 PP.11-27	ヒンディー語作家 Ajay Navariya の短編小説の翻訳。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1977.04.00	～	現在	日本印度学仏教学会会員	
2	1988.04.00	～	現在	日本南アジア学会会員	

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	井上 貴子	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 高校生の音楽 1		2006.03.09	教育芸術社〈高校生の音楽 1〉 高校 1 年生向け音楽の教科書。井上貴子はインドの歌の楽譜と解説を担当。総頁数 139 頁中 83 頁。				
2) 高校生の音楽 2		2007.03.05	教育芸術社 高校 2 年生向け音楽の教科書。井上貴子は、世界の諸民族の音楽、南アジアの芸能を担当。総頁数 129 頁中 108-111 頁。				
3) Joy of Music		2008.02.25	教育芸術社 高校 3 年生向け音楽の教科書。井上貴子は世界の諸民族の音楽を担当。総頁数 153 頁中 128-131 頁。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「神々を演じる人々ーインド神話と芸能」		2006.09.30	ミテイラー美術館展における講演 (渋谷、たばこと塩の博物館) 「神々を演じる人々ーインド神話と芸能」と題して、インドの神話を紹介しながら、それが実際にどのように芸能として上演されているかをビデオを上映しながら講演。				
2) 文化講座「アジア各地のポピュラー音楽」		2007.02.09	沖縄県立芸術大学附属研究所 9 日は「インドのポピュラー音楽 1ーフィルム・ソングからインディー・ポップへ」10 日は「インドのポピュラー音楽 2ー南アジア系移民の音楽バングラー・ビートの衝撃」と題して、講座を 2 回行なう。				
3) 高校生のためのアジア理解講座 「ガンディーのインド、IT のインド」		2007.06.16	大東文化大学国際関係学部、特色 G P アジア理解教育の総合的取組、高校生のためのアジア理解講座前期 「ガンディーのインド、IT のインド」と題して、現代インドを紹介。				
4) 「ファッションがつくるインド」		2007.07.13	国際交流基金 (ジャパンファウンデーション) 2007 年度第 1 期異文化理解講座 13 日は「芸能とファッション」と題して、インド舞踊の衣裳の変遷やマスメディアにおけるファッションへの影響を解説 27 日は「ワークショップーインドのファッションを実践するー」と題して、様々なサリーの着付け方などを紹介。				
5) 「アジア芸能のタベ」		2007.11.23	大東文化大学国際関係学部、特色 G P アジア理解教育の総合的取組、「アジア芸能のタベ」を開催 プログラムのコーディネート、企画、運営、及び 24 日にはインド舞踊バラタナーティヤムの音楽を担当して出演。				
6) 「インド、神話と芸能: 神々を演じる人々」		2007.12.13	国際交流基金 (ジャパンファウンデーション) 2007 年度第 2 期異文化理解講座 「バーガヴァタ・メーラとナラシンハ信仰」と題して講演。				
7) 高校生のためのアジア理解講座 (オープンキャンパス) 「ビートルズとインド」		2008.07.27	2007 年に引きつづいて、特色 G P のプログラムとして、「ビートルズとインド」と題して、ビートルズの活動を話の皮切りにインドの芸能や宗教について紹介				
8) 「アジア芸能のタベ」 (第 2 回)		2008.12.06	2007 年に引きつづいて特色 G P のプログラムとして、「第 2 回アジア芸能のタベ」を開催、プログラムのコーディネート、企画、運営及び 12 月 6 日にはインド舞踊の音楽担当として出演。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 21世紀の音楽入門 6	共	2005.04.15	教育芸術社	「音」の世界を探求するシリーズの第6巻、テーマは「和声」。共著者名：小沼純一、難波弘之、香取良彦、大角欣矢、関根敏子、田村和紀夫、井上貴子、久万田 晋、桜井真樹子、平田亜矢。井上貴子は「インド音楽に和声はあるのか」を執筆。総頁数 112 頁中 75-80 頁。
2 巨大市場インドのすべて	共	2005.07.28	ダイヤモンド社	自由化から 15 年たったインド経済について、具体的な事項を踏まえて、インドマーケットの広がり、その『巨大』さを検証したもの。島田 卓編著、共著者名：小島 卓、佐藤 宏、山田桂子、井上貴子、内川秀二、近藤則夫、三輪博樹、他。井上貴子は「タミル・ナドゥ州」を執筆。総頁数 286 頁中 174-180 頁。
3 近代インドにおける音楽学と芸能の変容	単	2006.02.28	青弓社	イギリス支配下におけるインド音楽研究とそれに基づく新しいインドの音楽学がもたらした芸術観が、実際の芸能にどのような変容をもたらしているかを明らかにする。総頁数 744 頁。
4 音楽がもっとわかる世界地図	共	2006.04.00	ロコモーション・パブリッシング	音楽の歴史を変えた瞬間を捉えて、具体的に解説したもの。世界の音楽編集部編、井上貴子は「インド」の項目執筆。総頁数 128 頁中、35、41 頁。
5 世界歴史大系 南アジア史 3-南インド	共	2007.01.31	山川出版社	南アジア史のなかで特に南インドに焦点をしばった通史。編者：辛島昇、共著者名：深尾淳一、石川寛、児玉望、高橋孝信、山下博司、小倉泰、高島淳、太田信宏、井上貴子、栗屋利江、水島司、柳澤悠、志賀美和子、山田桂子、鈴木正崇。井上貴子は「補説 8 カルナータカ音楽理論の完成」「第七章 2 デーヴァダーシー問題と古典芸能の再生」を担当。総頁数 463 頁中 193 頁、289-297 頁。
6 映画の恐怖	共	2007.05.24	青弓社	非日常へのまなざし、「闇」への想像力をかきたてるために刊行された「ナイトメア叢書」の中の巻として、映画を中心に編まれた論文集。井上貴子は「フリークス、モンスター、マッドサイエンティストの狂演」を執筆。編者：一柳廣孝、吉田司雄、共著者：小中千昭他 16 名、総頁数：216 頁中、56-61 頁。
7 ビートルズと旅するインド、芸能と神秘の世界	単	2007.08.31	柘植書房新社	ビートルズとインドの関係を話のきっかけにして、インドの音楽や舞踊などの芸能と、それに関する神話や宗教について語るもの。総頁数 260 頁。
8 現代インドを知るための 60 章	共	2007.10.10	明石書店	急速に変化を遂げつつある現代インドの姿をさまざまな角度から紹介するもの。編者：広瀬崇子、井上恭子、近藤正規、南埜猛、共著者：伊藤融他 25 名。井上貴子は「第 16 章 言語の自由をフル活用ーインドのメディア」「第 37 章 伝統と近代の狭間で苦悩する女性たちー現代インドの女性問題」を執筆。総頁数 336 頁中 93-98 頁、208-212 頁。
9 インドからの道 日本からの道 - 「日印交流年」連続講演録	共	2008.00.00	出帆新社	2007 年「日印交流年」を記念してインド各地で開催された講演の記録。前田専学編、井上貴子は第 9 章「日本の伝統芸能におけるインドの影響」と題した講演を行い、本書に収録、総頁数 259 頁中 163-186 頁。
10 Path from India Path from Japan: Lecture Series on Japan・India Relations	共	2008.00.00	Northern Book Centre	同上邦文書の英語版。井上貴子の論文は“The Indian Impacts on Japanese Traditional Performing Arts.” 総頁数 227 頁中 141-160 頁。
11 That's Entertainment from Asia 2008	共	2008.02.25	TOKIMEKI パブリッシング	2007 年のアジアのエンタテインメントを紹介し、2008 年がどうなるかを予想した総合的な情報本、編者：『POP ASIA』編集部、共著者：関谷元子他多数。井上貴子は「インド」を担当。総頁数 271 頁中、203-216 頁。

12	神話と芸能のインド－神々を演じる人々	共	2008.08.20	山川出版社	2007年国際交流基金「異文化理解講座」の内容を論文集として刊行したもの。鈴木正崇編、共著者：小西正捷、金基淑、外川昌彦、宮本久義、坂田真二、小西公大、小磯千尋、河野亮仙、古賀万由里、袋井由布子、井上貴子は第12章「パーガヴァタ・メーラとナラシンハ信仰－タンジャールヴールのテルグ語芸能の伝承と現在」を執筆。総頁数256頁中233-253頁。
13	証言！日本のロック70's	共	2009.04.20	アルテスパブリッシング	2007年に行われた70年代の日本のロックについての連続トークショーの記録。難波弘之・井上貴子編。総頁数296頁。
論文					
1	La r é forme de la tradition des devadasi: danse et musique dans les temple hindous.	単	2005.00.00	Ateliers d'ethnomusicologie Cahiers de musiques traditionnelles 18	ヒンドゥー寺院に奉納されたデーヴァダーシーと呼ばれる女性達の伝承する舞踊と音楽が、20世紀前半のデーヴァダーシー制度廃止運動のなかで、どのように変化していったか。具体的なデーヴァダーシーの活動を取り上げて論じる。103-133頁。
2	近代インドにおける音楽学と芸能の変容	単	2005.04.28	東京大学大学院総合文化研究科博士論文	イギリス支配下におけるインド音楽研究とそれに基づく新しいインドの音楽学がもたらした芸術観が、実際の芸能にどのような変容をもたらしているかを明らかにする。総頁数465頁と付録63頁。
3	Senri Ethnological Studies 71, Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan.	単	2008.00.00	National Museum of Ethnology	“Between Art and Religion: Bh ā garata M ē la in Thanjavur.” タンジャールヴールの芸能パーガヴァタ・メーラが存続の危機に陥った理由を、芸術と宗教を切り離すイデオロギーと「民主化」と呼ばれる現象を軸にして分析。総頁数284頁中103-134頁。
4	インドにおけるNGOの現状と課題	単	2009.03.31	『大東アジア学論集』第9号 大東文化大学アジア地域研究科	インドにおけるNGO事例を3つとりあげて、NGOのネットワーク化、宗教政治との癒着、NGOのアカウントビリティについて論じる。総頁数140頁中45-58頁。
その他					
1	ティヤーガラージャ慰霊祭をめぐる	単	2004.07.03	音楽学研究会（大東文化会館）	南インドの代表的な音楽家ティヤーガラージャ慰霊祭が、いかにその存在のカルスマ性を高め、音楽家のアイデンティティをめぐる政治に関与しているかについて。
2	ティヤーガラージャ慰霊祭をめぐる	単	2004.07.23	グローバル研究会（大東文化会館）	ティヤーガラージャ慰霊祭が音楽家のアイデンティティ政治にいかにか大きな役割を果たしているか。
3	インド社会とグローバル化－極左の運動を事例として－	単	2004.10.16	政治経済学・経済史学会（早稲田大学）	インドにおける毛沢東主義グループによる世界社会フォーラム批判に基づいて、グローバル化とローカルな状況のせめぎあいを明らかにする。
4	南インドの音楽祭をめぐるポリティクス－集合的アイデンティティの相克－	単	2004.11.23	個の可能性研究会ワークショップ（学士会館）	南インドの代表的な音楽家ティヤーガラージャ慰霊祭が、音楽家のアイデンティティをめぐる政治に関与しているかについて。
5	東谷 護編著、『ポピュラー音楽へのまなざし－売る・読む・楽しむ－』	単	2004.12.28	日本ポピュラー音楽学会〈ポピュラー音楽研究〉Vol.8	近年注目されているポピュラー音楽研究についての書評。総頁数120頁中63-66頁。
6	『帝国』をめぐる近年の議論と2004年世界社会フォーラム	単	2005.01.24	南アジア学会月例懇話会（東京外国語大学本郷サテライトキャンパス）	ネグリとハートの著書『帝国』と世界社会フォーラムの議論が、インドの毛沢東主義グループによっていかに批判されているかについて。
7	フライア・ホフマン著、阪井葉子・玉川裕子訳、『楽器と身体』	単	2005.03.26	図書新聞〈図書新聞〉2719号	ジェンダーの視点からの音楽探求への重要性について述べた書評。総頁数8頁中5頁。
8	植民地支配と文化変容の力学－近代インドにおける古典音楽の事例から－	共	2005.06.25	芸術学研究連絡委員会 シンポジウム「アートの文化変容の可能性－」（京都大学）	インドの古典音楽が西洋人音楽学者からいかなる影響を受け、それをいかに消化して、今日の状況が構築されてきたか。

9	「帝国」と「マルチチュード」－インドの毛沢東主義グループに とってのグローバル 化と世界社会フォー ラム－	単	2005.07.23	独占研究会（於:東京経済大 学)	ネグリとハートの著書『帝国』と世界社会フォーラムの議論 が、インドの毛沢東主義グループによっていかに批判されて いるのかについて。
10	装うインドーイン ドサリーの世界	単	2005.08.20	財団法人千里文化財団	国立民族学博物館で開催された「特別展 インドサリーの世界 」の図論。「舞踊とサリー」、「サリーのさまざまな顔」、 「サリー・ドレーピングの技法」を執筆。総頁数 123 頁中 61－62 頁、81－82 頁。
11	スバドラ・プタリヤー 著、鳥居千代香訳、 『ダウリーと闘い続 けて』	単	2005.09.03	図書新聞〈図書新聞〉2740 号	長期にわたって続けてきた地道な抵抗運動の成果について 述べた書評。総頁数 8 頁中 5 頁。
12	アートとバクティの 相克－タンジャーヴ ールのパーガヴァ タ・メーラをめぐる －	単	2006.05.20	同人研究会	アートとバクティという二つの概念がインドにおける芸能 の美学論においていかに展開しているか、現実の芸能の事例 としてパーガヴァタ・メーラをとりあげて論じる。
13	明治大学	単	2006.09.08	国際経済研究会定例研究会	「マルチチュードの民主主義は可能か－世界社会フォーラ ムとインドの毛沢東主義グループをめぐる」と題し、ネグ リ・ハート著『帝国』及び『マルチチュード』の議論を批判。
14	マルチチュードの民 主主義は可能か－世 界社会フォーラムと インドの毛沢東主義 グループをめぐる －	単	2006.09.08	国際経済研究会	ネグリとハートの最新刊「マルチチュード」をめぐる、そ の可能性と限界を、インドで開催された世界社会フォーラム と、それに対抗してムンバイ・レジスタンスを開催した毛沢 東主義グループの主張をとりあげて、論じる。
15	言語ナショナリズム と芸術至上主義－イ ンド、タミルナード 州を事例として－	単	2006.09.16	比較文明学会第 79 回研究 例会	インドにおける言語ナショナリズムが芸能において表出し たときに、政治的社会的対立を調停する方便として、芸術至 上主義が利用されてきたことを明らかにする。
16	モナ・アハメド文、ダ ヤニタ・シン写真・序 文『インド第三の性を 生きる』書評	単	2006.10.14	図書新聞 2793 号	男でも女でもない性別カテゴリーを越えた存在であるヒジ ュラの自伝についての書評。総頁数 8 頁中 5 頁。
17	シンポジウム「ポピュ ラー音楽にみるロー カリティ」（成城大 学）	共	2007.07.07	東洋音楽学会東日本支部第 33 回定例研究会、日本ポピ ュラー音楽学会 2007 年度 特別例会、合同	「ポピュラー音楽にみる NR I（在外インド人）のジレンマ」 と題して、在外インド人による、アイデンティティ構築のあ り方を明らかにする。
18	「公共圏における N GO、NPO の現状と 課題」（静岡大学）	共	2007.10.27	政治経済学・経済史学会 2008 年度秋季学術大会パ ネル	「インドにおける NGO の現状と課題」と題して、インドの NGO の情報を提供し、現在の問題点を指摘する。
19	歴史と地理 No.609 世界史の研究 213	単	2007.11.20	山川出版社	「インド音楽芸能史の困難」インド音楽芸能史の再構築にお ける問題点を方法論や資料の上から検討。総頁数 69 頁中 60-64 頁。
20	民謡研究の新しい方 向性（国際日本文化研 究センター）	単	2008.01.05	国際日本文化研究センター 共同研究会	「インドにおける「フォーク」の概念」と題して、英語のフ ォーク概念がどのようにしてインドに定着し、様々な現地語 に訳されて通用しているかを発表。
21	東洋学からオリエン タリズムへの射程－ インドの音楽研究を 事例として－	単	2008.03.04	新学術領域「ユーラシア地 域大国の比較研究」第 4・ 5・6 班合同研究会（北海 道大学）	サイードのオリエンタリズム論からその後のポストコロニ アル理論への展開について、インドの音楽芸能を事例として 論じる。報告要旨 http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_06/achievements/f iles/20090303_04_inoue.pdf
22	別冊宝島『音楽誌が書 かない J ポップ批評 52』	単	2008.04.18	宝島社	X JAPAN の全軌跡を特集した号。井上貴子は「ART OF LIFE 徹底解剖」を担当。総頁数 125 頁中 81-85 頁。
23	シンポジウム「南アジ アにおける《共生》の 諸相と展望」	共	2008.09.28	日本南アジア学会第 21 回 全国大会（東洋大学）	シンポジウム「南アジアにおける《共生》の諸相と展望」司 会

24	書評	単	2008.12.07	北海道新聞	ジョイス・チャップマン・リーブラ著『王妃ラクシュミー』書評 総頁数 36 頁中 15 頁。
25	至福のインド／ジョージ・ハリスン	単	2009.01.15	日経エンタテインメント増刊『大人のロック！』第 13 巻第 2 号	ジョージ・ハリスンの 1970 年代の活動をインドとの関わりから論じる。総頁数 154 頁中 64-65 頁。
26	書評	単	2009.01.30	政治経済学・経済史学会『歴史と経済』第 202 号 LI-2 2009.1	富永智津子・永原陽子編『新しいアフリカ史像を求めて－女性・ジェンダー・フェミニズム－』書評 総頁数 80 頁中 46～48 頁。
27	アマルティア・セン『議論好きなインド人』書評セッション	単	2009.04.04	政治経済学・経済史学会福祉社会フォーラム（東京大学）	アマルティア・セン『議論好きなインド人』（2008 年明石書店）の書評とコメント、解説。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1984.10.00	～	現在	東洋音楽学会正会員（平成 19 年度～現在 関東支部委員）
2	1987.10.00	～	現在	日本南アジア学会正会員（平成 15 年度～18 年度 理事、平成 21 年度～現在 常任理事）
3	1988.00.00	～	現在	日印協会会員
4	1992.10.00	～	現在	日本音楽学会正会員
5	1992.10.00	～	現在	民俗芸能学会正会員
6	1993.10.00	～	現在	国際ポピュラー音楽学会正会員
7	1993.10.00	～	現在	日本ポピュラー音楽学会正会員（平成 11 年度～14 年度、理事、平成 17 年度～平成 20 年度 理事）
8	1994.10.00	～	現在	民族芸術学会正会員
9	1997.09.00	～	現在	史学会正会員
10	2000.10.00	～	現在	国際政治学会正会員
11	2004.10.00	～	現在	政治経済学・経済史学会正会員（平成 18 年度～20 年度 研究活動委員、平成 21 年度～現在 理事）
12	2006.10.00	～	2009.03.00	国際交流基金異文化理解講座 アドバイザー

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	岡田 宏二	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 「中国の歴史講座」		2004.09.25	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2004年9月25日、10月2日・9日・16日・23日・30日、11月6日・13日の8回)。黄河文明から殷・周時代を経て春秋戦国時代までの中国の歴史について講演を行った。			
2) 「中国の歴史講座」		2005.05.21	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2005年5月21日・28日、6月4日・11日・25日、7月2日・9日・16日の8回)。春秋戦国時代の諸子百家から秦代を経て前漢の呂后専制の時期までの中国の歴史について講演を行った。			
3) 「中国の歴史講座」		2005.10.08	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2005年10月8日・15日・22日・29日、11月12日・26日、12月3日・10日の8回)。前漢の文帝の時期から後漢の成立までの中国の歴史について講演を行った。			
4) 「中国の歴史講座」		2006.05.13	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2006年5月13日・20日・27日、6月3日・10日・17日・24日、7月1日の8回)。後漢の衰退から隋代までの中国の歴史について講演を行った。			
5) 「中国の歴史講座」		2006.09.30	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2006年9月30日、10月7日・14日・21日・28日の5回)。唐の建国から太宗の時期までの中国の歴史について講演を行った。			
6) 「中国の歴史講座」		2007.04.07	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2007年4月7日・14日・21日・28日、5月12日・19日・26日、6月2日の8回)。唐の則天武後の時期から五代十国時代を経て宋の建国までの中国の歴史について講演を行った。			
7) 「中国の歴史講座」		2007.09.22	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2007年9月22日、10月6日・13日・20日・27日の5回)。北宋初期の政治から北宋末の混乱期までの中国の歴史について講演を行った。			
8) 「中国の歴史講座」		2008.04.12	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2008年4月12日・19日・26日、5月10日・17日の5回)。モンゴル帝国の成立から元王朝の時代を経て明王朝の建国までの中国の歴史について講演を行った。			
9) 「中国の歴史講座」		2008.09.20	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2008年9月20日・27日、10月4日・11日・18日の5回)。明の太祖の時期から明の衰退までの中国の歴史について講演を行った。			
10) 「中国の歴史講座」		2009.04.18	埼玉県県民活動総合センター「県民カレッジ」(2009年4月18日・25日、以下3回)。清王朝の建国から乾隆帝の時期までの中国の歴史について講演を行った。			
4 その他教育活動上特記すべき事項						

II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）
著書 1 壮学叢書－儂智高研究資料－	共著	2005.12.00	広西民族出版社	今日チワン（壮）族の英雄とされている儂智高が北宋時代にどのような理由から国家権力に反抗し、華南地域にどのような影響を与えたのかといった点について歴史的に考察を行った。范宏貴主編、岡田は「儂智高反乱」について執筆した。総頁数 645 頁中 610～621 頁。
論文 1 明代華南における土司の設置について	単著	2008.12.00	『東洋研究』170号（大東文化大学東洋研究所）	明代華南における土司の設置状況について、雲南・広西・貴州・四川・湖南・湖北地域における設置状況と土司と衛所制の関係、さらに土司の承襲規定、承襲手続、承襲範囲に焦点をあてて考察を行った。総頁数 141 頁中 1～30 頁。（レフリー有り）
2 土家（トゥチャ）族地域における土司の世系について	単著	2009.03.00	『大東文化大学紀要－人文科学－』47号	土家（トゥチャ）族地域において明清地代を中心として権力を保持した土司の世系について、族譜や地方志などの史料にもとづいてその系譜を辿り、分布状況について具体的に考察を行った。総頁数 462 頁中 43～68 頁。
その他				
III 学会等および社会における主な活動				
1	1978.04.00	～	2005.03.00	歴史学研究会会員
2	1978.04.00	～	現在	紀尾井史学会会員
3	1978.04.00	～	現在	史学会会員
4	1978.04.00	～	現在	上智史学会会員
5	1978.04.00	～	現在	東洋史研究会会員
6	1992.04.00	～	現在	中国社会文化学会会員
7	1999.04.00	～	現在	中国史学会会員
8	2007.04.00	～	現在	比較文化史学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	押川 典昭	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「アジア理解教育の総合的取組」		2006.10.00		(2006.10.~2009.3) 文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定(2006年度)された大東文化大学国際関係学部の教育の取組責任者としてプロジェクトを推進した。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『インドネシア語』(BAHASA INDONESIA)		2007.03.31		文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(2006年度)選定「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズNo.2として、大東文化大学国際関係学部が発行したインドネシア語テキスト。佐々木信子、キスワリ・スカルワティとの共著。全104頁。			
2) 『インドネシア語』(BAHASA INDONESIA)		2009.03.31		文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(2006年度)選定「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズNo.15として、大東文化大学国際関係学部が発行したインドネシア語テキスト。シリーズNo.2の改訂版。佐々木信子、キスワリ・スカルワティとの共著。全124頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「教育重視型大学への自覚的転換を！」		2008.11.07		大東文化大学 FD 委員会が主催した教職員を対象とする FD フォーラムにおいて、本学の退学者の現状、1年生の学習と生活状況、初年次教育への取り組みなどについて講演を行った。 (2008年11月7日)			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 「中途退学者を少なくするために」		2007.06.04		大東文化大学の8学部長連名で出された退学者問題についての報告書を取りまとめ、現状の分析と対応策の提言を行った。 (2007年6月4日)			
2) 「退学者を少なくするために」		2008.07.07		退学者を減らすために、大東文化大学の退学者の現状を分析し、2008年度に取り組むべき対応策と目標設定をまとめた報告書を作成した。 (2008年7月7日)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「プラムディヤ『人間の大地』四部作」	単	2009.01.30	ミネルヴァ書房	ミネルヴァ評論叢書(文学の在り処)別巻3として刊行された千石英世・千葉一幹編著『名作は隠れている』の1編。プラムディヤ・アナンタ・トゥールの歴史小説『人間の大地』4部作の意義を論じた。188頁~198頁。			
論文							
その他							
1 「海外の文学:インドネシア」	単	2005.03.25	『毎日新聞』	プラムディヤ・アナンタ・トゥールの文学活動についてのエッセイ。			

2	「文学の力 生涯追求」	単	2006.05.13	『信濃毎日新聞』	プラムディヤ・アナンタ・トゥールの追悼記事。
3	「ペンを信じ不正義と戦う」	単	2006.05.15	『朝日新聞』	プラムディヤ・アナンタ・トゥールの追悼記事。
4	「政治を離れた批評が可能に」	単	2006.06.02	『東京新聞』	プラムディヤ・アナンタ・トゥールの死と彼の死後のインドネシア文学界についてのエッセイ。
5	「世界の文学：インドネシア」	単	2007.06.14	『東京新聞』	プラムディヤ・アナンタ・トゥールの小説『ガラスの家』についてのエッセイ。
6	プラムディヤ・アナンタ・トゥール『ガラスの家』	単	2007.08.15	めこん	翻訳書。Pramoedya Ananta Toer の歴史大河小説4部のうちの第4部の翻訳。731頁。『人間の大地』『すべての民族の子』『足跡』と合わせてこの4部作の翻訳で第59回読売文学賞（研究・翻訳賞）を受賞した。
7	「大文字の歴史から消し去られた人間の肉声を聞く」	単	2008.08.01	『をちこち』第24号 国際交流基金	特集「変わりゆくインドネシア」の1編として、インドネシア文学の魅力について論じたエッセイ。32頁～33頁。
8	「東南アジア現代文学の眺望——作家、歴史、社会」	単	2008.11.30	「東南アジア学会」秋季大会	東南アジアの現代文学をめぐって行われたシンポジウムのコメンテーターを務めた。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.01 ～ 現在	東南アジア学会会員
2	2004.00.00	文部科学省 2004 年度文部科学省科学研究費第一次審査委員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	片岡 弘次	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 詩の会 (ウルドゥー語)		2005.12.03	ウルドゥー1、2及びウルドゥーI、IIの学生に1ヶ月以上まえにウルドゥー語の詩を与えて読む練習をさせる。東京近辺、および関西在住のパキスタン人を集め、パキスタンで行なわれているようなスタイルで詩の会をする。				
2) 詩の会 (ウルドゥー語)		2006.12.16	ウルドゥー1、2及びウルドゥーI、IIの学生に1ヶ月以上まえにウルドゥー語の詩を与えて読む練習をさせる。東京近辺、および関西在住のパキスタン人を集め、パキスタンで行なわれているようなスタイルで詩の会をする。				
3) 詩の会 (ウルドゥー語)		2007.12.08	ウルドゥー1、2及びウルドゥーI、IIの学生に1ヶ月以上まえにウルドゥー語の詩を与えて読む練習をさせる。東京近辺、および関西在住のパキスタン人を集め、パキスタンで行なわれているようなスタイルで詩の会をする。				
4) 詩の会 (ウルドゥー語)		2008.11.29	ウルドゥー1、2及びウルドゥーI、IIの学生に1ヶ月以上まえにウルドゥー語の詩を与えて読む練習をさせる。東京近辺、および関西在住のパキスタン人を集め、パキスタンで行なわれているようなスタイルで詩の会をする。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『ウルドゥー語』(大東文化大学国際関係学部)		2009.03.31	文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(2006年度)選定『アジア理解教育の総合的取り組み』刊行物シリーズNo.13でウルドゥー語の教科書を作成する。 監修 片岡弘次 著者 堀江弘道 総頁数 162頁				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 'Japan men Ghalib'についてウルドゥー語で発表		2006.08.29	1st International Urdu Conference, Government College University, Faisalabad				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『ガーリブ詩集』	単著	2006.02.25	花神社	『ディーワーネ・ガーリブ ガーリブ詩集』の全訳。それぞれの詩に注をつける。最後に「ガーリブとその詩」の論文をつける。論文内容は次のとおり (一)ムガル帝国の崩壊 (二)詩人ガーリブの住む町デリー (三)狂いたける天才詩人ガーリブ (四)『ガーリブ詩集』の詩と表現 総頁数 487頁中(363)-(485)頁			
2 イクパール詩集『隊商の旅立ちを告げる銅鑼の音』	単著	2008.05.25	大東文化大学国際関係学部	全訳。それぞれの詩に注をつける。最後に「詩集『隊商の旅立ちを告げる銅鑼の音』とイクパール」の論文をつける。総頁数 312頁			

論文				
1 『ガーリブ詩集』と編年体の観点から見た『ガーリブ詩集』	単著	2005.03.31	大東文化大学紀要第 43 号	1. 町で売られる『ガーリブ詩集』の版はどれを基準に作られたものか 2. 今まで出された『ガーリブ詩集』 3. 年代別『ガーリブ詩集』総頁数 355 頁中 (329) - (337) 頁
2 ガーリブと『ガーリブ詩集』のアンソロジー	単著	2006.03.31	大東文化大学紀要第 44 号	1. 『ガーリブ詩集』のアンソロジー 2. 『ガーリブ詩集』の中より 3. 『ガーリブ詩集』のアンソロジーと時機総頁数 355 頁中 (275) - (292) 頁
3 Diwan Ghalib ka Japani zaban men tarjmah	単著	2006.12.31	Sukhan 2006, Punjab University	1. 定本『ガーリブ詩集』について 2. カーリーダース・グプター・リザー 3. 日本語訳『ガーリブ詩集』の特徴 4. 日本における反響 総頁数 265 頁中(43)-(52)頁
4 映画「七つの海を越えて」とイン・パ分離独立の難民	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要第 46 号	1. 「七つの海を越えて」と移民問題 2. イン・パ分離独立の難民と小説 3. 難民二世に対する面接調査 総頁数 546 頁中(115)-(130)頁
5 イン・パ分離独立の難民に対する面接調査	単著	2009.03.31	大東文化大学紀要第 47 号	1. 分離独立により難民の発生 2. 難民文学 3. パーキスターンでの面接調査 4. インドでの面接調査 総頁数 424 頁中(101)-(120)頁
その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1974.03.00	～	現在	日本印度学仏教会会員 (平成 8 年度～平成 14 年度評議員、平成 15 年度～平成 16 年度理事、平成 17 年度～現在評議員)
2	1988.04.00	～	現在	日本パキスタン協会会員
3	1989.10.00	～	現在	日本南アジア学会会員
4	2002.04.00	～	現在	日本国際文化学会会員 (平成 14 年度～平成 16 年度理事)
5	2003.10.01	～	2005.03.31	国際協力機構駒ヶ根青年海外協力隊訓練所駒ヶ根青年海外協力隊訓練所語学諮問委員
6	2008.10.24	～	現在	日本翻訳家協会会員
7	2009.03.09	～	2010.03.31	国際協力機構駒ヶ根青年海外協力隊訓練所駒ヶ根青年海外協力隊訓練所語学諮問委員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	小泉 康一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1)		2004.04.00	(2004年4月～現在) タイ語の授業ではほぼ毎回小テストを行い、履習度を確認し、個別に指導している。成績優秀者の名前は公表し、激励を与えている。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) タイ語読本		2008.03.31	大東文化大学国際関係学部 このテキストに収録された文章は、タイの新聞、タイの小学校上級生の国語教科書、小説、物語、評論、旅行ガイド、論文、大学の広報紙など、多種多様なジャンルから選ばれている。このテキストの目的は、タイ語の基礎を学び、文法をひとつと学習した学生が、一段上のタイ語力を作ることがその目的である。協定校チューラーロンコーン大学文学部の二人の教師との共著。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 国際強制移動の政治社会学	単	2005.02.15	勁草書房	「強制移動」という新たな分析視角から難民を中心とする多様な国際強制移動民の類型化と相違の解明を通じて、具体的な施策・援助のあり方を包括的に研究。総頁 393 頁+索引他 20 頁。		
論文						
1 環境変化と強制移動ー環境難民の用語は適切かー	単	2005.03.31	大東文化大学紀要<社会科学・自然科学>第 43 号	環境難民の語は、政策担当者に無視されがちだったこの種の移民に光をあてたのはよいが、個人や家族が避難する理由を一つに限定してしまう怖れがある。環境要因に焦点をあわせることは、現在その権利の恩恵にある人から、庇護の権利をとりあげることになる。もし環境難民の新しい範疇が国際法で認められるなら、現在使われている難民条約の難民の使用法を補い、既にある難民の定義を損わないように工夫されるべきである。B5 版、総頁 423 頁中 15 頁から 36 頁。		
2 開発と非自発的定住ー巨大ダム移転民の社会的結果と変化ー	単	2006.03.31	大東文化大学紀要<社会科学>第 44 号	強制移動の一分野である開発移転民の状況の中で、強制移転と定住の関係を理論的に考察した。単なる原因と結果に焦点をあわせるのではなく、両者のより複雑な関係を調べる必要がある。両者の相互関係において、そして長期的に持続可能な開発過程との関係において、その特質を正確に分析することに努めた。B5 版、総頁 280 頁中、1 頁から 52 頁。		

3	国家、国際基準と国際 難民制度	単	2007.03.31	大東文化大学紀要<社会科学>第45号	この論文は、国際難民制度の分析視点を世界史的な文脈の中におき、難民移動を近代化とグローバル化、特に第二次世界大戦以後の変化の中に位置づけてみた。B5版、総頁317頁中51頁から108頁。
4	強制移動と社会結 束：強制移動民の社会 統合の決定要因	単	2008.03.31	大東文化大学紀要<社会科学>第46号	難民への状況が厳しさを増す中で、恒久的解決策の一つとしての再定住と、その結果としての統合の意味を考察した。この論文の課題は、主に理論的、概念的なものだが、同時に政策志向的でもある。B5版、総頁320頁中1頁から37頁。
その他					
1	英国における条約難 民及び庇護申請者等 に対する支援状況調 査報告	共	2007.01.31	(財) アジア福祉教育財団 難民事業本部	英国での難民受け入れ政策を調査、さらに庇護申請手続き、条約難民や庇護申請者に対する語学教育・就職斡旋の状況、庇護申請中の人への支援を調査した際の報告書。総37頁。
2	英国における条約難 民及び庇護申請者等 に対する支援状況の 調査報告会(於：国連 大学エリザベス・ロー ズホール)	共	2007.02.06	(財) アジア福祉教育財団 難民事業本部、UNHCR 共催	英国での難民及び庇護申請者等の受け入れ政策と理念について報告。
3	スペインにおける条 約難民及び庇護申請 者等に対する支援状 況調査報告	共	2008.00.00	(財) アジア福祉教育財団 難民事業本部	スペインでの難民受け入れ政策を調査した際の報告書。総68頁。
4	スペインにおける条 約難民及び庇護申請 者等に対する支援状 況の調査報告会(於： JICA地球広場)	共	2008.05.29	(財) アジア福祉教育財団 難民事業本部	スペインでの難民及び庇護申請者等に関して、同国の政策と理念を報告。
5	日本におけるインド シナ難民の定住に関 わるシンポジウム (於：国連大学エリ ザベス・ローズホール)	共	2008.08.28	国連大学・UNHCR共催 (於国連大学)	「リサーチ概念に関する理論的枠組み」を報告。

III 学会等および社会における主な活動

1	1991.04.00	～	現在	国際強制移動研究会 (The International Association for the Study of Forced Migration, Oxford, UK) 会員
2	1992.00.00	～	現在	日本国際政治学会会員 (1996年7月～2004年7月 評議員)
3	1992.01.00	～	現在	日本国際開発学会会員 (1998年1月～2000年1月「開発と文化」分科会主査)
4	1992.01.00	～	現在	日本平和学会会員 (1996年1月～現在「難民・強制移動民研究」分科会主査)
5	1993.06.00	～	現在	国際開発学会 (Society for International Development, Italy) 会員
6	1998.04.00	～	現在	日本国際連合学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科		職名	教授	氏名	高桑 守	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)			2007.08.00	中国中央民族大学へ現地研究として学生 32 名を引率指導 (2007 年 8 月～9 月)			
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 漁民社会研究の新たな地平	単	2006.03.00	山口県史の窓 (山口県環境生活部県史編さん室)	『山口県史資料編民俗 2』の刊行にともない、漁民社会の民俗学的研究の問題点と展望を概説した。1～4 頁			
2 なりわいー農業 家族と社会	単	2006.03.00	野々市町史 民俗と暮らしの事典 (石川県野々市町)	「なりわいー農業」町域の生業のうち農業の歴史と実態について民俗学的観点より概説した。117-134 頁、「家族と社会」町域の家族生活や村落生活の実態について民俗学的に概説した。69～106 頁			
3 脇野沢の歴史	共著	2008.03.25	青森県むつ市脇野沢支庁	旧脇野沢村の古代から現代に到る歴史を詳述したもので、「脇野沢漁業のうつりかわり」「『婦の里』にみる脇野沢漁協婦人部の活動」「漁村女性の生活史」の項を単著で担当執筆した。330～364 頁			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1971.06.00	～	現在	日本文化人類学会会員			
2	1971.06.00	～	現在	日本民俗学会会員 (1983.10～1989.9 評議員・理事 1992.10～1998.9 評議員 1995.10～1998.9 理事 2001.10～2007.09 評議員・理事)			
3	2004.04.00	～	現在	千葉市千葉市文化財保護審議会委員			

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	田辺 清	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 図解ダ・ヴィンチの謎 (監修)	編著	2004.09.16	宝島社	邦訳も出版され話題となったダン・ブラウン著『ダ・ヴィンチ・コード』(2003)で扱われたレオナルドの代表的絵画のそれぞれの問題点について一美術史家の立場で田辺が解明しブラウンの著作に疑問も投げかけている。そして『ダ・ヴィンチ・コード』の攻略本としての内容になっている。(総頁数 96 頁)			
2 図解ダ・ヴィンチの暗号 (監修)	編著	2005.06.10	宝島社	昨年の『図解ダ・ヴィンチの謎』につづく『ダ・ヴィンチ・コード』攻略本の第 2 弾。今回は図像解釈学にまで踏み込み、近代の作品にまで視野をひろげより多角的にレオナルドの世界を考察。全体的に『謎』よりも深い内容をめざしている (総頁数 128 頁)			
3 ダ・ヴィンチ・コード展図録 (監修)	編著	2006.04.27	森アートセンターギャラリー	2006 年 5 月 20 日の世界同時公開を控えた映画『ダ・ヴィンチ・コード』に合わせて開催した展覧会の図録。田辺は展覧会並びに図録の監修者として全体にかかわったが図録では「はじめに」(pp.10-11)と第 3 章「レオナルド・ダ・ヴィンチの実像」(pp.89-105)を執筆。レオナルドの人間性、イメージ、未完成の問題、宗教観そして時代背景等について考察、展覧会のテーマとしても言及している。(総頁数 120 頁)			
論文							
1 東西の肖像画にみられる「心の動き」について	単著	2004.11.25	『東洋研究』第 153 号 (大東文化大学東洋研究所)	ヨーロッパのルネサンス絵画を中心に肖像画にみられる「理想化」の背景にある「心の動き」について東洋と西洋の作品から考察、論述した。(総頁数 138 頁中 31 頁-42 頁)。(レフェリー有)			
2 ヴァザーリ、ペイター、イエイツ……レオナルド・ダ・ヴィンチ《モナ・リザ》をめぐって	単著	2005.03.31	『大東文化大学紀要』(人文科学) 第 43 号	レオナルドの名画《モナ・リザ》をめぐっての数ある批評のうち、ヴァザーリ、ペイター、イエイツをとりあげ共通して言及している「背景描写にみられる幻想性」についてイギリスの文学者ウォルター・ペイターに力点を置きながら論じた。(総頁数 355 頁中 339 頁-343 頁)			

3	ラファエッロの素描 —古典古代の起源と 東方—	単著	2005.11.25	『東洋研究』第157号(大 東文化大学東洋研究所)	ラファエッロの代表的事業のひとつにヴァチカン宮殿の 装飾があげられるが同宮殿・ヘリオドロスの間にあるプレス コ壁画「ヘリオドロスの間」にみられるひとりの若者の表現、 伝記作家のヴァザーリが賞賛するその下絵のひとつはルー ヴル美術館に所蔵されている。その下絵のみごとな毛髪表現 は1998年に発見された古代ギリシアのブロンズ像《踊るサ テュロス》にも相通じるものがあり、その影響関係を考察し た。(総頁数132頁中(25)頁—(31)頁)(レフェリー有)
4	W.B.イエイツ『レダと 白鳥』の視覚的源泉に ついて	単著	2006.03.31	『大東文化大学紀要』〈人 文学〉第44号	イエイツの詩『レダと白鳥』(1923)の発想源となった美術 作品としてはエトルスク時代の低浮雕彫りやミケランジェロ が構想した油彩画等がこれまで指摘されてきたが、詩の内容 によりふさわしいものとしてレオナルド更にはコレッジョ の作品にも可能性があることにふれた。そして19世紀のモ ローの作品により合致点が見られることを述べている。(総 頁数518頁中323頁—333頁)
5	レオナルド・ダ・ヴィ ンチと東方—《聖ヒエ ロニムス》をめぐって —	単著	2007.11.25	『東洋研究』第165号(大 東文化大学東洋研究所)	1993年に日本でも公開されたレオナルドの名画《聖ヒエロ ニムス》について、特に画面手前で横たわるライオンを堂々 としたポーズを中心に東方の美術に着想源があるかどうか を検討。レオナルドがライオンのイメージを取材した可能性 のある『黄金伝説』自体が東方起源であることもあり得る。 しかし造形的にみても中国・南宋時代の仏画やアッシリアの レリーフさらにササン朝ペルシアのモザイクとの関連性も 否定できずレオナルドの東方への関心について考察する一 例として《聖ヒエロニムス》の存在価値があることを強調し た。(総頁数150頁中(1)-(13)頁)(レフェリー有)
6	レオナルド・ダ・ヴィ ンチの《洗礼者聖ヨハ ネ》について—「形態」 と制作年代—	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要』〈人 文学〉第46号	《モナ・リザ》とともにレオナルドが最晩年まで手を加えて いたとされる神秘的な傑作《洗礼者聖ヨハネ》。当初、〈受胎 告知の天使〉を構想していたポーズにドナテッロ、チェーザ レ・ダ・セストさらにラファエッロ、コレッジョといった先 達や後輩の画家たちとの影響関係を通じて〈洗礼者聖ヨハ ネ〉へと形態の発展をとげた本作品はレオナルドのローマ時 代にあたる1514・5年に大部分が描かれ、その死の直前まで 加筆されていたと確認し得る。そして《モナ・リザ》同様、 謎の微笑をなげかける聖ヨハネにレオナルドは理想の人間 像を託したと思われる。(総頁数577頁中131頁—141頁)
7	ルネサンス絵画と中 国陶磁器	単著	2008.12.25	『東洋研究』第170号(大 東文化大学東洋研究所)	レオナルド・ダ・ヴィンチが《龍》を描いた黒チョーク素描 には「伝統的な中国風の龍」という指摘もかつてあったがレ オナルドをはじめルネサンスの美術家が描く龍あるいは類 似した動物にはしばしば東洋的な表現がみられる。そこで筆 者はイタリアに入った可能性のある中国陶磁器のモチーフ を分析することで東西交流の具体的成果を問いかけた。 (総頁数142頁中(1)-(11)頁)(レフェリー有)
8	レオナルド・ダ・ヴィ ンチの《モナ・リザ》 —「宿命の女」の系譜 から—	単著	2009.03.31	『大東文化大学紀要』〈人 文学〉第47号	レオナルドが描いた最もよく知られている名画《モナ・リザ》 については、すでに多くのモデル論争がくりひろげられてい る。今回、筆者が着目したのはいわゆる《裸のモナ・リザ》 として知られている工房作のカルトンの存在から本来はヌ ードの半身像として《モナ・リザ》が講想された可能性であ る。そしてそのカルトンとの関連性も考えられるルネサンス 時代の女性の半身像の系譜をたどることによってモナ・リザ も「宿命の女」のひとりとしてとらえ得ることを論じた。(総 頁数462頁中121頁—130頁)
その他					
1	〔学術的エッセイ〕 W.B.イエイツとレオ ナルド・ダ・ヴィンチ	単著	2004.09.10	『成城文藝』第188号(成 城大学文学部紀要)	アイルランドの詩人・劇作家であるW.B.イエイツは詩集『神 秘の薔薇』(1897)のエピグラフに「レオナルドの手記から の引用」としてオウィディウスの『変身物語』の一節を用い ている。同詩集では他にもレオナルドの手記からの一文がみ られるなどレオナルドの精神とアイルランドの「文芸復興」 を求めていたイエイツとに相通ずるものがあつた点があ がえる。このエッセイではレオナルドの作品や思想とイエ イツの詩を様々に比較しながら以上の問題を検討している。 (総頁数102頁中36頁—41頁)。(レフェリー有)

2	『ベルリンの至宝展 ーよみがえる美の聖 域』カタログ	単著	2005.04.05	東京国立博物館他	ベルリンの博物館群がほこる中世ヨーロッパ彫刻並びにヨーロッパ古典絵画の名品 12 点の翻訳。原著者はベルリン国立博物館群の学芸員。(総頁数 263 頁中 148 頁ー177 頁: 監修・後藤健、千足伸行)
3	レオナルド・ダ・ヴィンチの謎	単著	2006.06.03	『サイエンスウェブ』 (2006 年 7 月号) (株) サ イエンス・ウェブ	映画『ダ・ヴィンチ・コード』の冒頭にも登場するレオナルドの有名な素描「ウィトルウィウスの人体図」を中心に科学者としてのレオナルドを分析した。この素描は紀元前 1 世紀の建築家ウィトルウィウスの理論を図解したものであるがその「万能の天才」ぶりがよく示されている作品でもある。モデルはレオナルド自身といわれているが、「経験の弟子」と自負するレオナルドの超然とした様子がうかがえる。(総頁数 88 頁中 34 頁ー37 頁)
4	『クリーブランド美術 館展』カタログ図版 解説扉 (1~5 章)	単著	2006.09.09	森アーツセンターギャラ リー	アメリカ屈指の美術館のひとつとして知られているクリーブランド美術館の近代美術 60 点を紹介する展覧会の図録。印象派からイギリス諸島のモダンアートの発展を 5 部構成で展示し図録各章の扉文を翻訳した。原著者はクリーブランド美術館の学芸員。(監修・千足伸行 総頁数 160 頁中 25、61、85、103、123 頁)
5	DVD 美術館: 世界名 画 Best100 (監修)	単著	2007.03.23	インター・カルチャー・ク ラブハピネットピクチャー ズユニット	ハイビジョン・カメラを駆使した鮮やかな映像とクラシック音楽の BGM でヨーロッパ名画 100 点をテーマ毎に全 5 巻で紹介する DVD のシリーズの総監修 (DVD 各 1 時間、作品解説つき、テキスト全 32 頁)
6	高草茂著『「モナ・リ ザ」は聖母マリアーレ オナルド・ダ・ヴィン チの真実ー』	単著	2007.11.24	『図書新聞』2847 号 [発 行・(株) 図書新聞]	レオナルド研究家として知られる高草茂氏の 462 頁に及ぶ大著 (ランダムハウス講談社、2007) の書評。本書は膨大な量に及ぶレオナルドの手稿中の記述を中心にすすめている。ためレオナルドの「自伝」を読むような魅力にあふれている。評者は評者自身も関心を持っているレオナルドの蔵書からレオナルドの思想そして画家としての本質を分析した章 (本書 185-9 頁) を軸にして手稿さらに素描によるレオナルド芸術の解明の重要性を強調した。(全 8 面中 4 面)
7	〔研究ノート〕レオナ ルド・ダ・ヴィンチの 背景風景ー水墨画と の関連についてー	単著	2008.03.31	『大東アジア学論集』第 8 号 (大東文化大学大学院ア ジア地域研究科)	2007 年 3 月から 6 月にかけてわが国ではじめて公開され大きな話題になったレオナルドの《受胎告知》。その背景風景については従来からフランドルの性格が指摘されてきたが筆者は中国の南宋中期や日本の室町時代の水墨画にみられる幽玄で象徴的な要素をむしろ見出しレオナルドの絵画論と中国の画論との比較を根底に論じている。決して新しい話題ではないがレオナルドと東洋絵画との関連について考察することは 21 世紀の今日でも有意義と思う。(総頁数 142 頁中 13 頁ー17 頁)。
8	レオナルド・ダ・ヴィ ンチの《洗礼者聖ヨハ ネ》についてー制作年 代を中心にー	単著 (口頭 発表)	2008.05.10	美術史方法論に関する研究 会 (於: 学習院大学)	レオナルド最晩年の名画《洗礼者聖ヨハネ》の制作年代について影響関係が考えられる他の美術家の同主題画との比較・分析を通して 1514-5 年に大部分が描かれていた可能性を論じた。
9	高草茂著『名画に描か れた女性たちーレン ブランド、フェルメル 、ゴヤそしてドラク ロワは何を語るのか ー』	単著	2008.12.13	『図書新聞』2897 号 [発 行・(株) 図書新聞]	美術史家高草茂氏がランダムハウス講談社より 2008 年 10 月に刊行した好著の書評。『旧約聖書』のバト・シェバから近代の孤児に至るまでの女性像の変遷をドラスティックな視点でとらえた点に魅力があることを強調した。(全 8 面中 3 面)

III 学会等および社会における主な活動

1	1977.04.01	～	現在	美術史学会東支部会員
2	1977.10.01	～	現在	美学会東部会会員
3	1984.04.01	～	現在	民族芸術学会会員
4	1989.04.01	～	現在	アート・ドキュメンテーション研究会会員
5	2002.04.01	～	現在	地中海学会会員
6	2003.04.01	～	現在	三田芸術学会会員

7 2009.04.01 ~ 現在

西洋中世学会会員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	原 隆一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) ○授業内容のインターネットでの公開等:			まだ取り組んでいない。将来は前述した卒論集『チャイハーネ』や現地研修報告書『ヴァリキヤラー』などを公開したい。				
2) ★採用決定等における評価内容 ★各大学における自己点検・評価結果 ★学生による授業評価、教員による相互評価等の結果		2007.00.00	2007 年度後期の学生による授業評価は次のとおりであった。①西アジア地域研究 B「西アジアの社会と暮らし B」: 履修登録者数 86 名、授業評価アンケート回答数 35 名。総合評価である「授業への満足度」は、3.6 であった。②国際関係各論 6「社会学概論 B-アジアの環境と開発の社会学」: 履修登録者数 62 名、授業評価アンケート回答数 33 名。総合評価である「授業への満足度」は、3.9 であった。両者とも内容まで鋭く入り込んだコメントはなく、「板書が読みにくい」などの技術的指摘が多かった。シラバス作りが不十分である。シラバスから教科書的なものをまとめ準備していく必要がある。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) ★授業や研修指導などで使用する著書、教材など:			これまで、自分が原稿執筆した単行本や論文などが出版社から市販されているものがいくつかある。それを参考書として図書館に置いている。講義用にはレジャメプリントを配付しているが、体系的な教材作りの必要性を感じている。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) ★大学から受け入れた実習生等に対する指導 ★日本薬剤師センター等の職能団体の依頼による研修指導等 ★訴訟・審判・監査・与信・企業提携・研究開発等の専門的な実務に関する教育・研修 ★大学の公開講座や社会教育講座における講師、教育実績に対する表彰等							
2) ★大学教育に関する団体等における活動、教育実績に対する表彰等 ★国家試験問題作成等							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『イランを知るための 65 章』	共著	2004.09.00	明石書店	イランを知るための入門書である。◎岡田恵美子ほか編著である。現地研修に便利なガイドブックとなっている。総ページ数 392 ページ。原は「ノウルズ文化圏-イランの地理・風土・民族」(222~227 ページ)と「ザーグロスの南、フェールスの春-イラン南部の風景」(228-234 ページ)を執筆。			

2	『環ヒマラヤ広域圏における社会と生態資源変容の地域間比較研究』	共著	2006.03.00	平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（2）研究成果報告書（京都大学東南アジア研究所、平成 18 年 3 月）	4 年間にわたる文部科学省科学研究費補助金の共同研究の成果である。総頁数 276 頁。研究代表者は◎山田勇京都大学教授。17 名の参加者が執筆している。ヒマラヤ広域圏をめぐる自然生態資源と社会変容の総合的比較研究である。共同研究分担者である原は、「オアシス農村の水と草地利用変化－イラン・ザールグロス山地の事例から－」（pp.101～108）を執筆した。
3	『アジア歴史地理 2 都市と農地景観』	共著	2008.01.00	朝倉書店	朝倉書店刊の「アジア歴史地理全 3 巻」シリーズのうち、第 2 巻目にあたる刊行物である。（◎秋山元秀ほか編）このなかで、「西アジア－イランの水・農地・農村の変容－」（pp.347-358）を担当、執筆した。本書の企画は、地図を中心とする図版や写真などを多く使用することによって、アジアの歴史地理に関する具体的な知識を提供することにあつた。担当部分の執筆は、乾燥西アジアの水資源利用と地域社会の 50 年における変化を分かりやすく図示しながら説明した。
4	『イラン・ザールグロス山地コル川流域地方の 40 年の社会変容』	編著	2009.03.31	平成 16（2004）年度～平成 19（2007）年度科学研究費補助金基盤研究(B)海外学術調査研究成果報告書（大東文化大学国際関係学部、平成 21 年 3 月）	4 年間にわたる文部省科学研究費補助金による共同研究の成果である。A4 版総頁数 255 頁。研究代表者は◎原隆一大東文化大学国際関係学部教授で、研究分担者は、3 名の構成であつた。執筆は全 7 章、255 頁からなり、研究代表者の原隆一、分担者の後藤晃、南里浩子、それに研究協力者のアブドリ・ケイワンが分担執筆した。研究代表者である原は、「イランの水・農地・農村の変容・マルヴダシュト地方の事例から」（PP.239-250）の執筆他、全体の編集を行った。
その他					
1	「イラン南部における乳加工体系の多様性」	共著	2004.00.00	『砂漠研究』14-2、2004 年	原隆一（平田昌弘） pp.115-120 2004 年春の現地共同フィールド調査に基づいた論文。イラン南部の遊牧民の乳加工体系の多様性を共同研究で行ったもの。
2	“Socio-Political Changes in Iran (Qajar to Now)”	共著	2006.03.31	『大東アジア学論集』第 6 号、pp.105-120、2006 年 3 月	原隆一 Saeid Zahed セイエッド・ザールヘド教授（海外招聘研究員）の論文の解説と著者紹介。原は、pp.121-122 を執筆。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1982.04.00	～	現在	日本イラン研究会会員	
2	1985.04.00	～	現在	日本オリエント学会会員	
3	1985.04.00	～	現在	日本中東学会会員	
4	1998.04.00	～	現在	鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究員「砂漠化対策のための経済・社会開発」	

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科		職名	教授	氏名	樋口 桂子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 宇宙空間における表現	単著	2006.03.31	大東文化大学紀要第 44 号 人文科学編	重力の無い地点においても、地上のような絵画空間の表現は可能であるのか。人類の美意識は大地 (地球) の上に足を据えて立つという、天の下・大地の元に支えられて立つという、地球を中心とする感官の中から生まれた。ところが人類が宇宙空間を目指すことになって以来、このような観点は不動のものではなくなってきた。当該論考は、それでもなお、こうした新たな意識が、実はすでに遠い過去に考察されていたこと、それはまた東西文化の差異をも語り出すものとなっていたことを、具体的に証明していく。249～261 頁。レフェリー無。			
2 音色のレトリック	単著	2008.03.31	大東文化大学紀要第 46 号 人文科学編	音色と色との関連をレトリックの見地から論じた。視覚的な色の記述は客観的であるがゆえに共感覚の中心として議論されて来たが、色の記述方法についてはこれまであまりなされて来たとは言えない。この問題を『万葉集』の中の色と音との記述仕方、およびピアノの発展史と音楽演奏の評論仕方に拠りながら論述した。95～113 頁。レフェリー無。			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1973.04.01	～	現在	美学会会員			

2 2007.01.01 ~ 2008.12.31

独立行政法人 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	本田 孝一	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『アラビア語が面白いほど身につく本』 (アブドラー・アルモメン著)	監修	2004.06.00	中経出版	(240 頁)		
2 『パスポート日本語アラビア語辞典』	共著	2004.12.00	白水社	(780 頁) イーハープ・イバード氏と共著		
3 『歴史学事典』		2005.12.00	弘文堂	アラビア書道の項を執筆		
4 『たのしいアラビア語』第9巻		2006.04.01	本田アラビア語研究所	(150 頁)		
5 (アラビア書道作品集) 『アラビア書道の宇宙』本田孝一作品集		2006.09.20	白水社	(149 頁) 大英博物館収蔵の3作品を含め、カラー作品 35 点プラスモノクロ作品 10 点掲載		
6 『たのしいアラビア語』第6巻復刻版画版		2007.00.00	本田アラビア語研究所	(152 頁)		
7 『アラビア書道講座』 (テキスト1. ナスヒー書体)		2008.12.00	日本アラビア書道協会	(108 頁)		
論文						
その他						
1 (講演) 「日本社会におけるアラビア書道への関心の高まり」		2004.05.30	アラブ・イスラーム学院	於シンポジウム『日本とイスラームの文化対話』(アラビア語にて発表)		

2	(講演)「イスラム文化の華・アラビア書道」	2004.11.06	早稲田大学、国際言語文化研究所	於シンポジウム『イスラム世界の文化と言語』(アラビア書道についての概説と、実演)
3	(講演)「アラビア書道の世界」	2004.11.14	国立民族学博物館	於アラビアンナイト大博覧会 フランスのアラビア書道家ハッサン・マスウーディー氏との共同の講演会とワークショップ
4	(テレビ出演)NHK教育テレビ『アラビア語会話』(ゲスト出演3回)	2004.12.00		「アラブの文化」というコーナーにおいてアラビア書道を概説。
5	(講演)「アラビア書道の魅力」	2004.12.08	東京外国語大学、アジア、アフリカ言語文化研究所	於『線と点アラビア文字の旅』展示会 アラビア書道芸術紹介とワークショップ
6	「神聖なる書を美しい文字で」	2005.06.00	遠近(国際交流基金機関紙)No.5	(4頁)
7	「大英博物館アラビア書道展に招待されて」	2005.06.00	日本クウェート協会報	(2頁)
8	「アラビア語のすすめ」(語学リレーエッセイ)	2005.07.00	白水社	(ネット上で紹介)
9	「アラビア書道」	2006.03.05	朝日新聞社「シルクロード紀行」No.20	(2頁見開き)
10	(シンポジウム)「アラブ世界、そこが知りたい」	2006.12.15	東京工業大学	エジプト国大使などを含めた4名のパネラーの一人として参加。アラビア書道芸術の美を解説。

III 学会等および社会における主な活動

1	1992.04.01	～	現在	日本オリエント学会会員
2	1996.10.01	～	現在	エジプト公立アラビア書道協会恒久名誉会員
3	2000.01.01	～	現在	国際書道連盟客員審査員(アラビア書道部門担当)
4	2004.02.08	～	現在	アラブ・イスラーム学院アラビア語オリンピック招待審査員(毎年行われているアラビア語関係の競技会におけるアラビア書道部門での審査委員)
5	2006.05.01	～	現在	日本アラビア書道協会会長(日本におけるアラビア書道の紹介・普及を目的として2006年に設立された協会の会長に就任)

(表 25)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	本田 孝一	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等						
1 アラビア書道作品（2点）展示	国立民族博物館、於アラビアンナイト大博覧会	2004.11.00							
2 アラビア書道作品展示	東京外国語大学、アジア・アフリカ言語文化研究所	2004.12.00	（「青の砂漠」、「赤の砂漠」、「文字の宇宙」、「水の聖板」の4点出品）						
3 共同通信社『イスラームの歴史』表紙ロゴ		2005.04.00	（「イスラームの歴史」というアラビア語をアラビア書道でデザインしたもの）						
4 “Making of the Master” 展示会招待参加	大英博物館（イスラム美術收藏部）	2005.05.00	（イジャーズ〈書道の印可〉を出品 大英博物館、アラビア書道作品3点永久收藏（「神の顔」シリーズ3部作）。						
5 UAEドバイ政府主催「ドバイ国際アラビア書道展」に招待参加	UAEドバイ	2006.03.00	（「緑の宇宙」をはじめとした3点を出品）						
6 “Word to Art” 展に招待参加	大英博物館	2006.05.00	（大英博物館收藏の「神の顔」3部作を展示）						
7 「本田孝一とその弟子たちのアラビア書道展」を開催	アラブ・イスラーム学院	2006.11.00	（本人と弟子の作品、80点ほどを展示）						
8 アラビア書道作品個展	トルコ、イスタンブール IRCICA	2007.11.00	IRCICA（イスラーム歴史・文化・芸術研究センター）において20点の代表作を展示						
9 リヤド「ブックフェア」にて講演3回とアラビア書道の作品展開催とワークショップ	サウジアラビア、リヤド、ジェッダ	2008.01.30							
10 国際会議（「イスラーム地域研究の新しい地平」）にて学術発表とアラビア書道作品展示	マレーシア・クアラルンプル	2008.11.23							

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	教授	氏名	鹿 錫俊	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2005.04.00	出席の確認、理解度のチェック、学生との対話および質疑応答という四つの目的を達成するため、担当する全講義科目において、毎回「受講記録票」を配布し、講義終了時に意見、感想と質問を書かせ、それを分析して、次の講義に反映させるように心がけた。学部によるアンケート調査で、受講生から「毎回書く受講記録票によって理解を深めることができた」、「学生が記入した意見や質問を次の講義の最初に回答してくれたので、興味が引かれた」と評価された。(2005.04.00～2009.03.00)				
2)		2005.00.00	「実践による生きている歴史の修得」をはかるため、二年生と三年生の演習で、「私の日本認識と中国認識」「私の親の世代の日本認識と中国認識」をテーマに、各自で調査を行わせてうえ、発表と交流を実施した。この実践活動の指導により、自分史、家族史と社会史、国際関係史に対する学生の関心を高めた。				
3)		2006.04.00	「受講記録票」による対話式授業をより一層進展させるとともに、映像資料を講義の中に導入し、学外見学も多く実施した。これらを通して、教室内の勉学と教室外の勉学の相互促進と、感性の刺激と理性の昇華の相互補完をはかった。(2006.04.00～2009.03.00)				
4)		2006.00.00	2006年に担当した「現地研修(上海)」において、事前研修・現地研修・事後研修の三段階のそれぞれの特性に合わせて、各週の内容を新たに設定し、同僚から「非常に参考になる」と評価されている。また、上海での引率では、学生に対する学習上の指導と生活上の指導を工夫するのみならず、上海に勤務する日本人若者を招き、実体験を紹介するとともに大東生との座談会を行った。また、研修先が主催する活動に止まらず、農村見学など自前の活動を企画した。そのため、学生から積極的に評価された。				
5)		2007.00.00	「受講記録票」による対話式授業を継続するとともに、演習科目において、「知の週記」という実践的教育を導入。ゼミの学生に対して、見たこと、感じたこと、思ったことに基づくレポートの提出を週一回求めるとともに、それを添削・講評し、物事の見方、文章の書き方、発表と議論の仕方を総合的に指導する。				
6)		2007.09.00	学生との親睦を深め、教室外の教育を図るため、夏休みを利用して3年生との教育合宿を実施、読書・発表・議論を経て、卒業論文への基礎を築くよう、努力した				
7)		2008.00.00	本学大学院および一橋大学大学院(非常勤)での教育において、先行業績の整理、研究方法の修得と自らの研究方向の確認を指導の重点として工夫し、大学院生との討論を深め、積極的な反響を得ている。大学院の入試においては筆記試験と口述試験の中身の改善に努めている。				
8)		2008.04.00	地方の公立大学から都会の私立大学に移動した4年目を契機に、双方での経験と教訓を活かしつつ、全担当科目において講義内容の改訂と教え方の改善をはかっている。(2008.04.00～2009.02.00)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1)	「東アジア国際政治史」	2006.00.00	2006年度から共同作成してきた大学教科書である『東アジア国際政治史』を名古屋大学出版会によって出版、学界から高く評価された。同書は計13章で構成されるが、鹿は第6章、第7章を執筆。(2006.00.00～2007.00.00)				

2)	2008.00.00	チュートリアルの教育において自前の教材を試作するとともに、研究計画の作成→調査と資料収集→草稿の作成と中間発表→討論と修正→完成論文の提出と論文集の編集、というプロセスを辿って、学生による「鹿クラス研究報告集」を編集した。一年生より「多方面の訓練を得た」と評価された。同報告集は今後参考教材として活用できると思う。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1)	2007.06.30	大東文化大学国際関係学部特色G P 「高校生のためのアジア理解講座」で講師を担当
2)	2008.00.00	教務委員として、カリキュラムの改訂に尽力したほか、高校への説明会などの教育活動にも積極的に取り組んでいる。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『中国における共同体の再編と内発的自治の試み』 宇野重昭・鹿錫俊編著	共編著	2005.03.00	国際書院 ISBN 4-87791-148-0	研究代表者として統括していた共同研究「共同体の再編と社会システム：江蘇省居民委員会の実地調査から見た現代中国」の成果をまとめた論文集。宇野重昭、江口伸吾らとの共著。筆者は「ある家庭から見た末端社会の変容」と「中国都市部における社会保障制度の改革」という2章を執筆。(全276頁中の17～38頁と107～130頁)。
2 『150年中美関係史論著目録』 汪熙、田尻利主編	共編	2005.05.00	復旦大学出版社 ISBN 7-309-04395-2	1823年から1990年に至る時期に、中国、アメリカと日本で発表または出版された米中関係に関わる著書、論文および資料集、合計7980余点の目録をまとめたものである。筆者と王立誠、劉永濤、楊玉聖、呉心伯、金光耀との共同編纂による成果。(全603頁)
3 『東亞漢文化圏與中国關係』 石源華、胡礼忠主編	共著	2005.10.00	中国社会科学出版社 ISBN 7-5004-5237-3	石源華、胡礼忠、濱下武志らとの共著。筆者は「日中関係における心理的障害」を執筆。日中両国の民間人を対象に、心理的障害の起源、心理的障害の現状、心理的障害の克服という三つの側面を考察し、日中関係を改善するための提言を行った。(全476頁の中の413-427頁)。
4 『1930年代的中国』 中国近代史研究所編	共著	2006.09.00	中国社会科学文献出版社 ISBN 7-80230-213-7	1930年代の中国に関する国際学術会議の論文集。鹿は「抗戦前期国民政府對日美關係的反應」を執筆。1937年の日中戦争の勃発から1941年の太平洋戦争への突入までの時期における日米関係に対する国民政府の対応を究明(全884頁の中の444～460頁)。
5 『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』 三谷博、金泰昌編	共著	2007.04.00	東京大学出版会 ISBN978-4-13-020143-8	60年以上前の「過去」とその負の遺産について、現代に生きる東アジアの人々はどのように対処すべきだろうか。また、世代・国境を越えて明るい未来を共有できるだろうか。この二つの問題に対する日中韓3国の歴史家らによる考察と回答である。鹿は第7章を執筆。(全364頁中の215-245頁)
6 『膨張する帝国 拡散する帝国——第2次大戦に向かう日英とアジア』 石田憲編	共著	2007.04.00	東京大学出版会 ISBN 978-4-13-030144-2	石田憲、松浦正孝、籠谷直人らとの共著。1930年代からの日本帝国の膨張は、イギリス帝国との緊張関係を招き、アジアにも様々な反応を引き起こした。そのことは、第二次世界大戦にいかなる影響を及ぼしたのか？日英両帝国の膨張・対立とアジアの対応という視点から戦争への道を捉え直した。鹿は第6章を執筆(全257頁中の203-254頁)。

7	『東アジア国際政治史』川島真、服部龍二編	共著	2007.06.00	名古屋大学出版会 ISBN978-4-8158-0561-6	前近代の伝統的国際秩序の変容から現在の東アジア国際政治までを概説した大学用教科書。第1部、近代東アジア国際政治の形成 第2部、変動する東アジア政治 第3部、現代東アジア国際政治の形成と展開という3部に分けて、計13章で構成される。鹿は第6章「満洲事変と日中紛争」、第7章「アジア太平洋戦争と東アジア国際政治の変容」を執筆。(全387頁の中の137-156頁、157-178頁)
8.	『日中関係史の諸問題』	共著	2009.02.00	中央大学出版会、ISBN: 4805714077。	斎藤道彦編。(246頁)
論文					
1	『中国国民政府の対日政策:特にソ連・中国共産党要因との関わりを中心に』(1934-1937年)	単著	2005.06.00	科学研究費補助金基盤研究成果報告書(課題番号14520105)	研究代表者として完成した科学研究費補助研究の成果をまとめたものである。塘沽停戦協定から日中全面戦争に至る過程において、①ソ連要因と中国共産党要因はどのように関わっていたのか、②ソ連・中共要因を巡って日中両国の当局者がなぜ対立を生じたのか、③それは日中戦争とどうつながったのか、という三つの問題を考察した。(全170頁)
2	「満洲事変期における中国の対ソ政策」	単著	2006.05.00	ロシア史研究会・『ロシア史研究』第78号 ISSN0386-9229	満洲事変期における中国の対ソ政策を、当時の実際の状況とそこにおかれていた当局者自身の認識・対応に基づいて検証。①ソ連ファクターを全面的に警戒し、それとの関わりを回避しようとした第一段階、②ソ連ファクターのマイナスの面を警戒しながら、そのプラスの面を評価し、積極的に利用しようとした第二段階、③対日妥協政策の確定と合わせて、対ソ冷淡に転じた第三段階という三段階論を提示した。(46～59頁)。
3	『満洲』残留旧日本軍人に関する調査研究——中国共産党地域における「留用」の諸相を中心に』	単著	2006.06.00	科学研究費補助金基盤研究(B)(2)海外調査成果報告書(課題番号14402010)	研究代表者として完成した科学研究費補助研究の成果である。次の12章に分けて論を展開している。①序論:戦後中国における日本人の留用問題、②終戦後旧満洲地域残留日本人の境遇、③東北中共軍隊の史的沿革、④初期の徴用、⑤内外圧力下の拡大と選別、⑥日本人と東北解放軍医療隊、⑦旧日本軍人と新中国空軍、⑧生活面の待遇、⑨思想面の対応——軍機関紙『健康報』の報道を中心に、⑩管理体制の一断面——民族幹事から「管理委員会」まで、⑪日本人留用者の顕彰 ⑫復員と帰国。(全283頁)。
4	「世界化する戦争と中国の『国際的解決』戦略」	単著	2007.04.00	石田憲編『膨張する帝国 拡散する帝国——第2次大戦に向かう日英とアジア』所収、東京大学出版会 ISBN 978-4-13-030144-2	日中紛争解決策をめぐる国民政府の論理をまとめたうえで、①ヨーロッパに対する情勢判断と講和条件の抑制的設定、②独ソ不可侵条約成立前後の対応、③参戦か中立か——ヨーロッパ戦争への方針をめぐる論争、④講和か抗戦継続か——危機の中の再選択、⑤第2次世界大戦への拡大における中国要因と日本要因という5節を通して、1939年1月から11月に至る時期における中国国民政府のヨーロッパ情勢の観察と対応を考察し、「中国側の国際的解決戦略」という視座から、日中戦争とヨーロッパ戦争、第2次世界大戦との関連性を検討した。(203-254頁)
5	「日中関係における心の問題——歴史と思想の検証から見た壁、傷とズレ」	単著	2007.04.30	三谷博、金泰昌編『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』所収、東京大学出版会 ISBN978-4-13-020143-8	序論で国際関係における心的要因の重みを論じた後、二つの乖離状態から見た心の壁、歴史に負わせられた心の傷、思想の偏頗による心のズレという3節に分けて日中関係における心の問題を分析し、心の特性に合う解決策を提示。(215-245頁)
6	「日本の国際戦略と中日戦争の拡大化——論联接中日戦争と太平洋戦争の一個關鍵原因」	単著	2007.11.00	中国社会科学院近代史研究雑誌社・『近代史研究』総第162期、ISSN1001-6708 CN11-1215/K	日本の国際戦略の考察に基づいて、日中戦争と太平洋戦争を連接させた要因を分析。次の8節から構成する。①日中戦争初期における国際戦略上の対立、②「刺激せず」から刺激への経緯、③日米関係の隔たり、④日米通商条約廃棄通告への反応、⑤ヨーロッパ戦争勃発後の変化、⑥対米緩和の挫折、⑦国際的解決への合流、⑧戦争拡大への契機。(41～61頁)(レフェリー論文)
7	「国民政府对欧戦と結盟問題的対応」	単著	2008.10.00	中国社会科学雑誌社『歴史研究』、2008年第5期、ISSN0459-1909-CN11-1213/K	94～116頁。(査読有)

8	「日ソ相互牽制戦略の変容と蒋介石の『応戦』決定—再考 1935年における中日ソ関係の転換過程」	単著	2008.03.00	軍事史学会『軍事史学』第43巻第3・4合併号(『日中戦争再論』)、ISSN 0386-8877	「中日ソ三国の相互作用」という視点と新資料の分析を加えることで、1935年における蒋介石の外交戦略の変遷経緯の追跡を通じて、対日政策と対ソ政策をめぐる中国の転換過程とそれをもたらした原因を再検討した。(23-63頁)(レフェリー論文)
9	「中国問題と日本 1941年の開戦決定—以日方档案為依拠的再確認」	単著	2008.05.00	中国社会科学院『近代史研究』総第165期、ISSN1001-6708 CN11-1215/K	90~103頁。(査読有)
10	“Changes in Japanese Strategy in 1939~1940 and the Internationalization of the Sino-Japanese War”	単著	2008.06.00	Journal of Modern Chinese History, Vol.2, No.1	pp.21-40 (査読有)
11	「欧州情勢への対応と日独ソ関係への処置：1940年前後、太平洋戦争への中国の戦略」	単著	2009.03.00	防衛賞防衛研究所 『戦争史研究国際フォーラム報告書：太平洋戦争と連合国の対日戦略—開戦経緯を中心として』 ISBNNO978-4-939034-54-1	99-118頁。
その他					
1	「北東アジアにおける心の問題」	単著	2004.10.07	島根国際シンポジウム:国境をどう越えるか—北東アジア自治体外交の可能性」での発表、於島根県立大学	配布ペーパー2頁。日中韓関係の現状を事例に、国際関係における物心両面のバランスの取り方を論じた。
2	「政治・理念・生活の変動と社会保障制度の改革」	単著	2005.02.16	国際シンポジウム「社会システムの変化と現代中国の課題」での発表、於島根県立大学	配布ペーパー3頁。中国での実地調査に基づいて、ある家庭の歴史を事例に、中国の基層社会における変動を分析し、あわせて社会保障制度の改革による影響を考察した。
3	「日本の対中観の変化とその影響」	単著	2005.04.22	世界華人政治学者論壇、香港大学共催国際シンポジウム「Dynamics of International Relations in the Asia-Pacific」での発表、於香港大学 2005.04.22-2005.04.23	配布ペーパー10頁。小泉純一郎内閣の下で日本で表れた対中観の変化を明らかにし、その影響を論じた。
4	「書評 小池聖一著 『満州事変と対中国政策』」	単著	2005.06.00	『史学研究』第248号、ISSN0386-9342	小池聖一氏の著書『満州事変と対中国政策』に対する書評論文。著書の中身を要約したうえ、その長所と欠点を指摘し、満洲事変期の国際関係史研究のあり方を論じた。(61~70頁)(レフェリー書評論文)。
5	「兩種国際戦略的較量—論聯接中日戦争與太平洋戦争的一个關鍵原因」	単著	2005.08.05	中国社会科学院近代史研究所・『歴史研究』雑誌社・四川師範大学共催国際シンポジウム「1930年代の中国」での発表、於成都	配布ペーパー：論文37頁(約42000字)。1937年に勃発した日中戦争がなぜ1941年の太平洋戦争へ拡散していったのか、中国側の国際戦略と日本側の国際戦略に対する考察を通じて、その過程を追跡しながら、二つの戦争を連結させた一要因を検証した。
6	「中国指導者の対日対ソ戦略」	単著	2005.10.23	日本ロシア史研究会2005年度大会共通論題での発表、於成蹊大学	配布ペーパー：論文20頁+レジュメ2頁。蒋介石と汪精衛の思惑に対する考察に基づいて、1931~1935年間における中国指導部の対日対ソ戦略を分析した。
7	「九一八事変後中国的対蘇政策」	単著	2006.03.10	上海交通大学人文学院での特別講演、於上海	配布ペーパー：4頁。満洲事変期(1931~1933年間)の中国の対ソ政策を考察し、三つの段階に分けて、その中身と変遷の経緯をまとめた。
8	「戦後中国における日本人の『留用』問題:この研究の背景と意義を中心に」	単著	2006.03.00	大東文化大学大学院アジア地域研究科『大東アジア学論集』第6号	研究代表者として行ってきた海外調査の成果を踏まえて、①中国における日本人「残留者」と「留用者」の相違、②日本人「留用者」の役割、③空白状態をもたらした要因、④研究の意義と目標、という4点を論述した。(183~188頁)(研究ノート)

9	「如何看待日韓關於東亞外交的論争：以小泉参拝靖国神社問題為事例」	単著	2006.03.10	復旦大学朝鮮韓国研究中心での特別講演、於上海	配布ペーパー：レジュメ2頁。小泉純一郎首相の靖国参拝問題を事例に、対東アジア外交をめぐる日本と韓国ら隣国との論争を整理し、それをどのように見るべきかを分析した。
10	「国民政府留用日本技術人員的政策過程——以中方档案為中心的初步考察」	単著	2006.07.29	南京大学中華民國史研究中心等主催「第5回中華民國史國際學術シンポジウム」での発表、於中国溪口	配布ペーパー：論文10頁(A4判、約17000字)。1945—1947年間における中国国民政府の日本人技術者留用政策の中身を明らかにし、その決定の過程を追跡した。
11	「中国問題與日本1941年的開戦経緯——以日方档案為依拠的再確認」	単著	2006.08.17	中国社会科学院近代史研究所・『歴史研究』雑誌社主催「近代中国・東亞與世界——東アジア知的空間の再発見と構築」國際學術シンポジウムでの発表、於中国日照	配布ペーパー：論文11頁(A4判、約18000字)。1941年、日本当局の対米開戦の政策決定過程を日本側の一次資料に基づいて再検討し、それにおける中国要因を考察。
12	「中国共産党支配地域における日本人留用の諸相——中国側の一次資料から」	単著	2006.10.21	日本現代中国学会第56回全国學術會議での発表、於和光大学	配布ペーパー：レジュメ7頁(A4判)。1945年9月以降、中国共産党の支配地域における日本人留用の実相を中国側の一次資料に基づいて考察。
13	「中国建国に協力した國際友人」	単著	2006.11.08	東京財団主催「中国週間：チャイナ・ウィーク」での講演、於東京虎ノ門日本財団ビル	配布ペーパー：レジュメ4頁。中国共産党による中華人民共和国の創立過程における日本人の役割とその意味合いを解説。
14	「戦後中国における日本人『留用』問題——二つの地域の概観とその比較」	単著	2006.11.11	「20世紀と日本」研究会での講演、於京都大学	配布ペーパー：レジュメ8頁。第2次世界大戦終戦後、中国の共産党支配地域と国民党支配地域における日本人留用の実相をそれぞれ説明したうえ、二つの地域における留用政策の相違点を提示。
15	「国民政府戦後對滯華日本技術人員的留用政策——以台湾所藏档案為依据的考察」	単著	2007.03.12	上海交通大学人文学院での講演、於上海交通大学	配布ペーパー：レジュメ4頁。台湾で入手した一次資料に基づいて日中戦争終戦初期における国民政府の日本人技術留用政策を解説
16	「日本對六方会谈共同文件的反応」	単著	2007.03.15	復旦大学國際關係研究院での講演、於上海復旦大学	配布ペーパー：レジュメ2頁。朝鮮半島問題をめぐる6者会合で2007年2月に合意した共同声明に対する日本側の反応とその背景を解説。
17	「再考 日中關係における心の問題」	単著	2007.06.22	「大東文化大学北京事務所開設記念シンポジウム」での研究発表、	配布ペーパー：論文A4版中国語4頁、日本語4頁。日中關係における心の問題についてのこれまでの拙稿を踏まえて、新しい視角からこの問題を再検討。
18	「国民政府对日德意三国同盟问题的应对——以国际解决战略和欧战对策为视角的考察」	単著	2007.08.18	中国社会科学院近代史研究所中華民國史研究室・『歴史研究』雑誌社等共催「“1940年代的中国”國際學術討論会」での研究発表	配布ペーパー：論文A4版27頁。中国国民政府の國際的解決戰略とヨーロッパ戦争への対応を視點に、1937年から1940に至る間における、中国側の日独關係への対応をまとめた。
19	「日中戦争の起源における心理的断面——開戦前夜、日本側の反省と反動を事例に」	単著	2007.09.09	大東文化大学・南開大学共催「近代化過程における東亞三国の相互認識國際シンポジウム」での研究発表。	配布ペーパー：論文A4版9頁。日中戦争の前夜、日本で現れた対中政策についての反省とそれへの反動を事例に、日本指導層の心理状態を明らかにし、さらにそれと相互作用にある中国指導層の心境も分析し、日中戦争への心理的な断面を提示。
20	「日ソ關係の考察と中国の対日戰略：1937—1941」	単著	2007.10.14	アジア政経学会2007年度全国大会「盧溝橋70周年」分科会での発表	配布ペーパー：レジュメA4版4頁 1937～1941年にいたる間の日中ソ關係について、次の三つの視點から考察を行う。①日ソ關係の諸問題に対して、中国指導部はどのように分析し、どのような判断を行ったのか、②こうした考察は各段階の中国の対日戰略においてそれぞれどのような役割を果たしたのか、③日ソ關係の考察と対日戰略の關連性から見た日・中・ソ關係の相互作用はどのようなものか。
21	「ヨーロッパ情勢をめぐる中国の対応——1939年を中心として」	単著	2007.12.15	大東文化大学東洋研究所での発表	配布ペーパー：8頁。1939年を中心として、ヨーロッパ情勢をめぐる中国国民政府の認識と対応をまとめ、その対日政策への影響を分析した。

22	「日本對韓国大選の反応」	単著	2008.03.06	学術講演、於復旦大学国際関係研究院	配布ペーパー：レジュメ4頁。2007年12月に行われた大韓民国第17代大統領選挙とその結果をめぐる日本側の反応を検討。次の四点を中心に論じた。①日韓関係の現状、②盧武鉉大統領時期の日韓関係をめぐる論評、③李明博大統領への期待、④今後の日韓関係の展望。
23	「蒋介石与1935年中日蘇関係の転折」	単著	2008.03.11	浙江大学人文学院蒋介石と近代中国研究中心での講演	配布ペーパー：レジュメ2頁。1935年の中日ソ三国関係の転換における蒋介石の役割を分析。
24	「日本の中華民国史研究：歴史と特色」	単著	2008.03.13	学術講演、於上海交通大学人文学院	配布ペーパー：4頁。日本側の中華民国史研究について、①研究史、②主要なる成果と特色、③問題点、④今後の展望、という4点を中心に整理し、紹介した。
25	「書評」光田剛著『中国国民政府期の華北政治-1928-37年』	単著	2008.07.00	社団法人中国研究所『中国研究月報』(Monthly journal of Chinese affairs) 62(7)、ISSN 09104348	43-45頁。
26	「中国国民政府の対日戦略」	単著	2008.09.18	防衛省防衛研究所主催平成20年度戦争史研究国際フォーラム『太平洋戦争と連合国の対日戦略—開戦経緯を中心として—』での研究発表、於新宿NSビル30階「NSスカイカンファレンス」	配布ペーパー：2頁。満州事変から太平洋戦争に至る間の中国国民政府の対日戦略をめぐる本人の諸研究を要約し、報告したものである。
27	「蒋介石与1935年中日蘇関係的転折」	単著	2008.11.02	Hoover Institution, Stanford University 中国社会科学院近代史研究所共催「民国人物与民国政治国際シンポジウムでの研究発表、於中国社会科学院近代史研究所。	配布ペーパー：論文原稿約28000字。
28	「国民政府对欧戦与結盟問題的対応」	単著	2008.11.09	上海交通大学主催「20世紀中国的戦争与革命」国際シンポジウムでの研究報告。	同年10月に『歴史研究』誌に公表した同名の論文を要約したものである。
29	「中国都市部の社区卫生機構に関する一考察—政策と実相」	単著	2008.12.00	島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』(Shimane journal of North East Asian research) (16)、ISSN1346-3810 55~76頁。	55~76頁。研究ノート。

III 学会等および社会における主な活動

1	1991.04.00	～	現在	中国現代史研究会会員
2	1991.04.00	～	現在	日本現代史研究会会員
3	1991.04.00	～	現在	日本国際政治学会会員(平成14年6月～平成16年5月 評議員)
4	1999.04.00	～	現在	アジア政経学会会員
5	2003.04.00	～	2005.03.00	島根県総合教育審議会委員
6	2004.12.08	～	2004.12.08	島根県立大学公開講座「中国における社会保障制度の改革」講師
7	2005.06.04	～	2005.06.04	大東文化大学公開講座「日中関係の現状と課題：心という視点からの再検討」講師
8	2005.10.00	～	現在	現代中国学会会員
9	2007.06.30	～	2007.06.30	大東文化大学国際関係学部特色G P 高校生のためのアジア理解講座「日本と中国のはざまから日中関係を考える」講師
10	2007.10.07	～	2007.10.07	東久留米市民グループ「中国大好き」会公開講座「現代中国の地方自治— 居民委員会と『社区建設』とは何か」講師

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	准教授	氏名	大石 敏之	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 漢語レッスン		2006.04.01		中国語履修者用テキスト (1年生用)。総頁、89 頁。共著者：原瀬隆司 何秋平 光生館発行。		
2) アジアのことば		2007.04.01		国際関係学部新入生の言語選択に資するためのガイドブック的なもの。P.4-5 を担当。		
3) ポイント&ドリル中国語		2007.10.01		中国語履修者用テキスト。初級段階を終えた学習者を対象として、多くのドリルをこなすことによって中国語の知識をより確実なものにすることをねらったもの。主として2年生以上の学生を想定している。総頁 83 頁。共著者：原瀬隆司 何秋平 植松希久磨。光生館。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1979.04.00	～	現在	日本中国語学会会員		
2	1980.04.00	～	現在	日本中国学会会員		
3	1995.04.00	～	現在	大阪市立大学中国学会会員		

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	准教授	氏名	加藤 栄	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 平成 17 年度言語研修テキスト 1 ベトナム語：実践応用編		2005.07.26	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 アジア・アフリカ言語文化研究所 言語研修ベトナム語中級 ベトナムでの現地調査、研究やその他の専門業務に役立せることを目的としたベトナム語の短期集中講座 (2005 年 8 月 1 日～9 月 2 日) のために作成した語学テキスト。			
2) 「ベトナム語」		2008.03.31	(文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(2006 年度) 選定 「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ No.8 大東文化大学国際関係学部で地域言語でベトナム語を学ぶ 1、2 年生のためのベトナム語教科書			
3) 「ベトナム語」改訂版		2009.03.31	(文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」(2006 年度) 選定 「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ No.16 大東文化大学国際関係学部で地域言語ベトナム語を学ぶ 1、2 年生のためのベトナム語教科書改訂版			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 「ベトナムにおけるドイモイ政策と文学」		2007.11.10	(文部科学省 2006 年度「特色ある大学教育支援プログラム」選定 大東文化大学国際関係学部「アジア理解教育の総合的取組」関連事業「高校生のためのアジア理解講座」2007 年度後期) ドイモイ政策による急速な経済成長と、国際社会への参入で、ベトナム文学はどのような変貌をとげたのか。ベトナムにおける社会や文化のありようとからめながら、高校生にもわかりやすいように解説。			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
1 グエン・ニャット・アイン『つぶらな瞳』	単	2004.08.00	てらいんく	1991 年にベトナムで出版された青春小説の翻訳。農村の風物、都会と農村の格差、青少年の日常生活や心理を描く。全 295 頁 (ISBN4-925108-01-8 C0097)		

2	「世界の文学 ベトナム ブイ・アイン・タン『女性のいない世界』」	単	2004.12.03	東京新聞夕刊	ベトナム初の同性愛小説『女性のいない世界』。ベトナムにおける同性愛者の実態ばかりでなく、価値観の多様化の波に洗われる家族の揺らぎを読み取った評論。
3	チャン・ドゥック・ティエン『極楽世界』	単	2005.01.00	『新潮』第102巻第1号	1992年にベトナムで発表された短編小説の翻訳。大胆な性描写、現実と非現実が交錯するイメージーション豊かな表象を特徴とする、従来のベトナム文学には見られない手法を駆使した作品。pp.103-115 全452頁(雑誌04901-01)
4	『ベトナム現代短編集2』	単	2005.08.26	(財)大同生命国際文化基金	1990年代以降にベトナムで出版された短編小説11編の翻訳。
5	「海外の文学 ベトナム歴史の「負債」を問い直す」	単	2005.10.14	毎日新聞夕刊	民間伝承や文学的想像力を駆使して正史の闇を埋め、それを通じて現代を逆照射しようとする、ベトナムの女性作家ヴォー・ティ・ハーオの最新作『焼身の死刑台』についての評論。
6	「世界の文学 ベトナムドー・ホアン・ジュウの「金縛り」黒い影から脱却できぬ自分」	単	2006.02.17	東京新聞夕刊	ベトナムではタブーとなっている大胆な性描写とともに、それを暗喩として北の大国、中国の呪縛から脱脚できないベトナム自身の姿をあぶり出した短編「金縛り」についての評論。
7	チャン・トゥイ・マイ「天国からの風」	単	2006.10.00	『新潮』第103巻 第10号	九州大学アジア総合政策センター主催「アジアに浸る Soaked in Asia ベトナム篇」における、同大学特任教授で作家の高樹のぶ子氏との共同企画による翻訳。
8	「世界の文学 トー・ホアイ『あとから来た三人』加害側からえぐる土地改革の愚行」	単	2007.01.19	東京新聞 夕刊	1950年代の土地改革における「極左的誤り」が残した禍根を加害者の側から描いたトー・ホアイの小説『あとから来た三人』(2006年)の評論。
9	「世界の文学 ヴォー・ヴァン・チュック『池の底の苔』『傷跡と禿頭』権力が排除する善意の貢献」	単	2008.01.17	東京新聞夕刊	革命の中で、公の利益のために献身的に尽くそうとする個人の善意の行為が権力によって排除されていく過程を作者の実体験をもとに描いたベトナムの小説『池の底の苔』『傷跡と禿頭』についての評論。
10	独立行政法人 国際交流基金「開高健記念アジア作家講演会シリーズ(18)」ドー・ホアン・ジュウ氏講演会コーディネーター	単	2008.08.01		(2008.08.01～2009.03.31) 日本・ベトナム外交関係樹立35周年事業の一環として、ベトナムの作家ドー・ホアン・ジュウ氏を招聘するにあたっての、講演会企画案の作成、講演会当日の配布資料の企画・監修、講演会および日本国内文学者等との対談企画およびモデレーター、講演者の作品の翻訳、講演会記録の内容確認等、コーディネーター業務。
11	「ドー・ホアン・ジュウ短編集」	単	2009.03.00	独立行政法人 国際交流基金「開高健記念アジア作家講演会シリーズ(18)」ドー・ホアン・ジュウ氏講演会(ベトナム)当日配布資料	ベトナムの女性作家ドー・ホアン・ジュウの代表作「金縛り」「ハンセン病の川」の翻訳。同短編集は2009.03.14(函館)、03.15(仙台)、03.17(東京)、03.20(大阪)の各講演会場で来場者に配布。

III 学会等および社会における主な活動

1	1994.07.00 ～ 現在	世界文学会会員
---	-----------------	---------

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科		職名	准教授	氏名	高野 太輔	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書 1) チュートリアル (改訂版) (大東文化大学国際関係学部) ISBN978-4-9904305-1-1			2009.03.31	講義の教材として使用。共著。A4版、総頁89頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 アラブ系譜体系の誕生と発展	単著	2008.11.10	山川出版社				
論文							
1 論文「アラブ系譜学の誕生と発展」	単著	2006.03.00	『大東文化大学紀要<人文科学>』第44号	335～355頁			
2 論文「初期イスラム時代の遠島」	単著	2007.00.00	『大東文化大学紀要<人文科学>』第45号	211～230頁			
3 論文「アラブ系譜学における母祖の提供と系譜統合」	単著	2007.03.00	『西南アジア研究』第66号	31～42頁			
4 「研究フォーラム『預言者ムハンマド伝』の翻訳」	単著	2007.05.00	『歴史と地理』第604号	51～54頁			
その他							
1 書評「ボアズ・ショジャン著『イスラム史書の詩学—タバリーの「歴史」を脱構築する』」	単著	2006.00.00	『東洋学報』第88巻・第1号	027～031頁			

2	書評"Book Review: Shimizu Kazuhiro, Slave Soldiers, Bureaucrats and the People: Iraqi Society during the Disintegration of the Abbasid Dynasty."	単著	2007.03.00	『日本中東学会年報』第22 巻・2号	199～201頁
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1991.04.01	～	現在	日本イスラム協会会員	
2	1991.04.01	～	現在	日本中東学会会員	
3	1996.04.01	～	現在	史学会会員	
4	1998.04.01	～	現在	日本オリエント学会会員	
5	2007.04.01	～	現在	西南アジア研究会会員	

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	准教授	氏名	古川 宣子	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価平成 20 年 12 月実施において、高い評価を得た。コア語 1。平均値 4.2 (5 段階評価)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) コリア語		2009.03.31	코리아語初級用テキスト。講義の教材として使用。単著。A 4 版、総 120 ページ。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 朝鮮半島と日本		2006.11.15	埼玉県東松山市が行っている「きらめき市民大学 (国際文化学部)」での講師 (きらめき市民大学)			
2) 韓国社会と儒教		2007.10.27	国際関係学部が行った「高校生のためのアジア理解講座」での講師 (大東文化会館)			
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『帝国と学校』	共著	2007.04.00	昭和堂	筆者は第 4 章「植民地近代社会における初等教育構造－朝鮮における非義務制と学校「普及」問題－」(129～164 頁) 担当した。植民地期朝鮮における教育の構造について、初等教育レベルでも義務制がとられなかった方針に着目し、併合以前まで遡り分析した。特に植民地教育機関である公立普通学校の設置政策と地域的な分布状況や近年の研究成果を踏まえての就学率の検討などを行った。B5 版、総頁 380 頁。		
論文						
1 植民地期朝鮮における独立運動関係者とその子孫の被教育歴－パリ長書署名者に関して	単著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 (社会科学・自然科学)	韓国歴史学界において、独立運動として一定の評価を受けている 1919 年「パリ長書事件」に関係した人物およびその子孫に焦点をあて、関係者 5 名およびそれぞれの子孫の教育経歴について明らかにした。調査方法としては『族譜』・独立運動関係者の書き残した文書類などを収集・分析し、かつ、現地で各子孫へのインタビュー調査を行った。これらにより、植民地期に独立運動を行った人物と彼らの子孫が受けた教育について、特に伝統的漢文教育と植民地近代教育について、受けた時期・性別などの面から当時の状況を整理・考察した。B 5 版、総頁数 323 頁中 177～199 頁。		
2 植民地期朝鮮における学校普及実態と教育選択－慶尚北道迎日郡に関する一考察－	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 (社会科学)	植民地期朝鮮における学校普及の実態について、地域レベルでの考察として慶尚北道迎日郡を対象として通史的な分析を行った。迎日郡全体の普通学校設置過程について文書史料から跡づけるとともに、現地でのインタビュー調査により、迎日郡内の達田面における普通学校設立と住民の教育体験について、個人史的な考察も併せて試みた。B5 版、総頁数 105～131 頁。		

3	1920年代大邱徳山学校—その教育実態と植民地教育行政—	単著	2007.10.00	朝鮮史研究会『朝鮮史研究会論文集』第45集	植民地期に行政側からは「私設学術講習会」と位置づけられていた「徳山学校」を対象として、その教育内容や設立の背景および運営状況など多角的に考察し、朝鮮全土に数多く設立された夜学などを含む講習会がどのようなものだったのか、ケース・スタディーとしてその「学校」的実態を明らかにした。117～145頁。レフェリー制あり。
その他					
1	書評 金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー—就学・不就学をめぐる権力関係』	単	2006.04.15	朝鮮史研究会月例会発表(専修大学)	植民地期朝鮮の教育について、ジェンダーの視点から考察を試みた本書について、その内容を要約し、評価点や疑問点など、研究史に即して書評を行った。
2	書評 金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー—就学・不就学をめぐる権力関係』	単著	2006.08.25	『日本教育史研究』25号	同年4月に朝鮮史研究会月例会で発表した書評者の報告内容を文章化したもの。植民地期朝鮮の教育について、ジェンダーの視点から考察を試みた本書について、研究の到達点とともに研究史に即した諸疑問点を中心に叙述した。総頁数288頁中264～270頁。
3	2007年度歴史学研究会大会報告批判—近代史部会	単著	2007.12.00	歴史学研究会『歴史学研究』835号	2007年5月に行われた歴史学研究会大会の近代史部会報告について批判・検討を行った。近代史部会のテーマは「学校教育とマイノリティ」であり、3人の研究者による報告がなされた。著者は、テーマの設定や各報告者の内容について、総合的な検討を加えた。B5版、総頁数64頁中45～47頁。
4	朝鮮の植民地初等学校—慶尚北道における伝統教育からの移行過程研究	単	2007.12.16	九州大学韓国研究センター国際研究集会2007 見る・学ぶ・暮らす—比較植民地学の樹立を目指して—	九州大学国際ホールで行われた国際研究集会2007(助成:財団法人三菱財団・科学研究費「植民地研究」)の第2部ワークショップ(植民地朝鮮の教育)において研究報告を行った。その内容は、2001年～2004年度科学研究費補助金基盤研究(B)で実施した調査及びその研究成果と、2006年～現在継続中の科学研究費補助金萌芽研究における研究課題に関するものである。『九州大学韓国研究センター 国際研究集会2007 見る・学ぶ・暮らす—比較植民地学の樹立を目指して—要旨集』A4版、総頁数28頁中17頁。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1984.04.00	～	現在	朝鮮史研究会会員(平成11年度～18年度幹事、平成11年度～現在編集委員)	
2	1993.03.00	～	現在	教育史学会会員(平成18年度～19年度編集委員)	
3	1993.03.00	～	現在	歴史学研究会会員	
4	1997.03.00	～	現在	アジア教育史学会会員	
5	1998.03.00	～	現在	日本植民地教育史研究会会員	
6	1998.06.00	～	2006.00.00	文化センターアリラン近代史研究会会員	
7	2001.08.00	～	現在	日本教育史研究会会員(平成18年度～19年度編集委員)	
8	2002.04.00	～	現在	韓国・朝鮮文化研究会会員	
9	2004.01.00	～	2004.12.00	The Association for Asian Studies 会員	

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	准教授	氏名	水野 さや	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大学教育に対する基本姿勢			大学の講義においては、個々の知識を得るためのものではなく、むしろ自分のあり方を問う、自分の幹となるもの自覚する意識を形成できるように促している。例えば、これまで主に東洋・日本における仏教美術史に関する講義を行ってきたが、受講する学生に対し、古代から現代において盛んに信仰される仏教というキーワードをもとにアジアの美術作品に接することにより、「日本人である前にアジア人であれ」「アジア的な視座に立とう」ということを意識させるようにしている。			
2) 平成 17 年度担当科目		2005.04.00	東アジア地域研究 11 (東アジア芸術研究A)、東アジア地域研究 12 (東アジア芸術研究B)、現地研修 (韓国)、人文科学入門 4 (芸術) [前期]、人文科学入門 4 (芸術) [後期]、演習 I (東洋美術の諸問題)、演習 II (東洋美術の諸問題)、卒業論文演習			
3) 平成 18 年度担当科目		2006.04.00	東アジア地域研究 11 (東アジア芸術研究A)、東アジア地域研究 12 (東アジア芸術研究B)、チュートリアル、人文科学入門 4 (芸術) [前期]、人文科学入門 4 (芸術) [後期]、演習 I (東洋美術の諸問題)、演習 II (東洋美術の諸問題)、卒業論文演習			
4) 平成 19 年度担当科目		2007.04.00	東アジア地域研究 11 (東アジア芸術研究A)、東アジア地域研究 12 (東アジア芸術研究B)、チュートリアル、人文科学入門 4 (芸術) [前期]、人文科学入門 4 (芸術) [後期]、演習 I (東洋美術の諸問題)、演習 II (東洋美術の諸問題)、卒業論文演習			
5) 平成 20 年度担当科目		2008.04.00	東アジア地域研究 11 (東アジア芸術研究A)、東アジア地域研究 12 (東アジア芸術研究B)、チュートリアル、人文科学入門 4 (芸術) [前期]、人文科学入門 4 (芸術) [後期]、演習 I (東洋美術の諸問題)、演習 II (東洋美術の諸問題)、卒業論文演習、現地研修 (韓国)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						

1	「バイヨンの尊顔をめぐる諸問題」	単著	2004.05.00	『佛教藝術』274号、佛教藝術學會、pp.61～84 ISBN4-620-90274-8	カンボジアに現存するアンコール・ワットと並び称される寺院遺跡バイオンは、173面にも及び(復元総数181面)巨大な尊顔が彫刻されている遺跡として有名である。このバイヨンの尊顔について、著者が携わった尊顔の実地調査におけるこれまでの報告書をまとめ、同時代の遺跡や彫刻作品との比較を通し、その尊名と性格・役割について考察した。
2	「韓国・江原道襄陽禪林院址三層石塔について」	単著	2005.10.00	真鍋俊照博士還暦記念論文集『仏教美術と歴史文化』、法蔵館、pp.99～122 ISBN4-8318-6362-9 C3015	韓国・江原道襄陽禪林院址に現存する三層石塔について取り上げたものである。従来、この石塔は九世紀後半に建立されたものとみなされていたが、あらためて関係する資料を検討し、九世紀初めにこの地にあった億聖寺の遺品である可能性を述べた。なお、本論は平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))「韓国の浮彫形態の仏教集合尊像(四仏・五大明王・四天王・八部衆)に関する総合調査」(研究代表者:武蔵野美術大学・朴亨國)の調査成果の一環である。
3	「慶州南山茸長溪法堂谷址出土の石造如来坐像について」	単著	2005.11.00	頼富本宏博士還暦記念論文集『マンダラの諸相と文化』下、法蔵館、pp.319～338 ISBN4-8318-6363-7 C3015	韓国・慶州南山の茸長溪法堂谷址より出土し、現在は国立慶州博物館の所蔵になっている石造如来坐像について、その図像的な特徴および制作年代を、韓国における薬師如来像の図像変遷、同時代の石造彫像の様式変遷の中に位置付けて考察した。なお、本論は平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))「韓国の浮彫形態の仏教集合尊像(四仏・五大明王・四天王・八部衆)に関する総合調査」(研究代表者:武蔵野美術大学・朴亨國)の調査成果の一環である。
4	「興福寺の脱活乾漆造八部衆像について—中国・韓国の作例からみた図像的位置づけ—」	単著	2007.12.10	宮治昭先生献呈論文『汎アジアの仏教美術』、中央公論美術出版社、pp.379～402、 ISBN978-4-8055-0560-1	興福寺に所蔵される脱活乾漆造八部衆像を、中国および韓国の作例との比較を通して尊名を明らかにし、造像当初の図像の復元を試みた。なお、本研究は、平成19年度科学研究費補助金(若手研究(B))「中国の八部衆像に関する調査・研究」における成果の一部である。
5	「中国陝西省延安市安塞県樊庄石窟について—陝北地方における北宋の石窟造営とその背景に関するてがかりとして—」	単著	2008.12.00	『密教図像』第27号、密教図像学会、pp.69～86。 ISSN0287-3173	陝西省延安市安塞県の樊庄石窟第2窟について、窟内の造像銘の解釈、子長鍾山石窟、延安清凉山石窟など近隣の造像との比較を通して特徴を明らかにした。なお、本研究は、平成19年度科学研究費補助金(若手研究(B))における成果の一部である。
その他					
1	『バイヨンの修復における美術史的調査—外廻廊の修復のための基礎作業として—』	共著		平成16年度財団法人文化財保護・芸術研究助成財団研究助成研究成果報告書	調査に携わった浅井和春・朴亨國・東條由紀によりまとめられた財団法人文化財保護・芸術研究助成財団研究助成による研究成果報告書。研究編における「ホーチミン市歴史博物館所蔵のクメール彫刻について—アンコール期の作例を中心に—」を単独執筆、資料編における「調査記録(日誌)①夏の調査・②冬の調査」を朴亨國・東條由紀とともに執筆した。
2	『バイヨン寺院全体の保存修復のためのマスタープラン』	共著	2005.06.00	日本国政府アンコール遺跡救済チーム(JSA)・財団法人日本国際協力センター	中川武監修による日本国政府アンコール遺跡救済チームのこれまでの活動をまとめた報告書である。JSA美術史班の朴亨國とともに、これまでの美術史班の調査活動の手法・目的・成果をまとめた。
3	【研究資料紹介】「ホーチミン市歴史博物館所蔵のクメール彫刻について—アンコール期の作例を中心に—」	単著	2006.03.00	『大東文化大学紀要』第44号<人文科学>、pp.293～321	ベトナム・ホーチミン市歴史博物館所蔵に所蔵される多数のクメール彫刻作品の中から、アンコール期の作例に限って取り上げた。作品の写真可能な限り掲載してその造形的特徴を記述し、想起される問題点を取り上げ、クメールとチャンバ美術の関係を見直す足がかりとした。なお、本論は平成16年度財団法人文化財保護・芸術研究助成財団研究助成による海外学術研究「バイヨンの修復における美術史的調査—外廻廊の修復のための基礎作業として—」(研究代表者:武蔵野美術大学・朴亨國)の調査成果の一環である。
4	『日本における外来美術の受容に関する調査・研究』	共著	2006.03.30	東京文化財研究所	東京文化財研究所主催のシンポジウム、「日本における外来美術の受容に関する調査・研究」の報告書である。この中で、「日本における阿修羅像の図像の受容について」(pp.175～180)を執筆した。
5	「興福寺の脱活乾漆造八部衆像について」	単著	2006.05.26	第59回美術史学会全国大会(於:名古屋大学)	興福寺に所蔵される脱活乾漆造八部衆像を、中国・韓国の作例との比較を通して尊名を比定し、さらに、その伝来に道慈が関与している可能性をのべ、その伝来に関して大安寺造像が関わる可能性を指摘した。(配付資料:A3/2枚)

6	『韓国の浮彫形態の 仏教集合尊像（四仏・ 五大明王・四天王・八 部衆）に関する総合調 査』	共著	2007.03.31	平成 16 年～18 年度科学研 究費補助金（基盤研究（B） （1））研究成果報告書	調査・研究に携わった朴亨國・津田徹英・水野さや・陸戴和 によりまとめられた科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））、 研究代表者：武蔵野美術大学・朴亨國）による研究成果報告 書。「Ⅱ 作品解説」のうち主に四仏および八部衆に関する項 目について、「Ⅲ 研究編」のうち「韓国の八部衆像について」 「慶州南山茸長溪法堂谷寺址出土の石造如来像について」 「江原道襄陽禪林院址三層石塔について」を執筆した。
7	「中国陝西省延安市 安塞県樊庄石窟につ いて－陝北地方にお ける北宋の石窟造営 とその背景に関する てがかりとして－」	単著	2007.12.15	第 27 回密教図像学会学術 大会（於：大阪・法樂寺）	陝西省延安市安塞県の樊庄石窟第 2 窟について、窟内の造像 銘の解釈、子長鍾山石窟、延安清涼山石窟など近隣の造像と の比較を通して特徴を明らかにした。（配付資料：A4/2 枚） なお、本研究は、平成 19 年度科学研究費補助金（若手研究 （B））「中国の八部衆像に関する調査・研究」における成果 の一部である。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1995.00.00	～	現在	美学会会員
2	1995.00.00	～	現在	美術史学会会員
3	1998.00.00	～	現在	密教図像学会会員
4	1998.04.00	～	2006.03.00	愛知県史編纂室文化財部会調査員（仏教彫刻担当）
5	1998.10.00	～	2005.03.00	日本国政府アンコール遺跡救済チーム（J S A）美術史班団員
6	2004.12.21	～	2004.12.21	興福寺講演会講師（朝鮮半島の阿修羅像について）
7	2006.04.00			愛知県史編纂室文化財部会特別調査員（仏教彫刻担当）
8	2008.10.18	～	2008.10.18	NHK名古屋講演会講師（中国・北宋の仏教石窟と造像、韓国・石塔の美と荘厳）

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	准教授	氏名	山田 稔	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 「ペルシア語」中村ファラ著		2009.03.31		「アジア理解教育の総合的取組」刊行物シリーズ No.9 作成指導		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他 1 単語マラソン (ペルシア語)	単	2006.04.00	大東文化大学国際関係学部			
III 学会等および社会における主な活動						
1 1995.00.00 ~ 2006.00.00		オリエント学会				

(表 24)

所属	国際関係学部国際文化学科	職名	講師	氏名	廣江 倫子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 亜細亜大学授業評価		2005.12.00	亜細亜大学授業評価 (2005 年 12 月実施) において、「外書購読 I・II (中国語)」講義で高い評価を得た。総合評価 4.8 (5 段階評価)。			
2) 亜細亜大学授業評価		2006.12.00	亜細亜大学授業評価 (2006 年 12 月実施) において、「外書購読 I・II (中国語)」講義で高い評価を得た。総合評価 5 (5 段階評価)。			
3) 専修大学一部法学部学生による授業評価		2006.12.00	専修大学一部法学部学生による授業評価 (2006 年 12 月実施) において、「外国法 V (中国法)」で高い評価を得た。総合評価 4.4 (5 段階評価)。			
4) 大東文化大学授業評価		2006.12.00	大東文化大学授業評価(2006 年 12 月実施)において、「チュートリアル」、「法学概論 B」で高い評価を得た。授業への満足度 4.4 (「チュートリアル」)、4.4 (「法学概論 B」) (5 段階評価)。			
5) 専修大学一部法学部学生による授業評価		2007.12.00	専修大学一部法学部学生による授業評価 (2007 年 12 月実施) において、「外国法 V (中国法)」で高い評価を得た。総合評価 4.3 (5 段階評価)。			
6) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価(2007 年 12 月実施)において、「チュートリアル」、「社会科学入門 (法律)」で高い評価を得た。授業への満足度 4.4 (「チュートリアル」)、4.3 (「社会科学入門 (法律)」) (5 段階評価)。			
7) 専修大学一部法学部学生による授業評価		2008.12.00	専修大学一部法学部学生による授業評価 (2008 年 12 月実施) において、「アジア法 II・外国法 V」で高い評価を得た。総合評価 4.4 (5 段階評価)。			
8) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価(2008 年 12 月実施)において、「演習 I」、「法学概論 B」で高い評価を得た。授業への満足度 4.6 (「演習 I」)、4.3 (「法学概論 B」) (5 段階評価)。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『チュートリアル』(大東文化大学国際関係学部)		2005.12.00	国際関係学部 1 年次必修科目「チュートリアル」の教材として使用。筆者は、第 2 章「要約のしかた」、第 9 章「レジユメの作り方」担当。A4 版、総頁 89 頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						

1	『香港基本法の研究－「一国両制」における解釈権と裁判管轄を中心に－』	単	2005.02.00	成文堂	同名の博士論文（平成 15 年 3 月一橋大学提出）を科学研究費補助金の助成を受けて出版したもの。香港返還後に実施される「一国両制」のなかで中国法と関わる香港基本法解釈権と香港法院の裁判管轄の範囲につき、「一国両制」を具体的に規定しかつ返還後の憲法である香港基本法の視点から検討を加えた。香港基本法の解釈権は、返還後に中国・香港関係を理解する上での鍵となっている。全 211 頁。 (ISBN4-7923-3198-6)
論文					
1	「香港基本法解釈権の展開－普通選挙および行政長官任期をめぐって－」	単	2006.03.00	『一橋法学』第 5 巻第 1 号	本論文は香港基本法解釈権の最近の展開について論じた。具体的には、香港における行政長官と立法会の普通選挙に関する要求が、中国全人代常務委の香港基本法解釈権の行使により、普通選挙を行わないとされた事例および行政長官の後任の任期が全人代常務委の基本法解釈によって定められた事例を取りあげ、基本法解釈の事例の蓄積による解釈制度の構築について論じた。(143-161 頁)
2	「香港基本法解釈権の展開－普通選挙および行政長官任期をめぐって－」(レフェリー論文)	単著	2006.03.00	『一橋法学』第 5 巻第 1 号	1999 年 6 月に、返還後香港においてはじめて中国による基本法解釈権が行使されたのを皮切りに、現在までに合計 3 度にわたる基本法解釈がなされてきた。各解釈が香港における多大な論議を醸し出してきたことは否めない。と同時に各解釈は、基本法には規定され得ない中国の基本法解釈権行使における細則をも描き出してきたことは事実である。そこで本稿は、全人代常務委の解釈権の行使によって確立されつつある香港基本法の解釈権の制度および慣行、細則を明らかにすることを試みた。基本法解釈権とは、「一国両制（一国家二制度）」の法的側面からの実施を担保する役割をもつ。基本法 158 条は、中国と香港における法律解釈制度が異なることに鑑みて、基本法解釈に関して独特の規定を置いている。つまり、基本法解釈権は全人代常務委の権利であるが、香港法院は「中央人民政府が管理する事務」および「中央と香港の関係」に及ぶ条文を除き、自ら解釈することができる。だが、解釈権行使に関わる細則については、基本法の原則的な規定のみからでは明確ではなく、その詳細は、解釈権行使の先例の蓄積を待つばかりではなかった。返還以降これまでに、全人代常務委による基本法解釈権は 3 度行使されている。第一が、香港への移民の範囲に関する居留権事件に関して（1999 年 6 月 24 日）、第二が香港行政長官と立法会の普通選挙実施の可否に関して（2004 年 4 月 6 日）、第三が香港行政長官辞職に伴う後任行政長官の任期に関して（2005 年 4 月 27 日）である。本稿は、以上の事例を検討することにより、基本法解釈権を明らかにした。(143～161 頁。)
3	「香港における中文公用語化運動－香港法における中国語の使用－」	単著	2007.03.00	『大東文化大学紀要（社会科学）』第 44 号	1960 年代の香港において中国語を公用語とすることを求める運動、いわゆる中文公用語化運動の結果、1974 年の公用語条例（Official Language Ordinance 1974）によって、英語に加えて中国語が香港の公用語となった。本稿は、香港法分野に焦点をあてて、中文公用語化運動そして、1974 年の公用語条例の結果、法律の分野で中国語がどの程度用いられることとなったのかを明らかにした。(97-105 頁)
4	「選挙と法解釈－香港行政長官・立法会の普通選挙をめぐって－」	単著	2007.09.00	『法と民主主義』第 15 号	(pp.40-45) 選挙、とりわけ普通選挙は、香港において極めて限定的にしか実施されていないものの、普通選挙に対する要求は、近年極めて高まってきた。契機は 2003 年 7 月の国家安全条例制定に反対する 50 万人規模のデモである。勢いをつけた民主派は 2007 年行政長官選挙と 2008 年立法会議員全員に対する普通選挙の導入が要求した。これに対して中国全国人民代表大会常務委員会（以下、全人代常務委と称する）は、香港特別行政区基本法（香港の憲法に当たる。以下、香港基本法と称する。）への解釈権を行使し、選挙関連条文の解釈という形で、普通選挙の実施を当面の間延期した。基本法は、中国と香港における法律解釈制度が異なることに鑑みて、基本法の解釈に関して独特の規定を置いている。そこで、本稿では、中国と香港の法解釈の制度的差異について紹介し、香港における普通選挙の実施に対する中国全人代の香港基本法解釈の内容を簡単に紹介することを試みた。

5	「香港基本法 23 条の立法化－反逆、分裂、反乱扇動、転覆、国家機密の窃取および外国政治団体との連携－」	単著	2008.03.00	『大東文化大学紀要<社会科学>』第 46 号	返還後香港の憲法にあたる香港特別行政区基本法（以下、基本法と称する）23 条は、国家安全を脅かす行為について、これを禁止する立法を香港特別行政区自らが行うことを規定している。基本法 23 条が立法化を義務付ける犯罪類型は、反逆、分裂、反乱扇動、転覆、国家機密窃取ならびに外国政治団体との連携である。このうち、分裂と転覆は、コモン・ロー上にはない概念、つまり従来の香港法には存在しなかった犯罪類型である。2002 年、香港政府は、基本法 23 条の立法化に着手した。しかし、香港立法会における採択直前に、香港において基本法 23 条立法に反対するデモが発生、一説には 50 万人の香港居民が参加した香港史上最大規模の抗議デモを重く見た香港政府は、採択を無期限に延期した。基本法 23 条の立法化はなされなかったものの、基本法 23 条立法化の試みが香港社会、政治にもたらした意義は極めて大きい。また近い将来に基本法 23 条の立法化が再度試みられることも考えられる。そこで、本稿は、基本法 23 条の立法化につき、予定された犯罪類型ごとに、現行法の規定、諮問文書の提案および国家安全条例草案の規定を紹介した。（69-90 頁）
6	「国家機密と香港－香港基本法 23 条の立法化を中心に－」（レフェリー論文）	単著	2008.06.00	『社会体制と法』	1997 年の香港返還以降も、「一国両制（一国家二制度）」が実施され、香港の「従来の法は……保留される」とされた。したがって、香港法は、国家機密関連を含む国家安全の法は、中国法とは一線を画した従来の内容を保ってきた。しかし、国家安全の分野に限っては、香港特別行政区基本法（以下、基本法と称する）23 条は国家機密窃取を禁止する法律を香港特別行政区自らが制定しなければならない、として返還後香港自ら新たに国家安全関連の法を制定すべきことを義務付けている。それが基本法 23 条の立法化である。本稿は基本法 23 条が予定する範囲のうち、特に国家機密の窃取に焦点を当てる。具体的には、国家機密に関する香港法を明確にしたうえで、基本法 23 条立法が導入しようとした「国家機密の窃取」を詳説し、その問題点を明らかにした。（70-83 頁）
その他					
1	王向華『友情と私利－香港－日系スーパーの人類学的研究』	共	2004.06.00	風響社	香港における日系企業におけるフィールドワークを通じて、そこでの日本人社員および現地人社員との間の人間関係を文化人類学的に考察した研究書。応募者は第 10 章の翻訳を担当した。王向華氏は香港大学日本研究学助教授。（他の翻訳者：河口充男）（434 頁）（ISBN4-89489-027）
2	「香港基本法の展開と課題－解釈権および違憲審査権をとおして－」	単	2004.09.00	現代中国法研究会（於：東京大学）	香港返還後の香港基本法訴訟の展開に関して、香港基本法解釈権および香港法院の違憲審査権という「一国両制」の根幹に関わる制度を手がかりに、考察を試みた。特に香港基本法解釈権に関しては香港居留権事件、香港行政長官および香港立法会選挙の普通選挙の実施に関して、返還後に 2 度も全人代常委会より基本法解釈が発表されるなど、積極的な展開を見せている。本報告においては、香港基本法条文のみならず香港コモン・ローと中国法との対比を行うことで、返還後香港法が有する課題を考察した。（配布資料 A3・7 枚）
3	施文正『草原法講話』	共	2005.07.00	『一橋法学』第 4 巻 2 号	中国草原法の改正草案起草活動に携わった施文正元中国内モンゴル自治区人民政府法制工作諮問委員会委員）による、中国－EU 法律共同プロジェクト「草原環境の法律保護」の成果としての論文。中国新草原法について、改正の要点を旧法との比較を踏まえつつ概説し、かつ草原環境保護を中心として新草原法を論じている。（共訳者：西村幸次郎）（pp.705-736）（ISSN1347-0388）
III 学会等および社会における主な活動					
1	2000.04.00	～	現在	日本現代中国学会会員	
2	2000.09.00	～	現在	現代中国法研究会会員（広報委員）	
3	2004.11.00	～	現在	日本華僑華人学会会員	

経営学部

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	青木 幹喜	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 経営学イノベーション (3) 経営組織論		2006.04.00		中央経済社 本書は経営学のテキストとして書かれたものであり、経営組織論の内容が中心となっている。第2章では、経営組織とは一体何かといった経営組織の基礎的概念を論じ、また第5章ではコミュニケーション、特に、組織コミュニケーションの概要を示した。さらに、第6章では、リーダーシップの伝統的アプローチ、現代的アプローチの主要理論を紹介した。十川廣國 (編)。筆者は、第2章 経営組織の特徴と基礎概念 (pp.16~30) 第5章 コミュニケーション (pp.63~83) 第6章 リーダーシップ (pp.84~102) を担当。B5版、総ページ数 216 ページ。			
2) 人と組織を活かす経営管理論		2009.04.25		八千代出版 本書は、筆者が編著者となりまとめた経営管理論のテキストである。大学生および若い社会人を対象にして書かれたものであり、マネジャーになるための基礎的な知識を提供することを目的としている。筆者は序章 経営管理論という学問 (pp.1~11)、第1章 マネジャーの組織 (pp.15~33)、第2章 経営学の視点によるマネジャーの仕事 (pp.35~52) を担当する。石井昌宏、岩田一哲、金尾悠香、河野良治、佐藤耕紀、当間政義、山田敏之との共著。B5版、総ページ数 267 ページ。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 経営におけるエンパワメントーその理論展開と実証研究ー	単著	2005.03.00	大東文化経営研究所	本書は、経営におけるエンパワメントの理論サーベイを行なうとともに、エンパワメント・モデルの構築、仮説の導出、仮説の検証といった実証研究を行なった。エンパワメントを個人の創造的学習の推進力として位置づけ、はたしてエンパワメントが個人の創造的学習を促進するのか、また、エンパワメントの促進要因は何かを明らかにしたのが本書である。B5版、総ページ数 301 ページ。			
2 エンパワメント経営	単著	2006.04.00	中央経済社	本書は、2005年3月に発行した『経営におけるエンパワメントーその理論展開と実証研究ー』が市販されないため、その内容を修正し、市販用に発行されたものである。『経営におけるエンパワメントーその理論展開と実証研究ー』の中の第6章と第7章を省き、また、各章の一部を加筆・削除・修正し、市販用として発行した。B5版、総ページ数 228 ページ。			

論文				
1 経営におけるエンパ ワメント理論の新 動向	単著	2005.09.00	経営論集（大東文化大学経 営学会） 第10号 pp.1～ 17	最近のエンパワメント理論の動向を示してみた。エンパ ワメントの失敗により、エンパワメントの実行プログラム に焦点があてられるようになってきていること。また、エンパ ワメント概念が個人からチーム・組織へ適用されるようにな っていることを指摘した。B5版、総ページ数109ページ中、 17ページ。
2 経営におけるエンパ ワメント研究 ― 戦略創造の視点から ―（博士論文）	単著	2005.09.00	慶応義塾大学	エンパワメントを戦略創造の視点から論じ、エンパワ メントが従業員の創造的学習にどの程度関連するのか、また、 エンパワメントの促進要因にはどのようなものがあるの かを論じたのが本論文である。エンパワメント概念の検討 やエンパワメントの理論的サーベイを行ない、エンパワ メントに関わる研究モデルを構築し、その検証を行なってい る。
3 「イノベーションの 前提」について ―日 本とシリコンバレー との比較から―	共著	2005.10.00	大東文化大学経営研究所リ サーチペーパーNo.J-47	イノベーションが生起する諸条件（企業組織、社会的・文化 的バックグラウンド）を調査し、イノベーションの従来型日 本モデルとシリコンバレー型モデルの2つに分類した。ま た、従来型日本モデルが岐路に立っていることを指摘した。 1. はじめに(p1)、2. イノベーションの類型(pp.1～3)、 6. まとめ(p12)を担当。小沢一郎との共著。総ページ数73 ページ。
4 経営的側面からの企 業評価指標	共著	2006.03.00	大東文化大学経営研究所リ サーチペーパーNo.J-48（企 業評価の現状と動向）	大東文化大学経営研究所主催、第3回シンポジウムの報告内 容に基づき、経営的側面からの企業評価指標について論述し た(pp.11～24)。青木茂男、松尾敏充、永田清、天笠美知夫 との共著。総ページ数69ページ。
5 経営教育事典	共著	2006.06.00	学文社	日本経営教育学会25周年の記念に刊行された事典であり、 経営教育に関わる事典となっている。日本経営教育学会25 周年記念編集委員会編集。筆者は近代管理論など2項目(p34) を担当。B5版、総ページ数294ページ。
6 エンパワメントの 失敗と活性化	単著	2006.09.00	経営論集（大東文化大学経 営学会） 第12号 pp.1～ 19	2000年前後から失敗の報告が数多くなされるようになって きたエンパワメントの失敗原因をいくつか指摘した。ま た、エンパワメントに今なお潜在的力があるという視点か ら、エンパワメントの再活性化の方法を論じた。B5版、 総ページ数125ページ中、19ページ。
7 エンパワメントと コントロール	単著	2007.08.00	三田商学研究（慶應義塾大 学商学会） 第50巻3号 pp.239～251	エンパワメントの失敗原因の一つに、他の要因との連動性 を考慮していないという点があげられている。ここでは、コ ントロールという要因に注目して、エンパワメントの再活 性化にコントロールという要因が、本当に必要なかどうか を理論的・実証的に検討した。B5版、総ページ数483ペ ージ中、13ページ。
8 チーム・エンパワ メント ―研究の背景 と課題―	単著	2008.02.00	経営論集（大東文化大学経 営学会） 第15号 pp.1～ 16	エンパワメントの失敗原因には、個人のエンパワメント に焦点を当てすぎ、チームのエンパワメントを考慮しな かったことがあげられる。ここでは、チーム・エンパワ メントが何故必要なのかその背景を論ずるとともに、その研究課 題を示してみた。B5版、総ページ数115ページ中、16ペ ージ。
9 イノベーションの源 泉としての学習能力	共著	2008.03.00	イノベーション研究（成城 大学イノベーション学会） 第3巻第2号 pp.19～55	長期にわたって実施しているアンケート調査をもとに、日本 の製造企業のイノベーションの源泉が何かについて論じた。 個人の創造的学習に加え、組織の創造的学習能力の獲得・維 持が、イノベーションの源泉であることを論じた。十川廣國、 神戸和雄、遠藤健哉他11名との共著。B5版、総ページ数 190ページ中、37ページ。（担当部分抽出困難）
10 チーム・エンパ ワメントの理論展望	単著	2009.02.00	三田商学研究（慶應義塾大 学商学会） 第51巻第6号 pp.73～85	従来、経営におけるエンパワメント研究は、個人レベルの 研究が中心であった。しかし、最近、チームそのものがエン パワーするというチームレベルのエンパワメント研究も 進められるようになってきた。こうしたチームレベルのエン パワメント研究の理論サーベイを行なったのが本論文で ある。B5版、総ページ数219ページ中、13ページ。
その他				

1	経営的側面からの企業評価指標	単独	2004.11.00	大東文化大学経営研究所第3回シンポジウム「多元的企業評価指標の研究・開発」(於大東文化大学)	経営的側面からの企業評価指標を抽出するにあたっては、企業の持続的競争優位の獲得・構築の背後にある組織能力に注目し、この組織能力を構成する諸要素を考慮するべきであるという報告を行なった。
2	慶応義塾大学経済学研究科・商学研究科COEプロジェクト経営会計班中間報告書	共著	2005.01.00	慶応義塾大学	COEプロジェクトによる調査研究の中間報告書であり、第5章戦略的提携・技術・設備関連・組織要因の中の13. 戦略的提携における問題解決方法、14. リエゾンを担当した。十川廣國、黒川行治他31名との共同執筆。
3	「新時代の企業行動ー継続と変化」に関するアンケート調査(2)	共著	2005.02.00	三田商学研究 第47巻第6号 pp.121-145	本資料では、例年実施している日本の製造企業を対象にしたアンケート調査の一次集計結果が示されており、2004年夏の時点での日本の製造企業のマネジメント実態が報告されている。十川廣國、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、今野喜文、山崎秀雄、山田敏之、坂本義和、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、渡邊航との共同執筆(資料)(レフェリー制有り)(担当部分抽出困難)
4	定性要因による企業評価ー組織能力からの検討ー	単独	2005.03.00	JR 東日本大東文化大学寄附講座 成果報告会(於JR 東日本本社)	日本の製造企業のデータに基づき、経営の定性要因(経営者特性、従業員のビジョン理解、権限委譲、成果主義)の現状と財務的業績との関連を報告した。
5	経営におけるエンパワメント	単独	2005.10.00	日本経営学会関東部会(於大東文化大学)	エンパワメント研究の視点、エンパワメント概念、エンパワメント理論の概略を述べ、エンパワメントの促進要因、エンパワメントと従業員の創造的学習との関連性を、日本の製造企業を対象にした調査データに基づいて報告した。
6	市場の変化と企業行動ー経営・会計・商業の多角的視点からの分析 慶応義塾大学経済学研究科・商学研究科 COEプロジェクト経営会計班中間報告書(2)	共著	2006.01.00	慶応義塾大学	昨年に引き続き実施したCOEプロジェクトによる調査研究の中間報告書であり、第5章戦略的提携・技術・設備関連・組織要因の中の10. 問題の解決方法、11. リエゾンを担当した。十川廣國、黒川行治他33名との共同執筆。
7	「新時代の企業行動ー継続と変化」に関するアンケート調査(3)	共著	2006.02.00	三田商学研究 第48巻第6号 pp.147-167	本資料では、例年実施している日本の製造企業を対象にしたアンケート調査の一次集計結果が示されており、2005年夏の時点での日本の製造企業のマネジメント実態を報告した。十川廣國、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、今野喜文、山崎秀雄、山田敏之、坂本義和、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、永野寛子との共同執筆(資料)(レフェリー制有り)(担当部分抽出困難)
8	日本企業におけるエンパワメントー権限委譲の有効性ー	単独	2006.03.00	JR 東日本大東文化大学寄附講座 成果報告会(JR 東日本本社)	日本の製造企業のデータに基づき、権限委譲の現状と権限委譲が成功する諸条件とは一体何かを報告した。
9	経営におけるエンパワメント研究ー戦略創造の視点からー	単独	2006.09.00	日本経営学会第80回大会(於慶応義塾大学)	前年に報告した日本経営学会の部会報告に基づき、エンパワメント研究の視点、エンパワメント概念、エンパワメント理論の概略を述べた。そして、エンパワメントの促進要因、エンパワメントと従業員の創造的学習との関連性を、日本の製造企業を対象にした調査データに基づいて報告した。
10	新時代の企業行動ー継続と変化ー	共著	2007.01.00	千倉書房	本書は、日本経営学会第80回大会(2006年9月開催)の統一論題、自由論題の報告内容をまとめたものである。自由論題として報告した概要が、本書に記されている。自由論題：経営におけるエンパワメント研究ー戦略創造の視点からー(pp.126~127)
11	変化の時代における不変のマネジメント	共著	2007.02.00	三田商学研究 第49巻第7号 pp.205-228	本資料では、例年実施している日本の製造企業を対象にしたアンケート調査の一次集計結果が示されており、2006年夏の時点での日本の製造企業のマネジメント実態が報告されている。十川廣國、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、今野喜文、山崎秀雄、山田敏之、坂本義和、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、永野寛子との共同執筆(資料)(レフェリー制有り)(担当部分抽出困難)

12	環境経営における“見える化”の実態と戦略経営の課題	共著	2007.03.00	機械振興協会経済研究所	環境経営においても「見える化」が必要であること。しかも、創発された「見える化」が必要であることを理論的・実証的に示そうとしたのが本報告である。第3章を担当。A4版104頁 第3章 P D C Aサイクルと「見える化」一上から与えられる「見える化」の現状と問題一 (pp.55~65) 十川廣國、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、山崎秀雄、永野寛子、山田敏之との共同執筆。
13	CMSによる企業グループの総合的資金マネジメント	単独 (コメントータ)	2008.07.19	日本経営学会関東部会 (於明治大学)	園田智昭氏 (慶應義塾大学) の報告についての司会・コメントータを行なう。
14	従業員のエンパワメントとリーダー行動	単独	2009.04.18	日本経営教育学会関東部会 (於文京学院大学)	従業員が心理的にエンパワーするには、リーダーはいかなる行動を取るべきかを、これまでの理論サーベイや実証研究の成果から、実践的に論じた。従業員が有意味感高める、自己決定感を高める、自己効力感を高める、そして到達感を高める具体的行動を、リーダーは取るべきだと論じた。

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.00.00	～	現在	組織学会会員
2	1997.00.00	～	現在	日本経営教育学会会員
3	1999.00.00	～	2007.03.00	職業能力開発協会特級技能検定委員 (国家試験)
4	2000.00.00	～	現在	経営分析学会会員
5	2000.00.00	～	現在	日本経営学会会員
6	2005.00.00	～	2006.00.00	機械振興協会経済研究所平成17年度調査研究事業「中小製造業におけるエコ・イノベーションの実態に関する調査研究」委員会委員
7	2005.04.00	～	現在	慶応義塾大学慶応義塾大学経済学研究科・商学研究科連携21世紀COEプログラム市場の質に関する理論形成とパネル実証分析ー構造的経済政策の構築にむけてー学外研究協力者
8	2006.00.00	～	2007.00.00	機械振興協会経済研究所平成18年度調査研究事業「環境経営における“見える化”の実態と戦略経営の課題」委員会委員
9	2009.01.27	～	2009.01.27	大阪中小企業投資育成 (株) リーダー育成プログラム講師

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	教授	氏名	井上 照幸	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 大東文化大学授業評価			2009.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.7 (5 段階評価)。殊に「説明の理解度」「授業目的の明確性」「教員の熱意」等の項目では満点の評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
1 『競争と規制の経営学』		共著	2006.04.25	ミネルヴァ書房		本著では規制改革が及ぼす影響と課題について多角的な考察が展開されている。規制緩和と一辺倒の潮流に対してその問題点を指摘し、規制緩和論の理論的前提を批判的に検討している。それらを通じて、規制緩和から規制改革への変化と展望を試みている。井上は、日本の規制緩和がテレコムビジネスのグローバル化と米国の対日要求に連動している実態を究明し、テレコム企業の競争と規制に関する諸課題を考究している。共著者名：上田慧、齊藤正、小坂直人、村松祐二、桜井徹。井上照幸は第 1 章「テレコムビジネスにおける競争と規制～競争促進と公益性のジレンマ～」を執筆した。総頁数 244 頁中 29～70 頁。		
2 『ユビキタス時代の産業と企業』		共編著	2007.03.30	税務経理協会		ユビキタスネットワークの本格的進展が始まろうとしている。その進展が企業・産業レベルでどのような状況を生み出し、如何なる課題を内包するかについて、学際的な考究を展開している。井上は、ユビキタスの本来の語義およびマーク・ワイザーによるユビキタス概念を究明し、併せて理念としての「遍在」が「偏在」へ変質する現実を考察している。共編者：林倬史、渡邊明。井上照幸は編集担当とともに第 1 章「ユビキタスの理念と現実～マーク・ワイザーから u-Japan 政策への変容～」を執筆した。総頁数 243 頁中 3～30 頁。		

3	『日本のリーディングカンパニーを分析する～流通・テレコム～』	共編著	2007.07.10	唯学書房	本書は、情報化の進展の下で大きく変貌しつつある現代日本の流通企業とテレコム企業について、経営分析している。とかく看過されがちな社会的視座に配慮して、「現状への建設的批判と将来像の考究」を重視し分析しているところに大きな特徴がある。井上は、テレコムビジネスの特質の検証を通じて、現代日本のテレコム企業における新たな潮流について探究している。監修：大橋英五、共編者：野中郁江。井上照幸は編集担当とともに、第6章「テレコムビジネスおよびテレコム企業の内実と新潮流」を執筆した。総頁数 268 頁中 127～151 頁。
	論文				
	その他				
1	『独英情報通信産業比較にみる政治と経済』	単著	2009.03.25	日本比較経営学会(編)『比較経営研究』第 33 号、文理閣刊	ドイツを基軸に英国と欧州における情報通信産業の研究分析を世に問うている徳島文理大学教員の齋藤敦氏の著作について、日本比較経営学会から依頼されて書評を執筆した。総頁 204 頁中 186～192 頁。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1972.09.00	～	現在	日本経営学会理事 (平成 16 年度～現在)	
2	1977.04.00	～	現在	日本比較経営学会理事 (平成 10～11 年度) 常任理事 (平成 12～14 年度) 理事 (平成 16 年度～平成 18 年度)	
3	1983.11.00	～	現在	情報通信学会会員	
4	1993.06.00	～	現在	公益事業学会理事 (平成 19 年度～現在)	

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	教授	氏名	岡田 良徳	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1)			2006.05.10	日本ニュージーランド学会編『ニュージーランドへゆこう』は、ニュージーランドへ研修に行く学生のための必要知識が掲載されている。※研究業績の再掲			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)			1993.04.01	(1993年4月1日～現在) 明治大学商学部兼任講師 (専門演習担当)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 ニュージーランドと日本の貿易摩擦・漁業摩擦	単著	2005.03.31	東北公益文科大学 ニュージーランド研究所第4号 『ニュージーランド・ノート』	ニュージーランドと日本の貿易摩擦は、漁業摩擦に関係して起こることが多い。両国の食文化との関連を明らかにするとともに今後の問題を分析した。			
2 「ニュージーランドの対日貿易と産業・企業」	単著	2005.06.15	『日本ニュージーランド学会誌』第12巻、日本ニュージーランド学会	ニュージーランドに進出した日本企業によって対日貿易はどのように変化してきたか検討した。また、ニュージーランド側のライバル企業や産業の動向についても考察した。			
3 「日本の自動車産業の対米進出と貿易ーデトロイト近郊の日系サプライヤーの事業を中心として」	単著	2006.02.25	大東文化大学経営学会『経営論集』第11号	デトロイト近郊の日本企業を実地調査した体験をもとに直接投資や貿易のデータを分析整理し、自動車貿易の問題点を考察した。			
4 「羊と牧場、農業と産業・日本との貿易」	単著	2006.05.10	日本ニュージーランド学会編『ニュージーランドにゆこう』	ニュージーランドの伝統的産業である酪農と牧畜の現状について検討し、最近の新しい産業と農業の方向について考察した。			
5 Japan-New Zealand Trade and Fishery Frictions: Some Characteristics and Implications	単著	2006.09.25	New Zealand Agricultural and Resource Economics Society Conference Papers(NZARE S)	英文の論文。日本とニュージーランドの貿易摩擦と漁業摩擦についてその原因を検討した。また、今後の両国間の貿易のあり方について考察した。			
6 ニュージーランド学会編『ニュージーランド百科事典』	共著	2007.07.19	春風社	ニュージーランドの経済・貿易・ビジネスの部分を担当した。			

7	「ニュージーランドにおける日本企業の進出とその貿易効果ー王子製紙(株)と住友化学(株)の例を中心として」	単著	2008.02.25	大東文化大学経営学会『経営論集』第15号	アルミニウムと材木や紙類の対日輸出がどの様に増加していったかを明らかにした。また、今後の対日貿易の問題点も指摘した。
その他					
1	「ニュージーランドの対日貿易と産業・企業」	単	2005.06.18	日本ニュージーランド学会第12回研究大会(於大東文化大学)	ニュージーランドに進出した日本企業によって対日貿易はどのように変化してきたか検討した。ニュージーランド側のライバル企業や産業の動向についても考察した。討論では、特に伝統的産業である、酪農・牧畜の分野での質問があり、これに対する説明をおこなった。
2	「ニュージーランドの貿易政策と対日貿易ー改革後のNZ経済の方向とそのあり方」	単	2005.09.18	日本ニュージーランド学会北海道苫小牧・拡大研究会(於苫小牧駒沢大学)	経済改革後のニュージーランド経済は大幅に変化したきた。対日貿易もそれにつれて変化して来ているが、その方向について報告した。
3	Japan-New Zealand Trade and Fishery Frictions:Some Characteristics and Implications	単	2006.08.25	(New Zealand Agricultural and Resource Economics Society Conference), Tahuna Conference centre,Nelson,NZ	英語による口頭発表。日本とニュージーランドの貿易摩擦と漁業摩擦についてその原因を検討した。また、今後の両国間の貿易のあり方について考察した。
4	“Japanese Companies' Investment and Trade in New Zealand: Two Cases for Paper and Aluminium Projects”	単	2007.08.31	Presentation in the Seminar of New Zealand Asia Institute, Auckland University	オークランド大学で英語による報告をおこなった。大学の教員および学会員と英語による討論をおこなった。
5	「ニュージーランドにおける日本企業の進出と貿易:製紙とアルミニウムを事例として」	単	2007.10.13	日本ニュージーランド学会報告 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科会議室	オークランド大学での報告を日本語として報告。当日の質問や討論についても報告した。
6	研究ノート(フレッチャー)「ジェームズ・フレッチャー家の起業とニュージーランド経済への貢献ーフレッチャー社のビジネス展開と多国籍化の過程ー」	単著	2009.03.30	『経営論集』第17号	ニュージーランドで生成した世界的企業のコングロマリット化をその起業家のジェームズ・フレッチャーー三代の時代的背景を考察しながら経営陣の決断と企業の成長変革を分析した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1972.04.00	～	現在	日本貿易学会会員(1984年度および1991-1995年度の理事)
2	1982.04.00	～	現在	国際経済学会会員
3	1982.04.00	～	現在	大洋州経済学会会員(1989年度ー現在まで幹事)
4	1994.04.00	～	現在	日本ニュージーランド学会会員(1994年度ー現在まで理事、2000年6月ー2002年6月まで事務局長、2002年6月ー2004年6月まで会長)

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	熊沢 孝	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) Q&Aカード方式による参加型授業 (2006年4月1日～継続中)		2006.04.01		経営史、並びに経営学総論において、毎授業時に質問、意見カードを集め次回にQ&Aを記載したプリントを配布することによって、現代の消極的な学生のための参加型授業を実現している。カード提出を1回以上試みた学生は、受講者の3割程度であるが、質問機会に対してほぼ100%の学生が満足しており、関連して講義の説明についても90%程度が理解したと回答する結果となった。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 ネットワーク・イノベーションとマーケティング	共	2006.03.30	晃洋書房	本書はコンピュータ・ネットワークの形成の下での情報化が企業マーケティングにもたらした変化について、企業間マーケティングから対消費者マーケティングまで、事例調査を基本としながら分析・検討したものである。共著者名：佐藤研司、藤田誠久、藤岡章子 担当部分：第6章「インターネットと消費者の世界」(p.123-143)			
2 現代アメリカのビッグストア	共	2006.08.07	同文館 (マーケティング史研究会編)	本書はアメリカのビッグストアについて、業態の生成過程及び消滅をめぐって、12社の詳細な事例について分析したものであり、現状では最も包括的な研究書である。共著者名：小原博、光澤滋朗、鈴木和也、鳥羽達郎、三浦信、青木均、申賢洙、後藤一郎、塚田朋子、神保充弘、木棉良行 担当部分：第12章「シュピーゲルマーケティングの2つの武器による成功と失敗」(p.239-261)			
3 ヨーロッパのトップ小売業—その史的展開—	共	2006.10.01	同文館 (マーケティング史研究会論)	ヨーロッパにおける近代小売業の歴史的発展過程について扱ったわが国で最初の包括的研究書であり、主要企業11社についての論文が収録される。共著者名：John A. Dawson、鳥羽達郎、Leigh Sparks、Steve Burt、岩本明憲、戸田裕美子、Paul Jackson、斎藤雅通、三浦信、薄井和夫、東伸一、塚田朋子、河野三郎 担当部分：第8章「イケア (IKEA) —ライフスタイル市場の開拓者」(p.209-229)			

4	「中小企業における知的財産戦略」	共	2007.03.00	財団法人企業共済協会	本書は、特許、商標権など、いわゆる企業の知的財産の形成、保護をめぐる戦略について、中小企業を対象として12社の現地調査を踏まえて分析したものである。特にこの研究においては、わが国における中小企業の成長過程において、現実にも効性をもつ知財戦略がどのようなかたちのもので形成され展開されているかについて経営理念などの経営史的な理解をはかりながら深り下げている。共著者名：橋本正敏、小田恭市、日野修男、嶋村幸仁 担当部分：序章「中小企業における知的財産戦略への視点」(p3-6) 第6章「事例企業の知的財産戦略」(p.46-50、p82-87)
5	「産地企業のブランド化戦略」	共	2008.03.00	財団法人企業共済協会	本書は、わが国の伝統的な中小企業の現代市場への適応戦略として、ブランド化戦略に焦点をあてて分析したものである。10社の実地調査に基づく事例研究から、中小企業が現代の市場において、商品さらに企業のブランド力を高めることによってベンチャービジネス的に再成長することの可能性を示すとともに、特にそのための企業間リネージュなど、組織的な手法の重要性を明らかにした。共著者名：佐藤研司、大橋正房、及川勝、佐々木勉 担当部分：第1章「産地企業がブランド化に成功するために」(p7-15) 第6章「ブランド化をめざす産地企業の思考と行動」(p.54)
6	マーケティング学説史—アメリカ編—(増補版)	共	2008.04.25	同文館(マーケティング史研究会編)	本書はアメリカにおけるマーケティングの主要学説について、現在におけるマーケティングの理論と実践の到達点から再検討したものであり、わが国マーケティング学界として初めての試みである。共著者名：三浦信、薄井和夫、近藤文男、山中豊国、上沼克徳、小原博、尾崎久仁博、光澤滋朗、白石善章、西村栄治、風呂勉 担当部分：第4章「J. A. ハワード—マーケティング管理論と消費者行動論の開拓者—」(p.61-78)
論文					
1	企業家精神と企業成長—IKEAをめぐる—	単	2005.03.31	「国府台経済研究」第16巻第4号 千葉商科大学経済研究所	企業家の地域志向的な理念の下に創業された企業が、その成功によってより大きな市場の開拓と企業成長へと向う場合に、どのような葛藤が生じ、それはいかんにして克服されるのか、という問題についてスウェーデンから出発したIKEA社を中心に検討した。
2	新パラダイム下における中小製造企業のマーケティングの可能性	単	2005.10.00	「商工金融」第55巻第10号 商工総合研究所	マーケティング戦略のあり方について、大企業と異なる中小製造企業の存立形態、行動様式に焦点をあてて検討している。とりわけ、中小企業のマーケティング戦略の理解には、最近の認知科学的研究が示唆を与えるということが示される。
3	「企業活動の基本精神とビジネス・コミュニティの可能性」	単	2007.09.10	近代化過程東中東三国的相互認識(南開大学日東研究院)	本論文は、工業化過程における資本主義の型について、特に投資の概念から検討し、東アジア3国の今後の経済発展の協調において企業活動の基本精神の共有の必要性を指摘したものである。
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1977.09.00	～	現在	経営史学会会員	
2	1980.05.00	～	現在	商業学会会員	
3	1983.04.00	～	現在	産業学会会員	
4	1985.10.00	～	2005.11.00	中小企業学会会員	
5	1988.10.00			千葉県「小売価格情報ネットワークに関する調査(経済企画庁)」委員長	
6	1990.01.00	～	現在	ヴィジョン開発研究所代表	

7	1992.10.00	～	現在	マーケティング史研究会会員
8	1996.05.00	～	現在	財団法人ベンチャーエンタープライズセンター評議員
9	2003.06.00	～	現在	日本繊維製品消費科学会会員
10	2006.06.00	～	2007.03.00	財団法人企業共済協会「中小製造業における知的財産戦略検討委員会」委員長
11	2007.04.00			財団法人企業共済協会理事
12	2007.04.00	～	2008.03.00	財団法人企業共済協会「地場産業のブランド化戦略検討委員会」委員長
13	2008.04.00	～	2009.03.00	財団法人企業共済協会「映像産業と中小企業検討委員会」委員長

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	小松 義明	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 西武文理大学授業評価		2005.07.00	西武文理大学授業評価 (平成 17 年 7 月、12 月実施) において、高い評価を得た。授業満足度 (7 月、12 月共に) 4.6 (5 段階評価)。				
2) 西武文理大学授業評価		2006.07.00	西武文理大学授業評価 (平成 18 年 7 月、12 月実施) において、高い評価を得た。7 月：授業満足度 4.4 (5 段階評価)。12 月：授業満足度 4.8 (5 段階評価)。				
3) 西武文理大学授業評価		2007.07.00	西武文理大学授業評価 (平成 19 年 7 月、12 月実施) において、高い評価を得た。7 月：授業満足度 4.6 (5 段階評価)。12 月：授業満足度 4.3 (5 段階評価)。				
4) 明治大学授業評価		2007.07.00	明治大学授業評価 (平成 19 年 7 月、12 月実施) において、高い評価を得た。7 月：平均値 3.5 (4 段階評価、商学部平均 3.1)。12 月：平均値 3.7 (4 段階評価、商学部平均 3.3)。				
5) 明治大学授業評価		2008.07.00	明治大学授業評価 (平成 20 年 7 月実施) において、高い評価を得た。平均値 3.5 (4 段階評価、商学部平均 3.2)。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) さやまビズキッズ		2004.09.00	(2004 年 9 月より 2007 年 12 月まで) 狭山市入間川小学校、狭山商工会議所の共催の地域経済活性化活動 (例年 9 月～11 月実施) に西武文理大学の基礎演習 (ゼミナール) の一環として参加した。学生に小学 5 年生の総合学習の指導を行わせることにより、これまでの学習成果の確認と集団におけるリーダーシップについて学ばせた。				
2) 狭山市まちづくり市民公開講座		2006.12.00	西武文理大学、狭山市等共催「狭山市まちづくり市民公開講座」の平成 18 年度第 2 回「商店街の活性化」のパネラーとして報告した。サービス経営学を学んだ学生が地域商店街にどのように貢献できるかについて、大学における教育者の立場から報告した。				
3) 狭山市まちづくり市民公開講座		2008.02.00	西武文理大学、狭山市等共催「狭山市まちづくり市民公開講座」の平成 19 年度第 3 回「大学と地域経済」を企画し、コーディネーターとして司会を担当した。行政、商工業、学術の各分野からの報告を行い、大学が地域にどのように貢献できるかについて討論した。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							

1	ドイツにおける監査証明「確認の付記」の構造—国際監査基準 (ISA) 700 との比較分析—	単著	2006.03.15	『同志社商学』第 57 巻 6 号、同志社大学商学会	この論文では、ドイツにおける監査証明「確認の付記」が国際監査基準 700 号の影響を受けて英米流の「監査報告書」に接近し、いわゆる「確認の報告書」を以前にも増して模索していることが解明された。B 5 版、総頁数 290 頁中 14 頁。
2	ドイツ監査基準にみる内部統制システムの概念	単著	2006.04.25	『産業経理』Vol.66 No.1、財団法人産業経理協会	この論文では、ドイツ監査基準における内部統制システムの概念が導出されている。外形上は米国の internal control に接近させていることが窺えるが、実質的にはドイツの独自性が堅持されていることが明らかにされた。B 5 版、総頁数 頁中 8 頁。
3	ドイツ監査基準におけるリスク早期認識システムの概念—内部統制システムの観点から—	単著	2007.08.31	『経営行動研究年報』第 16 号、経営行動研究学会	(査読あり) この論文では、ドイツ経済監査士協会が I DW 監査基準 340 号の中で規定する「リスク早期認識システム」の概念をリスクマネジメントシステム、内部統制システムとの関連の中で明らかにした。A 4 版、総頁数 145 頁中 6 頁。
4	日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ 会社法の計算規定 中間報告	共著	2007.09.01	『日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ中間報告書』、日本会計研究学会スタディー・グループ	共著者◎吉岡正道編、徳前元信、杉山晶子、安達 巧、池田幸典、井上和彦、氏原茂樹、大野智弘、岸 牧人、神納樹史、永岩尊暢、長島 弘、成川正晃、弥永真生、山崎秀彦、筆者名、小松義明。筆者は「第Ⅱ編 会社法の計算規定に対する監査の位置付け 第 8 章計算書類等及び連結計算書類の開示義務と内部統制」の内、「1.業務の適正を確保するための体制と内部統制」(98-104 頁)を担当。B 5 版、総頁 172 頁。
5	ドイツにおけるリスクマネジメントの監査—IDW 監査基準 340 による決算監査人の任務—	単著	2007.09.30	『経理知識』第 86 号、明治大学経理研究所	(査読あり) この論文では、ドイツ経済監査士協会による監査基準 340 号に規定されているリスクマネジメントシステムの監査に関して、監査対象、監査手続に焦点を当て分析し、決算監査人が対象とすべきリスクマネジメントシステムの概念と範囲を明らかにした。B 5 版、総頁数 92 頁中 12 頁。
6	日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ 会社法の計算規定 最終報告書	共著	2008.09.08	『日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ最終報告書』、日本会計研究学会スタディー・グループ	会社法の計算規定の研究 共著者◎吉岡正道編、徳前元信、杉山晶子、安達 巧、池田幸典、井上和彦、氏原茂樹、大野智弘、岸 牧人、神納樹史、永岩尊暢、長島 弘、成川正晃、弥永真生、山崎秀彦、筆者名、小松義明。筆者は「第Ⅱ編 会社法の計算規定と監査」の内、「第 8 章 株式会社の業務の適正を確保するための体制と内部統制」(112~120 頁)担当。B 5 版、総頁 187 頁。
その他					
1	内部統制の国際的動向—アメリカ、日本およびドイツの状況—	単	2005.07.29	産業経理協会経営戦略会計研究委員会、産業経理協会	内部統制に関する世界的な標準ともいべき米国の COS O 報告書に示されるフレームワークの影響に着目して、ドイツおよび日本の国内基準化の状況と特質について報告した。
2	ドイツ監査基準にみる「リスク早期認識システム」の概念—内部統制システムの観点から—	単	2006.07.30	経営行動研究学会第 16 回全国大会、桜美林大学	ドイツ経済監査士協会が I DW 監査基準 340 号の中で規定する「リスク早期認識システム」の概念をリスクマネジメントシステム、内部統制システムとの関係について解明し、報告した。
3	日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ 会社法の計算規定 中間報告	共	2007.09.01	日本会計研究学会第 66 回全国大会、松山大学	「第Ⅱ編 会社法の計算規定に対する監査の位置づけ 第 8 章計算書類等及び連結決算書類の開示義務と内部統制」の内、「1. 業務の適正を確保するための体制と内部統制」を担当。
4	日本会計研究学会 2007—2008 年度スタディー・グループ 会社法の計算規定 最終報告	共	2008.09.08	日本会計研究学会第 67 回全国大会、立教大学	会社法の計算規定の研究 「第Ⅱ編 会社法の計算規定と監査」の内、「第 8 章 株式会社の業務の適正を確保するための体制と内部統制」を担当。
5	ドイツ監査基準の国際化	単	2008.09.21	日本監査研究学会第 31 回全国大会、立命館大学経営学部 (びわこ・くさつキャンパス)	ドイツにおける監査基準の国際化について、ドイツの国内法、会計慣行、国際監査基準および米国監査基準の観点に着目して検討し、その特徴と展望について報告した。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1999.09.00 ~ 現在	日本会計研究学会会員			

2	2002.05.00	～	現在	日本簿記学会会員
3	2002.09.00	～	現在	経営行動研究学会会員
4	2004.09.00	～	2007.11.00	「さやまビズキッズ」への参加（狭山市入間川小学校、狭山商工会議所、西武文理大学共催の地域経済活性化活動、例年9月～11月実施）西武文理大学学生統括責任者
5	2004.09.00	～	現在	日本監査研究学会会員
6	2006.12.07	～	2006.12.07	「狭山市まちづくり市民公開講座」（西武文理大学、狭山市等共催）平成18年度第2回、テーマ「商店街の活性化」のパネラーとして報告
7	2008.02.07	～	2008.02.07	「狭山市まちづくり市民公開講座」平成19年度第3回、テーマ「大学と地域経済」のコーディネーターとして司会担当
8	2008.04.00	～	現在	国際会計研究学会会員

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	首藤 禎史	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) ビジネス・マーケティング実践研究							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『経営学検定試験公式テキスト/6 マーケティング』	共著	2006.03.10	中央経済社	経営に関する基礎的・専門的知識の応用能力としての経営管理能力および問題解決能力の水準の資格認定を行なう経営学検定試験の中級のマーケティング分野における公式テキストとして企画された書籍で、筆者はその中の第1部「マーケティングの新しい考え方」の第4章「標的市場と価値提案」を担当した。A5版、総頁数255頁中74頁-105頁(31頁)。経営学検定試験の受験者を対象とした経営学関連の用語およびキーワードの解説書。			
2 『経営学検定試験公式テキスト 経営用語・キーワード』	分担執筆	2007.06.15	中央経済社				
3 『ビジネス・キャリア検定試験標準テキスト マーケティング3級』	共著	2007.07.09	中央職業能力開発協会				
4 『ビジネス・キャリア検定試験標準テキスト マーケティング2級』	共著	2007.07.09	中央職業能力開発協会				
論文							

1	「わが国の現代小売商業集積の戦略的展開に関する基礎的研究－板橋区の事例を中心に－」	単	2004.10.00	大東文化大学経営学会編『経営論集』第8号	バブル崩壊後、低迷にあえぐ小売業者および小売商業集積は、大きな過渡期に差しかかっているとされるが、その小売商業集積に、一体何が起きているのか、あるいは、今後わが国商業集積はどのように環境の変化に対応すべきなのかといったことについて、「板橋地域で材フォーラム」の共同研究で行なった板橋区の主要な商店街へのヒアリングを基に、小売環境の変化や、小売マーケティング・ミックス、戦略計画モデルなどを検討することを通じて考察した。(31～52頁)
2	「e-ビジネスとIT社会における現代アウトソーシング戦略に関する基礎的研究」	単	2005.03.31	日本消費経済学会『日本消費経済学会年報』第26集(2004年度)	e-ビジネスおよびIT社会の発展によって、現代企業戦略がアウトソーシングという概念もしくは手段を通じてどのように変化しているのかということを選択と集中はどこまで有効か” “コア・コンピタンスをどのように捉えるべきか” “現代企業は差別的優位性を獲得するための戦略ツールとしてアウトソーシングをどのように活用しているのか” “これからのアウトソーシングに必要な要素は何か”といった明らかにしつつ考察した。B5版、総頁数347ページ中10頁。(21～30頁)
3	「マーケティング研究と事業活動における“市場志向”に関する若干の問題点の検討と示唆」	単	2009.03.00	大東文化大学経営学会編『経営論集』第17号	現代、マーケティング研究やビジネス界で用いられている“市場志向”という言葉およびその概念は、必ずしも明確な捉えられ方をされているとは思われず、ときとして顧客志向＝市場志向と考えられていることも少なくない。そのような問題を明らかにするために、“市場志向”という言葉、もしくはそれが意味する概念について、研究者や実務家が、「どのように理解し、そしてどのように企業活動において位置づけるべきなのか」といったことを中心に“市場志向”に関する代表的な研究を検討することを通じて、その意味を再確認し、概念整理を行った。そしてまた、その“市場志向”が「どのように企業社会で機能しているか」、ないしは「どのように企業・ビジネス戦略において扱われるべきか、あるいは管理されるべきか」といったことに関する諸研究を検討することによって、現実社会および事業活動における“市場志向”の考え方、ないしは市場志向型ビジネス戦略のあり方についてのいくつかの示唆を提示した。(13～34頁)
その他					
1	「e-ビジネスIT社会における現代アウトソーシング戦略の基礎的研究」	単	2004.06.12	日本消費経済学会、第29回全国大会	先の『経営論集』第1巻、第1号で議論した「現代アウトソーシング戦略」について、e-ビジネスおよびIT社会の発展という観点から、“選択と集中はどこまで有効か” “コア・コンピタンスをどのように捉えるべきか” “これからのアウトソーシングに必要な要素は何か”といったことを鍵概念として研究・発表した。
2	『新しい市民大学をめざして』第2章「板橋コミュニティ・カレッジのフレームワーク構築に向けて」、第1節「コミュニティ・カレッジ先進国の現状と教育システム」	共	2005.03.00	大東文化大学国際比較政治研究所編、大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、地域で財フォーラム・ブックレット No.12	板橋区との共同研究において、18歳人口の減少に伴う大学全入問題やわが国における大学教育システムの問題と同時に、区民または市民に対する行政としての教育サービスに関係する問題などの解決のために、アメリカ合衆国やカナダにおけるコミュニティ・カレッジにそのヒントあるいは解決の糸口を求め、比較・検討した。終章(むすび)「板橋コミュニティ・カレッジ構想のフレームワーク」板橋コミュニティ・カレッジ構想のフレームワークとして板橋コミュニティ・カレッジの基本コンセプトと事業の意味と実行可能性、大学・行政・区民および参加者・地域産業にとってのメリットを検討・提示した。A5版、99頁中20頁担当。
3	『板橋コミュニティ・カレッジ構想』「コミュニティ・カレッジの組織構築に関する若干の示唆」	共	2006.03.31	大東文化大学国際比較政治研究所編、大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、地域デザインフォーラム・ブックレット No.16	板橋コミュニティ・カレッジを創生・実現することに向けて、組織構築のために必要な基本的な要件を明らかにし、他の大学の事例との比較検討および非営利組織の戦略的マーケティングの展開の方向性を検討することを通じて、とかく変化への対応に疎い官僚的な組織体系を採る非営利組織として、どのような戦略枠組みの下に、これまででない新しい形式の大学組織をいかに構築すべきかということについて考察した。A5版、第2章、第2節(総頁数159頁中19頁)担当。

4 「“市場志向” 概念と事業活動に関する若干の問題点の検討と新視点の示唆」		2009.01.31	第 194 回日本経営診断学会 関東部会	“市場志向” が「どのように企業社会で機能しているか」、 ないしは「どのように企業・ビジネス戦略において扱われるべきか、あるいは管理されるべきか」といったことに関する諸研究を検討することを通じて、現実社会および事業活動における“市場志向”の考え方、ないしは市場志向型のビジネス戦略のあり方について企業経営診断の視点から考察し、発表した。
--	--	------------	-------------------------	---

III 学会等および社会における主な活動

1	1991.00.00	～	現在	日本経営診断学会会員（平成 17 年度～学会誌論文審査委員）
2	1991.00.00	～	現在	日本商業学会会員
3	1992.00.00	～	現在	組織学会会員
4	1999.00.00	～	現在	日本消費経済学会会員
5	1999.04.00	～	現在	板橋区・大東文化大学板橋区地域デザインフォーラム研究委員
6	2003.04.00			中央職業能力開発協会ビジネス・キャリア制度試験委員
7	2004.11.00	～	2004.11.00	中小企業庁中小企業診断士第 2 次試験口頭質問委員
8	2005.11.00	～	2005.11.00	中小企業庁中小企業診断士第 2 次試験口頭質問委員
9	2006.12.00	～	2006.12.00	中小企業庁中小企業診断士第 2 次試験口頭質問委員
10	2007.00.00	～	現在	The Academy of Management 会員
11	2008.01.00	～	2008.03.00	The Academy of Management 年次大会発表論文査読委員
12	2008.12.00	～	2008.12.00	中小企業庁中小企業診断士第 2 次試験口頭質問委員
13	2009.02.00	～	2009.03.00	The Academy of Management 年次大会論文査読委員

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	教授	氏名	鈴木 一道	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 大東文化大学大学院経営学研究科編『経営学研究の 基本技法に関するガイドライン』			2008.03.31	大学院生に資料の集め方、論文の書き方、プレゼンテーションのやり方などを指導するための教材。第8章の「論文の書き方」(99-105頁)を担当。総頁105頁中7頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「Balanced Scorecard with Fuzzy Interence Mechanism as A Strategic Management System」	共著	2007.03.00	“Research Papers” No.E-41 大東文化大学経営研究所	Fuzzyを導入したBSCによる業績評価方法を開発し提案した。共著者：◎松尾敏充、天笠美知夫、鈴木一道。B5版、総頁36頁。			
2 「A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard」	共著	2008.01.00	“Research Papers” No.E-43 大東文化大学経営研究所	BSCに基づく多面的評価システムの提案であって、Fuzzy理論を導入しているが、前年のフレームワークに具体的数値をあてはめて、システムの実用化を図った。共著者：◎鈴木一道、天笠美知夫、松尾敏充。B5版、総頁23頁。			
3 「イギリス管理会計の特質—Armstrongの所説をめぐって—」	単著	2009.02.22	『明大商学論叢』第91巻第1号 明治大学商学研究所	アメリカ管理会計に対するイギリス管理会計の特質を明らかにするべく、Armstrong, P.の所説によって、イギリス資本市場の性格、会計的統制の重視、合併運動の中で会計職業が果たした役割などを指摘した。B5版、総頁410頁中15頁。			
その他							
1 『基本原価計算用語辞典』	共著	2004.08.06	白桃書房	最近の研究動向と実務の発展動向に対応した最新の基本用語を収録した辞典。利益計画、利益図表などを担当した。編者：山田庫平。			
2 「中国自動車産業と日本的経営」	単著	2005.10.16	「中日民間交流と東アジア地域協力」国際シンポジウム(遼寧大学日本研究所)	中国における自動車産業の発展と現在の課題、日本的経営からの貢献について、報告した。			

3	「高栢真一著『アメリカ管理会計生成史－投資利益率に基づく経営管理の展開－』	単著	2006.03.31	『会計史学会年報』第24号 日本会計史学会	本学会の学会賞を授与された本書について、編集委員会の求めによって評論した。はじめに、本書の概要、本書の特徴に分けて論述した。B5版、総頁130頁中5頁。
4	「日本企業の光と陰」		2006.10.05	興国管理学院特別講演会	第2次世界大戦以後、バブル崩壊を経て、今日までの日本企業の対応を整理し、明かるい部分と、その背後の陰の部分を指摘した。
5	“Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Performance Measurement”	共同	2006.12.19	7th-Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference	業績評価について Fuzzy を導入したBSCの方法を紹介した。共同報告者：◎松尾敏充、天笠美知夫、鈴木一道。
6	「バブル崩壊と日本企業」	単著	2007.06.22	「大東文化大学・北京外国語大学共同シンポジウム」(北京外国語大学)	バブル崩壊後のトヨタと京セラの経営が依然として、日本的経営の特質を保持していることを指摘するとともに、日本的経営の中にある「情」の部分を薄めつつも残しながら、「理」を貫徹してゆくと述べた。
7	“A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard”	共著	2007.11.18	38th Decision Sciences Institute	評価と統合のためのBSCを用いた多元的測定システムを提案した。共同報告者：◎崔冬梅、鈴木一道、天笠美知夫、松尾敏充。
8	「高沢修一著『事業承継の会計と税務』書評」	単著	2008.04.01	『會計』第173巻第4号 森山書店	上記著書について、構成、概要、特徴の視点から評論した。A5版、総頁165頁中4頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1970.10.00	～	現在	日本経営学会会員
2	1970.11.00	～	現在	日本会計研究学会会員(1988年9月～1990年9月 評議員)
3	1976.05.00	～	現在	日本原価計算研究学会会員
4	1980.11.00	～	現在	日本経営診断学会会員
5	1990.08.00	～	現在	日本パチョーリ協会会員(1990.08～9999.99 監事、世話人)
6	1991.06.00	～	現在	日本会計史学会会員(2001年度～02年度『会計史学会年報』編集委員、03年度～04年度編集委員長)
7	2005.00.00	～	現在	日本管理会計学会会員
8	2006.00.00	～	2007.03.31	(財)大学基準協会相互評価委員会経営学系第1専門評価分科会委員
9	2007.00.00	～	2008.03.31	(財)大学基準協会相互評価委員会経営学系第5専門評価分科会委員

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	教授	氏名	谷郷 一夫	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 関係性マーケティングと顧客関係管理	単	2008.12.16	大東文化大学経営論集第16号	本論文は、関係性マーケティング、そのなかでも特に、顧客関係管理を取り上げ、まず関係性とは何かを明確にするためにその形成要因や重要性を検討した。また、顧客関係管理については、一連のプロセスを考察することにより、競争優位を構築しうる重点顧客の選定の必要性を指摘するとともに、戦略的顧客関係管理については、価値創造のための戦略計画の立案や実行、評価という手順について検討した。			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1980.05.00	～	現在	日本商業学会会員			
2	1980.05.00	～	現在	日本商品学会会員			
3	1983.10.00	～	現在	日本経営診断学会会員			

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	前川 邦生	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 例解演習 基本簿記 4訂版	編著	2005.04.15	創成社	編集 前川邦生 山本孝夫 複式簿記の基本原理について、詳解するとともに簿記原理の基本問題を例解演習問題で習得させる用に構成されている。会計諸規則改正に伴い、内容および会計処理方法の変更に伴い、4訂正版とした。		
2 全経 3級簿記問題集	編著	2006.04.17	創成社	編集 前川邦生 山本孝夫 全国経理学校協会簿記検定3級問題集の解答解説		
3 演習 工業簿記	編著	2006.05.15	創成社	編集 前川邦生 工業簿記システムを例解演習方式により解説をし、基本問題等について、例解演習を試みた書籍である。		
4 例解演習 基本簿記 5訂版	編著	2008.04.15	創成社	編集 前川邦生 山本孝夫 複式簿記の基本原理について、新会社法等の改正により、詳解するとともに十分な理解を得られるように構成に工夫した。新しい規則に基づき、5訂版とした。		
5 財務会計学通論	共著	2009.04.20	税務経理協会	第6章5 税効果会計 企業に課税される「法人税等」は、基本的には企業会計が算出した利益に対して、一定の税率を剰じて算出される。企業会計と税務会計の適切な差異に係る法人税等支払額を期間配分することにより、合理的な対応させる会計処理を「税効果会計」という。		
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

1	1968.06.00	～	現在	日本会計研究学会会員
2	1991.06.10	～	現在	国際会計学会会員
3	1991.06.10	～	現在	税務会計

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	松尾 敏充	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 『経営学研究の基本技法に関するガイドライン』		2008.03.31		大東文化大学大学院経営学研究科編 経営学研究科の博士課程前期課程の「経営学研究の基本技法」の教材 第1章 本書の目的と「経営学研究の基本技法」の概要 (1-10 頁)、および第3章文献研究にもとづく論文の作成技法 (19-30 頁) を担当。A 4 版、総頁 105 頁。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 『管理会計研究の新たな分析視角—管理会計技法を基軸として—』	単著	2006.03.31	大東文化大学経営研究所 (242 頁)	80 年代以降、管理会計は新たな時代を迎え、ABC や BSC などの適格的な新たな管理会計技法を追求するとともに、新たな研究アプローチ (統合的な研究アプローチやアクション・リサーチなど) を模索しつつある。その中で、管理会計の基本的な枠組みを確認するために歴史的なアプローチは以前にも増して、その必要性が求められている。そこで、本書では、管理会計技法を基軸として、上記の3つ観点を本書の3部に収め、管理会計研究の新たな研究の方向性を探ったものである。本書は、この数年の研究論文を纏めたものであり、本書に含まれている各章は、これまでの研究論文に加筆修正を加えたものである。A 5 版 総頁 242 頁。		
論文 1 「管理会計技法としてのバランスト・スコアカードの意義」	単著	2005.03.31	『Research Papers』 (大東文化大学経営研究所) No.J-46、1-21 頁。	本研究では、最近、営利企業を含む多くの組織形態で適用され、注目されているバランスト・スコアカード (BSC) を研究対象に、マネジメント・コントロールとしての BSC の本質的特徴を析出し、既存の戦略論のフレームワークの中で BSC の新たな方向性を提示するとともに、BSC には既存の会計手法の限界を克服する優れた特徴のあること提示した。		
2 「BSC の地方公共団体への適用とその課題 (第4章)」	共著	2005.03.31	『地域デザインフォーラム・ブックレット No. 9 「政策評価制度」』大東文化大学国際比較政治研究所。	本研究では、地域デザインフォーラム (板橋区との共同研究) の第1分科会での研究テーマ「政策評価制度」 (中間報告) を、会計の立場からアプローチしたものである。自治体では、今後税収の伸びを期待できないことから、制約された財政資源を有効に活用することが求められている。そこで、本研究では、管理会計の評価指標であるバランスト・スコアカード (BSC) を各地の自治体に適用している事例に関して研究することで、今後の各地での自治体への適用可能性を探ったものである。		

3	「千代田区のBSCの意義と他の地方公共団体への適用可能性(第5章)」	共著	2006.03.31	『地域デザインフォーラム・ブックレット No.13「政策評価制度(総集編)」』大東文化大学国際比較政治研究所。	本研究では、地域デザインフォーラム(板橋区との共同研究)の第1分科会での研究テーマ「政策評価制度」(最終報告)を、会計の立場からアプローチしたものである。バランスト・スコアカード(BSC)は企業だけではなく、米国での成功例(シャーロット市)に見られるように自治体にもその有効性が実証されている。そこで、都内でBSCを導入している千代田区の視察結果を踏まえ、適用可能なくつかの条件を析出し、板橋区での適用可能性を検討した。
4	「企業評価の現状と動向」(会計的側面からの企業評価指標)	共著	2006.03.31	『Research Papers』(大東文化大学経営研究所) No.J-48、25-47頁。	「多面的企業評価指標の研究・開発」(2004年11月2日)というテーマで経営研究所主催のシンポジウムを行ったが、それを加筆修正し、会計研究班を代表し掲載したものである。本研究では、多面的な指標を含むトータルなフレームワークを会計側から提示するという視点から、各管理階層別に、管理会計の課題を提示するとともに、戦略の支援のツールとしてのバランスト・スコアカード(BSC)に注目し、企業への成功事例を示した。また、研究者サイドからの研究アプローチの必要性を説き、新たな方向性(ファジィ推論機構の導入)を提示した。
5	Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Performance Measurement	共著	2006.12.00	Toshimitsu Matsuo, Michio Amagasa † and Kazumichi Suzuki Proceedings of Papers (on CD-ROM) of The 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems, Bangkok, Thailand, 2006, pp.364-375. (レフェリー有)	In recent years, the balanced score card (BSC) has been the focus of considerable methodology for strategic cost management in management accounting area since it was originally proposed by Kaplan, R.S. and Norton, D.P. in 1992. BSC is an approach to performance measurement based on both financial and non-financial information from four perspectives which are called financial, customer, internal business process, and learning and growth, in order to balance the traditional financial performance system by several grouping of performance measures: short-term and long-term, internal and external, and current and future. Over time, it has been developed to a strategic management system from a comprehensive performance measure, and used in many organizations such as business, hospital, and autonomy in many countries. In this paper, we propose a general model based on BSC by introducing fuzzy inference mechanism. From this, specialists' knowledge and experience can be effectively reflected during the construction of the practical model. Then we illustrate a practical example for comparing the difference between the models of Japan and US, and verifying the validity of the model.
6	Balanced Scorecard with Fuzzy Inference Mechanism as A Strategic Management System	共著	2007.03.31	Toshimitsu Matsuo, Michio Amagasa, Kazumichi Suzuki. Research Papers (Institute of Business Research, Daito Bunka University), No. E-41, pp. 1-36, March 2007. (『英文リサーチペーパー』(大東文化大学経営研究所) No. E-41、1-36頁。)	本稿では、業績評価システムとしてのBSCに着目し、従来のBSCの研究を踏まえ、ファジィ推論機構を適用することによって新たな研究アプローチを提唱した。特に、本研究では、日米の企業を類型化し、それらの対比を通じて両者の企業の業績比較を行った。その際、従来の研究アプローチには欠けていたファジィ推論機構を導入することによって、企業の業績評価に関する新たなフレームワークを提示した。
7	A MULTIDIMENSIONAL MEASUREMENT SYSTEM WITH BALANCED SCORECARD	共著	2007.11.00	Dongmei Cui, Kazumichi Suzuki, Michio Amagasa, Toshimitsu Matsuo. Proceedings of the 38th Annual Meeting of the Decision Sciences Institute, Phoenix, Arizona, 2007, pp. 5061-5083. (レフェリー有)	In this paper, we aim to propose a multidimensional measurement system with BSC for solving the evaluation and integration subject. The proposed system does not care about whether the evaluator is an expert of the area or not, provides evaluators with a mechanism to incorporate subjective understanding or insight to evaluation process, and also offers a flexible support such changes from social and business environment or team-based organizational structure.

8	A Multidimensional Measurement System With Balanced Scorecard	共著	2008.01.31	Kazumichi Suzuki, Michio Amagasa, Toshimitsu Matsuo Research Papers (Institute of Business Research, Daito Bunka University), No.E-43, pp.1-23, January 2008. (『英文リサーチペーパー』(大東文化大学経営研究所)No.E-43、1-23頁。)	This paper aims at proposing a multidimensional measurement system with BSC, in which Fuzzy Structural Modeling is applied to build up structural models of perspectives by multi-evaluators, and a multiattribute decision making based on Choquet integral for weighting and integrating the evaluation values of perspectives. Furthermore, we introduce fuzzy inference mechanism to obtain the integrated value through inferring individual linkages among the outcome measures and drivers. From doing this, the system provides evaluators with a mechanism to incorporate subjective understanding or insight to evaluation process, and the evaluation can be conducted under consideration of decision-makers' differences on values, beliefs, attitudes, and understandings for the given problem set logically and analytically. In order to show how the system works and inspect its effectiveness, an example is illustrated.
その他					
1	「多面的企業評価指標の研究・開発」		2004.11.02	(シンポジウム報告) 大東文化大学経営研究所主催	「会計的側面からの企業評価指標」をいうテーマで、会計研究班を代表して報告を行った。本報告の全体の概要は、1はじめに、2戦略計画からの会計領域の拡大、3統合的フレームワークとしてのバランスト・スコアカード、4今後の研究課題であった。
2	Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Performance Measurement		2006.12.17	Toshimitsu Matsuo, Michio Amagasa and Kazumichi Suzuki The 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2006, 17 December, Bangkok, Thailand.	第7回 APIEMS (The 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2006)にて、「Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Performance Measurement」というテーマで研究班を代表して報告を行った。そこでは、業績評価のツールとしてのBSCに着目し、従来のBSCにファジィ推論機構を導入することで、BSC研究に新たな研究方法を提唱した。本報告では、特に日米企業比較を通じて、BSCの業績評価へファジィ推論機構の導入可能性を探るとともに、具体的な適用モデルを提示した。
3	A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard		2007.11.18	Dongmei Cui, Kazumichi Suzuki, Michio Amagasa, Toshimitsu Matsuo. The 38th Annual Meeting of the Decision Sciences Institute, Phoenix, Arizona, 2007.	第38回 DSI(Decision Sciences Institute, Phoenix, Arizona, 2007.)にて、「A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard」というテーマで、共同研究の報告を行った(代表: Dongmei Cui)。業績評価システムとしてのBSCに多面的な評価システムを導入し、評価プロセスに主観的な知見を組み込むような構造モデルを提示した。そのようなモデルにより、企業内外の環境の変化に即応した弾力的な支援システムが可能となることを提唱した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1981.06.00	～	現在	日本会計研究学会	
2	1992.05.00	～	現在	日本原価計算研究学会	
3	1993.06.00	～	現在	日本管理会計学会	
4	2001.04.01	～	現在	板橋区・大東文化大学板橋区地域デザインフォーラム研究委員	
5	2003.10.00	～	現在	日本会計史学会	

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	教授	氏名	水谷 正大	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 講義「情報科学 (インターネットの仕組み)」Web コンテンツ			2005.04.04	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/internet/index.html			
2) 講義「情報科学 (インターネットガバナンス)」Web コンテンツ			2005.09.25	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/governance/index.html			
3) 講義「情報科学 (インターネットの仕組みと応用)」Web コンテンツ			2006.04.04	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/internet/index.html			
4) 講義「情報科学 (インターネット社会科学)」Web コンテンツ			2006.09.25	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/complex_networks/index.html			
5) 講義「情報科学 (インターネットの仕組みと応用)」Web コンテンツ (内容更新)			2007.04.04	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/internet/index.html			
6) 演習「情報処理の基礎 A/B」周辺の Web コンテンツ (追加と内容更新)			2007.04.04	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture.html			
7) 講義「情報科学 (ネットワーク社会科学)」Web コンテンツ (内容更新)			2007.09.25	http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/complex_networks/index.html			
8) 講義「情報科学 (インターネットの仕組みと応用)」Web コンテンツ			2008.04.04	内容更新 http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/internet/index.html			
9) 演習「情報処理の基礎 A/B」周辺の Web コンテンツ			2008.04.04	追加と内容更新 http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture.html			
10) 講義「情報科学 (ネットワーク社会科学)」Web コンテンツ			2008.09.25	内容更新 http://www.daito.ac.jp/~mizutani/lecture/complex_networks/index.html			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							

1	オープンソースソフトウェアと企業経営における新たな課題	単著	2005.02.00	大東文化大学経営論集 Vol.9, pp.65～98.	オープンソースソフトウェアの今日の活況とその意義及びオープンソースビジネスの現在を紹介した上で、多くの企業がオープンソースビジネスにコミットし始めてきた背景を考察した。さらに、オープンソースの核心はその組織形態と運営法にあるとする立場から、成功したオープンソフトウェアの開発方法を紹介した後に、オープンソースの問題を経営組織の問題としてとらえ、企業経営それ自身の課題であることを論じた。
2	新たなガバナンス像をめぐって～インターネットガバナンスの波紋	単著	2006.02.00	大東文化大学経営論集 Vol.11, pp.71～82.	インターネットガバナンスの問題を包括的に紹介し、これが情報社会に固有の課題に留まるのではなく、企業を含む社会組織におけるガバナンスの問題に連なる課題となり得ることを論じた。
3	Numerical Experiments on Algebraic Properties of Scale-Free and Small-World Networks	単著	2006.03.00	Institute of Business Research Daito Bunka Univ. No.E-39(pp.1-33).	比較的小さなサイズの small-world および scale-free ネットワークグラフの数値計算を行い、代数的グラフ理論の諸結果を参照しながら、複雑度の振る舞いなど新たな現象を見出した。
4	組織の科学にむけて	単著	2007.02.00	大東文化大学経営論集 vol.13,pp55～63.	組織体を分析評価するための数理的方法を探るための準備的論考を行った。組織の指示・報告プロセスにおけるコストに着目し、組織構造を最適問題として捉えることを提案した。
5	経営組織の熱力学的定式化とエンパワーメント問題	単著	2008.02.00	大東文化大学経営論集 vol.15, pp.75～92.	経営組織をサービスを生み出す機関として見なし、その様子を記述するを熱力学的アプローチを提案し、その立場からエンパワーメント問題を位置づけることを試みた。
6	オープン性がもたらすイノベーションと従来知の解体	単著	2008.10.00	大東文化大学経営論集 Vol.16, P103	オープンソースソフトウェアが活発に開発され、情報社会において広く活用される状況をふまえた論考。ソフトウェアだけでなく「オープン性」と呼ばれるあり方が、技術の枠内にとどまらずに、新たなビジネスチャンスを提供したばかりでなく、情報インフラストラクチャの整備に伴って企業活動における長期戦略のあり方や企業イノベーション、さらには人材育成などに係わる従来知に対する破壊的な影響を持たざるを得ない状況を論じた。
7	経営を支援するクラウド駆動情報システム	単著	2009.02.00	大東文化大学経営論集 Vol.17, P59	企業活動の効率化や人間知の代替をめざすことを止め、情報爆発に対応するための新しい経営情報システムとして、企業体のクラウドコンピューティング環境が有する膨大なデータを抽出・フィルタリング・クラスタリングし、それらに関連づけられたセマンチック処理によって経営概況を俯瞰できるコンピューティングシステムを提案した。
その他					
1	Toward Spectrum of Harmonic Aperiodic Lattice	単著	2007.11.03	口頭発表：Workshop on Fractal Geometry and Ergodic Theory(Morning Center, Academy of Science, Beijing)	1次元非周期格子系のスペクトル解析の取り扱いを紹介し、2種類のバネが準周期的に配置されている場合の問題を検討した。
2	細分された Sturm 列について	単著	2008.02.10	口頭発表：Workshop 数論とエルゴード理論(平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「準周期タイリングの数理とその応用」研究会、金沢大学)	2次元整数格子を拡張し、直線がこの拡張格子と交差して得られる点列から定義される近接格子点の振る舞いとその性質について報告した。
3	Cutting Sequences Generated from a Simply Extended Lattices	単著	2008.04.28	科研費基盤 B「準周期タイリングの数理とその応用」Workshop(金沢大学)	正方格子をずらせて2重格子としたときにこれを横切る直線から得られる Cutting 列の取り扱いを Sturm 列との対比において考察し、その複雑度の数値計算結果を紹介した。
4	Cutting sequences on Extended Lattices	単著	2008.06.24	Porqueroll 08, Porquerolle, France (Institute of Mathematics of Luminy)	拡張された格子を横切る直線から定義される Cutting 列において、各記号をベクトル線分に対応させ、Cutting 列から近接格子点を結ぶジグザグ直線を定義して直線を近似することによって、Sturm 列の埋め込みとの関係を論じた。

5	Cutting Sequences Generated by Extended Lattices	単著	2008.11.03	International Workshop on Fractal Geometry and Ergodic Theory, Beijing (Beijin Institute of Technology)	多数の正方格子をずらせて得られる拡張された格子に対する Cutting 列の取り扱いを紹介し、自然数の分割、埋め込まれている Sturm 列との関係などを論じた。
6	On Cutting Sequences for Several Lattices	単著	2008.12.17	School on Information and Randomness 2008,Santiago, Chile(Center for Mathematical Modeling UMI 2807 UCHILE-CNRS And Universidad de Chile)	拡張された格子から生成される Cutting 列に対して、これを生成する力学系、とくに 1 次元区間交換写像との関係を論じた。また、この問題が本質的に n 次元超立方体内のビリヤード問題として取り扱うことができことを指摘した上で、簡単な拡張格子の場合について Cutting 列の複雑度が $p(n)=k(n+1)$ であることを紹介した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1980.00.00	～	現在	日本物理学会会員
2	1991.00.00	～	現在	日本応用数理学会会員
3	1995.00.00	～	現在	日本情報処理学会会員
4	1998.00.00	～	現在	日本芸術工学学会会員
5	2000.05.15	～	2005.10.30	笹川日仏財団理事
6	2004.04.01	～	2006.03.31	大学入試センター教科科目第一委員会委員

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	教授	氏名	山崎 雅教	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『英国におけるコーポレート・ガバナンスと取締役報酬開示規制についてーコーポレート・ガバナンス改革のための各報告書を中心としてー』	単著	2006.02.25	『経営論集』第 11 号 (大東文化大学経営学会)	本稿では、1990 年代に英国で生じた企業不祥事との関連で、その後に公表されたコーポレート・ガバナンスに関する一連の報告書をレビューしている。特に、取締役報酬に関する情報開示の問題が各報告書でどのように取り上げられているかの変遷をみることにより、その問題の重要性、さらには、英国での当該問題への取り組む姿勢を明らかにしている。具体的には、取締役報酬開示の重要性、取締役の経営機構における位置づけを明らかにした上で、キャドベリー報告書、グリーンバリー報告書、ハンベル報告書、総合規範、さらには取締役報酬報告規則 2002 を取り上げることにより、取締役報酬開示とコーポレート・ガバナンスの関連を検討している。(83-98 頁)			
その他							
1 『取締役報酬をめぐる開示規制の動向とその意義』	単著	2006.09.08	日本会計研究学会第 65 回全国大会	本報告では、投資家にとって非常に関心の高い経営者報酬及び取締役報酬に関し、その不透明性を改善するための手段として、アメリカ証券取引委員会 (SEC) が 2006 年 1 月に公開事業を公表し、同年 8 月に最終規制として発表された、「経営者報酬の開示規制に関する規則」における内容及びその背景について検討を加えている。特に、今日の規則の特徴の 1 つといえる報酬の討議と分析 (CD&A) について詳細にみることにより、財務報告における記述的情報の意味を考察している。			
III 学会等および社会における主な活動							

1	1987.05.00	～	現在	日本会計研究学会会員
2	1988.10.00	～	現在	日本簿記学会会員
3	1994.10.00	～	現在	証券経済学会会員
4	1996.10.00	～	現在	国際会計研究学会会員
5	2000.10.00	～	現在	ディスクロージャー研究学会会員

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	准教授	氏名	石井 昌宏	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 人と組織を活かす経営管理論		2009.04.25	本書は経緯管理論の入門テキストブック。第9章担当。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 『高校生のための大学の授業』	共著	2008.00.00	弘文堂	水島治, 安田行宏, 柳田卓爾, 丸山正博, 手塚広一郎, 石井昌宏, 奥田真也 ※石井は第6章を担当しました。		
論文 1 「電力取引市場におけるスポット・フォワード価格の形成」	共著	2004.12.00	公益事業研究 Vol.56、No.3 pp.61-70	石井昌宏、手塚広一郎		
2 “Equilibrium Spot and Forward Prices in Wholesale Electricity Markets: A generalized Bessembinder and Lemmon Model and its Application”	共著	2005.06.04	Proceedings of 28th Annual IAEE International Conference	Ishii, M. and Tezuka, K.		
3 「電力取引市場におけるマイクロストラクチャー」	共著	2006.00.00	公益事業研究 Vol.58No.2pp.83-89	手塚広一郎・石井昌宏		
4 「Rabinovitch (1985) の枠組みによる値洗いが離散時間で行われる場合の株式先物価格式」	単著	2006.00.00	経営論集 Vol.13pp.1-11	石井昌宏		
5 “Equilibrium Spot and Futures Prices in Shipping Freight Markets.”	共著	2006.00.00	Proceedings of IAME2006 Conference	Tezuka,K.,Ishizaka,M.,and Ishii,M.		

6	“A Game Theoretical Analysis of the Spot Prices in Wholesale Electricity Markets”	共著	2006.00.00	Proceedings of 30th Annual IAEE International Conference	Tezuka,K.and Ishii,M.
7	「日本と韓国のソプリング格付けに関する検証」	共著	2007.00.00	情報処理学会論文誌：数理モデル化と応用、 Vol.48 No.SIG15, pp.1-10.	宮崎浩一、ソヒジユク、伊藤隆康、石井昌宏
8	“The Basis for a Game-theoretic Analysis of Wholesale Electricity Markets”	単著	2007.00.00	経営論集、Vol.14, pp.31-42.	Ishii, M.
9	“An Analysis of the Sovereign Ratings of Asian Countries with a Focus on Japan and Republic of Korea”	共著	2007.00.00	Proceedings of Hawaii International Conference on Business 2007.	Miyazaki, K., Jihyeok, S., Ito, T., and Ishii, M.
10	“A Study on Shipping Freight Futures Curves in an Equilibrium Market Model”	共著	2007.00.00	Proceedings of IAME 2007 Conference	Ishizaka, M., Tezuka, K., and Ishii, M.
11	“A Study on Investment Decisions with Emissions Trading”	共著	2007.00.00	Proceedings of the 1st IAEE Asian Conference.	Ishii, M., Ishizaka, M., and Tezuka, K.
12	「非協力ゲームの枠組みを用いた電力取引市場における市場支配力の分析」	共著	2008.00.00	公益事業研究、Vol.59. No.3, pp.33-41.	石井昌宏、手塚広一郎
13	「アジア諸国のソプリング格付けの検証ー 回帰モデルからのアプローチー」	共著	2008.00.00	新潟大学経済論集, Vol.85,	宮崎浩一、中原智恵、伊藤隆康、石井昌宏 pp.133-148.
14	A Duopoly Model for Electricity Spot Prices	単著	2008.00.00	経営論集, Vol.16	Ishii, M. pp.113-124.
15	「電力スポット価格形成モデルを用いた PJM市場の分析」	共著	2008.00.00	社会経済研究、 No.56, pp.25-35.	手塚広一郎、石井昌宏
16	“Strategic Behavior and the Determination of Spot Prices in Shipping Freight Markets: A Game Theoretical Approach”	共著	2008.00.00	Proceedings of IAME 2008 Conference.	Tezuka, K. and Ishii, M.
17	“A Study on a Non-cooperative Game-theoretic Pricing Framework in a Oligopolistic Electricity Market”	共著	2008.00.00	Proceedings of 31th Annual IAEE International Conference.	Ishii, M. and Tezuka, K.
18	“A Study on an Asset Valuation Framework for Electricity Markets”	共著	2008.00.00	Proceedings of 2nd IAEE Asian Conference.	Ishii, M. and Tezuka, K.
19	“The Effects of the Regulatory Reform on Market Risk in the Japanese Electricity Industry”	共著	2008.00.00	Proceedings of 2nd IAEE Asian Conference.	Ishizaka, M., Tezuka, K., and Ishii, M.

その他					
1	「電力取引市場におけるスポット・フォワード価格の形成」	共著	2004.06.06	第54回 2004年度大会 公益事業学会	石井昌宏・手塚広一郎
2	Equilibrium Spot and Forward Prices in Wholesale Electricity Markets: A generalized Bessembinder and Lemmon Model and its Application	共著	2005.12.14	第14回公共政策研究会	手塚広一郎・石井昌宏
3	卸電力取引市場における均衡スポット・フォワード価格の形成	共著	2006.01.25	エネルギー経済ワークショップ	手塚広一郎・石井昌宏
4	「電力取引市場におけるマイクロストラクチャー」	共著	2006.06.00	公益事業学会第56回大会	手塚広一郎・石井昌宏
5	「電力取引市場におけるスポット価格形成モデル」	共著	2006.09.00	日本応用数学会 2006年度大会	石井昌宏・手塚広一郎
6	「非協力ゲームの枠組みによる電力スポット価格形成モデル」	共著	2007.01.00	日本金融・証券計量工学学会（JAFEE）2006冬季大会	石井昌宏・手塚広一郎
7	「非協力ゲームの枠組みを用いる電力取引市場における市場支配力の分析」	共著	2007.06.00	公益事業学会 第57回大会	石井昌宏、手塚広一郎
8	「不確実性下の卸電力取引所における価格形成」	共著	2007.09.00	電力経営問題研究会	手塚広一郎、石井昌宏
9	「非協力ゲームの枠組みを用いた電力取引市場における価格形成の分析」	共著	2008.02.00	富山大学 経済学セミナー	石井昌宏、手塚広一郎
10	「ゲーム理論の枠組みを用いた電力スポット価格変動のモデル化」	共著	2008.06.00	第57回理論応用力学講演会	石井昌宏・手塚広一郎
11	「原資産が貯蔵不可能な先渡に対する価格評価の枠組み」	単著	2008.12.00	電気通信大学 環境調和型ライフサイクル研究ステーション講演会	石井昌宏
12	「ゲーム理論を用いた電力先渡契約に対する価格評価の枠組み」	共著	2009.02.00	一橋大学 金融研究会	石井昌宏・手塚広一郎

III 学会等および社会における主な活動				
1	1995.00.00	～	現在	日本金融・証券計量・工学学会（JAFEE）会員（2003～2008 大会担当理事 2008～会計担当理事）
2	1999.00.00	～	現在	日本経営財務学会会員
3	2000.00.00	～	現在	日本経営工学学会会員
4	2003.00.00	～	現在	日本応用数学会会員
5	2004.00.00	～	現在	公益事業学会会員

(表 24)

所属	経営学部経営学科		職名	准教授	氏名	佐藤 史子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価			2007.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 19 年 12 月実施) において、「英語特別講座D」について 4.8 (5段階評価) を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 『Oscar Wilde's Japonisme』	単著	2005.02.00	大東文化大学経営学会「経営論集」第 9 号				
2 『Oscar Wilde and the Victorian Popular Image of Japan』	単著	2007.02.00	大東文化大学経営学会「経営論集」第 13 号				
3 『British Views of Japanese Social Changes in the Late Nineteenth Century』	単著	2008.12.00	大東文化大学経営学会「経営論集」第 16 号				
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1996.04.00	～	現在	日本英文学会会員			

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	准教授	氏名	中野 紀和	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価(平成20年12月実施)において、高い評価を得た。2段階評価の全項目で、1.9もしくは2.0であった。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 『経営学研究の基本技法に関するガイドライン』大東文化大学大学院経営学研究科編集・発行 A4版 総頁105頁 共著者：松尾敏光、山崎雅教、青木幹喜、永田清、水谷正大、鈴木一道 「第4章 フィールド・リサーチ」 pp.31-46		2008.03.31	本書は、博士課程前期の大学院生が、調査・分析・発表・論文作成をする上での基本的な技法を身につけることを目的として作成された体系的なテキストである。そのなかで、筆者の担当する「フィールド・リサーチ」は、現場での資料収集の仕方とその処理方法や留意点に重点を置いている。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) (調査実績) 福岡県北九州市小倉北区		1992.00.00	平成4年～継続中 小倉祇園太鼓を中心とした祭礼調査、住民のライフヒストリー調査、中心地域の町おこしに関連する調査を継続しておこなっている。			
2) (調査実績) 福岡県行橋市		2000.00.00	平成12年～平成17年 市史の編纂執筆委員として聞き取り調査を行っている。特に住民のライフヒストリーを軸にした聞き取りに重点をおき、従来の調査と記述のあり方を再考しながらフィールドワークを行なった。			
3) (調査実績) 山口県萩市大島		2000.00.00	平成12年～平成21年 山口県萩市沖の大島という島のフィールドワークを継続中である。都市部と島嶼部の関係に重点を置いている。平成16年からは、山口県史の執筆委員としても、同島を重点的に調査中である。			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
1 第2章 マチの社会と民俗	共	2006.03.00	『行橋市史 下巻』	福岡県行橋市の変遷を生活の側面から捉えたものである。マチ場の変遷、商業と諸職、年中行事、暮らしぶりをテーマに変遷と現状を示した。pp.715-731		
2 聞き書き マチ場の暮らし	共	2006.03.00	『行橋市史 下巻』	福岡県行橋市を構成するマチ場の変遷と暮らしぶりを住人のライフヒストリーから描いている。マチの中心地域で商業を営み、戦前戦後の動乱期を自らの知恵で生き抜いてきた女性の生活史であると同時に、一地域と社会全体との関連性を示している。pp.732-744		
3 聞き書き 農村の暮らし	共	2006.03.00	『行橋市史 下巻』	上記のマチ場の暮らしと同様に、マチ場近郊の農村部の暮らしの変遷を、ある夫婦のライフヒストリーから描いている。小規模の兼業農家を特徴とする行橋市の農村部の暮らしを、周辺の都市部との交流を交えて示している。pp.673-679		

4	聞き書き 漁村の暮らし	共	2006.03.00	『行橋市史 下巻』	上記のマチ場、農村部同様、漁村における男女の仕事の相違を、行商の女性と漁を営む男性のライフヒストリーから描いた。商品を通してマチ場とのつながりの欠かせない漁村の暮らしぶりとその変遷、農村とは異なる価値観のなかで生きる漁師の生活を示し、一つの市が抱える多様な暮らしぶりを描いている。 pp.704-714
5	『小倉祇園太鼓の都市人類学—記憶・場所・身体—』	単	2007.02.28	古今書院	本書は、都市祭礼（小倉祇園太鼓）という研究のパラダイムを入り口に、現代的な身体論や空間論、組織論と絡めながら、「都市的なるもの」を考察したものである。第Ⅰ部では、歴史的、社会的、宗教的、政治的、経済的側面を象徴する町内、有志、神社、保存振興会、企業を取り上げ、都市の重層性を描く。第Ⅱ部では、3人の人物のライフヒストリーを取り上げ、人びとが支配的な力や構造をいかに利用し主体性を獲得していくのか明らかにした。第Ⅲ部では、第Ⅰ部とⅡ部を受けて、主体と客体の相互再帰性、正当性と正統性をめぐる葛藤、ジェンダーをめぐる葛藤、記憶の生成、場所と没場所、移動する空間と意味の変化について分析した。全 357 頁
論文					
1	民俗調査の現場から—変貌する現代社会と民俗学—	単	2005.08.00	『日本民俗学』243号	第五十五回年会（平成十五年十月五日）では、「民俗調査の現場から—変貌する現代社会と民俗学—」と題したミニシンポジウムが開かれた。本稿は、議論の経過を含め、課題をまとめたものである。地域社会の変貌が指摘されて久しいが、民俗学はその変貌に対応しきれていない現状を再考した。民俗調査の現場で生起する具体的な問題を把握することに重点をおき、聞き取りの現場で起こっているさまざまな現象を把握したうえで、問題点の共有を目指した。
2	Conflits entre «cr é ation» et «tradition» dans une f ê te urbaine, l'exemple de la f ê te de Kokura des tambours de Gion (仏語訳 C é cil Didierjean)	単	2005.09.00	EBISU Etudes japonaises vol.34	日本における祭礼研究は、祭礼を通じて社会をみる多様な視点を提供してきた。祭礼を都市社会の異質性や多様性を乗り越える場として捉える一方で、差異を前提としてしまい、多様性や異質性が生まれるプロセスを具体的に解きほぐすという視点が希薄である。本論では、「小倉祇園太鼓」という祭礼の例をあげて、さまざまな力関係のかけひきのなかで、多様性や異質性が生まれるプロセスに注目した。相対的に生み出された差異が、境界線上に新たな意味や価値を付与し、さらなる次の動きを生み出していることを明らかにした。 pp.39-81
3	研究成果報告書：東洋と西洋が交錯する場としての磁器	共	2006.03.00	『江戸のモノづくり 個々の資料から見た江戸時代の職人の色彩、造形に関する研究』（文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究 A：我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究/A03/代表者・小林忠雄・北陸大学教授）	磁器に描かれた図案をとおして、日本とヨーロッパ諸国との交流の一端を示し、磁器の図柄が発するメッセージ性に注目した。製作された時代状況と照らし合わせ、社会の中での磁器の位置づけを考察した。磁器は単に美の対象としてではなく、技術の知識の象徴、国威の象徴、柔軟な情報伝達手段であったことを示した。 pp.7-22
4	「移動」から捉えたイベントと祭礼のイベント化	単	2006.08.00	『日本民俗学』247号	イベントを「宗教とのかかわり持たないマツリ」と広く捉え、従来の民俗学の対象とされてきた諸行事を逆照射した。年中行事のなかのイベントと国家的イベントの研究動向を概観し、イベントを捉える上での論点を以下の5点に整理して指摘した。①地域研究と比較研究の交差、②祝祭空間の移動（場と空間のかかわり）、③身体性と絆、④逸脱や暴力の統制と空間利用、⑤国家的イベントへの参加過程と日常実践への着目である。 pp.219-240 （学会依頼論文）
5	「ペット供養にみる現代社会の一局面」	単	2009.03.00	『大東文化大学紀要<人文科学>』第47号	現代におけるペット供養の現状を考察した。まず、ペット供養を支える背景を法律との関係から明らかにし、次に、動物霊園が増加する1960年代から70年代にかけての霊園に対する社会の視線を新聞記事から提示した。その上で事例をあげ、ペットと飼い主の関係を分析した。供養という過程は、希薄になる家族・人間関係を示すと同時に、それでも他者とのつながりを希求する現代社会を映し出すことを指摘した。 pp.131-147
その他					

1	地域表象としての太鼓		2004.06.06	日本文化人類学会第38回研究大会分科会「拡大する都市祭礼と地域への回帰：身体性と地域性の観点から」代表者：中野紀和	祭礼から都市を論じる視点として、身体性を切り口に論じたものである。まず、祭礼が戦後に構造変化を起こした要因として「企業・女性・現代風流」の3点を指摘した。社会変動と絡めながら、さらに、祭礼にみられる「開」「閉」の動きを、太鼓の「わざ」を介した身体性のあり方から論じた。地域の人々が、多様な所作に意味を見出しながら、他者との差異化あるいは同化を繰り返す、そのなかで地域性を再構築していく過程を明らかにした。
2	「わざ」とメディアからみた「民俗」の構築過程－小倉祇園太鼓と阿波踊りの事例を通して－		2005.10.09	日本民俗学会第57回年会	伝統行事における身体表現の変遷を明らかにし、民俗の意味や価値が社会的に構築される過程を明らかにする。背景の異なる行事ではあるが、比較を通して見えてきたものは、主要産業が衰退して以降、活動の場の拡大・メディアとの関わり・衣装といった3要素の繰り返し、という共通する動きであった。このことから、身体所作や表現は、これまで民俗学が個別に分析・報告してきた民俗行事をつなぎ、社会構造や生活の変遷を照射する視点になりうる可能性を提示した。
3	「はざまの民俗」	単	2008.05.17	現代民俗学会基調シンポジウム	民俗学が現代社会をどのように捉えることが可能なのか、ペット供養を事例に報告した。現代社会を象徴する現象としてペットと人との関係に注目し、ペットという存在が、モノと愛玩動物とのはざまにあることを法律的な観点から示した。事例を示しつつ、民俗学という観点から不可視のものを可視化することの意義を指摘した。
4	「ペット供養にみる新たな『家族』」	単	2008.09.17	2008年度東アジア三大学国際シンポジウム	現代における「家族」のありかたを、ペットと飼い主の関係から考察・報告した。ペットは初めから家族であるのではなく、遺体の処理から埋葬、供養までの一連の過程を経るなかで「家族にする」存在であることを示した。人間の家族は核家族化が進行する一方で、供養はペットをイエへと帰属させる装置として機能していることを指摘した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.05.00	～	現在	日本生活学会会員（平成18年度～現在幹事）
2	1995.06.00	～	現在	日本民俗学会会員
3	1995.06.00	～	現在	日本民族学会（平成16年より日本文化人類学会と改称）会員
4	1996.04.00	～	現在	日本社会学会会員
5	2000.04.00	～	2005.03.31	福岡県行橋市『行橋市史』編纂執筆委員
6	2000.06.00	～	現在	日本都市社会学会会員
7	2002.07.00	～	現在	日本宗教学会会員
8	2004.05.00	～	2010.03.31	山口県『山口県史』執筆委員
9	2004.07.00			北九州市自然史・歴史博物館北九州市自然史・歴史博物館主催「歴史友の会」平成16年度講演会講師
10	2004.11.00			萩市伝統芸能連絡協議会萩市伝統芸能連絡協議会主催「第2回萩市伝統芸能フェスティバルー地域をつなぐ伝統芸能ー」平成16年度講演会講師（基調講演）
11	2007.09.01	～	現在	北九州市自然史・歴史博物館北九州市自然史・歴史博物館協議会委員
12	2007.10.28			阿波踊りサミット実行委員会阿波踊りサミット実行委員会・文化庁・徳島県・徳島県教育委員会・第22回国民文化祭徳島県実行委員会主催「阿波踊りサミット2007」パネルディスカッションパネリスト
13	2009.04.01	～	現在	東京都小平市『小平市史』調査執筆委員

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	准教授	氏名	成岡 浩一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 科学研究費採択課題 資本市場におけるキャッシュフロー、発生項目および資産の増加額のプライシング			2004.04.00	研究種目の名称、課題番号 若手研究 (B)、課題番号: 16730242 研究期間 2004 年 4 月～2005 年 3 月。単独。			
2) 科学研究費採択課題 会計利益とその構成要素のプライシングに関する実証研究			2007.04.00	研究種目の名称、課題番号 若手研究 (B)、課題番号: 19730312 研究期間 2007 年 4 月～2008 年 3 月。単独			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 中小企業診断士試験 1 次試験過去問題集 [2006 年度版]	分担執筆	2006.02.00	同友館。	〔「財務・会計」分野の試験解説を担当〕共著者: 阿部圭司、成岡浩一。総頁数 661 頁中 48 頁。			
2 中小企業診断士試験 1 次試験過去問題集 [2007 年度版]	分担執筆	2006.12.00	同友館。	〔「財務・会計」分野の試験解説を担当〕共著者: 阿部圭司、成岡浩一。			
論文							
1 資本市場における利益と貸借対照表情報のプライシング	単著	2005.03.00	『金沢学院大学紀要』第 3 号 (経営・経済・社会学編)。	pp.21-31。A4 版、総頁数 189 頁中 12 頁。			
2 株式市場における貸借対照表情報のプライシング	単著	2005.07.00	『会計情報の現代的役割』所収、石塚博司編、白桃書房。	pp.220-232。A5 版、総頁数 257 頁中 13 頁。			
3 キャッシュフローの持続性とプライシング	単著	2006.03.00	『金沢学院大学紀要』第 4 号 (経営・経済・社会学編)。	pp.1-10。A4 版、総頁数 187 頁中 10 頁。			
4 投資家の洗練度と発生項目アノマリーの関係	単著	2007.03.00	『金沢学院大学紀要』第 5 号 (経営・経済・情報・自然科学編)	pp.1-10。A4 版、総頁数 306 頁中 10 頁。			

5	「発生項目アノマリーとバリュー/グラマー株効果」	単著	2008.03.01	『金沢学院大学紀要 経営・経済・情報・自然科学編』第6号(金沢学院大学)	発生項目アノマリー(および異常発生項目アノマリー)とバリュー/グラマー株効果の関係について分析した。先行研究と異なり、強い簿価時価比率アノマリーが観測され、その効果はキャッシュフロー対株価比率をコントロールした場合でも消失しなかった。それに対し、発生項目アノマリーの規模は相対的に小さく、簿価時価比率をコントロールすると消失することが判明した。A4版、総頁数235頁中16頁。
6	「カンパニー制組織採用後の業績改善効果に関する実証研究」	共著	2008.03.10	『流通経済大学論集』第42巻4号(流通経済大学)	カンパニー制組織を採用した44社をサンプルに、業績改善効果が生じたかどうかを検証した。サンプル企業全体としては、いずれの業績指標をとってもカンパニー制採用に業績改善効果があったことが判明した。このことはカンパニー制が有効な組織改革たりうることを示すものである。しかし、事前の予想に反して、関連多角化企業と非関連多角化企業での業績改善効果の差異は確認できなかった。共著者:中野貴文、成岡浩一、松本安司。B5版、総頁数128頁中22頁。
その他					
1	会計情報と市場の効率性	単著	2005.05.00	日本オペレーションズ・リサーチ学会「意思決定とOR研究部会」第11回研究集会。	(「会計」分野を担当)
2	発生項目の持続性と市場の合理性	単著	2005.09.00	日本会計研究学会(第64回全国大会)、関西大学。	
3	新・経営診断ポイント講座[財務・会計](第24回~連載中(月刊))	単著	2005.12.00	『企業診断』、同友館。	
4	「カンパニー制採用による業績改善効果」	共著	2007.09.08	日本管理会計学会2007年度全国大会	
III 学会等および社会における主な活動					
1	2002.00.00	~	2008.03.00	北國新聞文化センター簿記2級受験準備講座 講師	
2	2004.00.00	~	2008.03.00	金沢商工会議所日商簿記検定 採点委員	
3	早稲田大学産業経営研究所特別研究員				
4	日本会計研究学会会員				
5	日本管理会計学会会員				
6	日本経営財務研究学会会員				

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	准教授	氏名	山田 敏之	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2006.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 18 年 12 月実施) において、おおむね良好な評価を得た。科目名: 経営管理論 B 平均値 4.3 (5 段階評価)。			
2) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 19 年 12 月実施) において、おおむね良好な評価を得た。科目名: 経営学演習 平均値 4.2 (5 段階評価)。科目名: 経営戦略 B 平均値 4.5 (5 段階評価)。			
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、おおむね良好な評価を得た。科目名: 専門演習 I 平均値 4.8 (5 段階評価)。科目名: 経営戦略 B 平均値 4.4 (5 段階評価)。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 根本孝・茂垣広志監修・根本孝編著『マネジメント基本全集 1 経営入門』	共	2006.01.00	学文社	環境問題の質的な変化の中で、企業の果たすべき役割や責任の範囲も拡大しつつあり、従来とは異なった発想や戦略性が求められていること。多くの企業が ISO14001 を取得しているが、有効な成果を上げるには、個々の従業員が環境経営に関するアイデアや提案を絶えず行えるような組織的仕組みやマネジメントの工夫が必要になることを指摘した。共著者: ◎根本孝、茂垣広志監修、根本孝編著、吉村孝司、竹内慶司、山田敏之、松崎和久、鈴木研一、金雅美、歌代豊、松村洋平。筆者は「第 5 章 CSR と環境経営」(pp.67-82.) 担当。A 5 版、総頁 202 頁。		
2 『マネジメント基本全集 9 経営組織』	共	2006.02.00	学文社	組織デザインの基本要素として、①分業関係、②権限関係、③部門化、④コミュニケーションと協議の関係、⑤ルール化の 5 つを挙げ、組織を実際に設計する際に考慮すべき要因として①規模、②技術、③外部環境をとりあげた。さらに、組織デザインの実践形態として①ライン組織と②ライン・アンド・スタッフ組織の 2 つ基本形を示し、長所・短所を示した。共著者: ◎根本孝・茂垣広志監修・松崎和久編著、石坂庸祐、山田敏之。筆者は「第 6 章 組織デザイン」(pp.71-83.) 担当。A 5 版、総頁 198 頁。		

3	『マネジメント基本全集 9 経営組織』	共	2006.02.00	学文社	単純系の経営組織として、①機能別組織、②事業部制組織、③地域別組織という3形態の概要および長所・短所を示した。さらに、バーンズとストーカーによって提示された、機械的組織と有機的組織の概念について説明し、唯一絶対の組織形態はなく、環境が比較的安定している場合には前者が、環境変化が激しい場合には後者の形態が有効であることを示した。共著者：◎根本孝・茂垣広志監修・松崎和久編著、石坂庸祐、山田敏之。筆者は「第7章 単純系（一次元）の経営組織」(pp.85-96.) 担当。A5版、総頁198頁。
4	『マネジメント基本全集 9 経営組織』	共	2006.02.00	学文社	組織文化の基本的な概念、研究視点の移行を踏まえ、経営における機能(①判断基準の設定、②コミュニケーションの円滑化、③個人のやる気や挑戦意欲の向上)および逆機能(①価値観、思考様式の均一化、②自己保存、自社の組織文化への過度の固執)の問題を説明した。さらに、デニソンの統合モデルによって、組織文化と組織効率の関係をとりあげる視点を示した。最後に、組織文化の変革に必要な組織特性について言及した。共著者：◎根本孝・茂垣広志監修・松崎和久編著、石坂庸祐、山田敏之。筆者は「第11章 組織文化」(pp.143-160.) 担当。A5版、総頁198頁。
5	『経営学イノベーション2 経営戦略論』	共	2006.04.00	中央経済社	企業を取り巻く環境変化が不連続でかつ激しいときに必要な戦略の視点について明らかにしている。まずは、伝統的な経営戦略論の特徴および組織のとらえ方について概略し、その問題点を挙げるとともに、戦略形成という視点を導入し、戦略と組織との新たな位置づけについて議論している。さらに、戦略形成のプロセスにおける適合概念とその問題点を述べ、計画的プロセスと創発的プロセスの違い、および両者の相互作用の必要性を明らかにし、戦略経営論という考え方が必要であることを示している。共著者：◎十川廣國編著、坂本義和、清水馨、小沢一郎、横尾陽道、角田光弘、遠藤健哉、今野喜文、山田敏之、馬場杉夫、山崎秀雄、園田智昭、岡田拓己、榎本悟。筆者は第9章「経営戦略論から戦略経営論へ」(pp.109-119.) 担当。A5版、総頁218頁。
6	『経営学イノベーション3 経営組織論』	共	2006.04.00	中央経済社	組織が環境に主体的に適応していくための必要な要件について検討している。まずは、組織が環境を認識する際のフレームワークを示し、環境の不確実性のとらえ方を示している。次に、組織の環境適応という課題を扱ったコンティンジェンシー理論の概要に触れながら、その意義と問題点について述べている。最後に、90年代から盛んに言及されるようになった組織能力の概念をとりあげ、組織の環境適応という文脈の中に位置づけることによって、それらを構築する意義を明らかにしている。共著者：◎十川廣國編著、青木幹喜、清水馨、馬場杉夫、横尾陽道、遠藤健哉、山田敏之、山崎秀雄、今野喜文。筆者は第9章「環境適応と組織能力」(pp.135-155.) 担当。A5版、総頁216頁。
7	実践経営学会編(◎横澤利昌・平野文彦・室本誠二・中垣昇・深澤郁喜責任編集『実践経営辞典』)	共	2006.07.00	櫻門書房	実践経営学会創設40周年記念として編集された『実践経営辞典』の10項目について執筆したものである。執筆内容は、第3章 経営理念と組織文化において、①企業市民②企業の社会的貢献③企業倫理④社会的責任ピラミッド⑤フィランソフイー、第15章 環境経営の展開において、①拡大生産者責任②エコ・プロダクト③エコロジカル・デザイン④環境戦略と競争力⑤統合的製品政策である。
8	◎根本孝・茂垣広志監修・松崎和久編著『マネジメント基本全集別冊マネジメント基本辞典』	共	2007.03.00	学文社	マネジメント基本全集の別冊として編集された『マネジメント基本辞典』の16項目について執筆したものである。執筆内容は、①拡大生産者責任、②環境経営、③グリーン調達、④リサイクル、⑤統制の範囲、⑥モダンタイムス、⑦組織デザイン、⑧命令一元化の原則、⑨ライン・アンド・スタッフ組織、⑩プロシア、⑪機能別組織、⑫事業部制組織、⑬チャンドラー、⑭地域別組織、⑮機械的組織、⑯有機的組織である。

9	人と組織を活かす経営管理論	共	2009.04.00	八千代出版	本章は、経営戦略の基礎的な諸概念について説明したものである。まずは、経営戦略のコンセプトについて、様々な定義の存在、共通認識の抽出、経営戦略の3つの階層といった視点から検討している。次に、経営戦略の策定と実行に関する伝統的な考え方と新たなとらえ方を対比させ、分析型戦略とプロセス型戦略の違いを明らかにしている。最後に、経営戦略の策定の前提となる経営理念とビジョンの意味、機能、経営戦略との関係について言及している。共著者◎青木幹喜編、石井昌宏、金尾悠香、河野良治、佐藤耕紀、当間政義、山田敏之。筆者は第5章 経営戦略の基礎 (99頁～119頁) 担当。A5版、総頁 276頁。
10	人と組織を活かす経営管理論	共	2009.04.00	八千代出版	本章は、80年代後半以降、経営戦略論の中で注目を集めてきた資源・能力ベースの戦略論のエッセンスを説明したものである。まず、企業の持続的な競争優位の源泉を企業内部の固有の資源に求める資源ベースの戦略論について検討している。次に、ストックとしての経営資源よりもその活用が焦点を当てる能力ベースの戦略論について議論し、さらに能力の硬直化の危険性やダイナミックな能力の必要性という最新の考え方について紹介している。共著者◎青木幹喜編、石井昌宏、金尾悠香、河野良治、佐藤耕紀、当間政義、山田敏之。筆者は第8章 資源・能力ベースの競争戦略 (151頁～172頁) 担当。A5版、総頁 276頁。
論文					
1	新時代の企業行動ー継続と変化に関するアンケート調査 (2)	共	2005.02.00	三田商学研究 第47巻第6号	前年に引き続き日本企業の組織能力とイノベーション創造のあり方についてアンケート調査から実態を把握したものである (回答数: 233社)。企業は従来からの継続すべき点と変革していかねばならない点を明確にし、人々の創造性を引き出し、資源のユニークな活用が促進される組織能力を持つ必要があること。内部開発に加え、不足資源を補うような外部との提携、学習行動を生起させる必要があることが明確になった。(pp.121-145.)。共著者: ◎十川廣國、青木幹喜、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、今野喜文、山崎秀雄、山田敏之、坂本義和、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、渡邊航。B5版、総頁数 149頁中 25頁。
2	続・総合経営力指標ーコーポレートガバナンス・マネジメント全般と企業業績 2004 (1)	共	2005.02.00	三田商学研究 第47巻第6号	21世紀COE・慶應義塾大学経済学研究科・商学研究科連携「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析」の経営・会計班による「企業パネル調査」(回答数: 200社) から得られたデータを使い、コーポレートガバナンス、社会性マネジメントの諸要因と企業業績・従業員モラルとの関係についてQ A Q F手法により分析したものである。(pp.99-145.)。共著者: ◎岡本大輔、古川靖洋、佐藤和、梅津光弘、山田敏之、大柳康司。B5版、総頁数 149頁中 47頁。
3	企業における倫理問題の発生と組織風土	共	2005.03.00	実践経営 No.42	組織内で発生する倫理問題に対し、組織風土の影響が大きいこと、組織風土変容には意図的な要因と意図せざる要因の影響がみられることを指摘した。そして、組織風土が社会価値観や創業の理念と何らかの「ズレ」を生じた場合、それを感知して、組織的な変革を行っていく必要があること。それには、組織的学習を生起させることが必要であることを指摘した。組織風土と組織学習とは相互補完関係にあること、グループ単位での企業倫理確立についての研究が必要になることを課題として指摘した。(pp.45-52.) 共著者: ◎福永晶彦、山田敏之。A4版、総頁数 250頁中 8頁。
4	個人の倫理的意思決定に及ぼす組織風土の影響	共	2005.03.00	麗澤経済研究 Vol.13No.1	ある機械メーカーの販売会社から得られた 168名のデータを使い、組織内の個人の倫理判断・意識と倫理行動、および両者の乖離に組織風土や個人要因が及ぼす影響について実証的に分析したものである。倫理判断と倫理行動との乖離状況の存在、組織風土要因が倫理判断にはほとんど影響を及ぼさないが、倫理行動には大きく影響すること、意識と行動の乖離を狭める組織風土の役割について論じた。(pp.105-126.)。共著者: ◎山田敏之、福永晶彦、中野千秋。B5版、総頁数 246頁中 22頁。

5	雪印乳業における組織風土の変容と企業倫理	共	2005.03.00	東海学園大学研究紀要 第10号 (シリーズA)	雪印乳業(グループ)の事例を用いて、企業の歴史的変遷の視点から、企業倫理が組織風土により受ける影響について考察したものである。考察の結果、意図しない組織風土の変化が発生した後に、創業の理念や社会の価値観に対する議論が欠けたG I 導入により組織風土の固定化が起こり、業績悪化によるリストラと相まって不祥事の温床を形成したことが推察された。これらを踏まえ、組織風土の固定化を防ぐには、自らの組織風土を省察する組織学習の喚起が必要であることを示唆した。(pp.113-136.) 共著者:◎福永晶彦、山田敏之。B 5版、総頁数 157 頁中 24 頁。
6	続・総合経営力指標－コーポレートガバナンス・マネジメント全般と企業業績 2004 (2)	共	2005.06.00	三田商学研究 第 48 巻 第 2 号	前資料 7 の文献の続編である。21 世紀 COE ・慶應義塾大学経済学研究科・商学研究科連携「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析」の経営・会計班による「企業パネル調査」(回答数: 200 社) から得られたデータを使い、地球環境保護、企業倫理・コンプライアンス、組織の倫理性、組織文化といった変数と企業業績・従業員モラルとの関係について Q A Q F 手法により分析したものである。(pp.157-175)。共著者:◎岡本大輔、古川靖洋、佐藤和、梅津光弘、山田敏之、大柳康司。B 5版、総頁数 180 頁中 19 頁。
7	新時代の企業行動－継続と変化に関するアンケート調査 (3)	共	2006.02.00	三田商学研究 第 48 巻 第 6 号	日本企業の組織能力とイノベーション創造のあり方についてアンケート調査から実態を把握している(回答数:203 社)。継続調査の 3 年目の結果をまとめたものである。継続と変化という視点から、個々人の能力を活かし挑戦意欲を喚起し、組織の学習能力を向上させることが重要になること。そのために、戦略の選択や組織構造の変化に加え、組織文化の刷新、人材評価のあり方などが課題になることなどを主張している。(pp.147-167.)。共著者:◎十川廣國、青木幹喜、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、今野喜文、山崎秀雄、山田敏之、坂本義和、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、永野寛子。B 5版、総頁数 171 頁中 21 頁。
8	第 4 回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告	共	2006.03.00	日本経営倫理学会誌 第 13 号	平成 14 年度に続く第 4 回調査の結果をまとめたものである。得られた知見:①制度化の一層の進展、②ビューロクラティックな組織ほど制度化により企業倫理確立を図る傾向が高まること、③制度化努力の成果に対する満足度が著しく上昇したこと、④回答拒否企業でも内容自体に無関心ではないこと。今後の課題として、制度の構築状況だけでなく、その有効性や限界などを新たに調査する必要性を指摘した。(pp.91-103.)。共著者:◎福永晶彦、山田敏、中野千秋。B 5版、総頁数 241 頁中 13 頁。
9	日本企業における倫理確立に向けての取り組みと管理者の倫理観:10 年前との比較	共	2006.03.00	日本経営倫理学会誌 第 13 号	日本企業における倫理確立に向けた取り組みおよび管理者の倫理観の推移を、10 年前に実施した調査との比較によって明らかにしたものである。全上場企業および保険会社を含む 3714 社を対象にアンケート調査を実施(回答数:227 社)。結果の要点:①企業倫理確立に向けた取り組みの著しい進展、②しかし、管理者の倫理観に目だった変化は認められない、③状況主義的(倫理相対主義的)傾向が強い点での変化はみられない、④管理者の意思決定に及ぼす「会社の方針」の重要性が低下している。(pp.105-115.)。共著者:◎中野千秋、山田敏之。B 5版、総頁数 241 頁中 11 頁。
10	企業倫理の制度化と組織風土:企業倫理確立に向けてのコンテキストエンジェンシー・アプローチ	共	2006.03.00	『日本における企業倫理制度化と管理者の倫理観』平成 16 年度～平成 17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書 研究代表者:中野千秋	企業倫理の確立を図るために構築された制度や仕組みが成果に結びつくために必要とされる要件とは何か、という課題を、企業倫理制度化のタイプ(コンプライアンス型 vs 価値共有型)と組織風土のタイプ(管理志向 vs 自由闊達)との整合といった視点から考察したものである。アンケート調査から得られた 227 社のデータを用いた定量的分析から、①制度化の有効性の議論に企業倫理制度化のタイプと組織風土特性との整合という視点が重要な変数となること、②自由闊達な組織風土構築の重要性が導出された。(pp.25-39.) 共著者:◎山田敏之、中野千秋

11	企業倫理研究の理論的背景と基礎的概念：組織論の視点からの考察	単	2006.04.00	三田商学研究第 49 卷 1 号	本稿は、従来の企業倫理研究で欠落していた分析枠組みについて、組織論の視点から概念規定の明確化、再構築を行おうとするものである。企業組織の本質、企業組織と個人との関係、企業倫理の定義と対象範囲、企業倫理の分析単位に関する検討を行った。本稿で考察された組織論の視点から分析枠組みを用いることで、個人の倫理性の確立をいかに組織の倫理性の確立に結びつけるか、組織の倫理性向上と組織の効率、組織の業績との関係といったより複雑な現象を説明できることを指摘した。(pp.103-120.) B 5 版、総頁数 144 頁中 18 頁。
12	日本企業における倫理確立に向けての取り組みと管理者の倫理観－10 年前との比較－	共	2006.09.00	麗澤経済研究 VOL.14No.2	日本経営倫理学会誌第 13 号に掲載した論文に、1994 年から 2004 年にかけての日本企業を取り巻く法的・社会的環境の変化についての考察を加え、さらにデータに関する詳細な考察を付加したものである。(pp.45-66.) 共著者：◎中野千秋、山田敏之。B 5 版、総頁数 130 頁中 22 頁。
13	企業倫理の再生と組織の学習メカニズムに関する理論的考察	単	2006.10.00	博士論文	本論文は、企業倫理の再生という課題に取り組む場合に、従来いわれてきた企業倫理の制度化概念の限界を補完する新たな視点として組織学習の概念が導入される必要性を指摘し、組織が不祥事や非倫理的行為の原因を探り、新たな解決策を発見し、自己変革を成し遂げる組織的な学習のメカニズムを解明し、理論的なモデルを提示するものである。同時に、そのような学習メカニズムの促進要因としてのリーダー、とりわけミドルの役割についても考察している。
14	変化の時代における不変のマネジメント	共	2007.02.00	三田商学研究 第 49 卷 第 7 号	過去 4 年間の日本製造企業へのアンケート調査に基づき、マネジメント諸要因の異同を分析し、企業経営にとって「変わらなければならないマネジメント要因」と「持続的に適応性を持っているマネジメント要因」とは何かを明らかにしようと試みたものである(回答数：162 社)。新製品開発戦略の重点化、トップのビジョン共有努力の重要性、部門を超えた知識共有活動の重要性、戦略的ミドルの重要性等が抽出された。(pp. 205-228.) 共著者：◎十川廣國、青木幹喜、遠藤健哉、馬場杉夫、清水 馨、坂本義和、山崎秀雄、今野喜文、山田敏之、周 炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、岡田拓己、永野寛子。B 5 版、総頁数 231 頁中 24 頁。
15	CSR と戦略的ミドル	単	2007.03.00	機械経済研究 No.38	本稿は、CSR や対社会戦略の形成・実行におけるミドルの役割について、Floyd & Wooldridge によって提示された戦略的ミドルの概念を適用することによって考察したものである。CSR や対社会戦略の形成・遂行するための戦略的ミドルの役割として、①社会的チャンピオニング、②社会性情報の統合化、③社会性視点からの適応性の促進、④社会性の定着・実行、⑤社会性情報の拡散と共有の 5 つの役割が抽出された。(pp.1-17.) A 4 版、総頁数 76 頁中 17 頁。
16	中小企業のエコ・イノベーションと組織学習：ISO14001 の有効活用の視点から	単	2007.07.00	実践経営 No.44	本稿は、厳しい環境変化の中、品質、コスト、納期に加え、環境配慮の活動まで求められるようになった中小企業が、収益性と環境配慮とを両立させるにはどのような視点をもつことが必要になるのか、それらを実現するにはどのような組織運営の課題が存在しているのか、という点について、特に ISO14001 と組織学習との関係性に焦点を当てて考察したものである。中小企業にとってのエコ・イノベーションの意義、ISO14001 に潜在する合理性とコントロールの考え方の問題点とそれらにのみ依存した組織学習の限界、高度な組織学習を生起させるための戦略経営の視点の有効性を提示している。(pp.37-43.) A 4 版、242 頁中 7 頁。
17	企業倫理の再生と組織学習の視点：制度化の限界を超えて	単	2007.08.00	三田商学研究第 50 卷 3 号	本稿は企業倫理再生の本質をとらえ、従来の企業倫理の制度化の限界を示すとともに、企業倫理再生に向けた新たな視点として組織学習の有効性を明らかにすることを目的としたものである。制度化の限界を超えるには、組織内で自発的な問題発見、原因探索、変革行動が生起されるような倫理自律性を身につけ、個々人の相互作用により支配的な価値観の修正を行い、同時に構造や仕組みの創造プロセスまで遡って批判・検討する組織学習の視点を導入することが重要になる。(pp.323-341.) B 5 版、総頁数 483 頁中 19 頁。

18	Institutionalization of Ethics at Japanese Corporation and Japanese Managers' Views of Business Ethics: Comparisons with Ten Years Ago	共	2008.03.00	麗澤経済研究 Vol.16 No.1	1994年から2004年にかけての日本企業を取り巻く法的・社会的環境の変化(①相次ぐ企業不祥事、②政府・行政の方針転換:自己管理・自己責任の時代へ、③経済活動に関する新法の制定・法改正、④市場・消費者側の期待の変化)の中で、日本企業における倫理確立に向けた取り組みおよび管理者の倫理観がどのように推移したのかを、10年前に実施した調査との比較によって明らかにしたものである。(pp.1-27.) 共著者:◎中野千秋、山田敏之。B5版、総頁数180頁中27頁。
19	イノベーションの源泉としての学習能力	共	2008.03.00	成城大学 社会イノベーション研究第3巻第2号	本稿は企業が存続するために如何なる戦略行動をとる必要があるのか、つまり価値創造プロセスの活性化の成果である製品や製造技術のイノベーションにつながる要因を解明することを目的としている。分析の視点は①経営環境と日本企業の戦略動向、②製品イノベーションの取り組みと成果、③個人レベルの学習を促進するためのマネジメント、④コラボレーションを通じた学習の促進とイノベーション、⑤個の創造性発揮を通じた組織知の増幅に果たすミドルの役割、⑥ダイナミックな組織学習を実現するための土壌の6つである。(pp.19-55.) 共著者:◎十川廣國、青木幹喜、神戸和雄、遠藤健哉、馬場杉夫、清水 馨、坂本義和、山崎秀雄、今野喜文、山田敏之、周炫宗、横尾陽道、小沢一郎、角田光弘、永野寛子。B5版、総頁数190頁中37頁。
20	企業倫理の創発的再生と組織学習:雪印乳業の再生活動の事例分析	共	2008.09.00	実践経営 No.45	本稿は2002年以降の雪印乳業における企業倫理再生への取り組みを観察することで、再生活動において支配的となっている制度化という処方箋の危険性を指摘し、新たな視点を導入することの意義を議論したものである。学術的インプリケーションとして①企業倫理再生活動への創発的な視点、特に組織学習の視点を組み込むことの有効性、②組織内学習に加え、組織と社会との相互学習の視点を導入することの重要性が指摘された。(pp.19-26) 共著者:◎山田敏之・福永晶彦 A4版、総頁数239頁中8頁。
21	第5回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告	共	2009.03.00	日本経営倫理学会誌 第16号	本稿は平成17年度に続く第5回調査(最終)の結果をまとめたものである。得られた知見:①制度化の定着、ほぼ完了状態であること、②ビューロクラティックな組織ほど制度化により企業倫理確立を図る傾向が高まること、③制度化努力の成果に対する満足度が上昇したこと。残された研究課題として、制度化の限界、日本的な企業倫理確立の方法、制度をいかに効果的に機能させていくか、等が今後の研究課題になる点が提示された。(pp.151-163) 共著者:◎中野千秋、山田敏之、福永晶彦、野村千佳子。B5版、総頁数295頁中13頁。
その他					
1	組織間関係とイノベーションの創造に関する調査	単	2004.05.00	機械情報産業研究報告会(主催:(財)機械振興協会 経済研究所)	「組織間関係とイノベーションの創造に関する調査-日独産業の事例を中心として」の内容について機械情報産業研究報告会にて発表したものである。
2	The Influence of Organizational Climate on the Ethical Decision-Making of Individuals in an Organization	共	2004.07.00	International Society of Business, Economics, Ethics (ISBEE)第3回国際会議(メルボルン大学)	「個人の倫理的意思決定と組織風土」の内容について、ISBEE第3回国際会議(メルボルン大学)において発表したものである。共同報告者:◎山田敏之、福永晶彦、中野千秋
3	Institutionalization of Ethics in Japanese Corporations: A Report of Survey Studies Conducted in 1996, 1999, and 2002	共	2004.07.00	International Society of Business, Economics, Ethics (ISBEE)第3回国際会議(メルボルン大学)	日本経営倫理学会実証調査研究部会が3年おきに継続実施してきた「企業倫理制度化に関する定期実態調査」の過去3回の調査結果をもとに、日本企業の現時点での制度化の実態と課題をまとめたものをISBEE第3回国際会議(メルボルン大学)において発表したものである。共同報告者:◎中野千秋、山田敏之
4	外部からの知識獲得と組織学習:光造形複合加工機械の共同開発の事例	単	2004.08.00	製造科学技術センター機関誌IMS(Intelligent Manufacturing Systems) Vol.15 No.3	組織的なイノベーションの創造には外部からの知識獲得と組織学習との連動が必要であることを、光造形複合加工機械の共同開発(機械メーカーと大手電気メーカーとの共同開発)の事例調査から導き出したものである。(pp.20-23.) A4版、総頁数32頁中4頁。

5	組織における倫理問題の発生と組織風土：雪印乳業の事例	共	2004.09.00	実践経営学会第 47 回全国大会（亜細亜大学）	組織における倫理問題の発生を組織風土の変容という視点から報告したものである。理想的な組織風土の本質的な変容を防ぐには、学習を生起させるような組織が構築されている必要があることを指摘した。事例として雪印乳業における一連の事件を取り上げた。共同報告者：◎福永晶彦、山田敏之
6	産学官連携にみるドイツモデルと北陸モデル－工作機械等の開発事例－	単	2004.12.00	機械情報産業地方講演会（富山市オックスカナルパークホテル）	地域イノベーションの創造に向けた産学官連携のあり方について、ドイツにおけるプロジェクトと北陸（福井県）における複合加工機の開発事例を比較して述べたものである。
7	慶應義塾大学 経済学研究科・商学研究科 COEプロジェクト 経営会計班 中間報告書	共	2005.01.00	慶應義塾大学	厳しい環境変化の中で見受けられる企業行動の変容、その市場の質の変化に及ぼす影響について、コーポレート・ガバナンスのあり方、戦略の再構築、戦略的提携、マーケティング、環境経営、決算行動といった視点から考察したものである。分析には相関分析および Q A Q F 手法を用いた。
8	情報共有と組織力の向上：I T 活用能力と組織学習。	共	2005.03.00	機械工業経済研究報告書（財）機械振興協会経済研究所	組織が I T を有効に活用し、組織のパフォーマンス（業務スピードおよび創造性発揮）に結びつけるためには、単に物理的な I T の整備、知識豊富な専門要員の存在だけでなく、組織による情報の獲得→共有→解釈→保持・保有という組織学習のプロセスが機能する必要があることを示したものである（1500 社対象のアンケート調査実施）。山田執筆担当主要部分（pp.83-93.,pp.97-108.）共著者：◎遠山暁、元橋一之、福永晶彦、土井正、佐藤耕紀、山田敏之。A 4 版、総頁 141 頁。
9	工作機械・微細加工分野のマーケット展望と課題	単	2005.06.00	日本物流新聞 6 月 25 日「産業 VIEW・Winner の条件」	工作機械企業の高付加価値戦略の方向性として微細加工分野への進出展望と課題を述べたものである。今後の課題として、①高精度な要素技術開発の必要性、②国内外の多様な組織との連携強化、③微細加工技術に必要な技能をもった人材の育成・確保、④工作機械企業自身の意識改革の必要性を挙げている。
10	第 4 回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告	共	2005.10.00	日本経営倫理学会第 13 回研究発表大会（南山大学）	日本経営倫理学会実証調査研究部会が 3 年おきに継続実施してきた「企業倫理制度化に関する定期実態調査」の第 4 回目（最新）の調査結果を発表したものである。日本における制度化の一層の進展。制度をいかに効果的に機能させていくか、という組織的課題が浮かび上がってきた。共同報告者：◎福永晶彦、山田敏之、中野千秋
11	日本企業における倫理確立に向けての取り組みと管理者の倫理観：10 年前との比較	共	2005.10.00	日本経営倫理学会第 13 回研究発表大会（南山大学）	10 年前と同様の調査を実施することで、2004 時点での日本企業の実態、管理者の倫理意識を報告するとともに、10 年間の変化について考察を加えたものである。①日本の管理者の倫理観にそれほど大きな変化は見られない。②状況主義的傾向が強いという特徴は、ほとんど変わっていない。③管理者の倫理意思決定に影響を及ぼす要因として「会社の方針」の重要性は相対的に低下し、米国の管理者の倫理的意思決定パターンに近くなりつつある。といった点が抽出された。共同報告者：◎中野千秋、山田敏之
12	鋼材価格の変動が製造業に与える影響－工作機械業界における対応と課題	単	2005.10.00	第 357 回 S T E P 研究会（主催：（財）機械振興協会経済研究所）	鋼材価格の変動が工作機械業界に及ぼす影響について、①コスト上昇、②納期遅延という 2 点からとらえ、それに対応する工作機械企業の方策として①製品価格への転嫁、②企業努力による吸収、③調達先の変更を挙げ、それぞれに評価・検討を加えた。その上で、鋼材価格変動といった不確実な環境変化に対応するためには、収益基盤の強化が必要であり、具体的には①複合加工機の開発、②効率化とスピード重視の戦略、③販売・サービス活動の工夫が有効であることを主張した。
13	慶應義塾大学 経済学研究科・商学研究科 COEプロジェクト 経営会計班 中間報告書	共	2006.01.00	慶應義塾大学	2005 年 1 月の報告書に引き続き、厳しい環境変化の中で見受けられる企業行動の変容、その市場の質の変化に及ぼす影響について、コーポレート・ガバナンスのあり方、戦略の再構築、戦略的提携、マーケティング、環境経営、決算行動といった視点から考察したものである。

14	中小製造業におけるエコ・イノベーションの創造と戦略経営の課題	共	2006.03.00	機械工業経済研究報告書 (財)機械振興協会経済研究所	中小製造業6社(+取引先大手2社)を対象とするヒアリング調査により、中小企業がエコ・イノベーションを創造するための成功要因を、①段階的なグリーン戦略、②ISO14001の有効活用、③品質、小集団活動とグリーン戦略との統合、④個人の能力と教育・訓練、⑤トップの役割、⑥グリーン・アライアンスといった視点から考察している。山田執筆担当部分(pp.3-12.,pp.27-38.,pp.93-146.)共著者:◎十川廣國、青木幹喜、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、山崎秀雄、山田敏之。A4版、総頁146頁。
15	日本における企業倫理制度化と管理者の倫理観	共	2006.03.00	平成16年度～平成17年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書 研究代表者:中野千秋	「日本企業における倫理確立に向けての取り組みと管理者の倫理観:10年前との比較」および「企業倫理の制度化と組織風土:企業倫理確立に向けてのコンティンジェンシー・アプローチ」2つの論文、調査表原票および付属資料(1994年調査をまとめた中野千秋「実証研究:企業管理者の倫理観に関する日米比較」『麗澤学際ジャーナル』第3巻第1号,1995)から構成される報告書である。共著者:◎中野千秋、山田敏之。A4版、総頁80頁。
16	モノづくり企業におけるCSRへの取り組みとその成果—企業価値向上のための具体的提案	共	2006.03.00	機械工業経済研究報告書 (財)機械振興協会経済研究所	モノづくりの現場でのCSRのあり方、成果に結びつけられるために必要なマネジメントについて、アンケート調査とヒアリング調査から検討を加えたものである。①社会の変化と認識、組織的対応の必要性、②CSRは配慮、対話、協同、改革の3C Iの進化の過程であること、③本業の中への落とし込み、④適切なリーダーのもとでの本気の取り組み、⑤トータルな意識と連携の必要性、⑥成果に連動する仕組みづくりの必要性を提示した。共著者:◎井口哲夫、渡邊博子、山田敏之。A4版、総頁100頁。
17	中小製造業のエコ・イノベーション	単	2006.05.00	機械情報産業研究報告会 (主催:財)機械振興協会経済研究所)	「中小製造業におけるエコ・イノベーションの創造と戦略経営の課題」の第二章および第三章の内容について機械情報産業研究報告会にて発表したものである。
18	中小企業のエコ・イノベーションと組織学習:ISO14001の有効活用の視点から	単	2006.09.00	実践経営学会第49回全国大会(中京大学)	中小企業の経営にエコ・イノベーションの組織的な創造といった視点を組み入れることの意義、それらを実現するために必要な要因としての組織学習の役割、さらに、環境配慮の活動のガイドラインであるISO14001が組織学習を促進する要因として有効に機能するための条件について明らかにしたものである。
19	工作機械産業をめぐる新たな動きと岩手県機械産業の可能性	単	2006.10.00	機械情報産業地方講演会 (北上市ホテルシティプラザ北上)	工作機械産業の概要、経営の課題、高付加価値の製品開発状況、技能継承の課題、産学連携の活用について報告し、岩手県の機械産業についての課題を指摘した。
20	モノづくり企業における環境経営の“見える化”の実態	単	2006.11.00	第367回STEP研究会 (主催:財)機械振興協会経済研究所)	環境経営になぜ“見える化”の概念が必要になるのか、“見える化”導入の意義、先端的な企業の事例について報告を行ったものである。従来のISO14001の取得、PDCAサイクルを回すだけの不備を指摘し、見える化が上から押し付けるものになってしまう危険性を指摘した。三菱電機福山製作所とシャープ亀山事業所での事例から、創発的な見える化には戦略経営の視点が必要であることを主張した。
21	環境経営における“見える化”の実態と戦略経営の課題	共	2007.03.00	機械工業経済研究報告書 (財)機械振興協会経済研究所	環境経営を実効性あるものにしていくための「見える化」の手法適用の実態と課題について検討したものである。「見える化」は自律的な問題発見、解決を図る上で有効な手法であるが、管理面だけを強調した場合、上からの「見える化」となり、社員にやらされ感が充満してしまうこと、下からの創発的な「見える化」が理想であるが、それを実践するためには、単に「見える化」の手法を工夫するだけでなく、人事評価、リーダーの役割など、戦略経営の視点を組み込むことが必要であることを主張している。共著者:◎十川廣國、青木幹喜、遠藤健哉、馬場杉夫、清水馨、山崎秀雄、山田敏之。山田執筆担当部分(pp.3-33.)A4版、総頁124頁。
22	グリーン調達と中小企業の対応:ISO14001取得及び有効活用の視点から	単	2007.05.00	中小企業と組合2007.5号	グリーン調達が中小企業にどのような影響を与えるのか、先進的な企業はどのような対応をとっているのか、といった点をグリーン調達推進の基盤であるISO14001認証取得の有効活用に焦点を当て、複数の事例を交え報告したものである。中小企業のグリーン調達への対応では①ISO14001を回す工夫、②外部との連携、協力体制による規格の取得、③協同組合等のネットワークの活用がポイントとなることを指摘した。(pp.10-12.)、A4版、総頁数33頁中3頁。

23	企業倫理の創発的再生と組織学習：雪印乳業の再生活動の事例分析	共	2007.09.00	実践経営学会第50回全国大会（東京国際大学 早稲田サテライト）	2002年以降の雪印乳業における企業倫理再生の取り組みを観察することで、支配的となっている企業倫理再生への処方箋の危険性を指摘し、新たな視点を導入する意義を議論したものである。共同報告者：◎山田敏之、福永晶彦
24	企業倫理再生とミドルの役割	共	2008.09.00	実践経営学会第51回全国大会（長崎県立大学 佐世保校）	戦略論や組織論で議論されるミドルの新たな役割、戦略的ミドルの役割といった枠組みの企業倫理再生活動への適用可能性について報告したものである。個人の倫理学習から組織の倫理学習への橋渡しにはミドルの役割が重要になること。企業倫理再生活動におけるミドルの役割は、組織内部での非常に複雑なプロセスと内容をもつこと、また社会との結節点としての役割が重要になることが明らかにされた。共同報告者：◎山田敏之、福永晶彦
25	第5回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告	共	2008.10.00	日本経営倫理学会 第16回研究発表大会（慶應義塾大学）	日本経営倫理学会実証調査研究部会が3年おきに継続実施してきた「企業倫理制度化に関する定期実態調査」の第5回目（最新、最終）の調査結果を発表したものである。日本企業における制度化がほぼ完了している点が確認された。制度化の限界、日本的な企業倫理確立の方法、制度をいかに効果的に機能させていくか、等が今後の研究課題になる点が提示された。共同報告者：◎中野千秋、福永晶彦、野村千佳子
26	第5回・日本における企業倫理制度化に関する定期実態調査報告	共	2008.10.00	日本経営倫理学会 第16回研究発表大会（慶應義塾大学）	本経営倫理学会実証調査研究部会が3年おきに継続実施してきた「企業倫理制度化に関する定期実態調査」の第5回目（最新、最終）の調査結果を発表したものである。日本企業における制度化がほぼ完了している点が確認された。制度化の限界、日本的な企業倫理確立の方法、制度をいかに効果的に機能させていくか、等が今後の研究課題になる点が提示された。共同報告者：中野千秋・福永晶彦・野村千佳子

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1997.04.00	～	現在	組織学会会員
2	1998.05.00	～	現在	日本経営倫理学会会員（1998年6月～現在実証調査研究部会メンバー）
3	1998.10.00	～	現在	実践経営学会会員
4	2000.04.00	～	2004.05.00	麗澤大学 経済社会総合研究センター「産学共同プロジェクト：倫理的企業風土確立に向けての組織変革」メンバー
5	2001.04.00	～	現在	国際ビジネス研究学会会員
6	2002.04.00	～	現在	日本経営学会会員
7	2006.10.00	～	現在	戦略研究学会会員
8	2007.04.01	～	2008.03.31	（財）機械振興協会「グローバルなモノづくりにおける機械関連企業のグリーン調達に関する調査」研究会 委員

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	講師	氏名	青木 久	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 石灰岩で構成される海岸地形の多様性についてー波食棚地形の形成条件と形成高度に関する一考察ー	分担執筆	2006.00.00	琉球大学 21 世紀 COE プログラム編集委員会編「美ら島の自然史ーサンゴ礁島嶼系の生物多様性」、東海大学出版会	青木 久、前門 晃 第 26 章、361-371		
2 沖縄県史図説編 県土のすがた	分担執筆	2006.00.00	沖縄県教育委員会	(分担執筆)		
論文						
1 礫浜カスプの形成過程に関する野外実験と室内実験	単	2004.00.00	地理学評論、77	青木 久 195-208、査読あり		
2 エコーチップ硬さ試験機による青島砂岩の表面風化層の強度把握	共	2004.00.00	地形、25	青木 久、松倉公憲 371-382、査読あり		
3 エコーチップ硬さ試験機の紹介とその反発値と一軸圧縮強度との関係に関する一考察	共	2004.00.00	地形、25	青木 久、松倉公憲 267-276、査読あり		
4 シュミットハンマー：地形学における使用例と使用方法にまつわる諸問題	共	2004.00.00	地形、25	松倉公憲、青木 久 175-196、査読あり		

5	日南海岸いるか岬の波食棚地形に関する予察的研究：波食棚構成岩石の強度と含水比の測定	共	2004.00.00	筑波大学陸域環境研究センター報告、5	青木 久、大島智洋、若狭 幸、八反地 剛、松倉公憲 63-71、査読なし
6	Recession rates of Kaminari Falls in the upper Matsukawa River, Takayama Village, Nagano Prefecture	共	2004.00.00	Annual Report of Institute of Geoscience, The University of Tsukuba, 30	Hayakawa, Y., Aoki, H., & Y.Matsukura 21-25、査読なし
7	Equotip hardness for weathered surface layer of tuffaceous sandstone at "Yagura" artificial caves in Kamakura City	共	2004.00.00	Annual Report of Institute of Geoscience, The University of Tsukuba, 30	Matsukura, Y., Aoki,H., Hattanji, T., & N.Kuchitsu 27-32、査読なし
8	宮崎県日南海岸いるか岬における波食棚の地表面露出年代	共	2004.00.00	第12回「東京大学原子力研究総合センターシンポジウム」報告集	若狭 幸・大島智洋・青木 久・松崎浩之・松倉公憲 207-210、査読なし
9	大谷石採掘場跡地における岩盤崩落：宇都宮市大谷町坂本地区における1989年陥没の安定解析	共	2005.00.00	地形、26	青木 久、佐々木智也、小口千明、松倉公憲 423-437、査読あり
10	琉球石灰岩の一軸圧縮強度に与える寸法効果と岩石物性の影響	共	2005.00.00	応用地質、46	小暮哲也、青木 久、前門 晃、松倉公憲 2-8、査読あり
11	塩類風化速度に与える岩石物性の影響に関する一実験	共	2005.00.00	応用地質、46	山田 剛、青木 久、高橋 学、松倉公憲 72-78、査読あり
12	海水飛沫帯における橋脚砂岩塊のくぼみ深さに関する定量的把握：日南海岸・青島弥生橋の事例	共	2005.00.00	地形、26	青木 久、松倉公憲 175-196、査読あり
13	大谷石からなる岩盤の風化による強度低下に関する非破壊測定法：エコーチップ硬さ試験機と赤外線水分計を利用した例	共	2005.00.00	筑波大学陸域環境研究センター報告、6	青木 久、佐々木智也、松倉公憲 33-38、査読なし
14	青島砂岩の塩類風化速度に与える間隙率の影響に関する二、三の実験	共	2005.00.00	筑波大学陸域環境研究センター報告、6	山本まりえ、青木 久、松倉公憲 23-31、査読なし
15	台座岩から推定される石灰岩地表面の溶解による低下速度：喜界島における一例	共	2005.00.00	筑波大学陸域環境研究センター報告、6	松倉公憲、前門 晃、廣瀬 孝、青木 久、小暮哲也 17-21、査読なし
16	国際科学振興財団編：科学大辞典 第2版	分担執筆	2005.00.00	丸善出版	(分担執筆)
17	Effects of rock strength and location heights on growth rates of tafoni-like depressions at sandstone blocks used for a masonry bridge pier in the coastal spray zone	共	2006.00.00	Zeitschrift für Geomorphologie、51	Aoki, H. & Y. Matsukura 115-132、査読あり

18	石灰石で構成される波食棚の形成要因について：沖縄島辺戸岬の事例	共	2006.00.00	地形、27	青木 久、前門 晃 461-475、査読あり
19	琉球石灰岩からなる海食崖の崩落：ノッチの限界深さに関する一考察	共	2006.00.00	島嶼科学、1	青木 久、小暮哲也、前門 晃、廣瀬 孝、松倉公憲 査読あり
20	Effect of notch and tension crack development on instability of coastal cliffs made of Ryukyu Limestone at Okinawa, Japan	共	2006.00.00	Geomorphology、80	Kogure, T., Aoki, H., Maekado, A., Hirose, T. & Y. Matsukura 236-244、査読あり
21	2005年6月集中豪雨による沖縄島北部の千枚岩の切り取り斜面に発生した表層崩壊の特徴	共	2006.00.00	島嶼科学、1	若月 強、青木 久、小暮哲也、前門 晃、松倉公憲 35-45、査読あり
22	室内実験における石灰岩の溶解特性に関する一考察	共	2006.00.00	地学雑誌、115	高屋康彦、廣瀬 孝、青木 久、松倉公憲 136-148、査読あり
23	サンゴ礁海浜の前浜勾配に関する定量的予測	共	2006.00.00	沖縄地理、7	青木 久、前門 晃 79-84、査読なし
24	琉球石灰岩の海食崖にみられるノッチの限界深さ：八重山諸島・黒島での事例	共	2006.00.00	沖縄地理、7	青木 久、小暮哲也、前門 晃、松倉公憲 25-32、査読なし
25	Vertical changes in physical and mechanical properties due to weathering of Kunigami Gravel	共	2006.00.00	沖縄地理、7	Maekado, A. & H. Aoki 107-110、査読なし
26	沖縄島荒崎海岸における迷子石「カサカンジャー」の定置時期に関する一考察	共	2006.00.00	筑波大学陸域環境研究センター報告、7	青木 久、小暮哲也、前門 晃、松倉公憲 53-58、査読なし
27	A new technique for non-destructive field measurement of rock-surface strength: an application of an Equotip hardness tester to weathering studies	共	2007.00.00	Earth surface processes and landforms、32	Aoki, H. & Y. Matsukura 1759-1769、査読あり
28	Surface Lowering Rates of Uplifted Limestone-terraces Estimated from the Height of Pedestals on A Subtropical Island of Japan	共	2007.00.00	Earth Surface Processes and Landforms, Vol. 32	Matsukura, Y., Maekado, A., Aoki, H., Kogure, T., and Kitano, Y. 1110-1115 査読あり
29	石垣島における台座岩の形成条件と形成速度	共	2007.00.00	『筑波大学陸域環境研究センター報告』、第18巻	青木 久・春田知実・松四雄騎・前門 晃・松倉公憲 35-40、査読なし
30	Estimating the unconfined compressive strength of intact rocks from the Equotip hardness	共	2008.00.00	Bulletin of Engineering Geology and the Environment、67	Aoki, H. & Y. Matsukura 23-29、査読あり

31	波食棚上の節理沿いに発達するリムの形成プロセス	共	2008.00.00	地形、29	青木 久、松倉公憲 387-397、査読あり
32	沖縄島中南部西海岸における人工海浜の維持条件について	共	2008.00.00	沖縄地理、8	智原健太、青木 久、前門 晃 61-65、査読あり
33	沖縄島におけるマングローブの生育規模に及ぼす河床勾配の影響	共	2008.00.00	沖縄地理、8	具志堅ひな子、青木 久、前門 晃、藤永 豪 67-72、査読あり
34	西表島の国頭マージからなるパイナップル畑の土層構造と浸透能	共	2008.00.00	島嶼科学、2	若月 強、青木 久、前門 晃、高相徳志郎 1-9、査読あり
35	久米島東部奥武島海岸の波食棚「畳石」における節理沿いの微地形形成について	共	2008.00.00	島嶼科学、2	青木 久、三木蘭子、前門 晃、松倉公憲 11-19、査読あり
36	ハワイ・オアフ島北部海岸における台座岩	共	2008.00.00	島嶼科学、2	青木 久、前門 晃、松倉公憲 47-50、査読あり
37	完新世サンゴ礁段丘の表面高度と旧汀線高度との関係	共	2009.00.00	大東文化大学紀要（自然科学）	青木 久、松倉公憲 1-7、査読なし
38	琉球列島における完新世サンゴ礁段丘のカメニツァの平面形状の時間的变化	単	2009.00.00	大東文化大学経営論集	青木 久 1-11、査読なし
その他					
1	宮古島東平安名岬の琉球石灰岩からなる海崖の崩落後退	共	2004.07.00	2004 年度沖縄地理学会、沖縄（琉球大学）	前門 晃・廣瀬 孝・松倉公憲・小暮哲也・青木 久
2	Effects of temperature and CO ₂ concentration on dissolution rates of Limestone: a laboratory experiment	共	2004.10.01	Binghamton International Gemorphology Symposium, weathering and landform evolution, October 1-3, 2004, University of Kentucky, Lexington	Oguchi, T., C., Suzuki, M., Aoki, H., & Y. Matsukura
3	大谷石採掘場跡地の陥没について	共	2005.03.00	2004 年度筑波大学陸域環境研究センター年次研究報告会、茨城（筑波大学）	佐々木智也・青木 久・松倉公憲
4	塩類風化に及ぼす岩石の間隙率の影響に関する実験的研究	共	2005.03.00	2004 年度筑波大学陸域環境研究センター年次研究報告会、茨城（筑波大学）	山本まりえ・青木 久・松倉公憲
5	琉球石灰岩からなる海食崖の崩壊：岩石・岩盤強度の寸法効果を考慮した安定解析	共	2005.05.00	日本地形学連合 2005 年春季大会、福岡（九州大学）	小暮哲也・青木 久・前門 晃・廣瀬 孝・松倉公憲
6	Recession of Ryukyu Limestone coastal cliffs	共	2005.07.00	2005 年度沖縄地理学会、沖縄（沖縄国際大学）	Maekado, A., Hirose, T., Aoki, H., Kogure, T. & Matsukura
7	沖縄島辺戸岬におけるサーフベンチの形成要因に関する一考察	共	2005.07.00	2005 年度沖縄地理学会、沖縄（沖縄国際大学）	青木 久・前門 晃

8	Rockfalls in coastal cliffs made of Ryukyu Limestone: slope stability analysis considering the scale effect in rock strength	共	2005.09.07	Sixth International Conference on Geomorphology, September 7-11, 2005, the University of Zaragoza, Zaragoza.	Kogure, T., Aoki, H., Maekado, A., Hirose, T. & Y. Matsukura
9	石灰岩からなる波食棚の形成要因に関する一考察：沖縄島辺戸岬の事例	共	2005.10.00	日本地形学連合 2005 年秋季大会、名古屋（名古屋大学）	青木 久・前門 晃
10	離水サンゴ礁上に形成される溶食凹地の発達速度について	共	2006.03.00	日本地形学連合 2006 年春季大会、東京（日本大学）	青木 久・前門 晃
11	2005 年 6 月集中豪雨による沖縄島北部の千枚岩の切り取り斜面に発生した表層崩壊の特徴	共	2006.03.00	日本地形学連合 2006 年春季大会、東京（日本大学）	若月 強・青木 久・小暮哲也・前門 晃・松倉公憲
12	室内実験における石灰岩の溶解特性に関する一考察	共	2006.03.00	日本地形学連合 2006 年春季大会、東京（日本大学）	高屋康彦・廣瀬 孝・青木 久・松倉公憲
13	石灰岩からなる波食棚の形成要因について：沖縄島辺戸岬の事例	共	2006.03.00	琉球大学 21 世紀 COE プログラム平成 17 年度成果発表会、沖縄（琉球大学）	青木 久・前門 晃
14	離水サンゴ礁に形成される溶食プールの発達速度について	共	2006.07.00	平成 18 年度日本地理教育学会大会、沖縄（沖縄国際大学）	青木 久・前門 晃
15	西表島西北部・野崎川流域の人工改変地と半改変地における土層特性	共	2006.07.00	平成 18 年度日本地理教育学会大会、沖縄（沖縄国際大学）	前門 晃・青木 久・若月 強
16	共役節理とノッチの拡大がもたらす toppling についての安定解析	共	2007.03.00	日本地形学連合 2007 年春季大会、京都（京都大学）	小暮哲成・青木 久・前門 晃・松倉公憲
17	離水サンゴ礁上に形成される溶食プールの発達速度	共	2007.03.00	琉球大学 21 世紀 COE プログラム平成 18 年度成果発表会、沖縄（琉球大学）	青木 久・前門 晃
18	石垣島における台座岩の形成条件と形成速度	共	2007.03.00	2006 年度筑波大学陸域環境研究センター年次研究報告会、茨城（筑波大学）	春田知実・青木 久・松倉公憲
19	沖縄島の養浜海浜と自然海浜の堆積物特性	共	2007.09.00	2007 年度沖縄地理学会、沖縄（沖縄国際大学）	智原健太・青木 久・前門 晃
20	沖縄島北部、千枚岩の切り取り斜面に発生した表層崩壊に関する安定解析	共	2008.03.00	琉球大学 21 世紀 COE プログラム平成 19 年度成果発表会、沖縄（琉球大学）	前門 晃・若月 強・青木 久・小暮哲也・松倉公憲
21	連打法によるエコーチップの反発値と微小窪みとの関係に関する一考察	共	2008.10.00	日本地形学連合 2008 年秋季大会、東京（駒沢大学）	中家 渉・青木 久・松倉公憲
22	エコーチップ硬さ試験機による岩石硬度測定に関する研究	共	2009.03.00	2008 年度筑波大学陸域環境研究センター年次研究報告会、茨城（筑波大学）	中家 渉・青木 久・早川裕弐・松倉公憲。

III 学会等および社会における主な活動

1	1994.07.01	～	現在	日本地理学会会員（2008.4.1～現在 総務専門委員会委員）
2	1995.04.01	～	現在	日本地形学連合会員
3	2005.07.01	～	現在	沖縄地理学会会員
4	2007.04.01	～	現在	大東文化大学経営研究所会員（研究員）

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	講師	氏名	高沢 修一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2007.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 19 年 12 月実施) において、「財務諸表 B」平均値 4.2 (5 段階評価)、「税法 B」平均値 4.3 (5 段階評価)			
2) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、「専門演習 I」平均値 5.0 (5 段階評価)、「税法 B」平均値 4.2 (5 段階評価)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「受益者連続型信託における問題点の検討—財産税務会計からのアプローチ—」		2008.09.00		第 67 回日本会計研究学会全国大会 (立教大学) ※研究業績の再掲			
2) 「ファイナンシャルアドバイザー (FA) 研修」		2008.11.00		JA 共済連群馬県本部研修会講演			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書							
1 『流通の経営と税務』		単著	2004.05.16	白桃書房		本書は、流通の経営と税務の知識を幅広く習得できる構成内容としている。特に、税務の分野においては、流通業の営業において必要となる実務知識について解説した。すなわち、税金体系、所得税、法人税、消費税、相続税および贈与税、相続時精算課税制度、登録免許税、印紙税、不動産取得税、特別土地保有税、固定資産税、都市計画税、金融関連税務知識等について解説した。A5 版、総頁 211 頁。	
2 『会計学総論 (第 2 版)』		単著	2006.05.01	森山書店		本書は、『会計学総論』(森山書店、2003 年)を改定したものである。2006 年 5 月 1 日の新会社法施行にあたり、第 1 章序論および第 2 章会計原則と財務諸表の部分を書き直し、第 7 章会計ビックバンおよび第 8 章工業会計の部分を追加した。他の章建てである第 3 章、第 4 章、第 5 章、第 6 章および第 9 章については、前書と同一内容である。A5 版、総頁 222 頁。	

<p>3 『事業承継の会計と税務－わが国の事業承継に関する研究－』</p>	<p>単著</p>	<p>2008.02.20</p>	<p>森山書店</p>	<p>本書では、今日の経営学領域の重要な研究テーマのひとつといえる事業承継の基本的問題について、主として資産評価と課税システムの側面から考察を加えるとともに、事業承継問題の統合的アプローチを提案した。そのため、本書においては、税務会計をシステムとして捉え、そして税務会計システムのサブシステムとして財産税務会計を位置づけ、その財産税務会計のなかに、本書が論究対象とする事業承継問題を位置づけた。また、本書では、事業承継論の体系化（総合化）を目的として、農業相続人、宗教法人、医療法人、人的承継、公開会社等の事業承継についても論究した。よって、本書は、以下のとおり、補章を加えた全七章から構成されている。第1章 序論、第2章 事業承継税制の概要、第3章 事業承継手法の検討、第4章 事業承継税制の拡張、第5章 人的承継の重要性、第6章 要約と結語、補章 公開会社の事業承継 なお、本書は、大東文化大学大学院経営学研究科博士（経営学）学位論文をまとめたものである。A5版、総頁159頁。</p>
<p>論文</p> <p>1 『宗教法人の資産評価と課税システム』</p> <p>2 『事業承継における不動産評価に関する会計的考察』</p> <p>3 『非上場会社の資産評価に関する一考察－財産税務会計からのアプローチ－』</p> <p>4 『事業承継税制の展開と問題点の検討』</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>2005.01.00</p> <p>2005.02.00</p> <p>2005.12.01</p> <p>2006.01.00</p>	<p>大東文化大学大学院経研論集第21号</p> <p>杏林大学研究報告教養部門第22巻</p> <p>森山書店 会計第168巻第6号</p> <p>大東文化大学大学院経研論集第22号</p>	<p>事業承継税制において、宗教法人は、特例適用対象として取り上げられていない。宗教法人は、文化的価値の高い資産を多数保有しており事業承継において特異な問題を有している。そして、宗教法人は、法人税および相続税の課税面において優遇措置が講じられている。しかし、わが国の財政状態を鑑みた場合、これらの宗教法人に対する優遇措置について再検討すべきである。よって、本論文では、宗教法人の事業承継時の資産評価の見直しと相続税および法人税の課税上の強化について検討した。B5版、総頁13頁。</p> <p>現行、相続税の納税者は、相続人全体の僅か5%程度にすぎない。これは、小規模宅地等特例制度（以下、「特例制度」とする）の存在に起因する。なぜならば、事業承継時の承継財産において多数を占めるのは、特例制度の対象となる土地を主体とする不動産だからである。しかし、この特例制度は、資産評価上の種々の問題点を有し、物納時には不公平感を納税者に与える。よって、本論文では、この問題点を解明し、それに対する是正案について検討した。B5版、総頁9頁。</p> <p>今日、非公開会社の経営において事業承継が問題点の一つとして挙げられる。事業承継は、事業承継時の「課税財産」上の課税価格をめぐる相続財産および遺贈財産の評価をその拠りどころとするため、税務会計分野の一角を形成する「財産税務会計」の範疇に入る。よって、本論文においては、「財産税務会計」の視点から相続財産の承継行為において中心的な役割を担う存在である「非公開株式」および「小規模宅地等特例制度」における資産評価上の問題点について論究した。本論文は、日本会計研究学会第64回全国大会（2005年9月15日）における報告内容をまとめたものである。なお、『會計』は、学会機関紙に準じる役割を担う書籍である。A5版、総頁11頁。</p> <p>事業承継税制誕生以前における中小規模同族会社の事業承継時の資産評価は厳しいものであった。しかし、事業承継税制に対しては、研究者および専門家による批判的な見解も提示されている。例えば、事業承継税制は先代から親族への事業承継を前提とするが、「事業承継」と「事業者承継」とは異なるし、先代の事業遺産を何の対価を支払わずに相続する人が多くなるほど新規起業を妨げ社会に対して不平等感を助長すると批判された。しかし、事業承継が、起業の阻害要因になっているとは必ずしも断定できず、老舗を保護することは地域社会の豊かな社会環境を確保するうえで重要なことである。よって、本論文では、事業承継税制の発展経緯を考察し、誕生から20数年を経て現出した問題点について検討した。B5版、総頁19頁。</p>

5	『事業承継における金庫株評価に関する会計的考察』	単著	2006.02.00	杏林大学研究報告教養部門第23巻	平成14年度税制改正大綱および平成14年7月8日付相続税法基本通達42-2の改正を受け、自己株式が非公開の中小会社の事業承継において納税対策の一環として注目を浴びた。この改正は、企業が自己株式を買い入れて保有し、将来的な物納用資産として活用することを可能とした。このため、非公開の中小会社では、事業承継時の物納資産として自己株式の存在価値が高まっている。よって、本論文では、金庫株と称される自社保有の自己株式が事業承継に与える税務会計上の影響力について検討した。B5版、総頁9頁。
6	『非上場会社株式の同族外への移動と評価のポイント』	単著	2006.06.21	日本税理士会連合会監修・ぎょうせい月刊税理2006年7月号	平成18年度税制改正は、実質一人会社の役員給与の損金算入を制限する。このため、特殊支配同族会社からの除外適用要件を満たすためには同族外に10%超の株式移動が求められることになり、同族外株主の増加が予測される。よって、本論文では、従来の同族内での株式移動を前提とした評価方法である財産評価基本通達による評価方法から脱却し、新たにDCF法による株式評価の方法の採用について検討した。B5版、総頁8頁。
7	『農業相続人の事業承継に関する一考察』	単著	2007.02.00	杏林大学研究報告教養部門第24巻	世襲制を前提とするケースが多い農業の領域において、農家の事業承継を敬遠する者が増加している。このため、農業相続人の確保は、日本経済における重要な課題となっている。しかし、農業相続人には、一般の相続人とは異なるため、その特異性を考慮して税務上の特典が与えられている。よって、本論文においては、納税猶予制度を中心に農業相続人の事業承継について論究した。B5版、総頁9頁。
8	『わが国の事業承継に関する研究～資産評価と課税システムを中心として～』	単著	2007.03.00	大東文化大学大学院経営学研究科博士(経営学)学位論文	事業承継は、相続人の地位を占める事業承継者が被相続人である企業経営者から経営権を承継することであり、物的承継と人的承継という二つの側面を有する。よって、本論文においては、事業承継に関して生起している多面的な問題に対して、主として資産評価と課税システムを中心に税務会計の視点から考察を行い、併せてもう一つの側面である人的承継について、これが今後の重要課題であることから第二創業を中心に考察を加えた。なお、本論文は、第1章序論、第2章事業承継税制の概要、第3章事業承継手法における資産評価、第4章事業承継税制の拡張、第5章人的承継の重要性、第6章要約と結語という構成にしている。A4版、総頁220頁。
9	『中小企業の事業承継と後継者育成のポイント』	単著	2007.04.21	日本税理士会連合会監修・ぎょうせい月刊税理2007年5月号	事業承継には、人的承継と物的承継との二つの側面があるが、人的承継を「第二創業」の絶好のタイミングとして捉えるべきである。第二創業とは、従来の経営戦略の在り方を見直すことにより、自社の経営資源を有効活用させながら新事業を展開し、新分野を開拓することにより事業を再構築することである。この第二創業においては、後継者の存在が重要になる。よって、本論文においては、後継者の育成ポイントを中心に中小企業の事業承継について検討した。B5版、総頁7頁。
10	『株式非公開化に伴う種類株式の評価と課税ー全部取得条項付種類株式を中心としてー』	単著	2007.10.01	森山書店 会計第172巻第4号	一般的に、事業承継は、世襲制を採るケースが多い非公開会社をその対象とする。しかし、事業承継は、独り非公開会社だけの経営問題ではなく公開会社においても生じる経営問題である。なぜならば、M&A (merger & acquisition) の流行によりMBO (management buyout) による株式の非公開化を検討する公開会社数は増加の傾向を示しているからである。このMBOにおいては、会社法の改正に伴い、会社法第108条の全部取得条項付種類株式の活用も予測される。よって、本論文では、全部取得条項付種類株式について税務会計の視点から論究した。なお、『会計』は、学会機関紙に準じる役割を担う書籍である。A5版、総頁12頁。

11 『課税システムの再検討 - 限定財産税導入への会計的アプローチ』	単著	2007.11.30	法律文化社 租税理論研究叢書 17	周知のごとくシャープ (C.S.Shoup) 博士が主導したシャープ勧告は、わが国の税法制度の骨子となり所得税法および法人税法に与えた影響力は大きく、わが国の税法制度の整備に大きな足跡を残した。しかし、シャープ勧告がなされた当時と現在とでは、税法制度の背景となる社会経済環境が大きく変化しており、それに合わせて課税システムも再検討の時期を迎えている。そのため、本論文では、大企業および一定以上の資産家に対する課税を目的とする税として、所得税および法人税の補完的存在として「限定財産税」の必要性を提案したい。これは、現行の「国税三法」に変わり、所得税、法人税および「限定財産税」により形成される「新国税三法」の創設を前提とする税法制度の改革案である。よって、本論文では、この限定財産税導入の必要性とその理論的根拠について、税務会計の視点から課税システムの在り方について検討した。本論文は、第 18 回日本租税理論学会全国大会 (2006 年 12 月 3 日) における報告内容をまとめたものである。なお、租税理論研究叢書は、学会機関紙としての役割を担う書籍である。A5 版、総頁 11 頁。
12 『消費税法における諸問題の検討 - 消費税率改定議論に関連して-』	単著	2008.03.00	大東文化大学経営学会『経営論集』第 15 号	現在、平成 16 (2004) 年の事業者免除制度の改正に伴い、事業者の大多数が消費税の納税義務者となっている。しかし、少子高齢化の急速な進展に伴い大幅な収税の減収が予測され、財政再建を目的として財源不足を補うためにも一層の消費税増税の動きが避けられない状態となっている。仮に、消費税率が将来的に 10% に増加された場合には、消費税は、「国税四法」と呼称されるような重要な税法に成長する可能性がある。しかし、仮に、政府が消費税の増税を意図するのであれば、国民的理解を得るためにその前段階として消費税を巡る諸問題についてまず論じるべきである。そのため、本論文では、近い将来の消費税増税を前提として、①税負担の逆進性と複数税率化、②輸出免税と消費税の還付、③簡易課税制度等と益税問題、④仕入税額控除と帳簿等保存等の消費税を巡る諸問題について考察した。B5 版、総頁 12 頁。
13 『受益者連続型信託における問題点の検討 - 財産税務会計からのアプローチ』	単著	2008.12.01	森山書店 会計第 174 巻第 6 号	平成 18 (2006) 年 12 月 15 日、信託法の改正案が可決成立し、同年 12 月 15 日に公布された。この改正案は、事業承継において信託制度を活用できる可能性を拡大させた。例えば、旧法においては存在していなかった後継ぎ遺贈型の受益者連続型信託 (以下、「受益者連続型信託」とする) が、改正信託法 91 条により容認された。受益者連続型信託とは、委託者が受益者の承継の順位を自らの意思により定めることができる制度のことである。しかし、受益者連続型信託は、税務会計上の問題点も有している。例えば、受益者連続型信託を用いた場合と負担付遺贈の場合とでは、同様の経済的効果を期待することができるのにもかかわらず、前者における相続税の納税負担が二回であるのに対して、後者における相続税の納税負担が一回であるというように課税上の権衡が保たれていない。この他、受益者連続型信託は、遺留分における問題点も指摘できる。よって、本論文においては、事業承継を前提とした受益者連続型信託における問題点について財産税務会計の視点から論究した。本論文は、日本会計研究学会第 67 回全国大会 (2008 年 9 月 9 日) における報告内容をまとめたものである。なお、『会計』は、学会機関紙に準じる役割を担う書籍である。A5 版、総頁 14 頁。

<p>14 『法定相続分課税方式における諸問題の検討ーシャウブ勧告60年目の再評価ー』</p>	<p>単著</p>	<p>2009.03.00</p>	<p>大東文化大学経営学会『経営論集』第17号</p>	<p>現在、シャウブ使節団日本税制報告書および第二次報告書（以下、「シャウブ勧告」とする）が再評価され、シャウブ勧告への回帰現象が窺える。例えば、相続時精算課税制度の創設は、シャウブ勧告が提唱した“相続税と贈与税との一体化”を具現化した税法制度であり、そして相続税法の中でも重要な位置を占める事業承継を考慮した場合に、「法定相続分課税方式による遺産取得課税方式」（以下、「法定相続分課税方式」とする）からシャウブ勧告が提唱した「遺産取得課税方式」への変更も検討されている。従来、シャウブ勧告は、所得税および法人税法の視点から論究されることが多く、相続税法の視点からの研究論文は少ない。しかし、シャウブ勧告が総税法に与えた影響力は必ずしも僅少ではない。よって、本論文においては、シャウブ勧告60年目の節目にあたり、シャウブ勧告がわが国の相続税法に与えた影響とその存在意義について論究し、併せて、現行の相続税課税方式である「法定相続分課税方式」の有する問題点について論究した。B5版、総頁14頁。</p>
<p>その他</p> <p>1 『事業承継の資産評価と課税システム』</p> <p>2 『非上場会社の資産評価に関する一考察ー財産税務会計からのアプローチー』</p> <p>3 『課税システムの再検討ー限定財産税導入への会計的アプローチー』</p>	<p>単</p> <p>単</p> <p>単</p>	<p>2005.06.26</p> <p>2005.09.15</p> <p>2006.12.03</p>	<p>横浜商科大学・第2回日本ビジネス・マネジメント学会全国大会</p> <p>関西大学・第64回日本会計研究学会全国大会</p> <p>静岡大学・第18回日本租税理論学会全国大会</p>	<p>事業承継税制の中核的問題点の一つとして非上場会社株式が挙げられる。本報告では、この非公開会社株式における問題点について報告した。例えば、類似業種比準価額方式は、利益金額を重視した評価方法であるため会社の恣意的な利益操作によっては評価額および納税額が変動する可能性があり客観性や公平性の面で問題点を指摘できる。また、純資産価額方式は、企業清算を仮定要件とし非上場会社株式を評価するが、現行の税務会計は、継続企業における確定決算主義を前提としているため、清算所得を前提とするこの評価方法の採用には問題がある。さらに、配当還元方式は、同族グループ内の場合には持ち株割合5%未満の株主に限定されている点で合理性に問題がある。よって、本報告では、非上場会社株式の資産評価に関する問題点について報告すると共にDCF法による株式評価について提言した。</p> <p>事業承継には、「人的承継」と「物的承継」の二つの側面があり、非公開会社の重要な経営課題の一つである。本報告では、特に経済産業省中小企業庁の調査会社を対象とし「物的承継」面について検討した。「物的承継」面の経営課題としては、非上場会社株式および小規模宅地等特例制度における資産評価および課税上の問題点がある。これは、富岡幸雄を座長とする中小企業承継税制問題研究会において審議の中核を成した研究テーマである。事業承継は、事業承継時の課税財産上の課税価格をめぐる相続財産および遺贈財産の評価をその拠りどころとするため「財産税務会計」からのアプローチが適している。本報告では、「財産税務会計」の視点から非上場会社株式および小規模宅地等特例制度における資産評価上の問題点について報告した。</p> <p>周知のごとくシャウブ（C.S.Shoup）博士が主導したシャウブ勧告は、わが国の税法制度の骨子となり所得税法および法人税法に与えた影響力は大きく、わが国の税法制度の整備に大きな足跡を残した。しかし、シャウブ勧告がなされた当時と現在とは、税法制度の背景となる社会経済環境が大きく変化しており、それに合わせて課税システムも再検討の時期を迎えている。そのため、本論文では、大企業および一定以上の資産家に対する課税を目的とする税として、所得税および法人税の補完的存在として「限定財産税」の必要性を提案したい。これは、現行の「国税三法」に変わり、所得税、法人税および「限定財産税」により形成される「新国税三法」の創設を前提とする税法制度の改革案である。よって、本報告では、この限定財産税導入の必要性とその理論的根拠について、税務会計の視点から課税システムの在り方について検討した。</p>

4 『受益者連続型信託における問題点の検討 - 財産税務会計からのアプローチ』	単	2008.09.09	立教大学・第 67 回日本会計研究学会全国大会	平成 18 (2006) 年 12 月 15 日、信託法の改正案が可決成立し、同年 12 月 15 日に公布された。この改正案は、事業承継において信託制度を活用できる可能性を拡大させた。例えば、旧法においては存在していなかった後継ぎ遺贈型の受益者連続型信託 (以下、「受益者連続型信託」とする) が、改正信託法 91 条により容認された。受益者連続型信託とは、委託者が受益者の承継の順位を自らの意思により定めることができる制度のことである。しかし、受益者連続型信託は、税務会計上の問題点も有している。例えば、受益者連続型信託を用いた場合と負担付遺贈の場合とでは、同様の経済的効果を期待することができるのにもかかわらず、前者における相続税の納税負担が二回であるのに対して、後者における相続税の納税負担が一回であるというように課税上の権衡が保たれていない。この他、受益者連続型信託は、遺留分における問題点も指摘できる。よって、本報告では、事業承継を前提とした受益者連続型信託における問題点について財産税務会計の視点から検討した。
---	---	------------	-------------------------	--

III 学会等および社会における主な活動

1	2003.05.00	～	現在	日本ビジネス・マネジメント学会会員
2	2004.09.00	～	現在	日本会計研究学会会員
3	2004.12.00	～	現在	現代税法研究会会員
4	2005.11.00	～	現在	日本租税理論学会会員 (2008.12.00～現在 理事)
5	2007.04.00	～	現在	税務会計研究学会会員
6	2007.10.00	～	現在	戦略研究学会会員
7	2008.05.00	～	現在	関東会計研究会会員
8	2008.09.00	～	現在	日本経営学会会員
9	2009.04.00	～	現在	財団法人地方自治研究機構委員 (地域ブランドの発掘・活用による地域活性化に関する調査研究)

(表 24)

所属	経営学部経営学科	職名	講師	氏名	James McCrostie	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 大東文化大学授業評価		2008.00.00		大東文化大学授業評価 (平成 20 年度実施) において、高い評価を得た。平均値 4.7 (5 段階評価)。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) How to Help Your Students Learn Vocabulary		2004.07.27		Teacher training seminar conducted at the Kanda Gaigo English Education Seminar、東京		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 Perceptions of Word Frequency and the Impact on Students' Vocabulary Notebooks	単著	2004.12.00	Kanda University Working Papers in Language Education, Vol.1,	pp.163-178		
2 The Influence of Corpora Research on Teaching Practice: A Preliminary Analysis of the Kanda Writing Corpus	共著	2004.12.00	Kanda University Working Papers in Language Education, Vol.1,	Justin Falkus 氏との共著 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) pp.179-194		
3 A Further Investigation of Word Frequency Intuitions	単著	2005.05.00	The East Asian Learner, Vol.2, No.1,	pp.26-36		
4 Is There a Doctor in the House?: Getting Your Doctorate and a Better Job in Japan	共著	2005.09.00	The Language Teacher, Vol.29, No.9,	Rick Romanko 氏との共著 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) pp.13-17		
5 Student Perceptions on the Benefit of Different Error Correction Methods	共著	2005.10.00	Asia Pacific Journal of Language in Education, Vol.7, No.1,	Darren Bolonga 氏、Steve Jennings 氏との共著 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) pp.47-62		

6	Perishing to publish: An analysis of the academic Publishing process	単著	2007.00.00	Oncue Journal Vol.1, No.1. (Fall, 2007)	pp.74-79
7	Investigating the Accuracy of Teachers' Word Frequency Intuitions	単著	2007.04.00	RELC Journal, Vol.38,	pp.53-66
8	The Haunted World of Language Textbook Publishing	単著	2007.05.00	ESL Magazine, Vol.57,	pp.15-18
9	Examining Learner Vocabulary Notebooks	単著	2007.07.00	ELT Journal, Vol.61, No.3,	pp.246-255
10	Writer Visibility in EFL Learner Academic Writing: A Corpus Based Study pp97-114.	単著	2008.04.00	ICAME JOURNAL Vol.32	
その他					
1	The Influence of Corpora Research on Teaching Practice	共	2004.10.09	京都 J A L T 会議、京都	Justin Falkus 氏および James McCrostie の共同報告
2	Book Review of Teaching Pronunciation by Gloria Poedjosoedarmo	単	2004.11.00	The JALT Journal, Vol.26, No.2,	pp.271-272
3	The What, Where, and Why of Vocabulary Notebooks	単	2004.11.22	第 30 回全国語学教育学会 (J A L T)、奈良	
4	Investigating Student Essays With a Learner Corpus	単	2005.10.09	第 31 回全国語学教育学会 (J A L T)、静岡	
5	Analyzing Native and Non-native English Speaking Hotel Workers' Emails	単	2007.01.27	第 27 回タイ TESOL 国際会議、バンコク	
6	Using Vocabulary Notebooks Effectively	単	2007.02.24	第 3 回カンボジア TESOL 国際会議、プノンペン	
7	The Haunted World of ESL Textbook Publishing	単著	2007.11.24	第 33 回全国語学教育学会、東京	
8	Textbooks: A Necessary Evil	共著	2009.02.21	第 14 回 Nepal English Language Teachers Association 国際会議	John Rucynski 氏および James McCrostie の共同報告
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	2001.07.00	～	現在	全国語学教育学会 (J A L T) 会員	
2	2005.04.00	～	現在	大学英語教育学会 (J A C E T) 会員	
3	2006.04.00	～	2008.12.00	The Language Teacher (J A L T 発行雑誌) 校正係	
4	2007.11.00	～	現在	The Language Teacher Job Information Center 編集者	

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	天笠 美知夫	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 経営システムの考え方		2009.05.00		本書は、第1部 システム・認識プロセスと問題解決法 (8章)、第2部 システムと科学的アプローチ (9章) から構成され、企業機密の漏洩や経済格差、非正規雇用労働者の増加の問題などのさまざまな社会問題をシステムズアプローチによって認識し、その解決に導くための方法を解説している。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書 1 革新的問題解決法の研究・開発とその実際問題への応用	共著	2006.03.24	大東文化大学 J R 東日本寄附講座プロジェクト研究会 91 ページ	本研究報告書は5章から構成される。第1章 問題の定義と問題解決のアプローチ 第2章 革新的問題解決法のフレームワークと方法論 第3章 構造モデルと評価 第4章 T R I Z とその知識ベース応用ソフトウェア 第5章 革新的問題解決法とその実際問題への適用 (第1章 天笠 第2章 天笠 第3章 井上、天笠 第4章 Vlacic Chandy 天笠 第5章 永田、梅沢)		
2 『経営システムの考え方』	共著	2009.04.00	創成社 290 ページ	本書は、第1部システム・認識プロセスと問題解決法 (8章)、第2部システムと科学的アプローチ (9章) から構成され、内容は次のとおりである。第1章 経営環境の変化と経営システム 第2章 システム、環境、特性とシステム分類 第3章 システム認識プロセス 第4章 グラフ理論によるシステムモデリングの概念 第5章 グラフ理論によるシステムモデリング 第6章 問題の定義と基本モデル 第7章 問題解決法のフレームワークー人事評価問題への応用 第8章 システムズ・エンジニアリングの概念 第9章 デルファ法とニューデルファ法 第10章 時系列データの傾向変動 第11章 機能分析と価値評価 第12章 データの標準化と相関係数 第13章 統計的方法によるシステムの構造化 第14章 ゲームの理論 第15章 プロジェクトの管理と評価 第16章 損益分岐点分析 第17章 在庫管理のための分析法 (共著者、天笠美知夫、崔冬梅)		
論文						

1	Prediction Model using Density Function with Interval Data	単著	2004.12.14	Proceedings of The fifth Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference,Australia,pp 1 /16	変数に不確実性を表す区間データをもつファジィノンパラメトリック密度関数を定義し、これを用いて予測を行うアルゴリズムを提案した。さらに、本アルゴリズムを具体的な問題に適用することによりその有効性を検証した。
2	企業評価の現状と動向	共著	2006.03.00	大東文化大学経営研究所リサーチペーパーNo. J -48	多面的な企業評価指標に関する研究書であり、pp.57/64「総合的な企業評価指標」を担当(共著者 青木茂男、青木幹喜、松尾、永田、天笠)
3	Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-An Application of Revised Structural Modeling Method-	共著	2006.12.18	Proceedings of Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems 2006 pp.1184/1192	Ill-defined Problem に対するアプローチとして、構造モデルを構築するための方法として、Revised Structural Modeling Method を提案し、それを「つくばエクスプレス開業後の東日本旅客鉄道における乗客の行動分析」に適用し、その有効性について検証するとともに、常磐線沿線住民の行動意識について考察した。(J R 東日本(株)からファンドを得て実施されたものである。)(共著者 K.Nagata, M.Umezawa, D.Cui, M.Amagasa)
4	Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Strategic Cost Management Method-A Comparative Study on Models of Japan and US	共著	2006.12.19	Proceedings of Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems 2006 pp.1/10	企業における業績評価の方法として、ファジィ推論機構を導入した戦略的コストマネジメント法としてのバランスト・スコアカード法を提案した。さらに、それに基づく日米における業績評価方法を提案し、それらを具体的な問題に適用することにより提案した方法の有効性について検証した。(共著者 T.Matsuo,M.Amagasa and K.Suzuki)
5	Relation between Utilization of Static/Dynamic WBT Materials and Individual Character	共著	2007.06.00	Proceedings of ED-MEDIA 2007 Association for the Advancement of Computing in Education(AACE), June 25-29, 2007, BC Canada pp.4292-4299	本論文では、メイン教材として紙ベースの教科書を使い、授業でパソコンを使用しない科目に文字と図で構成される静的コンテンツのWBT教材と、文字・音・声・図・アニメーションで構成される動的コンテンツのWBT教材を補助教材として授業に適用し、これらのWBT教材のどちらをより多く利用するかを考察するとともに、テクノ依存症などの個人特性との関連性について明らかにした。(共著者、H.Hirose, Y.Yamamoto, H.Ichikawa, M.Amagasa)
6	A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard	共著	2007.11.00	Proceeding of Decision Sciences Institute 2007 Arizona, USA pp.5061/5083	本論文では、バランストスコアカード(BSC)に基づいた企業の業績評価のための多次元評価システムを提案し、企業の実際のデータによるシミュレーションを行い、有効性を検証した。すなわち、企業評価を4つの視点、財務の視点、顧客満足度の視点、内部プロセスの視点、学習と成長の視点からみた評価値を、Choquet 積分に基づく多属性評価法やファジィ推論機構により統合する方法を提案した。本方法により、意思決定者の経験や知識を企業評価に直接的に反映することができ、より現実に即した企業評価が可能であることを示した。(共著者、D.Cui, K.Suzuki, M.Amagasa, T.Matsuo)
7	Integrating Revised Structural Modeling Method with an Information Security Evaluation System	共著	2007.12.00	Proceedings of Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems 2007, Kaohsiung Taiwan (10 ページ、T1-R02, ID68)	本論文では、Ill-defined Problem に対するアプローチとして、システム構造モデルを構築するための Revised Structural Modeling 法を提案した。さらに本方法を、情報セキュリティの評価システムに組み込むことにより、より合理的なセキュリティ評価を行うことができる方法を提案し、それを実際問題に適用することにより、提案した方法の有効性について検証した。(共著者、K.Nagata, Y.Kigawa, D.Cui, M.Amagasa)
8	Effects of Dual Display and Task Decomposition Plan when Supporting Tool Used for the Elderly People	共著	2008.07.00	Proceedings of ED-MEDIA 2008 Association for the Advancement of Computing in Education (AACE), June 30-July4th, 2008, Austria pp.1/6	すでに発表した論文では、学習支援の手段としてディスプレイ装置が効果的であることを示し、さらに Task の分割プランがオフィスオートメーション装置を操作することに苦手であった人に対して効果的であることを考察している。しかしながらそこでは、年長者に対しての学習支援効果は確認されていない。本論文では、双対のディスプレイと Task 分割プランを用いた Web-based の学習支援手段が個人ごとに準備された場合、この学習支援技術が年長者にとって有益であり、非常に効果的であることを検証している。(共著者、H.Hirose, Y.Yamamoto, H.Ichikawa, D.Dongmei, M.Amagasa)

9	Risk Evaluation for Critical Assets with Fuzzy Inference Mechanism in an Information Evaluation System	共著	2008.12.00	Proceedings of Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems 2008, Indonesia pp.2630/2640	本論文では、非構造的な問題、いわゆる ill-defined problem に対するシステム論的なアプローチとして先に提案した Revised Structural Modeling 法を、Information Security Evaluation System に導入することにより、新しい情報セキュリティの評価方法を提案し、それを具体的な問題に適用し考察した。(共著者、K.Nagata, Y.Kigawa, D.Cui, M.Amagasa)
10	“Modified Structural Modeling Method and Its Application-Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company”	共著	2008.12.00	An International Journal of Industrial Engineering & Management Systems, Vol.7, No.3, 2008 pp.245/246	本論文では、システム構造モデリング法に新しい意思決定方法論を導入することにより、システム構造モデリングに基づく合理的な意思決定法を提案した。さらに、その方法論をつくばエクスプレス開業に伴う J R 東日本鉄道の乗客の行動分析に応用し、従来の統計的な方法による結果との比較・検証し考察した。(共著者、K.Nagata, M.Umezawa, M.Amagasa, D.Cui)
11	“Systems Approach in Social Science-An Application to Multi-dimensional Performance Measurement System”	共著	2009.03.00	Institute of Business Research, No.E-49, pp.1/25	本論文では、社会科学におけるシステム論的なアプローチによるモノの認識プロセスを提案し、それを、具体的な多次元評価システムに適用し考察した。(共著者、M.Amagasa, D.Cui)
12	ファジィ・アウトランピングによる学習効果の予測とインストラクションモデルの提案	共著	2009.03.00	情報社会学会誌 Vol.3 No.2, pp.15/27,2009	本論文では、授業期間中ミニテスト、レポート提出状況、出席状況、電子化された教材の学習状況を評価基準とし、ファジィ順位づけ法を用いて、単位修得が不可能になりそうな学生を予測し、ピックアップする方法を提案した。これによって、その後の課題や補習授業などの個別対応を可能にした。
その他					
1	Prediction Model using Density Function with Interval Data	単著	2004.12.14	The 5 th Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference, Gold Coast 2004	変数に不確実性を表す区間データをもつノンパラメトリック密度関数を用いて予測を行うアルゴリズムを提案した。さらに、本アルゴリズムを具体的な問題に適用することによりその有効性を検証した。
2	Group Decision Making based on Structural Modeling Method-Practical Application to Performance Appraisal System	共著	2005.09.12	日本経営工学会秋季大会	システム構造下法に基づく人事評価システムの構築アルゴリズムを提案し、それを実際問題に適用することによりその有効性を検証した。(共著者 翁曉青、天笠美知夫)
3	Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-An Application of Revised Structural Modeling Method-	共著	2006.12.18	The 7 th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference	Revised Structural Modeling Method を提案し、それを「つくばエクスプレス開業後の東日本旅客鉄道における乗客の行動分析」に適用し、その有効性について検証するとともに、常磐線沿線住民の行動意識について考察した (J R 東日本(株)からファンドを得て実施されたものである。) (共著者 永田清、梅澤正史、崔冬梅、天笠美知夫)
4	Balanced Scorecard with Fuzzy Inference as a Strategic Cost Management Method-A Comparative Study on Models of Japan and US	共著	2006.12.19	The 7 th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference	企業における業績評価の方法として、ファジィ推論機構を導入した戦略的コストマネジメント法としてのバランスと・スコアカード法を提案し、それを日米モデルの構築に適用し本方法の有効性について検証した。(共著者 松尾敏充、天笠美知夫、鈴木一道)
5	Relation between Utilization of Static/Dynamic WBT Materials and Individual Character	共著	2007.06.00	ED-MEDIA 2007 AACE June 25-29, 2007, BC Canada	本論文では、静的コンテンツと動的コンテンツの2つのWBT教材を授業に適用し、これらのWBT教材のどちらをより多く利用するかを考察し、個人特性との関連性について明らかにした。(共著者、H.Hirose, Y.Yamamoto, H.Ichikawa, M.Amagasa)
6	A Multidimensional Measurement System with Balanced Scorecard	共著	2007.11.00	DSI 2007 Arizona, USA pp.5061/5083	本論文では、バランススコアカード (B S C) に基づいた企業の業績評価のための多次元評価システムを提案し、企業の実際のデータによるシミュレーションを行い、有効性を検証した。(共著者、D.Cui, M.Amagasa, K.Suzuki, T.Matsuo)

7	Integrating Revised Structural Modeling Method with an Information Security Evaluation System		2007.12.00	APIEMS 2007, Kaohsiung Taiwan	本論文では、Ill-defined Problem に対するアプローチとして、システム構造モデルを構築するための Revised Structural Modeling 法を提案し、さらに本方法に基づくより合理的なセキュリティ評価を行うことができる方法を提案し、検証した。(共著者、K.Nagata, Y.Kigawa, D.Cui, M.Amagasa)
8	Effects of Dual Display and Task Decomposition Plan when Supporting Tool Used for the Elderly People	共著	2008.07.00	ED-MEDIA 2008 AACE, June 30-July 4th, 2008, Austria	本論文では、双対のディスプレイと Task 分割プランを用いた Web-based の学習支援手段が個人ごとに準備された場合、この学習支援技術が年長者にとって有益であり、非常に効果的であることが検証された。(共著者、H.Hirose, Y.Yamamoto, H.Ichikawa, D.Dongmei, M.Amagasa)
9	Integrating Modified Structural Modeling Method into an Information Security Evaluation System	共著	2008.12.00	International Conference on Asia-Pacific Industrial Engineering and Management Systems 2008, Indonesia	本論文では、ill-defined problem に対するシステム論的なアプローチとして、Revised Structural Modeling 法に基づく情報セキュリティの評価方法を提案し、考察した。(共著者、K.Nagata, Y.Kigawa, D.Cui, M.Amagasa)

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1968.04.00	～	現在	日本経営工学会論文誌編集委員、レフェリー委員
2	1972.04.00	～	2005.03.31	日本オペレーションズリサーチ学会
3	1980.04.00	～	現在	日本経営学会
4	1985.04.00	～	現在	日本バリューエンジニアリング協会マイルズ賞審査委員
5	1989.04.00	～	現在	日本知能情報ファジィ学会
6	1994.04.00	～	現在	経営情報学会
7	2007.04.01	～	2008.03.31	(財) 大学基準協会大学評価委員会 全学評価分科会委員
8	2007.10.01	～	2008.03.31	ときがわ町情報基盤設置懇談会座長
9	2008.04.01	～	2009.03.31	(財) 大学基準協会大学評価委員会 専門評価分科会委員

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科		職名	教授	氏名	今城 光英	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 授業評価			現在		全面的にパワーポイントを用いた講義について、学生の評価は概して良好であるが、新たな課題 (授業進行度の適正化、学生の理解度確認など) もある。また、視力障害のある学生に対して、データの形で提供できる利点がある。			
2 作成した教科書、教材、参考書								
1) 教材の作成			2007.04.01		学部の講義科目 (2科目) について、全面的にパワーポイント使用の運用に切り替え、そのためのデータを準備した。			
2) 教材の作成			2008.04.01		全面的にパワーポイント使用の運用に切り替えた講義科目 (2科目) について、データの修正、加除を行った。また、3年次配当科目については、学生の就職活動に伴う出席状況を勘案して、授業の進行順序を変更した。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称		単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書								
論文								
1 地方鉄道の衰退と再生		単著	2005.02.01	『運輸と経済』第 65 巻第 2 号		経営環境の悪化が続く地方鉄道について、その維持と活用のための方策と考え方を示した。2004.12.24 に開催された運輸調査局 2004 年度研究報告会報告の要旨を示したものである。		
2 地方鉄道と地域社会の紐帯		単著	2005.02.25	『経営論集』第 9 号 大東文化大学経営学会		地方鉄道の資本費と営業費の調達について、地域社会が如何にかかわってきたか、その史的変遷の輪郭を示した。採算性が低い地域的な社会資本の形成について、その特徴を明らかにしたものである。		
3 地下鉄開業 80 周年に寄せて—運賃・民営化・快適性を考える		単著	2007.01.00	『日本地下鉄協会報』第 163 号 日本地下鉄協会		地下鉄を例に、都市インフラ整備の上で、従来型設備投資が一巡したことを歴史的に示し、今後の整備の方向を展望した。		
その他								
1 Rural railways and the third sector lines		単著	2004.10.22	英国下院運輸委員会		英国下院運輸委員会 (委員長ダンウッド) に対して、わが国における第三セクター鉄道政策について、その経緯、効果、課題を報告した。報告の要旨は、House of Commons Transport Committee, Rural Railways, 2005.3, H.M.S.O に収録されている。		

2	地方鉄道問題	単著	2005.02.15	鉄道に関する連続講演会 (鉄道・運輸機構)	地方鉄道政策について、街づくりとの連携という今日的課題について報告した。
3	地方鉄道と費用負担の主体	単著	2005.03.25	大東文化大学 J R 東日本寄附講座中間報告会	地方鉄道の形成と維持に関して、その費用負担について論じた。
4	基調報告 16 鉄道の未来学 鉄道サービス：鉄道ネットワークのシームレス化を考える	単著	2005.10.00	『みんなてつ』16号 日本民営鉄道協会	わが国における相互直通の成果を評価しつつ、今後のシームレス化を展望した。
5	英国における地方鉄道政策の転換	単著	2006.03.24	大東文化大学 J R 東日本寄附講座成果報告会	地方鉄道政策は、欧米においても見直しが続いているが、ここでは英国のストラスクライドと、マージサイドの例を示して、政策の目的について論じた。
6	津軽鉄道復活のためのシナリオ	単著	2006.03.25	津軽鉄道の「今日」と「明日」を考えるフォーラム(津軽鉄道活性化協議会)	輸送量が減少し、存廃が議論されている津軽鉄道について、その再生と地域貢献の可能性について論じた。
7	『地方鉄道の再生－英国における地域社会と鉄道－』	単著	2006.03.28	日本経済評論社	本書は、グラスゴー大学のイアン・ドハティが執筆した Making Tracks の全訳である。社会的包含をめぐる拮抗するインストルメンタルなアプローチと、象徴的アプローチの対比を試みている。
8	パネルディスカッション「公益事業とガバナンス」	共著	2006.06.11	公益事業学会 2006 年度大会	公益事業とガバナンスを統一論題とする公益事業学会の年次大会において、同名のパネルディスカッションを実施し、これに参加した。ガバナンスの国際比較、公益企業のガバナンス等に触れた。
9	湊鉄道再生のシナリオ	単著	2007.03.21	湊線を考えるシンポジウム(ひたちなか市主催)	産業再生機構による再建下にある企業が経営する地方鉄道事業について、その再生と地域貢献の可能性について述べた。
10	湊鉄道と地域の紐帯	単著	2007.05.27	湊線を考えるシンポジウム第2回(ひたちなか市主催)	存続か廃止か地域の世論を二分している湊線を念頭に置きながら、地方鉄道の果たす役割とヨーロッパを中心とする街づくりと連携した先進事例を紹介した。
11	「運輸と経済」創刊 60 周年記念フォーラム	単著	2007.09.03	運輸調査局	鉄道改革を国際比較した場合の日本の特徴についてパネラーとして報告した。
12	The Development of Japan's Railway and the Role of Academic Activity	単著	2007.09.07	Special International Seminar in Seoul Korean Society for Railway	鉄道における技術開発の目的がスピードアップにあることの経済的な意味を強調し、基本的な社会資本整備が完成しつつある成熟期における投資の方向性を論じた。
13	私的資本による都市インフラ整備	単著	2007.09.10	「近代化過程における東南アジア三ヶ国間の相互認識」国際シンポジウム 南開大学・大東文化大学	日本の大都市において基本的な交通施設となっている都市鉄道網の整備について、それが私的資本によって担われた経緯、政策、効果を論じた。
14	都市における交通インフラの整備と資金調達	単著	2007.09.22	互惠、合作、発展の中日関係－中日国交正常化 35 周年記念国際学術シンポジウム 遼寧大学日本研究所・中華日本学会	東京における地下鉄整備と北京における地下鉄整備を資金調達の面から比較し、費用負担のあり方と自立経営について論じた。
15	『小規模交通需要地域における鉄道を含めた地域公共交通の検討調査』報告書	共著	2007.10.31	国土交通省関東運輸局、茨城県	委員、座長としてかかわった調査の報告書である。鉄道が特性を發揮できない規模の市場において維持される場合の社会的経済的効果を検討した。
16	幹線鉄道ネットワーク形成に関する歴史的視点	共著	2008.03.01	『運輸と経済』第 68 巻第 3 号	幹線鉄道網整備の歴史について、英国、ドイツ、日本を比較検討した座談会の記録である。他の出席者は、湯沢威学習院大学経済学部教授、桜井徹日本大学商学部教授、小川功跡見学園女子大学教授である。
17	都市交通インフラと整備主体	単著	2008.10.31	日本と中国の明日への懸け橋－言語・文化・社会、日中比較を基軸として日本学術振興会、大東文化大学、東北師範大学	日本における都市交通整備の特徴である私的資本による整備について、その概要を明らかにし、人口稠密なアジアの都市における社会資本整備のモデルとなりうることを報告した。

18	鉄道経営における今 日的課題	単著	2008.12.02	大東文化大学経営研究所第 7回経営シンポジウム「交 通政策のフロンティアー理 論・実証研究・制度分析」 大東文化大学経営研究所主 催、公益企業学会関東部会、 海運経済学会関東部会共催	日本における鉄道事業について、市場の特徴、輸送規模と客 貨の特性、生産性などの国際比較と、日本型ビジネスモデル の持つ特徴を、簡潔にとりまとめて報告した。
----	-------------------	----	------------	---	---

III 学会等および社会における主な活動

1		現在		経営史学会会員
2		現在		公益事業学会理事（前、評議員）
3		現在		鉄道史学会会員（前、理事、評議員）
4		現在		日本経営学会会員
5		現在		日本交通学会理事
6	1992.06.29	～	現在	財団法人交通統計研究所理事（非常勤）・評議員
7	2003.06.20	～	現在	財団法人運輸調査局理事（非常勤）
8	2005.08.03	～	2008.03.31	千葉県いすみ鉄道再生会議委員
9	2005.09.27	～	2007.03.31	千葉県東葉高速鉄道調査検討専門委員会委員
10	2007.06.14	～	2007.10.31	茨城県小規模交通需要地域における鉄道を含めた地域公共交通体系の検討調査検討会座長
11	2007.06.28	～	現在	東武鉄道株式会社独立委員会委員
12	2007.07.25	～	2009.03.31	文部科学省高等教育局各私立大学等研究設備整備費補助金等選定委員
13	2008.06.01	～	2009.03.31	群馬県群馬県鉄道網活性化研究会座長
14	2008.06.01	～	2009.03.31	国土交通省関東運輸局地方鉄道活性化方策の検討会座長
15	2008.06.01	～	2009.03.31	財団法人運輸政策研究機構公共交通支援センター顧問
16	2008.09.01	～	2009.03.31	財団法人広域関東圏産業活性化センター地方資源としての鉄道の可能性調査研究会アドバイザー

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	内山 研一	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学1,2年生に対する「参加型授業」の実施		2009.04.00	東松山開講「問題解決法」におけるグループ討議、プレゼンテーションの参加型授業を実施。(OHR、ハンドマイクの利用) 社会人参加コメントの実施。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「参加型授業におけるSSMベースのアクションリサーチ」 『大東文化大学経営論集』		2005.09.00	フランス・グランゼコールにおけるARの事例と評価				
2) 「JAARシンポジウムレポート」 『人材教育』 2009,Vol.21,No.9		2009.03.00	大学院修士コースゼミプロジェクト発表会のレポートが左記雑誌に掲載。(ゼミの公開発表会)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「フランスにおけるMBA大学院教育の実際」		2006.11.00	フランスからフランソワ・レジュ氏を招き共同講演(大東文化大学経営研究所シンポジウム)				
2) 「アクションリサーチの看護教育への摘要」		2009.03.00	札幌市立大学看護学部 教員研修				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『現場の学としてのアクションリサーチ: ソフトシステム方法論の日本的再構築』	単著	2007.04.00	白桃書房	内山研一			
2 「From Realism to Actualism in IS」	共著	2008.06.00	『Phenomenology, Organization and Technology』, Intron, Ilharco and Fa y (eds.), Universidade Católica Editora, Unipessoal, Lda., Lisboa, 2008. (リスボンカソリック大学出版)	2003年第2回POT国際会議で発表した論文が左記の本に収録された。			
論文							
1 参加型授業におけるSSMベースのアクションリサーチフランス・グランゼコールMBAコースでの事例	単	2005.09.00	大東文化大学経営学会『経営論集』第10号				

2	“思い”のモデルを使った新しいSSMベースのアクションリサーチ「モノの学」から「コトの学」へ	単	2005.10.00	作業療法学会誌『作業療法』第24巻5号	
3	「経営構想論」の構想	単著	2006.04.00	経営論集第12号	
4	「モノの学からコトの学へ」	単著	2007.11.00	『第2回横幹連合コンファレンス予稿集』、京都大学	内山研一
5	「ソフトシステム方法論（SSM）と、その誤解を糾す」	単著	2007.11.00	『第2回横幹連合コンファレンス予稿集』、京都大学	内山研一
6	「認知症ケアマネジメントへのSSMの適用」	共著	2007.11.00	京都大学	中西誠司・内山研一
7	「ソフトシステム方法論（SSM）の考え方をを用いた新規事業マネジメントのリフレクション」	共著	2007.11.00	『第2回横幹連合コンファレンス予稿集』、京都大学	八田真資・内山研一
8	「コンピュータ使用における4つのパラダイムとアクションリサーチ：コンピュータ使用の系譜学の試み」	単著	2008.12.00	『経営情報学会誌』Vol.17 No.3, pp7-30	コンピュータ使用をモノ／コトを軸とした4つのパラダイムの系譜に分類し、従来のモノの効率に偏向したコンピュータ使用を批判し、コトに基いた新しい使い方のガイドラインを提示した。
9	「A Concise Theoretical Outline of Action Research」	単	2009.03.00	大東文化大学経営研究所 Research Papers No.E-47, March 2009.	
10	南アフリカにおける「参加型組織」の形成を目指して—ソフトシステムズ方法論（SSM）による「信頼感のあるチームワーク作り」のreflection	単	現在	大東文化大学経営学会『経営論集』第4号	
その他					
1	「How to implement “Actuality” in Knowledge Management」	単	2004.06.00	ART of Management Interaction of Explicit and Implicit Attitudes for Intercultural Management (International Conference of Knowledge Management) Lyon, France	
2	The Japanese Style of Phenomenological Reduction and Management in SSM	単	2004.09.00	第3回POT国際シンポジウム University of Lapland, Rovaniemi Finland.	
3	SSMの情報システム分野への応用	共	2004.09.00	NTTデータ企画 ランカスター大学チェックランド教授へのインタビュー (於：英国)	
4	「情報システムにおける「実感」の大切さを自覚せよ	単	2005.01.00	『日経コンピュータ』No617 2005年1月号	
5	Towards the SSM based Action Research	単	2005.03.00	リヨン経営大学院特別講演	

6	“思いのモデル”を使った新しいアクションリサーチモノの学から「コトの学」へー学問に実感を取り戻すー	単	2005.06.00	第39回「作業療法学会」基調講演 つくば国際会議場	
7	リハビリテーションOTアワー「生活世界」と「科学の世界との統合ー21世紀の展望ー	単	2005.08.00	スカイパーフェクトTV 医療福祉チャンネル 774	(同上) の題 スカイTVノーカット放送
8	From Coordination to Accommodation: A Critical perspective of Winograd and Flores' Coordinator	共	2005.09.00	第4回POT国際シンポジウム E.M. Lyon, France Eric Fay との共著	
9	「Exploration of Changing Situating Caused by Transformation of Project Management Style Utilizing SSM Based on “Actual Feeling” of System Engineers」	共	2006.09.00	The 3rd International Conference of Project Management(ProAC2006), Sydney, Australia	
10	「The New Theoretical Grounding of Action Research based on Checkland's SSM and Kimura's Phenomenological Psychiatry」	単	2006.10.00	The 5th International Conference of Phenomenology, Organization, and Technology(PTO), University of Amsterdam, Netherland	
11	「フランス経営大学院におけるマネジメント教育について」、フランソワ・レジュ氏と	共	2006.11.00	大東大経営研究所シンポジウム	
12	「情報システムにおけるレトリックとリアリティ」	単	2006.12.00	『ネットワーク社会における企業と情報』大東文化大学経営研究所 第5回経営シンポジウム、大東文化大学、東京	
13	「中国におけるマネジメントの本音と建前」	単	2007.01.00	北京外国語大学内山ゼミ共同シンポジウム、北京外国語大学	
14	「ケア・マネジメントにおけるアクションリサーチの応用」	単	2008.03.00	第11回 岡山県通所リハビリテーション研究会 特別講演、岡山県医師会	
15	「医療福祉とアクションリサーチ」	単	2008.04.00	国際医療福祉大学院AR研究会特別講演	
16	「The New Theoretical Grounding of Action Research From the Japanese Point of View」	単	2008.05.00	5th Annual Symposium of Action Research in Education and Leadership, University of San-Diego, USA	
17	「A Four-Paradym Model of Computer Use and Action Research : Towards the Genealogy of Computer Use」	単	2008.06.00	The 6th International conference of Phenomenology, Organization and Technology(POT), Oxford University, UK.	

18	「Action Research and Japanese Context」	単	2008.06.00	Workshop on Action Research, Anglia-Raskin Politechnic University,UK
19	「アクションリサーチの新しい方針論とその妥当性／正当性について」	単	2008.07.00	千葉大学看護学部 現代GP特別講演、千葉大学、2008.
20	「家で死ぬるまち作りとアクションリサーチ」	単	2008.07.00	墨田区NPO「家で死ぬるまちづくり」厚生労働省科研費特別講演、2008
21	「在中国日本企業における中国人従業員の会社観」	単	2008.08.00	大連民族学院 「日本企業文化ワークショップ」、旭硝子特権玻璃大連有限公司共催、中国大連、2008.
22	「作業療法とSSMベースのアクションリサーチ」	単	2008.09.00	第18回日本作業行動研究会「基調講演」、秋田大学医学部
23	「訪問看護の現状をリッチピクチャーで考える」	単	2008.12.00	東京都看護協会『在宅訪問看護教育講座』特別講演
24	「アクションリサーチの経験とそのリフレクション (サン・デイエゴ大学、T.ローン、Inoue 等)」	単	2009.02.00	「第3回アクションリサーチシンポジウム」、日本アクションリサーチ協会、パネル司会
25	「SSMベースのAR」	単	2009.03.00	札幌市立大学「アクションリサーチ研究会」札幌市立大学看護学部 (特別講演)。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	2003.04.00	～	現在	情報システム学会会員
2	2003.11.00	～	現在	日本アクションリサーチ協会会長

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科		職名	教授	氏名	梅沢 豊	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1			日本オペレーションズ・リサーチ学会副会長				

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科		職名	教授	氏名	清家 伸彦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 授業評価			2008.12.00	授業評価の実施とその結果に対する対応。				
2 作成した教科書、教材、参考書								
1)			2008.04.01	S C Mサプライチェーンマネジメントの概説。				
2)			2008.04.01	C R M顧客関係管理の概説。				
3)			2009.04.01	コンピュータの歴史 EVIAC より現在まで。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
1)			2005.10.00	他大学との交流 (インナー大会) 参加による討議 (2005.10.00,2006.10.00)				
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
1 『世界を動かす企業家に学ぶ』	共著	2005.04.01	ドナイ出版 (韓国)	『世界の起業家 50 人』を韓国語に訳したもの。担当「トマス・ワソ Sr. & トマス・ワソ Jr. P.63~P.68。共著者:永野慎一郎他多数。				
論文								
1 「経営情報における情報管理」	単著	2007.09.25	大東文化大学経営学会 経営論集 14	情報品質の管理をソフトウェア品質の管理と比較しながら分析したもの。P.1~8.				
2 「プロセスマネジメントによる情報品質保証」		2008.12.16	大東文化大学経営学会経営論集 16	広義の情報品質をデータ品質と狭義の情報品質に分け、それぞれを情報収集から情報作成、情報流通、情報利用のプロセスで、品質の保証を行なうための方法を提案している。P.15~27.				
その他								
1 「経営情報と情報品質」	単著	2006.12.01	大東文化大学経営学部シンポジウム 大東文化大学経営学会	経営活動における情報品質の問題点を指摘し、その要因を情報品質の分類を通じて、その解決策を分析したもの。				
2 情報品質保証の管理	単著	2007.12.09	パーソナルコンピュータ利用技術学会 2	情報品質をデータ品質と情報品質に分類し、その品質保証を情報品質の管理方法を通じて分析したもの。				
3 「情報品質の保証プロセス」		2008.11.10	パーソナルコンピュータ利用技術学会 3	広義の情報品質の中で、特に狭義の情報品質の保証プロセスについて、利用者の視点からの情報品質という視点で分析している				

4	「情報データベース・システムの総合評価」	共著	2008.11.30	パーソナルコンピュータ利用技術学会 3	FUZZY理論を用いて、情報品質を構成する要素および、その重要性を評価し、その結果を用いて、データベースシステムを構築している。©梁高陽、永田清、清家伸彦
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1973.09.01	～	2007.03.31	日本行動計量学会	
2	1977.04.01	～	現在	日本オペレーションズリサーチ学会	
3	1982.04.01	～	現在	日本経営工学会	
4	1982.04.01	～	現在	日本情報経営学会	
5	1982.05.01	～	現在	日本教育工学会	
6	1985.08.01	～	2009.03.31	日本認知学会	
7	2007.04.01	～	現在	パーソナルコンピュータ利用技術学会理事	
8	2007.04.01	～	現在	大学生協同組合理事	

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科		職名	教授	氏名	寺田 浩司	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 環境と資源A			2005.05.01	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.49) (①現代社会と化学、②環境汚染)			
2) 生命科学A			2005.05.01	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.47) (①生物の分類、②行動学、③ヒトの行動と脳)			
3) 現代科学A			2008.05.01	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.21) (①環境汚染; 温暖化を改変、②環境評価)			
4) 生物学A			2008.05.01	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.21) (①行動学、②ヒトの行動と脳; 脳と医療を改変)			
5) 現代科学B			2008.09.18	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.23) (①物作りの資源; リサイクルを改変、②エネルギー資源; クリーンエネルギーを改変)			
6) 生物学B			2008.09.18	教科書 (出版: U-POC, B5 判, pp.23) (①生命の歴史; 系統関係改変、②バイオテクノロジー; 再生医療関係改変)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
その他							
1 酒井先生とハサミムシの時	単	2004.12.20	日本生物地理学会会報第 59 巻	酒井清六博士の全業績概要 (vol.59, p98) 農薬化学の時代 (連合作用の研究) と革翅目昆虫の分類の時代 (多変量分析による分類の研究)。			
2 酒井先生がいた風景	単	2005.04.10	日本地理学会第 60 回年次大会、追悼シンポジウム (立教大学)	酒井清六博士の業績概要と酒井博士による革翅目昆虫の形態分類体系と分子系統学による分類体系との比較 (酷似する結果についての報告)。			
III 学会等および社会における主な活動							

1	1974.04.00	～	現在	日本応用動物昆虫学会会員
2	1974.04.00	～	現在	日本昆虫学会会員
3	1975.04.00	～	現在	日本遺伝学会会員
4	1978.04.00	～	2006.12.00	カナダ昆虫学会会員
5	1978.04.00	～	現在	生物物理化学学会会員
6	1988.04.00	～	現在	日本生物地理学会会員 (1997年～2002年 会計幹事)
7	1992.05.00	～	現在	日本生態学会会員
8	1993.04.00	～	現在	日本分子生物学会会員
9	2000.04.00	～	現在	日本進化学会会員
10	2005.03.10	～	2007.03.07	東松山市きらめき市民大学講師 (講義「環境ホルモン」担当: 内容①内分泌かく乱物質について、②影響、③対策)
11	2008.03.05	～	2009.03.00	東松山きらめき市民大学講師 (講義「化学物質汚染」担当: 内容①世界の汚染地域について②日本の場合、③対策 (P R T R等))

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	永田 清	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書 1) MS-Office を使ったパソコン活用 (第4版)		2009.04.25	パソコン概論、Windows Vista、タイピング、Word、Excel、Access、Power Point 及びホームページ作成を、演習を行いながら習得させるための教科書で、プレゼンテーション一般と Power Point (第8章、pp.135-154) を担当した。第4版で Office2007 対応に全面的に書き換えた。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 超楕円曲線における Weil 数について	単	2005.01.00	経営論集第9号、大東文化大学経営学会	pp.57-64		
2 “超楕円曲線における Weil 数について”	単	2005.02.09	大東文化大学経営論集第9号	第3世代暗号方式といわれている超楕円曲線暗号の基礎となる、群の位数計算に用いられる Weil 数を考察 pp.57-64		
3 企業評価の現状の動向	共	2006.03.00	Research Papers No.J-48, Institute of Business Research Daito Bunka	担当: 「情報的側面からの企業評価指標—評価システム構築にむけて—」 pp.49-56 青木茂男、青木幹喜、松尾敏充、天笠美知夫		
4 “革新的問題解決法の研究・開発とその実際問題への応用”	共著	2006.03.00	J R 東日本寄附講座プロジェクト研究会	第5章革新的問題解決法とその実際問題への適用「つくばエクスプレス開通に伴う常磐線利用実態の変化とその要因分析」、天笠美知夫、梅澤正史、井上洋、Ljubo Vlacic、Yohan Chandy		
5 「Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-Application of Modified Structural Modeling Method」	共	2006.12.00	Proceedings of the 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2006	pp.1184-1192, (修正) 構造化モデル手法を提示し、公共交通機関の利用調査に対する分析に適用した。Amagasa, M., Umezawa, M., Cui, D.		

6	「Integrating Modified Structural Modeling Method with an Information Security Evaluation System」, CD-ROM, T1-R-2, ID68	共	2007.12.11	Proceedings of the 8th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2007	Amagasa, M., Kigawa, Y., Cui, D.
7	Constructive Algorithm of Self-Dual Error-Correcting Codes	共著	2008.06.00	Proceeding of the 11th International Workshop on Algebraic and Combinatorial Coding Theory, ACCT2008, June 16-22, 2008, Pamporovo in Bulgaria	標数 p の素体における自己双対符号を環 Z/p^sZ に拡張するアルゴリズムと可能な拡張すべての個数を表す式を, 奇素数 p の場合に与えた. pp. 215-220 Wada, H., Nemenzo, F.
8	Modified Structural Modeling Method and Its Application -Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-	共著	2008.12.00	Journal of Industrial Engineering & Management Systems, published by Korean Institute of Industrial Engineers(KIIE), Vol. 7, NO. 3, 2008	FSM を基礎として, 複数の人間により構成されるグループにおいて問題解決を行うための手法である MSMM を用いて, JR 東日本利用者の路線選択基準を解析し, 既存の手法による結果と比較検討した. pp.245-256 Amagasa, M., Umezawa, M., Cui, D.
9	Risk Evaluation for Critical Assets with Fuzzy Inference Mechanism in an Information Evaluation System	共著	2008.12.00	Proceedings of the 9th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2008, 3-5 December 2008, Bali, Indonesia, CD-ROM,	情報セキュリティマネージメントシステムにおける脅威バスのリスクレベルを総合的に評価する手法を提案し, 実際の例を示した. pp.2630-2640 Amagasa, M., Kigawa, Y., Cui, D.
10	The number of self-dual codes over Z_{p^3}	共著	2009.03.00	Journal of Designs, Codes and Cryptography, Vol. 50, NO. 3, 2009	素数 p に対し, 標数 p の素体における自己双対符号を環 Z/p^3Z に拡張するアルゴリズムと可能な拡張すべての個数を表す式を与えた. 特に, $p=2$ の場合が重要である. pp.291-303 Wada, H., Nemenzo, F.
その他					
1	方程式 $x^2+dy^2=m$ ($0<d<m$) の整数解	共著	2004.05.10	(社) パーソナルコンピュータユーザ利用技術協会 (査読あり)	pp.8-12 ジュリアス M.バジエラ
2	素数判定法の理論的考察	単著	2004.05.10	(社) パーソナルコンピュータユーザ利用技術協会 (査読あり)	pp.23-28
3	「情報リテラシ教育における学生属性の語る学生意識について」	共	2006.11.24	平成 18 年度 情報処理研究集会	pp.241-244,情報リテラシ教育に対する学生の意識を属性ごとに分類, 分析した。山下倫範、友永昌治、小塚光芳、上山俊幸、宮田大輔、木川裕、荻原尚、青木智子、福田真規夫
4	「情報セキュリティ評価システム OCTAVE-S と構造化モデル手法」	単	2007.03.09	パーソナルコンピュータ利用技術学会 全国大会講演論文集	pp.43-46, (修正) 構造化モデル手法を情報セキュリティ評価システムに適用することを提案し, その可能性に関して考察した。
5	「On Construction of self-dual code over Z/p^sZ 」	共	2007.05.18	Mathematical Society of the Phillipines 2007 Convension, Tagbilaran City in Bohol	Wada, H., Nemenzo, F.
6	「ネット不安と情報倫理意識」	共	2007.11.10	平成 19 年度情報教育研究集会講演論文集	pp. 504-506 山下倫範、友永昌治、上山俊幸、小塚光芳、宮田大輔、木川裕、荻原尚、青木智子、福田真規夫
7	「情報倫理教育教材の多言語化とアジアの現状」	共	2007.11.10	平成 19 年度情報教育研究集会講演論文集	pp. 430-433 木川裕、荻原尚
8	情報倫理教材の多言語化と問題点	共著	2008.09.04	教育システム情報学会第 33 回全国大会講演論文集	情報倫理教材を多言語化する場合の問題点を考察し, その方向性を探る研究. pp.506-507 木川裕、荻原尚
9	情報データベースシステムの総合評価手法 -情報品質の視点から-	共著	2008.11.30	第 3 回パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会講演論文集	情報データベースの品質に関して, 既存の研究による成果を元に, Fuzzy 積分による総合評価指標を提案した. pp.23-26 梁高揚、清家伸彦

10	アジア各国における 学生の情報倫理意識 －日本、フィリピン、 韓国の比較－	共著	2008.12.12	平成 20 年度情報教育研究 集会講演論文集	アジア各国からの留学に対する、より適切な情報倫理教育を 目指し、いくつかの国々における意識調査を行った結果を分 析、比較した。 pp.21・24 木川裕、荻原尚、青木智子
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1982.08.00	～	現在	日本数学会会員	
2	1992.12.00	～	現在	教育システム情報学会会員	
3	1993.07.00	～	現在	情報文化学会会員	
4	1995.00.00	～	2006.09.00	(社) パーソナルコンピュータユーザ利用技術協会会員	
5	2006.05.00	～	現在	パーソナル・コンピュータ利用技術学会会員 (平成 18 年度～現在理事)	

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	長谷川 礼	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『シリーズ国際ビジネス2 国際ビジネス理論』		2008.04.01	(2008年4月1日～現在) 講義の教材として使用。筆者は、本書の共編著者であり、第2部第6章(83-94頁)執筆。B5版、総頁225頁。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「日本における外資系企業」	共著	2006.11.15	同文館『新版理論とケースで学ぶ国際ビジネス』	共著者◎江夏健一、◎桑名義晴、笠原伸一郎他19名。筆者は、第14章(217-228頁)担当。A5版、総頁数275頁中12頁。2001年4月発行の『理論とケースで学ぶ国際ビジネス』の中の同章を、加筆修正したものである。			
2 「OLIパラダイム」	共編著	2008.03.05	中央経済社『シリーズ国際ビジネス2 国際ビジネス理論』	共著者は、◎江夏健一、◎長谷川信次、◎長谷川礼、他12名。筆者は、第6章(83-94頁)担当。A5版、総頁数225頁中12頁。製造業に従事する多国籍企業の生産活動の海外移転に関する決定要因を解明するメカニズムとして、1970年代後半にダニングにより提唱された枠組みである。本章はその概説である。			
3 「国際ビジネスの諸理論」	共著	2008.03.05	中央経済社『シリーズ国際ビジネス1 国際ビジネス入門』	共著者は、◎江夏健一、◎太田正孝、◎藤井健、他14名。筆者は、第3章(41-55頁)担当。A5版、総頁数179頁中15頁。国際ビジネスの諸理論として、経営者モデル、プロダクトサイクルモデル、内部化モデル、OLIパラダイム、トランスナショナルモデル等を紹介している。			
4 『多国籍企業における在外子会社の役割と進化』	単著	2009.03.31	大東文化大学経営研究所・研究叢書27	本書は、在外子会社の役割に関する静態的アプローチの枠組みとして、グローバル統合、現地適応、現地環境の重要性という3次元マトリックスの枠組みを提示し、その枠組みに依拠した2つの事例研究を行った。また、同テーマに関する動態的考察のためにP&Gの事例研究を行った。1998年以降、P&Gではフロントバック混成マトリックス組織を採用し、グローバル統合と現地適応の双方を同時に高める方向性を明確に打ち出した。本書では現状における課題を探った。A5判、総頁237頁。			
論文							

1	『在日外資系企業の経営に関する一考察ー子会社の役割を中心として』	単著	2007.03.00	大東文化大学経営研究所リサーチペーパーNo. J・42	B 5 版 12 頁。Birkinshaw=Hood の提唱する多国籍企業の在外子会社の進化パターン及び、Frost=Birkinshaw=Ensign の提示するセンター・オブ・エクセレンス (CEO) の概念を援用しつつ P & G ジャパンの成長と子会社としての役割の変化を概観した。
2	「在外子会社の役割に関する I-R グリッド分析の再考ーアコージャパンの事例研究を通じてー」	単著	2008.12.16	大東文化大学経営学会『経営論集』第 16 号	本稿ではフランス企業、アコーの在日子会社の事例研究を行った。アコージャパンはアップスケールクラスから低価格帯のバジェットクラスのホテルまで 4 つのホテルブランドを展開する中で、日本サイドの不動産オーナーと新たな契約形態・協力関係を構築するなどの試みを行い、順調にビジネスを成長させてきた。今回分析枠組みとして用いた I-R グリッドは、在日子会社の役割による類型化に必ずしも十分ではないことが分かった。B 5 版、総頁数 137 頁中 20 頁。
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	1988.04.01	～	現在	Academy of International Business 会員
2	1988.04.01	～	現在	日本貿易学会会員
3	1992.10.01	～	現在	日本国際経済学会会員
4	1994.10.01	～	現在	国際ビジネス研究学会会員
5	2000.04.01	～	現在	埼玉労働局労働条件紛争担当参与

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	丸山 啓輔	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 経営学	共著	2005.06.00	創成社 学術書	本書は第1部 経営の目的・戦略とは、第2部 経営の組織化とは、第3部 経営の新たな展開の3部から構成されており、総ページ数は290ページである。丸山担当 第1章経営 (現代社会と経済活動、経営とは、経営学と企業、企業とその特徴) を担当した。			
2 新経営管理論 [第二訂版]	単著	2007.02.00	同友館	新経営管理論の第3部第3章「人的資源管理」箇所を大中に改訂した。主な改訂点は①人的資源管理は、人間性原理の実現への制度的アプローチであること、②人的資源管理を経営学の視点からとらえていること、③戦前・戦後の我が国労働組合の相違点、の3点である。			
論文							
1 「合理性の研究」－統合経済合理性の一環として－	単	2004.00.00	日本橋学館大学「紀要」第3号10ページ (A/4)	本論は、日本経営学会誌9号にて発表した、「統合経済合理性」の論文の合理性を掘り下げたものである。合理性をどうとらえるのか、経営上の合理性の内容、統合経済合理性とH.A.サイモンの合理性および前提との関係について論じたものである。			
2 「企業別労働組合の新たな役割」－戦後の企業別労働組合形成背景および経営に対する役割とそのための留意点－	単	2004.00.00	日本橋学館大学「紀要」第3号12ページ (A/4)	本論は、我が国労働組合の特質といわれている企業別労働組合がどのように形成されたのか、企業と運命共同体の性格をもつこの企業別労働組合が経営とどう関わりあっていくべきかについてコーポレートガバナンスとの関係から論じたものである。			
3 人間性原理の展開－その1：人間性原理および就職の本質－	単著	2005.09.00	大東文化大学経営学会『経営論集』第10号	本稿は、まず、経営原理を構成するサブ原理の相互関係に触れ、経営さらに経営原理を論じ、次に就職の本質および就職によって生じる権利・義務を論じ、最後に就職の意味から企業と人との統合化を論じたものである。[掲載頁：99～109]			

4	戦前・戦後の我が国労働組合の相違点－企業別労働組合を中心として－	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 (社会科学)	本稿は、戦前・戦後の我が国労働組合の相違点を明らかにしたものである。比較項目としては、次の内容である。①労働組合の形態、②法律上、③組合員加入者、④組合役員の専従、⑤組合費の徴収、⑥労働運動の性格。
5	人間性原理の展開－その 2:人間性原理展開の構造と人間の特質－	単著	2006.09.00	『経営論集』第 12 号 大東文化大学経営学会	人間性原理は多面的総合的アプローチが求められる。すなわち、人的側面、制度的側面、職制の側面の総合的アプローチである。本稿では、まず人間性原理を展開していくうえで、これら 3 つの側面からの総合的アプローチの必要性と人間はどのような特質をもっているのかを論じた。
6	戦前の企業別労働組合－その存在検証と形成背景－	単著	2007.03.00	大東文化大学紀要 第 45 号<社会科学>	戦前に企業別労働組合が存在していたことを文献を通して実証し、さらに戦前に企業別労働組合が存在した背景を論じた。
7	人間性原理の展開－その 3:意欲と能率－	単著	2007.09.00	『経営論集』第 14 号 大東文化大学経営学会	人間性原理の中心課題は意欲と能率の向上をはかることである。本論はこの意欲と能率の考察である。まず、意欲・能率とは何かを究明し、次に意欲と能率両方を追求することが真の能力主義であることを明らかにし、さらに意欲と能率との関係をハーズバーグの動機づけ要因と衛生要因との関係を基に論じた。
8	人間性原理の展開 その 4-(1)－職制の役割－	単著	2008.06.00	大東文化大学経営研究所 Research Paper No.J-53	職制(経営者、管理者、監督者の総称ととらえる)とは、「管掌部署全体的にみて、経済合理性を遂行すること」ととらえる。このことは、職制 1 人では当然不可能である。そこで不可能を可能にするために組織を形成し、組織を通してその実現をはかる。この組織の人が意欲的能率的に与えられた仕事を果たすために、リーダーシップを発揮する必要があると論じている。
9	人間性原理の展開 その 4-(2)－職制の役割としてのリーダーシップ－	単著	2008.12.00	経営論集 第 16 号 大東文化大学経営学会	本稿は、前稿「人間性原理の展開 その 4-(1)」を受けてのものである。職制が管掌部署の目的を達成していくためには、部下の協働意欲を引き出す必要がある。このためにリーダーシップを発揮する必要があるが、このリーダーシップの本質、リーダーシップを発揮するための条件などを論じた。
10	人間性原理の展開 その 4-(3)－職制の役割と意見決定およびコミュニケーション－	単著	2009.03.00	大東文化大学紀要 第 47 号	効果的なリーダーシップを発揮するために意思決定とコミュニケーションは不可欠であると考え。そこで意思決定を発揮するために意思決定とコミュニケーションとがどう関係しているか、そのための意思決定とコミュニケーションをどうとらえたらよいか、コミュニケーションを効果的に行うための留意点などを論じた。
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1980.04.00	～	現在	日本労務学会会員	
2	1989.09.00	～	現在	日本経営学会会員	
3	1992.08.00	～	2008.12.00	経営哲学会会員	

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	McMahill, Cheiron Sariko	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 英語スピーチコンテスト		2003.00.00	(2003年～2009年) 大学生のスピーチコンテストへの参加を講師、審査委員、審査委員長として促進した。				
2) 大東文化大学授業評価		2003.12.00	(2003年12月～2008年12月) 大東文化大学授業評価(5年間毎年12月に実施)において、高い評価を得た。毎年平均点4.0以上(5段階評価)				
3) 英語学習オンラインソフトの使用を促進		2005.04.00	(2005年4月～2009年現在) 企業システム学科英語選択の2年生について(セイビドードーディールイングリッシュ教材、実習法を指導)				
4) 企業システム学科英語教科促進		2008.00.00	(2008年～現在) 専任、非常勤を問わず教員を集めて共通の教科書を選択し使用した。今年から英語プレイズメントテストを実施し上級者英語クラスを編成した。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 群馬県教育委員会 日本語教室運営サポートセミナー 講師		2007.06.26					
2) 「みんなのレインボー群馬 多文化共生への願い」		2008.07.20	高崎市中央公民館において、高崎市国際交流協会 青少年育成部会の親子勉強会にて、「みんなのレインボー群馬 多文化共生への願い」について講演をした。				
3) 「キレイな子どもの育て方」		2008.10.04	高崎市堤が丘小学校において、PTAシンポジウム「キレイな子どもの育て方」について発表をした。				
4) 「外国人から見た日本」		2008.11.19	群馬県庁において「群馬県多文化共生ソーシャル・ワーカー育成講座」にて、「外国人から見た日本」について講演をした。				
5) 「協同を進めるためのヒント～外国人教育相談窓口の実例」		2008.11.20	群馬県庁において「協同による新たな地域づくり～NPOと行政との協同～」の県・市・町村の職員の課題特別コースの中で、「協同を進めるためのヒント～外国人教育相談窓口の実例」について講演をした。				
6) 「外国人児童の人権」		2009.03.14	東京福祉大学において、子ども異文化は一もに一実行委員会・文部科学省後援の「多文化共生を考えるシンポジウム」で「外国人児童の人権」についてパネラ発表をした。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 「群馬県国際交流賞」		2008.10.20	群馬県知事より「群馬県国際交流賞」を受けた。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							

1	“Space as a Resource for Studying Multilingual Language and Literacy Practices.”	単著	2004.09.25	経営論集第8号	教室談話分析におけるスペースの分析法
2	“Multilingual Literacies in Japan : Children's project work in a community language school.”	単	2006.06.00	平成17年 Journal of Asian Pacific Communication 15:1, 79-96	多言語による読み書き学習の分析
3	“Valuing Minority Children and Their Languages in Japan: A Case Study of a Portuguese, English, and Japanese Community Language School” 「在日外国人児童およびその母国語を中心にーポルトガル語・英語・日本語のコミュニティ・ランゲージ・スクールの事例研究」		2006.12.13	日英・ランカスター大学大学院言語・英語学部応用言語学	博士論文
4	群馬県教育相談窓口で明らかになった少数民族児童の教育問題	単	2008.12.00	大東文化大学経営学会『経営論集』第16号	B5判、総頁13 外国人相談窓口案件の質的分析
その他					
1	“Theorizing Space as a social and material resource in young children's multilingual classroom interaction.”	単著	2005.03.23	5th International Symposium on Bilingualism, Barcelona	
2	“Exploring the meaning of children's use of ‘smoother’ spaces and animal bodies.”		2006.09.09	Conference on Socio-cultural Theory in Educational Research and Practice, University of Manchester, U.K.	
3	“Multimodal analysis of space and language in children's socio-dramatic play: ‘We are Dolphins.’”		2006.09.15	38th Annual BAAL Meeting, University of Bristol, U.K.	
III 学会等および社会における主な活動					
1	1986.10.00	～	現在	TESOL(Teachers of English to Speakers of Other Languages)会員	
2	1992.08.00	～	現在	JALT(Japan Association for Language Teaching…全国語学教育学会)・教師教育研究部会 広報係(1995年11月～1996年11月)、会報編集者(1997年10月～1999年10月)・群馬県 支部書記(1997年11月～1998年11月)・ジュンダーと語学教育研究部会(GALE SIG)会長 (1998年10月～)	
3	1995.11.00	～	現在	WELL(Women in Education and Language Learning…女性言語教育学会)創業者・入会係 (1995年11月～1997年1月)・会報編集者(1998年1月～2000年1月)	
4	2000.00.00	～	現在	群馬県認可特定非営利活動法人(NPO 法人)多言語教育研究所を創設し、英語・ポルトガル 語・日本語のトライリンガル・イマージョン教育を実施している子供の学校を理事長とし て運営する。	

5	2003.09.00	～	現在	BAAL (British Association of Applied Linguistics) 会員
6	2006.00.00	～	2007.00.00	群馬県定住外国人生活実態調査審査員
7	2008.12.04	～		北関東の産業に向けた多文化共生の地域づくりのあり方に関する検討委員会に委員就任
8	2009.04.00	～	現在	群馬県多文化共生推進懇談会委員に就任

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	教授	氏名	劉 甦朝	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 建国初期における農業協同化をめぐる毛沢東と劉少奇の認識と構想についての研究	単著	2005.12.25	「東洋研究」第 158 号、大東文化大学東洋研究所	建国前後、新民主主義経済における農業協同組合問題を取り上げ、その政策や方針の策定過程を論述し、そして毛沢東と劉少奇の微妙な食い違いを分析した。このような食い違いは過渡期における両者の各自の経済路線に対する認識上のズレに関連したことを指摘した。さらに本論文は、富農経済と農業協同組合についての論争を詳細に述べ、毛沢東の路線転換とその原因を探ってみた。103～125 頁。		
2 1950 年代半ばにおける中国農業協同化運動の展開－互助組から協同組合への移行についての分岐と論争－	単著	2008.12.25	「東洋研究」第 170 号 大東文化大学東洋研究所	1950 年代半ば頃、農業協同化の展開にともない、毛沢東の「推進派」と劉少奇の「慎重派」と論争が繰り返された。毛沢東は協同組合への移行を強行する中で、「慎重派」の抵制に対する批判をエスカレートし、個人の権威を利用して無理矢理に党内の共通認識となった新民主主義路線を破り、社会主義体制への移行を宣言した。新民主主義体制の失敗により、中国の経済路線は急進的な方向に突っ込んでしまった結果に至った。53～85 頁。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1998.07.00 ～ 現在		日本比較政治学会会員				

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	准教授	氏名	梅澤 正史	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 意思決定		2004.04.00	なるべく学生に質問を投げかけ、対話を重視することによって、学生の理解度を確かめながら授業をすすめた。(2004年4月1日～2007年3月31日)				
2) 情報処理の基礎		2004.04.00	毎授業時、演習を多く取り入れ、教室を回りながら学生のわからないポイントをその場で教示するよう努めた。学習確認のため、授業の最後に課題を与えた。(2004年4月1日～2007年3月31日)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 意思決定		2004.04.00	オリジナル資料を配布。その際、文章だけではなく、図解を多く盛り込むことによって、理解を深めるよう工夫。(2004年4月1日～2007年3月31日)				
2) 情報処理の基礎		2004.04.00	教科書に加え、オリジナル資料を配布。その際、学生の理解度合いに応じて、要点のまとめ方を工夫。(2004年4月1日～2007年3月31日)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 Social Welfare Function for Restricted Preference Domain.	共	2004.05.00	Institute of Policy and Planning Sciences, University of Tsukuba 1083	Discussion Paper(with k. ohbo, M. Tsurutani, and Y. Yamamoto)社会厚生関数に関するアローの不可能性定理(1963)の一般化を試みている。意見表明できる選択肢集合に対する限定を行っているが、この場合でも独裁的ではないルールの存在を保証することは困難であることを明らかにしている。pp.1-8			
2 企業内市場メカニズムによるナレッジ・マネジメントに関する理論的考察	共	2004.06.00	経営情報学会誌 vol.13	(山川茂孝と共著)(レフェリー有)本稿ではナレッジ・マネジメント・システムを企業内市場とみなし、ナレッジの利用者が生産者に対し支払いを行うモデルを考察する。これによりナレッジの生産者はナレッジの供給とメンテナンスに関する動機付けがなされることを明らかにしている。また、ナレッジを供給する競合同士の利潤最大化行動について分析している。pp.33-56			

3	A Cost Allocation Problem Arising in Hub-Spoke Network Systems	共	2005.02.00	European Journal of Operational Research vol.160	(with N. Matsubayashi, Y. Masuda, and H. Nishino) (レフェリー有) 通信ネットワークなどで利用されているハブ・スポーク型ネットワークシステムにおけるネットワーク維持費用の公平負担問題を協力ゲームアプローチによって定式化している。協力ゲームの解概念であるコアの存在条件を与え、準比例配分による費用負担が協力ゲームのそのコアに属することを示すことができた。pp.821-838
4	Social Welfare Function for Restricted Individual Preference Domain.	共	2005.05.00	Pacific Journal of Optimization vol.1、No.2	(with K. ohbo, M. Tsurutani, and Y. Yamamoto) (レフェリー有) 複数の選択肢に対して各個人がその選好順序を表明する際、その選択肢たちの社会的順序を集計する問題を扱っている。構成員は、ある1個人を除いて、選択肢の部分集合に対して意見表明するような状況をモデル化し、分析を行っている。無関係対象からの独立性、弱パレート性を満たす集計ルールは独裁的になることを示している。pp.315-325
5	Knowledge Markets: Knowledge Management through Market Mechanisms,	共	2005.05.00	New Frontiers in Knowledge Management・Palgrave Macmillan, United Kingdom	(with Y. Awazu and S. Yamakawa) (レフェリー有) 企業情報システムを利用して組織内でナレッジを共有させるシステムに関して、ナレッジを提供する供給者と買う側の購入者の意思決定行動をゲーム理論に分析している。企業内知識市場を想定し、均衡分析を行うことによって定性的な結果を得ている。いくつかのシナリオを通じてその様相を明らかにしている。pp. 99-116
6	Impossibility and Possibility Theorems of Social Choice Function with Restricted Alternative Set	共	2005.07.00	Department of Social Systems and Management, University of Tsukuba 1127	(with M. Tsurutani and Y. Yamamoto), Discussion Paper 社会の個人たちが持つ複数の選択肢に対する選好から1つの選択肢を社会的決定として選ぶ問題を扱っている。各個人は全選択肢に対して選好の意見表明を行うわけではないという点がこの論文におけるモデルの特徴である。どの個人も選択肢に対して操作不可能でかつ独裁的ではない社会的決定ルールは存在しないことを示した。また相互評価のケースの分析も行っている。pp.1-14
7	A Method for Finding Core Allocations of Minimum Cost Forest Games	単	2006.09.00	経営論集・大東文化大学経営学会 vol.12	ネットワークの最適構築と構築費用の配分に関するモデルである、最小費用フォレストゲームにおける費用の具体的な配分方法に関して分析している。コアというのは、協力ゲーム理論において公平な配分の集合として知られているが、様々な分担法の中でも、特にコアに属する配分を見つける方法を考察している。pp.119-125
8	Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-Application of Modified Structural Modeling Method	共	2006.12.00	Proceedings of the 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference	(with K.Nagata,D.Cui,M.Amagasa)1184-1192.(レフェリー有) 要因分析手法として、修正ストラクチャー・モデリング・メソッドの提案を行なっている。この方法は、集団的意思決定時にも有用な分析方法である。また、応用例としてつくばエクスプレス開通に伴うJR常磐線利用実態の変化について、上記の方法を適用し、多変量解析との比較を行ない、その有効性を検討している。
9	Impossibility and Possibility Theorems for Social Choice Functions on Incomplete Preference Profiles	共	2007.02.00	Pacific Journal of Optimization vol.3,no.1	(with K.Ando,M.Tsurutani,and Y.Yamamoto)(レフェリー有) 複数の意思決定主体が複数の選択肢に対して選好を表明し、それら意見の集約を行う集団的意思決定問題を扱っている。特に、各個人が持つ選好は全選択肢に対して可能とは限らないという意味で不完全な状況を想定し、意見表明に対して戦略的操作不可能な意見集約ルール(社会選択関数)の存在を示し、社会選択関数が持つ性質についていくつかの結果を得ている。pp.11-25.
10	最小費用ネットワーク構築ゲームにおけるコアに属する配分について	単	2008.02.00	経営論集・大東文化大学経営学会 vol.15.	本論文では、複数の消費者と複数のサービス供給地点がある状況におけるネットワーク構築問題を考えている。最小費用で全消費者の要求を満たすような最適ネットワークを構築し、その構築費用を消費者間で配分する。このような問題を協力ゲーム理論のモデルで考えたものの1つとして、最小費用フォレストゲームがある。本論文では、このゲームのコアが非空となる十分条件の下で、コアに属する配分を具体的に求める方法を考えている。特にこの配分は、部分的にシャプレー値を導入したものであり、公平性を保持した配分となっている。p.17-24

11	Modified Structural Modeling Method and Its Application: Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company	共	2008.12.00	Industrial Engineering and Management Systems: An International Journal vol.7(3)	(with K.Nagata, D.Cui, M.Amagasa) (レフェリー有) 修正ストラクチャー・モデリング・メソッドの提案と現実の問題への応用を行っている。この手法は、複数の意思決定者たちで集団的意思決定時において、どの要因が重要なのか、要因同士はどのような関係にあるのか、ということ进行分析する際に有効な方法である。つくばエクスプレス開通に伴うJR常磐線利用実態の変化を応用例として用い、多変量解析との比較を行ない、その有効性を検討している。 p.245-256.
その他					
1	On the Existence of Pareto Optimal Nash Equilibria and Correlated Equilibria.	共	2004.00.00	The Second World Congress of the Game Theory Society	(with M. Okada and H. Nishino) (レフェリー有)
2	Computational Complexity of Pareto Optimal Nash and Correlated Equilibria	共	2006.01.00	The 7th Conference of the Association of Asian-Pacific Operational Research Societies (APORS) 2006, (in Manila, Philippines), January 16-18, 2006.	(with M. Okada and H. Nishino) (レフェリー有)
3	革新的問題解決法の研究・開発とその実際問題への適用	共	2006.03.00	研究報告書「革新的問題解決法の研究・開発とその実際問題への応用」・JR 東日本寄附講座プロジェクト研究会、大東文化大学	第5章 担当(共著者: 永田清)革新的問題解決法の研究・開発において、その実際問題として、つくばエクスプレス開通に伴う常磐線利用実態の変化とその要因分析を取り上げ、その調査と分析を行いまとめたものである。
4	Behavior Analysis of Passengers for East Japan Railway Company-Application of Modified Structural Modeling Method-	共	2006.12.00	The 7th Asia Pacific Industrial Engineering and Management Systems Conference 2006	(with K.Nagata,D.Cui,M.Amagasa),(in Bangkok,Thailand),17-20 December,2006. (共同研究者が報告) (レフェリー有)
5	Coalitionally Strategy-Proof Social Choice Correspondences and the Pareto Rule	単	2008.07.00	The the Third World Congress of the Game Theory Society 2008	社会選択問題における社会選択対応の協調的操不可能性に関する研究発表を行った。特に、パレートルールが持つ良い性質に関する研究結果をまとめ、報告した。(レフェリー有)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1997.09.00	～	現在	日本オペレーションズ・リサーチ学会会員 (2004.04.00～2006.03.00 論文誌編集委員)	
2	1999.10.00	～	現在	日本経済学会会員	
3	2001.02.00	～	現在	INFORMS(Institute for Operations Research and Management Sciences)会員	
4	2001.08.00	～	現在	Journal of the Operations Research Society of Japan (論文誌レフリー)	
5	2004.04.00	～	現在	Game Theory Society 会員	

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	准教授	氏名	白坂 亨	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 『明治初期における「株式」会社発生過程』		2004.00.00	Research papers 43 大東文化大学			
2 『兵庫商社と「商人会社」』		2006.00.00	Research papers 49 大東文化大学			
その他						
1 『イギリス多国籍銀行史—1830～2000年—』	共訳	2007.00.00	日本経済社証券経済学会			
III 学会等および社会における主な活動						
1	1994.06.00	～	現在	証券経済学会会員		
2	1994.06.00	～	現在	日本経営財務研究学会会員		

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	准教授	氏名	Darren McDonald	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 “Actualizing” Human Resource Management: The Case of a Japanese Manufacturer Pp. 1 ~16 (16 ページ)	単	2004.06.00	Art of Management Seminar 学会 大会報告論集	ある日本メーカーのケーススタディを取り上げ、HRM の戦略を通じて、マネジメントのレトリックと現場の現実の差を縮めることを分析し、理論化した。野中郁次郎先生のナレッジマネジメント (特に「場」と tacit/explicit knowledge) と、内山研一先生の情報システム論 (特にアクチュアリティ/リアリティ) を人的資源管理論に適用した。いわゆる、個人個人の持つ仕事の tacit と explicit の両面を人的資源管理の戦略に活用することによって、経営のレトリックと現場の実態を縮めることが可能になる。		
2 Closing the Gap Between Rhetoric and Reality in Human Resource Management Strategy: The Case of a Japanese Manufacturer Pp.103~116 (14 ページ)	単	2004.09.00	『経営論集』第 8 号 (2004 年 9 月)、大東文化大学経営学会 pp.103-116	Art of Management Seminar 学会、大会報告論集 「“Actualizing” Human Resource Management: The Case of a Japanese Manufacturer」をさらに理論化して、今後の人的資源管理の役割を述べた。それは、今までの「仕事」が中心であった経営方法を根本的に考え直し、今後、組織の中の人の「役割」をベースにして新たな経営方法を生み出す、ということである。また、アコモデーションを通じて、従業員の間には存在している多様性を活用し、会社のためのシナジー効果を生み出すことを述べた。		

3	Developing and Implementing a Framework to Study Human Resource Management in Venture Companies (Start-up Companies) in Japan No. E40 Pp. 1~44 (44 ページ)	単	2006.03.00	大東文化大学経営研究所 英文リサーチ・ペーパー	一年間のベンチャー企業でのフィールドワーク (参加型研究方法) のための研究枠組みを構築し、その上で、それを実行し、そこから得た発見を述べた。大きな発見は、一般的に論じられている大手企業用の人的資源管理方法をベンチャー企業に適用はできず、ベンチャー企業では、「仕事」を中心にした管理方法を適用せず、自己実現を強く求めるベンチャー企業社員にとっては、「役割」管理を適用するべきだ、ということだった。
4	Understanding Diversity Management in Companies in Japan: Preliminary Approaches in Applying Grounded Theory No.E46 Pp. 1~32 (32 ページ)	単	2008.03.00	大東文化大学経営研究所 英文リサーチ・ペーパー	一年間を通じて、日本にある企業のダイバーシティ・マネジメントの実態を明確にするための研究枠組みを開発し、その枠組みに基づいてダイバーシティマネージャーと面接し、最初の段階の分析結果を述べた。アメリカで開発された、研究枠組みに用いた質的研究方法であるグラウンデッドセオリーを、日本の研究現場に適用するために再構築し、それをフィールドワークに活用した。
5	「Actualizing' Diversity Management in Japanese Companies: A Diversity Manager's Re-Conceptualization and Gemba Implementation」 Pp. 41~58 (18 ページ)	単	2008.07.00	International Workshop Phenomenology, Organisation and Technology 学会第 6 回報告論集	現象学的な視点から、日本の或る企業のダイバーシティ推進室長(Diversity Manager)が考える「ダイバーシティ・マネジメント」の概念化、計画と実践を中心に分析し、「ダイバーシティ」に対する新しい概念を開発した。この研究はフィールドワーク (現場での面接、観察・調査)、いわゆる、質的研究アプローチを基に、いくつかの研究対象のプロセス・機能を深く調べ、リッチなデータを活用することが出来た。
6	「The Diversity Manager and the Japanese Company: A Japanese Diversity's Experience in Conceptualizing and Implementing Diversity Management」 Pp. 0~22 (23 ページ)	単	2008.12.00	Euro-Asia Management Studies Association 学会第 25 回報告論集	私が数年間行った、日本におけるダイバーシティ・マネジメントの研究で発見したものは、ダイバーシティ・マネジメントを成功させるためにはダイバーシティ推進室長(Diversity Manager)が一番重要な役割を持つということだった。しかし、日本の Diversity Manager の実態に対する研究はほとんど行われていない。この研究の一番の目的は Diversity Manager 自身がどのように「ダイバーシティ」の概念を構築するのか、また、ダイバーシティ・プログラムをどのように計画し、実行しているかを詳しく調べ、モデル化 (論理化) することだった。この論理化の構築と共に、質的研究を通じて分かったことは、①多くの Diversity Manager は、Diversity Manager になる前に、差別を経験しており、「ダイバーシティ」ということを自分で勉強して、自分の企業の状況に適応させるように概念化する。②ダイバーシティのベースに個人個人の高いプロフェッショナル意識が必要である。そして、③働く「場」のなかの Tacit と Explicit の様相はとても重要な役割を果たしている。
7	「Pioneering Diversity Management in Japan: The Experience of 'Company K's First Diversity Manager」 No. E-48, Pp. 1~27 (27 ページ)	単	2009.03.00	大東文化大学経営研究所 英文リサーチ・ペーパー	日本における「ダイバーシティ・マネジメント」はまだ新しい活動であると同時に、新しい概念になっている。そのため、欧米と違って、日本のダイバーシティ推進室長(Diversity Manager)には、日本での先輩、いわゆるメンターがいない。この研究の第一の目的は、初めて就任することになった Diversity Manager が日本で Diversity Manager の仕事を行うためにどのようなプロセスを踏んだかを調べることである。この質的研究を通じて分かったことは、Diversity Manager は、メンターがいない代わりに、他の会社の Diversity Manager と交流し、海外からの Chief Diversity Officer とコンサルタントを招き、「日本に適応するダイバーシティ」をグループ・スタディにより検討し、ダイバーシティ・マネジメントを実行するための討議と具体的な対策を話し合うことが頻繁に行われているということである。そして、効果的な Diversity Manager になるために、3つの sphere (分野) が関連して働いている。①ダイバーシティを認識するための道、②ダイバーシティ概念の構築とプロセスを理解するようにする、③ダイバーシティを実現するための「場」をつくる、ことである。
その他					

1	“Actualizing”Human Resource Management: The Case of a Japanese Manufacturer Pp. 1～16 (16 ページ)	単	2004.06.00	Art of Management Seminar 学会 大会報告論集	同学会の大会報告論集に出版した論文を基に発表を行った。特に、経営研究に用いる日本の哲学（西田幾多郎の「場」、和辻哲郎の「もの・こと」、及び木村敏の「アクチュアリティ・リアリティ」）を、ケーススタディを通じて紹介した。
2	「The Diversity Manager and the Japanese Company: A Japanese Diversity's Experience in Conceptualizing and Implementing Diversity Management」 Pp. 0～22 (23 ページ)	単	2008.12.00	Euro-Asia Management Studies Association 学会第 25 回報告論集	「The Diversity Manager and the Japanese Company: A Japanese Diversity's Experience in Conceptualizing and Implementing Diversity Management」をさらに開発して発表した。特に、ダイバーシティ推進室長になるプロセスの問題点を明らかにした。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1996.00.00	～	現在	Euro-Asia Management Studies Association 会員
2	1996.00.00	～	現在	産業・組織心理学会会員
3	2002.00.00	～	現在	The Association of Japanese Business Studies 会員

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	講師	氏名	高田 茂臣	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『19世紀ハンガリーの産業革命ーハンガリー資本主義像の再検討ー』	単	2008.03.00	大東文化大学経営研究所研究叢書 (ISBN9784904108185)	v + 191 頁 レフェリー無		
論文						
1 「ハンガリーー農業国の工業企業」	分担執筆	2005.02.00	経営史学会編・湯沢威編集代表『外国経営史の基礎知識』有斐閣	320-321 頁 レフェリー無		
2 「ブダペシュト製粉業における工場制度の確立ー近代技術の導入と資本ー賃労働関係の成立を中心にー」	単	2006.03.00	『社会経済史学』(社会経済史学会) 第 71 巻第 6 号	73-94 頁 レフェリー有		
3 「19世紀ハンガリーにおける革新的企業家活動ーガンツ鉄・機械工場の創業と発展の事例に即してー」	単	2006.06.00	『企業家研究』(企業家研究フォーラム) 第 3 号	1-16 頁 レフェリー有		
4 「ガンツ鉄・機械工場の電機事業戦略ー『第二次産業革命』とハンガリー工業企業ー」	単	2006.06.00	『経営史学』(経営史学会) 第 41 巻第 1 号	28-46 頁 レフェリー有		

5	「近代ハンガリーにおける高等技術教育機関の成立と『産学連携』の起源－内燃機関の開発を中心に－」	単	2007.11.00	『西洋史研究』（西洋史研究会）新輯第36号	92-107頁 レフェリー有
6	「オーストリア・ロイドの創業と発展」	単	2008.12.00	『大東文化大学経営論集』（大東文化大学）第16号	27-45頁 レフェリー無
7	「第一次大戦前ハンガリーへのテイラー・システムの導入－ガンツ電機の事例－」	単	2009.03.00	『大東文化大学紀要<社会科学編>』（大東文化大学）第47号	189-195頁 レフェリー無
8	「近代オーストリアにおける銃器工業の発展－オーストリア兵器工場の事例－」	単	2009.03.00	『大東文化大学経営論集』（大東文化大学）第17号	49-57頁 レフェリー無
その他					
1	「国産の重工業企業は衰退～Jónapot from Hungary,ハンガリー通信（20）」	単	2004.06.07	『千葉日報』（千葉日報社）朝刊	留学中の新聞寄稿 レフェリー無
2	「EU加盟前後のハンガリー～留学体験を基に～」	単	2004.12.18	比較経済体制研究会報告, 京都大学	レフェリー無
3	「ブダペシュト製粉業における工場制度の確立」	単	2005.03.26	経済空間史研究会第4回研究会報告, 鏡が池碧山亭(福島県二本松市)	レフェリー無
4	「ハンガリー資本主義像の再検討－農業大国から先進工業国へ－」	単	2006.11.18	西洋史研究会大会自由論題報告, 東北大学	レフェリー無
5	「〈書評〉薩摩秀登著『物語 チェコの歴史』（中公新書, 2006年）」	単	2006.12.00	『比較経済体制研究』（比較経済体制研究会）第13号	120-124頁 レフェリー無
6	「近代フィウメの産業的背景－カッター教授研究会コメント－」	単	2008.01.12	政治経済学・経済史学会兵器産業・武器転移史フォーラム第10回会合報告, 東京大学	レフェリー無
7	「第一次大戦前ハンガリーへのテイラー・システムの導入－ガンツ電機の事例－」	単	2008.10.25	政治経済学・経済史学会秋季学術大会自由論題報告, 大東文化大学	レフェリー無し
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1998.04.00	～	現在	(社) 学士会会員	
2	1998.04.00	～	現在	ハプスブルク史研究会会員	
3	2000.00.00	～	現在	政治経済学・経済史学会会員	
4	2000.11.00	～	現在	社会経済史学会会員	
5	2001.12.00	～	現在	ドイツ資本主義研究会ADWG会員	
6	2001.12.00	～	現在	経済空間史研究会会員	
7	2002.04.00	～	現在	経営史学会会員	
8	2005.08.00	～	現在	企業家研究フォーラム会員	

9 2007.06.00 ~ 現在

西洋史研究会会員

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	講師	氏名	松崎 友世	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 低地位集団のネガティブな社会的アイデンティティ対処方略としての新しい次元比較方略	共著	2005.03.00	日本グループダイナミクス学会、実験社会心理学研究第 44 巻 2 号	地位の低い集団がポジティブな社会的アイデンティティ (SI) を獲得しようと試みる方略である新しい次元比較方略に注目し検討を行った。ここでは、低地位集団、高地位集団ともに検討した。本実験では地位の異なる集団間の比較次元として低地位集団に関連した次元を加え検討を行った。その結果、低地位集団は自集団に関連し (得意である次元)、地位決定に関係ない次元で内集団を高く評価し、ポジティブな SI となることが明らかになった。(松崎友世・本間道子) 98-108 頁。		
2 看護職者の職業アイデンティティについての組織心理学的視点からの検討	共著	2005.06.00	医学書院、看護研究第 38 巻 3 号	看護師、准看護師が看護職務をどのように構造化し、また両看護師間の看護職務の相互認識、さらに職業アイデンティティがいかなる看護職務により規定されているのか検討を行った。その結果、職業アイデンティティについて、看護師では医療知識が主要な規定因であり、一方、准看護師では実務技術が主要な規定因となっていた。このように両資格間で職業アイデンティティを規定する要因に差異が認められた。(松崎友世・本間道子) 65-77 頁。		
3 「格差のある集団間行動の認知的・動機的過程に関する研究—社会的アイデンティティ理論を背景として—」		2005.09.00	博士論文、日本女子大学	集団間でみられる集団成員としての行動 (集団間行動)、あるいはその現象に注目し、その心的過程を実証的に検討した。本論文での重要な点は、格差のある集団間関係を相対的な比較 (内集団と外集団) から検討し、さらにその心的過程を認知的、動機側面の両方から検討したことである。構成は 5 つの実験研究、2 つの調査研究を中心に①格差のある集団間関係における集団間行動、②マイノリティ集団の肯定的社会的アイデンティティの獲得方略、③集団内関係が集団間関係に及ぼす影響となっている。		

4	集団間関係の視点から見たステレオタイプング、偏見の社会心理学的研究		2007.05.00	独立法人学術振興会文部科学省補助金、研究成果報告書	独立法人学術振興会文部科学省補助金（基盤研究 C、課題番号 17530460） 研究代表者：松崎友世。 集団間関係での集団間の葛藤、および集団統合におけるメンバーの社会的アイデンティティの変化について、実験的研究、フィールド研究により検討を行った。実験的研究では集団間の補完的な相互依存関係が集団、組織の統合に効果的であることを明らかにした。さらにフィールド研究においては合併企業を対象とし、旧組織および新組織に対する従業員の評価、企業文化の変化、同一化の変化を検討した。
5	地位の格差のある集団間関係における内集団、外集団のステレオタイプングについての検討	単著	2008.03.00	日本女子大学人間社会研究科紀要 14 号	本研究はステレオタイプ化や偏見を、地位の格差のある集団間関係における集団変動性知覚とその方向性、比較次元で説明した。従来の集団変動性知覚の測定法と合わせ、新たな手法を用い、内集団、外集団の評価の方向性の比較を行った。また次元により変動性や方向性が異なるため、地位に関連した次元、関連しない次元での検討を行った。その結果、マジョリティはマジョリティの位置付けに関連する側面、マイノリティとの違いを鮮明にし、自分たちの集団をより好意的にステレオタイプ化した。 117-132 頁。
6	集団内地位が集団内変動性、集団間差異化の知覚に与える効果	単著	2009.03.00	日本女子大学人間社会研究科紀要 15 号	本研究では、集団内地位（高地位・低地位）が集団間の差異化に及ぼす影響を認知的プロセス、動機のプロセスから検討することを目的とした。ここでは認知的プロセスとして変動性知覚つまりステレオタイプング、動機のプロセスとして集団間評価での内集団ひいき、また内集団同一化について検討を行った。 本実験では、独立変数として課題における成績により一次的に地位を振り分け集団内地位を操作した。成績のよい成員を高地位、悪い成員を低地位とした。また松崎（2008）で用いた課題の得点により変動性知覚およびその方向性の測定を行い、ステレオタイプングの指標とした。その結果、高地位群は内集団の平均を外集団よりも高く評価し、また高地位群は、内集団、外集団の変動性知覚とともに低地位群よりも小さく知覚していた。さらに高地位群、低地位群とも内集団、外集団の変動性に関して差がなく、同程度の変動性と知覚していた。これらの結果から高地位群と低地位群では社会的アイデンティティの顕現化の程度が異なる可能性が示唆された。この点を明らかにするためには、集団のアイデンティティと個人のアイデンティティの顕在化の程度をみる必要があると考えられるため、今後さらに検討が必要である。
その他					
1	集団内の地位の違いによる集団変動性知覚および集団間評価の方向性の検討	共同	2004.07.00	第 45 回日本社会心理学会大会発表論文集（北星学園）	松崎友世、本間道子。 482-483 頁。
2	集団間の類似度の違いがステレオタイプに与える影響—集団変動性の知覚を手がかりとして—	共同	2005.09.00	第 46 回日本社会心理学会大会発表論文集（関西学院大学）	佐々木智佳子、松崎友世、本間道子。 662-663 頁。
3	The effect of complementary interdependence and successful outcome on superordinate group identity.	共同	2006.05.00	Association for Psychological Science 18th Annual Convention, New York, U.S.A.	T. Matsuzaki, M. Homma.
4	協力状況における相互依存関係および課題の成果が上位集団アイデンティティに及ぼす影響	共同	2006.09.00	第 47 回日本社会心理学会大会発表論文集（東北大学）	松崎友世、本間道子。 456-457 頁。
5	合併による新たな企業組織統合への心的プロセス	共同	2007.09.00	第 23 回産業・組織心理学会大会発表論文集（明治大学）	松崎友世、本間道子。 147-150 頁。

6	職場ストレスによるパフォーマンスへの影響	共同	2008.08.00	第24回産業・組織心理学会大会発表論文集(上智大学)	松崎友世、小山田恵美、本間道子。 29-32頁。
7	キャンパスライフ適応テスト開発のこころみ	共同	2008.09.00	第72回日本心理学会大会発表論文集(北海道大学)	松崎友世、久能代嗣。 219頁。
III 学会等および社会における主な活動					

(表 24)

所属	経営学部企業システム学科	職名	特任講師	氏名	伊澤 啓子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

環境創造学部

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	植野 一芳	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価			2006.12.00	大東文化大学授業評価(平成 18 年 12 月実施)において、2 教科についてそれぞれ平均値 4.1 と 4.3(5 段階評価)と比較的高い評価を得た。			
2) 大東文化大学授業評価			2007.12.00	大東文化大学授業評価(平成 19 年 12 月実施)において、2 教科ともに平均値 4.7(5 段階評価)と高い評価を得た。			
3) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価(平成 20 年 12 月実施)において、2 教科についてそれぞれ平均値 4.9 と 4.4(5 段階評価)と高い評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「少子化対策の動向とその検討—次世代育成支援対策前史として—」	単	2005.11.00	千葉明德短期大学『千葉明德短期大学研究紀要 第 26 号』 刊行	依然として合計特殊出生率の回復は見られず、少子化が進んでいる。それでは、こうした少子化の進展が提起するものは、一体何なのだろうか。本稿では、こうした問題意識をベースに、1990～2002 年の期間に実施された主な少子化対策の内容とその変遷を追い、対策による成果などについて検討を行った。言い換えれば、現行の次世代育成支援という新たな展開に至る「前史」の検討である。B5 版 pp.17-26			
2 「次世代育成支援対策の動向とその検討」	単	2005.11.00	千葉明德短期大学『千葉明德短期大学研究紀要 第 26 号』 刊行	日本の少子化対策は、1990 年から 2002 年の間に大きく変化を遂げた。「エンゼルプラン」「新エンゼルプラン」「少子化対策プラスワン」という一連の流れの中で、「保育」中心から「在宅の子育て」を含むかたちへ、働く女性中心から男性を含めた働き方の見直しへ、さらに個人・家族から地域へ、など施策の対象領域は拡大した。しかし、依然として少子化に歯止めはかかっている。本稿では、2002 年の「少子化対策プラスワン」以降、現在に至る対策 (次世代育成支援、「少子化社会対策基本法」から「少子化社会対策大綱」へ動き、次世代育成支援対策としての「子ども・子育て支援プラン」など) を追い、検討を加えた。B5 版 pp.27-37			

3 「児童福祉法改正と変わる保育所」	単	2006.07.00	大東文化大学環境創造学会『環境創造 第9号』 刊行	1997年、児童福祉法は制定以来50年ぶりに改正された。さらに、保育所にかかわる主な改正は、2001年、2003年と続いた。これら一連の改正の中に、現在、そして今後の保育所のあり方を規定する大きな「うねり」の起点があるのでは、という問題意識が膨らむ。その「うねり」とは、保育分野の規制緩和であり、さらには、それを具現化した公立保育所の民営化などを含むいわゆる「保育改革」である。本稿では、97年以降の保育所にかかわる児童福祉法改正の動きを追い、その中に保育改革につながる起点を確認し、検討した。B5版 pp.1-16
4 「地域連携による教育実践—「なかいた環創堂」の事例から—」	共	2009.03.00	大東文化大学『大東文化大学紀要 第47号<人文科学>』 刊行	本稿は、2005年4月から08年3月にわたる中板橋商店街振興組合、板橋区、大東文化大学環境創造学部の三者協働による「商・学・公連携」事業について、教育実践という視点から分析・検討を加えたものである。また、様々な課題を抱えつつ、多様な人々がかかわり日々働いている「商店街」という空間において、学部教育の柱でもある実践主義・現場主義の実現に向けて活動を共有した参加学生と担当教員との実践記録でもある。共著者：小湊浩二、篠原章、植野一芳、塚本正文。B5版 pp.161-180
その他				

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1988.04.00	～	現在	国際公共経済学会（CIRIEC Japanese Section）会員、2006年度より理事
2	1996.09.00	～	現在	日本公共政策学会会員
3	2004.04.00	～	現在	NPO北町大家族理事
4	2005.04.00	～	現在	NPOマニフェスト評価機構監事・運営委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	埴山 俊二	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 共働学舎 (フィールドワーク) (個人) 授業 (夏季集中・宿泊研修)			1992.00.00	(平成4年度～17年度)長野県小谷村において障害を有する人や現代社会に馴染めない方々が農業を中心とする自立的共同生活を営んでいる。そこに学生とともに1週間程度滞在し、共働学舎の目指していることや現代社会を振り返る学びを継続している。			
2) 保育の思考をひらくー「保育内容演習」の可能性と陥穽ー			2006.12.00	千葉明德短期大学「研究紀要 第27号」 P61-80 保育参加を取り入れた「保育内容演習」の授業を概観し、その特異性と教育効果等についてコメント。授業内容それ自体を示すことによる反省的振り返り、学びの可能性、さらに保育参加レポートを活用した授業の課題について整理。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 保育創造学科における「保育創造」とは			2005.11.00	千葉明德短期大学「研究紀要 26号」 P57~66 千葉明德短期大学幼児教育科は17年度に保育創造学科に名称変更した。保育創造学科という名称は、幼児教育科としての教育の営みとその特質を踏まえ、かつ今後の在り方を託するものとして誕生した。そこで、その理念を整理するとともに、この学科名が示唆する方向目標や課題を提起した。			
2) 《高島平ルネッサンス》シンポジウム 2008 高島平団地の過去・現在・未来ー高島平再生プロジェクトの行方ー			2008.10.00	高島平ルネッサンスシンポジウム 2008 実行委員会 (現代GPに関する学内シンポ) パネリストとして参加。2008年6・7月に実施した「高島平団地住民意向調査」の結果を報告。地域活力の衰退にどう対応するか。団地生活を支えるための自律的活動の可能性や主体要件について提案。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 保育社会学入門	共著	2004.12.00	建帛社	P147~165 保育は生活の共同化によって成立し、さらに生活の共同化を促す。子どもがよりよく生きていくための関係性がまずあること、また関係性は「目的」のために手段化され一元的に機能するものとは区別されなければならない。そして、その人の在ることの「感情」が「価値志向的」に在りたいと深まることで「共同化」に動く。本論は、この「共同性」を「公共性」に導く試論である。共著者：巖光夫他			
論文							
その他							

1	高島平再生プロジェクトの可能性－「二つの過疎地」が結ぶ未来－	共同	2008.10.00	政治経済学・経済史学会 秋季学術大会パネルディス カッション	パネリストとして参加。2008年6・7月に実施した「高島平団地住民意向調査」の結果を報告。地域活力の衰退にどう対応するか。団地生活を支えるための自立的活動の可能性や主体要件について発表。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1992.04.00	～	現在	日本社会学会会員	
2	1992.04.00	～	現在	日本村落研究学会会員	
3	1996.04.00	～	現在	日本社会臨床学会会員	
4	1996.05.00	～	現在	日本保育学会会員	
5	2003.05.00	～	現在	千葉県民間保育振興会 「保育実践研究会」講師	
6	2004.07.00	～	2005.03.00	社会福祉法人千葉明德会千葉市土気地区新設保育所提案書作成	
7	2005.04.00	～	2007.03.00	千葉市家庭教育推進協議会委員	

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	川村 千鶴子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
	教育実践上の主な業績	年月日	概要			
1	教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)					
	1) 本ゼミにおける調査手法概要書をゼミ生と共同作成	2009.04.00	『多文化共生フィールドワークの手法—現地調査のポイント—』を、特に「留学生の言語習得の過程と問題点」に注目した。2009年4月～現在			
	2) 第1回 太平洋諸島シンポジウムの事前準備活動	2009.04.00	トンガ人留学生から「異文化間交流」や「多文化社会」の授業にて個人史を聞く、あるいはビデオ教材等を用いて理解や対話を深めた。2009年4月～現在			
	3) メディアリテラシーの実践	2009.04.00	現代的課題である移民問題の新聞記事を通じて、「メディアは常に正しいのか」という点について、ほぼ毎回の授業で資料の提示を行っている。2009年4月～現在			
	4) 研究上の大学生活のアプローチ	2009.04.00	「入門ゼミ」において図書館の研究上の利用方法について実地(書庫等)で映像資料を含めた書籍検索方法等を指導した。			
2	作成した教科書、教材、参考書					
	1) 『移民政策へのアプローチ—ライフサイクルと多文化共生』編著 明石書店	2009.05.00	総頁 250 頁 「はじめに」 筆者は第 I 部 移民政策の地平 第 1 章 移民政策へのアプローチ 第 II 部 第 1 章 ともに生まれる 1) 人間の誕生と子どもの権利 第 10 章 ともに吊う 5) 移民政策につなぐ移民博物館を担当。共編者：近藤敦 中本博皓の 3 名			
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
	1) 第 1 回 「在日外国人の推移と海外の移民国家の現状」	2004.09.28	国際理解講座 主催：渋谷区社会教育 場所：渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館 テーマ：「移住の時代—内なる国際化の現状」			
	2) 第 2 回 「多文化共生社会—出産・保育・教育—」	2004.10.05	国際理解講座 主催：渋谷区社会教育 場所：渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館 テーマ：「移住の時代—内なる国際化の現状」			
	3) 第 3 回 「外国人の社会保障—居住・医療・就労—」	2004.10.19	国際理解講座 主催：渋谷区社会教育 場所：渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館 テーマ：「移住の時代—内なる国際化の現状」			
	4) 第 4 回 「少子高齢化における移民戦略と留学生問題」	2004.10.26	国際理解講座 主催：渋谷区社会教育 場所：渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館 テーマ：「移住の時代—内なる国際化の現状」			
	5) 第 5 回 「日本の基本理念と多文化共生庁の創設」	2004.11.02	国際理解講座 主催：渋谷区社会教育 場所：渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館 テーマ：「移住の時代—内なる国際化の現状」			
	6) 講演 板橋区連続講座 テーマ：「多文化を語ろう！触れよう！共生する街・板橋をつくる連続講座」	2005.02.27	主催：APFS、場所：板橋区グリーンホール			
	7) 講演：「やってみようホームステイ」	2005.06.19	講演 ホストファミリーセミナー主催：高崎市国際交流協会 対象：高崎市民 日時：2005年6月19日(日) 2時から4時			
	8) 講演題目「やってみようホームステイ」	2005.06.19	講演 ホストファミリーセミナー 組織名称 高崎市国際交流協会 会場 高崎市役所ホール 対象 高崎市民 150 名			
	9) 講演題目 多文化共生のまちづくり—新宿モデル—	2005.08.16	講演 新宿区・早稲田大学協働連携「新宿まちづくり学」講座 組織名称 早稲田大学、新宿区 会場 小野記念講堂(早稲田大学) 対象 区民代表 376 名			
	10) 入門ゼミ発表会において最優秀賞と優秀賞を受賞	2008.02.00	「ミャンマー政権と在日ミャンマー人の実態」、「東松山市内における日系ブラジル人児童の実態調査報告」。			
	11) 入門ゼミ発表会において最優秀賞を受賞	2009.02.00	「難民支援の現状と難民政策の課題」に関する調査報告。ゼミ生は実際の関係者(日本人・難民)と意見交換や交流を深めた。			
4	その他教育活動上特記すべき事項					

1) 多文化社会研究会 理事長	1990.04.00	外国人問題、エスニシティ、都市社会学、多民族多文化問題に関心のある研究者、実践者、外国人をまとめ、毎月研究会やフィールドワークを企画・運営する。また、多文化教育の実践研究活動を通じて地域社会のよりよいまちづくりに貢献。論文集『多文化共生社会の探求－外国人と法－』を編集、執筆し、平成12年5月に刊行、全国の関係者に配布した。(日本財団の助成による)(平成2年4月～現在)
2) 国際理解教育の実践と理論化	1991.00.00	学校教育、社会教育の両方の分野で広く実践し、その概念の構築に努め、人材育成に貢献した。特に『地域における国際理解教育の推進に関する実証的研究』平成7年～8年度調査研究報告書では日本における学校と地域との連携や地域の中での国際交流と国際理解教育の展開を分析した。総合的学習の具体的なモデルを示してきた。ホームステイ講座、国際交流講座、国際理解教育、多文化教育、外国人問題、保育関係職員研修、保育士研修会、コミュニケーション講座、多言語講座など大学や市民講座の講師として実践してきた。(平成3年～現在)
3) 多文化教育の実践と理論化	1998.00.00	多文化教育研究所を創立し、多文化共生社会の実現に向けて、多文化主義の矛盾点を分析し、その分析と提言を論文として学会で発表し、刊行物として広く社会に提起している。多文化教育の普及に取り組み、人権に関する積極的な啓蒙活動に取り組んでいる。(平成10年～現在)
4) NPO法人 ミクロネシア振興協会顧問	2005.09.01	ミクロネシア連邦共和国を調査、視察し、交流を深めている。
5) 国立民族学博物館研究員(2007.4月～現在) 研究テーマ:「国籍とパスポートの人類学」	2007.04.00	2ヶ月に一度研究会を開催。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 『異文化間介護と多文化共生－誰が介護を担うのか－』	編著	2007.05.01	(株) 明石書店	高齢化する多文化社会の諸相を調査・分析し、異文化間介護の実態と課題を浮きぼりにした。総ページ頁 368 頁、まえがき(9～18 頁)と第1章「異文化間介護の視座」を担当。(20 頁～69 頁) 共編者: 宣元錫、共著者: 川野幸男、渡辺幸倫、李錦純、藤田美佳、堀内康史、根本歩美
2 『「移民国家日本」と多文化共生論－多文化都市・新宿の深層－』	編著	2008.05.15	(株) 明石書店	グローバルな人の移動は、世界各地に多文化都市を誕生させた。本書は日本社会のマルチカルチュラルな社会的位相を歴史的に捉え、人のライフステージにそって多文化共生の実態を明晰化し、「多文化共生論」を体系化した。総頁数 405 頁。一川村は「刊行の主旨、第3章、終章、多文化共生年表を執筆。他 10 名の共著者。刊行の趣旨 (pp.3-13)、第I部 第3章「ディアスポラ接触－地球が日本を超えるとき」(pp.75-102) 第三部 終章「問われる国の理念と多文化共生政策」(pp.306-385) 「多文化共生年表(地域社会の多文化共生への動きと日本の外国人政策)」(pp.386-401) 索引(pp.402-405) 日本は明治初頭から移住者を受け入れ、現在は 215 万人の登録者がおり、日本国籍を取得した者も多い。国際結婚は 17 組に一組、移民は隣人であり身内の存在である。多文化の磁場となっている「新宿」をフィールドとして人とのライフサイクルにそって「多文化共生論」を体系化した。出産・保育・教育・就学・就労・結婚・祈りの場・街づくり・老後・看取りの深層に迫り、「移住」「移民」の本質を明晰化した。世界人権宣言や国際人権規約に照らし合わせた国内法の整備、国籍法や在留資格の見直し、外国人のまちづくりへの参画、具体的な多文化共生政策が必要とされる。公用語習得を重要視するヨーロッパの移民国家をそのまま模倣するのではなく、マルチリンガルな子どもたちの成長なども視野にいれた政策、専門研究機関の創設、多文化共生専門員の養成と身分保障、移民集住地区への予算補助が急務。移民歴史博物館の創設を提言している。編著者: 川村千鶴子 共著者: 陳天璽、李錦純、稲葉佳子、藤原ゆかり、藤田ラウンド幸世、麦倉哲、李スンミン、李ホヒョン、河合優子、渡辺幸倫

論文				
1	「国際理解と多文化共生—移民政策から多文化共生政策への転換—」	単著	2004.11.30	『国際理解』35号 帝塚山学院大学 国際理解研究所 p41～p54 日本が、国際人権規約、子どもの権利条約、人権差別撤廃条約に批准しながら、国際法と照らし合わせた国内法の整備が遅れていることを指摘。国籍中心主義から脱却し、外国籍住民のまちづくりへの参画、ボランティアの多文化共生指導の資格制度、超過滞在者への対応、留学生問題など、多文化共生政策の道筋を明らかにした。
2	研究成果報告書『太平洋島嶼諸国における経済発展と環境問題』	共著	2005.06.00	平成14年度～平成16年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)、研究実績報告書(2005年4月、文科省に提出) 研究成果報告書<2005年6月提出>200部発行 国内・海外関係者へ配布 研究代表者 川村千鶴子 共同執筆者 貫隆夫、山口由二、福島斉、北沢恒人、玉井昇、渡辺倫幸、貫真英 編著者&発行人:川村千鶴子 課題番号:14402049 研究領域:複合新領域・環境学・環境影響評価・環境政策、リサイクル調査対象国:トンガ王国、サモア独立国、マーシャル共和国、パラオ共和国、ツバル、ミクロネシア連邦、フィジー、米国、豪州、日本国内 総ページ数:298頁 目次 はしがき、序章(英文)Environmental Issues by Grobal-Ethnoscape Point of View in the Pacific 第1部 ポリネシア地域における環境問題の実態調査報告 第2部 ミクロネシア地域における環境問題の実態調査報告 第3部 環境問題の解決に向けてシンポジウムの開催(2005年2月14日)、座談会の開催(2005年3月10日)テーマ「太平洋島嶼諸国の連帯と環境問題への取り組み—廃棄物・廃車問題への日本の貢献—」 巻末資料:掲載された新聞記事
3	論文題名 第IV部 どうする!日本の移民受け入れ なぜ「多文化共生庁」が必要なのか 205頁～218頁 「多文化共生庁」がもたらすもの 219頁～228頁	単	2005.08.31	『日本における移民政策を考える—人口減少時代の課題—』 編者依光正哲(一橋大学教授) 明石書店 人口減少社会の到来は、日本の経済規模を縮小させ、むしろ労働力過剰・大失業時代となる可能性が高く、外国人労働者への依存や移民導入はメリットがないという主張がある。しかしながら外国人と日本人という二項対立的発想から脱却し、日本がいかなる移民政策をとるにせよ、その前提として「ともに生きる」理念を掲げた「多文化共生庁」の設置が急務であることを多面的に論証した。
4	研究調査報告書『パラオ・ミクロネシア廃車実態報告書 太平洋島嶼国における廃車適正処理に向けて』		2005.09.00	発行:特定非営利活動法人全日本自動車リサイクル事業連合 発行人:天明茂 編集人:竹内啓介 執筆:「おわりに」(pp.34～35)
5	「習志野俘虜収容所とポーンベイ(旧称ポナベ)人捕虜の帰還—オーラル・ヒストリーの可能性—」	単著	2006.09.00	『島嶼研究』第6号日本島嶼学会 日本島嶼学会の紀要『島嶼研究』第6号での論文。日独戦争後の捕虜と日本人とのあたたかい交流に始ったポナベでの人の移動とライフヒストリーをオーラルヒストリー手法で探究。オーラルヒストリーの可能性と方法論を論じている。(129～149頁)。(査読あり)
6	「多文化共生政策の課題—その社会的位相と多文化共生基本法の制定—」	単著	2008.03.00	『環境創造 第11号』大東文化大学環境創造学会 P1～P36.移民時代における多文化共生政策の課題を外国人の定住化とあわせて提起する①高齢化と介護②多文化共生の専門機関の必要性③ボランティアの評価と資格付与システム④国際人権基準に照らし合わせた人権保障と国内法の整備など。年表「戦後の日本の入管政策と多文化社会年表」を作成した。
7	『ディアスポラと社会変容—アジア系・アフリカ系移住者と多文化共生の課題—』	共著	2008.03.20	国際書院 国際シンポジウム「移住者の人権と多文化共生を目指して—アジアとアフリカのディアスポラの比較」監修:武者小路公秀、浜邦彦、早尾貴紀編 共著者:ドウドウ・ディエン、リサ・ロウ、陳天璽、河合優子他 (pp.105-107、174-176、187-188、200-223)
8	「ディアスポラ接触とは何か—新宿区大久保地区の多文化化の歴史から—」	単著	2008.03.31	『大東文化大学紀要第46号人文科学』大東文化大学 多文化都市、新宿の表層、ディアスポラ接触とは、ほか。(pp.143～166) 「ディアスポラ接触(diaspora contact)」という概念を切り口とし多文化共生論を展開した。ディアスポラ接触の歴史を概観し、ディアスポラの事例を分析し、ディアスポラ接触の語りと追体験を考察。ディアスポラ接触と異文化接触との違いとその有効性を明らかにした。人の移動はディアスポラの語りをさらに世界に広げる。接触領域(contact zone)として市民が創った博物館は地域に何をもたらしているのか。人の移動と人間の本性を見据えるディアスポラ学の意義を明晰化した。

9	「移民博物館がもたらすもの」	単	2009.01.01	『国際人流』第260号 財団法人入管協会 編集協力：法務省入国管理局	B5判 総頁56頁中 p20～p23 格差社会にあって人権意識を培う移民博物館の創設が、コミュニティの崩壊を防ぐ力をもっていることを明らかにした。世界各地に存在する移民博物館と日本に創設された移民博物館の経緯と有効性を分析し、トランスナショナルな機能を論じた。大学のカリキュラム改革と社会貢献とつながりを明らかにしている。
10	「多文化共生専門職の養成制度」	単	2009.02.01	『国際人流』第261号 財団法人入管協会 編集協力：法務省入国管理局	B5判 総頁56頁中 p22～p25 多文化共生社会の実現のために多文化共生専門員を養成し、活躍の場と身分保障の必要性を論述した。特に出産の現場、医療、難民支援の場での有効性を説き、大学のカリキュラム改革が進みつつあること、カウンセラーやアドバイザーの養成制度の必要性と展望を明らかにした。
その他					
1	テーマ 「太平洋島興国の自立と連帯」	単	2004.06.28	主催：NPO法人 汎太平洋上級教育推進機構 場所：国連大学本部ウ・タント国際会議場 後援：国際連合大学	
2	国際シンポジウム 第9回 太平洋芸術祭特別シンポジウム 基調講演 「Environmental Issues through a Global Ethnoscape Point of View” (9th Festival of Pacific Arts Symposium and Workshop: Koror, Palau. Main Theme :” How do we maintain our culture and compete in this Economic Globalization with our limited natural resources.”)	単	2004.07.24	場所：コロール会議場（パラオ）パラオ共和国政府	パラオ共和国政府の招聘による 太平洋島嶼諸国 22カ国の代表が参加
3	テーマ「太平洋島嶼諸国の連帯と環境問題への取り組みー廃棄物・廃車問題への日本の貢献ー」	単	2005.02.14	場所：大東文化大学板橋校舎 主催：大東文化大学環境創造学部 科研グループ・バシフィック・ウェイ研究会 場所：大東文化大学板橋校舎	国際シンポジウム開催 パネラー 文科省科学研究費補助金によるミクロネシア大使夫妻、外務省、学会関係者など約100名が集う。パネルディスカッション テーマ：「日本は何ができて、どのような関わり方をすべきか」
4	シンポジウム基調講演とパネルディスカッションのコーディネーター、テーマ：「外国人住民から見た地域社会」		2005.03.06	主催：大田区区民生活部国際交流支援課、場所：大田区役所本会議場	
5	招請会議：NPOミクロネシア振興協会支部 テーマ「自動車整備事業の展開に伴う環境などの課題と諸研修テーマについて」		2005.08.04	場所：PCR ホテル内 AMD-F SM事務所 ボンベイ（ミクロネシア連邦）	
6	講演題目 「文化人類学と自動車整備事業の展開に伴う環境などについて」		2005.08.20	国際会議 講演NPOミクロネシア振興協会支部会場 ザ・ビレッジホテル(ボンベイ州首都)	対象 ボナペ人、日本人住民、日本大使館職員 ボンベイ（ミクロネシア連邦）在住者 Environmental Issues through Global Ethnoscape Point of View.
7	講演題目 「太平洋の平和と環境問題」		2005.08.23	組織名称 外務省、国際交流団体 会場 ザ・ビレッジホテル(ボンベイ州、ミクロネシア連邦)	対象 神奈川県の高校生

8	「外国人と人権」		2005.09.14	平成 17 年度人権啓発指導者研修会 組織名称 法務省人権擁護局、財団法人・人権教育啓発推進センター 会場 アイビーホール青学会館(渋谷区)	対象 全国自治体職員の研修者 100 名 テキスト 「平成 17 年度人権啓発指導者養成研修会テキスト」 168 頁
9	第 1 回「ミクロネシア連邦」		2005.10.08	連続講座 板橋環境講座 講座名称 「旅してみませんか。太平洋島嶼諸国」 組織名称 板橋区、大東文化大学エクステンションセンター 会場 大東文化大学板橋校舎	対象 板橋区民 113 名
10	第 8 回「太平洋・島サミットにむけて」		2005.12.03	連続講座 板橋環境講座 講座名称 「旅してみませんか。太平洋島嶼諸国」 組織名称 板橋区、大東文化大学エクステンションセンター 会場 大東文化大学板橋校舎	対象 板橋区民 113 名
11	「高齢化する多文化社会ー共に老後を支えあうー」	単	2006.06.03	異文化間教育学会第 27 回大会 会場：関西大学高槻キャンパス	家族介護の困難と限界、老人ホームの可能性。国籍・民族・障害の有無を乗り越えて、ともに老後を支えあう尼崎市の特別養護老人ホームの事例から。
12	「異文化間介護の射程ーオーストラリアと日本の事例比較研究と実態報告ー」	単	2007.04.27	外国人政策研究所	
13	「なぜ異文化間介護なのか」在日外国人の高齢化とグローバルなケア	単	2007.06.01	異文化間教育学会第 28 回大会 (目白大学)	労働者の導入を指摘しつつ「異文化間介護」のメカニズムを解く。異文化間介護における人権侵害をジェンダーの視点、国籍の視点、介護労働に対する眼差しなど重層的差別の実態から検証、研究したもの。さらに外国人介護士をめぐる問題と二国間協定、特定活動としての介護労働、介護福祉士の国家試験のあり方など超高齢化社会における異文化間介護の重要性を論じる。
14	「多文化共生フォーラムー多様な側面をもつエスニック・マイノリティとの共生ー」	単	2008.01.26	共催：山梨県立大学、山梨県 場所：山梨県立大学講堂	基調講演：「多文化間介護の理念と実践ー東京と尼崎の事例から」、パネルディスカッション：「多様な側面をもつエスニック・マイノリティとの共生」のコメントーターをつとめる。
15	基調講演「多文化都市における対話の可能性ー世界人権宣言を読み解きながらー」		2008.05.00	主催：早稲田大学 Team WSP	担当：シンポジウムの基調講演 概要：現代社会の特徴と多文化都市 (multicultural city)、「世界人権宣言 (Universal Declaration of Human Rights)」、多文化共生専門員の役割、対話概念と対話の可能性 会場：早稲田大学 講堂 対象：早大生と一般約 250 名
16	出版記念シンポジウムコーディネーター 『「移民国家日本」と多文化共生論』の合評会		2008.07.00	主催：多文化社会研究会	参加者：研究者、国際機関、自治体関係者 NPO 事務局長、商社 CSR 担当者他 60 名 研究発表：執筆者 10 名 コメントーター：滝澤三郎 (UNHCR 駐日代表)、近藤敦 (名城大学教授)、石川えり (難民支援センター)、吉村貴之、上原伸一、斎藤達雄、宣元錫、川野幸男、柴崎敏夫 会場：大東文化大学法科大学院第 1 会議室
17	特別講演『「移民国家日本」と多文化共生論』の射程と展開		2008.09.20	2008 年 9 月 20 日 21 日 国立民族学博物館	研究課題：小・中学校、高等学校の国際理解教育の理論と実践に関する研究 研究代表者：阿久津昌三 対象：国立民族学博物館共同研究者 会場：国立民族学博物館第 3 演習室
18	職員研修第 153 期 特別講義「人権行政」		2008.12.01	総務省自治大学校	対象：全国市町村の係長以上の職員 188 名 内容：日本における移民政策の考え方と自治体の人権行政と外国人施策の現状と課題

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.00	～	現在	多文化社会研究会理事長
2	1991.00.00	～	現在	日本国際理解教育学会会員

3	1994.12.00	～	現在	太平洋学会会員
4	1996.04.00	～	現在	トウイトウィヴァオと桜の会（トンガ交流会）顧問
5	1996.04.00	～	現在	異文化間教育学会会員
6	1997.04.00	～	2007.03.31	日本ニュージーランド学会
7	1998.04.00	～	現在	日本オセアニア学会会員
8	2002.08.00	～	現在	日本島嶼学会会員、理事(2005.09.00～2008.4)
9	2003.04.00	～	2008.01.00	外国人政策研究会
10	2004.04.01	～	現在	社団法人太平洋島嶼地域研究所維持会員
11	2005.09.01	～	現在	特定非営利活動法人ミクロネシア振興協会顧問
12	2006.04.00	～	現在	多文化間精神医学会会員
13	2006.04.01	～	現在	人権教育啓発推進センター維持会員
14	2007.04.00	～	現在	日本オーラルヒストリー学会会員
15	2008.04.01	～	現在	特定非営利活動法人難民支援センター難民スペシャルサポーター
16	2008.05.00	～	現在	移民政策学会理事（平成20年～現在）、紀要編集委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	篠原 章	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 中板橋商店街活性化事業と授業とのリンク			2005.04.01	教員有志と協力の上、板橋区並びに中板橋商店街振興組合と連携して、中板橋商店街に空き店舗を活用した「なかいた環創堂」を開店し、学生による商店街活性化事業を行っている。「財政」「地域研究」「環境創造ゼミ」などの講義では、同事業での現場体験を生かせるような内容の授業を展開している。なお、本事業は東京都・板橋区の助成を受けて行われた (2005～07 年度)。2005 年 4 月～現在。			
2) ときがわ町との連携事業と授業とのリンク			2005.04.01	埼玉県ときがわ町と連携して、同町の資源を生かした教育的取組を行っている。他の教員とも協力して、課外の農業体験、自然体験、インターンシップなどを行い、あわせて、「財政」「地域研究」「環境創造ゼミ」などの講義に、ときがわ町の情報を活用している。なお、この取組はこれまで文科省補助金を得て実施されてきた。2005 年 4 月～現在。			
3) 遠隔中継授業システムを活用した現場追体験型授業の実践			2005.04.01	遠隔中継授業システムを教室外に持ち出し、沖縄などから中継を行うことにより、学生が現場を追体験できるような実践的な授業を展開している。都市文化・地域研究の授業枠を利用して実施している。2005.04.01～現在。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 日本ロック雑誌クロニクル	単著	2004.12.17	太田出版	ロック・ミュージックに関わる日本の音楽雑誌ジャーナリズムの推移を包括的に検証し、いわゆる「音楽評論」のあり方とポピュラー・ミュージックの展開、ならびに両者の関係について都市文化論的な観点から詳細に検討を加えた。雑誌『クイック・ジャパン』における連載に加筆修正したもの。四六判 296 頁。			
論文							
1 人口減少時代における財政システムの構築	単著	2006.11.00	『国際公共経済研究 No.19』国際公共経済学会	高齢社会のもうひとつの側面である「少子化」「人口減少」に焦点を合わせ、現状を整理した上で今後の財政システムを構築する際の理論的な問題点について分析し、「公平性」「中立性」といった水準を再検討した。156・160 頁。A 4 版総頁数 247。			

2	地域連携による教育実践－「なかいた環創堂」の事例から－	共	2009.03.00	大東文化大学紀要第 47 号（人文科学）発行：大東文化大学	環境創造学部が取り組む地域連携事業のひとつである「なかいた環創堂」を例にとり、社会科学教育の実践のあり方について共同で研究した成果を論文にまとめたもの。小湊浩二、植野一芳、塚本正文と共著。A 4 版 20 頁。
その他					
1	人口減少時代の社会経済システム～国際的視点を念頭に～（共通論題・指名報告）	単著	2006.12.03	国際公共経済学会第 21 回研究大会	「人口減少時代の」高齢社会のもうひとつの側面である「少子化」「人口減少」に焦点を合わせ、現状を整理した上で今後の財政システムを構築する際の理論的な問題点について分析し、「公平性」「中立性」といった公準の再検討などについて報告した。
2	事例報告：商公学連携による地域活性化～板橋区中板橋商店街「なかいた環創堂」／高島平再生プロジェクト	共著	2008.05.31	日本地方財政学会第 16 回大会	特別企画セッション「地域振興策の現在」における学会指名報告。環境創造学部における地域活性化の試みを紹介し、教育授業ならびに地域振興事業としての可能性と問題点を論じた。小湊浩二・塚本正文（ともに大東文化大学）との共同報告。
3	事例報告：平成の大合併～埼玉県ときがわ町の場合～	共著	2008.06.01	日本地方財政学会第 16 回大会	特別企画セッション「検証・平成の大合併」における学会指名報告。都幾川村・玉川村の 2 村による合併で成立した埼玉県ときがわ町を例にとり、合併のメリット・デメリットを詳細に検証した。中藤和重（大東文化大学大学院）との共同報告。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1983.10.24	～	現在	日本財政学会会員（同理事 平成 20 年 4 月～）	
2	1991.04.25	～	現在	日本地方財政学会会員（同理事 平成 20 年 4 月～）	
3	2005.04.01	～	2007.03.31	埼玉県玉川村行政改革審議会委員長	
4	2006.10.01	～	現在	国際公共経済学会（C I R I E C）会員	
5	2007.04.01	～	2009.03.31	埼玉県川島町行政改革推進委員会委員長	
6	2008.07.01	～	2009.03.31	埼玉県東松山市東松山市立市民病院在り方懇談会委員長	

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	白山 肇	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 富山湾の水質汚濁と地域の温暖化 203・206	単著	2006.03.00	富山国際大学地域学部第6巻 (2006.3)	陸域からの流入 (一時汚濁COD) と内部生産COD (二次汚濁COD) との量的関係をこれまでの調査結果から解析し、内部生産COD寄与率の上昇が富山湾の汚濁及び海水温の上昇と深く係わっていることを明らかにした。		
2 海色衛生によって観測された富山湾における1998年と1999年のクロロフィルa濃度分布 7・22	共著	2007.01.00	海の研究第16巻第1号 (2007年1月) Oceanography in Japan 16(1),7-22,2007	富山湾の湾外と湾中央では春季と秋季に二回の季節的なブルームが見られた。また衛生で観測されたクロロフィルa分布の短期変動によって、反時計回りの流動が存在することと、間欠的な対馬暖流の流入によって湾奥の水が湾外に運び出されることが示された。		
その他						
1 無酸素状態における水中の有機塩素化合物の紫外線放射分解ーピカッと光をあてて、有害な水をきれいにー		2004.00.00	第3回とやま産学官交流会実行委員会、富山県国際会議場、2004年			
2 日中学際環境協カシンポジウムの背景		2004.00.00	富山県等 (富山市)、2004年	実行委員長		
3 国際協カ一地域におけるODAをとおした人材育成について		2004.00.00	ODAタウン・ミーティングインとやま、外務省等 (富山市)、2004年			

4	Water Pollution of Toyama Bay and Regional Warming	2005.00.00	Suggested Activities for HAB in the Northwest Pacific Region (第1回北西太平洋地域における赤潮/HABに関する国際ワークショップ) UNEP-NOWPAP WG3, タワー111スカイホール(富山)、2005年	
5	「日本海漂流～謎の貝殻が警告する～」	2007.04.22	テレビ朝日 素敵な宇宙船地球号(夜11時～11時30分)	南方から日本海流にのってやってくる漂流する“カイダコ”。この神秘的な海の生き物を追いながら日本の海の異変、環境問題を再提起する番組。ナレーター：緒形拳。制作協力者の1人として紹介された。(日本海のクロロフィルa衛星画像を提供した)
6	大東文化大学「《高島平ルネサンス》シンポジウム2007」～多世代共住「高島平モデル」の具体化に向けて～	2007.10.20	大東文化大学板橋校舎 多目的ホール	コーディネーターとして、5人のパネル(板橋区教育長、ホームヘルパー、高島平地区NPO代表、教員、学生)とともに議論を深め、まとめとして「文化発信力のある健康教育都市」創造の実施母体宣言を行った。

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.04.01	～	2007.03.31	富山県 JICA 派遣専門家 OB 会事務局長
2	1997.03.01	～	現在	社団法人 日本技術士会会員 環境部会員
3	1998.04.01	～	現在	社団法人 日本分析化学会会員
4	2001.06.15	～	現在	富山県青年海外協力隊を育てる会会長
5	2002.04.01	～	2008.03.31	社団法人 環境科学会評議員
6	2002.04.01	～	現在	(財)とやま国際センターとやま国際草の根交流賞選考委員
7	2002.06.15	～	現在	富山市民国際交流協会理事
8	2004.04.01	～	現在	社団法人 協力隊を育てる会評議員
9	2004.05.01	～	2005.03.31	富山国際大学と北京大学との学術協力事業(中国)
10	2006.05.01	～	現在	社団法人 協力隊を育てる会理事
11	2009.05.01	～	現在	社団法人 日本技術士会 総務委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	高山 洋一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業中に PC 利用、文章表現強化。		2008.04.00		授業中に新聞、インターネットで学生の現実問題への関心を促し、みずからの考えを文章・レポート化させている。		
2) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (2008 年 12 月実施) において、いずれの科目も高い評価を得た。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『現代金融論』	共著	2004.12.00	有斐閣 (川波洋一・上川孝夫編)	第 5 章「管理通貨と中央銀行」を担当。金本位制から管理通貨制への移行を歴史的・理論的に概説し、金融革新＝金融の新潮流における中央銀行の金融政策上の問題点を考察した。A5 版、総頁数 365 頁中 20 頁。		
2 『現代金融と信用理論』	共著	2006.01.26	信用理論研究会編	第 5 章「中央銀行と金融政策」第 1 節「中央銀行の性格規定」を担当し、中央銀行の歴史的理論的前提、銀行の銀行としての中央銀行と金融政策、中央銀行の L O L R 機能、金融システム安定と中央銀行・公信用を論じた。		
論文						
1 ユーロシステムの金融危機・安定問題	単	2004.10.00	大東文化大学『環境創造』第 7 号	日本金融学会 2003 年度秋季大会 (10 月 25 日、滋賀大学) で開催された「中央銀行パネル：中央銀行と金融システムの安定性」で報告した内容を拡充したもので、ユーロシステムの連邦・中央集権的内容と分権および補完的内容との関連を問うなかで、中央銀行の最後の貸し手機能 (L O L R) と金融危機・安定の問題を考察した。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1973.04.01 ～ 現在			信用理論研究会会員、1996 年～現在 常任理事			

2	1974.04.01	～	現在	金融学会会員、1992年4月～1998年3月 機関誌『金融経済研究』編集委員、2000年4月～2008年3月 理事
3	1979.04.01	～	現在	経済理論学会
4	1980.04.01	～	現在	経済統計学会
5	1981.04.01	～	現在	証券経済学会
6	2000.12.01	～	2005.03.31	日本学術会議 2000年12月～2005年3月 第18期財政学・金融論研究連絡委員
7	2005.04.01	～	2006.03.31	大学基準協会相互評価委員会全学評価分科会委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	土井 幸平	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 環境創造ポートフォリオ			2005.04.00	2005年4月～ 問題発見・問題解決型学習、フィールドワーク学習を重視する環境創造教育の効果を高めるため、ゼミ生を対象に各年度における学習活動記録を綴じたものを作成、提出させる。履修した主要な講義・研修科目において提出した中間、期末レポート類、投稿論文、読書録、町歩きレポートなどを各自のUSBに保存し、随時に手を加えるなどして推敲し、期末に作品集としてとりまとめさせる。この作品集を読み返すことにより、次の学習課題の発掘や卒業研究テーマ設定への手がかりを得させる。			
2) 卒業研究の事前公開発表会			2006.01.00	ゼミ生の卒業研究の最終提出に先立ち、学会等における形式を踏んだ公開の研究発表会を学内で開催する。発表者は、A4一枚の研究梗概書と研究の要点を示したパワーポイントを用意し、プレゼンテーション8分、質疑応答7分の発表を行う。2年～4年の各年次のゼミ生があらかじめ定めた審査基準に基づいて審査し優秀論文等を選出し相互講評を行う。各学年の卒業研究に向けてのモチベーションを高める効果がある。			
3) 体験型町歩き研修 (ゼミ旅行)			2006.04.00	2006年4月～ 毎年夏休み期間を利用して、2年、3年、4年のゼミ生が参加する2泊3日もしくは3泊4日の現地体験を加えた町歩き研修を3年ゼミ生中心に企画し実施する。2006年度＝白神山地区におけるNPO法人の協力を得た間伐・植林体験。2007年度＝長野県大町におけるミニ水力発電、廃油回収事業の体験学習、2008年度＝飛騨高山・白川郷・郡上八幡の歴史的町並み宿泊体験。事前レポートと体験後レポートを課する。			
4) 「ゼミ生の上下学年連携」			2006.04.00	2年次の「環境創造ゼミⅠ」、3年次の「環境創造ゼミⅡ」、及び4年次の卒業研究ゼミを適宜連携交流させることにより、上の学年から下の学年が学びを深めることとしている。毎年夏に行う2泊3日のゼミ合宿旅行は3学年を参加させ、また1月には卒業研究ゼミ発表会を行い、4年生の発表を3年生が聞いて評価させ、テーマや発表の方法を学び来年次に備えさせる。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 地域連携による「環境創造型人材の育成」			2007.12.07	板橋区と大東文化大学との共同研究機関である地域デザイン・フォーラムの2007年度報告会において、地域連携による教育実践の事例報告を行ったもの。環境教育の特色として、環境創造流の問題解決法、現場で学ぶ環境創造教育、地域連携カリキュラムを取り上げ説明するとともに、中板環創堂プロジェクト、高島平再生プロジェクトへの取り組みを紹介した。			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							

論文				
1 「復興まちづくりへの取り組み」	共著	2005.03.00	兵庫県（企画）、復興10年委員会（編集・発行）	「阪神・淡路大震災復興10年総括検証・提言報告書」における6分野54テーマの復興検証課題のうち、まちづくり分野11テーマの一つを分担執筆した。54名との共著。A4版、総頁数600ページ中12頁。
2 「都市居住魅力ある堺市を実現するための住宅まちづくり政策のあり方について（答申）」	共著	2005.05.30	堺市住宅まちづくり審議会	堺市長の諮問に対し、審議会にまとめ部会を設け調査研究し、堺市の住宅政策のあり方について答申案を起草しまとめた。6名との共著。総頁数46頁
3 「復興まちづくりは何をもたらしたか」	単著	2005.06.00	全国市街地再開発協会機関紙市街地再開発 No.422	阪神・淡路大震災からの復興まちづくりがわが国の都市計画にその後どのように影響を与えたかを論じた。「阪神・淡路大震災《まちづくり検証》」と題する特集論文3本の一つを担当。A4版、総頁数80頁中6頁。
4 「板橋区産業振興と都市計画」	共著	2006.03.00	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	板橋区の産業振興と都市計画の関連性について考察し、今後の可能性について論じた。ブックレット No.14「地域の産業振興～ビジョン策定をうけて～」全7章のうち第3章を担当。総頁数147頁中11頁。中村年春、上遠野武司、相田治昭、富澤賢一、小池喜美子、横田昇との共著。
5 「成熟社会における都市づくりのあり方（答申）」	共著	2006.07.00	大阪府都市計画審議会	大阪府知事の諮問に対し、学識経験者5名による常務審議会を設け調査研究し、21世紀における大阪の都市計画のあり方について起草し提言をまとめた。岡田憲夫、斉藤弥生、西村多嘉子、増田昇との共著。総頁数45頁
6 時代の潮流を見据えた「埼玉の都市計画の方向」（提言書）	共著	2007.02.00	埼玉県都市計画審議会	埼玉県知事の諮問に対し、学識経験者8名による専門部会を設け調査研究し、21世紀における埼玉の都市計画のあり方について起草し提言をまとめた。久保田尚、大久保秀子、田中恭子、松原彰子、有田智一、加藤孝明、横張真との共著。総頁数29頁
7 シンポジウム「まちづくりと危機管理」	共著	2007.03.00	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	シンポジウムの企画準備とその内容を編集しまとめた。ブックレット No.18「シンポジウム《まちづくりと危機管理》」A5版、総頁数84頁中9頁。青山やすし、石塚輝雄、鈴木孝夫、山口鶴子、中村昭雄との共著。
8 「大都市の減災と危機管理」	単著	2007.09.00	全日本士地区画整理会機関誌「区画整理士会報」128号	阪神・淡路大震災とその復興過程における筆者の経験と研究をもとに、大都市における減災と危機管理のあり方について論じた。「震災への備えと防災対策」と題する特集論文6本の一つ。A4版、総頁数54頁中4頁。
9 「大都市直下型地震における危機対応」	共著	2007.12.00	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム	大都市直下型地震の特徴とそれに対する危機管理の基本について、阪神・淡路大震災を事例に論じた。ブックレット No.21「危機管理と自治体」全4章のうち、第2章を担当。A5版、総頁数117頁中11頁。中村昭雄、湯本隆、谷津浩史、矢嶋吉雄、森下真博との共著。
10 『『建築と社会』に記録された関東大震災からの教訓—その後教訓は生かされたのか—	共著	2008.03.00	大東文化大学経済研究所紀要「経済研究」第21号	関東大震災時における専門家による調査提言記録を分析し、当時の提言がその後日本社会にどのように生かされたかを検証した。大杉由香との共著。B5版、15頁。
11 日本建築協会の視点から見た戦前の衛生問題—何故問題は意識されつつも抜本的改善につながらなかったのか—	共著	2009.03.00	大東文化大学経済研究所紀要「経済研究」第22号	産業化が急速に進展し、過密都市における衛生問題が顕在化した大正～昭和前期に、大阪を拠点とした日本建築協会の発行した専門誌の関連論文の動向を分析し検証した。大杉由香との共著。B5判11頁。
その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				

1	1967.04.00	～	現在	日本都市計画学会会員
2	1994.04.00	～	現在	日本建築学会会員
3	1996.04.01	～	現在	東京都豊島区都市計画審議会委員、会長
4	1997.04.01	～	2005.07.31	高槻市建築審査会委員
5	1999.04.01	～	2005.03.31	堺市公共事業再評価懇話会委員、座長
6	2000.04.00	～	2008.03.31	堺市開発審査会委員
7	2000.06.00	～	2006.06.00	大阪市住宅審議会委員
8	2000.06.00	～	2006.06.00	大阪市都市計画審議会委員
9	2000.06.00	～	2007.10.00	大阪府開発審査会委員
10	2000.06.00	～	2008.07.31	大阪府屋外広告物審議会委員、会長
11	2000.06.00	～	現在	(財)大阪地域振興協会理事
12	2000.06.00	～	現在	大阪府都市計画審議会委員、会長代理
13	2000.08.01	～	現在	高槻市都市計画審議会委員、会長
14	2000.09.00	～	2006.09.00	大阪市大規模小売店舗立地審議会委員、会長代理
15	2001.07.01	～	現在	堺市住宅まちづくり審議会委員、会長
16	2002.03.00	～	現在	栗東市都市計画審議会委員、会長
17	2005.04.01	～	2007.03.31	埼玉県都市計画審議会委員、会長
18	2005.12.23	～	現在	東京都建築審査会委員
19	2006.00.00	～	2007.00.00	板橋区産業ビジョン策定委員会委員
20	2006.04.01	～	2009.03.31	いたばし総合ボランティアセンター運営委員会委員、委員長
21	2006.04.01	～	現在	練馬区都市計画審議会開発調整担当部会特別委員
22	2006.05.09	～	2007.10.00	大阪府農林水産審議会専門委員
23	2006.06.00	～	2008.06.26	国土交通省土地・水資源局これからの土地利用を考える懇談会委員
24	2006.07.00	～	2008.02.12	板橋区都市景観基本計画委員会委員、副委員長
25	2007.05.00	～	現在	(社)都市計画コンサルタント協会理事
26	2009.02.04	～	現在	板橋区景観計画策定審議会委員、会長

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	富田 祐一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 日本放送協会(NHK) ラジオ『基礎英語 1』講師		2005.04.00		基礎英語のテキスト作成、CD作成、放送における講師を担当した。2005年4月～2006年3月			
2) 日本放送協会 (NHK) 学校放送番組『えいごリアン』(全20回)(小学校「総合的な学習の時間」向け番組) 番組編成委員		現在		番組編成に関する助言指導を行っている。(平成11年11月1日～)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センターにおいて開催された、特別講演会「イギリスの大学改革：市場原理と財政改革を中心に」における通訳。		2004.11.10		Michel Byram (ダーラム大学教授・東京学芸大学客員教授) の講演「Universities in Britain: With particular reference to finance reforms and marketisation (イギリスの大学改革：市場原理と財政改革を中心に)」の講演および質疑における通訳を行った。			
2) 東京学芸大学・教員養成カリキュラム開発研究センターにおいて開催された、公開シンポジウム「これからの学校教育と教員養成カリキュラム：授業研究をととした教師の学びと支援」における通訳。		2004.12.04		Michel Byram (ダーラム大学教授・東京学芸大学客員教授) の講演「Education reform and teacher education in England (イギリスにおける教育改革と教師教育)」の講演および質疑における通訳を行った。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『NHKラジオ・テキスト基礎英語4月号』	共	2005.04.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
2 『NHKラジオ・テキスト基礎英語5月号』	共	2005.05.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
3 『NHKラジオ・テキスト基礎英語6月号』	共	2005.06.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
4 『NHKラジオ・テキスト基礎英語7月号』	共	2005.07.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
5 『NHKラジオ・テキスト基礎英語8月号』	共	2005.08.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
6 『NHKラジオ・テキスト基礎英語9月号』	共	2005.09.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
7 『NHKラジオ・テキスト基礎英語10月号』	共	2005.10.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			
8 『NHKラジオ・テキスト基礎英語11月号』	共	2005.11.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト			

9	『NHKラジオ・テキスト基礎英語12月号』	共	2005.12.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト
10	『NHKラジオ・テキスト基礎英語1月号』	共	2006.01.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト
11	『NHKラジオ・テキスト基礎英語2月号』	共	2006.02.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト
12	『NHKラジオ・テキスト基礎英語3月号』	共	2006.03.01	東京：NHK 出版	富田祐一、Lynne Parmenter NHK 教育ラジオの入門期の英語学習者を対象としたテキスト
13	(編集)平成18年度版・中学校英語教科書 New Horizon 1,2,3	共	2006.04.01	東京：東京書籍	編集、中学生を対象とする文部科学省検定教科書
14	『改定版英語教育用語辞典』	共	2009.05.01	東京：大修館書店.	共著（白畑知彦、富田祐一、村野井仁、若林茂則）1999年に出版した初版の『英語教育用語辞典』の内容に大幅な加筆、削除、修正を加えた改定版を編纂した。
論文					
1	真の「国際理解教育の一環としての外国語会話」を目指せ	単	2004.05.01	『英語教育2004年5月号』Vol. 53, No.2. 東京：大修館書店。	pp. 18-20.現在実施されている「国際理解教育の一環としての外国語会話」の目的が、共生原理に基づくことを示し、競争原理に基づく小学校英語ではなく、本来の目的に基づく外国語会話を目指すべきことを主張した。
2	めざすべき方向性は競争ではなく共生	単	2004.05.01	『子ども英語・2004年5月号』アルク	p. 11 これからの小学校における外国語教育が競争ではなく共生を目指すべきことを述べた。
3	海外新刊書紹介：言語政策に関する概説書 Bernard Spolsky (2003) Language Policy. CUP.	単	2004.06.01	『英語教育(2004年6月号)』Vol. 53, No.3. 東京：大修館書店。	p.84 言語政策の概説書を解説し紹介した。
4	国際理解教育の一環としての外国語会話肯定論：競争原理から共生原理へ	単	2004.07.31	大津由紀雄(編著)『小学校での英語教育は必要か』東京：慶応義塾大学出版会。	pp. 149-186 小学校で行われている外国語教育が競争原理ではなく、共生原理に基づくべきことを論証し、主張している論文。
5	海外新刊書紹介：アクションリサーチの優れた解説書 Ernie Stringer (2004) Action Research in Education Pearson Education.	単	2004.10.01	『英語教育(2004年10月号)』Vol. 53, No.7. 東京：大修館書店。	p.85 教育の分野におけるアクションリサーチの理論と実践をまとめた本を紹介した。
6	子どもは英語をどう覚えるのか：言語習得に関する8つのQ&A	単	2004.11.05	『子どもに英語を教えたい2005』東京：アルク	pp.160-162 子どもの言語習得のプロセスについて分かりやすく説明した。
7	書評：吉島茂・大橋理恵(他)編・訳「外国語教育II：外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」朝日出版社	単	2005.02.01	『英語教育(2005年2月号)』Vol. 53, No.11. 東京：大修館書店。	pp.88-89.ヨーロッパだけでなく、広く全世界的に注目を集めているCEFRの翻訳本を紹介した。
8	海外新刊書紹介：読みごたえのある言語政策論 Sue Wright (2004) Language Policy and Language Planning: From Nationalism to Globalisation. Palgrave	単	2005.03.01	『英語教育(2005年3月号)』Vol. 53, No.12. 東京：大修館書店。	p.94 言語政策と現代の社会的コンテクストとの関係を明確に論じた本を紹介した。

9	異文化間コミュニケーションにおける批判的文化能力(Critical Cultural Competence)の重要性について	単	2005.03.01	東北学院大学・オーディオビジュアルセンター紀要	pp.31-34 異文化間コミュニケーション能力を向上させるために欠くことのできない批判的文化能力について解説し、その重要性を示した。
10	知の崩壊と形成、そして ELEC 同友会への期待	単	2005.03.31	ELEC 同友会英語教育学会創設 10 周年記念誌	p.49 これからの英語教師が立ち向かうべきトピックの一つに若者の知の崩壊があることを主張した。
11	海外新刊書紹介：外国語の教師教育を考える上で欠くことのできない良書 Richards and Farrell (2005) Professional Development for Language Teachers: Strategies for Teacher Learning. Cambridge UP.	単	2005.07.01	『英語教育 (2005 年 7 月号)』 Vol. 54, No.4. 東京:大修館書店。	p.89 従来の教師教育の多くが受動的だったのに対して、能動的に教師が自発的に自分の能力を向上させることが重要であることを示した本を紹介した。
12	海外新刊書紹介：外国語教師と異文化間交流能力に関する国際比較 Foreign Language Teachers & Intercultural Competence. Lies Sercu et al. (2005) Multilingual Matters	単	2006.01.01	『英語教育 (2006 年 1 月号)』 Vol. 54, No.11 東京:大修館書店。	ヨーロッパを中心とする様々な国々の外国語教師が、異文化間能力をどのようにとらえているかについて調査した国際比較をまとめた本を紹介した。
13	海外新刊書紹介：Needs analysis の方法論と実例を的確に示している本 Second Language Needs Analysis. Michael H. Long (ed.) (2005) Cambridge University Press	単	2006.06.01	『英語教育 (2006 年 6 月号)』 Vol. 55, No.3 東京:大修館書店。	Needs Analysis に関する理論と実践についてまとめた本を紹介した。
14	クリティカルに異文化を読み解く	共	2006.12.00	『クリティカルシンキング教育』世界思想社。	共著(富田祐一、Lynne Parmenter) 異文化を理解する際に不可欠な要素としてクリティカルな異文化理解能力があることを示し、その定義と内容を示している。
15	海外新刊書紹介：明日の授業における指導と評価のために、すぐに役立つ良書：Teaching & Assessing Skills in Foreign Languages Caroline Woods (2005)Cambridge University Press	単	2006.12.01	『英語教育 (2006 年 12 月号)』 Vol. 55, No.9. 東京:大修館書店。	英国のケンブリッジ検定試験に長年かかわってきた著者による英語の指導法と評価に関する理論書を紹介した。
16	英国の中等学校での外国語教育と異文化理解教育プログラム	単	2007.03.01	『英語教育 (2007 年 3 月号)』 Vol. 56, No.13. 東京:大修館書店。	pp.28-29. イギリスのマンチェスターにある語学に重点をおくカレッジ (中等学校) における異文化理解教育のプログラムを紹介した。
17	基礎・基本について考える	単	2007.04.01	『教室の窓』(2007 年 4 月号)Vol. 10. 東京:東京書籍	p.4. 広く使われている「基礎基本」の概念について検討し、問題点と検討課題を示した。
18	海外新刊書紹介：個に応じた指導法のヒントが得られる本 C. Rothenberg & D. Fisher (2007) Teaching English Language Learners:Differentiated Approach	単	2007.06.01	『英語教育 (2007 年 6 月号)』 Vol. 56, No.13. 東京:大修館書店。	学習者の個の能力に応じた指導法を具体的に示している実践書を紹介した。

19	海外新刊書紹介：小学校の外国語活動の進め方を検討する際に参考になる書 (Teaching young language learners)	単	2007.12.01	『英語教育(2007年12月号)』Vol. 56, No.9	p.92 A.Pinter(2006) Teaching Young Language Learners. Oxford Univ. Press に関する書評。本書が、理論と実践の橋渡しをしている点を示し、日本の小学校の外国語活動の教育に有益な書であることを示した。
20	小学校における英語教育の実態調査報告	共	2008.03.00	第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究 平成16～19年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A)) (研究代表者・小池生夫) 研究報告書	pp.191-294. 小池生夫(明海大学)、椎名紀久子(千葉大学)、富田祐一(大東文化大学)、白畑知彦(静岡大学)、高橋美由紀(愛知教育大学) pp.191-294. 質問紙による特区と研究開発学校の小学校の英語教育の実態調査の結果を報告した。
21	日本の小学校英語教育にCEFRの指標を応用するための予備的調査：英語の名詞のマッチング調査の結果	共	2008.03.00	第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究 平成16～19年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(A)) (研究代表者・小池生夫) 研究報告書	pp.295-305 富田祐一(大東文化大学)、高橋美由紀(愛知教育大学)、椎名紀久子(千葉大学) 小学生を対象にした34個の名詞に関する音声と絵のマッチング調査の結果を報告した。
22	海外新刊書紹介：全人教育として児童英語教育を考えるヒントになる本 K. Crosse (2007)Introducing English as an Additional Language to Young Children	単	2008.06.01	『英語教育(2008年6月号)』Vol. 57, No.3. 東京：大修館書店。	p.97. 英語圏に移住する学齡期前の子ども達を対象とした第二言語としての英語教育のための具体的なかつ実践的な指導案を示した本を紹介した。
23	海外新刊書紹介：全人教育としての児童英語教育を考えるヒントになる本 (Introducing English as an additional language to young children. Language learners)	単	2008.06.01	『英語教育(2008年6月号)』Vol. 57, No.3	p.97 K.Crosse (2007) Introducing English as an Additional Language to Young Children. Paul Chapman Pub.に関する書評。本書が単に幼い子ども達の第二言語の発達だけでなく全人的な人格の発達に配慮したものであることを示した。
24	「特区における英語教育の実態調査の結果の分析」	共	2008.09.30	日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要・第27号	pp.1-24 共著(富田祐一、椎名紀久子、白畑知彦、高橋美由紀) 特区における小学校の英語教育の実態を分析し、今後の小学校の英語教育における課題を提示した。
25	海外新刊書紹介：国際語としての英語を教える英語教師のあり方を示す書(Teaching English as an international language: Identity, resistance and negotiation)	単	2008.12.01	『英語教育(2008年12月号)』Vol. 57, No.9	p.89 Phan Le Ha (2008)Teaching English As An International Language: Identity, Resistance and Negotiation. Multilingual Matters.に関する書評。ベトナム出身でオーストラリアで英語を教える筆者が自分の学習や指導の経験を踏まえた上で、英語の指導者としてのアイデンティティと非母語話者としてのアイデンティティの間で、非母語話者の英語の教師がいかにして自らのアイデンティティを築くかを検討した興味深い書であることを示した。
その他					
1	英語が苦手な教師のための小学校英語教育入門	単	2004.05.09	第18回英国国際教育研究所主催パネルディスカッションにおける提言	現在実施されている国際理解教育の一環としての英語活動は、あくまでも国際理解教育を行うために実施されるものであり、その活動を実施する際に教師に求められる能力は、英語の運用能力ではなく、国際理解教育の目的的確な理解、その目的を達成するための企画力、等が必要であることを示した。
2	国際理解教育の一環としての外国語会話(英語活動)の現状と課題	単	2004.05.14	平成16年度さいたま市国際理解教育協議会総会兼国際理解教育主任研修会	さいたま市の公立小学校および公立中学校の国際理解教育担当教師を対象とした研修会において、国際理解教育の一環としての外国語会話の実施にあたっての問題点と、解決すべき課題を提示した。

3	異文化間コミュニケーションにおける批判的文化能力の重要性について	単	2004.05.25	東北学院大学・土樋キャンパス オーディオヴィジュアルセンター主催「公開学術講演」	異文化間コミュニケーションにおいて重要な役割を果たす要素として、批判的文化能力 Critical Cultural Competence の定義を示し、その重要性を示した。
4	国際理解教育の一環としての英語活動の現状と課題	単	2004.06.29	さいたま市立蓮沼小学校、校内研究会における講演	公立小学校の教師を対象とした講演で、国際理解教育の一環としての外国語会話の実施にあたっての問題点を分析し、解決すべき課題を提示した。
5	Early Foreign Language Education in East Asia: Nurturing Cultures of Competition or Co-existence?	単	2004.07.16	International Cultural Research Network: Exploring Cultural Perspectives (Florence, Italy)における口頭発表	日本の小学校英語教育における様々な矛盾と問題点を指摘し、多言語多文化主義に基づく外国語教育の必要性を示した。
6	SLA と ESL の接点について	単	2004.08.29	日本第二言語習得学会 2004 年度夏季セミナーにおける口頭発表	第二言語習得理論研究と英語教育との接点を考える際には、その両者が目指していることを明確にした上で、安易な応用をすることへの警鐘を鳴らした。
7	SLA 研究に必要な基礎的な統計に関する知識 1,2,3	単	2004.08.29	日本第二言語習得学会夏季セミナーにおける連続講演	若手の第二言語習得研究者たちを対象としたセミナーにおいて、量的研究を行う場合に必要となる「数」「相関係数」「順位相関係数」「カイ二乗検定」「t 検定」「分散分析」等の統計学の基礎を教えた。
8	国際理解教育の一環としての英語活動の現状と課題	単	2004.09.22	東京都練馬区光が丘第五小学校、校内研究会における講演	国際理解教育の枠組みで英語の活動をとらえる際に注意すべき点を解説した。とりわけ、目的の設定をどのようにするかが大きな鍵になり、そのことによって、評価の方法や視点が異なってくることを示した。
9	English and education for international understanding in elementary school: from competition to co-existence 小学校での国際理解教育と英語：競争から共生へ	単	2004.09.26	Peace as a Global Language III (グローバルランゲージ (地球語) としての平和 III) における口頭発表	世界平和のための外国語教育を行う上で重要な要素として、多言語多文化主義と共生原理があることを示し、それらが日本の社会や教育界にはまだ根付いていないことを示し、今後解決すべき問題を示した。
10	2 年生国際理解授業に関する研究授業について	単	2004.10.21	東京都板橋区志村小学校における講演	国際理解の視点を取り入れた授業を見学した上で、その優れた点と改善すべき点を示した。
11	21 世紀の英語教育の方向性をさぐる：異文化間コミュニケーション能力育成のための指導方法について	単	2004.11.11	宮城県古川管内一斉研修会における講演	これからの時代の英語教育を考える際に重要な視点となる異文化間コミュニケーション能力についての理論的説明を行った上で、日本の中学校の英語教育の中で行うことができる異文化間コミュニケーション能力の育成のあり方を示した。
12	国際理解教育の一環としての英語活動の現状と課題	単	2004.11.27	埼玉県国際理解教育研究会における講演	埼玉県内の国際理解教育に関心のある先生方を対象にした講演で、現在日本の公立小学校で見られる、英語活動についての情報を提供し、その問題点と今後解決すべき課題について概説した。
13	4 年生国際理解授業に関する研究授業について	単	2004.12.10	東京都板橋区志村小学校における講演	4 年生を対象とした国際理解教育の授業を見学した上で、その優れた点と改善すべき点を示し、改善策を示した。
14	21 世紀の英語教育の方向性をさぐる：小中高大の連携を踏まえて	単	2005.01.20	千葉県・君津地区・英語研究会における講演	日本の学校教育における英語教育の縦の連携について、理論的な説明を行った上で、とりわけ小学校と中学校の外国語教育の連携の望ましいあり方を示した。
15	Credibility in qualitative research.	単	2005.01.22	Cultnet in Asia における口頭発表 (於 東京学芸大学)	質的研究における信頼度についての解釈と定義を示し、質的研究の信頼度を高めるための手段を、具体例を用いて示した。
16	あせらず、あわてず、見守り、共に育てましょう、蓮沼小学校の英語活動	単	2005.01.27	埼玉県・さいたま市立蓮沼小学校 PTA 主催・講演会における講演	小学校教育における外国語会話に対する保護者の過度の期待はかえって障害になることもあり得ることを示した上で、あせらずあわてず、子ども達の成長をゆったりとした気持ちで見守って戴きたい旨を述べた。
17	国際理解教育の一環としての英語活動の現状と課題	単	2005.02.02	東京都・葛飾区立中之台小学校における講演	現在の日本の公立小学校における国際理解教育の一環としての外国語会話の問題点を整理して示した上で、これから解決すべき課題を示した。

18	高学年の国際理解授業に関する研究授業について	単	2005.02.16	東京都板橋区志村小学校における講演	高学年の児童を対象にした国際理解教育を行う最の問題点と克服すべき課題を示した。
19	なぜ今、小学校で英語教育なのか？	単	2005.02.24	東京都荒川区立第六日暮里小学校における授業講評と講演	小学校における英語を教える意義が、英語のスキルだけではなく、人間的な成長を促進することにあることを示し、そのための具体的な方法論を示した。
20	発信型コミュニケーション能力の育成	単	2005.06.08	千葉県八千代市英語研究会における講演（八千代市立勝田台中学校にて）	学習者の発信型コミュニケーション能力を育成するためには、「批判的に考える力」を育成することが不可欠であり、言語的スキルを育成しただけでは不十分であることを示した。
21	進んでコミュニケーションを楽しむ児童の育成	単	2005.07.06	荒川区立第三日暮里小学校における講演	小学生が遊びの中で身につけたり学んだりすることの重要性を指摘した上で、遊びの中でいかにしてコミュニケーション能力を育成するかを示した。
22	元気で・なかよく・かしこい子の育成：コミュニケーション能力の育成を目指して	単	2005.09.07	荒川区立日暮小学校における講演	日暮小学校の研究課題の中に含まれている「元気で、なかよく、かしこい子」を育成するために、「英語教育を通じたコミュニケーション能力の育成」がどのような貢献をすることができるかを示した。
23	A comparison of the application of CEF to the context of foreign language education in Japan and UK : With special reference to PMFL	単	2005.09.08	JACET 全国大会・小池科研シンポジウム：諸外国における外国語教育の到達基準目標について—その設計過程、普及、活用：現状と課題の分析から得られる日本の外国語教育への示唆（於玉川大学）提案者：岡秀夫（東京大学）、富田祐一（大東文化大学）、相川真佐夫（京都外国語短期大学）	Common European Framework を日本の外国語教育界に応用する場合には、CEFR が生まれたヨーロッパの社会的背景を把握する必要があり、そこで尊重されている複言語主義、民主主義、平和主義といった要素を無視した応用には意味がないことを示した。また、イギリスの小学校教師を対象にした面接調査の結果を報告し、ヨーロッパでも CEFR が必ずしもまだうまく機能しているわけではないことを示した。
24	小学校英語教育の展望：小中高校の一貫した英語教育の視点から	単	2005.11.12	日本児童英語教育学会・九州沖縄支部・シンポジウム「小学校英語教育の展望：小・中・高一貫した英語教育の視点から」（於博多）パネリスト加藤由美子（ベネッセ）、金森強（愛媛大学）、富田祐一（大東文化大学）	異なるレベルの学校の間での一貫性には、幾つかの異なるレベルがあり、まずはどのレベルで議論しているかを明確にする必要があることを示した。さらに、現在の日本の小学校と中学校の外国語教育の間は、必ずしも同質である必要があるわけではないことを示し、安易な形で一貫性を求めることに問題があることを示した。
25	小学校の外国語教育を通じた批判的文化意識の育成：21世紀型の異文化間コミュニケーション能力を育てるために	単	2005.11.12	児童英語教育学会（JASTEC）九州沖縄支部における講演	批判的文化意識の概念に関する定義を示した上で、外国語教育の目的の一つとして、批判的文化意識を設定することの意義を述べ、その具体的な方法論を示した。
26	これからの小学校の英語教育について考える：異文化間コミュニケーション能力の育成と小学校英語	単	2005.12.13	荒川区立第六日暮里小学校における研究発表会での講演	小学校における「教科としての英語」が求めるべき方向性を検討する上で、最も重要な概念が「全人教育」であることを示し、その目的を達成するための方法を示した。
27	外国文化に親しみ積極的にコミュニケーションを楽しむ子の育成を目指して	単	2006.01.26	葛飾区立中之台小学校における研究授業の講評と講演	小学校における外国語教育と異文化間コミュニケーション教育の接点をいかにとらえるべきかを示し、具体的な指導方法を示した。
28	小学校教育における国際理解教育の一環としての外国語教育のあり方について	単	2006.01.27	板橋区立志村小学校における研究発表会における講演	3年間の区指定の研究開発の最終的報告会において、それまでの経緯、成果、今後の課題を示した。
29	異文化間コミュニケーションと小学校の英語教育	単	2006.07.07	葛飾区立中之台小学校における研究授業の講評と講演	小学校の英語教育を異文化間コミュニケーションの教育としてとらえる方法を示した。
30	実践的コミュニケーション能力を育成するための指導計画	単	2006.11.10	宮城県石巻市中学校英語教育研究会における講演	真の意味で実践的なコミュニケーション能力を身につけるためには、批判的思考力の育成が不可欠であることを示した。

31	これからの小学校における英語教育の課題と展望	単	2006.12.01	葛飾区立中之台小学校における最終報告会における講演	これまでの英語を通じた教育実践を踏まえた上で、更に充実した人間教育としての小学校英語を実践するための課題と今後の展望を述べた。
32	新たな時代の「異文化間コミュニケーション能力育成」への挑戦: 「えいごリアン」と「基礎英語1」に焦点をあてて	単	2007.01.28	English for Education in Global Generation 主催の研究会における講演 (於・大阪市総合生涯学習センター)	えいごリアンと基礎英語1において試みた異文化間コミュニケーションのための英語教育の方法論を示した。
33	荒川区小学校英語教育3年間の成果と課題: これからの小学校英語教育の目指す方向	単	2007.02.08	荒川区教育委員会主催シンポジウムにおける発表 (於・ムーブ町屋ホール)	荒川区の小学校英語をさらに充実させるためには、現場での経験を積み上げる「ボトムアップ式」の検討が重要になることを示した。
34	特区における小学校英語に関する教員対象の質問紙調査の結果	共	2007.06.09	日本児童英語教育学会全国大会における発表	椎名紀久子 (千葉大学)、富田祐一 (大東文化大学)、白畑知彦 (静岡大学)、高橋美由紀 (愛知教育大学) 教員対象の質問紙による「教育特区の小学校英語教育」の実態調査の結果を報告した。
35	なんで英語やるの? 本当の意味で世界で活躍するみなさんへ送るメッセージ	単	2007.06.28	福島県南会津郡田島町立檜沢中学校における講演	世界的課題に取り組む人材になるためには、外国語教育が果たす役割が大きいことを示した。
36	小学校英語活動で注意すべきこと	単	2007.07.16	葛飾区立中之台小学校の英語活動研究会における講演	これまでの英語活動の実践を踏まえた上で、残された課題を示した。
37	小学校における英語指導の基本的な理念	単	2007.10.04	神奈川県立総合教育センター「楽しく学ぶ小学校英語」基礎・研修講座における講演	小学校における英語教育の理念として「全人教育」と「異文化間コミュニケーション能力の育成」という視点が重要なことを示した。
38	第二言語習得研究と小学校英語	単	2007.10.27	小学館アカデミー第1回「子ども英語講師養成講座」における講演	第二言語習得研究を理解するために必要な基本的概念と第二言語習得研究と小学校の英語教育の実践の関係を示した。
39	知的な日本人を育成するための英語教育: 中学校における試み	単	2007.11.09	「全国英語教育研究大会」(於・福島県郡山市民センター)における公開授業のモデレーター	知的な人材を育成するために役立つ英語教育の方法論の一つとしてディベートを活用した教育実践を提案した。
40	教育機器の活用「地域を担う人材育成のための学習サポート事業: 一年間の取り組みの成果と課題」	単	2007.11.09	「全国英語教育研究大会」(於・福島県郡山市民センター)における報告のモデレーター	通信機器とインターネットを利用した遠隔学習による英語教育の実践例を報告した。
41	小中連携とこれからの小学校英語教育の方向性について	単	2007.11.26	荒川区教育研究会 (荒川区立第三日暮里小学校)における講演	小学校と中学校の連携を進める上で重要なポイントを指摘し、更なる相互理解の重要性を示した。
42	だれもが楽しく、生き生きと活動する英語学習を目指して	単	2008.01.16	荒川区英語活動研究会 (於・荒川区立汐入小学校)における講演	小学校と中学校の連携を進める上で重要なポイントを指摘し、更なる相互理解の重要性を示した。
43	思いやりのある子の育成とコミュニケーション能力	単	2008.02.27	葛飾区立亀青小学校の校内研究会における講演	人権教育で実績のある亀青小学校の教育実践と小学校の英語教育の共通性を示し、具体的なカリキュラムの構築法を示した。
44	思わず聞きたくなる授業の工夫	単	2008.03.09	日本児童英語教育学会・関東甲信越支部研究会 (於・昭和女子大学附属昭和小学校)の授業検討会におけるコーディネーター及びコメントレーター	神奈川県足柄地区で行なわれている小学校と中学校の教員の人事交流をふくめた小中連携の実践例を示し、その価値と今後の課題を示した。
45	小学生の語彙習得について	単	2008.03.25	小池科研最終報告会 (於・サピアタワー東京ステーション・コンファレンスルーム)における報告	小学生を対象にした34個の名詞に関する音声と絵のマッチング調査の結果を報告した。
46	外国語会話・英語活動のはじめの一步	単	2008.04.03	足立区立洲江第一小学校における講演	はじめて英語活動を導入する場合に明確にしておかなければならない教育理念と具体的な方法論を示した。

47	小学校の英語教育を考える：外国語会話の望ましい進め方	単	2008.07.29	神奈川県綾瀬市教育委員会における講演	綾瀬市の小学校と中学校の先生方を対象とした講演。今後の小学校の外国語会話を実践する上で留意すべき重要な基本的事項と今後の課題を示した。
48	小学校外国語活動を受け、中学校英語教育はどう対応するべきか？	単	2008.07.31	東京都練馬区・中学校英語研究会（中英研）における講演	練馬区の中学校の先生方を対象とした講演。現在の小学校における外国語活動の実態を示し、その事実を受けて上で、中学校の先生方が留意しなければならない事項と今後の課題を示した。
49	21世紀の異文化間交流を目指した国際語としての英語の教育方法と小中連携について	単	2008.08.04	香川県三豊観音寺地区・英語科教員・夏季研修会における講演	香川県の中学校の先生方を対象とした講演。英語教育を異文化間交流の教育という視点でとらえなおした上で、国際語としての英語を指導するための方法を示し、加えてそれを実践する上で重要な小中連携のあり方を示した。
50	コミュニケーション能力のとらえ方	単	2009.03.01	関東甲信越支部研究大会（於昭和女子大学）における口頭発表	1950年代から現在に至るまでの間に示されたコミュニケーション能力の定義を概観した上で、現在の小学校の外国語活動を担当している小学校の先生方を対象とした調査結果を示し、両者の差異と「英語教育関係者」と「小学校の教師」の間の、コミュニケーション能力に関する対話の重要性を示した。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1989.04.00	～	現在	関東甲信越英語教育学会会員
2	1990.04.00	～	現在	大学英語教育学会（JACET）会員
3	1997.04.00	～	現在	コンピュータ利用教育協議会（CIEC）会員
4	1997.04.00	～	現在	英語教育協議会（ELEC）同友会会員
5	1997.04.00	～	現在	日本英語学会会員
6	1998.04.00	～	現在	上越教育大学英語教育学会会員
7	2001.04.00	～	現在	東北英語教育学会会員
8	2001.04.01	～	2005.03.31	日本臨床神経生理学会会員
9	2001.04.01	～	2006.03.31	日本第二言語習得学会（J-SLA）副会長
10	2002.04.00	～	現在	異文化間教育学会会員
11	2002.04.00	～	現在	日本国際理解教育学会会員
12	2002.04.01	～	現在	日本児童英語教育学会（JASTEC）理事
13	2002.12.00	～	現在	小学校英語活動研究会代表
14	2006.04.01	～	現在	日本第二言語習得学会（J-SLA）運営委員
15	2008.04.01	～	2009.03.31	神奈川県綾瀬市教育委員会平成20年度神奈川県綾瀬市教育委員会小学校外国語活動スーパーバイザー
16	2008.04.01	～	2009.03.31	神奈川県教育委員会平成20年度神奈川県教育委員会小学校外国語活動スーパーバイザー
17	2008.09.01	～	現在	英国グリニッジ大学（University of Greenwich）人文社会科学部（School of Humanities and Social Sciences）学外試験官（External examiner）
18	2009.04.01	～	現在	日本放送協会（NHK）テレビ教育番組（英語）Gabby 番組委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	永戸 健	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
論文								
1 『岩手県遠野市片岩石灰岩地のチチブミネバリ群落について』	共著	2007.03.00	大東文化大学紀要 (自然科学) 45 号	カバノキ科のチチブミネバリは石灰岩地を指標する特徴的な植物であるが、埼玉県秩父山地周辺と岩手県北上山地に隔離分布していることが知られている。北上山地ではこれまでに群落としてのチチブミネバリの記録は無かったが、遠野市片岩石灰岩地に非常に良く発達した群落の存在が初めて判明した。この群落は、種組成に特徴があり、構造的にはチチブミネバリの実生更新が順調で、中間層にも見られる安定した群落である。また、地形的にみても土地的極相としてのチチブミネバリ群落が持続可能な条件が認められ、この条件が隔離分布の遠因となっていることを想定した。(16 頁。永戸健・島井誠司。現地調査ならびに執筆については、いずれも共同作業のため、担当部分をとくに抽出するのは困難。)				
その他								
III 学会等および社会における主な活動								
1	1968.03.00	～	現在	日本植物学会会員				
2	1970.03.00	～	現在	日本生態学会会員				
3	1970.03.00	～	現在	日本林学会会員				

4	1978.03.00	～	現在	種生物学会会員
5	1989.03.00	～	現在	日本作物学会会員
6	2003.03.00	～	2005.03.00	埼玉県埼玉県レッドデータブック植物編改訂調査検討会，委員。
7	2003.04.00	～	2007.09.29	埼玉県埼玉県絶滅危惧植物種調査団，調査委員。（2006.06.00～2007.09.29 副団長）
8	2004.07.00	～	2004.07.00	埼玉県東松山市東松山市きらめき市民大学「自然環境の科学」，講師。
9	2005.07.00	～	2005.07.00	埼玉県東松山市東松山市きらめき市民大学「自然環境の科学」，講師。
10	2006.07.00	～	2006.07.00	埼玉県東松山市東松山市きらめき市民大学「自然環境の科学」，講師。
11	2007.07.00	～	2007.07.00	埼玉県東松山市東松山市きらめき市民大学「自然環境の科学」，講師。
12	2007.10.00	～	現在	NPO法人 埼玉県絶滅危惧植物種調査団調査委員（2007.10.00～現在 副代表理事）
13	2008.07.00	～	2008.07.00	埼玉県東松山市東松山市きらめき市民大学「自然環境の科学」，講師。

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	貫 隆夫	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学生達とペットボトルキャップの回収作業を実施。		2007.04.01	大東文化大学エコキャンパス委員会委員長として、学生委員メンバーと共にペットボトル回収機のメンテナンスおよびペットボトルキャップのリサイクルに取り組む (2007.04.01~現在)。				
2) 学生達と田植え、稲刈りを実施		2007.04.01	大東文化大学地域連携センター所長として、埼玉県ときがわ町において参加学生と田植え、稲刈りを毎年 (6月と10月) 行っている。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「論文の評価基準」		2004.00.00	片岡信之他編『経営・商学系大学院生のための論文作成ガイドブック』文真堂 (アンケート) 190~191頁。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 非常勤講師		現在	非常勤講師としてはこれまで母校の慶應義塾大学 (商学部および商学研究科) をはじめ、明治大学、法政大学、立教大学、中央大学、作新学院大学等において主として生産管理論あるいは生産管理特論を担当した。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 山本孝則・嵯峨生馬・貫隆夫『環境創造通貨』	共著	2005.11.01	日本経済評論社	執筆部分: 第IV章「ECカード流通のための製品認証」、103~125頁。			
論文							
1 「環境の世紀の生産システムー資源循環型社会とゼロエミッションー」		2004.09.01	『工業経営研究』Vol.18、工業経営研究学会	14~19頁。			
2 「ゼロ・エミッションと21世紀の再生産システム・製品認証ー“もの作り大国”から“もの活かし大国”へー」		2004.09.06	『環境創造フォーラム年報』第4号、大東文化大学環境創造フォーラム、2004年9月6日	(報告記録) 26~31頁。			
3 「循環型社会形成におけるゼロ・エミッションの意義」		2004.09.06	『環境創造フォーラム年報』第4号、大東文化大学環境創造フォーラム、2004年9月6日	(資料) 32~37頁。			
4 「環境と企業経営」		2004.11.00	『経済』2004年11月号 (No.110)、新日本出版社	105~119頁。			

5	「環境問題に批判経営学はどう取り組むか」	2005.03.25	丸山恵也編著『批判経営学』(第2章担当)、新日本出版社	85～112頁。
6	「廃棄物問題と拡大生産者責任―循環型社会と環境問題特別委員会」の活動について」	2005.04.00	『学術の動向』、2005年4月号(第10巻第4号、通巻第109号)	(随想) 86～90頁。
7	「都市ごみの再資源化とエコビジネス―エコセメントとコンポスター」	2005.05.20	高橋由明・鈴木幸毅編著『環境問題の経営学』(第7章担当)、ミネルヴェ書房	199～217頁。
8	「サモアの廃棄物問題に関する聴き取り調査報告」	2005.06.02	平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書(研究代表者 川村千鶴子)『太平洋島嶼諸国における経済発展と環境問題』	(聴き取り記録) 104～110頁。
9	経営学研究連絡委員会『中等教育課程における経営教育の改善について』	2005.06.23	日本学術会議	30頁。委員長として編集を担当。
10	循環型社会と環境問題特別委員会『循環型社会形成への課題―もの活かし大国“に向けて”』	2005.06.23	日本学術会議	102頁。委員長として総論を執筆(1～14頁)。
11	「『真の循環型社会』を巡って」	2005.07.00	『農業』平成17年7月号(会誌 No.1470)、大日本農会	(報告記録) 24～47頁。
12	「21世紀の代表的工業製品はロボットである―ストックホルム・東京ビデオリンク会議「サービスロボットによる高齢者の生活の質の改善を目指して」の報告―」	2005.11.00	『学術の動向』、2005年11月号(第10巻第11号、通巻第116号)	(随想) 96～98頁。
13	「山崎敏夫著『現代経営学の再構築―企業経営の本質把握―』」	2006.03.00	『比較経営研究』第30号	(書評) 87～89頁。
14	「循環型社会における拡大消費者責任と消費者の役割」	2006.03.31	日本消費経済学会編『日本消費経済学会年報』第27集(2005年度)	13～19頁。
15	「島嶼国の廃棄物・廃車問題に関する考察―パラオの現地調査を踏まえて―」	2006.07.31	『環境創造』第9号	17～30頁。
16	YAMAMOTO Takanori, SAGA Ikuma, NUKI Takao, 'Environment Creation Currency: A Simple Guide to Community Currency for Establishing Sustainable Society'	2006.07.31	『環境創造』第9号	(英文要約) 69～105頁。
17	大日本農会編『21世紀農業の外部条件を模索する』	2006.12.00	(大日本農会叢書6)、大日本農会、309頁。	第1章「『真の循環型社会』を巡って」10～50頁。

18	「ユビキタスネットワーク時代におけるサービス・ロボットの展開」	2007.03.30	井上照幸・林倬史・渡邊明編『ユビキタス時代の産業と企業』、税務経理協会	57～77頁。
19	Environmental Issues and Theory of Management	2007.06.00	Asian Business and Management, June 2007, Palgrave Macmillan.	pp.123-142.
20	「山崎敏夫報告『経営学の再構築と企業行動研究の新展開―批判的経営学から『科学的経営学』へ』へのコメント」	2007.09.00	日本経営学会編『(経営学論集77集)新時代の企業行動―継続と変化―』千倉書房	(論評) 55-56頁。
21	「『環境経営』と企業責任」	2008.03.30	鈴木幸毅・百田義治編著『企業社会責任の研究』(第9章担当)、中央経済社	115～126頁。
その他				
1	コメンテータ 服部勝人氏(東洋大学)「新概念としてのホスピタリティ・マネジメント」	2005.05.28	日本経営学会関東部会(創価大学)	
2	基調講演「循環型社会における拡大生産者責任と消費者の役割」	2006.10.08	日本消費経済学会第30回全国大会(大東文化大学)	
3	コメンテータ 阿部智和氏(一橋大学大学院)「人間距離とコミュニケーション・パターン―コミュニケーション・メディアに注目して―」	2006.11.25	日本経営学会関東部会(日本大学)	
4	コメンテータ 山口厚江氏(作新学院大学)「企業内専門職の倫理的自立と企業倫理―介護支援専門員の職責を介して―」	2007.04.21	日本経営学会関東部会(中央大学)	
III 学会等および社会における主な活動				
1	1967.04.00	～	現在	日本経営学会会員(1992年9月～1995年8月理事、1995年9月～1998年8月常任理事)
2	1967.04.01	～	現在	企業経済研究会会員(1967.04.01～現在)
3	1986.04.00	～	現在	日仏経営学会会員(1993年6月～1995年5月会長、1995年6月～2003年5月理事)
4	1989.04.00	～	現在	日本工業経営研究学会会員(1996年11月～1999年10月副会長、2009年1月～現在会長)
5	1993.11.00	～	現在	アジア経営学会会員(1998年11月～2004年10月理事、2004年11月～2009年10月評議員)
6	2000.07.00	～	2005.09.30	日本学術会議会員(2000年10月～2003年9月技術移転研究連絡委員会委員長、2003年10月～2005年9月経営学研究連絡委員会委員長)
7	2001.04.01	～	現在	日本経営ディスクロージャー研究学会会員(2002年4月～2005年3月理事長、2005年4月～現在理事)
8	2005.06.00	～	2008.05.27	日本経済学会連合評議員・理事
9	2006.11.23	～	現在	経営関連学会協議会 2006年11月～2009年3月理事長、2009年4月～現在評議員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	教授	氏名	平山 義康	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「最近の環境行政の動向について」			2009.04.20	埼玉県環境事務研究会での講演			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 水質汚濁防止法施行令の改正に関与			1975.03.00	環境庁 (昭和 48 年 4 月～)			
2) 公害健康被害補償法施行令の改正に関与			1981.03.00	環境庁 (昭和 54 年 7 月～)			
3) 臨時行政調査会報告書の作成に関与			1983.03.00	環境庁 (昭和 56 年 4 月～)			
4) 大気汚染防止法施行令の改正に関与			1985.09.00	環境庁 (昭和 59 年 6 月～)			
5) 「絶滅のおそれのある野生動植物の譲渡の規制に関する法律」の制定及び自然環境保全長期構想の作成に関与			1987.10.00	環境庁 (昭和 60 年 10 月～)			
6) 気候変動枠組条約の京都議定書の作成事務に参加			1998.07.00	環境庁 (平成 9 年 7 月～)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	2001.00.00	～	現在	環境行政学会会員			
2	2001.00.00	～	現在	環境法政策学会会員			

3	2002.00.00	～	現在	日本法社会学会会員
4	2002.09.01	～	2005.02.28	パデコ（JICA事業）「イラン国大テヘラン圏大気汚染管理強化及び改善調査」法制度専門家
5	2004.07.11	～	2004.09.30	海外環境協力センター国際環境協力推進支援ガイドブック策定検討委員会委員長
6	2004.08.01	～	2006.07.31	独立行政法人国際協力機構環境社会配慮審査会委員
7	2004.12.12	～	2004.12.17	独立行政法人国際協力機構技術協力専門家
8	2005.09.01	～	2007.08.31	板橋区エコポリスセンター運営協議会委員
9	2005.11.25	～	2007.19.24	板橋区板橋区資源環境審議会委員
10	2006.00.00	～	現在	日本気候政策センター会員
11	2006.08.01	～	2008.07.31	独立行政法人国際協力機構環境社会配慮審査会委員
12	2006.08.01	～	2009.07.31	板橋区板橋エコアクション認定審査会委員慣用
13	2007.05.01	～	2009.04.30	板橋区板橋区環境教育推進協議会委員
14	2007.09.01	～	2008.08.31	地球環境戦略研究機関「中国の水環境管理を強化するための日中共同研究」アドバイザー委員
15	2007.09.01	～	2009.08.31	東松山市東松山市環境審議会会長
16	2007.11.25	～	2009.11.24	板橋区板橋区資源環境審議会委員
17	2009.04.00	～	現在	大学基準協会大学評価委員会分科会委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	宮地 秀門	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1	教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
	1) 授業運営の中で、インターネットから個別企業のHPをスクリーンに映し、調べていく方法を実践的に学習することを促進	2008.00.00	2008年度の担当科目「企業経営と環境問題」について、インターネットを利用して個別企業の環境報告書、CSRレポート等をスクリーンに映し出し、それらをどのように読みといていくかをディスカッションし、環境マネジメントを実践的に学習している。(2008年5月12日、19日、26日、6月2日) 2008年度担当科目「環境特殊講義B」については、就職目的の企業研究を学習するのであるが、個別企業のHPからIRを検索し、企業情報をどのように調べていくのかを実践的に学習している。(2008年10月20日、27日、11月10日)				
2	作成した教科書、教材、参考書						
	1) くらしと税金1	2007.00.00	①地球温暖化対策の経済的手段、特に排出権取引の実情、②環境税の論点(導入の検討項目)、③環境税の租税法からの検討などについて、環境省資料、論文、日本企業からのヒヤリング、新聞やインターネットからの最新の情報等からレジュメ 58 ページと参考資料 24 ページを作成し、講義で配布。				
	2) くらしと税金2	2007.00.00	受講の学生のほぼ全員がサラリーマンになることを想定して、所得税と相続税について実務的な側面を中心に節税策も付言して、レジュメ 62 ページを作成し、講義で配布。相続税については、民法の規定の学習が必要であり、別途 18 ページの参考資料を配付。				
	3) 国際会計・国際税務1	2007.00.00	日本国内に本社を作り、海外に子会社や支店を作り、海外取引をした場合を想定して、法人税における国際課税と、社員を海外赴任や海外出張させた場合の所得税の国際課税についてレジュメを 48 ページ及び参考資料 20 ページ作成し、講義で配布。				
	4) 国際会計・国際税務2	2007.00.00	①日本の企業会計基準の国際会計基準への共通化の進展状況一時問題、②1998年以降の会計ビッグバンの内容について実務的側面からの説明、③貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書の投資家からの見方などの観点から、レジュメを 38 ページと参考資料 16 ページを作成し、講義で配布。				
	5) 企業行動と環境問題	2007.00.00	日本企業の環境経営の事例をあげながら、環境経営のもつ重要性、実務の手順、課題、企業の本音などを、自分の実務経験や、新聞、インターネットなどの情報を加えてレジュメ 49 ページ及び参考資料 24 ページを作成し、講義で配布。				
	6) 環境特殊講義B	2008.09.00	この講義の中心テーマは、業界・企業研究である。就職活動の準備には、業界・企業研究をした上で、会社選定をしていくことが必要である。具体的には、①業界・企業研究の意義及び手法、情報収集の方法、②企業経営の仕組みについて就職活動を想定した研究、③各業界の研究、④企業内の職種についての研究、⑤企業幹部から「企業内で社員がどのように働いているのか、企業内での仕事とはどのようなものか。」などを含めた講話で、3年生にとって就活に役立つことを目的としている。合計 42 ページの講義資料により、講義を進めている。				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4	その他教育活動上特記すべき事項						

II 研究活動				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文 1 主要アジア各国の移転価格税制等とその執行の現状	単	2005.07.00	税大ジャーナル2号(税務大大学校)、21頁-42頁に連載	中国、インド、韓国、マレーシア、台湾、タイ、ベトナムの移転価格税制を中心とする国際課税の現状について、実務的側面については関係者からのヒヤリングも交え、制度の内容や執行状況等を整理し、今後の見通しについて付言している。さらに、日本企業にとっては、二重課税の恐れがあり、日本の国税庁が取るべき対応策も提案している。
その他				
III 学会等および社会における主な活動				
1	2001.09.00	～	現在	日本管理会計学会会員
2	2002.04.00	～	現在	税務会計研究学会会員
3	2002.04.00	～	現在	日本会計研究学会会員
4	2002.04.00	～	現在	日本簿記学会会員
5	2008.07.01	～	現在	長瀬産業株式会社補欠監査役

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	教授	氏名	山口 由二	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
1 『環境問題の経営学』	共著	2005.05.00	ミネルヴァ書房	本書の第6章の「拡大生産者責任と廃棄物会計」を執筆した。リサイクル法による拡大生産者責任の問題と自治体の負担の大きい容器、包装リサイクル法の問題点を指摘した。		
論文						
1 『政策評価制度』	共著	2005.03.31	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム、ブックレット	本書の第3章「政策評価システムの地方公共団体間の比較」を執筆した。企業会計導入との経緯を比較し、さらに8自治体の政策評価システムを比較した。		
2 『地域デザインフォーラム・ブックレット No.13 政策評価制度 (総集編)』	共著	2006.03.00	大東文化大学国際比較政治研究所	本著書は、地域デザインフォーラムの年間報告書として作成され、第5章1節を担当。東京都特別区23区の政策評価担当部署に行ったアンケート結果を集計、実態調査を行った。総169頁中、68～109頁。		
3 『全地球史からみる地球環境－生命の歴史から地球共生系を考える』	単著	2006.03.00	大東文化大学紀要	46億年の地球史から地球環境がどのように形成されたかを論じた。		
4 「自治体で進む行政評価について－板橋区の事例を中心に－」		2006.05.00	『政経研究』85号	東京都と板橋区を例として、行政評価制度の問題点を指摘。		
5 「自治体で進む行政評価－板橋区の事例を中心に－」、『政経研究 No.86』、板橋区	共著	2006.05.00	大東文化大学・板橋区地域デザインフォーラム・ブックレット	東京都を主な例として、行政評価制度の問題点を指摘した。総頁139頁中96～111頁。		
6 「人類史にみる環境問題－人類はどのように環境変動に対応してきたか－」	単著	2006.07.00	大東文化大学環境創造学会『環境創造』9号	人類史の中で人間の適応戦略について分析。そのことが、自然環境の悪化をもたらし、今後の絶滅と言う最悪の結果をもたらすことを指摘した。総頁105頁中43～53頁。		

7	「自治体が財政破綻にいたるまでの分析—赤池町と夕張市の財政分析による比較—」	単著	2007.05.00	『環境創造』10号	最近再建団体となった二自治体を比較分析。三位一体改革が進む中で自治体の財政危機・破綻が大きな問題で、2007年3月夕張市の財政破綻はその典型である。本研究では近年財政再建団体となった夕張市と赤池町の財務資料を用いて財務分析を行った。両自治体は旧産炭地という過去を持ち、過疎化と地域振興に取り組んだ末の破綻であるがその状況は大きく異なる。16年前に破綻した赤池町は無事再建したが夕張市の再建は困難な道のりとなる。総頁75頁中53-75頁。
8	「自治体財政とごみ減量の取り組み—徳島県上勝町の事例を中心に—」	単著	2008.08.00	『政経研究』91号	自治体財政の悪化が進む中、自治体のごみ処理費の増大が問題になっている。その中で上勝町では、ゼロ・ウェイスト宣言をして、ごみの減量化、再資源化を進めている。コスト分析を行い、自治体の廃棄物行政の方向性を論じる。
その他					
1	「自治体バランスシートによる都道府県財政状況の比較分析」		2008.05.31	日本地方財政学会第16回大会（大東文化大学・板橋校舎）	「自治体バランスシートによる都道府県財政状況の比較分析」について日本地方財政学会第16回大会（大東文化大学・板橋校舎）で発表。企業会計と公会計の違いを明らかにし、負債を中心にバランスシートによる分析能力を論じた。
2	「地方自治体における廃棄物減量の試み—徳島県上勝町の事例—」		2008.08.09	日本環境学会第34回研究発表会（富山県立大学）	「地方自治体における廃棄物減量の試み—徳島県上勝町の事例—」について日本環境学会第34回研究発表会（富山県立大学）で発表。自治体財政が悪化する中で、上勝町はどのようにごみ問題を克服しているかを紹介し、今後、自治体はごみ問題についてどのように対処すべきか論じた。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1987.03.00	～	現在	日本水産学会会員	
2	1994.03.00	～	現在	漁業経済学会会員	
3	1998.03.00	～	現在	日本環境学会会員	
4	1999.09.00	～	現在	日本会計研究学会会員	
5	2008.05.00	～	現在	日本地方財政学会正会員	

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	准教授	氏名	大杉 由香	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) まちづくり研究会視察旅行の記録 (2008年2月24日～26日)			2008.03.00	阪神大震災後に神戸市長田区がどのように再興したのか、また東大阪市高井田の工業集積の実態調査を行った時の状況をパワーポイント126枚に記録、関係教員 (土井幸平・岡村與子・島田恵司・小湊浩二) に現場教育用教材として無料配布する。			
2) まちづくり研究会九州研修旅行の記録 (2009年2月26日～3月1日)			2009.03.00	北九州市の環境都市としての取組や歴史視察、水保病患者の家族への聞き取り等の記録を372枚のパワーポイントスライドにおさめ関係教員 (土井幸平・岡村與子・島田恵司・小湊浩二・塚本正文) に現場教育用教材として無料配布する。			
3) 環境創造学会、春の見学会記録 (2009年3月5日)			2009.03.00	環境創造学部の学生12名を川崎市にある電気の史料館、横浜のランドマークタワーに引率した際の記録を84枚のパワーポイントスライドにおさめ関係教員 (土井幸平・北澤恒人・小湊浩二・塚本正文) に現場教育用教材として無料配布する。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 「地域再生には何が必要かー事例研究を通して普遍的条件を考えるー」			2006.04.25	東京板橋ロータリークラブ例会における卓話 (講演)、池袋東武バケットホール			
2) 「地域社会の再構築とNPO・ボランティア」			2006.10.07	秋田県北NPO支援センター主催の講演、秋北ホテル (秋田県大館市)			
3) 「地域再生には何が必要か」			2006.10.26	イワキ総研主催の講演 (「イワキ・ロンザ」、東京都中央区日本橋本町)			
4) 福祉・社会保障分野における格差問題ー医療・年金・福祉・介護サービスなどを考えるー			2007.11.17	大東文化大学公開講座「現代の格差問題を考える」講演内容は以下の通りである。はじめにー格差問題を考える前にー①社会保障費の伸びは不必要に高いのか?②国際的水準から見た日本の社会保障給付水準③日本の貧困率とジニ係数④社会保障・福祉充実の前に立ちはだかる問題 (誤解に基づく政策の展開) 1. 日本の社会保障給付水準の再検討ー如何なる格差が見られるのかー①年金問題②医療問題③介護問題ー介護保険を中心にー④公的扶助問題ー生活保護を中心にー 2. 社会保障・福祉の視点から格差問題を考える ①中流層は消滅しつつあるのか?②私自身の見解③高齢者世帯に見る特徴④若年世代の問題 3. 政府が進める社会保障・福祉における市場原理の導入 ①市場原理の導入が問題になる理由②市場原理主義とNPO おわりにー日本はこれでもまだ良い方なのか?ー			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							

1	『明治近代化の中の公的扶助と私的救済—今何を学び取るべきか—』	単	2007.03.13	法政大学イノベーション・マネジメント研究センター編 ワーキングペーパー No.30 (販売価格¥500) p.1-p.59	まず本書では薩埵正邦(1856~1897)の生きた時代の生活環境について述べた後、当時の日本の一般救貧法が救済対象を可能な限り限定する制限主義であったことを実証した。そして一般救貧法改正が潰されていく過程と、それに伴う特別救貧法の成立と内容を説明し、同時に特別救貧法が最近まで改正を重ねつつも適用されていた(されている)ことに注意を促し、戦後以降の日本の社会福祉も制限主義的な側面があることを明らかにした。その後、明治前期から中期にかけての公的扶助実施の地域的特徴と貧弱な公的扶助を支えた私的救済のあり方を説明し、その中でも特に現在のNPOのあり方を考えるにあたって参考になる秋田感恩講について力点を置いて解説、地域社会と一体化し、かつ組織が独立的に資金調達ができてこそ、NPOとして効果的な活動が可能であることを述べた。
2	『大学改革のイノベーター—法政大学創立者薩埵正邦と明治日本の産業社会』	共	2008.04.00	書籍工房早山、図書新聞、p.300-p.349	第8章「明治近代化の中の公的扶助と私的救済—ボアソナー博士と感恩講—」を担当、内容は『明治近代化の中の公的扶助と私的救済—今何を学び取るべきか—』と重複(洞口治夫、法政大学イノベーション・マネジメント研究センター編)。
論文					
1	「経済史の分析視角」	単	2004.06.00	『企業診断』51巻6号、同友館、p.78-p.82	経済史は経済学と歴史学が融合する学問であるが、社会主義体制の崩壊によってマルクス経済学が揺らいだ結果、経済史の分析視角が多様化したことに触れた。また現状肯定を前提としての研究は、単なる趣味的研究になりかねないことも警告した。
2	「日本農業の変遷と未来—日本経済史は農業をどう考えてきたか—」	単	2004.07.00	『企業診断』51巻7号、同友館、p.112-p.116	現在、食が満たされ、主流産業も工業・サービス業に移ったためか、日本経済史研究においても農業を取り上げる研究者は少ない。しかも戦前農村と戦後農村ではあまりに大きな変化があったため、現在の食料問題を考えるにしても、戦前の歴史は参考になりにくいところがある。だが世代を超えて進められた品種改良や戦前農村の質素な生活からは私達が日頃忘れがちな共助の精神や足るを知るといった節度を読み取ることができると指摘した。
3	「死亡統計から秋田市民の生活を考える—求められる行政的対応とは何か—」	単	2004.07.00	『秋田市史研究』13号、秋田市、p.25-p.40	1981年から2000年までの死亡統計を分析して秋田市民の医療・生活を考察した論文。県外人のみならず、秋田県人でも秋田県と秋田市を混同しているくらいがあるが、秋田市では医師率・病床率が県を上回っているだけでなく、全国平均よりも高く、恵まれた条件にあることを示した。しかし他方で秋田市は県全体と比べ、経済危機には脆く、98年以降の不況で収入が激減し、そのことが共働きの増加・夫の家庭的地位の低下・酒の消費量減少・自殺率の上昇につながったことが明らかになった。本稿ではこうした事態に対し、市がNPOとの連携によるまちづくりから行うべきであると指摘した。
4	「産業史・経営史・企業史のゆくえ—今何が問われているのか—」	単	2004.08.00	『企業診断』51巻8号、同友館、p.112-p.116	現在の日本経済史の主流は産業史・経営史・企業史であるが、経済史と経営史の相違および経営史と企業史の違いが認識されていない問題があるばかりでなく、今の社会に新しい視座や未来を切り拓くヒントを想起しているのかといった問題が厳存する。そこで本稿では社会的要求と研究の間でズレが生じている理由として、①異分野との交流の少なさ②企業側の史料提供等の便宜もあって保守的な書き方になること③研究の細分化を挙げ、さらに今後必要とされる視点として、国際的視点・中小企業の視点・自然と人間共生の視点を指摘した。
5	「生活史と日本経済史—生活の変遷をどう捉えてきたのか—」	単	2004.09.00	『企業診断』51巻9号、同友館、p.102-p.106	日本経済史では生活史を扱う研究が少ないが、状況は変わりつつある。しかしジェンダーや差別・弱者に対する問題意識は低く、たとえば労働不能者(一般窮民)に対しては、経済史的分析は僅少である。また20世紀前半までは日本でも非常に大きな問題であった病気・衛生が生活経済にもたらした影響にも触れていない。つまり日本経済史における生活の捉え方は現在の教訓を得ようといった発想は乏しく、過去の人々の生活・身体感覚にも鈍感になっている訳だが、同時にこうした生活・身体感覚を呼び起こすことが環境問題への対応等につながることを明らかにした。

6	「日本経済史の国際視角—脱亜入欧をめぐる視点の変遷と展望—」	単	2004.10.00	『企業診断』51巻10号、同友館、p.87-p.91	日本経済史では外国の問題を扱う際の特徴は、①政治的論争や社会動向と無縁である傾向②ある生じた事態（植民地化等）とは異なる道筋はありえたかといった検証が殆どない③現地語を解したうえで研究が少ない④植民地の現地の人々の生活が見えにくい⑤植民地以外の移民に無関心といったことが挙げられる。さらに最近では欧米列強との関係を重視することを批判して、アジア通商圏の力を強調する研究も出てきているが、他方でこうした一見アジアとの共生につながるような研究は、実は欧米や日本の経済侵略を曖昧にしている問題が存在する。なお、こうした経済侵略や植民地支配の問題は未だに強く残っており、私達がこれらに真摯に向き合う必要があることを示唆した。
7	「日本経済史の視点から見た経済政策—何を見つめ何を看過したか—」	単	2004.11.00	『企業診断』51巻11号、同友館、p.106-p.110	国や地方財政の債務残高が増える中で、現状分析の研究者はいささか自分の立場に都合の良い形で歴史を語りがちであるが、それに対し、経済史研究者の捉え方はどうかにかに焦点を当てている。まず経済史上に残る経済政策の多くは失敗に終わるケースが多かったことを示すと同時に、経済史研究者は比較的客観的に過去の政策を捉えているものの、中央政府の経済政策のみに焦点を当てがちで、地方財政や生活問題を切り口にして過去の財政や経済政策のひずみを考えることは少なかったことを述べた。そしてこれらの視角を軸にして、現在の問題と照らし合わせた場合、国からの税源移譲をするだけでは、税の無駄遣いはなくなるということ、また国債費増加による財政硬直化はかつての秩禄処分前の状況に似ている点を指摘した。まさに今は産業優先主義の政策から、セーフティネットの形成を中心にした政策転換が必要であることを強調した。
8	「日本経済史の教育—どこに問題があり、何を伝え切れていないのか—」	単	2004.12.00	『企業診断』51巻12号、同友館、p.95-p.99	日本経済史の研究において教育問題は、正面から取り上げられることは極めて少なかったが、このままでは研究の担い手の質量に関わること、さらに経済史＝記憶と趣味の世界と誤解されれば、過去の教訓が伝わらず、未来に悪影響をもたらすと考え、執筆をした。実学教育に比べ、現況に合わせた教育方法がやりにくい点で歴史教育が難しいことや、学生達の急激な知の劣化の実態を明らかにし、そのためには教師側が可能な限り、世界史と日本史の結合点を探る等、総合的な視野での授業を行うこと、かつフィールドワーク等を授業に導入して、学生達に歴史学の形になるまでを見せることが必要であると述べた。
9	「青木純一『結核の社会史—国民病対策の組織化と結核患者の実像を追って—』（書評）」	単	2005.03.00	『社会経済史学』第70巻6号、2005年3月、p.737-p.739	2004年3月に御茶の水書房から刊行された研究の書評。19世紀から1930年代における結核対策を取り上げた書で、社会経済史の研究で軽視されがちであった病と社会の関係に焦点を当てていること、さらに今までに利用されていなかった一次史料を駆使して結核患者の実態を明らかにした点を評価した。しかし他方で、結核に関する医学的説明が殆どなく、病氣自体が治まっても養生がその後も必要であった患者に対し建設されたコロニーの視点がないといった問題を指摘した。また戦時体制や戦後の分析が必要であることや年表の欠陥等をも述べている。
10	「視点 経済史研究の現状と将来」	単	2005.11.00	大東文化大学『東洋研究』第157号、大東文化大学東洋研究所、p.33-p.48	西洋経済史・アジア史の観点を通して見えてくる日本経済史の問題としては、①英国をはじめとする欧米での経済史の方法論や新説にとらわれやすいこと②アジアの経済史が発展途上ということもあって日本のアジアにおける特殊性のみが強調されがちであること③アジア史に対する無知が挙げられる。本稿ではこうした隘路打開の方策として、大塚史学をはじめとする、日本でかつて有力であった分析方法を単に捨て去るのではなく、それらを見直しながら欧米での新潮流との噛み合わせをすること、さらにアジア史研究をしているアジア人研究者との交流が必要なこと等を指摘した。

11 「自治体史編纂に見る地方研究の問題」	単	2006.02.00	大妻女子大学『人間関係学研究』7号、大妻女子大学人間関係学会、p.13-p.23	自治体史は地方史研究において重要な位置付けを占めており、その影響力は社会的に見ても研究上からしても無視できないが、他方で作成過程に様々な問題があることは意外と知られていない。第一に自治体史では学術誌と異なりレフリー制がないうえ、どの部分を誰が担当しているかはよく見ないと判らないため、執筆者は個人作業の段階で内容の質向上を等閑にしかねない問題がある。また第二に研究背景の異なる地元在住執筆者と全国史研究者が共同作業することで齟齬が生じ、結局両者の妥協等が興味深い内容を減じてしまうこともある。さらに第三の問題として地方における高齢化で人材が不足し、自治体史が都市部に住む全国史研究者への依存を強めているため、自治体住民のアイデンティティを支えるような自治体史の形成が困難になっている点が挙げられよう。そして第四に生活問題等を取り上げる際に自治体権力と対峙する問題が出てくるが、いずれにせよ、本稿では郷土史家のグループが地方大学と提携して、場合によってはNPOを設立し、他地方・他都市在住の若手研究者も対象に含めた奨学金制度・定職斡旋が人材枯渇を防ぐ一助になると提案した。
12 「研究ノート 少子高齢化と日本経済史—歴史を学ぶ意味は薄れたのか—」	単	2006.03.00	『武蔵大学論集』第53巻3・4号、武蔵大学経済学会、p.129-p.143	日本社会の今後を考えるにあたり、少子高齢化への対応が急がれるのは言うまでもないが、その際に長期的視点からの分析が当然必要である。ところが日本経済史研究に関して言えば、人口史等の一部の研究を除き、少子高齢化への対応にヒントを与えてくれるような研究は少ない。また少子高齢化と言え、人口減少といった数に注目が行きがちであるが、本稿では日本経済史的視点から、人間の心身の変化と少子高齢化との関連を考察した。結局、80年代半ば以降のコンビニの爆発的普及に象徴されるような、過度な経済発展は人間の心身を蝕むことをある程度実証し、それが少子高齢化に拍車をかけていることを明らかにしたが、同時にこうした現実問題に対応するために従来の日本経済史の視点を見直す必要があることを指摘した。
13 「明治・大正期におけるたばこ産業の労働環境—スペインたばこ産業との比較もふまえて—」	単	2006.08.00	『TASC monthly』368号、たばこ総合研究センター編・発行、p.4-p.10	本稿では明治・大正期のたばこ産業が他産業と比べて労働日数や労働時間で恵まれているにもかかわらず、雇用流動性が高かった理由として①現地採用・自宅通勤のため、自宅を拠点に職探しが容易であったこと②特に女性の賃金が高産業より低かったことを実証した。そしてスペインたばこ産業における労働条件に触れ、スペインでは解雇は労働能力が衰えてもありません、福利厚生が充実しており、かつたばこ職になれば、子孫の就職まで心配のなかった実態を明らかにして日本との比較を行った。
14 「視点 日本経済史研究の動向」	単	2006.12.00	大東文化大学『東洋研究』第162号、大東文化大学東洋研究所、p.111-p.125	元々は希薄になりすぎた階級対立・闘争の視点—日本経済史における研究動向批判—という題名の論文で、90年代以降、日本経済史研究の殆どで階級自体を扱わなくなっていることを指摘し、その理由として①社会主義政権の崩壊②統計分析の緻密化③低成長期以降の社会運動の減少④現状肯定型の問題意識に変わってきたことを述べ、このままでは日本経済史研究の社会的有用性が低下することは避けられないことを明言した。
15 「歴史学における、写真・映像—高度情報化と文書偏重主義の狭間にある盲点を考える—」	単	2007.03.00	『大東文化大学紀要〈社会科学〉』第45号、p.115-p.125	歴史学においては写真や映像が副次的な位置付けに置かれ、文書偏重主義が強い傾向がある。他方、写真や映像は編集によって真実をフィクション化しかねない側面があり、それが文書偏重主義に拍車をかけている部分がある。しかし文書と映像の統合的研究を進める必要があり、その理由としては近現代史においては実証性の強化につながる、かつポスト・モダンの歴史学の不可知論を論駁する意味もあるうえ、写真集や映像の客観性を強めることにもなると述べた。

16	「研究ノート 日本経済史における理論的・思想的支柱の喪失—今何が起きているのか—」	単	2007.03.00	『武蔵大学論集』第54巻4号、武蔵大学経済学会、p.85-p.98	90年代以降、日本経済史では理論的・思想的支柱でもあったマルクス歴史学・経済学の視角は研究上軽視される傾向がある。本稿では①なぜ日本経済史研究でこうした経済理論・思想が失われつつあるのか②日本経済史において理論・思想が必要な理由について言及した。①については社会主義体制崩壊の他に、西洋経済史と比べ、問題を細分化して高度な実証レベルを打ち出すのに関心が集中しがちなことや現状肯定を前提にした経済史の登場を挙げ、②については理論・思想抜きでの個別性の強い研究は思い込みを証拠づけるだけの実証になりかねず、下手をすると理論・思想なき実証は単なる資料の読み下しになり、時の権力にも悪用されかねない点を述べた。
17	「日本史研究における外国人の視点—英米人の日本史研究に対する批判的検証—」	単	2007.07.00	大東文化大学『経済論集』第89号、大東文化大学経済学会、p.1-p.12	日本史研究者は日本語で日本史を研究するという立場もあって、他の学問に比べて内国主義的だが、それを打破する意味でも外国人による日本史研究を知ることは重要である。本稿では研究や日本語翻訳も多い英米人の日本史研究に焦点を当てたが、これらの研究は言語帝国主義に陥っており、大抵の日本語の日本史研究を看過していること、英米人研究者は世界における自国の圧倒的力もあって、自分たちの歴史観を他国の研究者と比較して相対化・検証しておらず、概して植民地に対する自国の政策を過大評価する帝国主義的発想がある。つまり日本とは異なる意味で英米人の日本史研究は内国主義的で、これからの日本史研究はグローバルな影響を受けつつも、英米の歴史観に踊らされない独自の道を探る必要があることを唱えた。
18	「菅沼隆『被占領期社会福祉分析』(書評)」	単	2007.07.00	『歴史と経済』197号、政治経済学・経済史学会、p.58-p.60	2005年にミネルヴァ書房から出版された書籍。本書の実証レベルが群を抜いて高いこと、現代の社会的意義もふまえた高度な学術書であることを評価する一方、表現の難解さや史料集を思わせるような翻刻的な内容、先行研究に関する説明の不十分さを指摘し、GHQの史料的裏付のない記述では実証が手薄である問題および扱う時代があまりに短期間であるため、題名と内容が一致しない点等を述べた。
19	「日本におけるNPOの現況と問題点—米国との比較をふまえた批判的検証—」	単	2007.10.00	2007年度政治経済学・経済史学会 秋季学術大会パネル「公共圏におけるNGO・NPOの現状と課題」HPにPDF公開 (http://www.e.u-tokyo.ac.jp/~onozukat/fukushif/ohsugi.pdf#search='大杉由香')	まず本稿では日本のNPO研究が①当座の問題解決に目を囚われて理論研究が弱いこと②米国のモデルを理想視しがちであること③市民社会に対する盲目的理想視④歴史的視点がなかったといった問題点を挙げ、日本のNPOは国家の代替的役割はおおよそ果たせず、新たな公共圏の担い手としては期待しにくいこと、また日本人の行動原理から何故NPO活動が停滞しがちなのか、その理由を探った。そして米国と比較した際に浮かび上がる日本のNPOの特殊性を指摘し、国際的連携の少なさと、絶対的貧困者を排除して中産階級の生活維持に走りしがちな問題を述べた。
20	「日本経済史における金融史研究の動向—戦前日本の研究を中心に—」	単	2007.11.00	大東文化大学『東洋研究』第162号、大東文化大学東洋研究所、p.15-p.26	日本経済史の中でも最近とみに日本の先進性が強調されているのが金融史の分野であるが、実際には無理がある。たとえばアングロサクソンの市場展開が戦前の一時期あったにしても、それが戦時中に呆気なく消えてしまった点から見て後進性の方が目立つ。しかも先進性を強調した場合、少なくとも戦争責任をめぐる問題に関して今に何ら問題提起ができず、社会的意義のある研究になりにくいことを述べ、かつ現状肯定型の問題意識は時として有害な影響をもたらす危険性もあることを指摘した。
21	「福祉国家とグローバリゼーション—理論的問題と直面しつつある現実—」	単	2008.03.00	大東文化大学『経済論集』第90号、大東文化大学経済学会、p.1-p.19	現在、福祉国家体制は崩壊過程にあるのか、あるいは変容しつつも継続するのかといった議論が盛んにおこなわれており、後者に与する研究者は多いが、本稿では、①福祉国家論が深刻化している発展途上国の貧困救済とは対立関係にあること②グローバリゼーションによって国家不信が国民間に生まれて社会的連帯に悪影響をもたらしていること③グローバリゼーションによる環境問題の広がりが移民問題等を深刻化させ、先進国にも悪影響が及びつつあること④如何なる体制でも永久不滅は歴史上あり得なかったこと等を指摘して、福祉国家体制は10年程度の中期的なスパンであればともかく、(超)長期的には崩壊過程にあることを実証した。さらにここでは福祉国家体制に代わるだけの政治経済システムが見つかっていない問題も指摘している。

22	『建築と社会』に記録された関東大震災からの教訓—その後教訓は十分生かされたのか—	共	2008.03.00	『経済研究』第 21 号、大東文化大学経済研究所、p.55-p.69	関西の建築家を中心とする日本建築協会が現在も発行している『建築と社会』は 1917 年 9 月版から 1955 年 12 月版まで不二出版によって翻刻されたが、論文の一部史料として使われることが多く、『建築と社会』自体を取り上げる研究は少なかった。しかも建築業界においては建築史以外の研究者は歴史に関心を持たない傾向があり、こうした古い雑誌から現在に通じるような建築や都市計画の概念を読み取ろうとする意識は希薄であった。そこで本稿では、阪神・淡路大震災の問題をふまえながら、80 数年前の関西の建築家たちが関東大震災から何を学び伝えようとしたのかに触れ、かつ彼らの理想が何故現実の都市形成の中で消え去ったのか、近現代の大阪のまちづくりの形成過程から探った（共著者：土井幸平）。
23	日本の社会福祉とグローバル化の関係—世界情勢・中央政府・地域から考える—	単	2008.07.00	大東文化大学『経済論集』第 91 号、大東文化大学経済学会、p.1-p.23	グローバル化の視点から日本の社会福祉が論じられる場合、ワーキングプア等の貧困問題から分析されることが多いが、本稿ではグローバル化による経済変化が如何なる過程を以て社会福祉行政や地域福祉に悪影響をもたらすかを具体的に検討し、この悪影響が貧困層に留まらないことを実証・図示した。さらにグローバル化以前から日本では文化的で健康的な最低生活保障を満たしていないといった問題がある等、先進国との相違を検証した他、地域福祉の検証事例として板橋区を挙げ、グローバル化の下で地域経済が活性化しても、それが地域の相互扶助ネットワーク強化につながらないことを明らかにした。
24	秋田感恩講に関する一考察—過去の福祉 NPO から何を見るか	単	2008.11.00	大東文化大学東洋研究所『東洋研究』第 169 号、大東文化大学東洋研究所、p.1-p.18	現在、新自由主義の傾向が見直されてきているとはいえ、公的福祉の削減はやむを得ないものとみなされがちで、かつ米国型の福祉 NPO がもてはやされる傾向があるが、本稿はこうした現在の社会的傾向及び研究動向に対する批判をふまえたうえで、日本に由来した大規模 NPO である感恩講に注目し、日本では救済組織の設置によって地主や地域住民が自分たちにメリットが何らかの形で還元されると考えた場合に、組織としての長期的継続が可能であったことを述べた。また組織としての経済的自立の点では今でも学ぶべきところが大きい一方、過去の成功事例に胡坐をかいた結果、特に大正期以降、慈善事業から社会事業への転換をうまく図れなかった問題があったことなどを明らかにした。
25	「書評 岡本英男『福祉国家の可能性』」	単	2009.01.00	『歴史と経済』第 202 号、政治経済学・経済史学会、p.66-p.68	本稿では『福祉国家の可能性』が福祉国家に関する議論の交通整理を緻密に行っていること点を称賛しつつ、内容紹介する一方、福祉国家体制が未来永劫続くと考えには無理があること、環境問題や移民問題が福祉国家にもたらす悪影響を看過している点、市民の定義が曖昧である点等、多くの問題点を指摘した。
26	近代日本の福祉制度の成立過程とその背景	単	2009.03.00	『歴史と地理』通号 623 号、(日本史の研究 224 号)、山川出版社、p.1-p.15	本稿は、『歴史と地理』の「日本史の研究」(年 4 回)で組まれた福祉の歴史シリーズ(古代・中世・近世・近代)の 4 回目である。この論文では近代日本(戦前)の福祉制度が明治初期から次第に整備されてくるとはいえ、限られた財源の中で富国強兵政策を目指した以上、可能な限り国民が国家に依存しないことを前提に作成され、かつ権利性とは無縁な制度であったことを明らかにした。また 1920 年代に日本は世界の五大国になったとはいえ、まだ福祉については一般救貧法の充実が議論されている状態であったが、他方で同時期の英国では既に救貧法が解体し始めていたことを指摘し、日本の福祉や生活権における後進性を指摘した次第である。

27	日本建築協会の視点から見た戦前の衛生問題—何故問題は意識されつつも抜本的改善につながらなかったのか—	共	2009.03.00	大東文化大学経済研究所『経済研究』第22号、大東文化大学経済研究所、p.1-p.10	戦前日本の衛生問題に関する研究は、衛生問題の専門家と一般国民の感覚にはある程度触れているものの、その中間的な部分、すなわち衛生問題の周辺領域の専門家たちの視点に関する記述は殆ど見られなかった。そこで本稿では日本建築協会の雑誌に焦点を当て衛生問題を考えたがそれはある意味で研究の空隙を埋める意味を含んでいる。さらに本稿では衛生問題が戦前から現在に至るまでパンデミックでも起きない限り、日頃はその重要性が忘れられがちであることを指摘し、さらに人権意識が希薄で人を物資同様に国のために投入可能なものとみなす戦前では、目先の軍拡が重視され衛生環境は等閑にされたことも明らかにした。つまり現在の衛生的な環境は人権擁護の意識ができてこそ成り立つことを述べたが、同時に1920年代に『建築と社会』（日本建築協会の雑誌）の一部の論文で格差縮小のために唱えられた住居権（誰もが快適で清潔な家に住む権利という発想）が未だに現代日本でも確立していない問題も洗い出した次第である（共著者：土井幸平）。
28	福祉資格試験に関する問題—何のための、誰のための試験制度改革か—	単	2009.03.00	『大東文化大学紀要』第47号（社会科学）、p.197-p.207	現在、福祉資格試験制度は国家資格である介護福祉士でさえ、現場の労働者の声を反映したのになっておらず、今後は研修時間延長による受験資格取得が困難になることが予想される一方、受験日が未だに年に1日だけといった問題をはらんでいる。結局、研修時間延長によって試験制度改革は現場の労働者でなく福祉教育団体やその関係者を益する形となっている。なおこの傾向は公的資格・民間資格では一層顕著になっており、福祉住環境コーディネーターの事例を取り上げて分析を行い、実学と虚学のバランスを福祉教育の中でいかに取るべきかを模索した。
その他					
1	第3編 明治後期の秋田市と周辺町村	共	2004.06.00	『秋田市史 第4巻 近現代Ⅰ 通史編』の分担執筆、秋田市	第4章 社会と文化の諸相 第3節 衛生と安全の1・2、4・5 第5章 社会問題の展開と慈善事業 第1節の4を除く全部 第4編 大正期の秋田市と周辺町村 第4章 市民生活の諸相 第3節 衛生と安全の1・2、4・5 第5章 社会問題の展開と社会事業 第1節の4を除く全部 明治・大正の秋田市における医療・衛生・福祉に関する分析を秋田市役所の公文書を利用して行う。
2		共	2005.03.00	『秋田市史 第5巻 近現代Ⅱ 通史編』の分担執筆、秋田市	第5編 昭和恐慌期の秋田市、第6編 戦時下の秋田市、第7編 占領期の秋田市と周辺町村、第8編 町村合併と秋田市、第9編 高度成長期の秋田市、第10編 地方の時代の秋田市の各編 第3章 市民生活を担当（一部資料・社会運動関係を除く）。人口や物価、災害、衛生問題の他、福祉と医療についても昭和初期から平成2年（高田市長退任）まで描く。
3	p.164の史料集の編纂・解説	単	2005.03.00	『秋田市史叢書11 近現代感恩講史料』、秋田市	現在、日本では米国型の資金調達のできるNPOが持て囃されているが、実は日本では既にその原型が江戸時代の秋田で広がっていた。この感恩講は民法作成にも大きな貢献のポアソナードも賞賛し、明治期の貧期の貧窮民救済にも大きな力をふるったが、この叢書は明治期以降の感恩講の史料をまとめ、翻刻・解説を単独で行ったものである。
4		共	2005.03.00	『図説 秋田市の歴史』、秋田市の編纂	第5章 近現代の写真収集・選別・レイアウトを行った他に、福祉と医療に関しては解説文も書く。
5	「阪急電鉄・宝塚歌劇の創始者 小林一三」	単	2005.04.01	韓国国家戦略研究所・大東文化大学起業家研究会合同セミナー報告、韓国国家戦略研究所、ソウル	小林一三の先行研究を網羅したうえで、彼の起業家としての成功の背景には、①斬新なアイデア②逆境を順境に変える能力③時代の流れを読む嗅覚とそれに合わせる柔軟性④スピードと慎重さの絶妙なバランスがあった他、自分の子弟を有力者一族と姻戚関係で結ぶ戦略も影響していたことを指摘した。ただし小林は起業家としては適性であったものの、政治家としては不適格で、特に事大主義と人種偏見の強さが問題であったことも併せて述べた。

6	「福祉国家とグローバリゼーション-出口なき時代へ」	単	2005.09.24	2005 年度独占研究会研究報告、東京経済大学	本報告では福祉国家とグローバリゼーションの定義を明らかにしたうえで、福祉国家論における議論の問題および福祉国家とグローバリゼーションを関連付けた議論の傾向を整理したうえで、何故福祉国家論が発展途上国の貧困解消につながる学問にならないのか、また福祉国家体制、を越えて国際福祉（国際社会政策）の実施は可能なのかに触れたが、いづれにせよ、こうした政策が国境を越えることは困難であるばかりでなく、グローバリゼーションによって抑制されることを示し、福祉国家体制を世界中に広げることは不可能であることを示した。さらに環境問題の視点からも超長期的には福祉国家体制の解体が予想されることを明らかにした。
7		共	2006.03.00	『秋田市 第 17 巻 年表・索引編』の分担執筆、秋田市	近現代の市民生活・医療・福祉関連の年表作成を行った。
8	「明治近代化の中の公的扶助と私的救済-今何を学び取るべきか-」	単	2006.05.20	法政大学創立者薩埵正邦生誕 150 周年記念連続講演会-明治日本の産業と社会-の第 6 回講演、法政大学イノベーション・マネジメント研究センター	内容は 2007 年 3 月に法政大学イノベーション・マネジメント研究センターから発行された同題のワーキングペーパー（前掲）と同じ。
9	What is necessary for restoration of activity at living area?: Focusing on viewpoints and indispensable conditions through specific cases	単	2006.12.01	第 15 回東アジア国際シンポジウムでの研究報告、韓国技術教育大学校、韓国天安市	地域再生には何が必要かと兵庫県旧五色町（現洲本市）・大阪府枚方市・東京都板橋区の事例から考察し、地域社会のネットワークの形成には意外と自然環境や歴史のあり方が影響していることを明らかにした。そして地域活動が盛んである時にはひとつの組織が複数の顔を持っている場合(商店街は営利組織であると同時に町内会である etc)が多いことを述べ、日本の場合、町内会から遊離した NPO はあまり機能しないこと等を報告した。
10	「秋田感恩講の分析-過去の NPO から何を見るか-」	単	2007.03.18	2007 年度日本 NPO 学会大会報告、大阪商業大学	本報告では自ら資金調達を行って独立経営をしていた、現在から見ても珍しい非営利組織であった秋田感恩講に焦点を当て、この感恩講を中心に秋田県に感恩講組織が広がった経緯について述べた。秋田感恩講は江戸から明治 30 年代までは紆余曲折を経ながらも絶大な力を持っていたが、明治 30 年代以降も救済に力点を置きがちであったため、社会的地位を次第に低下させていった。その背景には近代的な組織改革が行われなかったこと等が挙げられ、本報告では過去の成功例が時代の変化への対応を遅らせたことも明らかにした。
11	「日本における NPO の現況と問題点-米国との比較をふまえた批判的検証-」	単	2007.10.27	2007 年度政治経済学・経済史学会（旧土地制度史学会）秋季学術大会パネル「公共圏における NGO・NPO の現状と課題」でのパネリストとしての発表、静岡大学	概要は前掲論文の通りである。

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.00	～	現在	歴史学研究会会員
2	1993.04.00	～	現在	社会経済史学会会員
3	1995.11.00	～	現在	土地制度史学会会員(2002.10 より名称が政治経済学・経済史学会に変更、編集委員[2002.12～2005.12]、理事 [2005.12～2008.12]、研究委員 [2005.12～現在])
4	1997.02.00	～	現在	社会政策学会会員
5	1999.03.00	～	現在	日本 NPO 学会会員
6	1999.08.00	～	現在	日本産業科学学会会員
7	2000.10.00	～	現在	実践経営学会正会員
8	2002.04.00	～	2006.03.00	秋田市史編さん室編さん専門部会（近・現代部会）委員
9	2004.07.00	～	2006.03.00	板橋区役所板橋区地域保健福祉問題懇談会委員（障害者福祉部会副部長）

10	2005.07.00	～	現在	同時代史学会会員
11	2006.04.00	～	2007.12.00	板橋区役所板橋区高齢者大学院「グリーンカレッジ」講師（健康生きがい部生きがい推進課）

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	准教授	氏名	北澤 恒人	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書 1 『シェリング自然哲学への誘い』	共	2004.08.10	晃洋書房	第5章「理念における存在者の学—後期シェリングにおける自然哲学の思想」を担当。積極哲学と消極哲学とを対比させる後期シェリングの思想枠組みの中で、初期の自然哲学・同一哲学の位置づけの変化とその新たな意義を明らかにした。共著者名：松山壽一／加國尚志／平尾昌宏／小田部胤久／澁谷理恵／北澤恒人／W・ノイザー／河本英夫／浅沼光樹／坂井孝彦 総頁数 264 頁中 117-141 頁。			
論文 1 Die intellektuelle und die ästhetische Anschauung: eine Untersuchung über Schellings System des transzendentalen Idealismus	単	2008.03.31	大東文化大学紀要第 46 号 人文科学	シェリング『超越論的観念論の体系』における知的直観と美的直観との関係について、とりわけ美的直観が歴史における自由と必然性との相克という矛盾の解決として導入されていることを示した。横組み 167-177 頁。			
2 Das Licht und die Schwere in Schellings Naturphilosophie: Eine Wandlung als das "Resultat" in der Einleitung zu seinem Entwurf eines Systems der Naturphilosophie 1799	単	2009.03.31	大東文化大学紀要 第 47 号 (人文科学)	シェリング自然哲学において、自然総体の産出的能動性の中で固体の存立を基礎づけるという課題は、フランツ・バーダーの重さの思想の影響のもとで一定の解決が与えられ、同時に同一性哲学体系への転換の契機となった。横組み 149-160 頁			
その他							

1	環礁の脆弱な自然環境と廃棄物管理の現状 —マーシャル諸島マジロ環礁とキリバス・タラワ環礁の場合		2004.10.31	『環境創造』第7号	41-71頁 文部科学省研究費助成による南太平洋島嶼国の現地調査報告。環礁地形の成り立ちと人の居住の歴史、人口と車両数の変化、淡水資源、廃棄物管理などの現状をまとめる。
2	ジョン・ロックにおける自己所有とその根拠としての人格の概念について		2005.01.08	日本医学哲学・倫理学会 関東支部例会（日本医科大学）	
3	伊坂青司・西村清和編『シェリング著作集第3巻』	共	2006.03.10	燈影社	シェリング「私の哲学体系の叙述」の序文および本文第100節まで、訳注を担当 全464頁中7-100頁および406-411頁。
4	H.J.ザントキューラー編『シェリング哲学・入門と手引き』	共	2006.07.20	昭和堂	第5章「自然の哲学」を担当。ヤンツェン「シェリングの自然哲学」の原稿にもとづく旧訳を改訂して収める。全288+59頁中122-159頁
5	『哲学の歴史・第7巻、理性の劇場』	単	2007.07.10	中央公論新社	コラム「リヒテンベルクと雨論争」を担当。総頁数718頁中181-182頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1983.10.00	～	現在	日本哲学会会員
2	1984.10.00	～	現在	日本倫理学会会員
3	1987.12.00	～	現在	ゲーテ自然科学の集い会員
4	1988.06.00	～	現在	ヘーゲル研究会会員
5	1988.12.00	～	現在	自然哲学研究会事務局
6	1992.07.00	～	現在	日本シェリング協会幹事（1992.07.00－1996.07.00）、編集委員（2002.07.00－2006.11.00）
7	1995.05.00	～	現在	日本ヘルダー学会会員
8	1996.10.00	～	現在	日本医学哲学・倫理学会関東支部会会員
9	2000.10.00	～	現在	環境創造学会会員
10	2002.04.00	～	現在	日本医学哲学・倫理学会会員
11	2007.08.01	～	2009.07.31	東京都板橋区感染症診査協議会委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	准教授	氏名	島田 恵司	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 一授業 (まちづくり原論) におけるワークショップ方式の採用		2003.04.00	2003 年度担当科目「まちづくり原論」について、受講生を数人ずつのチームに編成し、ディスカッションを行うとともにそれに基づいた発表を行う方法を採用している (2003 年 4 月～現在)				
2) 成蹊大学授業評価		2006.12.00	成蹊大学授業評価 (平成 18 年 12 月実施) において、高い評価を得た。				
3) 大東文化大学環境創造講座		2008.00.00	社会人、学生、高校生を受講生とした公開講座を担当し、社会に通用する実践的教育を行っている (共通テーマ: 2008 年度「環境」、2009 年度「まちづくり」)				
4) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。全学平均 3.9 のところ 4.4 (都市論)。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 分権改革の地平 (コモンズ刊)		2007.10.00	担当科目「地方自治」の教材として使用。*研究業績の再掲				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 政策法務の理論と実践	共	2004.11.18	第一法規	2003 年 7 月に発行された本書について、その後の状況を反映して、加筆修正を行った (当該部分の全面改訂) *島田恵司は、第 4 章 5 国と自治体の係争処理を執筆した。総頁数 500p 程度 (加除式のため) 中、42p 分を執筆。			
2 現代日本の地方自治	共	2006.09.30	敬文堂	本書は、地方自治総合研究所の所長であった佐藤竺先生が所長を退任されたことを記念して編纂された。共同執筆者として、今村都南雄中央大学教授、寄本勝美早稲田大学教授など全 434 頁。島田恵司は、「第 2 章 行政の区域」を担当し、22・55p 34p を執筆した。市町村の区域が、明治以降市町村合併に伴って、どのように変遷し形成されてきたかを論述した。			
3 平成大合併と広域連合	共	2007.04.30	公人社	本書は、長野県における広域連合の調査を元に編纂された。共同執筆者として、小原隆治成蹊大学教授、沼尾史久信州大学教授、辻山幸宣自治総研研究員ら。島田恵司は、第 5 章「広域連合の事務―平成の大合併の影響と残された広域行政課題―」を担当。170-204P、35 頁。			
4 分権改革の地平	単	2007.10.30	コモンズ	本書は、地方分権改革、とりわけ 2000 年に地方分権一括法として結実した第一次改革を中心に改革内容の分析とその影響を明らかにしたものである。引き続き改革と、将来課題についても検討を行った。A5 版、総頁 324 頁			

5	市民自治のこれまで・これから	共	2008.05.15	公職研	本書は、地方自治の月刊専門誌「地方自治職員研修」の創刊40周年を記念して企画されたもの。今井照（福島大学教授）から13名の地方自治関係者がインタビューを受けている。松下圭一（法政大学名誉教授）、大森彌（東京大学名誉教授）など。島田は、大石田久宗（三鷹市部長）と「地域で新しい価値を創造する」という題で対談形式で登場した。A5版、275頁中233-254頁、22頁。
論文					
1	「市町村合併と住民投票の関係」	単	2004.07.00	信州自治研 通巻149号（長野県地方自治研究センター発行）	本稿は、平成の大合併において行われている住民投票について、その件数、内容の分析を行なったものである。7-16p、10頁。
2	長野県における広域連合の課題と未来ー広域連合調査中間報告ー	共	2005.07.00	長野県地方自治研究センター	「広域行政機構の未来ー市町村合併の進展と残された広域行政課題」本稿は、広域連合について、平成の大合併の影響がありながらも、存続する意義があることについて考察したものである。110-125p、16頁。
3	「自治体をめぐる課題と展望ー新地方行革を中心にー」	単	2006.04.25	市政研究 通巻151号（大阪市政調査会発行）	本稿は、同調査会総会記念講演の内容を土台として、新たに昨今の地方行政改革について、その中央集権的手法について論じたもの。94-113p、20頁。
4	「広域連合の担う事務ー平成の大合併と広域事務ー長野県広域連合プロジェクト調査から」	単	2006.05.00	北海道自治研究 通巻448号（社）北海道地方自治研究所発行）	本稿は 昭和の大合併 および「平成の大合併」本稿は、広域行政のあるべき姿について、平成の大合併後の市町村規模を分析しつつ、新たな広域連合の機能を提案したものである。2-16p、15頁。
5	「生活保護制度改革と自治体の課題」	単	2007.01.00	市政研究 通巻154号（大阪市政調査会発行）	本稿は、激増する生活保護における課題を国と地方の役割分担の観点から考察したものである。26-36p、11頁。
6	パブリックコメント手続きの検証と条例化に向けて	共	2007.02.00	（社）東京地方自治研究センター	「都道府県パブリックコメント制度と行政手続法改正への対応」本稿は、国の行政手続法改正（2006年4月施行）に伴い、すでに制度存在していた道府県がこれにどのように対応しようとしているか、また、どう対応すべきかを論じたものである。33-44p、12頁。
7	第一次分権改革の論者たち	単	2008.04.00	「自治総研」354号（財）地方自治総合研究所発行）	第一次分権改革には、政府委員会に多くの学者が直接参加し、またその学者たちが多くの著書、論文を発表している。それらの論文を中心に、第一次分権改革において発表された諸論文を分析した。134頁中、29頁。
8	閉塞時代の分権改革	単	2008.06.15	アジェンダ第21号（アジェンダ・プロジェクト発行）	本稿は、格差時代と政権交代前夜という二つの閉塞状況の中における、分権改革の意味について論じたものである。本号は、「地方分権は進んだか」という特集号であり、著者のほか、保母武彦（島根大学教授）、池上岳彦（立教大学教授）などが執筆している。本稿が巻頭論文。6-14頁、9頁。
9	第二次分権改革と自治体の課題	単	2008.07.25	市政研究第160号（大阪市政調査会発行）	本稿は、2007年4月に設置された地方分権改革推進委員会（丹羽宇一郎委員長）による分権改革の課題と問題点、さらにそれらに対応した地方自治体の課題を論じたものである。本号は、「分権改革の現在」と題する特集号であり、著者のほか松本克夫（元日経新聞）、持田信樹（東京大学教授）、森脇俊雅（関西大学教授）などが執筆。14-27頁、14頁。
その他					
1	論文「町内会・自治会でいいのか」	単	2004.07.12	「地域政策・三重から」12号（三重県政策開発研修センター発行）	本稿は、新たに制度化された地域自治組織に関連し、町内会・自治会の位置づけについて論じたものである。52-53p、2頁。
2	論文「やはり市町村連合が必要だ」	単	2004.10.08	「地域政策・三重から」13号（三重県政策開発研修センター発行）	本稿は、市町村合併の進行にあわせ、新たな広域行政のあり方について論じたものである。58-59p、2頁。
3	「市町村合併と地方分権の現状」	単	2004.10.30	長野県生活者ネットワーク（岡谷市市民会館）	岡谷市市議会議員などで構成する長野県、生活者ネットワークの主催による講演会において、表記内容で講演した。
4	巻頭言「地域自治組織は近隣政府といえるか」	単	2004.12.15	「地方自治・職員研修」521号（公職研発行）	本稿は、地域自治組織の制度化に伴い、その評価について論じたものである。9-10P、2頁。

5	論文『『市民の時代』と『討議デモクラシー』』	単	2005.01.08	「地域政策・三重から」14号（三重県政策開発研修センター発行）	本稿は、地方分権の進展にあわせ、分権後の社会についてその目標を論じたものである。52-53P。2頁。
6	論文「どうなる、どうする『今年の地方自治』」	単	2005.02.00	「信州自治研」156号（長野県地方自治研究センター発行）	本稿は、2005年の地方自治の行方について、市町村合併、三位一体論議、憲法論議がどのように展開する可能性があるかについて論じたものである。2-4P。3頁。
7	論文「新合併特例法の施行と小規模町村の行方」	単	2005.03.00	「ニューズレター」112号（自治体学会発行）	本稿は、2005年4月から平成の大合併が第二段階に入るにあたり、新法の問題点について論じたものである。2P。1頁分。
8	論文「どくへ行くのか地方分権」	単	2005.03.30	「地域政策・三重から」15号（三重県政策開発研修センター発行）	本稿は、三位一体改革、市町村合併と地方分権の行く先が不透明になっていることに鑑み、その原因についてその目標を論じたものである。58-59P。2頁。
9	「分町のススメ」	単	2005.07.00	「地方自治職員研修」529号（公職研発行）	市町村合併が行われた後、再度、地域内において分離・独立を求める住民の動きが各地で起こっており、それを考察したもの。22-24p。3頁。
10	報告「広域連合の担うべき事務」およびパネルディスカッション	共	2005.07.01	「長野県における広域連合の課題と未来」主催：長野県地方自治研究センター、後援：長野県	広域連合のあり方について、「担うべき事務」について報告するとともに、他の報告者や町村長、職員と議論を行った。他の報告者は、小原隆治（成蹊大学）、沼尾史久（信州大学）、辻山幸宣（前、中央大学）ほか。
11	第5分科会「市民自治でよみがえる自治体行政－市民とむきあう役所の将来像」	共	2005.08.25	第19回自治体学会	パネルディスカッション形式：司会は今井照（福島大）氏、島田以外のパネリストは、大石田久宗（三鷹市）、相川康子（神戸新聞）、樺島秀吉（NPOコラボ）。記録は、大会報告書18-21p、4頁。
12	「国の施策と地元合意」	共	2006.00.00	日本地方自治学会	2006年度日本地方自治学会は、沖縄国際大学で開催されたことから、基地問題を含め、国の施策と地元合意というテーマで、メインのパネルディスカッションを行った。島田恵司は、このパネルの司会をつとめた。パネリスト、富野暉一郎（龍谷大学教授）、川瀬光義（静岡県立大教授）、人見剛（北海道大学教授）の3人。
13	「第一次分権改革」	単	2006.01.00	「北海道自治研究」444号（北海道地方自治研究所発行）	本稿は、戦後60年の地方自治を歩みについて特集された企画のうち、地方分権推進委員会による第一次分権改革について説明したもの。18-19p。2頁。
14	自治体をめぐる課題と展望－新地方行革を中心に－	単	2006.02.25	大阪市政調査会総会記念講演：大阪キャッスルホテル	三位一体改革、平成の大合併、新地方行革など、この間の国・地方改革について分析・解説するとともに、特に、進行しつつある自治体改革を中心に問題点とあるべき改革の方向性について講演したもの。
15	「昭和の大合併」および「平成の大合併」	単	2006.03.00	「北海道自治研究」446号（北海道地方自治研究所発行）	本稿は、戦後60年の地方自治を歩みについて特集された企画のうち、昭和の大合併と平成の大合併について説明したもの。12-13p、14-15p。4頁。
16	「家庭ごみ－特に容器包装類の減量を考える」	単	2006.11.29	東松山市きらめき市民大学	東松山市きらめき市民大学環境学部において、表記テーマで講義を行った。
17	座談会「市民自治のこれまで・これから」	共	2008.03.00	「地方自治職員研修」569号（公職研発行）	この座談会は、本誌40周年記念として連載された最終回の企画であり、市民自治の現状について、三鷹市部長の久石田久宗氏と福島大学・今井照氏と行ったものである。130頁中、9頁。
18	第3分科会「合併と自治の今とこれから～市町村合併は自治を高めたか～」	共	2008.08.22	第22回自治体学会 岩手・盛岡大会	パネルディスカッション形式、パネリストは藤原孝（岩手県紫波町長）、小田島峰雄（岩手県議会議員）、松本克夫（ジャーナリスト）、著者はコメンテータを務めた。記録は大会報告書26-29頁、4頁。
19	分権改革の「可能性」－与えられる「分権」から、獲得する「自治」へ－	単	2008.09.18	第23回自治総研セミナー「分権改革のいまをどうみるか」（（財）地方自治総合研究所主催）	本講演は、地方分権改革推進委員会が行った第一次勧告の評価を踏まえ、1995年以降の分権改革全体を評価し直す作業を試みたものである。本セミナーは、9/17,18と二日間にわたって開催され、他に金井利之（東京大学教授）、大津浩（成城大学教授）、井手英策（横浜国立大学准教授）、伊藤正次（首都大学准教授）が講演を行った。1時間50分
20	対談：分権改革の今日的状況を読む	共	2009.01.15	北海道自治研究480号（北海道地方自治研究所発行）	本稿は、神原勝（北海学園大学教授）と行った対談を記録したものである。第二臨調以降の分権改革の流れ全体を振り返り、今日的状況を分析、解説したもの。2-17頁、16頁。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	2000.05.00	～	現在	日本行政学会会員
2	2001.05.00	～	現在	日本自治学会会員
3	2002.10.00	～	現在	日本地方自治学会会員（2005年度～2008年度企画委員）
4	2003.05.00	～	現在	自治体学会会員
5	2007.12.00	～	現在	特定非営利活動法人 ローカルアクション・シンクポッツまち未来理事
6	2008.02.00	～	2009.03.00	埼玉県ふじみ野市公共事業評価委員会（副委員長）
7	2008.04.00	～	現在	日本公共政策学会会員
8	2008.11.10	～	現在	東京都板橋区地方自治制度研究会（会長代理）
9	2008.12.01	～	現在	特定非営利活動法人 ときがわ山里文化研究所山村再生プラン「元気な山里づくり推進協議会」委員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科		職名	准教授	氏名	福島 齊	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
1) 授業運営の中で、団地健康調査をアンケートにより施行			2007.06.22	2007～2009 年度担当科目「環境創造ゼミナールⅡ」において高島平団地居住の高齢者を対象として、外出や健康についてのアンケートを計 5 回行い、約 500 通の回答を得て、地域の自治会報や新聞社に還元した。(2007 年 6 月 22 日～2009 年 5 月 1 日)				
2) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において「スポーツ外傷、障害学」にて平均値 4.5 (5 段階評価) と高い評価を得た。				
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
1) 寝たきり予防のための膝イタ体操実践セミナー			2009.04.18	高島平一丁目地区住民を対象として変形性膝関節症の予防から、ひいては寝たきり予防に言及する実践講座として、実際に運動療法を実地で行った。				
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
論文								
1 サッカーで非接触性に発生した股関節脱臼骨折の 2 症例	共	2004.07.25	臨床整形外科第 39 巻第 7 号 (道学会発行)	股関節脱臼 (外傷性) は大きな外力により生じるのが一般的な考えであるが、サッカーのドリブルで、足部固定、膝関節完全伸展、股関節軽度屈曲の条件がそろると、容易に脱臼することがある。総頁数 117 中 1005-1008p (第 1 号から通し頁) 共著者名、角本土幸 (主)、長谷川潤、筋野隆、黒島永嗣 福島齊は運動学的考察につき協力した。				
2 陸上長距離選手に発症した仙骨疲労骨折の一例	単	2004.08.13	日本臨床スポーツ医学会誌第 12 巻 3 号 (同学会発行)	21 歳男性、陸上長距離選手に発症した仙骨疲労骨折について、本邦で 3 番目の報告を行った、ジャンプ動作や筋緊張などが誘因となる殿部痛が強い場合は、当疾患を念頭におき、精密検査を行うべきである。治療は走行中止のみで十分である。総頁数 156P 中 (502-505P、第 1 号から通し頁のため)				
3 過労死と身体環境	単	2004.10.31	「環境創造」第 7 号 大東文化大学環境創造学会発行	ストレス社会の産別である過労死について、その発生メカニズムと内的、外的環境について考察を行った。総頁数 71P 中 19-30p				
4 足底部での長母趾屈筋腱陳旧性断裂に対して、腱移植を行った陸上長距離選手の一例。	単	2005.00.00	日本足の外科学会誌第 26 巻第 2 号 (同学会発行)	足底部挫傷により上記腱断裂を生じた症例に腱移植を行った稀な例であり文献的考察を加えた。総頁数 106P 中 70-73P				

5	逆斜型肘頭骨折に関する検討	共	2006.12.25	骨折第 28 巻 4 号(同学会発行)	成人の肘頭部逆斜型肘頭骨折(尺骨長軸とのなす角が 70°未満のもの)は前方、外方へ不安定性を生じるものがあり、治療に際しては、固定法について考慮が必要。総頁数 758P 中 634-638P。(第 1 号から通し頁のため)
6	本学学生の骨密度調査	単	2007.05.31	「環境創造」第 10 号大東文化大学環境創造学会発行	本学学生 696 名(男性 465 名、女性 231 名)の踵骨骨密度を超音波測定器を用いて行った。骨密度減少は、骨粗鬆症につながるため、若年時から生活習慣に対する意識づけが必要である。今回の結果では、運動習慣および BMI (Body Mass Index) と骨密度に相関をみとめた。総頁数 75p 中 1-16p
7	運動選手における骨盤疲労骨折の 2 例	単	2007.11.30	日本整形外科スポーツ医学雑誌第 27 巻第 2 号(同学会発行)	運動選手 2 名について、発症した骨盤疲労骨折について報告した。仙腸関節周囲の所見に続いて、恥骨周囲の所見があらわれた。このことは、骨盤輪全体としての不安定性から生じたと思われる。総頁数 56 中 44-48p
8	本学学生の骨密度調査 ー 運動との関係 ー	単著	2009.03.00	CAMPUS HEALTH 第 46 巻第 2 号 全国大学保健管理協会発行	本学学生の骨密度(踵骨)を超音波測定器にて測定した。対象は 20~23 歳の男性 469 名、女性 261 名で、牛乳摂取と運動習慣についてのアンケートも合わせて行った。骨密度は牛乳摂取日数、中学高校時代のクラブ活動歴、現在の運動日数と関係があった。が、男性の方が女性よりも運動による増加の影響があらわれやすかった。総頁 184p 中、p.161-166
その他					
1	膝のスポーツ外傷と治療法	単	2004.05.24	都立府中病院リハビリ室にて約 1 時間の口演	上記について頻度の高いものを、医療関係者向けに画像を交えて解説
2	FHL(長母趾屈筋腱)陳旧性断裂に対し、腱移植を行った陸上長距離選手の一例	単	2004.06.25	第 30 回日本足の外科学会学術集会(東京)	21 歳男性、陸上長距離選手。受傷後 3 ヶ月で初診の長母趾屈筋腱断裂。母趾屈曲不能のため、走行不能であった。断裂部に腱移植を行い、競技復帰可能となった。
3	当院リハビリ病棟 11 年間の集計	単	2005.02.19	第 33 回西東京リハビリテーション研究会(東京)	都立府中病院リハビリテーション病棟開棟以来、11 年間の患者動態を考察した。在院日数短縮化の流れに伴い、在院日数はここ 3 年で半減したが、自宅退院率については平均 70%を維持した。
4	都立府中病院リハビリ病棟の 11 年間	共	2005.06.17	第 42 回日本リハビリテーション医学会学術集会(金沢)	2005 名の入院患者の統計を行い、早期退院を目指す今後のリハビリテーションを考察した。
5	トンガ王国の健康調査	単	2005.10.22	平成 17 年大東文化大学公開講座(板橋区共催)第 3 回	トンガ王国における、食生活の変化から生ずる生活習慣病について述べ、病院訪問による医療事情を報告した。
6	メディカルチェックでからだを把握し、戦略的に疲労を回復させる	単	2006.03.10	トレーニングジャーナル第 28 巻第 3 号 ブックハウス・エイチディ発行	アスリートがシーズン中にためた疲れを、オフシーズンに早くするにはどのようにしたらよいかについて、メディカルチェック(筋肉のかたさ)、オーバートレーニング、栄養補給の面から予防策を考えた。総頁数 102p 中 12-15p
7	腸腰筋膿瘍の診断に関する検討	共	2006.03.24	第 46 回関東整形災害外科学会学術集会(東京)	腸腰筋膿瘍は初期診断が困難であり、発熱のみを主訴とすることもある。他の関節炎を合併することもあるが、その存在を念頭におくことが大切である。
8	運動選手における骨盤輪 stress injury	共	2006.06.09	第 32 回日本整形外科スポーツ医学会(沖縄)	陸上長距離選手と、警察学校新入生に発症した、骨盤輪の stress injury について報告。仙骨周囲から恥骨部に続発した、骨盤輪は一ヶ所の破綻が、二次的な損傷をきたす。
9	膝イタ体操ー運動が人生を豊かにするー	単	2006.10.07	大館市子ども支援協議会ボランティア・市民活動講演会	変形性膝関節症に対しての運動療法について、具体的方法と、その理論を示しながら解説した。
10	機能障害とリハビリテーション	単	2006.10.26	(ケア 21、東京)	機能障害に対応し、早期離床や廃用症候群の概念に基づいたリハビリテーションを解説した。
11	膝イタ体操ー循環型社会の運動療法ー	単	2006.10.28	彩の国大学コンソーシアム公開講座(川越)	変形性膝関節症に対しての運動療法について、具体的方法と、その理論を示しながら解説した。
12	Proximal femoral nail antirotation(PFNA)を使用した大腿骨転子部骨折治療の問題点	共	2007.03.23	第 47 回関東整形災害外科学会学術集会(東京)	大腿骨転子部骨折に使用される、骨頭回旋予防 device は状況により骨頭の cut out や再骨折などの合併症を生じるために、骨形状に応じた術前計画が必要である。

13	社会人ラグビーチームにおける外傷・障害調査（トレーニング方法の変化と関連して）	共	2007.06.14	第33回日本整形外科学会スポーツ医学会（札幌）	社会人ラグビーチームにて、下肢に負荷のかかる筋力トレーニングを行った年と、行わなかった年につき、外傷・障害の種類を比較したところ、下肢に負担のかかるトレーニングは大腿部での症状出現が多く、その2ヶ月あとに下腿部に移行した。これは膝関節以下での代償運動によるものと思われる。
14	公開講座「膝イタ体操」第1回	単	2007.06.23	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平団地住民を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座を行い、運動器の重要性について述べた。
15	公開講座「膝イタ体操」第2回	単	2007.07.28	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平団地住民を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座を行い、運動器の重要性について述べた。
16	公開講座「膝イタ体操」第3回	単	2007.09.29	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平団地住民を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座を行い、運動器の重要性について述べた。
17	多世代共住「高島平モデル」の具体化に向けて	単	2007.10.20	高島平ルネ・サンスシンポジウム 2007	高齢化の進む、高島平団地において、健康調査を行い、外出頻度との関係を調べた。外出が週1日以下の「閉じこもり」ケースでは、歩行能力は半分近くは維持されており、外出をうながすコミュニティーシステムも健康維持と同様に大切であると思われた。
18	公開講座「膝イタ体操」第4回	単	2007.11.24	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平団地住民を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座を行い、運動器の重要性について述べた。
19	公開講座「膝イタ体操」第5回	単	2008.03.23	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平団地住民を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座を行い、運動器の重要性について述べた。
20	公開講座「膝イタ体操」第6回	単	2008.06.08	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平地区の高齢者を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座、指導を行い、寝たきり予防としての運動器の重要性を解説した（内容は初回以降同一）
21	シンポジウムパネラー	単	2008.10.17	高島平ルネサンス 2008	高島平団地に在住する高齢者の外出頻度と健康状態に関する調査を報告した。外出が週1回以下の「閉じこもり」は1割以下であったが、それらのものでも歩行能力は維持されている場合が多く、寝たきり予防の外出促進のためには身体機能の維持と地域コミュニティの充実の両方が必要であると思われた。
22	団地健康調査から分かったこと	単	2008.10.25	2008年度政治経済学・経済史学会、秋季学術大会・総会（東京）	高島平団地に在住する高齢者の外出頻度と健康状態に関する調査を報告した。外出が週1回以下の「閉じこもり」は1割以下であったが、それらのものでも歩行能力は維持されている場合が多く、寝たきり予防の外出促進のためには身体機能の維持と地域コミュニティの充実の両方が必要であると思われた。
23	本学学生の骨密度調査	単	2008.10.30	第46回全国大学保健管理研究集会（京都）	本学学生730名の踵骨骨密度を、超音波骨密度測定器を用いて測定し、生活習慣との関連を調べた。現在の運動習慣があること、中学高校時代のクラブ活動歴が骨密度増加と関連していた。スポーツ種目ではジャンプ系や瞬発系の競技者の骨密度が高かった。
24	「膝イタ体操」	単	2008.11.20	多摩市社会福祉協議会寿大学での開催	多摩センター地区の高齢者を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法を通じて、寝たきり予防の重要性を解説した。
25	公開講座「膝イタ体操」第7回	単	2008.12.06	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平地区の高齢者を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座、指導を行い、寝たきり予防としての運動器の重要性を解説した（内容は初回以降同一）
26	公開講座「膝イタ体操」第8回	単	2008.12.23	高島平小地域ネットワークとの共同開催	高島平地区の高齢者を対象として、変形性膝関節症に対する運動療法の講座、指導を行い、寝たきり予防としての運動器の重要性を解説した（内容は初回以降同一）

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1985.04.00	～	現在	関東整形災害外科学会正会員
2	1985.04.00	～	現在	日本整形外科学会正会員
3	1989.07.00	～	現在	日本小児整形外科学会正会員
4	1991.07.00	～	現在	日本整形外科学会スポーツ医学会正会員

5	1995.04.00	～	現在	日本リハビリテーション医学会正会員
6	1995.07.00	～	現在	日本骨折学会正会員
7	1998.09.00	～	現在	日本臨床スポーツ医学会正会員
8	2002.01.00	～	現在	大東文化大学陸上競技部チームドクター
9	2003.05.00	～	現在	日本足の外科学会正会員
10	2003.09.00	～	現在	釜石シーウェイブスラグビーフットボールクラブチームドクター
11	2008.11.00	～	現在	日本老年社会学会正会員
12	2009.02.00	～	現在	日本公衆衛生学会正会員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	講師	氏名	小湊 浩二	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「なかいた環創堂」(商学公連携事業)での学生指導		2005.04.00	東京都板橋区中板橋商店街、板橋区、大東文化大学環境創造学部による商学公連携事業として、また板橋区「にぎわいのあるまちづくり事業」の一環としての商店街活性化実践である本事業において、担当教員の一人として、年間を通じ拠点の運営、商店街行事への参加ならびに独自の企画・活動に携わる学生を指導した。 (2005年4月1日～2009年3月31日)				
2) 遠隔授業		2006.04.00	担当科目「現代日本経済史Ⅰ」および「Ⅱ」において、大東文化大学東松山校舎での授業および端末上の教材を同板橋校舎に画像として送信し、送信先において学生が受講できる授業の担当を開始した。またこのため、従来の印刷物教材をプレゼンテーション用に作成し直すなどした。 (2006年4月1日～2009年3月31日)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 2007年度大東文化大学環境創造フォーラム大会基調報告「商学連携の一つのかたち——大東文化大学環境創造学部「なかいた環創堂」2年半の軌跡——」		2007.12.14	中板橋商店街、板橋区、大東文化大学環境創造学部による商学公連携事業における拠点である「なかいた環創堂」の、開所以来の活動実績、意義、課題について、大東文化大学環境創造フォーラムにて基調報告を行った。商学連携事業による地域活性化への貢献という視点だけでなく、学生に対する教育効果に重点を置いた報告内容である。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 地域連携による教育実践——「なかいた環創堂」の事例から——	共著	2009.03.00	『大東文化大学紀要(人文科学)』第47号、161～180頁。	本論文は、大東文化大学環境創造学部、東京都中板橋商店街、板橋区との商学公連携事業である「なかいた環創堂」(2005年度～)について、3年間の活動実績と意義を総括したものである。他大学での商学連携の事例や、板橋区の商店街助成のあり方の変化などから、本事業のタイプや役割を位置づけるとともに、特に学生に対する教育的意義について重点を置いて論じている。著者：◎小湊浩二、篠原章、植野一芳、塚本正文			
その他							

1	事例報告 商学連携による地域活性化——板橋区中板橋商店街「なかいた環創堂」／高島平再生プロジェクト——	共	2008.05.31	日本地方財政学会第16回大会（於：大東文化大学）	本報告は、大東文化大学環境創造学部と中板橋商店街ならびに高島平団地との地域連携事業の活動内容とその効果に関する事例の紹介である。とくに中板橋商店街との連携事業については、当該事業と自治体（板橋区）の商店街助成のあり方との関係について検討した。報告者：篠原章、小湊浩二、塚本正文
2	商学連携の一つのかたち——大東文化大学環境創造学部「なかいた環創堂」2年半の軌跡——	単著	2008.09.00	『環境創造フォーラム年報』第8号、1～15頁。	東京都板橋区中板橋商店街、板橋区、大東文化大学環境創造学部による商学公連携事業である「なかいた環創堂」の開所以来の2年半にわたる活動実績を、大東文化大学「環境創造フォーラム」（2007年12月14日）にて報告したものを論説とした。本事業の立ち上げから、活動が軌道に乗るまでに学生が経た努力と、生じた問題についてまとめた。

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.00.00	～	2007.03.00	土地制度史学会会員
2	1998.00.00	～	現在	社会経済史学会会員
3	2003.06.00	～	現在	日本消費経済学会会員
4	2005.12.00	～	現在	経営史学会会員

(表 24)

所属	環境創造学部環境創造学科	職名	講師	氏名	塚本 正文	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
その他							
1 累進消費税－活力を生む新税制－	共	2004.05.00	文眞堂	本書は、Seidman, LS (1997) The USA Tax: a progressive consumption tax, MIT Press.の訳書である。USA税とは、これまで「支出税」と呼ばれてきたものと基本的な枠組みを同じくする租税で、1995年のアメリカ議会において議案として検討されている。本書はこのUSA税の理論的な仕組みを提示すると同時に、貯蓄等に対する経済効果についてもポジティブな検討を加え、さらには実施を踏まえた申告書案なども添付した提言である。塚本は「第1章 USA税」(p.1-p.19)、「第2章 貯蓄」(p.20-p.41)、「第6章 Q&A」(p.160-p.180)を担当。共訳者は八巻節夫・半谷俊彦。A5判195ページ。			
2 商公学連携による地域活性化	共	2008.05.31	日本地方財政学会第16回大会 (大東文化大学)	大東文化大学・環境創造学部が中心となって取組む、板橋区・中板橋商店街・大学連携プロジェクトなかい環創堂と、文部科学省現代GP採択済みの地元住民連携による高島平再生プロジェクトを扱った発表。前者については大学が実現可能な商店街振興策と行政から商店街への補助金の支出の形態の変化について触れた報告をしている。後者については行政による住民サービスは、行政が直接行うよりも大学が介入する事で住民のニーズをより汲み上げ住民の効用をより高めるサービスが行える可能性について報告している。			

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	2001.06.00	～	現在	地方財政学会会員
2	2001.10.00	～	現在	日本財政学会会員
3	2006.06.00	～	現在	国際公共経済学会会員

スポーツ・健康科学部

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	秋葉 盛夫	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.7 (5 段階評価)				
2) 東洋大学工学部授業評価		2009.01.00	東洋大学工学部授業評価 (平成 21 年 1 月実施) において、高い評価を得た。平均値 4.2 (5 段階評価)				
3) 授業運営の中で、AV 機器の有効利用及び安全教育の推進		2009.04.01	実技 (ラグビー) の授業において、ワールドカップの DVD や大学ラグビーの激闘史の DVD を学生に鑑賞させ、モチベーションを高めるとともにわかりやすい技術指導を行っている。また、女子学生の受講も増えていることからルールの変更を加え安全教育にも配慮しながら授業を進めている。				
4) 授業運営の中で、AV 機器の有効利用及び小テスト実施		2009.04.01	健康スポーツ科学 (運動と文化) の授業において、学生の理解力向上を目的としてパワーポイントの利用及び資料配布を行っている。また、テーマ毎に小テストなどで学生の理解度をチェックし、必要であれば再度指導を行っている。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 総合体育ガイドブック		2009.04.01	総合体育の理論授業用教材としてのガイドブックの「Lecture 4:人間の健康と運動」を執筆した。(33-40 頁)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) セクシャルハラスメント問題調査委員		2004.04.00	(平成 16 年 4 月～平成 20 年 3 月) 学内におけるセクシャルハラスメント問題調査委員として規程の作成から処罰内容等についての検討を行い、さらにセクシャルハラスメントに関する情報の共有化を図る目的で外部講師による講演などを開催した。				
2) 体育センター運営委員		2004.04.00	(平成 16 年 4 月～平成 20 年 3 月) 本学運動部の活動状況の調査や運営・管理に関する調査を基に、運動部に対する予算配分の決定、コーチ及び監督の人事等に関する検討を行い、課外活動を通じた学生の教育の充実に貢献した。				
3) キャリアセンター運営委員		2006.04.00	(平成 18 年 4 月～平成 20 年 3 月) 運営委員として学生のキャリア支援のための進路希望調査や「大東文化大学感謝の夕べ就職関係懇談会」開催の準備、運営に関する検討を行った。また、毎年発行している就職活動結果報告書の作成に関する検討を行い、学生の就職率アップに貢献した。				
4) 東松山キャンパス運営委員会委員		2006.04.00	(平成 18 年 4 月～平成 20 年 3 月) 学生支援部会長として駅から本学までの利用学生数を時間毎に調査することによってバス運行ダイヤの改正を行った。また、鴻巣駅からの新規便の増設などを行い、学生の通学の便を良くすることで学生の学習意欲を高め教育効果の向上に寄与した。				
5) 体育センター所長		2008.04.00	(平成 20 年 4 月～) 本学運動部の活動状況の調査や運営・管理に関する調査を行うと共に、運動部に対する予算配分の決定、コーチ及び監督の人事等に関する検討を行うことで課外活動を通じた学生の教育の充実に寄与しようと職務に邁進している。				
II 研究活動							

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文 1 「本学の必修保健体育科目への学生ニーズについて」	共著	2005.03.31	大東文化大学紀要第43号(社会科学・自然科学)	学生を対象に行ったアンケート調査の結果から本学の必修保健体育科目への学生のニーズの調査結果をまとめ報告したもの。(p59～66) ©兵頭圭介、大橋二郎、田中博史、中間和男、秋葉盛夫。
その他				

III 学会等および社会における主な活動

1	1967.00.00	～	現在	日本体育学会会員
2	1973.00.00	～	現在	ラグビー研究協議会大学ラグビー研究協議会会員
3	1987.00.00	～	現在	日本ゴルフ学会会員
4	1995.04.00	～	現在	川越市川鶴支会体育協力委員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	新井 義久	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 授業評価		2006.12.00		2006 年～2008 年 生活実践の密着型授業で水泳技術と併せて水難安全管理法、救助法等をベースとし実施。又陸上と水中での物理的相違を理解させ、呼吸、浮力の人体的影響を体験させる。尚、過去 3 年間の授業評価は、平均 4.5 以上と極めて高い評価である。		
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1975.04.01		日本体育学会会員				

(表 25)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	新井 義久	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1) 全日本種目別選考会及びユニバーシアード選考会		長野オリンピック記念アリーナ（エムウエーブ）		2007.10.00	平成 19 年 10 月～現在 全日本選択（エムウエーブ）教化部指導	

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	遠藤 俊郎	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) ビデオやインターネットを活用した最新情報の入手とそれらを教材化した授業の展開		1992.04.01	体育・スポーツ科学に関連する学会誌や専門誌からの情報のみならず、例えば NHK「プロフェッショナル仕事の流儀『イチロー・スペシャル』」(2008.1.2)といった放送メディアを録画し、その中から授業(例えばスポーツ心理学)の講義内容に関係する部分を編集して教材化した。また JOC 医科学サポート委員会科学サポート部会が運営するメーリングリスト「sport-i」や国立科学センター(JISS)情報研究部運営のメーリングリスト「jnet-academy」等の公的に運営されるメーリングリストからのスポーツや体育に関連したアップ・ツー・デートな情報を入手し、積極的に授業において活用し、受講学生の興味関心を高めることを志向した。授業時にコンピュータを利用してプレゼンテーションを行い、理解を深めるための取り組みを行っている。 さらに、小テスト制を導入し定期的な授業内容の把握状況を確認し形成的評価に努めている。平成4年4月1日～現在			
2) 山梨大学授業評価		2006.10.13	山梨大学授業評価(2006年度9月実施)において、高い評価を得た。大学評価委員会より要請を受け、授業において実践している内容について「授業において心がけていること」としてまとめ、FD教育の資料とした。			
3) 山梨大学評価本部		2007.07.01	平成18年度の山梨大学評価本部による教員評価において「教育」「研究」「管理・運営」「社会貢献」の4側面から評価され、合計20点中18点の高評価を得た。特に「教育」においては5点の評価であった。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 教養としてのスポーツ心理学		2005.05.20	講義の教材として使用している本書は、スポーツ心理学の入門書として大学生や大学院生に使用できるように配慮され企画された。その中で競技スポーツや健康スポーツという観点からバレーボールを例にとって心理的支援活動の実践例や基礎知識について論述した。 (編集者：徳永幹雄、共著者：橋本公雄、遠藤俊郎、他31名、分担部分10章6. バレーボール選手への指導；日本バレーボールチームに密着した心理的サポート、PP.84-87、11章4. 運動学習理論とバレーボール指導、PP.103-106、附章5、競技不安、PP.172-175			
2) 生活と健康 2008年版		2007.03.27	山梨大学全学共通科目「生活と健康」の授業用教材として改訂版を作成、使用した。筆者は、「5 心と健康(コミュニケーション、ストレスマネジメント)」「25 バレーボール」(20-23、100-103、114-115)と担当した。A4判、総ページ数149ページ			
3) 生活と健康 2007年版		2007.03.28	山梨大学全学共通科目「生活と健康」の授業用教材として使用した。筆者は、「5 心と健康(コミュニケーション、ストレスマネジメント)」「25 バレーボール」(20-23、100-103、110、140)と担当した。A4判、総ページ数140ページ			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 神奈川県体育センター研修会「運動部活動指導者研修講座」		2008.10.26	現職教員や運動部活動地域指導者を対象としての研修会講師として、効果的なスポーツ指導の考え方や学校現場で活用できるメンタルトレーニングの理論と具体的な実施方法に関して講演を担当している。2005年7月15日～2008年10月26日(神奈川県体育センター)			
2) 静岡県体育協会「競技力向上指導者研修会」		2009.02.09	静岡県内の各競技団体において強化事業に携わる指導者を対象とした研修会講師として効果的なスポーツ指導の考え方や学校現場で活用できるメンタルトレーニングの理論と具体的な実施方法に関して講演を担当した。(静岡県体育協会会館)			

4 その他教育活動上特記すべき事項				
1) 長野県体育センター研修会「学校体育・スポーツ研修講座」		2008.11.05	現職教員の研修会講師として、学校現場で活用できるメンタルトレーニングの考え方と具体的な実施方法に関して講演を担当している。2003年11月3日～2008年11月5日（長野県体育センター）	
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 スポーツ医学研修ハンドブック応用科目	共著	2004.10.00	文光堂（東京）	（分担部分：2.スポーツ心理学）日本体育協会公認スポーツドクター・（健康）スポーツ医制度に基づいたカリキュラムをまとめた教本である。遠藤はスポーツを人間の心理面と密接に結びつく活動の一種と捉え、その心理的特性や心理的効果に関して言及した。監修者：日本体育協会指導者育成専門委員会スポーツドクター部会。共著者：中嶋寛之、村山正博、黒田義男、遠藤俊郎、他50名。全270頁。11-19頁。
2 臨床スポーツ医学検査測定ハンドブック	共著	2004.12.00	文光堂（東京）	（分担部分：第1章体力、運動能力、競技能力の測定、B種目別体力特性の測定と実際、球技 3. バレーボール）本書はスポーツ医学領域の検査測定について幅広く取り上げ整理した物である。8章からなるが第1章ではスポーツ医学の基礎となる体力・運動能力・競技能力に関わる検査が取り上げられている。遠藤は其中でバレーボールの競技特性を踏まえた専門的体力の測定方法について論究した。編集者：臨床スポーツ医学編集委員会。共著者：黒田善雄、中嶋寛之、河野一郎、小林修平、山崎元、福林徹、村山正博、遠藤俊郎、他60名。全551頁。（分担）65-69頁。
3 公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目II	共著	2005.03.00	日本体育協会（東京）	（分担部分：6. スポーツの心理／コーチング評価）日本体育協会公認スポーツ指導者制度に基づく共通科目カリキュラム用に作成されたテキストである。本書ではスポーツの実技指導で対象者別に細やかな指導能力を発揮できることを狙っている。遠藤はPDCAサイクルを適用したコーチングにおける評価活動に関して言及した。編集者：日本体育協会。共著者：佐伯年詩雄、中澤眞、菊幸一、遠藤俊郎、他14名。全135頁。（分担）65-70頁。
4 スポーツメンタルトレーニング教本改訂増補版	共著	2005.04.00	大修館書店（東京）	（分担部分：4章7. 情動のコントロール技法、5章2. あがり防止のための緊張—不安のコントロール、用語解説；「IZOF理論」「呼吸法」「セルフトーク」「パフォーマンスルーティーン」）本書は初版を平成14年に出版したが、その後新たな研究や実践の成果を取り入れてより実践的な内容にしたものである。遠藤は初版の執筆部分に加えメンタルトレーニングに関わる用語解説4項目を新たに担当した。編集者：日本スポーツ心理学会。共著者：中込四郎、石井源信、吉川政夫、竹中晃二、遠藤俊郎、他18名。全270頁。（分担）116-121、138-144、248、249、251、252頁。
5 教養としてのスポーツ心理学	共著	2005.05.00	大修館書店（東京）	（分担部分：10章6. バレーボール選手への指導；日本代表バレーボールチームに密着した心理的サポート、11章4. 運動学習理論とバレーボール指導、附章5. 競技不安）本書はスポーツ心理学の入門書として大学生や大学院生に使用できるように配慮され企画された。遠藤は競技スポーツや健康スポーツという観点からバレーボールを例にとりて心理的支援活動の実践例や基礎知識について論述した。編集者：徳永幹雄。共著者：橋本公雄、遠藤俊郎、他31名。全209頁。（分担）84-87、103-106、172-175頁。

6	Thinking Volleyball バレーボール 100Q 入魂	共著	2005.05.00	日本文化出版 (東京)	(分担部分: 編集に関わったので抽出は困難) 本書はバレーボール学会創立 10 周年記念出版として編集された。バレーボールに関する 100 個の論点について各会員の持つスポーツ科学の専門分野からそれぞれ論述した。遠藤は出版ワーキンググループ委員長として自らも 4 項目を担当する傍ら全般の内容構成に関わった。編集者: バレーボール学会記念出版ワーキンググループ。 共著者: 遠藤俊郎、浅井正仁、有賀誠司、田中博史、他 50 名。 全 140 頁。
7	最新バレーボール教本	共著	2005.05.00	大修館書店 (東京)	(分担部分: 3. バレーボール選手のメンタル・スキル・トレーニング) 本書はコーチ・指導者に必要な指導理論・祖同技術・救急法、審判技術などに関して幅広く論及した指導書である。遠藤は指導現場サイドに立ったより実際の・具体的な心理面のコントロールやトレーニングについて重要な知見を提供した。編集者: 日本バレーボール協会。 共著者: 豊田博、橋爪静夫、宗内徳行、遠藤俊郎、渡辺英児、田中博史、他 7 名。 全 231 頁。(分担) 117-135 頁。
8	フィメールアスリート バイブル ースポーツをする女性の健康のためにー	共著	2005.11.00	ナッブ (東京)	(分担部分: 第 5 章メンタル・スキル・トレーニング) 本書は医学面のみならず、女性アスリートが競技生活に関わる全ての面で健全に快適に高い QOL で競技を継続できるようなサポートするために企画された。遠藤は女性アスリートと心の問題に関連してメンタルマネジメントに求められるメンタル・スキル・トレーニングの実際に関して論究した。編集者: 鳥居俊。 共著者: 難波聡、大庭治雄、内田直、遠藤俊郎、他 8 名。 全 216 頁。(分担) 111-142 頁。
9	ジュニアのためのトレーニングバイブル	共著	2006.07.00	ベースボールマガジン社 (東京)	(分担部分: 指導者におけるメンタル管理 4 つのミッション) 本書はベースボールマガジン社が発刊する B.B.MO O K411 スポーツシリーズの No. 290 としてジュニア期にある子供たちの効果的で安全なトレーニングを考えるために企画されたものである。遠藤は選手たちのメンタルコンディショニングをベストの状態に導くために指導者が理解しておくべきポイントを論述した。編集者: ベースボールマガジン社編集企画部。 共著者: 遠藤俊郎、他 9 名。 全 113 頁。(分担) 84-89 頁。
10	バレーボールのメンタルマネジメント	単著	2007.07.00	大修館書店 (東京)	筆者は 1991 年から競技現場で具体的な形で役立つ、実践的側面を重視した立場から様々な種目競技選手のメンタルマネジメントに関するサポート活動に関わってきた。特にバレーボールに関しては、1991-1998 年には全日本ジュニア女子バレーボールチームの「トレーナー」として、また、2000-2004 年には全日本男子シニアバレーボールチームにおいては「メンタルアドバイザー」として活動した。本書は、このような筆者のこれまでのバレーボールを中心としたメンタルマネジメントに関するサポート活動実践の集大成といっても良い内容であり、さらに、我が国においてバレーボールに関して初めてメンタルマネジメントという心理学的観点から執筆された書籍となった。本書の内容は、主に選手個人やチームに関するメンタル・スキル・トレーニングと運動学習理論に基づいたコーチングに集約される。 全 200 頁。
論文					
1	心理的側面から女子選手の指導を考える	単著	2004.05.00	トレーニング科学 Journal of Training Science for Exercise and Sport, 17, 2.	これまで女子選手に対するスポーツの指導については男子選手と異なる対応が必要といわれ続けてきた。しかし、本稿では「心理的に見て女子選手の指導は男子選手と本当に異なるのか?」という観点からいくつかの研究知見を基にこれまでの主張を再考した。我が国において高水準の技術能力を持つ全日本選手に MPI を用いて性格特性を調査し一般男女と比較した男女バレーボール選手の結果では、MPI の判定基準に照らしても男女選手とも神経症的傾向が低く、男子選手はやや外向的であったが女子選手は向性については普通というものであった。また、TSMI を用いて行われた 94 編の研究論文の中から分析に必要な条件を満たした 15 編の研究論文を統合したところ、TSMI の 7 下位尺度では小さな効果量が見られたが残りの 10 尺度においては性差が見られなかったことから、競技者全体では男女間に競技動機の明確な相違は認められないことが明らかとなった。 PP.107-112

2	バレーボール選手の心理的適性に関する研究—メタ分析の手法を用いた多項目競技者との比較—	共著	2004.05.00	バレーボール研究 Vol. 6、No.1	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 競技動機の観点からメタ分析の手法を用いて他種目選手との比較を通してバレーボール選手の心理的適性を検討した。TSMIを用いたバレーボール以外の種目の優秀選手を対象とした学術論文 51 編の中から被験者数、平均値、標準偏差値等のメタ分析の結果、緊張性不安、闘志、不節制、競技価値観、計画性、努力への因果帰属の 6 下位尺度で他種目の優秀選手との小さな差が認められ、これらの要因が優秀バレーボールの心理的適性を考える上で重要であることが示唆された。共著者：遠藤俊郎、加戸隆司。 7-14 頁。
3	スポーツ場面における社会的手抜き尺度の開発	共著	2004.09.00	山梨大学教育人間科学部紀要、 Vol. 7、No.1	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) チームとしてのパフォーマンスを争うことの多いスポーツ場面においての社会的手抜き研究の促進を図るために、まず実験法に変わる調査法による手抜き研究を可能にするための調査尺度作成を試みた。その結果、本研究で作成した社会的手抜き尺度の得点分布はほぼ正規分布であった。さらに因子分析の結果、一次的尺度であることが確認され、更に α 係数が非常に高く内的一貫性の観点から信頼性が認められた。また、内的-外的統制傾向尺度との相関係数は負の中程度の有意な相関係数が得られ基準関連妥当性が明らかとなった。共著者：遠藤俊郎、広瀬功。PP.50-57
4	競技スポーツから見たところの強化	単著	2006.06.00	体育の科学 Vol. 56、No.6	競技力という観点からこころの強化の在り方を論述した。特に、トリノオリンピックにおける荒川選手の金メダル獲得の心理的背景を考察した。さらに、トリノオリンピックでの心理面に関する諸外国の組織的対応を分析し、今後我が国の競技力と連携してのこころへの対応の必要性を指摘した。更に、筆者がこれまで競技力に関わって心の強化に腐心した実践内容を分析し、次代につながる心理的サポート活動の在り様を論述した。PP.437-442
5	遊びが児童の心身に与える影響について—児童の攻撃性・社会性に着目して—	共著	2007.03.00	教育実践学研究、山梨大学教育人間科学部付属教育実践総合センター、センター紀要、 No.12	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 共著者：遠藤俊郎、安田貢、下川浩一、斎藤由美。 PP.25-34
6	バレーボール指導における非言語的コミュニケーションに関する研究	共著	2007.03.00	山梨大学教育人間科学部紀要、 Vol. 8	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) VTR 観察法からバレーボールの試合時に指導者が表出している非言語的行動として得ることができた姿勢、身振り、タッチ行動を元に指導者が表出している非言語的行動が選手にメッセージとして機能しているかを検討した。指導者 70 名、選手 666 名を調査対象とした結果、①「身振り」「タッチ行動」は非言語的コミュニケーションとして具体的な言葉かけに近い機能を持つ。②「身振り」においては肯定的(賞賛・励まし)(承認・共鳴)、矯正的(要求・命令)なフィードバックが、「タッチ行動」には肯定的(賞賛・励まし)なフィードバックなメッセージとして機能すること、等を指摘した。共著者：遠藤俊郎、三井勇、安田貢、星山謙治。PP.72-82
7	ジュニア期における 2006 年選抜優秀選手の心理的特徴	共著	2007.03.00	テクニカルスタディー 2006、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 成長過程において心理状態が多感な時期にあるジュニア期に焦点を当て、全国選抜合宿に選出された優秀バレーボール男女選手 39 名の性格特性、競技不安、競技動機に関する調査を実施して心理的特徴を検討した。その結果、女子選手は男子選手よりも競技に対して意欲を持っており、また、バレーボール自体にもより価値観を有していた。男子選手は更なる意欲の向上が課題であることが明らかとなった。共著者：遠藤俊郎、安田貢。 PP.11-20

8	世界一級バレーボール選手のスパイクおよびサーブ動作の分析 (第1報)	共著	2007.03.00	テクニカルスタディー 2006、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 2006年に開催されたバレーボール選手権大会における世界一級バレーボール選手の試合中におけるスパイク動作とサーブ動作を3次元動作解析した。解析の典型例となる選手を取り上げ比較を含めながら一流選手の動作の特徴を検討した。レフトスパイクではバックスイング局面では内施しているがその後急激に外施して「ため」を作り、やや内施した状態でインパクトしていることが明らかとなった。また、スパイクサーブ動作を解析したところ、助走スピードに大きくブレークをかけないでやや前方へ飛び出す方が大きなスイングスピードが得られる可能性が指摘された。共著者：増村雅尚、キスベ、阿江通良、小川宏之、島津大宣、遠藤俊郎、泉川喬一、南匡泰。 PP.29-40
9	Social Identity in Sports team-Image Difference between High School Teams and College Teams.	共著	2007.12.00	Proceedings and Papers, Joint Congress 2007 SEA Games & ASEAN Para Games Scientific Congress and 5th Bangkok ASPASP International Congress on Sport Psychology.	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理) チームに所属した成員は、外集団に対して時集団所属の明確な意識を持つが、これは社会的アイデンティティと呼ばれている。スポーツ集団に関する社会的アイデンティティの研究が皆無なので、まず競技スポーツ集団という観点から高校と大学における集団に対するイメージの相違を検討した。その結果、部活動集団に対するイメージは高校時の方がより好意的であった。また、競技成績の低下が集団帰属意識の低下にも関わっていることが示唆された。共著者：Ae Mieko, Endo Toshiro and Miyake Noriko。 PP.350-352
10	Consideration about the Group Norm and the Social Identity in versity Volleyball Players.	共著	2007.12.00	Proseeding and Papers, Joint Congress 2007 SEA Games & ASEAN Para Games Scientific Congress and 5th Bangkok ASPASP International Congress on Sport Psychology.	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 集団規範は肯定的な社会的アイデンティティを維持することができ、これに基づいて集団間行動が説明される。本研究では、大学バレーボール選手474名に凝集性、モラル、社会的アイデンティティ、集団規範に関する調査を実施し、それぞれの関係を大学運動部活動(特にバレーボール)の練習場面において検討した。その結果、特に男子において、①集団規範は競技水準の高いほうが規範を守ろうという意識は高く、厳しい規範を持っていること。②競技水準が高いほうが運動部に対して魅力を感じており、まとまりがあること。③競技水準が高いほうが集団帰属意識が高いこと、等が示唆された。共著者：Toshiro Endo, Mieko Ae, Noriko Miyake, Koichi Shimokawa and Mitsugu Yasuda。 PP.586-588
11	Self-Handicapping in University Athletes.	共著	2007.12.00	Asian Pacific Conference on Exercise and Sports Science 2007.	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 大学で運動部活動に所属、または体育・スポーツ系学部に所属する男女大学生517名(男子255名、女子262名、平均年齢19.9±1.2歳)を対象として、セルフ・ハンディキャッピング尺度、特性的自己効力感尺度、失敗経験に関する質問紙を実施して、各尺度の関連を検討し、スポーツ場面において自己防衛的な行動や回避的で無気力な行動を選択している者に対する新たな視座を得ることを目的とした。その結果、①スポーツ場面における過去の重大な失敗経験の有無、失敗経験が自己に及ぼす影響の有無、失敗を繰り返さないようにするために心掛けている行動の有無はセルフ・ハンディキャッピング行動を選択することに影響を及ぼす要因ではないこと。②運動部活動加入・非加入、性別に関わらず、失敗を経験し、同じ失敗を繰り返さないように努力しているの方が努力していない者よりも、ある結果を出すために必要な行動を上手く行うことができる確信の程度が高いこと、等を指摘した。共著者：Yasuda M, Yamaguchi Y, Endo T and Shimokawa K。 PP.128-129
12	壮年後期・老年期におけるボディーイメージと運動行動に関する研究	共著	2008.03.00	山梨大学教育人間科学部紀要、Vol. 9	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 壮年後期・老年期にある男女151名を対象に保有する自己のボディーイメージの実態把握を試みると共に、性差、BMI、年齢差の検討、過去や現在の運動習慣との関連性を検討した。その結果、女性の方が自身の体型に対する意識が高く、他者からの評価にも敏感であった。また、BMIが高いほど男女とも自己の身体への関心度が高くなっていた。さらに高齢者のボディーイメージと運動習慣との関連性は明確ではなかった、こと等を見出した。共著者：遠藤俊郎、下川浩一、安田貢、川久保愛。 PP.155-162

13	大学生スポーツ競技者におけるセルフ・ハンディキャッピングの研究	共著	2008.03.00	教育実践学研究、山梨大学教育人間科学部付属教育実践総合センター、センター紀要、No.13	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 本研究は、大学生運動選手に注目し、スポーツ場面におけるセルフ・ハンディキャッピング (Self-Handicapping : SH) と心理的要因である特性自己効力感 (Generalized Self-Ecacy : GSE) 及びスポーツ場面における過去の重大な失敗経験との関連を検討することを目的とした。SH について因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った結果、「情緒的不統制」「責任転嫁」「完璧主義」「不安傾向」「現実逃避」「回避傾向」の因子が抽出された。運動部活動に所属している大学生運動選手は男女に関わらず、GSE 低群の方が高群より全ての SH 下位因子を選択することが示された。また、過去に重大な失敗経験の有無は SH を選択することに影響を及ぼす要因ではないことが示された。しかし、運動部活動所属有無に関わらず、過去の失敗経験を繰り返さないよう、努力している選手は GSE が高まることが明らかとなった。共著者：遠藤俊郎、安田貢、山口裕子、下川浩一。PP.102-112
14	世界一流バレーボール選手のフロントスパイクおよびパイプ攻撃動作のバイオメカにクスの分析	共著	2008.03.00	テクニカルスタディー 2007、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 2 バレーボールワールドカップ 2007 男子大会における世界一流バレーボール選手および日本選手のフロントスパイクおよびパイプ攻撃をバイオメカニク的に分析した。その結果、フロントスパイクと比較して効果的にパイプ攻撃を行うためには、①左肩をやや前方に出しながら捻りを先取して前上方に離地すること。②体幹の捻り戻しの角速度を大きくすること。共著者：増村雅尚、キスベ、阿江通良、島津大宣、遠藤俊郎、安田貢、泉川喬一、南匡泰。 PP.49-57
15	選抜高校選手の心理的特長の変化に関する研究	共著	2008.03.00	テクニカルスタディー 2007、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) 男女優秀高校選手 44 名に「競技意欲」「球技動機」「競技不安」の 3 検査を実施し、現在の高校選抜選手の心理的特徴を明らかにするとともに、10 年まえの優秀選手の心理的特徴と比較することにより今日の発達課題を明らかにしようとした。その結果、①近年の男子選手において競技達成意欲の低下が顕著であること。②近年の女子選手は、10 年前と比較すると心理的面で良好の傾向にあり、近年の女子選手に備わっている心理的適性能力は全日本女子ナショナルチームの選手に近い状態にあること。③近年の高校生選手の依存的・他律的な傾向が伺えること、等を指摘した。共著者：遠藤俊郎、下川浩一、安田貢。 PP.41-48
16	国際女子バレーボール試合における各ローテーションフェイズへのサービス(狙う、避ける)に関する研究	共著	2008.03.00	テクニカルスタディー 2007、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理・考察) バレーボールワールドカップ 2007 女子大会における日本チームの 5 試合 (対イタリア、ポーランド、キューバ、アメリカ) に関わる公式技術データを収集し、失点数、サーブレシーブ率および有効失点効率を求め、サービスの際に狙うほうが良いのか避けるほうが良いのかを分析した。具体的には、事前押し合い結果から狙う選手と避ける選手を判定し、実際に試合で狙えたのか、避けられたのか、あるいは他の選手にサービスしたのかという点と相手チームの失点とを加味して検討した。その結果、チーム有効失点率とサーブレシーブ率において狙う選手をちゃんと狙った場合に正の相関関係が伺え、明確で意図的なサービスの有効性が指摘された。共著者：島津大宣、泉川喬一、山下茂、坂井充、田原武彦、山本外憲、金子美由紀、松田敏男、遠藤俊郎、亀山紘美、南 PP.78-88
17	国際女子バレーボール試合におけるローテーションフェイズのサーブレシーブの評価に関する研究	共著	2008.03.00	テクニカルスタディー 2007、JVA 医・科学サポート委員会	(担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理) 2007 年に開催されたワールドグランプリ大会 14 試合 (55 セット) のサーブレシーブ評価に関わる公式技術データを収集し、得点率、失点率との関連性を検討した。その結果、①サーブレシーブの良否は失点率およびサイドアウト得点率に影響しないこと。②チーム失点率はローテーションフェイズの失点率と有意な相関が見られたことから分析項目の一つとして有用であること、等を指摘した。共著者：島津大宣、泉川喬一、山下茂、坂井充、田原武彦、山本外憲、金子美由紀、松田敏男、遠藤俊郎、亀山紘美、南 PP.67-72

18	国際女子バレーボール試合における各ローテーションフェイズのチーム（有効）失点率指数に関する研究	共著	2008.03.00	テクニカルスタディー 2007、JVA 医・科学サポート委員会	（担当部分： 研究計画の立案、データの収集・整理） バレーボールワールドカップ 2007 女子大会における日本チームの 3 試合（対キューバ、アメリカ、ブラジル）に関わる公式技術データを収集し、チーム失点率とチーム有効失点率を求め、サーブレシーブの攻守のバランスへの影響を検討した。その結果、チーム有効失点率指数が 16.67 が攻守の分かれ目になり、16.67 未満であれば相手チームのサービスに適応できる。また、16.67 以上になるとサービスの効果も含めて加点の可能性が高くなりチームにとっては有利なフェーズとなることが指摘された。共著者：島津大宣、泉川喬一、山下茂、坂井充、田原武彦、山本外憲、金子美由紀、松田敏男、遠藤俊郎、亀山紘美、南 PP.73-78
19	他尊感情及び自尊感情とスポーツ行動規範との関係性	共著	2009.03.31	山梨大学教育人間科学部紀要 NO.10	肯定的な感情評価を表わす「自尊感情」と他者との関係の中で生活するための新しい態度としての「他尊感情」を向上させる要因としてスポーツ行動規範に着目し、それぞれの関係性を解明することを目的とした。男女大学生 346 名を対象とした調査結果から、①スポーツ行動規範の「主張行為」「向上心」「敬意」全ての項目が他尊感情を向上させる大きな要因であることが示唆された。②スポーツ行動規範の「向上心」は自尊感情を向上させる要因となり、「主張行為」は自尊感情を抑制する要因であることが明らかとなった。共著者：遠藤俊郎、星山謙治、袴田敦士、安田貢、下川浩一、布施洋、伊藤潤二。PP.109-117
20	大学生の運動部活動に関する回顧調査	共著	2009.03.31	山梨大学教育人間科学部紀要 NO.10	中学・高校・大学と運動部活動に従事している大学生（474 名）、中学・高校と運動部活動に従事していた大学生（160 名）、高校時代に運動部活動を中止した大学生（28 名）の 3 群の高校時代に着目し、ストレス、教授したサポートの満足度、自己効力感に関する各群の相違を検討し、運動部活動継続を志向する指導の位置資料を得ることを目的とした。その結果、ストレスという観点からは明確な差は見いだせなかったが、大学でも運動部活動に従事しているものは、運動部活動が高校までの者や中止したものに比べて自己効力感が高かった。また、サポートを期待している者については、指導者からの理解・激励、尊重・評価、情報提供といったサポート、チームメイトからの尊重・評価や直接援助といったサポートが大学まで運動部活動を継続かを左右していた。共著者：安田貢、遠藤俊郎、下川浩一、布施洋、袴田敦士、伊藤潤二。PP.118-128
21	チームスポーツにおける集団規範—特にバレーボールについて—	共著	2009.03.31	山梨大学教育人間科学部教育実践総合センター研究紀要 教育実践学研究 NO.14	本研究では、大学における運動部活動（バレーボール）の練習場面における現代の集団規範の実態を把握するとともに、競技水準によってどのような違いがあるかを明らかにし今後のコーチングに役立てるための一資料にする。また、10 年前の選手の集団規範と比較することによって今日の選手の特徴を明確にすることを目的とした。その結果、男子における集団規範下位尺度得点において、競技水準の高いチームに所属している選手が競技水準の低いチームに所属している選手に対してすべての下位尺度得点で高い値を示した。男子における社会的アイデンティティ各項目得点においては、競技水準の高いチームに所属している選手が競技水準の低いチームに所属している選手よりも高い評価が得られた。このことから、男子において競技水準が高いほうが集団帰属意識は強く、規範も厳しいことが示唆された。また、90 年代と現代の集団規範の比較においては、「現代の選手」が 3 つの下位尺度得点（態度規範・上下序列規範・奉仕規範）で高い値を示した。このことから「現代の選手」において規範に対する耐性が低下している可能性があることが示唆された。共著者：遠藤俊郎、下川浩一、安田貢、布施洋、袴田敦士、伊藤潤二。PP.84-94

22	大学生の運動部活動に関する回顧調査ー中学時代のストレス、サポート、自己効力感に注目してー	共著	2009.03.31	山梨大学教育人間科学部教育実践総合センター研究紀要 教育実践学研究 NO.14	本研究の目的は、中学時代の運動部活動に注目し、中学時代・高校時代・大学時代に運動部活動に所属している大学生（以下：大学群）474人、中学時代のみ運動部活動に所属していた大学生（以下：中学群）82人、中学時代に運動部活動を退部した大学生（以下：退部群）9人の3群間に運動部活動場面における部員のストレス、享受したサポート満足度、自己効力感について相違を明らかにし、継続した運動部活動を志向する指導の一資料を得ることである。大学群は中学群よりも退部意識レベルが低いことがうかがえた。また、大学群は中学群よりも「指導者」「練習時間」「競技力」に関するストレスが有意に低く、指導者からの「直接援助」「尊重・評価」といったサポート満足度が有意に高かった。また、大学群や中学群は退部群よりも「指導者」「チームメイト」といった人間関係に関するストレスが有意に低く、指導者やチームメイトからの「尊重・評価」といったサポート満足度が有意に高かった。そして指導者は生活指導を勝つことに結びつけた指導、部員の日常場面における自己効力感を高める指導、試合出場機会を多く設けること、コミュニケーションスキルを身につける努力が必要であることが示唆された。共著者：安田貢、遠藤俊郎、下川浩一、布施洋、袴田敦士、伊藤潤二。PP.95-105
その他					
1	モチベーション理論の新展開 Advance in Motivation in Sport and Exercise by Glyn C.Roberts.	共訳	2004.10.00	創成社（東京） Human Kinetics Publishers, 2001.	（分担部分：第5章スポーツにおける達成目標に関する研究）本書はモチベーション研究のための現代における重要な論考について再調査し統合したものである。9章からなる本書は其々の章が寄稿者の論文から構成されている。遠藤は現代のスポーツの達成目標研究から生起する主要な方向性や論争点に関し他5章を担当した。監訳者：中嶋宣行、共訳者：水野基樹、遠藤俊郎、他8名。全446頁。（分担）158-225頁。
2	体育教師のための心理学 Psychology for Physical Educators by Y. Vanden Auweele, F. Bakker, S. Biddle, M. Durand, R. Seiler.	共訳	2006.04.00	大修館書店（東京） Human Kinetics Publishers, 1999.	（分担部分：第14章教師ー生徒の相互作用と生徒集団における相互作用パターン）本書はヨーロッパスポーツ心理学連盟のプロジェクトとして刊行されたものの邦訳である。最新のスポーツ心理学の成果に基づいて体育のカリキュラム目標の達成に必要な心理学的知識と実践へのガイドラインを広く体育教師に提供している。遠藤は体育の場面で経験する教師と生徒間の社会的相互作用に関する章を担当した。監訳：スポーツ社会心理学研究会、共訳者：伊藤豊彦、阿江美恵子、遠藤俊郎、渡辺英児、他11名。全203頁。（分担）156-171頁。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1978.04.01	～	現在	日本スポーツ心理学会会員	
2	1978.04.01	～	現在	日本体育学会会員（昭和59年～現在 山梨支部理事（平成19年度より支部長）、平成8年9月～平成15年3月 評議員）	
3	1981.04.00	～	現在	日本バレーボール協会科学研究委員会委員（平成5年度より副委員長）	
4	1981.07.00	～	現在	国際バレーボール連盟公認コーチ レベルⅢ	
5	1985.03.00	～	現在	文部省認定日本体育協会公認競技力向上A級コーチ	
6	1985.04.01	～	現在	日本スポーツ方法学会会員（平成4年4月～現在 理事（平成16年度より常務理事））	
7	1987.04.00	～	現在	山梨県バレーボール協会常任理事、副理事長	
8	1988.04.00	～	現在	日本バレーボール協会公認講師	
9	1988.04.01	～	2009.03.31	スポーツ運動学会会員	
10	1989.00.00	～	現在	日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会講師	

11	1991.04.00	～	現在	日本オリンピック委員会医科学サポート委員会科学サポート部会員
12	1994.04.00	～	現在	山梨県体育協会スポーツ医・科学委員会委員
13	1996.05.01	～	現在	日本バレーボール学会会員（平成8年5月～現在 理事・総務委員会委員長（平成18～20年度 理事長、平成21年度より会長））
14	1998.04.01	～	現在	国際スポーツ心理学会会員
15	2004.04.00	～	2009.07.10	山梨県スポーツ審議会委員
16	2007.04.00	～	現在	(財)日本モーターサイクルスポーツ協会理事
17	2007.04.00	～	現在	日本体育学会体育方法専門分科会監事

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	大橋 二郎	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学年メーリングリストによる双方向の情報交換		2006.04.01	スポーツ科学科は学年担任制をとっており各学年 110~120 名の学生の同意のもと携帯電話のメールアドレスを管理し、一斉に情報伝達ができるようにした。また返信は、学年担任のみに情報が伝わる設定になっていることから、一斉情報伝達と一対一双方向の情報交換が可能であり、学生との信頼関係のもとプライバシーが保たれ、履修、学習上のことや学生生活を含めた相談や指導の事例が多数あり、成果を上げた。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 授業資料の電子化と資料配布方法の工夫		2005.04.01	スポーツ科学科専門必修科目の「スポーツ科学概論」では体育・スポーツとスポーツ科学について、過去の資料と新聞記事等のアップデートな情報を教材としていることから、主としてパワーポイントを用いているが、紙での資料配布は一切行わず、教室で使用した資料をデータファイル化して希望者する全ての学生に配布し、PCを用いた学習の促進をしている。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 バイオメカニクス～身体運動を科学する～「サッカー」	共著	2004.10.01	杏林書院、第Ⅲ部 488-496	大橋執筆部分第 25 章 競技力向上のバイオメカニクス 3. サッカー、サッカープレーヤーの技術と動きについてその測定法を示すとともに、これらの結果をどのように読み取りトレーニングに生かすかについて述べた。金子公宥、福永哲夫編 執筆者多数にて省略			
論文							
1 サッカーのインサイドキックにおける speed-accuracy trade-off のメカニズム	共著	2006.08.01	バイオメカニクス研究, vol.10,235-244	足の内側を使うサッカーのインサイドキックについて、正確性とスピードという相反する課題の影響について経験者と非経験者を対象に検証した。非経験者はスピードを重視すると著しく正確性を欠くことが明らかになった。川本竜史、宮城 修、大橋二郎、深代千之(共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)			
2 Effect of leg cooling at half time breaks on performance of soccer-simulated exercise in hot environment	共著	2007.01.20	Journal of Sports Science and Medicine, Supple.10, 146-147	暑熱環境におけるサッカーの試合において、ハーフタイムに脚部を冷やすことにより後半のパフォーマンス低下を防げるかについてゲームをシミュレートしたプロトコル条件下で実験的に検証し、脚部の冷却が効果的であることが明らかになった。M. Yasumatsu, O. Miyagi, J. Ohashi, H. Togari, S. Nishikawa, H. Hasegawa, S. Ishizaki and T. Yoda (共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)			

3	Kinetic comparison of a side-foot soccer kick between experienced and inexperienced players	共著	2007.05.00	Sports Biomechanics May 2007; 6(2): 187-198	サッカーのサイドキックに注目し、経験者と非経験者における違いを足部を中心とした関節角度、角速度、蹴り足のトルクから運動学的に分析した結果、キック動作の早い時点での股関節トルクがボールスピードを増すのに効果的であることが明らかになった。R. Kawamoto, O. Miyagi, J. Ohashi and S. Fukashiro (共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)
その他					
1	リモートコントロールによるサッカー選手の移動解析システムの有用性	共著	2005.03.05	日本フットボール学会 2nd congress	サッカーなどのボールゲームプレーヤーの移動解析システムをリモートカメラを用いた方法に改良した。その結果測定精度についてはほぼ従来の方法と同様の結果を得ることができた。大橋二郎、宮城 修、瀧 剛志
2	「一般体育の充実とスポーツ・健康科学部の新設」		2005.11.25	日本体育学会第 56 回大会シンポジウム 3 (全国大学体育連合との合同シンポジウム)	「事例に学ぶ大学体育活性化戦略」と題するシンポジウムにおいて「初年度教育としての大学体育」中村友浩、「大学体育授業を通じた社会貢献」安田忠典、に続き 3 題目として、「一般体育の充実とスポーツ・健康科学部の新設」と題し、大東文化大学の特徴である全学必修科目「総合体育」の意義、そしてスポーツ・健康科学部設立のコンセプトと魅力ある体育・スポーツ系学科を目指し、具体化した事例について発表した。
3	フットボール学会のビジョン	単著	2006.01.14	第 3 回日本フットボール学会	(講演) 設立 3 年目の日本フットボール学会について、設立までの経緯、設立から 3 年経過した成果、そして将来のビジョンについて講演した。科学と指導現場の橋渡し、異なるフットボールとの連携、国際会議の招致への展望が主な内容であった。
4	サッカーにおける選手育成の取り組みと課題	単著	2007.03.03	バレーボール学会第 12 回大会	(講演) 日本のサッカーの世界におけるレベルの推移とナショナルトレセン制度や J リーグの発足、およびサッカーと科学を橋渡しする使命をもった日本フットボール学会の活動について講演した。
5	サッカーにおけるインサイドキック動作の左右対称性	共同	2008.03.16	第 5 回日本フットボール学会	サッカーにおけるインサイドキックの左右対称性について運動力学的に検討した。その結果熟練度に関わらず類似したトルク発揮パターンを示した。川本竜史、宮城 修、大橋二郎 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6	Kinetic similarity in side-foot soccer kicking with the preferred and non-preferred leg.	共著	2008.05.16	The First World Conference on Science and Soccer (第 1 回サッカーと科学の国際会議)	サッカーのインサイドキック動作について、非利き足に注目し、モーションキャプチャを用いて解析した。鍛錬者、非鍛錬者ともに関節モーメントにおいて有意な差がみられなかった。鍛錬者において特に左右差がみられなかったことから、練習によってインサイドキックの動作が左右の脚ともに習熟していることが示唆された。Ryuji Kawamoto, Jiro Ohashi and Osamu Miyagi
7	大学駅伝選手を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトの事例報告。	共著	2008.12.20	第 21 回日本トレーニング科学学会大会	2006～2007 年にかけて、D 大学陸上競技部員を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトを実施し、総合的測定評価によって指導現場にフィードバックを行った。このことによって選手のトレーニングやコンディショニングに対する意識の改善に大きな成果を得た。只限伸也、川本竜史、勝又宏、宮城 修、田中博史、大橋二郎、琉子友男
8	司会		2008.12.21	第 21 回日本トレーニング科学学会大会	第 21 回日本トレーニング科学学会大会シンポジウム②「子どもの体力データベース化はどこまで進み、何が分かってきたか？」のテーマで「J リーグ・アカデミーフィジカル測定プロジェクトでの取り組み」宮城 修、「ジャイアンツアカデミーでの取り組み」石田和之、「スポーツ医科学センターでの取り組み」持田 尚、「福岡県タレント発掘事業での取り組み～体力データベースをタレント発掘にいかん活用するか～」の 4 題の発表と参加者とのディスカッションの司会を務めた。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1976.04.00	～	現在	サッカー研究会会員	
2	1976.04.00	～	現在	児童スキー研究会理事長 (1991～2000)、会長 (2004～現在)	

3	1977.04.00	～	現在	日本体育学会会員
4	1987.04.00	～	現在	日本バイオメカニクス学会会員
5	1987.04.00	～	現在	日本体力医学会会員
6	1988.04.00	～	現在	トレーニング科学学会会員
7	2003.09.00	～	現在	日本フットボール学会会長（～2009.3）、理事（2009.4～現在）

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	馬渡 照代	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1974.08.00	～	現在	日本女子体育連盟会員		
2	1974.08.00	～	現在	日本体育学会会員		
3	1985.04.00	～	現在	健康体操教室、ジャズダンス教室		
4	1986.06.00	～	現在	日本舞踊学会会員		

(表 25)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	馬渡 照代	開催日時		発表・展示等の内容等	
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催日時	発表・展示等の内容等						
1 創作コンクール部門「こだわりの溢」 参加発表部門「Yes! 魂! ドゥンドゥン CREW」	第 17 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル (神戸)	2004.08.04	大学創作コンクール部門にて、生き生きとした生命力あふれる表現に対して「日本女子体育連盟理事長賞」を受賞する。						
2 モダン作品 12 作品、現代のリズム作品 2 作品、またアーティストリック・ムーブメント・イン富山における特別賞受賞作品「小さな地球直径 2」と「共奏曲」を再演。	第 19 回大東文化大学モダンダンス部公演アクトホール (成増) ざっくばらん～夜明けの花道～	2004.10.21	振付、指導する。						
3 創作コンクール部門「裸虫一千のセンスのかけあいー」 参加発表部門「につく Pa ニックぱ nic パニックか!」	第 18 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル (神戸)	2005.07.29	大学創作コンクールにて、すぐれた動きのテクニックに対して「特別賞」を受賞する。						
4 モダン作品 10 作品、現代のリズム作品 3 作品、またアーティストリック・ムーブメント・イン富山における松本千代栄賞北日本新聞社賞受賞作品「マンホールの下のジャンズ」を再演。	第 20 回大東文化大学モダンダンス部公演朝霞市民会館ゆめばれす (大ホール) [序章] Believe your Sence!!	2005.10.21	振付、指導する。						
5 創作コンクール部門「問いの階」 参加発表部門「vivashot!!」	第 19 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル (神戸)	2006.08.02	大学創作コンクール部門にて、表現の中核となる動きの発見に対して「特別賞」を受賞する。						
6 モダン作品 9 作品、現代のリズム作品 2 作品及び、“アーティストリック・ムーブメント・イン富山”における特別賞受賞作品「生きがかり」を再演。	第 21 回大東文化大学モダンダンス部公演和光市民会館 (サンアゼリア) ケセラセラー成るようにするー	2006.10.24	振付、指導する また卒業生 2 人によるシアター 21・フェス出展作品「other fact」を再演する。						
7 創作コンクール部門「ネオライブラー」 参加発表部門「ザオリク海底都市」	第 20 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル (神戸)	2007.08.06	大学創作コンクール部門にて入選する。						
8 モダン作品 11 作品、現代のリズム作品 2 作品	第 22 回大東文化大学モダンダンス部公演アクトホール (成増) イッパイあってな ー愛・溢れる今日にバンザイー	2007.10.22	振付、指導する。また卒業生 8 人による作品「HATSUDEN」を再演する。						
9 創作コンクール部門「覚悟の春」 参加発表部門「ファインの源」	第 21 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル (神戸)	2008.08.02	創作コンクール部門「覚悟の春」 参加発表部門「ファインの源」 大学創作コンクール部門にて、入選する。						
10 「夢」ありがとう モダン作品 6 作品、現代のリズム作品 2 作品	第 23 回大東文化大学モダンダンス部公演 (創立 30 周年) 和光市民会館サンアゼリア	2008.10.13	モダン作品 6 作品、現代のリズム作品 2 作品 振付指導。創立 30 周年記念作品「クレド」(本人出演) 及び、スポーツ科学科、ダンス演習生による作品上演						

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	教授	氏名	琉子 友男	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 東松山市高坂丘陵地区住民の健康づくり事業		2008.10.26	東松山市高坂丘陵地区住民の体力測定に学生を参加させ (学部生及び大学院生 20 名以上)、機器使用の実践能力の向上、一般住民とのコミュニケーション能力の向上、データの統計分析能力の向上を高めるための教育をしている。			
2) 大東文化大学授業評価		2009.02.05	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、比較的高い評価を得た。平均値は 4.2 (5 段階評価)。			
3) 中央大学法学部授業評価		2009.04.01	スポーツと健康及び生涯体育 (卓球) の授業評価 (2008 年 12 月実施) において平均値 3.5 (4 段階評価) 以上の比較的高い評価を得た。			
4) 授業運営の中で AV 機器の有効活用		2009.04.01	生理学の授業において、学生の理解力向上を目的としてテーマ毎 (末梢、中枢神経系、筋肉、骨格系等) にパワーポイントの利用及び資料配布を行っている。また、毎回小テストを行うことで学生の理解度をチェックし、必要であれば再度指導を行っている。特に重要で複雑な課題 (膝蓋腱反射の生ずる仕組み等) については、レポートを提出させ授業外における学習を促進する取り組みを行っている。			
5) 三鷹市新川中原地区住民の健康づくり事業		2009.04.15	東京都三鷹市の健康福祉関連事業の一環として行われている新川中原地区住民の体力測定に学生を参加させ (学部生及び大学院生 10 名程度)、機器使用の実践能力の向上、一般住民とのコミュニケーション能力の向上、データの統計分析能力の向上を高めるための教育を推進している。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) これからの健康とスポーツの科学 (第 2 版第 3 刷)		2007.03.00	第 2 版はかなりデータなどのリニューアルをし、カラー印刷をした結果、非常に読み易くなった。分担執筆部も第 5 章、第 6 章と増加した。関連分野では多くの大学においてテキストとして採用されている。(安部孝、琉子友男編著)。			
2) テキストブック 介護予防運動指導士—高齢者の体力を維持・向上させるプログラマー (ミネルヴァ書房)		2007.03.05	本著は、本邦における介護の実態、高齢者の体力を維持・増進させるためのレジスタンストレーニング法や持久的トレーニング法、転倒予防トレーニング法、高齢者のための栄養学と問題点、運動指導の際のリスクマネジメントなど総合的に解説している。現在、介護予防運動指導士を目指す学生向けのテキストブックとなっている。(pp.133 小野晃、琉子友男編著)。分担部: pp.7~32 (再掲)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 転ばぬ先の杖~ウォーキングと筋力トレーニングの効果~		2007.06.27	大東医学技術専門学校において全国の柔道整復師 O B を対象にウォーキングや筋力トレーニングの生理的効果に関して生活習慣病予防の観点や高齢者の転倒予防の観点から解説した。(大東医学技術専門学校講堂)			
2) 中高年体力づくり事業		2008.10.06	埼玉県東松山市鳩山町の「中高年体力づくり事業」に協力して、鳩山町在住の中高年の Q O L を向上させ、健康長寿と医療費削減を目指すものである。32 名の高齢者を対象に 2 ヶ月の間、廃校になった小学校校舎を利用して筋力トレーニングを行わせ、その前後に体力測定を行い、多くの高齢者が体力と Q O L の向上を獲得した旨の結果報告及び講演活動を行った。			
3) ジュニア期のスポーツ —骨格筋及び骨の発達—		2008.12.05	群馬県太田市のジュニアスポーツ育成事業の一環として、ジュニアスポーツの監督、コーチ、指導者、父兄を対象に骨格筋や骨の発育・発達に対するスポーツの影響について解説した。(群馬県太田市総合健康センター)			
4 その他教育活動上特記すべき事項						

II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 テキストブック 介護予防運動指導士－高齢者の体力を維持・向上させるプログラム－	共編著	2007.03.05	ミネルヴァ書房	本著は加齢に伴うからだの機能と構造の変化に関して機能解剖学および運動生理学的な観点から解説することを中心に、本邦における介護の実態、高齢者の体力を維持・増進させるためのレジスタンストレーニング法や持続的トレーニング法、転倒予防トレーニング法、高齢者のための栄養学と問題点、運動指導の際のリスクマネジメントなど総合的に解説している。現在、介護予防運動指導士を目指す学生向けのテキストブックとなっている。(pp.133 小野晃、琉子友男編著)。分担部：pp.7～32
2 これからの健康とスポーツの科学(第2判第3刷)	共編著	2007.03.25	講談社サイエンティフィック	本著は現在までの健康とスポーツの科学的事実を、健康を推進するための生活スタイル、生活習慣病の予防と改善法、肥満の評価と改善法、高い筋力やパワーの違い、筋量を高めるためのトレーニング法、持久力を高めるトレーニング法、フルマラソンのためのスタミナ養成、骨を強くする方法、加齢と筋萎縮およびサルコペニア、子供の体力や運動能力の改善法、環境変化と運動、スポーツ・スキルを高める方法、ストレスと運動など総合的にまとめている。また、第1版に子供の体力、サルコペニア、乳酸閾値に関係した章と著者を付加した(pp.180、安部孝、琉子友男編著)。分担者：安部孝、琉子友男、磯川正教、楠原慶子、小谷康則、兵頭圭介、深代千之、安松幹展、山崎先也、八田秀雄、平野裕一、藤田聡。担当部分：(第5章、第6章、pp.59-81)
3 新・日本人の体力標準値II	分担部単著	2007.09.26	不昧堂	本書は、首都大学東京体力標準値研究会が文部省の科学研究費助成「中高齢者の体力基準化に関する研究」の成果の一環として「日本人の体力標準値」を1970年に出版して以来、出版を継続してきたものである。今回は、首都大学の教員に東京都立大学から他大学へ移動した教員をメンバーとして加えて執筆させている。本書は過去5年間の文科省、厚労省、その他多くの研究者によって公表されたデータ(0歳から70歳までの体格および体力などの数値)をコンピューター処理してグラフ化している。(pp.421, 首都大学東京体力標準値研究会編) 担当部分：(pp.161-229)
論文				
1 マイナスイオンの人体に及ぼす影響－生理学および医学的効果に関する研究の歴史と最近の動向－(総説)	単著	2004.05.00	クリーンテクノロジー 第14巻5号, 62-66	本著は人工的マイナスイオン発生装置の開発の歴史、その装置を用いた研究の歴史を生理学および医学的見地から解説している。内容は2003年に報告された活性酸素仮説から最近の医学的発見まで多岐にわたるものである。特に最近の研究では、マイナスイオンがNK細胞のガン細胞増殖抑制作用を増加させる事例や血流阻止をともなう手術後の患者の有酸素機能を高める作用など体育学の分野に関連する事例も多くレビューしている。
2 短縮性収縮専用マシンを用いたスクワットトレーニングが高齢者の下肢筋力およびバランス能力に及ぼす影響	共著(筆頭)	2005.05.00	日本生理人類学会誌 Vol.10, No.2, 45-51.	本研究はスクワット運動で見られる大腿四頭筋の伸張性と短縮性収縮のうち伸張性収縮を補助できるマシンを開発し、そのマシンを用いたスクワットトレーニングが高齢者の下肢筋力やバランス能力にどのような効果を有するか調査した。その結果、脚伸展力、足関節低屈筋力、股関節外転筋力が有意に向上し、また、後ろ方向へ体を傾ける動的バランス能力も向上することが明らかとなった。このことは膝などに障害を持つ高齢者についても、このマシンを用いたスクワット運動が有効であることを示唆している。

3	Muscle fiber cross-sectional area is increased after two weeks of twice daily KAATSU-resistance training	共著	2005.10.00	International Journal of KAATSU training Research Vol.1, 65-70.	本研究は、静脈血流を阻止した状態で軽い負荷（1回挙上できる重さの20%の負荷）をかけた筋力トレーニングが、ヒトの筋線維横断面積に対してどのような影響を及ぼすかを検討したものである。下肢に対する2種類の筋トレは1日に3セットを2回、2週間行われた。その結果、外側広筋における遅筋線維の横断面積は5.9%しか増加しなかったが、速筋線維のそれは27.6%も増加した。この結果は負荷が軽くても静脈血を遮断して筋トレを行うと、遅筋線維よりも速筋線維が肥大することを示唆している。（筋生検後の筋肉の切片作成および染色の指導）共著者：Yasuda T., Abe T., Sato Y., Midorikawa T., Kearns C.F., Inoue K., Ryushi T., and Ishii N.
4	Effects of negative air ions on activity of neural substrates involved in autonomic regulation in rats.	共著	2008.01.11	国際生気象学会 Int. Journal of Biometeorology Vol.52: 481-489.	本研究は、マイナスイオンを曝露した時の生理学的反応と脳内の神経活動を c-Fos 遺伝子発現を指標に調査した。この研究では、動物の生理反応も同時に観察していたが、マイナスイオン曝露群は通常空気曝露群に比較して、血圧、心拍数、および呼吸数が減少し、心電図 R-R 間隔のスペクトル解析からみた副交感神経系 (HF) の活動が亢進した。また、c-Fos 遺伝子発現数が延髄の青斑核や視床下部の室傍核で少なく、延髄の疑核では多かった。この結果は、マイナスイオンが3つの神経核の活動を変化させることで交感神経抑制や副交感神経亢進の生理反応を起こすことを示唆するものである。（共同発表につき本人担当部分抽出不可能）共同発表者：Suzuki S., Yanagita S., Amemiya S., Kato Y., Kubota N., Ryushi T., Kita I.
その他					
1	Muscle fiber cross-sectional area increased after two weeks of low-intensity "kaatu" resistance training	共同	2004.06.00	9th annual congress of the European College of Sport Science	本研究は、被験者を大腿部の加圧（160 mmHg）によって血流阻止する群と加圧しない群に分類した。両群に1RMの50%以下の軽い負荷で2週間のあいだスクワットとレッグカールトレーニングを行わせた。その結果、加圧しながら筋力トレーニングを行った群は加圧しない群に比較して、筋力、大腿骨断面積、筋断面積が増加した。また、加圧した群の方が筋線維断面積は肥大していたが、中でも速筋線維の断面積の増加が特に著しいことが明らかとなった。（担当部分：筋生検後の筋肉処理、筋切片作成指導、組織化学的分析指導など）共同発表者：Yasuda T., Abe T., Sato Y., Midorikawa T., Inoue K., Ryushi T., Kearns CF and Ishii N.
2	An investigation on elective physical education programs in Japanese Colleges.	共同	2005.08.07	The 10th EASESS CONFERENCE	本研究は統合型（実技と講義を実施）の選択制体育実技を受講する大学生を対象に、体育実技に対する意識調査を行ったものである。その結果、実技と共に年数回実施する講義内容（食生活管理、AIDS 予防など）に関する評価は、約80%の学生が肯定的であった。1年間の実技授業を通じて友人の数は増える傾向を示し、運動に対する重要性の認識や運動の楽しさを体験した学生は4年間を通じて受講者の3分の2以上であった。以上の結果から、選択制体育の統合型の授業が学生のニーズに十分答えていることが明らかとなった。（共同発表につき本人担当部分抽出不可能）共同発表者：Hyodo K., Suzuki A., Ryushi T., Katsumata H. and Tanaka H.
3	空気マイナスイオンの生物学作用メカニズム		2006.06.08	第8回応用加速器・関連技術研究シンポジウム	本研究はラットにマイナスイオンを曝露した時の生理学的反応と脳内の神経活動を c-Fos 遺伝子発現を指標に調査したものである。一般に、神経細胞は何らかの入力情報を受けた時に一過性に転写を活性化し、Fos 蛋白を生産することが知られている。この研究では、動物の生理反応も同時に観察していたが、マイナスイオン曝露群は通常空気曝露群に比較して、血圧、心拍数、および呼吸数が減少し、心電図 R-R 間隔のスペクトル解析からみた副交感神経系 (HF) の活動が亢進した。また、c-Fos 遺伝子発現数が延髄の青斑核や視床下部の室傍核で少なく、延髄の疑核では多かった。この結果は、マイナスイオンの情報が気管で感知され迷走神経を介して孤束核や疑核に伝えられ、室傍核や青斑核の反応を変化させることを意味し、マイナスイオンが気管の感覚上皮体で感知され迷走神経を介して中枢へ影響を及ぼすとした Kavet の神経内分泌細胞仮説と符合するものである。

4	高齢者における Functional reach test 及び最大一歩幅 test の左右差	共同	2006.08.18	日本体育学会第 57 回大会	本研究は、バランスの指標とされる Functional reach test と筋力のある指標である最大一歩幅 test の左右差を明らかにすることによって、従来使用されてきたこれらのスクリーニングテストの簡便性や妥当性を明らかにする目的で行われた。その結果、いずれの測定項目においても左右差は認められず、左右のいずれかの手や足を用いても測定結果に影響を及ぼすものではないことが明らかとなった。この結果は、左右両方の手や足を用いて測定してきた Functional reach test や最大一歩幅 test は、左右のいずれかを用いて測定しても測定結果に影響を及ぼさないことを意味し、高齢者の測定に対する心身の負担を軽減することが可能であることを示唆する（共同発表につき本人担当部分抽出不可能）。共同発表者：小野晃、琉子友男
5	体育実技に対する学生の満足度について －4年間のアンケート調査の結果から－	共同	2006.08.19	日本体育学会第 57 回大会	本研究は本学における過去4年間のアンケート調査をもとに体育実技の満足度について検討したものである。その結果、体育実技に対する評価は「運動の重要性を認識した」「運動の楽しさを体験した」「健康・運動に関する知識を習得した」の3項目については、5段階評価のうち「あてはまる」あるいは「ややあてはまる」と答えた学生が8割に達した。しかし、「体力が回復した」、「生涯を通じてできるスポーツ種目が分かった」という問いについては、約3割が「ややあてはまらない」あるいは「あてはまらない」という否定的な回答をしていた。前期と後期に行った「体育実技を通じて得た友人の数」については、後期の終わりごろになると、「0人」「1～2人」と答える学生数が減り、「5～6人」「7人以上」と回答する学生が増加した。この結果は、体育実技が「友人を得る」、「健康や運動に関する知識を得る」など、健全な学生生活を送るための導入教育として重要な教育科目であることを示唆している。（共同発表につき本人担当部分抽出不可能）。共同発表者：兵頭圭介、琉子友男その他
6	イオンの決定版	分担部単著	2007.04.07	Newton 第27巻第4号、ニュートンプレス	本書は、サイエンスに関する記事を掲載した科学雑誌であるが、「イオンのすべて」というタイトルの特集が生まれ、その特集の中でマイナスイオンの正体や生成のメカニズム、生理的効果について解説した。担当部分：(pp.62-63)
7	化学のからくりがわかるイオンと元素	分担部単著	2007.12.10	Newton 別冊、ニュートンプレス	本書は、サイエンスに関する記事を掲載した科学雑誌であるが、イオンと元素に関する特集が生まれ、その特集の中でマイナスイオンがどのようにして生成され、また、どのようなメカニズムで健康に影響を及ぼすかを解説した。担当部分：(pp.94-95)
8	代謝アップの歩き方、ストレッチ	分担部単著	2008.06.01	日経インテレッセ6月号、日経ホーム出版社	本書は、日本経済新聞の日曜版とともに配布される新聞であるが、この中で大股歩きや自体重を荷物とした運動やストレッチ運動がいかにダイエット効果や代謝アップに役立つかを解説した。担当部分：(pp.2-5)
9	Relationship between functional reach and muscle strength.	共同	2008.08.01	The 13th EASESS conference	Functional reach test(FRT) は、従来、バランス能力の指標として用いられてきたが、バランス能力と FRT との間に密接な関連性を認めていない報告も多い。そこで、本研究は FRT がバランス能力よりも下肢の筋力を反映するのではないかという仮説を立て下肢の各部位の筋力と FR 距離との関係を調査することを目的とした。その結果、 FR 距離と股関節屈曲力、足関節背屈力、及び足関節底屈力などの下肢筋力との間に有意な相関関係が認められた。以上の結果から、 FRT が加齢にともない低下した高齢者の下肢筋力をおおまかに推定するために有効であり、この FRT を測定する器具は持ち運びが簡単であることから、施設等において高齢者の身体機能をチェックするのにも利用価値が高いことが明らかとなった。共同発表者：Ryushi T., Park M., and Katsumata H. et al.
10	夢 2 1	分担部単著	2009.01.01	わかさ出版	かかとのゆっくり上げ下げは、ヒラメ筋を効率よく鍛える「ヒラメ筋訓練器」を使えば効率絶大。本書は、健康に関する記事を掲載した商業雑誌であるが、この中で「からだの老化防止」特集が生まれ、ヒラメ筋の筋力トレーニングが高齢者の転倒防止やQOLの向上に役立つことを解説した。担当部分：(pp.22-24)
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					

1	1977.09.00	～	現在	日本体力医学会会員
2	1980.04.00	～	現在	日本宇宙航空環境医学会会員
3	1981.08.00	～	現在	日本体育学会会員
4	1990.05.00	～	2007.03.00	International Society of Electrophysiology and Kinesiology 会員
5	1993.04.00	～	現在	日本運動生理学会評議員
6	1995.04.00	～	現在	スポーツ・ウォーキングの会代表
7	1996.05.00	～	現在	日本生気象学会会員
8	1996.06.00	～	現在	日本臨床環境医学会会員
9	1996.10.00	～	現在	日本生理人類学会会員
10	1997.04.00	～	現在	コニカ陸上競技部トレーニングアドバイザー
11	1998.05.00	～	2006.09.00	日本臨床電子顕微鏡学会会員
12	1998.05.00	～	現在	トレーニング科学研究会会員
13	1999.04.00	～	現在	日本生理人類学会評議員
14	2000.04.00			International Society of Electrophysiology and Kinesiology reviewer
15	2000.04.00	～	現在	三鷹市スポーツ・ウォーキングの会トレーニングアドバイザー
16	2001.10.00			東京都生活文科局専門家評価委員
17	2002.03.00			Journal of Gerontology reviewer
18	2002.04.00	～	現在	日本住宅環境医学会理事
19	2002.06.00	～	現在	日本測定評価学会会員
20	2003.04.00	～	現在	日本運動・スポーツ科学学会会員
21	2003.12.00			Journal of Physiological Anthropology Reviewer
22	2004.01.00			International Journal of Biometeorology Reviewer
23	2004.03.00			日本生理人類学会 Reviewer
24	2005.01.00			International Journal of Biometeorology Reviewer
25	2005.05.00			Journal of Physiological Anthropology Reviewer
26	2005.06.21	～	2006.02.27	東京都生活文化局東京都表示適正化対策専門助言員
27	2006.02.22	～	2006.02.22	三鷹市健康福祉部講師
28	2006.06.00			Journal of Zhejiang University Science Reviewer
29	2006.12.00			Journal of Physiological Anthropology Reviewer
30	2007.07.00	～	現在	日本生理人類学会 Reviewer

31	2007.08.06	～	2007.08.06	三鷹市健康福祉部講師
32	2008.03.00	～	現在	日本生理人類学界 Reviewer
33	2008.12.00	～	現在	第 21 回日本トレーニング科学会大会会頭

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	川本 竜史	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・(無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 「SFC方式」による特色ある体育授業実践・運営	1999.04.00	(1999年4月～2005年3月。)「SFC方式」と称され、オンラインの授業予約システムを用いた問題発見&解決型学習として特色ある大学体育授業の実践・運営に5年間にわたって携わった。					
2) LL委員会委員としての活動	2005.04.00	LL委員として、学内における視聴覚施設の充実に努めている。					
3) 地域連携センター運営委員会委員としての活動	2006.04.00	地域連携センター運営委員として、大学と地域（特に東松山市）との連携強化に努めた。					
4) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2007.02.00	「スポーツバイオメカニクス」の授業評価アンケート結果より、「授業目的の明確性」、「教員の熱意」、「聞き取りやすさ」などの多くの項目で高い評価を得た。					
5) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2007.02.00	「総合体育B（バドミントン）」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.3（満点5）という学生からの高い評価を得た。					
6) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2008.02.00	「スポーツバイオメカニクス」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.4（満点5）という学生からの高い評価を得た。					
7) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2008.02.00	「スポーツ実技B（サッカー）」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.6（満点5）という学生からの高い評価を得た。					
8) オープンカレッジ（公開講座）における学部企画講座のコーディネート	2008.05.00	学内地域連携センター主催のオープンカレッジ（公開講座）において、スポーツ・健康科学部企画講座「健康づくりエクササイズの実践」を企画・コーディネートし、講師も担当した。					
9) 「スポーツコンテンツ制作演習」における卒業記念コンテンツの課外指導	2008.09.00	担当授業である「スポーツコンテンツ制作演習」における履修者の学習意欲を高める工夫として、卒業予定者に卒業記念アルバムとDVDの作成を指導し、課外時間においても積極的にサポートを行った。					
10) 学内における日本サッカー協会公認C級指導者養成講習会の開催コーディネート	2008.12.00	担当授業であるコーチング演習（サッカー）履修者の学習意欲を高め、公認資格の取得を促すことを目的として、学内において日本サッカー協会公認C級指導者養成講習会をコーディネートし開催した。18名の学生がライセンスを取得するという実績を残した。					
11) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2009.02.00	「スポーツバイオメカニクス」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.5（満点5）という学生からの高い評価を得た。					
12) 学生による授業評価アンケートでの高評価	2009.02.00	「スポーツ実技B（サッカー）」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.7（満点5）という学生からの高い評価を得た。					
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 女子サッカークラブの立ち上げと課外スポーツ指導への取り組み	2005.04.00	女子サッカークラブを新たに立ち上げ、課外活動における競技教育に取り組んでいる。					

2) オープンカレッジ (公開講座) における学部企画講座のコーディネート	2007.05.00	学内地域連携センター主催のオープンカレッジ (公開講座) において、スポーツ・健康科学部企画講座「ウォーキングを知的に楽しむ」を企画し、コーディネートした。
3) 第 21 回関東大学女子サッカーリーグ (2 部) での優勝と 1 部リーグ昇格	2007.11.00	課外活動において監督として指導にあたる女子サッカー同好会を第 21 回関東大学女子サッカーリーグ優勝へと導き、1 部リーグへの昇格という実績を残した。
4) 受託研究「ボディメイクプロジェクト」におけるスポーツ科学測定の実践的教育	2008.10.00	企業からの受託研究「ボディメイクプロジェクト」に学生を参画させ、皮下脂厚や周径囲の測定、運動指導補助、データの整理等を体験的に学習させる機会を設けた。
5) 第 16 回埼玉県女子サッカーリーグ準優勝と 1 部リーグ昇格	2009.03.00	課外活動において監督として指導にあたる女子サッカー同好会を第 16 回埼玉県女子サッカーリーグ優勝へと導き、1 部リーグへの昇格という実績を残した。

II 研究活動

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)
著書				
1 1 日でキックがうまくなる方法-蹴る動作改善のためのコーディネーションドリル (DVD)	単著	2005.06.20	(株) ジースポート	バイオメカニクス視点からサッカーのキック動作を分析し、これに基づくトレーニング方法をマルチメディアで紹介した。DVD。
2 小・中学生のためのサッカーレベルアップ教本 サッカーテクニックバイブル スポーツ科学でうまくなる	単著	2006.11.25	株式会社ベースボールマガジン社	スポーツ科学データを交えつつ、サッカーにおける基本技術のポイントを要約し、紹介した。
論文				
1 蹴る動作の発達	単著	2006.10.01	子どもと発育発達第 4 巻第 3 号 (PP.178-181)	サッカーのインステップキックを例に、蹴る動作の発達過程をバイオメカニクスの観点から解説した。筆頭論文 (川本竜史)
2 サッカーのインサイドキックにおける speed-accuracy trade-off のメカニズム	共著	2006.12.20	バイオメカニクス研究第 6 巻第 4 号 (PP.235-244)	サッカーのインサイドキックにおける正確性とボールスピードの関係をバイオメカニクスの観点から検討し、プレイスキックの状況下では正確性を重視しすぎるよりも、標的を持った上で強く蹴ることを重視した方が有利であることを示唆した。筆頭論文 (©川本竜史、宮城修、大橋二郎、深代千之)
3 Kinetic comparison of a side-foot soccer kick between experienced and inexperienced players	共著	2007.05.00	Sports Biomechanics, Vol.6, No.2(PP.187-198)	筆頭論文 (©R. Kawamoto, O. Miyagi, J. Ohashi, S. Fukushima). 3 次元運動力学解析を通じて、サッカーのインサイドキックにおけるキックスピード向上の要点を解明した。力強いインサイドキックを遂行する上では、キック前半局面での股関節屈曲トルクの発揮がキーポイントであることを明らかにした。
4 サッカーと恥骨結合炎	単著	2007.12.00	臨床スポーツ医学。第 24 巻第 12 号 (PP.1255-1261)	依頼原稿。サッカーのキックと恥骨結合炎との関連性について、バイオメカニクスの観点から考察し解説した。サッカーのインサイドキックでは、股関節内転筋力に依存するのではなく、股関節屈曲筋力を有効活用したキックが重要であることを指摘した。
その他				
1 サッカーにおけるインサイドキックスキルの解明	共著	2004.06.00	第 18 回人工知能学会全国大会大会論集 (CD-ROM、論文番号 3D-3-04)	学会発表・抄録 (筆頭) (©川本竜史、古川康一) サッカーにおけるインサイドキックをバイオメカニクスならびに統計学的に分析し、正確性の運動学的要因を検討し報告した。
2 データを整理しよう-測定データをより役立つものにするための整理テクニック	共著	2004.06.00	コーチングクリニック 6 月号 (ベースボールマガジン社発行 (PP.24-27)	スポーツ科学系一般雑誌への寄稿 (池田哲雄編、著者多数)。スポーツ現場におけるフィールドテストのデータ整理および統計的分析に関する要点を記した。(計 102 頁中の 4 頁)

3	サッカーのインサイドキックにおける speed-accuracy trade-off	単著	2006.01.15	日本フットボール学会 3rd Congress プログラム・抄録集	サッカーのインサイドキックにおける速さ-正確性関連のメカニズムをバイオメカニクスの観点から解明した。(p69)
4	バイオメカニクスと動作分析の原理	共著	2008.01.00	有限会社ナップ	(Iwan Griffiths 著、石毛勇介、川本竜史訳) “Principles of Biomechanics & Motion Analysis” というバイオメカニクスの洋書を翻訳した。本書は力学の基礎からデータの分析手法までを網羅したバイオメカニクス教科書として適当な内容である。第7～12章を担当(計128頁)
5	サッカーのインサイドキック動作の左右対称性	共著	2008.03.00	第5回日本フットボール学会大会論集 (P.50)	学会発表・抄録(筆頭)。(©川本竜史、宮城修、大橋二郎) サッカーのインサイドキック動作の左右対称性を運動力学的に検討した結果を報告した。サッカーの熟練度に関わらず、利き脚と非利き足の間での下肢関節での力発揮様式がきわめて類似することを明らかにした。
6	Kinetic similarity in side-footkicking with the preferred and non-preferred leg	共著	2008.05.15	Proceedings of the 1st World Conference on Science and Soccer (p.62)	学会発表・抄録(筆頭)。(©R.Kawamoto, O.Miyagi, J.Ohashi) サッカーのインサイドキック動作の左右対称性を運動力学的に検討した結果を報告した。サッカーの熟練度に関わらず、利き脚と非利き足の間での下肢関節での力発揮様式がきわめて類似することを明らかにした。
7	大学駅伝選手を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトの事例報告	共著	2008.12.20	第21回日本トレーニング科学学会大会予稿集 (p.60)	学会発表・抄録(共同)。(©只限伸也、川本竜史、勝又宏、宮城修、田中博史、大橋二郎、琉子友男) 大学駅伝選手を対象とした、総合的な体力診断等のスポーツ科学的なサポートプロジェクトの事例を報告した。
8	サッカーのヘディングにおける両脚ジャンプと片脚ジャンプの比較～助走距離と最高到達点に着目して～	共著	2008.12.20	第21回日本トレーニング科学学会大会予稿集 (p.73)	学会発表・抄録(共同)。(©和田拓士、川本竜史)。助走距離と最高到達点との関係に着目して、両脚ジャンプと片脚ジャンプでのヘディング動作をバイオメカニクスの観点から比較検討した。この結果、空間的・時間的制約がある条件では両脚ジャンプが有利であり、3m以上の助走を取れる条件では片脚ジャンプが有利であることを定量的に示した。
9	サッカーのフェイント動作に関するバイオメカニクスの研究	共著	2008.12.25	第20回日本バイオメカニクス学会大会論集 (p.83)	学会発表・抄録(筆頭)。(©川本竜史、宮城修、大橋二郎) サッカーにおける巧みなフェイント動作のメカニズムをバイオメカニクスの観点から検討した。この結果、ボールをまたいですばやく目的方向へと進行するには、進行横方向への重心変位のロスを小さくすることが重要であることを定量的に示した。
10	ジュニアユースからユースへ昇格する際の選手における体力的特徴	共著	2009.02.14	第6回日本フットボール学会大会論集 (p.85)	学会発表・抄録(共同)。(©宮城修、溝口悠己、川本竜史他) サッカーにおけるジュニアユースからユースへの昇格者と非昇格者の体力特性の差を明らかにすることを目的として実施した、Jリーグ・アカデミーフィジカル測定プロジェクトの成果について報告した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1999.04.00	～	現在	日本バイオメカニクス学会会員
2	1999.04.00	～	現在	日本体育学会会員
3	2003.11.00	～	現在	日本フットボール学会会員 (2006.04.01～2009.03.31 幹事)
4	2004.04.00	～	現在	Jリーグアカデミーフィジカルプロジェクトメンバー
5	2007.04.01	～	現在	全日本大学女子サッカー連盟理事
6	2007.04.01	～	現在	日本トレーニング科学学会会員 (2008.04.01～現在 理事)
7	2008.04.00	～	2008.10.00	(財) 埼玉県体育協会第63回国民体育大会サッカー(女子) 競技埼玉県コーチ
8	2008.04.01	～	現在	埼玉県女子サッカー連盟評議員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	田中 博史	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、高い評価を得た。実施したすべての科目で 4.5 以上の得点であった (5 段階評価)。				
2) 東京大学授業評価		2008.12.00	東京大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) において、授業の満足度について 4.0 以上 (5 段階評価) の高い評価を得た。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 大東文化大学保健体育ガイドブック		2009.04.00	大東文化大学全学共通科目である総合体育のガイドブックを作成 (2003 年から毎年更新)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「スポーツパフォーマンスと緊張」		2008.02.00	ジュニアスポーツ育成事業 (群馬県太田市)				
2) 「スポーツとストレス」		2009.01.00	ジュニアスポーツ育成事業 (群馬県太田市)				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 バレーボール 100Q 入魂 どうすればパフォーマンスアップできるかに答える 100 の Q&A	共著	2005.04.00	バレーボール学会編 日本文化出版	バレーボール競技のパフォーマンスアップのための Q&A をまとめたもの。ベーシックスキル、ポジションスキル、チームプレー、インストラクション、チームマネジメント、メンタル、ボディトレーニング、メディカル&フードの 8 つのチャプターにわけ、初心者を対象としてわかりやすく解説されたものである。(Q54, Q60, Q61, Q63, Q65 を田中博史担当)			
2 バレーボールコーチ教本 公認バレーボール上級指導員・上級コーチ用	共著	2005.07.00	財団法人日本バレーボール協会編 大修館書店	バレーボールの上級指導員・上級コーチを対象としたバレーボールの指導書である。(pp117-pp135 バレーボール選手のメンタル・スキル・トレーニング担当)			
論文							
1 本学の必修保健体育科目への学生ニーズについて	共著	2005.03.00	大東文化大学紀要 第 43 号<社会科学・自然科学> PP.59-66 (大東文化大学)	本学の保健体育エリアが 1995 年度から実施している授業評価の 2002 年度から 2004 年度にかけてのユーズ調査と満足度調査の結果を報告したものである。この調査において本学の保健体育科目においては健康管理上必要な知識の習得、交友関係の深化・ひろがりを伴う精神衛生面での効用など学生のニーズを満足できる程度に充足していることが伺われた。(データ分析担当: 田中博史) 共著者: 兵藤圭介、田中博史、中間和男、大橋二郎、秋葉盛夫			

2	スクーバダイビング中の小型医療機器を用いた測定を可能にする防水ケースの開発に関する研究	共著	2005.03.00	大東文化大学紀要 第43号<社会科学・自然科学>PP.279-287(大東文化大学)	本研究は、スクーバダイビング中の生体情報を小型医療機器を用いて測定することを可能にするための防水ケースを開発することを目的として行った。この開発によりスクーバダイビング中の生体に関する臨床データを得ることができ、安全ダイビングの指標を得ることができるものである。(データ分析及び執筆担当：田中博史) 共著者：田中博史、森口哲史、兵頭圭介、中間和男
3	スクーバダイビング中の小型医療機器を用いた測定を可能にする防水ケースのデータの信頼性に関する検討	共著	2006.03.00	大東文化大学紀要 第44号<自然科学>PP.17-24(大東文化大学)	本研究は防水ケースを用いた測定において取得されるデータがケースを用いないときと差があるのかについて調査し、ケースを使用して得られるデータの信頼性について明らかにすることを目的として行い、動脈血酸素飽和度及び心拍数はケースを用いた場合でも正確なデータが得られることが確認された。(データ分析及び執筆担当：田中博史) 共著者：田中博史、森口哲史、勝又宏、兵頭圭介、小田切優子、下光輝一)
4	「大学体育自己点検・評価報告書」に見る本学保健体育教育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について	共著	2006.03.00	大東文化大学紀要 第44号<自然科学>PP.17-24(大東文化大学)	大学体育連合の大学体育FD推進校の表彰の基準となった報告書の内容を紹介し、本学の保健体育教育の実態を明らかにし、あわせて2005年4月のスポーツ・健康科学部開設により、今後いかなる改善が期待されるのであるのかを考察した。(資料収集担当：田中博史) 共著者：兵頭圭介、勝又宏、川本竜史、只隈伸也、田中博史、中間和男、中村正雄、宮城修
5	バレーボールの授業の方向性を探る－中学校、高等学校の授業におけるバレーボールに対する意識－	共著	2006.05.00	バレーボール研究 Vol.8 No.1 PP.3-12(バレーボール学会)(レフリー付)	本研究はバレーボールの授業を受講した大学生に対しておもしろさ、難しさをキーワードに中学校から高校のバレーボールの授業に関するアンケート調査を行い今後の授業の方向性を検討した。その結果、教師は授業に於いて必要な練習時間を確保し、スパイクや連係プレーを上達させゲームの特性である緊張感や興奮を伴うゲームを実現するプログラムを作成する必要があると考えられる。さらに、おもしろくすることや難しさは、専門的なスポーツ経験の有無や性別による異なるため、これを理解しゲームを中心とした指導プログラムを作成する必要があると考えられた。(資料収集担当：田中博史) 共著者：高橋宏文、田中博史
6	スクーバダイビング中における末梢血中酸素飽和度及び心拍数	共著 (筆頭)	2008.06.00	宇宙航空環境医学第45巻第2号PP.61-67(宇宙航空環境医学会)(レフリー付き)	本研究はスクーバダイビング中のSPO ₂ を心拍数と合わせて測定・評価することを目的として行われた。スクーバダイビング中のSPO ₂ は安静時と比較して有意に高値を示すことが明らかとなり、心拍数においては先行研究同様に徐脈が確認された。なお、本研究はスクーバダイビング中のSPO ₂ の変化について明らかにしたはじめての論文であり、スクーバダイビングの安全な実施に向けてSPO ₂ の測定が有用である可能性を指摘した。共著書：田中博史、小田切優子、森口哲史、下光輝一
7	中高年者のフラダンスが与える心理生理的効果－重心動揺と気分プロフィールの変化について－	共著	2008.10.00	鹿児島大学教育学部研究紀要第60巻(鹿児島大学)	本研究はフラダンスを楽しむ中高年者を対象として、フラダンスの心理生理的効果の検討を行った。重心動揺、心拍変動などからの検討によりフラダンスはリラクゼーション効果があることが明らかとなった。森口哲史、藤田勉、市村志朗、永澤健、田中博史、今給黎希人、前田雅人(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
その他					
1	(雑誌) 潜水生理学	単	2004.10.00	Mermaid Press Vol/3 Autumn(NPO法人スクーバミュージアム)	NPO法人スクーバミュージアムが発行するMermaid Pressに潜水生理学のタイトルで連載をスタートした。スクーバダイバーのダイビング中の生理応答の研究についてまとめたものである。
2	(雑誌) 潜水生理学	単	2005.02.00	Mermaid Press Vo1/4 Winter(NPO法人スクーバミュージアム)	NPO法人スクーバミュージアムが発行するMermaid Pressに潜水生理学のタイトルで連載をスタートした。スクーバダイバーのダイビング中の生理応答の研究についてまとめたものである。

3	(学会発表) サーブパフォーマンス様式に関する研究	共同	2005.03.00	バレーボール学会第10回大会	イタリアセリエAリーグと日本のVリーグにおけるゲーム中のサーブの戦術的な相違点をそれぞれのサーブパフォーマンスの様式から見出すことを目的として行った。この結果、ジャンピングサーブにおいてストレートに近いヒットコースを選択し質的に高い打球を作ろうとしていることが伺えた。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 共同発表者: 高橋宏文、田中博史
4	(雑誌)	単	2005.04.00	月刊バレーボール5月号 (日本文化出版株式会社)	日本文化出版株式会社発行の月刊バレーボールの企画である「行列のできるバレーボール相談所」に「試合になると異常に緊張してしまいます。どうしたらいいのでしょうか?」の質問に対してリラクゼーションの方法について解説をした。
5	An Investigation on Elective Physical Education Programs in Japanese Colleges	共同	2005.08.00	The 10th EASESS CONFERENCE in SHANGHAI CHINA	共同発表者: Keisuke Hyodo, Akira Suzuki, Tomoo Rhyshi, Hiromu Katsumata, Hiroshi Tanaka (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6	(雑誌)	単	2006.03.00	バレーボールマガジン4月号 (オフィス美輪)	オフィス美輪発行のバレーボールマガジンの企画である科学的理論提示型連載「バレーボールの心技体知」に「鍛錬期の基礎基本練習プログラム」について執筆した。
7	(雑誌) 体育・スポーツ進路相談室	単	2006.07.00	体育科教育 2006.8月号	大修館書店発行の体育教育の連載である体育・スポーツ進路相談室に本学スポーツ・健康科学部の紹介について執筆した。
8	体育実技に対する学生の満足度について4年間のアンケート調査の結果から	共同	2006.08.00	日本体育学会第57回大会	大東文化大学の学生における体育実技の履修状況に関するアンケート調査の4年間にわたる縦断的な調査をまとめ、大学で取り扱う体育実技授業の取り組みに関する示唆を得た。共同発表者: 新井義久、勝又宏、川本竜史、久保玄次、鈴木明、只隈伸也、田中博史、中間和男、兵頭圭介、宮城修、疏子友男 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
9	(雑誌) バレーボールの心技体知	単	2006.12.00	バレーボールマガジン1月号 (オフィス美輪)	オフィス美輪発行のバレーボールマガジンの企画である科学的理論提示型連載「バレーボールの心技体知」に「移行期のチームの活動」について執筆した。
10	(報告書) 大学体育FD推進校受賞に関する調査報告	共同	2006.12.00	大学体育 NO.88 (社団法人全国大学体育連合)	大学体育連合より大学体育FD推進校として表彰された7大学を対象として質問紙による調査を行った報告である。共同報告者: 小林勝法、山内賢、森田啓、田中博史、富本靖、柳田泰義 (共同報告につき本人担当部分抽出不可能)
11	(報告書) 大学体育はどのように評価されているかー認証評価機関等の基準からー	共同	2006.12.00	大学体育 NO.88 (社団法人全国大学体育連合)	大学体育連合で行われている大学体育FD推進校の表彰制度の評価方法について他の機関での評価方法から大学体育連合としてふさわしい評価方法を構築するために行われた調査の報告である。共同報告者: 小林勝法、山内賢、森田啓、田中博史、富本靖 (共同報告につき本人担当部分抽出不可能)
12	(報告書) 大学評価に関する調査結果報告	共同	2007.07.00	大学体育 NO.89 (社団法人全国大学体育連合)	本調査は、大学評価、特に保健体育評価の実態と大学体育FD推進校表彰制度に対する認識度や意見を調査し保健体育のFD活動に対する意識と実態の一面を明らかにするために行われた調査の報告である。共同報告者: 小林勝法、山内賢、田中博史、富本靖、森田啓、柳田泰義、奈良雅之 (共同報告につき本人担当部分抽出不可能)
13	How college students are satisfied with the contents in PE classes? From the results of four-year investigations	共同	2007.08.00	The 12th EASESS Conference	共同発表者: Keisuke Hyodo, Susumu Takahashi, Shinya Tadakuma, Hiromu Katsumata, Hiroshi Tanaka, Akira Suzuki (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
14	スクーバダイビング中における末梢血中酸素飽和度及び心拍数	発表者	2008.06.00	第161回東京医科大学医学部総会	本研究は、スクーバダイビング中における酸素飽和度と心拍数について明らかにした研究である。スクーバダイビング中の酸素飽和度の変化について明らかにしたのは本研究が初めての研究であり、この研究の成果は極めて貴重なものである。田中博史、小田切優子、下光輝一 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
15	Relationship between functional reach and muscle strength	共同	2008.08.00	East Asia Exercise Science Society The 13th Annual Congress	本研究は、ファンクショナルリーチとマッスルストレングスの関係について明らかにした研究である。 Tomoo Ryushi, Park Mi-hyang, Akira Suzuki, Hiroshi Tanaka, Keisuke Hyodo, Shinya Tadakuma, Susumu Takahashi, Hiromu Katsumata (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

16	大学駅伝選手を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトの事例報告	共同	2008.12.00	第21回日本トレーニング科学会	2年間にわたり大学駅伝選手を対象として、生理学、バイオメカニクス、心理学等の観点から選手を総合的にサポートしたプロジェクトチームの活動と成果に関する報告である。只隈伸也、川本竜史、勝又宏、宮城修、田中博史、大橋二郎、琉子友男（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
17	大学体育のFD活動に関する意識と実態調査報告	共同	2008.12.00	大学体育 NO.92（社団法人全国体育連合）	本調査は全国大学体育連合の会員を対象として質問紙法により行った。有効回答が138大学で回答率は31.8%と極めて低かったが大学体育のFD活動に関する意識などの実態について示すことができた。小林勝法、山内賢、田中博史、森田啓、柳田泰義、奈良雅之、平田智秋（共同報告につき本人担当部分抽出不可能）

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1997.00.00	～	現在	バレーボール学会理事（2004年4月～現在）、総務委員会委員長（2006年4月～現在）
2	1997.00.00	～	現在	日本体育学会会員
3	1998.00.00	～	2008.03.00	大学スクーバダイビング研究会会員
4	2000.05.00	～	現在	全日本大学バレーボール連盟科学研究委員会副委員長
5	2002.04.00	～	現在	関東大学バレーボール連盟女子強化委員会委員
6	2003.04.00	～	現在	東京医科大学医学会会員
7	2003.07.00	～	現在	NPO法人 Experience Aid 理事長（設立代表者）
8	2003.09.00			東京都板橋区グリーンカレッジ講師
9	2004.03.00	～	現在	日本体力医学会会員
10	2004.04.00	～	現在	日本ストレス学会会員
11	2005.03.16	～	2005.03.16	群馬県太田市おおたスポーツ学校講演会講師（ストレス担当）
12	2005.04.00	～	現在	埼玉県比企郡市バレーボール連盟副会長
13	2005.04.00	～	現在	全国大学体育連合FD推進委員会委員
14	2006.11.00	～	2006.11.00	2006 バレーボール世界選手権男子さいたま大会モッパル・ボールレトリバー副主任
15	2007.03.04	～	2007.03.05	バレーボール学会第12回総会・大会実行委員会委員長
16	2007.11.00	～	2007.11.00	FIVBワールドカップ2007男子さいたま大会スタッフ
17	2008.02.01	～	2008.02.01	ジュニアスポーツ育成事業「公開講座」（群馬県太田市）講師（スポーツパフォーマンスと緊張）
18	2008.03.00	～	現在	宇宙航空環境医学会会員
19	2008.03.06	～	2008.03.06	埼玉県東松山市「きらめき市民大学」講師（ストレス）
20	2008.04.00			関東大学バレーボール連盟科学研究委員会副委員長
21	2008.04.00	～	現在	大学ライフスポーツ教育学会理事、マリンスポーツ教育研究会会長
22	2008.06.00	～	現在	日本高気圧環境・潜水医学会会員
23	2008.08.00	～	現在	全国大学体育連合大学体育評価審査委員会委員
24	2009.01.00	～	2009.01.00	ジュニアスポーツ育成事業「公開講座」（群馬県太田市）講師（スポーツとストレス）

25 2009.03.00 ~ 2009.03.00

埼玉県東松山市「きらめき市民大学」講師（ストレス）

(表 25)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	田中 博史		
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等		
1)	春季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	日本大学文理学部体育館他		2004.05.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第5位		
2)	東日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2004.06.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
3)	秋季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	日本大学文理学部体育館他		2004.10.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第4位		
4)	全日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2004.12.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
5)	春季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	日本大学文理学部体育館他		2005.05.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第3位		
6)	東日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2005.06.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
7)	秋季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	国士舘大学体育館他		2005.10.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第5位		
8)	全日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2005.12.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
9)	春季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	日本大学文理学部体育館他		2006.05.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第3位		
10)	東日本大学バレーボール選手権大会	北海道浅井学園大学体育館他		2006.06.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
11)	秋季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	日本大学文理学部体育館他		2006.10.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第4位		
12)	全日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2006.12.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
13)	春季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	国士舘大学体育館他		2007.05.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第6位		
14)	東日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2007.06.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
15)	秋季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	大東文化大学体育館他		2007.10.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第5位		
16)	全日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2007.12.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
17)	春季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	大東文化大学体育館他		2008.05.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第4位		
18)	東日本大学バレーボール選手権大会	駒沢体育館他		2008.06.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		
19)	秋季関東大学女子2部バレーボールリーグ戦	大東文化大学体育館他		2008.10.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として参加 第2位		
20)	関東大学女子1部リーグとの入れ替え戦出場	専修大学大学体育館		2008.10.00			
21)	全日本大学バレーボール選手権大会	東京体育館他		2008.12.00	大東文化大学女子バレーボール部監督として出場		

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	中間 和男	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 保健体育ホームページの公開		1998.10.00	平成 10 年 10 月～現在、保健体育部会では、体育関連の情報をホームページに公開している。その中で担当科目である体育実技 C、D の野外実習科目「水泳 (海)」のコンテンツ作成に関わっている。				
2) 授業評価		2007.00.00	平成 19～21 年度、健康スポーツ科学 B においてパワーポイントを使用し授業を展開している。本学及び東洋大学工学部の授業評価も高い評価を得ている。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 総合体育ガイドブック		2007.04.01	平成 19 年 4 月 1 日				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 スクーバダイビング中の小型医療機器を用いた測定を可能にする防水ケース開発に関する研究	共著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 (社会科学)	スクーバダイビング中に各種小型医療機器を用いて生体情報を測定可能にするために陸上で使用されている医療機器を水中でドライ環境に保つ防水ケースを開発する目的のための研究報告である。			
2 本学の必修保健体育科目への学生ニーズについて	共著	2005.03.00	大東文化大学紀要第 43 号 (社会科学)	保健体育独自の科目「保健体育」のニーズ調査と肥満度調査の結果報告である。			
3 「大学体育自己点検・評価」報告書に見る本学保健体育教育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について	共著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 (社会科学)	本学の保健体育教育の実態を明らかにしあわせてスポーツ・健康科学部の開設により今後いかなる改善が期待されるかを考察する。			
その他							

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1971.04.00	～	現在	全日本剣道連盟
2	1977.04.01	～	現在	日本体育学会会員
3	1986.05.00	～	現在	全日本剣道連盟 高段位・称号中央研修会
4	1998.05.00	～	現在	特定非営利活動法人 国際社会人剣道クラブ
5			現在	日本武道学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	中村 正雄	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学文学部教育学科キャンプ実習	1989.00.00	(1989年～2006年。) キャンプディレクターとして、キャンプの企画・運営その他を取りまとめ、実習全般を統括した。89-94年は4泊5日、95年3泊4日、96年は4泊5日、97-00年は3泊4日、01-03年は5泊6日、04-06は4泊5日の実習を担当した。					
2) 妙高スノーキャンプ	2001.00.00	(2001年～2007年。) 3泊4日の実習においてプログラムのひとつであるXCスキー、イグルーづくり等の雪上活動を指導した。					
3) 学生による授業評価と大学教育 大東文化大学授業評価報告書Ⅱ (授業科目別データ)	2004.00.00	2004年度。項目「授業への満足度」: 授業『体育特別研究3』平均4.9 (5段階評価) 授業『体育特別研究4』平均4.9 (5段階評価) 授業『体育特別研究5』平均4.9 (5段階評価)					
4) 宇都宮ビジネス電子専門学校 Medic First Aid 小児コース開催	2004.10.03	救急法指導					
5) 東横学園女子短期大学 Medic First Aid Basic コース開催	2004.12.23	救急法指導					
6) 東横学園女子短期大学 Medic First Aid Basic コース開催	2005.01.16	救急法指導					
7) 東横学園女子短期大学インターンシップ	2005.02.00	企業実習指導					
8) 東横学園女子短期大学 Medic First Aid Basic コース開催	2005.06.04	救急法指導					
9) 東横学園女子短期大学 Medic First Aid Basic コース開催	2005.06.12	救急法指導					
10) 大東文化大学 Medic First Aid Basic コース開催	2005.07.21	救急法指導					
11) 大東文化大学 Medic First Aid 小児コース開催	2005.07.26	救急法指導					
12) 学生による授業評価と大学教育 大東文化大学授業評価報告書Ⅱ (授業科目別データ)	2006.00.00	2006年度。項目「授業への満足度」: 授業『レクリエーション概論』平均3.7 (5段階評価) 授業『スケート』平均3.8 (5段階評価)					
13) 東横学園女子短期大学 Medic First Aid Basic コース開催	2006.12.16	救急法指導					
14) 学生による授業評価と大学教育 大東文化大学授業評価報告書Ⅱ (授業科目別データ)	2007.00.00	2007年度。項目「授業への満足度」: 授業『レクリエーション概論』平均4.2 (5段階評価) 授業『総合体育B』平均4.4 (5段階評価)					
15) 学生による授業評価と大学教育 大東文化大学授業評価報告書Ⅱ (授業科目別データ)	2008.00.00	2008年度。項目「授業への満足度」: 授業『安全教育及び救急処置』平均4.7 (5段階評価) 授業『総合体育B』平均4.9 (5段階評価)					
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 安全なキャンプのために Part5-水辺の活動の安全- (再掲)	2004.08.31	一般キャンパー向けの安全冊子					
2) 安全なキャンプのために Part6-野山の活動の安全- (再掲)	2005.07.01	一般キャンパー向けの安全冊子					
3) 安全なキャンプのために Part7-事故事例に学ぶ- (再掲)	2006.07.24	一般キャンパー向けの安全冊子					
4) 安全なキャンプのために Part8-楽しく学ぶキャンプの安全- (再掲)	2007.07.15	一般キャンパー向けの安全冊子					

5) 安全なキャンプのために Part9 ー役に立つファーストエイドー (再掲)	2008.07.20	一般キャンパー向けの安全冊子		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
1) NPO法人静岡県キャンプカウンセラー協会講演会「自然の側からみたキャンプ」	2005.05.15	講師		
2) (株) トップス指導者講習会「キャンプで使える救急法」	2005.06.05	講師		
3) 2005 年度関東ブロックキャンプ・ディレクター・ミーティング「キャンプディレクターに求められるものーキャンプにおける安全対策ー」	2005.12.18	講師		
4) (社) 日本キャンプ協会・(財) 関西テレビ青少年育成事業団共催「野外活動指導者のためのリスクマネジメントセミナー」	2006.01.28	講師 2006年1月28日～29日。		
5) 東横学園女子短期大学リーダー研修会	2006.02.04	講師		
6) (株) トップス指導者講習会「キャンプで使える救急法」	2006.06.04	講師		
7) (社) 中央青少年団体連絡協議会「少年少女自然体験交流事業」リーダー事前研修会	2006.06.20	講師		
8) 文部科学省 平成 18 年度野外活動指導者研修会	2006.07.14	講師		
9) 2007 年度 (社) 日本キャンプ協会キャンプディレクター 2 級養成講習会	2007.09.22	講師 2007年9月22日～24日。		
10) (社) 日本キャンプ協会リスクマネジメントセミナー	2007.12.01	講師 2007年12月1日～2日。		
11) 静岡県立朝霧野外活動センター主催事業 野外教育指導者養成講習会	2008.02.11	講師 2008年2月11日。		
12) (社) 日本キャンプ協会主催 「野外活動指導者のためのリスクマネジメントセミナー」	2008.07.05	講師 2008年7月5日～6日。		
13) 文部科学省委託事業青少年体験活動総合プラン (社) 日本キャンプ協会主催 「2008 年度自然体験活動指導者養成講習会」	2009.01.10	講師 2008年1月10日～12日。		
14) 千葉市少年自然の家主催事業 「リスクマネジメント講座」	2009.02.28	講師 2009年2月28日。		
15) 静岡県立朝霧野外活動センター主催事業 野外教育指導者養成講習会	2009.03.06	講師 2009年3月6日～8日。		
4 その他教育活動上特記すべき事項				
1) (社) 日本キャンプ協会安全管理委員会「雪上キャンプでの敷物の断熱効果実験」	2005.01.20	2005年1月20日～21日。上記内容の調査研究		
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)
著書				
1 安全なキャンプのために Part5ー水辺の活動の安全ー	共著	2004.08.31	(社) 日本キャンプ協会	海、川、湖、池などでの水辺活動について、水泳・水遊び、魚釣り・魚とり遊び、磯遊び・磯観察、カヌー・ヨットなどの船遊びの安全、救助法、ライフジャケット、着衣泳等について解説した。共著者:野間口英敏、畠中彬、大橋光雄、佐藤初雄、高見彰、長井せつ子、中村正雄、藤井雅子、眞木潔、吉田大郎。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

2	安全なキャンプのために Part6ー野山の活動の安全ー	共著	2005.07.01	(社) 日本キャンプ協会	野山の活動の安全について、計画・準備のポイント、服装・用具、安全でバテない歩き方、道迷い、天候の急変、避雷、危険な動植物、応急処置、等々について解説した。共著者：高見彰、畠中彬、野間口英敏、大橋光雄、佐藤初雄、長井せつ子、中村正雄、吉田大郎、藤井雅子。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
3	安全なキャンプのために Part7ー事故事例に学ぶー	共著	2006.07.24	(社) 日本キャンプ協会	有害動物、水の事故、落雷、熱中症、道迷い、カセットコンロによる事故、着火剤による事故、食中毒などの事例を紹介し、安全についての対策や予防について解説した。共著者：高見彰、畠中彬、大橋光雄、佐藤初雄、長井せつ子、中村正雄、野間口英敏、吉田大郎、吉野宏美。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
4	キャンプのリスクマネジメントエクササイズー実施の手引きー	共著	2007.03.01		キャンプにおける安全の問題について、指導者の「事故予防対策」「事故発生時の対応」、参加者の「危険回避」の要点を楽しく学ぶことをねらいとした。共著者：高見彰、畠中彬、大橋光雄、佐藤初雄、長井せつ子、中村正雄、野間口英敏、吉田大郎、吉野宏美。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
5	安全なキャンプのために Part8ー楽しく学ぶキャンプの安全ー	共著	2007.07.15		キャンプに参加する子どもや指導者が楽しみながらキャンプの安全の問題を考え、安全に対する意識や知識を高めることができる手法を紹介した。共著者：高見彰、畠中彬、大橋光雄、佐藤初雄、長井せつ子、中村正雄、野間口英敏、吉田大郎、吉野宏美。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
6	安全なキャンプのために Part9ー役に立つファーストエイドー	共著	2008.07.20		キャンプは非日常的な活動であるために、事故や病気の発生率が高くなる。ファーストエイドをキャンプの安全教育プログラムのひとつととらえ、キャンプで役立つファーストエイドについて解説した。共著者：高見彰、畠中彬、大橋光雄、佐藤初雄、長井せつ子、中村正雄、野間口英敏、吉田大郎、吉野宏美。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
論文					
1	「大学体育自己点検・評価報告書」に見る本学保健体育教育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について	共著	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号 <社会科学>	(兵頭圭介、勝又宏、川本竜史、只隈伸也、田中博史、中間和男、中村正雄、宮城修) 本稿では 2005 年 3 月に社団法人全国大学体育連合に「2004 年度大学体育 F D (Faculty Development) 推進校」として表彰を受けた本学の保健体育教育の実態を明らかにするとともに、改善に関する今後の方向性について考察した。
2	リスクマネジメントエクササイズ	単著	2007.08.01	(社) 日本キャンプ協会「キャンプ」118 号	キャンプや野外活動における事故防止や安全対策、危険回避に関わる問題について、楽しみながら学ぶ一つの手法としてリスクマネジメントエクササイズを解説。リスクマネジメントエクササイズを通してスタッフが安全に活動を遂行できるという効力感を持つことはキャンプや野外活動の効果を高めることにつながるとした。P.6。
3	子どもたちといっしょに学ぶキャンプの安全	単著	2008.06.01	(社) 日本キャンプ協会「キャンピング」123 号	キャンプリーダーが子どもたちといっしょに楽しみながらキャンプの安全を学ぶ活動例として「安全スタンツ」「安全クイズ」「安全標語を考えよう」「安全マップ」を紹介した。子どもたちが自分で自分の安全を確保しながら楽しいキャンプができたという効力感を持つことで、自信を高めることにつながるとした。p.6-7。
その他					
1	「野外教育プログラム」トレーニングの実践報告 (ポスター発表)	共同	2006.01.15	日本フットボール学会 3rd Congress	(高瀬宏樹、中村正雄、福富信也) 近年サッカーを中心に野外教育プログラムをトレーニングに取り入れる動きが広まっている。Jリーグの各チームでも 1998 年より取り組みが始まっているが、ここではサンフレッチェ広島の過去の取り組みについて、その内容と経緯、効果について報告した。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1985.04.00	～	現在	日本体育学会会員	
2	1988.04.00	～	現在	日本レクリエーション学会 (現日本レジャー・レクリエーション学会) 会員	

3	1989.11.00	～	現在	大学スケート研究会会員（平成元年 11 月～平成 5 年 10 月理事、平成 5 年 11 月～平成 7 年 10 月、平成 13 年 11 月～現在常任理事、平成 7 年 11 月～平成 13 年 10 月理事長、平成 13 年 11 月～現在常任理事）
4	1990.05.00	～	現在	日本環境教育学会会員
5	1991.04.00	～	現在	（社）日本キャンプ協会専門委員
6	1997.10.00	～	現在	日本野外教育学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	宮城 修	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学における学生による授業アンケートでの高評価	2008.02.00	「スポーツ生理学B」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.2(満点5)という学生からの高い評価を得た。					
2) 大東文化大学における学生による授業アンケートでの高評価	2008.02.00	「スポーツ測定法」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.4(満点5)という学生からの高い評価を得た。					
3) 大東文化大学における学生による授業アンケートでの高評価	2009.02.00	「スポーツ生理学B」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.4(満点5)という学生からの高い評価を得た。					
4) 大東文化大学における学生による授業アンケートでの高評価	2009.02.00	「スポーツ測定法」の授業評価アンケート結果より、「授業への満足度」の項目で4.5(満点5)という学生からの高い評価を得た。					
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) オープンカレッジ(公開講座)における学部企画講座の講師	2007.06.00	地域連携センター主催のオープンカレッジ(公開講座)において、スポーツ・健康科学部企画講座「ウォーキングを知的に楽しむ」で「ウォーキングのための体力診断」を担当					
2) オープンカレッジ(公開講座)における学部企画講座の講師	2008.05.00	地域連携センター主催のオープンカレッジ(公開講座)において、スポーツ・健康科学部企画講座「健康づくりエクササイズの実践」で「健康・体力診断(1)と(2)」を担当					
3) オープンカレッジ(公開講座)における学部企画講座の講師	2009.05.00	地域連携センター主催のオープンカレッジ(公開講座)において、スポーツ・健康科学部企画講座「健康づくりエクササイズの実践」で「健康・体力チェック」を担当					
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) スポーツ・健康科学会学会誌編集委員としての活動	2006.04.00	大東文化大学のスポーツ・健康科学会学会誌編集委員として、学会誌1号を発刊した。					
2) Jリーグの全クラブ配布用の「フィジカル測定実施概要」に関するDVDとマニュアルを作成	2007.02.00	「Jリーグに所属する育成年代選手の体力的特徴とデータベースの構築(31クラブ対象)」を進めていくうえで「フィジカル測定実施概要」に関するDVDとマニュアルを作成した。					
3) 愛知県警捜査1課より「相撲のぶつかり稽古が身体に及ぼす影響」について捜査協力依頼	2007.12.00	愛知県警捜査1課より「相撲のぶつかり稽古が身体に及ぼす影響」について捜査協力依頼があり、実際に力士8名を対象に、相撲のぶつかり稽古が身体に及ぼす影響を心拍数、体温および血液と尿の諸項目の変化から明らかにして報告書にまとめた。					
4) Jリーグが主催したJリーグ・アカデミー育成センター長講習会で講師	2007.12.00	Jリーグが主催したJリーグ・アカデミー育成センター長講習会で「2007年度の育成年代におけるサッカー選手の体力に関する特徴」で講師を担当					
5) Jリーグが主催したフィジカルコンディショニング担当者の講習会で講師	2007.12.00	Jリーグが主催したフィジカルコンディショニング担当者の講習会で講師を担当					
6) 紀要編集委員としての活動	2008.04.00	大東文化大学の紀要編集委員として、学内における紀要の充実に努めている。					
7) 男子サッカー部課外スポーツ指導への取り組み	2008.04.00	大東文化大学の男子サッカー部コーチとして、課外活動における競技教育に取り組んでいる。					
8) スポーツ・健康科学会学会誌編集委員としての活動	2008.04.00	大東文化大学のスポーツ・健康科学会学会誌編集委員として、学会誌2号を発刊した。					

9) Jリーグが主催したJリーグ・アカデミー育成センター長講習会で講師	2008.08.00	Jリーグが主催したJリーグ・アカデミー育成センター長講習会で「4年間にわたるJリーグに所属する育成年代選手の体力的特徴とデータベースの構築」で講師を担当
10) 男子サッカー部課外スポーツ指導への取り組み	2009.01.00	大東文化大学の男子サッカー部監督として、課外活動における競技教育に取り組んでいる。
11) 入試委員としての活動	2009.04.00	大東文化大学の入試委員として、学内における入試の充実に努めている。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
1 サッカー選手の体力	単著	2006.06.00	バイオメカニクス研究	バイオメカニクス研究の「サッカー」という特集号で、「サッカー選手の体力」について担当した。本稿では、体力測定と結果の活用方法、日本人選手と外国人選手の比較、そして育成年代からの体力強化へ向けたJリーグの取り組みについて解説した。Vol.10 pp.132-137.宮城修
2 サッカーのインサイドキックにおける speed-accuracy trade-off のメカニズム	共著	2006.12.00	バイオメカニクス研究	サッカーのインサイドキックにおける speed-accuracy trade-off のメカニズムについて、サッカー経験者と非経験者との比較から運動学的ならびに運動力学的に明らかにすることを目的とした。結果については、スキルの低い非経験者はスピードを重視することによって正確性が著しく低下したのに対して、スキルの高い経験者はボールインパクトが巧みであるため、スピードを重視しても高い水準で正確性を維持することが可能であった。Vol.10 pp.235-244.川本竜史、宮城修、大橋二郎、深代千之(共同発表)
3 Kinetic comparison of a side-foot soccer kick between experienced and inexperienced players	共著	2007.05.00	Sports Biomechanics. Vol.6, No.2 (PP.187-198)	3次元運動力学解析を通じて、サッカーのインサイドキックにおけるキックスピード向上の要点を解明した。力強いインサイドキックを遂行する上では、キック前半局面での股関節屈曲トルクの発揮がキーポイントであることを明らかにした。筆頭論文(R. Kawamoto, O. Miyagi, J. Ohashi, S. Fukashiro)(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
その他				
1 試合中の移動距離とスピードからみたポジション間の比較	共著	2004.09.00	日本体育学会第55回大会(信州大学)	ディフェンダー(以下、DF)選手を対象にして、Jリーグ公式戦における移動距離とスピードの変化を明らかにして、DF選手の動きの特徴を明らかにするとともに、これまでに報告してきたFW選手およびMF選手との比較を行うことにより、各ポジションの特徴について詳細に検討した。その結果、1試合の移動距離については各ポジションの中で最も低く、移動スピードについては試合中に $8m \cdot sec^{-1}$ 以上の速いスピードでの移動頻度が多くみられ、FW選手とかなり似かよった傾向がみられた。宮城修、大橋二郎、瀧剛志(筆頭発表者)
2 育成年代の発育発達に関する調査研究	共著	2005.03.00	第2回フットボール学会(東京工業大学)	Jリーグ・アカデミーに所属する育成年代の選手における形態面と機能面の年代別特徴を明らかにするとともに、各測定項目間の関係について検討することを目的とした。形態面と機能面の年代別特徴については、各項目の横断的变化をみていくと、形態面では身長、体重および足長が年齢とともに大きくなっていき、その変化量をみると11歳から12歳にかけて特に大きくなっていく傾向がみられた。機能面では各項目とも、年齢とともに優れた結果になっていくものの、変化量については各項目によってかなり異なる傾向を示した。宮城修、川本竜史、西川誠太、田村充、入江知子、山下則之(筆頭発表者)

3	育成年代の誕生日に関する調査研究	共著	2005.03.00	第2回フットボール学会 (東京工業大学)	個人の発育段階を誕生日に着目し、収集した形態面と機能面のデータと誕生日との関係について検討することを目的とした。育成年代サッカー選手の形態面および機能面と誕生日との関係を検討した結果、形態面では身長に、機能面では走速度とジャンプ力に誕生日別で有意な差が認められた。西川誠太、宮城 修、川本竜史、田村 充、入江知子、山下則之(共同発表)
4	Jリーグ・アカデミー体力測定プロジェクトにおけるフィードバック事例報告	共著	2005.03.00	第2回フットボール学会 (東京工業大学)	「日本型育成システムの確立」を目指して創設されたJリーグ・アカデミーでは、2004年度よりフィジカルプロジェクトを開始した。このプロジェクトの一環として実施したフィジカル測定において、育成年代のサッカー選手における体力基準表の作成と測定結果のフィードバック事例を中心に報告した。川本竜史、宮城 修、西川誠太、田村 充、入江知子、山下則之(共同発表)
5		共著	2005.11.00	日本体育学会第56回大会 (筑波大学)	日本サッカーの重要課題のひとつである体力強化に向けてのプロジェクトを立ち上げ、育成年代のうちに選手の発育発達を考慮したトレーニングが展開していけるような環境を整備していくための調査研究を開始した。その調査内容は、Jリーグ下部組織の11クラブの6歳から12歳までの選手1090名を対象に、形態面と機能面に関する9項目についての縦断的調査であった。これらの測定結果から、形態面と機能面の年代別特徴と基準表、各測定項目間の関係およびフィードバック事例について報告した。宮城 修、川本竜史、大橋二郎、西川誠太(筆頭発表)
6	育成年代のサッカー選手における体格、スプリント、酸素摂取量および等速性脚筋力の5年間にわたる縦断的变化	共著	2006.01.00	第3回フットボール学会 (大東文化大学)	我国サッカーの重要課題のひとつにあげられている体力強化については、一朝一夕の取り組みでは効果が得られないため、長期的視野にたち選手の発育面を考慮して、いかにしてトレーナビリティの高い時期に適切なトレーニングを行っていくかである。この研究では、Jリーグクラブの下部組織に所属するサッカー選手(測定開始時13歳)を対象にして、クラブで行われているトレーニングが選手の体格、スプリント、酸素摂取量および等速性脚筋力にどのような変化をもたらしているかを5年間にわたる縦断的变化について報告した。宮城 修、山下則之、北川 薫(筆頭発表者)
7	The effect of leg cooling at half time breaks on performance of soccer-simulated exercise in the hot enviroment	共著	2007.01.00	Fifth World Congress of Science and Football (Technical University of Lisbon, Portugal)	暑熱環境化でサッカーをシミュレートしたゲームにおいて、ハーフタイムに脚部を冷やすことが、後半にシュートやパスの技術面および跳躍高やスプリントの体力面に与える効果を前半との比較から検討した。その結果、暑熱環境化のゲーム中ではハーフタイムに脚部を冷やした群が冷やさなかった群に比較して技術面や体力面に良い効果が認められた。Mikinobu Yasumatsu, Osamu Miyagi, Jiro Ohashi, Haruhiko Togari, Seidai Nishikawa, Hiroshi Hasegawa, Satoshi Ishizaki, Tamae Yoda(共同研究者、実験とデータ整理を担当)
8	Jリーグの全クラブ配布用「フィジカル測定実施概要」に関するDVDとマニュアルを作成	単著	2007.02.00	Jリーグ映像	「Jリーグに所属する育成年代選手の体力的特徴とデータベースの構築(31クラブ対象)」を進めていくうえで「フィジカル測定実施概要」に関するDVDとマニュアルを作成した。
9	Jリーグ・アカデミーフィジカルプロジェクトの取り組み	単著	2007.07.00	サッカー批評 第35号 双葉社発行。pp.86-89	サッカー批評の「サッカーの日本化を止めるな」という特集で、「Jリーグ・アカデミーフィジカルプロジェクトの取り組み」について担当した。本稿では、2004年度から始まったJリーグのフィジカルプロジェクトが実施している体力の縦断的測定に関する活動内容やこの4年間で得られたデータから明らかになってきた点や今後の課題について解説した。
10	サッカーに必要な体力と間欠性持久力のトレーニング	単著	2007.11.00	コーチング・クリニック 第220号 ベースボール・マガジン社発行。pp.16-19	コーチング・クリニックの「スピード持久性」という特集で、「サッカーに必要な体力と間欠性持久力のトレーニングJ」について担当した。本稿では、サッカーに必要な体力とエネルギー供給機構、体力測定の評価とグルーピング、測定結果のフィードバック、およびトレーニング内容について解説した。

11	ボールを使ったフィットネストレーニング～ジュニアユース編～	単著	2008.01.00	ストライカーデラックス 第4巻 学習研究社発行. pp.120	ストライカー デラックスの「Jリーグアカデミーメソッド」という特集で、「ボールを使ったフィットネストレーニング～持久力編～」について担当した。本稿では、中学生年代のサッカー選手を対象とした持久力トレーニングを呼吸器系と循環器系に分けて、各々のトレーニング内容を解説した。
12	サッカーのインサイドキック動作の左右対称性	共著	2008.03.00	第5回日本フットボール学会 (大阪市立大学)	サッカーのインサイドキック動作の左右対称性を運動学的に検討した結果について報告した。サッカーの熟練度に関わらず、利き脚と非利き足の間での下肢関節での力発揮様式がきわめて類似することを明らかにした。川本竜史、宮城修、大橋二郎 (共同研究者、実験とデータ整理を担当)
13	Kinetic similarity in side-foot soccer kicking with the preferred and non-preferred leg	共著	2008.05.00	The First World Conference on SCIENCE & SOCCER (Liverpool John Moores University of United Kingdom)	男子サッカー熟練者7名と非熟練者を対象として、8m離れた標的に向けてインサイドによるプレスキックを左右で行わせ、キック動作の左右対称性について検討した。その結果、サッカーのインサイドキックにともなう下肢関節でのトルク発揮パターンは、熟練度を問わず利き脚と非利き脚でよく類似することから、キックのトレーニングにより両側性転移が生じると考えられた。Ryuji Kawamoto, Osamu Miyagi, Jiro Ohashi (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
14	サッカーのフェイント動作に関するバイオメカニクスの研究	共著	2008.08.00	第20回日本バイオメカニクス学会大会 (仙台大学)	サッカーのシザースフェイントの動作メカニズムを身体重心の操作戦略を中心として明らかにすることを目的とした。その結果、素早いシザースフェイントを実現するためには、進行方向以外への身体重心変位のロスを小さくすることがきわめて重要であることが明らかとなった。川本竜史、宮城修、大橋二郎 (共同研究者、実験とデータ整理を担当)
15	ボールを使ったフィットネストレーニング～ジュニアユース編～	単著	2008.09.00	ストライカーデラックス 第5巻学習研究社発行. pp.121	ストライカーデラックスの「Jリーグ・アカデミーメソッド」という特集で、「ウォーミングアップとクーリングダウン」について担当した。本稿では小・中学生年代のサッカー選手を対象とした100%の力を発揮するためのウォーミングアップとクーリングダウンの重要性について解説した。
16	Jリーグ・アカデミーフィジカル測定プロジェクトでの取り組み	単著	2008.12.00	第21回日本トレーニング科学学会大会 (大東文化大学)	第21回日本トレーニング科学学会大会シンポジウム シンポジスト大東文化大学、テーマ:「子どもの体力データベースはどこまで進み、何が分かってきたか?」
17	ジュニアユースからユースへ昇格する際の選手における体力的特徴	共著	2009.02.00	第6回日本フットボール学会 (武蔵大学)	本研究では、Jリーグ・アカデミーで実施している体力測定の結果の中からは、ジュニアユースの中学3年生に着目して、ジュニアユースからユースへの昇格者と非昇格者の形態面と機能面の比較を行って両者の差異を明らかにするとともに、この年代の選手における体力的特徴について検討することを目的とした。ジュニアユースからユースに昇格する際には、選手の形態面を含め機能面でもスピード、パワーおよび持久力といった体力要素が関与していることが明らかとなった。

III 学会等および社会における主な活動

1	1991.04.00	～	現在	日本バイオメカニクス学会会員
2	1991.04.00	～	現在	日本体育学会会員
3	1991.04.00	～	現在	日本体力医学会会員
4	1993.04.00	～	現在	日本運動生理学会会員
5	1998.05.00	～	現在	トレーニング科学研究会会員
6	1998.05.00	～	現在	日本スポーツ方法学会会員
7	2003.04.00	～	現在	Jリーグ Jリーグ・アカデミー アドバイザリースタッフ
8	2003.05.00	～	現在	日本体育測定評価学会会員 (平成15年5月～現在 編集委員)

9	2003.09.00	～	現在	日本フットボール学会会員（平成 15 年 9 月～現在 編集委員）
10	2003.09.00	～	現在	日本フットボール学会理事
11	2004.04.00	～	現在	Jリーグ Jリーグ 育成年代の発育発達に関する調査研究プロジェクトスタッフ
12	2004.04.00	～	現在	日本発育発達学会会員
13	2006.01.00			日本フットボール学会日本フットボール学会 3rd Congress（会場：大東文化大学）実行委員長
14	2006.12.00			日本フットボール学会日本フットボール学会 4th Congress（会場：早稲田大学）実行委員
15	2007.01.00			日本フットボール学会日本フットボール学会庶務委員長
16	2009.01.00			日本フットボール学会日本フットボール学会広報委員長

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	准教授	氏名	森 浩寿	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 教育方法の実践例 新聞等		現在		映像や新聞の切り抜き等を用いて、授業への導入や関心を高める工夫、テーマ・問題等をイメージしやすい環境作りに努めている			
2) 教育方法の実践例 ビデオ		現在		地域スポーツの実情やスポーツ政策、健康政策の実践などに関するビデオを教材として活用している。実技の授業では、フォームの確認のためにビデオを活用している。			
3) 教育方法の実践例 コンピューター (プロジェクター)		現在		プレゼンテーション用ソフトを使い、単に書写するだけではなく、視覚に訴えるような工夫を行っている。			
4) 日本大学国際関係学部		2000.04.00		(2000年4月～2006年3月) これまで、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、卓球、テニス、ソフトボール、サッカーなどを教材に、特に運動嫌いの学生の指導に重点をおいている。			
5) 日本大学法学部		2001.04.00		(2001年4月～2006年3月) 体気づきをテーマに、体力テストや機能測定などの評価を通じて、積極的に運動参加する意識改革を心掛けている。			
6) 東京成徳大学人文学部		2001.04.00		(2001年4月～2006年3月) ゴルフ担当だが、初心者が多いため、遊びの要素を取り入れたり、上達をビデオで確認しながらすすめている。			
7) 電気通信大学		2004.04.00		(2004年4月～2006年3月) ソフトボール担当で、非利き手での投球や打撃の練習を取り入れ、身体全体の運動になるよう注意している。			
8) 国士舘大学体育学部		2004.04.00		(2004年4月～2009年3月) スポーツ法学の授業では、新聞記事などを利用して実際におきている事例を題材に、何が法的な問題となるか、学生の考えなどとやりとりをしながらすすめている。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) テキストブック介護予防運動指導士		2007.02.00		ミネルヴァ書房 共著者：琉子友男・勝又宏・大竹一史・川村隆・亀井明子・只隈伸也・森浩寿。介護予防運動指導士ライセンス取得のためのテキスト。第10章「リスクマネジメント」(pp.121-128)執筆。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) ジュニアスポーツ指導のためのリスクマネジメント		2008.01.25		群馬県太田市ジュニアスポーツ育成事業「公開講座」 公開講座の講師			
2) ジュニアスポーツ指導のためのリスクマネジメント		2009.02.13		群馬県太田市ジュニアスポーツ育成事業 公開講座の講師			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							

1	スポーツ六法	共編	2005.03.00	信山社	スポーツに関する法律・条例・条約・国際合意文書、通知・通達、団体規約などを編纂したもの。第8章「スポーツとビジネス」の解説を執筆。
2	導入対話によるスポーツ法学	共著	2005.09.00	不磨書房	共著者：井上洋一・小笠原正・川井圭司・齋藤健司・諏訪伸夫・濱野吉生・森浩寿。5章「スポーツ団体の性格」、8章「スポーツと国籍」、9章「オリンピック憲章」、11章「スポーツ・ビジネス」、16章「企業スポーツの法律問題」、19章「スポーツにおける紛争解決」23章「スポーツ事故と補償」執筆。
3	スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見	共著	2006.03.00	笹川スポーツ財団	共著者：海老原修・北村尚浩・長ヶ原誠・藤田紀昭・間野義之・天野和彦・坂本譲次・佐藤由夫・澤井和彦・野村一路・古澤光一・横田匡俊・川西正志・小倉乙春・富山浩三・古屋武範・松尾哲矢・松永敬子・水上博司・山口泰雄・岡達生・永松昌樹・原田宗彦・佐野毅彦・重野弘三郎・田中茂・樋口太・藤本淳也・武藤泰明・仲伏達也・原田尚幸・仲澤眞・荒井宏和・海老塚修・勝田隆・白井克佳・和久貴洋・工藤康宏・高峰修・野川春夫・高橋義雄・中村好男・水戸重之・森浩寿・平川澄子。第10章「スポーツの法的側面」分担執筆。「競技者のスポーツ権」「団体と法」「プロ野球選手会の法的性格」「スポーツの安全管理」「スポーツに関する紛争の解決」の項目を執筆。
4	スポーツ六法 2006	共編	2006.04.00	信山社	スポーツに関する法律・条例・条約・国際合意文書、通知・通達、各種団体規約類などを編纂したもの。第8章「スポーツとビジネス」の解説および第14章資料編「(2)その他のスポーツ」の「ゴルフクラブ外国人入会資格制限事件」を執筆。
5	体力とはなにかー運動処方その前に	共著	2007.03.00	N A P	共著者：長澤純一・松井健・吉田博幸・森浩寿・石井隆憲・村岡功・芳賀脩光・太田あや子・富田寿人・鈴木桂治・梅林薫・杉浦雄策・鈴木大地・土屋正光・大森一伸・山本正嘉・野口いづみ・船木上総・加藤和彦・澤田亨・大平充宣・鈴木克彦・稲山貴代・駒林隆夫・野坂俊弥・大野秀樹・木崎節子・佐藤祐造・井澤鉄也・大澤功・狩野豊・藤瀬武彦・若山章信・杉山康司・竹島伸生。長澤純一（電気通信大学）編集。初学者向けの体力研究書。第1章（4）「健康権と体力」（pp.28-33）執筆。体力と健康は密接に繋がりがあることから、健康権についての解説と、体力を健康権と結びつけて概説した。
6	導入対話によるスポーツ法学（第2版）	共著	2007.04.00	不磨書房	共著者：井上洋一・小笠原正・川井圭司・齋藤健司・諏訪伸夫・濱野吉生・森浩寿。5章「スポーツ団体の性格」、8章「スポーツと国籍」、9章「オリンピック憲章」、11章「スポーツ・ビジネス」、16章「企業スポーツの法律問題」、19章「スポーツにおける紛争解決」、23章「スポーツ事故と補償」を第1版に加筆修正。
7	スポーツ六法 2007	共編	2007.04.00	信山社	2006年版のアップデート。「ひとくちコラム」執筆。
8	スポーツ政策の現代的課題	共著	2008.04.20	日本評論社	共著者：諏訪伸夫・新井博・成瀬和弥・齋藤健司・松畑尚子・新井喜代加・井上洋一・出雲輝彦・伊藤リナ・谷藤千香・森浩寿・里見悦郎・朱成鐸・石田慈洪・吉田勝光・小谷寛二・水沢利栄。筆者は、第4章第3節「オーストラリアのスポーツ政策」（173-187頁）担当。A5版、総頁303頁。
9	スポーツ六法 2008	共編	2008.04.20	信山社	編集代表：小笠原正・塩野宏・松尾浩也。編集委員他9名。2007年版のアップデート。
10	解説学校安全基準	共編	2008.05.20	不磨書房	編者：喜多明人・橋本恭宏・船木正文・森浩寿。執筆者他8名。筆者は、特に第2章第1項担当で、pp.60-70を執筆。A5版、総頁268頁。
11	スポーツビジネス叢書・スポーツマネジメント	共著	2008.11.10	大修館書店	共著者：原田宗彦・小笠原悦子・作野誠一・澤井和彦・富山浩三・原田尚幸・森浩寿。筆者は、第5章「スポーツマネジメントに必要な法知識」（94-122頁）担当。B6版、総頁257頁。
	論文				

1	学校体育・スポーツ事故防止における安全教育。安全指導の必要性	単著	2005.12.00	季刊教育法第 147 号、pp.70-74、エイデル研究所	有効な体育・スポーツ事故防止策の提示に向けた基礎的研究。スポーツ指導における危険周知の重要性について、判例を用いながら検討。
2	体育授業・運動部活動と安全指針	単著	2006.12.00	季刊教育法、第 151 号、pp.14-19、エイデル研究所	日本教育法学会学校事故問題研究特別委員会のプロジェクト研究「学校安全基準」研究第 3 弾の安全指針研究に関して、同年 6 月の中間報告に加筆・修正・解説を加えた。
3	スポーツ・マネジメントの法と倫理	単著	2007.01.00	体育の科学、Vol.57(1)、pp.13-17、杏林書院	日本体育学会編集の機関誌。スポーツ・マネジメントに関わる法的問題および倫理問題について概説した。
4	わが国におけるスポーツ仲裁・調停の課題	単著	2008.07.31	『スポーツ仲裁・調停』（日本スポーツ法学会年報第 15 号）、pp.74-87、日本スポーツ法学会／エイデル研究所	わが国のスポーツ紛争をめぐる問題点について、特に競技団体内の紛争解決手続に焦点をあてて論述し、あるべき形について検討を試みた。
5	スポーツ・ルールの法的根拠	単著	2009.01.01	体育の科学、Vol.59(1)、pp.15-19、杏林書院	日本体育学会編集の機関誌。スポーツに関する各種ルールについて、法的視点から検討した。
その他					
1	ジュニアスポーツと法律Q&A・保護者の責任	単著	2004.06.00	スポーツジャスト、2004 年 6 月号、pp.18-19、三省堂スポーツソフト	子どものスポーツ指導における保護者の責任について、法定監督義務、倫理綱領などを題材に概説した。
2	ジュニアスポーツと法律Q&A・子どもが頭を打った！どうする？	単著	2004.08.00	スポーツジャスト 2004 年 8 月号、pp.20-21、三省堂スポーツソフト	(財)日本体育協会スポーツ少年団機関誌。「ジュニアスポーツと法律Q&A」という連載の企画および執筆を担当。救急処置に関する法的問題を概説。
3	「緊急事態と法律问题」		2004.08.01	NPO法人NSCAジャパン・パーソナルトレーナー基礎講座、早稲田大学	講習会（講師）
4	ジュニアスポーツと法律Q&A・後片付け中に重大事故発生。誰の責任？	単著	2004.11.00	スポーツジャスト 2004 年 10/11 月号、pp.18-19	スポーツ活動後の道具・用具の後片付け中に重大事故が発生した事例を題材に、指導者の安全配慮義務の及ぶ範囲について検証。
5	ジュニアスポーツと法律Q&A・指導者の悩み。活動内容はどう選ぶ？	単著	2005.01.00	スポーツジャスト 2005 年 1 月号、pp.20-21	指導者の法的責任の一部として、指導プログラムと安全配慮義務について考察。
6	ジュニアスポーツと法律Q&A・この時期指導者がすべきことは何？	単著	2005.04.00	スポーツジャスト 2005 年 4/5 月号、pp.18-19	新年度にあたり、指導者が注意しなければならない点について、法的側面から概説。特に保険契約と指導者資格制度改定について解説。
7	ジュニアスポーツと法律Q&A・夏休みの行事中の事故。引率者の責任は？	単著	2005.07.00	スポーツジャスト 2005 年 7 月号、pp.18-19	指導者の法的責任の及ぶ範囲に関連して、引率者の責任について検討。
8	ジュニアスポーツと法律Q&A・損害の賠償	単著	2005.09.00	スポーツジャスト 2005 年 9 月号、pp.20-21、三省堂スポーツソフト	指導者が負うべき民事責任における損害賠償の対象や範囲等について概説。
9	ジュニアスポーツと法律Q&A・刑事責任	単著	2006.02.00	スポーツジャスト 2005 年 8 月号、pp.20-21、三省堂スポーツソフト	スポーツ指導者の法的責任に関して、特に刑事責任について解説。
10	スポーツ指導と責任 - 防げる事故は防ぐ	単著	2006.05.00	スポーツジャスト、2006 年 4・5 月号、pp.18-19、三省堂スポーツソフト	ジュニアスポーツ指導者の法的責任について概説した。
11	『公立〇〇中学校体育授業にかかわる安全指針』モデル案、 『公立〇〇中学校運動部活動にかかわる安全指針』モデル案	分担執筆	2006.05.00	中間報告「学校安全指針」モデル案の提案～人権尊重・協働・開放型の学校安全の創造、日本教育法学会学校事故問題研究特別委員会	日本教育法学会学校事故問題研究特別委員会が、2002 年 5 月より行ってきた「学校安全基準」研究の第 3 弾。「学校安全指針」モデル案について、体育授業および運動部活動に関わるモデル案を作成。

12	共同不法行為責任を知っていますか?	単著	2006.06.00	スポーツジャスト、2006年6月号、pp.18-19、三省堂スポーツソフト	ジュニアスポーツ指導者の法的責任に関して、共同不法行為責任について概説した。
13	スポーツと法		2006.06.24	埼玉県スポーツプログラマー養成講習会	講習会講師。
14	活動中の雷の予見可能性	単著	2006.08.00	スポーツジャスト、2006年8月号、pp.18-19、三省堂スポーツソフト	野外活動中の雷への対応について、最高裁判所判決を用いて指導者がすべき行動等について概説した。
15	ゴルフ指導と法的責任		2006.08.30	全国大学ゴルフ指導者研究会	研究会講師。
16	オーストラリアにおけるスポーツシステムとスポーツクラブ	単著	2006.09.00	みんなのスポーツ、Vol.326、pp.30-32、日本体育社	(社)全国体育指導委員連合機関誌。オーストラリアにおけるスポーツの構造とそれをささえるスポーツクラブについて紹介した。
17	総合型地域スポーツクラブとNPO法人	単著	2006.11.00	スポーツジャスト、2006年10・11月号、pp.18-19、三省堂スポーツソフト	スポーツ少年団も総合型化、NPO化が求められるようになってきたことを踏まえ、総合型地域スポーツクラブおよびNPO法人制度について解説した。
18	クラブの危機管理		2006.11.25	埼玉県クラブマネジャー養成講習会	講習会講師。
19	書評「実録・メジャーリーグビジネスの法律とビジネス」(ロジャー・エイブラム、大修館書店)	単著	2006.12.00	日本スポーツ法学会年報第14号、	原書「Legal Bases-Baseball and law」の訳本のブックレビュー。
20	日本におけるスポーツクラブの法と政策		2006.12.02	第4回韓国国際スポーツ・エンターテイメント法学会シンポジウム	韓国国際スポーツ・エンターテイメント法学会より招聘参加。シンポジウム「スポーツクラブの法と政策」において、日本のスポーツクラブに関係する法律と政策について報告した。
21	運動部活動をめぐる問題		2006.12.16	学校災害から子どもを守る全国連絡会	シンポジウム演者。日本教育法学会学校事故問題研究特別委員会のプロジェクト研究の中間報告を中心に報告した。
22	ジュニアスポーツ指導のリスクマネジメント		2007.03.03	バレーボール学会12回大会フォーラムB	フォーラムの演者。ジュニアスポーツ指導に関する法的責任とリスクマネジメントについて報告した。
23	スポーツ法務		2007.03.04	(財)日本プロスポーツ協会「マイスター候補・基礎講習会」	講習会講師。
24	活動に見合った保険商品の選択	単著	2007.05.00	スポーツジャスト、2007年4・5月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ関連保険に加入する際の注意点について解説した。
25	適切な処置で熱中症は防げる	単著	2007.06.00	スポーツジャスト、2007年6月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ活動中の熱中症の予防について概説した。
26	「健康づくり活動におけるリスクマネジメント」		2007.07.16	日本体育学会東京支部2007年度シンポジウム「健康づくり運動 地域による相違」	シンポジウム(演者)
27	これで安心! リスクマネジメント超入門	監修	2007.08.00	スポーツジャスト、2007年8月号、pp.2-13、三省堂スポーツソフト	スポーツ少年団の指導者に対して、スポーツ指導におけるリスクマネジメントの考え方について提示した。
28	施設・設備の管理	単著	2007.08.00	スポーツジャスト、2007年8月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ施設・設備の安全管理に対する考え方について言及した。
29	危険の告知	単著	2007.09.00	スポーツジャスト、2007年9月号、pp.14-15、三省堂スポーツソフト	スポーツ指導における危険情報告知の必要性について概説した。
30	アメリカンフットボール	単著	2007.11.00	問答式 学校事故の法律実務、加除式、新日本法規	アメリカンフットボール部の練習中に部員が死亡した事故をめぐる判決について解説した。
31	「クラブの危機管理」		2007.12.08	埼玉県クラブマネジャー養成講習会	講習会(講師)

32	「スポーツ仲裁・調停の将来の課題」		2007.12.15	日本スポーツ法学会第15回大会シンポジウム「スポーツ仲裁・調停」	シンポジウム(演者)
33	道具の目的外使用	単著	2008.01.00	スポーツジャスト、2008年1月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ用具を本来の目的とは異なった形で使用して事故が発生した際の責任の考え方について説明した。
34	紛争解決手段	単著	2008.02.00	スポーツジャスト、2008年2月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ紛争の解決手段について、刑事、民事に分けて解説した。
35	「スポーツ指導のリスクマネジメント」		2008.02.03	東松山市スポーツ指導研修会	研修会(講師)
36	スポーツの危険度と指導者の責任	単著	2008.05.00	スポーツジャスト、4・5月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ種目ごとに内在する危険と指導者の責任の関係について言及した。
37	日本のスポーツ法の昨今の問題		2008.05.31	同志社大学総合情報センター・同志社大学E.U.研究センター	同志社大学主催の国際シンポジウム・公開講演会「ヨーロッパと日本における現代スポーツ法問題」
38	スポーツ指導における刑事責任	単著	2008.06.00	スポーツジャスト、6月号、pp.14-15、三省堂スポーツソフト	ジュニアスポーツ指導における指導者の刑事責任について解説した。
39	ボランティア指導と法		2008.06.06	富山県教育委員会ボランティアリーダー研修会	講習会(講師)
40	指導者資格の有無と責任の度合い	単著	2008.09.00	スポーツジャスト、9月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	スポーツ活動中の事故において、指導者資格の有無が指導者の責任に影響するかについて検討した。
41	サッカー落雷事故差戻審判決について	単著	2008.11.00	スポーツジャスト、10・11月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	1996年8月に起きた高校サッカー部落雷事故の最高裁からの差し戻し審(高松高裁)判決について解説した。
42	クラブの危機管理・スポーツ事故と法的責任		2008.11.09	埼玉県クラブマネジャー養成講習会	講習会(講師)
43	スポーツ事故と指導者の責任		2009.01.28	埼玉県入間市スポーツリーダー養成講座	講習会(講師)
44	自動車送迎中の事故	単著	2009.02.00	スポーツジャスト、2月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	指導者らによる自動車送迎中の事故を巡る法的責任について言及した。
45	リスクマネジメント		2009.02.08	埼玉県体育協会スポーツ指導者講習会	講習会(パネルディスカッション)
46	ジュニアスポーツ指導の考え方	単著	2009.03.00	スポーツジャスト、3月号、pp.16-17、三省堂スポーツソフト	ジュニアに対するスポーツ指導の考え方について、特に法的な視点から検討した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1993.05.00	～	現在	日本体育学会会員(2005年4月～2007年3月 体育経営管理専門分科会運営委員会委員)
2	1993.06.00	～	現在	日本スポーツ法学会会員(1995年1月～1997年12月 スポーツ基本法研究専門委員会幹事、2000年1月～2006年12月 学会事務局員、2002年1月～現在 ADR研究専門委員会幹事、2007年1月～現在 学会理事)
3	1995.04.00	～	現在	日本教育法学会会員(1995年10月～現在 学校事故問題研究特別委員会委員、1999年5月～現在 学会事務局書記)
4	1996.04.00	～	現在	日本体育・スポーツ政策学会会員(2003年1月～2007年3月 運営委員会委員、2009年4月～現在 学会理事)
5	1997.01.00	～	現在	日本スポーツ産業学会会員(2006年4月～ スポーツ法学専門分科会幹事)
6	1998.04.00	～	現在	オーストラリア・ニュージーランドスポーツ法学会(Australian and New Zealand Sports Law Association)会員
7	2002.04.00	～	現在	国際スポーツ法学会(International Association of Sports Law)会員

8 2003.07.00 ~ 現在

日本体育・スポーツ経営学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	講師	氏名	鹿島 丈博	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 第1回トップアスリートふれあい体操教室		2004.09.26				
2) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2005.01.13		体操指導		
3) 千葉県山武町体操教室		2005.02.26				
4) セントラルスポーツ主催「ジムナストカップ」		2005.03.20		模範演技実施		
5) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2005.07.10		野々市 体操指導		
6) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2006.03.27		札幌市 体操指導		
7) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2006.06.25		野田市 体操指導		
8) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2006.08.05		津田沼市 体操指導		
9) ファンタジスタスクエア体操教室		2006.10.21		体操指導		
10) セントラルスポーツキッズ体育スクール		2008.09.25		曾谷市 体操指導		
II 研究活動						
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 平行棒における「棒下宙返り倒立」の技術に関する研究	単著	2006.03.00	順天堂大学大学院修士論文	棒下宙返りの「曲げ伸ばし型」と「回転型」のやり方をモルフォロジー的観点から比較考察を行った。		

2	平行棒における「棒下宙返り倒立」の技術に関するモルフォロジー考察	共著	2007.03.00	体操競技・器械運動研究会誌 15	本研究は棒下宙返りにひねりを融合させた「棒下宙返りひねり系技」の技術の発展性を視野に入れた「棒下宙返り倒立」の技術的解明を目的として行った。その結果、「回転型」の棒下宙返り倒立は従来の「曲げ伸ばし型」の棒下宙返り倒立と比べ、運動の質の高いやり方（技術）であることが示唆された。（執筆及びデータ分析担当：鹿島丈博）共著者：鹿島丈博、原田睦巳、伊藤政男 pp.31-41
3	鉄棒における「前方浮腰回転ひねり倒立（アドラーひねり倒立）」の技術に関するモルフォロジー的考察	共著	2008.03.00	順天堂大学スポーツ健康科学研究 第12号	前方浮腰回転ひねり倒立（アドラーひねり倒立）の有効な技術をモルフォロジー的観点から比較考察を行った。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）共著者：原田睦巳、齋藤良宏、鹿島丈博、富田洋之、加納實 pp.11-21
その他					
1	トップアスリートへの質問コーナー		2005.00.00	セントラルスポーツキッズ（セントラルスポーツ株式会社）	セントラルスポーツ株式会社発刊のセントラルスポーツキッズのトップアスリートへの質問コーナーに執筆した。
2	選手の子供のころ		2007.00.00	セントラルスポーツキッズ（セントラルスポーツ株式会社）	セントラルスポーツ株式会社発刊のセントラルスポーツキッズの「選手の子供のころ」の項に執筆した。
3	「体操競技とケガの問題を考える」選手の立場から：体の負担、ケガの克服体験		2008.12.21	日本体操競技・器械運動学会 第22回学会大会	体操競技は2006年にルール改正が行われ、技術的・体力的に体への負担が増加した。ケガや、故障などと、付き合いながら競技をする大切さと怪我の予防も含め、意識的、且つ自発的にトレーニングをする。
4	教育講演会「オリンピックを体験して得た努力と経験の大切さ」		2009.01.15	浦安市日の出中学校 青少年健全育成連絡会の共催	競技生活を振り返り、努力すること、継続することの大切さ、勉強・スポーツ、共に目標をもって取り組むことにより多くの貴重な体験ができる。
5	「世界で戦うためのジュニア期に最も必要な技術とは」		2009.03.22	国立スポーツ科学センター「ナショナルトレーニングセンター」通達講習、技術研修	体操競技において、基本的な技術の大切さ、そして、技術だけではなく、あいさつや礼儀を大切にすること。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	2004.12.20	～	2004.12.20	成田西高等学校演技会
2	2005.01.17	～	2005.01.17	中越地震被災地山越町塚山中学校講演会講師
3	2005.02.00	～	2005.02.00	黒浜小学校創立記念メッセージ寄稿
4	2005.02.08	～	2005.02.08	順天堂大学医学部看護士講演会講師
5	2005.02.10	～	2005.02.10	埼玉県蓮田市立黒浜北小学校講演会講師
6	2005.03.00	～	2005.03.00	近畿高等学校体操競技選手権大会プログラムへ寄稿
7	2005.06.05	～	2005.06.05	明海大学講演会講師
8	2006.04.01	～	現在	日本体操競技・器械運動学会会員
9	2007.05.13	～	2007.05.13	セントラルスポーツ会員向け講演会講師

(表 25)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	講師	氏名	鹿島 丈博		
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等		
1	[国内大会] NHK 杯兼体操競技日本代表決定競技会	メルボルン		2004.05.03	個人 5 位		
2	[国際大会] 第 28 回オリンピック・アテネ大会			2004.08.16	団体 1 位、あん馬 3 位		
3	[国内大会] 全日本社会人体操選手権大会			2004.09.18	個人 21 位		
4	[国際大会] 中日カップ			2004.12.04	あん馬 1 位、鉄棒 3 位		
5	[国際大会] ワールドカップ決勝			2004.12.12	あん馬 5 位、鉄棒 6 位		
6	[国内大会] 世界選手権体操競技第二次選考会			2005.05.05	個人 4 位		
7	[国内大会] NHK 杯兼体操競技日本代表決定競技会			2005.07.09	個人 3 位		
8	[国際大会] 第 23 回ユニバーシアード・イズミル大会体操競技			2005.08.13	団体 1 位、個人 3 位、あん馬 7 位、平行棒 1 位、鉄棒 6 位		
9	[国際大会] 第 38 回世界体操競技選手権大会			2005.11.25	あん馬 3 位		
10	[国内大会] NHK 杯兼体操競技日本代表決定競技会			2007.06.10	個人 4 位		
11	[国際大会] ワールドカップ決勝			2007.12.16	あん馬 6 位		
12	[国内大会] オリンピック競技大会体操競技第二次選考会			2008.04.13	個人 6 位		
13	[国内大会] NHK 杯兼体操競技日本代表決定競技会			2008.05.06	個人 9 位		
14	[国際大会] 第 29 回オリンピック・北京大会			2008.08.21	団体 2 位		

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	講師	氏名	佐藤 真太郎	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) ふれあい講演会		2007.11.28	鶴ヶ島市立藤中学校において全校生徒を対象に、講演会を行った。内容は“挑戦”することについて話し、各生徒に目標設定をさせ、目標達成の為に何が必要か考えさせ、レポートを提出、評価を行った。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 狭山ヶ丘学園狭山ヶ丘高等学校陸上競技部顧問		2005.10.00					
2) 新人陸上競技選手権大会西部地区予選		2006.09.00	男子総合優勝 (狭山ヶ丘高校陸上部、初の総合優勝)				
3) 新人陸上競技選手権大会兼関東高校選抜陸上競技選手権大会予選会		2006.10.00	女子 4×400R (5位)				
4) 学校総合体育大会兼関東高校陸上競技対校選手権大会予選会		2007.05.00	男子やり投げ (6位)、女子 200m (5位)、女子 4×400mR (5位)				
5) 関東高校陸上競技対校選手権大会		2007.06.00	男子やり投げ (出場)、女子 200m (出場)、女子 4×400mR (4位)				
6) 全国高等学校総合体育大会陸上競技大会 秩父宮賜杯 第60回全国高等学校対校陸上競技選手権大会		2007.08.00	佐賀 女子 4×400mR (出場)				
7) 第80回関東陸上競技選手権大会		2007.08.00	女子 4×400mR (優勝) 日本選手権リレー出場権利獲得				
8) 新人陸上競技選手権大会兼関東高校選抜陸上競技選手権大会予選会		2007.09.00	男子総合4位、男子走高跳 (優勝)、男子 110mH (3位)、女子 4×100mR (2位)、女子 4×400mR (3位)、女子 100m (4位)、女子 400m (4位)、女子 400mH (7位)				
9) 新人陸上競技選手権大会西部地区予選		2007.09.00	男子総合優勝、女子総合優勝				
10) 関東高校選抜陸上競技大会		2007.10.00	男子走高跳 (出場)、男子 110mH (出場)、女子 4×100mR (出場)、女子 4×400mR (出場)				
11) 日本選手権リレー		2007.10.00	女子 4×400mR (出場)				
12) 日本ジュニア室内陸上競技・大阪大会		2008.02.00	女子 60m (出場)				
13) 学校総合体育大会陸上競技選手権大会埼玉県西部地区予選会		2008.04.00	男子総合優勝 女子総合4位				
14) 学校総合体育大会兼関東高校陸上競技対校選手権大会予選会		2008.05.00	男子走高跳 (2位)、男子 110mH (6位) (8位) 2名、女子 4×400mR (4位)、女子砲丸投げ (4位)				
15) 関東高校陸上競技対校選手権大会		2008.06.00	男子走高跳 (6位)、女子 4×400mR (6位) 日本選手権リレー参加標準記録突破、女子砲丸投げ (6位)				

16) 国民体育大会少年の部西部地区予選会	2008.07.00	男子総合優勝（2連覇）、男子 110mH（1位）（2位）日本ジュニア室内陸上競技・大阪大会参加標準記録突破		
17) 全国高等学校総合体育大会陸上競技大会 秩父宮賜杯 第 61 回全国高等学校対校陸上競技選手権大会	2008.08.00	埼玉 男子走高跳（出場）、女子 4×400mR（出場）、女子砲丸投げ（出場）		
18) 国民体育大会少年の部西部地区予選会	2008.08.00	男子総合優勝（二連覇）、男子 110mH（1位）（2位）日本ジュニア室内陸上競技・大阪大会参加標準記録突破		
19) 第 80 回関東陸上競技選手権大会	2008.08.00	女子 200m（出場）、女子 400m（出場）、女子 4×400mR（出場）		
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
論文				
1 疾走動作中における体幹部のバイオメカニクス的研究		2006.03.00	筑波大学大学院修士論文	
その他				
III 学会等および社会における主な活動				
1	日本トレーニング科学会会員			

(表 25)

所属	スポーツ・健康科学部スポーツ科学科	職名	講師	氏名	佐藤 真太郎	
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等	
1	埼玉国体			2004.00.00	100m 優勝 茨城代表	
2	日本 GP (群馬)			2004.00.00	200m 優勝	
3	実業団学生対校			2004.00.00	200m 2位	
4	全日本インカレ			2004.00.00	200m 3位	
5	日中対抗室内陸上			2005.00.00	60m 3位 日本代表	
6	東日本実業団			2006.00.00	100m 出場	
7	全日本実業団			2006.00.00	100m 8位	
8	東日本実業団			2007.00.00	100m 出場	
9	全日本実業団			2007.00.00	200m 7位	
10	東日本実業団			2008.00.00	100m 5位	

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	伊藤 機一	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「遺伝子分析科学認定士」制度の実施		2007.06.00		筆者が理事長を勤める「日本臨床検査同学院」は2007年6月、標記の試験を開始した。臨床検査技師に特化せず、医師、薬剤師、理学系研究者、単位を取得した臨床検査技師養成校学生も受検資格がある。第1回目試験は宮地勇人試験委員長のもと、東大鉄門会館で実施した。105名の合格者を排出したが、今後全回分野での期待度が大きい。教科書(臨床病理刊行会)も出版した。			
2) 健康科学科3学年ゼミでの、新聞最新の医学関連記事を利用しての教育		2007.10.00		新聞での医療・保健・福祉分野での最新情報をコピーしてゼミ生に配布、内容を要領よくまとめさせゼミ生に印象を語らせる。新キーワードを把握でき、自分の学ぶべき内容を把握できたと学生には評価が高かった。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) メディカルサイエンスシリーズ (5) 尿の知識 (東海大学出版会)		2009.05.01		尿とは何か、その作られる仕組み、性質、検査の有用性を一般人に強調した啓発書である。単著。B6版、総頁122頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 鉄道完全乗車を続けて半世紀		2008.09.21		医療従事者向けに本来の職務以外の趣味を持ち、持続することの重要性をコラム欄に記した。筆者は「医療と検査機器・試薬誌」31巻(5巻)599~602頁を担当した。			
2) 医療廃棄物研究会の発足時から現在までを振り返る		2009.05.01		1988年発足した研究会(現在は有害・医療廃棄物研究と改名)の経緯を記した。針刺し事故、不法投棄など現在も問題となっているが、年々改善が進んでいる。筆者は「有害医療廃棄物研究会誌」21巻(1・2号)1~2頁を担当した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者。著者名(共著の場合のみ記入)		
著書							
1 基準値と異常値の間	分担執筆	2004.05.00	中外医学社<基準値と異常値の間>改訂6版		伊藤機一、高橋勝幸、他6名(B5版、14頁)健常と異常を区別する微妙な臨床検査値がしばしば問題となる。多くのEBM実践結果のからとくに尿検査につきまとめた。		
2 太郎じいちゃんとドクター・カーン・オンソッコ管理物語ー	共著	2004.07.00	(株)シスメックス		巽典之、伊藤機一(A4版、42頁)一般人向きに、尿中成分分析とその臨床的意義を述べ、さらに最近重要視されている「排尿障害」について記した。		
3 更年期の腎・泌尿器疾患と検査	共著	2004.08.00	臨床病理レビュー特集131号、女の一生と臨床検査<更年期をめぐる身体の変化とその臨床>		宮野康日己、伊藤機一(B5版、8頁)尿蛋白・糖・潜血検査、性ホルモンの変化を記し、さらに尿失禁など女性に多い排尿障害を記した。		
4 新カラーアトラス尿検査	編集	2004.09.00	月刊 Medical Technology 別冊		伊藤機一、野崎司(B5版、168頁)尿検査全般について、カラーを十分に用い視覚効果を高めた教本。前版の全面改定版。		

5	医者に聞けない検査結果の読み方がわかる本	監修	2004.11.00	中経出版	伊藤機一、神泳教子 (A5 版、289 頁) 一般人向けに記した。臨床検査を検体検査と生理機能検査に大別して記した著書を監修した。
6	病理<疾病の成り立ち>、微生物<感染と予防>、臨床検査<改定 2 版>	監著	2005.03.00	医学芸術社	伊藤機一、早川欽哉、岡田淳、三村邦裕 (B5 版、200 頁) 看護学生、栄養学学生、リハビリテーション学生、臨床検査技師学生教育用の教科書。
7	感染性廃棄物処理概論	編著	2005.03.00	臨床病理レビュー特集第 133 号、医療廃棄物の適正処理マニュアルー感染性廃棄物を中心にー	松島肇、伊藤機一 (B5 版、200 頁) 医療廃棄物の適正処理については排出者の責任が今後重視される方向で法的に従う必要があることなどを、各関連者が分担執筆した。
8	膀胱癌	分担執筆	2005.04.00	宇宙堂八木書店「健康管理と臨床検査ー早期診断を目指してー」	伊藤機一、布施川久恵、野崎司 (B5 版、7 頁) 膀胱癌診断のための尿検査、腫瘍マーカー、画像診断の重要性を記した。細胞診検査も不可欠である。
9	高齢者基準値ハンドブック<尿一般検査、腎機能検査>	分担執筆	2005.06.00	中外医学社	巽典之、伊藤機一、近藤弘 (A5 版、26 頁) これまでの検査基準値は成人が基準であったが、高齢化社会を迎えた今日、65 歳以上の基準値が必要となった。
10	尿沈渣検査	共著	2005.12.00	medicina 増刊号「これだけは知っておきたい検査のポイント (第 7 集)」	伊藤機一、石渡仁深、藤本美智子 (B5 版、5 頁) 腎尿路系疾患の診断に不可欠な尿沈渣検査につき、結果の解釈を述べた。また最近の尿中有形成成分自動測定装置の有用性、問題点を併記した。
11	尿沈渣検査	分担執筆	2005.12.00	Medical Technology 臨時増刊「カラー版 体腔液検査のすべて」	石渡仁深、藤本美智子、伊藤機一 (B5 版、22 頁) 尿沈渣検査について、sternheimer 染色を中心にその有用性と診断効果を記した。日常検査と細胞診検査との関連性をも記した。
12	尿化学物質検査	分担執筆	2005.12.00	Medical Technology 臨時増刊「カラー版 体腔液検査のすべて」	伊藤機一、石渡仁深、藤本美智子 (B5 版、18 頁) 検査も浮き沈みがあり、PSP、Fishberg 試験は消滅し、微量アルブミン定量は増加している。肺炎やレジオネラなど感染症検査も増加しつつある。
13	尿量、尿潜血反応、尿沈渣検査	分担執筆	2006.05.00	中外医学社「基準値と異常値の間 (改訂 6 版)」	伊藤機一、金子良孝、高橋勝幸、藤本美智子、石渡仁深 (B5 版、15 頁) 日常診療はもとより、健 (検) 診でしばしば話題となる「境界値」について、結果の解釈の仕方、注意点を記した。
14	血尿診断ガイドライン	分担執筆	2006.06.00	血尿診断ガイドライン検討委員会編	東原英二、伊藤機一 (A 4 版、50 頁) 腎炎、尿路感染症、腎尿路悪性腫瘍の診断に重要な血尿の診断法を尿試験紙法、尿沈渣検査法を中心に記した。
15	標準臨床検査医学 (第 3 版)	分担執筆	2006.09.00	医学書院	伊藤機一 (B 5 版、350 頁) 臨床検査医学を学ぶ医学生用教科書で、一般的臨床検査を担当した。
16	スポーツと医学と臨床検査	分担執筆	2006.11.00	臨床病理刊行会	伊藤機一、只野智昭 (B 5 版、20 頁) スポーツと尿検査との関連を運動負荷後の結果の変化を記した。またドーピング検査の実際の事項を著した。
17	河合忠編：改定版臨床検査薬情報担当者研修テキスト (II)	分担執筆	2007.02.00	薬事日報社	臨床検査学 (総論・一般検査・臨床化学検査) につき、臨床検査薬情報提供者 (MR) のテキスト用に執筆した (関頭と共著)。
18	日本臨床検査同学院編：遺伝子検査技術	単著	2007.03.00	宇宙堂八木書店	伊藤機一、宮地勇人、船渡忠男、他 (B 5、350 頁) 2007 年に始まった「認定遺伝子検査科学士」試験のためのテキスト。
19	腎不全予防医学調査研究会編：腎不全治療マニュアル	分担執筆	2007.07.00	日本透析医学会	あらゆる腎臓病の早期発見・早期診断の常にトップに位置する尿検査 (試験紙法による蛋白、糖、潜血検査と尿沈渣検査) の有用性と判定時の注意点を記載した。只野智昭と共著。
20	臨床検査 Year Book 2008 一般検査編	編集協力、分担執筆	2007.12.31	臨床病理刊行会	厚生省主催の全国医科大学中堅臨床検査技師が 1 週刊にわたり東京大医学部で学習する臨床検査のテキスト。筆者は「一般検査学総論 (尿検査を中心に)」を記載した。
21	やさしい臨床検査医学 (編集：森三樹雄)	分担執筆	2008.04.01	南山堂	初版 (2001 年) の大改訂版である。2008 年 4 月から開始された「メタボ検診」など、臨床検査は大幅な変革が生じた。これに対応すべく大改訂がなされた。筆者は消化器疾患、腎・尿路疾患、脂質代謝異常症、染色対異常・遺伝子異常、簡易検査、基準値を担当した。
論文					

1	検査データの読み方・考え方<尿検査>	単著	2004.05.00	Modern Physician	伊藤機一 (25 頁) 実地医家, 研修医向けに尿検査 10 項目について解説した。
2	検査データの読み方・考え方のポイント	共著	2004.05.00	Modern Physician	伊藤機一、(B5 版、12 頁) 尿量、比重、pH、蛋白、糖、ケトン体、ビリルビン、ウロビリノゲン、潜血の尿検査主要項目につき、臨床的意義を中心に記した。
3	試験紙法による尿定性・半定量検査	共著	2004.10.00	日本臨牀、特集 (第 6 版)、血液、尿化学検査、免疫学的検査	伊藤機一、野崎司 (B5 版、36 頁) 尿試験紙で検査できる 10 項目について、原理、結果の解釈、測定値の統一化などを詳細に記載した。
4	ユビキノン (コエンザイム Q)	共著	2004.10.00	日本臨牀、特集 (第 6 版)、血液、尿化学検査、免疫学的検査	伊藤機一、築瀬澄乃 (B5 版、6 頁) ビタミン類似物質で細胞を若返らせる作用があり、サプリメントとしても注目される CoQ10 につき、その生化学的作用、効果を記した。
5	尿試験紙における潜血陽性の考え方	単著	2005.02.00	日本医事新報	伊藤機一 (B5 版、2 頁) 潜血反応は尿尿のスクリーニングのほか、ヘモグロビン尿、ミオグロビン尿にも反応すること、ビタミン C などによる偽陰性があること、メーカー間差があることを記した。
6	JCCLS 尿試験紙標準法の概要—尿試験紙はこのように変わる—	共著	2005.05.00	Medical Technology	青木芳和、伊藤機一、高橋勝幸 (B5 版、5 頁) 尿試験紙法の主要 3 項目 (糖、蛋白、潜血) の 1+ 検出感度がメーカー間にばらつきがあったが、これが平成 17 年 12 月末に統一化されることになった経緯を記した。
7	メディアを賑わせた最近の事件「胎児と廃棄物」	単著	2005.08.00	医療廃棄物研究	伊藤機一 (B5 版、3 頁) 横浜の産科開業医が胎盤のみならず胎児までも切り刻んで一般ゴミとして捨てる事件があった。厚生省は全国に調査したが各地で対策はばらついていた。また産科の教科書にも胞衣 (えな) や産汚物について一行も触れておらず、警告の一文とした。
8	生活習慣病予防で重要性高まる臨床検査	単著	2005.08.00	OMNI・MANAGEMENT	伊藤機一 (B5 版、5 頁) 最近話題性を増しているメタボリックシンドロームを中心に血糖、血液グリコヘモグロビン、血清脂質の測定値の判断の仕方を記した。尿検査についても触れた。
9	POCT と検査部のかかわり「郵送検診の普及状況と精度保証」	共著	2005.10.00	Medical Technology	伊藤機一、植田美津江、三宅一徳 (B5 版、4 頁) Point of care testing として郵送検診 (自己検査) が普及している。自身の身体状況を知ることに異論はないが、検査精度と、異常が出た時のフォローが重要である。
10	食生活と栄養の百科事典	分担執筆	2005.12.00	丸善	伊藤機一 (B5 版、600 頁) 管理栄養士向きに、血液検査、尿検査、微生物検査、病理検査について用語の説明をした。
11	尿沈渣検査と尿培養法の細菌陽性率の比較検討	共著	2006.03.00	神奈川県臨床検査技師会誌	野崎司、高橋二美子、伊藤機一 (B5、8 頁) 尿中に白血球が多数出現している時は、従来言われている大腸菌のほか、多数の小型の球菌が存在し、原因菌となっていた。
12	医療廃棄物と医学教育について	単著	2006.04.00	医療廃棄物研究	伊藤機一 (B5 版、3 頁) 感染性医療廃棄物の不法投棄、針刺し事故の多発など、多くの医療従事者が重視する内容となったが、卒前教育のカリキュラムではまだ不十分である。
13	横須賀共済病院における生体試料からのアスベスト小体およびアスベスト繊維の光学顕微鏡下算定	共著	2006.06.00	医療と検査機器・試薬	石渡仁深、伊藤機一 (B5、12 頁) 喀痰細胞、肺洗浄液、肺生検から得られた試料につき、アスベスト小体を検索し、中皮腫との関連を検討した。
14	尿潜血反応の意味 (JCCLS 標準化を含めて)	共著	2006.08.00	Medical Technology	伊藤機一、高橋勝幸 (B5 版、6 頁) 我が国で発売されている 10 メーカーの尿潜血試験紙の (1+) の検出感度はこれまでバラツキがあった。検討の末、(1+) はヘモグロビン濃度として 0.06mg/dL、赤血球個数として 20 個/μL が適切と報告した。
15	宮沢幸久編: 最新検査・画像診断事典 (改訂 4 版)	分担執筆	2006.10.11	医学通信社	保険請求・適応疾患がわかる一般臨床医および保険担当事務職員のための解説書。猪狩淳、岡田淳と共著。
16	遺伝子分析科学認定士制度	共著	2006.11.00	医歯薬出版 Medical Technology	2007 年に日本臨床検査同学院主催の新たな資格認定制度の内容と成果を試験委員長である宮地勇人と記載した。
17	JCCLS document GP 3-P 1, proposed guideline “urinary reagent strip method” Supplement	単著	2006.12.00	Sysmex Journal International	Kiichi Ito (A4 版、16 頁) 我が国の尿検査の標準を定める日本臨床検査標準協議会 (JCCLS) での①尿試験紙法、②尿沈渣検査法、③尿蛋白定量法の 3 項目についての今日までの実践を英文にて報告した。

18	Report of the urinary testing standard committee (JCCLS)	単著	2006.12.00	Sysmex Journal International	Kiichi Ito (A 4 版、16 頁) 我が国の尿検査の標準を定める日本臨床検査標準協議会 (JCCLS) での①尿試験紙法、②尿沈渣検査法、③尿蛋白定量法の3項目についての今日までの実践を英文にて報告した。
19	血尿の定義と尿検査法	共著	2007.01.00	日本医師会雑誌	伊藤機一、高橋勝幸 (B 5 版、6 頁) 実地医家向きに血尿の検査法として、尿潜血反応、尿沈渣検査法の重要性と結果解釈上の注意点を記した。
20	二級臨床検査士制度の現状と連携	共著	2007.02.00	日本検査血液学会誌	30 年以上歴史のある日本臨床検査同学院の主催する「血液認定臨床検査士」制度の実績と今後の動向を記載した。近藤弘と共著。
21	ひと目でわかる異常所見、第 10 回便編	共著	2007.02.00	臨床研修プラクティス	大便の肉眼観察は腸疾患の診断に不可欠だ。コレラ、粘血便、血性下痢、白色便につき高橋勝幸らと記載した。
22	判断力を鍛える一歩進んだ検査 (尿検査)	共著	2007.03.00	レジデントノート	伊藤機一、只野智昭 (B 5 版、8 頁) 尿試験紙法と尿沈渣検査の臨床的意義を記した。
23	特定健診と臨床検査	共著	2007.03.00	臨床検査機器・試薬	巽典之、伊藤機一 (B 5 版、8 頁) メタボリックシンドロームの診断、健康予防は国民的課題となっている。その検査診断 (HDL-コレステロール、LDL-コレステロール、トリグリセリド) について結果の解釈を記した。
24	Q&A、臨床検査、尿沈渣・血液簡易検査液の入手法	共著	2007.03.24	日本医事新法	Sternheimer 超生体染色法、Sedistain など、尿沈渣検査法の簡易染色法として効力は大きである。今井宣子と共著。
25	尿定性検査に及ぼす薬剤の影響—ケトン体の偽陽性反応を中心に—	共著	2007.04.01	臨床検査機器・試薬	共同研究者の井野上章が第 42 回日本赤十字社医学会で発表・評価された内容の再編集。糖尿病の治療薬キネダック服用者に尿ケトン体の偽陽性例が多いことが判明した。
26	わかる！異常所見、第 11 回糞便編①②	共著	2007.05.00	臨床研修プラクティス	伊藤機一、高橋勝幸 (B 5、4 頁) 糞便の肉眼観察で胆道閉鎖症、腸管出血性大腸菌感染症、赤痢アメーバ感染など多種の重要疾患が発見できる。
27	ひと目でわかる異常所見 (便編②)	共著	2007.05.01	臨床研修プラクティス	2007 年 2 年に引き続いての便の肉眼観察の重要性をカラーアトラスで記載。今回は白色下痢便 (ロタウイルス感染)、新生児緑色便、異色タール状便 (十二指腸潰瘍)、鮮血便 (消化管出血) について高橋勝幸らと記載。
28	検査に及ぼす薬剤の影響 (ケトン体の偽陽性反応を中心に)	共著	2007.06.00	医療と検査機器・試薬	井野上章、高橋勝幸、伊藤機一 (B 5、8 頁) 尿試験紙法による尿ケトン体反応はニトロプルシド反応によっているが、多くの服用薬物による偽陽性反応が多く、その確認法を記載した。
29	尿沈渣と微生物検査における細菌数乖離の原因	共著	2007.07.00	検査と技術	野崎司、伊藤機一 (B 5、4 頁) 尿の顕微鏡検査で大腸菌などの桿菌は観察しやすいが球菌は小型のため白血球に隠されて見落とす可能性があり、要注意。
30	遺伝子分析科学認定士制度	共著	2007.10.00	臨床病理	2007 年に筆者が理事長を勤める日本臨床検査同学院の主催した認定制度の有効性につき宮地勇人と記載。
31	登録衛生検査所における依頼検体数の推移—特定健診 (いわゆるメタボ健診実施 2008 年 4 月を目前に控えて)	共著	2008.01.00	臨床検査機器・試薬	只野智昭、伊藤機一、関頭 (B 5、10 頁) メタボ健診の開始により、血清総コレステロール測定は減少し、HDL-コレステロールと LDL-コレステロール、中性脂肪の測定は増加した。
32	最新臨床検査項目辞典	編集・分担執筆	2008.03.20	医歯薬出版	同社の前版「臨床検査広辞典」の全面改訂版。保険収載項目約 3,000 につき詳細を要領よく記載している。筆者は尿・髄液・大便など一般検査を担当執筆した。監修者は桜林郁之介、熊坂一成。
33	血尿診断ガイドライン	共著	2008.05.00	検査と技術	油野友二、伊藤機一 (B 5、4 頁) 2006 年に刊行された「血尿診断ガイドライン」の骨子を記した。
34	海外長期滞在者の帰国健診時における寄生虫検査成績の検討	共著	2008.08.00	予防医学ジャーナル	坂川良美、白石一美、伊藤機一 (B 5、4 頁) 海外帰国者の糞便寄生虫検査で多発しているのはサイクロスポアなどの原虫感染症であった。
35	尿中有形成成分自動分析	分担執筆	2009.01.00	医学書院医学大辞典 第 2 版	フローサイトメトリー法などによる尿中有形成成分自動測定の意義を記した (2129 頁)。

36	尿中硫酸抱合型胆汁酸	分担執筆	2009.01.00	医学書院医学大辞典 第2版	胆道閉鎖症（新生児・乳幼児）早期発見に有用な検査であることを記した（2129頁）。
37	医学大辞典（第2版）		2009.02.15		2003年初版の大改訂版。カラー版となり、CD-ROM版も刊行された。筆者は尿検査10項目を担当した。
38	尿中細菌検出における核酸染色を用いたフローサイトメトリー法による尿中有形成分情報の有用性	共著	2009.03.00	臨床病理	中川弘子、油野友二、伊藤機一（B5、6頁）無遠心尿を用いた核酸染色により、尿中細菌検査が高精度に迅速に測定できるようになった。
39	CAPサーベイにおける尿沈査結果の日本と諸外国との相違	単著	2009.04.00	臨床検査室グローバルニュース（春号）	伊藤機一（B5、6頁）尿沈査検査のCAPフォトサーベイで、日本と諸外国での移行上皮と扁平上皮の判定が大幅に異なっていることを問題提起した。
その他					
1	Urine Sedimentation, Future	単著	2004.06.00	Sysmex Seminar in Korea	Kiichi Ito（A4版、5頁）韓国ソウルで開催された尿検査に関するセミナーの講演記録
2	各種認定試験について	単著	2004.08.00	全国臨床検査技師教育施設協議会編	伊藤機一（A4版、10頁）平成16年度全国臨床検査技師教育施設協議会研修会（大阪府）での特別講演の記録で、筆者が日本臨床検査同学院院長に就任してからの考えをまとめた。
3	Cellulose acetate membrane electrophoresis in the analysis of urinary protein in patient with tubulointerstitial nephritis	共著	2004.09.00	Abstract of 10th Asian Pacific Congress of Clinical Biochemistry (Pearth, Australia)	R. Kubota, K. Ito, K. Shiba et al（A4版、2頁）セア膜を用いた電気泳動法で銀染色を施すことにより、間質性腎炎の診断、尿細管障害など腎疾患の診断に有用と考えた。
4	尿検査でこんなことまでわかる	単著	2004.10.00	New Diet Therapy	伊藤機一（A4版、10頁）第25回日本臨床栄養学会総会、第24回日本臨床栄養協会大連合大会での基調講演における記録集。
5	随論「尿検査よもやま話（1）（2）（3）（4）」	単著	2005.03.00	日本臨床検査同学院「通信」平成17年3月・5月・9月・12月	伊藤機一（A4版、計8頁）「通信」の内容刷新を目途に、院長自身が尿検査にまつわるこぼれ話を記した。混ぜ物検体の多発、ドーピング検査など話題性に満ちている。
6	随論「横須賀ストーリー（2）短期大学閉学閉学論」	単著	2005.04.00	検査と技術	伊藤機一（B5版、1頁）平成16年3月、神奈川県立衛生短期大学は4年制大学への移行のため閉学となった。3科（衛生看護科、衛生技術科、専攻科）学生をすべて無事卒業にもっていくことの苦労話を、また教職員一丸となって尽力したことを記した。
7	尿蛋白・腎機能検査の標準化	共著	2005.06.00	第48回日本腎臓学会総会（横浜）抄録集（シンポジウム）	伊藤機一、折田義正、他（B5版、2頁）尿中アルブミン測定、クレアチニンクリアランスに代わるイヌリンクリアランス、血中シスタチンCなど最近の腎機能検査の動向を討論した。JCCLS尿検査指針についても触れた。
8	尿・便等一般検査領域における標準化の国際的動向	共著	2005.11.00	小児難病フォーラム「胆道閉鎖症」抄録集	伊藤機一、他（A4版、2頁）1万人に1例発症する新生児胆道閉鎖は放置により肝硬変、死に至る。尿中硫酸抱合胆汁酸の測定は本症の早期診断に効果的である。従来の変色調観察は精度に乏しい。
9	TIA-HB20の導入に伴う基礎的検討	共著	2006.01.00	第40回予防医学技術研究会抄録集	森郁子、伊藤機一（B5版、2頁）大腸がん検診集検用の免疫法便潜血反応自動測定装置は再現性がよく、集団検診に優れている。
10	オピニオン「尿試験紙のJCCLS勧告」	単著	2006.02.00	検査と技術	伊藤機一（B5版、1頁）平成17年12月、我が国10社の試験紙の尿蛋白、尿糖、尿潜血の1+部分の検出感度が統一された。
11	随論、横須賀ストーリー（3）米国人の体型について	単著	2006.03.00	検査と技術	伊藤機一（B5版、1頁）米国人の25%は異常肥満である。メタボリック症候群の概念は彼ら彼女らのために編み出されたものである。日本人も何らかの対策が必要である。
12	尿検査よもやま話一番外編一	単著	2006.04.00	医療と臨床検査機器・試薬	伊藤機一（B5版、2頁）「通信」に掲載していたが、他の編集主幹が「血液検査よもやま話」を連載するに伴い、本誌に記載した。

13	日本腎臓学会総会ワークショップ「血尿診断について」	共著	2006.06.14	日本腎臓学会誌 48	5年を費して各学会・団体より選出された専門医、技師等による血尿ガイドラインに関するワークショップの司会を東原英二委員長とともに行った。
14	JCCLS Document GP3-P1 Proposed Guideline "Urinary Reagent Strip Method" -Supplement-	単著	2006.10.00	Sysmex J. Int. 16	日本臨床検査標準協議会（JCCLS）尿検査標準化委員会（筆者委員長）は1995年から検討を進めてきた尿試験紙法での蛋白・糖・潜血の（1+）部分のメーカー間差の解消に努めてきた。その経緯を英文で記し、世界に情報発信した。
15	Report of the Urinalysis Testing Standards Committee Japanese Committee for clinical Laboratory Standards (JCCLS)	単著	2006.10.00	Symex J. Int. 16	同上で2000年発表した尿沈渣赤血球形態の分類法を紹介し、腎・尿路系疾患における血尿の判定法と臨床的意義を記した。
16	ジャーナル春秋「私の音楽遍歴ーバッハから演歌まで」	単著	2007.03.00	予防医学ジャーナル	古典音楽が最高と思っていたが、ノイローゼをきっかけとした環境変化により演歌こそ真髓の音楽と思った歴史背景を記した。
17	二級臨床検査士・緊急臨床検査士資格認定試験問題集	単著	2007.05.15	医学書院	40年の歴史を誇る臨床検査技師を対象とした認定試験は筆記試験と実技試験から成るが、半分の重要度を占める過去5年間の筆記試験問題集を載せ、その巻頭言を主催者の代表として記した。
18	スポーツ・健康科学部の腕のみせどころ（新学部長としての意見）	単著	2007.06.20	大東文化大学青桐会ARCH夏号	2005年4月、第8学部として新設された学部・学科（スポーツ科学科・健康科学科）について、その内容と、社会的価値・抱負について記した。
19	寄生虫検査		2008.05.24	第72回日本臨床検査専門医会教育セミナー（東海大学医学部）	減少していない外来寄生虫症、同検査法につき、専門医を対象に講演した。
20	登録衛生検査所における特定健診実施前後の依頼検体数の推移		2008.06.14	第19回神奈川県臨床検査医学会パネルディスカッション（横浜情報文化センター）	只野智昭、伊藤機一、関頭：新健診実施前後により検査依頼項目に著しい増減がみられ、血清総コレステロールの減少、トリグリセリド・HDLコレステロール・LDLコレステロールの増加が顕著であった。
21	私の音楽遍歴ーバッハから演歌までー		2008.06.21	大東文化大学オープンカレッジ・春期講演	古典音楽のみ真の音楽と思っていたが、人生経験により演歌こそ真のメロディーと感じたことの推移を語った。筆者が若年者騒音ノイローゼに罹患し、これを気にした父は「音は音をもって制す」の考えのもと、中古のピアノを与え、練習に励むようにした。バッハやモーツアルトの小品はモノにできたが、医者になって「酸いも甘い」も分かりかけ、古典音楽なんぞダサくて演歌こそこの世の天国と思うようになった。多くの方々に来ていただき、筆者のつたないモーツアルトのピアノ演奏も披露する予定。
22	尿検査からこんなことまでわかる。		2008.07.27	大東文化大学オープンキャンパス（東松山校舎）	一般人を対象に講演した。特にスポーツアスリートと尿ドーピング検査の重要性を強調した。
23	Urine Test Standard System of JCCLS	単著	2008.08.21	9th ANCLS Colloquium Program	尿検査の標準化作業（試験紙法、沈渣、総蛋白）について筆者が拝命しているJCCLS尿検査標準化委員会委員長としての立場を概説した。

III 学会等および社会における主な活動

1	1983.04.00	～	現在	神奈川県臨床衛生検査技師会学術顧問
2	1983.04.00	～	現在	日本臨床病理学会（現 日本臨床検査医学会）会員（1983.04.00～評議員、1993.04.00～関東甲信越支部幹事、1995.04.00～教育委員会教育委員）
3	1990.04.00	～	現在	医療廃棄物研究会理事・学術委員
4	1992.04.00	～	現在	日本総合健診医学会評議員（第565号）
5	1992.04.00	～	現在	日本病院病理医協会会員（第302304号）
6	1992.04.00	～	現在	日本臨床検査自動化学会会員（1992.04.00～評議員、1999.04.00～科学技術委員）

7	1992.04.00	～	現在	日本臨床検査標準協議会（JCCLS）会員（1992.04.01～尿沈渣検査法専門委員会副委員長、1996.04.01～用語委員会委員、1998.04.01～尿試験紙法検討委員会委員長）
8	1994.04.00	～	現在	（財）予防医学事業中央会会員（1994.04.00～臨床病理学術委員会委員、1994.04.01～尿小委員会委員長）
9	1994.04.00	～	現在	日本臨床病理同学院（1994.04.01～3部会部会長、1996.04.01～理事・副試験委員長）
10	1994.04.00	～	現在	米国臨床検査標準協議会（NCCLS）尿検査部門アドバイザー・オブザーバー
11	1996.04.00	～	現在	日本臨床検査医会教育研修委員会委員
12	1997.04.00	～	現在	神奈川県臨床検査医学会常任幹事
13	1997.04.01	～	2006.03.31	全国臨床検査技師教育施設協議会副会長
14	1997.04.01	～	現在	（財）医療関連サービス振興会衛生検査所業務調査指導員
15	1998.04.00	～	現在	神奈川県精度管理専門委員会委員（1998.04.01～1999.06.01 委員長）
16	1998.04.01	～	現在	横須賀市精度管理専門委員会委員
17	1999.04.00	～	現在	（財）東京都予防医学協会学術委員
18	1999.09.00	～	現在	福祉・医療技術振興会評議員
19	2000.03.00	～	現在	日本検査血液学会評議員
20	2001.04.00	～	現在	日本臨床検査医学会（旧日本臨床病理学会）会員（2001.04.00～倫理委員会委員、2001.04.00～クオリティマネジメント委員会委員、2007.04.00～臨床検査精度管理委員、2007.04.00～功労会員）
21	2001.10.00	～	現在	尿路感染症研究会幹事、2006.04.00～評議員
22	2002.04.00	～	2006.03.31	神奈川県公衆衛生協会理事
23	2004.01.00	～	2009.12.31	一般社団法人 日本臨床検査同学院理事長
24	2004.04.00	～	現在	特定非営利活動法人日本臨床検査標準協議会尿検査標準科委員会委員長
25	2005.04.00	～	現在	医療廃棄物研究会（現有害・医療廃棄物研究会）副会長
26	2005.04.00	～	現在	腎・泌尿器検査研究会副会長
27	2005.04.00	～	現在	胆道閉鎖症早期発見のための研究会会員
28	2007.04.00	～	現在	特定非営利活動法人生物試料分析科学会評議員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	大城 聡	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大学院指導教官		1994.04.01	(1994年4月1日～2005年3月) 東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・大学院指導教官助手を委嘱され、当該教員の研究テーマや当講座のメインテーマを通じて学内外の大学院生の研究指導に当たっている。				
2) 「健康科学科の生化学」臨床検査技師に必須		2006.01.15	大東文化大学新聞「大東文化」健康科学科紹介に対して本学新聞の取材に応じ、「健康科学科の専門科目である生化学」は臨床検査技師教育に必要な周辺専門科目の中心的な科目で重要であることを解説し、同新聞に掲載された。				
3) 学生による授業評価		2006.12.04	大東文化大学 担当科目「生化学」の学生による授業評価では総合評価「授業への満足度」に対しては、ほぼ満足 50% (満足・やや満足は 10%と 40%)、どちらともいえない 37%、不満・やや不満 (6%、11%) 17%という評価であった。細目番号 1～13 の総合評価の平均は評価 72%、改善してほしい 28%であった。この回答結果を考慮すると、生化学は生体成分の性質を理解するのに化学の基礎知識を重視するが、本学科生は受験の際、選択科目として生物学を選ぶ学生が 90%と圧倒的に多く、また文系の二科目受験の学生を受け入れていることなどもあり、化学の高校履修時間が「説明の理解度」を下げている一因とも考えられた。今回の授業評価および上記受験科目の背景を参考にし、「説明の理解度」および「学生の満足度」を高めていく努力をする。				
4) 学生による授業評価		2006.12.05	大東文化大学 担当科目「分子生物学」の学生による授業評価では、恐らく授業内容は難しいと感じている学生が多いのではないかと予想していたが、今回の授業評価の結果は、「教員の説明は分かりやすかったか」(説明の理解度)は評価が 71%、改善してほしい 29%であった。分子生物学は生化学の応用専門科目であるが、総合評価は生化学も分子生物学も概ね同じ評価であった。しかし、「説明の理解度」は分子生物学理解度が生化学よりも高く、前年度に行われた生化学講義の改良点が生かされ、分子生物学の講義の内容が評価された。				
5) 学生による授業評価		2007.12.05	大東文化大学 担当科目「生化学B」の学生による授業評価では、重要な項目は「授業への満足度」である。この項目の結果から約 70%の学生が専門科目としての生化学Bの目的、意図、重要さを理解して貰っていると推察された。好評価は 13 項目中 8 項目、改善して欲しいは 5 項目あり、今後の授業の反省材料とする。				
6) 学生による授業評価		2007.12.05	大東文化大学 担当科目「分子生物学」の学生による授業評価では、重要項目「授業への満足度」の結果から約 80%以上の学生が私の担当する分子生物学に一定の評価をしていると推察できるかもしれない。好評価は 13 項目中 8 項目 (73～83%)、改善して欲しいは 5 項目あり、今後の授業の反省材料として学生の授業への満足度を高めていく。				
7) 学生による授業評価		2008.12.05	大東文化大学 スポーツ・健康科学部健康科学科担当科目「生化学B」の学生による授業評価は 1～3 年前と比べても本質的な差異はないと考えている。理科離れおよび半数を占める推薦入学世代の学習力が反映して、化学を基礎にしている生化学の理解度を上げていくことが課題である。当学科の理系専門科目で共通した課題であり、学科レベルの対策として入学前教育および高大連携を通じて学習力強化を図っていく。現世代に合った躰を含む教育の手法を今後も考慮・工夫して「授業への満足度」を高めていく。				

8) 学生による授業評価	2008.12.05	大東文化大学 スポーツ・健康科学部健康科学科担当科目「分子生物学」の学生による授業評価結果は生化学を基礎にしている科目であるにも拘わらず、分子生物学に対する学習意欲が高い。基礎暗記項目が少なく、概念的な思考が中心である科目ということが反映しているかもしれない。生化学Bと同様に現世代に合った躰を含む教育の手法を今後も考慮・工夫して「授業への満足度」を高めていく。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1) 生化学実習書 2007	2007.04.00	スポーツ・健康科学部 健康科学科 生化学および生化学実習は臨床検査技師、食品衛生管理者、食品衛生監視員、作業環境測定士の国家資格を得る必須科目であり、周辺科目の基礎理論および基礎実習と成る。健康科学科一期生および二期生の講義および実習成績を踏まえて周辺専門科目の理論、実習に役立つよう、体成分および栄養素の成分の定性および定量法、遺伝子工学の基礎実験を総合的に盛り込んだ本格的な実習書を編集した。(編集者 大城聡)
2) 生化学実習書 2008	2008.04.00	スポーツ・健康科学部健康科学科 当健康科学科二次年に実施される生化学実習のオリジナル実習書 2006 の改訂版である。前半部分の実習・実験に関する心構え、レポート作成法、生体成分に関する基礎知識、操作法の内容を再吟味し、学生に好評の後半部分のオリジナルレポートも、項目ごとの実習のポイントが明確になるよう改訂を加えた。(編集者 大城 聡)
3) 平成 20 年度第 1 回臨床検査技師模擬試験	2008.09.00	医歯薬出版 臨床検査技師全国模擬試験の臨床化学の生化学分野の問題を項目別に作成した。
4) 平成 20 年度第 2 回臨床検査技師模擬試験	2008.11.00	医歯薬出版 臨床検査技師全国模擬試験の臨床化学の生化学分野の問題を項目別に作成した。
5) 平成 20 年度第 3 回臨床検査技師模擬試験	2009.01.00	医歯薬出版 臨床検査技師全国模擬試験の臨床化学の生化学分野の問題を項目別に作成した。
6) 生化学実習書 2009	2009.04.00	スポーツ健康科学部健康科学科 健康科学科二次年に実施する生化学実習書 2008 の改訂版である。前半部分の酸素項目の基礎実験部分を増やし、後半のレポート部分の課題に改訂を加え付録とした。(編集者 大城 聡)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 2005 年度課外特別セミナー	2005.05.06	「一年次からの生化学関連・臨床検査技師国家試験対策セミナー」に於いては 2005 年度健康科学科一年生、受講対象者 12 名、に対して 2005 年 6 月 15 日から 12 月 14 日の間、1 回 90 分、15 回実施し、本学より助成金を受けた。一年生で履修する生化学AおよびBの基礎知識で臨床検査技師国家試験が十分に理解でき、解答できる事を実感させ、また周辺科目との関連についても解説した。大城聡
2) 2006 年度課外特別セミナー	2006.06.19	2006 年度健康科学科一年生 20 名に対して「視聴覚教材を用いた入門生化学」を 2006 年 6 月 19 日から 1 月 30 日までの間、1 回 90 分、15 回実施した。アンケート調査の結果、本学科の学生は健康科学をマスターする上で生化学は必須ではあるが、生物と化学の知識を必要とする静的で複雑な学問というイメージを持っていることが明らかになった。そこで、本課外特別セミナーでは主に視聴覚教材を用いて生化学は極めてダイナミックでシンプルな学問であることを平易に解説し、学生の生化学の理解を深めることに努めた。
3) 平成 2007 年度課外特別セミナー	2007.06.05	当健康科学科の二年生を対象に「生化学を英語で学ぼう」というタイトルで 1 回 90 分、15 回実施した。本セミナーでは生化学を英語テキストで学ぶことにより専門用語の本来の意味を理解し、生化学の応用科目である分子生物学や周辺科目の理解を容易にさせ、この知識に基づいてヒトのゲノム(ヒトのひと纏まりの遺伝子)データベースに基づく最新の医科学情報の入手には英語力が必須であることを解説した。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 健康科学科主任代行	2005.05.06	スポーツ・健康科学部、健康科学科、全学協議会に出席し、学科主任を補佐した。大城聡
2) 東松山図書館懇談会議長	2006.05.18	大東文化大学館長から館長代行として東松山図書館運営に関する懇談会議長として指名され、同会議代表委員を招集し、懇談会内規改正、所蔵図書の見直し、除籍、カレンダー案について審議事項を取りまとめた。

3) 東松山図書館選書委員会委員長	2006.05.18	図書館長が招集した大東文化大学・図書館運営委員会（板橋・東松山地区合同）に於いて、東松山地区・選書運営委員長として基本・貴重図書の選書、祝祭日の開館時間の延長、図書館設備およびシステムの点検、見直しに関して図書館長を補佐し、審議事項の意見の取り纏めに当たった。
4) スポーツ・健康科学部健康科学科主任	2007.04.01	学科主任として学科協議会を招集し、学科運営、学科教育・研究等に関する審議事項を取り纏め、学部長が招集する学部教授会に於いて学科協議会に於いて取り纏めた審議事項を報告し、学部執行部として学部長を補佐し、学部運営に当たった。更に大学評議会に出席し、学園執行部より大学運営に関する各学部の連絡調整、その他の重要事項について報告を受け、審議に当たった。
5) 大東文化大学スポーツ・健康科学部 学部長代行	2008.04.01	学部長代行として五月の定例学部教授会を招集し、両学科審議事項等に関して報告を受け、学部運営等に関して審議に当たった。
6) 大東文化大学スポーツ・健康科学研究科専攻主任	2009.04.01	大東文化大学スポーツ・健康科学研究科の専攻主任として研究科委員長を補佐し、研究科運営に当たった。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者、著者名（共著の場合のみ記入）
著書				
1 「アンチエイジング 100のコツ」	分担執筆	2006.06.02	主婦の友社	スイカ果汁に含まれる特効成分「シトルリン」が尿素回路による解毒と利尿作用を高めることによる排尿のダブル作用で、肝臓と腎臓を活性化酸素あるいは老廃物から徹底浄化することによってアンチエイジング効果があることを生化学理論に基づいて解説した（分担執筆 ◎大城聡） p132
2 「血糖値がムリなく下がる 100のコツ」	分担執筆	2008.02.29	主婦の友社	スイカに含まれる生理活性物質が血液を浄化する作用があり、結果的に血糖値を理論的に下げる効果があることを解説した。（分担執筆 ◎大城聡） P86-87
3 「リバウンドなし必ず成功するダイエット 100のコツ」	分担執筆	2008.03.20	主婦の友社	スイカのエキスで体内老廃物や毒素を排出し、水太りを抑えて、基礎代謝を高め、痩せ型に体質改善も可能であることを理論的に解説した。 P118-119
4 飲む・食べる・塗る 手作りサプリ&コスメ	分担執筆	2008.08.31	主婦の友社	「肝臓と腎臓の毒出し機能を後押しするスイカの煮汁」において、肝臓・腎臓機能を高める方法として抗酸化作用を持つスイカの煮汁の作り方、貯蔵法を図、写真をまじえて分かりやすく解説した。（分担執筆 大城聡） p28-29
5 肝機能を高める知恵とコツ	分担執筆	2009.03.31	主婦の友社	「すいかの煮汁 シトルリンが毒素を排出させ体内を元気に」において、すいかのアミノ酸成分であるシトルリンがアミノ酸代謝によって体内に生じるアンモニアを排出して肝機能の負担を軽減する作用があることを紹介した。（分担執筆 大城 聡） p90-91
6 更年期のつらい症状が治る知恵とコツ	分担執筆	2009.04.10	主婦の友社	「すいかの煮汁 利尿作用を促して、むくみ排尿障害を防ぐすいかの毒出し成分」において、すいかの生理化成分をもつ成分であるシトルリンが尿や便を出す作用があることを解説した。（分担執筆 大城 聡） p74-75
論文				
1 PROTEOME ANALYSIS OF TRYPANOSOMA CRUZI CL BRENER, A REFERENCE STRAIN OF GENOME PROJECT.	共著	2006.08.11	(英国寄生虫学会) International Proceedings, 593-596, 2006. 11th International Congress of Parasitology, The British Society for Parasitology in Glasgow, Scotland, United Kingdom on 6th - 11th August, 2006.	ラテンアメリカでは 1600 万人に原虫トリパノゾーマが寄生し、シャガス病を引き起こしている。本研究はWHO世界保健機構および国家プロジェクトにより Trypanosoma cruzi genome project CLB Brener 種を reference として、トリパノゾーマゲノムプロジェクトの一環としてプロテオーム解析を実施した。その結果、同定された約 300 のタンパク質のうち約 140 種類のタンパク質からその遺伝子解析を行った。【共同研究者】：T. Sone, ©S. Oshiro, S. Matsushita and K. Hirayama (レフェリー有)

2	低酸素条件化に於けるプロテオミクスによるストレス・タンパク質の解析	単著	2007.06.00	平成 17 年度～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 報告書 (課題番号: 17500417)	研究代表者: ◎大城 聡 本研究では低酸素ストレスに応答するタンパク質群を二次元電気泳動後に質量分析装置によって解析し、データベース検索によって Heat shock, energy metabolism, nucleotide metabolism, shaperon, unknown protein 遺伝子の発現の増減を見出した。
3	Microglia and astroglia prevent oxidative stress-induced neuronal cell death: implications for aceruloplasminemia	共著	2008.01.00	Biomchimica et Biophysica Acta, Mol. Basis Dis. (インパクト・ファクター: 3.298)	アルツハイマー病やキーンソン病の患者脳には、鉄の蓄積が認められる。特に無セルロプラシミン血症患者脳ではアストログリア細胞 (AS)、ミクログリア細胞 (MG) にも鉄の蓄積が観察されるが、そのメカニズムは不明である。ラット大脳皮質神経細胞、AS、MG を精製し、夫々の細胞の単培養と混合培養細胞の鉄ストレスおよび酸化ストレス刺激に対する神経保護作用を調べた結果、AS は鉄が増殖因子として作用し、MG ではトランスフェリン非依存性鉄輸送系による鉄の取り込みを抑制することにより神経細胞を保護することが示された。この研究は無セルロプラシミン血症患者の病態解析に貢献できるモデル実験である。【共同著者】◎ Satoru Oshiro, Ken-ichi Kawamura, Chan Zhang, Toshio Sone, Shin Kobayashi and Kazuyuki Nakajima Vol. 1782(2), 109-117, 2008. レフェリー有
その他					
1	「血糖値低下、血圧安定にスイカいいってホント」現代医学にて立証	単著	2004.08.11	日刊ゲンダイ	スイカ果汁には利尿作用があるが、さらに果汁に含まれるシトルリンが尿素回路に入り、アミノ酸代謝によって生じたアンモニアを解毒するだけでなく、尿素回路の成分であるアルギニンが代謝されて発生する一酸化窒素によって欠陥が拡張し、血圧が下がって安定化する理論を解説し、また活性酸素測定装置によって測定したデータから顕著な亢酸化能を持っていることを示し、生活習慣病の予防に役立つことを生化学理論で平易に説明した。P27 大城聡
2	酸化ストレスに対する細胞応答ーヘム代謝と細胞内鉄代謝調節ー	共著	2004.09.00	(国内学会) 第 28 回日本鉄バイオサイエンス学会抄録集、酸化ストレス 23、2004 年	細胞は酸化ストレスに曝されるとその防御システムとしてプロテインホスファターゼ依存性、JNK/SAPK リン酸化酵素情報伝達系によってヘム分解酵素を活性化した後、細胞内鉄濃度が低下することが見出された。P.105 【共同研究者】◎大城聡、曾根敏雄
3	Involvement of Heme Oxygenase 1 with Iron Regulatory Protein 1 Activated by Endoplasmic Reticulum Stress.	共著	2004.10.00	(国内学会) 第 77 回日本生化学会抄録集、2004 年	細胞は酸化ストレスに対する防御システムとしてプロテインホスファターゼ依存性、JNK/SAPK リン酸化酵素情報伝達系によってヘム分解酵素を活性化し、この誘導によって細胞質から鉄を細胞外に排出する一方、ヘム分解酵素はヘム分解によって生成したビリルビンの亢酸化作用によって細胞を保護すると結論された。【共同研究者】◎Satoru Oshiro and Toshio Sone p1057
4	ストレス誘導タンパク質・ヘムオキシゲナーゼ 1 によるヘムおよび鉄代謝の調節	共著	2004.12.00	(国内学会) 第 27 回日本分子生物学会抄録集、2004 年	ヒトヘパトーマ細胞は酸化ストレスを受けると MAPK 情報伝達系によってヘム分解酵素を活性化し、この誘導によって活性酸素および細胞内非フェリチン鉄が減少し、鉄濃度センサー IRP 1 が活性化した。この結果から細胞は酸化ストレスを受けると細胞質から鉄を細胞外に排出することによって鉄濃度センサー IRP 1 を活性化し、ヘム分解産物ビリルジンおよびビリルビンの亢酸化作用によって活性酸素を消去し、細胞を保護すると結論された。P601 【共同研究者】◎大城聡、曾根敏雄
5	「有機栽培の秋ウコンの有用性について」	単著	2005.01.00	Macrobioique, No.808, 1 月号 2005	ウコンは肝機能を充める生薬として古くから珍重され、現在も健康食品として親しまれている。著者は野草のさと大月との産学連携共同事業としてウコンに含まれる生理活性物質を探索してきた。ウコンは主成分であるクルクミン以外に必須ミネラルを含む。前者は春ウコンよりも秋ウコンに多く含まれる。国内市場のウコンは有機栽培をしている商品が少なく、食の安全という点で有機栽培の秋ウコンが有である。P12-13 大城聡
6	「スイカの煮汁の特効成分シトルリンが体内の毒素を排出させて排尿障害を改善する。」	単著	2005.03.00	健康 (主婦の友社) 3 月号 2005	スイカ果汁には古くから経験的に利尿作用があることが知られていた。利尿作用が毒素を体外に排泄するのに役立つが、それ以外にシトルリンという成分がどのように毒素の排泄に役立っているか生化学的理論で解説を行った。P104 大城聡

7	スイカの煮汁で毒素排出ースイカの成分「シトルリン」と豊富に含まれるポリフェノールで毒素を排除し、器官が活発になる。	単著	2005.06.00	健康（主婦の友社）6月号 2005	アミノ酸が代謝される過程で生成されるアンモニアは毒性が高いが水によく解けるのでスイカの持つ利尿作用とアンモニアと反応して無毒化するシトルリンとの二つの効果で毒素の排泄に有効であること、また私の最近の研究でスイカにポリフェノールが含まれることが明らかになり、ポリフェノールが活性酸素を消去して三つの作用で器官が活発になることを理論的に解説した。P68 大城聡
8	Proteome analysis of the Trypanosoma cruzi genome project CLB Brener reference train. シャーガス病原寄生虫トリパノゾーマゲノムプロジェクト・プロテオーム解析	共著	2005.08.00	第78回日本生化学会(ワークショップ)	シャーガス病原寄生虫トリパノゾーマはラテンアメリカで年間5万人、が感染し、1600万人患者が存在する。WHO世界保健機構および国家プロジェクトとして Trypanosoma cruzi genome project CLB Brener が reference として選ばれトリパノゲノムプロジェクトの一環としてプロテオーム解析が行われた結果、285スポット中138種類のタンパク質が同定された。【共同研究者】Toshio Sone, Sho Matsushita, Satoru Oshiro and Kenji Hirayama
9	スイカの成分「シトルリン」が毒素の排出を促し、体内を元気に、キレイにする。	単著	2005.08.00	健康（主婦の友社）8月号 2005	スイカ果汁には利尿作用があるシトルリンが含まれる。シトルリンはアミノ酸代謝で生ずる神経毒アンモニアを無毒化して体の恒常性を保つ働きがある。この作用を生化学的理論に基づいて解説した。P114-117 大城聡
10	血管内溶血によって遊離されたヘモグロビンの肝細胞内に於ける代謝ーグロビン部分からのヘムの解離機構ー	単著	2005.09.00	第29回日本鉄バイオサイエンス学会抄録集、セッション No.2	ヘムグロビン(Hb)構成成分であるヘム、ヘム鉄、グロビン部分を ³ H、 ⁵⁵ Fe、 ¹⁴ C、 ¹²⁵ Iで標識し、[³ H-ヘム、 ¹⁴ C-グロビン]Hb、 ⁵⁵ Fe-ヘム] ¹²⁵ I-Hbを作製した。タンパク質分解酵素阻害剤でグロビン分解を抑制しても胆汁中へのヘムとグロビン部分の排泄のピークはズレが生じない事、ヘム分解酵素 H01mRNA の誘導も影響をうけないことから特異的な脱ヘム機構が存在すると推定された。◎大城聡
11	プロテオームによる Trypanosoma cruzi I と Trypanosoma cruzi II 由来タンパク質の異同の解析	共著	2006.05.19	第75回日本寄生虫学会	シャーガス病を発症させる原因原虫である Trypanosoma cruzi は遺伝学的な解析から T.cruzi I と T.cruzi II に大別されるが、今回は前者の代表株 SilvioX-10/7 と後者の代表株 CL Brener の epimastigotes を用いて両者の差異を二次元電気泳動でタンパク質を分離し、質量分析機によってタンパク質およびその遺伝子を解析した。【共同研究者】曾根敏雄、肥後廣夫、大城 聡、松下 詳、平山謙二 p66 2006年
12	排便力、排尿力を高める!	単著	2006.07.01	月刊健康雑誌「健康」7月号 主婦の友社	排便、排尿力を高めると代謝効率が高まり、体調維持に役立つ。肝腎腸がその中心あるが、濃縮スイカエキスはシトルリンに由来するアルギニンから一酸化炭素ガスが臓器血管に作用することによって血液浄化だけでなく、腸の蠕動運動が高まり、排尿、排便効果も期待できることを理論的に解説した。pp78-79、大城 聡
13	「夏に衰える血液浄化器官腎臓をすごく強めてむくみ瀕尿も通風も退ける手作りスイカ糖」	単著	2006.08.01	月刊健康雑誌「わかさ」8月号 わかさ出版	夏の暑さに適応するためには肝腎の機能が重要な役割を担っており、血液浄化と深い関わりあいがある。濃縮スイカ果汁は機能性食品として、むくみ、瀕尿に優れた効果が期待できる自然食品であることを理論的に解説した。pp147-151、大城 聡
14	むくみとダイエットの決定版	単著	2006.08.01	月刊健康雑誌「健康」8月号 主婦の友社	適度なダイエットはメタボリック症候群を予防効果があり、健康を維持に重要である。加熱濃縮スイカ果汁エキスは利尿効果、腸蠕動作用によって基礎代謝量が増加すると推測されており、ダイエット効果が期待できる健康食品であり、特定保健食品と同等の優れた健康食品である。pp131-135、大城聡
15	鉄応答因子のネットワーク解析	共著	2006.09.17	日本鉄バイオサイエンス学会	細胞内鉄制御因子である I R P は関連タンパク質 mRNA の非翻訳領域に存在する I R E と相互作用をすることにより、鉄代謝を鉄イオン濃度依存的に制御する。今回は I R E を持つ遺伝子をネットワーク解析し、トランスフェリン受容体を代表とする鉄応答性因子と疾患関連遺伝子についてその挙動を調べた。【共同研究者】森岡勝樹、荻島創一、大城 聡、田中 博 p56、2006年
16	「大反響! むくみ」	単著	2006.10.01	月刊健康雑誌「わかさ」8月号 わかさ出版	濃縮スイカ果汁エキスによって細胞内外の体液循環が改善され、むくみが解消される理論を解説した。pp60-63、大城聡

17	西瓜糖エキスの抗酸化力	単著	2007.03.01	健康ファミリー2007年3月号	西瓜糖エキスには解毒と排泄の両方の作用があり、抗酸化物質としてリコピン、タンニン含みアンチエイジングが期待できることを解説した。p40
18	尿素サイクルを助けて腎臓を癒すスイカのシトルリン	単著	2007.06.01	健康ファミリー2007年6月号、p40	私達の体内には新陳代謝の結果、産生される神経毒アンモニアは肝臓の尿素サイクルで解毒される。西瓜のエキスにはシトルリンと呼ばれる尿素サイクルの構成物質が含まれており、尿素の産生を助ける。更に尿素は尿として腎臓で排泄されるがこの両方の機能の助ける作用が期待できることを解説した。p40
19	無セルロプラスミン患者脳におけるミクログリアとアストロサイトによる神経細胞死の抑制	共著	2007.09.11	第30回日本神経科学学会大会、第50回日本神経化学学会大会、第17回神経回路学会合同大会（国内学会）	無セルロプラスミン患者脳モデルとなる神経細胞死の抑制に関して抗ストレス酸素遺伝子の発現が必ずしも並行して発現するわけではない新たなメカニズムを見出した。2007年第50回日本神経化学学会大会抄録 p2-d46,p196 【共同研究者】◎大城聡、曾根敏男、森岡勝樹、小林新、中嶋一行
20	Microglia prevent oxidative stress-induced neuronal cell death by suppressing transferrin-independent iron uptake.	共著	2007.09.11	第51回日本神経化学学会大会、第2回アジア・太平洋生物学的精神医学会・第30回日本生物学的精神医学会連合開催（国際学会）	ミクログリアによる神経細胞死の抑制に関して鉄輸送関連タンパク質遺伝子の発現関与する新たなメカニズムが見出された。【共同研究】◎Satoru Oshiro, Masaki Morioka, Kazuyuki Nakajima, 51st Janese Society for Neurochemistry, 2nd WFSBP Asia pacific Congress and 30th annual Meeting of JSBP Bulletin of the Japanese Society for Neurochemistry, Vol. 47, No2,3,p256,2008、
21	Temporary gene expression analysis of hypoxia in human muscle cell	共著	2007.10.01	The Eighth International Conference on System Biology（国際学会）	癌細胞の増殖・転移のモデル実験としてヒト平滑筋培養細胞を培養し、通常酸素環境から低酸素環境下に伴う環境変化に応答して発現・消失する遺伝子をDNAマイクロアレイで解析した。低酸素ストレスに応答する遺伝子の制御する転写因子HIFを中心として糖代謝系、細胞内情報伝達系を三次元的に解析した。【共同研究者】Masaki S. Morioka, Ryosuke R. Ishiwata, Soichi Ogishima, Satoru Oshiro, Hiroshi Tanaka October 1-6, 2007
22	Trypanosoma cruzi I と Trypanosoma cruzi II 間に見出されたアミノ酸置換を伴うタンパク質のプロテオーム解析による同定	共著	2007.12.00	第30回日本分子生物学会、第80回日本生化学会合同大会（国内学会）	Trypanosoma Cruzi は中南米に蔓延するシャーガ病の原因原虫である。遺伝学的解析から T. Cruzi 種は遺伝的に変異に富み、変異を基準にした系統樹の構築により I と II に大別される。T. cruzi の Silvio X 10/4 株では 423 タンパク質、CL Brener 株では 391 タンパク質を同定した。そのうち 127 タンパク質、95 タンパク質はそれぞれの株に特異的であった。MS/MS 解析によってアミノ酸置換の有無を検討した。【共同研究者】曾根敏雄、大城 聡、松下 祥、平山謙二、第30回日本分子生物学会、第80回日本生化学会合同大会講演要旨集、P859
23	Identification of different proteins between Trypanosoma cruzi I and Trypanosoma cruzi II by proteome analysis	共著	2008.04.04	第77回日本寄生虫学会大会（国内学会）	Trypanosoma cruzi に関して更に前回の学会報告より詳しい検討を行った。Silvio X-10/4 において 423 個のスポット、CL Brener において 391 個のスポットを検出した。296 個のスポットは両株に共通であったが、127 個（30%）は Silvio X-10/4 株に、95 個は CL Brener 株に特異的なスポットであった。対象タンパク質の同定は株内あるいは株間で電気泳動的に移動度の異なる主要タンパク質の同定成績について、さらに T. cruzi I と II 間でアミノ酸置換を伴う数種類のタンパク質を同定したのでこれらのタンパク質についても報告した。【共同研究者】曾根敏雄、大城聡、松下祥、平山謙二、第77回日本寄生虫学会大会要旨集 2008 年
24	Microglia-neuron co-cultures suppress transferring-independent iron uptake: Implication for aceruloplasminemia	共著	2008.07.19	2008th Meeting on GLIA IN HEALTH & DISEASE, Cold Spring Harbor Laboratory（国際学会）	ミクログリアによる神経細胞死抑制機構に関して鉄代謝関連タンパク質群遺伝子の発現関与する新たなメカニズムを見出した。【共同研究】◎Satoru Oshiro, Masaki Morioka, Kazuyuki Nakajima, p70, Abstract of papers presented at the 2008 meeting on GLIA IN HEALTH & DISEASE, Cold Spring Harbor Laboratory, Cold Spring Harbor, New York USA

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.04.00	～	現在	日本生化学会会員
2	1991.04.00	～	現在	日本薬学会会員

3	1991.11.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され reviewer として、論評を行った。 Journal of Neurochemistry
4	1998.04.00	～	現在	日本分子生物学会会員
5	1998.11.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Jouurnal of Neurochemistry (Impact Factor 4.604 in 2005 JCI)
6	2000.04.00	～	現在	公的ベンチャー企業「野草のさと大月」研究開発アドバイザー
7	2000.06.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Nutritional Neuroscience (Impact Factor 1.359 in 2005 JCI)
8	2001.01.00	～	現在	日本鉄バイオサイエンス学会会員
9	2001.05.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Journal of Inorganic Biochemistry (Impact Factor 2.423 in 2005 JCI)
10	2001.06.00	～	現在	日本神経化学学会会員
11	2001.10.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Biomedical Research on Trace Elements
12	2002.06.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Comparative Biochemistry and Physiology (Impact Factor 1.456 in 2005 JCI)
13	2002.08.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Nutritional Neuroscience (Impact Factor 1.359 in 2005 JCI)
14	2002.12.00			下記の国際科学誌および国内学会誌の主査から投稿論文の査読を依頼され、論評を行った。 Biopharmaceutical Bulletin (Impact Factor 1.113 in 2003 JCI)

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	太田 眞	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 2004 東京シテイロードレース医事監修		2004.05.00	約 5000 人の選手および大会関係者を対象に、健康相談、体力検査、運動負荷試験を行い健康運動の安全性の面から寄与した。				
2) スポーツ救急医学シンポジウム（千代田区）		2004.05.00	スポーツ医学と救急医療、内科医の立場から				
3) 東京都医師会平成 16 年度前期。健康スポーツ医学講習会		2004.05.00	運動と年齢－内科系 心臓震盪 (Commotio Cordis) コモシオ コルデイス 胸骨、肋骨、心臓に器質的な障害が生じない程度の比較的低エネルギーの打撃が胸部に加わったことによる突然死の現状を解説。				
4) スポーツ医学研修会救急救命講座		2005.07.02	第 16 回日本体力医学会スポーツ医学会 健康科学アドバイザー資格習得のための BLS、AED の実際と実習。				
5) 知っておきたい老後の健康		2005.07.20	葛飾区消費者生活センター保健衛生同好会 老後を健康で向かえるためにはいま何をすべきか教授した。				
6) 免疫力を高め、病気に罹らないようにするには？		2005.07.21	日本医健、ドクターセミナー 予防医学的観点から特にサプリメントを中心に述べた。				
7) 栄養、睡眠、運動などの面から：元気な老後を向かえるために		2005.09.16	葛飾区消費者生活センター 老後の健康を運動、休養、食育の面より考えた。				
8) 運動、食事の実際：元気な老後を向かえるために		2005.09.30	葛飾区消費者生活センター 実際の運動処方を作成し、実技としてボール体操を行った。				
9) 運動と年齢－内科系		2006.05.14	東京都医師会 平成 18 年度（前期）健康スポーツ医学講習会 身体の成長と老化に伴う各種身体的変化と運動に対する反応の特徴につき理解する。a) 発育、発達の概要 b) 呼吸、循環系 c) 内分泌代謝系 d) 体温調節系。身長成長速度曲線のパターンによる成長期の区分歴年齢からみた身長成長速度曲線（男子）・老人、老化の言語は、加齢とともに起こる機能低下を暗示しているがその変化は、加齢とともに「個体差」が大きくなる。				
10) AED の現状、医事監修		2006.06.03	2006 あきるの 24 時間走チャレンジカップ AED の現状と実際。24 時間持続走行する選手および関係者に AED の使い方と CRR の必要性を説明した。				
11) スポーツ医学研修会 救急救命講座		2006.07.08	第 17 回日本体力医学会スポーツ医学会 健康科学アドバイザー資格習得のための BLS、AED の実際と実習。				
12) 運動負荷テストと運動処方		2006.07.09	東京都医師会 平成 18 年度（後期）健康スポーツ医学講習会 安静時には認められない心血管系の異常を、運動という最も身近で生理的な負荷を身体に与えることより明らかにする。虚血性心疾患、とくに狭心症の診断、疾患の重症度ならびに予後判定、治療効果の判定、心筋梗塞後の再発予防のための運動処方の作成、予防医学的観点からの運動処方作成。				
13) AED を配備したスポーツ救急体制 東京都医師会健康スポーツ医会より派遣		2006.10.15	第 11 回東京都シニア健康スポーツマラソン AED の必要性和現状。東京都医師会健康スポーツ委員会では、高齢者のスポーツ現場では特に応急手当のための迅速な体制が必要であると提言しており、その一環として本大会に健康スポーツ医を派遣している。				
14) AED の効果		2006.11.23	第 2 回武蔵野ふれ愛ラン&ウォーク 全国で始めて健康スポーツ医の再教育（運動処方の作成と負荷試験の実際）を行った。				
15) 医事監修 健康管理		2006.11.25	第 31 回河口湖マラソン 競技前の健康管理と競技中のリスク管理。CPA に対する啓蒙。他学部、他大学の健康科学科、医学科、救急救命科のコラボレーションを図る。				
16) 医事監修 スポーツ外傷、救急処置		2007.03.18	第 10 回荒川市民マラソン 競技前の健康管理と競技中のリスク管理。一般市民ランナーの医学的サポート。				

17) 医事監修、スポーツ外傷、救急処置	2007.03.18	第10回荒川市民マラソン(東京都医師会健康スポーツ医会より板橋区医師会へ派遣) 競技前の健康管理と競技中のリスク管理 一般市民ランナーの医学的サポート
18) AEDを配備したスポーツ救急体制	2007.03.23	伊豆大島 100Km マラソン AEDの必要性和現状。行政職員および大会関係者、参加選手の対してCPRの必要性和AEDの効用につき説明、実習を行った。
19) AEDを配備したスポーツ救急体制	2007.03.23	伊豆大島 100Km マラソン(東京都大島町) AEDの必要性和現状。行政職員および大会関係者、参加選手の対してCPRの必要性和AEDの効用につき説明、実習を行った。
20) AEDの現状と実際	2007.06.02	2007あきるの24時間走チャレンジカップ AEDの必要性和現状。行政職員および大会関係者、参加選手の対してCPRの必要性和AEDの効用につき説明、実習を行った。
21) AED、BLS講習会	2007.12.22	第2回神宮外苑24時間走チャレンジカップ 新宿区民にAED、BLS講習会
22) 一般市民ランナーの医療サポート救急体制管理。	2008.01.13	第9回谷川真理ハーフマラソン(キタハーフマラソン) 医事。健康科学科 学生実地指導。(国内最大級の市民ハーフマラソン)
23) AEDの必要性和現状。	2008.03.16	第11回荒川市民マラソン(東京都医師会健康スポーツ医会より派遣) 東京都医師会健康スポーツ委員会では、スポーツ現場では応急手当のための迅速な体制が必要であると提言しており、その一環として大規模市民マラソンの地区医師会の役割を概(国内最大級の市民フルマラソン)
24) 第11回ひの新撰組祭り 日野市役所健康測定	2008.05.11	日野市役所にてマラソン参加選手、および市役所職員および大会関係者に対し、健康測定を行った。項目は血圧、尿検査、呼吸機能検査等である。健康科学科3年、4年の学生が担当し実技の実践にもなった。
25) ウォーキングと健康づくり 東京都目黒区健康セミナー	2008.05.20	運動、栄養、睡眠、などの面から元気な老後?を向かえるためにいま何をすべきか?有酸素運動の効用と実践。
26) 第4回 谷川真理駅伝 医療救護活動	2008.05.25	1区5Km20キロ市民駅伝。6000名参加。日体協スポーツ医と共同で過呼吸症候群、呼吸困難、てんかん様発作のスポーツ選手を救護した。学部学生指導。救護、救急隊の援助。
27) 東京都医師会 平成20年度(前期)健康スポーツ医学講習会	2008.05.25	運動と年齢—内科系。少子化、高齢社会における運動療法の考え方。身長成長速度曲線のパターンによる成長期の区分歴年齢からみた身長成長速度曲線(男子)・老人、老化の言語は、加齢とともにこの機能低下を暗示しているがその変化は、加齢とともに[個体差]が大きくなる。
28) 第5回 谷川真理駅伝 医療救護活動	2008.05.25	1区5Km20キロ市民駅伝。6000名参加。日体協スポーツ医と共同で過呼吸症候群、呼吸困難、てんかん様発作のスポーツ選手を救護した。学部学生指導。救護、救急隊の援助。救急車搬送者は2名であり2日間の入院後無事退院した。
29) 最新医療を考える:アスリートのリスクマネジメント(健康管理)	2008.06.16	東京女子医大医師会員に対しアスリートにみられる病的現象と特殊環境のスポーツ医学を講演した。具体的には運動誘発性気管支攣縮、熱中症の管理など。
30) 第8回にちなん おろち100Kmマラソン全国大会	2008.06.21	鳥取県日南町が主催する100Kmマラソンの医事監修および救護システム作りを担当。また韓国より数多くの参加者がある。体調管理、健康管理に主点を置く。競技当日は町立病院の医師、看護師、医療スタッフが各配置についている。
31) 第19回日本体力医学会スポーツ医学会(東京)スポーツ医学研修会救急救命講座	2008.07.05	日本体力医学会認定健康科学アドバイザー資格習得のためのBLS、AEDの実際と実習。スポーツ現場におけるAEDの役割と現状。
32) 東京都医師会 平成20年度(後期)健康スポーツ医学講習会I	2008.07.27	運動負荷試験の実際。健康スポーツ医に必要な運動生理学の基礎および臨床運動負荷検査医学の修得。
33) 東京都医師会 平成20年度(後期)健康スポーツ医学講習会II	2008.07.27	運動処方概論。運動処方とは?運動処方の必要性。運動処方の構成要素。運動処方に必要な情報と運動処方の流れ。運動の様式別運動処方。運動の頻度と時間。筋力・筋持久力につき東京都医師会会員に解説した。
34) 彩の国 大学コンソーシアム公開講座2008(埼玉)楽しく続けるエクササイズ(パートII)—AEDとともに10年後の私たち?—	2008.09.13	今年4月から「メタボリック・シンドローム」の特定検診・保健指導が始まった4人に1人が指導の対象になるとのことで現場は大変混乱している。10年後の私たちの将来を鑑みると、今なすべきことは何か?いかにこの時期が大切か!不安のみを抱えている場合ではない。セーフティネットの実践として究極の事故である「突然死」への対策。AED(自動体外式除細動器)の意義。

35) 第13回東京都シニア健康スポーツマラソン: AEDを配備したスポーツ救急体制。東京都医師会健康スポーツ医会より派遣	2008.10.05	AEDの必要性と現状。東京都医師会健康スポーツ委員会では、高齢者のスポーツ現場では特に応急手当のための迅速な体制が必要であると提言しており、その一環として本大会(国立駒沢陸上競技場)に健康スポーツ医を派遣している。また学科学生の実践教育を同時におこなう。		
36) 元気で長生き健康談話	2008.10.25	東京都伊豆大島町の某地区にて住民を対象に健康談話、健康相談、AEDの講習会を行った。		
37) 第31回日刊スポーツ河口湖マラソン医事監修。健康管理、健康測定。	2008.11.29	2008年11月29日、30日。1万人以上の参加者がある国内最大の市民マラソン。競技前の健康管理と競技中のリスク管理。血圧、尿検査、肺年齢、酸化ストレス、抗酸化力。筋肉量。体脂肪など本学学生が測定した。CPAに対する啓蒙。他学部、他大学の学生教育。健康科学科、医学科、救急救命科のコラボレーションを図る。		
38) 第1回御神火マラソン医事監修。健康管理、健康測定。	2008.12.23	2008年12月23日、24日。東京都伊豆大島地区婦人会の健康セミナー健康管理と競技中のリスク管理。		
39) 東京都港区医師会健康スポーツ医会第53回学術講演会活性酸素と運動療法: その理論と実際・臨床応用は可能か?	2009.01.29	近年、活性酸素フリーラジカルの研究が進み、老化や各種疾患との関連性が明白になってきた。過剰に発生した活性酸素素やフリーラジカルは様々な病態に関わっており、これらが関与しない疾患は存在しないとまで言われている。その一つである動脈硬化はその危険因子である脂質代謝異常、高血圧症、糖尿病、喫煙により血管内皮細胞が傷害を受け血管内皮機能は低下する。つまり血管内皮機能を評価することは動脈硬化の未病診断、前段階、治療効果が判明し予防医学上極めて有意義である。		
40) 第10回板橋区荒川市民マラソン医事監修。スポーツ外傷、救急処置東京都医師会健康スポーツ医会より派遣	2009.03.18	AEDの必要性と現状。行政職員および大会関係者、参加選手の対してCPRの必要性とAEDの効用につき説明、実習を行った。板橋区医師会員、帝京大学医学部救急医学講座と本学健康科学科の共同救護。活性酸素の測定により病態の把握がより定量化できた。		
41) 伊豆大島100Km マラソンAEDを配備したスポーツ救急体制および健康セミナー	2009.03.29	東京都伊豆大島町にて救急救命講座を開催し、AEDの講習会を町民、婦人会、役場関係者に実践した。		
2 作成した教科書、教材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
1) AEDについて	2006.03.06	東京都病院薬剤師会診療所部会例会 AEDの必要性と現状		
2) 区民の運動療法初回評価と効果判定の最前線	2006.03.11	東京都港区医師会健康スポーツ医実行部会実習再研修会 全国で始めて健康スポーツ医の再教育(運動処方書の作成と負荷試験の実際)を行った。		
II 研究活動				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 臨床検査技師。ポケット・レビュー帳 循環系検査レビューポイント		2007.12.01	メジカルビュー社	臨床医学における循環器系検査のポイントを網羅し、現在、汎用されている検査や今後、現場に登場する可能性の検査内容を簡潔にまとめた。
論文				
1 医師が注目するウォーキングの健康効果			ウォーキングの基本(これで身も心も軽くなる) JTBパブリッシング	運動しない現代人に対し運動療法としてのウォーキングの効用を紹介する。

2 透析患者の心筋症の成因と病態	共著	2004.00.00	腎と透析 56:69-75。(2004)	<p>太田眞、中田佳延、望月正武。本邦の透析患者は23万人を越え、それに伴い腎不全の基礎疾患の変遷、高齢化および長期透析例の増加も加速度的である。同時に「心筋症」の疾患概念、分類の改正も随時行われてきた。そのため透析患者と心筋症の関係に大きな変化がみられる。「透析患者の心筋症」というと尿毒症性心筋症(UCM)という疾患が頭に浮かぶが、この概念は透析療法が普及する以前のもので、尿毒症期つまり透析前の病態を指していた。安全な透析療法が確立し一般に普及した現在、果たしてUCMがどれだけ臨床的に意味をなすかはなはだ疑問である。さらに今日までUCMに関する統一見解がなかったことも問題点として挙げられる。筆者らは透析療法中に合併した拡張型心筋症(DCM)類似心臓を「透析心」として経過を見てきたが早期に発見し適切な管理により重症な虚血性心疾患に比較し予後は比較的良好であった。すなわち実地医療の場で心筋症を早期に発見して専門的な処置をとる必要性を痛感している。本論文では心筋症の分類および臨床症状と透析患者の関連につき検討した。</p>
3 核家族における急死への対応	単著	2004.00.00	修世会学会誌 6:1-13(2004)	<p>太田眞。「突然死への対応の必要性」「新しい心肺蘇生法」を紹介する。目の前で突然ヒトが倒れた場合の対応。Chain of Survival(救命の鎖)ヒトを助けるには四つの連携プレーが必要でこの鎖のどこが切れても社会復帰はむずかしい。脳血管障害は、日本では非常に多い疾患であるが、1分1秒を争うとなると心臓の問題が突然死の原因として重要である。近年、一人住い、あるいは二人暮らしの核家族化が大幅に進んでいる。そして二人以下の世帯、あるいは65歳以上の一人暮らしなどが多くなることは明らかである。これを加味して、緊急時にどうやって対応するか? 巳年生まれの男性、女性を見ると12歳、24歳、36歳、、何と人口の一番多いのは巳年生まれの60歳である。2000年にガイドラインが改定になって3年経つ。このガイドラインは一般市民のものではなく、健康管理者のガイドラインである。health care providerに対するガイドラインでmouth to mouthではなくてバックマスクを確実に使用するべきである。最低でもchest compression onlyという考えもある。AED(半自動型除細動器)死の四重奏(上半身肥満、高血圧、高中性脂肪血症、耐糖能異常)という概念も強調した。動脈硬化が急速に進んで、急性突然死つまり心臓病の可能性が出てくる。</p>
4 超長時間持続的運動における中枢性疲労の生化学的検討ー24時間ランニングの脳疲労ー	原著論文	2005.00.00	臨床病理 2005;53:802-809.	<p>超長時間持続走行の脳に及ぼす影響をセロトニン仮説を基に、24時間実験ランニング参加者15名を対象として血中セロトニン、メラトニン、f-Trp、遊離脂肪酸および尿中BPnの測定を、スタート前(午前)、競技中翌日深夜、24時間走行直後(ゴール直後)に行った。同時に日本語版POMSテストを併用し以下の結論を得た。血中セロトニンは変化無く、血中メラトニンは深夜に増加し、血中f-Trp、遊離脂肪酸、尿中BPnは運動量とともに増加した。POMSテストでは疲労得点は増加し、活気(活動性)得点は競技前後でも高く、怒り、敵意の得点は低かった。血中f-Trp値と尿中BPn値および疲労得点と尿中BPn値は有意に関連し、自覚的疲労状態の程度はBPnに反映されていた。以上より断眠にて24時間ランニングを継続するという状況下では脳疲労が惹起されることが推測され活性酸素の影響が示唆された。</p>
5 透析患者における心不全の病態と危険因子	その他	2005.00.00	HD Network 透析医療 2005;13:2-4.	<p>きわめて多彩な危険要因が複雑に絡み合っている病態こそ透析患者の心不全の特徴である。従って日常の体液管理以外に各症例毎に主要因をひとつひとつチェックし、改善の努力を重ねていく必要がある。</p>
6 尿中バイオピリン測定の基礎的検討およびストレスマーカーとしての有用性について	原著論文	2006.00.00	検査医学 2006;55:191-195.	<p>ビリルビンと活性酸素との最終反応生成物バイオピリンBPnは尿中に排泄され、さまざまな要因による酸化ストレス下で排泄量が増加する。尿中BPn測定試薬として開発されたバイオピリンEIA Kitを用いその基礎的検討および酸化ストレスの指標としてのBPnの有用性について肉体的、精神的にも過酷な24時間ウルトラマラソン参加選手の尿中BPnの動態につき検討した。その結果、尿中BPnの排泄量の増加は生体内の酸化状態を反映し、BPnがストレスマーカーとして有用であることが実証された。</p>

7	今さら聞けないモニター心電図 モニター心電図かんたん・マスター：急変で出会う不整脈事例上室性期外収縮	その他	2006.00.00	エキスパートナース 2006;22:84-89.	新人ナースを対象に急変で出会うモニター不整脈の事例（上室性期外収縮）の波形の特徴、症状、治療とケアのポイントを記述した。
8	アウトドア・インドア心臓救急（その事例と一次救急対処法）		2006.00.00	診断と治療 2006;94:1441-1447	救急事例の情報源の内訳を検討し、失神、ニアミス、突然死などをおこすきっかけを探る。またAEDのあるべき姿を述べる。
9	今さら聞けないモニター心電図 モニター心電図かんたん・マスター 急変で出会う不整脈事例上室性期外収縮		2006.00.00	エキスパートナース 2006;22:84-89.	新人ナースを対象に急変で出会うモニター不整脈の事例（上室性期外収縮）の波形の特徴、症状、治療とケアのポイントを記述した。
10	尿中バイオピリン測定の基礎的検討およびストレスマーカーとしての有用性について		2006.00.00	検査医学 2006;55:191-195	安藤 隆、小野安雄、堀口新悟 太田 眞平井徳幸、武田信彬 ビリルビンと活性酸素との最終反応生成物質バイオピリン BPn は尿中に排泄され、さまざまな要因による酸化ストレス下で排泄量が増加する。尿中 BPn 測定試薬として開発されたバイオピリン EIA Kit を用いその基礎的検討および酸化ストレスの指標としての BPn の有用性について肉体的、精神的にも過酷な 24 時間ウルトラマラソン参加選手の尿中 BPn の動態につき検討した。その結果、尿中 BPn の排泄量の増加は生体内の酸化状態を反映し、BPn がストレスマーカーとして有用であることが実証された。
11	Valsartan in a Japanese population with hypertension and other cardiovascular disease (Jikei Heart Study): a randomized, open-label, blind end point morbidity study		2007.00.00	Lancet 2007;369:1431-39	Seibu Mochizuki, Ikuo Taniguchi, Katsunori Ikewaki, Makoto Ohta, et al Valsartan will improve morbidity and mortality when added to conventional therapies in Japanese patients with hypertension and cardiovascular disease. For the first time, the clinical benefits of valsartan added to the benefits from blood pressure control, are extended to an Asian population. The JIKEI Heart Study results are highly relevant to clinical practice. We have to consider not only aggressive blood pressure control but also which blood pressure drug is the best choice to prevent outcomes
12	シチュエーション別にステップアップ。ドクターXの心電図スクール。(入院中のトイレで急変)		2007.00.00	ハートナーシング 2007;20.(11):6-11	洞不全症候群 (SSS : Sick Sinus Syndrome) は自覚症状と徐脈性不整脈の心電図が一致したときの診断は容易である。III 型：徐脈・頻脈症候群の症例を提示し、心電図の特徴を解説し、ナースの対応、ペースメーカ治療の適応につき述べた。
13	狭心症発作(12誘導心電図)		2008.00.00	ハートナーシング 2008;21.(21):11-17、メディカ出版	冠動脈の器質的狭窄に基づく労作性狭心症では、運動・興奮に伴う酸素需要の増大によって虚血に陥り、ST が低下し、安静により症状も心電図変化も回復する。一方、冠動脈の攣縮に基づく異型狭心症では、安静時・睡眠中に起こる発作時に ST が上昇し、自然に回復する。いずれもニトログリセリンが奏効する。ST 低下は心内膜下虚血を反映し、ST 上昇は心筋梗塞と同様に心外膜下に及ぶ心室壁全層の虚血を反映する。つまり貫通性の強度な虚血の場合は ST が上昇極めて危険な状態である。症例を定時し解説した。
その他					
1	24 時間ランニングにおける生体適応(超長時間持続運動)は中枢性疲労(脳疲労)をもたらす	講演	2005.06.11	第 9 回日本適応医学会	24 時間マラソンでは血中セロトニンは変化なく、血中メラトニンは夜間に著明に上昇し朝に低下した(生理的日内変動)。血中遊離型トリプトファン (f-Trp)、尿中バイオピリン (BPh) も運動量とともに増加した。アンケートにおける(眠気とだるさ)(注意集中の困難)(身体違和感)は運動量(時間)とともにスコアは増加した。血中 f-Trp と尿中 BPn は関連があり、自覚症状として(身体違和感)の程度が反映し、(集中困難)と関係はなかった。以上、脳疲労の血中マーカーと運動誘発性酸化ストレスのバイオマーカーは関連性があった。断眠にて 24 時間ランニングを継続するという状況下では脳疲労が惹起されることが推測される。
2	AED の現状(ランチオンセミナー)	講演	2005.07.25	第 16 回日本運動生理学会	AED の現状と実際

3	250Km ウルトマラソンにおける一過性尿円柱	講演	2005.09.20	第 60 回日本体力医学会	250Km ウルトマラソン (36 時間以内、名古屋—金沢間) の腎負荷の程度を尿沈渣所見を中心に検討した。その結果、糸球体濾過量 (MDRD Study による) と顆粒円柱の程度には関連性が示唆された。またゴール直後の血液生化学データ (CRP,CK,AST) とは関連性は認めなかったが尿蛋白、潜血、ケトン体が陽性となり、尿中電解質では Na、CL 排泄は減少し、翌日もその傾向は持続し、ゴール直後では K、Pi 排泄増加が認められた。250Km ウルトマラソンでは腎糸球体障害が危惧されたが速やかに改善し生体適応の一端を鑑みた。
4	250Km ウルトマラソンにおける生体応答：血液生化学的変動の推移	一般発表	2005.11.06	第 16 回日本臨床スポーツ医学会	250 km ウルトマラソン (U) では競技中、直後の身体事故時の救急病院での異常値の過剰評価や競技数日後の検診時の異常を指摘されることが多い。(U) の生体応答とくに血液生化学の自然経過としての推移を熟知しておくことは臨床医学的および危篤管上で重要と考える。2 名 (39 歳男性・41 歳女性) の計 9 回の完走時の血液検査を経時的に施行した (前、直後、3 日、7 日後)。前後で心エコー図、12 誘導心電図を測定。不眠不休で走行し時間は平均約 29 時間。環境条件は温度差が約 15℃、高低差は 900m で極めて厳しい過酷な自然下で行われた。白血球、CRP、CK、ミオシン軽鎖 I、AST、ALT、LDH、ノルアドレナリン、BNP (脳性ナトリウム利尿ペプチド) は直後で増加した。骨格筋障害と思われる生化学的異常高値の回復過程は速やかであった。心機能の低下を認めるも、その回復過程は今後の検討が必要であった。症例により血清 CK 値は記録と関連が認められた。
5	運動負荷様式の相違における酸化ストレス応答フリーラジカル自動分析装置を用いて	一般発表	2005.11.19	第 52 回臨床検査医学会	軽量かつ迅速的であるフリーラジカル自動分析装置 Free Radical Analytical System (FRAS4) が開発された。本法により高酸問欠的運動と持続的有酸素のストレス応答の相違があるか否かを検討した。その結果、酸化ストレス応答が異なっており、本法による酸化ストレスの程度は、従来より我々が測定している尿中パイピリンなどとは異質なマーカーと推測された。
6	非対称形状タイヤのドライバーに及ぼす影響	一般発表	2005.11.20	第 52 回臨床検査医学会	運転中のストレスや疲労は交通事故の原因となり、その全体の約 4 割は疲労による運転ミス、集中力欠如などが含まれる。今回、最適化された非対称形状のタイヤ (P) 使用により、道路の凹凸での横力変動が抑制され、車の安定性が向上することが判明した。このことがドライバーの疲労・ストレスを軽減する方向につながれば安全運転に寄与できる可能性がある。しかし、日常運転中のストレスの評価はそのコース条件などが変化し極めて困難である。今回、一定特殊条件下で (P) の生体応答につきホルター心電図による周波数領域解析法を用いて検討した。その結果、(P) 装着時は全例でストレスの指標となる LF/HF (交感神経機能の指標) 値が高くなることはなく従来タイヤに比較しリラックスして運転していることが判明した。
7	運動負荷様式の相違における酸化ストレス応答フリーラジカル自動分析装置を用いて		2006.06.23	第 10 回日本適応医学会	フリーラジカル自動分析装置 (FRAS4) による酸化ストレス度は運動負荷様式によりその応答に相違が認められ、スポーツ現場でスポーツ選手の酸化ストレス度と抗酸化力を短時間で迅速に測定可能で、選手の状況把握に有用であった。今後は self testing を含め point of care testing (POCT) としての臨床的役割が期待される。
8	どう見るあぶない不整脈 みきわめのコツとナースの判断・医師への伝え方		2006.07.16	モニター心電図の見方と読み方必要などからやる心電図かんたんマスター法 I	現場の看護師にとってモニター心電図の理解は極めて重要であるものの緊急時の判断には困難である場合が多い。本講演では実際のモニター心電図を見ながら①心室頻拍②心房粗細動③完全 (3 度) 房室ブロック④ペースメーカー心電図の実際とケアにつき講義した。
9	こんなときどうする？急変事例で見る波形がおかしい時の対応		2006.09.03	モニター心電図の見方と読み方必要などからやる心電図かんたんマスター法 II	危険な不整脈を素早く判断し処置の準備をする専門性が要求される。①早い心房細動→心不全②心室期外収縮→V T→V F への移行→電氣的除細動③洞不全症候群→長い心停止→右室ペーシング④S T 上昇→ニトログリセリンの準備→12 誘導心電図の症例に対し緊急対応を解説した。

10	ウルトラマラソン中毒の現状(アンケート調査による)		2006.11.02	第17回日本臨床スポーツ医学会	第8回から第16回の本学会にて250Kmウルトラマラソンおよび24時間走の生体応答を報告した。近年、「あなたはウルトラマラソン(U)中毒か?」そんな気がするほど競技人口および大会が増加してきた。スポーツは健康的な体を作るが、スポーツをしないと気がすまないといった「スポーツ中毒」陥ると、身体や精神に障害を生じる。しかしながら、その診断基準や治療法は統一されていない。このことは(U)に関しても当てはまることはないであろうか?今回は(U)中毒の可能性につき検討した。その結果(U)中毒ではない17%、(U)依存性が高い67%、やや(U)中毒である9%、(U)中毒7%であった。年齢とスコアは関連がなかった。(U)歴とスコアは有意の相関(p<0.01)を認めた。(U)中毒選手はベテランが多いが例外も認めた。
11	48時間持続ランニングの酸化ストレス応答とスポーツ中毒調査-フリーラジカル自動分析装置を用いて-		2006.11.10	第53回日本臨床検査医学会	第46回から第52回の本学会にて250Kmウルトラマラソンおよび24時間走の生体応答(心筋疲労、末梢疲労、中枢疲労)を報告した。近年、48時間、6日間、それ以上の時間をかけて走行距離を競う大会が世界的に開催されている。本邦でも先週、第2回48時間走が開催された。2日間も絶え間なくランニングすることは生体にとって多大なるストレス発生(高度酸化ストレス)が予想される。一方、「あなたはウルトラマラソン(U)中毒か?」そんな気がするほど競技人口および大会が増加してきた。スポーツは健康的な体を作るが、スポーツをしないと気がすまないといった「スポーツ中毒」に陥ると、身体や精神に障害を生じる。しかし、その診断基準や治療法は統一されていない。このことは(U)に関しても当てはまるであろうか?ウルトラマラソンでもスポーツ中毒選手が多く存在する可能性がある。競技参加に時間と投資は惜しむことなく、悪条件の天候でも競技に出場することが特徴である。今後はより適切な判定法の検討が求められる。
12	地区医師会と連携した区立健康増進センターにおける10年間の追跡調査		2007.05.26	第30回日本プライマリ・ケア医学会、宮崎。	共同発表者 太田 眞、高岡邦子、長谷川洋、山内 潤、稲次潤子、小笠原定雅、小原 誠、中村葉二、小原 誠 東京都港区医師会では平成8年より区立健康増進センターにおいて健康スポーツ医が運動負荷試験に基づき運動処方を作成し、区民の運動療法の実践に参画している。このような健康スポーツ医指導下による10年間の地域運動療法の継続は、体力保持に有効で新たな疾病発生の予防や生活の質の向上に寄与した可能性があった。
13	健康科学アドバイザー資格習得のためのBLS、AEDの実践と実習。		2007.07.07	第18回日本体力医学会スポーツ医学会(東京)スポーツ医学研修会救急救命講座	スポーツ現場におけるAEDの役割と現状。
14	大相撲ぶつかり稽古における生体応答	共同発表	2007.09.18	第63回日本体力医学会学術集会(大分)	同意を得た大相撲力士8名(年齢は平均20.8±3.9歳:15歳から25歳:序の口2名、序二段3名、三段目1名、幕下2名)に稽古前、ぶつかり稽古直前、直後、稽古終了1時間後に採血を行い、運動により発生した血中ヒドロペルオキシド濃度を呈色させ分光光度計で測定した。抗酸化力は鉄イオンを含む試薬を血液に混合し、Fe3+がFe2+に還元される量を呈色反応により測定した。
15	超長時間持久的負荷は呼吸機能に影響をおよぼすか?	共同発表	2007.09.19	第63回日本体力医学会学術数回(大分)	24時間走(24h)完走者12例に対しa)スタート直前b)ゴール直後に簡易スパイロメトリーを施行し呼吸機能を、随意尿にて尿中バイオピリン(酸化ストレス度の指標:BPn、HPLC)を測定した。%VC:実測VC(vital capacity)/予測VCx100(%)は24hではa)106±2.4 b)95±4.5、48hではa)113±7.7 b)104±10.0でいずれもゴール直後有意に低下した(P<0.05)。しかしながらEFV1(Gaenslerの1秒率)、MMF(最大呼気中間流量)、PEF(ピークフロー)、V25/H(25%における呼気流量/身長)は競技前後で有意な変化はなく、閉塞性、拘束性換気障害も認められなかった。BPnは24hではa)1.0±0.15 b)2.35±0.38、48hではa)1.37±6.21 b)2.6±0.34(U/gCr)(HPLC)とゴール後に有意に増加(P<0.01)したが、%VCの低下の程度との関連性は無く、24h,48hの差異も認めなかった。

16	楽しく続けるエクササイズ(10年後の私たち? AEDとともに)		2007.09.22	彩の国 大学コンソーシアム公開講座 2007 (埼玉)	10年後の私たちは元気で生活しているのでしょうか?心配です。今なすべきことは? 今日から運動(エクササイズ)を開始。そして楽しむことは継続する点から重要です。「生活習慣病」や「メタボリック・シンドローム」の予防や克服には欠かせない。今回10年におよぶ運動習慣の継続が身体におよぼす効果につきデータを提示し、一方では安全に対する配慮も必要。究極の事故は「突然死」。その多くは心室細動という不整脈が原因ですが、皮肉なことに運動不足がこの危険な不整脈の背景にある。配偶者が「突然気分が悪くなり立ちすくみ倒れ、呼びかけに答えなくなった」と想定してあわてず心肺蘇生、AED(自動体外式除細動器)を用いた応急手当の方法と実情につき解説。
17	大相撲と各種競技選手における酸化ストレス、抗酸化力応答の相違(フリーラジカル自動分析装置を用いて)	共同発表	2007.11.01	第19回日本臨床スポーツ医学会(千葉)	各種競技選手の酸化ストレス度(D)、抗酸化力(B)を測定し、激運動スポーツである大相撲との相違点を明らかにし、相撲稽古の中で特に「ぶつかり稽古」につき酸化ストレスの面から身体に及ぼす影響を検討した。安静時のDは駅伝、スキー<アメフト<柔道<大相撲、ウルトラマラソンで小であり、Bは駅伝、スキー>柔道>アメフト>大相撲の順に大であった。運動後のDの増大はウルトラマラソン>大相撲>スキー>アメフト>柔道で増大し駅伝では減少した。Bはスキー>アメフト>柔道>大相撲で増大し、駅伝では変化は乏しかった。ぶつかり稽古はDの増加は大で、Bの増加は軽微であった。国技である大相撲では他競技と比べ酸化ストレス、抗酸化力応答に相違が認められた。
18	健康スポーツ医の活動の場としての区立健康増進センターの役割		2007.11.03	第18回日本臨床スポーツ医学会、大分。	共同発表者 太田 眞、高岡邦子、小笠原定雅、小原 誠、中村葉二 日本医師会認定健康スポーツ医制度が発足してから15年以上が経過し、当時から「活動の場がない」、「経済的メリットがない」という声が多かった。しかし自治体からスポーツ医としての活動依頼があっても、地区医師会としてその要請の受諾は必ずしも容易ではなかったように思える。東京都港区医師会では制度発足と同時に健康スポーツ医会、スポーツ医実行部会を組織し、自治体の健康増進事業に参加して10年目を迎えた。来年4月から住民健診が、保険者に義務付けられた特定健診・特定保健指導となる。これを機に我々の経験した長期運動療法の効果を検討し、健康スポーツ医の役割について考察した。ハイリスクアプローチが必要となった今日、地域住民の健康づくりには行政と地区医師会の健康スポーツ医が力を合わせていくことは極めて有用であった。
19	250Km ウルトラマラソンは腎傷害を惹起させるか?		2007.11.24	第54回臨床検査医学会、大阪。	共同発表者 太田 眞、清水智美、今西昭雄、鈴木政登ほか。慢性腎臓病(CKD)の早期発見には、検尿と腎機能評価が必須である。腎障害の指標としての尿蛋白検査法があるが250Km ウルトラマラソン(36時間以内、名古屋-金沢間)(U)および24時間走(トラックを24時間不眠不休で回周し走行距離を競う競技)ではゴール直後の蛋白尿は効率に認められ運動誘発性の生理的所見と考えてきた。第46から53回の本学会にて(U)および24時間走での心筋疲労、脳疲労、酸化ストレスの程度につき報告したが、このようなウルトラマラソンの現場ではゴール後に肉眼的に血尿、褐色尿、黒色尿を経験し運動量の過激さがもたらす一過性の腎障害が危惧された。走行前に潜血尿が認められ競技直後に血尿となり精査にて膀胱結石が判明した例も経験した。今回は腎負荷の程度を心身疲労度や尿沈渣所見を中心に検討した。その結果(U)では一過性の腎糸球体障害が危惧され、日常の尿検査は定期的に必要と思われた。
20	競技前の健康管理と競技中のリスク管理 Japan-Vietnam Friendship International Marathon Dalat 2007		2007.12.16	第1回日本ベトナム友好国際マラソン	ベトナム(ダラット市)にてAED、BLS講習会
21	競技前の健康管理と競技中のリスク管理		2008.02.21	AEDを配備したスポーツ救急体制 東京都板橋区医師会	一般市民ランナーの医学的サポート、熱中症(熱失神、熱疲労、熱痙攣の経験)板橋区医師会指導

22	学校医や産業医にも役立つ運動時の心臓突然死の基礎知識と対処方法		2008.03.05	東京都浅草医師会臨床医会	スポーツ中の突然死の原点はハイマンの事件。心臓震盪 (Commotio cordis : コモシオ コルデイス) も学校医としては重要。最近では脱メタボ対策の運動中に突然死。産業医としても基礎知識を確認すべき。
23	大相撲の生体応答 (フリーラジカル自動分析装置を用いて)	共同発表	2008.06.06	第12回日本適応医学会	大相撲は激運動スポーツで身体負荷は多大であると推測される。相撲の稽古の中で特に「ぶつかり稽古」につき酸化ストレスの面から身体に及ぼす影響を検討した。血中乳酸値はぶつかり稽古前後で平均 6.1 ± 1.5 から 10.5 ± 1.4 (mmol/L) と有意に急激に増加 ($P < 0.01$) し、高強度の運動負荷が確認された。WBC、CRP はぶつかり稽古前後で有意差はなく、AST、ALT、LDH も同様な傾向であった。特にCKは600から700 (IU/L) と基準値より高値であるが極端な異常高値ではなかった。Crの推移は正常範囲内とぶつかり稽古前後で有意に増加した ($P < 0.01$)。酸化ストレス度は正常範囲で推移し、抗酸化力は増加傾向であった。
24	スポーツ科学領域に欠かせないコンディション管理とトレーニング効果の指標としての d-ROMs.BAP テスト、および大相撲ぶつかり稽古前後の測定経験	共同発表	2008.07.13	第6回酸化ストレス、抗酸化セミナー	ぶつかり稽古は静的負荷有意の激運動であるも骨格筋障害は少なく、一過性腎障害が認められたが回復は速やかであった。総合的評価である酸化ストレス度の増加は軽微であり、抗酸化力の生体適応は良好であった。評価法として本システム利用の報告は無く極めて貴重な結果である。

III 学会等および社会における主な活動

1	1996.04.00	～	現在	臨床運動療法懇話会会員 (1996.04.00～現在運営委員)
2	2000.04.00	～	現在	日本臨床心臓病教育研究会会員 (2000.04.00～現在評議員)
3	2002.07.00	～	現在	日本臨床検査医学会二級臨床検査士資格認定試験試験委員 (臨床生理学)
4	2003.01.00	～	現在	特定非営利活動法人スポーツメディカル協会会員 (2003.01.00～顧問)
5	2003.05.00	～	現在	日本体力医学会会員 (2003.05.00～現在学術委員、2003.05.00～現在スポーツ医学研修会実行委員会委員、2003.09.00～現在評議員)
6	2003.07.00	～	現在	日本適応医学会会員 (2003.07.00～現在評議員)
7	2003.11.00	～	現在	日本臨床スポーツ医学会会員 (2003.11.00～現在評議員)

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	岡田 淳	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書 1) 微生物学/臨床微生物学 (医歯薬出版)		2006.04.01		講義の教材として使用。著者は第 1 章 (1~119 頁) 担当。B5 版、総頁 465 頁。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 大安心二訂版 健康の医学 人間ドックの受け方・検査値の読み方	単著	2004.10.05	講談社 p.294-300	生活習慣病の発見に重要な人間ドックの受け方と検査データ (基準値) の解釈について解説した。執筆者 岡田 淳			
2 病理・微生物・臨床検査 微生物-感染と予防	共著	2005.03.15	医学芸術社 p100-173	検査技術向けの参考書として病理・微生物・臨床検査に分けて構成した。また、学習の評価ができるように練習問題をつけた。共著者 岡田 淳、伊藤機一、早川欽哉			
3 早分かり検査値ノート	共著	2005.03.20	照林社 p1-112, p180-229	臨床検査全般について検査の解説を行い、各検査項目の基準値 (基準範囲) について記載した。共著者 岡田 淳、宮地勇人			
4 最新検査・画像診断事典編集	共著	2006.12.10	医学通信社	主として医療保険請求業務を担当している職種を対象に編纂したものである。全ての臨床検査項目を網羅し、検査の意義、検査法、関連疾患などについて記載した。			
5 医療関係機関等を対象にした特別管理産業廃棄物管理責任者に関する講習 感染に関する基礎知識	共著	2007.02.01	日本医師会 p1-119	産業廃棄物管理責任者に対する教育書として編纂されたもので、感染、免疫に関する基礎知識について解説し、感染防止策について記載した。さらに、在宅医療廃棄物の対処についても記載した。共著者 岡田 淳、原田 優			
6 微生物学/臨床微生物学	共著	2007.09.01	医歯薬出版株式会社 p1-100	検査技師を対象とした微生物学の教科書で、最も広く使用されている。著者は総監修を担当し、また総論を執筆した。共著者 岡田淳、設楽 正次、森田 耕司、長沢 光章、渡辺邦友、ほか、			
7 バイオセーフティの事典-病原微生物とハザード対策の実際	共著	2008.12.10	医学評論社 p.311-317	バイオセーフティに関する本邦初の成書、著者は臨床検査を担当し、さまざまな臨床検査の課程で起こるハザードとその対策について記載した。			
論文							

1	感染症における迅速診断についての最近の話題	共著	2006.08.00	モダン メディア 52:245-251	現在使用されている感染症の迅速診断法について解説した。 共著者 森 伴雄、岡田 淳
2	迅速診断法	単著	2007.02.28	日本臨床増刊号 188-192	微生物検査における迅速診断法の位置づけと主要な迅速検査法について解説した。執筆者 岡田 淳
その他					

III 学会等および社会における主な活動

1	1977.02.00	～	現在	嫌気性菌感染症研究会会員（1977.02.00～1990.02.00 事務局長、1982.02.00～現在運営委員）
2	1983.04.00	～	現在	日本感染症学会会員（1983.04.00～現在評議員、編集委員を歴任）
3	1983.06.00	～	現在	日本化学療法学会会員（1983.06.00～現在評議員、英文雑誌編集委員（現在）、新薬委員会委員、薬剤感受性検討委員会委員を歴任）
4	1983.11.00	～	現在	日本臨床病理学会会員（1983.11.00～現在評議員）
5	1986.04.00	～	現在	サンプリング研究会会員（1986.04.00～現在 世話人・平成5年、平成14年総会長として開催した）
6	1986.07.00	～	現在	Bacterial Adherence 研究会会員（1986.07.00～現在 運営委員・平成16年7月 大会長として開催した）
7	1987.03.00	～	現在	日本環境感染症学会会員（1987.03.00～現在評議員）
8	1987.05.00	～	現在	臨床微生物迅速診断研究会会員（1987.05.00～現在 会長・平成3年、平成14年 総会長として開催した、現在会長）
9	1988.11.00	～	現在	医療廃棄物研究会会員（1988.11.00～現在 理事、学術部長、編集委員長を歴任）
10	1989.12.00	～	現在	日本性感染症学会会員（1989.12.00～現在評議員）
11	1990.06.00	～	現在	日本臨床微生物学会会員（1990.06.00～現在評議員・平成18年総会長として開催

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	狩野 元成	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による「緊急臨床検査士」認定試験に関する活動		2005.01.00		2005年1月～6月 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による臨床検査技師認定試験「緊急臨床検査士」のための問題作成等に取り組んだ。2005年5～7月 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による臨床検査技師認定試験「緊急臨床検査士」の主任試験委員を担当。			
2) 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による「緊急臨床検査士」認定試験に関する活動		2006.05.00		2006年5月～7月 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による臨床検査技師認定試験「緊急臨床検査士」の試験委員を担当。			
3) 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による「緊急臨床検査士」認定試験に関する活動		2007.05.00		2007年5月～7月 日本臨床検査医学会・日本臨床検査同学院共催による臨床検査技師認定試験「緊急臨床検査士」の試験委員を担当。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書							
1 臨床検査技師になるための Orientation 2005	共著	2005.04.00	医歯薬出版		櫻林郁之介、北村清吉、狩野元成、ほか 担当：10頁 臨床検査技師養成校の新入生を対象に基礎専門である病理学、微生物学、血液学、免疫学などの教科目ではどんな内容をどのように勉強するのか要点も含めて解説した書。		
2 今月の主題 これからの臨床検査技師を考える 諸外国の臨床検査と臨床検査技師教育	共著	2005.08.00	臨床検査；49: 895-898, (2005)		欧米、アジア・オセアニア諸国から回答を得た臨床検査技師とその教育制度に関するアンケート調査の結果をもとに、これら諸国とわが国の現状と比較した。さらにカナダ、米国に関しては現地での聞き取り調査、文献などをもとに臨床検査技師の資格と教育制度についての具体例を示し、スウェーデンに関しては文献から歴史的経過を辿った。これらの情報をもとに、今後、わが国における臨床検査技師教育が目指す方向性について考案した。共同著者 近藤弘、狩野元成、巽典之		
3 臨床検査学講座第2版 臨床化学検査学：第V章 診療支援と臨床化学検査結果の解析・評価のIII. 検査結果の解析の具体例 担当：422-424頁	共著	2006.01.20	医歯薬出版、第2版第1刷		臨床化学検査学の教本。筆者はメタボリックシンドロームを担当。		

4	臨床検査技師になるための Orientation 2006	共著	2006.04.00	医歯薬出版	櫻林郁之介、北村清吉、狩野元成、ほか 担当：10頁 臨床検査技師養成校の新入生を対象に基礎専門である病理学、微生物学、血液学、免疫学などの教科目ではどんな内容をどのように勉強するのか要点も含めて解説した書。
5	臨床検査臨床実習マニュアル（第3版）	共著	2006.05.00	医歯薬出版	狩野元成、鈴木敏恵、今井正、三村邦裕、大西英文、ほか 担当：90～114頁 臨床検査技師養成学生のための臨床実習マニュアル教本。第2版の内容に増ページにならない加筆を加え、実習充実化に有用な教本を目指した。筆者は臨床化学検査の脂質、非蛋白性窒素成分と編集を担当した。
6	臨床検査技師国家試験ガイドライン対応新ファーストトレーニング	共著	2006.08.00	医歯薬出版	狩野元成、三村邦裕、大西英文、ほか 担当：2-8、96-101、108-109頁 臨床検査技師養成校の学生のための国家試験形式による知識の整理と自己の実力評価に役立てる書である。筆者は検査総合管理学（検査管理総論）と生化学、臨床化学を担当した。
7	スポーツと健康と臨床検査 臨床病理レビュー特集第137号	共著	2006.11.00	臨床病理刊行会	小川秀興、狩野元成、梁井皎、丹波泰子、ほか 担当：166-173頁、臨床検査値に基づくスポーツ選手の肉体疲労指数（PF指数）について、本特集では、いろいろな観点から「スポーツと健康（チェック）と臨床検査」にかかわる問題を取り上げている。本特集の組み立てを、総論、スポーツと疾病、スポーツと臨床検査、各種検査値におよぼすスポーツの影響とし、また、箱根駅伝、柔道など特定のスポーツにおける各種評価についても取り上げた。本特集は医療関係者のみならず、幅広い分野の人達に役立つ有意義な書である。監修も担当した。
8	臨床検査技師になるための Orientation 2007	共著	2007.04.00	医歯薬出版	櫻林郁之介、北村清吉、狩野元成、ほか 担当：10頁 臨床検査技師養成校の新入生を対象に基礎専門である病理学、微生物学、血液学、免疫学などの教科目ではどんな内容をどのように勉強するのか要点も含めて解説した書。
9	臨床化学特論B（臨床化学検査学実習）実習書第1版：	共著	2007.07.00	大東文化大学	狩野元成（編集）、只野智昭、佐藤陽子、鈴木健、高加国夫 臨床化学検査学実習の教本。サンプリング、用手法による測定、簡易自動分析器による測定、HPLCによるアミノ酸測定、蛋白電気泳動法など網羅した書。
10	臨床検査技師になるための Orientation 2008	共著	2008.04.00	医歯薬出版	櫻林郁之介、北村清吉、狩野元成、ほか 担当：10頁 臨床検査技師養成校の新入生を対象に基礎専門である病理学、微生物学、血液学、免疫学などの教科目ではどんな内容をどのように勉強するのか要点も含めて解説した書。
11	新版臨床化学第2版：2. 臨床化学的分析法の2.1 臨床化学における分析、2.2 吸光度法、2.4 分離分析 担当：13-17、20-24頁	共著	2008.04.10	講談社サイエンティフィク、第2版第1刷	臨床検査技師を目指す学生のための教本。臨床化学分野における一般的事項を網羅し、臨床検査技師国家試験も意識した記述である。筆者は基礎的な分離分析法について担当。
12	臨床化学特論B（臨床化学検査学実習）実習書第2版	共著	2008.07.00	大東文化大学	狩野元成（編集）、只野智昭、鈴木健、高加国夫 臨床化学検査学実習の教本。第1版での項目を再検討した。サンプリング、用手法による測定、簡易自動分析器による測定、HPLCによるアミノ酸測定、蛋白電気泳動法など網羅した書。
13	臨床検査学実習書シリーズ 臨床化学検査学実習書：Ⅶ 非タンパク性窒素の1. 尿素窒素	共著	2008.09.20	医歯薬出版、第1版第1刷	編者：大西英文、狩野元成 担当：74-77頁 日本臨床検査学教育協議会監修による実習書シリーズのひとつである臨床化学分析学実習書。臨床検査技師育成に係わる大学、短大、専門学校における必須事項を網羅した標準的実習書。筆者は尿素窒素について担当。また、全体の編集も担当。
	論文				

1	大腸癌高危険群の同定に関する研究－便中胆汁酸組成比の食事評価への応用－	共著	2004.09.00	順天堂医学 ; 50: 364-372, (2004)	目的: 当教室では便中胆汁酸組成比が大腸癌高危険群の同定に有用であると報告してきた。今回は高脂肪低低繊維食が組成比にどのような影響を及ぼすか、大腸癌の一次予防として食生活の改善の指標に成り得るかを検討した。結果: 1. 便中 DCA/CA 値は加齢とともに上昇することが示唆された。2. 便中 DCA/CA 値は便秘によって上昇し、普通便・下利便に比べて高値を示した。3. 便中 DCA/CA 値は高脂肪低低繊維食で普通食に比べて高値を示した。4. 性・年齢・便の性状および食事の種類4因子の相互関係を考慮して、重回帰分析を実施した結果、便の性状の〈便秘〉および食事の種類〈高脂肪低低繊維食〉が便中 DCA/CA 値に強い影響を及ぼすことが明らかになった。結論: 現在、大腸癌予防の見地から食生活改善の具体的指標はされていない。便中 DCA/CA 値は高値例の食生活改善指標となる可能性が示唆された。共同研究者 川瀬吉彦、大内昌和、小島豊、奥澤淳司、渡部智雄、坂本一博、鎌野俊紀、狩野元成
2	Development of an Enzyme-Linked Immunosorbent Assay for Feecal Bile Acid	共著	2004.11.00	Rinsho Byori, 52 (11), 891-896(2004)	胆汁酸 DCA、CA のポリクローナル抗体を用いた ELISA 法で大腸癌と胆汁酸代謝の関わりについて、その臨床的有用性の検討を行っている。今回は交叉性の低い、DCA と CA のモノクローナル抗体を作製後、比較的簡易に測定が可能な ELISA 法を確立した。本法を用いて糞便中の胆汁酸を測定した結果、大腸癌患者の便中 DCA は健常者に比して高値を示し、手術後では有意に低値を示した。共同研究者 Masaru Matsumoto, Hajime Takei, Motonari Kanoh, Akira Kanabegawa, Toshiki Kamano, Masao Maeda
3	今月の主題 これからの臨床検査技師教育を考える 外国の医療と臨床検査技師 諸外国の臨床検査と臨床検査技師教育	共著	2005.05.15	臨床検査 49 (8) : 895-898 (2005)	欧米、アジア・オセアニア諸国から回答を得た臨床検査技師とその教育制度に関するアンケート調査の結果をもとに、これら諸国とわが国の現状を比較した。さらにカナダ、米国に関しては現地での聞き取り調査、文献などから大学教育が一般的である。したがって、東南アジアの韓国、台湾においても大学教育が主流となっている現状から、わが国における将来の臨床検査技師教育については大学教育制度が必須と考えた。共同研究者 近藤弘、狩野元成、巽典之
4	Histopathologic changes in serum Bile acid Fractions in pressure ulcer patients	共著	2005.06.00	Hepato-Gastroenterology, 52, 1015-1018 (2005)	褥瘡発症が認められた臥床高齢者の血清一次、二次、三次胆汁酸を Gas-mass 機器を用い分析定量し、同時検査を行った高齢健常者を対照としてその動態を検討した。褥瘡発症者の胆汁酸動態では瘡形成初期の Grade I、II で TBA が高値となる。その主体は DCA であった。Grade III、IV では TBA が低値を示すものの組成成分としては高い割合で DCA が認められた。このことから DCA は瘡形成要因と瘡形成後の増悪因子として関与の可能性があると推測された。共同研究者 Motonari Kanoh, Tomoaki Tadano, Taiko Tanba, Hitoshi Katayama, Tomomi Shimizu, Yoko Sato, Masayuki Shibuya, Hiroaki Ushio, Masaru Matsumoto, Yutaka Kojima, and Toshiki Kamano
5	褥瘡の臨床化学的検討－褥瘡発生者の便中胆汁酸値の便中胆汁酸値の検討－	共著	2005.07.00	褥瘡会誌 ; 7(4): 827-832, (2005)	【目的】一般的に褥瘡の原因として圧迫、摩擦、感染、低栄養状態などがあげられているが、今回われわれは褥瘡の原因やその増悪に関して、自排泄困難な褥瘡発生者において、生化学的側面から便中胆汁酸と褥瘡発生へのかかわりについて検討を行った。【成績】便中胆汁酸は対照群より褥瘡群において高い値を示し、そのうち DCA は有意に高値を示した (p=0.04)。グレード別の比較ではグレード I、II で対照群より高い傾向を示しグレード I では CA, DCA がグレード II では CA, CDCA が対照群よりそれぞれ有意に高かった (p<0.05)。【結論】胆汁酸には種々の細胞毒性を示すことが報告されている。褥瘡の発生、またその初期段階において、便中胆汁酸が関与している可能性が考えられた。共同研究者 小島豊、鎌野俊紀、坂本一博、川瀬吉彦、大内昌和、石田弘美、狩野元成

6	便中胆汁酸組成比による大腸癌高危険群の同定。Gas Chromatography-Mass Spectrometry 法の導入と二次胆汁酸への還元率の意義	共著	2005.09.00	順天堂医学 ; 51: 361-367, (2005)	当教室では enzyme-linked immunosorbent assay (ELISA) 法による便中胆汁酸組成比 Deoxycholic acid (DCA) / Cholic acid (CA) が大腸癌高危険群の同定に有用であることを報告してきた。ELISA 法は定性能には優れる反面、分離能が劣るため、両能力を一体化させた複合分析法である Gas Chromatography-Mass Spectrometry (GC-MS) 法により各胆汁酸の総胆汁酸に占める比率を求め、便中 DCA/CA の意義を改めて検討した。GC-MS 法によっても便中 DCA/CA が大腸癌症例で高値であることが再確認され、腸内細菌による CA から DCA への還元率が便中 DCA/CA と大きな関わりがあることが証明するとともに、定量性がより重要となる高次の大腸癌スクリーニングに GC-MS 法による便中胆汁酸の検討が有用であることが確認された。共同研究者 大内昌和、石戸保典、高橋玄、柳沼行宏、川瀬吉彦、坂本一博、鎌野俊紀、狩野元成
7	Studies of Serum and Feces Bile Acids Determination by Gas Chromatography-Mass Spectrometry	共著	2006.02.00	Rinsho Byori.; 54(2): 103-110, (2006)	ヒト体液中の胆汁酸分析法として RIA 法や ELISA 法が開発され、臨床検査法の一つとして目的に応じて利用されている。著者らは、より詳細な胆汁酸代謝の解析を目的としてガスクロマトグラフィ質量分析計 (GC-MS) を用い、健常者と大腸癌患者の血清及び便中胆汁酸の一斉分析を試み、得られた各種胆汁酸の動態を検討した。血清中では allo 胆汁酸は検出されなかったが、便中胆汁酸については著者らの GC-MS による胆汁酸分析により、従来の RIA や ELISA 法では検出不可能な胆汁酸成分の分析と確認が可能となった。また、得られた結果の胆汁酸動態の検討により大腸癌発生に関わる因子の一つとして allo 胆汁酸 (DCA, LCA) が示唆された。共同研究者 Tomoaki TADANO, Motonari KANO, Masaru MATSUMOTO, Kazuhiro SAKAMOTO, Toshiki KAMANO
8	Kinetic Analysis of Bile Acids in the Feces of Colorectal Cancer Patients by Gas Chromatography-Mass Spectrometry.	共著	2007.05.00	Rinsho Byori.;55(5):417-427(2007)	ガスクロマトグラフィ質量分析計 (GC-MS) を用い健常者を対照として大腸癌患者の便中胆汁酸の一斉分析を実施後、大腸癌占拠部位毎の胆汁酸の動態についても検討した。1.大腸癌症例において二次胆汁酸の allo タイプ (DCA, LCA) の著明な高値傾向を認めた。2.二次胆汁酸の allo タイプ (DCA, LCA) は DCA, LCA より大腸癌発生に強く関与する因子としての可能性が示唆された。特に allo LCA は男女ともに著明な高値傾向 (p<0.001~p<0.005) を示した。3.大腸癌症例男性群において allo CA, allo DCA に著明な高値傾向を認めたことから女性群とは異なった男性群の生活習慣行動との関連が示唆された。4. allo LCA は C と D を除く大腸癌に共通した関与因子の可能性が示唆された。5.UDCA は発癌関与因子としてより、むしろ高値になることで発癌抑制に関与する生体防御反応の因子の可能性が示唆された。共同研究者 Tomoaki TADANO, Motonari KANO, Hiroshi KONDOH, Masaru MATSUMOTO, Kunihiro MIMURA, Yuhsaku KANO, Kazuhiro SAKAMOTO, and Toshiki KAMANO
9	Kinetic Analysis of Bile Acids in the Feces of Colorectal Cancer Patients by Gas Chromatography-Mass Spectrometry.	共著	2007.05.00	Rinsho Byori.; 55(5):417-427 (2007)	ガスクロマトグラフィ質量分析計 (GC-MS) を用い健常者を対照として大腸癌患者の便中胆汁酸の一斉分析を実施後、大腸癌占拠部位毎の胆汁酸の動態についても検討した。1. 大腸癌症例において二次胆汁酸の allo タイプ (DCA, LCA) の著明な高値傾向を認めた。2. 二次胆汁酸の allo タイプ (DCA, LCA) は DCA, LCA より大腸癌発生に強く関与する因子としての可能性が示唆された。特に allo LCA は男女ともに著明な高値傾向 (p<0.001~p<0.005) を示した。大腸癌症例男性群において allo CA, allo DCA に著明な高値傾向を認めたことから女性群とは異なった男性群の生活習慣行動との関連が示唆された。allo LCA は C と D を除く大腸癌に共通した関与因子の可能性が示唆された。UDCA は発癌関与因子としてより、むしろ高値になることで発癌抑制に関与する生体防御反応の因子の可能性が示唆された。共同研究者: Tomoaki TADANO, Motonari KANO, Hiroshi KONDOH, Masaru MATSUMOTO, Kunihiro MIMURA, Yuhsaku KANO, Kazuhiro SAKAMOTO, and Toshiki KAMANO

10 特集(1): 技師教育—臨床検査技師教育の果たす役割、-3- 4年制大学教育の目指す臨床検査技師教育—アンケート調査の結果から—	共著	2007.06.00	機器・試薬 30(3): 219-239・(2007)	調査より最も多かった要望は4年生大学ではスキルアップ可能な講座を開講する。さらに大学院の設置の要望が多かった。また臨床検査技師教育制度を充実させるには大学院教育が不可欠であり臨床検査専門職、またチーム医療の一員としての自覚を養うには臨床実習期間は長いほうが良いとの指摘が過半数を占めた。共同研究者 近藤弘、佐藤陽子、狩野元成、伊藤機一
11 Changes to N-linked Oligosaccharide Chains of Human Serum Immunoglobulin G and Matrix metalloproteinase-2 with Cancer Progression	共著	2008.00.00	ANTICANCER RESEARCH 28:715-720 (2008)	癌細胞におけるシアリル LeX糖鎖の発現が、癌細胞の血管内皮細胞への接着に影響することが実証されている。他方、MMP-2は細胞外マトリックスを分解して、癌細胞の浸潤・転移に関与する。36例の局在・転移癌患者(肺癌12例、胃癌12例、前立腺癌12例)および10例の健常対象者について、FACEを用いてヒト血清IgGのN結合型オリゴ糖鎖を解析した。血清MMP-2はELISAで定量した。癌進展に伴いFr1(糖鎖末端にGlaを有するIgG糖鎖)とFr2(糖鎖末端にGlaを有するIgG糖鎖)は有意に減少し、他方、Fr4(Glaが欠損するIgG糖鎖)は有意に増加した。Fr4/Fr1+Fr2比は健常対象群に比べ有意に増加し、局在癌に比べ転移癌で有意に高値を示した(p<0.001)。転移癌の血清MMP-2値は、局在癌の血清MMP-2値に比べ有意(p<0.001)に増加した。転移癌患者におけるFr4/Fr1+Fr2比と血清MMP-2値は有意な相関関係(p<0.0001)を示した。FACEによる血清IgGのN結合型オリゴ糖鎖の解析は、癌転移のモニタリングに有益な血清腫瘍マーカーの補助的な指標になることが示唆された。共同研究者 YUHSAKU KANOH, TADASHI OHHARA, TOMOAKI TADANO, MOTONARI KANOH and TOHRU AKAHOSHI
12 Serum Matrix Metalloproteinase-2 Levels Indicate Blood-CSF Barrier Damage in Patients with Infectious Meningitis	共著	2008.04.00	Inflammation Vol.31, No.2:99-104 (2008)	蛋白の透過性は、脳脊髄液関門が障害された場合に増加する。マトリックスメタロプロテナーゼ-2(MMP-2; グラチナーゼA)は、細胞基底膜の主要成分であるIV型コラーゲンを分解することが知られている。我々は $\alpha 2M$ indexを調べ、感染性髄膜炎患者において細胞外マトリックスを分解するMMP-2と脳脊髄液関門の透過性の指標である $\alpha 2M$ の関性を調べた。 $\alpha 2M$ indexは健常対象群に比べ感染性髄膜炎で有意に上昇した。 $\alpha 2M$ indexは細菌性髄膜炎で最も高く、ウイルスおよび真菌性髄膜炎との間で有意差(p<0.05)を示した。血清MMP-2値は感染性髄膜炎で上昇し、細菌性髄膜炎で最も高く、健常対象群との間で有意差(p<0.05)を示した。血清MMP-2と $\alpha 2M$ indexは有意な相関関係(r=0.64, p<0.0001)を呈した。感染性髄膜炎、特に細菌性において、血清MMP-2値の著明な増加は、脳脊髄液関門の障害度を反映することが考えられた。共同研究者 Yuhsaku Kanoh, Tadashi Ohhara, Motonari Kanoh and Tohru Akahoshi
その他 1 臨床検査値に基づくスポーツ選手の肉体疲労指数(Pf指数)の試み	共同	2004.05.00	第53回日本臨床衛生検査学会(2004)	貧血傾向が改善しても試合で力を発揮できなかったり、タイムが伸びない生徒達の検査データから、要因把握できないか否か肉体疲労指数(Physical fatigue index・Pf指数)と名称しデータ解析を検討した。2000年5月から2003年10月までの約4年間男子陸上部員(15~18歳)に対し早朝空腹時採血した。臨床検査データ(延べ人数519名)の生化学検査3項目(AST, ALT, Fe)、血液検査3項目(Hb, Ht, RBC)を用い下式からP指数を算出した。 $Pf = \frac{Hb(g/dL) \times R(10^4/\mu L) \times Fe(\mu g/dL)/Ht}{AST(IU/L) + ALT(IU/L) / 100}$ 519名のPf値指数を求めた。1.00以下を要注意群、1.00~1.50を注意群と区分する。個人のPf指数の動態については、個人のPf指数の最高値をベストの状態とし、20%まで低下した場合、練習量の軽減化や休養の必要性が示唆された。共同発表者 丹波泰子、狩野元成、片山仁、只野智昭、清水智美、佐藤陽子、吉原律子、芳賀義信

2	褥瘡の臨床病理学的検討—第26報—竹炭含有低反発ベッドを用いた褥瘡の予防と下肢皮膚吸引による皮膚所見と血液理化学的検査値の検討	共同	2004.06.00	第46回日本老年医学会(2004)	臥床者の下肢の冷えは膝関節の屈曲拘縮を招く要因と推察され、仙骨部等の骨突出を招くことから褥瘡誘発因子と考えられた。今回、冷えの対策に竹炭含有低反発ベッドパッド(NCL介護用ベッドパッド)を用い、臥床老人の下肢皮膚の状態を観察し褥瘡予防に係わる緩和ケアとしての有用性に合せ皮膚吸引所見と血液理化学検査値の関係を検索した。竹炭含有ベッドパッド使用者で使用開始から1週目に皮膚表面温度の上昇と皮膚吸引所見の色調で赤色系の淡い色から明赤色系の濃い色への移行がみられ、4週後の成績で皮膚表面温度と皮膚吸引比色値の相方に著しい上昇($p<0.0005$)がみられた。一方、竹炭を含まない低反発ベッドパッド他2群での差はみられなかった。皮膚所見と血液成分の関係は赤色系の濃い色調を呈した24名に比べ淡い色調を呈した10名でHgb, Hct, TP, Alb値に低下($p<0.05$)がみられた。竹炭含有ベッドパッドあ褥瘡予防に係わる介護用具として有用と考え、また、皮膚吸引所見と栄養状態の関係がみられた。共同発表者 牛尾博昭、渋谷正行、狩野元成、只野智昭、岡田淳
3	褥瘡予防に係わる試み(第3報)—竹炭含有低反発ポジショニング具による臥床老人の緩和ケア—	共同	2004.09.00	第6回日本褥瘡学会(2004)	私達は昨年の本会で褥瘡予防に係わる試みとして竹炭マットによる臥床老人の緩和ケアについて報告した。今回は昨年同様の低反発ウレタン素材を用い、臥床老人の体位保持及び体圧分散に使用する竹炭ポジショニングパッドを製作し褥瘡予防に係わる試みとして本方法の緩和ケア効果について解析した。結果から竹炭ポジショニングパッド(低反発ウレタン)は褥瘡予防に係わる緩和ケア用具として有効であり、その有用性が示唆された。共同発表者 牛尾博昭、渋谷正行、狩野元成、岡田淳
4	Gas-Mass法測定による大腸癌症例便中胆汁酸の解析	共同	2004.09.00	第63回日本癌学会(2004)	近年、本邦において大腸癌が増加している。増加の原因として食生活の欧米化、高脂肪食に起因する便中胆汁酸量や胆汁酸組成の変化の関与が考えられている。Gas-Mass法を用いて、便中胆汁酸濃度を計測し大腸癌症例においてどのような傾向があるか検討した。当科大腸癌手術症例、健常者の各種便中胆汁酸濃度をGas-Mass法にて測定した。今回新しい試みとして便中胆汁酸CA, CDCA, DCA, LCAを用いて癌症例か健常者症例であるかを判別分析行い予測式を求め、その結果91%が正しく予測され、ROC曲線を書くと曲線下面積は0.979であった。こりよりCut-off値を677とすると感度89.7%特異度0.05%であった。便中胆汁酸をGas-Mass法で測定した報告はいまだなく癌症例のスクリーニングとして有用であると思われた。共同発表者 大内昌和、石戸保典、柳沼行宏、高橋玄、湊あこ、野中英臣、小島豊、渡部智雄、川瀬吉彦、狩野元成、鎌野俊紀
5	褥瘡発生者における便中胆汁酸の動態	共同	2004.10.00	第66回日本臨床外科学会(2004)	褥瘡の原因として圧迫、摩擦、感染、低栄養状態などが言われているが、今回我々は褥瘡の原因やその増悪に関して、自排泄困難な褥瘡発生者において、生化学的側面から便中胆汁酸と褥瘡発生者の関係について検討を行った。胆汁酸には種々の細胞毒性を示すことや大腸癌患者において血清胆汁酸組成比DCA/CAが高値を示すことなどが報告されている。褥瘡の発生、またその初期段階において、便中胆汁酸が関与している可能性が考えられた。共同発表者 小島豊、野中英臣、大内昌和、渡部智雄、川瀬吉彦、坂本一博、狩野元成、鎌野俊紀
6	口腔洗浄による経管栄養施行臥床高齢者の口腔環境の改善	共同	2005.06.00	第47回日本老年医学会(2005)	老人医療施設に入所していた24名(鼻腔13名、胃瘻10名、IVH1名)平均83.5歳に口腔洗浄器(OHC-01:ニイガタ機電)を用い、酸性電解水50~70mL(pH3.8, Cl-15ppm:三浦電子)による口腔洗浄を2日間隔で10回行い、口腔拭い液の細菌(真菌を除く好気性菌)と口腔の潜血及びたん白反応(試験紙)並びに口臭、舌苔などを観察した結果、我々が取り組んだ口腔洗浄は、日常のケアにおける課題を解決する方法として有効であり、臥床者の緩和ケアとして有用性が示唆された。共同発表者 牛尾博昭、渋谷正行、岡田淳、狩野元成

7	褥瘡予防に係わる下肢皮膚の対策－緩衝・緩和ケア用具と設置部位の検討	共同	2005.08.00	第7回日本褥瘡学会(2005)	前2回の本会で臥床老人の緩和ケアとして竹炭含有低反発ウレタンのケア用具を紹介し、ケア効果の確認に用いた透明吸引カップ吸着による皮膚の血色(うっ血)所見が褥瘡ハイリスク者の検索に有効で簡便なことを報告した。今回は素材が異なったクッションなどを設置した臥床者の皮膚の血色と皮膚温を観察して設置効果について検討した。供試赤外線放出横シート設置は下肢うっ血の緩和に有効であり、発泡スチレン粒クッションの両下腿内側への設置は下肢の冷え並びに血流障害の緩和に有効であった。共同発表者 牛尾博昭、渋谷正行、狩野元成、岡田淳
8	尿中硫酸抱合型胆汁酸(USBA)測定による新生児胆道閉鎖症のスクリーニング法の検討	共同	2007.06.00	第18回神奈川県臨床検査医学会大会(2007)	胆道閉鎖症は肝内胆汁うっ滞の影響、時間の経過と共に肝組織の破壊が進行し、放置により多くは新生児期に死に至る予後不良の疾患で有り、早期発見、早期治療が必要である。著者等は、尿中硫酸抱合型胆汁酸(USBA)測定法の基礎的検討を行い、この方法を用いて本症のスクリーニング法としてのパイロットスタディを行った。USBAをスクリーニングマーカーとする本法は、非侵襲の尿を材料としていることから、新生児を対象とする本症には有用で有り、今回の結果から測定感度も十分に有り、その測定値は定量性・再現性を有していて信頼度も高いので、新生児胆道閉鎖症のスクリーニング検査法として有用で有ると考えた。今後症例対象数を増やし、検討を継続する予定で有る。共同発表者 鈴木健、只野智昭、狩野元成、伊藤機一、大島雅之、連俊博、鈴木光幸、山城雄一郎
9	臥床高齢者の口腔ケア 経管栄養施行者の口内環境の改善	共同	2007.09.29	第46回日本老年医学会関東甲信越地方会及び教育企画(2007)	経管栄養施行者の口内組織に脆弱化がみられ、細菌叢の異常並びに口臭などの口内環境の悪化が認められた。係る対策として経口栄養へ誘導すべく口内清掃を行った。口臭対策などの日常ブラッシングは歯肉から出血を招きやすく口内環境悪化要因と考えられた。今回の口内清掃は従来の方法に代わる有効かつ安全な口内ケアの一つとして示唆された。共同発表者 牛尾博昭、渋谷正行、狩野元成

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.04.00	～	現在	(社) 日本薬理学会会員
2	1976.04.00	～	現在	(社) 日本老年医学会会員
3	1985.03.00	～	現在	(社) 日本薬理学会学術評議委員
4	1993.04.00	～	2006.03.00	(社) 日本癌学会会員
5	1993.04.00	～	2006.03.00	日本消化器外科学会会員
6	1993.04.00	～	現在	日本癌治療学会会員
7	1994.04.00	～	2008.03.00	(社) 日本消化器病学会会員
8	1995.04.00	～	現在	(社) 日本消化器病学会肝機能研究班会議会員
9	1996.04.00	～	2006.03.00	日本微量元素学会会員
10	1997.04.00	～	2006.03.00	(社) 日本大腸肛門病学会会員
11	1998.04.00	～	2005.03.00	全国臨床検査技師教育施設協議会幹事
12	1998.04.00	～	2006.03.00	日本消化器癌発生学会会員
13	1999.04.00	～	現在	(財) 東京都予防医学協会学術委員
14	2000.04.00	～	現在	(社) 日本感染症学会会員
15	2000.12.00	～	現在	(社) 日本感染症学会認定インフェクションコントロールドクター (認定番号: ID 0897)

16	2002.03.00	～	2006.03.00	日本褥瘡学会会員
17	2004.05.00	～	2006.08.00	日本臨床検査医学会日本臨床検査同学院共催の緊急臨床検査士認定試験主任試験委員
18	2006.04.00	～	現在	有限責任中間法人 日本臨床検査学教育協議会理事
19	2006.09.00	～	2008.04.00	日本臨床検査医学会日本臨床検査同学院共催・緊急検査士認定委員
20	2007.04.00	～	現在	有限責任中間法人 日本臨床検査学教育協議会副理事長

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	樺澤 一之	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 遠隔授業システムの構築		2005.11.12	大東文化大学の板橋キャンパスと東松山キャンパス間の遠隔授業システムを情報化推進委員会委員として検討している。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)		2006.00.00	「聴覚障害児における書記リテラシー形成の実態調査と評価・指導臨床システムの開発研究」で文部科学省研究費を受託(研究分担者)し、聴覚障害児における書記言語能力に関して言語心理学的観点から構造的に解析する評価法を開発した。				
II 研究活動							
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 医療情報学入門	共	2006.06.00	共立出版	コンピューター・ネットワークの基礎、病院情報システム、電子カルテ、システム管理の解説。共著者：樺澤一之、豊田修一			
2 解説医療情報技師能力検定試験問題	共	2008.03.00	篠原出版新社	医療情報技師能力検定試験における過去の問題を取り上げ、問題の解説を行うとともに、その背景にある「医学・医療」、「情報処理技術」、「医療情報システム」の各領域における専門知識・技術・最新動向などについて解説している。執筆分担 樺澤一之			
3 医療・福祉系のための情報リテラシー	共	2009.01.00	共立出版	コンピュータ演習用のOS、Word、Excel、PowerPoint、インターネット解説書、Windows Vista、Office2007版。共著者：樺澤一之、寺島和浩、豊田修一			
論文							
1 Association of HER-2 Overexpression with Prognosis in Nonsmall Cell Lung Carcinoma: A Metaanalysis	共	2005.00.00	Cancer, Vol.103, No.9	A metaanalysis of published studies was performed for this quantitative review of the effects of HER-2 overexpression on survival among patients with NSCLC. A significant, unfavorable prognostic effect of HER-2 overexpression in NSCLC was evident from the metaanalysis. 共著者: H. Nakamura, N. Kawasaki, M. Taguchi and K. Kabasawa			
2 Survival following lobectomy vs limited resection for stage I lung cancer: a meta-analysis	共	2005.00.00	British Journal of Cancer 92	We therefore conducted a meta-analysis of reported studies to compare survival of stage I patients between limited resection and standard lobectomy. None of these survival differences were significant, indicating that survival after limited resection for stage I lung cancer was comparable to that after lobectomy. 共著者: H. Nakamura, N. Kawasaki, M. Taguchi and K. Kabasawa			

3	Survival impact of epidermal growth factor receptor overexpression in patients with non-small cell lung cancer:a meta-analysis	共	2006.02.00	An International Journal of Respiratory Medicine,Vol.61,No.2	A meta-analysis of previous studies was performed to quantitatively review the effects of E G F R overexpression on survival in patients with N S C L C using a DerSimonian-Laird random effects model.Eighteen studies including 2972 patients were subjected to final analysis.R E S U L T S :Overall,positivity for E G F R overexpression differed between histological types:39% in adenocarcinomas, 58% in squamous cell carcinomas, 38% in large cell carcinomas,and 32% in cancers in a miscellaneous category (p<0.0001).The combined hazard ratio (HR) was 1.14 (95% CI0.97 to 1.34;p=0.103),indicating that E G F R overexpression has no significant impact on survival.
4	Role of preoperative chemotherapy for no-small-cell lung cancer:A meta-analysis	共	2006.12.00	Lung Cancer,Vol.54,No.3	The efficacy of preoperative chemotherapy for improving postoperative survival in patients with non-small-cell lung cancer(N S C L C)is controversial.We therefore conducted a meta-analysis of the published phase III randomized clinical trials(R C T s)to quantitatively evaluate the survival benefit of preoperative chemotherapy.共著者 : H Nakamura,N kawasaki1,M Taguchi1 and K Kabasawa
その他					
1	部分清拭によるヘモグロビン濃度の変化ーN I R S (近赤外分光法)による脳血流の検討ー	共	2006.08.06	第 16 回看護教育学会	清拭による『脳血流量の変化』を近赤外分光法を用いて計測し、清拭刺激と脳神経活動の活性状況を明らかにすることで清拭効果を検証した。
2	聴覚障害児における統語規則に関する言語機能評価法の開発	共	2006.09.29	第 51 回日本聴覚医学会総会	幼児の日本語の基礎的な統語規則に関する言語機能評価法を開発しその評価を行った。
3	臨地実習における学生カンファレンスに影響する要因についての検討	共	2006.12.02	第 26 回日本看護科学学会学術集会	看護学生が実習中に行うカンファレンスでどのような困難を抱えていたかについて質問紙調査を実施した。本研究では「カンファレンスがスムーズに進まなかった・嫌だった」ことに影響を与えている要因を検討した。共同発表者：堤かおり、糸井裕子、樺澤一之
4	聴覚障害児におけるマルチ感覚モダリティを用いた言語聴取・理解能力評価システム (その2)	共	2008.05.00	第 47 回日本生体医工学会大会	統語論的な言語機能評価を行うためのマルチモダリティによる検査システムの研究・開発。聴覚と視覚モダリティによる検査文の理解を比較して優位な入力経路の検討が実施でき、また被検者に有利なモダリティで統語理解能力の評価を行うことを可能とした。共同発表者：樺澤一之、廣田栄子
5	病院看護師の道徳的感性に関する研究ー小規模病院と中・大規模病院の現状比較ー	共	2008.08.22	第 12 回日本看護管理学会年次大会	小規模病院と中規模病院に勤務する看護師の倫理観に関する研究。共同発表者：池田五十鈴、樺澤一之
6	中堅看護師離職に関する実態調査と分析	共	2008.08.22	第 12 回日本看護管理学会年次大会	関東・中部地区に勤務する中堅看護師のアンケートによる要因分析研究。職務満足度を中心として。共同発表者：山形由美子、田中照美、樺澤一之、高岡素子
7	Association between consciousness of lifestyle with type 2 diabetes of working middle-aged subjects and glycemic control status.	共	2008.09.00	The 13th Research Conference of the Workgroup of European Nurse Researchers	仕事を持つ中年の 2 型糖尿病に関する生活意識と血糖値状態の関係を明らかにした。共同発表者：Kaori Tsutsumi, Fusae Kondo, Kazuyuki Kabasawa
8	施設満足度が中堅看護師離職に及ぼす影響についての研究	共	2008.12.13	第 28 回日本看護科学学会学術集会	関東・中部地区に勤務する中堅看護師のアンケートによる要因分析研究。パーソナリティと職務満足度を中心として。共同発表者：田中照美、樺澤一之、山形由美子、高岡素子
III 学会等および社会における主な活動					
1	1992.05.00			第 31 回日本ME学会大会プログラム委員	
2	1992.05.00			第 31 回日本ME学会大会座長	

3	1993.11.00		第13回医療情報学連合大会座長
4	1994.11.00		第14回医療情報学連合大会座長
5	1995.11.00		第15回医療情報学連合大会座長
6	1997.09.00		教育工学関連学協会連合第5回全国大会座長
7	2001.09.00		医療情報システム開発センター「医療情報技術者の人材の在り方」委員会委員
8	2002.09.00		日本医療情報学会医療情報技師育成事業講習会テキスト担当
9	2003.04.00		日本医療情報学会評議員
10	2003.04.00	～ 現在	日本医療情報学会会員（平成15年4月～現在 評議員、平成15年12月～現在 医療情報技師育成事業試験問題作成委員）
11	2003.12.00		日本医療情報学会医療情報技師育成事業試験問題作成委員
12	2005.04.00		全国保健センターe-CAMOプロジェクト委員
13	2005.04.00	～ 2008.03.31	大学基準協会評価委員（登録者）
14	2006.00.00	～ 現在	日本リウマチ学会会員
15	2006.00.00	～ 現在	日本看護科学学会会員
16	2006.00.00	～ 現在	日本看護管理学会会員
17	2006.00.00	～ 現在	日本看護技術学会会員
18	2006.00.00	～ 現在	日本聴覚医学会会員
19	2007.01.00		日本医療情報学会医療情報技師能力試験問題集積委員
20	2007.04.00	～ 2008.03.31	大学基準協会評価委員
21	2008.12.00		日本医療情報学会医療情報基礎知識検定試験・教材小委員会委員
22	2009.04.00		大学基準協会評価委員
23		現在	日本生体医工学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	近藤 弘	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 独自に実施した学生による授業評価		2006.01.00	2006年1月 大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科(必修)およびスポーツ科学科(自由科目)を対象にして、血液学に関する学生による授業評価を行った。無記名、選択式の自記式アンケートを終講試験日に実施した。総合評価は5点満点としたとき5点23.4%、4点35.8%、3点32.1%、2点5.1%、1点3.6%と良好な評価を受けた。			
2) 大東文化大学 学生による授業評価 大学の授業評価実施委員会		2006.12.00	大東文化大学「学生による授業評価委員会」が実施した学生による授業評価(2006年12月)において、授業に対する総合的満足度は、5点満点中、血液形態検査学実習4.4点、止血検査学4.2点と高い評価を得た。			
3) 課外特別セミナー「要説血液検査学」を実施		2007.10.15	大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科2年生および3年生の希望者を対象に課外特別セミナー「要説血液検査学」(90分15回)を開催した。臨床検査技師国家試験の過去に出題された問題をもとに1~2年時に学んだ講義・実習内容を総復習することを目的として開催し、学生の学習に対する意欲を増進させた。(2007年10月15日~現在)			
4) 大東文化大学 学生による授業評価 大学の授業評価実施委員会		2007.12.00	大東文化大学「学生による授業評価委員会」が実施した学生による授業評価(2007年12月)において、授業に対する総合的満足度は、5点満点中、血液形態検査学実習4.4点、止血検査学4.3点と高い評価を得た。			
5) 大東文化大学 学生による授業評価 大学の授業評価実施委員会		2008.12.00	大東文化大学「学生による授業評価委員会」が実施した学生による授業評価(2008年12月)において、授業に対する総合的満足度は、5点満点中、血液形態検査学実習4.1点、止血検査学4.3点と高い評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 血液細胞ノート形態速習アトラス(文光堂)		2005.04.00	講義の教材として使用。筆者は、血液標本作製法、顕微鏡操作法、血液細胞観察のための基礎知識、血液細胞の人工的变化、染色体検査、フローサイトメトリを記載した。(2-8頁、30-34頁、42項、63-64頁、69-79頁)(2005年4月~現在) ※研究業績の再掲			
2) 臨床検査学講座第2版 血液検査学(医歯薬出版)		2006.04.00	講義の教材として使用。筆者は、「第6章 血球に関する検査B赤血球沈降速度」92-94頁、「第6章 血球に関する検査D溶血の検査、第7章 形態に関する検査」103-141頁を担当。(2006年4月~現在) ※研究業績の再掲			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
1) 諸外国の臨床検査と臨床検査技師教育		2005.08.00	臨床検査49巻8号 近藤 弘、狩野元成、巽 典之 諸外国から得た臨床検査技師とその教育に関するアンケート調査をもとに、わが国と諸外国の制度を比較した。また文献、聞き取り調査の結果も踏まえ、わが国における臨床検査技師教育が示す方向性について考察した。分担「原稿全般」895-898頁 ※研究業績の再掲			
2) 「教職員による授業参観を制度化」		2006.04.01	平成19年発行のFDニュースNo.2に掲載。単著 ※研究業績の再掲			

3) 4年制大学教育の目指す臨床検査技師教育－アンケート調査の結果から－	2007.06.00	機器・試薬 30 巻 3 号 229-233 頁 分担「原稿全般」185-194 頁 近藤弘、佐藤陽子、狩野元成、伊藤機一 医療施設や臨床検査技師養成施設で働く医師・臨床検査技師・衛生検査技師を対象にアンケートを実施し、4年制大学における実務教育の位置づけ、育成する人材像、学内実習での到達点、学部教育の内容、4年制大学が備えるべき教育機能、臨地実習期間などについて検討し、4年制大学教育の目指す臨床検査技師教育の方向性を考察した。 ※研究業績の再掲
4) 外国の臨床検査技師制度	2009.03.01	臨床検査学教育 Vol.1 No.1 46-49 頁 上田耕久、佐藤陽子、近藤弘 諸外国の臨床検査技師教育制度、臨床検査制度の調査を行い我が国の現状と比較し今後の課題について考察し、学会誌に資料論文として発表した。「資料提供と調査研究の全般にわたる統括」 ※研究業績の再掲

4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 臨地実習、どうしていますか？－送り出す側から－	2004.12.09	(社)大阪府臨床衛生検査技師会 講演 学生からのアンケート結果をもとに、臨地実習施設への要望などについて話題提供した。またカナダでの臨地実習の様子をもとに諸外国とわが国の臨床検査技師教育カリキュラムを比較した。(大阪市) ※研究業績の再掲
2) 高等学校の体験授業での講義	2005.04.00	埼玉県立浦和東高等学校「浦和東1日大学(大学出張講義)」、大東文化大学第一高等学校「大学の授業」、本学「オープンキャンパス」、東京都立足立新田高等学校「大学の模擬授業体験」において“血液を見て考える”について講義した。(平成17年4月～現在)
3) 生活習慣病を考える－太りすぎと血液－	2005.11.00	府民健康フォーラムで講演。大阪府民を対象にしたフォーラムにおいて、メタボリックシンドロームと血液検査について解説した。(大阪市) ※研究業績の再掲
4) (社)全国労働衛生団体連合会臨床検査専門委員会委員	2006.07.04	平成18年7月～現在に至る 全国約300施設を対象に実施している外部精度管理調査の自動血球分析項目を担当している。毎年発行される精度管理調査報告書はそれをまとめたものである。私は血液学検査の調査結果を記述した。
5) 臨床検査における精度保障・精度管理の基礎	2007.06.17	母子愛育会研修部による平成19年度先天性代謝異常症等検査技術者研修会において講演した。(東京都) ※研究業績の再掲
6) メタボリックシンドローム検診のあり方－検診の品質保証を考える－	2007.09.22	第56回日本臨床化学会近畿支部例会において、特定健診に必要な臨床検査とその品質保証のあり方について、特定健診の実施に至るまでの議論の過程も紹介しながら解説した。(京都市) ※研究業績の再掲
7) 大学祭展示の指導	2007.10.01	大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科1～3年生希望者を対象に、大学祭における学生による血液学に関連する展示のための指導を通して、学生の血液検査学学習への取り組みの促進に努めた。学生に効果的なプレゼンテーション技術も指導した。(平成19年10月～平成20年11月)

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 血液細胞ノート形態速習アトラス	共著	2005.04.00	文光堂	巽典之(編)、久保田勝秀、本間 優、東 克己、近藤 弘、阿南健一 血液標本作製法、顕微鏡操作法、血液細胞観察のための基礎知識、末梢血赤血球系(異常像)、白血球系(異常像の一部)、血液細胞の人工的变化、染色体検査、フローサイトメトリの写真、図表、解説を記載した。2・8頁、30・34頁、42頁、63・64頁、69・79頁 分担「原稿の全般」
2 高齢者基準値ハンドブック	共著	2005.06.00	中外医学社	巽典之、朝山 均、三木隆巳、近藤 弘(編)編集ならびに介護老人保健施設で得られる高齢者臨床検査値について、自身の調査データも含めて解説した。分担「編集および執筆」181-188頁

3	自動血液検査品質保証論	共著	2005.07.00	ベックマン・コールター株式会社	巽典之(監修)近藤弘、巽典之 国際標準化機構、ISO15189、外部精度監査を受ける立場、行う立場、血球検査の国際的な標準化の作業について解説した。分担「第7章臨床検査室外部精度監査 audit と国際標準化機構 International Organization for Standardization(ISO)」95-97頁、「第10章血液検査国際標準化作業の動き International standardization and harmonization in hematology」108-109頁
4	英文対訳 計測技術ティーチングー自動血球分析装置の基本原理ー	共著	2006.01.00	株式会社宇宙堂八木書店	巽典之(編)近藤弘、永井豊、巽典之 自動血球分析装置の内部精度管理法および外部精度評価法を解説するとともに、アジア地区外部精度評価活動の現状と今後のわが国における外部精度評価について記載した。分担「内部精度管理、外部精度評価、AQuAS (アジア臨床検査外部精度評価)」147-178頁
5	臨床検査学講座第2版 血液検査学	共著	2006.04.00	医歯薬出版	奈良信雄、小山高敏、東克己、近藤弘、小河原はつえ、三村邦裕、西岡淳二 臨床検査技師養成のための血液検査学分野の教科書として編集されている。分担「第6章血球に関する検査B赤血球沈降速度」92-94頁、「第6章血球に関する検査D溶血の検査、第7章形態に関する検査」103-141頁
6	基準値と異常値の間ーその判定と対策ー改訂第6版	共著	2006.05.20	中外医学社	河合忠(編)、巽典之、山根孝久、近藤弘、ほか 各臨床検査項目について、病態との関係、誤差とその要因、基準値、生理的変動、年齢・性による変動、境界値などについて解説した。分担「可溶性フィブリンモノマー、フィブリノペプチド」、「FDP、Dダイマー」、「プロテインC、プロテインS (付ADAMTS-13)」137-139頁、140-142頁、146-149頁
7	コンパクト福祉系講義 医学一般	共著	2007.03.20	金芳堂	日野原重明(監修)、巽典之、星野正明(編集)、池辺寧、伊藤孝治、片山善章、川合陽子、北村肇、倉田義之、車谷典明、近藤弘、新谷奈苗、末続なつ江、高内克彦、巽典之、橋本篤孝、蓮間忠芳、平塚儒子、増田樹郎、増原光彦、橋本珠希、森三樹雄、守本とも子、横田正春、若林和夫、和田佳郎 第17章血液・尿・糞便検査、微生物検査、遺伝子検査、病理検査、輸血検査、生理検査、画像検査における最新臨床検査技術について解説した。 分担「最新臨床検査技術」114-118頁
8	遺伝子検査技術-遺伝子分析科学認定士テキスト-	共著	2007.03.21	宇宙堂八木書店	有限責任中間法人日本臨床検査同学院、遺伝子分析科学認定士制度委員会(編集)三村邦裕、古川泰司、諏訪部章、野沢胤美、水口國雄、熊谷俊一、奈良信雄、岡村登、西川隆、川上康、前川真人、糸賀栄、羽田明、藤巻慎一、行正信康、南木融、上野一郎、石川博、堤正好、谷口真理子、宮地勇人、近藤達郎、三浦利彦、船渡忠男、横田浩充、西岡淳二、増川敦子、根津雅彦、野村文夫、西村基、庫本高志、江口文陽、沼部博直、松田一郎、涌井敬子、福嶋義光、東田修二、辻直樹、櫻井晃洋、登勉、那谷雅之、日野雅之、金田安史、池内達郎、別府弘規、三輪晋智、松田洋一、梅原千鶴子、松田和之、近藤弘、小原保彦、日高恵以子、塚崎邦弘、上平憲、島田裕允、大神明子、祖父尼俊雄 染色体標本の作製法(低張処理、固定、展開、保存)について解説した。 分担「応用編 5.染色体検査の実践 B.標本作製」257-258頁
9	白血球計測学ー1	共著	2007.11.00	シスメックス株式会社	巽典之(編著)、近藤弘、前田宏明、横田正春、紙谷富雄 異型リンパ球、環状鉄芽球の形態学的特徴と臨床的意義について記述した。 分担「第2章 白血球分類の理解に必要な臨床的事項 異型リンパ球、環状鉄芽球」89-93頁、115頁
10	スタンダード検査血液学 第2版	共著	2008.05.20	医歯薬出版	日本検査血液学会(編)、麻生裕康、新井盛大、飯島憲司、家子正裕、近藤弘、ほか 血液検査の基礎知識、専門知識、検査方法、検査結果の判定方法、検査業務に関する知識と検査技術について記載した。分担「赤血球沈降速度、リンパ球幼若化試験」110頁、153-154頁
11	水を知るー病院検査を理解するための豆知識ー	共著	2008.10.01	宇宙堂八木書店	巽典之(編)、横田正春、紙谷富夫、近藤弘 自然界の水、腐敗した水と機能水、原水の特性、上水と水質基準、水の消毒法、下水、病院用水、実験室用水、精密工業用水、人体と水、自然の水浄化力に関する解説のうち、イオン交換水、超純水について記述した。 51-54頁

12	シーメンスサイエンテフィックインフォメーションー Hematologyー	共著	2008.10.01	シーメンスヘルスケア・ダイアグノスティクス	巽 典之、近藤 弘、横田正春、他 シーメンス物語、白血病のF A B分類およびWHO分類、異常細胞出現時の報告方法の現状、コントロール血液、Band と Seg.の分類について、F C Mによる白血球5分類と好中球分析、単球のフローサイトメトリー、LUCとは?について解説した。 61-70 頁、127-130 頁、160-164 頁、188-189 頁、219-221 頁
13	白血球計測学ー2 血液疾患治療の動向・白血球計測に係るQ & A	共著	2008.10.20	シスメックス株式会社学術本部	巽 典之(編著)、近藤 弘、前田宏明、横田正春、紙谷富夫 血液疾患治療の動向(主要血液疾患に対する最近の治療法とその血液検査値の変化)、よく遭遇する血液分析に関わるQ & Aのうち、外部精度管理に関するQ & Aを担当した。 150-154 頁
14	臨床検査 Yearbook 2009 血液検査編	共著	2009.01.31	臨床病理刊行会	矢富 裕、小池由佳子、金子 誠、横田浩充、菅野信子、常名正弘(編) 第1章 総論 3.自動血球計数機の進歩、第2章 各論 E.標準化 1.血球算定の標準化ーその現状と課題ーについて解説した。14-19 頁、148-152 頁
論文					
1	最新臨床検査と医療リスク回避:(第1章)自動分析検査前エラー	共著	2004.11.00	医学と生物学 148 卷 11 号	巽 典之、只野壽太郎、横田正春、近藤 弘、Narayanan S 最近の臨床検査は大規模臨床検査システムで実施され、その分析データには種々の誤差が含まれる。これまで分析誤差に関する報告は多いが、総合的検査システムで生ずる誤差の解説はなく、本総説では臨床医が知っておくべき分析前誤差について記述した。分担「原稿全般」1-17 頁
2	知っておいてほしい 海外から来る病気	共著	2005.00.00	医科器械学 76 卷	巽 典之、横田正春、近藤 弘、紙谷富夫 海外から持ち込まれる可能性のある各種感染症の原因、病態、治療、予防法に関して詳細に記述した。分担「原稿全般」108-118 頁
3	最新医学大辞典(第3版)	共著	2005.04.00	医歯薬出版	最新医学大辞典編集委員会 後藤 桐(編集代表) 近藤 弘 血液検査学用語のうち、ワーファリン治療のためのプロトロンビン時間測定に関連する I N R、I S I について単著で解説し、線溶系用語である PAI-1 については巽 典之と共著で解説した。分担「INR,ISI,PAI-1」1 頁、1627 頁
4	小型自動血球分析装置による白血球分類の有用性に関する検討	共著	2005.08.00	医学と生物学 149 卷 8 号	近藤 弘、永井 豊、木下知美、上村ゆり子、斉藤史徳、巽 典之 小型自動血球分析装置の白血球分類機能の有用性について従来法と比較するとともに、開発が進められている竿状核球に関する新しいパラメーターを検討し知見を得た。分担「実験の立案および全般にわたる実施と統括」281-285 頁
5	諸外国の臨床検査と臨床検査技師教育	共著	2005.08.00	臨床検査 49 卷 8 号	近藤 弘、狩野元成、巽 典之 諸外国から得た臨床検査技師とその教育に関するアンケート調査をもとに、わが国と諸外国の制度を比較した。また文献、聞き取り調査の結果も踏まえ、わが国における臨床検査技師教育が示す方向性について考察した。分担「原稿全般」895-898 頁
6	Vlidation of platelet counting accuracy with the CelltacF automated hematology analyzer	共著	2005.12.00	J Automated Methods & Management in Chemistry No.4	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi モノクローナル抗体を用いたフローサイトメトリーによる血小板測定法を検討し、それを用いて CelltacF 自動血球分析装置の血小板計測の正確性を検討した。分担「研究全般」235-239 頁
7	Detection capability of hematopoietic tumor cells by new flags of automated hematology analyzer	共著	2005.12.00	Anal Bio-Sci Vol.28 No.5 PP.438-444	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 自動血球分析装置による幼若細胞、腫瘍性細胞など異常な細胞の検出のための検出メッセージを新たに設定するとともに、その検出感度を検討した。分担「研究全般」438-444 頁
8	Evaluation of accuracy and traceability of automated hematology analyzer; Celltac F as an example	共著	2005.12.00	Medicine and Biology Vol.149 No.12 PP.468-482	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 血球分析装置における追跡性の検証を行い、結果として精確さと追跡性の概念図を作成した。その結果、選択した基準分析法は国際的に認知された標準法に追跡可能であることが判明した。また検討した自動血球分析装置は二校正器として適当であると判断された。分担「研究全般」468-482 頁
9	赤血球沈降速度	共著	2006.03.00	生物試料分析 29 卷 2 号 140-145 頁	杉山昌晃、近藤 弘、巽 典之 赤血球沈降速度測定法と必要な抗凝固剤について記述した。特にわが国において広く使用されているウェスターグレン法については測定原理、測定法、結果の解釈について詳細に説明した。分担「原稿全般」

10	なぜ炎症部位では血液が凝固しないのか？	共著	2006.03.00	生物試料分析 29 巻 (印刷中)	巽 典之、近藤 弘、紙谷富夫 血液凝固系の概要および、炎症部位における血液凝固線溶系と炎症反応とのかかわりについて総説した。分担「原稿全般」
11	最新臨床検査と医療リスク回避：(第3章)生活習慣病時代における糞便科学の現状	共著	2006.04.00	医学と生物学 150 巻 4 号 137-151 頁	巽 典之、横田正春、近藤 弘、紙谷富夫 糞便が教える人間の歴史、糞便異常症の臨床、糞便の臨床検査(細菌)、糞便中の真菌、糞便中のウイルス、原虫・寄生虫症、潜血検査、糞便科学の将来について総説した。分担「原稿全般」137-151 頁
12	生活習慣病と簡易検査(POCTを含む)システム	共著	2006.07.00	臨床病理レビュー 特集第 138 号 45-50 頁	近藤 弘、巽典之 健康者を対象とした特定健診(メタボ健診)では従来の病院検査とは異なる検査の利便性に着目して POCT を含む簡易検査を利用し、検査結果を総合的に判断できるシステムを活用する意義は大きい。これらの観点から、メタボリックシンドロームを含む生活習慣病簡易検査システム、主要簡易検査システムについてとその導入時の考え方について概説した。分担「原稿全般」45-50 頁
13	特定健診結果に対する栄養および運動指導	共著	2006.08.00	機器・試薬 第 30 巻 1 号 9-12 頁	三輪孝士、近藤弘 特定健診・保健指導とメタボリックシンドロームについて概説し、診断基準に基づくスクリーニングから支援レベルを決定する際の注意点、エネルギー摂取量の評価と活動内容の関係を示し、保健指導スタッフが果たす役割について述べた。分担「原稿全般」9-12 頁
14	自動血球分析装置	共著	2006.09.00	メディカル・テクノロジー 34 巻 13 号 1409-1412 頁	近藤弘、巽典之 全自動血球分析装置の概要、検査法の共通原理(血球数と容積、自動白血球分類、網赤血球)、測定項目、装置を導入する際に整えるべき環境、装置の安全管理・保守管理、装置を選択する際のポイント、今後の展望、注意点について解説した。分担「原稿全般」1409-1412 頁
15	身体的機能の加齢変化	共著	2006.09.00	臨床検査 第 50 巻 9 号 957-960 頁	巽 典之、近藤 弘、横田正春、松本珠希 高齢化に伴う心身機能評価は老化度の個人変動が多様であることと、評価項目の基準値・計測変動度が評価方法によって異なっていることから、測定値の評価は慎重でなければならない。また、身体的加齢変化測定のための検査項目選択に当たっては、科学的妥当性が確立されていて、検査継続性があり国際性のあるものを選ぶべきである。分担「原稿の一部を執筆」959 頁
16	スポーツがおよぼす血液検査への影響	共著	2006.09.00	臨床病理レビュー 特集第 137 号 76-80 頁	近藤 弘、巽 典之 長期的なスポーツの影響は赤血球系に強く表現され、運動によって引き起こされる貧血をスポーツ貧血という。他方、白血球系においては運動により免疫担当細胞の分布状態および免疫活性が大きく変化する。これらの影響を判定するためには、臨床検査による定期的な身体機能のチェックが不可欠である。分担「原稿全般」76-80 頁
17	介護老人保健施設で得られる高齢者臨床検査値	共著	2006.10.00	臨床検査 第 50 巻 9 号 1003-1008 頁	近藤 弘、大下弘介、兵頭弘美、巽 典之 要介護者が介護老人保健施設に入所する際に実施する臨床検査を基に、介護老人保健施設で得られる臨床検査血の特質および介護老人保健施設における基準値設定に関して記述した。分担「原稿全般」1003-1008 頁
18	The detection system by flow cytometry of morphological abnormality obtained by non-staining nucleated cells	共著	2006.12.00	Indonesian Journal of Clinical Pathology Vol.16 No.3 pp.132-137	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 無染色での光学的白血球分類機能を有する小型全自動血球分析装置における異常細胞の識別能について評価し、臨床に導入する際の留意点・有用性を明らかにした。分担「研究全般」132-137 頁
19	Current status of national external quality assessment scheme (NEQAS) results in clinical chemistry and complete blood counts in Japan	共著	2007.02.00	Medicine and Biology Vol.151 No.2 PP.49-56	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 2004 年に日本医師会が実施した全国規模の外部精度管理調査結果をもとに、参加施設数、調査項目および評価システムの現状を調査するとともに、臨床化学検査項目では施設間差、方法間差の有無、血球分析項目については大阪府医師会の調査結果との比較検討を行った。分担「研究全般」49-56 頁

20	Kinetic analysis of bile acids in the feces of colorectal cancer patients by gas chromatography-mass spectrometry(GC-MS)	共著	2007.05.00	臨床病理 55 巻 5 号 417-427 頁	Tomoaki Tadano, Motonari Kanoh, Hiroshi Kondo, Masaru Matsumoto, Kunihiro Mimura, Yuhsaku Kanoh, Kazuhiro Sakamoto all タイプ胆汁酸の大腸癌発生関与の可能性の詳細を明らかにするために、ガスクロマトグラフィ質量分析法を用いて健常成人および大腸癌患者便中の胆汁酸の分析を行い、健常成人を対象として大腸癌占拠部位ごとの胆汁酸動態についても検討した。 分担「研究全般」417-427 頁
21	4 年制大学教育の目指す臨床検査技師教育—アンケート調査の結果から—	共著	2007.06.00	機器・試薬 30 巻 3 号 229-233 頁	分担「原稿全般」185-194 頁 近藤弘、佐藤陽子、狩野元成、伊藤機一 医療施設や臨床検査技師養成施設で働く医師・臨床検査技師・衛生検査技師を対象にアンケートを実施し、4 年制大学における実務教育の位置づけ、育成する人材像、学内実習での到達点、学部教育の内容、4 年制大学が備えるべき教育機能、臨地実習期間などについて検討し、4 年制大学教育の目指す臨床検査技師教育の方向性を考察した。
22	血小板計測標準法	共著	2007.06.00	生物試料分析 30 巻 3 号 203-212 頁	永井 豊、近藤弘、巽 典之 血小板計測原理と干渉物質、血小板計測法と標準法、血小板標準計測法の変遷、血液検査分野での国際標準化組織の変遷、国際標準化機構 (ISO) での取り組み、測定の特長・サビリティ、ICSH/ISLH 標準法について述べた。 分担「原稿全般」203-212 頁
23	血小板活性化に伴う形態変化とその計測	共著	2007.06.00	生物試料分析 30 巻 3 号 203-212 頁	巽 典之、横田正春、紙谷富雄、永井豊、近藤 弘 血小板活性化の生理、活性化に伴う形態変化、血小板・フィブリン結合、形態変化の物理的計測について、走査および透過電子顕微鏡像や粒度分布図を用いて総説した。
24	抗凝固剤の使い分け	共著	2007.12.00	検査と技術 35 巻 13 号 1476-1477 頁	近藤弘、佐藤陽子、巽典之 汎用抗凝固剤検索時の異変、血小板機能と抗凝固剤、抗凝固剤の使い分けについて述べた。 分担「原稿全般」1476-1477 頁
25	自動血球分析装置におけるヒストグラムの見方	共著	2008.03.00	検査と技術 36 巻 3 号 229-233 頁	近藤弘、佐藤陽子、永井豊、巽典之 電気抵抗式血球測定 の原理、ヒストグラム、白血球 3 分類について解説し、ヒストグラム判読時の注意点を示した。 分担「原稿全般」229-233 頁
26	血球分析のグローバルな標準化の現状と動向	共著	2008.04.01	日本臨床検査自動化学会会誌 Vol.33, No.2, PP.168-171	近藤 弘、佐藤陽子、永井 豊、巽 典之 国際的標準化のこれまでの経緯、標準化の現状、国際的な動向、検査室認定と血球分析項目、外部制度評価の役割、今度の対策について述べた。 分担「原稿全般」168-171 頁
27	外国の臨床検査技師制度	共著	2009.03.01	臨床検査学教育 Vol.1 No.1 pp.46-49	上田耕久、佐藤陽子、近藤 弘 諸外国の臨床検査技師教育制度、臨床検査制度の調査を行い我が国の現状と比較し今後の課題について考察し、学会誌に資料論文として発表した。「資料提供と調査研究の全般にわたる統括」46-49 頁
28	室温の赤沈への影響	共著	2009.03.01	検査と技術 Vol.37 No.3 PP.286-289	近藤 弘、佐藤陽子、巽 典之 赤血球沈降速度に及ぼす室温および赤沈管の傾斜による影響について、赤沈の基礎および自験例をもとに室温をはじめ測定時の種々の変動要因について解説した。 分担「研究全般」286-289 頁
その他					
1	赤血球	共著	2004.05.00	バイエルヘマトロジーニュース 第 4 号 1-39 頁	秋山利行、池本敏行、兜森 修、近藤 弘ほか 赤血球形態、コントロール血液について解説した。 分担「原稿の一部を執筆」1-9 頁、30-33 頁
2	Performance evaluation of the platelet counts obtained using a Celltac F automated hematology analyzer	共著	2004.06.00	The 26th International Federation of Biomedical Laboratory Sciences World Congress, 13-18 June, Stockholm Sweden (Abstract Book)	Hiroshi Kondo, Kayoko Hirano, Emi Uchibori, et al 自動血球分析装置セルタック F の血小板計測の正確性について、モノクローナル抗体を用いた国際標準法を用いて評価した。 分担「研究全般」240 頁
3	血液検査の精密性と正確性の保証	共著	2004.12.00	トライアングル第 5 号 1-22 頁	近藤 弘、巽 典之、秋山利行 コールターカウンターの開発の歴史血液検査の精密製・正確性の保証に関して記述した。 分担「原稿の一部を執筆」7-10 頁
4	平成 16 年度(第 32 回)精度管理調査結果報告	単著	2005.02.00	(社)大阪府医師会	大阪府医師会が実施している臨床検査精度管理調査の年次報告書である。報告書のうち、赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリット、白血球数、血小板数、赤血球指数、網赤血球比率、白血球分類の調査結果を記述した。249-304 頁

5	自動血球分析装置 CelltacF の登録衛生検査所での有用性に関する検討	共著	2005.04.00	医学検査 54 巻 4 号	高木美見、上村ゆり子、中原和己、近藤 弘 小型自動血球分析装置 CelltacF の登録衛生検査所検体における有用性を検討した。血球分析は従来方途の比較、白血球分類は目視法と比較した。分担「実験の立案および全般にわたる実施と統括」464 頁
6	Evaluation of the automated immature granulocyte count(IG) and band cell count (band) obtained using a Celltac F automated hematology analyzer	共著	2005.05.00	Laboratory Hematology Vol.11, No4	Hiroshi Kondo, Yutaka Nagai, Toshiyuki Akiyama, Noriyuki Tatsumi 自動血球分析装置セルタックFの幼若顆粒球、桿状核球を反映するパラメーターのそれぞれについて変更ならびに設定を試みるとともに臨床的有用性を検討した。分担「研究全般」260-261 頁
7	Performance evaluation of the celltac F hematology analyzer for the new flag in the hamatopoetic tumor cells and abnormal cells	共著	2005.05.00	Laboratory Hematology Vol.11, No4	Yutaka Nagai, Noriyuki Tatsumi, Hiroshi Kondo, et al 各種白血病に特徴的な異常細胞のスキャットグラムを詳細に解析することにより、自動血球分析装置による白血病型分類を試みた。分担「研究全般」260 頁
8	好中球	共著	2005.05.00	バイエルヘマトロジーニュース第5号 1-30 頁	小河原はつ江、兜森 修、北川誠一、近藤弘、ほか 好中球機能を見る、Band と Seg. の分類について、FCM による白血球5分類と好中球分析について記述した。分担「原稿の一部を執筆」1-3 頁,23-27 頁
9	貧血診断における自動血球分析装置 CelltacF のパラメーターの有用性に関する検討	共著	2005.09.00	日本臨床検査自動化学会会誌 30 巻 4 号	上村ゆり子、近藤 弘、永井 豊、巽 典之 各種赤血球異常症例において、自動血球分析装置を用いて電気抵抗法により血小板領域と小赤血球領域を明確に区別するための検討を行った。分担「研究全般」413 頁
10	自動血球分析装置 CelltacF の幼若顆粒球および桿状核球に関するパラメーターの検討	共著	2005.09.00	日本臨床検査自動化学会会誌 30 巻 4 号	近藤 弘、永井 豊、巽 典之 無染色フローサイトメトリー原理による自動白血球分類機能のうち、幼若顆粒球および桿状核球に関するパラメーターについて検討した。分担「研究全般」416 頁
11	Accuracy assurance for the automated hamatology analyzer, CelltacF	共著	2005.09.00	The 2nd Congress of Asia Association of Medical Laboratory Scientists, Shanghai	Yuraka Nagai, Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 自動血球分析装置の正確度評価のための手順・考え方について、自動血球分析装置 CelltacF を対象機種として、分析結果をもとに考察した。分担「研究全般」
12	血液形態学の最新情報	単著	2005.09.00	シスメックス第4回血液形態セミナー、仙台市	講演 臨床検査技師を対象にした講演会において、わが国における血球分析の標準化、国内外における外部精度評価実施の現状について解説した。分担「講演全般」
13	Evaluation of a flow-cytometric method using monoclonal antibody for differential leukocyte differential	共著	2005.09.00	The 2nd Congress of Asia Association of Medical Laboratory Scientists, Shanghai	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi, Yuraka Nagai, Shigeko Yamamoto シンポジウムモノクローナル抗体とフローサイトメータを用いた白血球5分類測定法の評価成績を報告した。分担「研究全般」
14	The actual situation of hematology quality assessment and the future of standardization	共著	2005.09.00	The 2nd Congress of Asia Association of Medical Laboratory Scientists, Shanghai	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 血球分析の日本における標準化の現状、外部精度評価の国際的動向、自動血球分析装置 CelltacF における品質管理について講演した。分担「講演全般」
15	Country report & QC network II:NEQAS 2004 in Japan	共著	2005.10.00	6th Colloquium Asian Network for Clinical Laboratory Standardization and Harmonization (Ho Chi Minh City, Viet Nam)抄録集 41 頁	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 日本の外部精度管理の現状を報告した。また日本医師会の全国規模の調査と大阪府医師会の地区サーベイの結果を比較し、半加工血液と新鮮血液による自動血球分析項目の精度管理調査の長短所を述べた。分担「研究全般」416 頁

16	血液検査の外部精度管理	共著	2005.11.00	総合健診 32 巻 6 号	近藤 弘、巽 典之 新鮮血試料および半加工血試料による外部精度管理調査を比較し、わが国における外部精度管理調査の問題点を考察した。アジア地域の外部精度評価プログラムおよびカナダ国オンタリオ州の外部精度管理プログラムを紹介した。研修会資料である。分担「原稿全般」 552-556 頁
17	生活習慣病を考えるー太りすぎと血液ー	単著	2005.11.00	府民健康フォーラム、大阪市	大阪府民を対象にしたフォーラムにおいて、メタボリックシンドロームと血液検査について解説した。分担「講演全般」
18	日本医師会・大阪府医師会の連携強化による臨床検査レベルの向上 平成 17 年度血液一般検査の精度管理より	単著	2006.03.00	大阪府医師会臨床検査精度管理フォーラム、大阪市	平成 17 年度精度管理調査結果の概要、および歴史の変遷について解説した。血液一般検査において日本医師会精度管理調査と大阪府医師会精度管理調査を組み合わせる実施することの意義について述べた。分担「講演全般」
19	平成 17 年度(第 33 回)精度管理調査結果報告	単著	2006.03.00	(社) 大阪府医師会	大阪府医師会が実施している臨床検査精度管理調査の年次報告書である。報告書のうち、赤血球数、ヘモグロビン、ヘマトクリット、白血球数、血小板数、赤血球指数、網赤血球比率、白血球分類の調査結果を記述した。132-164 頁
20	Current Situation of NEQAS Implementation with ISO15189	共著	2006.04.00	7th Colloquium Asian Network for Clinical Laboratory Standardization and Harmonization (Putrajaya, Malaysia)	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 半加工血液および新鮮血を用いた血球分析項目の外部精度管理調査の結果から、半加工血液ではメーカー間差、機種間差が大きく、特に白血球分類値では著しい差が存在する。また表面マーカー検査では、施設間差が非常に大きいものがあり、理想的な精度管理調査用試料が存在しないことが標準化を遅らせている。標準化に向けて、ユーザーとメーカーの連携、コンセンサス値の検討が重要である。 分担「研究全般」
21		単	2006.04.01		平成 19 年発行の F D ニュース No.2 の「教職員による授業参観を制度化」を執筆。
22	平成 18 年度総合精度管理事業に基づく全衛連臨床検査精度管理調査結果報告書	共著 著	2006.06.00	(社) 全国労働衛生団体連合会 PP.50-54	近藤弘、川合陽子 全国労働衛生団体連合会が実施している臨床検査精度管理調査の年次報告書である。報告書のうち、外部精度管理調査の担当項目である血液学検査部門を担当した。分担「原稿全般」 50-54 頁
23	A Trial of Cooperation Between the Japan Medical Association on an External Quality Assurance Schema for Automated Blood Cell Analysis	共著	2006.09.00	The 27th World Congress of Biomedical Laboratory Science (Seoul, Korea)	Hiroshi Kondo, Masaaki Sugiyama, Noriyuki Tatsumi 臨床検査の大規模外部精度管理調査である日本医師会および大阪府医師会の調査について、測定項目、想定法のコード番号および報告値の統計解析方法を共通化することで、異なる実施母体による複数の外部精度管理調査結果を同一の判断基準で評価できるかどうかを検討した。 分担「研究全般」抄録集 118 頁
24	Performance Evaluation of a New Compact Size Automated Hematology Analyzer and C-Reactive Protein Quantitation System for Point-of-Care Testing; Celltac Alpha and Celltac Chemi	共著	2006.09.00	Congress of Biomedical Laboratory Science (Seoul, Korea)	Masaaki Sugiyama, Hiroshi Kondo, Yutaka Nagai, Shunichi Takai, Hiroshi Kawarai, Hitoshi Asayama, Noriyuki Tatsumi 小型自動血球分析装置および C 反応性タンパク測定装置の臨床的有用性について検討した。再現性、直線性、キャリアオーバー、参照機との相関性などの基本的性能は優れており、C R P 測定装置は前希釈なしで全血、血清、血漿による測定が可能であり、有用性が高い。分担「研究全般」 118-119 頁
25	平成 18 年度(第 34 回)精度管理調査結果報告	単著	2006.09.00	(社) 大阪府医師会 203-206 頁	自動血球分析装置の精度管理調査用血液試料を検討した。市販されているコントロール血液を用いて、メーカー間差を調査した。各メーカーが市販しているコントロール血液にはそれぞれ適合性に差があり、外部精度管理調査用試料として使用する場合には、事前の検討が不可欠である。
26	小型自動血球分析装置セルタック α の性能評価	共著	2006.10.00	第 46 回近畿医学検査学会 福井市	上村ゆり子、高木美見、近藤弘、杉山昌晃 セルタック α は小型で操作性がよく、P O C T、一般の検査室、開業医、緊急検査室などで有用な装置である。特に低倍率希釈および希釈前モードとともに血小板数および白血球数の低値検体においても信頼性の高い正確な測定が可能であった。 分担「研究全般」

27	Determination of Low Ratio Leukocytes in Peripheral Blood Using Fuluorescence-Label ed Monoclonal Antibodies an	共著	2006.11.00	Laboratory Hematology vol.12,No.3 179	Hiroshi kondo, Yutaka Nagai, Shigeko Yamamoto, Noriyuki Tatsumi モノクローナル抗体を用いた末梢血液中の出現率の少ない細胞、好酸球、単球を含む白血球分類を試みた。洗浄操作を加えることなく、FS/SS スキャッタを組み合わせることで、正確な白血球分類が可能となった。 分担「研究全般」
28	POCT用小型自動血球分析システム (Celltac α + Chemi) の基礎的検討	共著	2006.12.00	日本検査血液学会雑誌 vol.7 学術集号 ,s87	杉山昌晃、近藤弘、永井豊、巽典之 セルタックα、セルタック Chemiは白血球分類のスクリーニング装置として、有用性が高いことが示唆された。また高濃度測定モードは希釈の煩雑さがなくPOCT用機器として有用である。白血球数、好中球%、CRPが全血で短時間に測定できることから外来迅速検体加算などにも対応可能と思われる。 分担「全般」
29	A New Compact Size Automated Hematology Analyzer for Community Hospitals and Clinics:Celltac A	共著	2007.01.00	Laboratory Hematology vol.12,No.3, 180	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Masaaki Sugiyama, Hitoshi Asayama, Shuichi Takai, Itsunari Yamamoto, Noriyuki Tatsumi 小型全自動自動血球分析装置セルタックαの性能評価を行った。再現性、大型機との相関性、白血球3分類機能は良好で、ポイントオブケアを含む臨床に有用な装置である。分担「研究全般」
30	Performance Evaluation of a New CelltacA Automated Hematology Analyzer and Celltac Chemi: 3-part Differential and C-reactive protein quantitation	共著	2007.02.00	Laboratory Hematology vol.12,No.3, 180	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Masaaki Sugiyama, Shuichi Takai, Katsuhiko Tsuchiya, Hiroshi Kawarai, Noriyuki Tatsumi 炎症性疾患診断に適したCRP測定装置と白血球3分類機能搭載小型自動血球分析装置のシステムを検討した。CRP測定その他機種との相関性は良好で白血球3分類機能とともに炎症性疾患の診断に有効なことが確認された。分担「研究全般」
31	Efficacy of Cell Surface Analysis Using Blood Cell Analyzer	共著	2007.03.00	Laboratory Hematology vol.12,No.4, 228	Hiroshi Kondo, Noriyuki Tatsumi 血球分析装置による血球表面分析の有効性について述べた。フローサイトメトリを利用した白血球5分類、血小板数算定、日本医師会と大阪府医師会における血液検査の外部精度管理調査結果などについて講演した。 分担「研究全般」
32	Determination of red blood cell, nucleic acid-containing cell and platelet(RNP determinations) by the DNA/RNA emission light crossover analysis	共著	2007.06.00	Laboratory Hematology Vol.29, Suppl PP.59	Yutaka Nagai, Hiroshi Kondo, Shigeko Yamamoto, Noriyuki Tatsumi 蛍光色素アクリジンオレンジで染色した試料のDNA/RNA染色結果をフローサイトメトリ原理に測定原理による測定装置で解析することにより、明確に赤血球、網赤血球、血小板集団を分離測定することができた。分担「研究全般」59頁
33	平成19年度総合精度管理事業に基づく全衛連臨床検査精度管理調査結果報告書	共著	2007.06.00	(社) 全国労働衛生団体連 合会 PP.52-56	近藤弘、川合陽子 全国労働衛生団体連合会が実施している臨床検査精度管理調査の年次報告書である。報告書のうち、外部精度管理調査の担当項目である血液学検査部門を担当した。分担「原稿全般」52-56頁
34	社会福祉法人の依頼による講演 母子愛育会	単著	2007.06.17		近藤弘：母子愛育会研修部による平成19年度先天性代謝異常症等検査技術者研修会（東京都）において、臨床検査における精度保障・精度管理の基礎について講演した。担当「筆頭発表者」
35	血液検査の外部精度管理	単著	2007.07.02	日本総合健診医学会平成17年度・第2回精度管理研修会	血球分析の外部精度管理に関して、精度管理の基礎、内部精度管理、外部精度管理、外部精度管理の国内の現状と課題、アジア臨床検査標準化ネットワークについて解説した。分担「講演全般」
36	血液学検査における精度管理の問題点と対策	単著	2007.07.04	(社) 全国労働衛生団体連 合会 平成19年度臨床検査技師等講習会	平成19年度血液検査外部精度管理調査の解析結果について解説し、精度管理法について解説するとともに、改善点について詳細に述べた。分担「講演全般」
37	新しい小型全自動血球計数器 Celltac α の 検	共著	2007.09.00	日本臨床検査自動化学会会	深海律子、古川恭也、近藤弘、永井豊 Celltac αは測定モードを変更することで希釈操作

38	学術団体の依頼による講演 日本臨床化学会近畿支部	共著	2007.09.22		近藤弘、巽典之：第56回日本臨床化学会近畿支部例会（京都市）において特別講演「メタボリックシンドローム検診のあり方ー検診の品質保証を考えるー」について講演した。担当「筆頭発表者」
39	メタボリックシンドローム検診のあり方ー検診の品質保証を考えるー	共著	2007.09.22	第56回日本臨床化学会近畿支部例会 京都市	近藤弘、巽典之 特定健診に必要な臨床検査とその品質保証のあり方について、特定健診の実施に至るまでの議論の過程も紹介しながら解説した。分担「講演全般」
40			2007.09.28	臨床検査自動化学会誌,vol.32, No.4, p.356	近藤弘、伊藤機一、巽典之：第39回日本臨床検査自動化学会（横浜市）シンポジウム「血液検査のグローバルな標準化ーその現状と対策ー」において「赤血球数・白血球数」について講演した。担当「筆頭発表者」
41	職能団体の依頼による講演 東北臨床検査技師会	共著	2007.09.30		近藤弘、巽典之：第48回東北医学検査学会（盛岡市）において「血球分析の標準化の現状」について講演した。担当「筆頭発表者」
42	ミラーディスクを用いた血小板参照値を決定するための実用法の開発	共著	2007.10.00	一般発表 第47回近畿医学検査学会 大阪市	上村ゆり子、高木美見、杉山昌晃、近藤弘 血小板算定の間接法に、一般に網状赤血球算定で使用するミラーディスクを用いて血小板と赤血球数を計数し、別に自動血球分析装置で算定した同一検体の赤血球数をもちいて、血小板数を正確に算出する方法を考案した。分担「研究全般」
43	振動が赤血球沈降速度に及ぼす影響	共著	2008.02.00	第18回生物試料分析科学会大会（大阪市）	佐藤陽子、近藤弘 赤血球沈降速度の人為的変動要因のひとつとされているが明確な記載がないため精査した。その結果判定時間により振動の影響が異なり、凝集期、沈降期、堆積期により、その影響に差があることが示唆された。分担「研究全般」
44	振動が赤血球沈降速度に及ぼす影響	共著	2008.02.11	生物試料分析 Vol.31、No.1 PP.75	佐藤陽子、近藤弘 赤血球沈降速度の測定の歴史は古く、種々のアーチファクトが存在することが知られている。振動については促進または遅延と記載された教科書があり、検討条件によって異なることが示唆されたため、検討を試みた。分担「研究全般」75頁
45	血液学検査の内部・外部精度管理の進め方と結果の評価	単著	2008.02.27	(社)全国労働衛生団体連合会 平成19年度臨床検査技師講習会	血液検査の内部精度管理、外部精度管理の基礎と実践、血液検査実施上の問題点と解決策について解説した。分担「講演全般」
46	社団法人の依頼による講演 (社)全国労働安全衛生団体連合会	単著	2008.02.29		近藤弘：(社)全国労働安全衛生団体連合会による平成19年度臨床検査技師等講習会において「血液検査の内部精度管理と外部精度管理の現状と問題点」について講演した。担当「筆頭発表者」
47	A rapid assay for determination of red cells, nucleic-acid-containing cells and platelets (RNP determinatinTM) by a crossover analysis of emission DNA/RNA light	共著	2008.06.00	Laboratory Hematology Vol.30, Suppl PP.74	Yukata Nagai, Hiroshi Kondo, Shigeko Yamamoto, Noriyuki Tatsumi 血小板および網赤血球の高精度算定のための、核酸染色およびフローサイトメトリを用いた新しい計測法に関する研究を行い、基準分析法との相関性も良好であり、赤血球および血小板異常を検出するための新しい計測法であることが示唆された。分担「研究全般」74頁
48	External quality assessment for complete blood count using anticoagulated fresh blood for surveillance material	共著	2008.06.00	Laboratory Hematology Vol.30, Suppl PP.91	Hiroshi Kondo, Yohko Kawai 抗凝固剤としてEDTAおよび輸血用保存液CPD液の混液を使用した全国労働安全衛生団体連合会の自動血球分析項目について解析し、採血後48時間以内であれば、経時的に有意な変化を認めず、新鮮血による外部精度管理調査が可能であることを報告した。分担「研究全般」91頁
49	平成20年度総合精度管理事業に基づく全衛連臨床検査精度管理調査結果報告書	共著 著	2008.06.00	(社)全国労働衛生団体連合会 PP.50-54	近藤弘、川合陽子 全国労働衛生団体連合会が実施している臨床検査精度管理調査の年次報告書である。報告書のうち、外部精度管理調査の担当項目である血液学検査部門を担当した。分担「原稿全般」50-54頁
50	血球算定の標準化ーその現状と課題ー	単著	2008.06.13	文部科学省主催 第42回国公立大学病院臨床検査技術者研修テキスト 血液検査 PP.72-73	近藤弘 血球算定の標準化ーその現状と課題ーについて、標準化活動の経緯、標準化作業の現状と動向、外部制度評価について述べるとともに、事前に寄せられた血液検査の標準化に関連した質問について解説した。分担「講演全般」72-73頁

51	Current status of external quality assessment results for clinical chemistry and complete blood cell count in Japan	共著	2008.08.22	9th Colloquium Asian Network for Clinical Laboratory Standardization and Harmonization(Tokyo, Japan)	Hiroshi Kondo, Yohko Kawai, Noriyuki Tatsumi 我が国の臨床検査標準化の現状と問題点について、とくに臨床化学検査および自動血球分析項目における日本医師会外部精度管理調査、全国労働安全衛生団体連合会の外部精度管理調査結果をもとに発表した。分担「講演全般」抄録集 46-47 頁
52	血球分析の標準化の現状	単著	2008.09.30	第 48 回東北医学検査学会	血球分析の標準化の現状について、国内および国際的動向を踏まえて解説した。国内では特に加工血と新鮮血による外部精度管理調査の実践例の紹介、国際的動向については国際検査血液学会、国際血液学標準化委員会活動の動向について解説した。分担「講演全般」
53	血液学検査の内部・外部精度管理の進め方と結果の評価	単著	2009.02.27	(社) 全国労働衛生団体連合会 平成 20 年度臨床検査技師講習会	血液検査の内部精度管理、外部精度管理の基礎と実践、血液検査実施上の問題点と解決策について解説した。分担「講演全般」
54	抗凝固剤に 3.8%クエン酸 Na を用いた自動血球分析装置測定の検討	共著	2009.10.00	一般発表 第 49 回近畿医学検査学会 神戸市	上村ゆり子、高木美見、近藤 弘 抗凝固剤としてクエン酸ナトリウムを用いて、はじめに凝固検査を行い、次に自動血球分析を行うことで、1本の採血管で凝固検査、自動血球分析を行えることを実証した。これにより採血量を軽減し、資源保護、省力化が可能となる。分担「研究全般」

III 学会等および社会における主な活動

1	1975.04.00	～	現在	(社) 日本臨床衛生検査技師会会員
2	1975.04.01	～	2005.03.31	近畿臨床衛生検査技師会会員 (平成 2 年 4 月～平成 5 年 3 月、平成 14 年 4 月～平成 16 年 3 月 理事)
3	1975.04.01	～	2006.03.31	(社) 大阪府臨床検査技師会会員 (昭和 63 年 4 月～平成 5 年 3 月 理事、平成 2 年 4 月～平成 5 年 3 月 21 世紀の臨床検査検討委員会委員、平成 4 年 4 月～平成 10 年 3 月 生涯教育・国家試験対策委員、平成 12 年 4 月～平成 16 年 3 月 理事、平成 14 年 4 月～平成 16 年 3 月 常務理事)
4	1975.09.01	～	現在	日本臨床検査医学会 (旧称：日本臨床病理学会) 会員 (平成 3 年 10 月～平成 7 年 3 月 臨床検査標準委員会血液小委員会アクティブメンバー、平成 4 年 8 月～現在 臨床病理技術士資格認定試験委員 (血液学：関西)、平成 15 年 4 月～現在 臨床病理技術士資格認定試験委員 (緊急検査：関西)、平成 13 年 4 月～平成 14 年 12 月 第 49 回日本臨床検査医学会総企画・プログラム委員)
5	1991.10.01	～	現在	生物試料分析科学会会員 (平成 4 年度～平成 15 年度評議員・学会誌編集委員、平成 16 年度～現在理事・学会誌編集委員)
6	1998.04.01	～	2006.03.31	(社) 大阪府医師会臨床検査精度管理委員会委員
7	1999.01.01	～	現在	日本健康体力栄養研究会会員・評議員
8	1999.09.01	～	現在	日本臨床検査自動化学会会員
9	2000.04.01	～	現在	International Society for Laboratory Hematology (国際検査血液学会) 会員
10	2000.04.01	～	現在	日本検査血液学会会員 (平成 12 年 4 月～現在 評議員・国際委員会委員、平成 14 年 3 月～現在 認定血液検査技師制度審議会・カリキュラム委員会委員、平成 14 年 10 月～平成 15 年 2 月 冬季セミナー実務委員・実行委員、平成 16 年 1 月～現在 編集委員会編集委員、平成 18 年 1 月 1 日～現在 理事・国際委員会副委員長・編集委員会編集委員・標準化委員会委員・認定血液検査技師制度審議会・カリキュラム委員会委員)
11	2001.07.01	～	現在	Asian Network for Clinical Laboratory Standardization and Harmonization (アジア臨床検査標準化ネットワーク) 会員 (平成 18 年 8 月～現在 副会長)
12	2005.04.01	～	現在	(社) 埼玉県臨床衛生検査技師会会員
13	2006.04.01	～	現在	有限責任中間法人日本臨床検査同学院会員 (平成 18 年 4 月～現在 遺伝子分析科学認定士制度委員会委員・広報委員長・2 級臨床病理技術士認定試験委員・緊急検査士認定試験委員)
14	2006.07.04	～	現在	(社) 全国労働衛生団体連合会平成 18 年 7 月～現在 臨床検査専門委員会委員、平成 20 年 4 月～現在 参考値検討委員会委員
15	2008.08.21	～	2008.08.22	Asian Network for Clinical Laboratory Standardization and Harmonization (アジア臨床検査標準化ネットワーク) 第 9 回学術大会大会長 (大東文化大学・大東文化会館、東京)

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	杉森 裕樹	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		1998.00.00	(平成 10 年～現在) 授業中になるべく問いかけをして、双方向性(インタラクティブ)に学生とコミュニケーションをはかるよう努めている。				
2)		1998.00.00	(平成 10 年～現在) 配付資料とパワーポイント、ビデオを用いて、なるべく視覚に訴えるような講義に心がけている。				
3)		1998.00.00	(平成 10 年～現在) 年 1 回、学生から講義に関するコメントが教学部を通して返却されるが、良好な評価である。				
4)		2000.00.00	(平成 12 年～現在) Problem Based Learning (PBL) を積極的に導入し、小グループ (6 名程度) による自主的学習を促進させている。				
5)		2007.09.00	環境衛生学科目において、毎授業時に、作業環境測定に係る映像ビデオを使い、さらに併せて作業環境測定器具の実物を見せて、実践的な内容に即しながら講義した。				
6)		2007.09.00	公衆衛生学実習では、5 人ずつの小グループに分かれさせて公衆衛生に関わるテーマに対して、自分たちで資料を収集し、整理し、解決するとともに、学会形式の発表を通してプレゼンテーション技術を学ばせた。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1)	「ヘルスコミュニケーション実践ガイド」	2008.09.00	講義の教材として使用。筆者は、部分翻訳及び監訳を担当。B5 版。総頁 240 頁。				
2)	「臨床検査技師ポケットレビュー帳」メジカルビュー社	2009.01.00					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1)		1999.00.00	(平成 11 年～現在) PBL (Problem Based Learning) のセミナーに参加し積極的に学生の自主性を引き出すような技量について学んできた。				
2)		2001.00.00	(平成 13 年～現在) 厚生労働科学研究班の分担研究者として、予防医学・公衆衛生学に係る e-learning サイトの構築を行っており、IT 技術を用いて、より有効性の高い学習方法の技術について検討している。				
3)	実務家教員についての特記事項	2003.00.00	(平成 15 年～現在) 学年担当教員として、年数回、食事会などを通して学生と交流し医学生の個人的な相談にのっている。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							

1	科学論文がスラスラ書ける！パソコンのやさしい使い方	共著	2005.00.00	羊土社	インパクトファクターや論文の投稿方法について概説した。水島洋・廣島彰彦・金子周司・小田中徹也・中山健夫・竹腰正隆・法橋尚宏・古賀道恵・八幡勝也・秋月由紀・小島清嗣・小澤和夫・張慶偉・深海一・小林薫・小橋元・杉森裕樹・菅野靖司・加藤聡一郎・本間徳子・波田哲朗 B 5判、総 236 頁。
2	社会格差と健康	共著	2006.00.00	東大出版	ヘルスリテラシーの概念を紹介し、わが国におけるヘルスリテラシーと社会構造の関係、ヘルスリテラシーと健康アウトカムの関係等を説明した。川上憲人・小林廉毅・橋本英樹編、川上憲人・小林廉毅・橋本英樹・豊川智之・提明純・杉森裕樹・土井由利子・岩田昇・近藤克則・西信雄・中山健夫 第 II 部 文化・教育・社会関係と健康、第 6 章 教育の不平等と健康 A 5判、総 256 頁。
3	これからの保健師（からだの科学増刊号）	共著	2006.00.00	日本評論社	産業保健師と産業保健関連機関との連携について概説した。水嶋春朔・鳩野洋子・杉森裕樹 B 5判、総 176 頁。
4	家庭の医学用語辞典	共著	2006.00.00	保健同人社	医学用語 1766 の項目を収録。配列は項目名の五十音順、巻末に五十音順索引とアルファベット順索引が付く。
5	「病気予防」百科—100 歳まで元気人生！	共著 分担執筆	2008.00.00	(株) 日本医療企画	元気で長生きできるように、健康の保持・増進の基礎知識をわかりやすく解説した一般書 渡邊昌、和田攻総監修、大内尉義、吉田勝美、久保明、坪田一男編集委員、「肝機能・骨密度」担当 A 4判変型 1109 頁
6	作業環境改善事例集 追録 73～75 号	分担執筆 執筆	2008.00.00	第一法規	作業環境改善対策の計画・再検討に役立つ事例集 作業環境改善研究会 編著、「第 1 編第 2 章」担当 B 5判
7	臨床検査技師ポケットレビュー帳 上巻・下巻	分担執筆 執筆	2009.00.00	メジカルビュー社	臨床検査技師国家試験対策の直前参考書 芝紀代子編 「下巻 第 6 章公衆衛生学」担当 A 5 変形判 総 296 頁
8	Health and Social Disparity (edited by Kawakami N, Kobayashi Y and Hashimoto H), Chap 6. Education Inequality and Health	共著 分担執筆	2009.00.00	Trans Pacific Press (Melbourne)	(in press)
論文					
1	Hematopoietic stem cell transplantation for natural killer-cell lineage neoplasms	共著		Bone Marrow Transplant	NK腫瘍患者における造血幹細胞移植を検討した。
2	Remote sensing technique for human behavioral assessment	単著	2004.00.00	International Journal of Remote Sensing and Ocean Science (IJReSOS: 2) 1(1):66-69	リモートセンシング (GPS と PHS のハイブリッドセンシング) を用いて、在宅高齢者の行動特性を検討し、右握力と高齢者の移動能力との間に相関があることを明らかにした。
3	Aggressive natural killer (NK) cell leukemia revisited: large granular lymphocyte leukemia of cytotoxic NK cells	共著	2004.00.00	Luekemia 18:763-770.	我が国で発生例の少ない Aggressive natural killer-cell leukemia (ANKL) を疫学的に集計し、その特徴を明らかにした。Suzuki R, Suzumiya J, Nakamura T, Aoki S, Notoya A, Ozaki S, Gondo H, Hino N, Mori H, Sugimori H, Kawa K, Oshimi K.
4	Analysis of factors influence on changes of body build from ages 3 through 6 -A cohort study based on the Toyama study	共著	2004.00.00	Pediatrics International. 2004; 46(3): 302-310.	富山出生コホート研究データを用いて、3歳～6歳にかけての小児の Body Mass Index (BMI) の推移と6歳時の生活習慣などの環境因子との関連を検討した。小児肥満の予防因子を明らかにした。Sugimori H, Yoshida K, Izuno T, Miyakawa M, Suka M, Sekine M, Yamagami T, Kagamimori S.
5	東洋医学的前処置による歯科治療時の麻酔使用量減少効果	共著	2004.00.00	Health Sciences21(1): 130-136	歯科治療時の麻酔使用量に与える影響について東洋医学的見地から検討した。西原雅史、山本竜隆、田中利明、須賀万智、杉森裕樹、畑中由美、吉田勝美。

6	Smoking status in Japanese mothers before and after childbirth in urban area	共著	2004.00.00	Primary care Japan 2(1): 51-59	川崎市における子育て世代の禁煙効果について検討した。Sugano Y, Sugimori H, Nakamura T, Matsuda T, Kiyota A, Matsui K, Ohmori C, Amemiya F, Sakamoto N, Yoshida K.
7	Creating a brochure to promote understanding of epidemiologic research	共著	2004.00.00	J Epidemiol. 14(5) 174-176	疫学研究理解促進のためのパンフレットを作成した。Naito M, Nakayama T, Ojima T, Kobashi G, Muto K, Washio M, Ishikawa S, Maruyama E, Sakai M, Sato K, Sugimori H, Suzuki M, Takahashi F, Yamagata Z, Tamakoshi A.
8	Health Data Transfer Protocol -The Health Data Markup Language (HDML)	共著	2004.00.00	Medinfo. 2004(CD) : 1630	健康情報を電子的に伝送する規約について概説した。Hara S, Sugimori H, Yoshida K, Tofukuji I, Kubodera T.
9	論文記載に関する倫理的配慮について	共著	2004.00.00	Health Sciences. 20(3):322-324	論文記載に関する倫理的配慮について概説した。吉田勝美、杉森裕樹。
10	成長期の骨評価値と Peak Height Velocity に関する検討	共著	2004.00.00	Osteoporosis Japan. 12(2):257-263	成長期の骨量と身長伸び率について検討した。黒澤幸男、杉森裕樹、堀ルミ、窪田薫、玉置弘美、工藤弘美、池田佐智子、雄鹿薫、阿部勝己、浦清、松本勝、山内邦昭、米元まり子、磯辺啓二郎。
11	What expectations do young Japanese epidemiologists have for the future of epidemiology? A questionnaire survey of members of the young epidemiologists society for discussing the future of epidemiology (letter)	共著	2004.00.00	J Epidemiol 14:69-71	日本の若手疫学研究者の疫学の将来についての期待について検討した。Kobashi G, Hoshuyama T, Sugimori H, Oki I, Kadowaki T, Kanda H, et al.
12	ヘルスリテラシー：健康に関する情報を理解・活用できる能力の育成が必要である	単著	2004.00.00	からだの科学	ヘルスリテラシー（健康情報をうまく利用して自ら健康度を高める能力）について、米国および国内の課題を概説した。2004;234: 2-7.
13	特集 乳がんの診断と治療. 1. 乳がんの疫学	共著	2005.00.00	産科と婦人科. 72(1):1-6	乳癌の診断と治療について概説した。杉森裕樹、吉田勝美。
14	Body image and body satisfaction play important roles in the path to dieting behavior in Japanese preadolescents: The Toyama Birth Cohort Study	共著	2005.00.00	Environ Health Prev Med 10(6):324-330	富山出生コホート研究における対象者のボディ・イメージと身体満足度がダイエットに与える影響について検討した。Suka M, Sugimori H, Yoshida K, Kanayama H, Sekine M, Yamagami T, Kagamimori S.
15	小児における骨折の動向と疫学的特徴	単著	2005.00.00	CLINICAL CALCIUM. 15(8):53-59	成長期における子どもの骨折の動向及び疫学的特徴について検討した。
16	疫学のはなし, IX. 造血器腫瘍（白血病, 悪性リンパ腫, 多発性骨髄腫）	共著	2005.00.00	放射線科学. 48(6)	放射線科学における造血器腫瘍（白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫）について概説した。押味和夫、杉森裕樹。
17	医学研究分野の個人情報保護 -米国大学における HIPPA 導入事例	共著	2005.00.00	放射線科学 48(5). 166-179	医学研究分野の個人情報保護について、米国大学におけるHIPPA導入を例に概説した。杉森裕樹、清田礼乃、大神英一、加藤聡一郎、小橋元、鷲尾昌一、中山健夫、玉腰暁子。
18	NK-cell neoplasms in Japan.	共著	2005.00.00	Hematology. 10(3):237-45	わが国におけるNK細胞腫瘍の実態調査結果について概説した。Oshimi K, Kawa K, Nakamura S, Suzuki R, Suzumiya J, Yamaguchi M, Kameoka J, Tagawa S, Imamura N, Ohshima K, Kojya S, Iwatsuki K, Tokura Y, Sato E, Sugimori H.

19	第5回日本骨粗鬆症学会子どもの骨折予防委員会報告。地域の学童・生徒を対象とした骨折に関する疫学的検討	単著	2005.00.00	Osteoporosis Japan. 13(2):433-437	成長期の子どもの骨折について疫学的に検討し、「子どもの骨を丈夫にするための提言」として報告した。
20	Blastic natural killer cell lymphoma/leukemia (CD56-positive blastic tumor): prognostication and categorization according to anatomic sites of involvement	共著	2005.00.00	Cancer, 104(5):1022-31	NK腫瘍研究会報告：予後解剖学的見地から分類されたCD56-positive blastic tumorの予後および分類について Suzuki R, Nakamura S, Suzumiya J, Ichimura K, Ichikawa M, Ogata K, Kura Y, Aikawa K, Teshima H, Sako M, Kojima H, Nishio M, Yoshino T, Sugimori H, Kawa K, Oshimi K, for the NK-cell Tumor Study Group.
21	高感度CRPの動脈硬化リスク指標としての検討	共著	2005.00.00	Health Sciences21(1): 53-59	高感度CRP (C-reactive Protein: C反応性蛋白質)と動脈硬化性リスクとの関係を検討した。田中利明、吉田勝美、須賀万智、杉森裕樹、高田礼子、菅野靖司、西原雅史、畑中由美、吉野千寿子。
22	Relationships between erectile dysfunction, depression, and anxiety in Japanese subjects	共著	2005.00.00	J Sexual Medicine. 2:365-371	日本人における性的機能不全・低下 (ED) と不安状態/抑うつ状態との関係について検討した。Sugimori H, Yoshida K, Tanaka T, Baba K, Nishizawa R, Iwamoto T.
23	Analysis Between Lifestyle, Family Medical History and Medical Abnormalities Using Data Mining Method - Association Rule Analysis	共著	2005.00.00	K E S (2) : 161-171	データマイニングの一手法の関連性ルール分析を用いて、医療における異常所見と生活習慣および家族歴との関連性について検討した M. Ogasawara, H. Sugimori, Y.Iida, K.Yoshida
24	I T時代のヘルスリテラシー、ヘルスリテラシーの重要性	共著 編著	2006.00.00	からだの科学 250号:25-30	ヘルスリテラシーの概念を説明し、わが国のヘルスリテラシーや周辺領域のさまざまな話題と取り組みを紹介した。杉森裕樹・中山健夫。
25	Young Epidemiologists' Attitude towards Personal Data Protection	共著	2006.00.00	J of Epidemiology (0917-5040) 16(2): 90-92	日本疫学会若手の会の会員を対象として行った個人情報保護に関する調査結果を整理した。Kobashi G, Hoshuyama T, Ohta K, Sugimori H, Oki I, Kanda H, Naito M, Takao S, Tamakoshi A.
26	Body Image, Body Satisfaction and Dieting Behavior in Japanese Preadolescents: Toyama Birth Cohort Study	共著	2006.00.00	Environmental Health and Preventive Medicine	富山コホートスタディの一環で、思春期日本人のボディ・イメージと満足度と食行動の検討を行った。(1342-078X) 11(1): 24-30 Suka M, Sugimori H, Yoshida K, Kanayama H, Sekine M, Yamagami T, Kagamimori S.
27	子どもの骨を丈夫にするための提言	共著	2006.00.00	Osteoporosis Japan 14, 177-189	子どもの骨を丈夫にするための提言を、地域学童の大規模な疫学調査の結果より報告した。子どもの骨折の特徴には、男女児で異なることが示された。田中弘之、杉森裕樹、加賀勝、井本岳秋、三村寛一、高橋香代、清野佳紀
28	Hematopoietic stem cell transplantation for natural killer-cell lineage neoplasms	共著	2007.00.00	Bone Marrow Transplant 37(4): 425-31	NK腫瘍患者における造血幹細胞移植を検討した。Suzuki R, Suzumiya J, Nakamura S, Kagami Y, Kameoka J, Sakai C, Mukai H, Takenaka K, Yoshino T, Tsuzuki T, Sugimori H, Kawa K, Koderia Y, Oshimi K, for the NK-cell Tumor Study Group
29	男性更年期障害の重症度分類による男性ホルモン軟膏の治療効果の検討	共著	2007.00.00	泌尿器科	男性更年期障害患者に対する男性ホルモン軟膏の治療効果を、重症度ごとに検討した。53: 25-29 天野俊康、今野哲也、竹前克郎、岩本晃明、馬場克幸、山川克典、中澤龍斗、吉田勝美、杉森裕樹、田中利明、方波見卓行、田中政巳

30	The efficacy of testosterone ointment (Glowmin) treatment for late-onset-hypogonadism (LOH) patients according to LOH severity	共著	2007.00.00	Hinyokika Kiyō.	LOH患者に対する男性ホルモン軟膏の治療効果を、重症度ごとに検討した。25-9; discussion 29 Amano T, Imao T, Takemae K, Iwamoto T, Baba K, Yamakawa K, Nakazawa R, Yoshida K, Sugimori H, Tanaka T, Katabami T, Tanaka M
31	Profile of Serum Testosterone Levels After Application of Testosterone Ointment (Glowmin) and Its Clinical Efficacy in Late-Onset Hypogonadism Patients.	共著	2008.00.00	J Sex Med. 5:1727-1736	LOH (遅発性男性ホルモン低下症) 患者に対するテストステロン軟膏 (グローミン) の有効性の検討を行った。Amano T, Imao T, Takemae K, Iwamoto T, Yamanaka K, Baba K, Nakanome M, Sugimori H, Tanaka Y, Yoshida K, Katami T, Tanaka M.
32	Close relation between 14q32/IGH translocations and chromosome 13 abnormalities in multiple myeloma: a high incidence of 11q13/CCND1 and 16q23/MAF.	共著	2008.00.00	Int J Hematol 87(3):260-5	多発性骨髄腫における 14q32/IGH 転座と染色体 13 番の異常の関連性について検討した。1q13/CCND1 および 16q23/MAF の発現が顕著に認められた。Takimoto M, Ogawa K, Kato Y, Saito T, Sukuki T, Irei M, Shibuya Y, Suzuki Y, Kato M, Inoue Y, Takabashi M, Sugimori H, Miura I.
33	Profile of serum testosterone levels after application of testosterone ointment (Glowmin) and its clinical efficacy in late-onset hypogonadism patients	共著	2008.00.00	J Sex Med 5(7):1727-36	テストステロン塗布による男性更年期障害への有効性の検証 Amano T, Imao T, Takemae K, Iwamoto T, Yamakawa K, Baba K, (Sugimori H), et al.
34	こどもと骨 (2) 我が国のこどもの骨折の疫学~骨を丈夫にするための提言シリーズ (1)	共著	2008.00.00	Clinical Calcium 18(6):844-50	わが国の小児の骨折の頻度屋リスクファクターの分析及び骨折予防の提言 杉森裕樹、小田嶋剛、山口勝正
35	結核入院期間を決定する要因に関する臨床的研究	共著	2008.00.00	結核 83(8):567-72	結核患者の入院期間を決定する関連要因の分析 藤野忠彦、布施川久恵、西海麻依、大久保泰之、柿崎徹、杉森裕樹
その他					
1	不平等が健康を損なう	共同	2004.00.00	日本評論社	社会経済的状態の格差は行き過ぎると健康度を下げることを実証した米国ハーバード大学の研究結果を翻訳した。西信雄・高尾総司・中山健夫監訳、小橋元・土井由利子・本庄かおり・岩田昇・杉森裕樹・原谷隆史・橋本秀樹・植田紀美子・近藤克則、第4章 隣に負けるな A 5判、総 208 頁
2	データマイニング手法による生活習慣と検査異常に関する分析	共同	2004.00.00	日本総合健診医学会第 32 回 pp319	データマイニング手法を用いて、関連性の強い重要な生活習慣と検査異常の関係を抽出した。小笠原充宏、加藤多恵、杉森裕樹、神尾視教、大野義明、飯田行恭、吉田勝美
3	データマイニング手法を用いた体力と健診結果との関連	共同	2004.00.00	日本総合健診医学会第 32 回 pp362	データマイニング手法を用いて、関連性の強い重要な体力と健診結果の関係を明らかにした。杉森裕樹、吉田勝美、結城真、中村孝之、馬場倫広、荻野淑郎、竹内成之、菱沢利行、平賀理絵、小笠原充宏、飯田行恭。
4	右上大静脈欠損を伴う左上大静脈遺残症の診断で経静脈性コントラスト心エコー法が有用であった 1 例	共同	2004.00.00	日本超音波医学会関東甲信越地方会第 16 回学術集会抄録集, 64	右上大静脈欠損を伴う左上大静脈遺残症の診断で経静脈性コントラスト心エコー法が有用であった 1 例について症例報告した。

5	画像処理ソフト HALCON を使った白血球分類アルゴリズムの提案	共同	2004.00.00	医療情報学 24 回連合大会 論文集, 1168-1169	病理画像による診断が大きなウェイトを持つ白血病を採り上げ、その中でも発症率の高い急性白血病を判定するために必要な白血球分類アルゴリズムについて検討した。
6	相関ルールに基づく生活習慣 家族歴と検査異常の関連分析	共同	2004.00.00	医療情報学 24 回連合大会 論文集, 826-827	データマイニングの一手法である相関ルールに基づく生活習慣・家族歴と検査異常の関連について分析した。
7	Protein energy malnutrition 患者の食事・栄養管理サービス(NCM)に関する研究 公的病院連合加盟病院における実態調査	共同	2004.00.00	病院管理(0386-9571)41 巻 Suppl, 161	全国公的病院を対象として低栄養患者の食事・栄養管理サービス(NCM)について実態調査した。
8	神奈川県下の小規模事業場における MSDS の利用状況と活用方法	共同	2004.00.00	産業衛生学雑誌 (1341-0725)46 巻臨増, 483	神奈川県下の小規模事業場における MSDS (Material Safety Data Sheet) の利用状況と活用方法を検討した。
9	高感度 CRP と動脈硬化性リスクとの関係	共同	2004.00.00	産業衛生学雑誌 (1341-0725)46 巻臨増, 368	高感度 CRP (C-reactive Protein: C 反応性蛋白質) と動脈硬化性リスクとの関係を検討した。
10	高感度 CRP の経時的変化と健診所見(第 3 報)	共同	2005.00.00	産業衛生学雑誌 (1341-0725)47 巻増刊, 657	高感度 CRP (C-reactive Protein: C 反応性蛋白質) の経時的変化と健診所見を検討した。
11	右上大静脈欠損を伴う左上大静脈遺残症の診断で経静脈性コントラスト心エコー法が有用であった 1 例	共同	2005.00.00	超音波医学(1346-1176)32 巻 2 号, 210	右上大静脈欠損を伴う左上大静脈遺残症の診断で経静脈性コントラスト心エコー法が有用であった 1 例について説明した。
12	ステータス症候群ー社会格差という病	共同	2007.00.00	日本評論社	なぜ社会格差は健康格差につながるのか。社会階層における相対的地位が健康にとって最も重要な要素であるという研究結果を翻訳した。鏡森定信、橋本英樹監訳、「相対的」とは何か。A 5 判、総 352 頁
13	ヘルスコミュニケーション実践ガイド	共同	2008.00.00	日本評論社	健康増進と疾病予防のためのヘルスコミュニケーションを進めるために、米国立がん研究所が編集した、定評あるマニュアル。中山健夫(監修)、高橋吾郎、杉森裕樹、別府文隆(監訳) B 5 判 総頁 240 頁
14	医学探偵ジョン・スノウ。コレラとブロード・ストリートの井戸の謎	共同	2009.00.00	日本評論社 (in press)	猛威をふるうコレラと闘った疫学の祖、英国人医師ジョン・スノウの生涯 杉森裕樹、大神英一、山口勝正。四六判。総頁 440 頁。

III 学会等および社会における主な活動

1	1989.10.23	～	現在	日本内科学会会員
2	1991.01.30	～	現在	International Epidemiology Association(IEA)会員
3	1991.01.30	～	現在	日本疫学会会員
4	1992.00.00	～	2007.03.00	日本骨形態計測学会会員
5	1992.02.22	～	現在	日本骨粗鬆症学会会員
6	1993.00.00	～	現在	日本医療情報学会会員
7	1993.04.00	～	現在	日本産業衛生学会会員 (2002 年 4 月～現在 代議員)
8	1993.04.01	～	現在	日本公衆衛生学会会員
9	1993.05.01	～	現在	日本老年医学会会員

10	1993.05.25	～	現在	日本衛生学会会員
11	1994.12.00	～	現在	International Health Evaluation Association(IHEA)会員
12	1994.12.26	～	現在	日本人間ドック学会会員（1998年5月～現在 評議員）
13	1994.12.27	～	現在	日本総合健診医学会会員（2002年1月～現在 評議員）
14	1995.05.01	～	現在	日本健康科学学会会員
15	1996.00.00	～	現在	臨床経済学研究会会員
16	1997.02.26	～	現在	健康開発科学研究会会員
17	1998.00.00	～	現在	社会福祉法人東京いのちの電話土曜医療相談相談員
18	1998.00.00	～	現在	日本医療・病院管理学会会員
19	1999.00.00	～	2007.03.00	神奈川県公衆衛生協会会員
20	1999.00.00	～	現在	独立行政法人労働者健康福祉機構神奈川産業保健推進センター産業保健相談員
21	2000.00.00	～	現在	川崎市健康福祉局「かわさき健康ニューファミリー育成・健康資源開発モデル事業」検討委員会助言者
22	2000.06.01	～	現在	日本高血圧学会会員
23	2000.12.16	～	現在	日本健康・栄養システム学会会員（2005年4月～現在 評議員）
24	2001.00.00	～	現在	日本学術会議第7部・個人情報保護基本法問題小委員会（田中平三委員長）、予防医学研究連絡委員会、報告書作成ワーキンググループ委員会委員。日本学術会議第7部報告「医学研究からみた個人情報の保護に関する法制の在り方について」（平成13年度）
25	2001.00.00	～	現在	独立行政法人放射線医学総合研究所編集委員
26	2002.00.00	～	現在	日本骨粗鬆症学会子どもの骨折予防委員会（委員長：清野佳紀）委員
27	2003.00.00	～	2007.03.00	日本総合健診医学会研究倫理審査委員会委員
28	2003.00.00	～	現在	財団法人日本医療機能評価機構医療技術評価総合研究医療情報サービス事業（Minds）協力者
29	2004.00.00	～	現在	Journal of Community Nutrition Editorial Board 編集委員
30	2004.00.00	～	現在	社団法人日本産業衛生学会産業医プロフェッショナルコース企画運営委員
31	2004.07.00	～	現在	日本学校保健学会会員
32	2004.11.29	～	現在	日本プライマリ・ケア学会会員
33	2005.11.24	～	現在	日本結核病学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	鈴木 明	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 保健体育ホームページの公開		1999.04.00	平成 11 年～現在 教育内容、履修方法、教員情報についてホームページを公開している。				
2) 聖学院大学授業評価		2004.12.00	平成 16 年度 (前期) 二科目で無記名マークシート方式による学生の授業評価があり、総合評価は「健康体力づくり実習 A」が 4.5、「保育内容・健康」が 4.0 (5 段階評価に換算) であった。				
3) 大東文化大学 学生による授業評価		2007.12.00	平成 19 年度 (後期) 無記名マークシート方式による学生の授業評価があり、「授業の満足度」は健康スポーツ科目 4.0、総合体育 I 4.8 (5 段階評価に換算) であった。				
4) 東横学園女子短期大学授業評価		2007.12.00	平成 19 年度「ライフサイクルと運動」の無記名式の授業評価があり「授業の満足度」は 3.8 (4 段階評価に換算：全体平均 3.5) であった。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「生活習慣と健康 (子どもの健康はまずお母さんの健康から)」		2009.01.21	聖学院大学みどり幼稚園で講演を行った。				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 聖学院大学硬式テニス部監督		1988.00.00	昭和 63 年～平成 17 年 聖学院大学硬式テニス部監督として指導。				
2) ソフトボール (競技実績)		1989.04.00	平成元年～現在 上石神井ソフトボールクラブ監督兼選手 (投手・内野手)。練馬区大会優勝 4 回。最高は平成 13 年度東京都社会人 II 部大会準優勝。練馬区代表として 3 度東京都社会人 I 部大会に出場。				
3) 大東文化大学 ハンドボール部 部長		2007.09.00	平成 19 年～現在。				
4) (市民大学大学院講座) 東松山市きらめき市民大学大学院講座講師		2009.04.00	平成 21 年 4 月～ (2 年間) きらめき市民大学大学院生に対する論文指導を行っている。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 保育内容・健康－保育のための健康教育－	共	2006.05.20	同文書院	保育・幼児教育の世界と保育者養成のための解説。第 1 章健康の概念 1) 2) (p1-11) と第 3 章 1) 心身の発育と発達 (p53-67) を担当。健康の定義や健康観の変遷、乳幼児のからだの発育と発達について解説した。監修：河鍋喬；共著者：鈴木明・大江敏江・井戸ユカリ・池森隆虎・相川徳孝・倉田新・石井智子・武山隆子・坪井宏・松永静子・鈴木隆・根津明子・岸本弘子 総頁 185 頁			
2 保育の安全と管理	共	2008.04.15	同文書院	乳幼児の健康維持と生命の安全をはかるための解説書。第 1 章「生活習慣の指導と安全管理」で「休養」の項担当 (p31-46)。河鍋喬、鈴木明、池森隆虎、相川徳考、大江敏江、小栗俊之、近藤雅雄、坂口早苗、坂口武洋、高橋うらら、中村磐男			

論文				
1 健康スポーツ科学—現代生活と健康—	単	2007.11.00	臨床病理刊行会 臨床病理レビュー 特集 第137号 別冊	スポーツと健康と臨床検査の特集の第1章総論を担当。現代生活におけるライフスタイルと生活習慣病との関わり、長寿社会の中での健康寿命の延ばし方や健康行動の習慣化について論じた。
2 「小中学校における喫煙防止教育の標準化とその評価—中学校喫煙防止教育用CD-ROMの効果の評価」	単	2008.03.00	聖学院大学 総合研究所	担当教師によって最低1時間の授業の中で行える喫煙防止プログラムを開発、作成したCD-ROMを用いて授業を行い、その結果をWilcoxonの順位検定を用いて分析した結果、より効果的な授業内容が明らかになった。
3 「本学院短期大学生の体力変化と形態評価について—2007年在学生と1988年測定時の体力の比較と形態変化の経緯—」	共	2009.02.00	立教女学院短期大学紀要第40号	この20年間で垂直跳び、立位体前屈の低下が顕著である反面、体重、BMIには有意な増加が認められた。皮下脂肪の分布に関しては腹部の皮下脂肪厚が筋厚の約2倍の厚みを有していた。大腿部周径囲は皮下脂肪厚、筋厚ともに高い相関を有し、皮下脂肪厚、%fatが運動能力に有意な影響を及ぼさないことが示された。 楠原慶子、大森美美子、鈴木明、奥山静代、佐々木玲子（共同研究につき抽出不能）
その他				
1 Book Review「喫煙と歯肉」	単	2004.08.00	医歯薬出版「歯界展望」8月号 2004 Vol.104 No.2	（書評）松岡晃 著「喫煙と歯肉」の書評。喫煙が歯肉に対して悪影響を及ぼすので、歯科医の立場からの指導に関する意見を記載した。
2 からだ博 相談員		2004.08.06		東京ビッグサイト（8月3日～8日）で行われた健康とフォーラム実行委員会、NHK、日本経済新聞社主催のからだ博。健康・医療コミュニケーションコーナーの運動・スポーツ相談コーナーを担当
3 「An Investigation on Elective Physical Education Program in Japanese Colleges」	共	2005.08.00	THE 10th East Asian Sport and Exercise Science Society(EASESS)	自由選択体育実技種目について、講義形式との比較では受講生の動機、ニーズ、満足度に高く、学生の求めている内容も異なるので、その内容の充実が必要であることが確認された。K.Hyodou, A.Suzuki, T.Ryusi, H.Katsumata, H.Tanaka
4 「How College student are satisfied with the contents in PE classes? From the results of four-year investigations」	共	2007.08.00	THE 12th East Asian Sport and Exercise Science Society(EASESS)	体育実技に対する満足度について4年間の調査結果を検討し学生の教育効果や健全な学生生活を送ることからも体育実技種目の必要性が明らかになった。K.Hyodou, S.Takahashi, S.Tadakuma, H.Katsumata, H.Tanaka, A.Suzuki
5 「Relationship between functional reach and muscle strength」	共	2008.08.02	THE 13th East Asian Sport and Exercise Science Society (EASESS)	下肢の各部位の筋力とF R (Functional Reach) 距離との関連を比較検討した結果、F R Tが加齢に伴い低下した高齢者の下肢筋力をおおまかに推定するために有効であることが明らかになった。 T.Ryushi, M.Park, A.Suzuki, H.Tanaka, K.Hyodo, S.Tadakuma, S.Takahashi, H.Katsumata.
III 学会等および社会における主な活動				
1	1976.04.00	～	現在	日本学校保健学会会員
2	1976.04.00	～	現在	日本体育学会会員
3	1992.04.00	～	現在	一般教育学会（現：大学教育学会）会員
4	1993.04.00	～	現在	日本健康科学学会会員
5	1994.01.00	～	現在	日本公衆衛生学会会員
6	1994.03.00	～	現在	日本教育保健研究会（現：日本教育保健学会）会員
7	1994.04.00	～	現在	日本スポーツ教育学会会員

8	1995.04.00	～	現在	全国大学体育連合運営委員（1995.04.00～1998.03.00 情報部委員会委員、1998.04.00～現在 総務部副部長および組織検討特別委員会委員、2005.04.00～2007.03.31 総務部委員会委員、2007.04.00～現在 監事）
9	1997.04.00	～	現在	日本民族衛生学会会員
10	1998.04.00	～	現在	日本保育学会会員
11	1999.03.00	～	2007.03.00	中華人民共和バレエ芸術委員会中・小児訓練センター副主任兼健身訓育部部長
12	1999.03.00	～	2007.03.00	中華人民共和国溜博市中国小児研究所技術顧問
13	2000.04.00	～	現在	日本養生学会会員
14	2001.04.00	～	現在	日本健康行動科学学会会員
15	2004.09.00	～	現在	練馬区ソフトボール協会役員（～2007.03.31 一般男子部部長、2007.04.01～現在 副会長）
16	2008.01.00	～	現在	日本禁煙学会会員（2008.10～ 、Scientific Advisor）

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部 健康科学科	職名	教授	氏名	高橋 進	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「教科教育法 (保健体育)」模擬授業における授業評価並びにアンケートの実施		2007.04.00	(2007年4月～現在)「教科教育法 (保健体育)」模擬授業において、学生による授業評価並びにアンケートを実施し、学生自らの実施した模擬授業への客観的な評価フィードバックをとおして授業実践力の向上を図っている。				
2) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成20年12月実施)において、「教科教育法 (保健体育)」、満足度4.7の高い評価 (5段階評価)を得た。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 「スポーツ選手のこころ」		2008.12.20	東前橋整形外科病院研修会 (PT 対象) 東前橋整形外科				
2) 「子どもの体力実態」		2009.03.06	平成20年度太田市ジュニアスポーツ育成事業「公開講座」 太田市総合健康センター3F研修室				
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 柔道関係の講習会等の実績		1992.04.00	(1992.4.00～現在) (剤) 日本体育協会公認C級コーチ専門科目助手・講師を担当 「柔道技術の構造」「対人的基本技術」「対人的応用技術」などの講義を担当				
2) ディベート大会の開催		2001.04.00	(2001.4.00～2007.3.00) 学生のコンピテンシー向上を目的に、ゼミ対抗のディベート大会を企画。学生実行委員を指導し、運営に参画。年2回の年中行事として定着した。				
3) 大学における地域貢献への寄与		2003.04.00	(2003.4.00～現在) 地域が求める大学への要求に応え、太田市スポーツ学校の分校を大学内に設置、地域の小中学生を対象に、スポーツ教室を開催している。分校責任者として、柔道指導を行っている。				
4) JOC強化スタッフとして実績		2005.04.01	2005.4.1～2009.3.31 日本オリンピック委員会強化スタッフ (戦略・マネージメント)				
5) 柔道審判員としての実績		2007.04.00	平成19年度全日本柔道選抜体重別選手権大会審判員				
6) その他柔道国際視察・コーチ・監督、海外指導などの実績		2007.04.00	第一回オランダ柔道連盟主催形セミナー講師、CIOS授業講師				
7) 柔道審判員としての実績		2007.10.30	2007.10.30～2007.10.31 東アジア柔道選手権大会審判員 (中国・シンセン)				
8) 柔道審判員としての実績		2008.02.28	2008.2.28～2008.3.4 ブラハ (チェコ) 国際柔道大会審判員				
9) その他柔道国際視察・コーチ・監督、海外指導などの実績		2008.03.05	2008.3.5～2008.3.20 第二回オランダ柔道連盟主催形セミナー講師、CIOS授業講師				
10) 柔道審判員としての実績		2008.04.05	2008.4.5～2008.4.6 平成20年度全日本柔道選抜体重別選手権大会審判員				
11) 柔道審判員としての実績		2008.04.26	2008.4.26～2008.4.27 アジア柔道選手権審判員 (韓国)				
12) 柔道審判員としての実績		2008.08.05	2008.8.5～9 平成20年第57回全国高等学校柔道大会審判員 (埼玉)				

13) 柔道審判員としての実績	2008.09.21	2008.9.20～21 2008 東アジア柔道選手権大会審判員 (台湾)
14) 柔道審判員としての実績	2008.11.15	2008.11.15～16 平成 20 年度講道館杯全日本体重別選手権大会審判員
15) 柔道審判員としての実績	2008.12.05	2008.12.5～6 韓国国際柔道大会審判員 (韓国)
16) 柔道審判員としての実績	2008.12.06	柔道 IJF 公認審判員 (国際 A) 取得 (韓国)
17) 柔道審判員としての実績	2008.12.12	2008.12.12～14 嘉納治五郎杯東京国際柔道大会 2008 ワールドグランプリ審判員 (東京)
18) 柔道審判員としての実績	2009.02.21	2009.2.21～22 ドイツ国際柔道選手権審判員 (ドイツ・ハンブルク)
19) 柔道審判員としての実績	2009.02.28	2009.2.28～3.1 香港国際柔道選手権大会審判員

II 研究活動

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)
著書				
1 ジュニアのためのスポーツ科学	共著	2005.01.31	太田スポーツ学校 p1～62 東京広告株式会社 太田市	共著者◎高橋進、高瀬博他 担当部分: 編著・全般 ジュニア期の「スポーツ心理」「栄養」「障害」「発育発達」に関して、各問題点を会話形式でまとめたものであり、ジュニア期のスポーツ指導者のためのスポーツ科学に対する知識を啓蒙するための入門書である。
論文				
1 現代柔道の現状と今後の課題についてー生涯柔道の観点からー	共著	2004.08.30	埼玉武道学研究 第5号 Pp.1-11 日本武道学会埼玉支部	本研究は、柔道の現状をとらえ、今後の課題とされるべき問題点を提起することにより、生涯スポーツにおける多様化について明らかにし、柔道が更なる発展を遂げることを目的とした。その結果、生涯スポーツとしての柔道は、嘉納治五郎が掲げた理念である、「体育」を示唆する現状であることが明らかになった。また、柔道人口の減少理由として、少年柔道の競技人口の減少と指導者人口の減少が影響していることが明確となった。(共同研究者◎三宅仁・野瀬清喜・金杉博美・鈴木若葉・野瀬英豪・高橋進 担当部分: 抽出不可能)
2 逮捕術受講者体力調査について (その2)	共著	2004.08.30	埼玉武道学研究 第5号 Pp.27-31 日本武道学会埼玉支部	本研究では、警察官に即した体力要素をより簡便的にチェックする体力診断テストを作成、実施し、その妥当性を検証することを目的とした。また、本ねらいを達成すると推測される測定5項目を選定し、その妥当性について因子分析を用いて検証した。その結果、4因子が抽出され、それぞれの測定項目が独立した体力要素を測定するために妥当であると判断された。(共同研究者◎椛沢博之・高橋進 本人担当部分: 統計解析等)
3 メンタルトレーニングによる大学柔道選手の心理的適性の変容について	共著	2004.10.00	大阪産業大学論集 人文科学編 114号 Pp.63-81	本研究の目的は以下の2点である。①柔道選手のために考案されたMTを2ヶ月にわたり実施し、心理的適性の変容がみられるかの検証を試みる。②競技水準の違いによる心理的能力および競技意欲の差異を明らかにすること。その結果、MT実施による心理的適性については、DIPCA、TSMIに含まれる殆どの項目において有意に良好な状態に変容したことが明らかになった。また、入賞群は、試合シーズンに心理的競技能力および競技意欲が、他の2群よりも有意に高いことが明らかにされた。(共同研究者◎前川直也・菅波盛雄・飯島正博・廣瀬仲良・高橋進・佐藤博信 担当部分: 抽出不可能)

4	大学柔道選手におけるメンタルトレーニング導入前後の競技内容分析	共著	2005.02.00	大阪産業大学論集 人文科学編 115号 Pp.29-40	本研究の目的は、MTが競技パフォーマンスに与える影響を競技分析により明らかにすることである。研究方法は、J大学柔道部23名を対象にMTを臨床心理士の指導のもと行った。その結果、単位時間あたりの施技数、十分組んでからの施技、有組み手主導権、施技のつながり、施技の種類が有意に増加し、積極的な競技スタイルに変容した。このことから、MTが競技力向上を図るために重要な方法であることが示唆された。と同時にMTの重要性が示唆された。(共同研究者◎前川直也・菅波盛雄・飯島正博・廣瀬伸良・高橋進・佐藤博信・河幡一彦 本人担当部分：抽出不可能)
5	高校生の体力と性格特性の関連について	共著	2005.03.03	関東学園大学紀要 Liberal Arts 第13集 Pp.1-9	本研究は、一般の高校生164名について、文部科学省の指導で多くの学校で行っている新体力テストの結果と、YG性格検査結果をピアソンの積率相関係数を用いて、関連の有無の調査分析を行った。その結果、体力と性格特性の間に、強くはないものの、正の相関が認められた。このことは、子供たちの教育、学校教育において、体育、スポーツの実践によって、体力を高めることが精神の健康とも関わり、性格形成に大きく関わっていることを示していると考えられる。ひいては、個人の進学、就職、学校の活性化にもつながると考えても良いことが示唆された。(共同研究者◎高瀬博・高橋進 本人担当部分：統計分析)
6	学校生活に対する高校生の意識－心理的諸要因に言及して－	共著 筆頭	2005.03.03	関東学園大学紀要 Liberal Arts 第13集 Pp.11-25	本研究では、学校生活に対する満足要因を明らかにする意味で、高校生の学校生活に対する態度を測定するとともに、生徒自身の原因帰属様式、自己有能感を併せて明らかにすることとした。また、学校生活の中で、どのような環境要因への認知が、それらの心理的諸側面に関与するのとも明確にし、生徒の側に立った魅力ある学校づくりへの一資料を得ることを目的とし研究を進め、有益な結果が得られた。(共同研究者◎高橋進・高瀬博・飯島昌幸・吉田明稔・岡村和明 担当部分：全般)
7	学校教育における体罰に関する大学生の意識について	共著	2006.03.28	関東学園大学紀要 Liberal Arts 第14集 Pp.1-17	本研究の目的は、学校現場における「適度な体罰容認論・必要論」の実態を、将来教師を目指す学生、あるいは一般の大学生の視点から解明することにある。280名の学生に対してアンケート調査を実施した結果、大学生でさえ、体罰が法律で禁止されていることを周知されながらも、「体罰肯定論」が根強いことが伺えた。また、その傾向は、教師を志す学生のほうが高く、教員養成に対する一課題であることも示唆された。(共同研究者◎高瀬博・高橋進 担当部分：統計分析など)
8	大学女子サッカー選手を対象としたサッカー特異性が含まれるフィールドテストの作成－本学女子サッカー部のフィールドテストの測定結果から－	共著	2007.03.00	関東学園大学紀要 Liberal Arts 第15集 Pp.37-49	本研究は、大学女子サッカー選手のフィジカル能力をサッカーに特異的なフィジカルテストを用いて把握すること、さらに、サッカー特異性が含まれるフィールドテストの現状について、本学女子サッカー部の測定結果から文献的に考察をすることを目的とした。その結果、女子サッカー選手を対象に行われているフィールドテストの測定項目が統一されていないことが明確になった。(共同研究者◎氏平裕人・小林直行・高瀬博・高橋進・山口重信・江田香織・宮川俊平 担当部分：抽出不可能)
9	大学生の授業選択行動要因に関する研究－スポーツ且つ意識と柔道に対する態度並びに他の心理的側面との関連性について－	共著	2007.03.00	講道館柔道科学研究会紀要 第十一輯 Pp.129-144 講道館	本研究は、行動を決定する一要因であるスポーツ価値意識に着目し、実際に柔道を大学で選択履修した学生の心理的諸側面(柔道に対する態度、原因帰属様式、自己有能感など)との因果関係を明らかにすることを目的とした。尚、柔道に対する心理的諸側面との関係を明らかにするために、スポーツ価値意識を含め、心理的諸側面を因子分析的手法による特性上から分類・比較することとした。(共同研究者◎高橋進・貝瀬輝夫・加曾利正美・野瀬清喜・三宅仁・江田香織・濱田初幸・高野千春 担当部分：全般)

10	大学生の柔道に対する態度と自己形成意識との関連性について—自尊感情、本来感、自己受容を中心に—	共著	2007.03.31	埼玉武道学研究 第6号 Pp.35-32 日本武道学会埼玉支部	柔道に対する良好な態度と様々な心理的側面との因果関係を探ることは、柔道のみならず大学生の保健体育関連授業選択行動の解明に一矢を投ずることになり得るという観点から、本研究では、大学生期の心理的な課題の一つである自己形成の促進に着目した。課題解明にあたり、その自己形成を促進する要因として、自尊感情、本来感、自己受容の3尺度を取り上げ、2点の仮説を立て、それを立脚すべく研究を進めることとした。尚、柔道に対する態度については、その構造を再認する目的から因子分析的手法を用いた。さらに、柔道に対する態度への自尊感情、本来感、自己受容の影響を検討するためにカテゴリカル回帰分析を施した。(共同研究者◎高橋進・野瀬清喜・三宅仁・江田香織・濱田初幸・高野千春 担当部分：全般)
11	柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について(第2報)—授業評価観点と態度との関連性—	共著	2008.03.00	大東文化大学紀要 第46号 (社会科学)Pp.169-185	本研究の目的は、「構成的グループエンカウンターを導入した大学体育柔道授業」自体が、良い授業であったか否かを検討し、併せて良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにすることである。特に、研究の第一段階では、採用した授業評価観点24項目を良い体育授業条件とし、大学生にそれぞれの項目について、良い授業と感じる程度を尋ねることとした。更に、得られたデータについては、因子分析的手法を用い、その評価観点の構造についての検討を重ね、その上で、柔道授業評価並びに授業に対する態度を問うアンケート用紙の作成を試みることにした。尚、柔道に対する態度については、その構造を再認する目的から因子分析的手法を用いた。また、良い授業要因と柔道に対する学習者の態度との因果関係を明らかにするため、ピアソンの積率相関変数を求めた。(共同研究者◎高橋進・武内政幸・矢野勝・三宅仁・若山英央 担当部分：全般)
12	足関節不安定性を有する大学女子サッカー選手の足関節周囲のX線学的検討	共著	2008.03.01	関東学園大学紀要 Liberal Arts 第16集 Pp.61-70	本研究では、大学女子サッカー選手の足部及び足関節周囲のX線撮影及び単純X線ストレス撮影を行い、骨性変化などの特徴を検討することを目的とした。対象は、関東女子大学リーグに所属する2校の大学女子サッカー選手29人40足であった。年齢は18～21歳、サッカー歴は4～12年であった。頻回の捻挫経験があり、自覚的不安感を認める25足を不安定群とし、下肢に既往が無い15足を健常群とした。尚、自覚的不安定感の有無を検討するにあたり、Karisson et al.によってつくられた評価法を改変した足関節機能的不安定性のスコアを用いた。また、得られたX線画像は、パーソナルコンピュータに取り込み画像解析ソフトマイクロアナライザーを用い計測した。(共同研究者◎小林直行・氏平裕人・高瀬博・宮川俊平・高橋進・加曾利正美・山口重信) 分担当：抽出不可能
13	大学生の保健体育教員に対するパーソナリティ認知について—保健体育免許状取得可能大学生の場合—	共著	2009.03.00	大東文化大学紀要 47号 p.209-223	本研究では、教員免許状の課程認定に大きく変化の現れている保健体育について焦点を絞ることとし、新しく保健体育免許資格を得ることのできるようになった2大学の学生(新設されたスポーツ・健康科学部と経済学部のスポーツマネジメントコースに在籍する学生)を対象に、保健体育教員に対するパーソナリティ認知についての調査、良い体育授業についての価値意識、更にはそのパーソナリティ認知と価値意識との因果関係を解明することを目的とした。尚、「保健体育教員に対するパーソナリティ認知構造」については、その構造を再認する目的から因子分析的手法を用いた。また、パーソナリティ認知と価値意識との因果関係を明らかにするため、両尺度間のピアソンの積率係数を求めた。(共同研究者◎高橋進・濱田初幸)

14	柔道教員のパーソナリティ認知構造についての一考察—パーソナリティ認知構造と授業評価との関連性—	共著	2009.03.00	講道館柔道科学研究会紀要第一二輯 p.171-182 講道館	本研究では、武道を教授する教員のパーソナリティの特異性を明確化させるために、武道の中で「柔道」を専門とする教員のパーソナリティ認知の解明を試みることを目的とし、柔道教員のパーソナリティ認知について、あるいは授業評価についてのアンケート調査を行うこととした。得られた柔道教員のパーソナリティ認知については、因子分析を試み、林のパーソナリティ認知の基本3次元を基軸とした上で、筆者らが抽出・命名した、保健体育教員のパーソナリティに対する認知構造と比較し、その特異性について考察することとした。また、授業評価を高橋らの示した要因毎に明らかにするとともに、本研究で得られた柔道教員のパーソナリティ認知評価との因果関係を明らかにするために、両尺度間(評価得点)の積率係数(ピアソン)を求めた。(共同研究者◎高橋進・貝瀬輝夫・野瀬清喜・濱田初幸)
その他	1 How college students are satisfied with the contents in PE classes? From the results of four-year investigations	共同	2007.08.02	東アジアスポーツ&エクササイズ学会 2007大会(中国・上海)	In the trend of re-organizing undergraduate programs in universities and junior colleges in Japan, whether physical education (PE) classes are necessary as requirements for completing a course or not have been an issue in each of schools. Therefore, it is important to obtain knowledge on how students are satisfied with PE classes as well as what they expect to get from the classes. To this end, we have investigated by questionnaires for four years (2002-2005) for all of the students who took PE classes as their requirements for graduation in D university in Tokyo, Japan. The investigations were conducted by questionnaires twice in each of the four years, (June in the first semester and December in the second semester). The questionnaires were designed to capture students'evaluations about PE classes in terms of: 1)the contents of class activities, 2)the activities as a medium to making friends, 3)the quality of a textbook as a course material, 4)the contents and qualities of lectures on AIDS and the role of nutrition for one's health, and 5)the amount of exercise in the classes. The students were also asked to evaluate the classes in terms of: 1)improving their physical fitness, 2)encountering lifelong sports, 3)recognizing the importance of sports in one's life, 4)experiencing the joy of sports, and 5)learning how to exercise and care one's health. (共同研究者 Susuniu Takahashi, Keisuke Hyodo, Shinya Tadakuma, Hiromu Katsumata, Hiroshi Tanaka, Akira Suzuki 担当部分: 全般・発表者)
III 学会等および社会における主な活動					
1	1983.04.00	～	現在	日本体育学会(体育心理学、体育測定評価、体育科教科教育)会員	
2	1983.04.00	～	現在	日本武道学会会員(2005.04.00～現在 評議員)	
3	1985.02.01	～	現在	財団法人講道館指導員	
4	1987.04.01	～	現在	全日本柔道連盟強化委員会科学研究部班員	
5	1990.05.00	～	現在	ソ連(キエフ)ジュニア国際柔道大会全日本柔道連盟派遣コーチ	
6	1990.10.00	～	現在	中国・北京アジア大会選手支援団(柔道)	
7	1991.04.01	～	現在	全日本柔道連盟教育普及委員	
8	1994.04.00	～	現在	日本学生相談学会会員	
9	1994.06.00	～	現在	韓国選手権視察団員(柔道)	
10	1996.04.01	～	現在	群馬県警察柔道特別師範	

11	1997.06.00	～	現在	イタリア・ウンブリア州AVISカップ群馬県代表選手団監督
12	1998.02.00	～	現在	イラン国際大会全日本柔道連盟公認チーム（関東学園大学）監督・90Kg級小山武彦優勝
13	1999.09.00	～	現在	アジア柔道連盟主催コーチセミナー参加（全日本柔道連盟派遣）・シンガポール
14	2001.03.00	～	現在	オランダ研修団監督（関東学生柔道連盟派遣）
15	2001.08.00	～	現在	ハンガリー・アトムカップ国際柔道大会監督（関東学園大学チーム）
16	2002.04.00	～	現在	群馬県柔道連盟指導部長（2004.03.00～現在 常任理事）
17	2003.10.00	～	現在	上毛新聞「オピニオン21」委員
18	2004.11.00	～	現在	柔道IJF公認審判（アジアA・国際B）取得、青島（中国）国際柔道大会審判員
19	2005.04.00	～	現在	群馬県太田市体育協会理事（現在に至る）
20	2005.04.01	～	2009.03.31	JOC日本オリンピック委員会強化スタッフ（戦略・マネージメント）
21	2005.09.00	～	現在	アジア柔道連盟主催コーチングセミナー講師、ベトナム国際柔道大会審判員
22	2006.04.00	～	現在	全日本柔道連盟柔道ルネサンス委員・大会事業委員・教育普及委員（現在に至る）
23	2006.05.00	～	現在	ハノイ国際柔道大会審判員
24	2006.11.00	～	現在	タイペイ国際柔道大会審判員
25	2007.03.00	～	現在	ポーランド国際柔道大会審判員
26	2007.04.00			オランダ柔道連盟、CIO S 第一回オランダ柔道連盟主催形セミナー講師、CIO S 授業講師
27	2007.04.00			全日本柔道連盟平成19年度全日本柔道選抜体重別選手権大会審判員
28	2007.10.30	～	2007.10.31	全日本柔道連盟東アジア柔道選手権大会審判員（中国・シンセン）
29	2008.02.28	～	2008.03.04	全日本柔道連盟プラハ（チェコ）国際柔道大会審判員
30	2008.03.05	～	2008.03.20	オランダ柔道連盟、CIO S 第二回オランダ柔道連盟主催形セミナー講師、CIO S 授業講師
31	2008.04.05	～	2008.04.06	全日本柔道連盟平成20年度全日本柔道選抜体重別選手権大会審判員（オリンピック選考会）
32	2008.04.26	～	2008.04.27	全日本柔道連盟アジア柔道選手権審判員（韓国）

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	高山 成伸	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 視覚教材の作成と利用		2006.04.00	大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科において、免疫学では「生体防御機構の基本的な仕組み」について、免疫検査学では今日の臨床検査において利用されている「免疫学的検査法の原理と応用」について、輸血移植学では「より安全な輸血・移植の実施」を目標とした検査技術について講義をおこなっている。生体内・生体外の免疫反応を理解させる工夫として、コンピュータグラフィックスによる動画やパワーポイントによる表現等を可能な限り導入して利用することで、分子レベルで起こる免疫反応をより理解し易くした。			
2) 高度臨床検査技術の導入		2007.12.00	大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科において、3年次の免疫学実習授業では、抗原抗体反応の原理と臨床検査への応用の実際について、間接蛍光抗体法など数多くの術式を体験学習させるとともに、フローサイトメトリー法など近年の免疫化学的手法も実習させることで他校には無い高度な技術や解析法にも触れさせ、学生に対して近未来的な手技への関心も高揚させるよう努めた。また、輸血移植学実習授業では、各検査法について確実性のある手技や術式を習得させることを目標として、第一線の現職にある講師陣を招聘しての細やかな実習指導体制により実施した。卒業演習・卒業研究では、免疫学分野で学んだ基礎的な知識や技術を発展させる内容のテーマに基づく研究法の指導を行い、さらに、個々の学生が実際の臨床診断法への発展性や応用性について考察した内容を、ピアレビュー方式によるプレゼンテーションによって表現させることで、ディスカッションの方法等も同時に指導した。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 免疫検査学／輸血検査学の実習書および記入式実習レポートの作成と利用		2007.12.00	大東文化大学スポーツ・健康科学部健康科学科において、3年次の免疫検査学実習書および輸血検査学実習書を作成した。我が国における臨床検査技師国家試験の出題基準や臨地実習教育内容を十分に考慮して、質の高い学内実習教育を効果的に実施する目的から実習項目は選別した内容とし、各法の臨床的意義や目的を簡潔に記載し、さらに、原理および操作法については写真や挿絵を多用することで、詳しく、かつ解り易く解説した。また、並行して免疫検査学実習レポート、輸血検査学実習レポートを作成し、学生が実習した内容の各要点を効率良く整理し易くした。さらに、これら実習レポートの本文中にある各実習項目ごとの設問を、臨床検査国家試験出題基準に準拠した内容としたことは、実学教育の質をより向上させおり、臨地実習でも高い評価を得ている。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						

1	臨床検査 臨地実習 マニュアル 第3版 —	共著	2006.05.00	医歯薬出版	臨床検査技師教育において義務づけられている臨地実習に関する教本について、輸血検査分野を分担執筆した。共著者 ©狩野元成、鈴木敏恵、今井正、他。筆者は第8章の輸血検査分野 (295-301 頁) を担当。A 6 版変、総頁 452 頁。
2	臨床検査講座 免疫 検査学	共著	2008.06.00	医歯薬出版	共著者 ©窪田哲郎、加藤亮二、藤田清貴、他。筆者は第3章 A-V(126-129 頁)および BI-3,4,5(170-190 頁)を担当。B 5 版、総頁 404 頁。
論文					
1	循環抗凝結素を有する 症例における凝固 因子活性測定	共著	2006.07.00	日本検査血液学会誌 7 巻 2 号、270-277(2006)	循環抗凝結素を有する患者を対象として、4 種の APTT 試薬における凝固因子活性 (FVIII:C および FIX:C) を比較検討した。インヒビター保有血友病例や LA 陽性症例などの循環抗凝結素保有例では、使用する APTT 試薬の特異性や検体希釈率の違いによって著しい差異が生じることを明らかにした。共同発表者 山崎哲 細谷由紀子 鈴木典子 山崎法子 安室洋子 大井千愛 瀧正志
2	各種第 VIII 因子イン ヒビター測定法の方 法論的特徴と不活化 処理法の有用性	共著	2008.04.00	日本血栓止血学会誌 19 巻 2 号、235-243(2008)	血友病患者に発生する第 VIII 因子インヒビターの活性測定法 4 法について、それぞれの測定特性を明らかにするとともに、著者らの方法における不活化処理の臨床的有用性について論じた。共同発表者山崎哲、鈴木典子、山崎法子、山下敦己、武藤真二、長江千愛、瀧正志
3	ヘパリナーゼを用いた ヘパリン混入血液 のトロンビン生成試 験法による凝固能評 価の基礎的検討	共著	2008.12.00	日本血栓止血学会誌 19 巻 6 号、796-805(2008)	CVV 血を使った凝固能測定に際し、ヘパリンの影響とヘパリナーゼのヘパリン中和効果について新たな TGT 法を中心に検討した。その結果、ヘパリナーゼはヘパリンを完全に中和し、ヘパリン混入血でも凝固能を評価できることを明らかにした。共同発表者山下 敦己、長江 千愛、武藤 真二、浅原 美恵子、山崎 哲、瀧 正志
4	第 VIII 因子インヒビ ター測定法 4 法の特 性比較と補正值によ る評価法の検討	共著	2009.03.00	日本検査血液学会誌 10 巻 2 号、167-174(2009)	第 VIII 因子インヒビター測定法として利用される 4 法を比較検討し、各法の測定特性を明らかにし、さらに、各法を統合し得る補正法の適用性について検討した。共同発表者山崎哲、山崎法子、鈴木典子、後藤宏実、瀧正志
その他					
1	血液サンプル中の mRNA の保存安定性 について	共同	2004.05.25	第 44 回 日本臨床化学会 総会	mRNA 発現解析については、DNA チップを用いた数万の遺伝子に関する網羅的な発現解析が行われている。血中の 7 種の mRNA について、採血後の経時的な発現量変動を検討した。室温では mRNA の変動が大きく、IL-8 では 742 倍 (24h, p<0.01) に変動し、4℃保存群でも 5.0 倍) の変化を認めた。共同発表者 飯島健太郎 高山成伸 星昭彦 日比望 原田勝二 引地一昌 [科学技術振興機構 JST 託開発事業]
2	健常人末梢血 mRNA を用いた市販 DNA チ ップの基礎的検討	共同	2004.12.10	第 27 回 日本分子生物学 会年会	健常人末梢血 mRNA を対象に DNA チップの臨床診断法への応用を検討した結果、今回得られた良好な再現性は、DNA チップ法が検査診断法として応用可能であることを示唆するものと思われた。共同発表者 飯島健太郎 高山成伸 星昭彦 日比望 原田勝二 引地一昌 [科学技術振興機構 JST 委託開発事業]
3	LA 陽性例における ADAMTS-13 活性お よび抗原量の比較	共同	2006.07.00	第 7 回日本検査血液学会 (2006)	最近開発された ADAMTS-13 抗原測定法の有用性について LA 陽性症例を対象とし検討を行った。健常人では抗原量との間で良好な相関を示したが、LA 陽性症例では異なる相関性を示し、抗原量が解離した LA 陽性症例では阻止活性も検出された。共同発表者 山崎哲 鈴木典子 小野智子 伊神恒 瀧正志
4	新たに開発された V WF 活性測定試薬 「Hemosol IL VWF activity」の評価	共同	2006.07.00	第 7 回日本検査血液学会 (2006)	最近開発された、 GPIb 結合サイトに対する MoAb 抗体を用いた VWF 活性測定法を検討した。同時再現性および従来法との相関は良好な結果を示し、活性/抗原比が健常人で平均 0.98 であったのに対し、VWD type2A では平均 0.47 と低値を示したことは、VWD 病型分類においても有用と考えられた。共同発表者 鈴木典子 山崎哲 山崎法子 浅原美恵子 瀧正志

5	組織球性壊死性リンパ節炎に伴いLAが出現し抗第VIII因子抗体との鑑別を要した血友病Aの1例	共編	2006.11.00	第29回日本血栓止血学会(2006)	今回、血友病患者において組織球性壊死性リンパ節炎に伴って一過性にLAの出現を認めた症例を経験したが、出血傾向の増悪あるいは血栓などの明らかな臨床症状の変化は認められなかった。血友病においてウイルス感染に伴ってLAが出現することは知られているが、本症に伴うLAの報告例は無く貴重な症例と思われた。共同発表者 大井千愛 瀧正志
6	第VIII因子インヒビター測定法の比較	共同	2007.07.00	第8回日本検査血液学会(2007)	第VIII因子インヒビター測定は、従来Bethesda法によっておこなわれているが、現状においては種々の改良法も利用されており、評価法としては一定していない。著者らは、4種の第VIII因子インヒビター測定法についてその特徴を明らかにし、臨床評価における各法の意義を明らかにした。共同発表者 山崎哲 鈴木典子 山崎法子 瀧正志
7	第VIII因子インヒビター測定法の比較 -第2報-	共同	2008.07.00	第9回日本検査血液学会(2008)	前回発表した第VIII因子インヒビター測定法について、さらに今回、インヒビター陽性例を対象として検討した。陰性例での結果と同様に、陽性例でも4種の第VIII因子インヒビター測定法で、差異があることが明らかとなり、各法の違いは本症治療の評価において重要であることが示された。共同発表者山崎哲、鈴木典子、山崎法子、瀧正志
8	混合補正試験の評価方法に関する検討	共同	2008.07.00	第9回日本検査血液学会(2008)	凝固時間延長の原因を検索する方法の一つとして実施される混合補正試験の評価は、明確でない場合が多く、凝固因子欠乏か循環抗凝血素かを判定する上で困難なことが多い。今回の検討により、本法は使用する試薬や判定法によって、その評価に差異があることが明らかとなったことは、その利用において重要であることが示された。共同発表者鈴木典子、山崎哲、山崎法子、井本清美、瀧正志
9	Different Performance by the Methods on Factor VIII:C Inhibitor Assay	共同	2008.08.00	9th Colloquium Asian Network for Clinical laboratory Standerdization and Harmonaization	FVIII:C阻害因子量は統一されたBU単位で表示されるが、日本においては4種の測定法が混在し、我々は各法の測定特性が互いに異なることを明らかにした。この結果は、血友病患者の凝固能維持・管理において非常に重要である。共同発表者 Satoshi Yamazaki, Masashi Taki
10	L-asparaginase 治療が小児白血病の患者のトロンビン生成に及ぼす影響	共同	2008.11.00	第31回日本血栓止血学会(2008)	L-aspによる止血凝固異常を解明するため患者のトロンビン生成能について検討した。L-aspの使用例でのETP増加は血栓傾向を増加させ、さらに、感染症の合併はこの傾向を助長することが明らかとなった。共同発表者山下 敦己、鈴木典子、山崎哲、山崎法子、井本清美、瀧正志

III 学会等および社会における主な活動

1	2001.00.00	～	現在	日本検査血液学会会員
2	2004.00.00	～	2005.00.00	日本臨床化学学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	早川 欽哉	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1)		2007.04.00		(2007年4月～現在) 関連病院の協力により、人体解剖材料を借りて、実際に役立つ病理実習を行ってきた。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 「好きになる病理学」		2004.04.00		(2004年4月～2008年8月 第8刷) 単著 講談社サイエンティフィック 病理学全体の入門参考書。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 医学大辞典改訂第2版	共著	2009.02.15	医学書院	病理学に関する用語の一部について。			
論文							
1 潰瘍性大腸炎との鑑別が困難であった腸管T細胞リンパ腫の1例	共著	2006.12.00	交通医学 60巻5-6号 39-43	当初、潰瘍性大腸炎と診断したが、治療に抵抗性を示し、粘膜病変が進行したため、精査の結果、T細胞リンパ腫と判明した43才男性の1例。化学療法を施したが死亡、剖検を行った。丹野正隆、早川欽哉			
2 血清ProGRP値の異常高値を伴う非定型的カルチノイドの1切除例	共著	2006.12.00	交通医学 60巻5-6号 44-47	右中葉肺門部原発、43才女性の非定型的カルチノイドの1手術例を報告した。血清ProGRPの異常高値(918pg/ml)を示しており、形態的には小細胞癌に類似していた。上野克仁、室田欣宏、早川欽哉、丹野正隆			
その他							
1 炎症性大動脈瘤に対してホモグラフトを用いた大動脈置換術を行った1剖検例	共同	2004.06.00	第93回日本病理学会総会	丹野正隆、早川欽哉、泉浩、長谷川秀樹			
2 肝硬変にAeromonous Hydrophilia感染による敗血症を合併した1剖検例	共同	2005.04.14	第94回日本病理学会総会 2005.04.14～04.16	丹野正隆、早川欽哉、泉浩			
3 口蓋から鼻腔底にかけて広範な膨隆をきたした鼻口蓋嚢胞	共同	2005.06.04	第59回日本交通医学会総会 2005.06.04～06.05	青木秀啓、早川欽哉他			
4 舌に発生した多発性脂肪腫の1例	共同	2005.06.04	第59回日本交通医学会総会 2005.06.04～06.05	神林由美子、青木秀啓、丹野正隆、早川欽哉			

5	乳癌骨転移にて高Ca血症を1年9ヶ月にわたり繰り返した1症例	共同	2005.06.10	第13回日本乳癌学会総会 2005.06.10～06.11	鈴木信親、早川欽哉他
6	術前化学療法を施行した乳癌49症例の治療成績について	共同	2005.06.10	第13回日本乳癌学会総会 2005.06.10～06.11	川端英孝、早川欽哉他
7	対称的な経過をとった炎症性乳癌の3症例	共同	2005.11.26	第2回日本乳癌学会関東地方会	鈴木信親、川端英孝、早川欽哉他
8	高令内臓逆位症の1剖検例	共著	2006.06.18	第60回日本交通医学会総会	内臓逆位症は稀な疾患で、通常 kartagener 症候群を伴う。70才男性の剖検例で心、肺、肝、脾、脾の逆位を示していた。また kartagener 症候群と思われる細気管支の拡張がみられた。丹野正隆、早川欽哉
9	肉芽腫性乳腺炎の1例	共	2006.06.18	第60回日本交通医学会総会	34才女性の稀な肉芽腫性乳腺炎症例について、穿刺吸引細胞診による細胞病理学的に検索した。乳癌との鑑別に有用な所見を得た。木村勝己、深井光一郎、中澤和久、今野久美子、丹野正隆、早川欽哉
10	乳癌治療後の妊娠、出産の5例	共	2006.07.07	第14回日本乳癌学会学術総会、2006年7月7～8日	乳癌治療後の妊娠、出産が再発を促進するという考え方は否定的ではあるが、社会的な面も含め、多様な観点からの評価を試みた。鈴木信親、川端英孝、丹野正隆、早川欽哉
11	再発乳癌症例に対する頭部MR I検査(スクリーニング)の意義について	共	2006.07.07	第14回日本乳癌学会学術総会、2006年7月7～8日	乳癌の剖検例では20%程度の脳転移を認めるとの報告が一般的であるが、近年の薬物療法の進歩により頻度と臨床的な重要性が増していると思われる。当院での遠隔転移49名のうち7例に脳転移の診断がついており、ガンマナイフ、照射の治療を受けている。早期発見のためにスクリーニングMR Iが有効である。川端英孝、丹野正隆、早川欽哉
12	第96回日本病理学会総会	共	2007.03.13	日本病理学会会誌96巻1号 p.262、2007年3月13～15日	小脳髄膜腫(血管周皮腫)切除13年後に肺、肝臓に巨大転移巣を形成した一症例 丹野正隆、早川欽哉、久米桂子、福村由紀、泉浩、須田耕一
13	中高年の登山～アンドスの風に吹かれて		2008.05.27	大東文化大学スポーツ・健康科学学会	7000m級の高山の中高年の登山の健康に関する考察。(特別講演)
14	呼吸器-2		2008.11.14	日本臨床細胞学会秋期大会	座長
15	第98回日本病理学会総会		2009.05.01	第98回日本病理学会総会	T細胞型血管内リンパ腫の一剖検例。関邦彦、丹野正隆、早川欣哉

III 学会等および社会における主な活動

1	1976.04.00	～	2005.03.00	日本臨床電子顕微鏡学会会員
2	1978.04.00	～	現在	日本病理学会評議員
3	1979.04.00	～	2005.03.00	日本肺癌学会会員
4	1985.04.00	～	現在	日本臨床病理学会会員
5	1985.04.01	～	2005.03.00	日本乳癌学会会員
6	1988.04.00	～	現在	日本交通医学会評議員
7	1990.04.01	～	2005.03.00	日本胃癌学会会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	教授	氏名	兵頭 圭介	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 一年次生対象の体育実技科目の履修状況調査		2006.04.00		2006 年度より過半数の学科において自由科目となった「総合体育」の履修状況について、マークシートによる調査を行なった。(2008 年まで毎年実施)			
2) 大東文化大学授業評価		2006.12.00		2006 年の大東文化大学授業評価 (12 月実施) において、総合評価 (5 点満点) で 4.5 以上と、平均を上回る結果を得た。他の評価項目においても肯定的な評価結果を得た。			
3) 大東文化大学授業評価		2007.12.00		2007 年の大東文化大学授業評価 (12 月実施) において、総合評価 (5 点満点) で 4.5 以上と、平均を上回る結果を得た。他の評価項目においても肯定的な評価結果を得た。			
4) 授業で使用した資料をネットワークドライブに掲載		2008.04.01		講義を行う際に、パワーポイントを併用しているが、使用したパワーポイントのファイルをネットワークドライブ上にアップロードして、学生が閲覧できるようにした。			
5) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		2008 年の大東文化大学授業評価 (12 月実施) において、総合評価 (5 点満点) で 4.5 以上と、平均を上回る結果を得た。他の評価項目においても肯定的な評価結果を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『シンプル衛生公衆衛生学 2005』鈴木庄亮、久道茂編著。7 章：学校保健、P209-219、P225-227 を担当。		2005.03.10		株式会社 南江堂、東京 医療関係者養成の専門学校・大学・短大での教科書の分担執筆を行なった。学校保健の項を担当した。			
2) 『これからの健康とスポーツの科学第 2 版』琉子友男、安部孝編		2005.04.00		2000 (平成 12) 年に初版が発行された、一般大学の保健・スポーツ科学の授業用テキスト。第一章「ライフスタイルと健康」を担当。			
3) 『シンプル衛生公衆衛生学 2006』鈴木庄亮、久道茂編著		2006.03.00		株式会社南江堂 1986 (昭和 61) 年に初版が発行されて以来、ほぼ 2 年に 1 度のペースで改訂を重ねてきた、医療・福祉系の学部専門教育に教科書として用いられている。			
4) 『シンプル衛生公衆衛生学 2007』鈴木庄亮、久道茂編著		2007.03.00		株式会社南江堂 担当部分はシンプル衛生公衆衛生 2005 に同じ。最新のデータをもとに子供の健康状況や学校保健についての記述を改めた。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 全国大学体育連合より「FD 推進校」として表彰を受ける		2005.03.00		2004 年に本学の保健体育分野における教育・研究に関連した内容で一万字を超える FD 報告書を作成して全国大学体育連合に提出。同連合にて審査の結果「FD 推進校」として 2005 年 3 月に表彰を受けた。この FD 報告書作成を担当した。			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							

論文				
1 本学の必修保健体育科目への学生ニーズについて	主著	2005.03.00	大東文化第紀要 第 43 号 <社会科学・自然科学> P59-66	本学の必修保健体育である総合体育に関し、受講者全員（約三千人）を対象に履修システム・教育内容（前期実施分）についての満足度調査を行ない、良い結果を得た。兵頭圭介、大橋二郎、田中博史、中間和男、秋葉盛夫
2 スクーバダイビング中の小型医療機器を用いた測定を可能にする防水ケース開発に関する研究	共著	2005.03.00	大東文化大学紀要 第 43 号<社会科学・自然科学> P279-287	スクーバダイビング中の生理学的測定を可能にするための機器の開発を行ない、実用に耐える性能であることが明らかにされた。主著：◎田中博史、大橋二郎、兵頭圭介、中間和男
3 タイトル：「大学体育自己点検・評価報告書」に見る本学保健体育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について。	主著	2006.03.00	大東文化大学紀要 第 44 号<社会科学>	社団法人全国大学体育連合のFD推進事業に基づいて本学の保健体育教育に関する自己点検・評価報告書を全国大学体育連合に提出したところ、その内容が評価されて、本学が「大学体育FD推進校」として、2005（平成17）年3月に大学体育連合から表彰された。その報告書の概要を紹介すると共に、2005（平成17）年4月のスポーツ・健康科学部開設が、本学の保健体育教育の充実・改善にどのような影響を及ぼしたかを考察した。兵頭圭介、田中博史、中間和男、川本竜史、中村正雄、只隈伸也、宮城 修
その他				
1 An Investigation of Elective Physical Education Programs in Japanese Colleges	共著	2005.08.07	Tenth Annual Conference of East Asian Sport and Exercise Science Society	Keisuke Hyodo, Akira Suzuki, Tomoo Ryushi, Hiromu Katsumata and Hiroshi Tanaka 大東文化大学2年次配当の体育実技の履修動機についてアンケート調査を実施し、分析を行なった。
2 『体育実技に対する学生の満足度について』	共著	2006.08.00	日本体育学会第57回大会	大東文化大学の一年次対象の体育実技（総合体育）の授業効果と学生の満足度について、悉皆調査によるアンケート調査結果について分析した。兵頭圭介、大橋二郎、田中博史、中間和男、秋葉盛夫
3 How college students are satisfied with the contents in PE classes? From the results of four-year investigations	共著	2007.08.02	12th Annual Conference of East Asian-Sport and Exercise Science Society	Keisuke Hyodo, Susumu Takahashi, Shinya Tadakuma, Hiromu Katsumata, Hiroshi Tanaka, and Akira Suzuki 大東文化大学1年次配当の保健体育実技科目の学生ニーズと満足度について4年間調査し、結果を集計した。
III 学会等および社会における主な活動				
1	1975.04.00	～	現在	日本公衆衛生学会会員
2	1979.04.00	～	現在	中間法人東大LB会少年サッカー教室コーチ・事務局
3	1979.04.00	～	現在	日本体育学会会員
4	1979.04.00	～	現在	日本体力医学会会員
5	1984.10.00	～	現在	運動療法研究会会員（平成11年～12年度理事）
6	1987.09.00	～	現在	大学教育学会（旧一般教育学会）会員
7	1988.04.00	～	現在	アジア障害者体育・スポーツ学会会員
8	1994.04.00	～	現在	大学キリスト者の会関東地区委員、全国委員
9	2000.04.00	～	現在	東京都大学サッカー連盟理事
10	2007.04.00	～	現在	東京都大学サッカー連盟評議員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	准教授	氏名	勝又 宏	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 明治大学授業評価		2004.12.00	明治大学授業評価において (2004 年 12 月実施) において、高い評価を得た。平均 3.47 (4 段階評価)			
2) 大東文化大学授業評価		2004.12.00	大東文化大学授業評価 (2004 年度 12 月実施) において、高い評価を得た。平均 4.2 (5 段階評価)			
3) 明治大学授業評価		2005.12.00	明治大学授業評価において (2005 年度 12 月実施)、高い評価を得た。平均 3.46 (4 段階評価)			
4) 明治大学授業評価		2006.12.00	明治大学授業評価において (2006 年度 12 月実施)、高い評価を得た。平均 3.66 (4 段階評価)			
5) ビデオを利用した動作習得		2007.04.00	2007 年 4 月～現在。大学 1 年生を対象とした体育実技授業 (ゴルフ) において、①動作のメカニズムについてビデオやパワーポイントを用いた資料により学習する、②そのメカニズムを身につける基本ドリルによってスイング動作の基礎を实践する、③ビデオを用いたフィードバックにより自分の動作感覚と実際の動きの違いを認識するといった過程を通じて、学生自ら動作の組織化を見出すことをねらいとした。			
6) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価 (2007 年度 12 月実施) において、高い評価を得た。授業への満足度：平均 4.4 (5 段階評価)			
7) 明治大学授業評価		2007.12.00	明治大学授業評価 (2007 年度 12 月実施) において、高い評価を得た。平均 3.73 (4 段階評価)			
8) 地域と連携したトレーニング演習授業の展開		2008.04.00	2008 年 4 月～現在。トレーニングの演習授業において、トレーニング方法・指導法を学んだ学生に、実践経験を積ませるため、授業の一環において、地域の体力測定・トレーニング教室イベントの企画・運営・指導に参加させた。また、それを通じてスポーツにおける社旗貢献について学ばせた。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 第 3 章「トレーニング理論」		2007.03.00	「テキストブック介護予防運動指導士」小野晃・琉子友男 (編著) ミネルヴァ書房、pp.33-44 体力向上およびパフォーマンス向上を目的としたトレーニングの、基礎理論・方法について以下の点からまとめた:トレーニングの原則、プログラムの方法、レジスタンストレーニング、有酸素トレーニング			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 明治大学体育実技・理論		2002.04.00	2002 年 4 月～現在に至る。非常勤講師として、学部学生を対象とした、体育実技 (球技全般・体力トレーニング) および体育理論の授業を担当。			
2) 大東文化大学体育実技		2003.04.00	2003 年 4 月～2005 年 3 月。非常勤講師として、学部学生を対象とした体育実技の授業 (ソフトボール、バドミントン、体力トレーニング) を担当。			
3) 東京都立大学 研究支援者		2004.10.01	2004 年 10 月 1 日～2005 年 3 月 31 日。大学院理学研究科 身体運動科学研究室において、動作分析機器を用いた実験の計画・実行、結果分析、学会発表を行うとともに、研究会に参加した。			

4) 首都大学東京 客員准教授	2005.04.01	2005年4月1日～現在に至る。大学院人間健康科学研究科の運動制御研究室において共同研究を実施、成果を学会・国際誌に発表した。
5) 大東文化大学 スポーツ・健康科学部 准教授	2005.04.01	2005年4月1日～現在に至る。スポーツ科学科学生に対して「スポーツ運動学」、「スポーツ実技：トレーニング」、「トレーニング演習」、全学共通科目として「総合体育A・B」を担当(週10.5時間)
6) 大東文化大学 スポーツ・健康科学研究科 准教授	2005.04.01	2005年4月1日～現在に至る。大学院スポーツ・健康科学研究科修士課程において、「運動制御・運動学習特論」および「演習」、「スポーツ・健康科学研究法」、「特別研究」を担当(週3時間)
7) 2006.04～2008.03 科研費による研究「脳内知覚情報伝達経路の分析による認知と身体運動制御との関連の検討」	2006.00.00	64Chennel-EEG測定システムを用いて、Grasping課題における大脳の活動を、Event-related-desynchronizationの観点より分析。得られた知見を、2007年8月国際学会Progress in Motor Controlで発表。
8) 大東文化大学 特別研究 共同研究者	2006.04.01	2006年4月1日～2008年3月31日。学内特別研究費による「大学陸上競技選手に対するスポーツ科学的サポートプロジェクトの実践研究—箱根駅伝優勝を目指して—」の共同研究者として、トレーニング科学領域を担当、選手の筋力測定・分析を行った。
9) 海外調査研究 2007年3月14～21	2007.03.14	科研費による研究のため、Dr.Aymar de Rugy研究室(Universcity of Queensland, Department of Human Movement Study, Brisbane Austlaria)を訪問、研究プロジェクトに関する意見交換し、今後の研究の方向性について論議した。
10) 高坂地区体力テスト	2007.11.00	埼玉県東松山市の高坂丘陵地区住民主催の体育祭において、地域住民参加者の体力測定を行った。
11) 科研費による研究「運動課題遂行中の脳波分析による知覚—運動制御過程への認知的情報処理の関与について」	2008.04.00	64Chennel-EEG測定システムを用いて、Grasping課題における大脳の活動を、Event-related-desynchronization および Coherenceの観点より分析し、認知的情報処理活動の、知覚にもとづいて動作を組織化するしくみへの関与について検討する。
12) 大東文化大学 特別研究 共同研究者	2008.04.01	2008年4月1日～2101年3月31日。学内特別研究費による「日本及び中国における幼児の生活環境とライフスタイルが体温に及ぼす影響について」の共同研究者として、調査結果の分析・成果発表資料作成を行った。
13) 鳩山町「高齢者トレーニング教室」	2008.10.00	2008年10月～12月。埼玉県鳩山町保健センターの企画による高齢者を対象としたトレーニング教室において、体力測定・トレーニング方法の指導・測定結果分析を行った。
14) 高坂地区体力テスト	2008.10.00	2008年10月～12月。埼玉県東松山市の高坂地区住民の体育祭において、参加者に対して体力測定を行った。

II 研究活動

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
1 The dialogue between data and model: Passive stability and "active" control in a ball bouncing task.	共	2004.00.00	Nonlinear Studies, 11(3):319-344	Dijkstra, T.M.H., Katsumata, H., De Rugy, A., & Stamad, D. 安定した周期的運動の特徴は、振動子としてモデル化できる。そのふるまいに、生体ノイズを加えることで、実際のヒトの周期運動の特徴をあらわすことができる。運動の遂行過程に介入する生体・環境ノイズは、運動系のふるまいが平衡点にとどまろうとすることに対する外乱として作用する。これから生じる運動エラーに対する機能的補償動作が実際の安定した運動にみられた。(共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)

2	「大学体育自己点検・評価報告書」に見る本学保健体育教育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について	共	2006.03.00	大東文化大学紀要、44:209-228	兵頭圭介、勝又宏、川本竜史、只隈伸也、田中博史、中間和男、中村正雄、宮城修 社団法人全国大学体育連合のFD推進事業に基づいて、本学の保健体育教育に関する自己点検・評価報告書を全国大学体育連合に提出したところ、その内容が評価されて、本学が「大学体育FD推進校」として、2005（平成17）年3月に大学体育連合から表彰された。その報告書の概要を紹介すると共に、2005（平成17）年4月のスポーツ・健康科学部開設が、本学の保健体育教育の充実・改善にどのような影響を及ぼしたかを考察した。
3	スクーバダイビング中の小型医療危機を用いた測定を可能にする防水ケースのデータの信頼性に関する検討	共	2006.03.00	大東文化大学紀要、44:17-24	田中博、森口哲史、勝又宏、兵頭圭介、小田切優子、下光輝 本研究は防水ケースを用いた測定において取得されるデータがケースを用いないときと差があるのかについて調査し、ケースを使用して得られるデータの信頼性について明らかにすることを目的として行い、動脈血酸素飽和度及び心拍数はケースを用いた場合でも正確なデータが得られることが確認された。
4	A functional modulation for timing a movement: A coordinative structure in baseball hitting	単著	2007.02.00	Human Movement Science, 26:27-47	異なる速度の投球に対する打撃における地面反力と動作の系時的变化を検討した。投球の飛来に対する動作のタイミング調節が見いだされ、運動課題を達成するための、機能的協調構造のしくみが明らかになった。
5	The involvement of cognitive processing in a perceptual-motor process examined with EEG time-frequency analysis	共	2009.01.00	Clinical Neurophysiology, (Epub ahead of print)	Katsumata H., Suzuki, K. Tanaka T., & Imanaka, K. Grasping 課題動作中の脳波周波数スペクトルの時系列変化を分析することにより、動作遂行における対象物に対する認知情報処理過程の関与を検討した。
その他					
1	Perceptual-motor skill in stable rhythmic skill	単	2004.06.00	The Kligman Fellows Research Conference, The Pennsylvania State University, Pennsylvania, USA	Katsumata, H. 運動課題を達成するための動作を制御するしくみを理解するためには、まずその課題を形成する生体と環境および物理的な運動課題要素からなる系のダイナミクスについて知ることが糸口となる。この理論的枠組みについて、ボールをラケットでバウンドさせて安定した周期を維持するという運動課題に関する研究成果を例にあげながらまとめた。
2	An investigation on elective physical education programs in Japanese colleges	共	2005.08.00	The 10th EASESS Conference, Shanghai	Hyodo, K., Suzuki, A., Ryushi, T., Katsumata, H., & Tanaka, H. 日本の4年生大学における一般教養科目として位置づけられている保健体育系授業に関する授業を選択した大学生の体育授業の重要性に関する意識調査結果を発表した。
3	Joint and muscle actions in rhythmic ball bouncing	共	2005.08.17	Progress in Motor control V: A multidisciplinary Perspective The Pennsylvania State University, State College, PA USA 2005.08.17-20	Katsumata, H., Imanaka, K., & Sternad, D. (筆頭研究者) 複雑な多関節運動の制御について、ボールをラケットでバウンドさせて安定した周期運動を維持するという運動課題を用いることで検討した。ラケットを操る手首・肘関節とそれらに関連する筋群の活動は、ボールとラケットの衝突に一定の弾性を維持するよう組織化されており、また、ボールに対するラケットの動きのタイミングについてインパクトの強さを調節するという協調構造により運動課題を達成することが示された。
4	Fluctuations in bouncing a ball on a racket	共	2005.08.17	Progress in Motor control V: A multidisciplinary Perspective The Pennsylvania State University, State College, PA USA 2005.08.17-20	Dijkstra, T.M.H., Wei, K., Katsumata, H., & Sternad, D. ラケットによりボールをバウンドさせる運動課題では、ボール-ラケット系に内在する安定性を利用することで、複雑なエラー修正回路を必要とせずに安定したボールの運動を産出できる。この運動のモデルを構築し、ボールとラケットの衝突にノイズを含ませることで、モデルによるバウンドのふるまいが、ヒトのバウンドパフォーマンスをよく表すことを示した。さらに、より弾みやすいボールの条件下では、系の安定性に依存する受動的運動の組織化だけでなく、能動的な制御の要素が加わることが見出された。

5	Hitting a falling ball: Tau or time-to-contact?	共	2006.06.00	North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity (NASPSPA), Denver, Colorado, USA	Hiromu Katsumata & Daniel M. Russell 飛来するボールを打つ・捕るなどの動作のタイミングはどのようなしくみで組織化されるのか? このことについて、落下するボールをロッドで打つという運動課題を用いて、物体の加速度に対する動作タイミングの調整を検討した。
6	モデル分析によって運動課題達成のヒントを探る: リズミカルなボール・バウンド・パフォーマンスを例として	単	2006.12.00	スポーツ心理学会 ラウンドテーブルディスカッション「運動学習/制御の数理モデル」	運動制御の研究領域において、数理モデルを用いる目的とその観点を、特に、Dynamical system approach による安定したボールバウンドをもたらすラケットの制御に関する研究について解説した。
7	A coordinative structure in the timing of baseball hitting	単	2007.06.00	North American Society for the Psychology of Sport and Physical Activity (NASPSPA), San Diego, CA, USA (Journal of Sport & Exercise Psychology, 29(Supplement): 92)	Katsumata, H. 打撃動作における飛来するボールに対するタイミング制御が、スキルを形成する重要な要素である協調構造をなすことについての実験データを示した。
8	Cortical activity for grasping an object and estimating the object's size	共	2007.08.00	Progress in Motor Control VI, Santos, Brazil (Motor Control, 11(Supplement): 127-128)	Katsumata, H., Suzuki, K., Tanaka, T., & Imanaka, K. Grasping および Matching 課題を用いて、動作制御過程における認知的情報処理過程の関与について、EEG の ERD/ERS 分析結果を発表した。
9	How college students are satisfied with the contents in PE classes?: From the results of four-year investigations	共	2007.08.00	The 12th EASESS Conference, Shanghai, China	Hyodo, K., Takahashi, S., Tadakuma, S., Katsumata, H., Tanaka, H., & Suzuki, A. 大学における体育授業履修学生に対して4年間にわたって実施した質問紙による体育・スポーツに関する意識調査の結果を報告した。
10	明治大学授業評価		2007.12.00		明治大学授業評価(2007年度12月実施)において、高い評価を得た。平均3.73(4段階評価)
11	ジュニア期の動作コントロール: 意味と意義	単	2008.02.15	太田市ジュニアスポーツ育成事業公開講座	ジュニア期のスポーツ選手が、スポーツスキルを獲得・向上させることについて、発育・発達の特徴を踏まえるとともに、Dynamical system 理論を応用した運動学習理論の点からの留意点・練習方法について提案した。
12	Relationship between functional reach and muscle strength	共	2008.08.00	The 13th EASESS Conference, Seoul, Korea	Ryushi, I., Park, M., Suzuki, A., Tanaka, H., Hyodo, K., Tadakuma, S., Takahashi, S., & Katsumata, H. ファンクショナルリーチと下肢筋力の相関分析より、姿勢の安定性と筋力の関係および、ファンクショナルリーチの安定性の測定値としての有効性を検討した。
13	ERD/ERS analysis to examine the qualitative features of a visuo-motor process in a prehensile movement	共	2008.11.00	Society for Neuroscience 2008, Washington DC, USA	Katsumata, H., Suzuki, K., Tanaka, T., & Imanaka, K. Grasping および Matching 動作中の脳波周波数スペクトルの時系列変化の特徴より、動作制御過程における認知的情報処理過程の関与についての検討結果を発表した。
14	大学駅伝選手を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトの事例報告	共	2008.12.00	第21回 日本トレーニング科学学会大会、大東文化大学東松山キャンパス	只隈伸也、川本竜史、勝又宏、宮城修、田中博史、大橋二郎、琉子友男 2006年~2007年にかけて実施した大学駅伝チームにたいするスポーツ科学的サポートの実施内容および、選手のトレーニングやコンディショニングに対する効果について事例報告を行った。
15	ジュニア期の動作コントロール: 意味と意義	単	2009.01.23	太田市ジュニアスポーツ育成事業公開講座	スポーツ指導者を対象に発育発達の過程における少年期におけるスポーツの練習には、スキル獲得・動作習熟のための運動要素を取り入れることが必要であるという点について、運動制御・学習の分野における知見を基に講義を行った。

III 学会等および社会における主な活動

1	1993.03.00 ~ 現在	日本スポーツバイオメカニクス学会会員
2	1993.03.00 ~ 現在	日本スポーツ方法学会会員
3	1993.03.00 ~ 現在	日本体育学会会員

4	1995.11.00	～	現在	日本体力医学会会員
5	1997.11.00	～	現在	North-American Society for the Psychology of Sports and Physical Activity (NASPSPA) 会員
6	2005.10.00	～	現在	児童スキー研究会会員
7	2008.04.00	～	現在	Society for Neuroscience 会員

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	准教授	氏名	只限 伸也	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2004.05.00	平成 16 年度より大東文化大学総合教育科目必修科目の「総合体育」を担当している。この科目は実技と講義を併用する授業形態であるが、「競技における精神性の高さ」をテーマ行った講義において、この授業で用いた「ただ一撃にかける」という剣道を扱ったビデオに対し、事後のアンケートにおいて学生から「教員の熱意がある。」「教材が適切であった。」などの評価をうけた。					
2) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2004.06.00	平成 16 年 6 月に実施した総合体育の授業内容に関するアンケート調査結果では、すでに行った栄養に関する講義と性感染症に関する講義について、「関心を持って聞くことができた」、「役立つ内容であった」「新しい知識を得た」の項目で、それぞれ 84.4% (栄養に関する講義:「新しい知識を得た」の項目) から 93.9% (性感染症に関する講義:「関心を持って聞くことができた」の項目) の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生の自主性を重んじながらも、自律性を育てるような指導が行われていることが確認されている。					
3) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2004.12.00	平成 16 年 12 月に実施した総合体育の授業内容に関するアンケート調査結果では、「関心を持って聞くことができた」、「役立つ内容であった」「新しい知識を得た」の項目で、それぞれ 91.4% (栄養に関する講義:「新しい知識を得た」の項目) から 91.9% (「関心を持って聞くことができた」の項目) の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生に満足感を与えるような指導が行われていることが確認されている。					
4) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2005.05.00	平成 17 年 5 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査結果では、95%以上の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生の自主性を重んじながら、満足感を与えるような指導が行われていることが確認されている。					
5) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2005.12.00	平成 17 年 12 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査結果では、92%以上の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生の自主性を重んじながら、満足感を与えるような指導が行われていることが確認されている。					
6) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2006.05.00	平成 18 年 5 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査結果では、96%以上の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生の自主性を重んじながら、満足感を与えるような指導が行われていることが確認されている。					
7) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2006.12.00	平成 18 年 12 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査結果では、93%以上の学生から肯定的な評価を得ている。また、このアンケート調査では実技面に関する評価項目はないが、学生の自主性を重んじながら、満足感を与えるような指導が行われていることが確認されている。					
8) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2007.05.00	平成 19 年 5 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査 (満足度等) の結果では、学生から 5 段階評価で 4.9 以上の高評価を得ている。					
9) 「総合体育」のレポートおよびアンケートによる学生の評価	2007.12.00	平成 19 年 5 月に実施した総合体育および専門科目・陸上運動の授業内容に関するアンケート調査 (満足度等) の結果では、学生から 5 段階評価で 4.9 以上の高評価を得ている。					

10) 大東文化大学授業評価	2008.05.00	平成 20 年 5 月に実施した総合体育 A の授業内容に関するアンケート調査（満足度等）の結果では、学生から 5 段階評価で 4.8 以上の高評価を得ている。
11) 大東文化大学授業評価	2008.05.00	平成 20 年 5 月に実施した専門科目・陸上運動 A の授業内容に関するアンケート調査（満足度等）の結果では、学生から 5 段階評価で 4.9 以上の高評価を得ている。
12) 第 17 回高坂丘陵地区 ふれあい体育祭 ジョギング教室	2008.10.00	東松山キャンパスに近い高坂ニュータウンにおいて実施されたふれあい体育祭において陸上競技部の学生参加の下、ジョギング教室を開き地域の方との交流を図った。
13) 第 17 回高坂丘陵地区 ふれあい体育祭 体力測定	2008.10.00	東松山キャンパスに近い高坂ニュータウンにおいて実施されたふれあい体育祭においてトレーニング演習の授業を履修している学生参加の下、体力測定を実施し地域の方との交流を図った。測定項目は血圧・体脂肪率・握力等 12 項目にわたり、トレーニング演習の学生にとっては非常に有意義な授業でもあった。
14) 鳩山ニュータウン『筋力 UP! 高齢者トレーニング教室』	2008.11.00	東松山キャンパスに近い鳩山ニュータウンにおいて高齢者向けのトレーニング教室を全 8 回にわたり開催した。第 1 回目に体力測定を行い、その結果に基づきトレーニング処方を行った。この教室にはトレーニング演習を履修した学生も参加し実際に体力測定やトレーニング指導に携わるという実践的な授業でもあった。
15) 大東文化大学授業評価	2008.12.00	平成 20 年 12 月に実施した専門科目・陸上運動 B の授業内容に関するアンケート調査（満足度等）の結果では、学生から 5 段階評価で 4.9 以上の高評価を得ている。
16) 大東文化大学授業評価	2008.12.00	平成 20 年 12 月に実施した総合体育 B の授業内容に関するアンケート調査（満足度等）の結果では、学生から 5 段階評価で 4.7 以上の高評価を得ている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
1) 作成した教科書、教材大東文化大学保健体育編「ガイドブック」	2003.00.00	平成 15 年～現在に至る。健康・スポーツ科学に関する知識の重要な部分を抜粋し「ガイドブック」として、大東文化大学の新生入生全員に配布している。平成 16 年度版では、新任講師（非常勤）として、新たな資料提供をした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 九州高校選抜合同合宿研修会トレーニング学・コーチング学講師	2005.03.00	2005 年 3 月～現在。長崎県諫早市で開催されている九州高校選抜合同合宿において参加校の教員向けに開かれている研修会においてトレーニング学・コーチング学についての講師を 2005 年 3 月から引き受けている。
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) ランニング教室講師としての実績	1999.00.00	平成 11 年～現在 クレーマージャパン主催の陸上教室で中高生およびその指導者を対象に基礎体力、基礎技術の向上とともにスポーツを通じての人間形成について「長距離ブロック」の講師として講演した。
2) 全国都道府県対校男子駅伝埼玉県チーム支援コーチ	1999.01.00	平成 11 年 1 月～現在に至る。全国都道府県対校男子駅伝
3) SAQ トレーニング陸上競技長距離トレーニングアドバイザー	1999.04.00	平成 11 年 4 月～現在 日本 SAQ 協会主催のトレーニング教室において、長距離トレーニングアドバイザーとして協力している。
4) スポーツ栄養学講座講師としての実績	2002.00.00	平成 14 年～現在 女子栄養大学スポーツ栄養学講座の外部講師として、大東文化大学陸上競技部の箱根駅伝の取り組み方を例に「スポーツと栄養」について講義した。
5) 大東文化大学父兄会総会記念講演	2004.07.00	横浜において開催された、父兄会総会において「感覚を失いつつある世の中で一忘れないで豊かな自分を育てること！」というテーマで参加者 100 名を対象に記念講演を行なった。
6) 感覚を失いつつある世の中で一忘れないで豊かな自分を育てること！	2004.07.00	大東文化大学父兄会会報第 43 号 2～3 面 試合はどのスポーツにおいても大切な段階であるがそれが全てではない。本来スポーツに向かわせる欲求は非常に高次の自己実現の欲求であると考えられる。その欲求実現には動機付けの強さが必要になる。動機付けの強さにはメンタル的なものも強く関係しているという事を父兄会会報の中で述べた。

7) テレビ、ラジオ解説者としての実績	2004.08.00	アテネオリンピック 陸上競技 NHK BSハイビジョン放送において、スポーツ科学的な視点から解説する予定である。大会期間中8月20日～30日のうち長距離、マラソン種目を担当。
8) 大東大只限監督のランニング栄養学講座	2004.09.00	クリール 9月号～ (株) ベースボールマガジン社 ベースボールマガジン社のランナー向け雑誌「クリール」において栄養学・トレーニング学について9カ月にわたり連載した。読者より好意的な投書が多数寄せられた。
9) 見果てぬ夢を RUN-道を切り開き続けるー	2004.12.00	一箱根駅伝ー熱き思いを胸にタスキがつないだ 80年間 P52～P55 (株) ベースボールマガジン社 共に生い立ちから社会人を経て、箱根へのチャレンジ、その後までを4ページにわたって特集で紹介される。その他の紹介者は瀬古俊彦、谷口浩美ら。
10) 大東医学技術専門学校柔道整復科シンポジウム「大東医専柔道整復科の現状と将来展望」	2005.04.00	講演及びパネリスト 柔道整復師を取り巻く現状と展望を理論的まとめ解り易く講演していった。
11) 特集/乳酸は「味方」だ！スポーツ現場での乳酸活	2005.04.00	月刊トレーニングジャーナル 4月号 P22～P25(有)ブックハウス・エイチディ 月刊トレーニングジャーナルにおいて、血中乳酸値の意味・トレーニングへの利用方法等専門的な立場から意見を述べた。
12) ランニング教室講師としての実績	2005.11.00	2005年～現在に至る。上尾シティマラソン前日のランニング教室講師として、約500名の受講者を集め、翌日の大会に向けた実践的な指導を行っている。
13) 大和病院主催公開講座	2005.11.00	板橋区大和病院主催の「健康科学のススメ」と言う公開講座において、参加者役50名を対象に講演及びパネルディスカッションのパネリストをつとめた。
14) 蘇れ強い大東 伊勢路の激走がチームを変えた	2005.12.00	月刊陸上競技1月号増刊 P40、P96～P97 陸上競技社/講談社 2年続けてシード権を逃した大東大。しかし、チームに漂っていた「負の空気」を払拭する激走があった。伊勢路のアンカーで3チームをかわし、土壇場でシード権を獲得したエース。大東復活に向けてのプランを監督として語った。チーム・選手紹介。
15) ランニング教室講師としての実績	2006.03.00	上尾市主催ランニング教室 埼玉県上尾市立上尾西中学校において、小学校低学年から高齢者まで約150名の受講生を集め陸上教室を開催した。このランニング教室には養護学校の生徒も参加しており、健常者との触れ合いの場を提供することにもなり関係者に非常に良い評価を頂いた。ランニング教室終了後、参加者に対して約90分の講演を行った。
16) 激戦を戦った監督たちがホンネを語る 箱根をめぐる監督・選手の涙と笑顔	2006.04.00	ランナーズ4月号 P30～P33 (株)ランナーズ 国民的イベントとなった箱根駅伝。テレビ中継されるのは往路・復路の2日間だけだが、そこへ至るまでの1年には、監督や選手たちのさまざまなドラマがある。出場校のうち3校の監督の一人として学生を指導する面白さと難しさを本音で語った。
17) 箱根町町制 50周年健康都市宣言記念 健康スポーツフェスティバル	2006.09.00	神奈川県箱根町において開催された「箱根町町制 50周年健康都市宣言記念健康スポーツフェスティバル」において、「箱根駅伝・襷をつなぐ友情と責任」(箱根駅伝の思い出など)という演題で町民約700人を対象にパネルディスカッションを行い、コーディネーターを勤めた。
18) 風が強く吹いている	2006.09.00	風が強く吹いている 三浦しおん (株)新潮社 直木賞作家三浦しおんが書き下ろした長編小説「風が強く吹いている」において陸上競技の専門的描写において、細部にわたり描写指導を行った。
19) 箱根駅伝 2007 いつも心に「大東」を	2006.12.00	陸上競技マガジン 12月号増刊 P40～41 (株) ベースボールマガジン社 ここ5～6年だいがくえきでん、ことに箱根駅伝を取り巻く状況が激変してきた。しかし、大学駅伝を取り巻く空気がどう変わろうと大東大は大東大だ。そう信じて自分の道を行くことがきっと最善の方法であると、チームを紹介した。
20) 大東医学技術専門学校柔道整復科シンポジウム「柔道整復師とスポーツ障害」	2007.06.00	「柔道整復師とスポーツ障害」というテーマで約2時間の講演・質疑応答を行った。
21) 「知恵を出す」ということ	2007.12.00	大東文化大学父兄会会報 「親の躰」「学校での躰」「地域の躰」があって初めて教育が成り立つ。チーム作りも同じように様々な要因によって成り立っている。「知恵を出すことが非常に重要である」と述べた。
22) 栄光をつかめ 安定したキャプテンの存在がチームを象徴	2007.12.00	陸上競技マガジン 12月号増刊 P37 (株) ベースボールマガジン社 「今回は6～13、4位までは大きな力の差はないと思っている」とチーム力を分析しながら、レース展開の予想等を行っている。「シード権を目指す」という目標についての解説等を述べた。

23) 取り戻せ、ライトグリーンの輝き	2007.12.00	月間陸上競技1月号増刊 P50～P51、P104～P105 陸上競技社/講談社 「今までの経験からして、主将が強い時は良い成績が残ることが多いんです。そういう意味で今回は勝負できると思います。」と現状分析とともに、各選手の分析を述べた。チーム・選手紹介。
24) 「大東文化大学・只限監督が語る真の姿」 “山の 大東の向こう側”	2007.12.00	一箱根駅伝一擲の記憶 P70～P77 (株) ベースボールマガジン社 「山を制する者が箱根を制す」といわれる。上りの5区と下りの6区は最もタイム差が出る区間だ。ここで無類の強さを誇ったのが大東大で、いつしか山の東と呼ばれるようになった。しかし、大東文化大学陸上競技部の本質はその先にある。大東文化大学陸上競技部の歴史を振り返り、その紹介と共に今後のビジョンを述べた。
25) 第8章 只限選手と高橋選手	2007.12.00	「箱根駅伝」不可能に望んだ男たち 原島由美子著 (株) ヴィレッジブックス 「必ずたどり着いてみせる。仲間を信じて。かかわった誰もが涙ぐみながら思い出を語るといふ、伝統の「箱根駅伝」。往復 214 キロ、12 時間にも及ぶそのレース。しかし彼らには、想像を絶する過酷な条件が待っていた。」著書作成にあたっての協力・アドバイザー。
26) 第 33 回国営武蔵丘陵森林公園完走マラソン	2008.02.00	埼玉県滑川町にある国営武蔵丘陵森林公園において開催された第 33 回完走マラソンにおいて女子バレー元オリンピック代表吉原さんとクロスカントリーレースやマラソンについてのトークショーを行った。
27) 中国・北京等における幼稚園・小学校訪問 日中の 子供の現況についてのディスカッション	2008.07.00	2008 年 7 月 11 月と中国にわたり各地の幼稚園・小学校を訪問し日中の子供の体力・生活習慣の現状について関係者と懇談を行った。日中の交流を図れたと共に帰国後、東松山キャンパスに近い高坂小学校において中国の現状を報告し、地域との情報交換を行う事も出来た。来年も中国訪問は継続する予定である。

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 テキストブック 介護予防運動指導士～高齢者の体力を維持・向上させるプログラム	共著	2007.03.00	株式会社ミネルヴァ書房 P109～P119	社会福祉基礎構造改革は、サービスを提供する側が中心ではなく、サービスを受ける利用者・住民を主体にして、住民自らサービスを選択し、決定するというシステムに切り替えるという大きな転換点にある。元気な高齢者でいるために介護予防従事者向けの指導用テキスト「第9章高齢者と栄養」を担当した。◎小野晃、◎琉子友男、勝又宏、大竹一史、川村隆、亀井明子、只限伸也、森浩寿
論文				
1 「大学体育自己点検・評価報告書」に見る本学保健体育教育の評価とスポーツ・健康科学部発足に伴う問題解決の方向性について A review of physical and health education in daito bunka university in the viewpoint of faculty development	共	2006.03.00	大東文化大学紀要第 44 号(社会科学)、209-228	文部科学省の学校基本調査によれば、大学への進学率は 47.3%で過去最高となっている。大学の大量化、ユニバーサル化が指摘されており、大学においては「研究と教育の両立」から、「教育」のほうへ教員の労力を移さざるを得ない状況になっている。このような背景から、大学における教育内容を含めた、大学に対する他者評価、自己評価が行われるようになってきており、こうした大学全体の評価に加えて、特定分野に限定した第三者評価も行われるようになった。本学は平成 16 年度大学体育 FD 推進校の表彰を受けたが、本稿ではその表彰の基準となった FD 報告書の内容を一部紹介することにより今後いかなる改善が期待されるかを考察した。◎兵頭圭介、勝又宏、川本竜史、只限伸也、田中博史、中間和男、中村正雄、宮城修
その他				
1 How college student are satisfied with the contents in PE classes? From the results of four-year investigations.	共	2007.08.02	THE 12th EASESS CONFERENCE August 1st-3rd,2007,shanghai,China	本学の総合体育における過去 5 年間の体力測定の結果をもとに、学生の体力の変遷を考察し、授業において今後いかなる対応が必要かということ、上海の学会においてポスター発表を行った。◎兵頭圭介、高橋進、只限伸也、勝又宏、田中博史、鈴木明

2	体育実技に対する学生の満足度について－4年間のアンケート調査の結果から－	共	2007.09.00	日本体育学会	青森で開催された日本体育学会において、大東文化大学総合体育の現状について共同発表を行った。◎兵頭圭介、只隈伸也
3	風が強く吹いているコミック	共	2008.03.00	風が強く吹いている コミック版 海野そら太 (株集英社)	2008年3月～現在に至る。直木賞作家三浦しおんが書き下ろした長編小説「風が強く吹いている」が雑誌に連載されることになり、陸上競技の専門的描写において、漫画家海野そら太に細部にわたり描写指導を行った。
4	Relationship between functional reach and muscle strength	共	2008.08.00	THE 13th ANNUAL CONGRESS East Asia sport Exercise Science Society July 31st, 2008 to August 2nd, 2008, yeungju, Korea	体力測定においては様々な種目において相関関係がみられるが、測定項目の中の一つファンクショナルリーチにおける筋力や柔軟性との相関関係についての研究を韓国で開催された国際学会においてポスター発表を行った。◎琉子友男、朴美紀、鈴木明、田中博史、兵頭圭介、只隈伸也、高橋進、勝又宏
5	彼女の知らない彼女 (単行本)	共	2008.11.00	彼女の知らない彼女 (単行本) 里見蘭著 新潮社	作家里見蘭が書き下ろし、第20回日本ファンタジーノベル大賞を受賞した「彼女の知らない彼女」の出版にあたり、陸上競技の専門的描写において、細部にわたり描写指導を行った。
6	大学駅伝選手を対象としたスポーツ科学プロジェクトの事例報告	共	2008.12.00	第21回日本トレーニング科学会大会 2008年12月20、21日 大東文化大学東松山キャンパス	大東文化大学は42年連続箱根駅伝出場の実績を誇るが、継続的に成果を挙げる上では、総合的視点に立って選手育成に取組む必要性が高まっている。我々は2006～2007年にかけて大東文化大学陸上競技部員を対象としたスポーツ科学サポートプロジェクトを実施し報告発表を行った。この発表により第21回日本トレーニング科学会大会において最優秀賞であるトレーニング科学研究賞を受賞した。◎只隈伸也、川本竜史、勝又宏、宮城修、田中博史、大橋二郎、琉子友男
7	シンポジウム『箱根駅伝とスポーツ科学』		2008.12.00	第21回日本トレーニング科学会大会 2008年12月20、21日	2008年12月20、21日に開催された第21回日本トレーニング科学会大会において『箱根駅伝とスポーツ科学』という約400名参加のシンポジウムのパネリストとして『箱根駅伝の裏側に見えるもの』という題名で発表及びディスカッションを行った。

III 学会等および社会における主な活動

1	1989.00.00			東京箱根間往復大学駅伝競争日本テレビ解説
2	1999.00.00	～	現在	クレーマージャパン陸上教室長距離ブロック講師
3	2000.00.00	～	現在	びわ湖毎日マラソンNHKテレビ解説
4	2002.00.00	～	現在	女子栄養大学スポーツ栄養学講座外部講師
5	2003.00.00			全国柔道整復学校教員研修会講師「SPORTS NUTRITION」
6	2003.00.00			板橋区高齢者グリーンカレッジ講師「禊の現場」
7	2004.05.00	～	現在	日本体力医学会会員
8	2004.08.00			アテネオリンピック陸上競技NHKテレビ解説
9	2004.09.00			特定非営利活動法人日本SAQ協会 (Nippon Institute of Speed, Agility and Quickness Association :NISAQ) テクニカルインストラクター
10	2004.10.00	～	現在	上尾シティマラソンアドバイザー
11	2004.11.00	～	現在	熊谷さくらマラソンアドバイザー
12	2005.11.00	～	現在	上尾シティマラソン ランニング教室講師
13	2007.04.00	～	現在	関東学生陸上競技連盟強化委員
14	2007.04.00	～	現在	大東文化大学 オープンカレッジ講師

(表 24)

所属	スポーツ・健康科学部健康科学科	職名	講師	氏名	築瀬 澄乃	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
1) 生体試料分析学A		2005.04.00	(2005年4月～現在) 臨床検査技師国家試験取得のための専門必修科目である一般検査学の講義 (実際の検査結果を多く取り入れた)			
2) 大東文化大学授業評価		2005.12.00	大東文化大学授業評価 (平成17年12月実施) において、高い評価を得た。学生による自由コメント欄に「尊敬しています」と記載された。			
3) 形態学C		2006.04.00	(2006年4月～現在) 臨床検査技師国家試験取得のための専門必修科目である医動物学の講義 (実際の検査結果を多く取り入れた)			
4) 生体試料分析学D		2006.04.00	(2006年4月～現在) 臨床検査技師国家試験取得のための専門必修科目である一般検査学実習、データの取扱い法、レポートの書き方			
5) 形態学F		2006.09.00	(2006年9月～現在) 臨床検査技師国家試験取得のための専門必修科目である医動物学実習、光学顕微鏡の操作法、レポートの書き方			
6) 卒業研究演習		2007.09.00	(2007年9月～現在) 科学論文の抄読会 (主に英文)			
7) 卒業研究		2008.09.00	(2008年9月～現在) 線虫 <i>C. elegans</i> を用いた老化の分子機構の解明。			
8) 基礎実習		2008.09.00	(2008年9月～現在) 化学・生物学系実験における基礎的な実験法・操作法の修得。			
9) 化学演習		2009.04.00	化学演習において、演習内容を効果的に学生に習得させる為に授業ごとにほぼ毎回小テストを実施。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
1) 「生体試料分析学D実習テキスト」		2006.04.00	(2006年4月～現在) 採血の手技、検体の取扱い方、採尿の手技、尿定性検査、尿定量検査、尿細管機能検査、糞便検査、胃液検査、脳脊髄液検査、穿刺液検査			
2) 「形態学F実習テキスト」		2006.09.00	(2006年9月～現在) 顕微鏡の使用法、原虫類の観察、線虫類の観察、MGL法による標本作製と観察、吸虫類の観察、条虫類および節足動物の観察			
3) 「基礎実習テキスト」		2008.09.00	化学・生物学系実験の基本的実験法と操作法。			
4) 「化学演習テキスト」		2009.02.00	(2009年2月～現在) 化学・生物学系実験の基本的実験法と操作法、データの処理法。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 不審死した野鳥の剖検		2004.05.00	人畜共通のウイルスおよび農薬等の被害調査の目的で、不審死した野鳥の剖検を行った。			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		

著書				
論文				
1 広範囲血液・尿化学検査免疫学検査—その数値をどう読むか—〔第6版〕	共著	2004.00.00	日本臨床 62 : 206-209	(2) IV 生化学的検査〔2〕B ビタミン関係ユビキノン(コエンザイムQ)。
2 The p38 signal transduction pathway participates in the oxidative stress-mediated translocation of DAF-16 to <i>Caenorhabditis elegans</i> nuclei.	共著	2005.00.00	Mechanisms of Ageing & Development 126: 642-647	<i>C. elegans</i> における p38 関与 sek-1 (MAPKK) の変異体では、DAF-16 転写因子の酸化ストレス依存性核局在に異常があった。©M. Kondo, S. Yanase, T. Ishii, P.S. Hartman, K. Matsumoto, N. Ishii
3 Effect of oxidative stress on translocation of DAF-16 in oxygen-sensitive mutants, <i>mev-1</i> and <i>gas-1</i> of <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2005.00.00	Mechanisms of Ageing & Development 126: 637-641	DAF-16 転写因子の核移行は、 <i>mev-1</i> や <i>gas-1</i> といった短寿命変異体で顕著で、CoQ10 を添加することにより、核移行が弱まった。©M. Kondo, N. Senoo-Matsuda, S. Yanase, T. Ishii, P.S. Hartman, N. Ishii
4 Effects of γ -ray irradiation on olfactory adaptation to benzaldehyde in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2007.00.00	Biological Sciences in Space 21: 117-120	<i>C. elegans</i> における嗅覚反応において、 γ 線による適応応答反応が確認された。©T. Sakashita, N. Hamada, M. Suzuki, D. D. Ikeda, S. Yanase, N. Ishii, Y. Kobayashi
5 Modulatory effect of ionizing radiation on food-NaCl associative learning: the role of γ subunit of G protein in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2007.00.00	The FASEB Journal 22: 713-720	<i>C. elegans</i> における food-NaCl 連合学習において、電離放射線は調節体として作用し、その働きには G γ が関与している。©T. Sakashita, N. Hamada, D. D. Ikeda, S. Yanase, M. Suzuki, N. Ishii, Y. Kobayashi
6 Hyperoxia exposure induced hormesis decreases mitochondrial superoxide radical levels via Ins/IGF-1 signaling pathway in a long-lived <i>age-1</i> mutant of <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2008.00.00	Journal of Radiation Research : 49 : 211-218	<i>C. elegans</i> の長寿命変異体 <i>age-1</i> では、高濃度酸素暴露によるホルミシス誘発には、インシュリン様信号伝達経路を介したミトコンドリア機能が関与していることを示した。©S. Yanase, N. Ishii
7 Locomotion-learning behavior relationship in <i>Caenorhabditis elegans</i> following γ -ray irradiation.	共著	2008.00.00	Journal of Radiation Research : 49 : 285-291	<i>C. elegans</i> における food-NaCl 連合学習において、 γ 線照射は行動を抑制するが、学習能力には影響を与えないことを明らかにした。©T. Sakashita, N. Hamada, D. D. Ikeda, M. Suzuki, S. Yanase, N. Ishii, Y. Kobayashi
8 SOD-1 deletions in <i>Caenorhabditis elegans</i> alter the localization of intracellular ROS and show molecular compensation.	共著	2009.00.00	Journals of Gerontology: 64A : 530-539	<i>C. elegans</i> の <i>sod-1</i> 欠失変異株では、ミトコンドリアおよび細胞質での ROS 産生が増加しており、代替的に <i>sod-5</i> 遺伝子の発現増幅が見られた。©S. Yanase, A. Onodera, P. Tedesco, T.E. Johnson, N. Ishii

9	Effects of ionizing radiation on locomotory behavior and mechanosensation in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2009.00.00	Journal of Radiation Research : 50 : 119-125	γ 線照射由来の H_2O_2 は、 <i>C. elegans</i> の運動率を低下させるが、そのしくみは神経伝達物質ドーパミンを酸化させることによるものではないかと推測した。◎M.Suzuki, T.Sakashita, S.Yanase, M.Kikuchi, H.Ohba, A.Higashitani, N.Hamada, T.Funayama, K.Fukamoto, T.Tsuji, Y.Kobayashi
10	sod-5 遺伝子は、線虫 <i>C.elegans</i> における DAF-16 転写因子の標的遺伝子の一つである。	共著	2009.00.00	大東文化大学紀要 47 : 9-14	<i>C.elegans</i> の sod-5 遺伝子の非翻訳領域上流に DBE が見付き、DAF-16 転写因子の標的遺伝子候補の可能性が示唆された。◎梁瀬澄乃、高橋義裕、須賀直博、石井直明
その他					
1	Characterization of phenotypes for aging in Cu/Zn SOD deletion mutants.	共	2004.06.30	2004 East Asia <i>C. elegans</i> Meeting (淡路島)	<i>C. elegans</i> における Cu/Zn 型 SOD の欠失変異株の表現型解析で、2 種の変異体共に野生株より短寿命であった。S. Yanase, A. Onodera, N. Ishii
2	放射線ホルミシスによる寿命延長効果に関わるインシュリン様信号伝達経路の標的遺伝子の探索。	共	2004.11.26	第 47 回日本放射線影響学会大会 (長崎)	daf-16(m26)株の遺伝子発現量を age-1 株と cDNA マイクロアレイによって比較し、DAF-16 結合エレメントを上流にもつ遺伝子を検出した。築瀬澄乃、小原雄治、上杉ひろ子、石井直明
3	線虫 Cu/Zn 型スーパーオキシドディスムターゼ遺伝子欠失変異株の表現型解析。	共	2004.12.10	第 27 回日本分子生物学会年会 (神戸)	Cu/Zn 型 SOD 欠失変異株 2 種は、野生株より短寿命であり、野生型 sod-1 遺伝子を発現させたところ、寿命の表現型回復が見られた。築瀬澄乃、小野寺章、石井直明
4	Characterization of phenotypes for aging in Cu/Zn SOD deletion mutants.	共	2005.06.27	15th International <i>C. elegans</i> Meeting (L.A., CA)	<i>C. elegans</i> での Cu/Zn 型 SOD 欠失変異株 2 種は、野生株より短寿命であり、野生型 sod-1 遺伝子導入により寿命回復が見られた。S. Yanase, A. Onodera, N. Ishii
5	OSM-7 localized in cuticles affects resistance to environmental stress.	共	2005.06.27	15th International <i>C. elegans</i> Meeting (L.A., CA)	<i>C. elegans</i> における塩ストレス耐性株である osm-7 は、パラコート耐性で酸素感受性の表現型を示した。K. Mase, A. Onodera, S. Yanase, Y. Ohshima, N. Ishii, T. Ishihara, M. Koga
6	寿命延長を誘発する酸素ラジカルによるホルミシス効果は、生体内スーパーオキシドを減少させる。	共	2005.11.16	日本放射線影響学会第 48 回大会 (広島)	<i>C. elegans</i> における高濃度酸素の短時間暴露による寿命延長効果は、ミトコンドリア内 O_2^- の発存量減少に起因すると推測された。築瀬澄乃、石井直明
7	線虫 <i>C. elegans</i> における高浸透圧ストレスや酸化ストレスに対する応答にクチクラ層の構成成分 OSM-7 が関与する。	共	2005.12.08	第 28 回日本分子生物学会年会 (福岡)	<i>C. elegans</i> の分泌蛋白をコードする osm-7 遺伝子変異株は、酸素感受性であるが、パラコート耐性という表現型を示した。間瀬慶子、小野寺章、築瀬澄乃、安藤恵子、三谷昌平、大島靖美、桂勲、石井直明、石原健、古賀誠人
8	線虫 Cu/Zn 型 SOD 遺伝子欠失変異株の寿命に関する表現型解析。	共	2005.12.08	第 28 回日本分子生物学会年会 (福岡)	<i>C. elegans</i> における sod-1 遺伝子欠失変異株では、生体内スーパーオキシド発存量の上昇が認められた。築瀬澄乃、小野寺章、石井直明
9	A cuticle component OSM-7 regulates responses to osmotic and oxidative stresses in <i>C. elegans</i> .	共	2006.06.20	20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress (Kyoto, Japan)	<i>C. elegans</i> の分泌蛋白をコードする osm-7 遺伝子変異株は、酸素感受性であるが、パラコート耐性という表現型を示した。K. Mase, A. Onodera, S. Yanase, K. Gengyo-Ando, S. Mitani, Y. Ohshima, I. Katsura, N. Ishii, T. Ishihara, M. Koga
10	寿命延長を誘発するホルミシス効果は、ミトコンドリアにおけるスーパーオキシドラジカル産生量を低下させる。	共	2006.09.07	日本放射線影響学会第 49 回大会 (札幌)	<i>C. elegans</i> の長寿命変異体 age-1 におけるホルミシス効果による寿命延長には、ミトコンドリアでの O_2^- 産生量の低下が関与することが推測された。築瀬澄乃、石井直明

11	SOD-1 contributes to anti-aging by maintaining the balance of localization of intracellular ROS in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共	2006.11.17	2006 East Asia <i>C. elegans</i> Meeting (Seoul, Korea)	<i>C. elegans</i> の sod-1 欠変異株では、細胞質だけでなくミトコンドリアからの O ₂ -産生量が増加していた。S. Yanase, A. Onodera, N. Ishii
12	Hormesis-induced lifespan extension decreases mitochondrial superoxide radical levels via Ins/IGF-1 signaling pathway in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共	2007.06.30	16 th International <i>C. elegans</i> Meeting (L.A., CA)	<i>C. elegans</i> の長寿命変異株でのホルミシスによる寿命延長効果に、インシュリン様信号伝達経路活性化が役立っている可能性が示唆された。S. Yanase, N. Ishii
13	Xray irradiation mediated hormesis of post dauer life span.	共著	2007.06.30	16th International <i>C. elegans</i> Meeting (L.A., CA)	<i>C. elegans</i> における X 線による適応応答の一つとして、dauer 後の寿命延長が認められ、その反応性は若い虫ほどよいことが判明した。◎A.Onodera, S.Yanase, T.Ishii, K.Yasuda, M.Miyazawa, P.S.Hartman, N.Ishii
14	線虫のベンズアルデヒド嗅覚順応に対する γ 線照射の影響。	共	2007.09.27	日本宇宙生物科学会第 21 回大会(東京)	<i>C. elegans</i> の嗅覚順応を指標とした学習反応に対して、低線量 γ 線照射による学習効果が認められた。坂下哲哉、浜田信行、池田大祐、築瀬澄乃、鈴木芳代、石井直明、小林泰彦
15	重イオンマイクロビームを利用したモデル生物・線虫の放射線生物研究への取り組み。	共	2007.11.14	日本放射線影響学会第 50 回大会(千葉)	<i>C. elegans</i> の food-NaCl 連合学習に与えるマイクロビームを利用した放射線局所照射の効果について紹介。坂下哲哉、鈴木芳代、浜田信行、池田大祐、深本花菜、横田裕一郎、舟山知夫、築瀬澄乃、東谷篤志、石井直明、小林泰彦
16	線虫の学習行動と放射線影響。	共	2007.11.29	第 12 回放射線プロセスシンポジウム(ポスターセッション)(東京)	<i>C. elegans</i> の (学習) 行動に対して、放射線が受容体等に特異的に作用する可能性が示唆された。坂下哲哉、鈴木芳代、浜田信行、池田大祐、築瀬澄乃、石井直明、小林泰彦
17	線虫 <i>C. elegans</i> における SOD-1 欠失の細胞内 ROS 局在性への分子的寄与。	共	2007.12.14	第 30 回日本分子生物学会年会・第 80 回日本生化学会大会合同大会(横浜)	<i>C. elegans</i> の sod-1 欠失変異体において、細胞質だけではなく、ミトコンドリアにおけるスーパーオキシド産生量にも影響することが判明した。築瀬澄乃、小野寺章、P. Tedesco, T.E. Johnson、石井直明
18	Hyperoxia exposure induced hormesis decreases mitochondrial superoxide radical levels via Ins/IGF-1 signaling pathway in a long-lived age-1 mutant of <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2008.04.19	The 3rd East Asia <i>C. elegans</i> Meeting (Shanghai, China)	<i>C. elegans</i> の長寿命変異体でのエルミシスによる寿命延長効果に、インシュリン様信号伝達経路を通じたミトコンドリア ROS 産生制御が役立っている可能性が示唆された。◎ S.Yanase, N.Ishii
19	sod-5; A target gene of DAF-16 Transcription factor in <i>Caenorhabditis elegans</i> .	共著	2008.08.05	Aging, Stress, Pathogenesis, and Heterochrony <i>C. elegans</i> Topic Meeting #4 (Madison,WI)	<i>C. elegans</i> における sod-5 遺伝子は、インシュリン様信号伝達経路による発現制御を受けているらしいことを発見した。◎S.Yanase, Y.Takahashi, N.Suga, N.Ishii
20	sod-5 遺伝子は線虫 <i>C.elegans</i> における DAF-16 転写因子の標的遺伝子の一つである。	共著	2008.12.10	第 31 回日本分子生物学会年会・第 81 回日本生化学会大会合同大会 (神戸)	<i>C. elegans</i> における sod-5 遺伝子は、インシュリン様信号伝達経路による発現制御を受けており、さらに他の制御機構の存在が示唆された。◎梁瀬澄乃、高橋義裕、須賀直博、P.Tedesco, T.E.Johnson、石井直明

III 学会等および社会における主な活動

1	1995.05.00	～	現在	日本分子生物学会正会員
2	1997.05.00	～	現在	日本基礎老化学会正会員
3	2000.06.00	～	現在	日本放射線影響学会正会員

4	2005.09.17	～	2005.09.24	砂漠植林ボランティア協会中国砂漠植林「喜びの森」第11回植林ボランティア参加
5	2006.06.00	～	2007.03.00	九州大学大学院理学府アドバイザーコミッティー
6	2007.06.00			OAS I S会NPO法人「足尾に緑を育てる会」植林ボランティア参加
7	2007.09.00			OAS I S会植林通信紙OAS I S第13号編集・製作
8	2008.02.00			CCC自然・文化創造工場赤城山「炭焼き釜」作り作業ボランティア参加

法務研究科

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	浅野 善治	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 国際基督教大学授業評価			2008.07.00	国際基督教大学授業評価 (2008年7月実施) において、高い評価を得た。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 論点整理と演習「憲法」	共	2006.03.00	敬文堂	事例から憲法の基本的論点を解説する基本書。第2部の第5章から第7章までを担当して執筆。			
2 実務行政訴訟法講義	共	2007.04.00	民事法研究会	理論と実務の架橋を意識し、行政訴訟法の論点を解説。第13章、憲法訴訟を担当して執筆。			
論文							
1 立法補佐体制の現状と問題点	単	2004.07.00	北大法学論集 55 巻 2 号 (北海道大学大学院法学研究科)	立法補佐体制の現状と問題点に対する憲法及び議会法の観点から分析したもの			
2 立法の過誤	単	2004.09.00	ジュリスト 1275 号 (有斐閣)	内閣提出法律案の過誤について解説したもの			
3 地方分権改革の今後とその中における地方税制のあり方	単	2005.01.00	税 60 巻 1 号 (ぎょうせい)	三位一体改革の今後と地方税制のあり方について解説したもの			
4 判例評釈 当選人の選挙犯罪による当選無効と議員の報酬請求権をめぐる事件 東京高裁平成 13 年 11 月 28 日判決	単	2005.03.00	自治研究 平成 17 年 3 月号 (第一法規)	行政事件判例についての評釈			
5 判例評釈 在日外国人公務員東京都管理職選考受験資格確認等請求事件上告審判決 最大判平成 17 年 1 月 26 日	単	2005.11.00	法律のひろば 58 巻 11 号 (ぎょうせい)	表記判決についての判例評釈。			

6	提言 個人所得課税制度の課題とあり方 地方の責任で個人住民税システムを決定するのが基本理念	単	2005.11.00	税 60 卷 11 号(ぎょうせい)	税源移譲後の個人住民税のあるべき姿に関する提言
7	国会の財政監督	単	2006.03.00	大東ロージャーナル 2 号 (大東文化大学法科大学院 法務学会)	国会の財政監督機能についてその基本的な考え方及びその機能を解説し、現状の問題点を明らかにする。
8	国政調査権 議会国政調査権の本質と限界	単	2006.06.00	議会政治研究 78 号(議会政治研究会)	国会の両院が有する国政調査権についてその基本的な考え方とそこから導き出される限界を考察。
9	法令公布の時期	単	2007.04.00	憲法判例百選Ⅱ (第 5 版) (有斐閣)	法令の公布が問題となった判例を取り上げ、法令の公布についての問題点を解説。
10	地方税法と税条例のあり方に関する今日的課題	単	2007.04.00	税 62 卷 4 号 (ぎょうせい)	地方分権が進展する中での税条例のあり方についての気泡的な考え方と現状の問題点を考察。
11	憲法改正の国会審議のあり方	単	2007.06.00	議会政治研究 82 号(議会政治研究会)	憲法改正に関する手続を定める法律が制定されたことに伴い、憲法改正に関する国会審議のあり方についての問題点を考察。
12		単	2007.10.00	比較憲法研究 18 号(比較憲法学会)	諸外国の議会における二院制についての比較考察の一環として、日本国憲法における二院制の基本的考え方を考察。
13	「日本国憲法における両院制 一つの考え方」	単	2007.10.00	比較憲法学会	諸外国の議会における二院制についての比較考察の一環として日本国憲法における両院制の基本的考え方を考察
14	「国政調査権の本質 一試論として」『慶應の法律学 公法 I 慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集』	単	2008.12.00	慶應義塾大学出版会	議院の国政調査権の日本国憲法上の位置付けについて考察
その他					
1	研修会	報告	2004.07.15	衆議院調査局法制執務研究会	法制執務並びに立法政策の企画及び立案に関する研修会
2	研修会	報告	2004.07.29	衆議院調査局法制執務研究会	法制執務並びに立法政策の企画及び立案に関する研修会
3	研修会	報告	2004.08.26	衆議院調査局法制執務研究会	法制執務並びに立法政策の企画及び立案に関する研修会
4	研究会	報告	2004.11.06	時事問題研究会	時事問題に関する研究会において立法政策の企画立案の実務に関し報告
5	特別講義	報告	2004.11.19	関東学院大学法学部法政策学科特別講義	関東学院大学法学部法政策学科法政策に関する講演会において立法政策の企画立案について特別講義
6	研究会	報告	2004.11.26	行政判例研究会	行政事件判例に関する研究会
7	研究会	報告	2006.02.00	政治議会研究会	国会改革のこれまでの経過と現状を考察し、国会改革のあり方に関する論点を報告。
8		報告	2006.10.00	比較憲法学会	各国の二院制をテーマとする研究会において日本国憲法の二院制の基本的考え方を報告。
9		報告	2006.11.00	法文化学会	法の担い手たちをテーマとする研究会において、法律の制定についての基本的な論点を報告。
10	「食の安全と国家の責任」		2008.12.00	「アジアにおける法律変革及び国際協力」シンポジウム発表	日中国際シンポジウムにおいて日本における食品安全確保に関する諸制度と支障事象における国家の責任について考察
III 学会等および社会における主な活動					
1	1996.10.00	～	現在	租税法学会会員	
2	1996.10.00	～	現在	日本租税理論学会会員	

3	1998.10.00	～	現在	日本公法学会会員
4	2004.04.00	～	現在	日本経営協会 自治体職員研修講師
5	2004.04.00	～	現在	北海道大学立法過程研究会会員
6	2004.08.00	～	現在	比較憲法学会会員
7	2005.09.00	～	現在	慶應法学会会員
8	2005.11.00	～	現在	日弁連法務研究財団 法科大学院認証評価評価員
9	2006.02.00	～	現在	実務公法学会会員
10	2006.10.00	～	現在	法と経済学会会員
11	2007.04.00	～	現在	日本建築士事務所協会連合会理事
12	2007.09.00	～	現在	全国市町村研修財団 市町村職員中央研修所講師
13	2009.03.00	～	現在	日本法政学会会員
14	2009.04.00	～	現在	全国都道府県議会議長会法制執務アドバイザー

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	井口 秀作	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) シラバスシステムを通じた双方向的授業		2007.00.00	2007 年度後期より、名古屋大学法科大学院の開発した電子シラバスシステムを通じた、授業を開始した。授業資料の配付、また、授業時間外の学修活動等に指示を行うとともに、起案練習としても活用している。				
2) 学生による授業評価アンケート		2007.00.00	2007 年担当科目の総合評価は、5 段階評価で、各科目 2 クラスで、下記のような評価を受けている。憲法Ⅱ：4.5、4.5 憲法演習：4.4、4.5 公法総合Ⅱ：4.4、4.9				
3) 学生による授業評価アンケート		2008.00.00	2008 年度担当科目の総合評価は、5 段階評価で、各科目 2 クラスで、下記のような評価を受けている。 憲法Ⅱ：4.5、4.7 憲法演習：4.6、4.4 公法総合Ⅱ：4.7、4.8				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 情報公開審査会・個人情報保護審査会委員			実務家教員についての特記事項。大東市及び四條畷市で情報公開審査会、個人情報保護審査会委員を務め、四條畷市では委員長に就任した				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 いまなぜ憲法改正国民投票法なのか	共編著	2006.03.25	蒼天社出版	憲法改正国民投票法案について、それが・なぜ・いま必要なのかについて批判的検討をするとともに、検討されている法案の内容についても批判的な検討を行った。「『国民投票派』のおかしさ」と「国会による発議とは」を分担総頁数 109 頁中 12 頁。(共編著者、浦田一郎、只野雅人、三輪隆) P39～50			
2 ここがヘンだよ日本の選挙	共著	2007.03.20	学習の友社	いわゆる「郵政選挙」に代表されるような、近年の選挙に対する違和感を出発点として、選挙制度や政治資金規正等の現状の問題を分析するものである。制定直前のいわゆる「国民投票法」の制度化の問題点を担当した。P121～145			
論文							
1 憲法改正国民投票制に関する覚え書き	単著	2005.03.11	『平和学論集Ⅲ』(大阪産業大学産業研究所) 産研叢書 22	憲法改正の現実性が高まる中で、従来の護憲派と改憲派の対立とは異なった観点から、憲法改正の国民投票の実施を積極的に求めるジャーナリスト今井一氏の議論を取り上げ、その主張を整理するとともに、批判的に検討した。そして、このような議論は「国民投票派」と位置づけられるが、「国民投票派」の護憲派批判は、誤りであることを指摘した。総頁数 267 頁中 22 頁。P157～178			

2	憲法改正国民投票制をめぐると憲主義と民主主義	単著	2005.03.28	大東ロージャーナル創刊号	憲法改正の主張の中には、憲法改正規定の改正を求めるものが多く、とりわけ、国民投票のあり方に修正を加える提案が一般的である。憲法改正規定の改正は憲法改正の限界を構成するかどうかなど理論的にも問題がある。そこで、憲法改正国民投票制を立憲主義と民主主義の二つの原理の結節点であるとする観点から、改正案を検討した。総頁数 119 頁中 14 頁。P25～40
3	憲法改正国民投票法案をめぐって	単著	2006.03.01	法学セミナーNo.615 日本評論社	憲法改正国民投票法案の提出が切迫するなか、国民投票法の憲法上の意味を明らかにし、なぜ今法案の提出、成立がさげばれているのかの政治的背景を探った。また、予想される法案の内容についても、若干の論点を取り上げ検討した。P38～41
4	法学入門 2006「憲法入門」	単著	2006.04.01	法学セミナーNo.616 日本評論社	法学セミナーの法学入門特集の憲法編。憲法の話題として、2005 年「郵政解散劇」を取り上げ、その憲法上の問題点を指摘し、憲法の論点として、二院制と衆議院の解散について、解釈論的な検討をした。また、若干の用語解説を行った。P12～15
5	「国民投票法案」の批判的検討	単著	2006.07.00	法律時報増刊『続・憲法改正問題』日本評論社	2007 年通常国会の会期末に、自民・公明の与党側と民主党側から提出された、いわゆる「国民投票法案」について、その基本的性格、狭義の「国民投票法」部分、国会法改正部分に分けて、批判的に検討した。P32～38
6	憲法改正国民投票制をめぐると現況	単著	2006.10.00	憲法理論研究会編『“改革の時代”と憲法』敬文堂	憲法改正国民投票制をめぐると現況について、「改正正当化根拠として憲法改正国民投票制」、「改正対象としての憲法改正国民投票制」、「改憲手続としての憲法改正国民投票制」の三つに整理し、分析を行った。P29～40
7	「国民投票法案」に浮上した新たな問題点	単著	2006.11.00	「世界」(岩波書店) No.758	国会の提出された国民投票法案について、住民投票条例との違いにも触れながら、その基本的性格を明らかにし、修正の可能性も念頭におきながら、その問題点を指摘した。P57～69
8	もう一度「憲法改正手続法案」の意味を考える	単著	2007.04.00	「軍縮問題資料」No.317 軍宿市民の会・軍宿研究室	いわゆる「国民投票法案」が、「憲法改正手続法案」であることを示し、その制定する正当化する議論を取り上げて、批判的に検討した。その上で、今「憲法改正手続法案」を制定することが、どのような意味をもつものかを検証し、注意をうながした。P12～15
9	何のための「国民投票法案」なのか	単著	2007.05.00	「世界」(岩波書店) No.765	国会の提出された国民投票法案について、住民投票条例との違いにも触れながら、その基本的性格を明らかにし、修正の可能性も念頭におきながら、その問題点を指摘した。もう一度「憲法改正手続法案」の意味を考える。いわゆる「国民投票法案」が、「憲法改正手続法案」であることを示し、その制定する正当化する議論を取り上げて、批判的に検討した。その上で、今「憲法改正手続法案」を制定することが、どのような意味をもつものかを検証し、注意をうながした。何のための「国民投票法」なのか。制定間近とされる、いわゆる「国民投票法案」について、そもそも憲法改正国民投票とは、いかなる「民意」を問うものであるかという原理的視点にたつて、批判的な検討を行った。そして、法案の内容が、国民に十分に理解されていないことこそが、最大の問題であることを指摘した。P127～136
10	「国民投票法」と国民主権	単著	2007.06.01	法律時報 79 巻 7 号(日本評論社)	いわゆる「国民投票法」の制定を受けて、賛否の記載方法、政党の優遇、最低投票率制度などを取り上げて、「国民投票法」と国民主権のあり方について分析した。P1～3
11	国民投票法重要条文解説	単著	2007.10.01	法学セミナーNo.634 (日本評論社)	「国民投票法」について、重要な条文を取り上げて、コンメンタール風に解説を加えた特集で、全般的な解説を扱う「総論」と「国民投票公報協議会」を担当した。P36～39
12	「民主過程」をめぐると憲法学説	単著	2008.05.00	全国憲法研究会編「憲法問題」No19 (三省堂)	憲法施行 60 周年を踏まえて、プーブル主権や「国民内閣制」に関する論争を取り上げて、統治機構をめぐると憲法学説のあり方を、「直接民主制」の観点から回顧し、今後の展望をさぐった。p.74-86
13	新版・体系憲法辞典	共著	2008.06.00	青林書院	本書は、体系書と項目辞典の機能を併せ持った、憲法に関する総合辞典である。大項目の憲法改正と中項目の在宅投票制度を担当。(編集代表：杉原泰雄) p.608-611、p795-800
その他					

1	憲法改正国民投票制をめぐって	単著	2005.06.18	憲法理論研究会6月月例研究会	憲法改正国民投票法の現況を、憲法改正の正当化の根拠、憲法改正の対象、憲法改正の手續の三つの観点で整理した。そして、それぞれについて理論的、憲法政治的な検討を行い、若干の問題提起を行った。
2	憲法改正国民投票法の制度設計をめぐって	単著	2005.07.23	憲法と国会研究会	憲法改正国民投票法をめぐって、「憲法議連案」、「与党案」、「民主党案」を素材にして、その制度設計に関わる多様な論点を指摘し、理論的な検討を行った。また、法案のもつ政治的な位置づけについても、法案の内容に関わる限りで問題点を指摘した。
3	憲法と地方自治直接民主制	単著	2005.12.17	憲法と地方自治研究会	住民投票制を中心として地方自治における直接民主制的制度について、憲法理論的な検討を行った。フランスの半直接制論を参照しながら、日本国憲法下の地方自治の統治形態と直接民主制の関係をさぐった。
4	「憲法改正国民投票法にどう向かいあうのか」	単著	2006.02.22	日本民主法律家協会全国常任理事会	憲法改正国民投票案の国会提出を目前にし、護憲の立場から、この法案にいかに向かい合うべきなのか探った。とりわけ、「護憲派は国民投票から逃げている」とする批判に対抗することの重要性を指摘した。『法と民主主義』(2006年No.406)に「憲法改正国民投票法とその周辺」として集録。
5	「民主過程」をめぐる憲法学説	単著	2007.10.08	全国憲法研究会秋季研究集会	憲法施行60周年を踏まえて、統治機構をめぐる戦後憲法学を直接民主制の観点から回顧し、今後の展望をさぐった。

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1993.05.00	～	現在	憲法理論研究会会員
2	1994.05.00	～	現在	全国憲法研究会会員 企画委員 (2006年11月～2007年10月)
3	1994.10.00	～	現在	日本公法学会会員
4	1996.10.00	～	2005.03.31	大東市個人情報保護審査会委員
5	1997.04.01	～	2005.03.31	大東市情報公開審査会委員
6	2000.04.01	～	2005.03.31	四条畷市情報公開・個人情報保護審査会委員 (会長)

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	石川 美明	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)		2007.04.00	最初の授業の時、「法律学学習の心得—法学未修者のために—」を配布し、落伍者が出ないように配慮している。			
1) 法科大学院「法学未修者」対策			<p style="text-align: center;">法律学学習の心得——法学未修者のために——</p> <p>法学未修者は、まず、目的地に確実に到達する鉄道をしっかりと敷き、その上で、レールの上を焦らず——されど、倦まず弛まず——走ってほしい。</p> <p>一、民法学は整理の学問である。 ※ これは先学の言葉であるが、受講者はこの教えを守ってほしい。整理のないところに勉強はなりたない。整理にあたっては、枝葉を切り落として結論と根拠とを明確に把握することである。この整理のないところに、理解とか、当否の判断とか、他説との比較などということはなりたないはずである。この整理作業の徹底していない学生の答えは、論旨の展開がにごること必然である。整理を通して核心をつかんでいけば、応用問題に対して、どの理論が働くかを速やかに発見することができるはずである。</p> <p>一、教科書の記述は法源ではない。 一、3M (無理・無駄・斑) は受験生の敵である。 その他</p>			
2) 大東文化大学法科大学院 授業評価			2007.07.00	(2007年4月～現在) 「正解カード制度」の導入、「法律学学習の心得」の配布等の工夫により、大東文化大学法科大学院授業評価において、高い評価 (全項目について、4～5の評価 (5段階評価)) を得ている (2007年度、2008年度)。		
3) 「民法の解釈・適用能力」と「事実の分析能力」との相関を強く意識した授業		2009.04.00	2009年度担当科目「民法演習」——いわゆる予備校本の「論点」の「論証」を丸暗記する勉強法を止めさせる。代わりに、「民法の解釈・適用能力」と「事実の分析能力」との相関を強く意識した学習、具体的には、下級審判例を熟読し、事実の読解・分析という「事例分析」と「民法の適用」とをきちんと整序するプロセスを学ばせる。(2009年4月～現在)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
論文				
1 表見責任制度における「外観への信頼」の要件	単	2004.12.00	社会システム研究所紀要第5巻第1号	表見責任に関する規定のなかには、「外観への信頼」の要件につき、法文上、「善意・無過失」が要求されているものがある一方、「善意」のみしか要求されていないもの——さらに、「善意」も「無過失」も要求されていないもの——もある。そこで、本稿では、法文上、「善意」のみを要するとされている規定について、立法者意思を探求するとともに、表見的なものへの信頼を保護する制度であるにもかかわらず、過失の有無を問わなくてよいのかどうかを検討する。A4版、総頁数175頁中16頁
2 盗難通帳による預金の払戻しと金融機関の責任	単	2005.03.00	中央学院大学法学論叢第18巻第1・2号	平成11年頃から、日本全国において、預金通帳、印章などの盗難が横行し、盗取した預金通帳等を利用して銀行等から預金が無断で払い戻されるという事例が多発している。そのため、近年、盗難通帳による不正な払戻請求に応じた金融機関の過失を論じた裁判例が急激に増加している。そこで、本稿では、金融機関の注意義務の程度についての判例の動向を探るとともに、預金の過誤払いの問題を、銀行取引約款(免責約款)、本人確認方法など幅広い分野にわたって検討する。B5版、総頁数302頁中34頁
3 遺体・遺骨をめぐる諸問題	単	2005.12.00	社会システム研究所紀要第6巻第1号	わが国では遺骨崇拜思想が厳然として残っており、そのため、葬祭に関連して遺骨は誰に帰属するのか、が昔から争われてきた。そこで、本稿では、遺骨(および、その前段階である遺体)は、いかなる原因によって(帰属原因)、誰に帰属することになるのか(帰属主体)、検討する。A4版、総頁数173頁中12頁
4 葬送・墓制をめぐる法的諸問題	単	2006.03.00	社会システム研究所紀要第6巻第2号	近年、わが国では、葬送形態が多様化してきている。その要因としては、高齢化社会が到来したこと、男女双方の非婚化・晩婚化により少子化が進行していることなどがあげられよう。そこで、本稿では、わが国の葬法の変遷を概観するとともに、最近登場してきた新しい葬法について、その法的問題点を検討する。A4版、総頁数260頁中15頁
5 私法上の善意・悪意概念	単	2006.12.00	社会システム研究所紀要第7巻第1号	私法上、「善意」であるか「悪意」であるかによって法律上の効果を異にする場合が極めて多い。「善意」であれば、不当利得者の返還義務の縮減(民703・704)、取得時効期間の短縮(民162)などの効果が認められ、また、取引の安全保障を理由に「善意の第三者」を保護する規定も多い(民94Ⅱ・96Ⅲ、商6Ⅱ・21Ⅲ)。「善意・悪意」概念は、一般には、「不知・知」と解されているが、必ずしも一義的ではないようである。そこで、本稿では、「善意・悪意」概念の例外的使用例について検討する。A4版、総頁数182頁中13頁
6 撒骨をめぐる諸問題	単	2008.03.00	大東ロージャーナル第4号	近年、法律問題化している撒骨(撒骨をめぐる紛争が多発し、裁判(民事)沙汰に及んでいる)について、従来議論されてきた墓理法上の問題等を再検討するとともに、新たな視点からも検討を加えた。B5版、総頁数115頁中18頁。
7 わが国における新しい葬法とその法的問題点	単	2008.11.10	宗教法第27号	新葬法の問題点について検討し——新葬法について、従来議論されてきた問題を再検討するとともに、新たに「自己決定の尊重」という視点からも検討を加えた——、将来あるべき葬法の姿について提言した。B5版、総頁数337頁中24頁。
その他				
1 わが国における新しい葬法とその法的問題点	単	2007.11.10	宗教学学会(愛媛大学)学会報告	新葬法の法的問題点について検討し、将来あるべき葬法の姿について提言した。
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				

1	1988.05.00	～	現在	日本私法学会会員
2	1989.06.00	～	現在	宗教学学会会員
3	1989.10.00	～	現在	日米法学会会員
4	1992.07.00	～	現在	金融法学会会員

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	植村 栄治	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学内電子掲示板システムによる各種教材等の配布		2005.04.01	毎回の授業用の教材や3～4回に1回行った小テストの解答・解説などを学内電子掲示板に掲載し、質問は電子メールで受け付けた。(2005年4月1日～2007年1月20日)				
2) 事例問題による小テストの実施と添削・解説		2009.04.01	毎回の授業の最後に簡単な事例問題による10分程度の小テストを行い、次週に添削して返却するとともに解答例や解説を学内電子掲示板に掲載した。(2009年4月1日～2009年4月30日)				
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 使用教科書に即したレジメと練習問題の作成		2005.04.01	使用教科書の重要ポイントが分かりかつ説明の足りない箇所を補ったレジメを毎回作成し、理解を身につけるための練習問題を多数作成して配布した。(2005年4月1日～2007年1月20日)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 法律行為の要件たる行政行為の欠缺	単著	2006.05.20	行政判例百選 I [第5版] 有斐閣	農地法上必要な知事の許可がないときに民法130条によって許可ありとみなすことはできないとの判例の解説。32-33頁。			
2 指定管理者制度と芸術振興	単著	2007.03.31	文化施設の近未来——アートにおける公共性をめぐって(慶応義塾大学アート・センターBooklet15)	最近登場した指定管理者制度が地方公共団体の美術館や音楽ホール等の運営に及ぼす影響を法的な面から考察したもの。59-69頁。			
その他							
III 学会等および社会における主な活動							
1	1984.09.00	国際法曹協会主催エネルギー法セミナーにて報告(日本の原子力規制法制について)					
2	2006.06.00 ~ 2007.06.00	人事院 国家公務員採用試験第I種試験委員[多肢式]					

3	2006.11.00 ~ 2007.06.00	法務省 新司法試験審査委員[行政法]
4		日本公法学会 事務局事務担当 (1972年7月~1973年3月)

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	片山 克行	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称		編者。著者名 (共著の場合のみ記入)	
著書						
1 演習ノート破産法<第4版>	共著	2005.08.00	法学書院		民事再生法の制定、個人再生手続きの創設、外国倒産処理手続きの承認援助法の制定および新会社法の成立、新破産法の制定に合わせて、改訂版の内容を全面的に改訂した。◎加藤哲夫編 共同執筆者 (13名) : 櫻井孝一・河野正憲・加藤哲夫・三上威彦・馬越道夫等 執筆項目 : 8・9・10・11・78・79・(全90項目中)	
2 演習ノート民事執行法・民事保全法<改訂第2版>	共著	2006.08.00	法学書院		平成16年の法改正に伴い、関連する箇所の改訂を施した。◎飯倉一郎・加藤哲夫編 共同執筆者 (14名) : 飯塚重男・梅本吉彦・加藤哲夫・河村好彦・梅善夫等 執筆項目 : 35・38・42・50・53・59	
論文						
1 裁判員制度という名の司法制度改革—裁判員制度は刑事司法界の黒船なのか—	単著	2006.07.00	新日本学 題第1号 文化研究所	平成18年夏改 拓殖大学日本文	平成21年に始まる裁判員制度という刑事司法改革は、制度上無理がある。憲法上の疑義は勿論、裁判官、検察官、弁護士、そして裁判員に選抜された市民のそれぞれに加重な負担を強いるだけでなく、被疑者に不利に働く要素が多い。なによりも国民自身の裁判員制度に対する素朴な疑問に応えていない現状で、果たして運用に重大な支障が生じる可能性を否定できない。P99～P106。	

2	特定調停における生活保護者・時効に係わる問題	単著	2006.08.00	拓殖大学論集「政治・経済・法律研究」9巻1号 政治経済研究所発行	消費者金融業者を取り巻く環境が厳しくなるにつれ、取り立ても手段を選ばなくなってきた。とりわけ、生活保護者に支給される扶助金を目当てにした取り立てが目につく。生活保護者に対する貸し付けは、既に自然債権であって、裁判上の請求もできず、債務者の自主的支払いを待つべきであって、生活保護者も扶助金を以て支払いに充てるべきではない。また、時効完成後の債務承認を詐術を用いたり、債務者の無知を利用して得た場合には、時効援用権を放棄したことにはならない。また、陳述書に分割支払い等の記載がある場合にも真意からなされたのかを確認すべきである。P1～P16。
その他					

Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1976.04.00	～	現在	日本私法学会会員	
2	1976.10.00	～	現在	民事訴訟法学会会員	
3	1977.04.00	～	現在	慶應法学会会員	
4	1983.04.00	～	現在	手続法研究所理事	
5	1998.10.00	～	現在	横浜地方裁判所 勤務地：横浜地裁相模原支部・相模原簡易裁判所民事調停委員	
6	2001.04.00	～	現在	自治医科大学遺伝子解析研究倫理審査委員会委員	
7	2001.10.00			浦和市立高等看護学院特別講義講師 医療過誤の法律問題	
8	2001.12.00			相模原民事調停協会研修会講師 過怠約款と利息制限法	
9	2002.04.00	～	現在	横浜家庭裁判所 勤務地：横浜家裁相模原支部家事調停委員	
10	2002.10.00			公開講座（作新学院大学・宇都宮市民大学運営協議会）身近な法律問題	
11	2002.10.00	～	現在	自治医科大学附属病院遺伝子治療臨床研究審査委員会委員	
12	2002.12.00	～	2007.03.00	自治医科大学疫学研究倫理審査委員会委員	
13	2003.10.00	～	現在	日本法政学会会員	
14	2003.12.00			相模原民事調停協会研修会講師 生活保護者による特定調停申立の可否	
15	2005.01.00	～	現在	横浜地方裁判所 勤務地：相模原簡易裁判所司法委員	
16	2005.07.00			相模原民事調停協会研修会講師 多重債務者の債務整理と破産・更正	
17	2006.07.00			相模原民事調停協会研修会講師 時効消滅後の債務承認と時効援用権の放棄	
18	2007.12.00			相模原民事調停協会研修会講師 調停における調停委員の役割－合意の形成について－	
19	2008.04.00			神奈川民事調停協会連合会理事	
20	2008.04.01			相模原民事調停協会会長	

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	河原 格	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 入門 民法総則		2004.10.00	八千代出版 先の「入門 物権法」と同じく総則の内容を概説的に説明し、できるだけ学生が総則でつまづくことのないように興味をいだけるような方法で執筆された。				
2) 契約・不法行為入門 債権各論		2005.04.00	泉文堂 不法行為を中心として初学者が契約各論、不法行為について興味を持てるようにとの配慮から執筆された。問題文を入れてどのような法が適用されるかがわかるようにされている。				
3) レーア・ブーフ民法 I 【総則】第 2 版		2005.05.00	中央経済社 レーア・ブーフ民法の内容を民法改正に合わせて改訂し、各章にまとめ、要点を掲げ、初学者にとり読みやすい教科書となっている。				
4) 入門 民法 [第 3 版]		2005.11.00	有斐閣 入門民法 [第 2 版] を民法の現代化に則して内容を全面的に書き改め充実した内容となり、同時に読みやすくなっている。				
5) 法学への一歩		2006.04.00	八千代出版 前編著「はじめての法学」を改訂した内容で、前著より図、写真を多用し、視覚的に法学を法学部以外の学生が容易に学べるよう、工夫した内容となっている。				
6) レーア・ブーフ民法 I 【総則】第 3 版		2007.01.30	中央経済社 先の同書第 2 版を民法の口語化、会社法制定などに対応し内容を一新し、最新の重要判例に詳細な解説を付し充実した新版。法学部のテキストに最適				
7) 「法学への一歩 第 2 版」		2008.04.01	八千代出版 前編著「法学への一歩」を昨今の法改正をもとに修正し、より内容を具体的な例示によりわかりやすくした改訂版である。執筆者間の相互意見により叙述内容を工夫している。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 不作為不法行為序説 (1)	単著	2005.03.00	東洋法学 (東洋大学法学部) 48 巻 2 号 16 ページ	不作為不法行為の構造を作為不法行為と対比して論じ、作為義務が発生する原因及び因果関係をどのように考えるかを論じた未完の内容。			

2	子に対する扶養損害	単著	2005.03.00	白山法学（東洋大学法科大学院）創刊号 15 ページ	望まなかった子が出生した場合のその子に対する扶養損害を損害概念から始め、扶養費を損害概念に入れるのが妥当かを論じた内容。
3	麻酔業務における看護師の責任	共著	2007.03.30	大東ロージャーナル（大東文化大学法科大学院）第3号 18 ページ	麻酔における看護業務としての術前、術中、術後の観察、麻酔行為の補助、麻酔管理の補助の場面で医療事故が生じた場合の看護師の責任の所在を明らかにした論文。
4	動機の錯誤の一考察	単著	2008.03.30	大東ロージャーナル（大東文化大学法科大学院）第4号 19 ページ	動機の錯誤の争われた事例を契約内容実現不能の場合、個別目的実現不能の場合、個別的契約目的実現不能の3つに分けて、それぞれの場合に動機がどのようにからんでいるかを観察し、その結果を考察した論文。
5	錯誤と瑕疵担保責任との競合	単著	2009.03.31	大東文化大学紀要 第47号<社会科学>9 ページ	錯誤と瑕疵担保責任の規定が競合する問題につき通説の瑕疵担保責任優先説に対し判例のとり錯誤優先説を検討した論文。
その他					
III 学会等および社会における主な活動					
1	1979.10.00	～	現在	日本医事法学会会員	
2	1979.10.00	～	現在	日本私法学会会員	
3	2007.03.15	～	現在	東京弁護士会所属弁護士	

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	高 翔龍	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 第二東京弁護士会で開催された「2009 年度新規弁護士登録研修」		2009.02.24		特に「法曹倫理」の主題で実例をとり上げ活発な質疑・応答の方式で行われた。ロースクール学生教育に役に立つ研修参観であった。			
2) 早稲田大学大学院 法学研究科主催「法理論と法実務との統合」		2009.03.14		法学教育的側面を踏まえて法理論と法実務との統合を如何に実現するかの問題をめぐって、日本・韓国両国におけるロースクール教育が抱える問題につき発表があり、コメンテーターとして参加した。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
1) 日本のロースクール教育現況と韓国ロースクールの教育方向について		2008.04.24		韓国・圓光大学ロースクール 日本ロースクールが抱えている教育の問題と 2009 年 4 月から開校する韓国のロースクールの教育はいかなる方向へ進むべきであるかについて特別講演。			
2) 韓国・釜山大学ロースクール招請「日本ロースクールの教育現況－教材開発と教育方法を中心に－」		2009.01.06		日本のロースクールが直面している問題について紹介すると同時に現在教材の開発がどの程度進展しているか、教育方法として講義はどのように行われているかを紹介し、4 月から開校されるロースクールにとって参考になるように特別講演を行った。			
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)			
著書							
1 韓国法	単	2007.08.10	信山社	韓国法の歴史、韓国人の法意識、統治構造、裁判制度等を中心に日本法律制度と比較しながら書いた書物である。(全 360)			
論文							
1 アクセスガイド外国法	共著	2004.06.17	東京大学出版会	北村一郎編で、外国(アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ヨーロッパ、ロシア、中国、韓国など)の法令集・判例集へのアクセスの学問的・実用的ガイドたることを主目的として出版されたものである。私は「韓国法」編を執筆した。(pp.329-368)			
2 韓中日契約法比較	単	2005.03.28	大東ロージャーナル(大東文化大学法科大学院)	上記(第4回日中民法研究会)で発表した内容を補完した論文。(pp.31-64)			
3 韓国家族法の大改革	単	2005.07.15	ジュリスト No.1294	韓国家族法は、主に儒教倫理に基づいた保守的・慣習的特性が考慮され、制定された法である。しかし、今日において家族法の多くの規定は、憲法や民主主義の理念に反するものになり、それらを改正するために、2005 年度に大改正された。その主な内容をとりあげ、検討した論文。(pp.84-91)			

4	2005年春大改正された韓国家族法の現況	単	2006.03.31	東洋文化研究第8号(学習院大学)	2005年に韓国家族法は大改正されたが、その主な内容である戸主制度の完全廃止、同姓同本禁婚原則の大幅修正、姓不変原則の修正、親養子制度の導入など、について紹介と検討を加えた論文。(pp.333~343)
5	韓・中・日間の統一売買法試案	単	2006.06.02	「学術院論文集」人文社会科学篇第45輯(大韓民国学術院(学士院))	2006年度大韓民国学術院(学士院)学術セミナーで、韓・中・日間統一売買協約の必要性和その可能性を指摘し、C I S G、P I C C、P E C Lを参考資料として紹介した後に、三国間の統一売買協約に関する試案を発表した論文。(pp.315-386)
6	韓国における「姓」と「婚姻」	単	2006.07.30	法の支配 No.142(日本法律家協会)	韓国においては婚姻後も夫婦の姓は変わらない。夫婦別姓制をとっている。その理由について日本の場合と比較しながら論じた論文。(pp.19-27)
7	世界における生命倫理と生殖医療—日本・韓国比較事情	単	2007.01.01	産婦人科の世界 Vol.59 No.1.(医学の世界社)	韓国における少子化の原因について述べた後、特に養子縁組を好まない韓国の特殊な血統主義思想について論じた論文。(pp.7-16)
8	韓国家族法における父系血統主義の變化	単	2007.03.18	21世紀の家族と法(小野幸二教授古稀記念論集)(法学書院)	韓国における父系血統主義の變化を朝鮮時代から今日に至るまで、どのように變遷してきたかを考察した論文。(pp.663-687)
9	韓国における不動産物権と不動産登記制度	単	2007.03.30	大東ロージャーナル3号(大東文化大)	不動産物権制度を概観した後に、特に、物権變動の問題をとりあげて日本の不動産物権制度とはどう違うのかにつき、考察した論文である。(pp.41-72)
10	韓国における不動産賃貸借制度	単	2007.03.31	東洋文化研究第9号(学習院大学)	韓国民法制定前の慣習上の不動産賃貸借について述べた後、民法上の賃貸借制度の問題点を指摘、それらの問題を解決するために制定した特別法上の賃貸借制度について検討した論文。(pp.1-36)
11	日本民法學と星野英一教授	単	2007.04.26	成均館大學校BK21事業團・海外碩學招聘講演會(韓国)	終戦後、星野法學が日本民法學にどのように影響を与えてきているのかにつき、星野法學を紹介した後に日本民法學の動向について講演。
12	韓国民法改正について	単	2007.08.01	比較法研究63号(比較法学会)	2004年度の国会に上程された民法改正案を紹介した後に、特に、法定解除権に関する債務者の帰責事由の必要性の有無について私見を述べたものである。(pp.84-87)
13	民法改正の動向(5)韓国	単	2007.09.28	ジュリスト増刊(民法の争点)	1960年に韓国民法が施行されて以来、民法の中でどのような制度が改正され、将来、どのような方向へ改正されて行くのかを展望したものである。(pp.41-43)
14	韓国民法の特色—日本法との比較	単	2008.01.31	北大法学論文集第53巻5号(北海道大学)	日本民法典にはない韓国民法の特殊な制度を概観した後に、日本民法において不明な制度について2、3点とりあげて、日本側の学者らと討論を行ったものである。(PP.193-256)
15	韓国の不動産賃貸借法「東アジア私法の諸相」	共著	2009.02.25	勁草書房	韓国では住宅賃貸借の一つの方法として、慣行上行われてきた「伝賃(チョンセ)」というものがあり、それが今日において民法上の物権として認めるに至っている。しかし、登記を要するこの制度は活性化されず、結局、特別法で賃借人が保護されていることを紹介し、様々な法律問題(ex.破産、対抗力など)を取り上げて論じた論文。(pp.65-92)
16	韓国法における家制度		2009.03.03	「大東ジャーナル」第5号	韓国では儒教的な伝統習慣により、血縁中心の血縁団体である「家族」制度が受け継がれて今日に至っている。しかし、1910年より日本植民地政策の一環としての同化政策により日本の「家」制度の導入が強いられたが、終戦後本来の「家族」制度に戻った、という變遷過程を論じた論文。(pp.7-28)
その他					
1	中日韓民法制度統一化に関する模索	単	2004.11.20	第4回日中民商法研究会国際学術大会(中国社会科学学院)(中国)	将来、韓中日三国間における統一売買協約の必要性和その可能性を指摘した後、その前提として三国のそれぞれの契約法の諸原則を比較考察した論文を発表。
2	韓国家族法の特色とその変革—中国婚姻法との比較—	単	2005.06.27	中国延辺大学法学院招請講演(中国)	韓国家族法の特色を述べた後、将来、二国間に生じうる国際結婚をめぐる法的紛争を予め解決するために、中国の婚姻法との相異点を明らかにする内容をもって講演。
3	判例の役割と判例研究方法	単	2005.09.20	中日韓国際学術大会(中国青島東北アジア研究会)(社团法人)(中国)	韓国の裁判制度について概観した後、韓国社会において判例はどのような役割を果しており、判例はどのように形成され、それらの判例を如何なる方法で研究しているのかについて発表。

4	外国法の調べ方	単	2005.10.06	東京大学外国法文献センター	インターネットによる韓国の法令・判例・立法関連資料・学術関連資料に関する調べ方について発表。
5	アジア法の今（東洋文化講座）	単	2005.10.12	東洋文化研究所（学習院大学）	私が日本留学時代に経験した日本法文化について述べた後、韓国の家族法文化との違いについて発表。
6	韓中日契約法比較	単	2006.02.01	中日民商法研究第4巻（中日民商法研究会）（中国）	将来の韓中日間の売買統一協約を予想し、その前提として三国間の契約法総論分野について比較検討した論文。（pp.177-197）
7	韓国家族法の改正－氏の変更を中心に（日本の氏との比較）（公開講演会）	単	2006.03.14	現代社会総合研究所（東洋大学）	絶対不変原則であるといわれてきた性（氏）が2005年の家族法改正により変更可能となったことと日本における姓の変更制度について比較しながら発表。
8	世界における生命倫理と生殖医療	単	2006.05.28	第11回 Fertility Right of Mother(FROM)シンポジウム	子に関する韓国の家族法文化について発表。
9	債務不履行－売買の目的物に瑕疵がある場合における買主の救済	単	2006.06.04	第69回日本比較法學會シンポジウム	韓国民法（財産編）の改正動向について述べた後、特に改正案でとりあげられている法定解除改正条項について批判的立場から発表。
10	韓国の不動産物権と登記制度－日本法との比較－	単	2006.06.17	第5回日中民商法研究会国際学術大会（中国社会科学学院）（中国）	中国の物権法律案が最高人民大會で否決されたことと関連し、その立法参考資料として韓国の不動産物権と不動産登記との関係について日本法と比較しながら発表。
11	東アジア研究	単	2006.11.11	東洋文化研究所（学習院大学）	韓国における不動産賃貸借制度について概観した後、特に韓国固有制度の賃貸借の1つの方法である「傳賃（チョンセ）」制度について発表。
12	東アジアにおける「家」－韓国の法体系における家の問題	単	2008.09.16	第2回東アジア三大学国際シンポジウム（大東文化大学）	血縁中心主義をとっている韓国の伝統的家族制度から、日本植民地化政策による日本式「家」制度へ変遷して行く、それから戦後、民法上の家族制度の改革による変化について発表。

III 学会等および社会における主な活動

1	1977.03.01	～	現在	韓国民事法学会会員、理事
2	1978.03.01	～	現在	韓日法学会会員、理事
3	1980.03.01	～	現在	韓国家族法学会理事
4	1983.03.01	～	現在	韓国商事仲裁院委員
5	1986.05.01	～	現在	韓国土地法学会理事
6	1996.04.01	～	現在	韓国比較私法学会副会長、会長、名誉会長、顧問
7	1996.05.01	～	現在	韓国法学教授会(社団法人)副会長、元老諮問委員
8	1999.05.01	～	現在	韓国商事仲裁学会会員
9	2002.01.01	～	2004.08.31	大韓毎日新聞名誉論説委員
10	2003.04.01	～	2004.08.31	韓国産業人力公団専門諮問委員
11	2004.09.01	～	現在	大韓民国学術院（学士院）会員 選任
12	2004.10.01	～	現在	日本法政学会会員
13	2006.02.01	～	現在	日本比較法学会会員
14	2006.03.01	～	現在	日本私法学会会員
15	2009.02.06	～	現在	麻生総合法律事務所 顧問

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	齊藤 信宰	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項			1) 本学では、「アクティブセンター」が主催して、一般・社会人を対象にした「生涯教育」を行っているが、不定期的にここで、法学を講義したり、刑法を講義した。				
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 刑法ゼミナール (総論)	単	2004.05.00	成文堂	「法令行為・正当業務行為」〔概要〕本書は法科大学院用のゼミテキストとして書かれたものである。「法令行為・正当業務行為」とは何かを説明し、併せて、事例を設定し、その事例についての模範となる解説をした。「可罰的違法性」〔概要〕上記と同じ要領で執筆した。以上 2項目を刑法ゼミナール (総論)〔三原憲三編〕で執筆担当した。(PP76～81)			
2 現代社会における法学入門	単	2006.05.00	成文堂	題名のとおり、社会福祉、医療、少年犯罪等、現代社会に密接した問題を取り上げた法学入門。最近の判例も数多く取り上げ、それに対する解説も加えている (編、著)。(PP44～55) (PP71～85) (PP183～199) (PP212～226)			
3 刑法ゼミナール (各論)	単	2006.09.00	成文堂	「名誉毀損」に関する事例の設定を解説。(PP64～69)			
4 新版刑法講義 (総論)	単	2007.04.00	成文堂	初版以来 16 年経過したのを機に全面的に書き換えた。「客観的帰属」「早すぎた構成要件の実現」といったテーマについても論述した。(PP1～593) 法科大学院生に照準を合わせている。			
5 新版刑法講義 (各論)	単	2007.04.00	成文堂	最近、刑法はめまぐるしく改正されている。初版以来 17 年経過したのを機に全面的に書き換えた。また、最近の判例をできるだけ多く取り入れ、法科大学院での授業内容に照準を合わせている。(PP1～607)			
6 刑事法総合ゼミナール	単	2008.03.00	成文堂	法科大学院での刑事法総合のテキストとして刊行されたものである。設例、争点解説、最後に関連問題と学生に考える力を要求した演習書。小松進、鈴木實、本吉邦夫、米澤敏雄と共著。(PP 2～7、14～20、34～42、62～84)			

7	新刑法総論	単	2008.05.01	北樹出版	◎船山泰範、辻本衣佐、清水洋雄、南部篤、岡西賢治、野村和彦、中村雄一、加藤康栄共著。筆者は第6章(100-124頁)担当。B5版総頁236頁。法科大学院の未修者を対象とするような、学部初学者より少し上級者を考えた総論。担当箇所は、通説といわれている学説にも配慮した。
8	新刑法各論	単	2008.05.01	北樹出版	◎船山泰範、清水洋雄、齊藤誠二、南部篤、岡西賢治、後藤弘子、増井清彦、野村和彦、辻本衣佐、中村雄一、加藤康栄共著。筆者は8～9章(108-128頁)担当。B5版総頁244頁。総論と同じく執筆者が法科大学院関係者で、法科大学院未修者を対象とすることを念頭に置いた各論。論理的に説明することを重点に置いた。
論文					
1	共犯の諸問題	単	2005.02.00	法律論叢(77巻4・5合併号) 明治大学	共犯は刑法における難問の1つとされているが、本論文では、共犯の中でもとりわけ大きな問題である「共犯従属性説」と「共犯独立性説」、「犯罪共同説」と「行為共同説」について、分り易く自説を展開した(PP119～152)。
2	目的的行为論と過失犯	単	2006.03.00	大東ロージャーナル(2号) 大東文化大学法科大学院	行為の本質は人間の「目的性」にあるということを出発点としての行為論の研究。目的的行为論に対してなされる「過失犯の目的性」を刑法の中でどのように取り扱うかということに分り易く、論理的に展開した。(PP3～23)
3	法律の不知(刑法判例百選I総論〔第6版〕)	単	2008.02.00	有斐閣	法律の不知は、行為者にとって故意を阻却するということになるのかということを解説。私見によれば「法の不知は許さず」の法諺と同じく故意は阻却しない。(PP96～97)
その他					
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1985.05.25				日本刑法学会会員
2	2004.11.20	～	2008.10.31	日本法政学会会員	

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻		職名	教授	氏名	鈴木 實	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動								
教育実践上の主な業績			年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)								
2 作成した教科書、教材、参考書								
1) ロースクール少年法講義 (付 被害者保護の諸制度)			2006.12.25	大東文化大学刑事法研究会 (学内用教科書) 大東文化大学法科大学院3学年前期「市民生活と犯罪」の教科書の一部として執筆。少年法及び被害者保護制度について最新改正法の内容を基にした教科書である。(B 5、110 頁)				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
II 研究活動								
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)				
著書								
1 刑事法総合ゼミナール	共著	2008.03.15	株式会社成文堂	刑事実体法、手続法の主要問題について解説。担当部分は刑事手続法の主要問題 (捜査手続中心) 94 頁～144 頁 (総頁 234 頁中) 小松進、斉藤信宰、本吉邦夫、米澤敏雄 (いずれも大東文化大学法科大学院教授) と共著。				
論文								
1 平成 19 年の少年法一部改正について	単著	2008.03.30	大東文化大学法科大学院法務学会「大東ロージャーナル」	平成 19 年の少年法一部改正の経緯・内容等について解説及び論評した。18 頁 (総頁 119 頁)				
その他								
III 学会等および社会における主な活動								
1	2005.02.00	～	現在	日弁連法務研究財団法科大学院評価員				
2	2008.04.00	～	2009.03.00	財団法人大学基準協会法科大学院評価員				

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	須田 清	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書				『民法講義概要』(川口短期大学) 本人作成 (教材) 小野幸二編『民法』(大東文化大学) の分担執筆			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
1) 司法修習生実務指導		2007.00.00		平成 18 年 平木 伸佳 (現検察官)			
2) 司法修習生実務指導		2007.00.00		平成 18 年 福田 舞 (現弁護士)			
3) 司法修習生実務指導		2007.00.00		平成 17 年 五月女 有希 (現裁判官)			
4) 司法修習生実務指導		2007.00.00		平成 17 年 片上 尚子 (現弁護士)			
5) 司法修習生実務指導		2007.00.00		平成 17 年 太田 貴裕 (現弁護士)			
6) 司法修習生実務指導		2008.00.00		平成 20 年 荒木 泉子 (現弁護士)			
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 医事法授業体験記	単	2005.08.10	年報医事法学 20 日本医事法学会編	法科大学院における医事法教育のミニシンポにおけるパネリストとしての参加と授業の実際についての体験記			
2 医事法制・感染症予防法	共	2005.09.19	民事法研究会「実務医事法講義」	法科大学院における医事法の教科書として、全国の担当者 28 名の共同執筆。そのうち 2 つのテーマについて執筆した。			
3 医師・病医院をめぐる法律問題	共	2006.07.27	日本医療企画「医療法務のすべて」	医療における様々な法律問題、知的財産法も視野に入れた諸問題について知財法の権威である寒河江孝允弁護士との監修・執筆で出版した。			
4 20 のケースから学ぶ問題解決の手法	共	2008.05.31	ソーテック社「トラブルとクレームに勝つプロの交渉術」	裁判手続前の交渉のあり方、その基本的スタンスのあり方について一般市民を対象として理解しやすく解説したものの			
論文							
1 説明義務とその法的効果	共著	2007.12.20	第 12 回日本臨床死生学会記録 (株) イウス出版	説明義務不履行の法的効果は損害賠償責任であるが、具体的な判決としては全額で表示される。その算定根拠と理論的根拠についての考察			

2	未決拘留中の被告人の治療と転送義務	2006.09.30	ジュリスト医事判例百選	東京拘置所内の患者に対する治療行為の過誤が争われた事件についての判例の研究
3	性同一性障害者と特別立法前の司法の対応	2007.03.18	小野幸二教授古稀記念論集 21世紀の家族と法	性同一性障害者の戸籍の性別変更申立事件の代理人の実務経験に基づき、特別立法前の裁判所の対応についての批判的検討を加えたもの
その他				
1	新潟県病院協会「病院協会報」医療事故防止研究会講演記録	2006.06.00		医療をめぐる法律問題～法令遵守と医療の安全保障～と題する講演
2	さいたま市立高等看護学院講演	2006.12.00		高等看護学院の学生に対する、「看護師と医療過誤」と題する講演
3	さいたま市立高等看護学院講演	2007.12.00		高等看護学院の学生に対する、「看護師と医療過誤」と題する講演
4	看護と法律	2008.12.06		高等看護学院の学生に対する法律講演

III 学会等および社会における主な活動

1	1971.00.00		(東京弁護士会関係) 運動会実行委員会委員
2	1971.00.00		(東京弁護士会関係) 会則等改正委員会委員
3	1971.00.00		(東京弁護士会関係) 東京弁護士会常議員
4	1971.00.00		(東京弁護士会関係) 東京弁護士会育英財団評議員
5	1971.00.00	～ 現在	古河市・茨城西南市町村圏事務組合公平委員会 委員長委員長
6	1973.00.00		(東京弁護士会関係) 運動会実行委員会委員
7	1975.00.00	～ 現在	日本交通法学会一般会員
8	1979.00.00		(東京弁護士会関係) 会館建設実行特別委員会副委員長
9	1981.00.00	～ 現在	埼玉県医師会法律顧問
10	1983.00.00		(東京弁護士会関係) 法律研究部医療過誤法部副部長
11	1984.00.00		(東京弁護士会関係) 弁護教官候補者推薦に関する合同協議会委員
12	1985.00.00		(東京弁護士会関係) 広報委員会委員
13	1987.00.00		(東京弁護士会関係) 法律研究部医療過誤法部副部長
14	1988.00.00		(東京弁護士会関係) 会則第27条運営特別委員会委員
15	1988.00.00		(東京弁護士会関係) 常議員常議員
16	1988.00.00		(日本弁護士連合会関係) 日弁連代議員
17	2000.00.00		(東京弁護士会関係) 人権擁護委員会委員長
18	2001.00.00	～ 現在	(東京弁護士会関係) 人権擁護委員会委員
19	2002.00.00	～ 現在	(その他) 東京三会 医療関係事件検討協議会委員
20	2003.00.00	～ 現在	さいたま地方裁判所医療関係訴訟連絡協議会委員委員

21	2005.00.00	～	現在	日本臨床死生学会一般会員
22	2006.00.00	～	現在	NPO法人市民生活安全保障研究会代表理事
23	2007.00.00	～	現在	NPO法人環境住宅代表理事
24	2007.00.00	～	現在	医療の質・安全学会一般会員

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	早川 勲	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 報告テーマ「委員会等設置会社とコンプライアンス」	単著	2005.06.30	2004.10.29 日本法政学会公開シンポジウム「大企業におけるコンプライアンスの実証的検討」法政論叢第 41 巻第 2 号	アメリカ法にモデルがある「委員会等設置会社」を平成 13 年に商法特例法を改正して新設した。この会社の長所は会社経営に関する業務の「決定」と「執行」を分離し、コンプライアンスを含めた業務執行に対する監督の実効性を高める仕組みとなっている。従来型とのいずれを選択することも可能である。三委員会と社外取締役制度を置いたことがコンプライアンス経営の成否の決め手となるが、そういった点を研究し報告したものである。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1	1971.10.00	～	現在	日本私法学会		
2	1972.05.00	～	現在	日米法学会		
3	1972.05.00	～	現在	比較法学会		
4	1972.10.00	～	現在	経済法学会		
5	1975.10.00	～	現在	信託法学会		

6	2003.06.00	～	現在	日本法政学会
7	2004.11.20	～	2006.11.19	文部科学大臣認証法科大学院認証評価機関：(財)日弁連法務研究財団法科大学院認証評価事業評価委員
8	2006.04.27	～	2009.03.31	第一東京弁護士会市民法律相談・刑事弁護委員会委員

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	平良木 登規男	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績			年月日	概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「罪数論と刑事訴訟法」		2004.07.00	現代刑事法 63 号			
2 「刑事裁判の充実・迅速化と新たな争点及び証拠の整理手続の創設意義」		2004.12.00	現代刑事法 68 号			
3 シンポジウム「特集・陪審・参審・職業裁判官」		2006.05.00	刑法雑誌 39 巻 1 号			
4 「刑事裁判が変わる」		2008.02.00	BAN 番			
その他						
1 「司法制度改革タウンミーティング イン宮崎」		2006.03.00				
2 「司法制度改革タウンミーティング イン広島」		2006.05.00				
3 「被疑者取調べの適正化に関する有識者会議委員 (座長)」		2007.12.00	警察庁 (2007 年 12 月から)	提言		

4 延世大学、大田大学、 刑事政策院（以上韓 国）、南京大学（中国）、 イスタンブール文化 大学（トルコ）等で講 演		現在		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1 1988.05.00 ~ 現在	日本刑法学会理事			

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	教授	氏名	出井 直樹	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項			<p>1) 知的財産権法 (科目ごとの特記事項)</p> <p>2) 国際取引法、法律文書作成</p>			
<p>弁護士になる前より中山信弘東京大学教授主宰の知的財産権研究会に参加。これまでに4回研究発表。米国ニューヨーク大学ロースクールにて、集中的に知的財産権法科目を受講。実務面でも、知的財産権は、契約面・紛争面の両面にわたって事務所の仕事の中核。ギターの形状をめぐる不正競争防止法事件、聖書翻訳の著作権をめぐる日米両国にまたがった訴訟・仲裁事件、医療機器の意匠をめぐる訴訟事件その他多数の知的財産権紛争案件を担当。</p> <p>実務上国際・国内のディストリビューション契約、ライセンス契約、合弁契約、企業買収契約を多数扱っている。日本語・英語両方での契約のドラフティングと交渉、契約の分析は、事務所の実務の中核である。ニューヨーク大学ロースクールにて、国際商取引受講。契約のドラフティング、交渉に関するセミナー・講演多数。</p>						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者。著者名(共著の場合のみ記入)		
著書						
1 「特許ライセンス契約について」	共著	2004.05.00	第二東京弁護士会知的財産権法研究会編「特許実務の最前線」商事法務 2004年5月号所収			
2 「ADR法制の方向性について」	共著	2004.10.00	消費者法ニュース 2004年10月号所収			
3 「Recent Developments in Japanese Law Concerning Employee Inventions」	共著	2005.03.00	Daito Law Review Vol.1			
4 「説明義務関係訴訟の審理の弁護士から見た特徴・注意点」	共著	2005.07.00	判例タイムズ 1178号(臨時増刊)「説明義務・情報提供義務をめぐる判例と理論」所収			
5 「Q&A新しい筆界特定制度」	共著	2006.01.00	三省堂			

6	「新しい信託法解説」	共著	2007.04.00	三省堂	
7	「民事紛争解決手段としての仲裁の位置付けと可能性」	共著	2007.09.00	小島武司編「日本法制の改革：立法と実務の最前線」所収 中央大学出版部	
論文					
その他					
1	(所内)				新人弁護士、若手弁護士に2記載の教材を用いて、カウンセリング、ドラフティングの要点を指導。最近の判例を題材に、実務家の観点からの判例研究(原告の立場、被告の立場、裁判所の立場それぞれから判例を分析する)。若手弁護士を対象に、英文判例講読、ソクラティック・メソッドで判例研究。その他実際の仕事を通じての後進弁護士の指導。
2	国家公務員としての審議会委員と法令遵守の関係について		2004.05.07	連合-政府各省庁審議会連合推薦委員会合	刑法に関する講演。
3	新仲裁法と各機関規則の改正について(報告)		2004.05.12	日本仲裁人協会研究部会→会報掲載	新仲裁法と各機関規則の改正についての研究報告。
4	司法研修所民事交互尋問外部講師		2004.08.17		司法研修所での民事交互尋問の指導。
5	ADR法の立法状況について		2004.09.22	紫水会例会	ADR法の立法状況についての報告。
6	ADR法について		2004.10.01	全国仲裁センター連絡協議会	ADR法の立法状況についての報告。
7	ADR促進法について		2004.12.07	大阪弁護士会仲裁・ADR促進法説明会	ADR法についての講義。
8	裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律について		2005.01.15	宮城県土地家屋調査士会研修会	土地家屋調査士に対するADR法についての講義。
9	隣地所有者の境界承諾書の実務と法律上の諸問題(代理の問題を含む)		2005.02.02	東京土地家屋調査士会法令実務研修会	土地家屋調査士に対する民法、民事訴訟法、ADR実務に関する講演。
10	弁護士会仲裁・ADR		2005.03.11	第二東京弁護士会継続研修	仲裁に関する講義。
11	裁判外紛争解決手続(ADR)の実際		2005.03.22	日本行政書士連合会研修	行政書士に対するADRに関する講演。
12	新仲裁法の実務と理論		2005.05.27	日本仲裁人協会総会記念講演	
13	ADR法の評価と課題		2005.07.02	仲裁ADR法学会総会シンポジウム(パネリスト)	
14	和解あっせん・仲裁の非公開制について		2005.07.10	第二東京弁護士会仲裁夏季合宿報告	
15	裁判外紛争解決手続の利用の促進に関する法律について		2005.07.22	東京民事調停協会連合会研修会講演	
16	「日本法制2010年」新仲裁法の諸問題		2005.07.30	中央大学大学院特殊講義 I	
17	Use of Independent Experts in Arbitration		2005.09.29	IBA Congress Working Session(パネリスト・報告者)	

18	ADR機関・各種専門家の連携・協働のあり方	2005.10.19	三会仲裁実務研究会（パネリスト）
19	仲裁・ADRの実務知識	2005.12.13	日弁連特別研修会・紛争解決手段としてのADR
20		2006.01.11	仙台弁護士会ADR座談会（パネリスト）
21	ADR代理権と認定土地家屋調査士	2006.02.02	東京土地家屋調査士会法令実務研修会
22	国際取引法 研修所 第60期前期民事共通選択制講座	2006.06.15	司法研修所
23	国際取引法 研修所 第61期前期民事共通選択制講座	2007.06.08	司法研修所

Ⅲ 学会等および社会における主な活動

1	1985.00.00	～	現在	知的財産権研究会（中山信弘東京大学教授主宰）会員
2	1994.00.00	～	現在	American Bar Association 会員
3	1997.00.00	～	2006.03.31	-第二東京弁護士会関係-仲裁センター運営委員会委員：平成9年度～13年度、15年度～17年度 副委員長：平成11年度、15年度～16年度 幹事：平成14年度
4	1997.00.00	～	2006.03.31	-第二東京弁護士会関係-民事訴訟改善研究委員会委員：平成9年度～17年度 副委員長：平成14年度～15年度
5	1997.00.00	～	現在	国際青年法曹協会（Association Internationale des Jeunes Avocats）会員・平成8年より日本支部代表：平成12年度～17年度
6	1999.00.00	～	2006.03.31	-第二東京弁護士会関係-住宅紛争審査会運営委員会設立準備協議会委員：平成11年度 委員：平成12年度～17年度 副委員長：平成12年度～13年度
7	2000.00.00	～	現在	-第二東京弁護士会関係-住宅紛争審査会平成12年度～ 紛争処理委員
8	2000.00.00	～	現在	-第二東京弁護士会関係-仲裁センター平成12年度～ 仲裁人候補者
9	2001.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-ADRセンター委員：平成13年度～17年度 事務局委員：平成14年度～15年度 仲裁検討会バックアップ委員：平成13年度～15年度 ADR検討会バックアップ委員：平成13年度～15年度（15年度座長） 副委員長：平成16年度～17年度
10	2001.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-住宅紛争処理機関検討委員会幹事：平成13年度～14年度 事務局委員：平成15年度 委員：平成15年度～17年度
11	2001.00.00	～	現在	環太平洋法律家協会（Inter-Pacific Bar Association）会員
12	2002.00.00	～	現在	日本スポーツ法学会会員
13	2003.00.00	～	2005.03.31	-第二東京弁護士会関係-司法改革推進二弁本部（裁判迅速化法案対策部会）幹事：平成15年度～16年度
14	2003.00.00	～	2005.03.31	-日本弁護士連合会関係-裁判迅速化法検証WG委員：平成15年度～16年度
15	2003.00.00	～	2006.03.31	-第二東京弁護士会関係-弁護士業務委員会委員：平成15年度～17年度
16	2003.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-民事裁判手続に関する委員会委員：平成15年度～17年度 事務局委員：平成16年度～17年度
17	2003.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-隣接士業に関する委員会委員：平成15年度～17年度
18	2003.00.00	～	現在	-東京土地家屋調査士会関係-境界紛争解決センター紛争解決委員：平成15年度～
19	2003.00.00	～	現在	-日本商事仲裁協会関係-日本商事仲裁協会調停人候補者：平成15年度～現在 規則改正委員会委員：平成15年度
20	2003.00.00	～	現在	-日本仲裁人協会関係-発起人：平成15年度～現在 会員：平成15年度～現在 理事：平成15年度～現在 研究部会仲裁分科会幹事長：平成16年度～17年度

21	2004.00.00	～	2005.03.31	-住宅リフォーム紛争処理支援センター関係-「住宅紛争処理手続の実務必携」改訂検討委員会委員：平成16年度
22	2004.00.00	～	2005.03.31	-日本弁護士連合会関係-ADR代理権と72条問題検討WG委員：平成16年度 副座長：平成16年度
23	2004.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-裁判迅速化法問題対策委員会委員：平成16年度～17年度 事務局長：平成16年度～17年度
24	2004.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-司法改革総合推進会議委員：平成16年度～17年度
25	2004.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-弁護士の法的サービス推進本部委員：平成16年度～17年度 事務局次長：平成16年度～17年度
26	2004.00.00	～	現在	工業所有権法学会会員
27	2004.00.00	～	現在	大東文化大学法科大学院エクスターンシップ国際法務統轄：平成16年度～
28	2004.00.00	～	現在	大東文化大学法科大学院欧文ジャーナル編集委員会世話人：平成16年度～
29	2004.00.00	～	現在	著作権法学会会員
30	2004.11.00	～	現在	中央建設工事紛争審査会特別委員：平成16年度～
31	2005.00.00	～	2006.03.31	-日本弁護士連合会関係-構造改革特区WG委員：平成17年度
32	2005.00.00	～	現在	仲裁ADR法学会会員：平成17年度～
33	2007.00.00	～	現在	国際協力医学研究振興財団糖尿病予防のための戦略研究・中央倫理委員会委員：平成17年度～

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	特任教授	氏名	麻生 利勝	大学院における研究指導担当資格の有無	(有)・無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 知見における特異性			昭和37年4月海上保安大学校航海科卒業後、参議院議員の立法政策秘書として研鑽を積みながら、海洋法ならびに海上保安業務に関する研究と実務を参考にし、昭和44年弁護士並びに海事補佐人登録後は、船舶衝突を中心とした海難事故の研究を継続するうちに、損害賠償を専門とする弁護士として実績を重ね、損害保険会社の顧問就任後はニューヨークに本部のあるRIMSの国際会議に出席し、そのたびに、米国内の著名大学で「TORT」講義聴講、海難事故から次第に個人的な損害賠償(交通事故、医療事故、航空機事故、男女問題等)へ、さらに組織的不法行為へ研究対象をシフトさせて「企業犯罪」に関する「法的危険管理論」を体系化した。理科系から出発した損害賠償専門家としての知見を多く取得しているので、授業を受ける学生は事案の臨場感を強く抱くと感想を述べている。また、学生との接触を学内にとどめず、富士山ろくに施設している私的研究室にて諸問題を自由に研究・討論することで、教員と学生の全人格的ふれあいを実践し、もって人格形成に寄与している。				
2) 調停委員としての事案処理経験			弁護士としての業務経験に裁判官的役割を担う調停委員として事件処理における多角的能力を習得できたばかりでなく、裁判所側の思考スタンスや国民感情への希薄性を学んだ。				
3) 「日本刑法学会」「老人医療研究会」「日本臨床細胞学会」や同志社大学法学部、海上保安大学校、海上保安学校、における特別講演			主催者の希望するテーマで特別講演を行ってきたが、説得力と信頼醸成の成果を挙げたと思う。最近では、医療問題に関する講演依頼が多く、また、企業からの講演と研究会指導の要請に応えることで、理論と実務の相互研究を可能にしている。				
4) 新聞、テレビ、雑誌等への出演と投稿			トピカルな不法行為や企業犯罪に関する諸問題で、マスメディアの依頼に応じることはできるだけ避けてきたが、国民的視野から正論を主張する必要のある問題に限り積極的に応じることで、一般常識と法律との徒な乖離の回避能力を習得している。				
5) 海難事故に関する法的研究		2004.05.00	21 海事総合事務所 2004年5月より2005年1月まで。海難審判並びに海難事故と法的責任に関する指導と研究。				
6) 高齢者保護の法律		2004.06.00	板橋グリーンカレッジ 2004年6月より7月まで週1回の連続5回。高齢者が遭遇する社会的諸問題を如何にして適性かつ有利に対処するか、具体的事例を中心に講義。				
7) 修習生実務研修 実務指導・模擬裁判		2004.07.00	最高裁判所司法研修所 2004年7月より10月まで。第二弁護士会受け入れの修習生一名の実務修習を担当。				
8) 日弁連法科大学院研究会、各法科大学院主催の研究会に随時参加・研修並びに課題研究		2005.00.00	日弁連・法科大学院 要件事実・教授法・学習要綱などの研究会参加と研修				
9) 国内企業エクスターンシップとして、大企業訪問		2005.02.00	大東文化大学法科大学院 KDDI(株)、三井不動産販売、京王電鉄、損保ジャパン、小島国際法律事務所の五カ所を訪問し、院生と共に企業法務の実情と体験を指導				
10) 要件事実研究会		2005.03.00	創価大学法科大学院附属要件事実研究所 法科大学院における要件事実の教育研修				
11) 修習生実務研修 実務指導・模擬裁判		2005.04.00	最高裁判所司法研修所 第二弁護士会受け入れの修習生一名の実務修習を指導。				
12) 癌治療と患者情報		2005.05.00	日本癌治療学会倫理委員会 患者情報のリークと法的問題に関する講義				
13) 医療情報と患者の権利(福岡国際会議場)		2005.05.00	日本治療細胞学会医療安全小委員会 医療従事者が患者の情報を何処まで聴取し保管できるかに関する講義				
14) 刑法学会(北海道大学)		2005.06.00	日本刑法学会 定期学会における研修。				

15) 被害者学会（関西学院大学）	2005.06.00	日本被害者学会 定期学会における研修。
16) 高齢者の安全と保護に関する法律	2005.06.00	板橋グリーンカレッジ 2005年6月より7月まで週1回の連続5回。振り込め詐欺や高齢者を襲う種々の犯罪から回避する手法並びに遺産相続・家庭内暴力など問題となる法的課題につき連続講義。
17) 韓国法務エクスターンシップ	2005.08.00	国際法律事務所・韓国軍事法務院、司法機関訪問 国際法務の研修先との共同研究乃至業務提携及び韓国軍事法務院等にて法務の実情調査と研究。
18) 大東大FD研修	2005.09.00	法科大学院FD委員会 大学施設にて1泊2日研修院生との自由討議を含む。
19) 海難研究会（神戸）	2005.09.00	21 海事総合事務所 航路内航行船と警戒船との衝突事故研究
20) 薬局経営と院外処方に関する病院経営との関わり（岡山）	2005.11.00	医療法人十全会 院前薬局と薬事法並びに医師法との関係及び医院経営上の法的課題の研究と指導
21) 芸能界と法的問題	2005.12.00	株式会社ニッコク みのもんたを中心に芸能界における慣習と法的課題の検討会。
22) 国内企業エクスターンシップとして、大企業訪問	2006.02.00	大東文化大学法科大学院 三井不動産販売、京王電鉄、損保ジャパン、小島国際法律事務所の五カ所を訪問し、院生と共に企業法務の実情と体験を指導
23) 司法制度論	2007.08.25	慶應義塾大学法科大学院 ブルドック対スティーラのTOB判例評釈
24) 民事模擬裁判分科会	2008.03.21	日弁連法科大学センター 教員ネットワークを通じての模擬裁判教材研究
25) 法科大学院認証評価シンポ	2008.03.29	日弁連法務研究財団 評価結果報告および弁護士のマインドとスキル養成方法
2 作成した教科書、教材、参考書		
1) 韓国法務調査	2004.07.00	成均館大学法学部大学院並びに国際法律事務所 国際法務（エクスターンシップ）の研修先との共同研究乃至業務提携及び韓国法務の実情調査。
2) 企業法務と法曹倫理	2007.10.11	大東文化大学法科大学院 企業内外の法曹と倫理の落とし穴を中心に
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1) 循環研セミナー	2007.01.17	環境監査研究会 21世紀の「持続可能な経済社会」を考える
2) 病理医と細胞検査士研修会	2007.02.10	PCL 病理医と検査技師との法的責任について
3) 酸素補給と応急措置の法律	2007.03.29	DANジャパン 潜水指導員に対する緊急事務管理の法制を説く
4) 循環研セミナー	2007.05.24	循環社会研究会 国会の中から見た環境政策
5) 「東アジア裁判外紛争解決機構」設立シンポ	2007.09.02	大東文化大学法科大学院 機構設立に関する法的要件並びに諸国の法令検討シンポを主催した
6) 循環研セミナー	2007.12.19	循環社会研究会 CSR報告書作成に向けて
7) 選択一ヶ瀬典子の場合	2008.01.31	H19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業 終末医療・安楽死に関する女医の苦悩と患者側の対応
8) 日弁連法科大学院センターロイヤリング研究会	2008.02.02	日弁連法曹養成対策室 活動報告とモデル授業のビデオ上映
9) グローバル・コンパクト・ラーニング・フォーラム	2008.02.21	環境監査研究会 「人権課題と企業の果たすべき役割」を研究
10) 循環研セミナー	2008.05.14	循環社会研究会 消費者から見た森林活性化と循環型の暮らし
4 その他教育活動上特記すべき事項		
1) 三点思考の勧め	2007.10.15	麻生総合法律事務所 社会事象の分析に三点思考による立体的評価手法を提唱した

2) 企業法務エクスターンシップ	2008.02.05	大東文化大学法科大学院 東京一部上場企業四社の法務部と企業法務授業を選考した院生と合同で直面する企業法務課題研究を指導
3) 認証データマネージャー制度委員会	2008.02.08	日本癌治療学会 同委員会における秘密保持義務等を含む規則並びに運用細則作成
4) 海洋基本法の施行と安全シンポ	2008.02.16	海洋安全研究会 海賊被害防止並びに海上災害防止等に関する研究
5) 海洋レジャーの事故対策	2008.03.15	海洋レジャー振興協会 弁護士・海事補佐人としての法的アドバイスを行った
6) 実務家教員研究交流集会	2008.03.22	日弁連法科大学センター 民事と刑事の実務教育研究会合同での司法修習との連携と最低限の実務基礎教育に関する研究
7) 第10回倫理委員会	2008.03.28	日本癌治療学会倫理委員会 利益相反行為に関する倫理指針と運用研究
8) 院内暴力・リスク管理調査	2008.04.21	日本病院協会 実態調査WGの調査結果の検証
9) フェリー「ベガ」・貨物船「平井丸」衝突事件	2008.04.30	TOMGO 国際法としての海上衝突予防法と狭水道または航路における特別規則等との解釈優劣性の研究
10)	2008.05.07	東京新都心RC

II 研究活動

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月(西暦でも可)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者、著者名(共著の場合のみ記入)
著書				
1 海のレジャーQ&A(仮称)	共著	2008.02.19	成山堂出版協議	海洋レジャーと損害賠償を中核とした法的責任を詳論する。
論文				
1 「立退き料で賃貸借人間の利益バランスを調整した判例」	単			店舗賃貸借契約の更新拒絶に関する事例研究
2 「嫌悪すべき心理的欠陥と瑕疵に関する判例」	単			自殺のあった住宅の解約が法的にいかなる制約を帯びるか、日本人の死や忌まわしさに対する感情と法的効果の関係を論じた。
3 「非堅固の特約が建物保護理念に優先するかの判例」	単			借地契約上の契約違反と解除の関係に住宅事情という社会的背景を投影させてその調整原理を追求した。
4 賃料値上げの複数鑑定のうち採用しなかった判例」	単			賃料の上昇率を巡る妥当性を追求した。
5 「履行の着手に触れず権利濫用論を採用した判例」	単			手付け倍戻しによる契約解除の正当性を論じた。
6 「営業委託に伴う建物利用に賃借権を認める妥当性に関する判例」	単			営業用建物賃貸借契約と住宅用賃貸借契約保護理念との関係を論じた。
7 「契約終了後の動産類搬出で賃貸人の不法行為が成立するとした判例」	単			賃貸人が賃料確保のためにいかなる程度の自力救済が可能かを追求した。
8 「日影被害と受忍限度を論じた判例」	単			受忍限度を超えているか否かの判断に際し、工事禁止仮処分における原決定の理由並びに加害回避性と当事者の交渉経過を重視した判例の妥当性を論じた。
9 医療過誤抑止を考える	単	2004.09.00	日本産科婦人科学会雑誌第56巻9号別冊	学会研修における要望講演に基づき、医療機関の組織性に着目して、法的危険管理による医療過誤抑止策の重要性を説いた論文。

10	企業犯罪抑止と刑事法的介入に関する一考察	単	2005.03.00	大東ロージャーナル2号	企業犯罪の発生要因の分析と抑止策に関して、現行の刑事法的介入が如何なる効果と課題を包含しているかを論じた論文
11	医療検査と診療における法的責任と抑止に関する一考察	単	2005.03.00	大東ロージャーナル	医療検査に起因する医療過誤の増加に対し、患者と医療機関並びに医療検査機関の三者間における法的責任のあり方を説き、医療過誤抑止の法的視点を明らかにして、実践的な抑止論を展開した。大東ロージャーナル創刊号に掲載。
12	在宅医療と個人情報法保護法	単	2005.08.00	日本在宅医療学会誌第3巻	学会より要望され、在宅医療の増加に伴う医療関係者と患者並びに家族との、個人情報取扱に関する法的課題の論文。
13	法の正義	単	2005.08.00	第二東京弁護士会五月会誌	社会的混乱の中で法曹業務に従事する者として、「法の正義」を再検討する必要性があり、その際の基本的視座を明らかにした論文
14	医療検査と診療における医療過誤の法的責任に関する一考察	単	2005.09.00	大東ロージャーナル1号	医療過誤に対する過剰反応の抑止と適正な予防措置に関する法的視点を明らかにした論文
15	法曹の使命と法的正義並びに倫理の関係	単	2005.09.00	大東ロージャーナル2号(英文)掲載予定	現代法曹が、法的知見を過剰に意識している危険性と伝統や慣習に基礎を置く倫理並びに情念の世界における感性とのバランスの重要性を説いた論文
16	調停における法規範と倫理のバランス	単	2005.09.00	東京簡裁調停時報	調停委員が事件処理に際し、法的知見と社会常識における倫理とのバランスを駆使する必要性と自己研鑽の重要性を説いた論文
17	企業犯罪抑止と刑事法的介入に関する一考察	単論文	2006.03.10	大東文化大学法科大学院法務学会	企業犯罪の自主的抑止に力点を置き、企業の持続的発展に寄与する抑止の意義と手法を考察した論文
18	東アジア裁判外紛争解決機構構想	単論文	2007.03.10	大東法科大学院法務学会	東アジアに進出している企業相互間の私的紛争を裁判外機構で解決する意義と功罪を論じた
19	「内部告発と組織の不本意な関係論」	共論文	2008.12.25	慶應義塾大学大学院法務研究科 「慶応法学第11号—慶應義塾創立150年記念号上巻」	企業の内部告発の背景と企業組織循環論と構造的解析論により相互の合目的関係を論述
20	「潜水用酸素の利用と取り扱い並びに緊急対処における法的プロテクト」	共論文	2009.03.30	大東ロージャーナル」第5号103頁以下	潜水中に減圧症にかかった患者の応急措置と医療行為の関係並びに高圧酸素の取り扱いに関する法的諸問題
その他					
1	自然環境と省エネルギー対策・施設の研究	研究調査		ハワイ大学・ハワイ州環境保全局等並びに法律事務所	日本人が多く住む地域における「もったいない」精神の効用並びに自然環境保全への取り組みなどを調査研究
2	刑法学会(広島大学)	参加	2004.05.00	日本刑法学会	企業犯罪・環境犯罪関連の研究会に参加。
3	被害者学会(早稲田大学)	参加	2004.06.00	日本被害者学会	被害者救済並びに被害者の裁判参加等に関する研究会参加。
4	癌治療に関する倫理規定その他研究会	研究参加	2004.06.00	日本癌治療学会	2004年6月より11月まで5回。癌の告知やインフォームドコンセント等に関する研究者が癌倫理委員会を構成し、数回にわたり火急的課題を討議研究した。
5	小型船舶PL紛争に関する研究	研究参加	2004.07.00	(財)日本舟艇工業会	小型船舶のPL紛争並びにPL委員会運営に関する検討会にて、法的専門委員として研究・提言。
6	医療検査の法的課題	研究	2004.07.00	日本病理細胞診学会	細胞診・細胞検査等に関する法的課題を抽出し、予想される医療過誤との関係を整理、その対策を研究。
7	細胞検査士に関する医療過誤問題	参加	2004.08.00	日本細胞検査士会	臨床医並びに病理医と検査士との医療過誤に関する法的研究。
8	医事紛争対策	研究参加	2004.09.00	日本病理細胞診学会	病理細胞診に関する医療過誤対策委員会における対策協議。
9	癌治療の倫理規定策定(京都国際会館)	参加指導	2004.10.00	日本癌治療学会	法的専門委員として、癌治療に関する倫理規定の策定と検討会における指導と助言。
10	企業犯罪抑止の実践的抑止策	講演	2004.10.00	(社)商事法務研究所	大企業の第一線で活躍している法務マンを中心にした実践的セミナーの講師として講演。

11	株主総会とコンプライアンス	講演 パネラー	2004.11.00	日本法政学会	学会記念公開シンポジュームの企画と講演並びにパネラーを担当した 法政論叢に詳細が掲載される。
12	病理と細胞診に関する紛争処理について	指導	2004.11.00	日本臨床細胞学会	病理と細胞診に関する医事紛争委員会検討会に参加し指導。
13	乳癌治療と医療過誤	講演	2004.12.00	茨城県乳癌研究会	増加の傾向にある乳癌治療と医療過誤の問題を如何にして抑止し、患者の期待に応えるかについて講演。
14	環境訴訟研究	参加	2005.01.00	日弁連実務家連絡会議	環境訴訟に関する法的課題につき研究。
15	交通事故を限りなくゼロへ	講演	2005.01.00	大東実業株式会社	数百台を要する運送企業における交通事故撲滅の法的視点と具体的抑止策について埼玉県警交通課警視と共に特別講演。
16	東京地裁交通事故関係判決の研究	討議 参加	2005.03.00	交通法学会	裁判官による平成 17 年度の交通事故民事判決の傾向と事例研究
17	法科大学院教員研修会	参加	2005.03.00	実務家研修委員会	平成 16 年度実務家教育を終えての検証
18	癌治療と医療関係者の倫理	研究 討議	2005.03.00	日本癌治療学会倫理委員会	がん患者と情報提供に関する医師倫理の関係を討議研究
19	海洋自然環境の研究と環境訴訟について	研究 調査	2005.03.00	ハワイ大学・海洋発電所・ホノルル法律事務所	2005 年 3 月より 8 日間。自然環境の保全と海洋発電にかんして先駆的存在であるハワイ諸島における研究調査並びにホノルルにおける環境訴訟の実態調査研究。
20	潜水事故に関する法的課題	講演	2005.03.00	(財) 日本海洋レジャー振興協会	潜水士資格管理に関する国際組織 DAN メンバー (インストラクター) に対する潜水事故と法的課題を講演。
21	企業とコンプライアンス	参加	2005.03.00	国際ロータリークラブ中央分区	企業のコンプライアンスと経営者の役割のパネルディスカッション
22	社会奉仕と地域貢献	研究	2005.03.00	国際ロータリークラブ第 258 地区中央分区	日本衰退原因の一つである地域住民の相互関係希薄化の研究
23	癌治療に関する不倫理規定その他研究会	研究	2005.04.00	日本癌治療学会がん倫理委員会	2005 年 4 月より隔月。癌の告知やインフォームドコンセント等に関する研究者が癌倫理委員会を構成し、数回にわたり火急的課題を討議研究した。
24	企業のコンプライアンス	講演	2005.04.00	西北ロータリークラブ	企業がコンプライアンスの徹底を図ることの重要性並びに怠ることの法的危険性の講演。一部上場の企業経営者や専門家に意義を伝える
25	調停制度の研究	研究	2005.04.00	東京簡易裁判所	調停委員による研究会
26	海難救助に関する研究	研究	2005.04.00	財団法人日本水難救済会	2005 年 4 月から 7 月まで毎月一回。海難救助に関する全国規模での実態調査と問題点の研究、特に漁船の遭難並びに内陸部の水難事例研究
27	国際介入と国際法	研究	2005.05.00	日本法政学会	103 回学会における研究会
28	環境監査研究会定例会議	研究	2005.05.00	環境監査研究会	世界におけるエネルギー事情に関する研究
29	特定調停の終焉	参加	2005.05.00	東京簡易裁第一調停懇話会	一時急増した特定調停に関する現状と展望
30	個人情報保護法と細胞診	講演	2005.07.00	日本日本臨床細胞学会	臨床細胞診における個人情報保護法との関係を学会員に対して解説
31	医療検査の法的課題	研究	2005.07.00	日本臨床細胞学会	細胞診・細胞検査等に関する法的課題を抽出し、予想される医療過誤との関係を整理、その対策を研究。
32	小型船舶 P L 紛争に関する研究	研究 参加	2005.07.00	(財) 日本舟艇工業会	小型船舶の P L 紛争並びに P L 委員会運営に関する検討会にて、法的専門委員として研究・提言。
33	細胞検査士に関する医療過誤問題	研究	2005.09.00	日本細胞検査士会	臨床医並びに病理医と検査士との医療過誤に関する法的研究。
34	個人情報保護法と司法の流れ	講演	2005.10.00	日本癌治療学会がん倫理委員会	がん拠点病院、がん専門医師認定制度等と個人情報保護法との関係につき講演。
35	医事紛争対策	研究	2005.10.00	日本病理細胞診学会	病理細胞診に関する医療過誤対策委員会における対策協議。

36	癌治療の倫理規定策定(名古屋国際会議場)	研究指導	2005.10.00	日本癌治療学会	法的専門委員として、癌治療に関する倫理規定の策定と検討会における指導と助言。
37	地域防犯と法的問題(北九州)	研究	2005.10.00	誠鏡会	地域犯罪のうち外国人犯罪と法的問題点の研究
38	国際婦人の人権問題研究(京王ホテル)	研究	2005.10.00	国際ゾントクラブ	国際組織であるゾントクラブ総会における小委員会に手の研究。
39	病理検査と細胞検査に関する精度管理(奈良国際会館)	研究指導	2005.11.00	日本臨床細胞学会	病理と細胞診に関する医療安全小委員会における研究と法的指導。
40	日本と国際情勢	参加	2005.11.00	アジア交流センター	中曽根元総理による講演会
41	企業と法務博士の関係	参加研究	2005.11.00	商事法務研究会	50周年記念シンポにて、法曹人口増大に関する種々の問題点の研究
42	海難事故研究会	研究	2005.11.00	21 海事総合事務所	17年度海難事故の分析と海難審判庁裁決事例研究
43	安全シンポ	研究	2005.12.00	横浜桐蔭大学企業コンプライアンス研究会	企業がもたらす不祥事と国民の安全に関するシンポジウム。
44	地雷とアジア紛争地域(講演会)	参加	2006.01.00	国際ロータリークラブ	ミャンマーを中心とした東南アジア紛争における地雷敷き設による被害者救済と地雷撤去に関する講演
45	利益相反行為の法的概念		2007.10.24	日本癌治療学会倫理委員会	同学会誌に掲載するとともに学会で特別講演した
46	新司法試験シンポ		2007.10.27	弁護士会新試験委員会	法科大学院における教育、司法修習に関する検討
47	森つくりシンポ		2008.02.05	日経エコロジー・B P社	森林環境保全による地球環境保護を考える
48	日本医学教育学会倫理教育・行動科学委員会		2008.02.10	臨床倫理教育WS	行動科学、倫理、法律、哲学、教育、心理など総合的に臨床現場での倫理教育技法を学ぶカリキュラムの開発を目的としたWS
49	宗教的輸血拒否に関する合同委員会		2008.02.28	宗教的輸血拒否に関するガイドライン	同委員会報告の検証
50	民法改正国際シンポ		2008.03.01	慶應義塾大学事務センター	日本、ヨーロッパ、アジアの民法改正動向比較研究
51	「環境訴訟と団体訴権」	参加	2008.03.01	日本弁護士連合会	環境訴訟における団体訴権の確立に如何なる法的障害が存在するか、またその障害を除去するには如何なる法制が妥当についての研究
52	洞爺湖サミットとNPO協働		2008.03.05	NPO循環型社会研究会	効果的な温暖化対策と排出量取引について
53	「グローバル化時代の法曹教育」	参加	2008.04.01	第二東京弁護士会	独自の法曹教育に着手した弁護士会としての取り組み
54	現在社会の政治的課題	参加	2008.04.21	谷垣講演会	次期総裁候補の政治的思考と現代政治の動向を学ぶ
55	「医療安全と医療行為」	参加	2008.04.22	厚労省医事局	医行為の概念と細胞診に関する当局の見解を検証する意見交換会
56	「特許事務と訴訟」	参加	2008.04.28	エビス国際特許事務所	特許事務と特許訴訟に関する実情調査と研究会
57	「港湾出港船と適正航路の研究」	報告	2009.04.30	21 海事総合事務所	苫小牧港における出港船と入港船との適正航路に関する研究報告
58	「企業経営とコンプライアンス」	発表	2008.05.07	東京新都心 RC	企業の第一線にて活躍する経営者に向けて法令遵守の重要性と不遵守の場合のリスクを説く
59	台湾・韓国「証拠開示に関する調査報告会」	参加	2008.05.16	刑事法研究会	日本と台湾・韓国の証拠開示に関する研究
60	癌治療に関する研究報告等における倫理規定の在り方	報告	2008.05.21	日本癌治療学会	癌治療薬等の開発に際して企業献金を受けた者が開示すべき事項と開示しなかった場合の制裁規定に関する法的研究の報告
61	台湾における特許事務に関する諸問題	報告	2008.05.29~31	エビス国際特許事務所	台湾企業の日本国内における特許申請と諸問題を台湾東海大学の林教授と共同研究

62	日本国内における水難救済の実情	参加	2008.06.04	財団法人日本水難救済会	日本沿岸で生じた水難事故に関する救済の実情と水難対策の検討
63	日本細胞診学会		2008.06.07	細胞診における医療安全	細胞診は医行為か否かを中心にして、細胞検査における医療現場で臨床医と病理医に検査技師相互間の責任の在り方と細胞検査の誤判断に起因する医療過誤防止策を提唱した。
64	医療過誤における臨床医と病理細胞診の法的責任	学会発表	2008.06.07	日本臨床細胞学会	臨床医は検査結果を信頼し治療方針を即断する傾向があるが、検査精度は100%ではない。両者の医療過誤に関する法的責任割合と予防策
65	高齢者の幸福と法的問題点	講演	2008.06.13~07.11	東京都板橋区「グリーンカレッジ」	60歳以上の高齢者が老後を幸せに過ごす上で、必要な法的視点からの注意点を五回にわたって講義した
66	刑事手続きと被害者参加に関する諸問題	参加	2008.06.14	日本被害者学会	刑事手続きにおける被害者参加論を始め、被害者支援の国際標準化に「犯罪被害者等基本計画の実施と今後の課題」シンポジウムが行われた
67	癌治療に関する倫理規定のマニュアル化に関する諸問題	報告	2008.06.26	日本癌治療学会・倫理委員会	研究開発に関する企業献金等を受けた場合の公表マニュアル作成上の諸問題
68	小型船舶の製造物責任に関する研究	報告	2008.07.02	日本舟艇工業界	小型船舶の海難事故に関係する製造物責の実態と解決に関する研究
69	日・中における海外企業に関する法制の研究	共同調査・研究	2008.07.16	中国律師「金杜事務所」	北京在住の鮑 榮振律師(東京大学大学院)との共同研究で、日本企業の海外進出に伴う法的紛争の実態と対象法
70	医療安全に関する実態調査と対処法	参加	2008.08.12	日本臨床細胞学会	臨床医と検査技師間の医療事故防止に関する研究
71	韓国法制研究	参加	2008.08.25~29	大東文化大学法科大学院	韓国の地裁・高裁・最高裁・軍事裁判所等の判例事並びに弁護士との日韓法制比較研究
72	裁判員制度について	講演	2008.09.01	東京西北 RC	裁判員制度の国際比較と問題点 なかでも裁判員を断れる事項につき重点的に解説
73	フレッシュマン・セミナー	参加	2008.09.06	大東文化大学法科大学院	院生を対象にして法的研究のしるべき並びに法曹教育の在り方等に関する研究
74	法科大学院評価協議	参加	2008.09.09	大学評価・学位授与機構	本評価に際しての準備協議
75	東アジア ADR 研究	報告	2008.09.16	大東文化大学法科大学院	東アジア ADR シンポジウムにて「基本的構想と目的」を報告
76	韓国特許事務所の実情調査	参加	2008.11.04~06	エビス国際特許事務所	韓国のソウル市内所在にかかる国際特許事務所の実情調査と業務提携の在り方の研究
77	癌治療における倫理規定制定	参加	2009.01.30	日本癌治療学会	倫理規定を他の医療学会に使用させる件の検討
78	私鉄運行と法的諸問題	共同研究	2009.02.16	京王電鉄法務部	私鉄経営における車両・人身事故並びに痴漢等乗客及び騒音等の沿線住民との紛争に関する法的処理
79	レストラン経営に付随した法的紛争の実態と対処法	共同研究	2009.02.17	(株)ニュートーキョー法務部	食材・メニュー商品・配膳等に生じる顧客との法的紛争に関する研究
80	不動産分譲並びに管理に関する研究	共同研究	2009.02.18	三井不動産販売(株)総務部	不動産販売・仲介等に関する法的規制と管理に関する事例研究
81	国際的な法的紛争の実態と対象法並びに国際的な法的事務処理の実態	共同研究	2009.02.19	小島国際法律事務所	実例に基づく国際紛争と取引等における対処と問題点を明らかにしてその解決手法を学ぶ
82	損害保険の支払いに関する紛争の実態と対処法	共同研究	2009.02.20	損保ジャパン(株)文書法務部	保険事故と保険金支払い要件の検証と法的紛争の対処法
83	酸素供給行為と医行為の関係	講演	2009.02.22	DAN ジャパン	酸素供給の緊急性から救急救命士の法制化に習って、減圧症発症時に潜水インストラクターが酸素供給行為の適法化法案の研究

84	環境フィールド・ワーク	参加	2009.03.07~19	米国環境保護団体 FWT	環境法の授業に利用するために、ハワイ州の環境保護団体と弁護士や市民有志からなる環境フィールド・ワークの活動に参加し、環境保護理論と環境保護政策の実践との有機的関係の検証と今後の対策を協議
----	-------------	----	---------------	--------------	---

Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1					運輸省海上保安庁「海洋法研究会」特別委員
2					企業法学会
3					厚生省「食品健康被害者救済制度化研究会」委員
4					社団法人日本外洋帆走協会顧問
5					第二東京弁護士会常議員
6					第二東京弁護士会「公害対策・環境保全委員会」委員長、「綱紀委員会」「人権擁護委員会(障害者人権特別部会)」「司法制度調査委員会」各委員
7					東京簡易裁判所調停委員
8					日本刑法学会
9					日本交通法学会
10					日本被害者学会
11					日本弁護士連合会代議員
12					日本法政学会
13	1994.10.00				NGO「21世紀の環境と文明を考える会」「ダイオキシン対策会議」会員
14	1999.07.00				社団法人日本舟艇工業会小型船舶に関する消費者製品相談室「運営評議委員・斡旋委員」
15	1999.11.00				社団法人日本水難救済会青い羽根募金事業運営協議会委員
16	2001.01.00				「21 海事総合事務所」代表
17	2002.04.00				日本海洋レジャー安全・振興協会理事
18	2003.04.00				東京簡易裁判所第一調停懇話会理事長
19	2003.04.00				東京簡易裁判所民事調停協会副会長(研究部担当)
20	2004.03.00				日本癌治療学会倫理委員会外部委員
21	2004.04.01				日本臨床細胞学会顧問
22	2005.07.01	～	2006.06.31		東京西北ロータリークラブ会長
23	2005.07.01	～	2006.09.01		関東誠鏡会会長
24	2006.04.01				独立行政法人大学評価・学位授与機構法科大学院評価部会専門委員

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	特任教授	氏名	中込 秀樹	大学院における研究指導担当 資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日	概 要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)			レポートを毎回出させて添削している。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項			<p>判決・和解の実務上の業績については、約 40 年にわたる裁判所勤務のうち約 20 年訴訟実務に従事したことから、社会的に注目されて新聞報道のされたもの、法律雑誌に参考裁判例として掲載されたものはいずれもおびただしい数にのぼる。経歴から分かるように、行政事件訴訟に携わった期間が比較的長く、その間にした判決には、行政の取扱い実務の変更を招いたものも相当数ある。無国籍児国籍確認事件は、我が国で出生し、父母が知れない場合の、知れないことの立証責任を出生した者が負担するか、国が負担するかという問題について、従来出生した者に負担させていた実務を変更させたものであり (高裁で取り消されたが、最高裁で認められた。)、知的財産権対価国外源泉事件 (シルバー精工事件) は、米国に輸出した我が国企業の製品が米国特許権を侵害するとして米国で提訴された事件において和解が成立し、これに基づいて米国企業に支払った我が国の企業の和解金が国内源泉というべきかどうかという争点にかかるもので、税務実務を変更して国外源泉としたもの (最高裁でも認められた。) である。</p>			
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						

(表 24)

所属	法務研究科法務専攻	職名	特任教授	氏名	村上 光瑠	大学院における研究指導担当資格の有無 (有)・無
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1) 職務上の経験 ア 刑事		1999.04.00		平成 11 年 4 月～平成 17 年 2 月 合議裁判長(東京高裁第 1 刑事部)		
2) 主要な関与裁判		2004.10.19		・東京高判平 15・5・16 (高速道路上に自動車を停止させた過失行為と後続車が追突した事故との間の因果関係を認めた事例) 判決時報 1879 号 (平 16・10・19)		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者。著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 論文		2006.03.00	判例タイムズ社	「一事不再理効の客観的範囲」(小林充・佐藤文哉古稀祝賀刑事裁判論集下巻)		
2 判例解説		2007.04.00	有斐閣	「刑法 383 条と刑の変更」平成 18 年度重要判例解説		
3 判例批評		2007.10.00	成文堂	「刑の変更の意義」刑事法ジャーナル Vol19.		
4 論文		2008.09.00	法務総合研修所	「裁判員裁判における事実認定」(研修 2008・9NO.723)		
その他						
1 「司馬遼太郎さんのこと」	単著	2005.04.00	法曹会 「法曹」654 号 23 頁～27 頁			
III 学会等および社会における主な活動						
1	2000.04.00	～	現在	日本山岳会 日本山岳会員		
2	2001.04.00	～	2005.02.00	日本弁護士連合会 日本弁護士連合会懲戒委員		
3	2002.04.00	～	2005.02.00	法曹会 法曹会理事		

4	2003.04.00	～	2005.02.00	最高裁判所簡易裁判所判事選考推薦委員会委員
5	2005.12.00	～	2008.03.00	法務省旧司法試験委員（憲法）
6	2008.09.00	～	現在	日本商事仲裁協会商事仲裁人

東洋研究所

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	教授	氏名	兵頭 徹	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価		2006.12.00		大東文化大学授業評価 (平成18年12月実施)、平均値 4.1 (5段階評価)			
2) 大東文化大学授業評価		2007.12.00		大東文化大学授業評価 (平成19年12月実施)、平均値 4.4 (5段階評価)			
3) 大東文化大学授業評価		2008.12.00		大東文化大学授業評価 (平成20年12月実施)、平均値 4.5 (5段階評価)			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 洋銀引替継続と長崎奉行	単著	2004.11.25	『東洋研究』154号 (大東文化大学東洋研究所)	岡部長常以後の奉行が引き続き取扱った貨幣問題を記す『貨幣事件』を中心に採りあげ、岡部以降の洋銀引替の実態について明らかにした。			
2 海軍省調査課と囑託の役割 (一) - 臨時調査課時代と高木友三郎 -	単著	2005.11.25	『東洋研究』157号 (大東文化大学東洋研究所)	海軍省の臨時調査課は、昭和8年6月、第2次ロンドン海軍軍縮会議に向けた基本対策を講じる時期に、大臣官房所属の臨時の課として発足した。本稿では、臨時調査課時代から数多くの論稿を「臨調資料」として発表した法政大学教授の高木友三郎を採り上げ、囑託の意義と役割について考察した。			
3 海軍省調査課と囑託の役割 (二) - 前期高木課長時代と天川勇 -	単著	2006.11.25	『東洋研究』161号 (大東文化大学東洋研究所)	昭和12年10月に、第4代の課長となった高木惣吉は、調査課のあるべき姿について深慮し、囑託の活用を勘案しながら、民間人有識者を銓衡して海軍のブレーン・トラストを構築する思いに至る。本稿では、高木の構想実現に向けた行動を明らかにした。			
4 海軍省調査課と囑託の役割 (三) - 高木惣吉と大学校研究部 -	単著	2007.11.25	『東洋研究』165号 (大東文化大学東洋研究所)	昭和14年11月、高木は定期異動によって2度目の海軍大学校教官に任じられ、調査課を離れることになったが、従来から抱いてきたブレーン・トラスト構想の実現に向け、大学校を基点とした運動を続けることとなる。本稿では、大学校研究部拡張の提議を中心に囑託配置の意味するところを明らかにした。			

5	海軍省調査課と嘱託の役割（四）－ブレーン・トラストの編成－	単著	2008.11.25	『東洋研究』169号（大東文化大学東洋研究所）	昭和15年11月に、再び調査課長の任を帯びた高木惣吉は、上申書を作成してブレーン・トラストの編成を提出していくことになる。本稿では思想懇談会、外交懇談会、政治懇談会、直接連絡の嘱託の5分野に47名の学者・知識人を結集していった過程を捉え、高木構想の高味するところを考察した。
その他					
1	『昭和社会経済史料集成』31巻	共著	2004.08.31	大東文化大学東洋研究所	昭和研究会資料 昭和10年7月～昭和12年8月
2	『昭和社会経済史料集成』30巻	共著	2004.10.31	大東文化大学東洋研究所	海軍省調査課資料（別巻） 総目次・総索引
3	『昭和社会経済史料集成』32巻	共著	2005.08.31	大東文化大学東洋研究所	昭和研究会資料 昭和12年9月～昭和13年6月
4	『昭和社会経済史料集成』33巻	共著	2006.08.31	大東文化大学東洋研究所	昭和研究会資料 昭和13年7月～昭和14年2月
5	『昭和社会経済史料集成』34巻	共著	2007.08.31	大東文化大学東洋研究所	昭和研究会資料 昭和14年3月～昭和14年12月
6	『昭和社会経済史料集成』35巻	共著	2008.08.31	大東文化大学東洋研究所	昭和研究会資料 昭和15年1月～昭和15年5月
III 学会等および社会における主な活動					
1	1983.04.00	～	現在	経営史学会会員	
2	1983.04.00	～	現在	社会経済史学会会員	

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	教授	氏名	福田 俊昭	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	(有)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 『藝文類聚 (巻 15) 訓読付索引』	共著	2005.02.25	大東文化大学東洋研究所	巻 14 の続き。◎福田俊昭、成田守、日吉盛幸、中林史朗、浜口俊裕、蔵中しのぶ、芦川敏彦。B 5 版、総頁 93 頁。			
2 『藝文類聚 (巻 16) 訓読付索引』	共著	2006.03.25	大東文化大学東洋研究所	巻 15 の続き。◎福田俊昭、成田守、日吉盛幸、中林史朗、浜口俊裕、蔵中しのぶ、芦川敏彦。B 5 版、総頁 118 頁。			
3 『藝文類聚 (巻 80) 訓読付索引』	共著	2007.03.25	大東文化大学東洋研究所	今回より巻 80 以後の巻を扱う。◎福田俊昭、成田守、日吉盛幸、中林史朗、浜口俊裕、蔵中しのぶ、芦川敏彦。B 5 版、総頁 109 頁。			
4 『藝文類聚 (巻 81) 訓読付索引』	共著	2008.03.25	大東文化大学東洋研究所	巻 80 の続き。◎福田俊昭、成田守、日吉盛幸、中林史朗、浜口俊裕、蔵中しのぶ、芦川敏彦。B 5 版、総頁 156 頁。			
5 『藝文類聚 (巻 82) 訓読付索引』	共著	2009.03.25	大東文化大学東洋研究所	巻 81 の続き。◎福田俊昭、成田守、日吉盛幸、中林史朗、浜口俊裕、蔵中しのぶ、芦川敏彦。B 5 版、総頁 143 頁。			
論文							
1 『和漢朗詠集』の項目の組み立て方	単著	2004.09.25	「東洋研究」152 号	ポーランド・ワルシャワ大学における E J A S で口頭発表したものをまとめたものである。『和漢朗詠集』の項目は基本的には『千載佳句』の項目を踏襲しているが、『千載佳句』の項目にみえない項目は『千載佳句』所録の詩語から採取している。詩語以外のものは『和漢朗詠集』所録の和歌の歌語が歌題や歌集の部立から項目が設定されたことを論考した。A 5 版、総頁 94 頁中 29 頁。			
2 「蓬生」の巻にみえる漢籍典拠の検討	単著	2004.10.10	『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂	『蓬生』にみえる漢籍典拠は江戸の昔から指摘されているが、その 1 つ 1 つを検討し、その可否を論述し、更に新発見の典拠も挙げる。B 5 版、総頁 224 頁中 15 頁。			
3 『藝文類聚』(巻十五) 本文の構成について	単著	2005.02.25	『藝文類聚 (巻十五) 訓読付索引』	『藝文類聚』(巻十四) と同じ方法で論述したものである。B 5 版、総頁 93 頁中 19 頁。			

4	長屋王の私邸における詩宴詩（上）	単著	2005.09.25	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」156号	『懐風藻』には主題の異なる詩が多く収録されているが、中でも長屋王関係の詩が最も多い。長屋王関係の詩は長屋王自身の詩を含めると19首あり、その全て（1首が関係詩）が長屋王の邸宅で催した宴会時に詠出された詩である。これらの詩には詠出された時期が記載されていないので、でき得る限り、詩の制作時期を特定し、詩の内容を分析して、中国文学との受容関係を指摘しながら詩の位置付けを試みる。A5版、総頁161頁中42頁。
5	『藝文類聚』（巻十六）本文の構成について	単著	2006.03.25	『藝文類聚（巻十六）訓讀付索引』	『藝文類聚』（巻十五）と同じ方法で論述したものである。B5版、総頁118頁中26頁。
6	長屋王の私邸における詩宴詩（下）	単著	2006.07.25	「東洋研究」160号	「東洋研究」156号の継続である。A5版、総頁140頁中36頁。
7	2004（平成16）年度～2006（平成18）年度。日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）。〔課題番号：16520114〕研究成果報告書。研究分担者。五山文学にみえる茶—鎌倉時代—	単著	2007.02.15	茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク	茶が平安時代の措紳から鎌倉時代に栄西禅師が再び茶葉を齎らして以来、五山の禅宗の僧侶に受け継がれていく過程、特に鎌倉時代の茶について論述したものである。A4版、総頁219頁中6頁。
8	『藝文類聚（巻80）本文の構成について	単著	2007.03.25	『藝文類聚巻80）訓讀付索引』	『藝文類聚』（巻16）と同じ方法で論述したものである。B5版、総頁109頁中23頁。
9	『朝野僉載』に見える医薬説話	単著	2007.07.25	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」164号	『朝野僉載』にみえる医術、薬に関する説話を採り挙げて、荒唐無稽の説話でないことを論究したものである。レフェリー有り。A5版、総頁119頁中35頁。
10	『藝文類聚』（巻81）の本文の構成について	単著	2008.03.25	『藝文類聚（巻81）訓讀付索引』	『藝文類聚』（巻80）と同じ方法で論述したものである。B5版、総頁156頁中30頁。
11	『朝野僉載』に見える識應説話（前編）	単著	2008.07.25	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」168号	『朝野僉載』に見える識應に関する説話を採り挙げて、荒唐無稽の説話でないことを論究したものである。レフェリー有り。A5版、総頁152頁中69頁。
12	李嶠と雑詠詩の研究	単著	2009.03.18	大東文化大学	これは学位論文で1部李嶠篇、2部書誌篇、3部雑詠詩篇から成る。原稿用紙1778枚
13	『藝文類聚』（巻82）の本文の構成について	単著	2009.03.20	『藝文類聚（巻82）訓讀付索引』	『藝文類聚』（巻81）と同じ方法で論述したものである。B5版、総頁143頁中31頁。
14	走筆謝孟諫議寄新茶	単著	2009.03.31	大東文化大学東洋研究所	『茶譜』研究会の分担個所である。これは唐の盧仝の詩の注釈である。B5版、総頁230頁中4頁
その他					
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1	1963.04.00	～	現在	漢学会（大東文化大学）会員	
2	1967.04.00	～	現在	日本中国学会会員	
3	1979.06.00	～	現在	中古文学会会員	
4	1986.04.00	～	現在	中国社会文化学会（旧東大中国学会）会員	
5	1986.04.00	～	現在	和漢比較文学会会員（平成3年11月～平成5年11月特別理事、平成5年11月～現在理事、平成11年10月～平成13年9月常任理事、平成17年10月～現在常任理事）	
6	1996.04.00	～	現在	東北中国学会会員	

7	2002.10.00	～	現在	ヨーロッパ日本研究協会 (EJAS) 会員
8	2008.02.15			板橋グリーンカレッジOB会講演「孔子は何処で学んだか」

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	教授	氏名	松本 照敬	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績			年月日	概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 大東文化大学授業評価			2008.12.00	大東文化大学授業評価 (平成 20 年 12 月実施) 平均値 4.5 (5 段階評価)。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 浄厳・不動忿怒瑜伽要鈔――訓下、加注――	単著	2008.04.28	成田山仏教研究所	江戸期の不動尊に関する漢文著作の写本研究。総頁数 694 頁。			
論文							
1 ラーマヌジャ思想の研究	単著	2004.09.20	『東洋研究』第 152 号	ラーマヌジャの主著『シュリーバーシャ』第 1 篇第 1 章第 1 スートラの検討。総頁数 104 頁中 1～22。			
2 不動明王の真言について	単著	2005.02.28	『成田山仏教研究所紀要』第 26 号	不動明王に対して唱えられる諸種の真言について考察。総頁数 321 頁中 1～18。			
3 ラーマヌジャ思想の研究 (2)	単著	2005.09.25	『東洋研究』第 156 号	『シュリーバーシャ』第 1 スートラの検討。総頁数 159 頁中 1～20。			
4 「阿弥陀如来根本陀羅尼」考	単著	2006.02.28	『成田山仏教研究所紀要』第 27 号	真言宗で常用されている阿弥陀如来の陀羅尼に関する考察。総頁数 263 頁中 1～24。			
5 ラーマヌジャ思想の研究 (3)	単著	2006.07.25	「東洋研究」第 160 号	『シュリーバーシャ』第一スートラの検討。総頁数 140 頁中 1～24 頁。			
6 『梵語千字文』の原語比定	単著	2007.02.28	「成田山仏教研究所紀要」第 30 号	義浄の撰述による『梵語千字文』における悉曇文字表記の諸語を逐一検討して正確な原語を確認し比定した。総頁数 550 頁中 35～101 頁			
7 ラーマヌジャ思想の研究 (4)	単著	2007.07.25	『東洋研究』第 164 号	前稿に続き『シュリーバーシャ』1. 1. 1. の検討。総頁数 119 頁中 (1)～(25)			
8 『梵語雑名』の原語比定	単著	2008.02.28	『成田山仏教研究所紀要』第 31 号	唐の礼言の撰述による『梵語雑名』における悉曇文字表記の諸語を逐一検討して正確な原語を確認し比定した。総頁数 765 頁中 55～155 頁。			
9 ラーマヌジャ思想の研究 (5)	単著	2008.07.25	『東洋研究』第 168 号	前稿に続き『シュリーバーシャ』1.1.1 の検討。総頁数 152 頁中(1)～(24)			

10 『唐梵文字』の原語比 定	単著	2009.02.28	『成田山仏教研究所紀要』 第 32 号	唐の全真の撰述による『唐梵文字』における悉曇文字表記の 諸語を逐一検討して正確な原語を確認し比定した。総頁数 479 頁中 1 ～51 頁。
その他				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1974.06.00	～	現在	比較思想学会常任幹事（1974.06.00～1983.06.00）、理事（1983.06.00～現在）

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	教授	氏名	山田 準	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日	概要				
1 教育内容・方法の工夫（授業評価等含む）							
1) 授業及び研究名用のHP上の公開		1993.09.20	1993 年度担当科目すべてについて授業に対する情報をHP上に公開し課題およびレポート提出の参考資料を提供している。(http://www.daito.ac.jp/~jyamada/index.html) (1993 年 9 月 20 日～現在)				
2) メールアドレスの公開によって質問・連絡・レポート提出を実施		1994.04.01	1994 年度以来メールアドレスを学生に公開し、学生からの質問・連絡・レポート提出のために使用している。質問の中で学生全員に説明を必要とするものは、講義中に回答している。 (1994 年 4 月 1 日～現在)				
3) 大東文化大学授業評価		2004.12.00	大東文化大学授業評価（平成 16 年 12 月実施）において東洋史（対外交渉史）に対する評価として平均値 3.9 であった。（5 段階評価）				
4) 大東文化大学授業評価		2004.12.00	大東文化大学授業評価（平成 16 年 12 月実施）において東洋史（東西交渉史）に対する評価として平均値 4.4 であった。（5 段階評価）				
5) 大東文化大学授業評価		2006.12.00	大東文化大学授業評価（平成 18 年 12 月実施）において歴史学（東西交渉史 B）に対する授業への満足度は 3.9 であった。（5 段階評価）				
6) 大東文化大学授業評価		2007.12.00	大東文化大学授業評価（平成 19 年 12 月実施）において歴史学（日蘭交渉史 B）に対する授業への満足度は 3.9 であった。（5 段階評価）				
7) 大東文化大学授業評価		2008.12.00	大東文化大学授業評価（平成 20 年 12 月実施）において授業への満足度は平均 3.7（5 段階評価）であった。				
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者。著者名（共著の場合のみ記入）			
著書							
論文							
1 リーフデ号とスペイン	単著	2004.09.25	大東文化大学東洋研究所『東洋研究』152号 pp23-44 22頁。	オランダから最初に来航または漂着したとされるリーフデ号は、当初から日本をめざしていたこと、それはスペインへの対抗と反抗の意味をもった航海であったことを論じた。			
その他							

Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1974.04.00	～	現在	社会経済史学会会員
2	1974.04.00	～	現在	日本貿易学会会員
3	1981.09.00	～	現在	日蘭学会会員
4	1999.04.01	～	現在	大東文化大学東洋研究所管理委員
5	2005.04.01	～	2009.03.31	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」編集委員長
6	2005.04.01	～	現在	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」論文審査委員
7	2007.04.01	～	現在	大東文化大学東洋研究所共同研究第1班研究部会会員（研究課題：東洋における異文化の本質的相違性に関する研究）
8	2008.04.01	～	現在	大東文化大学東洋研究所共同研究第6班研究部会主任（研究課題：大西洋世界とインド洋＝太平洋世界を結ぶもの：西欧植民地主義再考）

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	准教授	氏名	岡崎 邦彦	大学院における研究指導担当資格の有無	(有・無)
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「中国の中央アジア政策－上海協力機構 (SCO) 設立に見る中国の中央アジア政策－」	単著	2004.12.25	大東文化大学東洋研究所刊行『東洋研究』154号	1996年中国が主催した五カ国首脳会議 (中国、ロシア、カザフスタン、クルグスタン、タジキスタン) から、2001年の上海協力機構 (SCO) 設立までの経緯と目的を明らかにし、さらにその後の展開と問題点を指摘した。最後に、中国にとって対中央アジア政策が「新国際政治経済秩序」構築の一部であり、今後はSCOと東アジア地域との地域相互協力へと発展することが期待されていると結んだ。			
2 「2005年日中関係－4月反日デモ騒動、その経緯と日本の報道」	単著	2005.12.25	大東文化大学東洋研究所刊行『東洋研究』158号	2005年3月から約一月間、中国全土に広がった反日デモについて、その経緯とデモ発生原因を究明し、さらに日本各新聞のデモ報道内容を分析した。そこから、日中両国の内部事情、日中政府双方のデモへの対応の違いが、まさに日中国民間の相互不信を醸成している現状を指摘した。論文は、こうしたデモの真相を明らかにするとともに、われわれが中国民衆の反日デモをどのように捉えるべきかについて論述した。			
3 「西安事件後の国共交渉－西安事件70周年」(上)	単著	2006.12.25	大東文化大学東洋研究所刊行『東洋研究』162号	1935年中共中央と紅軍は、長征を終えて陝西省に根拠地を構えた。しかし、食糧や装備などが不足するとともに、国民政府軍の剿共戦によって危機的状況におかれていた。そうした状況を一変させたのは、1936年西安事件と事件後の国共交渉、さらに日中戦争のはじまりである。本論は、西安事件と事件後の経緯を明らかにするとともに、中共代表周恩来と国民党との国共交渉の内容を検討した。			

4	「西安事件後の国共交渉―第2次国共合作交渉の開始」(中)	単著	2007.12.25	大東文化大学東洋研究所刊行『東洋研究』166号	1937年2月、西安において、第二次国共合作交渉が開始された。軍事、政治面で圧倒的に優勢な国民党と、陝北に追い込まれ食糧、資金面で窮地に陥っていた中共との合作交渉は、当初から中共が国民党へ「投降」、「帰順」する交渉であると見られていた。蒋介石国民党側は、中共紅軍改編後の軍事指導権およびソヴィエト区廃止後の陝甘寧辺区政府の中央統制などを要求していた。これに対し、中共側周恩来はそれらの中共の指導権、中共組織の維持、中共の公開活動、制度面での合法化を目指し、中共の存亡をかけて交渉するのであった。
5	「西安事件後の国共交渉―杭州会談と廬山会談」(下)	単著	2008.07.25	大東文化大学東洋研究所刊行『東洋研究』168号	1937年3月の第二回国共合作交渉(杭州)から6月第三回交渉(廬山)までの交渉内容と、交渉の対立点を明らかにした。また、杭州会議後、中共は全国の党員へ国共合作化のために会議などを開いて準備するが、しかし蒋介石は会議後の通知や中共の対応から合作を「偽装手段」と捉えて、廬山会談で厳しい条件を突きつける。中共紅軍の解体であり、指導者毛沢東と朱徳の「出洋」(外遊、すなわち海外追放)である。ところが、こうした中共にとってその窮地を一変させる事件が起こる。それが7月廬溝橋事件に始まる日中戦争であった。
その他					
1	「現代『三国志』―反日デモの背景」		2005.11.17	大東文化大学東洋研究所公開講座	
2	「廬溝橋事件70周年―日中戦争勃発の中国側政治背景」		2007.11.22	大東文化大学東洋研究所公開講座	
3	「1937年朱毛出洋問題」		2008.05.24	2008年度アジア政経学会東日本大会(東京外国語大学)	1937年6月、第二次国共合作交渉で周恩来は、蒋介石から中共紅軍の指導者朱徳と毛沢東の「出洋」(外遊、すなわち海外追放)を要求される。これは中共組織と紅軍にとって存続にかかわる大問題であった。この「出洋」を巡って、当時周恩来はコミンテルンと党内へ朱徳と毛沢東の「出来做事」(南京へ出てきて仕事をする)と報告し、その意味を大きく変えてしまった。現在もなお中国の中共党史研究においては、「出洋」と記す研究者とその事実はないとし、「出来做事」と記す研究者がいる。当時、どうして周恩来は「出洋」を「出来做事」と意味を変えて党内へ報告しなければならなかったのか、それについて党内の対立事情から説明を加えた。
III 学会等および社会における主な活動					
1	1980.04.00	～	現在	社団法人中国研究所研究員	
2	1981.06.00	～	現在	アジア政経学会会員	
3	1997.10.00	～	現在	日本現代中国学会会員	
4	2004.12.00	～	現在	日本日中関係学会会員	

(表 24)

所属	東洋研究所	職名	准教授	氏名	小林 春樹	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
1) 学生による授業評価		2004.00.00		(2004 年度[後期]~2008 年度[後期]) 学生による授業評価を実施。当初は、平均 3.5 であった授業への満足度が、昨年度は 4.5 まで改善された。今後もよい講義を実現する為の努力を続けていく。			
2 作成した教科書、教材、参考書							
1)		2005.04.00		(2005 年 4 月~2009 年 5 月) 中国古代史、中国近世史には適切な教科書が存在しない為、自ら作成した B4 用紙 85 枚から成る印刷物を毎年更新を重ねて、教科書に代わる参考文献として各講義ごとに配布している。			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
1 「若杉家文書・中国天文五行占の研究」	共著	2007.03.25	大東文化大学東洋研究所	京都府立総合資料館所蔵・若杉家文書第八十四号「雑怪事占法」に関して、訓読文。参校史料・参考史料を施すとともに、当該史料をめぐる著者二人の論考二編を付した研究書。著者：小林春樹・山下克明。執筆協者：大谷光男、栗原圭介、小坂貞二、小林達彦、近藤正則、中村士、濱久雄、渡邊義浩。総頁 190 頁。			
2 『福井重雅先生古稀・退職記念論集／古代東アジアの社会と文化』	共著	2007.03.28	汲古書院	共著者は近藤一成早稲田大学教授以下 26 名。著者は第二章に、「漢書五行志の述作目的」という論文 (165-185 頁) 掲載し、当該史料の述作目的が、前漢の滅亡の不可避性の証明にあったことを論じた。B 5 版、総頁 570 頁。			
3 「狩野直禎博士傘寿記念 三国志論集」	共著	2008.09.14	汲古書院	共著者は渡邊義浩大東文化大学教授以下、22 名。著者は、「『三国志』の王朝観－『漢書』との比較を中心として－」という論文を 275 頁~290 頁 (全 583 頁) に発表し、以下のような議論を展開した。『漢書』の王朝観は漢王朝、とくに後漢王朝の神聖性、永遠不滅性を主張するものであり、従って当該書の王朝観は王朝の滅亡を事明のこととして認めている時代史のそれとは一画線をへだてる、古代史なものであった。それに対して魏、蜀、呉三国、さらには三国を統一した西晋を含めて、それらをやがては滅亡すべき有限の存在であるにとらえてそれらの歴史を叙述している『三国志』の王朝観は、『漢書』のそれよりも一歩、時代史に接近している。以上である。			
論文							

1	「中国史上における『面縛』の機能と性格、およびそれらの変遷について」	単著 2005.01.25	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」第155号（レフェリー制）（194頁／123～157頁）	中国においては古代から近世に到るまで「面縛」という身体儀礼が存在した。面縛は種々の場面において実行されるとともに、下記のようなさまざまな役割を担ってきた。1. 前方の者から後方の者までを物理的に一列に結ぶことによって彼等の散逸を防止するための手段。2. 捕縛者が、捕虜に対してみずからの思い通りの行動をとらせるための拘束手段。3. 捕虜や反乱者に対して詰問したり、その逃亡や抵抗を防止するための手段。4. 杖刑を円滑に執行するための身体的拘束手段。5. 帰順の意志を表明するための身体的儀礼。6. 自首の意志を表明するための身体的儀礼。7. 降服の意志を表明するための身体的儀礼。8. 「亡国の礼」の一環を為す身体的儀礼。以上である。これらのうち面縛の原初形態と役割を留めているのは1. の場合であり、逆に完成形態を示す事例は8. であると考えられる。また1. から8. までの事例に共通して見出される面縛の物理的実態は、人間を何らかの方法によって一列に並べて散逸、逃亡、抵抗などを不可能にするというものであり、社会的性格や機能は、面縛を行なった者に対する生殺与奪の権が、それを受容した者の手に移譲されたことを身体的に表現することにあつた。そのような面縛は、或る行為が赤心に由来することを示す身体表現とされる「肉袒」と相俟って、中国史上において対立関係を「外面的」、「形式的」に止揚し終結させる機能を果たしてきたのであつて、それが広汎かつ長期にわたって行われてきたという点に鑑みれば、面縛が果たした役割は「禪讓」以上に中国史上において大きかったとさえ言い得る。
2	大政翼賛会興亜局編纂の「暦法調査資料」について－戦時科学史的視点からの暦法研究の試み－	単著 2005.09.20	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」第156号	大政翼賛会興亜局は昭和17年（1942）9月から昭和18年（1943）3月までの期間に「暦法調査資料」全13輯を刊行した。小稿ではそれぞれの調査資料の内容と、執筆者の研究態度を詳細に検討した結果、個々の著者の研究態度が科学者としての良心と、科学的客観性を保ったものであつたこと、従つて当該の調査資料全体についても、戦時下という特殊状況下における編纂物でありながら現在でもその資料的価値、さらには学術的価値を失っていない、立派な業績であることを確認した。
3	二十五史における「蘭」の用例の検討－歴史書を援用した文学研究に関する試論－	単著 2005.10.20	財団法人無窮会「東洋文化」復刊第95号	正史にみられる「蘭」、すなわちフジバカマの用例を子細に定量的・定性的に検討すると、（1）清廉潔白の士のメタファー、（2）世にうけいられずに隠世を余儀なくされた不遇の士のメタファー、等々の、率然とした文学作品研究からは明らかにできない隠喩性が明らかになる。因みにそれこそが『楚辞』における「君子」のイメージそのものであつて、『楚辞』における君子像は単に清廉潔白な、高邁なる君子ではなく、世にうけいられることができぬままに不遇をかさつ人士であつたことが闡明になる。この一例からも知られるように文学研究をすすめるうえで、二十五史に代表される歴史書は重要な資料たり得るのであり、文学研究を「研究」の名にし負う客観的なものにするためにも歴史書を資料として活用することが是非ともとめられるのである。
4	「元和改暦の性格・特色、および曆学史的意義の再考－後漢の『合理主義的思想』再考のために－」	単著 2007.01.25	大東文化大学東洋研究所「東洋研究」第163号（レフェリー制）	蔭内清の指摘によって、一般に合理的かつ科学的目的と性格を特徴とすると見做されている後漢章帝による元和改暦について再考した結果、第一に、当該の改暦とその結果採用された後漢四分暦とが、科学的性格と受命改正の性格の両面を有していたこと、および当該改暦によって、従来の改暦と曆法に付随していた循環論的、革命論的傾向など、統一王朝にとって好ましがらざる思想傾向が払拭され、以後各王朝はそれらから自由な立場で改暦事業を実施することが可能になったことを論証した。

5 『漢書』の谷永像について	単著	2008.01.25	大東文化大学東洋研究所 『東洋研究』第167号（レフェリー制）	『漢書』巻85に本伝が立てられているとともに、同書「五行志」では、董仲舒などとともに前漢を代表する儒学者の一人としての評価を与えられているにもかかわらず従来あまり注目されてこなかった谷永について検討を加えた結果、以下の諸事実が判明した。1. 本伝において谷永は、災異思想を基本とする儒学的知識を援用して、外戚・王氏に阿諛追従した人物として批判的に描かれている。2. 一方「五行志」では、同じく災異思想を基本とする儒学者として谷永を描きつつも、成帝期に発生した種々の災異解釈を中心として、前漢滅亡が不可避の天命であることを読み解く知識人としての役割を与えられている。3. 本伝と「五行志」における谷永像の相違は以下のように理解することによって整合化し得る。すなわち本伝における谷永像は実際の彼の姿の実録であるのに対して、「五行志」に登場する谷永は、成帝期が、前漢の滅亡が決定付けられた画期であることを証明してみせる優れた災異学者として『漢書』の作者によって登場させられいわば架空の存在である。4. ちなみに『漢書』は、前漢の滅亡と後漢の再受命が不可避の天命であったこと、および後漢が永遠不滅の神聖王朝であることの証明を以てその重要な述作目的とした歴史的叙述である可能性が高いが、果して然らば、そこに二つの谷永像が存在するという事実もそのような視点からの説明が可能となる。すなわち『漢書』は本伝において谷永の実像を呈示するとともに、「五行志」においてその述作目的を果たすために、無謬の災異学者としての「谷永」なる登場人物を「創造」したものと理解されるのである。
6 「国教化実施以後儒教的神秘主義特徴と合理主義特徴－從曆学史角度作新的探討－」	単著	2008.04.00	(中国)『山東大学学报』2008年 第2期	日本における通説では、漢代に国教化されてからの儒教は、緯書を重視した、神秘主義的・非合理主義的性格を特色とする、一種の国家宗教的思想であると理解されている。また国教化以後の儒教史は、そのような儒教と、それに対して批判的な立場をとる合理主義的な知識人たちの対立を軸とするとともに、後者による前者の克服の過程として描かれることが多い。しかし筆者が行なった漢代の曆学史、とくに後漢の章帝が実施した元和改暦についての研究結果にもとづいて再考すると、国教化された儒教が重視した緯書には神秘主義的・非合理主義的な性格とならんで、これまで全く無視されてきた合理主義的な性格が含まれていたことが判明する。そのような事実をふまえて国教化された儒教と、国教化以後の儒教史について再検討を加えると、国教化された儒教の内部に、神秘主義的・非合理主義的な性格をみずから止揚して合理主義的な思想に発展する要素が内在していた可能性があること、したがって国教化以後の儒教史を「儒教みずからの自己発展運動」として理解し得る可能性があることが推測されることになる。
7 書評：稲葉一郎著『中国史学史の研究』（京都大学学術出版会、A5版、840頁）	単著	2008.07.20	『史学雑誌』第117編第7号（p.111～p.120）	諸子百家、司馬遷、班固、劉知幾、司馬光、章学誠に至る人々の史学思想と著作について総合的に論じた大著である稲葉一郎氏『中国史学史の研究』の内容を紹介した。そのうえで、時代史という中国史学史、および中国史学思想を特色づける史体の成立と展開に留意しつつ、一王朝ごとの歴史叙述の集積としての中国史学、および中国史学史の特色について若干の私見を付記した。
8 『漢書』「外戚伝」の構成について	単著	2008.07.25	大東文化大学東洋研究所 『東洋研究』第168号（レフェリー制）	「元后伝」「王莽伝」とともに『漢書』の末尾に描かれ、「外戚列伝」の態を為している「外戚伝」は、前漢の皇帝、とくに成帝の事蹟を中心に、その愚行が結果的に前漢の帝系を断絶に導き、ひいては前漢の滅亡と王莽の抬頭、そして「新」王朝成立を招来したことを冷徹かつ批判的視点から事実を中心として描いた扁目であったことを確認した。そのうえで、「外戚伝」をその末尾に布置した『漢書』とその編者の意図が、前漢滅亡と王莽および「新」の成立の必然性、不可避性を闡明することにあつた可能性が高いことを指摘した。
その他				

1 「国教化」実施以後的 儒教的神秘主義特性 和合理主義特性—基 于曆学史的再考—	2007.09.16	「面向世界的東方思想」中 日韓三国學術研討会（中 国・山東大学）	日本における通説では、漢代に国教化されてからの儒教は、緯書を重視した、神秘主義的・非合理主義的性格を特色とする、一種の国家宗教的思想であると理解されている。また国教化以後の儒教史は、そのような儒教と、それに対して批判的な立場をとる合理主義的な知識人たちとの対立を軸とするとともに、後者による前者の克服の過程として描かれることが多い。しかし筆者が行なった漢代の曆学史、とくに後漢の章帝が実施した元和改暦についての研究結果にもとづいて再考すると、国教化された儒教が重視した緯書には神秘主義的・非合理主義的な性格とならんで、これまで全く無視されてきた合理主義的な性格が含まれていたことが判明する。そのような事実をふまえて国教化された儒教と、国教化以後の儒教史について再検討を加えると、国教化された儒教の内部に、神秘主義的・非合理主義的な性格をみずから止揚して合理主義的な思想に発展する要素が内在していた可能性があること、したがって国教化以後の儒教史を「儒教みずからの自己発展運動」として理解し得る可能性があることが推測されることになる。
--	------------	--	---

Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
1	1984.04.00	～ 現在	東方学会会員
2	1984.04.00	～ 現在	東洋史研究会会員
3	1997.04.00	～ 現在	財団法人・無窮会評議員
4	2006.04.01	～ 現在	三国志学会理事

書道研究所

(表 24)

所属	書道研究所	職名	教授	氏名	玉村 清司	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
1)		2006.12.00		NHK (教育)「美の壺 (筆)」出演		
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1966.02.00 ~ 現在		奎星会同人副理事長				
2 1977.07.00 ~ 現在		全日本書道連盟評議員				
3 1977.07.00 ~ 現在		毎日書道会審査会員、評議員				

(表 25)

所属	書道研究所	職名	教授	氏名	玉村 清司		
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所		開催日時	発表・展示等の内容等		
1	「霽山臨書展」(Ⅲ)			2004.11.00			
2	「霽山臨書展」(Ⅳ)			2005.11.00			
3	「霽山臨書展」(Ⅴ)			2006.11.00			
4	百心展	アートサロン毎日	2007.11.00				
5	二人展	アートサロン毎日	2008.11.00				

国際交流センター

(表 24)

所属	国際交流センター	職名	特任准教授	氏名	大河原 尚	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 「大東文化大学における別科および留学生受入れに関する問題と今後 ー平成 16 年度日本私立大学団体連合会日本語教育連絡協議会における報告からー」	単著	2005.00.00	『別科日本語教育』7、大東文化大学別科日本語研修課程。			
2 「他者の経験を知ることの意味 ー多様な確信 (ビリーフ) を持つ教師と日本語コースのあり方に関する考察からー」	単著	2006.00.00	『別科日本語教育』8、大東文化大学別科日本語研修課程。			
3 「コミュニティ作りの実践としてのプログラム・コーディネーター ー大東文化大学別科での 11 年間 (1997-2007) を振り返って」	単著	2008.00.00	『別科日本語教育』9、大東文化大学別科日本語研修課程。			
4 「留学交流による大学国際化のあり方について」	共著	2008.00.00	『別科日本語教育』9、大東文化大学別科日本語研修課程。	共著者◎大河原尚、前田理佳子。大河原は論文全体にわたって担当。		

その他				
1 「別科日本語研修課程 この一年を振り返って -2003年度活動報告および今後の課題-」	単著	2004.00.00	『別科日本語教育』6、大東文化大学別科日本語研修課程。	共著者◎大蔵親志、大河原尚。大河原は全体にわたって担当。
2 「別科の歴史」	共著	2005.00.00	『別科日本語教育』7、大東文化大学別科日本語研修課程。	
3 「短期交換留学生生活アンケート調査報告」	単著	2008.00.00	『別科日本語教育』9、大東文化大学別科日本語研修課程。	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1	1985.07.00	～	現在	日本語教育学会会員

(表 24)

所属	国際交流センター	職名	特任准教授	氏名	清水 厚子	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)
I 教育活動						
教育実践上の主な業績		年月日		概要		
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)						
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動						
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)		
著書						
論文						
1 留学生とその現状に対する日本語教育に関する一考察		2006.12.00	大東文化大学別科論集「別科日本語教育」第8号	「別科作文集」(1997～2005年度)から、日本語教育のあり方について一考察を行う。特に別科作文集の内容と、留学生を取り巻く事情とを照らし合わせ今後の日本語教育のあり方を考える。		
2 2006年度別科活動報告		2008.03.00	大東文化大学別科論集「別科日本語教育」第9号	2006年度の別科の活動についてのまとめ。学生とクラス編成、授業について、試験について、課外活動について、修了後の進路など。		
その他						
III 学会等および社会における主な活動						
1 1978.09.00 ～ 現在			社団法人日本語教育学会会員			

(表 24)

所属	国際交流センター	職名	特任准教授	氏名	松嶋 緑	大学院における研究指導担当資格の有無 (有・無)	
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日		概要			
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等含む)							
2 作成した教科書、教材、参考書							
1) 『現代実用日本語』(中級編1)		2007.08.00		中国高等教育出版社 本文校正編集に参加			
2) 『現代実用日本語』(中級編2)		2008.03.00		中国高等教育出版社 分担執筆 (本文および日本語部分担当)			
3) 『現代実用日本語 中級編1・2 教師用指導書』 中国高等教育出版社		2008.11.00		日本語部分における校正編集分担			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべき事項							
II 研究活動							
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月 (西暦でも可)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数) 等の名称	編者、著者名 (共著の場合のみ記入)			
著書							
論文							
1 「2003年度担任クラス内での「日本事情」実践報告 -別科における「日本事情」授業の必要性-」		2004.05.00	大東文化大学別科日本語研修課程 『大東文化大学別科論集「別科日本語教育」』第6号	pp.30-42			
2 「初級学習者を対象としたTPR指導の有効性 -TPRによる文型導入と文脈を与える指導-」	共同執筆	2005.05.00	香港日本語研究会・香港城市大学語文学部 第6回国際日本研究・日本語教育シンポジウム論文集『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』	pp.114-123 (聖学院大学川口さち子氏と共同執筆)			
3 「初級口頭表現における聴解優先教授法の有効性 -実践報告から-」		2006.06.00	(財)言語文化研究所 『日本語教育研究』第50号	pp.101-118			
その他							

1	「2004 年度大東文化 大学別科年次報告」		2005.05.00	大東文化大学別科日本語研 修課程 『大東文化大学別 科論集「別科日本語教育」』 第7号	pp.22-36
2	発表タイトル「初級口 頭表現における聴解 優先教授法の有効性」	単独	2005.08.00	カナダブリティッシュコロ ンビア州ビクトリア大学に て開催のカナダ・アメリカ 日本語教育振興会 2005 年 年次大会	

III 学会等および社会における主な活動

1	1990.04.00	～	現在	日本語教育学会一般会員
2	1991.04.00	～	現在	法政大学国文学会会員
3	2000.09.00	～	2008.08.00	グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会会員一般会員
4	2003.08.00	～	2006.08.00	カナダ北米日本語教育振興会会員
5	2006.04.00	～	現在	待遇コミュニケーション学会一般正会員
6	2009.04.00	～	現在	言調聴覚論研究会一般会員